中野谷松原遺跡

—縄文時代遺物本文編—

—安中横野平工業団地造成事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書３—

１９９８

群馬県安中市教育委員会

中野谷松原遺跡

—縄文時代遺物本文編—

—安中横野平工業団地造成事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書３—

１９９８

群馬県安中市教育委員会

例　　言

1．本書は群馬県企業局が実施した安中横野平工業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3分冊である。

2．遺物整理は平成5年4月～平成10年10月まで実施した。

3．遺物整理は安中市教育委員会が直営で行い、社会教育課文化財係主任（文化財保護主事）大工原豊が担当した。

4．本書の執筆は大工原のほか深町真（主事）、井上慎也（主事）、関根慎二（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団）、林克彦（青山学院大学大学文学部助手）、吉川裕司（市誌編さん協力員）、中沢信忠（明治大学考古学専攻卒）が行った。そして、編集は大工原が行い、氏家芳子がこれを補助した。

5．自然科学編に関する分析及び本文執筆は、テフラ分析は早田勉(㈱古環境研究所)、植物珪酸体分析は（㈱古環境研究所)、石器石材分析は磯貝基一（市史編さん調査員)、黒曜石の産地及び年代分析は金山喜昭（野田市郷土博物館）・鈴木正男（立教大学）・戸村健児（同)、赤色顔料の分析は永嶋正春（国立歴史民俗博物館）の各氏による。なお、黒曜石分析と赤色顔料分析は編集の不手際から、データのみの掲載となってしまったので、データに関するコメントを大工原の責任において附加した。

6．縄文土器の分類・選別は関根の指導のもと金井京子が行った。また、土器台帳作成・計測を金井が行い、湯川光子がこれを補助した。

7．石器の分類・選別は大工原が行った。また、石器台帳作成・計測を古立真理子、佐藤佐由里、須藤ダイが行った。

8．礫台帳作成・計測は須藤が行い、小川久美子がこれを補助した。

9．土器の実測・トレースは、通常の方法以外に写真実測法とパソコン・デジタイザーによる実測法を併用し、主として筑井美佐子、伊田百合子、平出紀子が行い、高林直美、高瀬敦子がこれを補助した。そして、断面実測にはＴ＆Ｆ社製クロシスを利用した。

9．石器の実測・トレースは通常の方法以外に写真実測法とコピー機利用の方法で用い、大工原、井上慎也（文化財係主事補)、古立、佐藤、平出、小川、吉沢栄子、舘弘子（早稲田大学大学院修士課程)、中沢が行った。また、麻生敏隆（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団)、水田雅美（青山学院大学学生)、氏家がこれを補助した。

10．拓本は掃除機を利用した方法を採用し、田中利策、平出が行った。

11．土器組成グラフは深町真（文化財係主事)、金井が作成し、石器組成グラフは大工原、深町、井上、古立、小川が作成した。

12．遺物分布図（デジタル方式）の作成は市田武子、深町、伊田、金井、佐藤、古立が行った。

13．土器の復元は神宮幸四郎、清水正が行った。

14．遺物実測用の写真撮影は写真家小川忠博に委託して実施した。

15．集落の景観復元図は大工原の指導のもと白石純子が描画した。

16．遺物の記録、図面、台帳類は安中市教育委員会で保管している。

17. 遺物整理の後半段階では、以下の方々に御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。
（敬称略・遺構編に記載のある方以外）
浅川滋男　安孫子昭二　新井和之　安斎正人　石井　寛　石坂　茂　石戸啓夫　井上　太　今福利恵
大塚昌彦　小野和之　角張淳一　可児通宏　木下哲夫　櫛原功一　小菅将夫　小林謙一　鈴木徳雄
鈴木保彦　須藤隆司　高橋　誠　谷藤保彦　塚本師也　角田真也　寺崎裕助　冨樫泰時　戸田哲也
長井正欣　長沢宏昌　中村　大　新津　健　西田泰民　羽鳥政彦　松田光太郎　山下歳信　山本暉久
山本典幸　　山村貴輝

凡　　例

1．住居址の遺物分布図では、石器のみ壁溝出土遺物を各区最下層として示している。これは土器・礫・石器を別々に集計したことによる手違いであるが、修正には膨大な時間を要するためと、基本的な遺物出土傾向に大きな違いがないと判断しそのまま図示した。

2．石器組成グラフは分析の初期段階で作成したため、その後に行った器種変更、石材変更の結果は反映されていないので本文中の記載と若干異なっている。この場合、組成表　及び本文中の数量が正しい。統計学的にみた場合、組成傾向が大きく異なることはないので、グラフ自体は修正していない。

3．住居址、調査区出土遺物分布図はデジタル方式で図示した。この分布図は本来カラーで作成されているが、印刷の都合でモノクロとしてある。また、土壙墓群については、アナログ方式で主要遺物の出土位置を図示した。

4．報告書の記載内容が分析の深化とともに変更されている部分がある。この場合、本書に記載されている内容が最終見解である。また、遺構実測図・遺物実測図においても誤記が多く認められることが判明したため、遺物観察表に正しい内容を記すとともに正誤表により訂正しているが、すべての箇所を訂正しきれていない可能性がある。利用者にとっては不都合な箇所が多く、多大なる迷惑をおかけしています。この場を借りて陳謝したいと思います。

例　言

凡　例

目　次

1　遺構・遺物の分析方法 …… 1
(1)　遺物の分析 …… 1
a　遺物分析の方法と目的 …… 1
b　土器の分析 …… 4
c　石器の分析 …… 7
d　土器・石器相互の関係の分析 …… 11
(2)　遺構と遺物の関係についての分析 …… 13
a　遺構相互の関係 …… 13
b　遺構と遺物ユニットの関係 …… 15
c　遺物ユニット相互の関係 …… 16
(3)　集落の景観復元 …… 16
(4)　領域と社会の復元に向けて …… 17

2　後期旧石器時代の遺物 …… 19
(1)　調査の方法と経過 …… 19
(2)　Ⅺ層の出土状態 …… 21
(3)　Ⅺ層出土の石器 …… 21
(4)　縄文時代遺構中から出土した石器 …… 21
(5)　小　　結 …… 21

3　縄文時代草創期の遺物 …… 22

4　縄文時代前期中葉～中期初頭の遺物 …… 23
(1)　土　　器 …… 23
a　土器の分類 …… 23
b　土器組成 …… 32
c　遺構出土の土器 …… 32
d　土器群の変遷と編年的位置 …… 134
(2)　土 製 品 …… 161
a　土製品の分類 …… 161
b　土製品各説 …… 161

c　小結 ……164
(3)　石　　器 ……167
a　石器組成 ……167
b　石器各説 ……275
c　縄文時代前期中葉から後葉の打製系列（A類・B類）について ……362
(4)　遺物出土（分布）状態 ……377
a　住居址の遺物出土状態 ……377
b　掘立柱建物址の遺物出土状態 ……446
c　土壙墓群の遺物出土状態 ……450
d　土坑の遺物出土状態 ……488
e　ピットの遺物出土状態 ……495
f　調査区の遺物出土状態 ……507

5　縄文時代中期後葉～後期前葉の遺物 ……516
(1)　土　　器 ……516
a　分　　類 ……516
b　各遺構出土の土器 ……518
(2)　石　　器 ……533
a　概　　要 ……533
b　石器組成 ……533
c　石器各説 ……541
d　小　　結 ……542

6　古墳時代遺構 ……543

7　奈良・平安時代の遺構 ……543

8　成果と問題点 ……549
(1)　縄文時代の集落の景観復元 ……549
a　縄文集落の景観復元について ……549
b　縄文時代前期中葉の集落の景観 ……549
c　縄文時代前期後葉の集落の景観 ……553
d　縄文時代前期末葉の集落の景観 ……562
e　縄文時代中期後葉～後期前葉の集落の景観 ……564
f　縄文時代前期の集落変遷について ……564

(2) 中野谷松原遺跡の活動領域について ……578
a 石材入手からみた活動領域の推定 ……578
b 時期ごとにみた遺跡の分布状態 ……581
c ま と め ……586

付編 自然科学的分析

1 テフラ分析 ……595
(1) はじめに ……595
(2) ローム層中のテフラ層序 ……595
(3) テフラ検出分析 ……596
(4) 考察―示準テフラとの同定と石器の出土位置 ……596
(5) ま と め ……597

2 植物珪酸体（プラント・オパール）分析 ……600
(1) はじめに ……600
(2) 試 料 ……600
(3) 分析法 ……600
(4) 分析結果 ……602
(5) ま と め ……604

3 直接打撃系列（B類）の石器石材について ……608
(1) はじめに ……608
(2) 石器と石材との関係 ……608
(3) 石材の特徴と原産地 ……609
(4) 石器石材の入手 ……610

4 黒曜石の産地及び年代の推定 ……612

5 赤色顔料の分析 ……619

補遺 ……620

1　遺構・遺物の分析方法

(1)　遺物の分析

a　遺物分析の方法と目的

［遺物整理の基本的方法について］

本遺跡の遺物整理の基本方針と目的については、すでに『遺構編』において述べた。ここでは考古学的意味での遺物分析の方法と目的を述べる。なお、ここでは本遺跡の主体となる縄文時代前期の遺物の分析を主眼としている。

本遺跡での遺物整理の基本的方法論は、型式学的方法と層位学的方法の実践である。型式学的に配列された遺物を層位学的方法によりクロスチェックし、分析により導き出された結果の確実性を高めることが重要である。その結果を基に、遺物分布状態や遺構との関係について分析・検討し、遺跡の歴史的・社会的景観を復元することを当面の目標としている。その後、周辺遺跡との関係をも分析・検討し、生業領域や生業形態を解明する。そして、最終的には歴史学的・社会学的・経済学的方法によって、縄文社会の実態を明らかにすることを目的としている。

型式学的方法による遺物の分析には、遺物の内包する「質」についての分析と、遺物全体の「量」の比較に基づく分析がある。この「質」的分析と「量」的分析は、完全に排他的な関係にあるのではなく、ある部分では分析の手順を示すものである。最初に「質」についての分析を行い、遺物のもつ本質を見極め、その結果に基づいた分類ごとに遺物を計り、その「量」的保証によって、分類結果の確実性を高めるのである。そして、「質」がどのように変移するか、あるいは「量」的にどのような組成をもつかについて解明するための分析を行うのである。

また、遺物の一括性や新旧関係を正確に把握するためには、遺物分布状態と層位からの分析も重要である。遺構・出土部分（区）・層位を単位とした一括性の把握により、異なる性質の遺物（例えば土器と石器）の共伴関係が確認されるのである。そして、層位的関係は、型式学的方法により導き出された新旧関係について、唯一保証を与える検証方法である。したがって、この遺物出土状態と層位によって示される原位置論（麻生　1969）的視座からの「質」と「量」の関係の分析が最重要課題となる。

［基礎的資料の提示］

今回の報告書では、遺物の「質」の分析のための資料として、『縄文時代遺物図版編』及びCD―ROM版『縄文土器写真図版編』に実測図と写真として示した。また、各種台帳類についても、データファイル化して報告書に添付することにした。

掲載に際しての選択基準は、考古学的資料価値の高いものを優先している。また、図示にあたっては、出土位置・層位・材質がダイレクトに分かるように、個々の資料の下に記載した。

土器　完形・実測復元可能な資料については、原則として図示することにした。また、破片資料は住居址の出土層位別に掲載する方法を採用した。この際、明らかな混在遺物は除いたが、原則として同じ層位から出土したものは一緒に掲載することにした。この方法で基礎データを示しておけば、後にある程

度型式学的操作が可能であると判断したためである。土壙墓出土資料は副葬品・下部施設（鉢被り・破片被り）については全点図示した。土製品・ミニチュア土器・土偶などについても、原則として全点図示することにした。

石器　住居址出土資料のうち良好な堆積状態で、土器群も共伴していて最終的に確実な土器型式帰属率（後述）が得られる資料を中心に掲載することに主眼を置いた。これは、石器の型式学的方法をクロスチェックするのに不可欠であるからである。また、土壙墓出土資料については、副葬品と抱石についても全点図示することにした。特殊な器種や特殊な形態の石器についても、なるべく図示することにした。したがって、図示したものだけから石器組成をイメージすると、特殊なものが多いように見えるので、注意が必要である。

なお、立石など図示しなくても分析ができる資料については、計測値を示す方法で掲載するに留めた。

礫　今回の分析では、礫についてもすべて被熱・欠損等を観察して、データ化を行った。しかし、データ化の過程で、提示に耐えないエラーが存在していることが判明した。そこで、ここでは、礫に関するデータ提示と分析を見合わせることにした。なお、このエラーは住居址出土遺物分布図作成過程で判明したものであり、土器・石器については致命的エラーは認められないので、当初予定していた分析を続行した。遺物分布図の作成は多くの労力が必要とされ、省略されることもしばしばあるが、データの精度をチェックする手段として、このような予期できない事態に皮肉にも効力を発揮する。

遺物分布状態　遺物分布状態の分析は、遺物分布図を作成し、遺物出土状態を示すことによって、遺物の共伴関係（一括性）と差異を確認すること、遺物の状態（遺棄方法・廃棄方法など）を確認することを目的としている。層ごと、種類（系列）ごとの出土状態、土器と石器の共伴関係などから、いくつかの出土パターンを抽出することができる。そのパターンが何を示しているのかを解明するための基礎データを提示することにした。

住居址については分層16分割法（『遺構編』p.8参照）で遺物を取り上げているため、土器と石器に分けて層・区ごとに図示した。この表示方法はデジタル方式であり、遺物整理段階で分類作業が終了後にパソコンで図面を作成したものである。通常行われるアナログ方式に比べやや粗いが、出土傾向を把握することは可能である。なお、遺物分布図の視覚的客観性を高めるため、土器は重量で表示し、石器は個数で表示した。礫は分布図は作成したが、欠落が大きいことが発覚したため、報告書には掲載しなかった。

土壙墓出土遺物は、『遺構編』に出土位置をアナログ方式で図示したほか、土壙墓群単位での模式的な分布図を作成した。その他の遺構（掘立柱建物址・竪穴状遺構・土坑・ピット）出土遺物は、遺跡全体の遺構出土土器分布図中に図示したのみであり、個々の遺構出土遺物については、一部の土坑のみ『遺構編』の遺構図に図示した。

遺跡全体の遺物分布図は、原則として２ｍ×２ｍの小グリッド単位でデジタル方式で図示した。当初は遺構・調査区（グリッド）出土遺物を一つの図として示そうとしたが、一部出土量の多い住居址があるため、遺構出土遺物と調査区出土遺物に分けて図示した。さらに、煩雑な場合には、種類（系列）別に図を分けた。

こうした遺物分布図の作成には、膨大な労力が必要であるが、遺物ブロックの設定から遺物ユニットの解釈に至る集落の景観復元のための分析には必要不可欠である。

［型式学的方法による分析］

型式学的方法による遺物の分析は、考古学の基本的分析方法のひとつであり、個々の遺物が有している性質（素材・技術・形状・機能など）を観察することを主眼としたものである。

型式学的方法による分析には、一つの資料で多くの特質をもった「質」の良い資料が重要視される。そのため、分析者は「良質」なものを峻別できる経験と能力が不可欠とされる。また、選別の際には、分析者の視点の違いにより選択される資料が異なる。とりわけ、石器における選択性の差異は、研究の進展を阻害するほど深刻な問題となっている。

したがって、型式学的方法に適した資料を提示する場合には、こうした点を念頭に置いて、「良質」な資料をできるだけ偏りのないように選択するべきである。自らが分析者として資質に欠ける場合、専門性を有した外部からの分析者を招聘するなど、遺物整理組織運営上の工夫も必要であろう。さらに言えば、選択された資料の内包する情報を理解できるような互換性・客観性のある図・写真・計測表・観察表などを提示する必要がある。

こうした「良質」な資料を用い、文様帯系統論や、技術系統論などの型式学的方法で、個体差を越えた、集団などの社会的単位の表徴するような特徴を、客観性のある基準で弁別することを念頭に置いて分析は実践される。

また、究極の細分は個体差に帰結してしまう。したがって、意味のある分類単位をどの位置に置くかが問題となる。この位置は考古学研究者間で異なっているので、報告書レベルでは客観性の高い位置で基準を設定する必要がある。具体的には、現段階で多くの研究者にコンセンサスが得られている位置、あるいはそれよりやや高い位置（作業仮説段階）を基準とすべきであろう。

［「量」的把握について］

型式学的方法によって属性が抽出された遺物は、分類単位ごとに数量に置き換えて、評価してゆく必要がある。報告書の性格を考えた場合、データとして後々使用に耐え得る客観性が重要であり、将来的にも遺物の分析に耐えられる「数量」として示さなければならない。

遺物の数量は基本的に「個数」と「重量」で示すことができる。本遺跡の遺物整理では、土器・石器とも「個数」と「重量」のデータ化を行った。そして、報告書として示す段階で、その適性に合わせて個数あるいは重量として示すことにした。

例えば、土器は完形個体で検出される資料が非常に少なく、破片として分析することを常態とするので、分類単位間の比較段階では「重量」で示さざるを得ない。「個数」では同じ大きさの個体が、破損程度の差で異なってしまうことになるからである。「個数」で示すより「重量」で示す方がより客観的と判断し、その後の分析は基本的に「重量」を用いて行った。実際に「個数」より「重量」の方が個体数を容易に復元し得ることを経験している（大工原・金井　1993）。

しかし、石器の場合、石鏃と石皿のように器種により著しく重量が異なる。石鏃は往時には矢柄が存在し、立派に一つの道具として機能していたものであるからである。現存する部分が小さくても資料としては大きな意味をもっている。したがって、器種レベルで数量を比較する場合には、「個数」で示されている方がより客観的と言える。

ところが、石器を石材といった属性によって数量化する場合には、「重量」で比較する必要が生じる。例えば、黒曜石は同じ「重量」でも原石と剝片類では、「個数」に数十倍もの違いが生じてしまう。(註1)

また、調査精度によっても、剝片・砕片数は大きく異なる。石材入手地での組成は「重量」で示されるので、遺跡出土の資料との比較は「個数」では客観性に欠ける。

したがって、石器の場合、比較する属性により、「個数」と「重量」を使い分けなければならない。そのために、どうしても「個数」と「重量」を併せて示す必要があり、今回は系列・器種レベルでの分析では「個数」を、石材レベルでの分析では「個数」を用いることにした。そして、報告段階では、属性ごとに分類された遺物の数量は、表やグラフのかたちで示した。

この際、データの採取方法・エラーの出現頻度など、信頼性に関する記載は不可欠である。そうしないと、資料批判することも困難なものとなってしまう。例えば、スコップで掘って得られた資料数と、移植ゴテで掘って得られた資料数は同じではないのである。

今回の調査では、エラーの頻度を少しでも押さえるように考慮した。そして、調査機材から遺物整理機材まで『遺構編』で提示した。しかし、実際にはデータエラーが生じることは避けられなかった。そこで、データにエラーが存在する可能性があるものについては、その都度述べることとし、実際よりも調査精度を良く見せるようなことはしないように心懸けた。

b　土器の分析

［型式学的方法による分析］

型式学的方法と層位学的方法のクロスチェックすることを念頭に置いて、土器群の分析を行った。以下、分析方法を簡潔に述べる。

①質的レベルの高い土器群が一定量出土している住居址を選択し、型式学的方法から導き出された結果と層位学的方法から導き出された結果をクロスチェックさせつつ、住居址層位別に編年的操作を行うことにした。具体的には、機軸となる文様帯を有する土器の変化を文様帯系統論的方法で資料操作し、それに確実に共伴関係をもつ異なる文様帯を有する土器群の編年的位置付けを明らかにし、複数の文様系統間の互換性を検討しつつ、住居別土器編年図を作成した。②そして、こうした得られた複数の住居址の編年結果を再度クロスチェックすることにした。このような複数の遺構間での系列は三分法(tripartition) により編年系列が設定される (Childe　1956)。これが「質」的分析の結果となる土器編年図として示される。③さらに、「質」的分析によって得られた土器編年の結果を、次に述べる「量」的分析の結果とクロスチェックすることにより、中野谷松原遺跡における土器編年を確立させることにした。④中野谷松原編年に、周辺地域の関連遺跡の土器群を照らし合わせ、編年的位置付けを検討することにした。また、同時期に並存する遺跡を抽出すこることにした。

なお、土器だけの分析はここまでであり、これ以降の分析は、土器群のみで分析・検討できるものではない。遺構・石器についても同様なプロセスを経た分析を実施し、その分析結果を突き合わせ、総合的に結論を出す必要がある。この後の分析方法については、遺構・遺物の総合的分析の項で述べる。

［「量」についての分析］

土器分類と数量化の方法　土器群の分類は、型式学的方法に基づき、分類要素を抽出した。この際、小破片でもある程度同じ基準で分類できるように考慮した。また、前期中葉～後葉の土器群が大部分を占めていることから、この時期の土器群の分析を行うことに主眼を置いた分類項目とした。それ以外の時

土器型式・系統	施文具等	基本文様	文様構成	胎土等	分類略号
関山II式	半截竹管	コンパス文	横位	含繊維	SY2-1
	半截竹管	鋸歯状文		含繊維	SY2-2
有尾式	半截竹管・櫛歯	櫛歯状刺突文	山形・菱形	含繊維	AR-1
	半截竹管	爪形文（垂直施文）		含繊維	AR-2
	半截竹管	爪形文	菱形	含繊維	AR-3
	半截竹管	爪形文	山形	含繊維	AR-4
	半截竹管	爪形文＋平行沈線文		含繊維	AR-5
	半截竹管	爪形文		含繊維	AR-6
	半截竹管	平行沈線文	菱形	含繊維	AR-7
	半截竹管	平行沈線文	山形	含繊維	AR-8
	半截竹管	平行沈線文		含繊維	AR-9
黒浜式	半截竹管	コンパス文		含繊維	KR-1
	半截竹管・縄文	平行沈線文＋縄文		含繊維	KR-2
	粘土紐貼付	隆帯文		含繊維	KR-3
	半截竹管	爪形文	米字形	含繊維	KR-4
		乱雑な沈線		含繊維	KR-5
	半截竹管・縄文	爪形文＋縄文		含繊維	KR-6
前期中葉	縄文	縄文（無節・単節）		含繊維	ZC-1
	縄文	羽状縄文		含繊維	ZC-2
	縄文	異条斜縄文（付加条）		含繊維	ZC-3
		無文		含繊維	ZC-4
		底部破片（文様不明）		含繊維	ZC-5
		文様不明		含繊維	ZC-6
諸磯a式	半截竹管（幅狭）	平行沈線文	肋骨文		MRa-1
	半截竹管（幅狭）	平行沈線文	木の葉文	＊1	MRa-2
	半截竹管（幅狭）	平行沈線文	入組文		MRa-3
	半截竹管（幅狭）	爪形文			MRa-4
	半截竹管（幅狭）	平行沈線文			MRa-5
	竹管・縄文	円管刺突文＋縄文			MRa-6
諸磯b式	半截竹管・櫛歯	平行沈線文	波状文	＊2	MRb-1
	竹管・半截竹管・櫛歯	円管刺突文＋平行沈線文	波状文	＊2	MRb-2
	半截竹管	平行沈線文	格子目文		MRb-3
	半截竹管（幅広）	爪形文			MRb-4
	粘土はみ出し・粘土紐貼付	太い浮線文			MRb-5
	粘土紐貼付	浮線文			MRb-6
	粘土紐貼付	浮線文			MRb-7
	粘土紐貼付	浮線文	獣面把手		MRb-8
	半截竹管（幅広）	平行沈線文	横線文		MRb-9
	半截竹管（幅広）	平行沈線文	直線・曲線		MRb-10
	半截竹管（幅狭）	集合沈線文	横位		MRb-11
	半截竹管（幅広）	平行沈線文			MRb-12
諸磯c式	櫛歯状施文具	集合沈線文	縦位		MRc-1
	粘土貼付	貼付文			MRc-2
	粘土貼付・縄文	貼付文＋縄文			MRc-3
前期後葉	縄文	縄文（羽状・管状刺突を含む）			ZK-1
		無文			ZK-2
		文様不明			ZK-3
		底部破片（文様不明）			ZK-4
浮島系	貝殻・半截竹管？	鋸歯状文			UK
大木4系	粘土紐貼付	粘土紐貼付文	鋸歯状		DI
北白川下層系	半截竹管	爪形文		薄手	KS
下島系	粘土紐貼付・櫛歯	浮線＋櫛歯状刺突文			SJ
十三菩提式					JS
五領ヶ台式					GR
阿玉台式				含雲母	AT
加曽利E式					KSE
称名寺式					SM
堀之内式					HR
中・後期	縄文	縄文			C-K
時期不明					N

＊1：浅鉢など一部諸磯b式を含む　＊2：一部諸磯a式を含む

第1表　縄文土器時期・文様別分類表

期は、文様構成要素ではなく、型式レベルでの数量化に留めた。分類項目は第１表のとおりである。分類は最初に項目を決めてしまうと、最後まで変更することができなくなる。特に本遺跡のように資料数が多い場合には、やり直しは経費的にも不可能である。今回も途中で項目数を増やす必要性が生じたが、最初の分類基準を踏襲せざるを得なかった。したがって、今回の分析では時間的推移を詳細に示すには不十分なデータとなってしまった。

なお、これ以外にも数量化に問題点がない訳ではない。全体に特徴的な文様が施文される諸磯ａ～ｃ式では、小破片でもある程度分類が可能であり、数量化は比較的容易である。これは、全体に特徴的な文様が施文されるこの土器群の特性が数量化に適していたことによるものである。ところが、同時に分類を行った加曽利Ｅ式～堀之内式の土器群では、文様が大柄であるため、小破片から属性を読みとることが困難であり、分類不能の土器の比率が非常に大きなものとなってしまった。(註2) 画一的な基準による分類では対応しきれないのである。

土器文様別重量組成　土器の分析では最初に分類基準を設定し、細分類を行った。しかし、そのままの状態で、以降の分析を行ってゆくにはやや煩雑であった。そこで、当初の土器群の文様構成要素別細分類をある程度まとめ、土器型式の分析が比較的簡単に構成可能なレベルに再集計させたものが、ここで示す土器文様別重量組成である。

これは原則として、土器群の中でも出土量の多い文様構成要素についての数量を、遺構単位（特に住居址単位）で比較するためのものである。本報告書ではこれを提示するに当たり、ダイヤグラム方式の棒グラフを採用した。百分率のグラフでは出土量の比較ができないことと、分類項目ごとの微妙な違いが表現されず、比較が難しいことによる。また、このグラフだけでは、少量しか出土していない異系統土器群の出土量が比較できなくなるため、別にグラフを作成して提示することにした。

この土器文様別重量組成では、選択的に提示された土器図版と比較した場合、土器群の内容がデフォルメされることがないので、より客観的に遺構間で土器群どうしを比較することが可能であるという利点をもつ。従来より遺物包含層（例えば洞穴遺跡など）に対しては、こうした分析方法が採用されることがしばしばあり、その有効性についても一定の評価が得られている。しかし、一般的な集落遺跡においては、こうした検討が不十分であったので、今回は資料的にも恵まれていたので、敢えてこうした分析方法を採用した。

この場合、注意しなければならない点は、あくまで土器群総体どうしの比較であり、個別資料間の比較を行うものではないことを理解しておくべきである。

この方法の利点は、文様別重量組成は土器群の弁別に対する熟練度の低い他分野の研究者（遺構・石器・自然科学など）に対し、正確に土器群の内容を伝達することが可能であり、土器群を誤認される危険性が少ない点である。今後の考古学研究の方向性は、土器群研究を基礎に、発展的に他分野の研究を含めた総合的研究に移行するものと察せられ、こうした基礎的データの提示は不可欠なものと考えられる。

時期別土器重量・土器型式比率　各住居址の土器文様別重量組成をさらに時期別に再集計したものが時期別土器重量である。また、これを百分率化したものが土器型式比率である。時期別土器重量組成は、統計学的にみて安定したデータとなり得るかどうかを、判別するために必要である。一般的に住居址では、一定量の土器が出土しているので安定した土器型式比率が得られるが、土坑やピットなど遺物量が少ない場合は、土器型式比率が不安定なものとなってしまう。したがって、いきなり土器型式比率を算

出して、遺構間で比較したのでは危険であり、時期別土器重量組成と土器型式比率を併用しなければならない。

なお、土器型式比率は、石器群分析では土器型式帰属率という用語で用いた。この土器型式比率（土器型式帰属率）が土器群と石器群との橋渡しを上で重要な意味をもつ。

ところで、住居址出土の遺物には、住居で使用されそのまま遺棄されたものと、住居廃絶後の跡地に廃棄されたものがある。本遺跡の場合、大部分が廃棄による遺物と推定されている。したがって、住居址出土の土器群は、使用時の共伴関係を厳密に示しているものではない。さらに、異なる時期の土器群が一定量含まれていることから、土器使用者による一次廃棄だけではなく、自然の流れ込みや、後世の居住者による二次廃棄も頻繁に行われていたことが推定される。(註3) ゆえに、単に住居址から一緒に検出されたからといって、無批判に共伴関係の事例とすることには多少危険性が伴う。土器群は蓋然性から確実性への昇華が可能な頻度での共伴関係を確認しておかなければならない。

器種組成についての分析　分析の中心となる前期中葉～後葉（有尾式～諸磯ｂ式）にかけての時期には、器種組成が変化することが知られている。複数の文様を組成として見るだけではなく、器種組成としてみる視点も重要である。こうした観点から、同時期の大下原遺跡において、器種組成の変化についての分析を行ったことがある。ただし、ここでの分析は器形とサイズに主眼を置いたものであり、器種ごとの文様の違いとの関連性などについての分析は行えなかった。そこで、今回はこの点も考慮して、器種組成についての分析を行い、使用単位の抽出を目的としている。

また、本遺跡の土器群は全資料について重量・個数の計測を行ったので、遺跡から出土した土器の総重量と、完形個体の重量が判明している。そこで、統計学的手法を用い、年間土器消費量（製作量）の算出についてのシミュレーションを行うことにした。この作業によって得られたデータは、土器製作がどのようなタイムスケジュールで行われていたのかについて、出土資料レベルから導き出された数値として、科学的・実証的意義をもつものと考えている。ここでは民族事例・実験事例との比較検討までは行えなかったが、研究分野の拡大を企図するものである。

c　石器の分析

［石器の分類と型式学的方法による分析］

ここで実施する石器の分析方法は、これまでに安中市において筆者が携わった調査において実践的に行っているものの、発展形態である。これまで刊行されている報告書（『大下原遺跡』1993年・『中野谷地区遺跡群』1994年など）でも繰り返し述べている分析方法である。

土器と同じように当然縄文時代の石器にも型式が存在している。しかし、型式の概念がこれまで漠然としていた。そこで、最近筆者は石器型式についての概念規定と実践方法についての在り方を示した（大工原　1996,1997ａ）。今回の遺物整理でも、この方向性は維持されている。石器の分析の方法論は、前掲文献に記述しているので、ここでは簡潔に述べるに留める。意図を正確に理解するためには前掲文献を併読されたい。

縄文時代の石器群は異なる性質の器種の集合体である。唯一の共通点は素材が石であるという点に過ぎない。したがって、石器群を技術形態学的に理解できる器種群と、機能形態学的に理解せざるを得ない器種群が存在している。これらは第２表に示したように石器の諸特性から３系列（石製品を含めると

石器系列	器種系列（類）		器　　種	技術的特徴
打製系列	押圧剝離系列（A類）	石　器	石鏃 石錐 石匙A類 スクレイパーA類(ScA) リタッチド・フレイクA類(RFA) 楔形石器 石槍	調整に押圧剝離を多用
		剝片類	剝片A類 石核A類 原石A類	
	直接打撃系列（B類）	石　器	打製石斧 石匙B類 スクレイパーB類(ScB) リタッチド・フレイクB類(RFB)	調整に直接打撃を多用
		剝片類	剝片B類 石核B類 原石B類	
使用痕系列	形状選択系列（C 1類）		凹石 磨石 石皿 球石 部分研磨石器	研磨痕・敲打痕により石器と認識できるもの
	形状非選択系列（C 2類）		敲石 台石 砥石	
複合技術系列	非機能系列（D類）		石棒 棒状礫 槍状石器 多孔石 丸石	直接打撃・敲打・研磨を複合的に用いる
	機能系列（E類）	石　器	磨製石斧	
		剝片類	剝片E類 石核E類 原石E類	
	装身系列（F類）	石　器	垂飾 ケツ状耳飾 管玉 勾玉 石製円盤 各種石製品 ストーンリ・タッチャー	
		剝片類	剝片F類 原石F類	

第2表　石器系列・器種分類表

7系列）に大別、さらに6系列（石製品を含めると7系列）に細別することが可能である。なお、石器型式は素材・技術・形状・機能により設定されるが、型式の強度はどの系列でも同じではない（第3表）。この際、型式が強い器種が存在する系列を優先的に分析する必要がある。具体的には、打製系列（押圧剝離系列・直接打撃系列）の分析が重要である。

そこで、今回の遺物整理では、打製系列の分析により強固な型式の設定を行うことを目的としている。また型式設定は器種レベルで行うのではなく、系列レベルで行うことにした。例えば、押圧剝離系列では、石鏃・石錐・スクレイパーA類など、共通の素材・技術により製作されている器種群の工程配置自体が型式の要件となるのである。

機能形態学的に理解をせざるを得ない器種群により構成される使用痕系列（形状選択系列・形状非選択系列）では、器種間の関連性を製作技術から実証的に抽出することが困難である。また、明確な型式を設定し得るような特徴をもった器種が存在しない場合が多い。そのため、こうした系列に対しては、敢えて型式設定はしないことにした。このような系列では時間的・空間的に単位となり得ないからである。時空的位置は、強い型式をもつ系列との共伴関係から間接的に示されることになる。こうした使用痕系列の器種群の評価は、型式学的方法ではなく、形態学的方法によって行うべきであり、機能を追究することが主眼となる。

複合技術系列（非機能系列・機能系列）は、本来強固な型式を有している。しかし、これらの系列に属する器種群は、製作遺跡と消費遺跡が分かれていることが多い。そして、本遺跡のような集落遺跡では製作工程の最終段階に位置する製品しか存在していない。そのため、今回は型式設定は行わない。型式設定は製作工程が理解できる資料が安定して出土している遺跡において行うべきである。なお、石製品は複合技術系列に属する器種群である。これを石器に含めない方が良いという意見もあるが、本報告書では石器に含めて扱うことにした。

また、石材は火成岩・堆積岩といったような岩石学的分類ではなく、岩石の性質や技術との適性から考古学的意味のある分類が必要である。このようにして、考案されたものが第　表に示した石材系列表である。ここでは石材系列と石器系列の間には、ある程度関連性がある。それは、石材が型式設定の一つの要件であることに帰因している。この石材系列表はどこでも同じではなく、地域単位で作成される必要がある。これは、本遺跡の存在する群馬県西部地域（鏑川・碓氷川流域）のものである。

［「量」についての分析（石器組成）］

石器組成の種類と分析単位　石器は土器と異なり、製作過程で生じた剝片・石核なども存在しているため、石器組成もいくつかの表現方法がある。ここでは石器系列組成・石器器種組成・石材重量組成を示すことにした。分析の方向性によって、どの組成が有効かが異なっており、選択的に用いることになる。

また、今回の石器組成の分析単位は、原則として遺構レベルとして示した。これは組成の基本単位であり、遺構間の石器群の共通性や差異を明確化することができる。さらに、時期的推移を明らかにするために、土器型式帰属率によって再集計することにした。なお、住居址の層単位の石器組成も必要に応じて示すことにした。

以下に各組成の特徴と、ここでの分析方法を述べる。

石器系列組成　石器を系列単位で石器と剝片類に大別して集計したものである。この組成によって、石器の製作と消費の傾向を明瞭化することができる。ここからは、系列ごとに石器製作の頻度、あるいは

石材系列	石材	石材の特徴
I類　剝離最適系列	黒曜石 チャート 硬質頁岩 黒色安山岩 めのう・玉髄 鉄石英（赤玉・黄玉） 硅質岩 流紋岩（硬質）	硬質で粘度が少ない 剝片剝離に最も適する 剝離面は極めて平滑で、エッジは鋭利
II類　剝離適合系列	頁岩類（泥岩・シルト岩） 硬砂岩 輝緑凝灰岩 ホルンフェルス	多少軟質でやや粘度がある 剝離に適する 剝離面はやや平滑で、エッジはやや鋭利
IIIa類　剝離不適系列	安山岩類 石英閃緑岩	やや軟質で粘度がある 剝離に不適である 割れ面は粗面でエッジは鋭利でない 耐火性に富む
IIIb類　剝離不能系列	砂岩（牛伏砂岩） 凝灰岩	軟質で粘度がない 剝離は極めて不適である 割れ面は極めて粗面で、エッジは鈍い
IV類　節理系列	結晶片岩類	硬質な部分と軟質な部分があり、粘度はややある 節理で剝離に方向性があり、やや不適である 剝離面の鋭利さは方向に左右され一定でない
V類　緻密質系列	緑色岩類 蛇紋岩 蛇灰岩	緻密質で比較的硬質で、粘度もある 剝離にあまり適さない 剝離面は粗面で、エッジはやや鋭利
VI類　その他	翡翠 滑石 軽石 礫岩 軟質泥岩 溶岩 石英斑岩 硅化木 石英 緑色凝灰岩(グリーンタフ) 黒雲母流紋岩(下呂石) 斜長石	比較的稀少な多種多様な石材

第3表　石材系列・石材分類表

消費の頻度が示される。抽出されたパターンにより、遺跡のセトルメントを明らかにする際の指標の一つとなる。打製系列では大きく分けて、「石器製作型」と「石器消費型」という二つのパターンが存在している。そして、さらに押圧剝離系列と直接打撃系列の組合せにより、多くのバリエーションがある。このパターンの共通性と差異により、石器の製作・消費といった観点からのグルーピングが可能となる。

石器器種組成　一般的に言う石器組成がこの器種組成である。この組成は、石器装備（道具立て）を示すもので、遺跡の性格を明らかにする際、最も重視される。

他遺跡との石器群の比較には便利であるが、注意も必要である。確かに、器種組成は同じ精度で行われた遺跡内で比較する時には大きな問題はない。しかし、遺跡間で比較する場合、器種分類・器種認定基準・調査精度などの諸条件により、内容が大きく異なってしまい、単純に比較することができない場合も多い。

なお、用途を先験的に断定して、「狩猟具」とか「植物加工具」などにいきなり大分類してしまう報告例があるが、これは機能・用途論による分析といった考古学的手続きが行われているものではないので、意味のない組成である。できるだけ用いない方が良い。

石材組成（石材個数組成・石材重量組成）　石材組成は個数組成と重量組成といった二つの表示方法で示すことができる。縄文時代の遺跡の場合、両者が大きく異なることが多いため、本報告書では両方を合わせて示すことにした。特に比較する際に重視されるのは重量組成である。個数では、例えば原石か剝片かといった石器の状態の違いや、調査精度の違いに大きく左右されるが、重量では個数ほど左右されないからである。

石材入手場所がある程度判明している石材群を分析する場合、石材重量組成は有効な手段となる。つまり、遺跡に搬入された石材の空間的なベクトルの方向と強度は、集落間・地域間交流の状態を示してくれる。

d　土器・石器相互の関係の分析

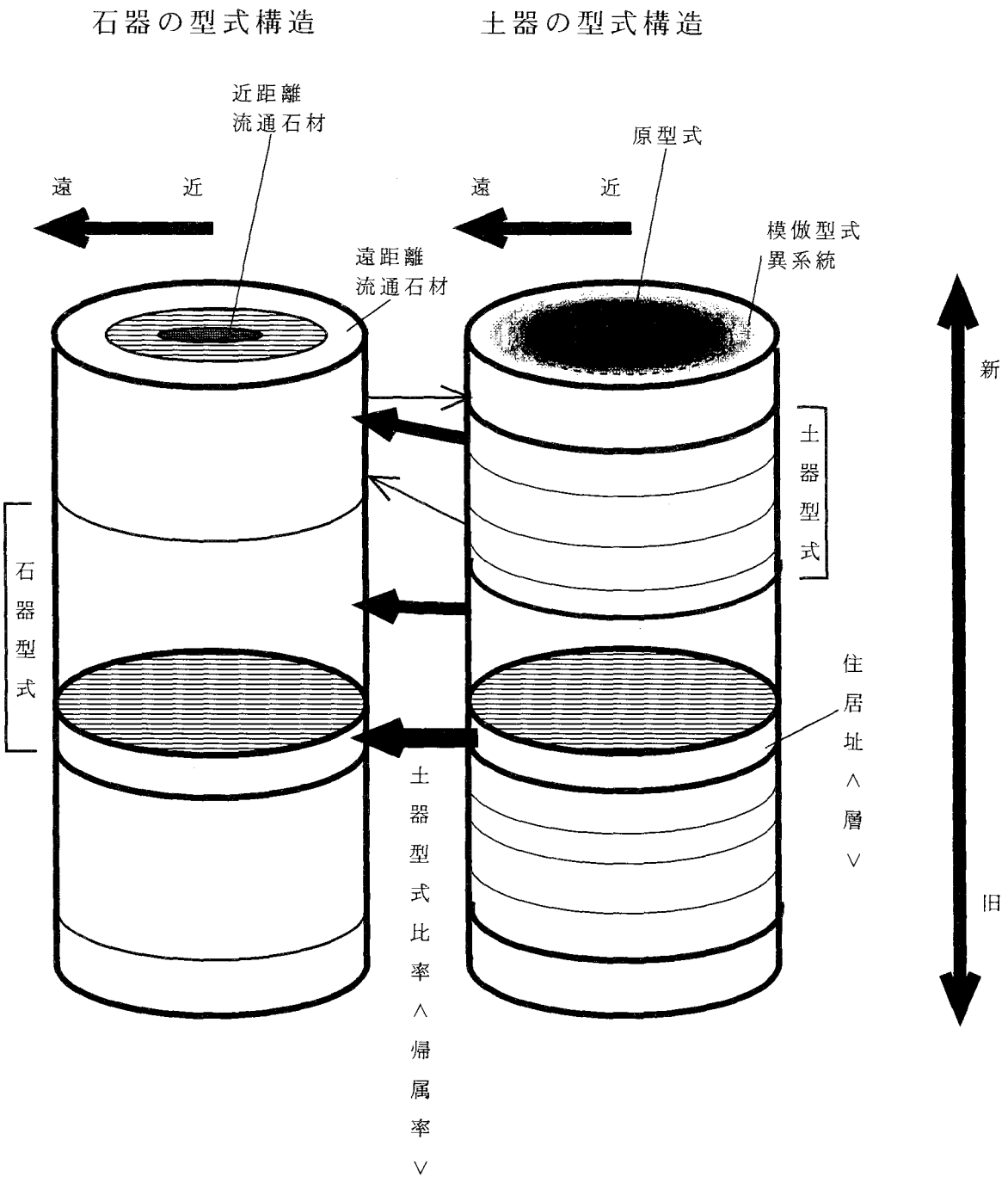
［石器の土器型式帰属率］

従来の遺物整理では、「土器は土器、石器は石器」といったように、両者の間を結びつける有効な概念が存在していなかった。そのため、石器の編年は大きく遅れることとなった。同じ集計単位から検出された土器の型式比率を石器の時期決定に援用したものが、土器型式帰属率である。土器型式比率＝土器型式帰属率であるが、それを石器側から見た場合の概念となる。将来的に石器型式が設定されても石器型式＝土器型式となるとは限らない。ちょうど、土器型式と石器型式の翻訳装置のようなものとして機能することになる。

土器型式帰属率は石器型式が設定されていない石器群についても、利用することができるので、石器の時期を客観的に示すには、常に有効な概念装置となり得る。

［土器と石器の関係］

土器は時間的推移を敏感に示す特性がある。これに対し、石器は空間的移動を敏感に示す特性がある。また、今述べたように土器と石器の時間的関係は、土器型式帰属率によって結びつけることが可能である。この両者の特性をうまく活用すれば、時間的・空間的なものの動き（ものを介在とした人の動き）



第１図　土器型式と石器型式の関係

が理解できることとなる。
言い換えれば、土器型式によって漠然と示された空間的な動態が、石器によって具体性のある動きに変換できるのである。具体性をもちつつ、遺物の時空的動態を解明することにより、歴史的・社会的あるいは文化的構造を究明することが、ここでの目的となる。

これを実現させるための具体的な方法は、これまでに得られた土器と石器の分析結果を突き合わせ、それを解釈して、一般論化させることである。この段階では、解釈は人文科学的な手法となり、最終的には調査者・報告者の主観的意見も含まれて一つの結論が導き出されることになる。

［遺物分布状態からの検証］

土器と石器の共伴関係は、遺物分布状態から検証することも可能である。遺物分布状態に有意な関係が認められれば、共伴関係は確認される。住居址の層・区レベルでの共伴関係は、客観性が高い。それが反復的であればその可能性はさらに高まることになる。

(2) 遺構と遺物の関係についての分析

a 遺構相互の関係

［遺構の時間的整理］

遺構の時期は、遺構型式学的方法、層位学的方法（重複関係）、埋甕炉・鉢被りなど付随する施設として用いられている土器、そして、覆土中の土器型式比率から導き出される。

この分析段階では、すでにこれらのデータは出尽くしているはずであり、これが整合性のあるように時間的に配列して行く作業である。不自然な偏りがある場合、慎重にチェックする必要がある。

遺構型式学的方法と、層位学的方法による時間的連続性については、『遺構編』において、図示している。ただし、この時には土器型式としての時間的位置は厳密ではなかったので、土器の分析成果を踏まえて、再構築することにした。

［遺構の新旧関係］

遺構の新旧関係は層位学的方法が最も客観性が高い。住居址の重複関係は、この方法によって確認し得る。ただし、同一場所建て替えが多い本遺跡の場合、住居址の新旧関係はつかめても、遺物が「縄文人による攪乱」を受けており、それぞれの住居址に帰属する遺物を特定し得ない状態が生じている。したがって、最も古い遺物と、最も新しい遺物によって継続時期については特定することが可能である。

そこで、一定の時間的幅をもたせた住居址系列を作成し、さらに遺構型式論を援用しつつ、多数の住居系列を並べ、比較検討することにより、住居址の時期的変遷過程を明らかにする方法を採用した。

掘立柱建物址は、同じ場所で繰り返し建て替えられている例が多く、これらに時間幅があることは確実である。しかし、柱穴中から出土する遺物は少量であり、また異なる時期の遺物の混入も想定されることから、厳密な時期決定はできなかった。

また、土壙墓群の新旧関係は、副葬品・下部施設として出土した遺物により、土壙墓群全体としての時間幅を推定する方法を採った。副葬品や下部施設として用いられた土器の出土比率は最も多い土壙墓

群でも全体の20%未満であった。ただし、「良質」な資料が多いことから、この方法により時期を決定する方法が最も有効性が高いと判断された。覆土中に混在する本来土壙墓とは無関係の土器片によって、時期を推定する方法も併せて行ったが、より曖昧な結果となりかえって有効性は低いと判断された。

通常の土坑についても同様であり、無意図的な出土遺物により単純に時期を決定する方法では有効性に疑問が生ずることになる。したがって、土坑の存在する箇所の遺物包含層出土の土器群についても分析し、クロスチェックを行う必要がある。ピット群についても同様である。また、一定範囲内に分布する土坑を「群」として扱い、土坑群として遺物を集計し、その時期幅を明らかにする方法も有効な分析手法である。ここで得られた遺物の単位は、住居址出土遺物に準じた一括性が与えられるので、出土石器群はセトルメント分析に利用することができる。こうした細部まで検討しなければならない分析には、際限がないので、所期の目的を完遂するところまで到達し得ない場合も多い。本報告書においても時間的制約から、分析はやや粗いものと成らざるを得なかった。

[共時性のある遺構相互の関係]

遺構どうしの同時性や新旧関係を検証するには、土器や石器の接合関係による方法が最も確実である。しかし、遺構間での遺物の接合作業を実施するには膨大な時間と経費を費やす。そのため、余裕のある遺物整理でないと、実践することは難しい。今回の遺物整理でも、土器・石器ともに遺構間の接合関係を示す資料を抽出することはできなかった。

次善の策として、土器型式による同時性を検証する方法がある。土器文様別重量組成グラフの波形がピッタリと一致すれば、ほぼ同時期であることを示すことができる。そして、その中に含まれている石器群もほぼ同時期であると言うことができる。こうした方法により、遺構間の比較を繰り返し行うことにより、同時並存する遺構が抽出される。

遺物出土状態の分析から明らかにされた遺物出土パターンも、共時性の指標の一つとなる。特に遺棄されたものに対して実効性が高い。例えば、土壙墓の遺物出土パターンからは、ある程度共時性を確認することができる。しかし、住居址に廃棄された遺物出土パターンでは、広い時間幅での共時性は確認できるが、傍証にしかなり得ない。

また、埋甕炉は住居址の時期決定に有効である。これを利用して同時並存を示す方法もある。中期のように埋甕炉の多い時期ではこの方法は実効性が高い。しかし、本遺跡では埋甕炉は全体に少なく、あったとしても時期決定に有効な部位でない場合も多くので、実際にはあまり効力を発揮しなかった。

理論的には以上の事象を一つずつチェックしてゆくことにより、同時性を検証できることになるが、定住性の高い集落遺跡の場合、縄文人自身による遺物の二次的攪乱も多く、時期を特定し得ないケースが多いことも事実である。実際には集落論的分析になると、遺構群単位、遺物群単位としたやや目の粗い分析となってしまう。ここで重要なポイントは、個々の遺構・遺物レベルでの共時性から導き出される個別的な関係の抽出ではなく、遺構群と遺物群の共時性から導き出される社会的関係の抽出である点である。この観点を忘れてしまうと、本末転倒な分析となってしまうのである。

b　遺構と遺物ユニットの関係

［遺物ブロックと遺物ユニット］

遺跡には、現在の我々には遺構として認識できない縄文時代の施設もたくさん存在してしたことは確実である。掘り込みがない施設だったり、掘り込みが確認できない施設（層中の遺構）だったりする。また、特定の「場」として社会的に認識されている部分も存在する。

このように、遺物が一定の範囲から集中して出土し、視覚的レベルでまとまりとして捉えられるもを遺物ブロックと呼ぶ。遺物ブロックは、単に分析単位として扱われ、特別な意味は持たない。そして、含まれる遺物の種類により、土器ブロック・石器ブロック・礫ブロックなどに分類される。石器ブロックはさらに種類により、押圧剝離系列ブロック（A類ブロック）、直接打撃系列ブロック（B類ブロック）など系列ブロックに分類することができる。

視覚的レベルで認定された遺物ブロックは、組成と分布状態を分析することにより、有機的な結びつき（意味のあるまとまり）のあることを確認してゆく。この分析には各種遺物分布図が基礎データとして用いられる。遺構配置や後世（縄文時代の中でも）の攪乱を考慮して、遺物の種類（系列）ごとに遺物ブロックは設定されて行く。複数の遺物ブロックの関係は、平面的位置関係と、土器型式により一括性が認識され、ブロック間に意味のある関係が成り立つ。この分析過程で遺物ブロックは分割、あるいは統合され、再編成される。

こうして抽出された有機的な意味をもったまとまりを遺物ユニットと呼ぶ。遺物ユニットには、例えば廃棄ユニット・石器製作ユニット・祭祀ユニットなど意味付けされた呼称として、遺構と同じレベルの集落構成因子に昇華されることになる。また、分析によっても有機的結びつきが確認できない場合、遺物ブロックのまま残される。

ここで用いるブロック・ユニットは、後期旧石器時代の遺跡構造を解明するための分析に用いられているものである（鈴木　1980、大工原　1990）。安中市では天神原遺跡・注連引原II遺跡において実践されている。

［遺構と遺物ユニットの関係］

遺構の時期は、遺構型式学的方法と土器型式学的方法によって決定される。ここでは土器型式比率により、遺構の時間的位置は示される。そして、広い意味では住居址出土遺物も遺物ブロック・遺物ユニットである。住居の構築時期と出土遺物の時期は必ずしも同時期ではない。遺物の方が住居より一時期新しいことが一般的であり、その多くは廃絶された窪地を利用した廃棄ユニットの一形態である。暗黙のうちに、廃絶直後に遺物が廃棄されたことを前提として時期を決定しているが、その保証はない。炉体土器による検証により、廃棄ユニットの時期と遺構構築時期の関係が確認される。

平面的に包含層を形成する遺物ユニットも、見かけは違うがこれと同じものである。遺構相互の時間的関係を明らかにするために、不可欠なものである。

また、平面的な遺物ユニットは、遺構が無い場所にも特定の機能を有する「場」の存在を示すことができる。ただし、遺構の無い場所を遺物ユニット化するのは、旧石器時代と同様に困難な作業を伴う。しかし、遺構がこれに加われば、遺物ユニットの性格はより明確にすることができる。例えば、土壙墓群重なって存在する遺物ユニットの性格は、何もない場所に形成される遺物ユニットとは異なる意味を

持ちそうである。(この分析は本論で実際に行う。)

なお、少量の土器の場合、土器型式で時期を特定できない場合もある。遺物量が少ない土坑やピットなど、小規模な遺構の時期を決定することは容易ではない。そして、ここでは最も多い出土遺物が必ずしも、遺構の時期の示していないこともある。(註4) こうした遺構を扱う場合、周辺に存在する遺物ユニットにより、間接的に時期を推定することが可能である。例えば、遺構の周囲には遺物ユニットが存在しているにも関わらず、遺構内からは少量の遺物しか出土しない場合、遺構の方がより古いと推定される。

以上のように、遺構と遺物ユニットの分析では、時間的新旧関係・共時性等の解明(時間的動態)と、集落遺跡における人間の動態(空間的動態)を立体的に復元できることを目的として行うより人文科学的レベルでの分析である。

c　遺物ユニット相互の関係

[遺物ユニット間の関係]

遺物ユニットどうしの関係を明らかにする場合、直接的な接合関係を示す資料を少しでも多く見つけ出すことで、共時性が証明される。これは遺構の共時性の項でも述べたとおり、本遺跡では時間的・経費的に実践できなかった。土器型式における共時性が唯一の拠り所である点も同じである。また、本遺跡では貝塚や低地遺跡のように短期間で厚い包含層を形成することもなく、包含層は比較的薄い。そして、異なる性格の遺物ユニットが重複して形成されていた場合、分離することは不可能である。希薄な遺物ユニットは認識することができない場合も多い。さらに、耕作等の攪乱で遺物ユニット自体すでに破壊されてしまっている場合も考えられる。このように、遺物ユニットの分析ははじめからデメリットが多く、敬遠されがちな分析である。

しかし、この分析を行うことで、特定の機能を有する「場」と「場」の関係がはじめて明らかにされるのである。「場」の意味と関係が明らかにされることで、集落にアニメーションのように動く人間行動を組み込むことが可能となる。住居・土壙墓・広場が無人で描かれていても社会は解明されたことにならないのである。社会学的意味で集落内での人間活動の軌跡を多少なりとも解明することが、この分析の目的である。

具体的には土器型式で時期の明らかな遺物ユニットに含まれる石器組成の内容をユニット間で比較し、それが集落内にどのように位置しているかを明らかにする作業である。時期別・種類別に遺物ユニットの内容を組成として示し、平面図に位置・関係図・時期別変遷などを加えた図面を作成することにしている。

(3)　集落の景観復元

集落の景観復元は、遺跡の歴史的・社会意味がどれだけ理解できたか、到達点を具体的な形で示すことである。具体的検証もなしに、集落の想像復元図が描かれることがあるが、それは科学的な景観図ではない。集落の景観復元により確証が得られた部分については、市民・社会へ還元する責務がある。ここで分析された内容をもとに、いつ・どこで・だれが・何を・どうした　といった問いかけに対し、でき得る限り誠実に答えるための理論的根拠となる部分に相当する。

また、ここで復元された景観が、縄文社会の中で、時間的・空間的に一般性をもつ内容であるのか、特殊性をもつ内容であるのかについても言及する必要がある。歴史や社会は、ごくありふれた日常の連続体であり、波瀾万丈なハプニングの連続ではないのである。その何も大きな変化のない日常の描写こそが、縄文社会そのものなのである。

この景観復元の過程では、同時期の遺跡・類似した性格の遺跡の事例についても分析されることになる。本遺跡では不十分で実態が解明され得なかった点について、他の遺跡で検証された事例から類推するためである。他遺跡との共通性が多ければ多いほど、分析あるいは解釈結果は強固なものとなって行く。また、差異は本遺跡の個性・特殊性として理解されて行く。こうした比較を行うための機軸は、言うまでもなくこれまで行ってきた分析の結果である。検証された結果こそが最大の論拠となり得るのである。多くの分析結果を総合的に判断し、それぞれが最も整合性をもつところで結論を下して行くという人文科学的な作業である。

そして、この景観図は研究の進展により、どんどん描き変えられて行くことになる。あくまでも報告書作成時点で、分析・解釈を行った担当者がイメージする景観である。そのいくつかは、しっかりとした検証結果に基づくものであり、それは描き変えられない事実である。この事実となり得る部分を少しでも多くすることが重要なのである。

(4) 領域と社会の復元に向けて

中野谷松原遺跡の集落の景観が明らかになった次の段階では、集落の生活領域や、集落間の社会的・経済的関係を明らかにすることになる。ここに至り中野谷松原遺跡を取り巻く縄文社会の様相を、今回の分析により明確化した事実をキーワードとして考察する。ここで推定される縄文社会は、日本列島における同時代の縄文社会の一つの地域性として理解されることになる。

集落はいくつかのセトルメント・パターンに分類され、その結びつき方からモデルが設定されて行くことになる。

第1段階として、中野谷松原遺跡を中心とした同一集団の行動軌跡を検討する。拠点集落とキャンプサイトなど、セトルメントの異なる遺跡相互の関係とその活動領域を明確化させ、具体的に領域の景観を復元しモデル化する。また、領域モデルの時期的変遷についても明確化させる。ここでは仮想領域モデルを利用して検討を行う。

第2段階として、群馬県内の他集団の行動軌跡を検討する。中野谷松原遺跡の領域モデルと比較し、このモデルが適合可能かどうか検討し、モデルの普遍性を確認する。また、異なる部分・モデルの問題点を抽出し、さらに普遍性の高いモデルを構築する。

第3段階として、拠点集落相互の関係について検討する。領域を異にする集団相互の共通性と差異性を明確化し、どのような社会的紐帯関係が存在しているか、またどのような変遷過程を辿るか解明する。そして、縄文前期の社会構造モデルを構築し、一つの結論あるいは仮説として提示する。

ここで構築される領域モデルは遺跡から抽出された実証的根拠により、蓋然性のレベルから確実性のレベルに徐々に接近して行くことになる。本遺跡における結論がどの程度の確実性のレベルに位置するか、研究者により評価が異なる。客観性の高い、あるいは抽象化されたモデルは単純化され、陳腐な結論となる。また、主観性が高くなるにつれ、あるいは具体性を高めるにつれてモデルは複雑化され、歴

史性・社会性・哲学性をも付加された結論となる。

なお、結論は論理的に説明可能な範囲に留めておくべきであり、それを逸脱する場合、仮説であることを明記すべきである。本報告書での結論は、一部仮説を含むものとなることが予想される。そして、今回の分析によっても解明することができなかった課題・問題点は問題提起として、後世の研究者へ引き継がれることになる。

以上、本報告書で主題となる縄文前期の遺構と遺物の分析の方法論について、本論に先立ち述べた。報告書は単なるデータ集ではなく、前提・方法・本論・結論から構成されるレポートである。何の方針も示すことなく、いきなり本論として厳格な事実のように装うことも、羅列的に事実記載（事実かどうか確認できない）を行うことも、科学的な報告書とは言い難い。

また、人間の行う作業と分析であるから人為的ミスはつきものである。すべてにおいて誤りのない報告書など有り得ない。そのため、どの程度の信頼度であるのか、どのような方法でデータ化したのか、何を明らかにするためのデータ化なのか、所信を示した上で、記載を行うべきである。

（註１） 例えば、「中野谷地区遺跡群」所収の天神原遺跡の石器組成を参照されたい。

（註２） 後・晩期の天神原遺跡における土器群の数量化では、細分類可能な土器が精製土器と有文粗製土器に限られてしまったため、細分類可能な資料のみで、土器組成を作成した。なお、この際には「土器文様別個数組成」を用いている（林 1994）。大量に粗製土器が存在する土器群においては、「良質」な土器群に依存する方法を採らざるを得ないこともある。なお、この遺跡では、細分可能な精製土器群の平面分布との強い整合性から、帰属型式不明の粗製土器群の帰属型式を割り出すことに成功している。

（註３）ほぼ同時期の大下原遺跡の場合では、すべての住居址から前段階の土器片が一定量検出されており、ここでは拡張・重複のない住居址でもこうした現象が普遍的に認められ、二次廃棄が行われていたことを推定した（大工原 1993）。集落の「清掃行為」とでも言うべき集落居住者の二次廃棄行動は、土器の編年的研究を阻害する要因であるが、こうした現象が認められるような大規模な集落遺跡こそが、「量」的面において土器編年研究を保障している。このジレンマを克服することが、今日的課題と言えよう。

（註４）筆者自身の経験では、出土量が多い土器群＝遺構の時期とはなり得ないことが多い。この場合、遺構の性格も推測しながら、慎重に分析を行ってゆくべきである。天神原遺跡の配石墓の事例では、層位ごとの土器組成を分析し、中・下層には加曽利Ｂ式の土器が組成し、晩期の土器は出土していないことから、配石墓の構築時期を特定し得たが、最も多く出土したのは上層から出土した晩期の土器群であった（大工原・林　1995）。注連引原Ⅱ遺跡の平安時代の「牧」区画溝では、中・下層から出土したのはすべて縄文時代と弥生時代中期の土器群であり、弥生時代の環壕集落と誤認した（大工原　1988）が、実際の時期は上層のみに含まれていた須恵器に近い時期であった。容器として機能しない破片は無関係な人間にとっては、ただの石ころ同然のものであることを、強く認識しておく必要がある。

2　後期旧石器時代の遺物

(1)　調査の方法と経過

安中市域における後期旧石器時代遺跡の本調査は古城遺跡のみであり、それ以外の場合、単独出土であり、明確に出土層準が確認された事例はない。今回の調査では、きちんとした出土層準からの石器の検出が一つの目的である。南東0.7kmに上黒岩遺跡があり、ここからは3個体以上のオオツノシカの化石骨が出土している。出土層準は岡山大学考古学研究室の調査によりAT層（姶良Tn火山灰層：2.2～2.5万年前）とY-Pm Ⅳ層（八ヶ岳新期第Ⅳ軽石層：年代再検討中）の間の泥炭層中であることが確認されている(稲田　1989)。上黒岩遺跡のある星川と横野台地は約70mの比高があり、急峻な斜面が存在している。また、広大な横野台地はこの時期草食動物の食糧であるクマザサが繁茂していたことが植物珪酸体分析により確認されており（杉山・前原・大工原　1992)、大形草食動物の棲息も当然推定される。上黒岩遺跡のオオツノシカが本来横野台地に棲息していた可能性は十分にあり、これを狩猟対象とした後期旧石器時代人の遺跡の存在も予測される。AT下位には古城型単位集団集落と牛伏型集団群集落が存在しており、狩猟戦略の違いから立地環境・条件に大きな差異があることが推定されている（大工原1990・1991)。ここでは古城型単位集団集落あるいはさらに小規模な一時的狩猟キャンプの存在が想定される。横野台地南端の星川の峡谷へオオツノシカの追い落とし猟が行われたと仮定した場合、狩猟キャンプは逆に台地の北寄りに形成された可能性が高い。

後期旧石器時代の調査はこうした予測とこの時代の狩猟戦略を考慮し、試掘坑は深い谷に面した北傾斜変換ラインに6カ所（A・C～H区)、台地中央の最高所ラインに4カ所（B・H～J区）設定した（遺構図版編第5図)。試掘坑は10×10mの規模とした。

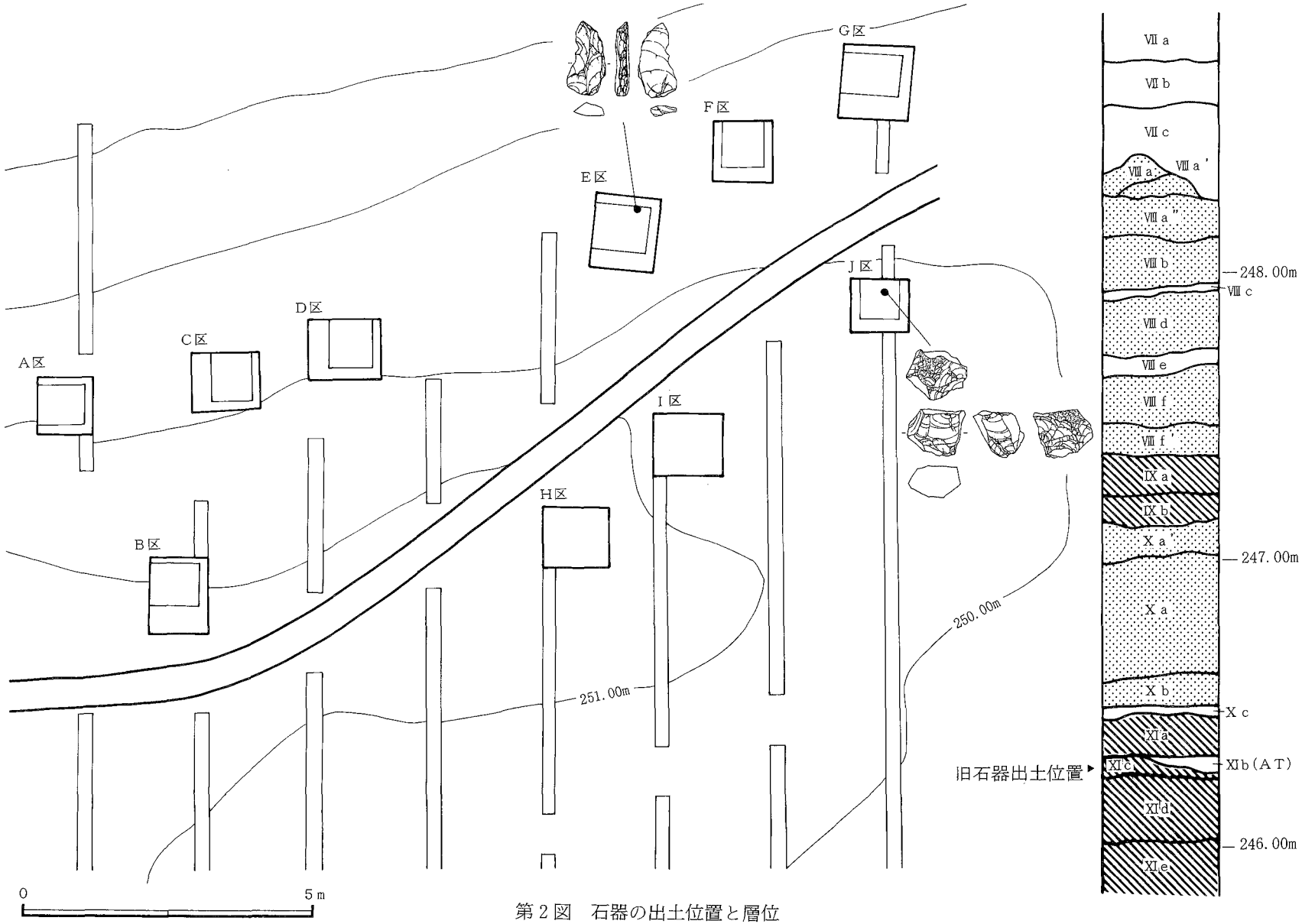
この地域におけるテフラ分析と植物珪酸体分析の結果に基づき、クマザサの含有量の多く土壌化が進行している土層を中心に調査を行った。具体的には、As—YP層とAs—BP層の間層（Ⅶa～Ⅶb層)、As—BP層群中の間層（Ⅷe層)、As—BP層とAs—MP層の間層（Ⅸa～Ⅸb層)、AT層より下部にある黒色帯（Ⅺb～Ⅺd層）を調査の対象とした。

土層掘削は軽石層（As—YP、As—BP、As—MP）はバックホー（0.7m³）により一般的な方法で掘削を用い、調査対象層ではバックホーにより厚さ数cm程度に薄くスライスする方法で掘削し、人力による精査も併せて行い石器の検出に努めた。なお、可能性の最も高いAT下位層については、すべて人力による精査を行った。AT層よりも上位の層中からは自然礫の出土は数例あったものの、石器は検出されなかった。

AT下位層の調査では、北傾斜変換ラインに設定したE区・Ⅺc層中からはナイフ形石器1点、最高所ラインに設定したJ区・Ⅺc層中からは石核1点が検出された。

稲田孝司　1989「群馬県上黒岩オオツノシカ化石産出地の試掘調査」『哺乳動物化石の産状と旧石器文化』岡山大学文学部研究叢書2

杉山真二・前原豊・大工原豊　1992「植物珪酸体（プラント・オパール）分析による遺跡周辺の古環境推定」『日本文化財科学会第9会大会研究発表要旨集』日本文化財科学会



第2図　石器の出土位置と層位

大工原豊　1990・1991「AT下位の石器群の遺跡構造と分析に関する一試論」『旧石器考古学』41・42　旧石器文化談話会

(2)　XI層の出土状態

各区の出土状態は以下のとおりである。なお、旧石器時代の出土層序については、遺構図版編第3章（p.21～23）に調査時の分層状態と所見を示した。また、自然科学編第1章テフラ分析（p.595～597）で詳述されているので、併読いただきたい。

E区（第2図）　調査区の北端からナイフ形石器が単独で検出された。出土層位はXIc層（黒色帯）中である。堅い土層中に包含されていたため、調査時に刃部を一部欠損した。周囲からは何も検出されなかった。

J区（第2図）　調査区の中央北寄りの場所から石核が単独で検出された。出土層位はXIc層（黒色帯）中である。それ以外に剥片類などはまったく検出されなかった。

(3)　XI層出土の石器

ナイフ形石器（図版編第187図1）　縦長状剥片を素材剥片とし、打面は比較的大きな剥離面で基部に残存する。一側縁に片面急角度調整（狭義のブランティング）が施されたものである。石材は黒色安山岩である。

石核（図版編第187図2）　サイコロ状を呈し、求心状剥離により幅広剥片を作出した残核である。石材は赤色の鉄石英である。

(4)　縄文時代遺構中から出土した石器

石刃（図版編第187図3）　小さな原礫面を打点として作出された黒曜石製の石刃で、先端部は半分ほど欠損する。裏面を中心に調整が施されているが風化度が弱いので、縄文時代にスクレイパーとして転用された際の調整と判断される。出土した住居址（図版ではJ－29住とあるがJ－33住へ名称変更）の時期は諸磯a～b式であり、この時期に再利用されたものと推定される。なお、同じ住居址から草創期の有舌尖頭器も出土しており関連性が窺える。

(5)　小　　結

a　AT層下位の石器について

ナイフ形石器と石核はAT層下位の黒色帯中のほぼ同一レベルから出土しており群馬編年I期の石器群とみなすことができる。しかし、距離は約35m離れており、出土状況からみた場合、必ずしも同じ時期のものとは言い難い。

次に個々の石器について検討してみよう。ナイフ形石器は基部に打面を残し、一側縁調整により整形

されたもので、特徴的な形態である。類例は群馬編年Ⅰ期2段階～3段階に複数認められることからこの段階に相当すると判断される。また、石核は小形のナイフ形石器（いわゆる台形様石器）などの素材となる幅広剝片を作出した残核と考えられる。Ⅰ期の資料であることは確実であるが、それ以上の細分時期は言及できない。

このように、単独で石器が出土するだけでブロックを形成しない遺跡は、ごく短期間利用されただけのセトルメントであり、当初予想された星川への追い落とし仮説と矛盾するものではない。しかし、考古学的方法ではそれ以上積極的に言及できるものではない。現時点での旧石器時代のセトルメント復元の限界であろう。

（大工原　豊）

3　縄文時代草創期の遺物

有舌尖頭器（図版編第187図4・5）　2点とも細身で側縁部は細かい鋸歯状を呈する。また舌部は返りが明瞭であることから小瀬ヶ沢型の範疇で捉えられる。4は完形で、チャート製である。遺跡で見学者により表面採集されたもので、出土位置は不明である。また、5は先端部が欠損しており、黒曜石製である。諸磯b式期のJ—33号住居址（旧J—29号住居址）覆土中から検出されている。いずれも原位置を保っておらず、この時期の遺跡像は不明である。

安中市内からは、これを含め7点の有舌尖頭器が検出されている。このうち中野谷地区からは、下宿東遺跡から2点が表面採集されており、いずれも小瀬ヶ沢型である。この時期に中野谷地区には移動生活の中で定期的に立ち寄る居住地が存在していた可能性が高い。ちなみに、それ以外のものとしては、簗瀬二子塚古墳（原市地区）・杉名薬師遺跡（同）・北原遺跡（東上秋間地区）から各1点検出されている。いずれも単独出土である。

（大工原　豊）

4　縄文時代前期中葉～中期初頭の遺物

(1)　土　　器

a　土器の分類

土器の分析方法については、第１章で述べたとおりであり、単に土器を羅列的に示すことではない。土器の時間軸に対する強さを最大限抽出し、石器や遺構との関係を明らかにすることである。

中野谷松原遺跡から出土した縄文土器は、前期を主体として中期、後期の土器が出土している。また、本遺跡から検出された遺構は、住居址・掘立柱建物址・土坑・土壙墓等があり、出土土器と遺構の時期はほぼ一致する。そして、前期中葉から後葉にかけての時期では縄文時代の集落構造を具体的に検討できる。しかし、中期から後期にかけての遺構については、散逸的に見られる程度で集落構造を解明するに至る資料が少ない。

このため、前期の縄文集落構造をさらに詳細に検討することを主眼とし、土器の分類では、前期中葉から後葉にかけて細かく細分した。これらの土器を細分することで、時間的な推移、地域的な特徴、他地域との交流について判断できるものと考えたからである。そして、前期の土器分析においては、中期から後期の土器群を概括的に分類するだけにとどめた。また、中期後葉～後期前葉については、別章で扱う。

今回の土器分類については、従来の土器型式名を使用し、各土器型式内を主に施文具・施文方法で分け、さらに基本文様と、文様構成の違いで細分した。土器型式名については、分類者によって齟齬があると思われるが、各型式の土器について標準資料を提示することで理解いただきたい。

有尾式から十三菩提式までの土器群は、中野谷松原遺跡の前期集落における時間的推移と群馬県西部における当該期の地域的特色を理解するための土器である。また、浮島式から下島式までの土器群は、在地の土器群に伴って出土した他地域の土器である。中期以降の土器は、前述のとおり概括的に分類した。

以下、今回行った分類基準を示す。

［関山Ⅱ式］

本遺跡出土の資料は、量的には少ない。施文具は、半截竹管を多用している。地文の縄文には組紐文がある。口縁部文様に三角や規矩形また、コンパス文が崩れた長い波状沈線などが施文されるようになる。基本文様の違いから２つに分類した。

SY ２-１　口縁部に半截竹管でコンパス文を描くもの。

SY ２-２　口縁部に半截竹管で鋸歯状文を描くもの。

［神ノ木式］

信州系の繊維混入のきわめて少ない有尾式以前の土器群を本類とした。本遺跡出土の資料は、きわめて量的には少ない。

KA　櫛歯状の工具での刺突文を施すもの。口縁上端に縦位に押し引くように施文したもの。

［有尾式］

長野県飯山市有尾遺跡の資料により設定された土器型式である。本来、有尾式土器は、無繊維の土器であるとされてきた。群馬県域で出土する土器は、含繊維の土器であるが有尾遺跡例の土器と文様構成等同じ内容のものであることや長野県出土の有尾式土器にも含繊維土器が認められることから、有尾式に含めた。本遺跡の主体となる土器である。９つに分類した。本型式の土器も施文具は半截竹管を主としているため、基本文様・文様構成の違いから分類した。

AR-１　櫛歯状の工具での刺突文を施すもの。口縁上端に縦位に施文する。口縁部文様帯に山形･菱形に文様を描くもの。

AR-２　半截竹管で平行沈線を口縁部上端に縦位に施文するもの。口縁部文様帯に山形･菱形に文様を描くもの。

AR-３　半截竹管で爪形文を口縁部文様帯に菱形に描くもの。

AR-４　半截竹管で爪形文を口縁部文様帯に山形に描くもの。

AR-５　半截竹管で爪形文と平行沈線文で口縁部文様帯に菱形に描くもの。

AR-６　半截竹管で爪形文を施文するもの。小破片のため３・４いずれか判断の付かないもの。

AR-７　半截竹管で平行沈線文を口縁部文様帯に菱形に描くもの。

AR-８　半截竹管で平行沈線文を口縁部文様帯に山形に描くもの。

AR-９　半截竹管で平行沈線文を施文するもの。小破片のため７・８いずれか判断の付かないもの。

［黒浜式］

従来、群馬県域では当該期の土器は(関山II以降諸磯ａ式以前の土器)、黒浜式として総称されてきた。しかし詳細に観察すると、有尾式と黒浜式に分別できる。ここでは、有尾式の文様構成以外の特徴的な半截竹管施文の土器を黒浜式とした。

本遺跡では、有尾式に伴って出土するものと、時期的に新しくなる土器とがある。有尾式に伴うものは、KR-２、KR-３、KR-５で、それよりやや時期が新しくなるのは、KR-１、KR-４、KR-６である。黒浜式前半段階のものは、文様に規則性があまり無く、新段階のものには、文様帯に規則性や、文様区画が出来てくる傾向にある。

KR-１　縄文地文の上に、半截竹管で平行沈線やコンパス文を描き文様帯を区画するもの。

KR-２　縄文地文の上に、半截竹管で不定形な平行沈線を描くもの。

KR-３　口縁部に平行あるいは縦位に粘土紐を貼付する隆帯文を持つもの。

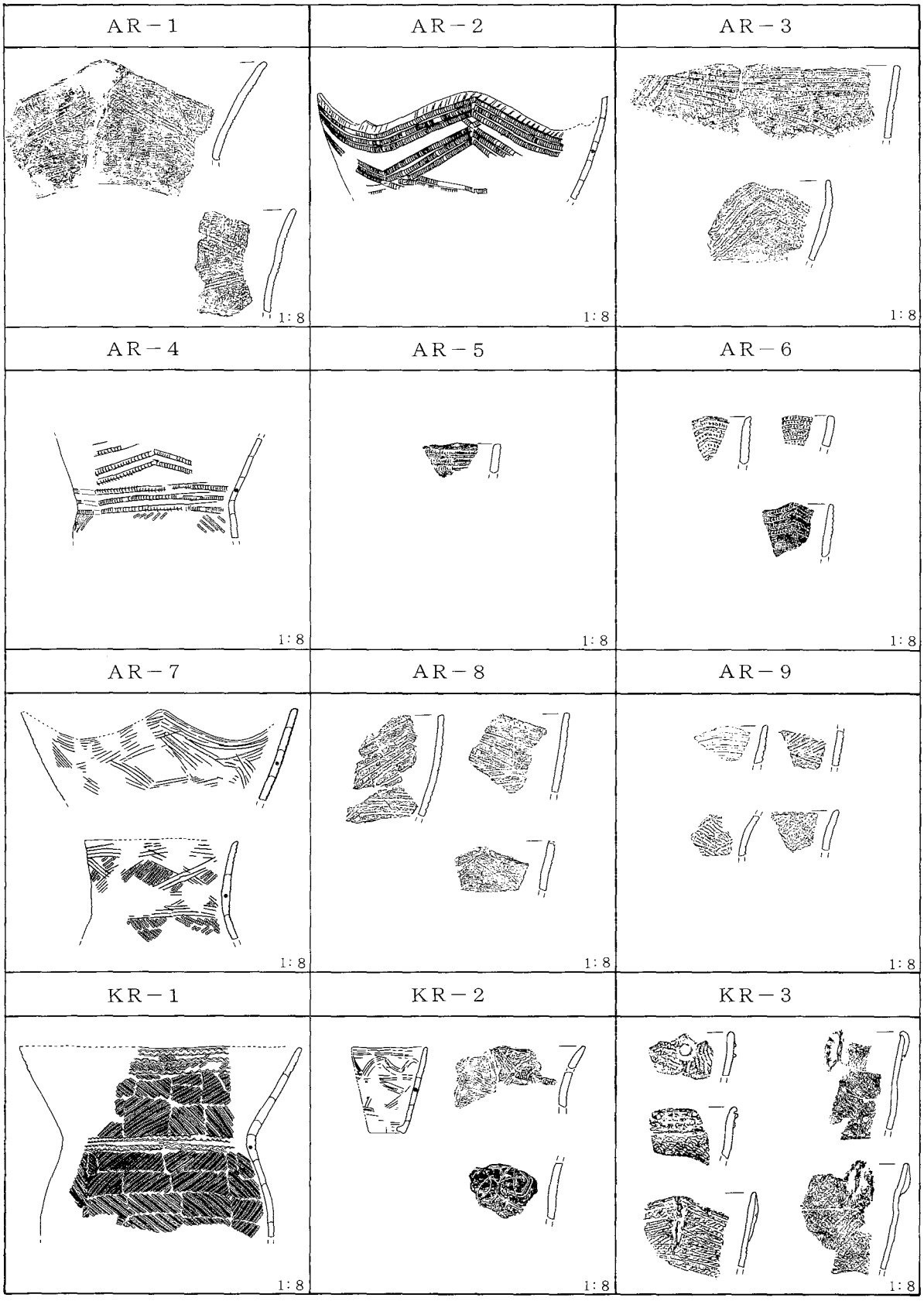
KR-４　縄文地文の上に、半截竹管による爪形文を縦位･横位に描き、斜位に爪形文を施文し、米字形文を描くもの。

KR-５　縄文地文の上に、棒状の工具で乱雑な沈線を描き、文様に規則性がないもの。

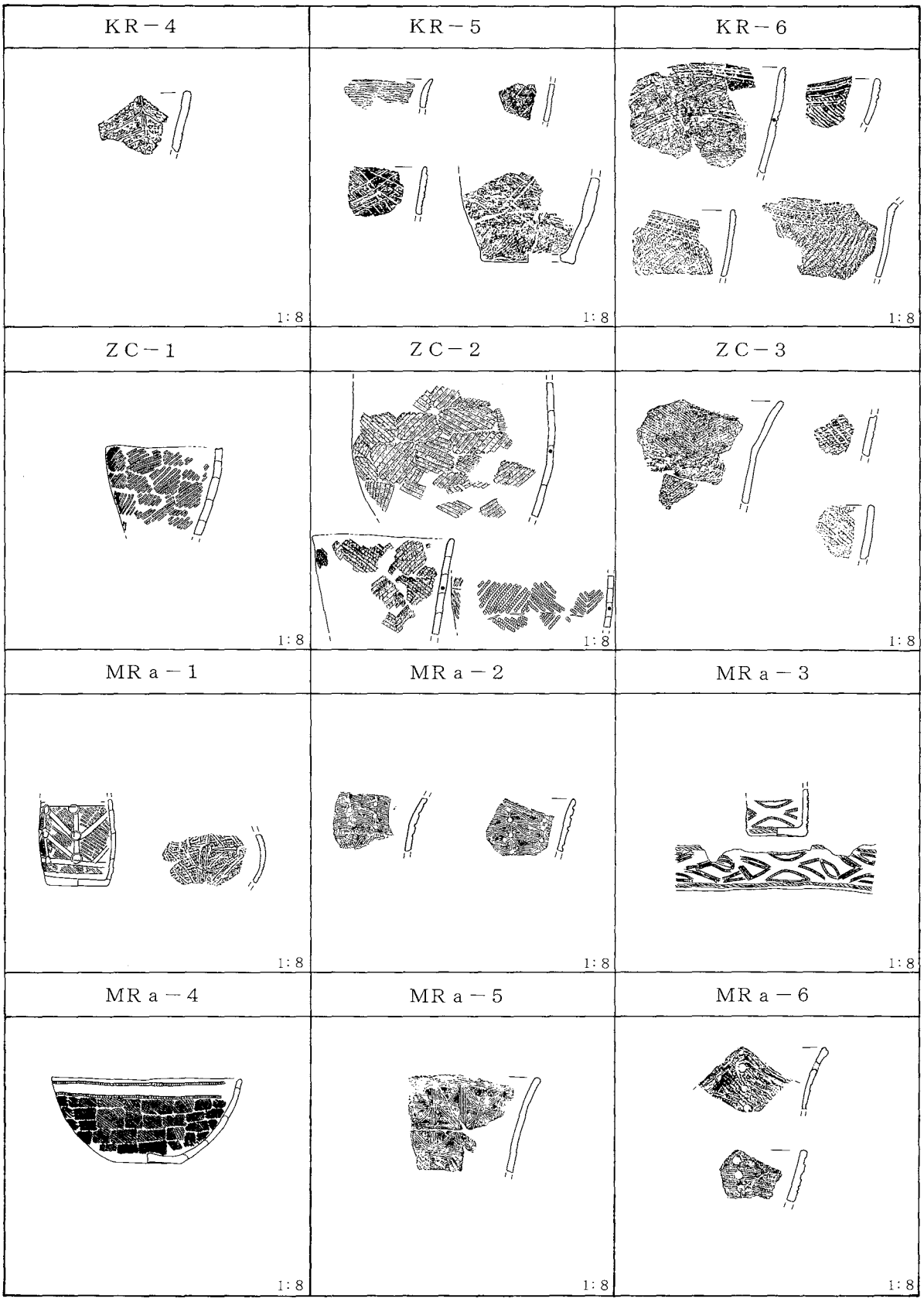
KR-６　縄文地文の上に、半截竹管で爪形文を横位・縦位に描き、文様帯を区画するもの。

［前期中葉縄文施文の土器］

器形全体を復元できる土器で、縄文施文のみのものや、本来ならば文様を施文されるべき土器である



第3図　土器分類（1）


KR－4
KR－5
KR－6
1:8
1:8
1:8
ZC－1
ZC－2
ZC－3
1:8
1:8
1:8
MRa－1
MRa－2
MRa－3
1:8
1:8
1:8
MRa－4
MRa－5
MRa－6
1:8
1:8
1:8

第4図　土器分類（2）

が、破片のため文様部分が認められない含繊維の縄文施文の土器を分類した。その他、文様施文の不明なものを一括した。縄文施文のみの土器では、有尾式土器と黒浜式土器の区別は、詳細に検討することで区別がある程度可能ではあるが、今回は同一として扱った。

ZC-1　無節・単節の縄文を施文したもの。

ZC-2　羽状縄文を施文したもの。

ZC-3　異条斜縄文と附加条縄文を施文したもの。

ZC-4　無文のもの。

ZC-5　底部破片（文様不明）。

ZC-6　文様不明のもの。

［諸磯ａ式］

幅狭の竹管を工具として施文している土器群である。主として幅狭の竹管を使用して文様を描いている。同じ竹管による文様構成を持つ土器について幅広の竹管を使用する諸磯ｂ式と区別した。施文文様から、６つに分類した。

MRa-1　半截竹管（幅狭）による平行沈線で肋骨文を描くもの。

MRa-2　半截竹管（幅狭）による爪形文で木葉文を描くもの。

MRa-3　半截竹管（幅狭）による平行沈線で入組文を描くもの。

MRa-4　半截竹管（幅狭）により爪形文による上記以外の文様のもの。

MRa-5　半截竹管（幅狭）により平行沈線で施文した上記以外の文様を有するもの。

MRa-6　縄文を地文とし、竹管により円管刺突を加えたもの。

［諸磯ｂ式］

施文具は幅広の竹管を使用している。施文方法から半截竹管による爪形文と平行沈線文、粘土紐による浮線文で分け、さらに基本文様、文様構成で分類した。

MRb-1　幅広の半截竹管または櫛歯状工具による平行沈線で横線・波状文を口縁部文様帯に描くもの。

MRb-2　半截竹管または櫛歯状工具による平行沈線で口縁部文様帯に波状文を描き、竹管により円管刺突文を加えるもの。

MRb-3　半截竹管による平行沈線で斜格子目文を口縁部文様帯に描く描くもの。

MRb-4　半截竹管（幅広）による爪形文で木葉文から変化した文様を描くもの。

MRb-5　粘土紐貼付による太い浮線文と半截竹管（幅広）による爪形文で木葉文から変化した文様を描く。

MRb-6　粘土紐貼付による浮線文により、入組状の渦巻き、弧線を描くもの。

MRb-7　粘土紐貼付浮線文により、入組状の渦巻き、弧線を描くもの。浮線がMRb-6より扁平なもの。

MRb-8　粘土紐貼付浮線文を施文した土器で、獣面把手を持つもの。

MRb-9　半截竹管（幅広）による平行沈線を横位に施文するもの。

MRb-10　半截竹管（幅広）による平行沈線で、横位に区画した文様帯内に入組状の渦巻き、弧線を

描くもの。

MRb-11　半截竹管（幅狭）による沈線が集合化し、横位の区画と区画内に入組状の渦巻き、弧線を描くもの。

MRb-12　半截竹管（幅広）により平行沈線を描くもの。小破片のため9・10いずれか判断できないもの。

［諸磯ｃ式］

集合沈線による施文と粘土紐による耳朶状・棒状の貼付文の土器と地文に縄文を持つものを本型式とした。粘土紐を貼り付け竹管で結節の爪形文を刺突する結節浮線文の土器群は、本型式には入れず下島式とした。

MRc-1　櫛状施文具により集合沈線を引き、文様を描くもの。

MRc-2　棒状・耳朶状の貼付文を有し、地文に集合沈線を施文するもの。

MRc-3　棒状・耳朶状の貼付文を有し、地文に縄文を施文するもの。

［前期後葉縄文施文の土器］

繊維を含まず縄文施文と器形、胎土から前期後葉になると思われるものを本類とした。

ZK-1　縄文を施文するもの。ただし、羽状・円管刺突を含む。

ZK-2　無文のもの。

ZK-3　文様不明のもの。

ZK-4　底部破片（文様不明）。

［十三菩提式］

前期最終末の土器群を本類とした。

JS　三角印刻文や縄文地に結節浮線により文様を描くもの。

［浮島式］

諸磯ｂ式に並行する東関東系の土器群を本類とした。浮島Ⅰ式・Ⅱ式に相当するものを本類とした。

UK　貝殻腹縁による鋸歯状文を施文したものや、口縁部文様帯に平行沈線により菱形を描くもの。

［大木４・５式］

諸磯ｂ式に並行する東北系の土器群を本類とした。

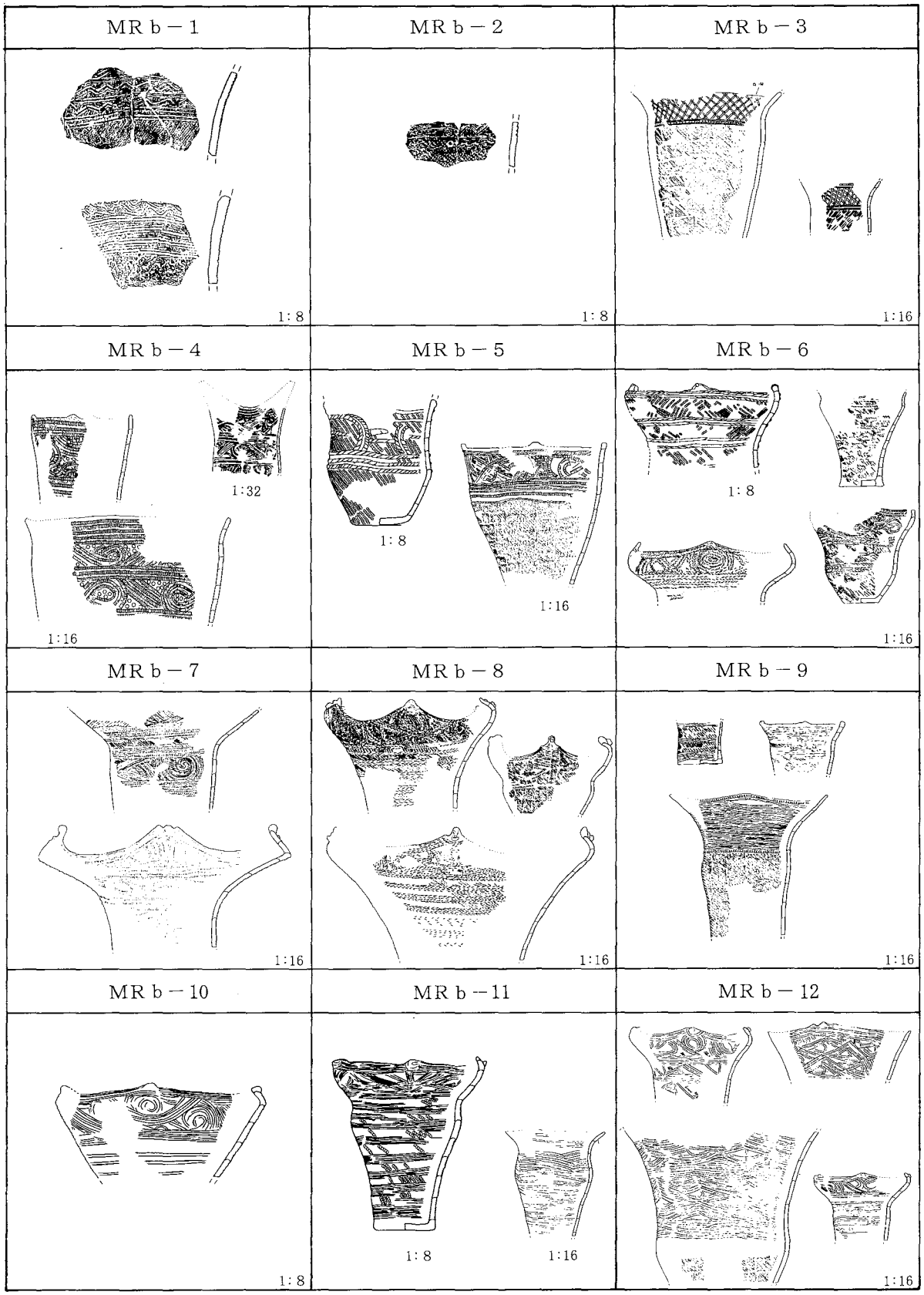
DI　縄文地に粘土紐を鋸歯状に施文したもの。

［北白川下層式］

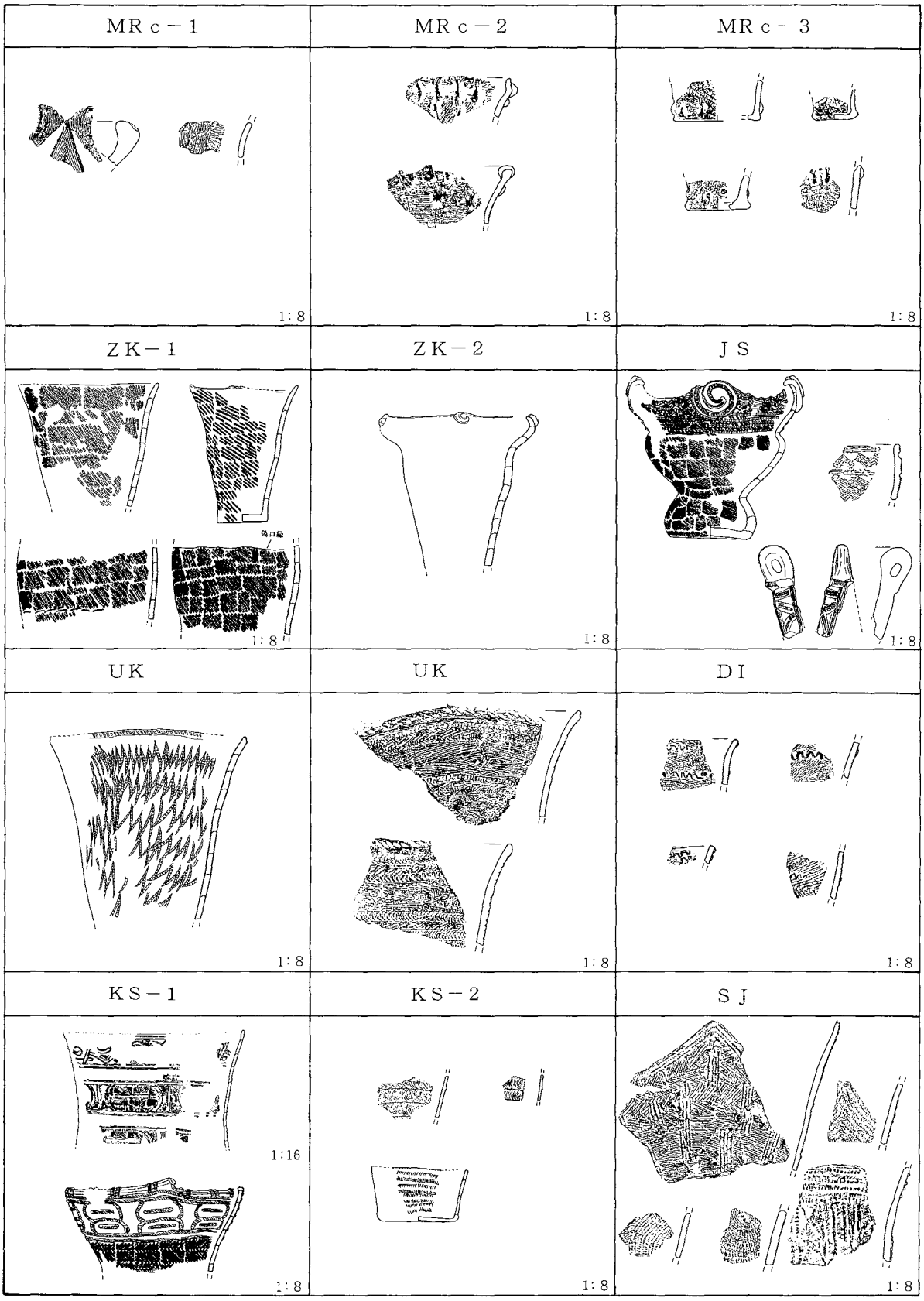
北白川下層Ⅱｂ式・Ⅱｃ式に相当する土器群を本類とした。

KS-1　浮線文を施文し、地文に羽状縄文を施文した薄手のもの。北白川下層Ⅱｃ式に比定される。

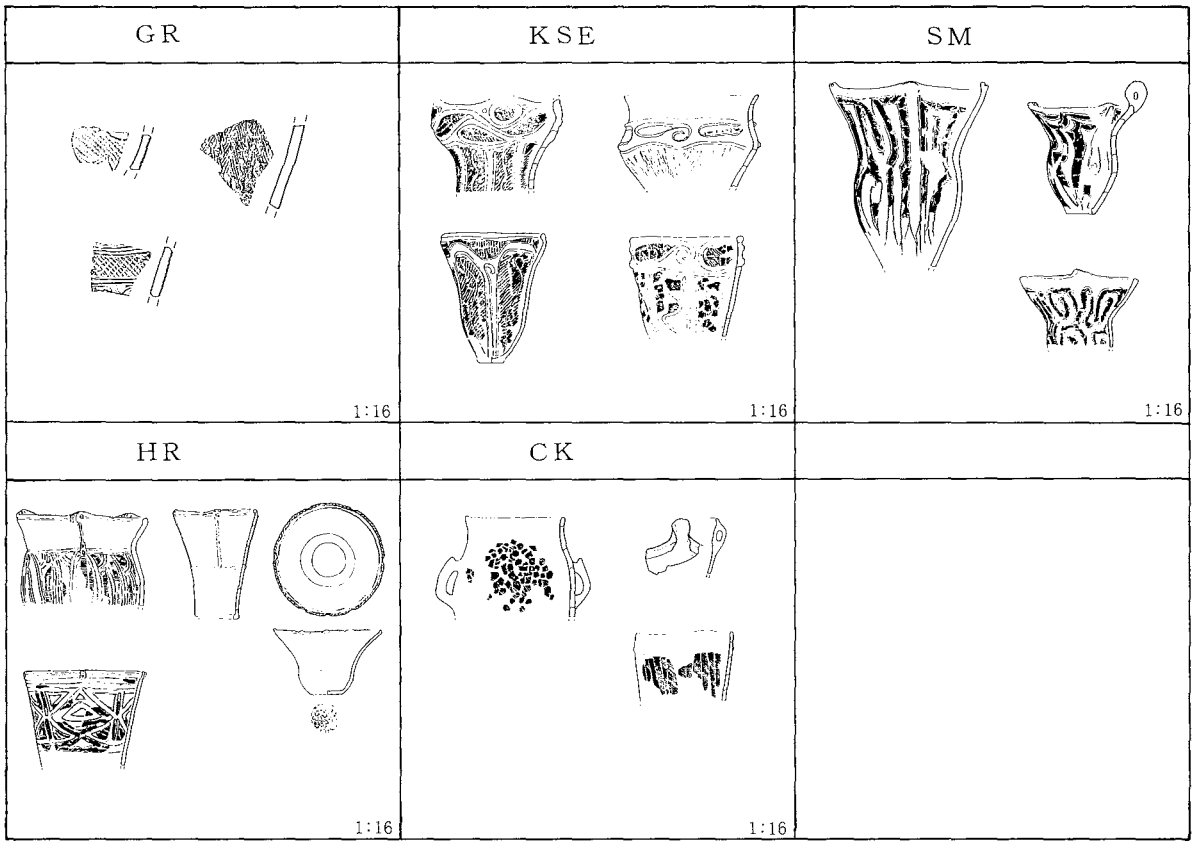
KS-2　棕櫚状文（幅広の爪形文を横位に施文した文様）で薄手のもの。北白川下層Ⅱｂ式に比定される。


MR b－1
1:8
MR b－2
1:8
MR b－3
1:16
MR b－4
1:32
1:16
MR b－5
1:8
1:16
MR b－6
1:8
1:16
MR b－7
1:16
MR b－8
1:16
MR b－9
1:16
MR b－10
1:8
MR b－11
1:8
1:16
MR b－12
1:16

第5図　土器分類（3）


MRc－1
1:8
MRc－2
1:8
MRc－3
1:8
ZK－1
1:8
ZK－2
1:8
JS
1:8
UK
1:8
UK
1:8
DI
1:8
KS－1
1:16
1:8
KS－2
1:8
SJ
1:8

第6図　土器分類（4）



第7図　土器分類（5）

［下島式］

諸磯c式に並行する土器群で、長野県を中心としているものを本類とした。

SJ　地文に集合沈線を施文し、結節浮線や結節の沈線により、渦巻き文などを施文したもの。

［五領ヶ台式］

中期初頭の土器群を本類とした。

GR　細線文や細沈線と三角印刻文を持つもの。胴部に縦方向の縄文帯が施文されるものと、集合沈線が横位の区画線内に縦位に施文されるものがある。本遺跡では、全体の出土量は少ないが割合は後者が多い。

［阿玉台式］

中期前葉の胎土に雲母を含む土器群を本類とした。

AT　胴部に粘土輪積痕を残し、胎土に雲母を多く含むもの。口縁や胴部に隆帯が多用され、隆帯に沿って角押し文等が施文されるもの。

（関根慎二）

b　土器組成

［分析対象データの確認］

遺跡全体の土器組成（第８図、第４・５表）

遺跡から出土した土器類（ミニチュア・土偶・土製品を含む）は、全部で4,993.8kgである。この中には中～後期の土器類も一部含まれているが、大部分は前期中葉～後葉の土器類である。中・後期の比率は4.8％に過ぎない。最も多いのは諸磯ｂ式で全体の62.4％を占めており、主体をなしている。次いで有尾式が多いが、その差は大きい。また、遺構別にみると住居址から出土したものが圧倒的に多い。次いで、土坑出土のものが多いが、住居址の８％程度であり、その差は大きい。したがって、本遺跡の土器群は諸磯ｂ式を中心としたものであり、住居址に集中していることが分かる。

住居址全体の土器組成　中・後期の住居址を含む住居址全体の土器は、3,902.0kgである。この重量は遺跡全体の78.1％である。中・後期の占める割合は2.2％に過ぎず、ほぼ前期土器群の組成を示している。しかし、住居数では有尾式期100回、諸磯ｂ式期68回であり、有尾式期の方が住居址数は多い。土器組成では、諸磯ｂ式は67.4％を占めており、有尾式は18.9％である。すなわち、有尾式期の方が土器保有量がはるかに少なかったことを示している。また、異系統土器群の占める割合は極めて小さい。これは本遺跡に他地域の集団の移入する状態がほとんどなかったこと示しており、土器群の変遷は内的要因によるところが大きかった可能性が高いことが推測される。

では、遺跡全体の組成と住居址全体の組成を比較してみよう。第８図や第５表をみても、土器組成上の差異はほとんど認められない。したがって、マクロ的に土器をみた場合、住居址出土の土器群が分かれば、遺跡全体の土器群が分かることになる。以下の分析を行ってゆく上で、前提条件となる点なので、最初に確認しておく。

（大工原　豊）

c　遺構出土の土器

［住居址出土の土器］

住居址全体の土器組成が、本遺跡の前期の土器群を理解するに十分な内容を有していることは、土器組成の比較から検証し得た。しかし、住居址全体が遺跡の様相を示しているからといって、個々の住居址から出土している土器群がどのような内容と特徴を有しているかを無視する訳にはいかない。本遺跡では住居址が重複しているケースが非常に多い。これは、相当程度の時間幅を有している証拠であり、さらに時期的に細分が可能なはずである。しかし、重複の多い住居址では複数の土器群が混在するため、良質な資料とは言えなくなってしまう。純粋な一時期の土器群を理解するためには、すべての住居址を扱うのではなく、特徴的な文様別重量組成を有する住居址（良質な資料を保持する住居址）を選択的に抽出し、類型化して理解する必要がある。

以下、住居址出土の土器群を文様別重量組成をもとに、いくつかのパターンに分類する。

土器文様別重量組成（第９図～第10図）　個々の住居址出土土器の文様別重量組成は、第11図～第28図のグラフとして示すことができる。これらグラフの形状が近似しているものは、当然時期的に近い土器

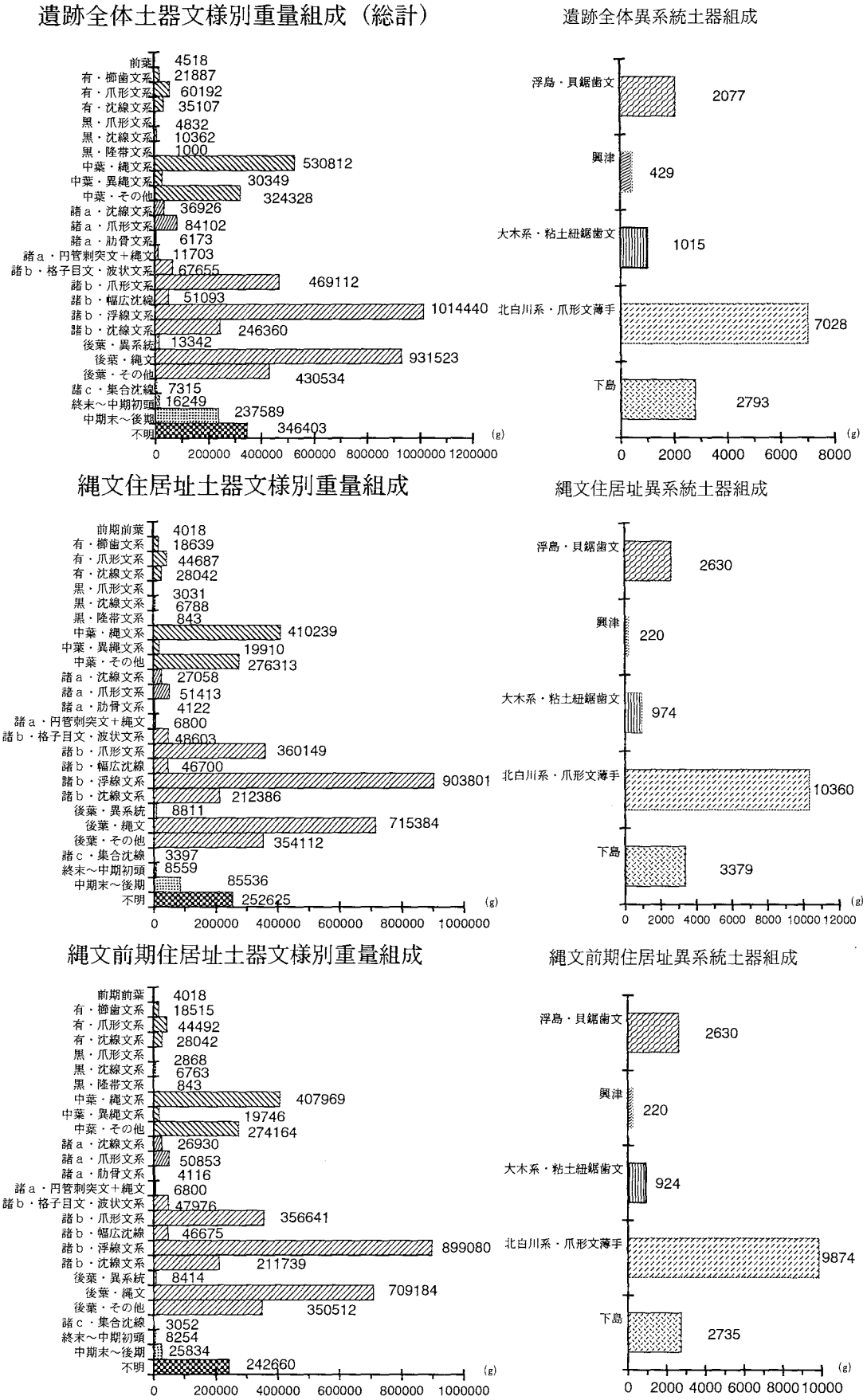
遺構	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
前期住居址	4,018	720,516	82,886	145,637	2,564,869	3,052	8,414	8,254	25,834	242,660	3,806,140
中・後期住居址		3,203	1,887	1,359	18,663	345	397	305	59,702	9,965	95,826
掘立柱状遺構	44	7,617	575	25,622	40,903	28	1,782	440	4,184	8,481	89,676
B区土壙墓群	90	7,746	3,426	4,042	16,448	65		26	385	2,403	34,631
D区土壙墓群		4,337		2,487	8,611	145	154	27	795	170	16,726
単独土壙墓	20	5,717	301	1,178	5,362	174		1,800	3,997	1,465	20,014
竪穴状遺構		2,810	32	599	13,077				1,752	824	19,094
大形柱穴		247		96	613	45			484	351	1,836
土坑	87	77,137	17,768	12,167	95,944	562	258	2,508	68,829	29,122	304,382
ピット		7,220	1,350	1,124	19,415	172	84	331	3,476	4,001	37,173
調査区	225	58,884	14,807	41,498	328,616	2,727	2,253	2,494	66,870	44,967	563,341
その他	34	373		192	1,034			59	1,281	1,994	4,967
合計	4,518	895,807	123,032	236,001	3,113,555	7,315	13,342	16,244	237,589	346,403	4,993,806

第4表　遺跡出土土器の型式別重量

遺構＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
前期住居址	0.11	18.93	2.18	3.83	67.39	0.08	0.22	0.22	0.68	6.38	100
中・後期住居址		3.34	1.97	1.42	19.48	0.36	0.41	0.32	62.30	10.40	100
掘立柱状遺構	0.05	8.49	0.64	28.57	45.61	0.03	1.99	0.49	4.67	9.46	100
B区土壙墓群	0.26	22.37	9.89	11.67	47.50	0.19		0.08	1.11	6.94	100
D区土壙墓群		25.93		14.87	51.48	0.87	0.92	0.16	4.75	1.02	100
単独土壙墓	0.10	28.57	1.50	5.89	26.79	0.87		8.99	19.97	7.32	100
竪穴状遺構		14.72	0.17	3.14	68.49				9.18	4.32	100
大形柱穴		13.45		5.23	33.39	2.45			26.36	19.12	100
土坑	0.03	25.34	5.84	4.00	31.52	0.18	0.08	0.82	22.61	9.57	100
ピット		19.42	3.63	3.02	52.23	0.46	0.23	0.89	9.35	10.76	100
調査区	0.04	10.45	2.63	7.37	58.33	0.48	0.40	0.44	11.87	7.98	100
その他	0.68	7.51		3.87	20.82			1.19	25.79	40.14	100
合計	0.09	17.94	2.46	4.73	62.35	0.15	0.27	0.33	4.76	6.94	100

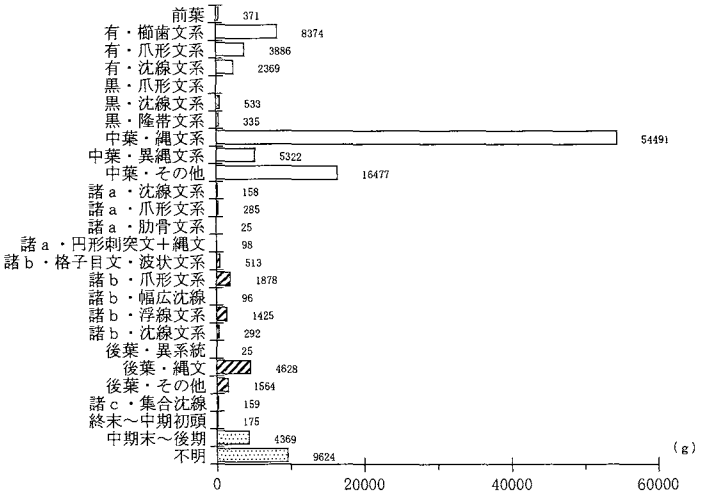
第5表　遺跡出土土器の型式比率

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木4式など、中期後～後期前は加曽利E式、称名寺式、堀之内式を示す。



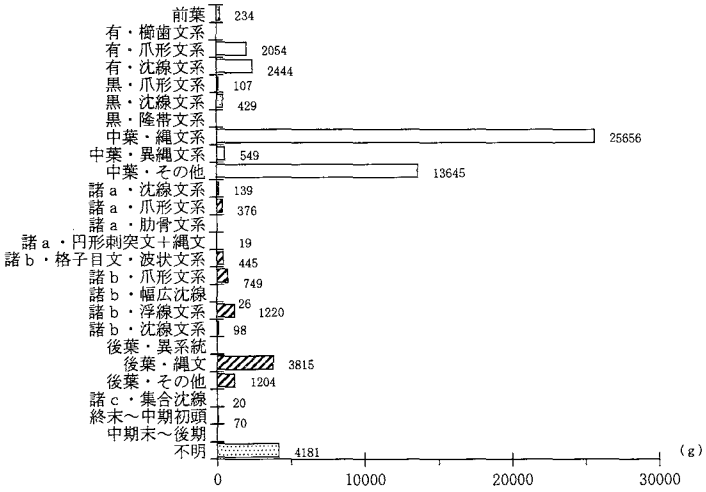
第８図　遺跡全体・住居址全体土器文様別重量組成

パターン１（有尾式１段階）



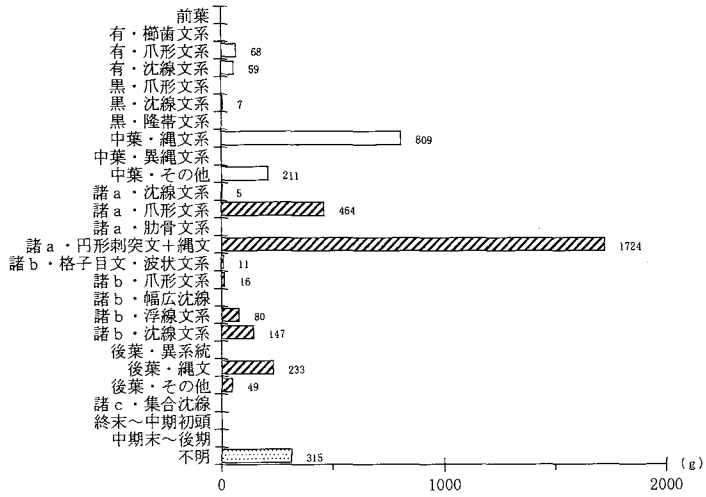
J51号住・Ｊ52号住
J54号住・Ｊ109号住

パターン２（有尾式２段階）



J11号住・Ｊ17号住
J25号住・Ｊ34号住・Ｊ99号住

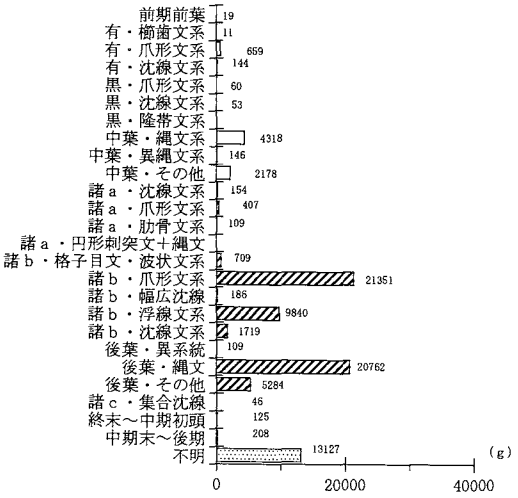
パターン３（諸磯ａ式段階）



Ｊ101号住・Ｊ60号住

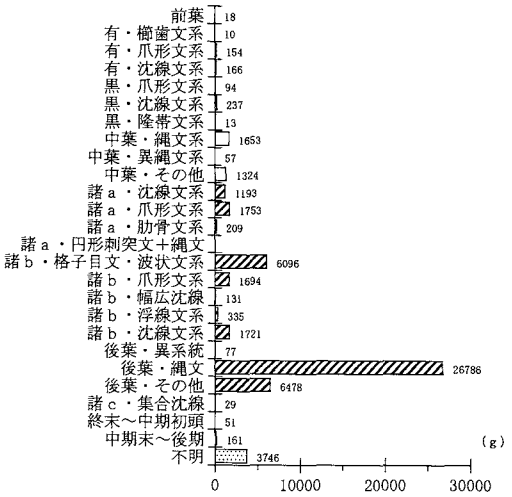
第９図　有尾式・諸磯ａ式土器文様別重量組成パターン

パターン４ａ（諸磯ｂ式１段階１）



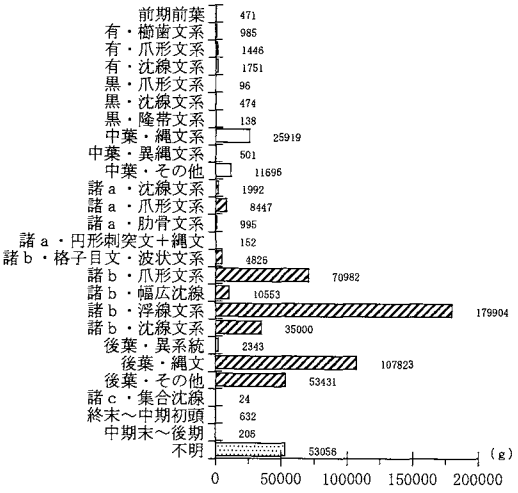
Ｊ13号住・Ｊ79号住・Ｊ81号住

パターン４ｂ（諸磯ｂ式１段階２）



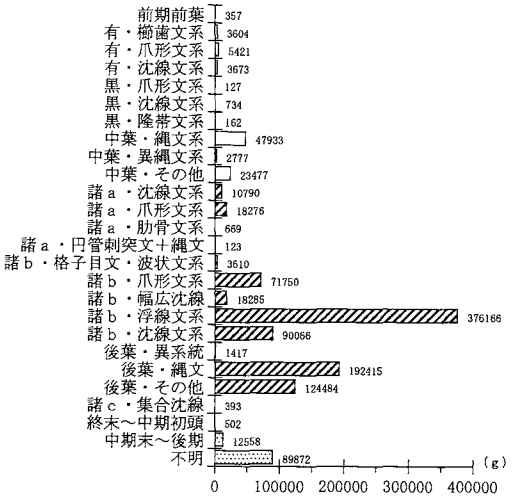
Ｊ94号住・Ｊ117号住

パターン５（諸磯ｂ式２～３段階）



Ｊ57号住・Ｊ62号住・Ｊ80号住

パターン６（諸磯ｂ式４～５段階）



Ｊ56号住・Ｊ66号住・Ｊ78号住

第10図　諸磯ｂ式土器文様別重量組成パターン

群であることを示している。また、折衷様の波形を示すものは、複数の時期の土器群の混在を示している。

これらの住居址の中から良質な土器組成を有するものを抽出すると、第９図・第10図に示されるような７パターンが存在していることが判明した。これらのパターンはこれまでの編年観では、基本的にパターン１からパターン６の土器群へと推移すると考えられている。そこで、この編年観に準拠し、土器群の変化の様相について、検討を行ってみたい。各パターンは以下のとおりである。

パターン１　：有尾式１段階　櫛歯状工具による縦位の刺突文が組成するもの。

パターン２　：有尾式２段階　櫛歯状工具による縦位の刺突文を組成しないもの。

パターン３　：諸磯ａ式段階　幅の狭い半截竹管により施文されたものが組成するもの。

パターン４ａ：諸磯ｂ式１段階１　爪形文を主体とし、格子目文を組成しないもの。

パターン４ｂ：諸磯ｂ式１段階２　爪形文を主体とし、格子目文を組成するもの。

パターン５　：諸磯ｂ式２～３段階　太い浮線文を主体とするもの。

パターン６　：諸磯ｂ式４～５段階　細い浮線文を主体とするもの。

有尾式では、主たる基本文様と文様構成の変化が乏しいため、口縁部のみに存在する櫛歯状文の有無を基準としてパターンを分類した。グラフ上での比率は小さいが、実質的には数値以上に大きな差異が存在していると推定される。

諸磯ａ式のみが出土している住居址は１軒のみである。本遺跡では常に有尾式と諸磯ｂ式が一緒に検出されている。こうした場合でも有尾式は量的に少なく二次的に混在したものが大部分であると推定される。これに対し、諸磯ｂ式は古相を呈する土器群が共伴している。したがって、諸磯ａ式でもｂ式に近い時期の土器群であることが推定される。

諸磯ｂ式が出土している住居址では、グラフの波形から４パターンに分類することができる。パターン4a と4b は近い存在であり、時期差というよりも系統差としてパターンが分けられる。パターン５との差異は明確であり、大きな画期として認識される。

また、パターン５とパターン６は、グラフ上ではほぼ同じパターンとして認識されてしまう。これは、浮線文というカテゴリーが太い浮線と細い浮線に分かれていないためである。しかし、このパターンで示される時期には、いくつかの段階が存在していることが判明しているため、今回の分析では土器図版から両者の差が明らかなものを抽出して２つのパターンに区分けした。浮線文系の土器群の場合、さらに文様構成から細分されるが、破片を含めた今回の分析では表示し得ないので、後項で層位ごとに検証を試みる。

ここで重要な観点は、パターンが明確に区分可能な場合と、そうでない場合がパターン間に存在していることである。パターンの明確な差異は、①時期が大きく離れている場合と、②その間に大きな変化が生じた場合である。また、明確に区分できない場合では、大きな変化のない連続性をもった文化の中での時間差として認識される。

パターン１とパターン２との間、パターン３とパターン4a・4b との間、パターン５とパターン６との間は、明確に区切れない。この間は緩やかに変化する連続性のある比較的安定した時代相を示している時期であったと言えよう。これに対し、パターン２とパターン３との間、パターン4a・4b とパターン５との間の差異は大きい。前者は①のケースに相当し、後者は②のケースに相当すると考えられる。

土器型式比率（第６表～第７表）　個々の住居址の型式比率は、簡単に時期を判断するためのものであ

り、細分レベルでの土器群どうしの分析や比較には、区分の目が粗すぎる。しかし、それほど詳細な時期を要求しない遺構や石器の分析では、比較の際非常に有効である。今回も型式比率を帰属率として、型式や形態の時間軸のクロスチェックに頻繁に利用している。また、資料の信頼度を示す指数として利用することが可能であり、土器群の共伴関係のチェックに役立つ。石器群の場合、型式比率が低い遺構から検出されたものは二義的扱いにならざるを得ない。

なお、本遺跡では型式比率は一定レベル以上で頭打ちとなる傾向がある。これは破片資料も含めて扱う分析の性格上、どうしても生ずる現象である。しかし、型式比率が頭打ちとなるのはこうした統計処理上の問題だけではないようである。最も端的に示しているのは、有尾式土器を用いた土製円盤である。土製円盤は有尾式期の住居址からはほとんど検出されず、諸磯ｂ式期に集中している。そして、諸磯ｂ式期の住居址からは有尾式土器を用いた土製円盤が多数検出される。これは有尾式土器が、その後に諸磯ｂ式期の住人により再利用されていたことを示している。諸磯ｂ式期の住居址からは土製円盤以外に有尾式の土器片が多数存在している。こうした土器片は諸磯ｂ式期の住人により二次的に移動（おそらく廃棄）させられていたことによると考えざるを得ないのである。こうした現象が生じているため、土器型式帰属率は頭打ちとなってしまうようである。

異系統土器群を組成する住居址　35軒の住居址で異系統の土器群が検出されている。前期の住居址全体の中で異系統土器群は8.4kg（0.2%）であり、実際には非常に低率であることが判明した。これは土器の移動・模倣といった現象が生じる機会が、社会の中で極めて限定されたものであったことによると推定される。

時期別にみると、有尾式期では、異系統土器群が含まれている住居址はほとんどない。これに対し、諸磯ａ～ｂ式では35軒の住居址に異系統土器が含まれている。この時期に他の土器型式圏との間の物資や情報のやりとりが行われるようになったと判断される。

異系統土器群の中で多いものは、北白川下層系と浮島系のものである。北白川下層系のものは、パターン4b の住居址に多く伴う。特に、Ｊ―111号住居址は注目される存在である。また、浮島系のものはＪ―78、Ｊ―80号住居址に比較的多く存在している。

（大工原　豊）

［各住居址の出土の土器］

Ｊ－１号住居址出土の土器（遺物図版編第48図）

爪形文で口縁部文様を菱形に施文するもの（AR－３：10･27）や、櫛歯状工具により口縁部に縦位に施文するもの（AR－１：20）が出土している。１・２層ともに時期的な新旧ははっきりしない。有尾式の２段階を主体としている。

Ｊ－２号住居址出土の土器（遺物図版編第１図１・第49図）

爪形文で口縁部文様を菱形に施文するもの（AR－３：10）や、平行沈線で波状に描くもの（KR－５：４）が出土している。１・２層とも土器から時期的な新旧ははっきりしない。有尾式の２段階を主体としているが、２～４は黒浜式的である。

Ｊ－３号住居址出土の土器（遺物図版編第50図）

爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文する（AR－３：１、AR－４：19、AR－６：18）。21・25は爪形文を押し引き状に施文し、菱形の中に渦巻きの文様を描く（AR－３）。１・２層では２層がやや古

い土器を出土する。有尾式の２・３段階を主体とする。

Ｊ－４号住居址出土の土器（遺物図版編第51図）

爪形文で口縁部文様を山形に施文するもの（AR－４：29）や、平行沈線で菱形に文様を描くものがある（AR－７：３）。１層に若干古い有尾式が出土している傾向にある。有尾式の２・３段階を主体としている。

Ｊ－５号住居址出土の土器（遺物図版編第１図２・５・第52図）

爪形文で口縁部文様を菱形に施文するものが多い（AR－３：１）。17・18は口縁上部に縦位の沈線を施文している（AR－２：第１図２）。これは櫛歯状工具を沈線に転換したもので、古い様相を示していると思われる。１・２層にはっきりした新旧関係は認められない。有尾式の２段階を主体としている。

Ｊ－７号住居址出土の土器（遺物図版編第１図３・第53図）

爪形文で口縁部文様を菱形に施文するものがある（AR－３：５・31）。１・２層にはっきりした新旧関係は認められない。炉体土器も出土しているが、縄文施文の土器で有尾式の細別は困難である。有尾式の２段階を主体としている。

Ｊ－８号住居址出土の土器（遺物図版編第54図１～８）

爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文するものがある（AR－６：５・６）。有尾式の２・３段階を主体としている。全体に時期を確定する土器の出土量が少ない。

Ｊ－９号住居址出土の土器（遺物図版編第１図４・第54図９～14）

爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文するものがある（AR－６：11）。有尾式の２・３段階を主体としている。全体に時期を確定する土器の出土量が少ない。

Ｊ－10号住居址出土の土器（遺物図版編第54図15～21）

有尾式を主体とする。爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文するものがある（AR－６：18）。20は口縁部に粘土瘤が付けられる有尾式である（AR－６）。有尾式の２・３段階を主体としている。

Ｊ－11号住居址出土の土器（遺物図版編第１図７・第55図）

櫛歯状工具による施文（AR－１：８）や、爪形文・平行沈線で口縁部文様を菱形・山形に施文するものがある（AR－４：15、AR－６：17～19、AR－８：10・29、AR－９：11・12）。炉体土器も出土しているが（ZC－２：第１図７）、縄文施文で有尾式の細別は困難である。有尾式の２・３段階を主体としている。

Ｊ－13号住居址出土の土器（遺物図版編第１図６・８、第56図）

25・26は黒浜式で平行沈線による波状文が施文される（KR－６）。10・14は幅広の爪形文が施文される（MRb－４）。９は浮線文である（MRb－７）。全体に下層に古い様相のものが出土している。

炉体土器が出土しているが、縄文の施文の様子から諸磯ａ式終末～諸磯ｂ式と考えられる（ZK－１：第１図８）。諸磯ｂ式の１・２段階を主体とする。

Ｊ－14号住居址出土の土器（遺物図版編第59図１～14）

爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文する（AR－６：５・８・15）。有尾式の２・３段階を主体としている。

Ｊ－15号住居址出土の土器（遺物図版編第57図・第58図）

幅広の爪形文による施文（MRb－４：第57図２・３・36）と、平行沈線や浮線による施文のものが出土している（MRb－６：第57図１・25・30、MRb－10：第58図９・17）。住居跡の覆土１～３層中で土

器の新旧関係は認められず、混在した状態で出土している。5・6・8・26・32・35は縄文地文に浮線を施文する土器で、諸磯b式の浮線文とは異なる(JS)。4層出土のものは竪穴状遺構の土器である。第58図23は浮線文であるが、凸面の低い浮線でやや新しい傾向を示す(MRb－7)。諸磯b式2～3段階を主体とする。

J－16号住居址出土の土器（遺物図版編第59図16～27）

爪形文で口縁部文様を山形に施文する（AR－4：25・26)。有尾式の3段階を主体としている。全体に時期を確定する土器の出土量が少ない。

J－17号住居址出土の土器（遺物図版編第60図1～8）

爪形文で口縁部文様を山形に施文する（AR－4：5)。有尾式の3段階を主体としている。全体に時期を確定する土器の出土量が少ない。

J－18号住居址出土の土器（遺物図版編第60図9～13）

爪形文で口縁部文様を山形に施文する（AR－4：10・13)。有尾式の3段階を主体としている。全体に時期を確定する土器の出土量が少ない。

J－19号住居址出土の土器（遺物図版編第60図14～22）

爪形文や平行沈線で口縁部文様を菱形・山形に施文する（AR－4：20、AR－6：22、AR－7：17)。有尾式の2・3段階を主体としている。全体に時期を確定する土器の出土量が少ない。

J－21号住居址出土の土器（遺物図版編第1図9・第61図）

諸磯a式の平行沈線による波状文(MRb－1：12・14・26)や、幅狭の爪形文による木葉文(MRa－4：11）とともに、有尾式の爪形文や平行沈線文が出土している。住居跡の覆土1～3層中で土器の新旧関係は認められず、混在した状態で出土している。炉体土器は縄文施文の様子から諸磯b式と考えられる（ZK－1：第1図9)。

J－20号住居址出土の土器（遺物図版編第62図1～20）

有尾式の爪形文と平行沈線で口縁部文様を菱形・山形に施文する（AR－3：15、AR－4：12、AR－8：7、AR－9：9)。1・2は黒浜式で、コンパス文を施文している（KR－1)。有尾式の2・3段階を主体としている。黒浜式は3段階以降である。

J－22号住居址出土の土器（遺物図版編第62図21～36）

有尾式の爪形文（AR－6：21・22）や、諸磯a式の幅狭の爪形文による木葉文（MRa－4：30)、波状文（MRb－1：29)、そして諸磯b式の幅広の爪形文（MRb－4：31）が混在した形で出土している。

J－23号住居址出土の土器（遺物図版編第1図10・第63図1～10）

1～3は黒浜式の幅狭の爪形文である（KR－6)。4・5は諸磯b式の幅広の爪形文（MRb－4)、6は波状文（MRb－1)、7・8は浮線文である（MRb－6：第1図10)。

J－24号住居址出土の土器（遺物図版編第2図1・第63図11～23）

15・16は諸磯a式で爪形文である（MRa－4)。17からは諸磯b式で浮線による施文（MRb－6：18）と平行沈線文（MRb－10：19、MRb－11：20)、幅広の爪形文（MRb－4：17）が混在している。第2図1は諸磯b式3段階に相当する、平行沈線を間隔を開けて横位に施文するものである（MRb－10)。

J－25号住居址出土の土器（遺物図版編第64図）

平行沈線・爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文する（AR－3：2、AR－6：10、AR－7：4)。有尾式の3段階を主体としている。3・11は黒浜式である。3は平行沈線で口縁部文様を山形に施文し、

棒状の粘土紐を貼り付ける（KR－３）。11は平行沈線を乱雑に施文して格子目状の文様を胴部に施文する（KR－５）。

Ｊ－26号住居址出土の土器（遺物図版編第２図２・第65図）

諸磯ｂ式で幅広の爪形文（MRb－４：７・16）や、浮線文（MRb－６：８・９・17)、平行沈線施文（MRb－10：19）が出土している。住居跡覆土中の１～３層では、３層の25が平行沈線による波状文で若干古い傾向にある（MRb－１）。18は木葉文を崩した文様を平行沈線で描いている諸磯ｂ式２段階である（MRb－10)。第２図２は諸磯ｂ式３段階に相当する浮線文である（MRb－６）。

Ｊ－33号住居址出土の土器（遺物図版編第２図４・第66図～第68図１～12）

諸磯ａ式で幅狭の竹管による波状文や木葉文（MRa－２：第66図10・第67図７・８、MRb－１：第67図５、MRb－２：第67図６）、諸磯ｂ式で幅広の爪形文（MRb－４：第66図15～18）や浮線文（MRb－６：第66図19～22）が出土している。第67図１～３は浮線で口縁部文様帯を上下に分け、その中を格子目文で施文している。長野の北部から新潟方面に見られる格子目文である（MRb－３）。24は結節浮線文に三角印刻のある前期末のものである（JS)。住居跡覆土中の１～３層では３層に平行沈線による波状文が出土しており、若干古い傾向にある（MRb－２：第68図11)。第２図４の浅鉢は諸磯ｂ式２段階に相当する。

Ｊ－30号住居址出土の土器（遺物図版編第２図５・第69図１～21）

平行沈線・爪形文で口縁部文様を山形に施文する有尾式（AR－４：17、AR－８：11）や、黒浜式が出土している。13～16は半截竹管でコンパス文や爪形文を描く黒浜式である（KR－１）。10は黒浜式の爪形文である（KR－６）。３・４段階に相当する。

Ｊ－31号住居址出土の土器（遺物図版編第69図22～32）

平行沈線・爪形文で口縁部文様を山形に施文する有尾式（AR－４：25、AR－６：23・26）と、24は半截竹管でコンパス文や爪形文を施文する黒浜式である（KR－１）。３段階に相当する。

Ｊ－32号住居址出土の土器（遺物図版編第69図33～36）

半截竹管でコンパス文（KR－１）や爪形文を描く黒浜式（KR－６：35）が出土している。３段階に相当する。

Ｊ－34号住居址出土の土器（遺物図版編第２図６・第70図）

平行沈線により口縁部を菱形施文する有尾式（AR－７：８・13）や、18の平行沈線による乱雑な格子目文を施文するもの（KR－６）や、25・26の口縁部に棒状に粘土紐を貼り付ける黒浜式が出土している（KR－３）。第２図６は諸磯ｂ式で本住居跡に混入したものと思われる（MRb－５）。覆土中から出土しているものの主体は２段階である。

Ｊ－35号住居址出土の土器（遺物図版編第２図７・第68図13～20）

有尾式の平行沈線で菱形に施文するもの（AR－７：17）や、18は黒浜式の平行沈線で格子目文を作る土器が出土している（KR－５）。２段階が主体となっている。第２図７の住居跡炉体土器は有尾式で爪形文による山形施文がみられる（AR－４）。覆土中から出土している土器より１段階新しい３段階のものである。

Ｊ－40号住居址出土の土器（遺物図版編第３図１・５・第71図～第73図）

本住居跡からは、有尾式では、第72図３・４は１段階の有尾式で櫛歯状工具による口縁部縦位施文（AR－１）や、２段階の爪形文・平行沈線による菱形の施文土器が出土している（AR－３：第71図11、AR－７：第72図19)。黒浜式は第71図10・15で２・３段階のコンパス文を持つ土器（KR－１）、平行沈線で

乱雑に施文するものが出土している（KR－５）。また、諸磯ａ式の平行沈線による波状文（MRb－１：第71図22、MRb－２：第71図21）や、諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb－４：第71図23・27・28）、浮線文（MRb－６：第72図13・28）が出土している。第72図12は浮島II式である（UK）。覆土からは下層の方に新しい傾向を示すものが出土する。

Ｊ－41号住居址出土の土器（遺物図版編第３図２～４・６～７・第74図）

諸磯ａ式の幅狭の半截竹管による木葉文や肋骨文（MRa－１：12、MRa－２：７・16）、諸磯ｂ式１・２段階の幅広の爪形文（MRb－４：５・８・第３図３）や、浮線文（MRb－６：17・第３図４）に混じり、有尾式や黒浜式の２段階が出土している（AR－３：２、KR－３：１）。第３図２の炉体土器は結束縄文を施文したもので、諸磯ａ式末～諸磯ｂ式１段階に相当すると考えられる（ZK－１）。

Ｊ－43号住居址出土の土器（遺物図版編第75図１～15）

平行沈線・爪形文で口縁部文様を山形に施文する有尾式（AR－４：11、AR－８：４）と、６の口縁部に棒状の粘土紐を添付施文する黒浜式が出土している（KR－３）。２・３段階に相当する。

Ｊ－44号住居址出土の土器（遺物図版編第75図16～20）

平行沈線・爪形文で口縁部文様を山形に施文する、有尾式の２・３段階に相当する（AR－６：16）。

Ｊ－45号住居址出土の土器（遺物図版編第75図21～27）

平行沈線・爪形文で口縁部文様を山形に施文する有尾式（AR－４：21・22）と、半截竹管で鋸歯状に施文する黒浜式が出土している（KR－２：27）。２・３段階に相当する。

Ｊ－46号住居址出土の土器（遺物図版編第75図28～41）

平行沈線・爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文する有尾式（AR－６：36、AR－８：29）と、35・39は半截竹管による平行沈線を施文する黒浜式である（KR－２）。40は縄文でループ文を施文している関山式である（ZC－１）。２・３段階に相当する。

Ｊ－49号住居址出土の土器（遺物図版編第76図１～21）

櫛歯状工具による施文（AR－１：２・３）や、平行沈線・爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文する有尾式（AR－７：１・６、AR－８：５）と、半截竹管で平行沈線を鋸歯状や、爪形文を施文する黒浜式が出土している（KR－２：20、KR－６：４）。覆土中からは１～４段階のものがまばらに出土している。

Ｊ－50号住居址出土の土器（遺物図版編第76図22～45）

平行沈線・爪形文で口縁部文様を山形に施文する有尾式の３段階のもの（MRb－６：36・37）、半截竹管で波状文を施文する諸磯ａ式（MRa－１：30、MRa－２：28・29）が混在して出土している。

Ｊ－51号住居址出土の土器（遺物図版編第４図３・第77図）

櫛歯状工具による施文（AR－１：６・７・８・10～14・19～22）や、平行沈線・爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文する有尾式（AR－９：23）と、半截竹管で爪形文を施文する黒浜式が出土している（KR－６）。有尾式１・２段階である。覆土上層からは諸磯ａ式の幅狭の半截竹管による木葉文や波状文が出土している（MRa－４：１・３、MRb－１：２・４）。

Ｊ－52号住居址出土の土器（遺物図版編第78図１～28）

櫛歯状工具による施文（AR－１：１～８・21～24）や、平行沈線・爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文する有尾式（AR－６：13、AR－９：９・10）と、４・６の半截竹管で爪形文や平行沈線を施文する黒浜式が出土している。１段階が主体となる。

Ｊ―53号住居址出土の土器（遺物図版編第78図29～40）

櫛歯状工具による施文（AR―１：29）や、平行沈線・爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文する有尾式（AR―６：35・39、AR―９：33）と、30・31の半截竹管で爪形文や平行沈線を施文する黒浜式が出土している（KR―４：30、KR―６：31）。１段階が主体となる。

Ｊ―54号住居址出土の土器（遺物図版編第79図～第81図１～７）

第79図・80図の１・２の櫛歯状工具による施文（AR―１）や、平行沈線・爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文する有尾式が主体となる（AR―３：第80図６、AR―４：第80図７、AR―８：第80図12・13）。14は異条斜縄文を施文する（ZC―３）。全体に古い様相のものが多く、１段階が主体となる。

Ｊ―55号住居址出土の土器（遺物図版編第４図１・２・第81図８～16・第82図）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb―４：第82図12）、浮線文（MRb―６：第81図９・10・12、MRb―７：第81図８・15・第82図７・８・９・第４図１）、沈線文（MRb―10：第82図６）が出土している。諸磯ｂ式２・３段階に相当する浮線文が主体となる。第４図２は口縁部文様帯の上下を爪形文で区画し、区画内を平行沈線で横位に充塡し、胴部を羽状縄文で施文しているもので、諸磯ｂ式とは趣を異にしている。北陸系の格子目文に関係すると思われる（MRb―９）。また、**Ｊ―56号住居跡の第９図３と共通する。**

Ｊ―56号住居址出土の土器（遺物図版編第５図～第11図・第83図～第85図）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb―４：第85図19）、浮線文（MRb―６：第85図６・第６図２・第８図３、MRb―７：第83図９～11・第７図２、MRb―８：第７図２）、沈線文（MRb―10：第84図10～14・第11図１～５）が出土している。諸磯ｂ式１・２・３段階が主体となる。第９図３は口縁部文様帯の上下を爪形文で区画し、区画内を平行沈線で横位に充塡し、胴部に結束の縄文を施文しているもので、諸磯ｂ式とは趣を異にしている。北陸系の格子目文に関係すると思われる（MRb―９）。また、Ｊ―55号住居跡の第４図２と共通する。

Ｊ―57号住居址出土の土器（遺物図版編第４図４～７・第86図）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb―４：８）、平行沈線文（MRb―９：７、MRb―10：３～６）が出土している。また、第４図の復元できる大型の浮線文（MRb―６：５・６）や、平行沈線を間隔を開けて横位に施文したもの（MRb―９：７、MRb―10：４）も出土している。諸磯ｂ式３・４段階が主体となる。

Ｊ―58号住居址出土の土器（遺物図版編第87図１～６）

諸磯ｂ式の平行沈線文（MRb―10：４）、浮線文（MRb―６：７）が出土している。

Ｊ―59号住居址出土の土器（遺物図版編第88図～第89図）

平行沈線・爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文する有尾式（AR―３：第88図14、AR―４：第88図13、AR―７：第88図６・７、AR―８：第89図６・７）と、半截竹管による平行沈線を施文する黒浜式が出土している（KR―２：10、KR―３：５）。３段階に相当する。

Ｊ―60号住居址出土の土器（遺物図版編第12図３・第87図７～12）

第12図３は諸磯ａ式で、円管刺突と平行沈線で縦位の区画を行い、円管刺突を斜めの線で結んでいる（MRa―６）。諸磯ｂ式の平行沈線文（MRb―10：９・10）、浮線文（MRb―６：11）が出土している。

Ｊ―61号住居址出土の土器（遺物図版編第87図13～20）

諸磯ｂ式の平行沈線文（MRb―10：14）、浮線文（MRb―７：15・16）と、17～20の五領ヶ台式が出土している（GR）。

Ｊ－62号住居址出土の土器（遺物図版編第12図１～２・第87図21～28）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb－４：27・28）、浮線文（MRb－６：21・23、MRb－７：22、MRb－８：第12図１）、平行沈線文（MRb－９：24、MRb－10：25）が出土している。第12図２は口縁部文様帯の上下を爪形文で区画し、その中を平行沈線により格子目文を描くものである。長野北部、新潟に分布する格子目文土器である（MRb－３）。

Ｊ－63号住居址出土の土器（遺物図版編第12図４・第90図）

諸磯ａ式の幅狭の半截竹管による平行沈線の波状文（MRa－１：１・２、MRa－２：３・４）や、爪形文による木葉文（MRa－４：６）が主体となる。第12図４の炉体土器は複節斜縄文が施文される。諸磯ａ式～諸磯ｂ式と思われる（ZK－１）。

Ｊ－64号住居址出土の土器（遺物図版編第12図５・第91図・第92図１～15）

諸磯ｂ式３段階に相当する浮線文（MRb－６：第91図１～10）や、平行沈線文（MRb－10：第91図11・12）が主体である。１層からは諸磯ａ式（MRa－４：第91図18）や、有尾式（AR－１：第92図10～12、AR－６：第92図14・15、AR－９：第92図13）、第12図５・第92図３の北白川下層Ⅱｂ式（KS－２）などが混入して出土している。

Ｊ－66号住居址出土の土器（遺物図版編第13図～第16図・第92図16～26・第93図１～15）

諸磯ｂ式の浮線文（MRb－６：第92図22・第14図１・４・５、MRb－７：第93図３・８・第16図２・３）、平行沈線文（MRb－10：第13図１・６）が出土している。諸磯ｂ式３・４段階に相当する浮線文が主体となる。炉体土器は諸磯ｂ式の浮線文である。

Ｊ－67号住居址出土の土器（遺物図版編第93図16～18）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb－４：17）、平行沈線文（MRb－10：16）、浮線文（MRb－６：18）が主体となって出土している。

Ｊ－68号住居址出土の土器（遺物図版編第17図１～４・第94図～第95図）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb－４：第94図17・18）、平行沈線文（MRb－10：第94図８～10・第17図３・４）、浮線文（MRb－６：第95図９・10・第17図１、MRb－７：第94図11・第95図11）が主体となって出土している。第94図20～24は浮島Ⅱ式である（UK）。覆土上層には諸磯ａ式が混入している（MRa－５：第94図６）。

Ｊ－69号住居址出土の土器（遺物図版編第96図）

諸磯ｂ式の浮線文（MRb－６：１～３・６・９・10）が主体となって出土している。11・12・14・15・20は繊維を含む有尾式、黒浜式である（AR－１：12、AR－９：15、KR－６：11・14）。17・19は諸磯ａ式である（MRa－３：19、MRb－２：17）。18は格子目文である（MRb－３）。

Ｊ－70号住居址出土の土器（遺物図版編第97図）

諸磯ａ式の幅狭の爪形文（MRa－４：１・４）や、円管刺突と平行沈線文（MRb－２：８）と、諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb－４：12）、平行沈線文（MRb－10：11）、浮線文（MRb－６：２・13）が出土している。

Ｊ－71号住居址出土の土器（遺物図版編第98図１～16）

黒浜式の爪形文を主体としている（KR－６：11・13～15）。４段階である。

Ｊ－74号住居址出土の土器（遺物図版編第98図17～25）

有尾・黒浜式の縄文施文のものを主体として出土している（ZC－１：20、ZC－２：19、ZC－３：21）。

Ｊ―75号住居址出土の土器（遺物図版編第99図１～８）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文(MRb―４：１～３)、平行沈線文(MRb―10：６)、浮線文(MRb―６：４・５）が出土している。

Ｊ―76号住居址出土の土器（遺物図版編第99図９～28）

16・17の櫛歯状工具で施文するもの（AR―１）や、平行沈線・爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文する有尾式（AR―３：21、AR―４：26、AR―７：27、AR―８：10)、爪形文の有尾式が多い（AR―６：25)。３段階に相当する。

Ｊ―78号住居址出土の土器（遺物図版編第18図～第25図・第100図～第103図）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb―４：第101図14～18)、浮線文（MRb―６：第102図４・６・第18図３・５、MRb―７：第100図６・13・第18図１・２・第20図２・３・４・第21図３・４・第22図１・第24図１・３・第25図１・２)、平行沈線文（MRb―10：第100図７・８・第19図１～４）が出土している。第101図３～５は大木５式の鋸歯状の粘土紐を貼付するものである（DI：第101図25)。第100図２・４・５の格子目文が出土している（MRb―３：第102図８)。第19図５・第103図11は浮島II式である（UK)。第19図７の炉体土器は平行沈線を間隔を開けて横位に施文する諸磯ｂ式４段階のものである（MRb―９)。

Ｊ―79号住居址出土の土器（遺物図版編第17図５～６・第104図～第105図）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb―４：第104図11～14・第17図６)、浮線文（MRb―６：第104図３～６)、平行沈線文（MRb―10：第104図21）が出土している。格子目文もある（MRb―３：第105図２～４・25)。第105図26～28は諸磯ａ式である(MRa―１：27、MRa―５：26、MRb―１：28)。第105図30は下島式の結節浮線文である（SJ)。爪形文や浮線文は諸磯ｂ式２・３段階に相当するものが多い。

Ｊ―80号住居址出土の土器（遺物図版編第26図～第30図・第106図～第108図１～15）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb―４：第106図１・第28図５・第30図３)、浮線文（MRb―５：第29図１、MRb―６：第107図14～16・第27図１・第28図６～９・第30図２、MRb―７：第106図７、MRb―８：第28図４・第29図４)、平行沈線文（MRb―９：第27図２、MRb―10：第106図４～６・第27図３・第28図１・第29図５）が出土している。格子目文もある（MRb―３：第107図３)。爪形文や浮線文は諸磯ｂ式３段階に相当するものが多い。第26図５の炉体土器は縄文施文で諸磯ｂ式である（ZK―１)。

Ｊ―81号住居址出土の土器（遺物図版編第108図16～19）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb―４：16)、浮線文（MRb―６：18)、平行沈線文（MRb―10：17）が出土している。第108図19はピット出土で北白川下層IIｃ式である（KS―２)。

Ｊ―82号住居址出土の土器（遺物図版編第109図１～３）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb―４：２)、浮線文（MRb―６：３）が出土している。格子目文もある（MRb―３：１)。

Ｊ―83号住居址出土の土器（遺物図版編第110図）

諸磯ａ式の刺突による縦位の区画と波状文(MRb―１：18)や、諸磯ｂ式の幅広の爪形文(MRb―４：３～５)、浮線文（MRb―６：12、MRb―７：１・２)、平行沈線文（MRb―９：７、MRb―10：６・８）が出土している。上層に諸磯ｂ式、下層に諸磯ａ式が多く出土する傾向にある。

Ｊ―84号住居址出土の土器（遺物図版編第31図１・３・第109図14～17）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb―４：７・８)、浮線文（MRb―６：第31図３）が出土している。第

31図１は獣面把手を持つ（MRb－８）。

Ｊ－85号住居址出土の土器（遺物図版編第31図２・４・第111図～第113図）

諸磯ａ式では第113図５～７の幅狭の平行沈線・爪形文（MRa－１：５、MRa－３：第31図２、MRa－４：６）や、円管刺突（MRa－６：７）がみられ、下層から出土している。諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb－４：第112図２～９）は上層・下層から出土している。格子目文も多い（MRb－３：第111図８～11)。第111図25・26は北白川下層IIｃ式である(KS－１)。第111図１・第112図９の爪形文(MRb－４)、第111図24の平行沈線文(MRa－３)は、諸磯ａ式にみられる木葉文が崩れたような文様を施文していることから、諸磯ｂ式１段階に相当すると思われる。

Ｊ－86号住居址出土の土器（遺物図版編第114図～第116図）

第114図２～４の諸磯ａ式は幅狭の爪形文や円管刺突（MRa－４）で、１・２層に出土している。諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb－４：第114図16～23・第116図２～10)、浮線文（MRb－６：第115図４・５）も１・２層から出土している。格子目文も多い（MRb－３：第115図７・８)。主体となっているのは諸磯ｂ式の幅広の爪形文で、２段階に相当する。

Ｊ－87号住居址出土の土器（遺物図版編第117図）

１層は有尾・黒浜式と中期初頭（GR：13～15）が混在している。その他の層位でも諸磯ｂ式の爪形文、浮線文（MRb－７：28・29)、平行沈線文（MRb－11：25・26）などが入り乱れて出土している。

Ｊ－89号住居址出土の土器（遺物図版編第118図１～５）

諸磯ａ式の幅狭の半截竹管による爪形文（MRa－４：５）と、円管刺突文（MRb－２：３）が出土している。

Ｊ－91号住居址出土の土器（遺物図版編第118図６～29）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文を主体に出土している。爪形文は諸磯ａ式の木葉文の様相を残したもので、諸磯ｂ式１段階のものである（MRa－４：12～18)。

Ｊ－92号住居址出土の土器（遺物図版編第119図１～４）

諸磯ａ式の幅狭の半截竹管による爪形文が出土している（MRa－４：１)。

Ｊ－93号住居址出土の土器（遺物図版編第119図５～９）

諸磯ｂ式に混じり有尾式、十三菩提式の細片が少量出土している(AR－６：６、AR－９：７、JS：９)。

Ｊ－94号住居址出土の土器（遺物図版編第31図５・第119図～第120図）

諸磯ａ式終末から諸磯ｂ式初頭の肋骨文や木葉文（MRa－１：第119図24、MRa－３：19～21・23)、波状文（MRb－１：第119図10～16、MRb－２：17・18・22）を主体としている。第120図21～23は黒浜式でピットから出土している。コンパス文が出土している（KR－１)。第31図５は口縁部文様帯に横位の平行沈線が施文され、円管刺突を縦位に施文して区画する(MRb－２)。諸磯ｂ式１段階に相当する。

Ｊ－96号住居址出土の土器（遺物図版編第121図１～５）

黒浜式の爪形文の細片が少量出土している（KR－６：１・３)。

Ｊ－98号住居址出土の土器（遺物図版編第121図６～12）

黒浜式と下島式が混在して出土している（KR－２：６、SJ：10)。

Ｊ－99号住居址出土の土器（遺物図版編第121図13～43）

平行沈線・爪形文で口縁部文様を山形に施文する有尾式が出土している（AR－６：19・36・40、AR－９：15～17)。口縁部に平行沈線で乱雑な施文をする黒浜式が出土している（KR－５：20)。２・３段

階に相当する。

Ｊ－100号住居址出土の土器（遺物図版編第122図１～５）

平行沈線・爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文する有尾式が出土している（AR－６：２、AR－９：１・３）。

Ｊ－101号住居址出土の土器（遺物図版編第122図６～８）

爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文する有尾式が出土している（AR－６：８）。

Ｊ－102号住居址出土の土器（遺物図版編第122図９）

爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文する有尾式が出土している（AR－６：９）。

Ｊ－103号住居址出土の土器（遺物図版編第122図10～27）

諸磯ｂ式の浮線文（MRb－６：11・12）と、前期終末、中期初頭が混在して出土している（JS：13～17・22・23、GR：25・26）。

Ｊ－104号住居址出土の土器（遺物図版編第122図28～37）

１層からは平行沈線・爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文する有尾式が出土している（AR－４：28、AR－９：20）。住居内の土坑からは諸磯ａ式の肋骨文や爪形文、諸磯ｃ式が混在して出土している（MRa－１：37・38、MRa－４：36、MRc－２：39）。第122図33は前期終末の平行沈線を渦巻き状に施文したものである（JS）。

Ｊ－105号住居址出土の土器（遺物図版編第123図１～５）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb－４：１・２）、浮線文（MRb－６：３）、平行沈線文（MRb－10：４）が出土している。

Ｊ－106号住居址出土の土器（遺物図版編第32図１・第123図６～21）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb－４：18）、浮線文（MRb－６：19、MRb－７：７・11・第32図１）、平行沈線文（MRb－10：８・９）が出土している。１層からは第123図15・16の北白川下層IIｃ式（KS－１）や、17の浮島II式が出土している（UK）。諸磯ｂ式２・３段階が主体となっている。

Ｊ－107号住居址出土の土器（遺物図版編第123図25・26）

有尾式の細片が出土している（AR－６：25）。

Ｊ－108号住居址出土の土器（遺物図版編第123図27～30）

諸磯ｂ式（MRb－４：27、MRb－６）や第123図30の大木５式が少量出土している（DI）。

Ｊ－109号住居址出土の土器（遺物図版編第124図～第126図）

櫛歯状工具による施文のもの（AR－１：第125図３～６）や、平行沈線・爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文する有尾式が出土している（AR－３：第125図９・10、AR－４：第124図17、AR－６：第125図７、AR－８：第124図９、AR－９：第126図８・12）。黒浜式は、口縁部に粘土紐を張り付けて隆帯にするもの（KR－３：第124図２・６・30～32）や、半截竹管による爪形文（KR－６：第124図34）、乱雑な平行沈線を施文するもの（KR－５：第124図７・８）が出土している。有尾式の１段階が主体となる。１層・２層には新旧関係は認められなかった。

Ｊ－110号住居址出土の土器（遺物図版編第127図１～21）

諸磯ｂ式の浮線文（MRb－６：13）、諸磯ｃ式（MRc－２：４、MRc－３：３）や前期終末（JS：２・10・17・18）が１層・２層に混在して出土している。

Ｊ－111号住居址出土の土器（遺物図版編第32図２～６・第127図～第131図）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文(MRb－４：第127図27～33・第129図１～５・第32図６)、浮線文(MRb－６：第128図１～７)、平行沈線文（MRb－10：第131図７・第32図４・５）が主体となって出土している。北白川下層IIｃ式（KS－１：第130図７～12・第131図18・第32図２・３、KS－２：第128図20）や格子目文（MRb－３：第128図11・第130図６・第131図10）も出土している。全般に住居跡覆土下層には諸磯ａ式（MRa－２：第131図８）や諸磯ｂ式の１段階が多く（MRb－２：第131図６)、覆土上層には諸磯ｂ式２～３段階や諸磯ｃ式（MRc－２：第128図16、MRc－３：第128図17、SJ：第128図14・19）などの新しい土器が出土する傾向にある。

Ｊ－112号住居址出土の土器（遺物図版編第132図１～６）

有尾式（AR－６：９)、諸磯ｂ式の細片（MRb－４：５）が少量混在して出土している。

Ｊ－113号住居址出土の土器（遺物図版編第33図１～２・第132図７～28）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb－４：18・20・25)、浮線文（MRb－６：12・13・第33図２、MRb－７：７～11)、平行沈線文（MRb－10：14・15）が出土している。炉体土器は浮線文で諸磯ｂ式３段階で、覆土中のものとほぼ同時期である。

Ｊ－115号住居址出土の土器（遺物図版編第33図３・６・９・第133図）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb－４：１～７・第33図３）と、波状沈線文（MRb－１：11～13、MRb－２：８・14）が出土している。波状文や、幅広の平行沈線で木葉文を描くもの（MRb－10：10）など諸磯ｂ式１段階が主体となっている。

Ｊ－116号住居址出土の土器（遺物図版編第33図５・第134図～第135図）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb－４：第135図８・11)、浮線文（MRb－６：第134図１～８)、平行沈線文（MRb－９：第134図13、MRb－10：第134図14)、波状沈線文（MRb－１：第135図12・13）が出土している。３層やピットからは諸磯ｂ式１・２段階が出土し、１層からは３・４段階が多く出土する傾向にある。

Ｊ－117号住居址出土の土器（遺物図版編第136図１～19）

黒浜式ではコンパス文（KR－１：１）が出土している。諸磯ａ式は肋骨文（MRa－１：10)、幅狭の爪形文が出土する（MRa－４：５・６)。諸磯ｂ式は幅広の平行沈線文（MRb－10：11・12)、波状沈線文（MRb－１：４・７・８）が出土している。

Ｊ－118号住居址出土の土器（遺物図版編第33図４・７、第136図21～27）

諸磯ｂ式の幅広の平行沈線文(MRb－10：24・25・第33図４)、波状沈線文(MRb－１：21、MRb－２：23）が出土している。諸磯ｂ式１段階が主体となる。

Ｊ－119号住居址出土の土器（遺物図版編第137図・第138図１～４）

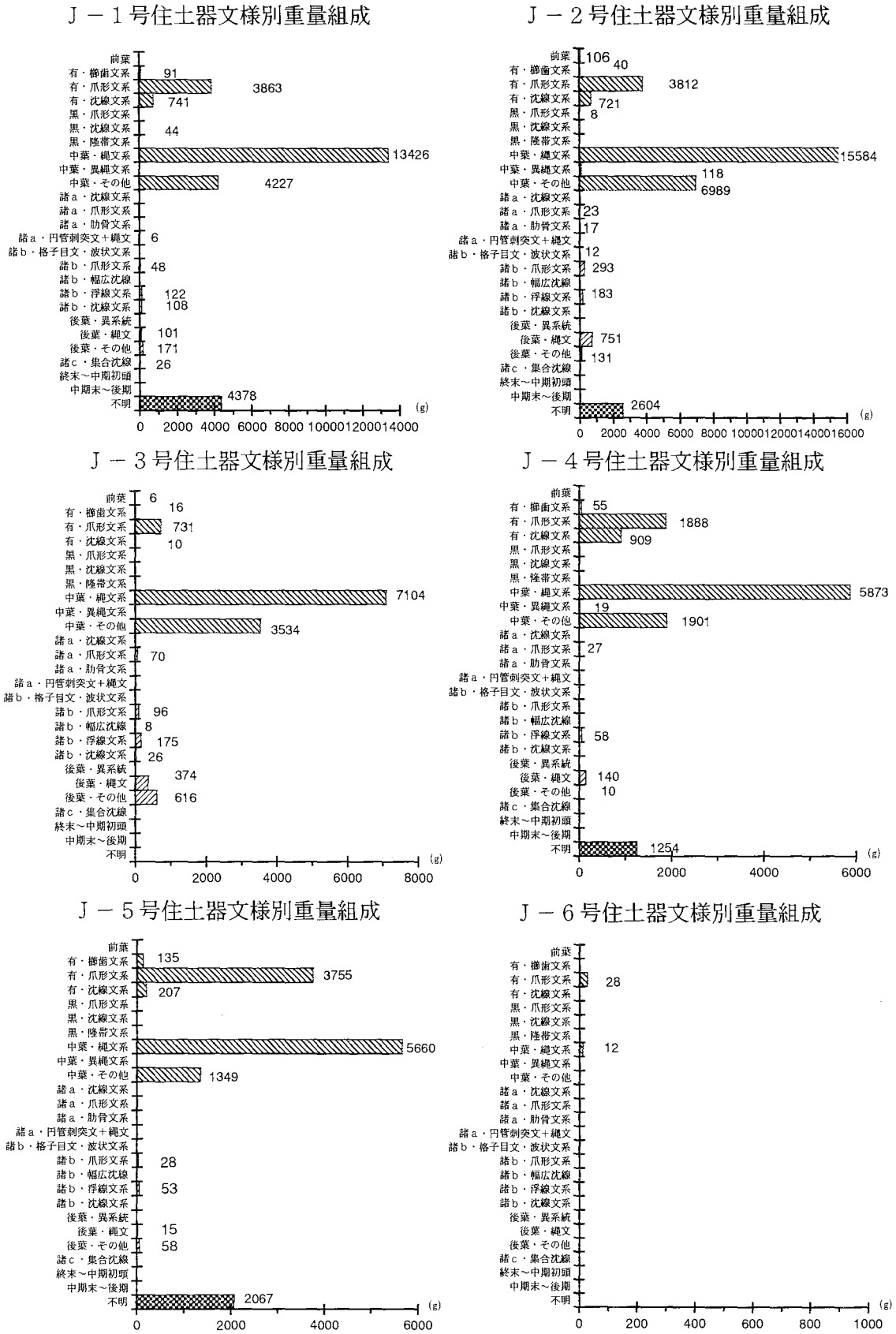
諸磯ｂ式の幅広の平行沈線文（MRb－９：８、MRb－10：６・18)、浮線文（MRb－７：11・12・15・16）が出土している。諸磯ｂ式２・３段階が主体となる。

Ｊ－120号住居址出土の土器（遺物図版編第33図８・第138図６～13）

諸磯ｂ式の浮線文（MRb－10：10)、波状沈線文（MRb－２：７）に混じり、格子目文（MRb－３：８）が出土している。

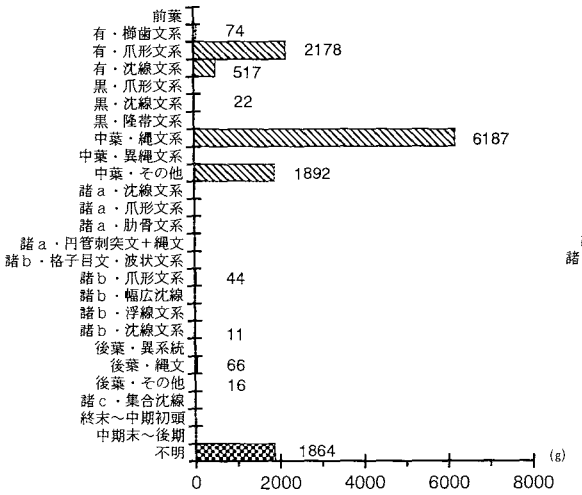
Ｊ－121号住居址出土の土器（遺物図版編第138図14～33・第139図１～13）

櫛歯状工具により施文するもの（AR－１：第138図17・19・29・31）や、平行沈線・爪形文で口縁部文様を菱形・山形に施文する有尾式が出土している（AR－６：第138図18、AR－７：第138図20・24・

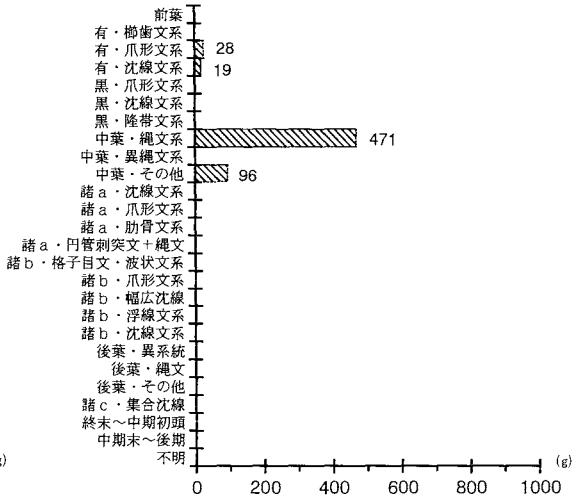


第11図　住居址出土の土器文様別重量組成（１）

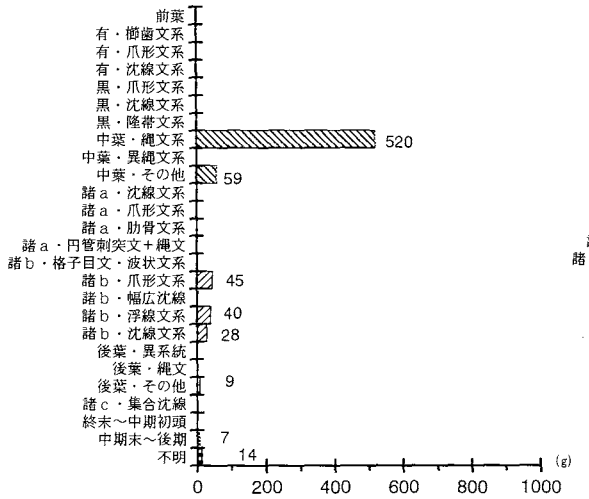
Ｊ－７号住土器文様別重量組成



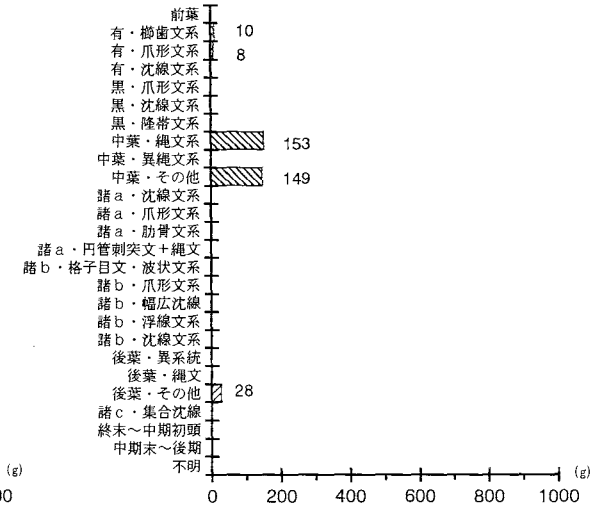
Ｊ－８号住土器文様別重量組成



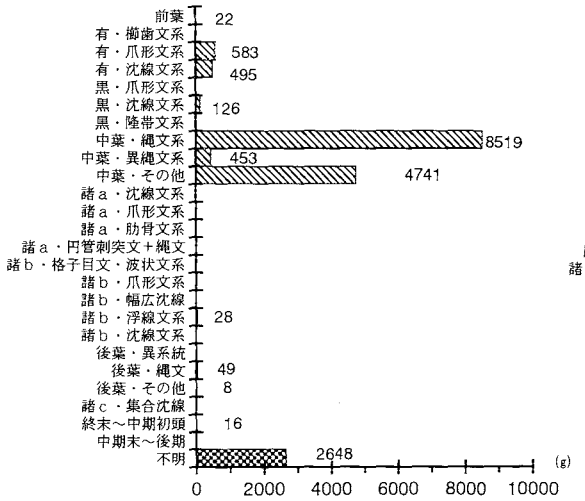
Ｊ－９号住土器文様別重量組成



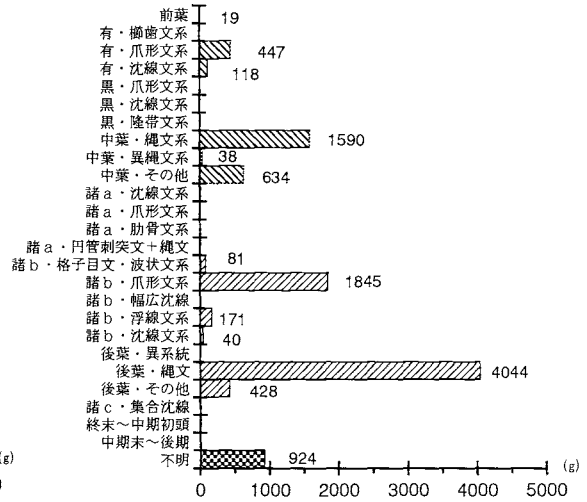
Ｊ－10号住土器文様別重量組成



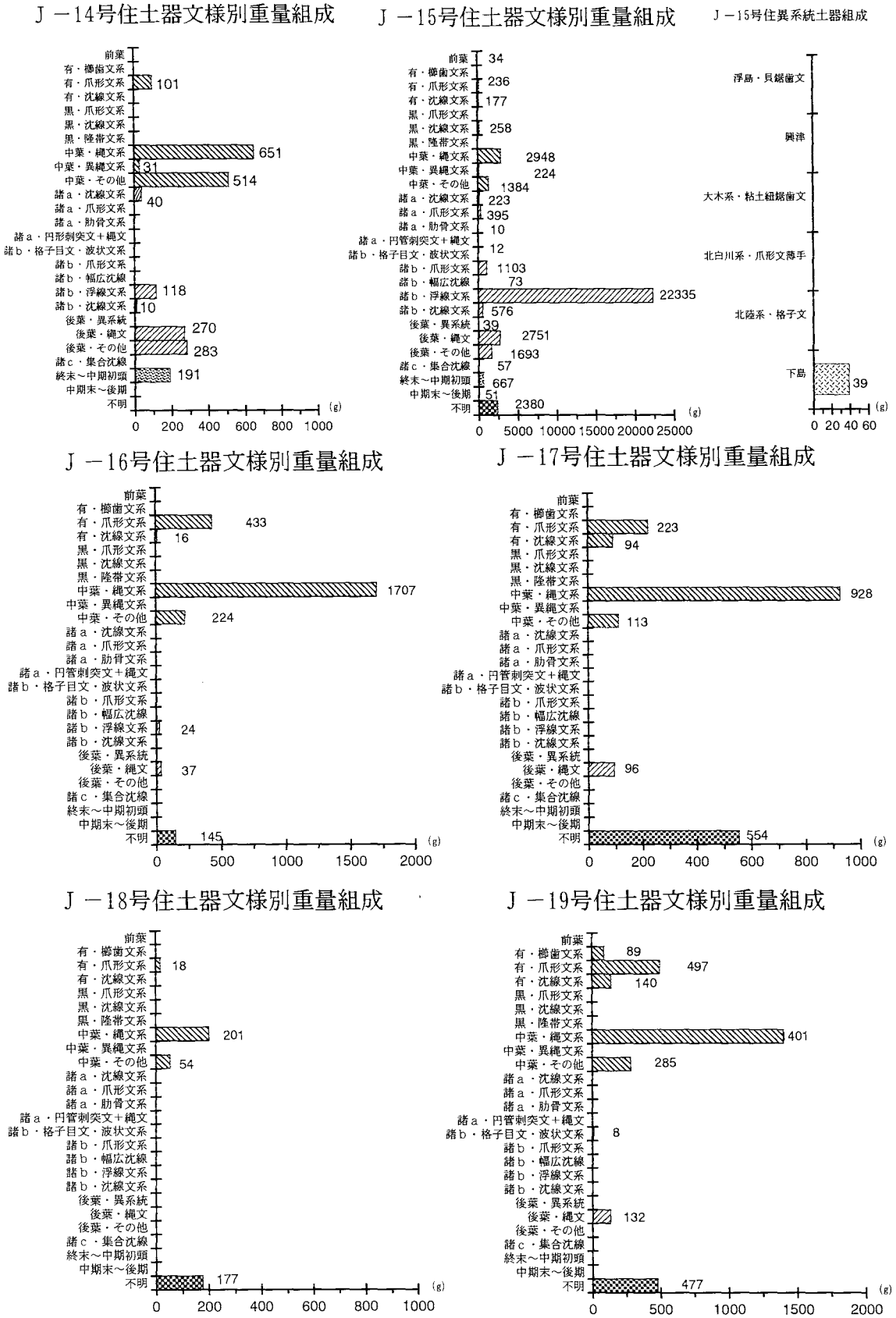
Ｊ－11号住土器文様別重量組成



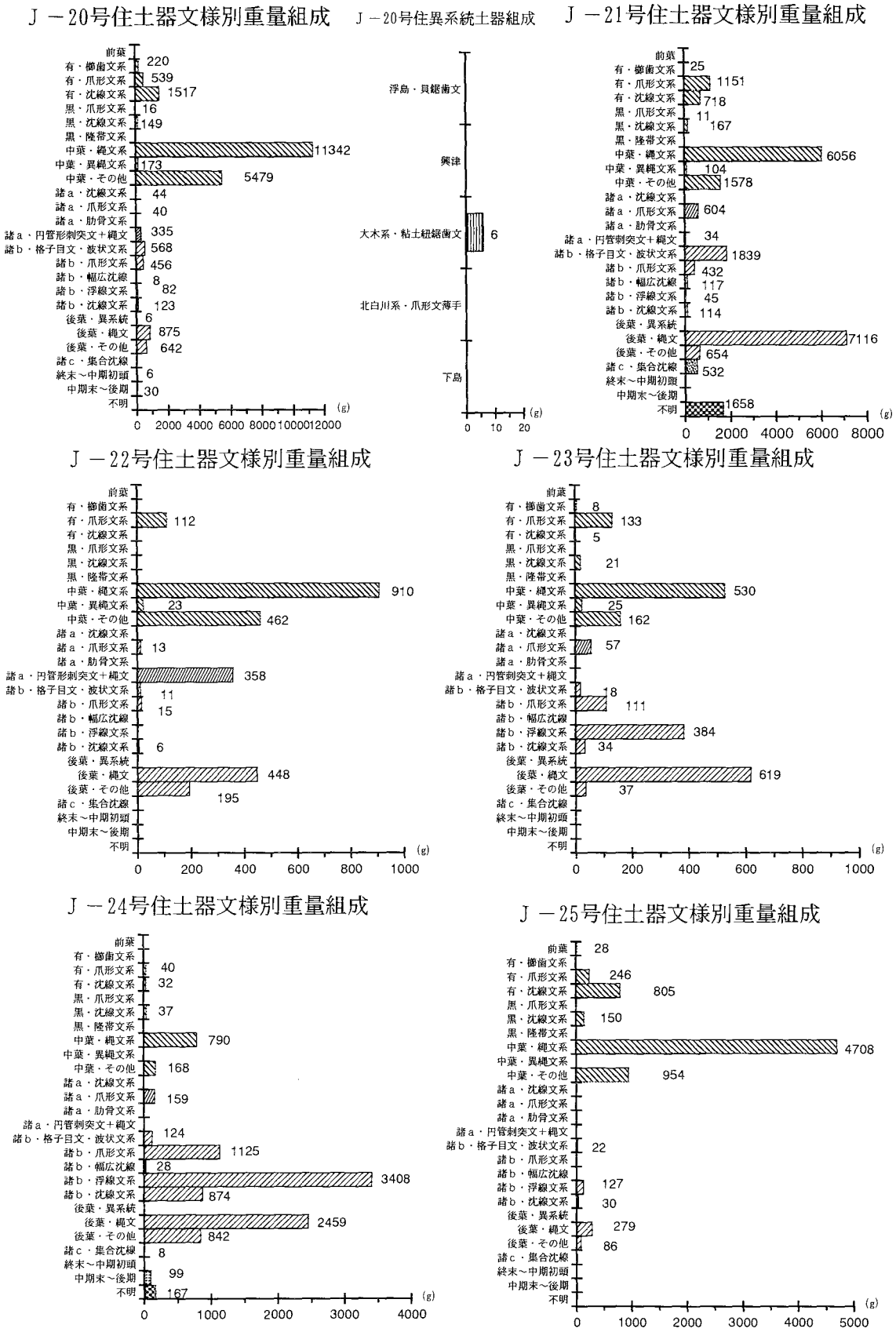
Ｊ－13号住土器文様別重量組成



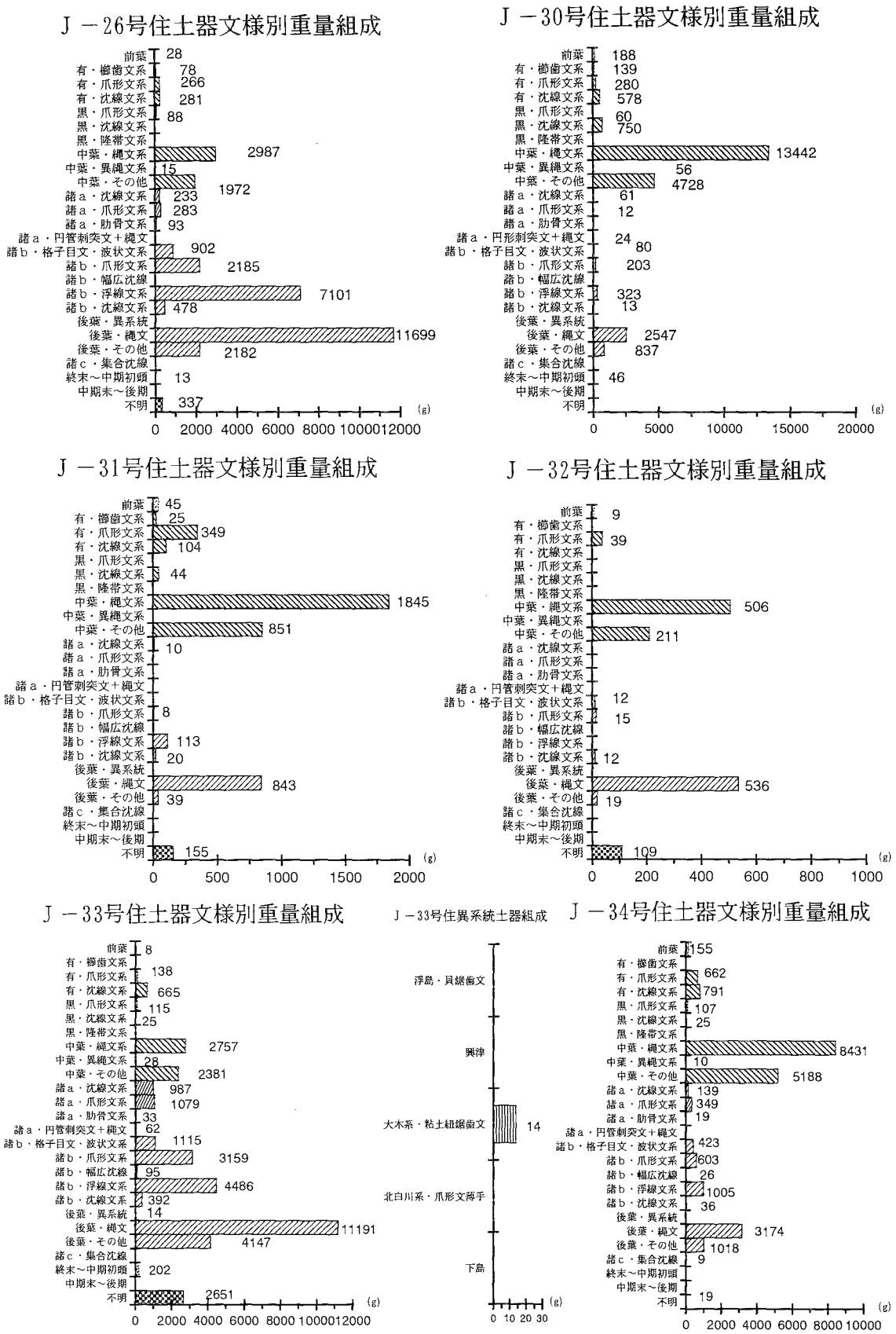
第12図　住居址出土の土器文様別重量組成（２）



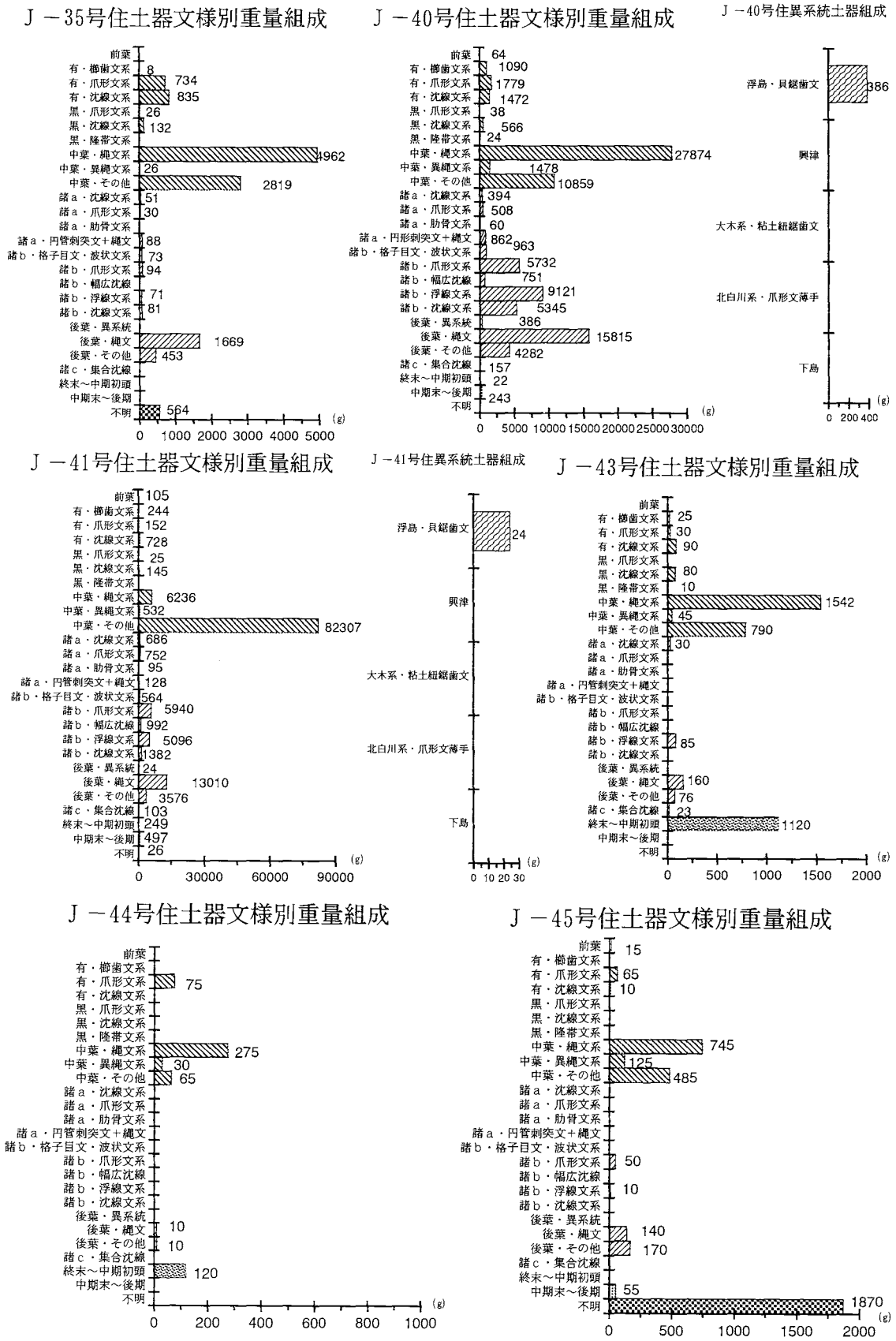
第13図　住居址出土の土器文様別重量組成（3）



第14図　住居址出土の土器文様別重量組成（4）

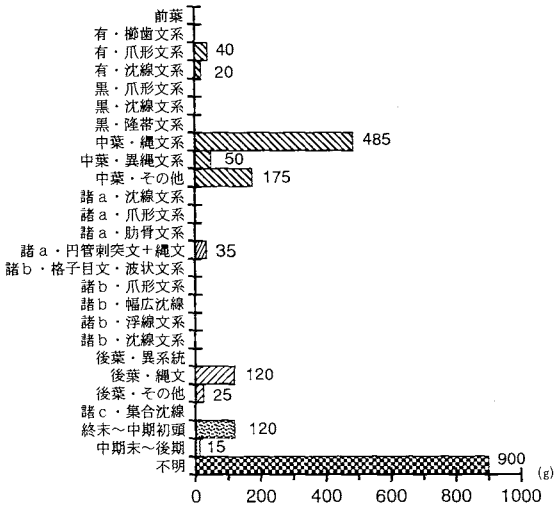


第15図　住居址出土の土器文様別重量組成（5）

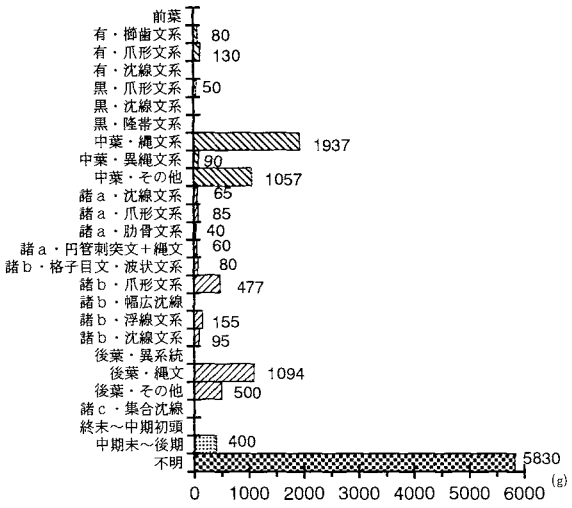


第16図　住居址出土の土器文様別重量組成（６）

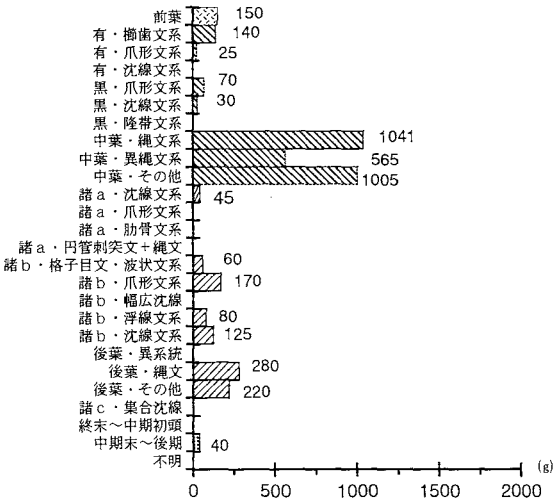
Ｊ－46号住土器文様別重量組成



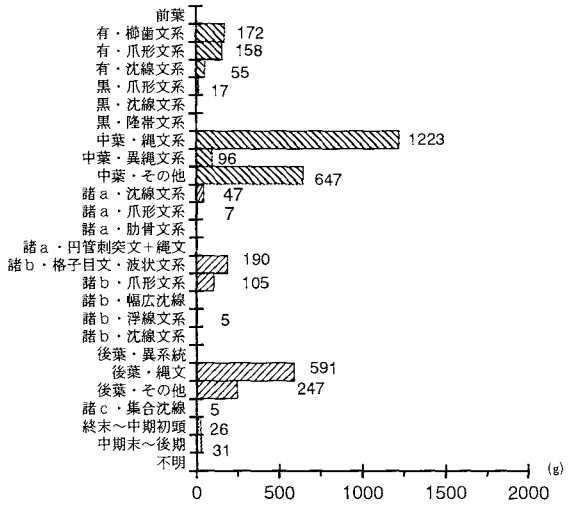
Ｊ－47号住土器文様別重量組成



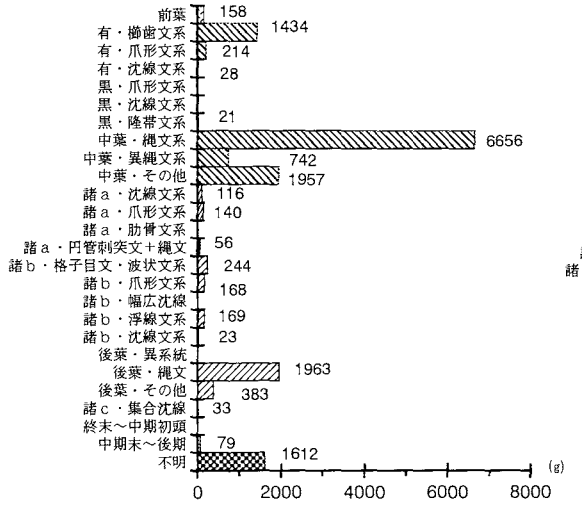
Ｊ－49号住土器文様別重量組成



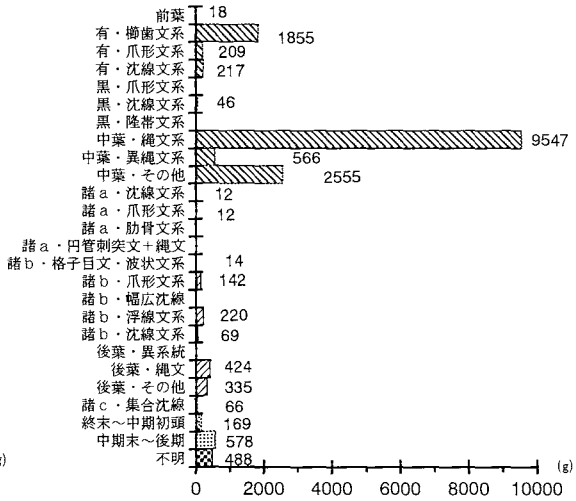
Ｊ－50号住土器文様別重量組成



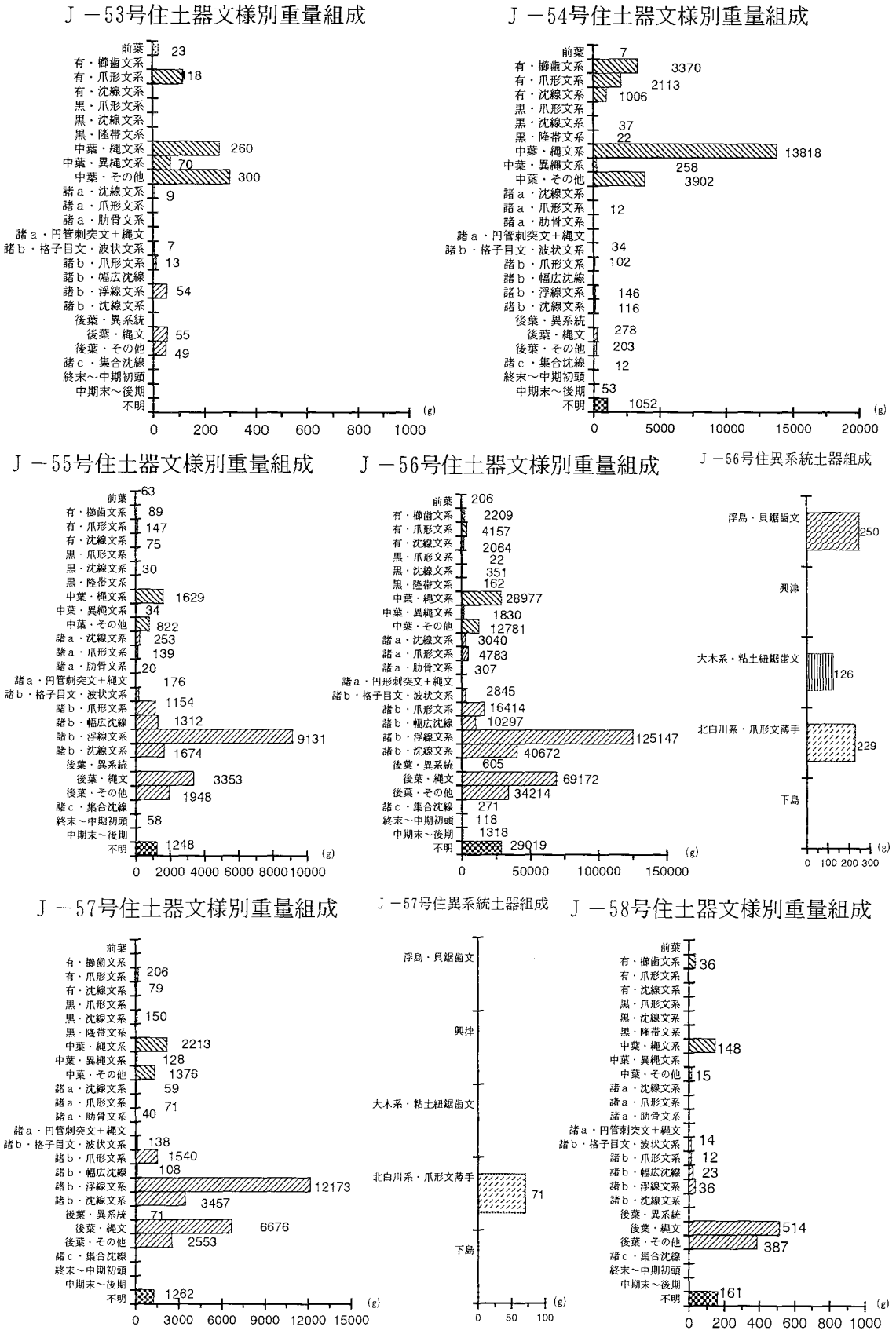
Ｊ－51号住土器文様別重量組成



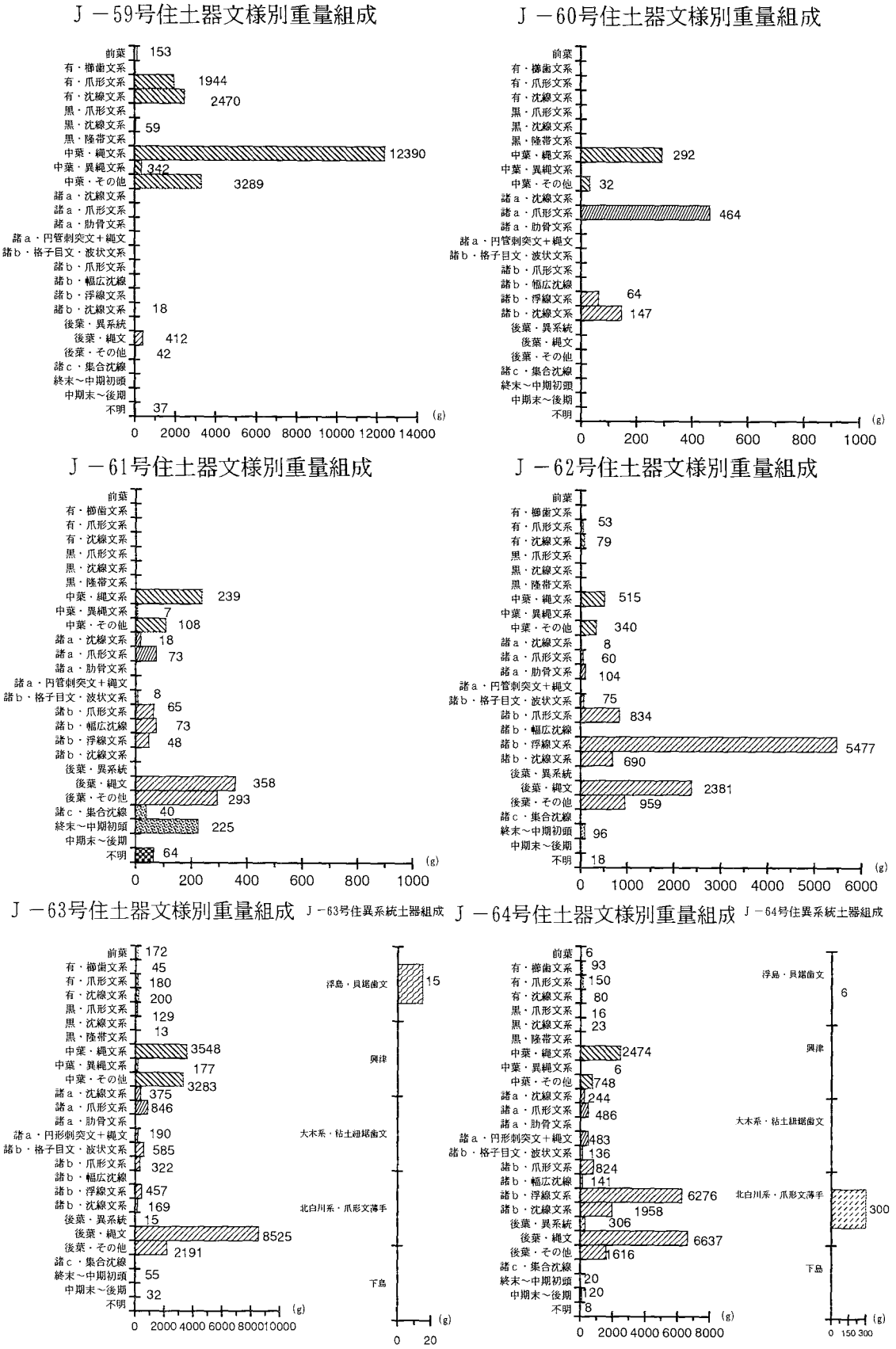
Ｊ－52号住土器文様別重量組成



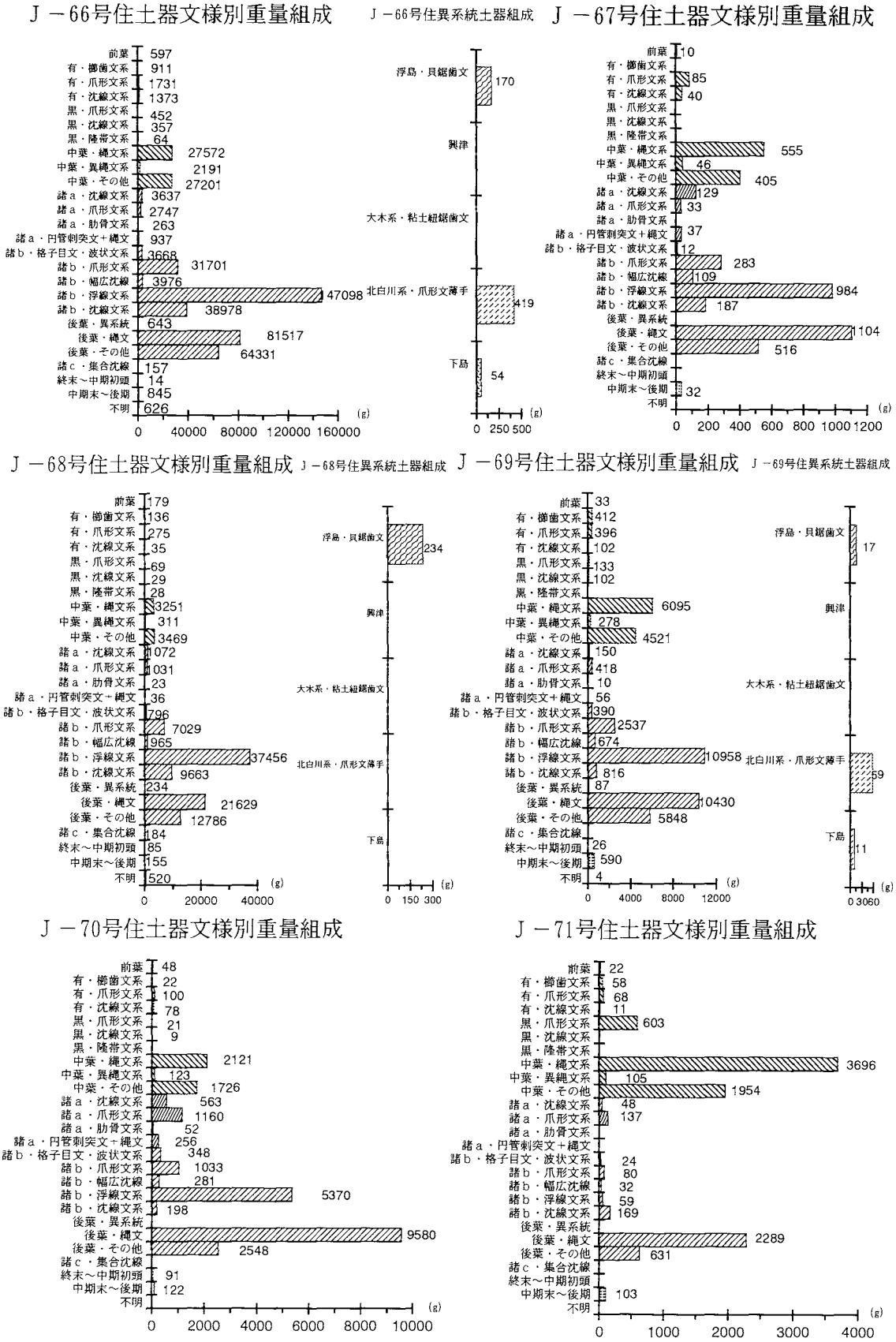
第17図　住居址出土の土器文様別重量組成（７）



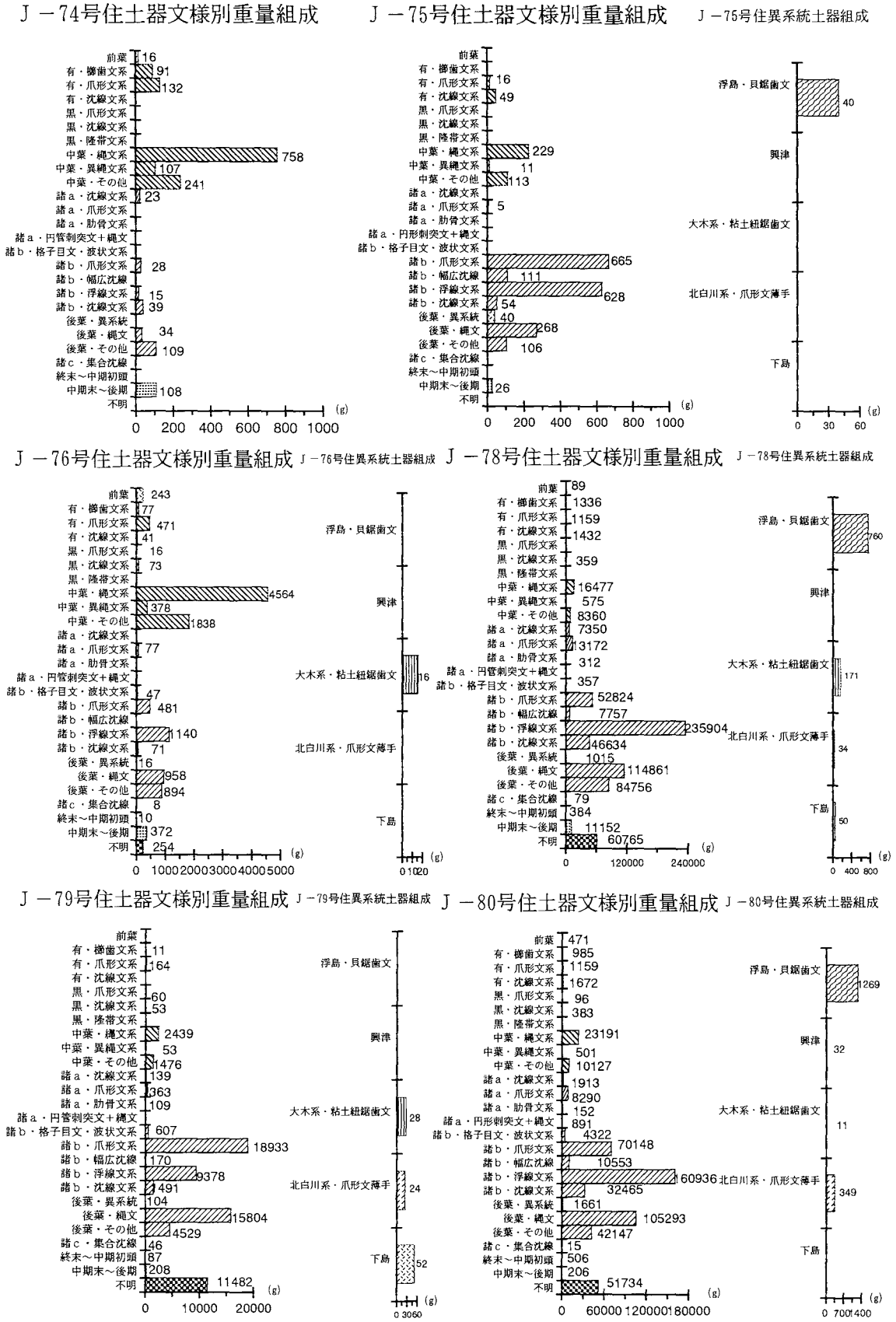
第18図　住居址出土の土器文様別重量組成（８）



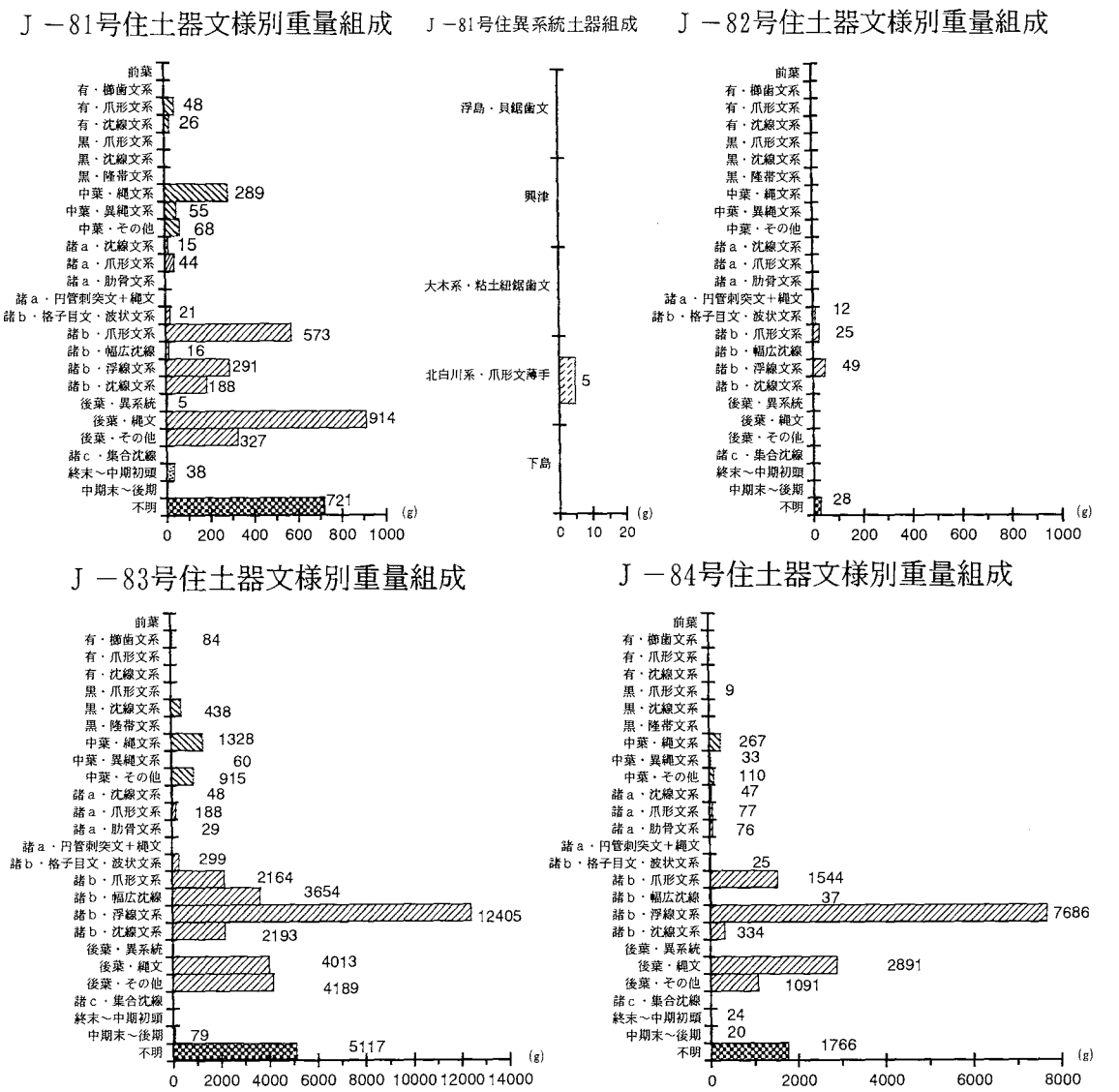
第19図　住居址出土の土器文様別重量組成（９）



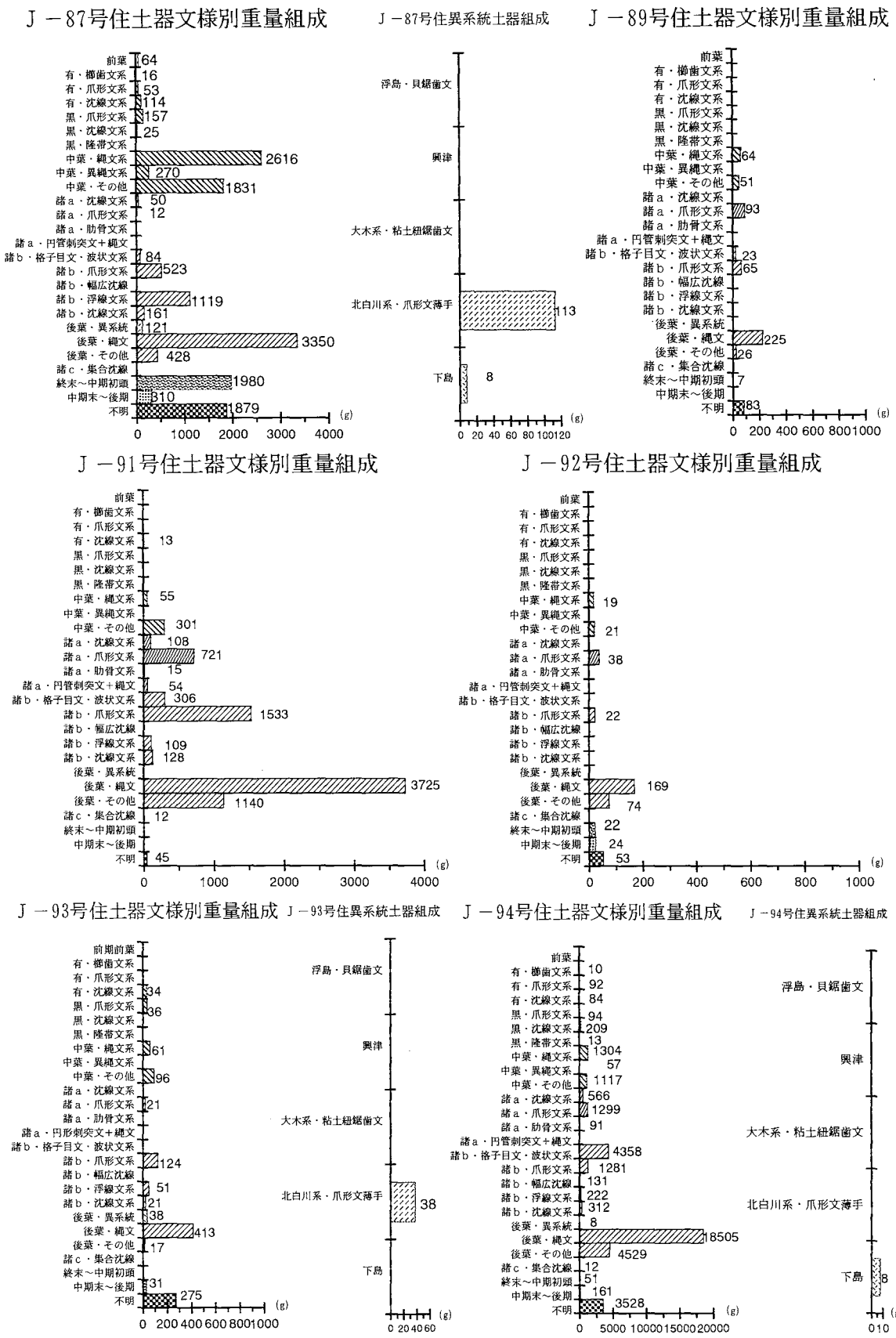
第20図　住居址出土の土器文様別重量組成（10）



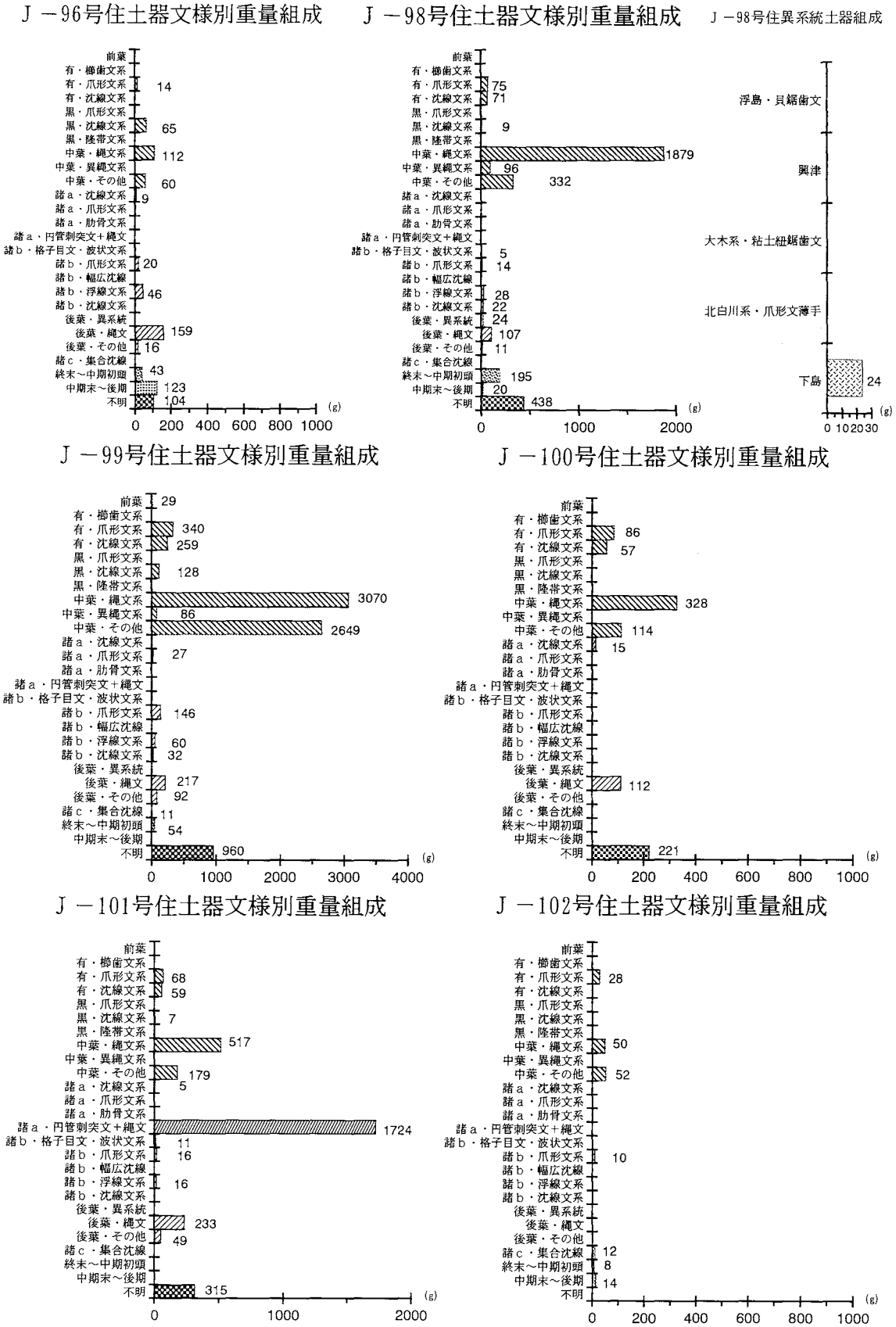
第21図　住居址出土の土器文様別重量組成（11）



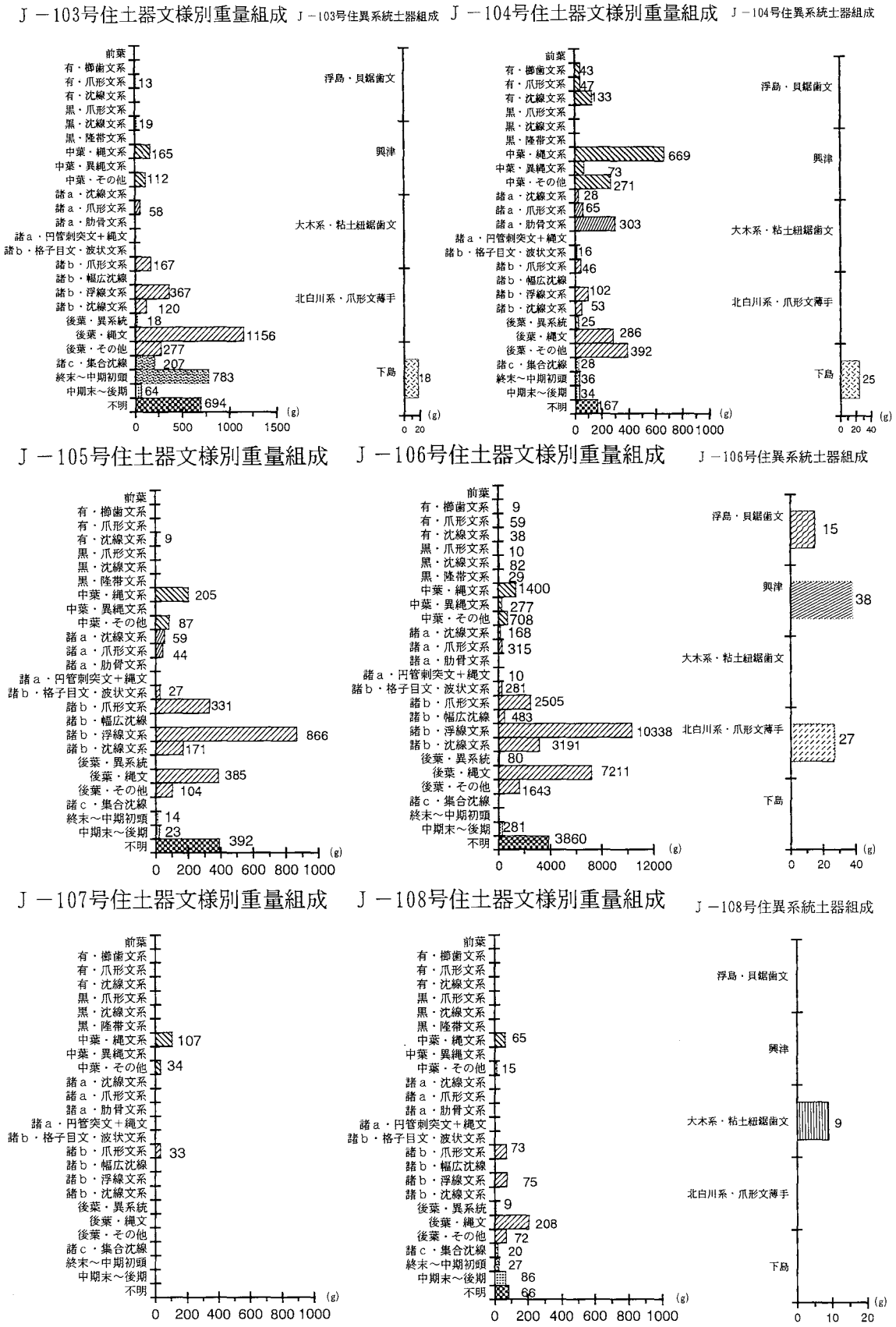
第22図　住居址出土の土器文様別重量組成（12）



第23図　住居址出土の土器文様別重量組成（13）

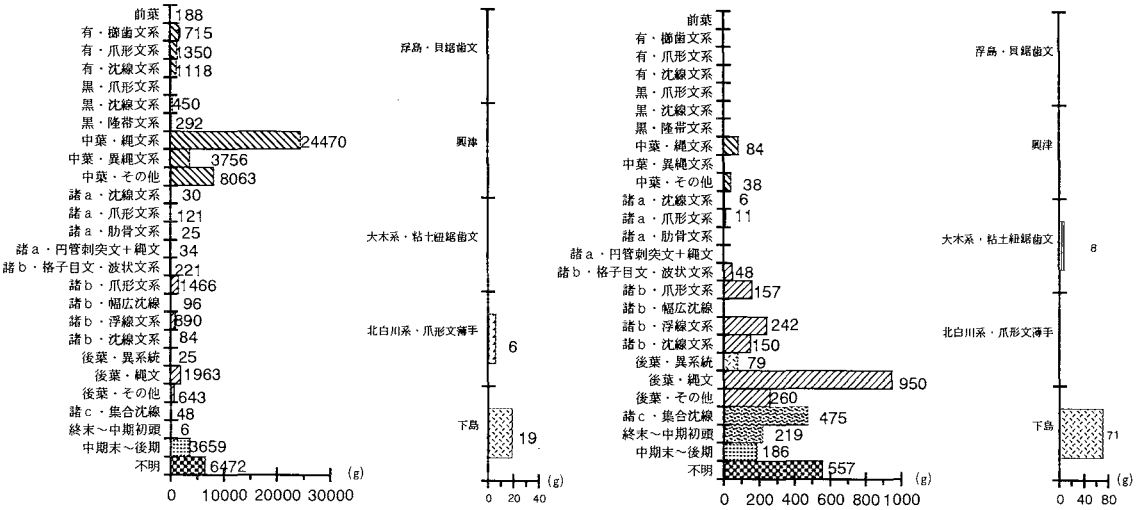


第24図　住居址出土の土器文様別重量組成（14）

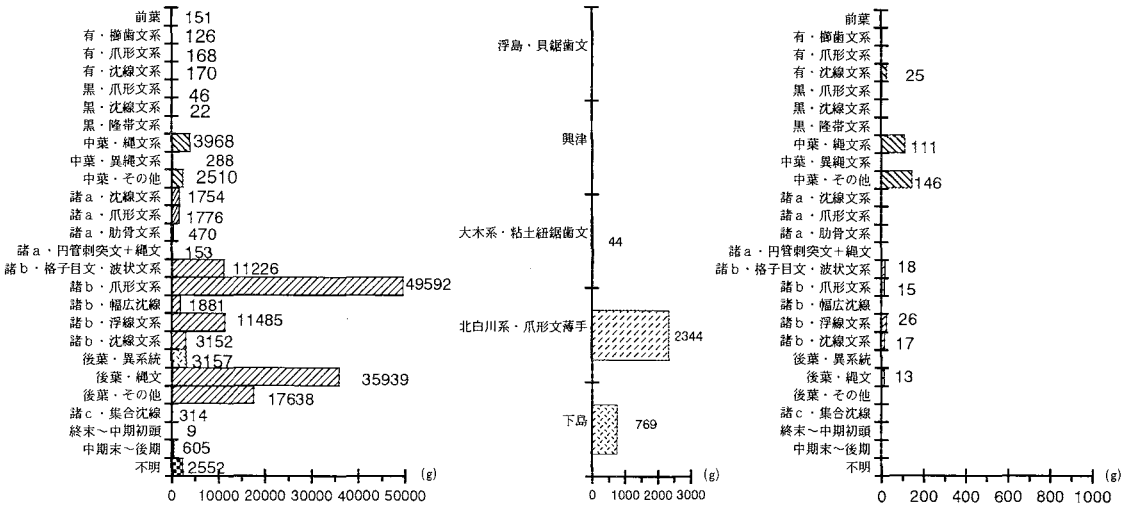


第25図　住居址出土の土器文様別重量組成（15）

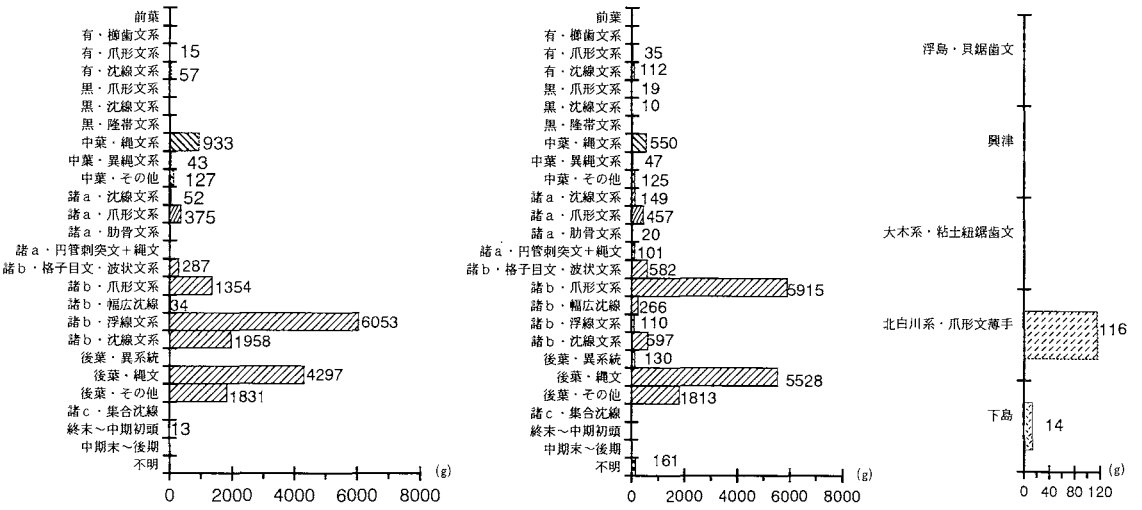
Ｊ－109号住土器文様別重量組成　Ｊ－109号住異系統土器組成　Ｊ－110号住土器文様別重量組成　Ｊ－110号住異系統土器組成



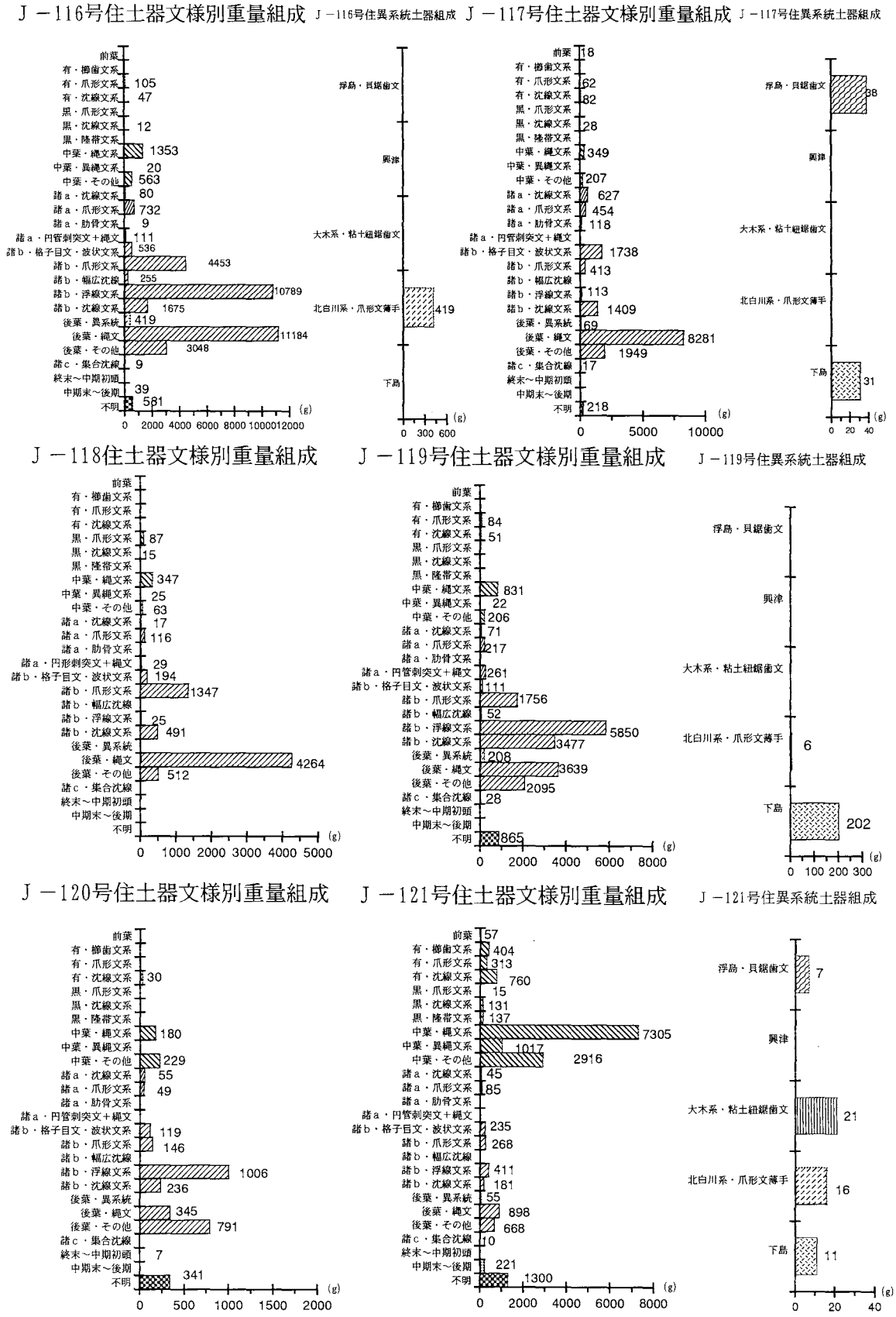
Ｊ－111号住土器文様別重量組成　Ｊ－111号住異系統土器組成　Ｊ－112号住土器文様別重量組成



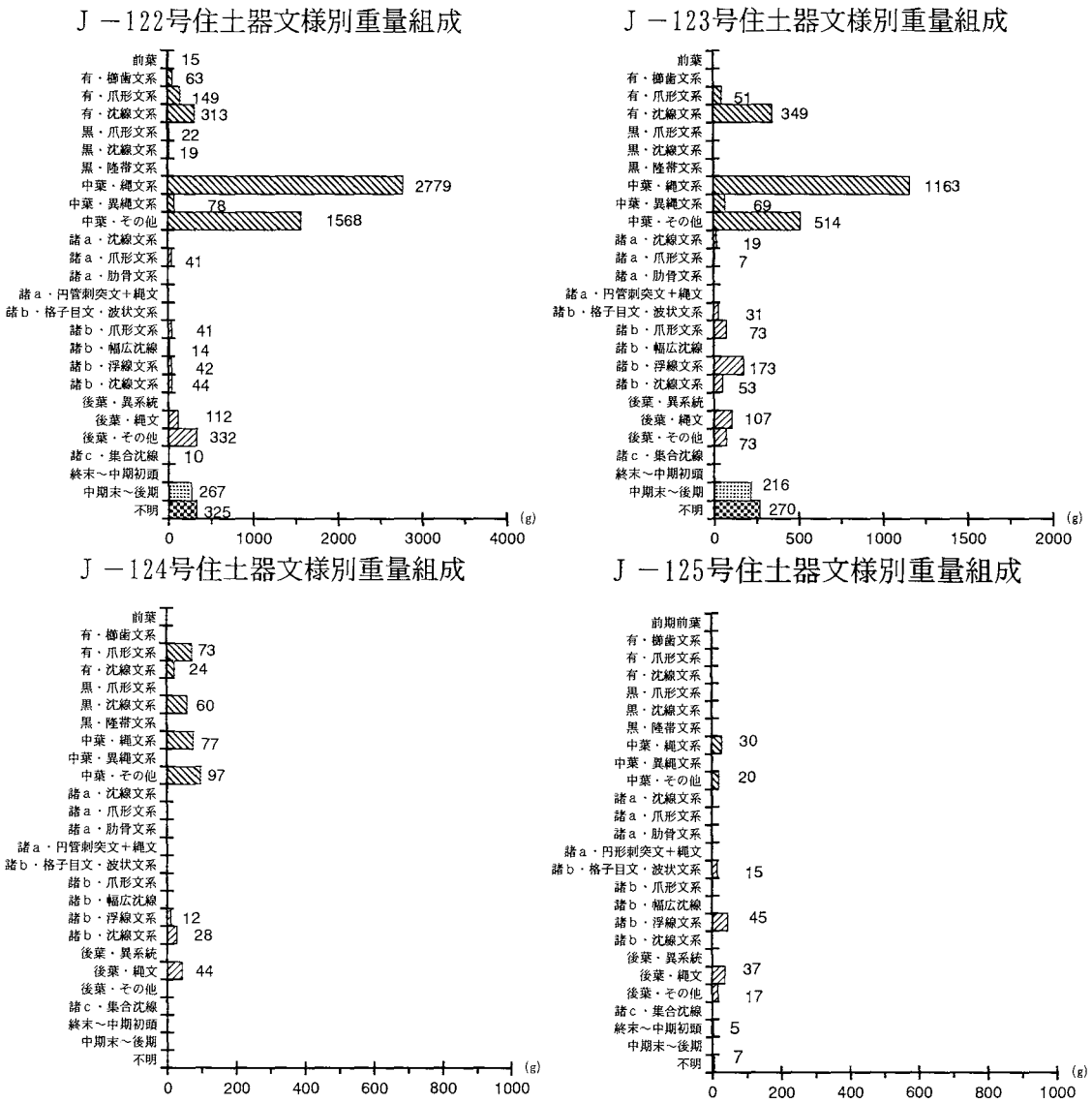
Ｊ－113号住土器文様別重量組成　Ｊ－115号住土器文様別重量組成　Ｊ－115号住異系統土器組成



第26図　住居址出土の土器文様別重量組成（16）



第27図　住居址出土の土器文様別重量組成（17）



第28図　住居址出土の土器文様別重量組成（18）

第139図４）。黒浜式は口縁部に粘土紐を張り付けて隆帯とするもの（KR－１：第138図15・16）や、半截竹管による爪形文（KR－６：第138図21）、コンパス文（KR－１：第138図22）、乱雑な平行沈線を施文するもの（KR－５：第138図32）が出土している。有尾式の１段階が主体となる。

Ｊ－122号住居址出土の土器（遺物図版編第139図14～22）

諸磯ｂ式の平行沈線文の細片が少量出土している（MRb－10：15・16）。

Ｊ－123号住居址出土の土器（遺物図版編第139図23～25）

有尾式の細片が出土している（AR－７：23・24）。

Ｊ－124号住居址出土の土器（遺物図版編第139図26～29）

有尾式の細片が出土している（AR－６：27、AR－９：29）。

（関根慎二）

住居址＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
J-001		22,184	208	12	544	26				4,378	27,352
J-002	106	27,224	48	107	1,303					2,604	31,392
J-003	6	11,395		391	1,021						12,813
J-004		10,645		75	160					1,254	12,134
J-005		11,106			154					2,067	13,327
J-006		40									40
J-007		10,784	86	16	128					1,864	12,878
J-008		614									614
J-009		579			122				7	14	722
J-010		320			28						348
J-011	22	13,356	1,561		85			16		2,648	17,688
J-013	19	2,827			6,609					924	10,379
J-014		1,297		172	549			191			2,209
J-015	34	3,217	2,010	741	28,430	57	39	667	51	2,380	37,626
J-016		2,380			61					145	2,586
J-017		1,358			96					554	2,008
J-018		273								177	450
J-019		2,412		140						477	3,029
J-020		18,121	1,314	803	2,370		6	6	30		22,650
J-021		8,967	843	2,194	8,761	532				1,658	22,955
J-022		1,507		963	83						2,553
J-023		773	111	119	1,141						2,144
J-024		705	362	251	8,768			8	99	167	10,360
J-025	28	6,006	857		544						7,435
J-026	28	4,985	702	1,359	23,797			13		337	31,221
J-030	188	11,053	8,980	555	3,545			46			24,367
J-031	45	2,947	271	68	965					155	4,451
J-032	9	756			594					109	1,468
J-033	8	5,202	907	5,066	21,680		14	202		2,651	35,730
J-034	155	13,947	1,267	1,324	5,468	9				19	22,189
J-035		8,673	869	904	1,706					564	12,716
J-040	64	39,470	5,710	3,368	40,465	157	386	22	243		89,885
J-041	105	78,497	11,872	3,423	28,798	103	24	249	497	26	123,594
J-043		1,612	1,000	92	259	23		1,120			4,106
J-044		445			20			120			585
J-045	15	1,430			370				55	1,870	3,740

第6－1表　住居址出土土器の型式別重量（1）

住居址＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
J-046		770			180			120	15	900	1,985
J-047		2,701	643	627	2,024				400	5,830	12,225
J-049	150	1,791	1,085	92	888				40		4,046
J-050		2,268	100	182	1,010	5		26	31		3,622
J-051	158	10,915	137	1,111	2,151	33			79	1,612	16,196
J-052	18	14,699	296	63	1,165	66		169	578	488	17,542
J-053	23	748		20	167						958
J-054	7	24,305	221	43	856	12			53	1,052	26,549
J-055	63	2,577	249	570	18,590			58		1,248	23,355
J-056	206	49,417	3,136	12,255	294,886	271	355	118	1,318	29,019	390,981
J-057		2,826	1,354	259	26,556	9	71			1,262	32,337
J-058		199			986					161	1,346
J-059	153	20,272	268		472					37	21,202
J-060		324		464	211						999
J-061		354		299	637	40		225		64	1,619
J-062		987		251	10,337			96		18	11,689
J-063	172	5,678	1,897	6,547	7,113		15	55	32		21,509
J-064	6	3,203	387	2,162	16,639		306	20	120	8	22,851
J-066	597	50,805	11,047	12,331	366,522	157	643	14	845	626	443,587
J-067	10	1,131		381	3,013				32		4,567
J-068	179	5,928	1,675	3,443	89,043	184	234	85	155	520	101,446
J-069	33	9,568	2,471	1,279	31,008		87	26	590	4	45,066
J-070	48	3,652	548	4,691	16,698			91	122		25,850
J-071	22	1,202	5,293	1,169	2,300				103		10,089
J-074	16	1,329		54	194				108		1,701
J-075		418		6	1,871				26		2,321
J-076	243	6,479	979	156	3,512	8	16	10	372	254	12,029
J-078	89	27,210	2,488	32,248	531,729	79	965	384	11,152	60,765	667,109
J-079		2,586	1,670	1,009	50,514	46	104	87	208	11,482	67,706
J-080	471	33,863	4,251	16,970	420,140	15	1,661	506	206	51,734	529,817
J-081		486		123	2,266		5	38		721	3,639
J-082					86					28	114
J-083		455	2,370	369	28,813				79	5,117	37,203
J-084			419	281	13,527			24	20	1,766	16,037
J-085		420	1,889	6,103	42,964		63		1,663	6,435	59,537
J-086		345	3,244	4,695	67,608	7	155	68	161	7,718	84,001

第6－2表　住居址出土土器の型式別重量（2）

住居址＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
J-087	64	2,548	2,534	182	5,545		121	1,980	310	1,879	15,163
J-089		115		222	210			7		83	637
J-091		369		2,367	5,472	12				45	8,265
J-092		40		192	111			22	24	53	442
J-093		110	117	63	584		38		31	275	1,218
J-094		1,104	1,876	7,411	23,883	12	8	51	161	3,528	38,034
J-096		44	207	30	220			43	123	104	771
J-098		2,319	143		187		24	195	20	438	3,326
J-099	29	5,382	1,150	58	516	11		54		960	8,160
J-100		585		127						221	933
J-101		787	43	2,004	50					315	3,199
J-102		130			10	12		8	14		174
J-103		126	183	175	1,970	207	18	783	64	694	4,220
J-104		1,236		834	457	28	25	36	34	167	2,817
J-105		301		137	1,850			14	23	392	2,717
J-106		1,220	1,392	745	25,400		80		281	3,860	32,978
J-107		141			33						174
J-108		80			428	20	9	27	66	86	716
J-109	188	35,005	6,209	394	5,179	48	25	6	3,659	6,472	57,185
J-110		122		51	1,773	475	79	219	186	557	3,462
J-111	151	6,365	933	6,883	128,183	314	3,157	9	605	2,552	149,152
J-112		282			89						371
J-113		1,175		686	15,555			13			17,429
J-115		750	148	1,378	14,160		130			161	16,727
J-116		1,946	154	1,644	31,228	9	419		39	581	36,020
J-117	18	609	119	3,717	11,385	17	69			218	16,152
J-118			537	511	6,484						7,532
J-119		1,194		816	16,713	28	208			865	19,824
J-120		439		177	2,570			7		341	3,534
J-121	57	10,908	2,090	296	2,495	10	55		221	1,300	17,432
J-122	15	4,629	362	141	485	10			267	325	6,234
J-123		2,146		39	497				216	270	3,168
J-124		205	126		84						415
J-125		50			114			5		7	176

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木４式など、中期後～後期前は加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式を示す。

第６－３表　住居址出土土器の型式別重量（３）

住居址＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
J-001		81.11	0.76	0.04	1.99	0.10				16.01	100
J-002	0.34	86.72	0.15	0.34	4.15					8.30	100
J-003	0.05	88.93		3.05	7.97						100
J-004		87.73		0.62	1.32					10.33	100
J-005		83.33			1.16					15.51	100
J-006		100.00									100
J-007		83.74	0.67	0.12	0.99					14.47	100
J-008		100.00									100
J-009		80.19			16.90				0.97	1.94	100
J-010		91.95			8.05						100
J-011	0.12	75.51	8.83		0.48			0.09		14.97	100
J-013	0.18	27.24			63.68					8.90	100
J-014		58.71		7.77	24.87			8.65			100
J-015	0.09	8.55	5.34	1.97	75.56	0.15	0.10	1.77	0.14	6.33	100
J-016		92.03			2.36					5.61	100
J-017		67.63			4.78					27.59	100
J-018		60.67								39.33	100
J-019		79.63		4.62						15.75	100
J-020		80.00	5.80	3.55	10.46		0.03	0.03	0.13		100
J-021		39.06	3.67	9.56	38.17	2.32				7.22	100
J-022		59.03		37.72	3.25						100
J-023		36.05	5.18	5.55	53.22						100
J-024		6.81	3.49	2.42	84.63			0.08	0.96	1.61	100
J-025	0.38	80.78	11.53		7.32						100
J-026	0.09	15.97	2.25	4.35	76.22			0.04		1.08	100
J-030	0.77	45.36	36.85	2.28	14.55			0.19			100
J-031	1.01	66.21	6.09	1.53	21.68					3.48	100
J-032	0.61	51.50			40.46					7.43	100
J-033	0.02	14.56	2.54	14.18	60.68		0.04	0.57		7.42	100
J-034	0.70	62.86	5.71	5.97	24.64	0.04				0.09	100
J-035		68.21	6.83	7.11	13.42					4.44	100
J-040	0.07	43.91	6.35	3.75	45.02	0.17	0.43	0.02	0.27		100
J-041	0.08	63.51	9.61	2.77	23.30	0.08	0.02	0.20	0.40	0.02	100
J-043		39.26	24.35	2.24	6.31	0.56		27.28			100
J-044		76.07			3.42			20.51			100
J-045	0.40	38.24			9.89				1.47	50.00	100

第7－1表　住居址出土土器の型式比率（1）

住居址＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
J-046		38.79			9.07			6.05	0.76	45.34	100
J-047		22.09	5.26	5.13	16.56				3.27	47.69	100
J-049	3.71	44.27	26.82	2.27	21.95				0.99		100
J-050		62.62	2.76	5.02	27.89	0.14		0.72	0.86		100
J-051	0.98	67.39	0.85	6.86	13.28	0.20			0.49	9.95	100
J-052	0.10	83.79	1.69	0.36	6.64	0.38		0.96	3.29	2.78	100
J-053	2.40	78.08		2.09	17.43						100
J-054	0.03	91.55	0.83	0.16	3.22	0.05			0.20	3.96	100
J-055	0.27	11.03	1.07	2.44	79.60			0.25		5.34	100
J-056	0.05	12.64	0.80	3.13	75.42	0.07	0.09	0.03	0.34	7.42	100
J-057		8.74	4.19	0.80	82.12	0.03	0.22			3.90	100
J-058		14.78			73.25					11.96	100
J-059	0.72	95.61	1.26		2.23					0.17	100
J-060		32.43		46.45	21.12						100
J-061		21.87		18.47	39.35	2.47		13.90		3.95	100
J-062		8.44		2.15	88.43			0.82		0.15	100
J-063	0.80	26.40	8.82	30.44	33.07		0.07	0.26	0.15		100
J-064	0.03	14.02	1.69	9.46	72.82		1.34	0.09	0.53	0.04	100
J-066	0.13	11.45	2.49	2.78	82.63	0.04	0.14	0.00	0.19	0.14	100
J-067	0.22	24.76		8.34	65.97				0.70		100
J-068	0.18	5.84	1.65	3.39	87.77	0.18	0.23	0.08	0.15	0.51	100
J-069	0.07	21.23	5.48	2.84	68.81		0.19	0.06	1.31	0.01	100
J-070	0.19	14.13	2.12	18.15	64.60			0.35	0.47		100
J-071	0.22	11.91	52.46	11.59	22.80				1.02		100
J-074	0.94	78.13		3.17	11.41				6.35		100
J-075		18.01		0.26	80.61				1.12		100
J-076	2.02	53.86	8.14	1.30	29.20	0.07	0.13	0.08	3.09	2.11	100
J-078	0.01	4.08	0.37	4.83	79.71	0.01	0.14	0.06	1.67	9.11	100
J-079		3.82	2.47	1.49	74.61	0.07	0.15	0.13	0.31	16.96	100
J-080	0.09	6.39	0.80	3.20	79.30		0.32	0.10	0.04	9.76	100
J-081		13.36		3.38	62.27		0.14	1.04		19.81	100
J-082					75.44					24.56	100
J-083		1.22	6.37	0.99	77.45				0.21	13.75	100
J-084			2.61	1.75	84.35			0.15	0.12	11.01	100
J-085		0.71	3.17	10.25	72.16		0.11		2.79	10.81	100
J-086		0.41	3.86	5.59	80.48	0.01	0.18	0.08	0.19	9.19	100

第７－２表　住居址出土土器の型式比率（２）

住居址＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
J-087	0.42	16.80	16.71	1.20	36.57		0.80	13.06	2.04	12.39	100
J-089		18.05		34.85	32.97			1.10		13.03	100
J-091		4.46		28.64	66.21	0.15				0.54	100
J-092		9.05		43.44	25.11			4.98	5.43	11.99	100
J-093		9.05	9.59	5.14	47.98		3.12		2.55	22.58	100
J-094		2.90	4.93	19.49	62.79	0.03	0.02	0.13	0.42	9.28	100
J-096		5.71	26.85	3.89	28.53			5.58	15.95	13.49	100
J-098		69.72	4.30		5.62		0.72	5.86	0.60	13.17	100
J-099	0.36	65.96	14.09	0.71	6.32	0.13		0.66		11.76	100
J-100		62.70		13.61						23.69	100
J-101		24.60	1.34	62.64	1.56					9.85	100
J-102		74.71			5.75	6.90		4.60	8.05		100
J-103		2.99	4.34	4.15	46.68	4.91	0.43	18.55	1.52	16.45	100
J-104		43.88		29.61	16.22	0.99	0.89	1.28	1.21	5.93	100
J-105		11.08		5.04	68.09			0.52	0.85	14.43	100
J-106		3.70	4.22	2.26	77.02		0.24		0.85	11.70	100
J-107		81.03			18.97						100
J-108		11.17			59.78	2.79	1.26	3.77	9.22	12.01	100
J-109	0.33	61.21	10.86	0.69	9.06	0.08	0.04	0.01	6.40	11.32	100
J-110		3.52		1.47	51.21	13.72	2.28	6.33	5.37	16.09	100
J-111	0.10	4.27	0.63	4.61	85.94	0.21	2.12	0.01	0.41	1.71	100
J-112		76.01			23.99						100
J-113		6.74		3.94	89.25			0.07			100
J-115		4.48	0.88	8.24	84.65		0.78			0.96	100
J-116		5.40	0.43	4.56	86.70	0.02	1.16		0.11	1.61	100
J-117	0.11	3.77	0.74	23.01	70.49	0.11	0.43			1.35	100
J-118			7.13	6.78	86.09						100
J-119		6.02		4.12	84.31	0.14	1.05			4.36	100
J-120		12.42		5.01	72.72			0.20		9.65	100
J-121	0.33	62.57	11.99	1.70	14.31	0.06	0.32		1.27	7.46	100
J-122	0.24	74.25	5.81	2.26	7.78	0.16			4.28	5.21	100
J-123		67.74		1.23	15.69				6.82	8.52	100
J-124		49.40	30.36		20.24						100
J-125		28.41			64.77			2.87		3.98	100

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木４式など、中期後～後期前は加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式を示す。

第７－３表　住居址出土土器の型式比率（３）

［掘立柱建物址出土の土器］（遺物図版編第143図～148図）

ＨＴ－２号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編162図下段）

諸磯ｂ式（MRb－10：27）や諸磯ｃ式（MRc－１：26）が出土している。

ＨＴ－３号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編143図１～５）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文（MRb－４：１）の細片が少量出土している。

ＨＴ－４号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編143図６～８）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文と浮線文が少量が出土している（MRb－４：７・８、MRb－６：６）。

ＨＴ－５号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編143図９～10）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文と浮線文が少量が出土している（MRb－４：９、MRb－６：10）。

ＨＴ－６掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編143図11～14）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文が少量が出土している（MRb－４：11・12）。

ＨＴ－７掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編143図15～18）

有尾式の爪形文と諸磯ｂ式の縄文施文が少量が出土している（AR－６：17）。

ＨＴ－８・９号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編143図19～22）

諸磯ｂ式の縄文施文が少量が出土している（ZK－１：19～22）。

ＨＴ－10・11号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編144図）

諸磯ｂ式の波状沈線文、幅広の爪形文と浮線文が出土している（MRb－１：１、MRb－４：６～16、MRb－６：20～28）。幅広の爪形文が主体となる。

ＨＴ－12・13号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編145図）

諸磯ｂ式の波状沈線文、幅広の爪形文と浮線文が出土している（MRb－２：１、MRb－４：４～12、MRb－６：13～18）。幅広の爪形文が主体となる。

ＨＴ－14号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編146図１～７）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文と浮線文が出土している（MRb－４：４、MRb－６：５、MRb－７：７）。

ＨＴ－15・16号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編146図８～14）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文と浮線文が出土（MRb－４：９～11、MRb－６：12～14）。格子目文土器（MRb－３：８）が幅広爪形文と共伴している。

ＨＴ－17・18号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編146図15～22）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文と浮線文が出土している（MRb－４：16～20、MRb－６：22）。格子目文が出土している（MRb－３：15）。

ＨＴ－19号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編147図１～４）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文と浮線文が出土している（MRb－４：２、MRb－５：４）。

ＨＴ－20・21・22号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編147図５～９）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文と浮線文が出土している（MRb－４：５・７、MRb－６：６）。格子目文土器が出土している（MRb－３：８）。

ＨＴ－23号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編147図10～15）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文と浮線文が出土している（MRb－５：11、MRb－６：12～15）。

ＨＴ－24号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編147図16～19）

諸磯ａ式の幅狭の爪形文（MRa－４：17）と、諸磯ｂ式の幅広の波状沈線文と爪形文が出土している

（MRb－１：16、MRb－４：18・19）。

ＨＴ－25号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編147図20～21）

諸磯ｂ式の幅広の平行沈線文と浮線文が出土している（MRb－６：20、MRb－11：21）。

ＨＴ－26号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編147図22～24）

諸磯ｂ式の幅広の平行沈線文が出土している（MRb－１：23・25）。

ＨＴ－27号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編148図１～４）

諸磯ａ式の幅狭の平行沈線文と爪形文が出土している（MRa－４：１、MRa－５：２）。

ＨＴ－28号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編148図５～７）

諸磯ｂ式の幅広の平行沈線文と浮線文が出土している（MRb－４：５、MRb－６：６）。

ＨＴ－29号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編148図８～10）

諸磯ｂ式の幅広の平行沈線文と浮線文の浅鉢が出土している（MRb－４：10）。

ＨＴ－30号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編148図11）

諸磯ｂ式の縄文施文が出土している（ZK－１）。

ＨＴ－31号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編148図12～15）

縄文施文が出土している（ZK－１：12～15）。

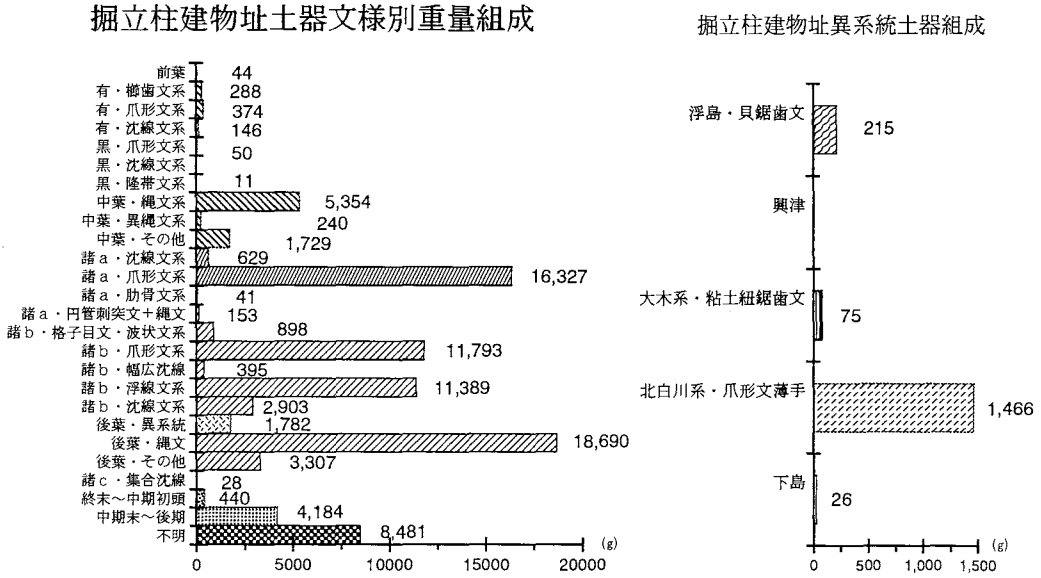
ＨＴ－35号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編148図16～19）

諸磯ｂ式の平行沈線文が出土している（MRb－18・19）。

ＨＴ－37号掘立柱建物址出土の土器（遺物図版編148図20～21）

諸磯ｂ式の幅広の爪形文と浮線文が出土している（MRb－４：21、MRb－６：20）。

（関根慎二）



第29図　掘立柱建物址の土器文様別重量組成

住居址 / HT	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)	備考
HT-002A		37			133					7	177	
HT-002B		134		9	385					58	586	
HT-002C		48			198			5			251	
HT-002D		65	55	443	201					55	819	
HT-003		1,203			286		11			44	1,544	
HT-004	9	303		58	757	6	8	159	1,002	934	3,236	
HT-005	14	630		92	1,343			154		510	2,743	
HT-006		874		47	1,230				35	27	2,213	
HT-007		119	94		987				126	9	1,335	
HT-008		118		29	441					20	608	
HT-009		158		30	340			25		55	608	
HT-0010		216		716	6,949		406			1,036	9,323	
HT-0011		92		7	1,906		75			436	2,516	
HT-0012			564	150	6,652		72		26	1,009	8,473	
HT-0013					460						460	
HT-0014		31		326	2,078		198			47	2,680	
HT-0015		21			1,322				101	142	1,586	16と重複
HT-0016		21			1,322				101	142	1,586	15と重複
HT-0017		184		48	2,791		84		282	776	4,165	18と重複
HT-0018		184		48	2,791		84		282	776	4,165	17と重複
HT-0019				106	1,044				831	229	2,210	
HT-0020		101		35	210					26	372	
HT-0021				383						52	435	
HT-0022		130		94	234			39			497	
HT-0023		28		78	2,012		928			173	3,219	
HT-0024		76		146	1,009				81	181	1,493	
HT-0025		227			214				47	19	507	
HT-0026		383		187	1,092				1,356	22	3,040	
HT-0027		31		39	512				22	19	623	
HT-0028		296			340					12	648	
HT-0029A		53	38	330				16		12	449	
HT-0029B		35	26	26							87	
HT-0030		4			209			10			223	
HT-0031		143		140	354	22					659	
HT-0032					165				273	37	475	
HT-0033		22			286				10	146	464	
HT-0034		34									34	
HT-0035		250			633					193	1,076	
HT-0036											0	遺物なし
HT-0037		29			111						140	
HT-10～13		503	369	883	15,957		553		26	2,481	20,772	
HT-14～24		571		681	11,235		1,210	39	1,295	1,626	16,657	

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木４式など、中期後～後期前は加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式を示す。

第８表　掘立柱建物址出土土器の型式別重量

時期 / HT	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)	備考
HT-002A		20.90			75.14					3.95	100	
HT-002B		22.87		1.54	65.70					9.90	100	
HT-002C		19.12			78.88			1.99			100	
HT-002D		7.94	6.72	54.09	24.54					6.72	100	
HT-003		77.91			18.52		0.71			2.85	100	
HT-004	0.28	9.36		1.79	23.39	0.19	0.25	4.91	30.96	28.86	100	
HT-005	0.51	22.97		3.35	48.96			5.61		18.59	100	
HT-006		39.49		2.12	55.58				1.58	1.22	100	
HT-007		8.91	7.04		73.93				9.44	0.67	100	
HT-008		19.41		4.77	72.53					3.29	100	
HT-009		25.99		4.93	55.92			4.11		9.05	100	
HT-0010		2.32		7.68	74.54		4.35			11.11	100	
HT-0011		3.66		0.28	75.76		2.98			17.33	100	
HT-0012			6.66	1.77	78.51		0.85		0.31	11.91	100	
HT-0013					100.00						100	
HT-0014		1.16		12.16	77.54		7.39			1.75	100	
HT-0015		1.32			83.35				6.37	8.95	100	16と重複
HT-0016		1.32			83.35				6.37	8.95	100	15と重複
HT-0017		4.42		1.15	67.01		2.02		6.77	18.63	100	18と重複
HT-0018		4.42		1.15	67.01		2.02		6.77	18.63	100	17と重複
HT-0019				4.80	47.24				37.60	10.36	100	
HT-0020		27.15		9.41	56.45					6.99	100	
HT-0021				88.05						11.95	100	
HT-0022		26.16		18.91	47.08			7.85			100	
HT-0023		0.87		2.42	62.50		28.83			5.37	100	
HT-0024		5.09		9.78	67.58				5.43	12.12	100	
HT-0025		44.77			42.21				9.27	3.75	100	
HT-0026		12.60		6.15	35.92				44.61	0.72	100	
HT-0027		4.98		6.26	82.18				3.53	3.05	100	
HT-0028		45.68			52.47					1.85	100	
HT-0029A		11.80	8.46	73.50				3.56		2.67	100	
HT-0029B		40.23	29.89	29.89							100	
HT-0030		1.79			93.72			4.48			100	
HT-0031		21.70		21.24	53.72	3.34					100	
HT-0032					34.74				57.47	7.79	100	
HT-0033		4.74			61.64				2.16	31.47	100	
HT-0034		100.00									100	
HT-0035		23.23			58.83					17.94	100	
HT-0036												遺物なし
HT-0037		20.71			79.29						100	
HT-10～13		2.42	1.78	4.25	76.82		2.66		0.13	11.94	100	
HT-14～24		3.43		4.09	67.45		7.26	0.23	7.77	9.76	100	

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木４式など、中期後～後期前は加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式を示す。

第９表　掘立柱建物址出土土器の型式比率

［土壙墓群出土の土器］（遺物図版編第34図～37図・第140図～142図）

土壙墓群出土には、パターン①：副葬品あるいは鉢被り・破片被りなど下部施設として埋納されたもの、パターン②：埋葬時に混入したもの、パターン③：それ以前に存在していた遺構のものや、後世のものが二次的に混入したものが存在している。パターン①は完形もしくは大形破片であり容易に識別が可能である。また、パターン②・③のいずれかを判断することは難しい。ここでは副葬品・下部施設の時期とほぼ同じ時期のものをパターン②と判断し、時期的にかけ離れているものをパターン③と推定した。①～③になるにつれて、時期決定資料としての信頼性は低くなる。

以下、各土壙墓群について、①パターン・②パターン・③パターンに分けて述べる。

Ｄ区南東群（遺物図版編第34図１・２、第142図15～32）

パターン①（第34図１・２）　１は無節の斜縄文を施文した小形深鉢である（ZC―１）。２は半截竹管により山形文を施文した小形深鉢である（AR―８）。両者は副葬品である。文様は異なるものの、器形・サイズともほぼ同じである。いずれも有尾式３段階に位置付けられる。

パターン②（第142図15・17・19・28・30）　いずれも有尾式であり埋葬時の混入とみられる。15は菱形文を重層的に施文したもので２段階である（AR―７）。17・30は口縁部文様帯に爪形文で山形に施文する３段階（AR―４）。19・28は有尾式の縄文施文である（ZC―１：19、ZC―２：28）。

パターン③（第142図16・18・20・22～27・29・31・32）　文様施文は諸磯ｂ式である。24～26は幅広の爪形文（MRb―４）、27は浮線文である（MRb―６：16）。文様施文から諸磯ｂ式２・３段階と思われる。単節斜縄文のものもこの時期とみられる（ZK―１：18・20・22・29・31・32）。

Ｄ区南群（遺物図版編第34図３・第142図33～40）　パターン①（第34図３）　３は口縁部文様帯に半截竹管により菱形文が施文された深鉢である（AR―７）。口縁部文様帯にも縄文が施文されることから、当地域の有尾式とは若干趣を異にし、黒浜式の系譜も考えられる。有尾式２段階に位置付けられる。

パターン②（第142図33）　有尾式の羽状縄文と判断される（ZC―２）。

パターン③（第142図34～40）　34は下島式で地文に横位の沈線を施文し、結節浮線文で渦巻き状の文様を描いている（SJ）。35は縄文地文にボタン状貼付文を施す諸磯ｃ式である（MRc―３）。36は半截竹管による平行沈線を横位に施文するもので、底部が裾広がりになることから諸磯ｂ式終末から諸磯ｃ式と思われる（MRb―11）。38は爪形文の諸磯ｂ式である（MRb―４）。37・39・40はこれらに伴う縄文施文である（ZK―１）。

Ｄ区中央群（遺物図版編第34図４～９・第142図１～14）

パターン①（第34図４～９）　８は単節斜縄文を施文した小形深鉢である（ZC―１）。９は羽状縄文を施文した小形鉢である（ZC―２）。いずれも有尾式であるが細別時期は不明である。４は諸磯ｂ式２段階の大形深鉢である（MRb―４）。２単位の大波状口縁を有しており、口縁部から胴上半部にかけて半截竹管により入組文が施文され、胴下半部には羽状縄文が施文されている。類似資料としては大下原遺跡・行田梅木平遺跡・上大屋樋越地区遺跡群・中川貝塚・塚屋遺跡・多摩ニュータウン№205遺跡出土例などがある。本例は円管刺突が全くない点で他遺跡の例とは異なっているが、これは円管刺突が新段階になると使用されなくなっていくことと関係があると思われる。

５・６は小形浅鉢である。胴下半部は屈曲し、そこに縄文を施文している。５は口辺部に３カ所の焼成後穿孔が認められる。いずれも諸磯ｂ式古段階のものと判断される。７は直前段合撚の縄文が施文さ

れた深鉢の胴部である。諸磯ａ式と推定される。
パターン②（第142図１～14）　この土壙墓群は有尾式と諸磯ａ～ｂ式の２段階に分かれている。６・10・12・14は有尾式であり（ZC－１：６・10・14、ZC－２：12）、パターン①の８・９に対応する。１～５・７～９・11・13は諸磯ａ～ｂ式であり、パターン①の４～７に対応する。ここでは諸磯ｂ式の幅広の爪形文や浮線文が主体となる（MRb－４：４・13、MRb－６：３・11、MRb－７：２）。５は諸磯ａ式の木葉文を平行沈線で描いたもので文様構成が崩れてきている（MRa－２）。８は赤色塗彩が施された有孔浅鉢である。また、11は梯子状に浮線文を貼り付けたもので、地文に羽状縄文を施文している。羽状縄文と浮線文の文様の特徴から、北白川下層式や北陸の系譜も考えられる。

Ｂ区北群（遺物図版編第35図１～３・第140図21～47）
パターン①（第35図１～３・第140図39）　１は幅狭の半截竹管により格子目文が施文された深鉢の破片で、上端部は二次的に整形され偽口縁となっている。なお、39は同一個体の破片であ（MRb－３）。これと類似したものは大下原遺跡の土壙墓からも出土している。また、類似のものは長野県飯山市の大倉崎遺跡で大量に出土している他、新潟県でも出土している。諸磯ｂ式古段階に併行するとみられる。２は口縁部に幅狭の半截竹管で平行に爪形文が施文された浅鉢で諸磯ａ式に位置付けられる（MRa－４）。３は単節斜縄文が施文された深鉢の胴部であり、上部は偽口縁となっている（ZK－１）。諸磯ａ式と推定される。
パターン②（第140図22・23・47）　諸磯ａ式を中心とするもので、幅狭の平行沈線による肋骨文や木葉文である（MRa－１：22・47、MRa－２：23）。
パターン③（第140図21・24～38・40～46）　21・24・27・29・31・38は諸磯ｂ式の浮線文で本土壙墓群より後世の二次的混入と判断される（MRb－７：24・27・29・31・38）。なお、21は浅鉢である。また、それ以外は本土壙墓群よりも古い時期の有尾式を主体とする（AR－６：40、AR－８：36、ZC－１：25、ZC－２：37、ZC－３：45）。ただし、41は関山II式もしくは黒浜式の古段階である（KR－２）。また、33・46は櫛歯状工具で口縁部に縦位と菱形に文様を描いている有尾式１段階である（AR－１：30・35）。比較的有尾式１段階が多いのは、この土壙墓群がＪ－51号住居址（有尾式期）と重複していることによると推定される。

Ｂ区南群（遺物図版編第36図１～３、第37図１～５、第141図１～27）
パターン①（第36図１～３、第37図１～５、第141図27）　第36図１～３・第37図１は浮線文で諸磯ｂ式３段階に位置付けられる深鉢である（MRb－６：２、MRb－７：１・３・第37図１）。第36図１は頸部に円管刺突を一列施文する特異な例で、本遺跡ではこれのみに認められる。ちなみに「鉢被り」として用いられたこの下部からは、本土壙墓群では唯一の玦状耳飾が一対出土しており、文様の特殊性と関連して注目される。第37図２～５は諸磯ｂ式１段階の小形浅鉢である。２は第34図６（Ｄ区中央群）に類似するが、本例では胴部の屈曲が認められない（ZK－１）。３は高台状の突起が底部に付くもので器形は第34図６に類似する。漆状の物質が全体に付着している（ZK－２）。４は算盤玉形の器形を呈する例で、幅狭の半截竹管により入組文が施文されている（MRa－４）。５は小形の有孔浅鉢で、２～４に比べ後出であり、２～３段階と考えられる（ZK－２）。27は幅広の半截竹管により平行に爪形文を施文した深鉢の破片であり（MRb－４）、「破片被り」として用いられていた。諸磯ｂ式２段階に位置付けられる。

パターン②（第141図１～６・９・10・12・15～22・26）　１・18・21・22は浮線文である（MRb－６：１・21、MRb－７：18・22）。２・26は幅広の半截竹管により爪形文が施文される（MRb－４）。19は幅狭の平行沈線を施文したものである（MRb－11）。以上は諸磯ｂ式２・３段階である。６は幅広の半截竹管による爪形文で入組文が施文された浅鉢の破片である（MRb－４）。諸磯ｂ式１段階である。12は諸磯ａ式で幅狭の爪形文である（MRa－４）。その他の無繊維の縄文施文は諸磯ｂ式と思われる（ZK－１：４・５・16・20）。
パターン③（第141図７・８・11・13～15・23・25）　有尾式の一群であり、本土壙墓群に重複するＪ－49号住居址の遺物の混入の可能性が高い（AR－９：７・８、ZC－１：23・25）。

Ｂ区南西群（遺物図版編第37図６・７、第140図１～20）
パターン①（第37図６・７）　６は小形の有孔浅鉢である（ZK－１）。外面には赤色塗彩の痕跡が認められる。７は浅鉢の下半部である（ZK－１）。割れ面は整形されて偽口縁となっており、「鉢被り」として用いられていた。６と共伴しており同時期のものである。おそらく有孔浅鉢であったと推定される。
パターン②（第140図５・12・15～20）　平行沈線と爪形文と縄文施文である。諸磯ｂ式の一群である（MRb4：20、MRb－10：18・19、ZK－１：５・12・15～17）。
パターン③（第140図１～４・６・７～11・13・14）　４・６は諸磯ａ式で、幅狭の半截竹管を施文具としている（MRa－４：４、MRa－５：６）。残りは繊維を含んでおり有尾式に位置付けられる（AR－１：１・13、AR－４：７・14、ZC－１：２・８・10、ZC－２：３）。いずれも二次的に混入したものと判断される。

（大工原　豊）

［単独土壙墓出土の土器］（遺物図版編第38図４、第39図８・９、第40図７・８、第150図１～20）
単独の土壙墓でもパターン①～③の状態で土器が検出されている。以下、個々の土壙墓について、出土パターンを含めて各土器の時期と特徴について述べる。

Ｄ－136号土壙墓出土の土器（第150図１）　パターン②の状態で出土したと推定される。諸磯ｂ式２段階である（MRb－10）。
Ｄ－158号土壙墓出土の土器（第150図２）　パターン②の状態で出土したと推定される。有尾式２段階で爪形文により菱形の文様構成をなす（AR－３）。
Ｄ－199号土壙墓出土の土器（第150図３・４）　パターン②の状態で出土したと推定される。３は半截竹管による爪形文が施文されたもので黒浜式とみられる（KR－６）。４は附加条の羽状縄文が施文されたもので有尾式である（ZC－２）。
Ｄ－217号土壙墓出土の土器（第150図５・６）　パターン②の状態で出土したと推定される（ZC－１：５、ZK－１：６）。
Ｄ－240号土壙墓出土の土器（第38図４・第150図７）　４はパターン①の状態で出土した浅鉢である。伏せられた状態で出土しており、「鉢被り」として用いられたと推定される。沈線文と縄文が施文されている（MRb－１）。諸磯ａ～ｂ式に位置付けられる。また、７はパターン②の状態で出土した（MRa－２）。
Ｄ－315号土壙墓出土の土器（第150図８）　パターン②の状態で出土したと推定される。爪形文を施文

する有尾式である。

D－730号土壙墓出土の土器（第150図９）　パターン②の状態で出土したと推定される。五領ヶ台式と判断される（GR）。

D－800号土壙墓出土の土器（第39図８・第150図10）　８はパターン①の状態で出土した深鉢である。胴部のみで単節斜縄文が施文されている（ZK－１）。諸磯ａ～ｂ式古段階と推定される。10はパターン②の状態で出土した。半截竹管による波状文が施文されており、諸磯ｂ式１段階と判断される（MRb－２）。

D－864号土壙墓出土の土器（第39図９）　パターン①の状態で出土した深鉢である。幅狭の半截竹管による平行沈線と円管刺突が施されている（MRa－５）。諸磯ａ式である。

D－1086号土壙墓出土の土器（第150図11・12）　パターン②の状態で出土したと推定される。幅広の爪形文と口唇部を外削ぎ状にしていることから諸磯ｂ式２段階と思われる（MRb－４）。

D－1091号土壙墓出土の土器（第150図17・18）　パターン②の状態で出土したと推定される。いずれも諸磯ｃ式の深鉢の口縁部破片である（MRc－２）。

D－1092号土壙墓出土の土器（第150図13・14）　パターン②の状態で出土したと推定される。いずれも単節斜縄文を施文したもので諸磯ａ～ｂ式と推定される（ZK－１）。

D－1093号土壙墓出土の土器（第150図15・16）　パターン②の状態で出土したと推定される。いずれも諸磯ｂ式の浮線文である（MRb－６）。

D－1100号土壙墓出土の土器（第150図19）　パターン②か③の状態で出土したと推定される。半截竹管により爪形文を施文した諸磯ｂ式２段階の破片である（MRb－４）。

D－1116号土壙墓出土の土器（第150図20）　パターン②の状態で出土したと推定される。全体に単節斜縄文を施文しており、口縁部外反の特徴から諸磯ａ式と推定される（ZK－１）。

D－1126号土壙墓出土の土器（第40図７・８）　８はパターン①の状態で出土した鉢であり、副葬品と判断される。キャリパー状のくびれを２段つけ、台付き鉢のような器形を呈する。浮線の貼り付により口縁部に渦巻文や波状文を施文している。地文は単節斜縄文である。十三菩提式である（JS）。また、７はパターン②の状態で出土した深鉢の破片である。平行沈線を横位に胴部上半に施文している諸磯ｂ式の終末段階と考えられる（MRb－９）。

（大工原　豊）

土壙＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0886		73		398	41						512
D-1004		38			183						221
D-1005		295		257	556			15	410		1,533
D-1006		100			44						144
D-1007					37						37
D-1008		60			13						73
D-1009											
D-1010											
D-1011											
D-1012											
D-1020		33			178						211
D-1023											
D-1029		380		25	9						414
D-1030		103		58							161
D-1030											
D-1031		242			220						462
D-1032											
D-1033		22			52						74
D-1034											
D-1040		240			15						255
D-1041					158						158
D-1042											
D-1043											
D-1044					4						4
D-1045											
D-1046											
D-1047											
D-1048											
D-1049					25						25
D-1061											
D-1062		461			35						496
D-1063											
D-1064											
D-1065		17									17
D-1066											
D-1067											
D-1068					27						27

第10表　D区南東土壙墓群出土土器の型式別重量

土壙＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0887											
D-0888											
D-0889											
D-0891											
D-0893				221							221
D-0894											
D-0895											
D-0896											
D-0922											
D-0935		17		11	43				72		143
D-0936		5			222						227
D-0937											
D-0938											
D-0939		5			57						62
D-0940											
D-0941					775						775
D-0942											
D-0943											
D-0944					3,696						3,696
D-0946A					89						89
D-0946B											
D-0947											
D-0948											
D-0949											
D-0950											
D-0951				305							305
D-0952		74		297	200			12			583
D-0953									23		23
D-0954		645			15				280	170	1,110
D-0955		25									25
D-0956											
D-0957				136							136
D-0958											
D-0959											
D-0960		6		11					10		27
D-0964				204							204
D-0965											
D-0966											
D-0967											

第11表　D区中央土壙墓群出土土器の型式別重量（1）

土壙＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0968A				13							13
D-0968B											
D-0969											
D-0970					1,509						1,509
D-0971											
D-0972											
D-0973		633			28						661
D-0974											
D-0975		56									56
D-0980											
D-0981											
D-0982		99									99
D-0983				17	37						54
D-0989		280									280
D-0999											

第12表　D区中央土壙墓群出土土器の型式別重量（2）

土壙＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0984											
D-0990											
D-0994											
D-0995											
D-0996											
D-0997					17						17
D-0998											
D-0999		260									260
D-1003		130			260	145	154				689
D-1021											
D-1028											
D-1036											
D-1037					58						58
D-1038											
D-1039				6	40						46
D-1050		38		61							99
D-1051											
D-1052											
D-1053											
D-1054											
D-1055				207	23						230
D-1056					201						201
D-1057											
D-1069											

第13表　D区南土壙墓群出土土器の型式別重量

土壙＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0333		182			104						286
D-0334		19	26		139						184
D-0335		32									32
D-0336		106			92						198
D-0337A		18			11						29
D-0337B					2,490						2,490
D-0337C					46						46
D-0339		47			16						63
D-0340											
D-0341											
D-0342		130			199						329
D-0343A					17						17
D-0343B											
D-0344											
D-0345											
D-0346		176			37						213
D-0347		289			19						308
D-0348		31			10						41
D-0349		49			1,000						1,049
D-0350		69									69
D-0351A		4		130	508				8		650
D-0351B											
D-0352A		105			2,503	35				42	2,685
D-0352B											
D-0353											
D-0365		301		94	259						654
D-0366A					1,235						1,235
D-0366B											
D-0367					111						111
D-0370		33			20						53
D-0371		66									66
D-0372		551			485						1,036
D-0374		54			11						65
D-0377A					525						525
D-0377B					815					7	822
D-0378											
D-0379											

第14表　B区南土壙墓群出土土器の型式別重量

土壙＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0319A		45		11						10	66
D-0319B											
D-0320			537	350	99				22	112	1,120
D-0321		137		24	48						209
D-0322											
D-0323		887			29						916
D-0324		166		7	559				64		796
D-0325		75			160				12	14	261
D-0326		663		13						192	868
D-0354	11	461		87	154				214		927
D-0355		368	586		36					72	1,062
D-356		777	224		159					246	1,406
D-0356											
D-0357	15	310	87		132				10	91	645
D-0357							2,302				2,302
D-0358			401		294						695
D-0359											
D-0360											
D-0361	64	569			26			18		310	987
D-0362			690	1,803	435					948	3,876
D-0368											

第15表　B区北土壙墓群出土土器の型式別重量

土壙＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0254											
D-0255		622			49						671
D-0256				57						29	86
D-0257											
D-0258											
D-0259		677		101						9	787
D-0260											
D-0261		239			57	10			11		317
D-0262											
D-0263											
D-0264											

第16表　B区南西土壙墓群出土土器の型式別重量（1）

土壙＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0267A				16		20				28	64
D-0267B											
D-0268		175		70	556					24	825
D-0269		23			47						70
D-0271											
D-0274											
D-0275		25			104				40	17	186
D-0276					10					80	90
D-0277A		140			69				12	172	393
D-0277B					1,750						1,750
D-0281											
D-0290											
D-0291											

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木４式など、中期後～後期前は加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式を示す。

第17表　Ｂ区南西土壙墓群出土土器の型式別重量（２）

土壙＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0886		14.26		77.73	8.01						100
D-1004		17.19			82.81						100
D-1005		19.24		16.76	36.27			0.98	26.74		100
D-1006		69.44			30.56						100
D-1007					100.00						100
D-1008		82.19			17.81						100
D-1009											
D-1010											
D-1011											
D-1012											
D-1020		15.64			84.36						100
D-1023											
D-1029		91.79		6.04	2.17						100
D-1030		63.98		36.02							100
D-1030											
D-1031		52.38			47.62						100
D-1032											
D-1033		29.73			70.27						100
D-1034											
D-1040		94.12			5.88						100
D-1041					100.00						100
D-1042											
D-1043											
D-1044					100.00						100
D-1045											
D-1046											
D-1047											
D-1048											
D-1049					100.00						100
D-1061											
D-1062		92.94			7.06						100
D-1063											
D-1064											
D-1065		100.00									100
D-1066											
D-1067											
D-1068					100.00						100

第18表　D区南東土壙墓群出土土器の型式比率

土壙＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0887											
D-0888											
D-0889											
D-0891											
D-0893				100.00							100
D-0894											
D-0895											
D-0896											
D-0922											
D-0935		11.89		7.55	30.21				50.35		100
D-0936		2.20			97.80						100
D-0937											
D-0938											
D-0939		8.06			91.94						100
D-0940											
D-0941					100.00						100
D-0942											
D-0943											
D-0944					100.00						100
D-0946A					100.00						100
D-0946B											
D-0947											
D-0948											
D-0949											
D-0950											
D-0951				100.00							100
D-0952		12.69		50.94	34.31			2.06			100
D-0953									100.00		100
D-0954		58.11			1.35				25.23	15.32	100
D-0955		100.00									100
D-0956											
D-0957				100.00							100
D-0958											
D-0959											
D-0960		22.22		40.74					37.04		100
D-0964				100.00							100
D-0965											
D-0966											
D-0967											

第19表　D区中央土壙墓群出土土器の型式比率（1）

土壙＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0968A				100.00							100
D-0968B											
D-0969											
D-0970					100.00						100
D-0971											
D-0972											
D-0973		95.76			4.24						100
D-0974											
D-0975		100.00									100
D-0980											
D-0981											
D-0982		100.00									100
D-0983				31.48	68.52						100
D-0989		100.00									100
D-0999											

第20表　D区中央土壙墓群出土土器の型式比率（2）

土壙＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0984											
D-0990											
D-0994											
D-0995											
D-0996											
D-0997					100.00						100
D-0998											
D-0999		100.00									100
D-1003		18.87			37.74	21.04	22.35				100
D-1021											
D-1028											
D-1036											
D-1037					100.00						100
D-1038											
D-1039				13.04	86.96						100
D-1050		38.38		61.62							100
D-1051											
D-1052											
D-1053											
D-1054											
D-1055				90.00	10.00						100
D-1056					100.00						100
D-1057											
D-1069											

第21表　D区南土壙墓群出土土器の型式比率

土壙＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0333		63.64			36.36						100
D-0334		10.33	14.13		75.54						100
D-0335		100.00									100
D-0336		53.54			46.46						100
D-0337A		62.07			37.93						100
D-0337B					100.00						100
D-0337C					100.00						100
D-0339		74.60			25.40						100
D-0340											
D-0341											
D-0342		39.51			60.49						100
D-0343A					100.00						100
D-0343B											
D-0344											
D-0345											
D-0346		82.63			17.37						100
D-0347		93.83			6.17						100
D-0348		75.61			24.39						100
D-0349		4.67			95.33						100
D-0350		100.00									100
D-0351A		0.62		20.00	78.15			1.23			100
D-0351B											
D-0352A		3.91			93.22	1.30				1.56	100
D-0352B											
D-0353											
D-0365		46.02		14.37	39.60						100
D-0366A					100.00						100
D-0366B											
D-0367					100.00						100
D-0370		62.26			37.74						100
D-0371		100.00									100
D-0372		53.19			46.81						100
D-0374		83.08			16.92						100
D-0377A					100.00						100
D-0377B					99.15					0.84	100
D-0378											
D-0379											

第22表　B区南土壙墓群出土土器の型式比率

土壙＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0319A		68.18		16.67						15.15	100
D-0319B											
D-0320			47.95	31.25	8.84				1.96	10.00	100
D-0321		65.55		11.48	22.97						100
D-0322											
D-0323		96.83			3.17						100
D-0324		20.85		0.88	70.23				8.04		100
D-0325		28.74			61.30				4.60	5.36	100
D-0326		76.38		1.50						22.12	100
D-0354	1.19	49.73		9.39	16.61				23.09		100
D-0355		34.65	55.18		3.39					6.78	100
D-356		55.26	15.93		11.31					17.50	100
D-0356											
D-0357	2.33	48.06	13.49		20.47				1.55	14.11	100
D-0357							100.00				100
D-0358			57.70		42.30						100
D-0359											
D-0360											
D-0361	6.48	57.65			2.63			1.82		31.41	100
D-0362			17.80	46.51	11.22					24.46	100
D-0368											

第23表　B区北土壙墓群出土土器の型式比率

土壙＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0254											
D-0255		92.70			7.30						100
D-0256				66.28						33.72	100
D-0257											
D-0258											
D-0259		86.02		12.83						1.14	100
D-0260											
D-0261		75.39			17.98	3.15			3.47		100
D-0262											
D-0263											
D-0264											

第24表　B区南西土壙墓群出土土器の型式比率（1）

土壙＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0267A					25.00	31.25				43.75	100
D-0267B											
D-0268		47.43		8.13	37.94					6.50	100
D-0269		32.86		67.14							100
D-0271											
D-0274											
D-0275		13.44			55.91				21.51	9.14	100
D-0276					11.11					88.89	100
D-0277A		35.62			17.56				3.05	43.77	100
D-0277B					100.00						100
D-0281											
D-0290											
D-0291											

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木４式など、中期後～後期前は加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式を示す。

第25表　Ｂ区南西土壙墓群出土土器の型式比率（２）

土壙墓群＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D区南東群		2064		738	1597			15	410		4824
D区中央群		1845		1214	6672			12	385	170	10298
D区南群		428		274	599	145	154				1600
B区南群		2262	26	224	10652	35		8		49	13256
B区北群	90	4458	2525	2295	4433			18	322	1995	16136
B区南西群		1901		244	2642	30			63	359	5239

第26表　土壙墓群出土土器の型式別重量

土壙墓群＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D区南東群		42.79		15.30	33.11			0.31	8.50		100
D区中央群		17.92		11.79	64.79			0.12	3.74	1.65	100
D区南群		26.75		17.13	37.44	9.06	9.63				100
B区南群		17.06	0.20	1.69	80.36	0.26		0.06		0.37	100
B区北群	0.56	27.63	15.65	14.22	27.47			0.11	2.00	12.36	100
B区南西群		36.29		4.66	50.43	0.57			1.20	6.85	100

27表　土壙墓群出土土器の型式比率

土壙墓群＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D区南東群		410									410
D区南群		260									260
D区中央群		640		305	4670						5615
D区中央群(2)		640		305	977						1922
B区北群				1680	2302						3982
B区南群					8999						8999
B区南西群					1750						1750

＊但し、D区中央群（2）は大形深鉢を除いた場合

第28表　土壙墓群出土下部施設・副葬品による型式別重量

土壙墓群＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D区南東群		100.00									100
D区南群		100.00									100
D区中央群		11.40		5.43	83.17						100
D区中央群(2)		33.30		15.87	50.83						100
B区北群				42.19	57.81						100
B区南群					100.00						100
B区南西群					100.00						100

＊但し、D区中央群（2）は大形深鉢を除いた場合

第29表　土壙墓群出土下部施設・副葬品による型式比率

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木4式など、中期後～後期前は加曽利E式、称名寺式、堀之内式を示す。

土壙墓群＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D区南東群D-1040		240									240
D区南東群D-1062		170									170
D区中央群D-0936					202						202
D区中央群D-0941					775						775
D区中央群D-0951				305							305
D区中央群D-0973		360									360
D区中央群D-0989		280									280
D区中央群D-0944					3,693						3693
D区南　群D-0999		260									260
B区南　群D-0337B					2,490						2490
B区南　群D-0349					1,000						1000
B区南　群D-0351A					450						450
B区南　群D-0352A					2,126						2126
B区南　群D-0366A					1,133						1133
B区南　群D-0372					485						485
B区南　群D-0377A					500						500
B区南　群D-0377B					815						815
B区北　群D-0357B					2,302						2302
B区北　群D-0362				1,680							1680
B区南西群D-0277B					1,750						1750

第30表　土壙墓群出土下部施設・副葬品による型式別重量

土壙墓群＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D区南東群D-1040		100.00									100
D区南東群D-1062		100.00									100
D区中央群D-0936					100.00						100
D区中央群D-0941					100.00						100
D区中央群D-0951				100.00							100
D区中央群D-0973		100.00									100
D区中央群D-0989		100.00									100
D区中央群D-0944					100.00						100
D区南　群D-0999		100.00									100
B区南　群D-0337B					100.00						100
B区南　群D-0349					100.00						100
B区南　群D-0351A					100.00						100
B区南　群D-0352A					100.00						100
B区南　群D-0366A					100.00						100
B区南　群D-0372					100.00						100
B区南　群D-0377A					100.00						100
B区南　群D-0377B					100.00						100
B区北　群D-0357B					100.00						100
B区北　群D-0362				100.00							100
B区南西群D-0277B					100.00						100

第31表　土壙墓群出土下部施設・副葬品による型式比率

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木４式など、中期後～後期前は加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式を示す。

土壙＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0122	0	0									0
D-0136	0	42							114		156
D-0141	0	0									0
D-0158	0	964			17			25		12	1,018
D-0199	20	1,120			81					165	1,386
D-0217	0	34			47						81
D-0240	0	397		285	1,694						2,376
D-0315	0		575		29						604
D-0415	0										0
D-0447	0	252		12						200	464
D-0693	0										0
D-0730	0	140				10		100	10	126	386
D-0800	0			193	1,159						1,352
D-0824	0										0
D-0864	0				446						446
D-0925	0										0
D-1060	0										0
D-1082	0				46						46
D-1086	0	43		37	17						97
D-1091	0			43	97	157			75	22	394
D-1092	0	176		265							441
D-1093	0	140		119	988	7			3,798	531	5,583
D-1096	0	731			82						813
D-1100	0				66						66
D-1105	0	482									482
D-1115	0	56									56
D-1116	0	156									156
D-1126	0	710		100	717			1,675		409	3,611

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木４式など、中期後～後期前は加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式を示す。

第32表　単独土壙墓出土土器の型式別重量

土壙＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0122											
D-0136		26.92							73.08		100
D-0141											
D-0158		94.70			1.67			2.46		1.18	100
D-0199	1.44	80.81			5.84					11.90	100
D-0217		41.98			58.02						100
D-0240		16.71		11.99	71.30						100
D-0315			95.20		4.80						100
D-0415											
D-0447		54.31		2.59						43.10	100
D-0693											
D-0730		36.27				2.59		25.91	2.59	32.64	100
D-0800				14.28	85.72						100
D-0824											
D-0864					100.00						100
D-0925											
D-1060											
D-1082					100.00						100
D-1086		44.33		38.14	17.53						100
D-1091				10.91	24.62	39.85			19.04	5.58	100
D-1092		39.91		60.09							100
D-1093		2.51		2.13	17.70	0.13			68.03	9.51	100
D-1096		89.91			10.09						100
D-1100					100.00						100
D-1105		100.00									100
D-1115		100.00									100
D-1116		100.00									100
D-1126		19.66		2.77	19.86			46.39		11.33	100

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木４式など、中期後～後期前は加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式を示す。

第33表　単独土壙墓出土土器の型式比率

［土坑出土の土器］（遺物図版編151図～161図）

土坑出土のものは有尾式の１段階から諸磯ｂ式、諸磯ｃ式、十三菩提式など前期末葉まで見られた。

第151図１～４・６～15は有尾式である。爪形文とそれに伴う羽状縄文を菱形に施文したものである（AR－６：１・４・７・14、ZC－１：２・６・10・12)。５は諸磯ｂ式の波状沈線文である（MRb－１)。８は爪形文を菱形に施文し、その中に渦巻きの文様を充填している（AR－３)。11・15・17は爪形文を山形に施文している（AR－４)。９・13は菱形になるように羽状縄文を使っている（ZC－２：２・16)。18～25は十三菩提式の一群である（JS)。18～20・25は縄文地文に結節浮線を施文している。口縁部文様帯には、沈線で斜線を引き山形や矢羽状に施文している。21は沈線で横位に文様を区画し、上部に沈線で鋸歯状の文様を描いている。24は沈線間に三角の印刻を持つ。

第152図１～６・９～11・14～16は有尾式である。爪形文を施文するもの（AR－４：３・10・11、AR－６：１：９・15・16、AR－９：６）と、縄文施文のものがある（ZC－２：４・５)。13・20は黒浜式で爪形文や平行沈線文を施文している（KR－２：20、KR－６：13)。17・21は同じ土坑出土の縄文施文である(ZK－１)。21は縄文に結節を持つことから諸磯ａ式と思われる。１は諸磯ｂ式の幅広の爪形文である。12・18は諸磯ｂ式の浮線文である（MRb－７)。７・８は十三菩提式（JS)、19は波状粘土紐がみられる大木５式である（DI)。

第153図３・４・７は有尾式で縄文を施文し（ZC－１・４：７、ZC－２：３)、20・22は爪形文と平行沈線文を施文している（AR－６：20、AR－９：24)。５・６・８・10は黒浜式で爪形文と平行沈線文、コンパス文を施文している（KR－１：５・６、KR－６：８・10)。16・17・24は諸磯ａ式で、16は円管刺突を縦位に施文し、平行沈線文で肋骨文を描き(MRa－１)、17は平行沈線文で木葉文を描く。諸磯ｂ式初頭にまでかかるものである(MRa－２)。24は縄文施文に円管刺突がみられる(MRa－６)。１・２・７・９・11～15・19・21・23・25・25は諸磯ｂ式である。25は平行沈線文で横位に文様を区画した中に波状の平行沈線文が施文され（MRb－１)、21は口縁部に格子目文を持つ（MRb－３)。９・19は浮線文である（MRb－６)。

第154図３・５は有尾式で爪形文を施文する（AR－４)。４・６・９・19は黒浜式で４・19は沈線文で乱雑に文様を描き（KR－５)、６はコンパス文（AR－１)、19は爪形文を施文する（AR－６)。２・８・10・12・16・18・20～23は諸磯ａ式である。幅狭の半截竹管による爪形文を施文するもの（MRa－４：２・10・18・20)、幅狭の平行沈線文で肋骨文を描くもの（MRa－１：12・22・23）がみられる。21は縄文施文に円管刺突を縦位に施文している（MRa－６)。１・13・17・26・27・28は諸磯ｂ式で、28の縄文施文以外は、幅広の半截竹管を使用して文様を施文している(MRb－１：27、MRb－２：１、７、MRb－４：13・26)。

第155図１～４・11～13・25～28は有尾式で、２・11・26は爪形文が施文される(AR－２：11、AR－４：26、AR－６：２)。６・18は黒浜式でコンパス文、爪形文が施文される（KR－１：６、KR－６：18)。５・９・14・17・23は諸磯ａ式である。５・23は木葉文（MRa－４)、14は爪形文と縦位に円管刺突を施文している(MRa－４)。９は幅狭の半截竹管で入組文を描き(MRa－３)、16は口縁に沿って幅狭の爪形文が施文される（MRa－４)。８・10・15・16・20～22・24は諸磯ｂ式である（MRb－１：７・10・16、MRb－４：８・21・22、MRb－６：20)。

第156図５・７・８・10・11・13・14・16～18・20は繊維を含む有尾式と黒浜式の一群である（AR－６：７・14、AR－９：５・11・20、ZC－２：10・13、ZC－３：８・18)。縄文施文が多いが、16はコンパス

文（KR－1）、17は沈線で乱雑に施文した黒浜式である（KR－5）。1～4・6・9・12・15・21～24は諸磯b式で、3・21・22は、幅広の爪形文で木葉文の変化した文様を描く（MRb－4）。11・23は横位に平行沈文線、1・24は浮線を施文する（MRb－6：24、MRb－7：1、MRb－11：11・23）。

第157図7・11～16・18～24・27～30・13～24・27～30は有尾式と黒浜式の一群である。縄文施文のものが多い（ZC－1：7・24、ZC－2：11・12・21・22・27・30、ZC－3：13）。18・20は黒浜式でコンパス文を施文する（KR－1）。有尾式は爪形文、平行沈線文による施文がみられるほかに（AR－6：14・28・29、AR－9：15・16・19）、櫛歯状工具による施文もみられる（AR－1：23）。1～6・8～10・17・25・32は諸磯b式である。浮線文の資料が多く（MRb－6：1～5・32）、3は顔面表現型の獣面把手で、4は獣面把手から変化して突起と顔の輪郭が付けられたものである（MRb－8）。26は諸磯a式、31は諸磯c式である（MRa－4：26、MRc－1：31）

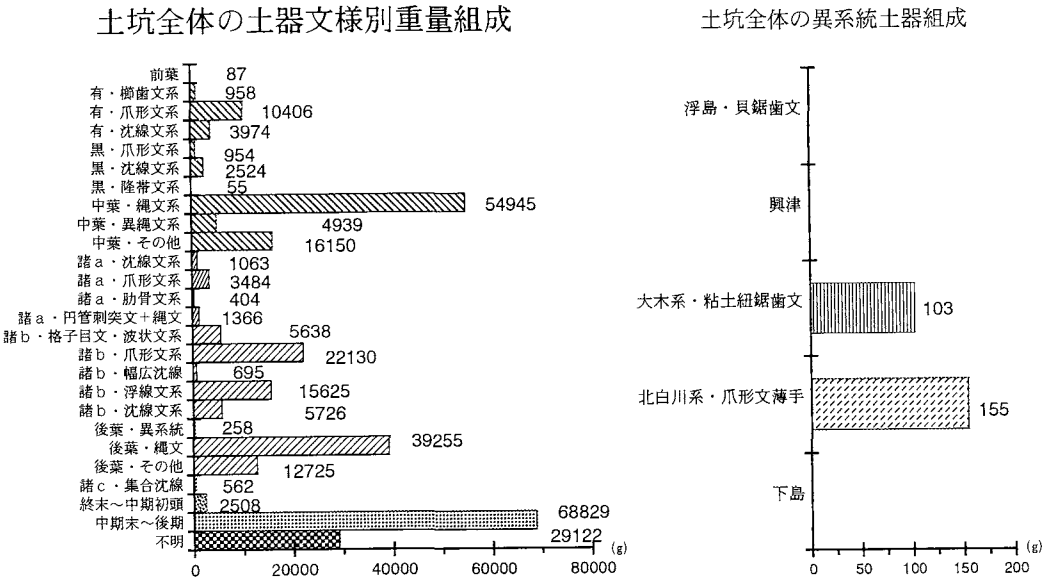
第158図2・3・8・10・12・15は有尾式である（AR－6：10、ZC－3：2、ZC－5：8）。12・15は櫛歯状工具により菱形・山形の文様が施文される（AR－1）。6は口唇部に突起がつく黒浜式である（KR－6）。29・34は諸磯a式で幅狭の爪形文が施文される（MRa－4）。1・4～7・9・11・13・14・18～22・24～27・30～33は諸磯b式である。幅広の爪形文（MRb－4：9・18・22・24・25・27・33）、浮線文（MRb－6：4・6・13・19・21・26・31）、円管刺突を加える波状文がみられる（MRb－2）。16は大木5式で地文に平行沈線文が施文され、鋸歯状の粘土紐が貼付される（DI）。28は他のものと比較すると器壁が薄く硬質なことから北白川下層IIb式である（KS－2）。

第159図4・15・16は黒浜式で縄文施文に幅狭の爪形文、平行沈線を施文する（KR－2：4、KR－6：15・16）。7・18・19・28は幅狭の爪形文を施文する諸磯a式である（MRa－4）。5・6・8～11・14・24～27は諸磯b式で、6・14・25・27は幅広の爪形文（MRb－4）、9・11・24は浮線文（MR－b－6）、10は幅広の平行沈線を施文する（MRb－10）。9は格子目文、26は円管刺突を加える波状文である（MRb－2、MRb－3）。1～3・24は前期末葉で口縁部や沈線間に三角印刻を持ち、口唇部が内側に肥厚するものと、縄文施文に結節浮線を持つものがある（JS）。12は縄文施文に鋸歯状粘土紐を貼付する大木5式（DI）、13は結節浮線で文様を構成する下島式（SJ）、17・20～22は中期初頭の五領ヶ台式である（GR）。

第160図12・15・18・19・22・23・26～29は繊維を含む黒浜式、有尾式である。18・19・26は黒浜式で爪形文やコンパス文を施文している（KR－1：26、KR－2：19、KR－6：18）。3～10は同一の土坑出土である。3・5・7は幅狭の爪形文で木葉文が施文される（MRa－4）。6・9・10は波状文を施文するもので、諸磯a～諸磯b式に相当する（MRb－1：10、MRb－2：6・9）。2は諸磯c式で棒状貼付文を持つ（MRc－2）。14は前期末葉で三角印刻を持つ（JS）。

第161図10は関山式でコンパス文を描く（SY2－1）。7・8・18・24は有尾式で、櫛歯状工具で刺突したもの（AR－1：7・18・24）や、8のように櫛歯状工具による沈線で菱形の交点に円形の文様を描いたものがある。16・25は黒浜式でコンパス文が施文される（KR－1）。12は円管刺突と幅狭の爪形文を施文する諸磯a式である（MRa－4）。2～6・11・13～15・17・19～23・26は諸磯b式である。2・22は獣面把手（MRb－8）、11・15は浮線文（MRb－6）、20・21・26は幅広の爪形文を施文する（MRb－4）。27は地文に平行沈線を引き鋸歯状に粘土紐を貼付した大木5式である（DI）。

（関根慎二）



第30図　土坑全体の土器文様別重量組成

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0001		965			9						974
D-0002		528									528
D-0003		696									696
D-0004		221			203					18	442
D-0005		232									232
D-0006		164									164
D-0019		1,094									1,094
D-0020		68		87						203	358
D-0021										158	158
D-0027		321									321
D-0028		183			8						191
D-0029		307			27						334
D-0034		286									286
D-0035		35									35
D-0047		323									323
D-0048		113			12						125
D-0050		436									436
D-0051		647									647
D-0052		149									149
D-0053		317		41				412			770
D-0054		46								15	61
D-0076		142									142
D-0077		35									35
D-0078		102									102
D-0080		266									266
D-0081		355									355
D-0084		638									638
D-0085		277									277
D-0086		606									606
D-0089		61			31			66			158
D-0090		107			43			50			200
D-0092		13			6						19
D-0104		24									24
D-0105		160								259	419
D-0107		224									224
D-0109		92									92
D-0113		102									102
D-0114		174			19						193
D-0115		56									56
D-0129		51			21						72

第34表　土坑出土土器の型式別重量（1）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0137		219									219
D-0138		54									54
D-0143		47									47
D-0144		65									65
D-0147		444									444
D-0148		142									142
D-0149		42									42
D-0150		31		13							44
D-0151		268									268
D-0153		255									255
D-0155		99									99
D-0157		957									957
D-0164					23						23
D-0168					13			23			36
D-0173		10			35					14	59
D-0174		159			895						1,054
D-0176		929			24			35			988
D-0183		505		163	36						704
D-0186				5	371					56	432
D-0192		2,195	1,227		30					298	3,750
D-0195		151									151
D-0196		216	2,466		486					409	3,577
D-0197		182									182
D-0198		528			1,129						1,657
D-0200		13			63						76
D-0201		380									380
D-0202			118	60	131						309
D-0204		7			34						41
D-0205		45			91						136
D-0207		53			79						132
D-0208		251		183							434
D-0209					22					44	66
D-0211		128		479	1,156					212	1,975
D-0214		352		74	382						808
D-0215		56		66	153						275
D-0218		2,081		243	4,072					41	6,437
D-0219		359		338	879						1,576
D-0220		969		12	82						1,063
D-0221		92			19						111
D-0222			378								378

第35表　土坑出土土器の型式別重量（2）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0224		27			22						49
D-0226		602									602
D-0229		1,278	339		11					30	1,658
D-0230		891		126	33						1,050
D-0231		33									33
D-0234		285		192	57						534
D-0235		194		269	376						839
D-0236		46		68	316						430
D-0238		271		115	198						584
D-0239			236	30	392						658
D-0241			50		26						76
D-0242		317			171						488
D-0243		47									47
D-0244		40			57						97
D-0245		32	22								54
D-0247		104			1,138						1,242
D-0248		9		1,336	109						1,454
D-0249		113	39								152
D-0251					10						10
D-0253		290	31	438	348						1,107
D-0270					55						55
D-0273		382			67						449
D-0280		8			170						178
D-0282		38		77	283						398
D-0283		969			33						1,002
D-0286		185									185
D-0287		29			8						37
D-0288		474	146	490	819						1,929
D-0293		87			56						143
D-0294		448			11				19		478
D-0298		877									877
D-0299		1,264		445	203						1,912
D-0301		504	174	143	116				18		955
D-0302		1,112		32	43						1,187
D-0303					29				30		59
D-0306		50			98						148
D-0307		370		78	706					265	1,419
D-0308				18	18						36
D-0310		3,575									3,575
D-0311		86			26						112

第36表　土坑出土土器の型式別重量（3）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0312		383			20						403
D-0317		338									338
D-0327		27	31		78					38	174
D-0328		618			10						628
D-0329		52		525							577
D-0331		173		48	887					46	1,154
D-0332		187		121							308
D-0363		391									391
D-0380		135			70						205
D-0381		165			20						185
D-0384		60			60						120
D-0385		3,530		20	40						3,590
D-0386		77			103						180
D-0387		55									55
D-0388		80									80
D-0389		55									55
D-0391		633	267								900
D-0396	20	1,856	854		35						2,765
D-0397		35									35
D-0402		27		5	10			40			82
D-0404		150		39	231						420
D-0406		200		30	240						470
D-0407		310			255			180			745
D-0408		290			1,060					75	1,425
D-0409				19	146					130	295
D-0411		1,020		56	6,054					665	7,795
D-0412		34			207						241
D-0418		101			107					21	229
D-0422		290		23	642			10		105	1,070
D-0429		15			18						33
D-0431		4			88					18	110
D-0432		22			96					14	132
D-0436		535		11							546
D-0437		1,025								93	1,118
D-0438		15								12	27
D-0439		255								140	395
D-0443		185			127					210	522
D-0444		131		199						145	475
D-0445		224	258		50					395	927
D-0446		822			47						869

第37表　土坑出土土器の型式別重量（4）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0448		1,330			31					361	1,722
D-0455		107		53						327	487
D-0457		1,866			20					416	2,302
D-0458		344			49					831	1,224
D-0463		68			35						103
D-0465		98									98
D-0471					28			13			41
D-0472		175		92	102						369
D-0474		26			23	20					69
D-0479		947			23						970
D-0484		17		66	254					29	366
D-0487		36			32						68
D-0488		11		43	13					48	115
D-0496		48			88						136
D-0499		36			52						88
D-0500		509		75	37					64	685
D-0502			90		23						113
D-0503		26			22						48
D-0504		50			36	18					104
D-0506					140	32				8	180
D-0507					65						65
D-0508		46			50						96
D-0509				47	26						73
D-0511		26			60		10			300	396
D-0514		322			33						355
D-0517					35						35
D-0518				7						10	17
D-0524		518		17	444						979
D-0527		33			32						65
D-0531		117								205	322
D-0539		15			305						320
D-0540					10						10
D-0569					100			150			250
D-0571				90	10						100
D-0580				17	12						29
D-0582		55			85						140
D-0583		25		33	187						245
D-0584		95		16	254						365
D-0586				63	1,058					330	1,451
D-0589		50			55						105

第38表　土坑出土土器の型式別重量（5）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0592		5		20	40						65
D-0597				85							85
D-0600		60			170						230
D-0602					60						60
D-0603		235			182					10	427
D-0607		90			70						160
D-0613		47			295						342
D-0618		10			140						150
D-0619		126		20	297					135	578
D-0620		75		60	605						740
D-0622		40		60							100
D-0623					325						325
D-0627					445						445
D-0628		50			10						60
D-0631		97	78		75					370	620
D-0632					150						150
D-0637		345			35						380
D-0640					35						35
D-0641		15	68		62						145
D-0647		250		128	1,747					558	2,683
D-0648					75						75
D-0649		10			40						50
D-0650				116	784					78	978
D-0651				94	101	25					220
D-0652					110						110
D-0653					115						115
D-0656					80						80
D-0657		20			15						35
D-0658					15						15
D-0659				32	268						300
D-0660		85			25						110
D-0661		730			70						800
D-0665		35									35
D-0666					30			20			50
D-0667					30						30
D-0671		16									16
D-0673		10			50						60
D-0674					55						55
D-0678		10		15							25
D-0679			465	400						165	1,030

第39表　土坑出土土器の型式別重量（6）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0684		38			265			230			533
D-0686		260		47	108						415
D-0687		80		40	160						280
D-0689				272	1,188						1,460
D-0692		405		12	6,963			30		306	7,716
D-0698					11						11
D-0701				31							31
D-0716					10	45		10			65
D-0718		20									20
D-0722		25			20						45
D-0724					15						15
D-0729		55			3						58
D-0731					30						30
D-0733		25									25
D-0734		110			45						155
D-0735		50			70						120
D-0740		70								220	290
D-0750		40			20						60
D-0751		35			5						40
D-0755					10			40			50
D-0759					70						70
D-0762				46							46
D-0766		50									50
D-0767					30						30
D-0768		30			20						50
D-0770				60							60
D-0772		170			120					70	360
D-0774		42									42
D-0775					15						15
D-0778		70		14	946						1,030
D-0783								7			7
D-0790		20									20
D-0797		30			20	20					70
D-0799		90			20			15			125
D-0801			100		50						150
D-0807		35			220						255
D-0808		18									18
D-0815			350								350
D-0817		30									30

第40表　土坑出土土器の型式別重量（7）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0820		385									385
D-0821		10								25	35
D-0822		455								355	810
D-0825		26									26
D-0827					20						20
D-0828		37									37
D-0831					16						16
D-0832		30									30
D-0837		60			50			8			118
D-0838			760								760
D-0839		305								10	315
D-0858										50	50
D-0865		210									210
D-0866		65			116						181
D-0867		150									150
D-0869		120			25					10	155
D-0871		15			55			20		37	127
D-0882		45								940	985
D-0883		35			455						490
D-0884		5		32	33					45	115
D-0885				175	114						289
D-0901					15	15					30
D-0915		65			55			228		55	403
D-0916		90			40						130
D-0917		135			50						185
D-0918		65									65
D-0921								30			30
D-0930		35			35						70
D-0963		45		99	1,958						2,102
D-0976					60						60
D-0978		60									60
D-1000		541	135	95	165						936
D-1001	37	70								445	552
D-1013		65			130						195
D-1022		250									250
D-1024		20		12	63					30	125
D-1026		20		78	272					20	390
D-1035		105		397	453	25				80	1,060
D-1058			155	56	683	10				150	1,054
D-1059		100			30						130

第41表　土坑出土土器の型式別重量（8）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-1070				7	49						56
D-1072		772									772
D-1077		81	70		23						174
D-1078		154		293	1,098						1,545
D-1079		846									846
D-1080		197									197
D-1081		267									267
D-1083		47		318						100	465
D-1084					639						639
D-1085		76			31					194	301
D-1087					1,230					28	1,258
D-1090		39			60						99
D-1098		117			163						280
D-1099		524		172						51	747
D-1102				17	53						70
D-1104		74		39	182						295
D-1108		615	313								928
D-1109		13			135						148
D-1110		75			206						281
D-1111		25			64						89
D-1113					49	12					61
D-1114					173						173
D-1119		33					28				61
D-1122		28		26	53						107
D-1124	41				18						59

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木4式など、中期後～後期前は加曽利E式、称名寺式、堀之内式を示す。

第42表　土坑出土土器の型式別重量（9）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0001		99.08			0.92						100
D-0002		100.00									100
D-0003		100.00									100
D-0004		50.00			45.93					4.07	100
D-0005		100.00									100
D-0006		100.00									100
D-0019		100.00									100
D-0020		18.99		24.30						56.70	100
D-0021										100.00	100
D-0027		100.00									100
D-0028		95.81			4.19						100
D-0029		91.92			8.08						100
D-0034		100.00									100
D-0035		100.00									100
D-0047		100.00									100
D-0048		90.40			9.60						100
D-0050		100.00									100
D-0051		100.00									100
D-0052		100.00									100
D-0053		41.17		5.32				53.51			100
D-0054		75.41								24.59	100
D-0076		100.00									100
D-0077		100.00									100
D-0078		100.00									100
D-0080		100.00									100
D-0081		100.00									100
D-0084		100.00									100
D-0085		100.00									100
D-0086		100.00									100
D-0089		38.61			19.62			41.77			100
D-0090		53.50			21.50			25.00			100
D-0092		68.42			31.58						100
D-0104		100.00									100
D-0105		38.19								61.81	100
D-0107		100.00									100
D-0109		100.00									100
D-0113		100.00									100
D-0114		90.16			9.84						100
D-0115		100.00									100
D-0129		70.83			29.17						100

第43表　土坑出土土器の型式比率（1）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0137		100.00									100
D-0138		100.00									100
D-0143		100.00									100
D-0144		100.00									100
D-0147		100.00									100
D-0148		100.00									100
D-0149		100.00									100
D-0150		70.45		29.55							100
D-0151		100.00									100
D-0153		100.00									100
D-0155		100.00									100
D-0157		100.00									100
D-0164					100.00						100
D-0168					36.11			63.89			100
D-0173		16.95			59.32					23.73	100
D-0174		15.09			84.91						100
D-0176		94.03			2.43			3.54			100
D-0183		71.73		23.15	5.11						100
D-0186				1.16	85.88					12.96	100
D-0192		58.54	32.71		0.80					7.95	100
D-0195		100.00									100
D-0196		6.04	68.94		13.59					11.43	100
D-0197		100.00									100
D-0198		31.86			68.14						100
D-0200		17.11			82.89						100
D-0201		100.00									100
D-0202			38.19	19.42	42.39						100
D-0204		17.07			82.93						100
D-0205		33.09			66.91						100
D-0207		40.15			59.85						100
D-0208		57.83		42.17							100
D-0209					33.33					66.67	100
D-0211		6.48		24.25	58.53					10.73	100
D-0214		43.56		9.16	47.28						100
D-0215		20.36		24.00	55.64						100
D-0218		32.33		3.78	63.26					0.64	100
D-0219		22.78		21.45	55.77						100
D-0220		91.16		1.13	7.71						100
D-0221		82.88			17.12						100
D-0222			100.00								100

第44表　土坑出土土器の型式比率（2）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0224		55.10			44.90						100
D-0226		100.00									100
D-0229		77.08	20.45		0.66					1.81	100
D-0230		84.86		12.00	3.14						100
D-0231		100.00									100
D-0234		53.37		35.96	10.67						100
D-0235		23.12		32.06	44.82						100
D-0236		10.70		15.81	73.49						100
D-0238		46.40		19.69	33.90						100
D-0239			35.87	4.56	59.57						100
D-0241			65.79		34.21						100
D-0242		64.96			35.04						100
D-0243		100.00									100
D-0244		41.24			58.76						100
D-0245		59.26	40.74								100
D-0247		8.37			91.63						100
D-0248		0.62		91.88	7.50						100
D-0249		74.34	25.66								100
D-0251					100.00						100
D-0253		26.20	2.80	39.57	31.44						100
D-0270					100.00						100
D-0273		85.08			14.92						100
D-0280		4.49			95.51						100
D-0282		9.55		19.35	71.11						100
D-0283		96.71			3.29						100
D-0286		100.00									100
D-0287		78.38			21.62						100
D-0288		24.57	7.57	25.40	42.46						100
D-0293		60.84			39.16						100
D-0294		93.72			2.30			3.97			100
D-0298		100.00									100
D-0299		66.11		23.27	10.62						100
D-0301		52.77	18.22	14.97	12.15			1.88			100
D-0302		93.68		2.70	3.62						100
D-0303					49.15			50.85			100
D-0306		33.78			66.22						100
D-0307		26.07		5.50	49.75					18.68	100
D-0308				50.00	50.00						100
D-0310		100.00									100
D-0311		76.79			23.21						100

第45表　土坑出土土器の型式比率（3）

土坑＼時期	関山II	有　尾	黒　浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不　明	合計(%)
D-0312		95.04			4.96						100
D-0317		100.00									100
D-0327		15.52	17.82		44.83					21.84	100
D-0328		98.41			1.59						100
D-0329		9.01		90.99							100
D-0331		14.99		4.16	76.86					3.99	100
D-0332		60.71		39.29							100
D-0363		100.00									100
D-0380		65.85			34.15						100
D-0381		89.19			10.81						100
D-0384		50.00			50.00						100
D-0385		98.33		0.56	1.11						100
D-0386		42.78			57.22						100
D-0387		100.00									100
D-0388		100.00									100
D-0389		100.00									100
D-0391		70.33	29.67								100
D-0396	0.72	67.12	30.89		1.27						100
D-0397		100.00									100
D-0402		32.93		6.10	12.20			48.78			100
D-0404		35.71		9.29	55.00						100
D-0406		42.55		6.38	51.06						100
D-0407		41.61			34.23			24.16			100
D-0408		20.35			74.39					5.26	100
D-0409				6.44	49.49					44.07	100
D-0411		13.09		0.72	77.67					8.53	100
D-0412		14.11			85.89						100
D-0418		44.10			46.72					9.17	100
D-0422		27.10		2.15	60.00			0.93		9.81	100
D-0429		45.45			54.55						100
D-0431		3.64			80.00					16.36	100
D-0432		16.67			72.73					10.61	100
D-0436		97.99		2.01							100
D-0437		91.68								8.32	100
D-0438		55.56								44.44	100
D-0439		64.56								35.44	100
D-0443		35.44			24.33					40.23	100
D-0444		27.58		41.89						30.53	100
D-0445		24.16	27.83		5.39					42.61	100
D-0446		94.59			5.41						100

第46表　土坑出土土器の型式比率（4）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0448		77.24			1.80					20.96	100
D-0455		21.97		10.88						67.15	100
D-0457		81.06			0.87					18.07	100
D-0458		28.10			4.00					67.89	100
D-0463		66.02			33.98						100
D-0465		100.00									100
D-0471					68.29			31.71			100
D-0472		47.43		24.93	27.64						100
D-0474		37.68			33.33	28.99					100
D-0479		97.63			2.37						100
D-0484		4.64		18.03	69.40					7.92	100
D-0487		52.94			47.06						100
D-0488		9.57		37.39	11.30					41.74	100
D-0496		35.29			64.71						100
D-0499		40.91			59.09						100
D-0500		74.31		10.95	5.40					9.34	100
D-0502			79.65		20.35						100
D-0503		54.17			45.83						100
D-0504		48.08			34.62	17.31					100
D-0506					77.78	17.78				4.44	100
D-0507					100.00						100
D-0508		47.92			52.08						100
D-0509				64.38	35.62						100
D-0511		6.57			15.15		2.53			75.76	100
D-0514		90.70			9.30						100
D-0517					100.00						100
D-0518				41.18						58.82	100
D-0524		52.91		1.74	45.35						100
D-0527		50.77			49.23						100
D-0531		36.34								63.66	100
D-0539		4.69			95.31						100
D-0540					100.00						100
D-0569					40.00			60.00			100
D-0571				90.00	10.00						100
D-0580				58.62	41.38						100
D-0582		39.29			60.71						100
D-0583		10.20		13.47	76.33						100
D-0584		26.03		4.38	69.59						100
D-0586				4.34	72.92					22.74	100
D-0589		47.62			52.38						100

第47表　土坑出土土器の型式比率（5）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0592		7.69		30.77	61.54						100
D-0597				100.00							100
D-0600		26.09			73.91						100
D-0602					100.00						100
D-0603		55.04			42.62					2.34	100
D-0607		56.25			43.75						100
D-0613		13.74			86.26						100
D-0618		6.67			93.33						100
D-0619		21.80		3.46	51.38					23.36	100
D-0620		10.14		8.11	81.76						100
D-0622		40.00		60.00							100
D-0623					100.00						100
D-0627					100.00						100
D-0628		83.33			16.67						100
D-0631		15.65	12.58		12.10					59.68	100
D-0632					100.00						100
D-0637		90.79			9.21						100
D-0640					100.00						100
D-0641		10.34	46.90		42.76						100
D-0647		9.32		4.77	65.11					20.80	100
D-0648					100.00						100
D-0649		20.00			80.00						100
D-0650				11.86	80.16					7.98	100
D-0651				42.73	45.91	11.36					100
D-0652					100.00						100
D-0653					100.00						100
D-0656					100.00						100
D-0657		57.14			42.86						100
D-0658					100.00						100
D-0659				10.67	89.33						100
D-0660		77.27			22.73						100
D-0661		91.25			8.75						100
D-0665		100.00									100
D-0666					60.00			40.00			100
D-0667					100.00						100
D-0671		100.00									100
D-0673		16.67			83.33						100
D-0674					100.00						100
D-0678		40.00		60.00							100
D-0679			45.15	38.83						16.02	100

第48表　土坑出土土器の型式比率（6）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0684		7.13			49.72			43.15			100
D-0686		62.65		11.33	26.02						100
D-0687		28.57		14.29	57.14						100
D-0689				18.63	81.37						100
D-0692		5.25		0.16	90.24			0.39		3.97	100
D-0698					100.00						100
D-0701				100.00							100
D-0716					15.38	69.23		15.38			100
D-0718		100.00									100
D-0722		55.56			44.44						100
D-0724					100.00						100
D-0729		94.83			5.17						100
D-0731					100.00						100
D-0733		100.00									100
D-0734		70.97			29.03						100
D-0735		41.67			58.33						100
D-0740		24.14								75.86	100
D-0750		66.67			33.33						100
D-0751		87.50			12.50						100
D-0755					20.00			80.00			100
D-0759					100.00						100
D-0762				100.00							100
D-0766		100.00									100
D-0767					100.00						100
D-0768		60.00			40.00						100
D-0770				100.00							100
D-0772		47.22			33.33					19.44	100
D-0774		100.00									100
D-0775					100.00						100
D-0778		6.80		1.36	91.84						100
D-0783								100.00			100
D-0790		100.00									100
D-0797		42.86			28.57	28.57					100
D-0799		72.00			16.00			12.00			100
D-0801			66.67		33.33						100
D-0807		13.73			86.27						100
D-0808		100.00									100
D-0815			100.00								100
D-0817		100.00									100

第49表　土坑出土土器の型式比率（7）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0820		100.00									100
D-0821		28.57								71.43	100
D-0822		56.17								43.83	100
D-0825		100.00									100
D-0827					100.00						100
D-0828		100.00									100
D-0831					100.00						100
D-0832		100.00									100
D-0837		50.85			42.37			6.78			100
D-0838			100.00								100
D-0839		96.83								3.17	100
D-0858										100.00	100
D-0865		100.00									100
D-0866		35.91			64.09						100
D-0867		100.00									100
D-0869		77.42			16.13					6.45	100
D-0871		11.81			43.31			15.75		29.13	100
D-0882		4.57								95.43	100
D-0883		7.14			92.86						100
D-0884		4.35		27.83	28.70					39.13	100
D-0885				60.55	39.45						100
D-0901					50.00	50.00					100
D-0915		16.13			13.65			56.58		13.65	100
D-0916		69.23			30.77						100
D-0917		72.97			27.03						100
D-0918		100.00									100
D-0921								100.00			100
D-0930		50.00			50.00						100
D-0963		2.14		4.71	93.15						100
D-0976					100.00						100
D-0978		100.00									100
D-1000		57.80	14.42	10.15	17.63						100
D-1001	6.70	12.68								80.62	100
D-1013		33.33			66.67						100
D-1022		100.00									100
D-1024		16.00		9.60	50.40					24.00	100
D-1026		5.13		20.00	69.74					5.13	100
D-1035		9.91		37.45	42.74	2.36				7.55	100
D-1058			14.71	5.31	64.80	0.95				14.23	100
D-1059		76.92			23.08						100

第50表　土坑出土土器の型式比率（8）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-1070				12.50	87.50						100
D-1072		100.00									100
D-1077		46.55	40.23		13.22						100
D-1078		9.97		18.96	71.07						100
D-1079		100.00									100
D-1080		100.00									100
D-1081		100.00									100
D-1083		10.11		68.39						21.51	100
D-1084					100.00						100
D-1085		25.25			10.30					64.45	100
D-1087					97.77					2.23	100
D-1090		39.39			60.61						100
D-1098		41.79			58.21						100
D-1099		70.15		23.03						6.83	100
D-1102				24.29	75.71						100
D-1104		25.08		13.22	61.69						100
D-1108		66.27	33.73								100
D-1109		8.78			91.22						100
D-1110		26.69			73.31						100
D-1111		28.09			71.91						100
D-1113					80.33	19.67					100
D-1114					100.00						100
D-1119		54.10					45.90				100
D-1122		26.17		24.30	49.53						100
D-1124	69.49				30.51						100

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木４式など、中期後～後期前は加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式を示す。

第51表　土坑出土土器の型式比率（９）

［竪穴状遺構出土の土器］（遺物図版編149図）

D－227からは１～４の諸磯ａ式の幅狭の爪形文も出土している。１・２は横位方向に幅狭の爪形文が施文されている（MRa－４）。３は平行沈線による肋骨文（MRa－１）、４は同じく平行沈線による木葉文が施文される（MRa－２）。５～18は諸磯ｂ式１段階～３段階である。５・６は平行沈線による波状文（MRb－１）、７は無文の有孔浅鉢、８～10は幅広の爪形文を施文する（MRb－４）。11は浮島II式で平行沈線で口縁部を菱形に施文し、爪形文で上下を区画する（UK）。13・17は平行沈線文である（MRb－10）。15・16・18は浮線文で、16には獣面が付けられる（MRb－６：15・18、MRb－８：16）。D－228からは幅狭、幅広の爪形文が出土している（MRa－４：19、MRb－４：20）。D－390からは21の有尾式で平行沈線で菱形に施文するもの（AR－７）、D－494からは22の諸磯ｂ式の獣面把手が出土している（MRb－８）。

［大形柱穴出土の土器］（遺物図版編150図下段）

D－284の１は有尾式で爪形文を施文する（AR－６）。４は諸磯ａ式で幅狭の爪形文がみられる（MRa－４）。D－873は諸磯ａ式の縄文施文や、諸磯ｃ式のボタン状貼付文が混在して出土している（ZK－１：７・８、MRc－２：10・11）。

（関根慎二）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0284・2層		92			73				344	39	548
D-0284・3層		35			36						71
D-0873		120		81	519	45			140	312	1,217

第52表　大形柱穴出土土器の型式別重量

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0284・2層		16.79			13.32				62.77	7.12	100
D-0284・3層		49.30			50.70						100
D-0873		9.86		6.66	42.65	3.70			11.50	25.64	100

第53表　大形柱穴出土土器の型式比率

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0154		53									53
D-0172											
D-0227・1層		464		28	4,890				1,490	667	7,539
D-0227		875	24	582	7,884					157	9,522
D-0228		143		21	158						322
D-0318		15									15
D-0390		1,075							60		1,135
D-0494		193			113				202		508

第54表　竪穴状遺構出土土器の型式別重量

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0154		100.00									100
D-0172											0
D-0227・1層		6.15		0.37	64.86				19.76	8.85	100
D-0227		9.19	0.25	6.11	82.80					1.65	100
D-0228		44.41		6.52	49.07						100
D-0318		100.00									100
D-0390		94.71							5.29		100
D-0494		37.99			22.24				39.76		100

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木4式など、中期後～後期前は加曽利E式、称名寺式、堀之内式を示す。

第55表　竪穴状遺構出土土器の型式比率

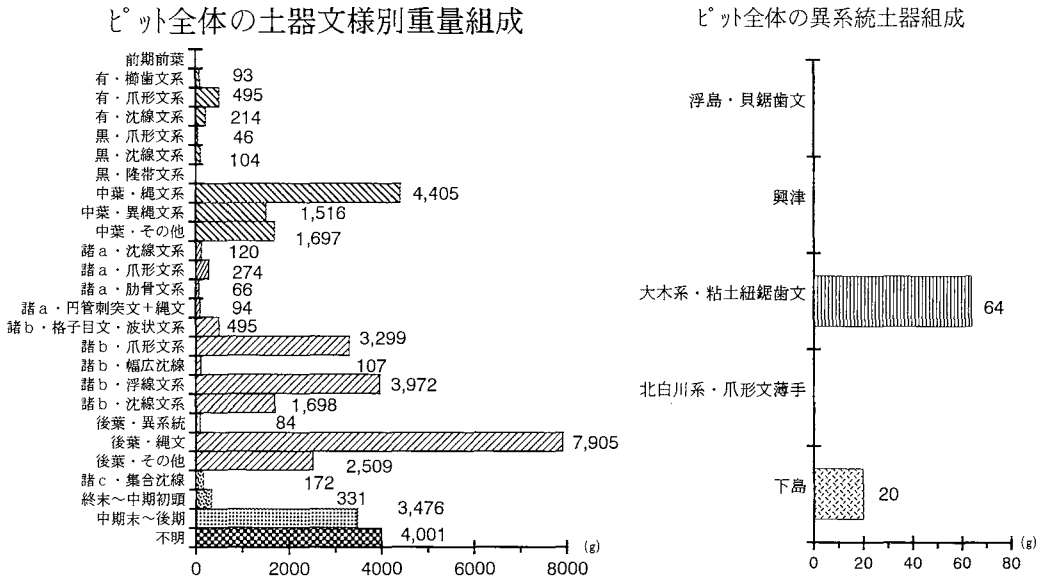
［ピット出土の土器］（遺物図版編162図上段）

4～6・9・12・16は繊維を含む黒浜式、有尾式である。12は平行沈線、16は爪形文を施文する黒浜式である（KR－2：12、KR－6：16）。1・2・7・8・11・17・18は諸磯b式で、幅広の爪形文（MRb－4：1・7・8）、波状沈線文（MRb－1：2）、浮線文（MRb－6：17）を施文する。13は諸磯b式で集合沈線で施文し、口縁部が靴先状になる（MRc－1）。14は口縁部文様帯に対弧と双円の文様が描かれる（SJ）。15は縄文地文に鋸歯状の粘土紐とボタン状貼付文を持つもので諸磯c式に伴う（DI）。

［柱穴群出土の土器］（遺物図版編162図下段）

19・21・22は諸磯a式で幅狭の半截竹管による爪形文や平行沈線、円管刺突を施文する（MRa－4：19・22、MRa－5：21）。27は諸磯b式で幅広の平行沈線を施文する（MRb－10）。23・26は集合沈線により文様を描く諸磯c式である（MRb－11：23、MRc－1：26）。

（関根慎二）



第31図　ピット全体の土器文様別重量組成

ピット＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
P-001		18									18
P-002		44									44
P-012		36									36
P-014					15						15
P-016		18									18
P-017		44									44
P-018					80						80
P-021		78									78
P-025		59			235						294
P-026			107		27						134
P-027					23						23
P-028		7			6						13
P-029		19			68						87
P-030		41		15	32						88
P-038		218						28			246
P-039					42						42
P-041		66			24					1	91
P-042		93			421						514
P-045				40	82						122
P-046			15		11						26
P-048										24	24
P-049					26						26
P-050		21			12					34	67
P-051					40						40
P-052					20					42	62
P-054				83							83
P-056										33	33
P-058					26						26
P-061		94								17	111
P-062		189			483					69	741
P-063		29			12						41
P-065					46						46
P-068					35						35
P-073		100		76							176
P-074		63			5						68
P-080		46			38						84
P-083		9			48						57
P-084		43			32						75
P-086		12			145						157
P-088										42	42
P-091		13			53					7	73
P-093					50						50

第56表　ピット出土土器の型式別重量（1）

ピット＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
P-095		31			12						43
P-098		14			22						36
P-099		42									42
P-102		22			35						57
P-110		65								17	82
P-111		86									86
P-113		41									41
P-115		25			11					70	106
P-116		23			34					37	94
P-120					31					11	42
P-121					53						53
P-124		48			47						95
P-125		10	86								96
P-127		15		13						22	50
P-128		37									37
P-130					7						7
P-132		5			7					46	58
P-136		72			79						151
P-139					96						96
P-151										175	175
P-152		40									40
P-153		74			47						121
P-154		28									28
P-157		35									35
P-159		29			92					34	155
P-164					69						69
P-165					47						47
P-172		35			11					17	63
P-178					12						12
P-179		11			20	10					41
P-181		16									16
P-185		14									14
P-186					38						38
P-188					32						32
P-189					11					30	41
P-190										12	12
P-191					17						17
P-194					123						123
P-196					28					14	42
P-198					9						9
P-200		15									15
P-221					21						21

第57表　ピット出土土器の型式別重量（2）

ピット＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
P-222		10			111						121
P-227		9			64						73
P-231		43			148						191
P-233					119						119
P-234					78						78
P-240		32			338						370
P-241					126			12			138
P-243					60						60
P-245					386						386
P-248		38			22						60
P-249					46					4	50
P-250		10			84						94
P-251		57			943						"1,000"
P-257					481						481
P-258					17						17
P-262					36						36
P-263					47					68	115
P-264		26			87					63	176
P-265					51			19			70
P-266					181			18			199
P-270				74	206		15			32	327
P-271					43						43
P-275					41						41
P-276					90					23	113
P-277		11			244						255
P-280		9									9
P-283		20			319						339
P-284										19	19
P-285		41			12			7			60
P-289				9	35					40	84
P-291				68							68
P-292		34			85						119
P-293		18		20	23						61
P-295		22			25						47
P-298					21						21
P-300					143						143
P-302		34			51						85
P-305					52						52
P-308					930						930
P-309		20			51						71
P-310					53						53
P-315										39	39

第58表　ピット出土土器の型式別重量（3）

ピット＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
P-318								12		14	26
P-319		13									13
P-321				13							13
P-323					9						9
P-329										25	25
P-330					26						26
P-332					18						18
P-335		91		10	76						177
P-336					22						22
P-341					84						84
P-342		12			51					2	65
P-343		47			7						54
P-350				16	49			15			80
P-352					9					29	38
P-353		19									19
P-355										19	19
P-358										7	7
P-359					16						16
P-360					235						235
P-369		107			364						471
P-370					878						878
P-371		32			19						51
P-372					11						11
P-373		52			13						65
P-375								10		40	50
P-376		27			27						54
P-377			254		32						286
P-378		85									85
P-379		22			132			24			178
P-382						20					20
P-383							43			31	74
P-384					74						74
P-385					10					56	66
P-389					12						12
P-395					9						9
P-396					26						26
P-400					37			25			62
P-411					26						26
P-412								10		118	128
P-414								16			16
P-416		120			32						152
P-420										42	42

第59表　ピット出土土器の型式別重量（4）

ピット＼時期	関山Ⅱ	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
P-425					26						26
P-427		13			68	22					103
P-431					274						274
P-432										41	41
P-433		71			273			70			414
P-435					21						21
P-439		34								24	58
P-444					16					19	35
P-448		12									12
P-450					59						59
P-452					41						41
P-453					35						35
P-455		107		70						320	497
P-456					18						18
P-458		83		131	247	30				390	881
P-459		297			81						378
P-462		25		13	16			13		14	81
P-463										32	32
P-466		18			17						35
P-469					41						41
P-470					25						25
P-472										15	15
P-473					25						25
P-475					159						159
P-476		21									21
P-477		51			206					19	276
P-480		22									22
P-481		115			145						260
P-482					10						10
P-487		399			37						436
P-488		23		73	24						120
P-493					4						4
P-497					202	10					212
P-498		29		66	64						159
P-499		22		70	179						271
P-500					237						237
P-501		230			306						536
P-503		66			97						163
P-511					11						11
P-522					44						44
P-525		11									11
P-530					46						46

第60表　ピット出土土器の型式別重量（5）

ピット＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
P-531					36						36
P-532		55								51	106
P-533				24	94						118
P-534					122					25	147
P-536					23						23
P-537										28	28
P-538					6						6
P-540					62						62
P-541					29						29
P-544		9			64						73
P-545					31						31
P-546					47						47
P-554					14	25					39
P-555					27						27
P-558					41						41
P-560		41			29						70
P-562					67						67
P-563		12			109			19		51	191
P-575					76						76
P-576		33									33
P-577					93						93
P-579		38			30						68
P-583		19			54						73
P-584				26	37						63
P-588		24			92						116
P-589					38						38
P-590					45					15	60
P-592					28						28
P-593		21			98					15	134
P-594										32	32
P-597					110		5			11	126
P-599		19			83	29					131
P-600		29			38						67
D-246		73		10	316						399
D-364		103									103
D-570					245						245
D-700					40						40
D-719		15			15						30
D-777					15						15
D-992		275			75						350

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木４式など、中期後～後期前は加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式を示す。

第61表　ピット出土土器の型式別重量（６）

ピット＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
P-001		100.00									100
P-002		100.00									100
P-012		100.00									100
P-014					100.00						100
P-016		100.00									100
P-017		100.00									100
P-018					100.00						100
P-021		100.00									100
P-025		20.07			79.93						100
P-026			79.85		20.15						100
P-027					100.00						100
P-028		53.85			46.15						100
P-029		21.84			78.16						100
P-030		46.59		17.05	36.36						100
P-038		88.62						11.38			100
P-039					100.00						100
P-041		51.97			18.90					29.13	100
P-042		18.09			81.91						100
P-045				32.79	67.21						100
P-046			57.69		42.31						100
P-048										100.00	100
P-049					100.00						100
P-050		31.34			17.91					50.75	100
P-051					100.00						100
P-052					32.26					67.74	100
P-054				100.00							100
P-056										100.00	100
P-058					100.00						100
P-061		84.68								15.32	100
P-062		25.51			65.18					9.31	100
P-063		70.73			29.27						100
P-065					100.00						100
P-068					100.00						100
P-073		56.82		43.18							100
P-074		92.65			7.35						100
P-080		54.76			45.24						100
P-083		15.79			84.21						100
P-084		57.33			42.67						100
P-086		7.64			92.36						100
P-088										100.00	100
P-091		17.81			72.60					9.59	100
P-093					100.00						100

第62表　ピット出土土器の型式比率（1）

ピット＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
P-095		72.09			27.91						100
P-098		38.89			61.11						100
P-099		100.00									100
P-102		38.60			61.40						100
P-110		79.27								20.73	100
P-111		100.00									100
P-113		100.00									100
P-115		23.58			10.38					66.04	100
P-116		24.47			36.17					39.36	100
P-120					73.81					26.19	100
P-121					100.00						100
P-124		50.53			49.47						100
P-125		10.42	89.58								100
P-127		30.00		26.00						44.00	100
P-128		100.00									100
P-130					100.00						100
P-132		8.62			12.07					79.31	100
P-136		47.68			52.32						100
P-139					100.00						100
P-151										100.00	100
P-152		100.00									100
P-153		61.16			38.84						100
P-154		100.00									100
P-157		100.00									100
P-159		18.71			59.35					21.94	100
P-164					100.00						100
P-165					100.00						100
P-172		55.56			17.46					26.98	100
P-178					100.00						100
P-179		26.83			48.78	24.39					100
P-181		100.00									100
P-185		100.00									100
P-186					100.00						100
P-188					100.00						100
P-189					26.83					73.17	100
P-190										100.00	100
P-191					100.00						100
P-194					100.00						100
P-196					66.67					33.33	100
P-198					100.00						100
P-200		100.00									100
P-221					100.00						100

第63表　ピット出土土器の型式比率（2）

ピット＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
P-222		8.26			91.74						100
P-227		12.33			87.67						100
P-231		22.51			77.49						100.00
P-233					100.00						100
P-234					100.00						100
P-240		8.65			91.35						100
P-241					91.30			8.70			100
P-243					100.00						100
P-245					100.00						100
P-248		63.33			36.67						100
P-249					92.00					8.00	100
P-250		10.64			89.36						100
P-251		5.70			94.30						100
P-257					100.00						100
P-258					100.00						100
P-262					100.00						100
P-263					40.87					59.13	100
P-264		14.77			49.43					35.80	100
P-265					72.86			27.14			100
P-266					90.95			9.05			100
P-270				22.63	63.00		4.59			9.79	100
P-271					100.00						100
P-275					100.00						100
P-276					79.65					20.35	100
P-277		4.31			95.69						100
P-280		100.00									100
P-283		5.90			94.10						100
P-284										100.00	100
P-285		68.33			20.00			11.67			100
P-289				10.71	41.67					47.62	100
P-291				100.00							100
P-292		28.57			71.43						100
P-293		29.51		32.79	37.70						100
P-295		46.81			53.19						100
P-298					100.00						100
P-300					100.00						100
P-302		40.00			60.00						100
P-305					100.00						100
P-308					100.00						100
P-309		28.17			71.83						100
P-310					100.00						100
P-315										100.00	100

第64表　ピット出土土器の型式比率（3）

ピット＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
P-318								46.15		53.85	100
P-319		100.00									100
P-321				100.00							100
P-323					100.00						100
P-329										100.00	100
P-330					100.00						100
P-332					100.00						100
P-335		51.41		5.65	42.94						100
P-336					100.00						100
P-341					100.00						100
P-342		18.46			78.46					3.08	100
P-343		87.04			12.96						100
P-350				20.00	61.25			18.75			100
P-352					23.68					76.32	100
P-353		100.00									100
P-355										100.00	100
P-358										100.00	100
P-359					100.00						100
P-360					100.00						100
P-369		22.72			77.28						100
P-370					100.00						100
P-371		62.75			37.25						100
P-372					100.00						100
P-373		80.00			20.00						100
P-375								20.00		80.00	100
P-376		50.00			50.00						100
P-377			88.81		11.19						100
P-378		100.00									100
P-379		12.36			74.16			13.48			100
P-382						100.00					100
P-383							58.11			41.89	100
P-384					100.00						100
P-385					15.15					84.85	100
P-389					100.00						100
P-395					100.00						100
P-396					100.00						100
P-400					59.68			40.32			100
P-411					100.00						100
P-412								7.81		92.19	100
P-414								100.00			100
P-416		78.95			21.05						100
P-420										100.00	100

第65表　ピット出土土器の型式比率（4）

ピット＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
P-425					100.00						100
P-427		12.62			66.02	21.36					100
P-431					100.00						100
P-432										100.00	100
P-433		17.15			65.94			16.91			100
P-435					100.00						100
P-439		58.62								41.38	100
P-444					45.71					54.29	100
P-448		100.00									100
P-450					100.00						100
P-452					100.00						100
P-453					100.00						100
P-455		21.53		14.08						64.39	100
P-456					100.00						100
P-458		9.42		14.87	28.04	3.41				44.27	100
P-459		78.57			21.43						100
P-462		30.86		16.05	19.75			16.05		17.28	100
P-463										100.00	100
P-466		51.43			48.57						100
P-469					100.00						100
P-470					100.00						100
P-472										100.00	100
P-473					100.00						100
P-475					100.00						100
P-476		100.00									100
P-477		18.48			74.64					6.88	100
P-480		100.00									100
P-481		44.23			55.77						100
P-482					100.00						100
P-487		91.51			8.49						100
P-488		19.17		60.83	20.00						100
P-493					100.00						100
P-497					95.28	4.72					100
P-498		18.24		41.51	40.25						100
P-499		8.12		25.83	66.05						100
P-500					100.00						100
P-501		42.91			57.09						100
P-503		40.49			59.51						100
P-511					100.00						100
P-522					100.00						100
P-525		100.00									100
P-530					100.00						100

第66表　ピット出土土器の型式比率（5）

ピット＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
P-531					100.00						100
P-532		51.89								48.11	100
P-533				20.34	79.66						100
P-534					82.99					17.01	100
P-536					100.00						100
P-537										100.00	100
P-538					100.00						100
P-540					100.00						100
P-541					100.00						100
P-544		12.33			87.67						100
P-545					100.00						100
P-546					100.00						100
P-554					35.90	64.10					100
P-555					100.00						100
P-558					100.00						100
P-560		58.57			41.43						100
P-562					100.00						100
P-563		6.28			57.07			9.95		26.70	100
P-575					100.00						100
P-576		100.00									100
P-577					100.00						100
P-579		55.88			44.12						100
P-583		26.03			73.97						100
P-584				41.27	58.73						100
P-588		20.69			79.31						100
P-589					100.00						100
P-590					75.00					25.00	100
P-592					100.00						100
P-593		15.67			73.13					11.19	100
P-594										100.00	100
P-597					87.30		3.97			8.73	100
P-599		14.50			63.36	22.14					100
P-600		43.28			56.72						100
D-246		18.30		2.51	79.20						100.00
D-364		100.00									100.00
D-570					100.00						100.00
D-700					100.00						100.00
D-719		50.00			50.00						100.00
D-777					100.00						100.00
D-992		78.57			21.43						100.00

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木４式など、中期後～後期前は加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式を示す。

第67表　ピット出土土器の型式比率（６）

［調査区出土の土器］（遺物図版編163図～165図）

第163図１は櫛歯状工具を口縁部に縦位に施文し、それを横にずらして施文する神ノ木式である。２～４は櫛歯状工具を縦位や菱形に刺突する有尾式である（AR－１）。５～７は有尾式で爪形文を施文する（AR－３：５、AR－６：６・７）。８～14・17は黒浜式である。縄文地文の上に平行沈線で菱形に文様を描くもの（KR－２：８・９）、コンパス文を描くもの（KR－１：10～13・17）、爪形文で文様を描くものがある（KR－６：14）。15・16・18は前期中葉の縄文施文で、15は平行沈線が施文される（AR－９：15、ZC－２：16・18）

第164図１～３は交点に円管刺突を持つ肋骨文の諸磯ａ式である（MRa－１）。４は格子目文で諸磯ｂ式に伴う（MRb－３）。５は幅狭の爪形文による木葉文で諸磯ａ式である（MRa－４）。６・７は同一個体で幅広の爪形文による木葉文を施文し、文様間を浮線で区画している（MRb－５）。８・10は諸磯ｂ式で幅広の爪形文を施文する（MRb－４）。９は口縁部に浮線を伴う浅鉢で赤色塗彩がみられる。12・14は諸磯ｂ式の浮線文である（MRb－６）。13・15は諸磯ｂ式で平行沈線を施文する（MRb－９：15、MRb－10：13）。17・18は縄文施文に粘土瘤を貼付する諸磯ｃ式である（MRc－３）。

第165図１～４は大木５式で鋸歯状粘土紐を貼付する（DI）。５～７は変形爪形文を持つ浮島II式である（UK）。８～13・14は北白川下層IIｂ式で大形の爪形文や浮線文がみられる（KS－１：10～13、KS－２：８・９・15）。17～21は結節浮線や結節沈線で円形や渦巻きの文様を描く下島式である（SJ）。22～24・28は前期末葉で、23・24は大形の波状口縁を持つトロフィー型のもの、28は三角印刻を持つものである（JS）。25～27は五領ヶ台式である（GR）。

有尾式、黒浜式、諸磯ａ式、諸磯ｂ式、諸磯ｃ式に混じって異系統の北白川下層式、大木５式、浮島式が出土している。また、前期末葉のものも見られる。

（関根慎二）

d　土器群の変遷と編年的位置

［中野谷松原遺跡の土器群の様相の分析について］

第１章でも述べたように、土器の分析では、型式学的方法による分析（質の分析）と、「量」についての分析から、土器群の様相についてアプローチする必要がある。これまで示してきたように、本遺跡の土器群は有尾式と諸磯ｂ式を中心としている。本遺跡の資料は質・量ともに充実していることから、各時期の土器群の様相をある程度把握することができた。すでに遺構別に文様別重量組成も明示し、個々の資料の特徴についても理解が深まった。そこで、本遺跡の土器群を総括する意味で、土器群の編年的位置付けについて検討を行ってみたい。

まず、分析を開始するにあたり、有尾式土器群と、諸磯ａ・ｂ式土器群の資料操作の方法が異なっていることについて、述べておきたい。有尾式期の住居址は竪穴の掘り込みが比較的浅かったことと、同一場所建て替えが頻繁に行われていたため、土器の層位的把握が困難である。また、繰り返しの建て替えで、土器の破片化も著しく、復元個体数は非常に少ない。また、有尾式土器群は文様帯以外は、時期的な変化を示す指標となる部分が少ないことから、破片資料によって土器群を細分し、数量として把握することも難しい。したがって、有尾式土器群の場合、編年的検討は文様帯の存在する良好な資料をピックアップし、それによって型式学的検討を行うオーソドックスな方法に多くを依存せざるを得ない。

これに対し、諸磯ｂ式期では、竪穴の掘り込みが深い大形住居址が多く存在しており、こうした住居址の層位的検討が可能であるため、土器群の型式学的方法についてのクロスチェックすることが可能である。また、諸磯ｂ式土器群では、文様帯の占める割合が大きいこと、胴部にも文様が附加されていること、浮線文系・沈線文系・爪形文系といった複数の系列が存在していること、器形の変化も大きいこと、器種が多いことなどの特性を有しているため、破片資料についてもある程度数量的に把握することが可能である。したがって、こうした遺構の条件と土器の特性を生かした分析が可能である。

そこで、まず基準となり得る住居址別に、土器群の変遷を明らかにする。それを三分法により結合することによって本遺跡の土器群の変遷過程のフレームを構築する。さらに、他の住居址出土土器群によって、肉付けを行い、編年案を提示する。今回の分析によって得られた土器群編年案を、従来より示されている複数の編年案に照らし、それが問題ないのかどうか検証する。こうしたプロセスを経ることによって、より確度の高い当期土器群の変遷過程を明らかにすることができる。

以上のような条件の違いから、有尾式と諸磯ｂ式の土器群の検討を別個に行い、最終的にそれを統合することで、中野谷松原遺跡の土器編年として提示することを本項の目的とする。ここでは諸磯ｂ式土器群の分析に今回は重点を置くことにする。そして、この編年案に基づいて本集落の変遷過程についての分析を後章で行う予定である。

（大工原　豊）

［前期中葉の編年と住居址の編年的位置について］

当該期の土器については、鳥羽政之(1985・1991)、谷藤保彦(1988)、金子直行(1989)、黒坂禎二(1989)、細田勝（1989)、埼玉考古学会シンポジウム「大木・有尾・そして黒浜」(1990年)、最近では、第10回縄文セミナー（1997）等で提示されている。個々の変遷観は、若干異なるが、その大筋での変遷については、確立してきた土器といえよう。本稿では、これらの成果をふまえ、地域的な特徴を加味しながら土

器の変遷と住居址の出土層位別に見た土器の編年的位置について記したい(第32図、付図１)。なお、本稿で有尾系土器は、長野・群馬地域に分布を主とする大形菱形文系土器、黒浜系土器は分布域が東関東を主とする土器という意味で扱った。

有尾・黒浜式土器の変遷（付図１）

１段階　有尾系土器の本段階の特徴は、櫛歯状の工具を使用して縦位連点状刺突や横位連点状刺突を施文していることである。文様構成は、口縁部直下に連点を縦位に施文、口縁部文様帯に大形菱形の文様を描く。また、連点刺突に沿って櫛歯状工具による条線や平行沈線が施文される。地文の縄文は、異条斜縄文による羽状縄文を施文して、菱形を構成する土器が多い。黒浜系土器については、口縁部に粘土紐を貼り付けた隆帯を持つ土器が相当する。

２段階　有尾系の土器では、爪形文や平行沈線により、大形菱形文様を描く。口縁部には、前段階の影響から沈線による縦位の施文や爪形文が口縁に沿って施文される。縄文は、羽状縄文で菱形を構成する。黒浜系土器は、口唇部から棒状の粘土紐が貼付される。コンパス文を口縁直下や胴部くびれ部に施文する。全体に黒浜式土器の縄文は羽状縄文を作らず乱雑に施文されているものが多い。

３段階　有尾系の土器は、爪形文、平行沈線で施文される。前段階に比べ大形菱形の形が緩くなり、頂点に丸みを持った山形や、三角形を描くようになる。口縁部に沿って、平行沈線や爪形文が施文される。黒浜系土器は、器面に乱雑な沈線で格子状の文様を描いたり、粘土紐を口縁部に縦位に貼り付け平行沈線の菱形文を口縁部に施文する。地文の縄文は、斜縄文で、羽状縄文は少ない。また、有尾系土器では文様施文域に縄文を施文する例は少ないが、黒浜系土器では文様施文域に地文として縄文が施文されている。

４段階　本段階になると、有尾系土器の実体が分からなくなる。黒浜系土器では、爪形文が口縁部に施文される。文様は、いわゆる米字状やユニオンジャック形、口縁に沿って２条を対にして施文され、爪形文間の縄文を磨り消しているものもある。地文の縄文は、斜縄文や羽状縄文。

出土土器から見た住居址の変遷（第32図）

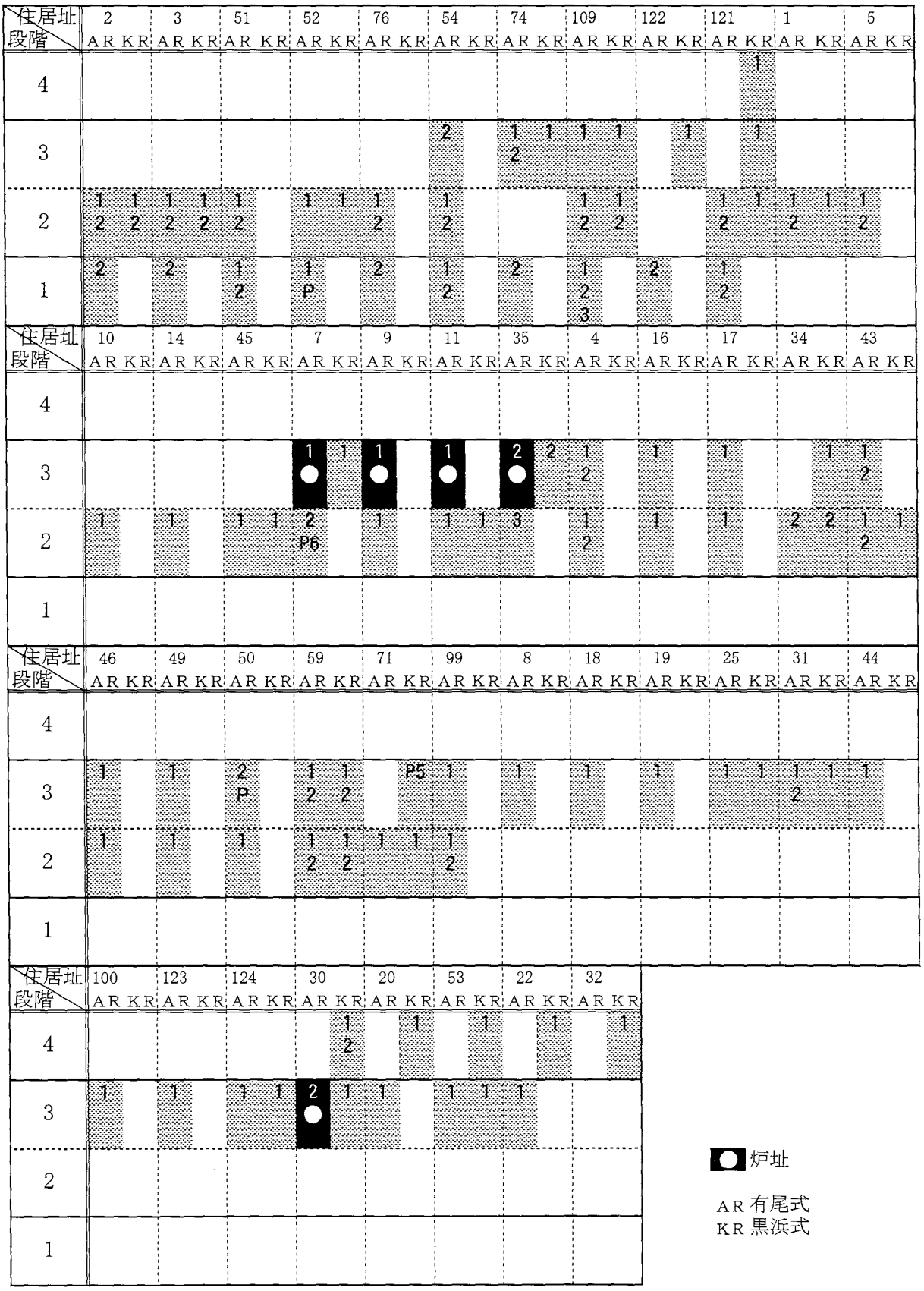
本遺跡検出の当該期の住居址は、掘り方が浅く住居内層位の上下から編年的な序列を組み立てるには、難しい。土器の型式変化から土器の時期差を捉え、住居内各層の出土する土器の時間的位置によって住居のおおよその編年的位置付けを行ってみたい。

１・２段階の土器と推定される住居址は、Ｊ－２・３・51・52・76住で上層に２段階の土器が、下層に1段階の土器が多く出土している。この段階では、黒浜系土器の混入は少ない。また、Ｊ－54・74・109・122・121住では、１段階から３・４段階の土器が出土している。下層に古い段階の土器が出土している傾向にある。各段階に多くまたがる土器が出土している住居からは、黒浜系土器も多く出土している。

Ｊ－１・５・10・14・45住では、２段階の土器が出土している。Ｊ－７・９・11・35住では炉址から出土している土器は３段階のものである。Ｊ－４・16・17・34・43・46・50・59・71・99住は、２・３段階の土器が出土している。

Ｊ－８・18・19・25・31・44・100・101・123・124住は３段階の土器が出土している。Ｊ－30住は、３・４段階の土器が出土していが、炉址から出土しているのは、３段階の土器である。Ｊ－20・53・22・32住は３・４段階の土器が出土している。Ｊ－30住は下層からも４段階の新しい土器が主土している。この段階になると黒浜系土器が主体となって出土している。

（関根慎二）



第32図　有尾式住居址対応表

［住居別にみた諸磯ｂ式土器群の変遷］

これまで諸磯ｂ式土器の編年については、鈴木徳雄（1979）・今村啓爾（1981等）・鈴木敏昭（1991）・谷口康浩（1989）・松田光太郎（1994）らによって示されている。特に、近年資料の増加とともに、細分編年が行われるようになり、諸磯ｂ式の変遷過程の詳細を理解することが可能となりつつある。そこで、こうした文様帯系統論に基づいた編年案の有効性について、実際の住居址出土土器群により検証を試みる。

本遺跡では諸磯ｂ式期に大形で深い竪穴を有する住居址が４軒検出されている。Ｊ―56住・Ｊ―66住・Ｊ―78住・Ｊ―80住である。これらの住居址では、土器が大量廃棄された状態で検出されている。ここに廃棄されている土器群を層位ごとに配列させることで、層位に基づいた土器群の変遷を理解することが可能である。ここでは複数の住居址で同じ作業を行い、クロスチェックすることで、文様帯系統論的編年の有効性を確認し、編年精度の向上に努める。

また、異系統の土器群の共伴関係については、先の４軒に加え、比較的多く出土しているＪ―111号住居址を用いて検証を試み、土器型式間の対比を行う。

Ｊ―56号住居址の層位的出土状況と土器群の特徴（第32図）　この住居址は、深さ約95cmであり、構築から遺物の廃棄までに次のような変遷がたどれる。①最初の住居の構築。②貼床を施した住居への改築（柱の位置はそのまま）。③住居内土坑の掘削、初期三角堆積（人為的か？）。④遺物の大量廃棄、焼却を伴う行為。⑤焼却後の廃棄。

①段階の土器としては、炉体土器がある。そして、②段階以前の土器は６層に含まれるものである。また、③段階の初期三角堆積の覆土中からは、ほとんど遺物が出土していない。④段階に廃棄された土器群が５～１層に含まれる。したがって、６層と５層の間に時間的空白が存在していたことになる。

浮線文系土器群では６層に胴下半部まで渦巻文が認められるものが認められる。こうした例は５～１層にはない。また、５層～３層では口縁部文様態に渦巻文を有するものが多いのに対し、２～１層では渦巻文が縦長の、崩れた形状となり、この間でやや変化が認められない。また、器形の変化をみると、５～４層では口縁部が平縁のものが多く、３層になると波状口縁のものが増加する。そして、１～２層で口縁部が大きく外反し、屈曲が強まり、再び平縁化する。獣面把手の付くものは３層を中心としており、口縁の波状化と連動している。

次に、沈線文系土器群では、５～３層にかけて多く存在する。沈線文系では、浮線文系と同じ文様構成のものと、弧状文を幾重にも重ねた菱形区画「つ」字文を施文したものが存在する。後者は浮島式の文様と類似しており、影響を受けたものと推定される。５～３層に多く存在しており、浮島II式に併行するものと推定される。４層の波状口縁のものでは、獣面把手の付くものがあり、浮線文系とこうした土器群との接続が可能である。

縄文系のものでは、本住居址で最古の時期となる炉体土器が存在する。ただし、胴下半部のみであり、上部の文様帯の有無は不明であり、編年的基準資料とは成り得ない。

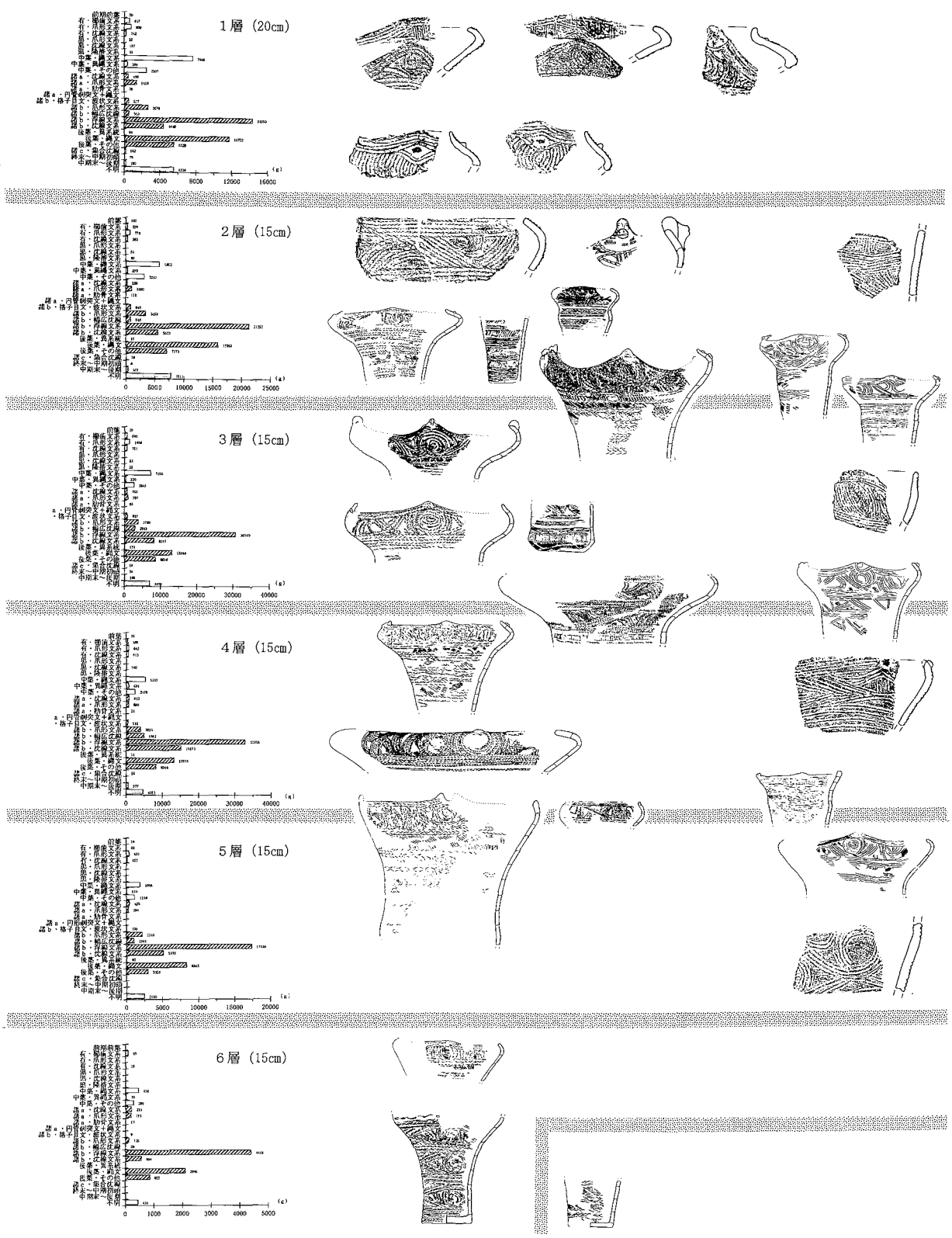
異系統のものとしては、大木系・北白川下層系のものが若干出土しているのみであり、この時期に異系統土器群の大規模な流入はない。

浅鉢では確実なものとして、３～２層で大形で高台状の突起の付く無文の有孔浅鉢が出土しており、浮線文系・沈線文系との共伴関係が確認できる。４層では口縁が内傾する無文の有孔浅鉢が存在してい

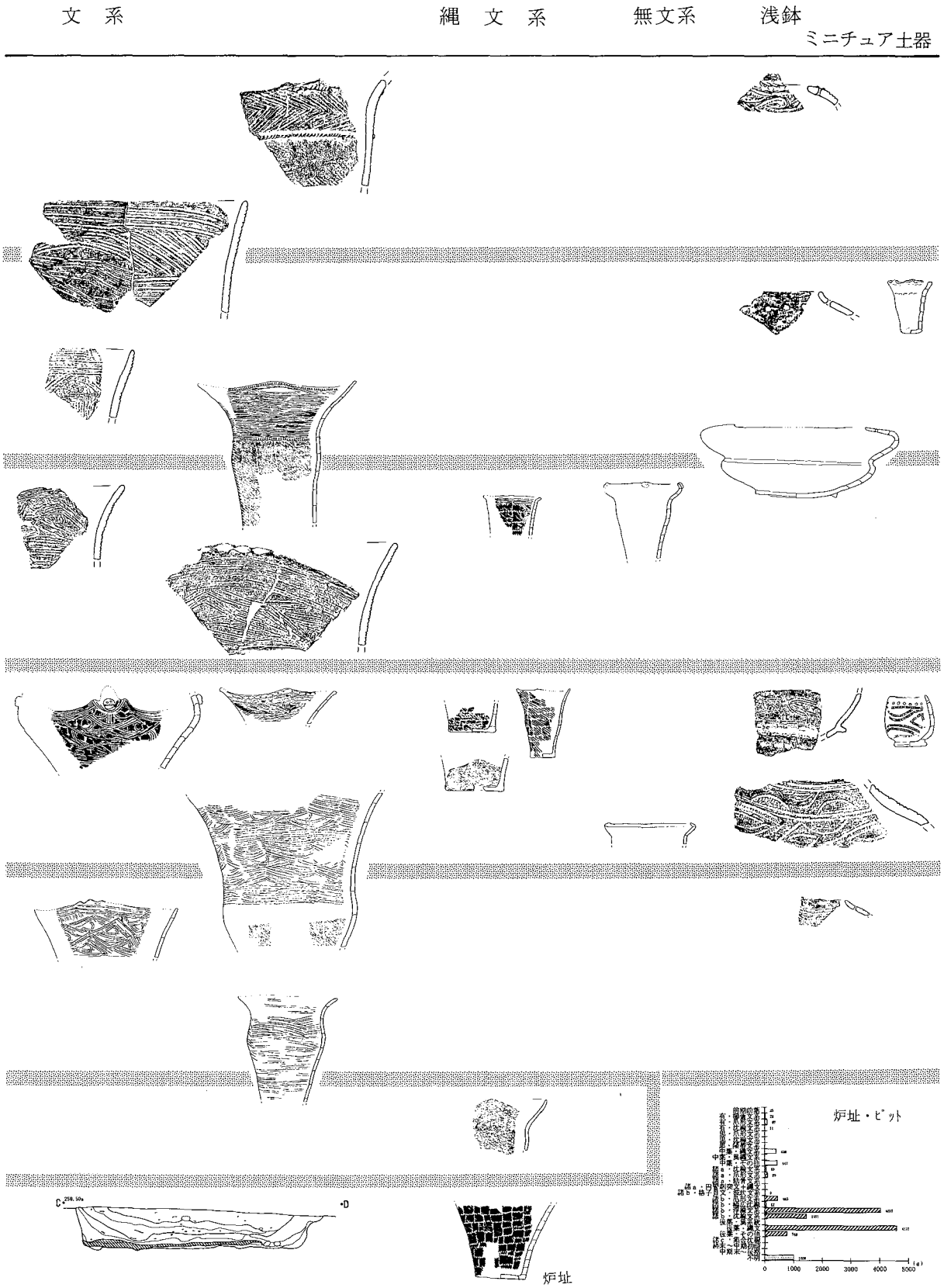
文様系

浮線文系　　沈線

層別グラフ



第33―1図　J―56号住居址の層位的出土状況（1）

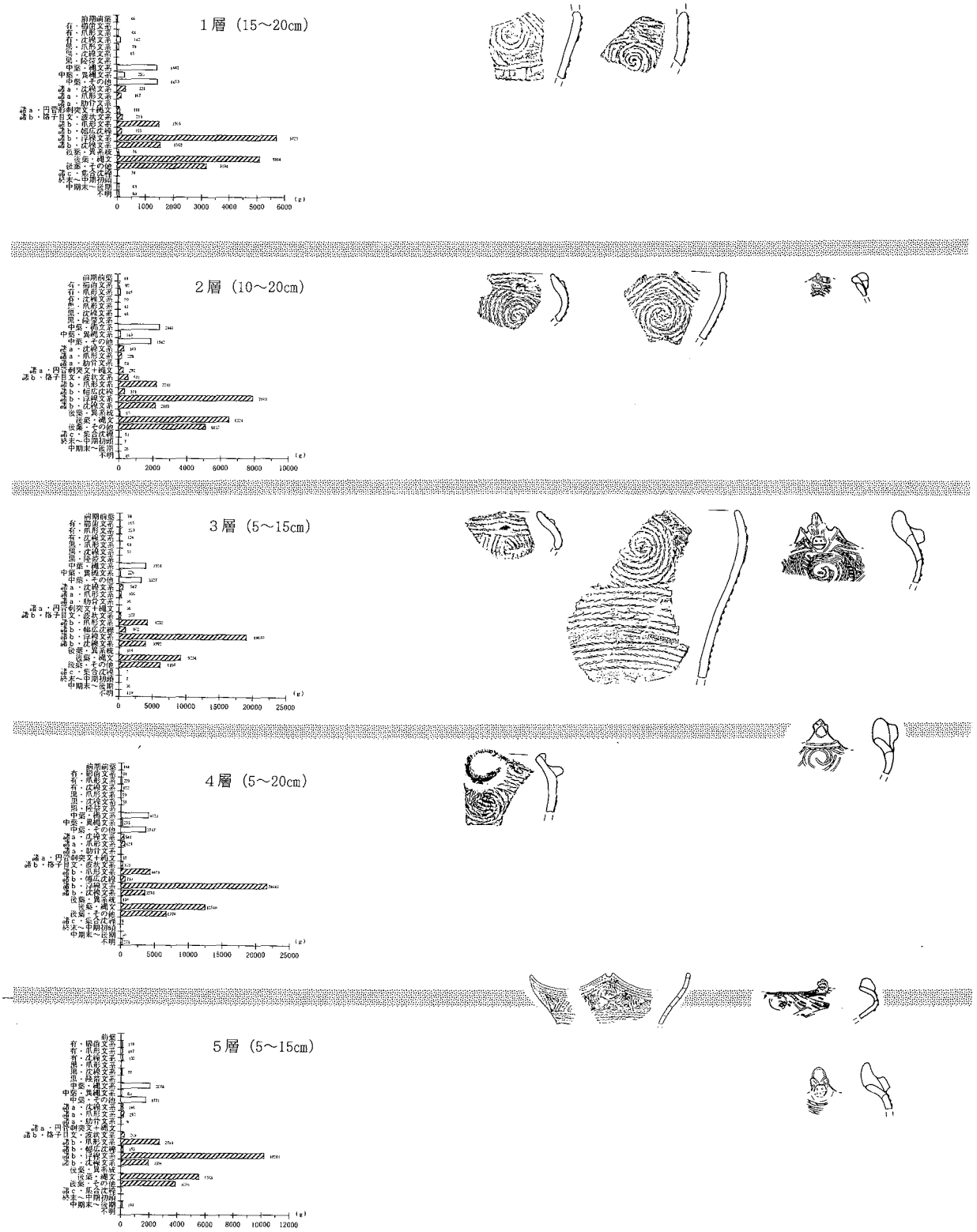


第33―２図　Ｊ―56号住居址の層位的出土状況（２）

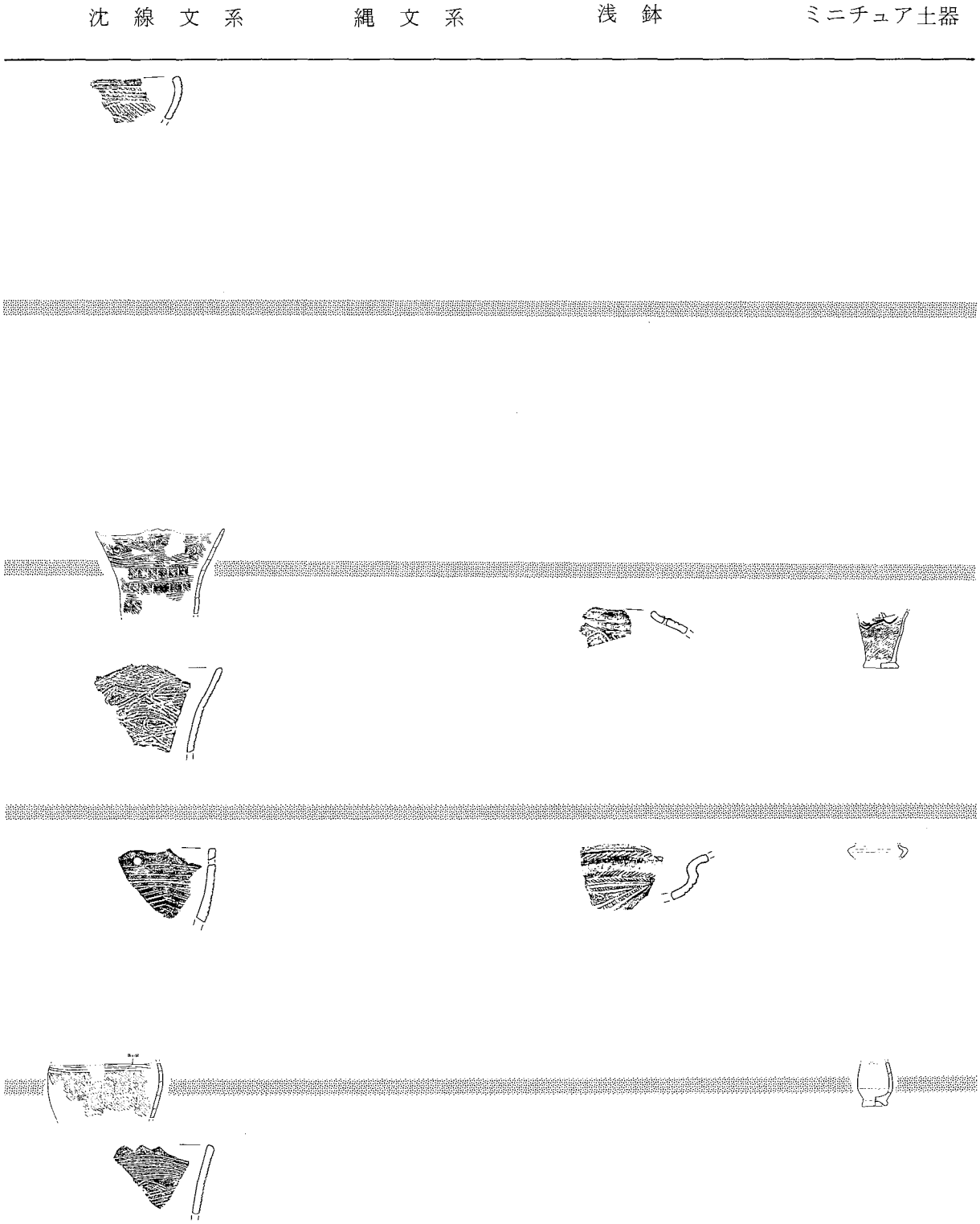
文　様　系

浮　線　文　系

層別グラフ



第34―1図　J―66号住居址の層位的出土状況（1）

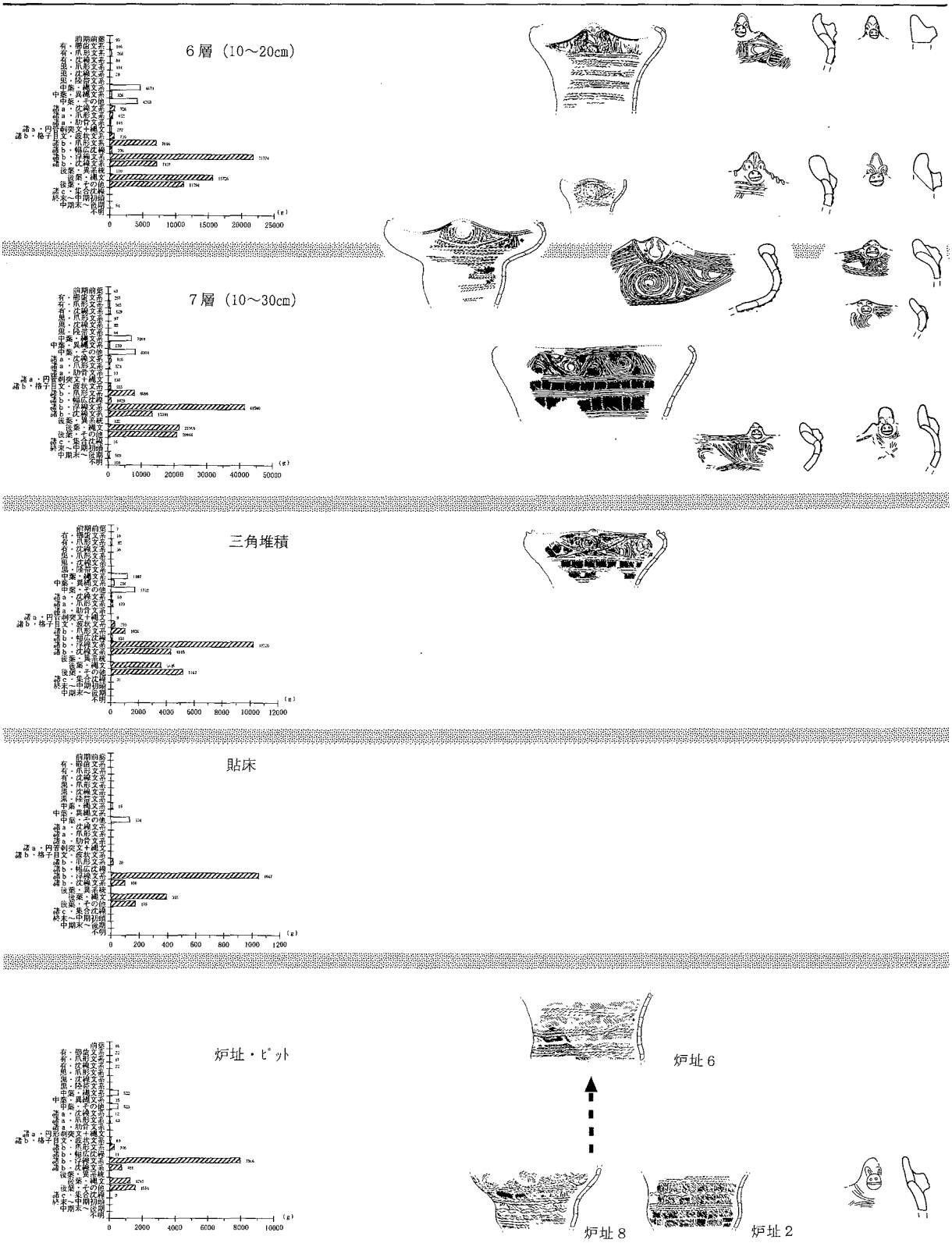


第34―2図　J―66号住居址の層位的出土状況（2）

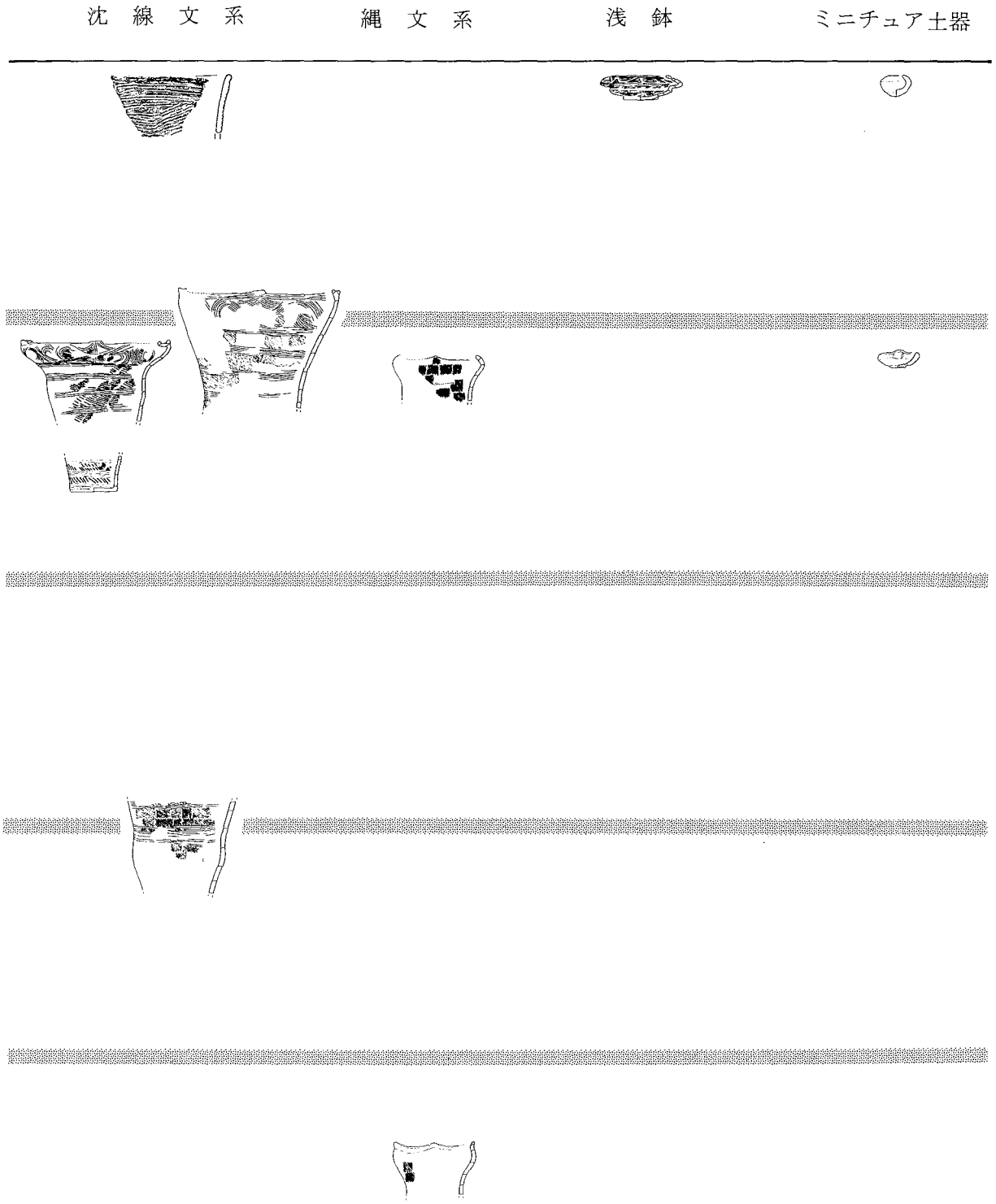
文　様　系

浮　線　文　系

層別グラフ



第35－1図　J－66号住居址の層位的出土状況（3）



第35―2図　J―66号住居址の層位的出土状況（4）

るが、ミニチュア土器にもこうした浅鉢を模倣したものがあり、編年的位置が確認できる。

なお、本住居址では爪形文系の土器群は少ない。これは爪形文系土器群の編年的位置がある程度時期的に限定されるものであることを示している。

以上のように本住居址出土の土器群では、6層、3～5層、1～2層の3段階で差異が認められた。6層と3～5層の間の差異よりも、3～5層と1～2層の間の差異のほうが大きい。3～5は④段階(焼却を伴う大量廃棄）の堆積であるのに対し、1～2層は⑤段階（焼却を伴う行為後の廃棄）の堆積であり、この間に本住居址に対する廃棄行為が一時中断されたことによると考えられる。これは土層堆積状態からも傍証され、1・2層と3層の間には不連続面が認められる。なお、ここの土器群は本遺跡の諸磯b式の中では中段階に位置付けられるものと判断されよう。

J―66号住居址の層位的出土状況と土器群の特徴（第33図～第34図）　本住居址は深さ約95cmである。平面形は当初円形であったが、建て替えを行い隅円方形としている。この際、柱の配列が変わっているので、上屋は一時撤去されたことが分かる。

最初の住居（J―66A）の炉体土器はそのまま床面（9層）に埋め込まれており、炉2・炉8がこれに相当する。また、炉6は建て替えられた住居（J―66B）の炉体土器であり、時期的には近接しているものの新旧関係が認められる。8層は廃絶直後の三角堆積であるが、すでに本住居址に対する廃棄行為は開始されており、その後1層まで連綿と廃棄が続けられている。この間、黒褐色土層と黄褐色土層が互層となってきれいにレンズ状に堆積しており、色調の違いは季節の差と推定されている。

浮線文系は主たる文様であり、各層とも最も多い。浮線文系では平縁で浮線を弧状に施文し、その間に渦巻文を充塡するものが7～8層から出土している。J―66B住炉体土器8も同じ文様構成と推定され、より古い文様構成と推定される。しかし、7～1層では基本的には波状口縁で渦巻文を主体とするものであり、獣面把手もこれに付帯する文様要素とみられる。

沈線文系は浮線文系の文様構成とほぼ同じであり、独立した文様構成を有していない。これは、この時期の沈線文系土器が浮線文系土器の省略形態として位置付けられていて、最終工程の浮線文の添付が省略されたものであったことに帰因していたのではなかろうか。なお、7層の沈線文系の中には口縁部が屈曲するものがあり、注目される。

縄文のみが施文される土器は少ない。そして、爪形文系は本住居址ではほとんど存在していない。浅鉢は6層に良好な資料が存在する。これは幅広の爪形文により、入組文を構成させるものであり、すでに深鉢には施文されない爪形文が、浅鉢といった特殊な器種には残存していた（あるいは伝世していた？）とみられる。一方、異系統土器群は浮島系・北白川下層系・下島系が若干出土しているが、基本的には諸磯b式のみで構成された土器群として捉えられる。

以上のように、本住居址の土器群は層位により大きく変化することなく、同じ傾向が継続している。ただし、炉体及び7～8層には古い様相が認められる。本住居址に対する廃棄行為は、比較的短期間に行われたものと推定される。なお、ここの土器群は本遺跡の諸磯b式の中では中段階に位置付けられるものと判断されよう。

J―78号住居址の層位的出土状況と土器群の様相（第35図～第36図）　この住居址は深さ約1.5mを計る。5回建て替えられており、最初の住居（J―78A）は最大規模の大形住居であり、1.5mにも及ぶ覆

土の堆積が存在したが、ここからはほとんど遺物が出土しておらず、時期等は判然としない状況である。その後、内側に少し小振りのＪ―78Ｂが構築され、それから徐々に大形化し、Ｊ―78Ｆの段階で再び当初と同じ大規模な住居となる。遺物の廃棄行為はＪ―78Ｆの廃絶後に開始されている。覆土はレンズ状に堆積しており、大きな不連続面もないことから、ほぼ継続的に廃棄行為が行われたものと判断される。床面は少しずつ張床がなされていたので、古い住居の炉址は床面に埋め込まれていた。こうした炉址は大部分地床炉であったが、炉４は炉体土器が残存していた。この炉体土器はＪ―78Ｅに伴う。また、最終段階のＪ―78Ｆに伴う炉体土器は炉２である。ここには新旧関係が認められる。しかし、炉４は胴部に縄文を地文とし、沈線を横位に施文したものであり、時期を決定する部位の文様構成が不明であり、良好な資料とは言い難い。本遺跡では炉体土器がほとんど口縁部文様帯を欠いており、有効な編年資料と成り得ず、住居址の時期決定も二次的に廃棄された土器群に依存せざるを得ない。

それでは、以下系列ごとに土器群の様相について述べることにする。浮線文系では炉２がここで最も古い。頸部に弧線状に文様を施文したものであり、口辺部の立ち上がりからみて、口縁部は大きく屈曲しない器形と推定される。ところが、８～１層にかけては、口縁部が大きく開き、「く」の字形に強い屈曲をもつものが主体を占めている。また、頸部や胴部に文様帯を有するものが目立つ。そして、浮線も細く平坦なものが多い。こうした特徴は下層から上層まで基本的に同じであるが、口縁部の渦巻文は５層以下では明確であるのに対し、４～１層では渦が崩れるなどの差異が認められる。獣面把手も４層以上では平面的に貼り付いたものが目立つようになる。なお、獣面把手は本来の位置より上層から検出される例が認められるが、これらは二次的混在と判断される。

沈線文系は比較的少ない。５層では菱形区画「つ」字文を施文したものが認められる。また、４～１層にかけて、浮線文系と同じモチーフの文様や、鋸歯状文を施文したものが認められる。

縄文系では２層に口縁部が外反する単純な器形のものが存在する。また、爪形文系の土器群も出土しているが、二次的に混入したものと推定される。

浅鉢は７層や４層に入組文を施文した有孔浅鉢が出土している。口縁部は大きく「く」の字状に屈曲しており、深鉢と共通点が見い出せる。

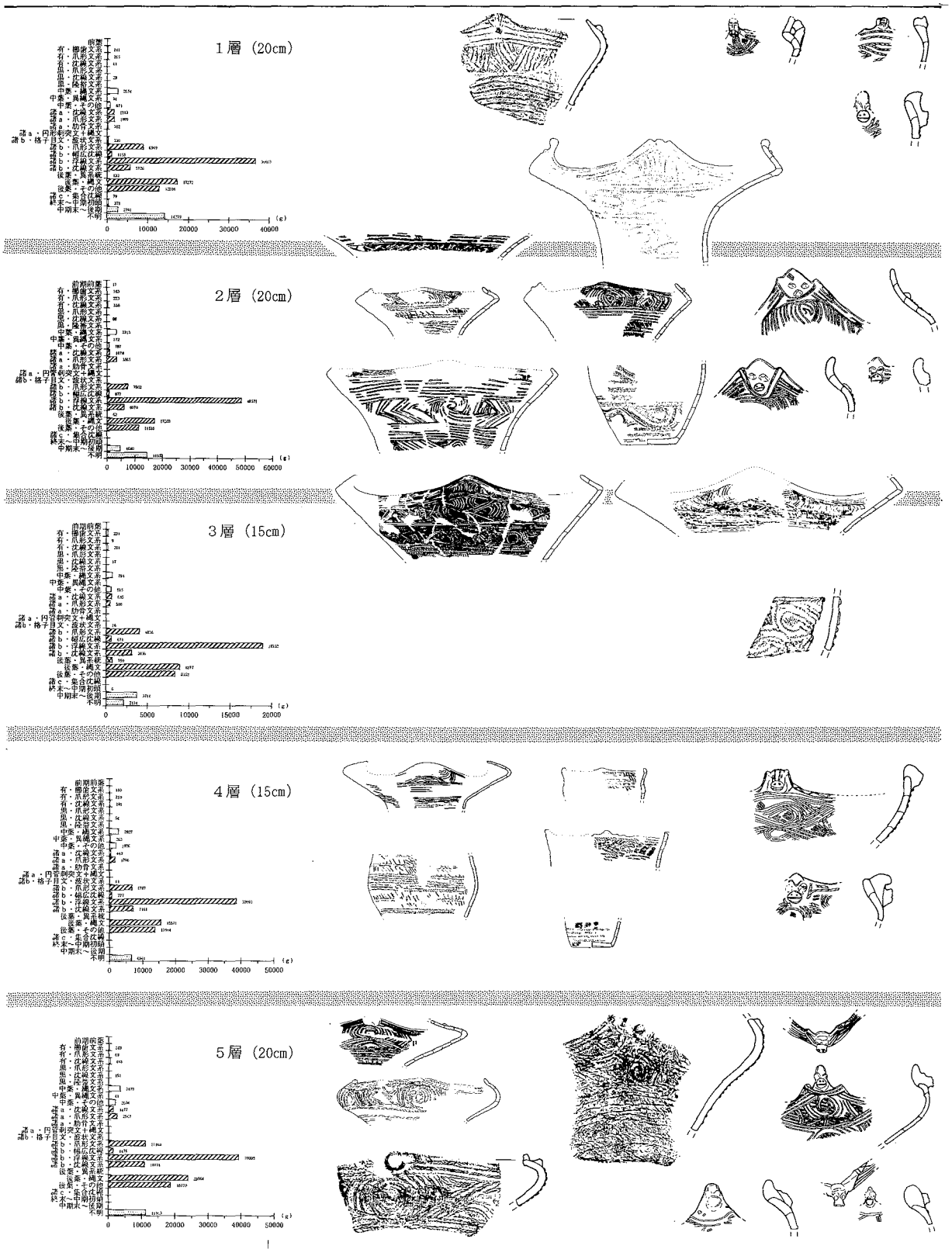
異系統の土器としては、３層で浮島式の貝殻腹縁文を施文したものが出土している。これは浮島Ⅱ式に比定され、型式間の対比が可能である。７層・９層でも浮島式の破片が認められる。これ以外に、大木系・北白川下層系の土器が若干出土している。大木系のものは３～４層から出土しており、大木５式に比定される。

本住居址出土の土器群の様相をまとめると、基本的には比較的短期間に廃棄された一連の土器群と判断される。４層と５層の間に若干差異は認められるものの、大きな断絶はないようである。ここから出土した土器群は、本遺跡の諸磯ｂ式の中では新しい段階に属するものである。また、浮島式や大木式の土器群がしばしば混入しており、型式間の関係が注目される。

文　様　系

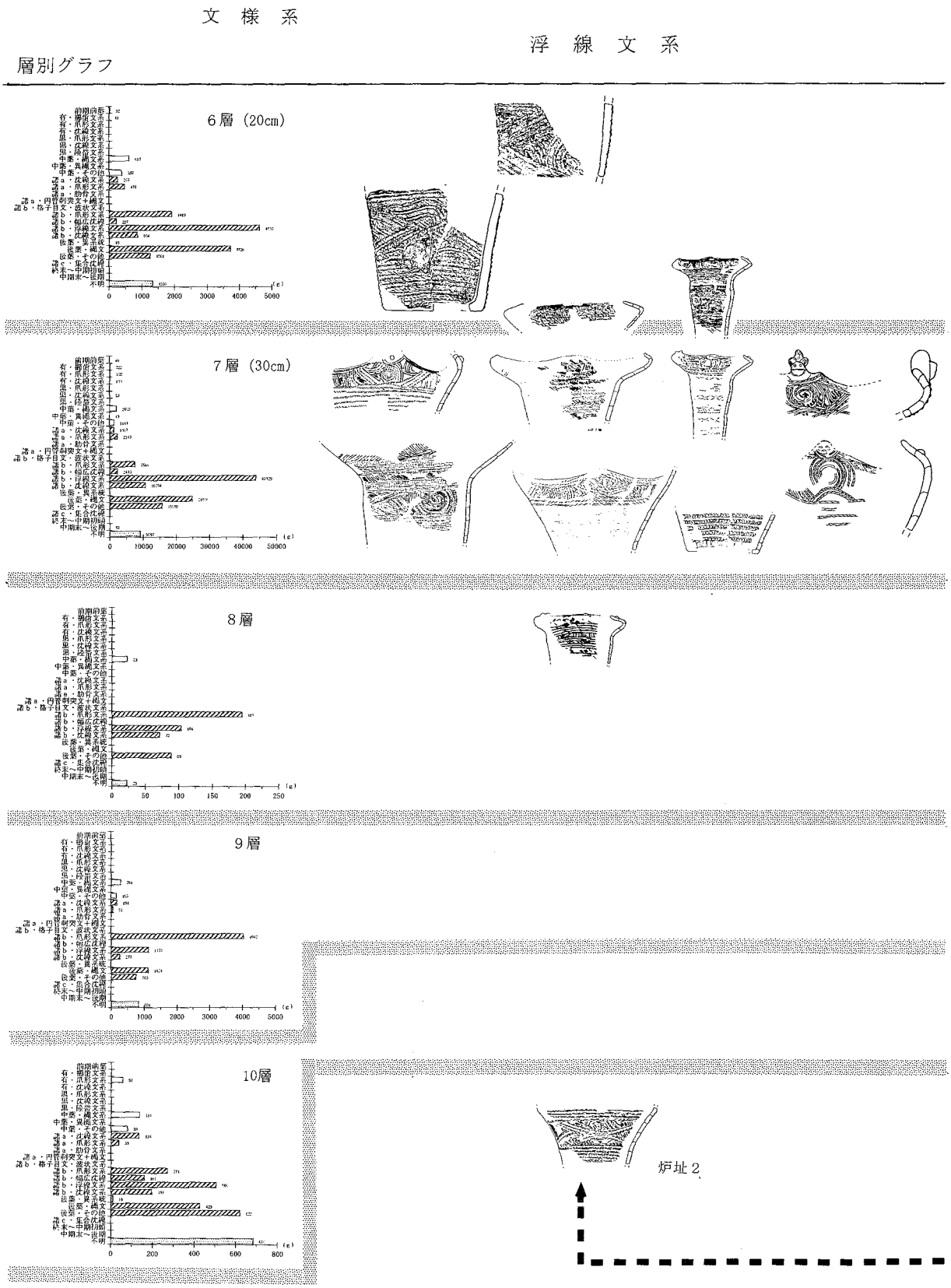
浮　線　文　系

層別グラフ

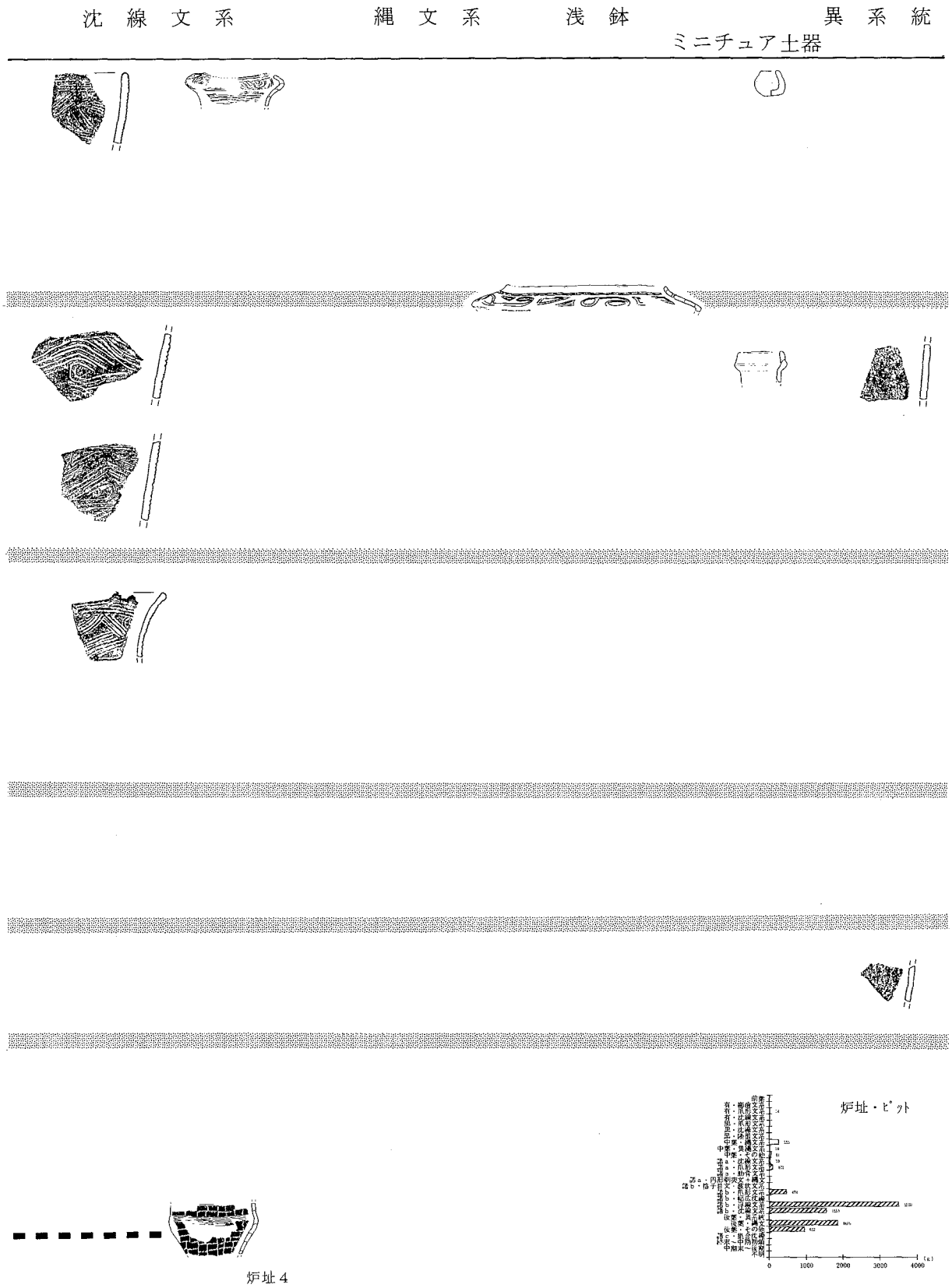


第36－1図　J－78号住居址の層位的出土状況（1）

第36—2図　J—78号住居址の層位的出土状況（2）



第37―１図　Ｊ―78号住居址の層位的出土状況（３）



第37―２図　Ｊ―78号住居址の層位的出土状況（４）

Ｊ―80号住居址の層位的出土状況と土器群の様相（第37図）　本住居址は直径10mほどの大形住居址であるが、約0.9mと大きさの割に浅い。また、ここではＪ―81号住を含め、７回建て替えられており、覆土中には切り合い関係や廃棄の中断を示す不連続面が認められる。したがって、堆積状態はきれいなレンズ状ではなく、遺物の混入や二次的攪乱も多いと判断される土器群である。

そこで、本住居址では、こうした混入が少ない部分（区・層）を選び、この位置的関係と堆積層位の関係を併用しつつ、土器群の様相について、検討を行うことにした。具体的には、①ブロック：12区・14～16区２～４層、②ブロック：５区・９区１～３層、③ブロック：３区・４区１～３層の３つのグループに土器群を大別した。これらの土器群は層位的には不整合の上下となり重ならず、位置的にも重なりを持たない。したがって、層位的新旧関係が土器群の型式差として明示される可能性が最も高いエリアである。なお、層位的新旧関係では、①ブロック→②ブロック→③ブロックの順に新しくなることが確認されている。

①ブロック　文様別重量組成グラフをみると、沈線文系は４層で多く組成する。また、４層では諸磯ａ式の爪形文系も比較的多く、出土量が少ないものの本住居址では最も古相を示す。

爪形文系と浮線文系は、３～２層に多く、沈線文系を凌駕し、土器群の主体を占めるようになる。３～２層では太い粘土紐の貼付と爪形文による木葉文から変化した文様を施文した大形深鉢（MRb―５）が出土している。

これに対し、浮線文系では、２層から太い浮線文を施した口縁部の屈曲の弱い深鉢形土器や、口縁部に突出した立体的な獣面把手が出土しており、爪形文系と浮線文系の時間的推移がある程度辿れる。浮線文系の深鉢は横位波状文に小渦巻文や蕨手文が充塡されるものであり、浮線文としては古相を呈している。

また、沈線文系では２層に浮島系の菱形文を連続的に施文するもの（UK）が出土しており、浮島II式に比定される。そして、新潟系とみられる格子目文土器もこの層から出土しており、この時期に異系統の土器群が流入していることが分かる。

なお、ブロック外となるが、①ブロックと関連するものを示す（第38図右下）。炉址２は本住居址の廃絶時期を示すものとして重要な土器であるが、底部のみしか残存しておらず、時期決定が難しい。これを補足するものとして、次の２つの土器がある。６・10区２～３層出土のものは縄文を地文とし、横位に太い浮線を施文した大形深鉢である。この土器は炉址２と器形と縄文が類似している。浮線文系の古相を示すものである。また、７・10・11区３層から出土している爪形文系の深鉢も胴下半部は縄文が施文されるものである。いずれにしても、本住居址は諸磯ｂ式古段階まで遡るものと推定されよう。

②ブロック　文様別重量組成グラフをみると、３層に爪形文系が多く、２～１層では少なくなる傾向が読みとれる。そして、２～１層では浮線文系が主体を占めるようになる。深鉢では口縁部の屈曲がやや強くなっており、獣面把手の下部には渦巻文が施文される。また、獣面把手は２層では口唇部に突出しているが、１層では多少器面に組み込まれている。

沈線文系では１層で浮線文系や爪形文系と同じモチーフの横位弧線文が施文されるやや古相を呈したものと、横位に沈線を施文する浮線文系と同じものが出土している。ここでは沈線文系は浮線文系の省略形態として存在しているようである。

浅鉢は２層では浮線文と爪形文によって入組木葉文が施文された有孔有段のものが出土している。そして、１層からは幅広沈線で入組木葉文が施文された有孔有段浅鉢が出土している。

③ブロック　文様別重量組成グラフをみると、浮線文系が主体を占めるが、3層では爪形文系が多く、1層では沈線文系が多い傾向が認められ、2層はその中間的在り方を示している。したがって、この推移は時間的変化として把握することが可能である。浮線文系では3層では横位波状文の間に渦巻文を充塡するものが出土している。これに対し、2層では浮線が平坦化し、口縁部の屈曲が強いものが出土しており、時期差が認められる。

沈線文系のものは、2層から横位波状文を施文するものが出土している。1層では横位波状文の間に渦巻文を充塡する口縁部の屈曲のやや強いものが出土している。いずれも浮線文と同じモチーフのものであることから、他のブロック同様浮線文の省略形態として位置付けられる。

浅鉢では1層から口縁部に浮線を施文する無文の有孔浅鉢が出土している。他のブロックのものと比べて、新しい様相のものである。

以上、3ブロックの様相について検討してみたが、基本的には層位的関係が型式変化と整合性をもって推移していることが判明した。変化の顕著なものは①ブロック4・3層間、②ブロック3・2層間、③ブロック各層である。これに対して、①ブロック3～2層、②ブロック2～1層は変化がほとんど認められない。この現象は、①・②ブロックでは急速な初期堆積とその後の緩やかな堆積の関係として、③ブロックでは深く小さな住居址に対する長期に及ぶ堆積の結果が反映していると推定される。したがって、土器群の時期については、諸磯b式古段階から中段階に位置付けられるものであり、比較的長期間に緩急のある時間幅をもった土器群と判断される。

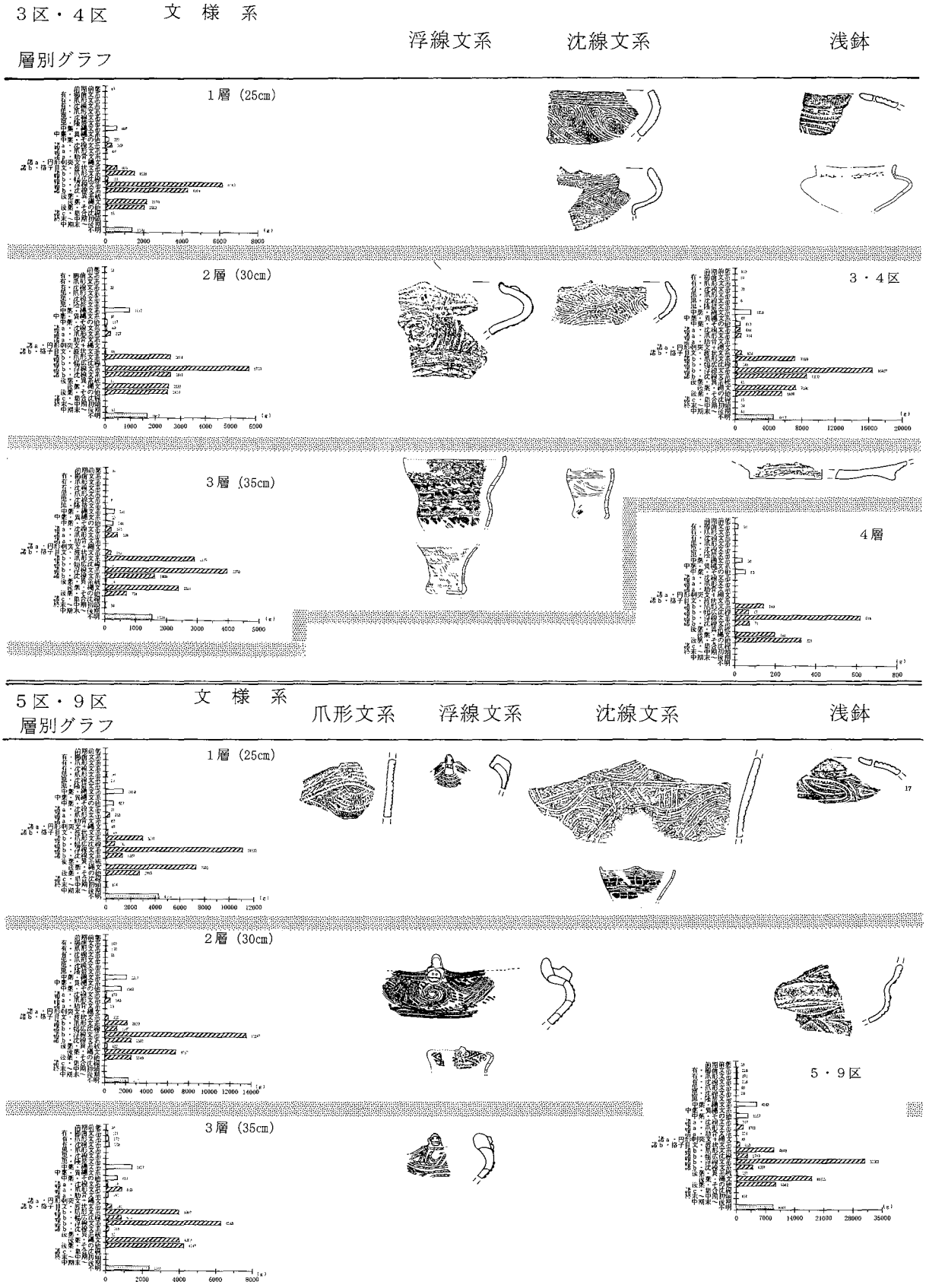
J－111号住居址の層位的出土状況と土器群の様相（第38図）　この住居址は深さ65cmであり、柱穴配置から少なくとも1回の建て替えが行われている。住居規模は変化なく、床面に段差もない。しかし、炉址が10基も存在しており、通常の住居址に比べ異常に多く、機能的にみて特殊な住居址であったと判断される。堆積状態は典型的なレンズ状堆積であり、廃絶後は廃棄行為を伴う堆積層によって埋没しており、不整合面は認められない。また、遺物の出土量は比較的多く、ほぼ万遍なく出土している。

文様別重量組成グラフをみると、4層では爪形文系と縄文系が多く、前期中葉・縄文系（含繊維）も比較的多く組成している。縄文系が多いのは、爪形文系の胴部以下が縄文を地文としているためとみられる。3層では爪形文系と縄文系が依然として多いが、これに沈線文系（波状文系のもの）が加わる。そして、2層では沈線文系に代わって、浮線文系が顕在化するようになる。1層は2層とほぼ同じ組成であるが、再び沈線文系が浮線文と同程度まで増加する。このように、文様別重量組成グラフから、ある程度層位的に変遷が辿れる。また、異系統の土器群では、3・2層に北白川下層系が比較的多く、1層では下島系が多い傾向が読みとれる。1層の下島系は時期的におおきくズレがあることから、二次的な混在資料として理解できる。2層から出土している大木系の粘土紐貼付文も同様に二次的混在とみられる。

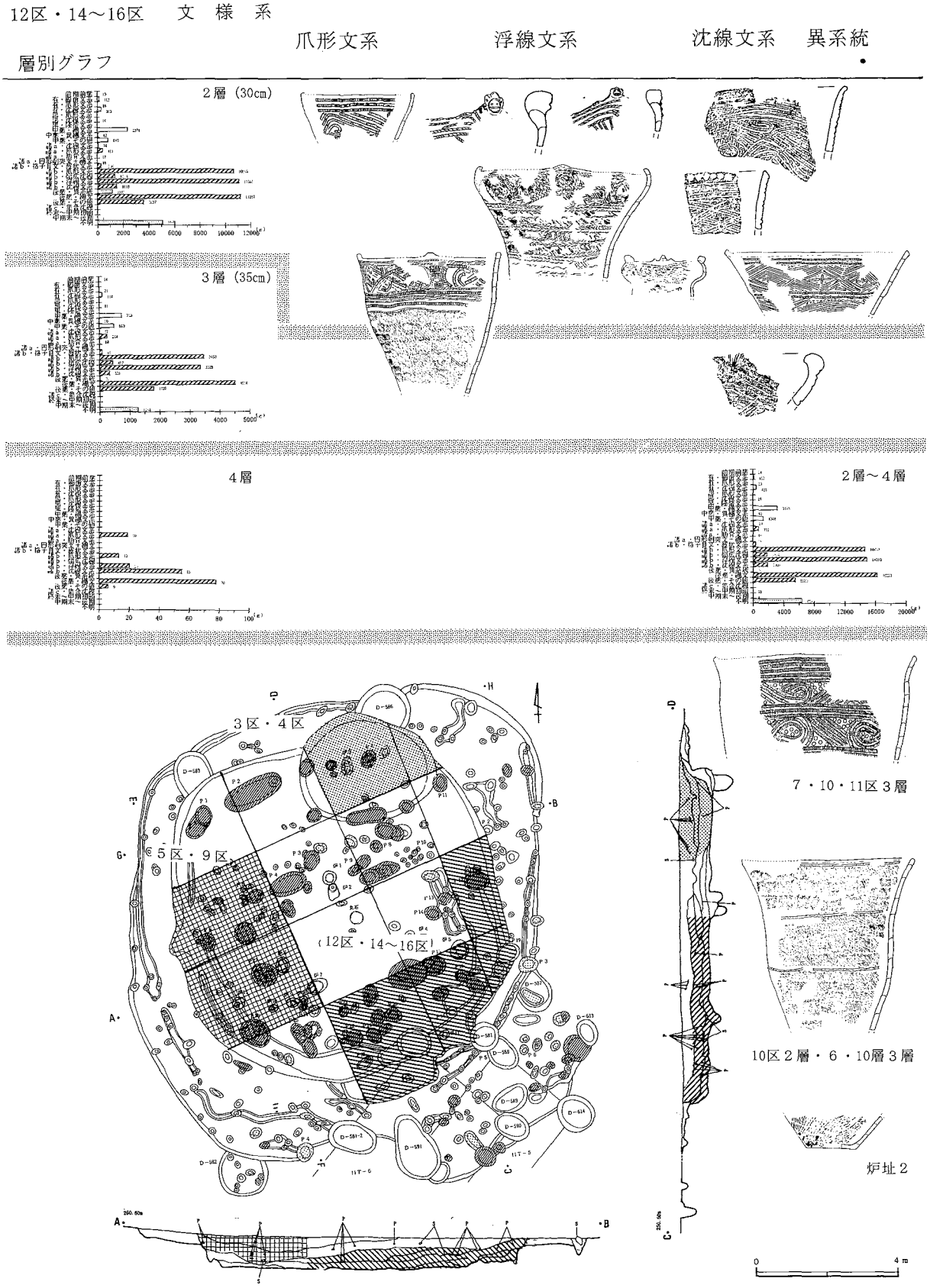
では、次に各系ごとに層位ごとにどのような文様構成の土器群が存在しているか、さらに詳しく調べてみることにする。

爪形文系では、3～1層まで横位弧線文の間に木葉文から変化した文様や渦巻文を描くもの（MRb－4）が連続して認められる。

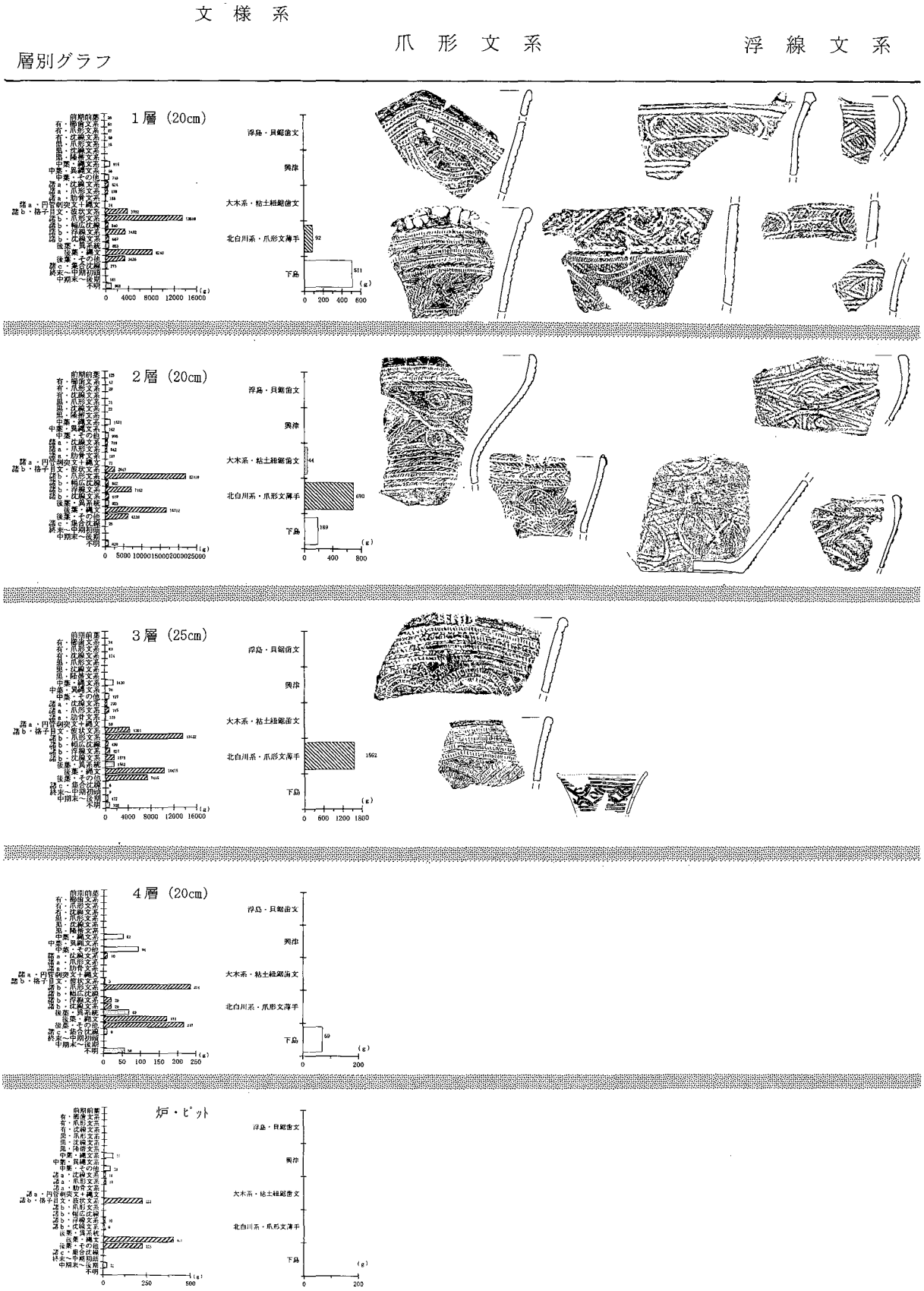
浮線文系では、太い浮線により横位弧線文を施文し、その間に蕨手状の文様を充塡するものが2層に認められる。口縁部の湾曲も弱く、浮線文の中では古相を呈している。また、2・1層では北白川下層



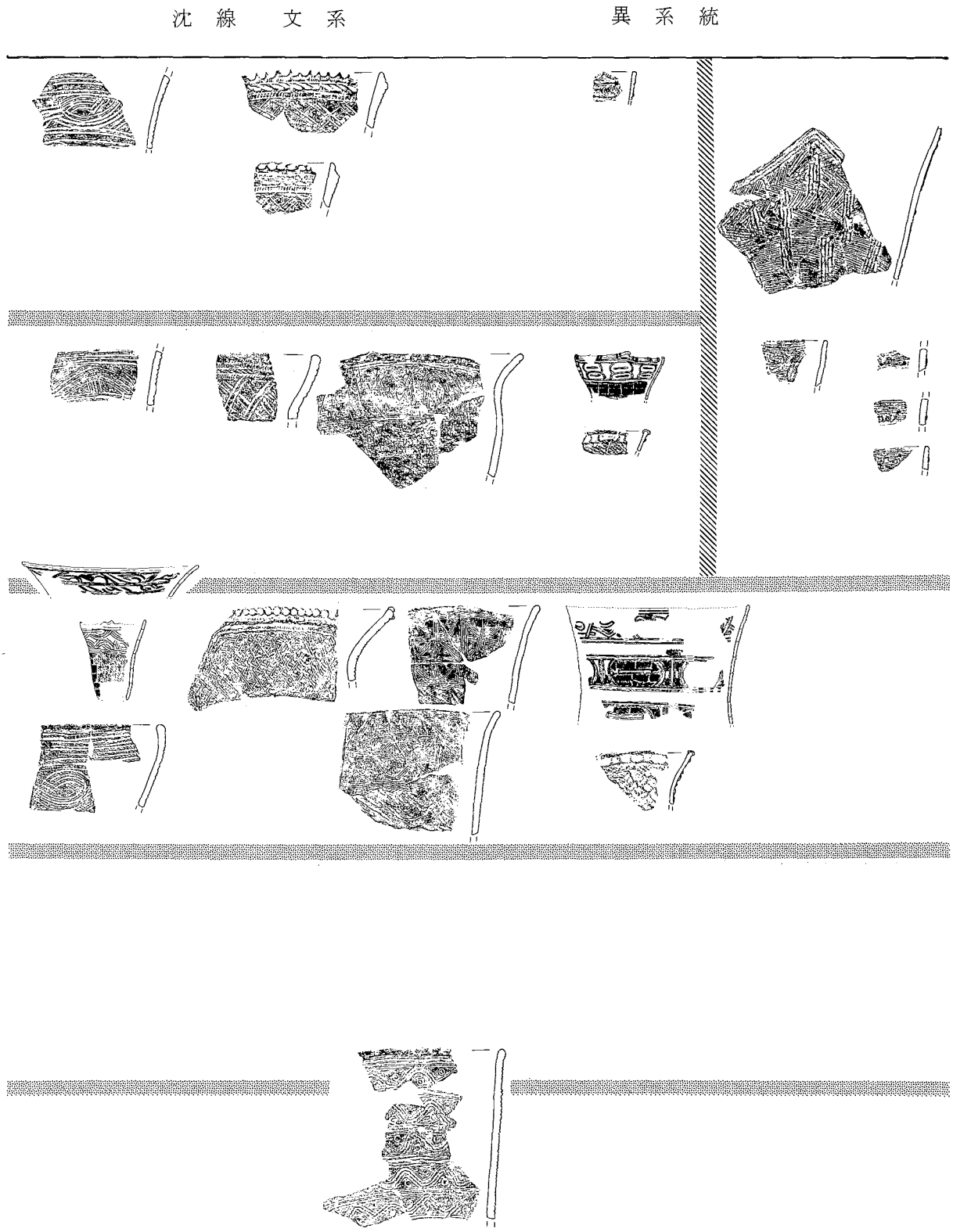
第38―1図　J―80号住居址の層位的出土状況（1）



第38―2図　J―80号住居址の層位的出土状況（2）



第39―1図　J―111号住居址の層位的出土状況（1）



第39—2図　J—111号住居址の層位的出土状況（2）

系と類似した区画文を施文するものが存在しており、両者の関連性が強いことがうかがえる。そして、1層では浮線文の下部に爪形文が施文されるものが認められ、確実に両者が並存していたことを示すものが存在している。

沈線文系では、3～2層にかけて横位弧線文が存在する。また、入組文を描くもの(MRb—10)も3・1層に認められる。同じ文様構成は爪形文にも認められ、沈線文のものは省略形態と考えることができる。そして、3層からは諸磯a式の範疇に含まれる幅狭の半截竹管による波状文と格子目文が組み合わされたもの（MRa—5）が認められ、やや古い様相の土器群が共伴するものと推定される。

従来新潟方面の系統とされる格子目文（MRb—3）が3～1層に存在する。波状文の間に円管刺突を施すも（MRb—2）のが柱穴中から出土しているが、格子目文と近似した文様構成を有しており、強い親和性がうかがえる。格子目文が異系統として伝播したとみるより、こうした波状文の中から成立したものと考えた方が整合性が保てる。

異系統の土器群では、羽状縄文を地文とし、浮線文により、区画文が描かれる北白川下層系の深鉢形土器（KS—1）が2・3層より出土している。北白川下層IIc式に相当するものとみられる。この土器は諸磯b式の浮線文の影響を受けたものとされる(鈴木徳　1987)。また、1層にも棕櫚状文を施文するもの（KS—2）が出土している。

以上のように、本住居址の土器群の時間的推移が層位的に辿れることから、ある程度時間幅をもった土器群として理解することができる。ここでは大きな断絶は認められず、諸磯b式古段階の様相を示す土器群が漸移的に変化している様相を理解することができる。

そして、本住居址では異系統の北白川下層系の土器群がある程度まとまって検出されているので、型式間の関係を理解することができる。北白川下層系のうち浮線文を施文するもの（KS—1）は、北白川下層IIc式とみられる。ここでは爪形文系土器群が主体であり、諸磯b式古段階相当の段階に対比される。なお、3層に北白川下層系の浮線文を施文する深鉢が存在するが、この層からは浮線文系のものはほとんど検出されていない。そして、1層において北白川下層系の影響を受けたと推定される浮線文系の区画文が施文されるものが存在する。つまり、この関係を整理すると、諸磯b式の浮線文系よりも、北白川下層系の方が層位的に古く存在していることになる。この点は浮線文系土器群の成立過程を明らかにする上で重要である。

（大工原　豊）

［各住居址出土の諸磯a～b式土器群の対比］

本遺跡で検出された住居址出土土器のうち、前項において、詳しく検討してきた基準となる5軒の住居址について、層位ごとに編年的位置付けを行ったものが第40図である。また、これらの住居を基本形に、他の住居についても層位別に出土土器の変遷を示したものが第41図である。また、全体の土器の変遷については、付図2に示した。ここでは諸磯式土器を5段階に分類し、1段階を諸磯b式初頭段階、2段階を古段階、3・4段階を中段階、5段階を新段階とした。

諸磯b式新段階に属する土器を多く出土するのはJ—78号住居址である。本住居址の1から3層の覆土上層には、諸磯b5段階の土器群を多く包含している。諸磯b初等段階の土器が1層から出土しているが、これらの土器群は、最初に構築された住居に関連する土器群と考えられる。中段階の土器は、4層から10層の覆土中・下層からの出土が多い。また、炉体土器が中段階の土器であることから、中段階

に住居が廃絶されたと考えられる。新段階の遺構としては、T—15号竪穴状遺構が代表例である。ここでも廃棄場所として用いられている。

J—66号住居址出土土器群は、諸磯b中段階（3・4段階）が主体であるが、層位別にみると下層に3段階の土器が出土している傾向が認められる。炉体土器も3段階に位置付けられる。J—56号住居址出土土器群もJ—66号住居址と同様に炉体土器からほぼ同時期と考えられる。この段階としては、ほかにJ—55・116、68号住居址出土土器群がある。

J—80号住居址は、数度の建て替えのあった住居址で、出土層位と出土ブロックにより諸磯b式2・3・4段階に分離できた。炉体土器が2段階に位置付けられることから、この住居址は諸磯b式2段階に始まり4段階まで継続して使用された住居址であると考えられる。2段階としては、ほかにJ—119・68・13・69・115・83・70・40・41号住居址出土土器群がある。

J—111号住居址からは、諸磯b式初頭から古段階の土器群が出土している。層位別に見ると諸磯b 3段階の土器群は1・2層から、2段階の土器群は1・2・3層から、そして1段階の土器群は、2・3・4層からは出土している。出土層位が重なりながらより下層に古い土器が出土していることが分かる。本住居では、下層から出土している諸磯b式1段階をもってこの住居始まりとした。同じような土器の出土状況からJ—83・79・85号住居址出土土器群が同時期と考えられる。

さらに、これより古い諸磯a式期の土器群は、J—63・26・24・33号住居址等から出土している。下層から古い土器群が出土する傾向がある。

以上、基本となる住居址出土土器群について、層位別の出土傾向から住居址の時期的変遷を概観した。この中で土器の出土傾向にいくつかの特徴があることが判明した。炉体土器とほぼ同じ時期の土器は、下層から出土する場合が多い。覆土中の同じ層からは、複数の細分段階の土器が伴って出土するが、住居下層に行くほど古い土器を出土する傾向が摑めた。土器群の逆転現象で、古い段階の土器がまれに、上層で出土することがあるが、全体量からすれば相対的に少ない。二次廃棄のため、有尾式土器群が常に出土している。

（関根慎二）

［中野谷松原遺跡出土土器の編年的位置］

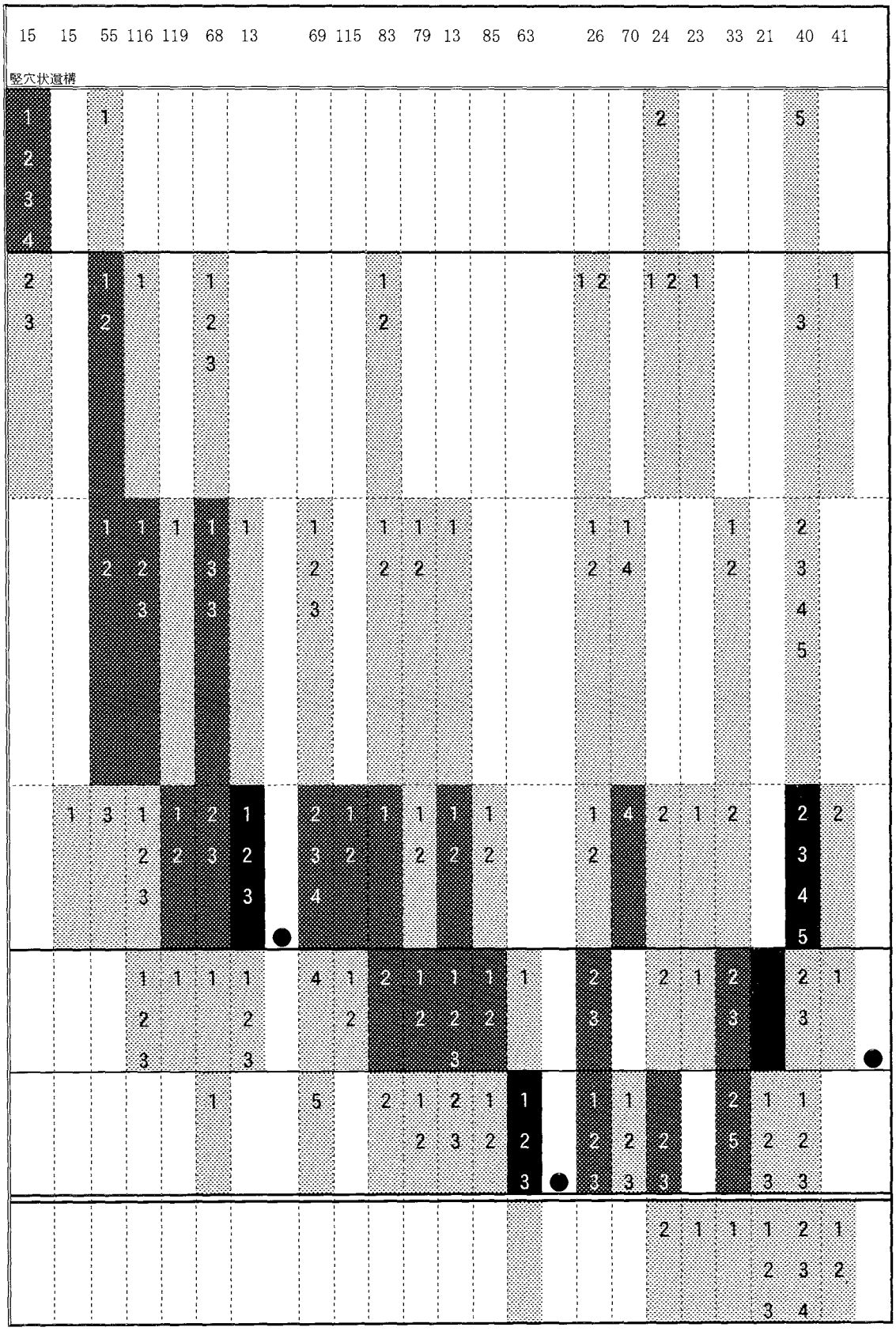
諸磯式a・b土器の編年　付図に示した諸磯a・b式土器の編年的位置については、下記の基準で分類段階分けした。この中で、本遺跡の主体となる諸磯b式土器を中心として段階分けしている。諸磯a式土器については、諸磯b式土器に繋がる部分を編年図（付図2）に示した。

諸磯a式段階　本段階の主な文様モチーフは、円形刺突、肋骨文、波状文、木葉文である。施文手法は、幅狭の半截竹管を主として使用し、平行沈線と爪形文で文様を描いている。円形刺突は、やや太めの竹管を使用している。肋骨文、波状文は、円形の刺突により縦位に区画されその間を平行沈線や爪形文で連結する。肋骨文は、米字文に由来するものであり、幅広で、磨消縄文を持つものは、より古いものである。木の葉文は、平行沈線や爪形文による木葉状の曲線を横に連結させて文様を描く。木葉文間には磨消縄文が認められる。地文の縄文は、比較的長めの斜縄文RLが多い。浅鉢は、ボウル形で幅の狭い爪形文と磨り消し縄文施文の土器がある。

諸磯b式1段階（初頭）　波状文、木葉状入組文を主な文様モチーフとする。前段階と文様構成に似たものがあるが、施文手法が前段階に比べ幅広の半截竹管を施文具とするようになる。本段階の土器は、

時期区分＼住居址	78	66	56	80 ③ブロック	80 ②ブロック	80 ①ブロック	80 7・10・11区	111
諸磯ｂ式 5段階 (新)	1 2 3 7	1	1					
諸磯ｂ式 4段階 (中)	4 5 6 7 8 ●	1 2 3 4 5 6	1 2 4 6	1				
諸磯ｂ式 3段階 (中)	9 10 ●	1 2 3 4 5 6 7 ●	3 4 5 6	2 3	1 2 3	2		1 2
諸磯ｂ式 2段階 (古)			●		1 2	2 3	3 ●	1 2 3
諸磯ｂ式 1段階 (初頭)	1							2 3 4
諸磯ａ式								
有尾式		● 炉体土器						

第40図　諸磯ｂ式基準住居址層位別対応表



第41図　諸磯ａ式～諸磯ｂ式住居址対応表

半截竹管による平行沈線と爪形により文様が描かれる。文様施文域は、口縁部にあり波状文の土器では前段階に比べ施文域、沈線間の幅とも広くなり、波形が山形に近く施文される。また、円形の刺突も前段階では、縦位に区画することを目的とした施文をするのに対して本段階では、縦区画を意識しなくなり区画としての施文施文ではなくなる。地文の縄文は、原則として、口縁部文様帯以下の胴部に斜行縄文が施文されるが、木葉状入組文が施文される口縁部文様帯には、磨消縄文を成立させるために施文される。浅鉢は、上半部は磨り消し縄文で、下半部に縄文が施文されるボウル形のものと、有段で肩部に幅広の爪形文による木葉文が施文される有孔浅鉢がある。

諸磯ｂ式２段階（古段階）　１段階では、爪形文で描かれる文様が木葉状入組文をモチーフとしたのに対して、本段階では、懸架状入組文が描かれる。前段階と同じく幅広の半截竹管により文様が描かれる。文様帯は、口縁部と胴部に有り、多段化する傾向にある。口縁や頸部に文様帯を区画する部分に、刻みを持つ隆帯が付けられ、浮線文との関連をを窺わせる土器もこの段階に見られる。また、口縁部文様帯の主文様にも爪形文と浮線文が融合して施文されている土器も出現する。地文の縄文は、斜行縄文が多い。この段階に格子目文の土器や北白川下層IIｂ式土器が伴う。浅鉢は、前段階同様の有孔浅鉢の有段のもので、幅広の爪形文による木葉文施文が主となる。

諸磯ｂ式３段階（中段階）　口縁部文様帯に同心円・渦巻き文様を描く。これらの文様は、懸架状入組文が同心円や渦巻き文に変化したものと考えられる。胴部文様帯も多段化し、口縁部文様と同様の意匠が施文される。新しい施文要素として浮線が現れ、爪形文が消失する。浮線には、鋭利なへら状の工具により、刻みが矢羽状に施文される。爪形や、浮線の幅より狭い円形の刺突を浮線上に施文した浮線も見られる。半截竹管による施文は、前段階に比べやや繊細になり、平行沈線を描くのに使われる。平行沈線で描かれるモチーフは、浮線によるものと同様のものから鋸歯状や斜めに施文し、菱形を連結させ間に鈎の手状の文様を意匠する物もある。地文の縄文は、単節斜行縄文を口縁部文様帯から胴部下半まで施文されるものが多い。浅鉢は有孔浅鉢になる。沈線で文様を描くものもあるが無文化する傾向にある。樹液や顔料などで彩色されるものもある。

諸磯ｂ式４段階（中段階）　口縁部文様帯に対弧・入組弧線、風車状弧線文が描かれる。３段階の同心円・渦巻きから次第に入組弧線や対弧状のモチーフへと変化していく。胴部文様は、さらに多段化され間隔が狭くなる傾向にある。胴部中頃や胴部下半部の膨らみ部に口縁部文様の一部がモチーフとして描かれる。胴部については、横位の区画線のみでは前段階との区別は困難なものがある。３段階同様に施文手法は、浮線・半截竹管である。地文の縄文は、３段階と同様の施文である。平行沈線施文の土器では、胴部に狭い間隔で横位の区画線を書き込むため、縄文が磨り消えている土器も多い。浅鉢は胴部の丸くなる有段のもので、無文化するものが多い。

諸磯ｂ式５段階（新段階）　文様モチーフは、対弧文・入り組み弧線が描かれる。

深鉢の器形では靴先状に尖った大波状口縁の土器が現れる。口縁部文様は、屈曲した部分を境にして同様の文様モチーフを二段に描いている（前段階まででは、幅が狭く横線や簡単な文様であった。）本段階の施文手法は、浮線と平行沈線が主体である。浮線は、薄く扁平なものとなり、刻みを施さない浮線のみのものもある。また、平行沈線に刻みや爪形を施文し浮線を意識した施文方法もある。浅鉢は有孔浅鉢で、口縁部直立ぎみに立ち上がり、肩部が水平になる形が多い。

（関根慎二）

(2) 土 製 品

a 土製品の分類

土製品には、ミニチュア土器・土偶・スプーン状土製品・石皿状土製品・磨石状土製品・土製篦状垂飾・団子状土製品・土玉・土製円盤・焼成粘土塊がある。この中には道具として実際に使用可能なスプーン状土製品・土製篦状垂飾・土玉と何に用いられたか推測できない「第二の道具」と呼称されるそれ以外の土製品に大別される。また、土製円盤は土器片の二次利用製品であり、整形方法から他の土製品とは区別される。

そして、焼成粘土塊は土製品を製作途上、ないしは土器製作途上の粘土が何らかの原因で焼成されてしまったものと推定され、他の土製品とは意味合いが異なるが、都合上ここに掲載したものである。

b 土製品各説

［ミニチュア土器］（遺物編第167図・第168図）

中野谷松原遺跡から出土したミニチュア土器は、深鉢形ミニチュア土器、浅鉢形ミニチュア土器、深鉢形手捏土器、浅鉢形手捏土器の４種類に分類できる。深鉢形・浅鉢形ミニチュア土器が実用的なサイズの個体を概ね模倣させていることから、器形、文様要素、文様構成などから時間的な位置付けが可能である。これに対し、手捏土器は無文の資料がほとんどで、かつ、形態も深鉢形か浅鉢形かを判断するのに困難を要する資料がほとんどである。４種類の分類基準を以下に示す。

第１群　深鉢ミニチュア土器（第167図１～４・６・15）
　器形、文様要素・構成が同時期の実用的深鉢土器に準じているもの

第２群　浅鉢ミニチュア土器（第167図８・９・13・14・19、第168図１・２・４～12・22・27・45）
　器形、文様要素・構成が同時期の浅鉢土器に準じているもの（円孔、有段、尾鰭を有する）

第３群　深鉢形手捏土器（第167図５・７・10・12・18、第168図３・13・16・19・25・26・29・31・35・36・38・39）
　形態が深鉢土器に類似し、製作がミニチュア土器に比べてかなり粗雑なもの

第４群　浅鉢形手捏土器（第167図16、第168図14・15・17・18・20・21・23・24・28・30・32～34・37・40～42、補遺追加資料）
　形態が浅鉢土器に類似し、製作がミニチュア土器に比べてかなり粗雑なもの

次に、時期設定が可能な形態ならびに文様要素を有する資料について概観する。

第１群では、１は唯一繊維混入がみられる有尾式期のミニチュア土器で、平行沈線文で鋸歯状文を描出していることから古い様相を呈する。同じＪ―76号住出土の破片資料（第99図27）に同様な器形、文様構成をとるものがある。２は口唇部に１単位の環状突起がみられることから諸磯ｂ式古段階前半に相当する。これに類似する資料は図示していないが、Ｊ―80号住出土で口唇部加工に環状突起を有し、器形は外反平縁で平行沈線文で「つ」字文を器面全体に施文する大型の破片資料があり、これを模倣した

可能性が考えられる。3は底部の形態が1類を呈し、口縁部文様帯に平行沈線文による交互型波状文が施文されていることから、諸磯b式古段階～中段階前半の時期に相当する。交互型波状文が施文され、単頭突起を有する資料は本遺跡では確認されていないが、J－118号住出土の資料（第136図25）は口縁部文様帯に横位弧線文が施文されているが、口縁部が外反し単頭突起を有しており共通点が多い。6は口唇部に2単位ずつ双頭突起、三頭突起を有していることから諸磯b式中段階に相当する。同じJ－56号住出土の資料で口縁部が外反し口唇部に突起を有するのは、第8図2・第9図2・第11図1の3点が認められる。

次に、第2群の浅鉢形ミニチュア土器について概観する。13、14の器形は、ミニチュア土器ならではの規則を踏んでいるが、13の文様施文は忠実に浅鉢独自の文様構成を模倣している。また、第168図1・2は、無文の浅鉢形ミニチュア土器であるが器形は本来の浅鉢の特徴的な箇所を忠実に模倣している。1は第37図3、2は第10図1を模倣している。

このようにみていくと、第1群・第2群は時間的に古い特徴を有する資料がほとんどであり、新しい要素を持つミニチュア土器は認められないことが分かる。新しい段階では、より抽象化された第3群・第4群の手捏土器が製作されるようになっている。こうした「忠実な模倣（第1・2群）」から「抽象（第3・4群）」への変化の要因については、祭祀形態の変容などが想定されるが、出土状態をみても、ほとんど住居址に廃棄された日常的遺物と一緒に出土していることから、具体的理由ははっきりしていない。

この中で注目される例としては、諸磯b式期のJ－117号住居址から出土した第1群に属する深鉢形ミニチュア土器（第167図3）がある。この例は住居の床面直上から出土している。おそらく遺棄されたものと考えられ、住居内で使用されたか収納されていた可能性を示している。

また、多くの小形浅鉢は副葬品として土壙墓に供されているが、こうしたミニチュア土器が副葬された例はまったく認められない。したがって、小形浅鉢と浅鉢形ミニチュア土器とでは、機能や性格が異なっていたものとみなされる。

（中沢信忠）

［土偶］（遺物編第169図・第170図1・2・5）

全部で14点出土している。大きさと形状から以下の3形態に細分される。

Ⅰa形態（第169図5・7・11？・第170図2・5？）：大形でヴァイオリン形を呈するもの。第169図11・第170図5もこの形態の腕部の可能性がある。

Ⅰb形態（第169図1・2・8・9・10）：小形でヴァイオリン形を呈するもの。1・6は腹部が前面に張り出し、妊婦を思わせる作りである。2には唯一、沈線により渦巻き文様等が施文されている。また、8・9・10はいずれも張り付けによる乳房を表現している。

Ⅱa形態（第169図3・170図1）：小形で十字形を呈するもの。3は乳房を貼り付けているが、170図1は腕部を摘み出すことで、乳房を表現している。

本遺跡から出土した土偶は、すべて非自立の板状土偶であり、ヴァイオリン形と十字形を基本としており、短い腕部は付くが、脚部は作られていない。胎土には繊維は混入されない。また、頭部が残存しているものは1例もない。型式学的特徴と土器型式帰属率から諸磯b式期のものと判断される。

現在のところ、県内で土偶が出現するのは諸磯b式期であるとみられ（藤巻・石坂　1996）、本遺跡で

も多出しているヴァイオリン形を呈するもの（Ⅰａ形態・Ⅰｂ形態）が一般的である。また、形態的によく似ているが、腹部表現の異なる十字形を呈するものの出土事例も確認されている。天神原遺跡では大形で十字形のもの（Ⅱｂ形態）が、下宿東遺跡ではⅡａ形態のものが、諸磯ｂ式新段階の住居址から検出されており、十字形の系譜もこの地域では続くようであり、より後出の土偶形態と推定される。

また、2のように沈線文様のある例は、吉井町黒熊第5遺跡にあり、諸磯ｃ式期と推定されている（茂木　1983・1988）。2は諸磯ｂ式中段階に帰属するので、この系譜を遡るものである。こうした「併行期の土器と同じ文様で飾る」土偶は「富装飾タイプ」として、前期後葉に成立することが指摘されている（原田　1997）。本例もこの系譜の一つと捉えられる。

このようなヴァイオリン形・十字形の板状土偶は、「胴体の表現を第一の要素として、顔面の表現がまだ抽象の域を出ない」もので「初期土偶」と位置付けられており（原田　1995）、早期以降形状に大きな変化はない。腹部を張り出させ妊婦を表現した例（11）は、知られておらず、注目される。

［スプーン状土製品］（遺物編第170図3・6）

2点検出されている。スプーン状の土製品で、匙部は大きく湾曲している。実用に耐える大きさと形状を呈する。3は匙部と柄部の基部が残存している。また、6は匙部の先端部のみである。いずれも繊維は混入しない。土器型式帰属率からみて諸磯ｂ式期のものと判断される。

［石皿状土製品・磨石状土製品］（遺物編第170図4）

石皿と磨石を模したミニチュア土製品で、1点ずつ出土している。石皿状土製品は楕円形で縁が有り、掃きだし部が付く、典型的な石皿を模したものである。内面は黒色となっており、沈線により石目を表現している。おそらく結晶片岩の石目を表現したものと推定される。繊維は混入しない。

石皿状土製品とセットになる磨石を模した土製品が同じ層・区から出土している。この磨石状土製品は楕円形を呈し、端部に刺突により小孔が穿たれている。繊維は混入しない。

いずれも土器型式帰属率からみて、諸磯ｂ式期のものである。

［土製箆状垂飾］（遺物編第170図7）

石製の箆状垂飾を模した土製品で1点出土している。基部に小孔が穿孔されており、先端側は半分ほど欠損している。

［団子状土製品］（遺物編第170図8～9）

円形でやや扁平な形状を呈している。石皿状土製品や磨石状土製品のように、石器（丸石か磨石？）のミニチュアの可能性がある。

［土玉］（遺物編第170図10～12）

全部で3点検出されている。いずれも繊維は混入されていない。10・11・12は球形で穿孔されているものである。11はＤ区南東土壙墓群の土壙墓底面から出土しており、副葬品と推定される。ただ、副葬品とした場合、何故半分に欠けて装着できないものが、埋納されるのか疑問である。9・10は土器型式帰属率から諸磯ｂ式期と判断される。また、11は有尾式期の土壙墓群から出土しているので、この時期

のものである可能性が高い。

［焼成粘土塊］（遺物編第171図）

全部で14点検出されている。粘土を手で握った状態で焼成されたもので、形状はいずれも不整形である。繊維が混入しているものはなく、出土遺構の土器型式帰属率からみてもすべて諸磯ｂ式期のものと判断される。

こうした焼成粘土塊は松井田町行田梅木平遺跡214号土坑（諸磯ｂ式新段階）からもまとまって出土しており、単なる偶然の産物ではなく、何らかの意図で焼成された「道具」であった可能性が高い。

［土製円盤］（遺物編第172図・第173図）

全部で57点検出されている。第172図１～21は繊維混入の土器片（有尾式）を円形に整形したものである。それ以外は繊維が混入していない諸磯ａ～諸磯ｂ式の土器片を用いている。多くは諸磯ｂ式の土器片である。第172図28は諸磯ａ式の土器片を用いている。

Ｊ―30号住居址出土の４例（第172図２～４・22）は土器型式帰属率から有尾式期のものと推定される。それ以外で住居址出土のものは、繊維の混入の有無にかかわらず、土器型式帰属率からみて諸磯ｂ式期のものと判断される。したがって、繊維混入土器を利用した土製円盤も諸磯ｂ式期の人間が再利用したものであり、単に土器片の文様だけからは帰属時期が決定できない。

ｃ　小　　結

本遺跡から検出されたミニチュア土器・土偶・土製品は、一部は有尾式期のものであるが、大部分は諸磯ｂ式期のものである。

有尾式期のミニチュア土器は、Ｊ―76号住居址から出土した第167図１のみである。この時期にはすでに副葬用の小形深鉢形土器（第34図１・２・８・９）が製作されており、これをさらに小形化したものである。これら副葬用の小形深鉢形土器も、容器としての実用性のない副葬用品として製作されていることから、さらに小形のミニチュア土器も実用的用途で製作されたものではなかったと推定される。また、土製品でもＤ―1030号土壙墓から副葬品（？）として出土した土玉（第170図11）のみである。なお、有尾式土器を用いた土製円盤も実は諸磯ｂ式期のものである。こうしてみると、有尾式期の土製品は死者に対する葬送用品として使用され始めたものと考えられる。

諸磯ｂ式期になると、ミニチュア土器・土偶・土製品が激増する。ミニチュア土器は深鉢形土器よりも浅鉢形土器が多くなる。また、丁寧に製作されている模倣形態のものより、粗雑で抽象的な手捏土器の方が多い。サイズもより小形化し、どんな器種の模倣か不明な抽象化の著しい例も多数存在している。この変化はミニチュア土器を用いた祭祀の形態の変化を暗示している。土偶が極めて抽象化された存在であることと関連する現象と推定される。しかし、出土場所を調べると土偶・ミニチュア土器とも土壙墓から出土したものはなく、ほとんどが住居址に廃棄された遺物と一緒に出土している。

土偶はミニチュア土器に比べ少数である。この時期に出現する土偶はヴァイオリン形・従事形の板状土偶で、諸磯ｂ式期では一般的な形態のものである。なお、土偶はなぜか頭部がすべて欠落している。

また、土製品もミニチュア土器に比べると少数である。この中には、実用品の可能性のあるスプーン

状土製品も含まれている。注目されるのは石皿状土製品と磨石状土製品（第170図４）である。サイズからみてミニチュア土器とセットで用いられたものと考えられる。また、土製円盤は有尾式土器の破片を利用したものも多く、時期を誤認するおそれがあり、注意が必要な遺物である。

これら土製品はいずれも、住居址覆土から廃棄遺物と一緒に出土しており、用途を推定することのできる出土状態は確認されなかった。しかし、実用的用途が想定されないものが多く、儀礼や祭祀等に用いられた「第二の道具」であったと推定される。有尾式期から諸磯ａ式期にはごく僅かにしか認められなかった「第二の道具」がまとまって出土した意味は重要である。情報として知っているレベルと実際にそれを使用するレベルの差は大きい。生活基盤の安定と定住生活の強化が背景にあったと考えられる。

（大工原　豊）

第167図	分類	地　文	文様要素	文　様	胎　　土	色　　調	残存状態・重量	内外調整	備　　考
1	1	LR 5㎜	巾5㎜平行沈線文	鋸歯状文	繊維含、白色粒、礫	にぶい褐7.5YR	完形1／2、80	ナデ△	
2	1	L 4㎜			白色（極小、小）・黒色粒、礫	黄灰2.5Y	口縁部1／4欠、80	タテ・ヨコナデ△	
3	1		巾2㎜平行沈線文	交互型波状文	白色・黒色粒、礫	にぶい橙7.5YR	口縁部1／4欠、90	タテナデ、ヨコミガキ○	煤付着
4	1				白色粒、黒雲母、礫	黒褐2.5Y	口縁部～頸部1／5、14	ナデ△	
5	3				白色・黒色粒	にぶい黄橙10YR	完形1／2、20	ナデ△	煤付着
6	1				白色（極小、小）・黒色粒、黒雲母、礫	橙7.5YR	完形、60	ヨコナデ△	煤付着
7	3		巾4㎜平行沈線文		白色・黒色粒、黒雲母	灰白10YR	完形1／4、14	タテ・ヨコミガキ△	
8	2		棒状工具	縦位弧線文	白色・黒色粒、黒雲母、礫	明赤褐5YR	完形2／3、40	ナデ△	円孔
9	2		巾2.5㎜平行沈線文	鋸歯状文	白色・黒色粒	黄灰2.5Y	完形1／3、20	ヨコナデ○	
10	3				白色粒、黒雲母、礫	にぶい橙5YR	完形1／3、25	ナデ△	
11									
12	3				白色・黄色・黒色粒、黒雲母、礫	暗灰黄2.5Y	口縁部全周、24	ナデ△	
13	2		巾2㎜、間隔2㎜爪形文	横位弧線文,三角文	白色（極小、小）・黄色・黒色粒	灰白10YR	完形2／3、100	ヨコナデ△	円孔
14	2				白色（極小、小）・黒色粒、黒雲母	明赤褐5YR	口縁部欠、72	ナデ△（外）ミガキ○	円孔
15	1	L2.5㎜	巾2㎜平行沈線文		白色（極小、小）・黄色（小）・黒色粒、黒雲母	浅黄2.5Y	胴部全周、85	ヨコケズリ	
16	4		棒状工具	渦巻文	白色・赤色・黒色粒	浅黄橙7.5YR	完形、40	ヨコナデ△	円孔
17									
18	3	RL 3㎜			白色・黄色粒（極小、小）、黒雲母	にぶい黄橙10YR	胴下部1／4、14	ナデ△	煤付着
19	2				白色・黒色粒、黒雲母	淡黄2.5Y	胴下部ほぼ全周、91	ミガキ△（外）ナデ△	
第168図									
1	2				白色・黄色粒、砂、礫	暗灰黄2.5Y	完形、120	ナデ△（外）ヨコケズリ	
2	2				白色・黒色粒、黒雲母、砂	淡黄2.5Y	完形、165	ナデ△（外）ナデ△	煤付着
3	3				白色粒	褐灰10YR	口縁部1／8、4	ナデ○	
4	2				白色・黄色粒、黒雲母、礫	暗灰黄2.5Y	完形、1／6、20	ナデ△（外）ナデ△	
5	2		棒状工具		白色・黄色・黒色粒、黒雲母	暗灰黄2.5Y	完形、1／4、10	ナデ△	
6	2				白色・黄色・黒色粒、黒雲母	黄灰2.5Y	口縁部1／2欠、35	ナデ△（外）ナデ△	
7	2		棒状工具		白色・黄色・黒色粒、黒雲母	淡黄2.5Y	口縁部1／6、3	ナデ△	
8	2				白色・赤色粒、砂	黄灰2.5Y	完形、1／6、11	ヨコミガキ△(外)ナデ○	
9	2				白色・赤色粒	黒褐2.5Y	完形、1／6、7	ナデ○（外）ナデ△	
10									
11	2				白色・黒色粒、黒雲母	黄灰2.5Y	完形、1／5、15	ナデ△（外）ナデ△	
12	2				白色・黒色粒、黒雲母	黄灰2.5Y	完形、1／6、10	ナデ△（外）ナデ△	
13	3				白色粒、礫	淡黄2.5Y	完形、20	ナデ△（外）ナデ△	
14	4		巾1.5㎜櫛歯文	交互型波状文	白色・黒色粒、黒雲母	浅黄橙10YR	完形、22	ナデ△	
15	4				白色・黒色粒、黒雲母、礫	浅黄橙10YR	完形、25	ナデ△（外）ナデ△	円孔
16	3				白色（極小、小）・黄色粒、黒雲母、砂	黄灰2.5Y	完形、26	ナデ△（外）ナデ△	
17	4				白色・黄色粒、黒雲母	灰黄2.5Y	完形、22	ナデ△（外）ナデ△	
18	4				白色・黒色粒、黒雲母、砂	浅黄橙7.5YR	口縁部1／6欠、32	ナデ△(外)ヨコミガキ△	
19	3				白色粒、雲母	黄灰2.5Y	完形、1／2、25	ナデ△（外）ナデ×	
20	4				白色・黒色粒、黒雲母、砂、礫	浅黄2.5Y	口縁部3／4欠、39	ナデ△（外）ナデ△	
21	4				白色・黄色（小）・黒色粒、黒雲母、砂	灰白2.5YR	口縁部1／4欠、30	ナデ△（外）タテナデ△	
22	2				白色粒	黄灰2.5Y	口縁部1／6、3	ナデ○（外）ナデ○	円孔
23	4				白色・赤色・黒色粒、黒雲母	灰白2.5YR	完形、20	ナデ△（外）ナデ△	
24	4				白色粒、黒雲母、砂	灰黄褐10YR	完形、12	ナデ△（外）ナデ△	
25	3				白色粒、黒雲母	淡黄2.5Y	底部1／2、12	ナデ△（外）ナデ△	
26	3				白色粒、黒雲母	灰白2.5YR	底部3／4、14	ナデ△	
27	2				白色粒、砂	にぶい赤褐5YR	底部1／4、11	ナデ△（外）ナデ△	
28	4				白色粒、黒雲母、砂	浅黄橙7.5YR	完形、16	ナデ△（外）ナデ△	
29	3		厚1㎜浮線文（無文）	梯子状文	白色粒、黒雲母	灰黄2.5Y	底部全周、15	ナデ△	
30	4				白色粒、黒雲母、砂	黒褐2.5Y	口縁部1／2欠、11	ナデ△（外）ナデ△	
31	3				白色粒、	浅黄橙10YR	完形、11	ナデ△（外）ナデ△	
32	4				白色粒、砂	黄灰2.5Y	完形、1／2、8	ナデ△（外）ナデ△	
33	4				白色・黒色粒、砂	浅黄橙10YR	完形、16	ナデ△（外）ナデ△	
34	4				白色・黒色粒、黒雲母、砂	黄灰2.5Y	底部全周、8	ナデ△（外）ナデ△	
35	3		巾1㎜平行沈線文		白色粒、砂	橙7.5YR	底部2／3、8	ナデ△（外）ナデ△	
36	3				白色・黒色粒、砂	黄灰2.5Y	底部全周、8	ナデ△（外）ナデ△	
37	4				白色・黒色粒	にぶい黄橙10YR	底部全周、5	ナデ△（外）ナデ△	
38									
39	3				白色粒、黒雲母、砂、礫	浅黄橙10YR	完形、10	ナデ△（外）ナデ×	鼎形土器の脚か？
40	4				白色（極小、小）・黒色粒、黒雲母	黄灰2.5Y	完形、10	ナデ△（外）ナデ△	
41	4				白色・黒色粒、砂	灰白2.5YR	底部欠、12	ナデ△（外）ナデ△	
42	4				白色・黒色粒	橙7.5YR	完形、6	ナデ△	
43			結節浮線文		白色・黒色粒	明赤褐5YR	完形、5	ナデ○	装飾部分か？
44									
45	2				白色・黒色粒、砂、礫	淡黄2.5Y	完形、22	ナデ△（外）ナデ△	

○丁寧　△やや丁寧　×粗い

第68表　ミニチュア土器観察

(3) 石　　器

a　石器組成

［分析対象データの確認］

遺跡全体の石器組成　遺跡から出土した石器類（石器・剝片・原石・棒状礫）は、全部で22,680点である。また、総重量は3,568.19kgである。また、内訳は第69表～第70表及び、第42図、第43図のとおりである。膨大な量の石器が本遺跡から検出されている。一部は中・後期の石器を含むが大部分は前期中葉～後葉のものであり、ほぼこの時期の組成と見なしても差し支えないレベルである。

住居址全体の石器組成　中・後期も含むすべての住居址出土の石器類は15,441点（遺跡全体の68.1％）、重量は2,218.59kg（同62.2％）である。また、内訳は第71表～第72表及び、第42図、第43図のとおりである。全体的にスケールダウンしているが、それでも膨大な量の石器組成であり、前期中葉～後葉の石器組成とみなされる。通常の石器組成分析は、このレベル止まりの場合が多く、さらに細かい時期ごとの石器組成は示されることが極めて少ない。

遺跡全体と住居址全体の石器組成の比較　住居址出土石器は土坑・ピット・グリッド出土石器を含む遺跡全体の石器より、土器との共伴関係が明確である。そのため、土器型式帰属率が安定しており、時期的変化を示すには精度が高い。しかし、土壙墓など特定の遺構に伴う遺物は分析対象から除外されるため、一部の少量遺物については、分析結果が異なる点が生じる可能性がある。

この両者の各種石器組成を比較したものが、第42図、第43図のグラフである。両者の組成はいずれも同じ傾向を示しており、大きな違いは認められないことが分かる。したがって、住居址出土石器を用いた分析結果を、遺跡の分析結果と見なすことができる。

分析対象住居址の選択　そもそも、石器組成分析では少量遺物の傾向を明らかにするのではなく、多量出土する石器の変化を主眼としているため、大きな傾向がはっきりすれば良い。そのため、今回の分析にはより時期が明確な住居址全体の石器組成を用いて、時期別変化を示すことにする。

第44図は住居址の有尾式と諸磯ｂ式の土器型式比率（帰属率）によるセリエーションを行ったものである。このグラフに見られるように両時期とも60％前後から急激にその割合を減じ、20％前後で横這い状態となる。そこで、原則として有尾式・諸磯ｂ式とも60％以上の帰属率を有する住居址出土石器を、分析対象に用いることにする。なお、60％では少し低率過ぎると思うかもしれないが、高率となるものが少ないのは、時期不明のものや、二次的廃棄行為で混入してしまった土器片が含まれているためであり、時期が明らかなものだけで型式比率を算出すれば実際にはもう少し型式比率が高くなるのであり、大きな問題はないと判断される。

ちなみに、各時期ともちょうど39軒の住居址が対象となり、比較する上でも好都合なものとなった。以下、それぞれの時期の石器組成の特徴を示し、最後に両者を比較・検討する。

石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	1,393	4,078	830	142	6,443
B　類	3,642	6,325	253	19	10,239
C 1　類	2,738				2,738
C 2　類	1,232				1,232
D　類	407	1,210		11	1,628
E　類	217	61	2	8	288
F　類	66	37	4	5	112
合　計	9,695	11,711	1,089	185	22,680

第69表　遺跡全体の石器系列組成

石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合計(kg)
A　類	9.56	16.59	14.66	8.96	49.77
B　類	185.95	191.8	46.19	5.62	429.56
C 1　類	2341.41				2341.41
C 2　類	241.12				241.12
D　類	391.68	67.84		1.37	460.89
E　類	36.1	2.05	1.09	3.37	42.61
F　類	1.83	0.55	0.14	0.31	2.83
合　計	3207.65	278.83	62.08	19.63	3568.19

第70表　遺跡全体の石器系列重量組成

石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	1,032	3,068	631	84	4,815
B　類	2,576	4,185	146	9	6,916
C 1　類	1,595	0	0	0	1,595
C 2　類	818	0	0	0	818
D　類	261	774	0	0	1,035
E　類	147	40	1	4	192
F　類	40	24	3	3	70
合　計	6,469	8,091	781	100	15,441

第71表　住居址全体の石器系列組成

石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合計(kg)
A　類	7.31	12.45	10.82	2.91	33.49
B　類	121.49	118.87	21.69	3.44	265.49
C 1　類	1455.16				1455.16
C 2　類	182.73				182.73
D　類	211.78	39.75			251.53
E　類	23.67	1.44	0.55	2.87	28.53
F　類	1.07	0.29	0.13	0.17	1.66
合　計	2003.21	172.8	33.19	9.39	2218.59

第72表　住居址全体の石器系列重量組成

石器系列	器　種	個　数
A　類	石鏃	237
	石錐	98
	ＳｃＡ	636
	石匙Ａ	77
	ＲＦＡ	299
	楔形石器	36
	円盤状石器	1
	異形石器	1
	石槍	7
	石匙状石器	1
B　類	打製石斧	1,004
	ＳｃＢ	2,273
	石匙Ｂ	134
	ＲＦＢ	214
	三角錐形石器	2
	円盤状石器	13
	ミニチュア打斧	1
	礫器	1
Ｃ１　類	磨石	474
	凹石	1,666
	石皿	391
	球石	100
	部分研磨石器	99
	スタンプ形石器	3
	特殊磨石	5
Ｃ２　類	敲石	247
	砥石	979
	台石	6
D　類	棒状礫	351
	多孔石	35
	丸石	8
	石棒	8
	槍状石器	4
	石製深鉢	1
E　類	磨製石斧	216
	磨製石器	1
F　類	ストーンリタッチャー	9
	ケツ状耳飾り	14
	垂飾	15
	石製円盤	14
	管玉	5
	勾玉	1
	石製品	5
	有孔石製品	1
	箆状石製品	1
	Ｆ類(溶岩)	1
	合　計	9695

第73表　遺跡全体の石器器種組成

石器系列	器　種	重量(kg)
A　類	石鏃	0.3
	石錐	0.7
	ＳｃＡ	5.77
	石匙Ａ	0.62
	ＲＦＡ	1.69
	楔形石器	0.16
	円盤状石器	0.002
	異形石器	0.003
	石槍	0.25
	石匙状石器	0.06
B　類	打製石斧	66.28
	ＳｃＢ	107.89
	石匙Ｂ	3.1
	ＲＦＢ	6.9
	三角錐形石器	0.47
	円盤状石器	1.07
	ミニチュア打斧	0.001
	礫器	0.24
Ｃ１　類	磨石	198.43
	凹石	779.39
	石皿	1336.09
	球石	16.9
	部分研磨石器	6.34
	スタンプ形石器	1.05
	特殊磨石	3.18
Ｃ２　類	敲石	49.48
	砥石	135.22
	台石	56.45
D　類	棒状礫	32.65
	多孔石	269.75
	丸石	86.88
	石棒	1.12
	槍状石器	0.19
	石製深鉢	1.09
E　類	磨製石斧	36.07
	磨製石器	0.031
F　類	ストーンリタッチャー	0.65
	ケツ状耳飾り	0.14
	垂飾	0.44
	石製円盤	0.24
	管玉	0.04
	勾玉	0.003
	石製品	0.1
	有孔石製品	0.17
	箆状石製品	0.03
	Ｆ類(溶岩)	0.017
	合　計	3207.65

第74表　遺跡全体の石器器種重量組成
※砥石は砂岩礫を含む

石器系列	器　種	個　数
A　類	石鏃	166
	石錐	72
	ＳｃＡ	475
	石匙Ａ	59
	ＲＦＡ	229
	楔形石器	27
	円盤状石器	1
	異形石器	
	石槍	2
	石匙状石器	1
B　類	打製石斧	653
	ＳｃＢ	1,644
	石匙Ｂ	102
	ＲＦＢ	167
	三角錐形石器	2
	円盤状石器	7
	ミニチュア打斧	
	礫器	1
Ｃ１　類	磨石	264
	凹石	976
	石皿	244
	球石	46
	部分研磨石器	60
	スタンプ形石器	3
	特殊磨石	2
Ｃ２　類	敲石	159
	砥石	655
	台石	4
D　類	棒状礫	230
	多孔石	18
	丸石	2
	石棒	7
	槍状石器	3
	石製深鉢	1
E　類	磨製石斧	146
	磨製石器	1
F　類	ストーンリタッチャー	8
	ケツ状耳飾り	7
	垂飾	6
	石製円盤	9
	管玉	3
	勾玉	1
	石製品	5
	有孔石製品	
	箆状石製品	1
	合　計	6469

第75表　住居址全体の石器器種組成

石器系列	器　種	重量(kg)
A　類	石鏃	0.21
	石錐	0.52
	ＳｃＡ	4.46
	石匙Ａ	0.48
	ＲＦＡ	1.42
	楔形石器	0.11
	円盤状石器	0.02
	異形石器	
	石槍	0.03
	石匙状石器	0.06
B　類	打製石斧	41.28
	ＳｃＢ	71.37
	石匙Ｂ	2.22
	ＲＦＢ	5.39
	三角錐形石器	0.47
	円盤状石器	0.53
	ミニチュア打斧	
	礫器	0.23
Ｃ１　類	磨石	109.25
	凹石	452.18
	石皿	881.76
	球石	6.05
	部分研磨石器	3.55
	スタンプ形石器	1.05
	特殊磨石	1.32
Ｃ２　類	敲石	31.89
	砥石	98.39
	台石	52.45
D　類	棒状礫	20.94
	多孔石	185.77
	丸石	2.82
	石棒	0.98
	槍状石器	0.17
	石製深鉢	1.1
E　類	磨製石斧	23.64
	磨製石器	0.03
F　類	ストーンリタッチャー	0.6
	ケツ状耳飾り	0.039
	垂飾	0.12
	石製円盤	0.15
	管玉	0.03
	勾玉	0.0025
	石製品	0.1
	有孔石製品	
	箆状石製品	0.03
	合　計	2003.21

第76表　住居址全体の石器器種重量組成
※砥石は砂岩礫を含む

石器系列	器　種	個　数
I　類	Ob	4,694
	Ch	1,287
	HSh	100
	BAn	496
	その他Ⅰ類	97
II　類	Sh	8,686
	HSS	31
	Sch	38
	その他II類	10
III a　類	An	3,918
III b　類	SS	962
	Tf	23
IV　類	Sc	1,901
V　類	GrR	334
	Se	20
	その他V類	7
VI　類	滑石	33
	石英	18
	珪化木	8
	翡翠	1
	下呂石	3
	その他	13
	合　計	22,680

第77表　遺跡全体の石材個数組成

石器系列	器　種	重量(kg)
I　類	Ob	23.86
	Ch	14.31
	HSh	1.51
	BAn	21.45
	その他Ⅰ類	3.39
II　類	Sh	332.92
	HSS	1.49
	Sch	1.14
	その他II類	0.91
III a　類	An	2691.31
III b　類	SS	92.95
	Tf	1.85
IV　類	Sc	324.59
V　類	GrR	51.03
	Se	0.7
	その他V類	0.085
VI　類	滑石	0.6
	石英	3.13
	珪化木	0.064
	翡翠	0.0003
	下呂石	0.017
	その他	0.88
	合　計	3568.19

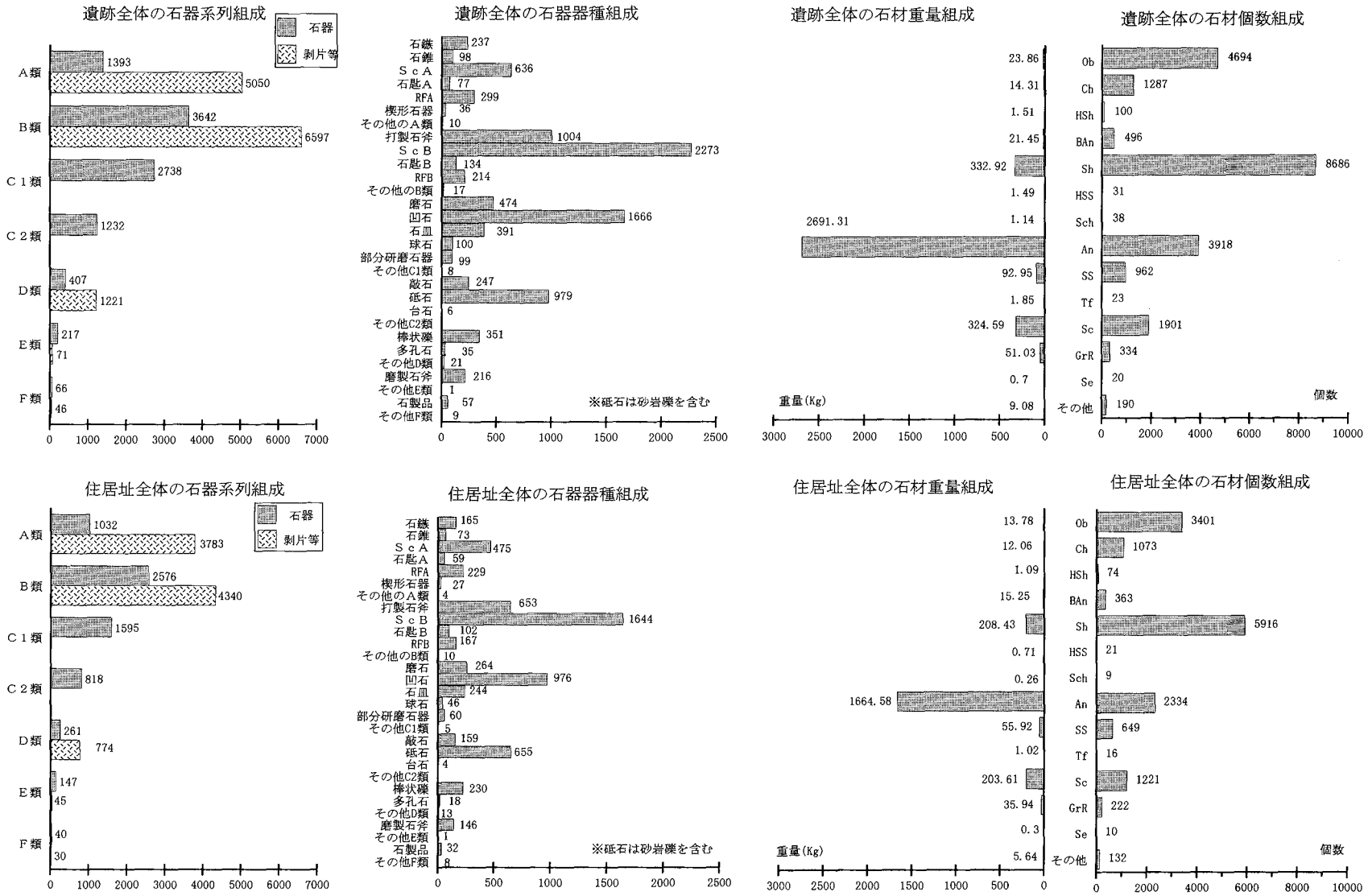
第78表　遺跡全体の石材重量組成

石器系列	器　種	個　数
I　類	Ob	3,401
	Ch	1,073
	HSh	74
	BAn	363
	その他Ⅰ類	69
II　類	Sh	5,916
	HSS	21
	Sch	9
	その他II類	8
III a　類	An	2,334
III b　類	SS	649
	Tf	16
IV　類	Sc	1,221
V　類	GrR	222
	Se	10
	その他V類	2
VI　類	滑石	24
	石英	10
	珪化木	7
	翡翠	1
	下呂石	1
	その他	10
	合　計	15,441

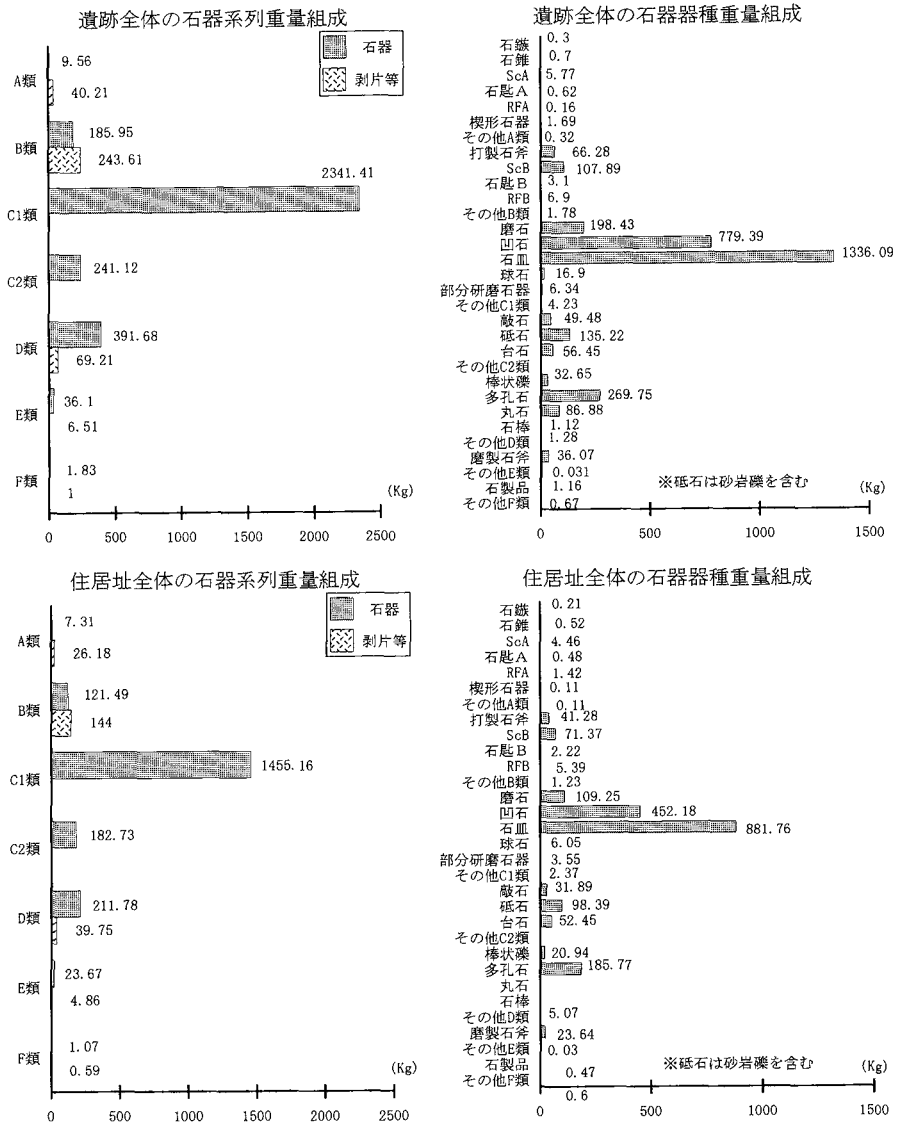
第79表　住居址全体の石材個数組成

石器系列	器　種	重量(kg)
I　類	Ob	13.78
	Ch	12.06
	HSh	1.09
	BAn	15.25
	その他Ⅰ類	1.739
II　類	Sh	208.43
	HSS	0.71
	Sch	0.26
	その他II類	0.787
III a　類	An	1664.58
III b　類	SS	55.92
	Tf	1.02
IV　類	Sc	203.61
V　類	GrR	35.94
	Se	0.3
	その他V類	0.014
VI　類	滑石	0.49
	石英	1.97
	珪化木	0.059
	翡翠	0.003
	下呂石	0.013
	その他	0.57
	合　計	2218.595

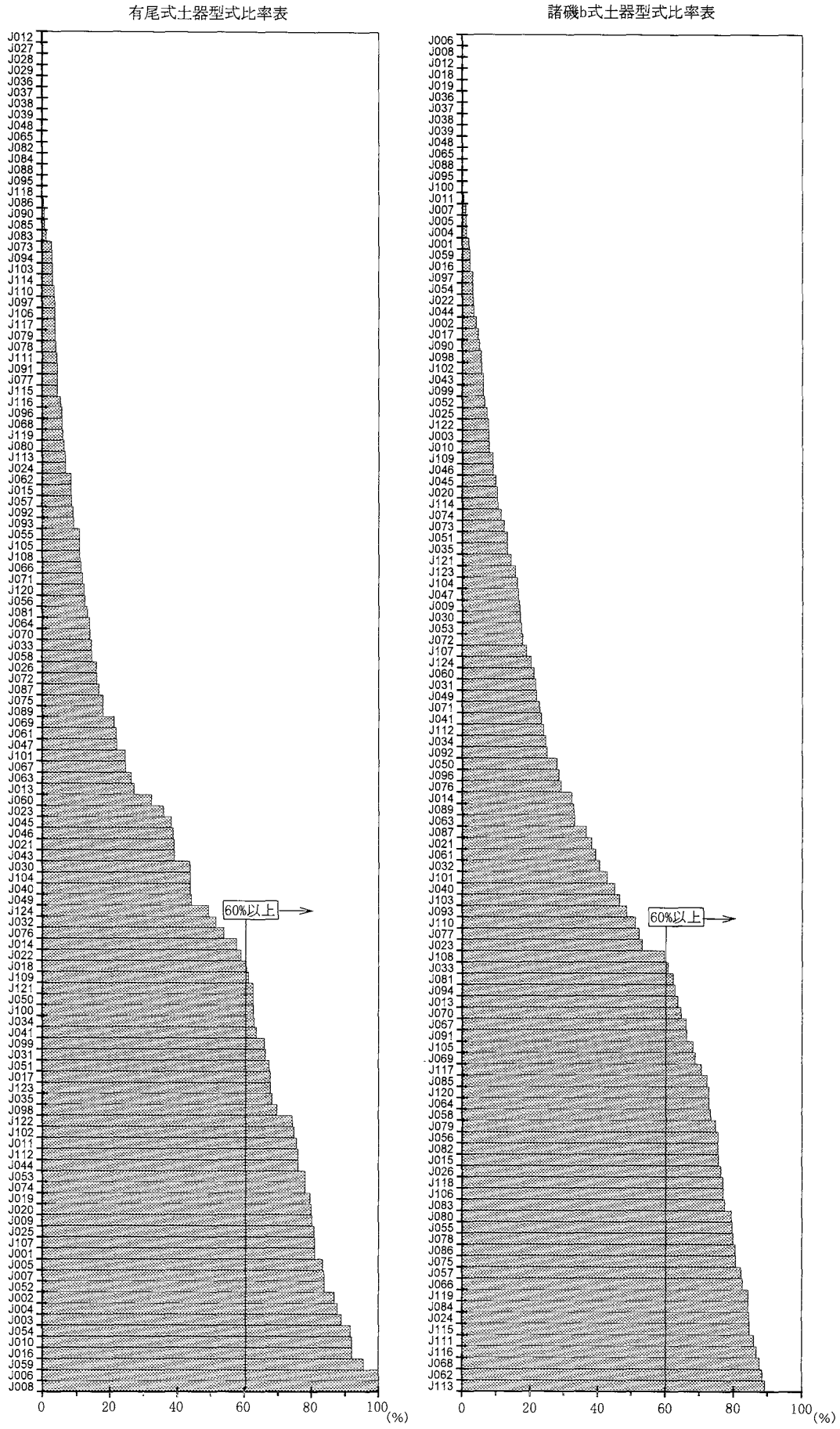
第80表　住居址全体の石材重量組成



第42図　遺跡・住居址全体の石器組成



第43図　遺跡・住居址全体の石器組成



第44図　有尾式・諸磯ｂ式の土器型式比率

［有尾式期の石器組成］

分析の対象となった住居址は39軒である。そして、対象となる資料は2,440点、544.33kgである。なお、ここで軒と数えたのは、重複・拡張などを含む複数の住居址がまとまった単位であり、正確には39カ所の廃棄（一部遺棄も含まれると推定されるが）場所として理解した方が良い単位である。

石器系列組成（第45図・第81表）　系列組成の分析では、実際に遺跡で石器製作が行われるA類（押圧剝離系列）とB類（直接打撃系列）の分析が中心となる。石器製作が活発か・低調か、石器消費が活発か・低調か、でパターン化することができる。(註)

A類では製作指数3.48、1軒当たりの点数が石器2.4点、剝片類8.2点であり、低調な石器製作的パターンを示している。B類では製作指数1.49、1軒当たり石器14.5点、剝片類21.6点であり、やや低調な石器製作・消費的パターンを示している。つまり、A類の方が石器製作の頻度が高かったことが分かる。また、全体としても石器使用頻度が低かったか、通算居住期間が短かったと推定される。

（註）これまでも石器製作と消費のパターン化とそれを用いた分析について、早期から晩期に至るまで実際に実施してきており、有効性についてもある程度示している（大工原ほか 1994など）。これまでのパターン化では客観的でない部分も存在していたため、今回は客観的な基準を提示することにする。

A類・B類について、石器（T）と剝片類（F：石核・原石を含む。以下同）の比率は、AF/AT、BF/BT などと示すことができる。この指数を製作指数と呼ぶことにする。この指数がF/T＜0.5を「石器消費的パターン、0.5≦F/T＜1.5を「石器製作・消費的パターン」、F/T＞1.5を「石器製作的パターン」と呼ぶことにする。また、ここでは1軒当たりの各属性の数量が10点未満の場合を「低調なパターン」と、10～30点を「やや低調なパターン」、30点以上を「活発なパターン」と呼ぶことにする。なお、この基準数値は暫定的なものであり、遺跡の性格などにより、あるいはデータの蓄積結果により変更される可能性もある。

石器器種組成（第45図・第85表）　対象となる狭義の石器は1,200点である。A類の器種は非常に少ない。石鏃は19点であり、スクレイパーA類（以下 ScA と呼称）も33点に過ぎず、住居址(註) 1軒当たり1点未満である。これに対し、B類ではスクレイパーB類（以下 ScB）431点と圧倒的に多く、それ以外の器種は総じて少ない。例えば、打製石斧は55点と ScB の12.8％に過ぎない。したがって、直接打撃系列（B類）では、定型化した打製石斧や石匙B類よりも、ScB を主たる器種として製作・使用していたことが理解される。

C1類では凹石が209点と卓越しており、磨石は57点と1/4程度である。また、石皿は33点であり、凹石・磨石（以下凹石類と呼称）の12.4％である。即ち、石皿1点に8点の凹石類が対応することになる。また、凹石類は住居址1軒当たり6.8個、石皿は0.8個となる。石皿1つに凹石類1つが対応すると考えた場合、石皿は凹石類の8倍程度長持ちしていたことになる。石器の寿命は大きく異なっていたことが分かる。

砥石（C2類）も非常に多い器種である。磨製石斧（E類）も42点組成していることから、一部はこれを対象とした砥石と推定される。

（註）石器の分析では特別にことわりのない限り住居址とは、遺物が廃棄された場所を示す単位を指す。構築物としての住居建物、世帯としての住居（家族）を暗示する単位ではない。

石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	92	238	69	13	412
B　類	564	812	27	3	1,406
C 1　類	321	0	0	0	321
C 2　類	132	0	0	0	132
D　類	42	69	0	0	111
E　類	42	5	0	1	48
F　類	7	3	0	0	10
合　計	1,200	1,127	96	17	2,440

第81表　有尾式60%以上の住居址全体の石器系列組成

石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	843	2,495	485	58	3,881
B　類	1,621	2,718	99	6	4,444
C 1　類	995	0	0	0	995
C 2　類	588	0	0	0	588
D　類	189	642	0	0	831
E　類	84	31	0	2	117
F　類	28	17	3	3	51
合　計	4,348	5,903	587	69	10,907

第82表　諸磯ｂ式60%以上の住居址全体の石器系列組成

石材系列	石　材	個　数	重量(kg)
I　類	Ob	337	1.17
	Ch	40	0.35
	HSh	15	0.32
	BAn	61	1.97
	Ja	5	0.1782
II　類	Sh	1219	44.51
	HSS	2	0.08
	Sch	1	0.05
	Ho	3	0.596
III a　類	An	470	444.48
III b　類	SS	109	10.84
	Tf	6	0.32
IV　類	Sc	122	29.23
V　類	GrR	44	10.19
	Se	1	0.01
	蛇灰岩		
VI　類	GTf	1	0.0034
	ヒスイ	1	0.0037
	滑石	3	0.031
合　計		2440	544.3323

第83表　住居址の石材重量，個数組成
（有尾式60%以上）

石材系列	石　材	個　数	重量(kg)
I　類	Ob	2642	11.04
	Ch	966	10.52
	HSh	48	0.66
	BAn	259	11.39
	Ja 他	58	2.42
II　類	Sh	3792	131.41
	HSS	18	0.57
	Sch	8	0.22
	Ho 他	2	0.06
III a　類	An	1464	880.08
III b　類	SS	467	37.61
	Tf	7	0.68
IV　類	Sc	979	115.18
V　類	GrR	145	19.19
	Se	8	0.19
	蛇灰岩	2	0.014
VI　類	滑石	19	0.43
	石英	9	0.97
	珪化木他	14	0.33
合　計		10907	1222.96

第84表　住居址の石材重量個数組成
（諸磯ｂ式60%以上）

石材重量組成・石材個数組成（第45図・83表）　石材重量組成では、安山岩が444.48kgと突出して多い。形状選択系列（Ｃ１類）の石器が安山岩製で、１点の平均重量は945.7ｇと比較的重い石器が多いことによる。また、入手も容易であったことにも帰因すると考えられる。それ以外の石材では、頁岩44.5kg、結晶片岩29.23kg、砂岩10.84kg、緑色岩類10.19kgと、重い石材でも数十kg程度である。これらの石材はいずれも鏑川産の石材である。(註)

石材個数組成では、頁岩1,219点と最も多い。しかし、重量は44.51kgと安山岩のほぼ１/10である。剝片化・石器化されているので、個数は非常に多いが、１点の平均状量は36.5ｇと比較的軽い。また、黒曜石は337点で1.17kgである。１点の平均重量は3.5ｇと頁岩の１/10以下である。

（註）石材の原産地及び入手地点については、数年前から河川調査・露頭調査・プレパラート法による分析などを行ってきた。その結果、現在ではある程度入手地点を特定できる段階に至っている（磯貝・大工原 1993、磯貝1994、磯貝1995）。特に、多用される安山岩については、大部分が最寄りの碓氷川産（約2.1km）であることが判明している。

石器系列	器　種	個　数
A　類	石鏃	19
	石錐	9
	ＳｃＡ	33
	石匙Ａ	6
	ＲＦＡ	23
	楔形石器	2
	その他Ａ類	
B　類	打製石斧	55
	ＳｃＢ	431
	石匙Ｂ	31
	ＲＦＢ	45
	その他Ｂ類	2
Ｃ１　類	磨石	57
	凹石	209
	石皿	33
	球石	13
	部分研磨石器	8
	その他C1類	1
Ｃ２　類	敲石	26
	砥石	105
	台石	1
	その他C2類	
D　類	棒状礫	36
	多孔石	5
	その他Ｄ類	1
E　類	磨製石斧	42
	その他Ｅ類	
F　類	石製品	4
	その他Ｆ類	3
	合　計	1200

第85表　住居址の石器器種組成
（有尾式60％以上）

石器系列	器　種	個　数
A　類	石鏃	132
	石錐	54
	ＳｃＡ	402
	石匙Ａ	44
	ＲＦＡ	188
	楔形石器	19
	その他Ａ類	4
B　類	打製石斧	515
	ＳｃＢ	950
	石匙Ｂ	56
	ＲＦＢ	93
	その他Ｂ類	7
Ｃ１　類	磨石	163
	凹石	595
	石皿	165
	球石	26
	部分研磨石器	42
	その他C1類	4
Ｃ２　類	敲石	114
	砥石	472
	台石	2
	その他C2類	
D　類	棒状礫	166
	多孔石	11
	その他Ｄ類	12
E　類	磨製石斧	83
	その他Ｅ類	1
F　類	石製品	26
	その他Ｆ類	2
	合　計	4348

第86表　住居址の石器器種組成
（諸磯ｂ式60％以上）
※砥石は砂岩礫を含む

［諸磯ｂ式期の石器組成］

分析の対象となった住居址は39軒である。対象資料は10,907点、1,222.96kgであり、有尾式期に比べ個数で4.5倍、重量で2.2倍に増加している。ただし、この数量をもって単純に装備（石器組成）が増加したとは言えない。時間軸の長さの違いや、住居址の深さなどの違いもあるからである。最終的に土器の型式学的分析の成果と照合する必要がある。

石器系列組成（第45図・第82表）　A類では製作指数3.60、１軒当たりの点数が、石器21.6点、剝片類77.9点であり、活発な石器製作的パターンを示している。B類では製作指数1.74、１軒当たり石器41.6点、剝片類72.4点であり、活発な石器製作的パターンを示している。A類・B類ともに石器製作の頻度が高かったことが分かる。

それ以外にも非機能系列(D類)も製作指数3.41、１軒当たり石器4.8点、剝片類16.5点と見かけ上は、やや低調な石器製作パターンを示している。しかし、D類の剝片類には結晶片岩の破砕礫が多数含まれており、石器は全く剝離を伴わない棒状礫が大部分であるので、実態は棒状礫と破砕された結晶片岩の集合であり、打製系列の石器製作とは異質なものである。

機能系列（E類）では、製作指数0.37であり、低調な消費的パターンを示している。したがって、磨製石斧の製作は別の場所で行われていたことが分かる。石製品・装身具類（F類）は極めて低調な石器製作消費的パターンを示している。

石器器種組成（第45図・第86表）　A類に属する器種群では、石鏃は132点と安定して組成している。ただし、１軒当たりでは3.4点と実際にはそれほど多くない。ScA は402点（１軒当たり10.3）とこの系列中では最多である。また、RFA も188点と ScA に次いで多い器種である。しかし、多数を占める器種のうち、定型化されているのは石鏃のみである。多数を占める ScA や RFA はほとんど定型化されておらず、この系列の中で主体的な器種とは言い難く、石鏃や石錐など定型化した器種に付随して製作された器種と推定されている（麻生・大工原　1994)。

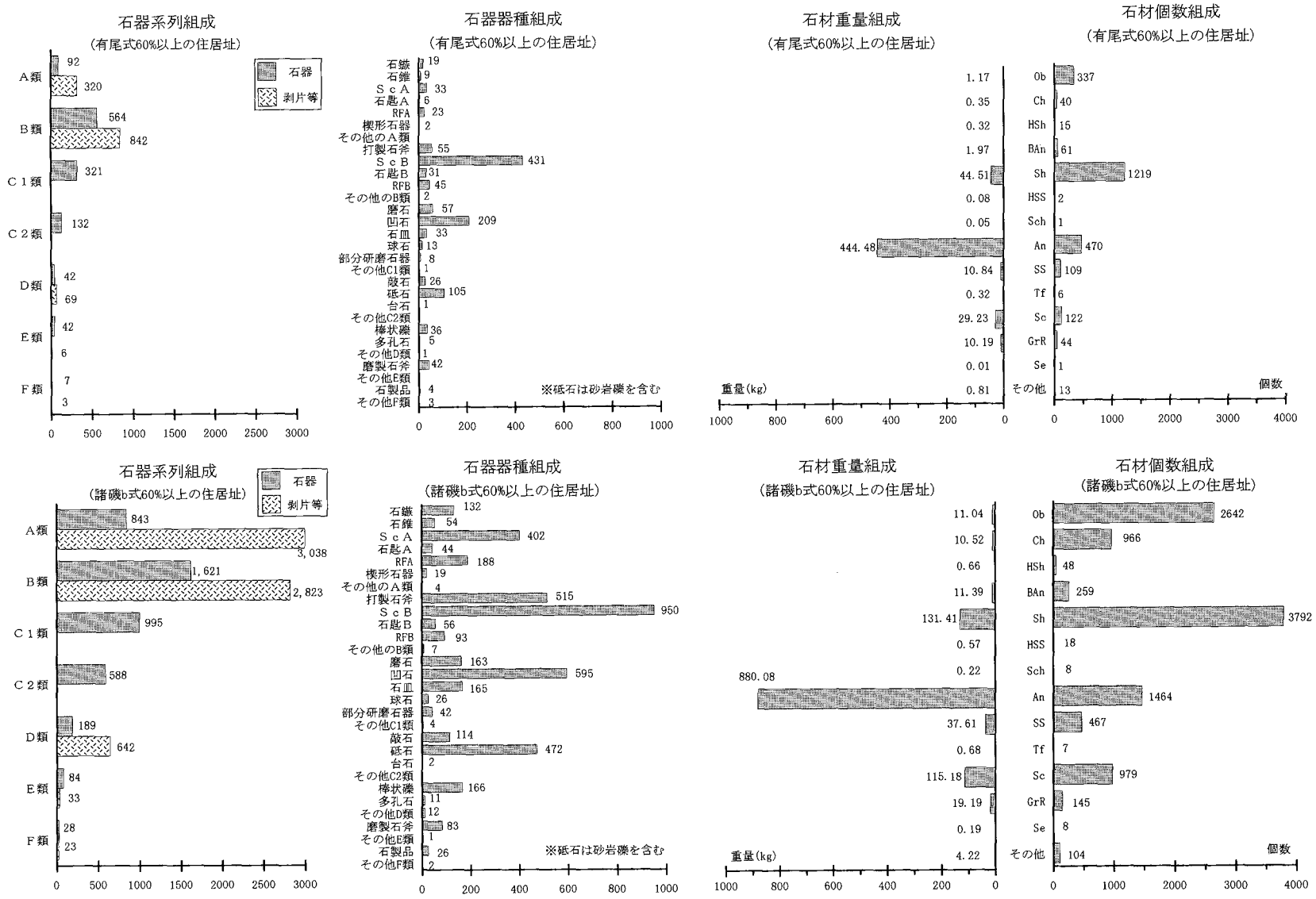
B類では ScB950点（１軒当たり24.4点）と圧倒的に多い。次いで打製石斧が515点（１軒当たり13.2点）と相当多い。この系列中では打製石斧と ScB が大部分を占めている。しかし、石匙B類は56点と少なく、それほど頻繁に消費される道具ではない。B類では定型化した打製石斧と、あまり定型化されていない ScB が製作・使用されている。この系列の組成の在り方については次項で述べる。

C１類では凹石が595点と卓越している。また、磨石163点、石皿165点とほぼ同数である。ここでは石皿：凹石類＝165：758＝１：4.6であり、１点の石皿に４～５点の凹石類が対応する。また、１軒当たり凹石類は19.4点、石皿は4.2点である。

C２類では砥石が472点（１軒当たり12.1点）と相当多い。また、敲石は114点と比較的多いが、台石は２点であり、ここでは敲石と台石がセットではないことが分かる。

D類では棒状礫が166点（１軒当たり4.2点）と比較的多い。多孔石や石棒も少数存在するが組成には現れて来ない。

E類では磨製石斧が83点（１軒当たり2.1点）である。磨製石斧の数量が少ないのは、長期間使い続けられる器種（欠損してもほとんど刃部再生されたり、敲石に転用されたりして使用され続けている）であることに帰因するとみられる。磨製石斧は建物などを構築や木工製品の製作時の必需品であるにも関わらず、検出数量が少ないのは、製作サイクルが長い器種であったことによるとみられる。こうした寿命の長い器種は組成に反映されないので、デフォルメして考えた方が良い。



第45図　有尾式・諸磯ｂ式期の石器組成

石材重量組成・石材個数組成（第45図・第84表）　重量組成は安山岩が880.08kgと圧倒的に大きい値を示す。頁岩131.41kg、結晶片岩115.18kgがこれに次ぐが、その差は大きい。これを個数組成でみると、頁岩が3,792点、安山岩1,464点、結晶片岩979点と頁岩と安山岩の関係が逆転する。また、重量では11.04kgと少なかった黒曜石が、個数では2,642点と頁岩に次ぐ値を示している。1点当たりの平均重量は安山岩601.1g、頁岩34.7g、結晶片岩117.7g、黒曜石4.2gである。したがって、安山岩は頁岩の17.3倍、黒曜石の143.1倍の重量があったことを示している。安山岩はほぼ石器のみであり、黒曜石や頁岩には剥片類が多数含まれていることから、石器（狭義）の場合、さらにこの差は大きなものとなる。

このように剥片剥離を行う石材では数量が多く、礫素材のままの石材では重量が大きくなる傾向が顕著であり、比較する場合注意が必要である。

［有尾式期と諸磯b式期の石器組成の比較］

有尾式期、諸磯b式期ともほぼ同数の住居址が分析対象である。全体として見た場合、有尾式期2,440点、諸磯b式期10,907点であり、4.5倍である。また、石器（狭義）では有尾式期1,200点、諸磯b式期4,348点であり、3.6倍である。このことから、諸磯b式期の方が石器以外の剥片類が多いことが分かる。なお、諸磯b式期が数量が多い要因は、深い住居址が多いことと時間幅が同じでないことが一因である。しかし、数量は一律ではなく系列や器種により増加率が異なっている。そこには、時期により保有する装備（道具立て）の変化や、構造の変化といったの要因が内在していると考えられる。

以下、有尾式期と諸磯b式期の石器組成を比較しながら、各時期の石器群の特徴を抽出して行くことにする。

A類・B類の石器製作について（第46図）系列組成ではA類・B類は以下のパターンが抽出された。

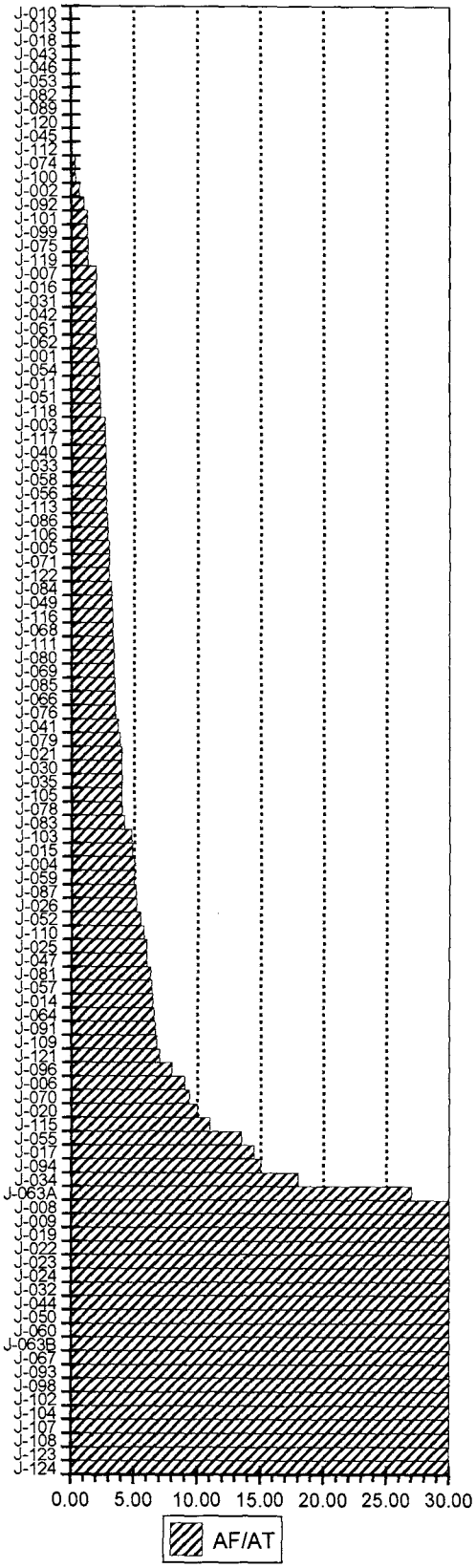
有尾式期　A類：低調な石器製作的パターン（製作指数3.48）
　　B類：やや低調な石器製作・消費的パターン（製作指数1.49）
諸磯b式期　A類：活発な石器製作的パターン（製作指数3.60）
　　B類：活発な石器製作的パターン（製作指数1.74）

有尾式期では、石器製作が全般に低調である。これに対し、諸磯b式期では、石器製作が活発に行われている。しかし、製作指数（剥片類／石器）をみると、両者ともほぼ同じ傾向を示している。つまり、時期に関係なくA類・B類といった系列により、1点の石器が製作されるのに生じる剥片類の数量はほぼ一定であることが理解できる。

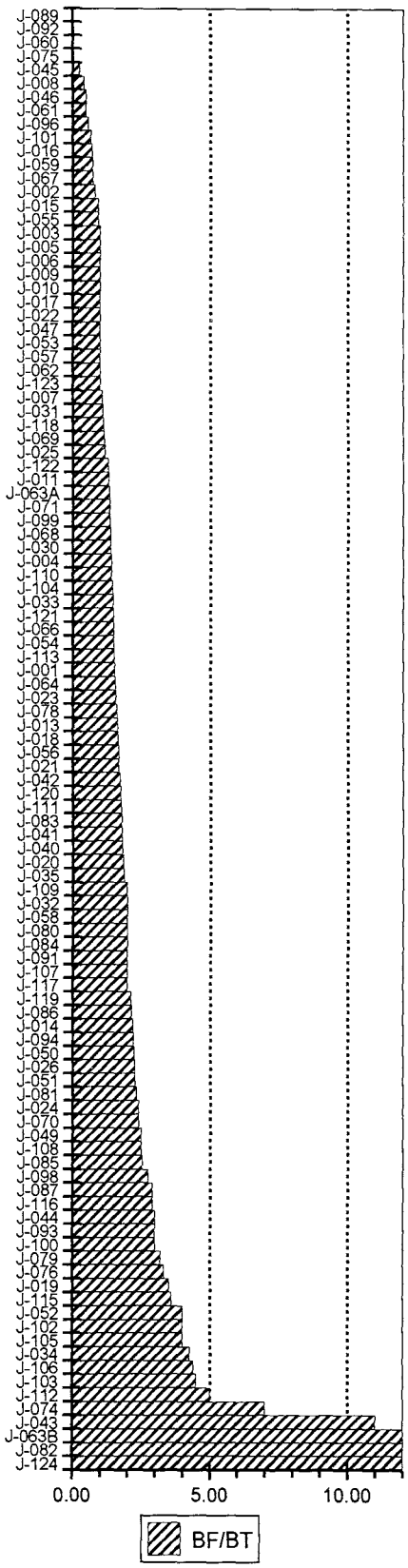
A類の方がサイズが小さく、調査時に検出できなかった剥片類が多いはずである。それにもかかわらず、検出頻度の高いB類の方が剥片類が少ないのは、どういったことであろうか。スクレイパー類(Sc・RF）であれば、①［1素材剥片≒1石器＋少数の剥片］となる。また、打製石斧の場合、②［1素材剥片≒1石器＋多数の剥片］となり、剥片類は石器の数倍になるはずである。

器種組成をみると、両時期ともScBが最多器種である。実際の製作指数1.5前後であり、ScBの製作だけであれば、①の公式が適用できる。そして、有尾式期では打製石斧がScBの12.8%であるから、[①＋②×0.13］となり、実際の製作指数1.44と大きな隔たりはないと判断される。

しかし問題は諸磯b式期である。この時期では打製石斧が多量製作されており、ScBの54.2%にも及ぶのである。諸磯b式期は［①＋②×0.54］で示され、もっと多数の剥片類が検出されていても良いところである。ところが、実際にはこれより遙かに剥片数が少ないのである。



A類の住居址別の石器製作指数



B類の住居址別の石器製作指数

第46図　A類・B類の住居址別石器製作指数

つまり、諸磯ｂ式期の直接打撃系列（Ｂ類）では、遺跡内で石器製作に関わるすべての作業が行われていたのではなく、遺跡外でも一部の作業が行われていたと判断される。遺跡外で行われた作業内容については、別項でも述べるが、素材剥片獲得段階までの作業と打製石斧製作の作業が行われていたと推定される。

Ａ類石器の変化について　有尾式期と諸磯ｂ式期において、最大の違いはＡ類石器が92点→843点（9.2倍）と大幅に増加していることである。器種別では石鏃19→132（6.9倍）、石錐９→54（6.0倍）、ScA33→402（12.2倍）、石匙Ａ類６→44（7.3倍）、RFA23→188（8.2倍）である。ScA や RFA（定型化していない器種）が石鏃・石錐・石匙Ａ類（定型化している器種）の２倍近く延びている。これは単にＡ類石器が増加しただけでなく、石器製作システム自体も変化していることを示している。

このような変化には、石材入手の変化も関連しているとみられる。すなわち、主たる素材である黒曜石1.17kg→11.04kg（9.4倍）、チャート0.35kg→10.52kg（30.1倍）、黒色安山岩1.97kg→11.39kg（5.8倍）と大幅に増加している。特に、チャートの伸び率が大きいことが目に付くが、むしろ有尾式期に極端に少ない方が異常であり、その方が異常である。この要因は不明である。

それと、諸磯ｂ式期において主要石材である黒曜石・チャート・黒色安山岩の入手量がほぼ同じである点が注目される。詳しく調べると、両時期とも石材ごとに１点当たりの重量がほぼ同じであることが判明した。つまり、各石材１点当たりの平均重量は黒曜石3.5ｇ→3.7ｇ、チャート8.8ｇ→9.5ｇ、黒色安山岩32.3ｇ→40.7ｇである。各石材は使用される器種により大きさが違っているのである。Ａ類では石材と器種との間には緊密な対応関係が存在し、それが有尾式期から諸磯ｂ式期にかけて通時期的に維持されていたものと理解される。具体的には、[石鏃≒黒曜石]、[石錐・石匙Ａ・小形 ScA≒チャート]、[大形 ScA≒黒色安山岩] といった関係が維持されていたのである。そして、この背景には石材によって石器製作技術を使い分けていた可能性も想定される。

黒曜石と石鏃との緊密な関係は、本地域ではすでに前期初頭の関山Ｉ式期から認められており、黒曜石以外の石材で石鏃が製作される頻度は全般に相当低率である。(註) このように黒曜石を占有的に使用する石鏃は、黒曜石の爆発的に増加に連動して、大幅に増加したものと理解されるのである。

（註）関山Ｉ式を主体とする中原遺跡では黒曜石製石鏃が80.8%、関山II式を主体とする東畑遺跡、三本木II遺跡では80.0%を占めている（麻生・大工原　1994、大工原1996）。入手量が少ない時期から「石鏃は黒曜石」といった認識が強かったことが分かる。

Ｂ類石器の変化について　この系列でも全体的に増加しているが、特に打製石斧の爆発的増加が最大の特徴である。ScB は431→950（2.2倍）、石匙Ｂ類31→56（1.8倍）、RFB45→93（2.1倍）とほぼ増加率が同じであるのに対し、打製石斧は55→515（9.4倍）と他の器種の４倍以上の伸びを示している。打製石斧では、この時期にＩ形態（片面加工・撥形）→II形態（両面加工・短冊形）に変化しており、これはＢ類の型式変化の象徴の一つである。石器型式の質的大転換に打製石斧の爆発的増加の本質的原因があると考えられるのである。(註)

すでに検証したように、打製石斧は遺跡外で製作されている器種である。遺跡外での石器製作作業における剥片類の数量は遺跡内の数倍～数十倍になると推定される。こうした潜在的石器製作作業を含めると、諸磯ｂ式期における直接打撃系列（Ｂ類）の増加は遺跡での見かけ以上に大きなものと考えられる。

（註）有尾・黒浜式期では並列形工程配置であるのに対し、諸磯ｂ式期では直列形工程配置であり、石器型式が異なっていることはすでに指摘したとおりである（大工原　1996・1997ａ）。

Ｃ１類石器について　凹石、磨石の関係を調べると時期を越えて一定の関係が認められることが判明した。有尾式期では凹石209点、磨石57点であり、凹石：磨石＝3.7：１である。
また、諸磯ｂ式期では凹石595点、磨石163点であり、凹石：磨石＝3.7：１である。このように、時期に関わらず凹石と磨石の比率は一定である。これは偶然の一致ではなく、前期では一般的な組成比率である。(註) したがって、凹石・磨石の使用方法には大きな変化は生じていなかったと判断される。

次に石皿と凹石類との関係を調べてみたい。有尾式期では凹石類：石皿＝8.1：１であるのに対し、諸磯ｂ式期では凹石類：石皿＝4.6：１であり、有尾式期の方が石皿が長持ちしていたと推定される。有尾式期では移動性の高い生活を行っていたことが判明している。石皿は２～36kgほどの重量があり、移動時に持ち運ぶのは容易ではない。そのため移動の際に放棄したり、繰り返し利用できるように意図的に置き去りにすることが多かったと推定される。したがって、移動生活に不向きな石皿の調達頻度は低く、１つの石皿が長期にわたって利用されていたものと推測される。

これに対し、諸磯ｂ式期では定住性が強化されたため、使用頻度・調達頻度ともに高くなったことが石皿の増加につながったと推測される。なお、欠損率等も考慮する必要があるので、詳細は石皿の項で再度分析を行うことにする。

（註）凹石と磨石の比率は前期の中原遺跡4.4、東畑遺跡16.7、三本木II遺跡3.7、吉田原遺跡5.3、大下原遺跡3.4であり、東畑遺跡以外はほぼ同じ程度の比率である。

Ｃ２類石器について　この系列では敲石・砥石が主要な器種である。有尾式期・諸磯ｂ式期とも、敲石：砥石＝１：４であり、組成率では全く変化が認められない。Ｃ２類石器の使用方法には大きな変化がなかったことを示している。

Ｄ類石器の変化について　この系列で代表的な器種は棒状礫である。棒状礫は36点→166点（4.6倍）と大幅に増加する。石棒は遺跡全部でも８点であり、石器組成には反映されないが、諸磯ｂ式期に出現しており、棒状礫の増加との関連性もうかがえる。

Ｅ類石器の変化について　この系列では磨製石斧が主要な器種である。42点→83点（2.0倍）と他の器種に比べ伸び率が低い。また、剝片類はほとんど検出されていないことから、遺跡外で製作されていたことは確実である。ただし、有尾式期では磨製石斧：砥石＝１：2.5、諸磯ｂ式期では磨製石斧：砥石＝１：5.7であり、諸磯ｂ式期においては最終工程に当たる研磨作業を遺跡内で行っていたことについても、検討しておく必要があろう。

Ｆ類石器の変化について　装身具や各種石製品がこの系列に含まれる。もともと数量が少ないので、各器種別に組成論的分析を行うことはあまり意味をなさない。有尾式期から諸磯ｂ式期にかけて４点→26点（6.5倍）と、大幅に増加していることだけは確実である。この系列では剝片類多少検出されており、遺跡内で一部のものは製作されていたと推定される。

（大工原　豊）

住居址	AT	AF	BT	BF	C1T	C2T	DT	DF	ET	EF	FT	FF	Total	AF/AT	BF/BT
J-001	6	13	38	58	21	6	3	2	2				149	2.17	1.53
J-002	6	4	44	36	15	10		3	4	1			123	0.67	0.82
J-003	3	8	25	25	16	11	2		2				92	2.67	1.00
J-004	1	5	15	21	11	2		1	2				58	5.00	1.40
J-005	1	3	24	24	9	4	3	2	3				73	3.00	1.00
J-006	1	9	1	1									12	9.00	1.00
J-007	8	16	25	27	13	13	2	3			1		108	2.00	1.08
J-008		1	7	3	1	1	1	1					15	M	0.43
J-009		1	1	1									3	M	1.00
J-010			3	3									6		1.00
J-011	11	25	36	47	17	6	2	2	6				152	2.27	1.31
J-013			19	31	15	8	1	3		1			78		1.63
J-014	4	26	5	11	2	1							49	6.50	2.20
J-015	13	63	16	15	10	1	1						119	4.85	0.94
J-016	1	2	7	5	1	2	4						22	2.00	0.71
J-017	2	29	7	7	2		1						48	14.50	1.00
J-018			3	5		1							9		1.67
J-019		1	2	7	6	1	1	1	1				20	M	3.50
J-020	1	10	26	48	11	4		3	3	1		1	108	10.00	1.85
J-021	4	16	25	42	19	6		2				1	115	4.00	1.68
J-022		3	12	12	4	1							32	M	1.00
J-023		1	9	14	2					1			27	M	1.56
J-024		12	5	12	3		1	3		1			37	M	2.40
J-025	1	6	22	26	10	4			2				71	6.00	1.18
J-026	6	31	15	34	15	13	6	6	2				128	5.17	2.27
J-030	4	16	59	82	38	11	5	6	4				225	4.00	1.39
J-031	1	2	10	11	7	1	1	1			1		35	2.00	1.10
J-032		1	2	4	1		1	1					10	M	2.00
J-033	16	44	34	50	21	9	1	7	3	1			186	2.75	1.47
J-034	1	18	16	68	17	6	1	10	2	2	1		142	18.00	4.25
J-035	4	16	29	54	25	5	2	2					137	4.00	1.86
J-040	19	52	100	181	37	24	8	21	5	2	2	2	453	2.74	1.81
J-041	7	26	42	76	15	13	5	3	3	1	1		192	3.71	1.81
J-042	2	4	11	19	6	4	4	3				1	54	2.00	1.73
J-043			1	11	2								14		11.00
J-044		1	1	3	2								7	M	3.00

＊T：石器　＊F：剥片・石核・原石　　M：剥片類のみ　U：石器のみ

第87表　住居址出土石器・系列別一覧表（1）

住居址	AT	AF	BT	BF	C1T	C2T	DT	DF	ET	EF	FT	FF	Total	AF/AT	BF/BT
J-045	1		4	1	2								8	U	0.25
J-046			2	1									3		0.50
J-047	1	6	8	8	7	1	1	1					33	6.00	1.00
J-049	4	13	4	10	4				1				36	3.25	2.50
J-050		4	4	9	5	2	1	1					26	M	2.25
J-051	7	16	7	16	13	1	1	6					67	2.29	2.29
J-052	2	11	5	20	12		1						51	5.50	4.00
J-053			3	3	4	2			1				13		1.00
J-054	4	9	16	24	9	2	2	2	1				69	2.25	1.50
J-055	2	27	18	17	4	6	2	12					88	13.50	0.94
J-056	123	340	247	412	69	69	21	67	8	3	3	1	1363	2.76	1.67
J-057	5	32	16	16	6	3		7	2			1	88	6.40	1.00
J-058	4	11	1	2									18	2.75	2.00
J-059	2	10	19	14	11	1	2	3	1				63	5.00	0.74
J-060		1	1										2	M	U
J-061	1	2	2	1	4								10	2.00	0.50
J-062	8	16	6	6	3	4		4			1	1	49	2.00	1.00
J-063A	1	27	18	24	17	3	3	4	2				99	27.00	1.33
J-063B		2		4	1								7	M	M
J-064	10	66	22	34	15	5	3	10	2	1		2	170	6.60	1.55
J-066	140	487	248	368	137	62	23	91	12	3	4	3	1578	3.48	1.48
J-067		1	4	3	1	1	1	3	1				15	M	0.75
J-068	24	79	37	51	32	11	3	9	1		1		248	3.29	1.38
J-069	16	54	28	32	18	11	2	4	3	2			170	3.38	1.14
J-070	6	56	15	36	17	4	1	4		1			140	9.33	2.40
J-071	1	3	18	24	12	4	2	1			2		67	3.00	1.33
J-074	3	1	1	7	1	1	1						15	0.33	7.00
J-075	3	4	6			1		2					16	1.33	U
J-076	2	7	9	30	8	3	1	1					61	3.50	3.33
J-078	166	667	331	531	264	138	49	142	22	7	5	2	2324	4.02	1.60
J-079	22	85	20	64	14	11	5	28	1		1		251	3.86	3.20
J-080	123	414	212	424	118	81	34	135	11	7	5	8	1572	3.37	2.00
J-081	3	19	3	7			1	1				1	35	6.33	2.33
J-082				4		1			1				6		M
J-083	13	55	23	41	12	6	4	12	1		1		168	4.23	1.78
J-084	6	19	9	18	3	3	1	5	1				65	3.17	2.00

＊T：石器　＊F：剥片・石核・原石　　M：剥片類のみ　U：石器のみ

第88表　住居址出土石器・系列別一覧表（2）

住居址	AT	AF	BT	BF	C1T	C2T	DT	DF	ET	EF	FT	FF	Total	AF/AT	BF/BT
J-085	13	45	26	66	25	10	2	6					193	3.46	2.54
J-086	26	74	40	86	34	18	2	16	2		1	2	301	2.85	2.15
J-087	8	41	20	58	35	7	2	4	2				177	5.13	2.90
J-089								1					1		
J-091	3	20	8	16	6	1			1				55	6.67	2.00
J-092	1	1			2		1	2					7	1.00	
J-093		3	2	6	1			1	1				14	M	3.00
J-094	2	30	27	60	17	15	2	2	1				156	15.00	2.22
J-096	2	16	7	4	6	2							37	8.00	0.57
J-098		9	4	11	4	2							30	M	2.75
J-099	7	9	23	31	10	7		1		1			89	1.29	1.35
J-100	3	1	2	6	2								14	0.33	3.00
J-101	4	5	3	2	1	1		1			1		18	1.25	0.67
J-102			1	4	1								6	M	4.00
J-103	9	43	4	18	4	3	1	1					83	4.78	4.50
J-104		11	9	13	8	1		1	1				44	M	1.44
J-105	3	12	1	4	3	1	1	1					26	4.00	4.00
J-106	19	55	10	44	13	8	6	11	2				168	2.89	4.40
J-107		1	2	4		1	1						9	M	2.00
J-108		6	2	5		1		1		1	1		17	M	2.50
J-109	5	34	35	69	17	9	5	8	3		1	2	188	6.80	1.97
J-110	4	23	5	7	2	4		1					46	5.75	1.40
J-111	40	134	93	165	53	40	5	25	2	2	2		561	3.35	1.77
J-112	1		1	5	1			1					9	U	5.00
J-113	9	25	14	21	9	8	2	2		1	1		92	2.78	1.50
J-115	1	11	5	18	8	5	3	5	1		1		58	11.00	3.60
J-116	7	23	12	35	15	14	1	6	1				114	3.29	2.92
J-117	3	8	18	36	11	8		4	2	1		2	93	2.67	2.00
J-118	3	7	22	25	5	4		1	1		1		69	2.33	1.14
J-119	3	4	8	17	8	6	3	6					55	1.33	2.13
J-120			4	7	8		1	1					21		1.75
J-121	1	7	27	40	16	7	2	10	2				112	7.00	1.48
J-122	1	3	17	22	11	5	2	2	2				65	3.00	1.29
J-123		5	4	4		2					2		17	M	1.00
J-124		3		1	3	1							8	M	M

＊T：石器　＊F：剥片・石核・原石　　M：剥片類のみ　U：石器のみ

第89表　住居址出土石器・系列別一覧表（3）

［石器比率のクラスター分析］

これまでの各時期の住居址の石器比率が、時期により有意な差があるかについて、クラスター分析を中心に解析した。クラスター分析とは、データを分類するいろいろな手法の総称である。外的基準がないデータに対して用いられ、言ってみれば説明変数の値だけで類似するデータを分類する手法である。

1．土器型式帰属率の高い住居の石器比率

ここでの分析には、土器型式帰属率80％以上の高率を示す住居址を用いることにした。有尾・黒浜式、諸磯ｂ式の土器型式帰属率80％以上の住居址それぞれ13軒、12軒であり、住居名址は以下のとおりである。

有尾・黒浜式：Ｊ-59、Ｊ-25、Ｊ-16、Ｊ-54、Ｊ-03、Ｊ-04、Ｊ-02、Ｊ-20、Ｊ-07、Ｊ-11、Ｊ-52、Ｊ-05、Ｊ-01

諸磯ｂ式：Ｊ-113、Ｊ-62、Ｊ-68、Ｊ-116、Ｊ-111、Ｊ-115、Ｊ-24、Ｊ-84、Ｊ-119、Ｊ-66、Ｊ-57、Ｊ-86

これらの住居址の石器比率は、第47図のグラフのとおりである。有尾・黒浜式期ではBTが、諸磯ｂ式期ではAFが多いことが特徴である。また、個数についても諸磯ｂ式期では１軒当たり271点、有尾・黒浜式期では１軒当たり88点と約３倍になっている。

2．クラスター分析

分析は、統計ソフトSATISTICA（米国：Stat Soft社製）を用いて行った。使用するデータは、石器数20点以上、土器帰属率の有尾・黒浜式、諸磯ａ式、諸磯ｂ式のいずれにも属さない、その他が20％以下の、61軒を対象とした。そして、分析する変数はAT、AF、BT、BF、C1T、C2T、DT、DFとした。

結合距離0.4で切断すると、Ａグループ（30軒）と、Ｂグループ（31軒）の２つのクラスターに分かれる（第47図）。これら各グループの住居址の土器型式帰属率は、第49図のグラフのようになる。グラフのＸ軸は、クラスター分析での解析の結果得られたグラフ中のＸ軸と合わせて、Ｙ軸に土器型式帰属率を表示した。

その結果、概ねＡグループでは諸磯ｂ式の土器型式帰属率が高く、Ｂグループでは有尾・黒浜式の土器型式帰属率が高いことが確認された。

各グループの土器型式帰属率の平均値は次のとおりである。

Ａグループ／有尾・黒浜式17％、諸磯ｂ式68％

Ｂグループ／有尾・黒浜式62％、諸磯ｂ式25％

また有尾・黒浜式80％以上の土器型式帰属率を有する13軒のうち12軒がＢグループに、諸磯ｂ式80％以上の土器型式帰属率を有する12軒のうち11軒がＡグループに振り分けられる。そこで、各グループの石器比率について検討した。

まず、個数については、Ａグループでは１軒当たり340点、Ｂグループでは１軒当たり100点と約３倍になっている。先に解析した土器型式帰属率の高い有尾・黒浜式と諸磯ｂ式の石器比率と、ここに示した点数と比較すると、第50図のようにＡグループが諸磯ｂ式、Ｂグループが有尾・黒浜式と同様なグラフの形態を示している。

以上の結果より、石器比率でのクラスター分析による解析に優位性が認められたと判断できる。この優位性は、有尾式期と諸磯ｂ式期で石器の製作状態が明らかに異なっていたことを示している。

参考文献　新村秀一　1997『パソコン楽々統計学　グラフで見るデータ解析』　講談社

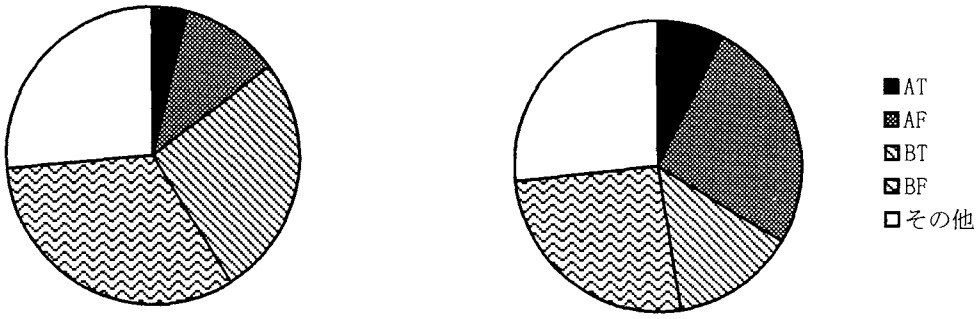
（吉川祐司）

土器型式帰属率

AT	AF	BT	BF	その他	
0.03821317	0.10919306	0.26465384	0.32337307	0.26456686	1139
0.07388181	0.26287902	0.13933189	0.25657603	0.26733126	3246

有尾・黒浜
総数1139個

諸磯ｂ
総数3246個

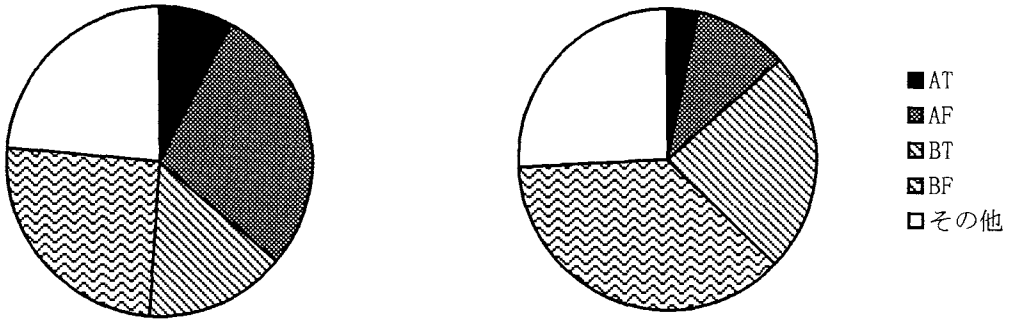


第47図　土器型式帰属率の高い住居址の石器比率

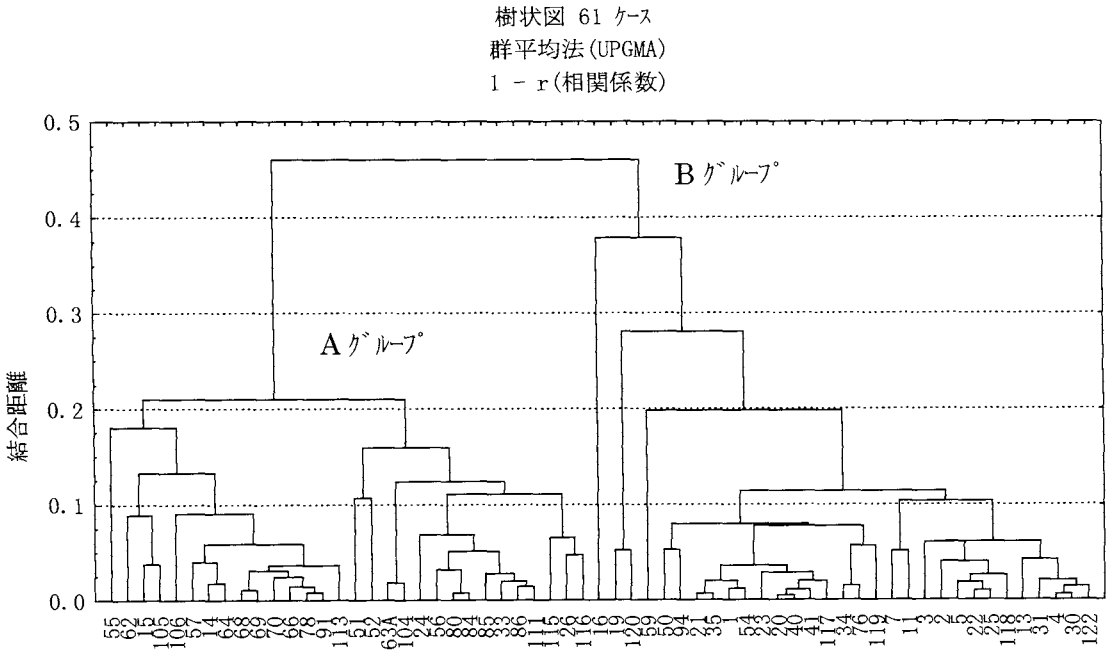
	AT	AF	BT	BF	その他
A	0.0783103	0.2839361	0.14819171	0.25433696	0.23522493
B	0.03203883	0.10517799	0.23592233	0.36860841	0.25825243

Ａグループ
総数10203個

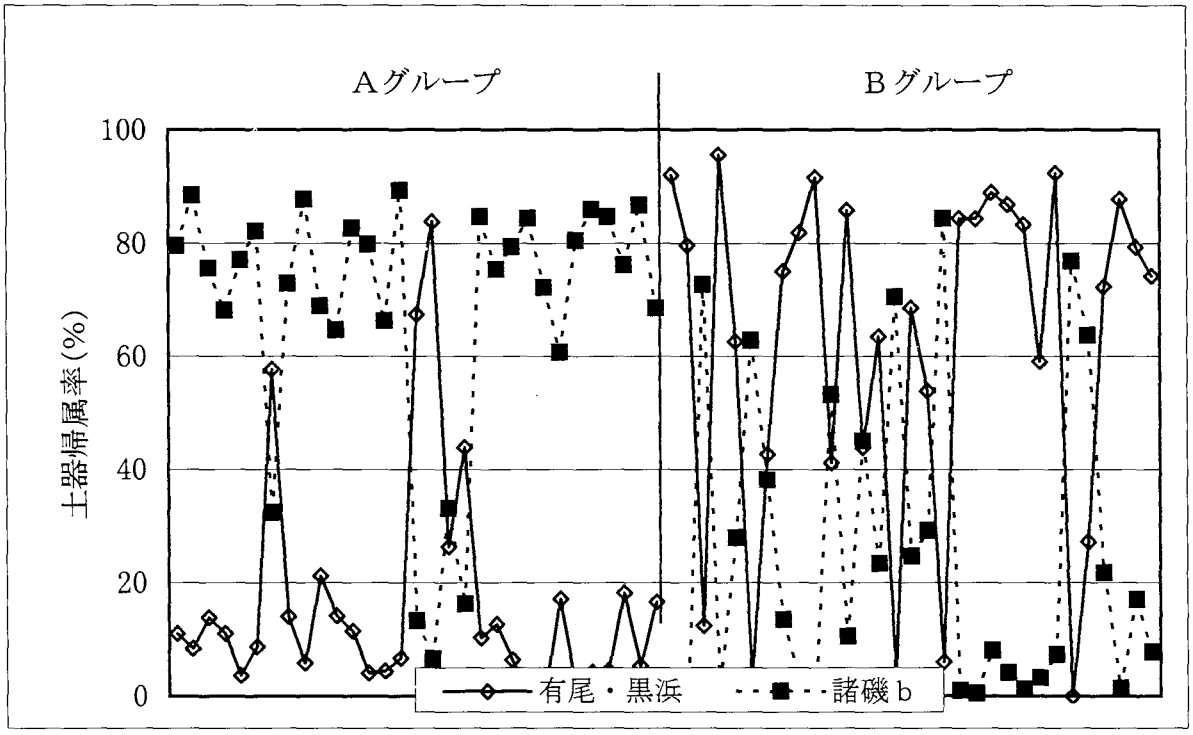
Ｂグループ
総数3090個



第48図　各グループの石器比率



第49図　住居址クラスター



第50図　各グループと土器型式帰属率の関係

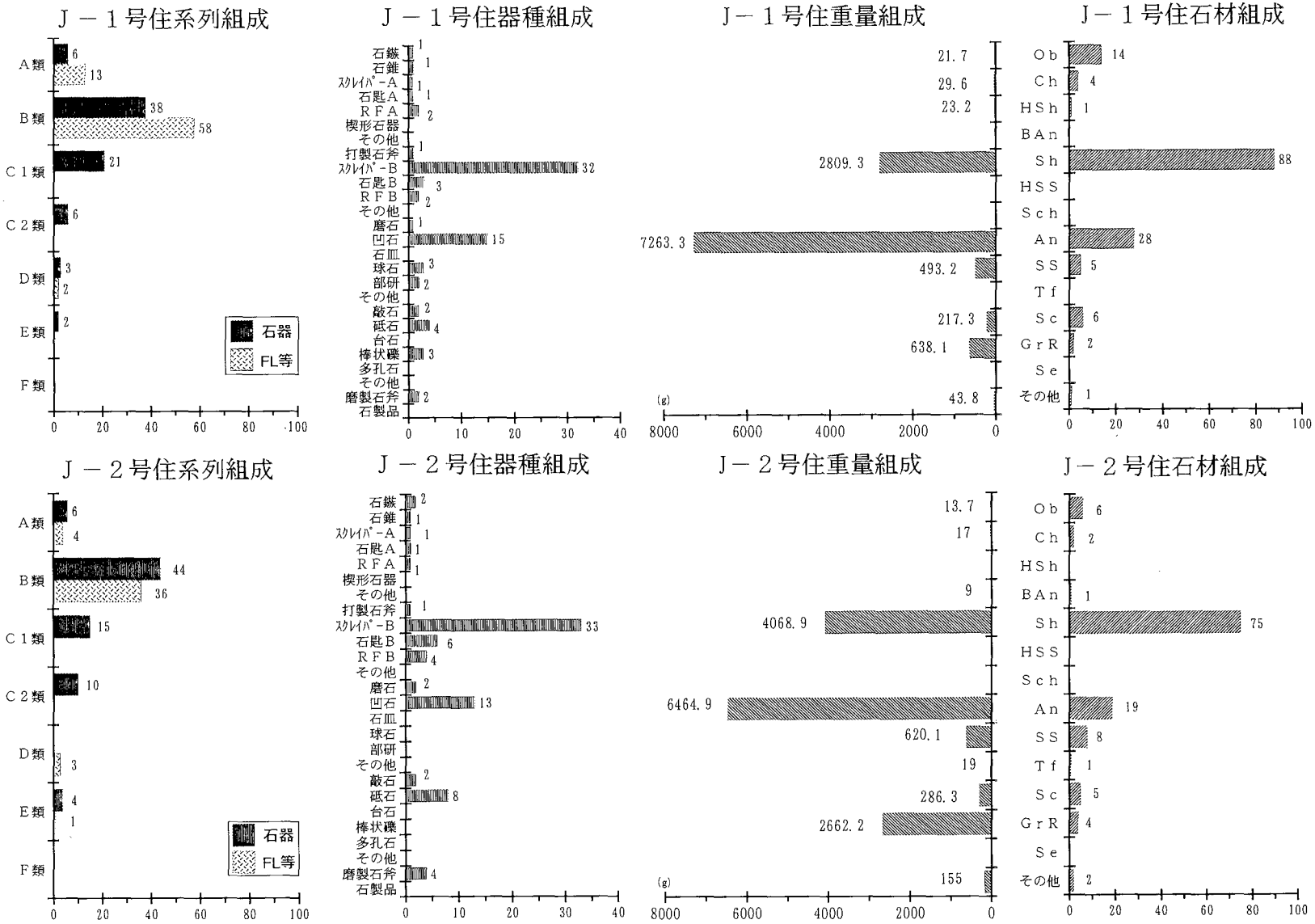
［石器組成の変化の要因について］

以上のように、有尾式期と諸磯ｂ式期では、石器組成からみた場合、有意な差異があることが明らかとなった。この差異は押圧剝離系列（Ａ類）と直接打撃系列（Ｂ類）において顕著であり、石器製作に関する構造的な変化に帰因しているものと推定される。特に、Ａ類における黒曜石の激増現象は大きな要因とみられる。また、Ｂ類の変化も大きなものがある。遺跡外で行われていたとみられる打製石斧の製作について、製作指数を用いた分析により検証することができた。この時期には打製系列は大きな変化を生じており、ひとつの画期を示している。

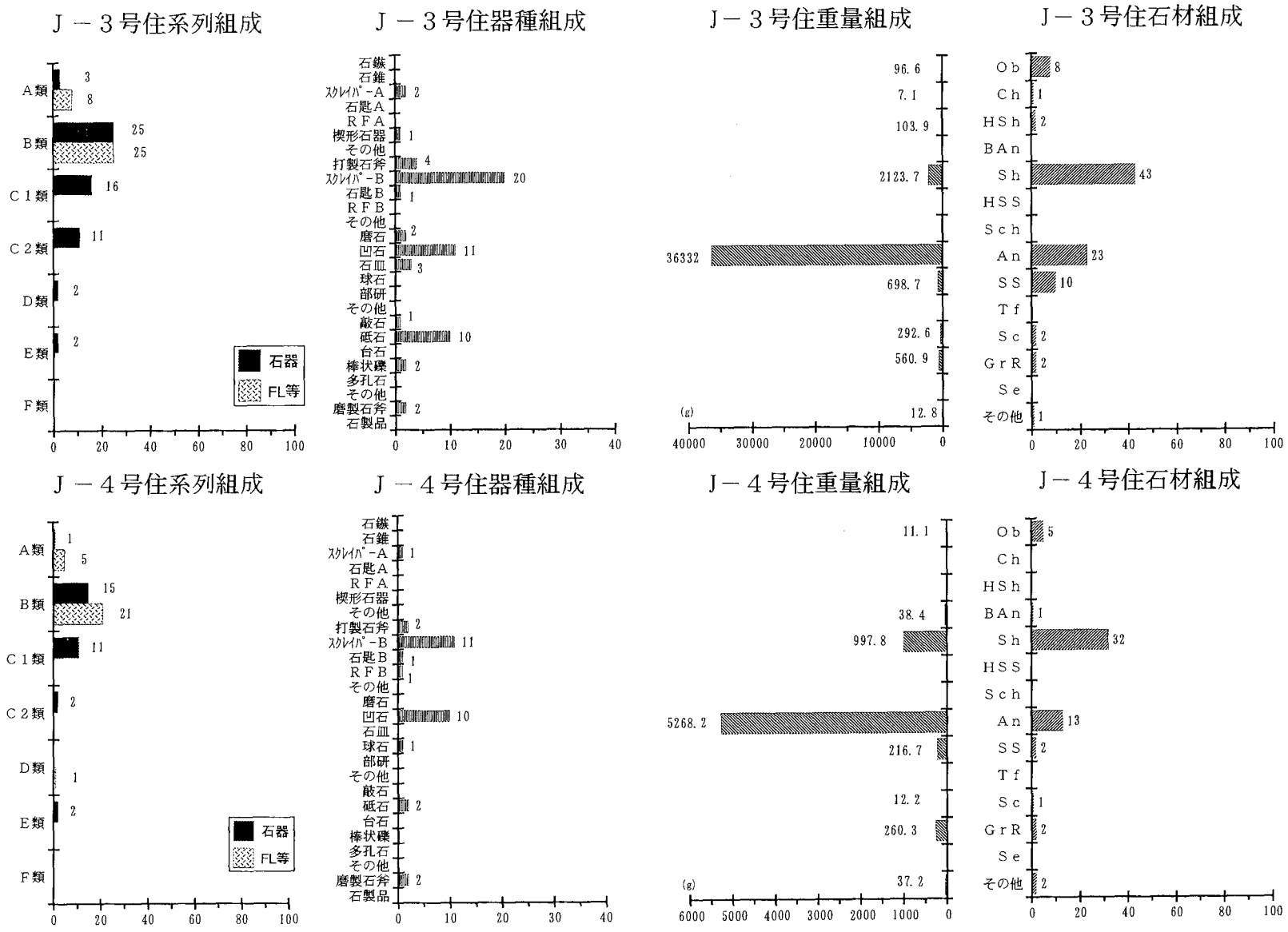
ところが、打製系列で大きな変化が生じているにも関わらず、使用痕系列（Ｃ１類・Ｃ２類）・複合技術機能系列（Ｅ類）では、この時期構造的には大きな変化は生じておらず、前期的な石器組成が継続していることが確認された。この中でも、使用痕形状選択系列（Ｃ１類）では凹石類の器種比率もまったく変化しておらず、食糧資源を中心とした粉砕用具の使用方法は確立していたと考えられる。ただし、数量的には大幅に増加しており、使用人口の増加や使用期間の延長が生じていたことが要因であろう。石皿の増加はこれを象徴する現象である。この石器組成の様相に顕れている現象は、生業基盤の安定化と発展が、定住性強化の大きな原動力となっていたものと理解されるのである。

このように石器組成から、有尾式期から諸磯ｂ式期にかけての社会的・歴史的変化を読みとれることができる。石器組成を比較する場合、こうした定点観測的手法は時間的変化を示すのに有効な方法である。

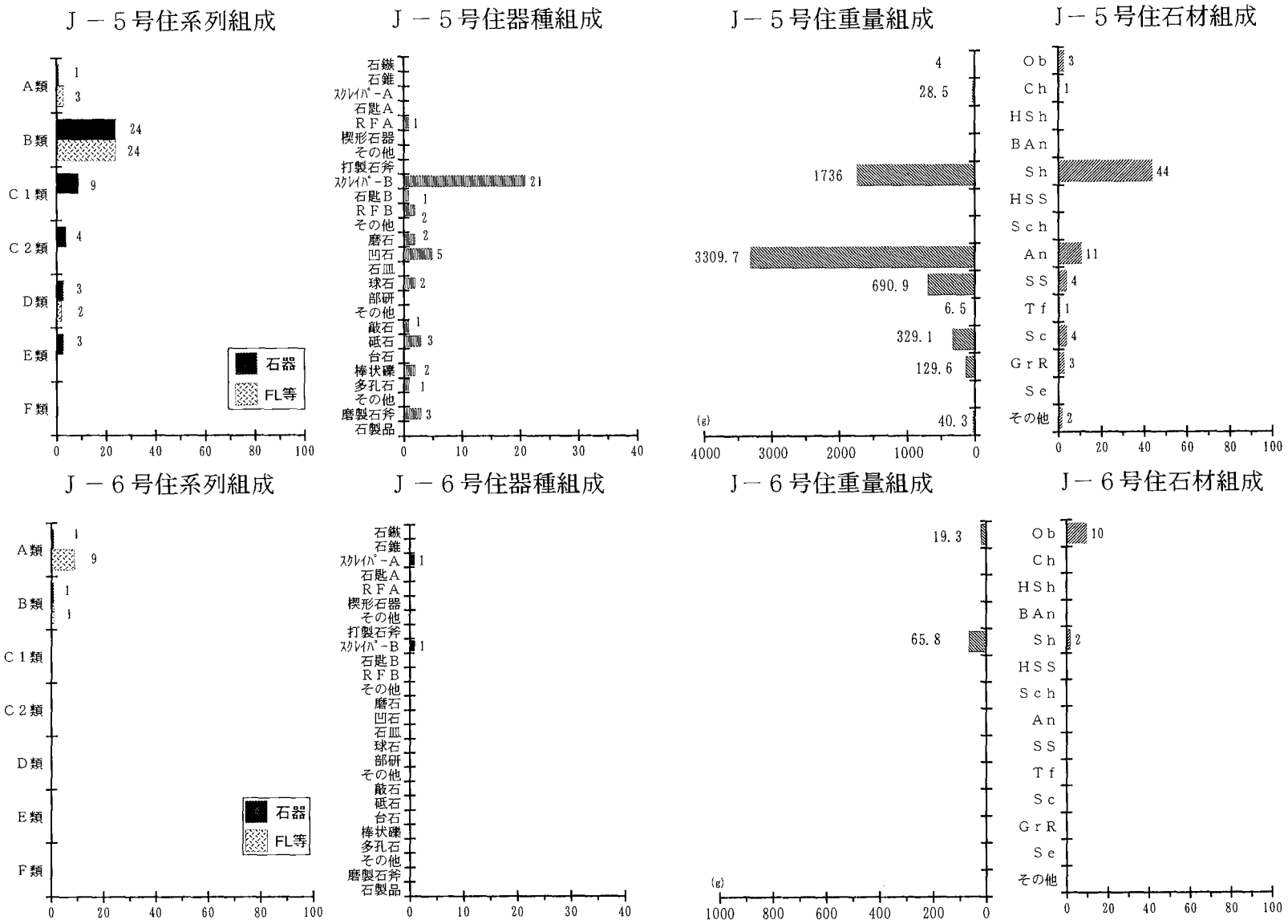
（大工原　豊）



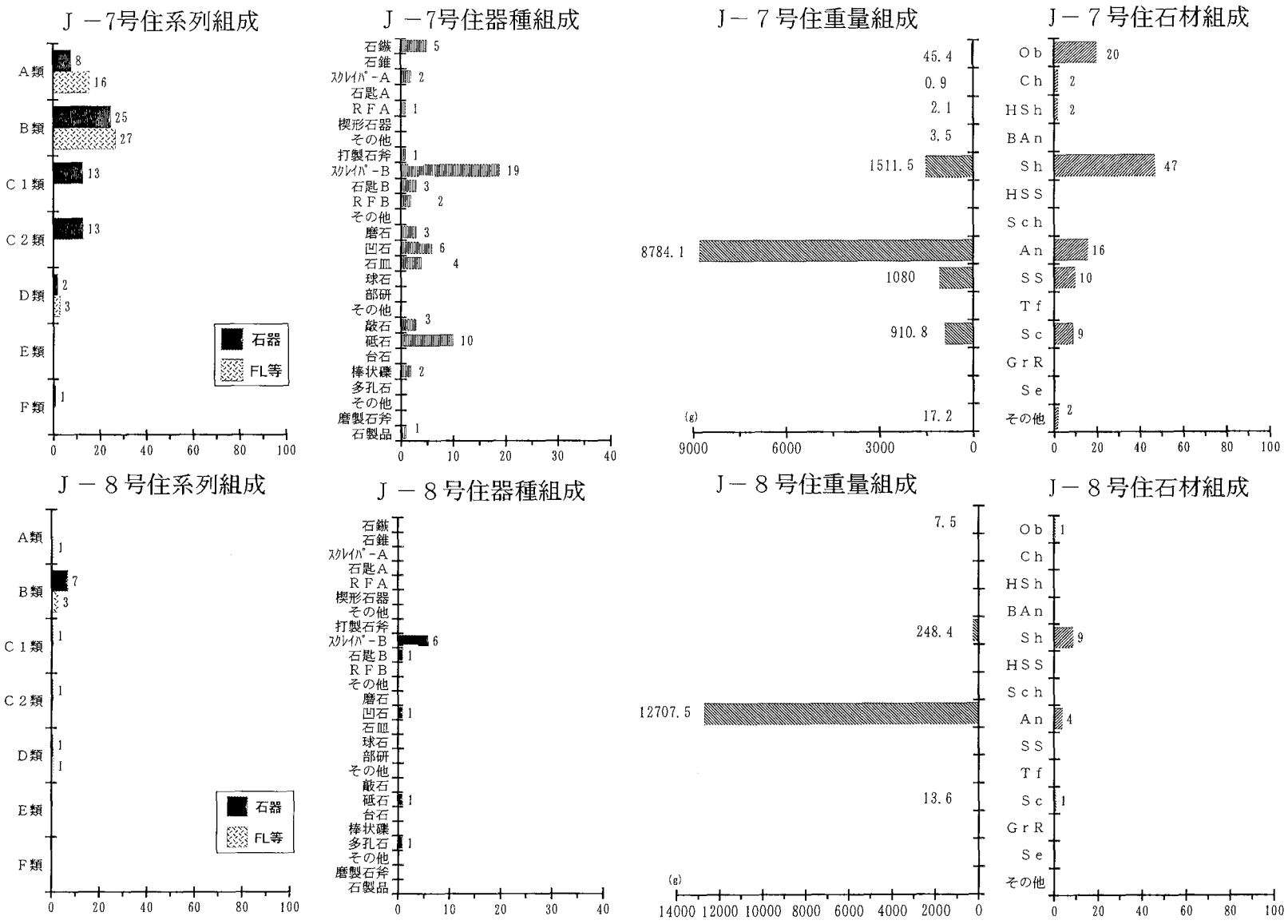
第51図　J－1・2号住居址の石器組成



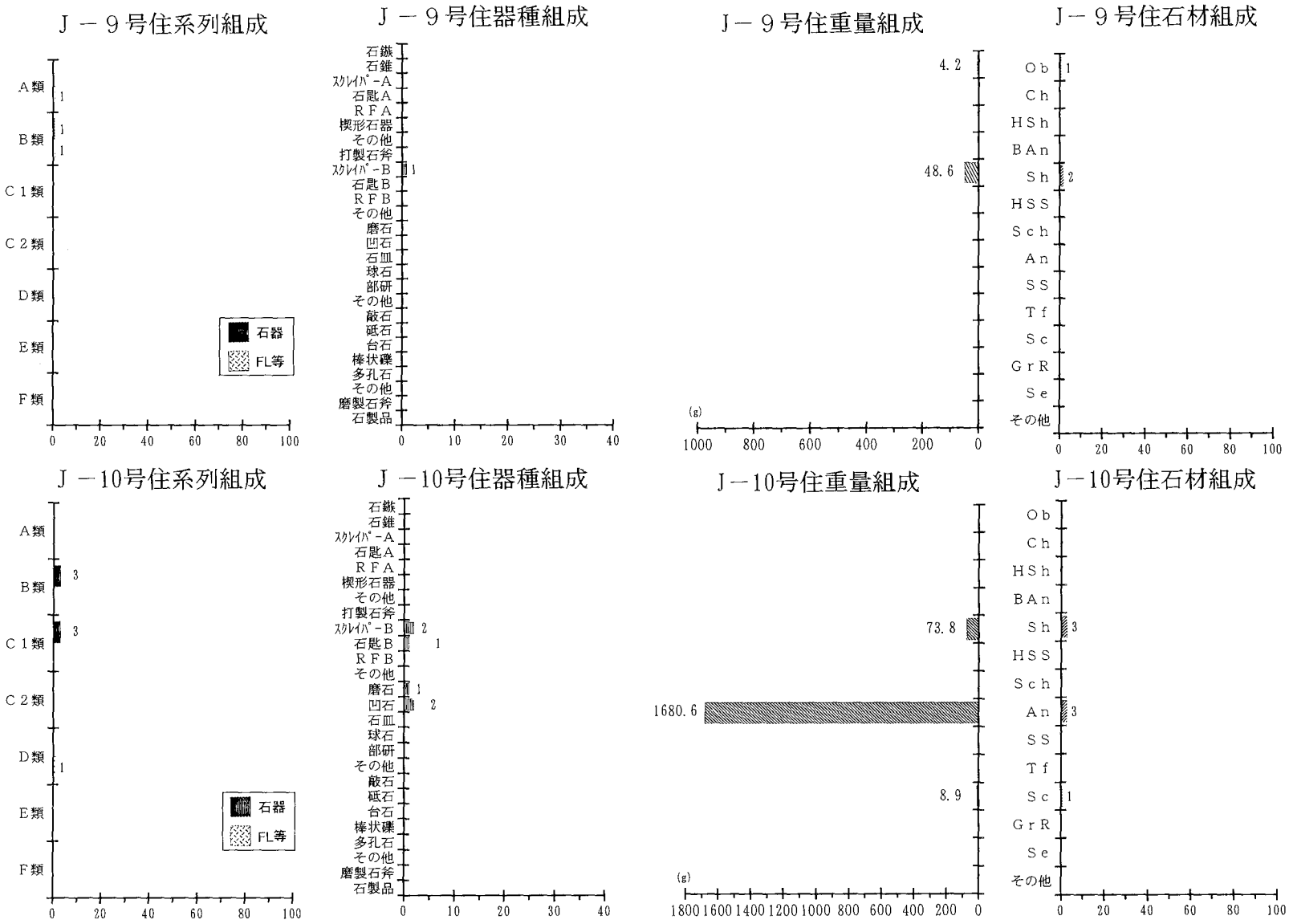
第52図　J－3・4号住居址の石器組成



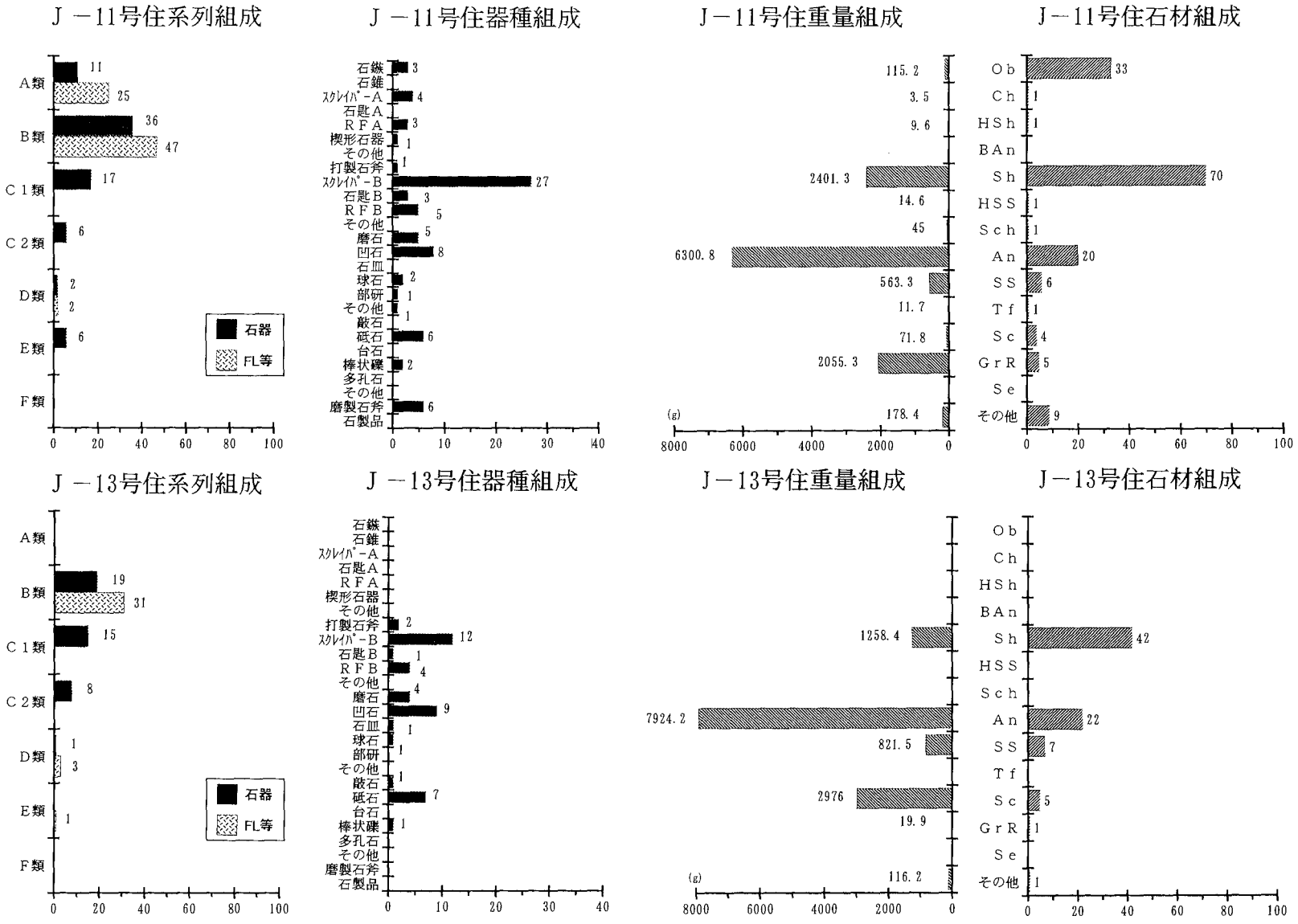
第53図　J－5・6号住居址の石器組成



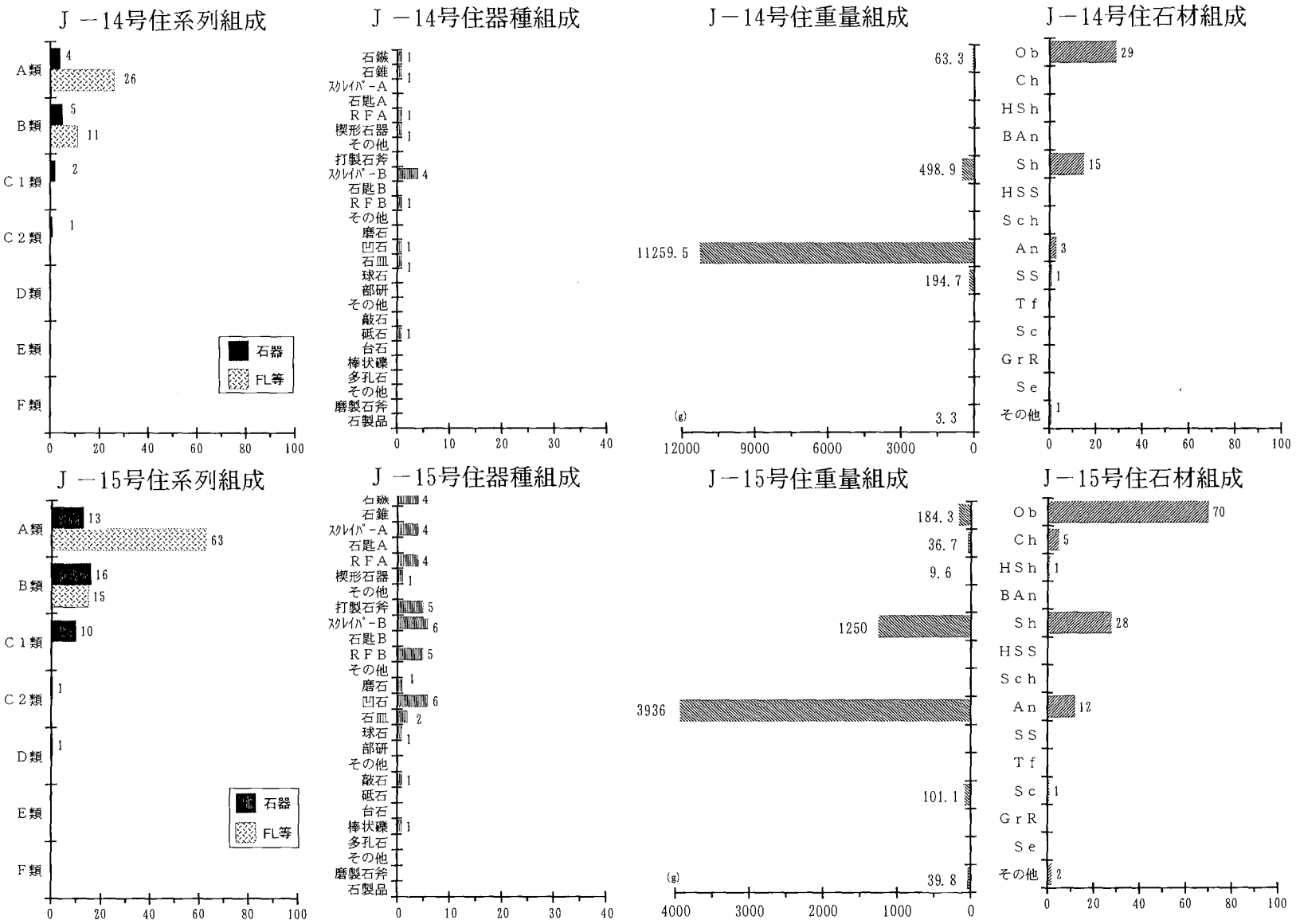
第54図　J－7・8号住居址の石器組成



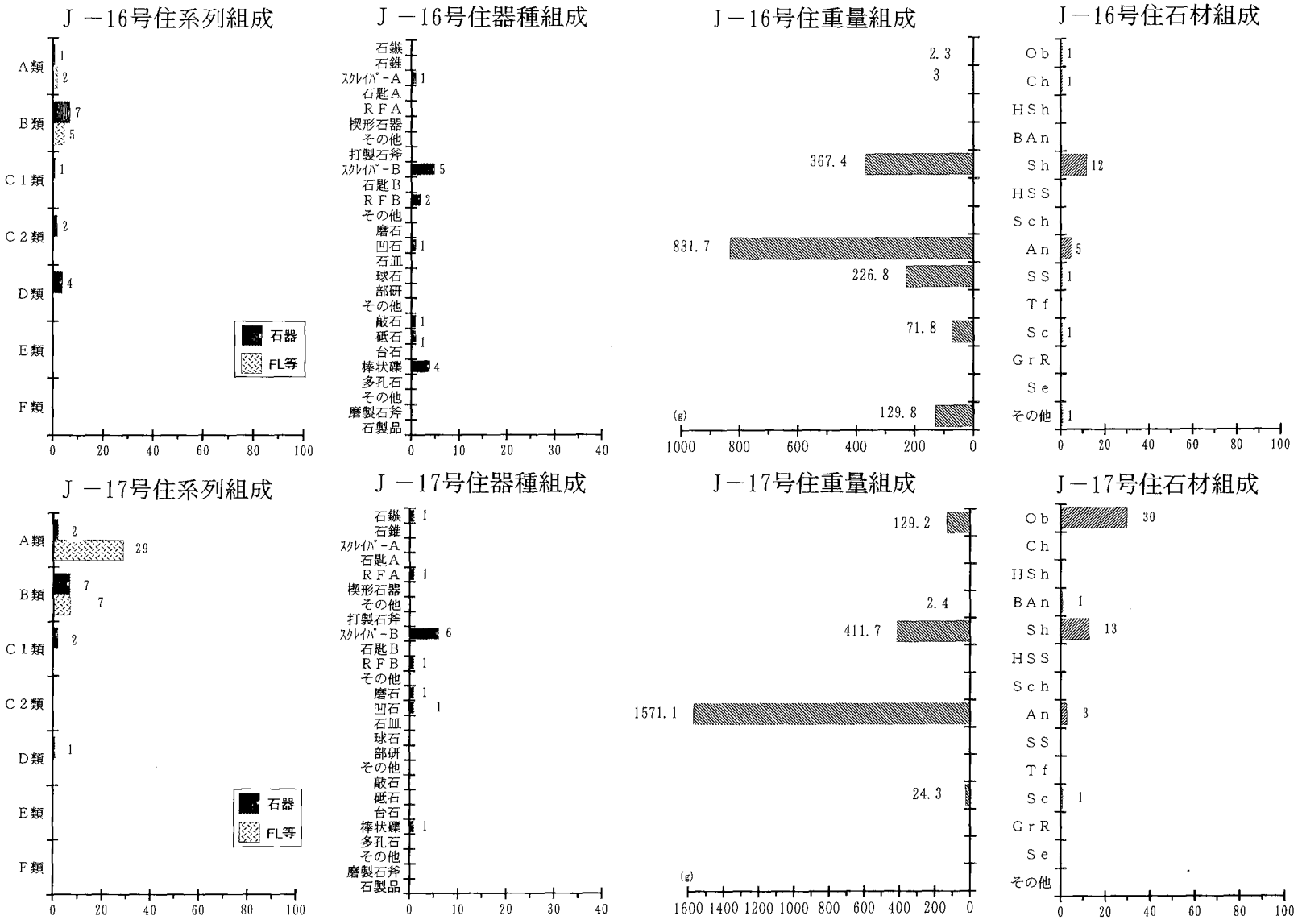
第55図　J－9・10号住居址の石器組成



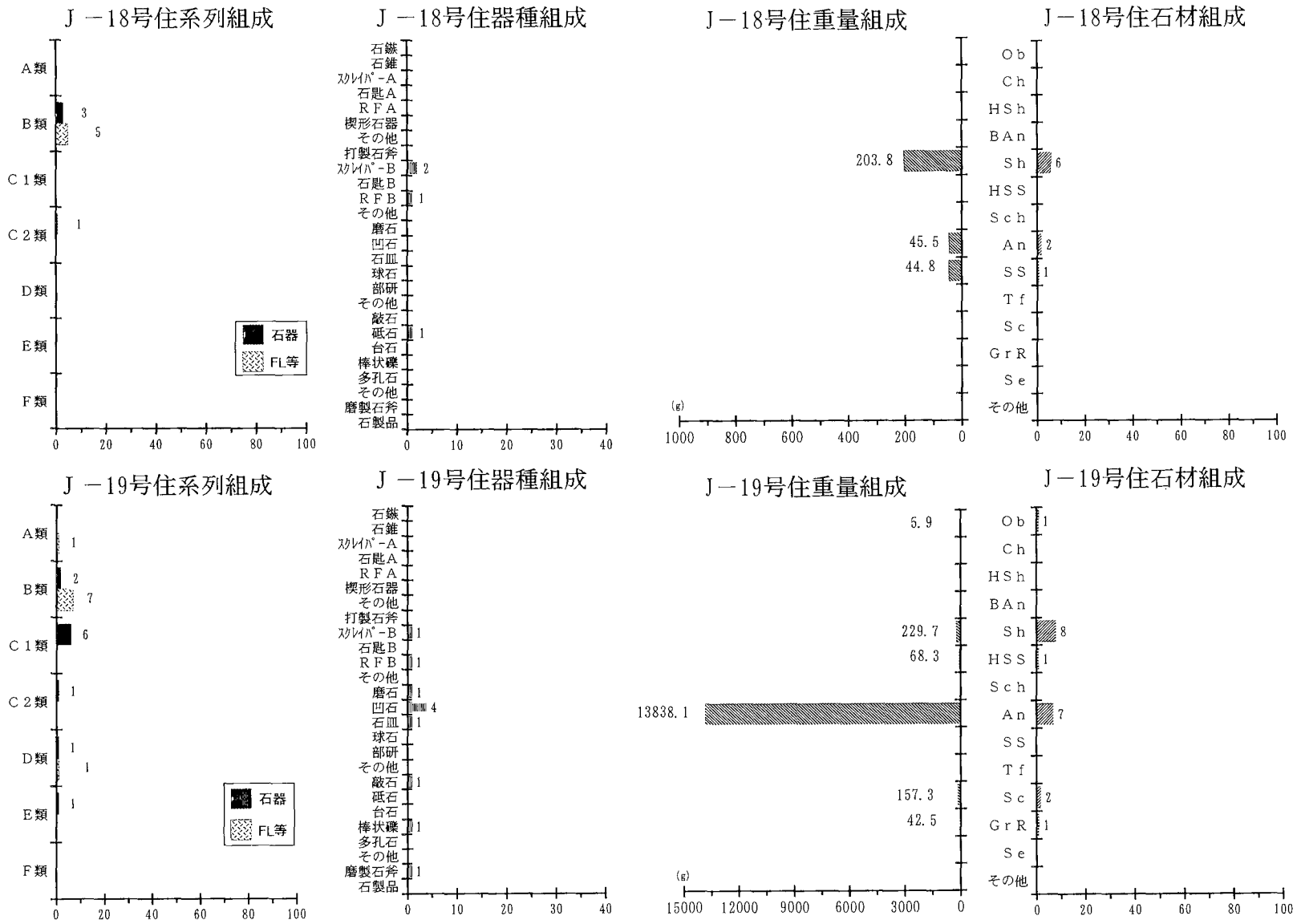
第56図　J－11・13号住居址の石器組成



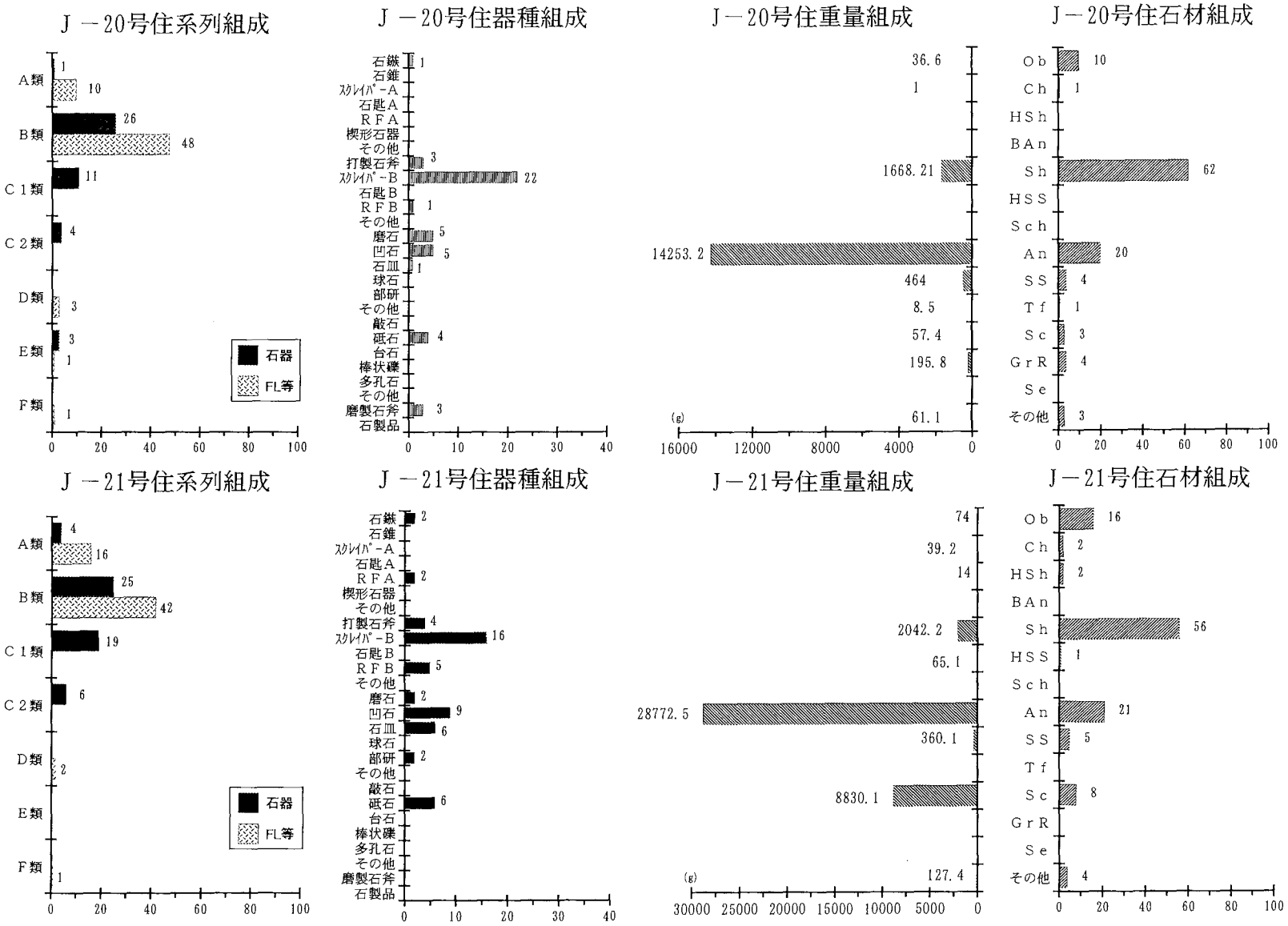
第57図　Ｊ—14・15号住居址の石器組成



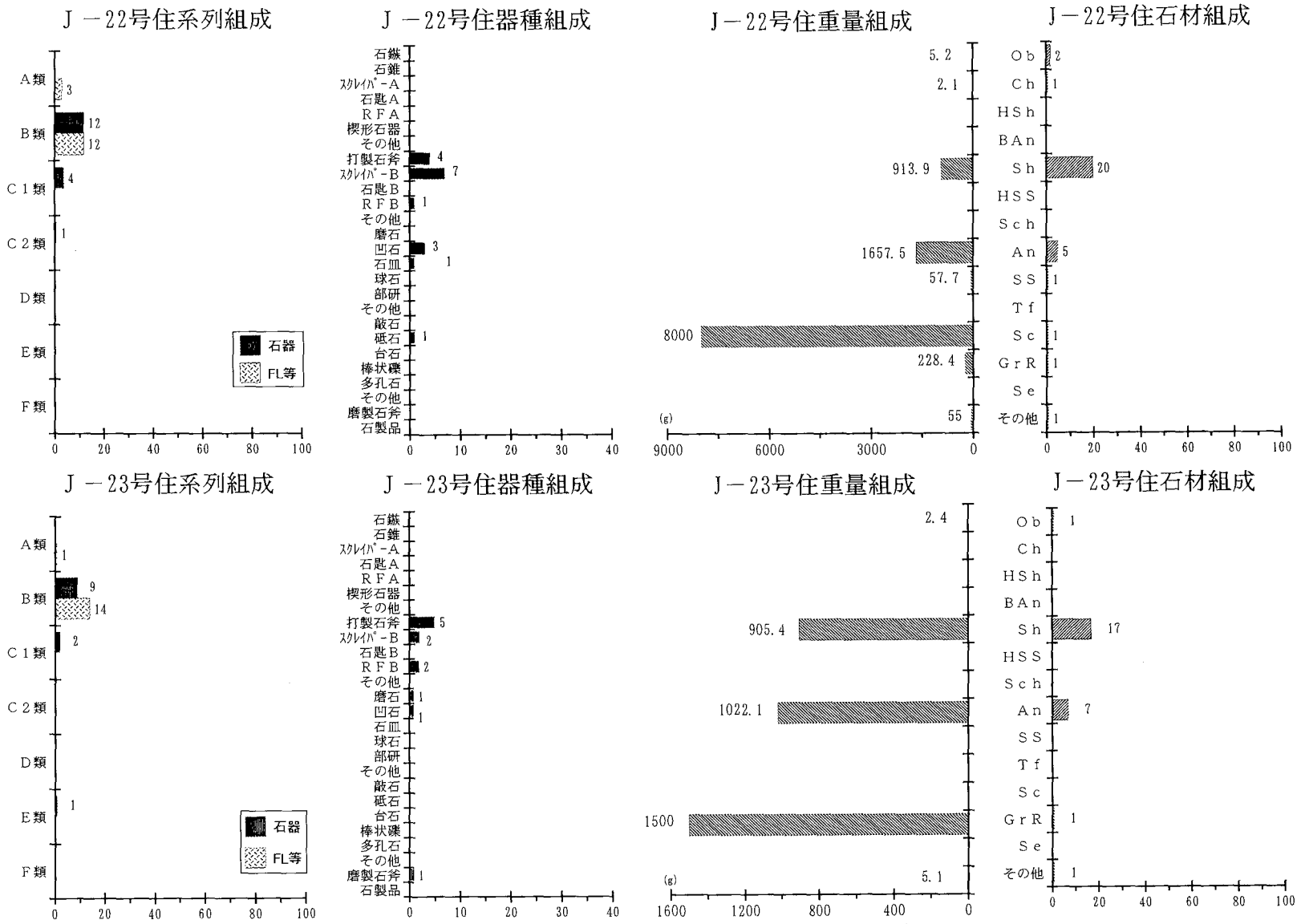
第58図　J－16・17号住居址の石器組成



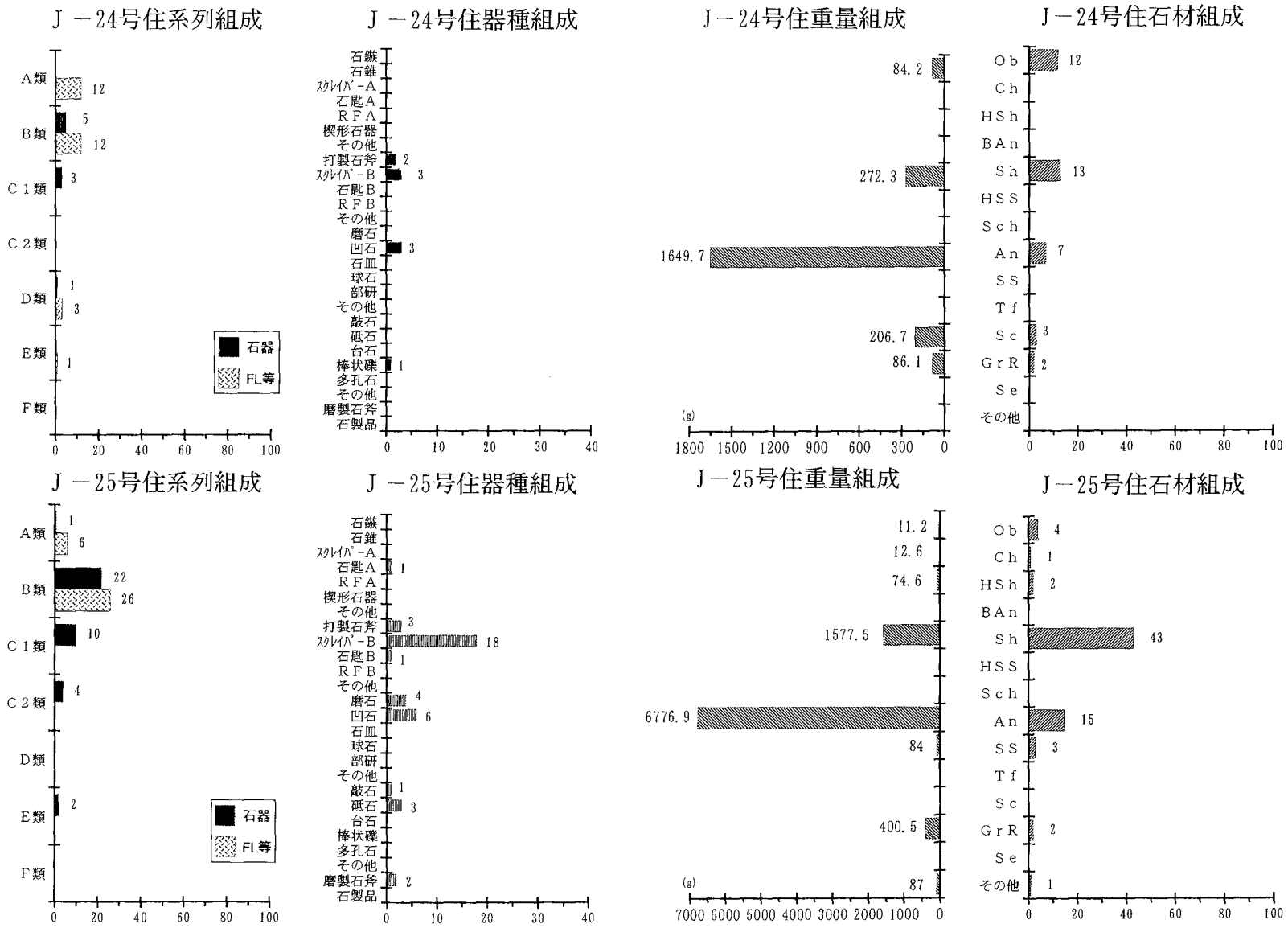
第59図　J—18・19号住居址の石器組成



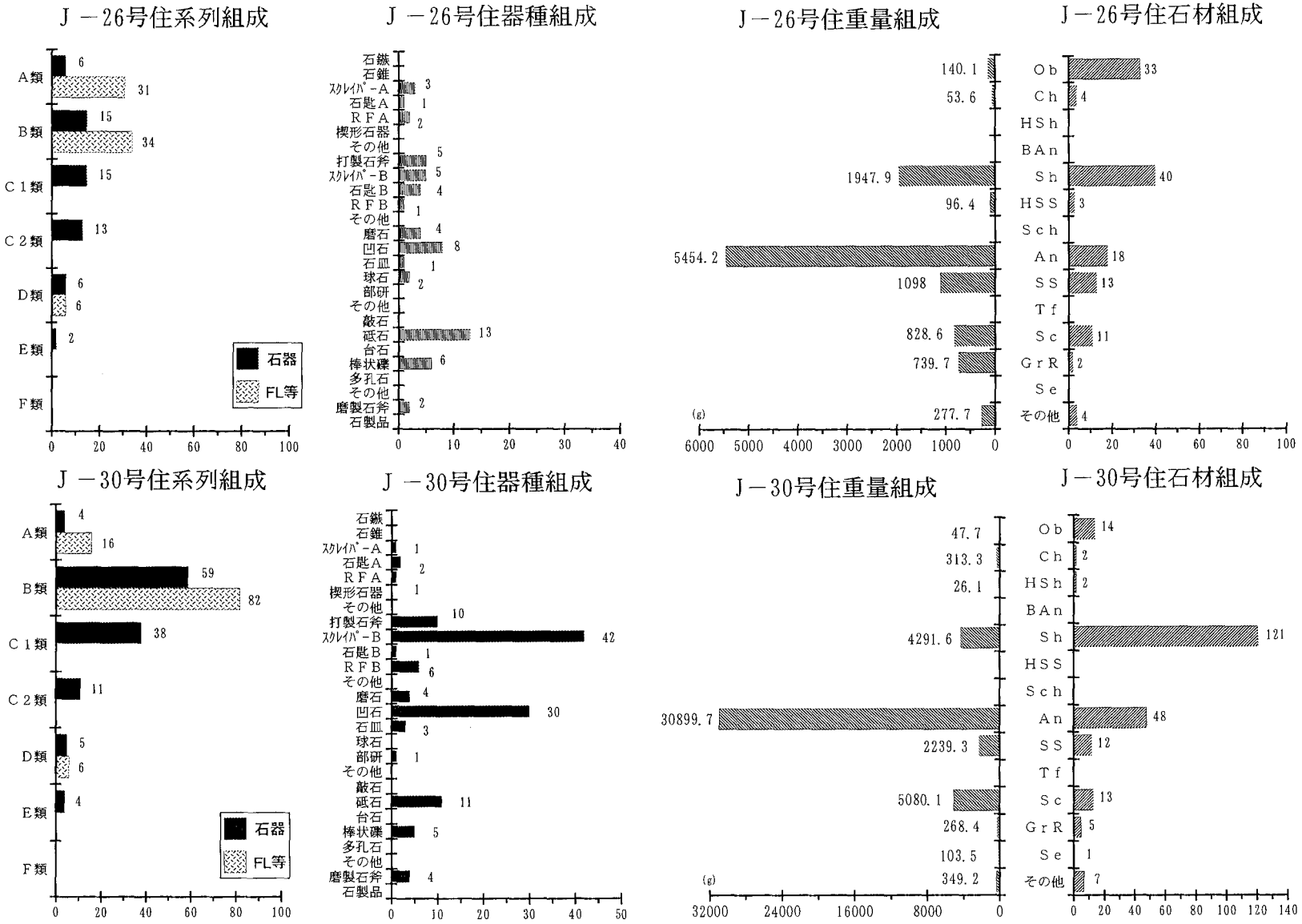
第60図　J—20・21号住居址の石器組成



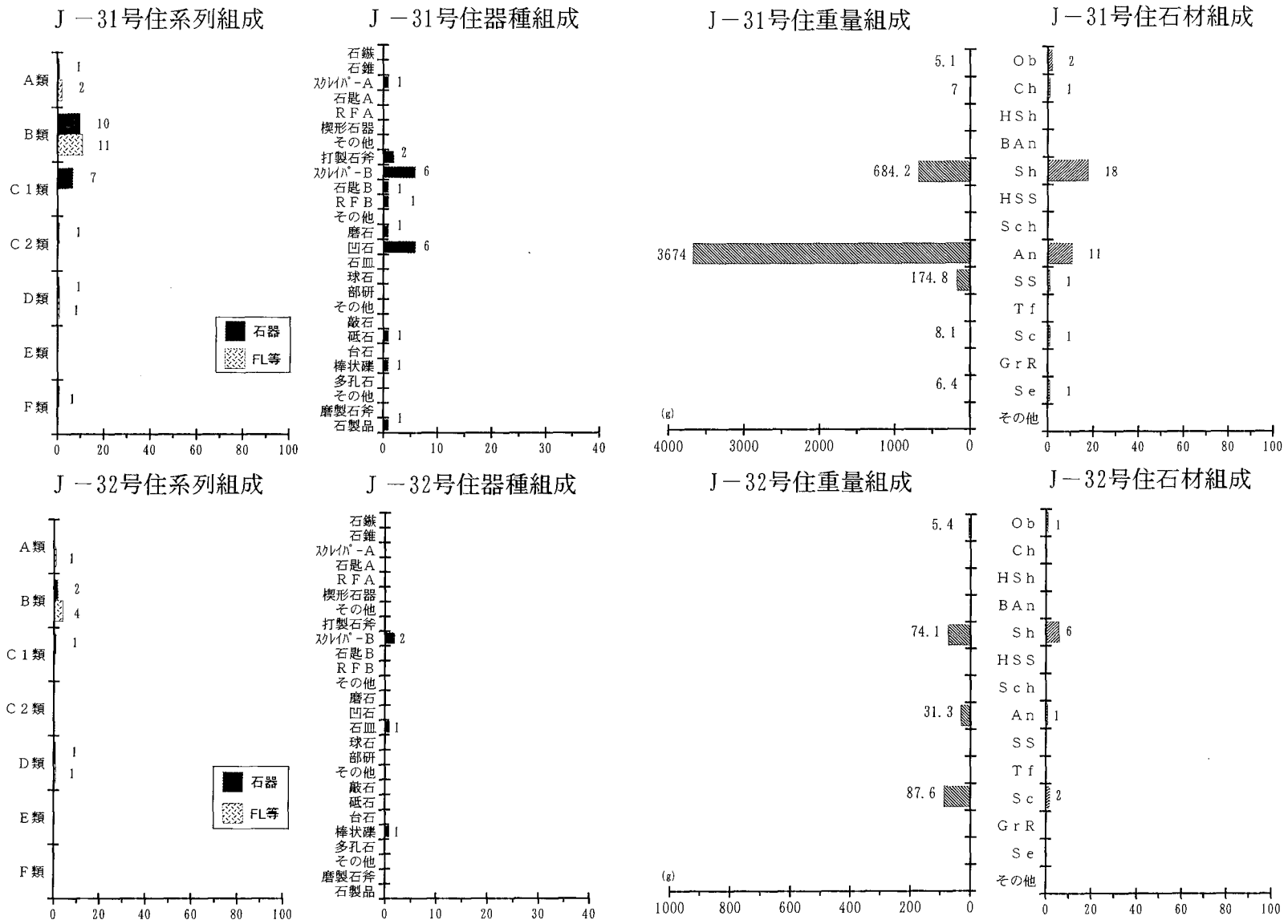
第61図　J—22・23号住居址の石器組成



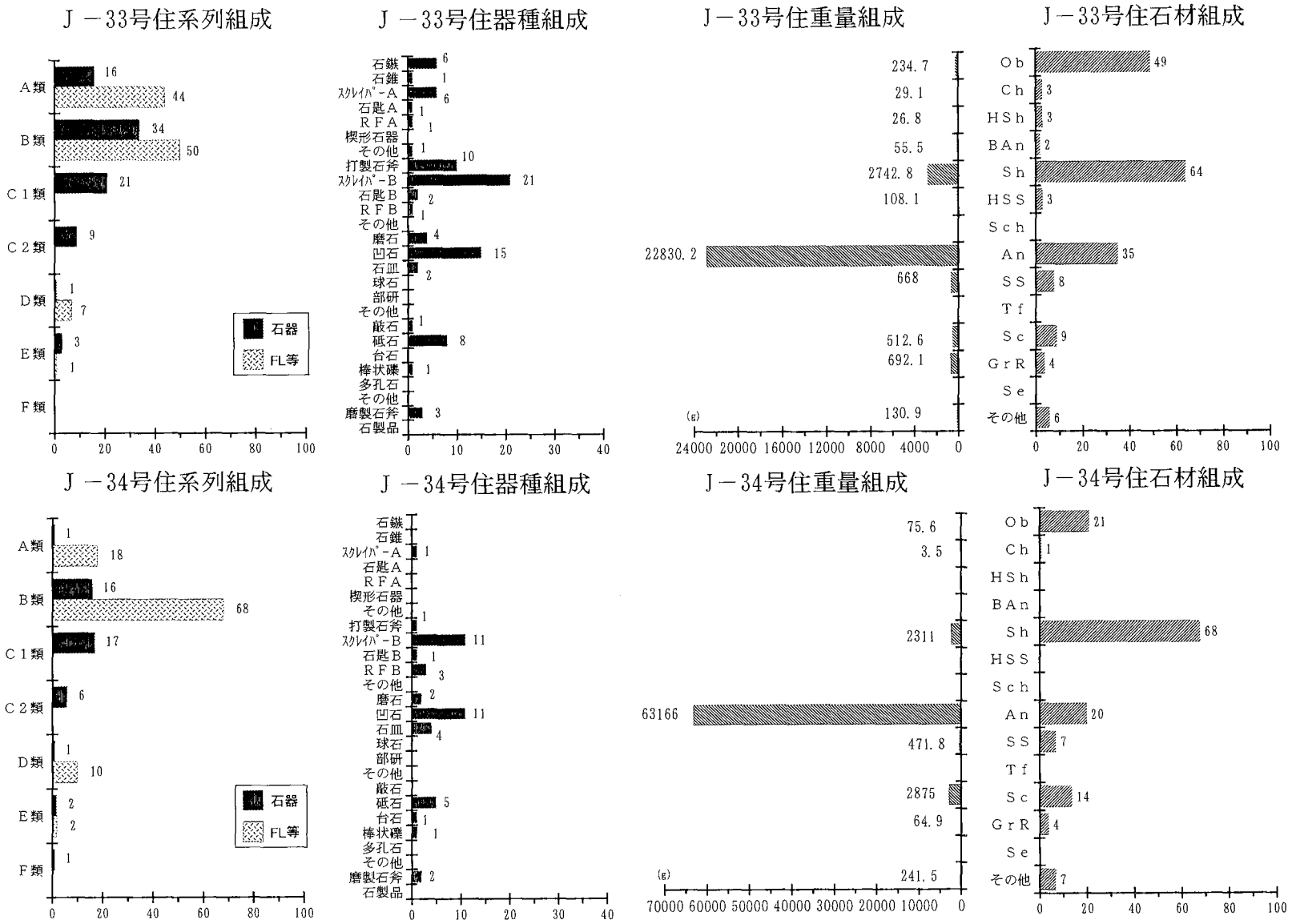
第62図　J—24・25号住居址の石器組成



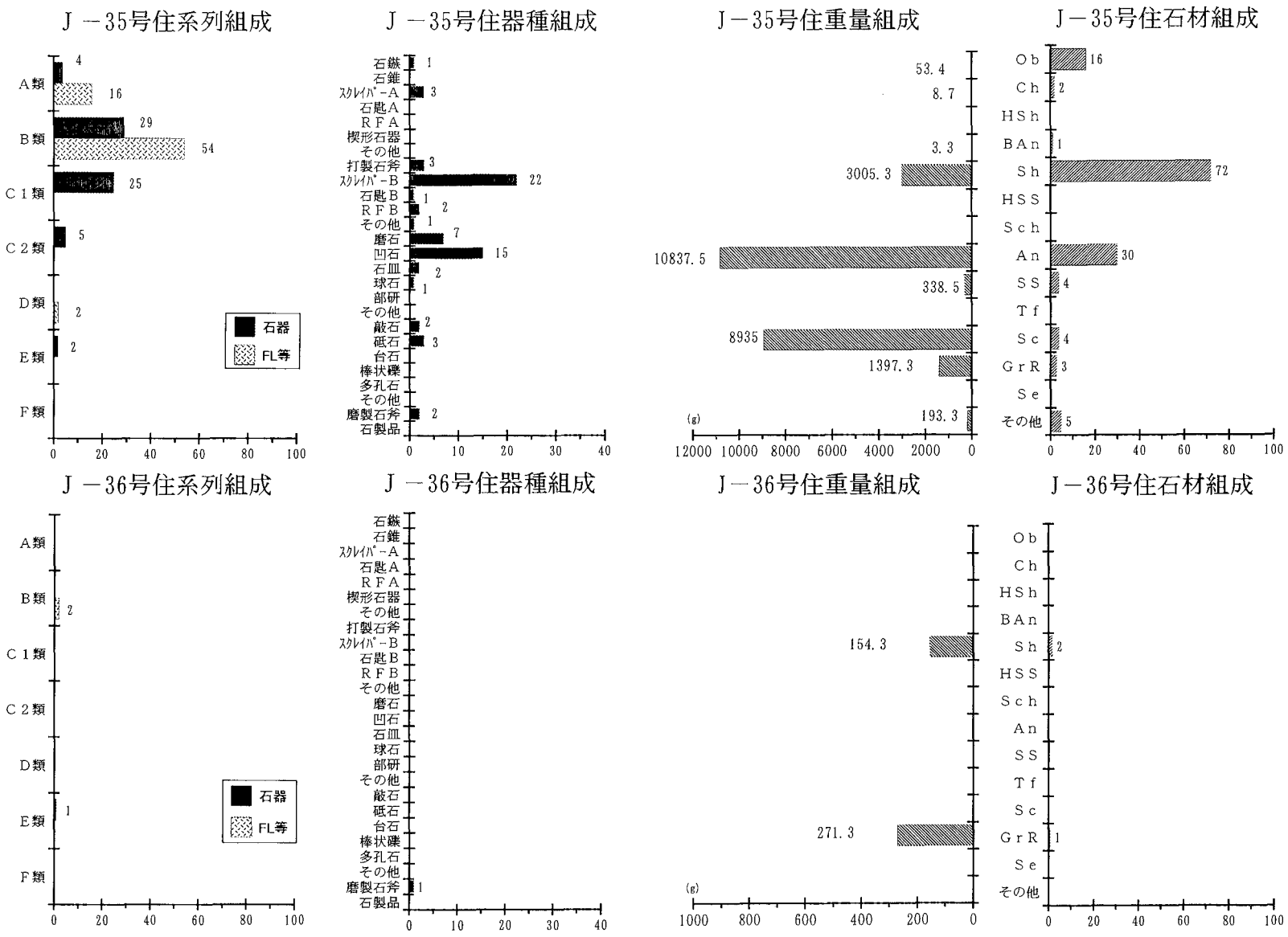
第63図　J－26・30号住居址の石器組成



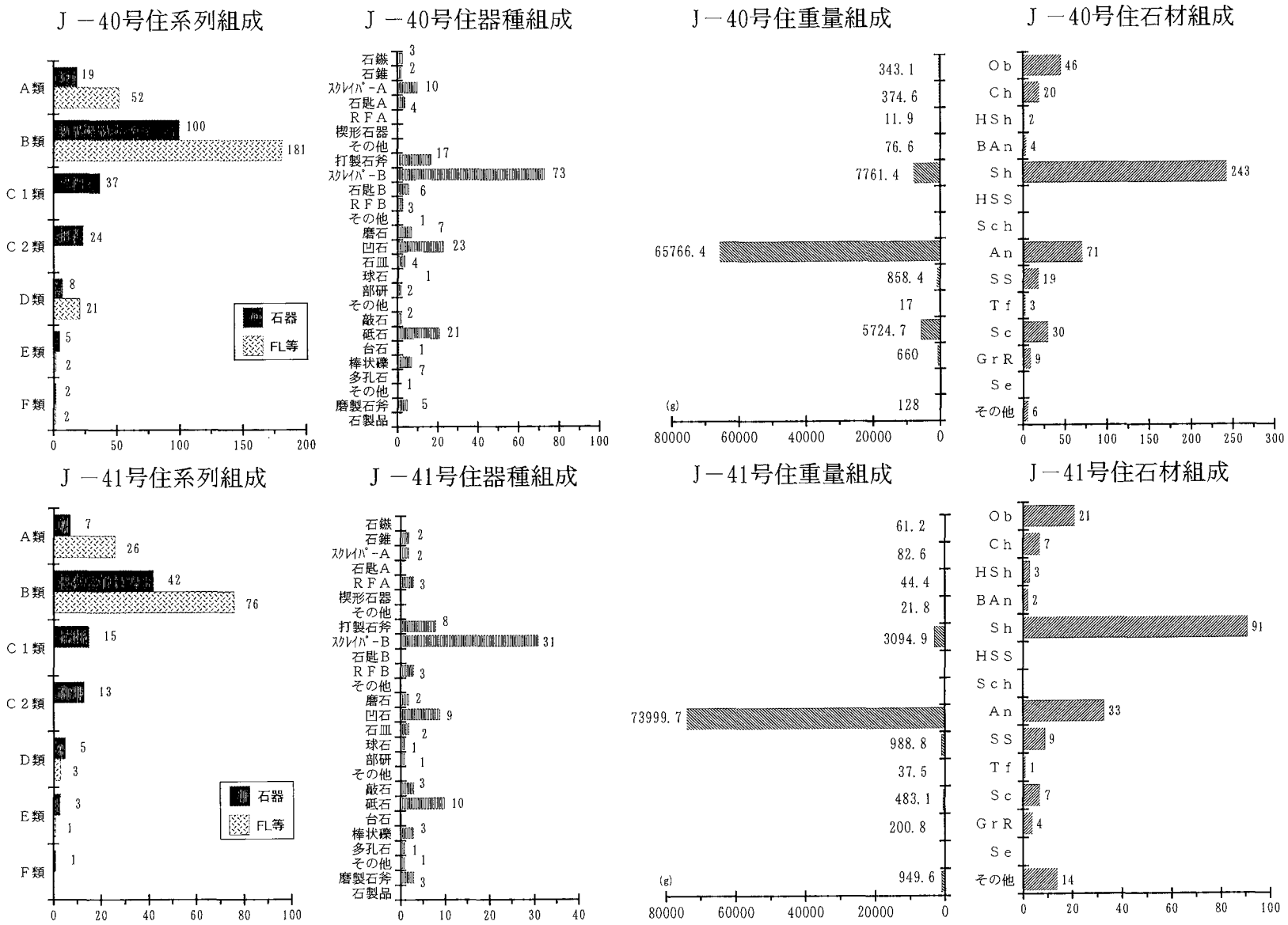
第64図　J－31・32号住居址の石器組成



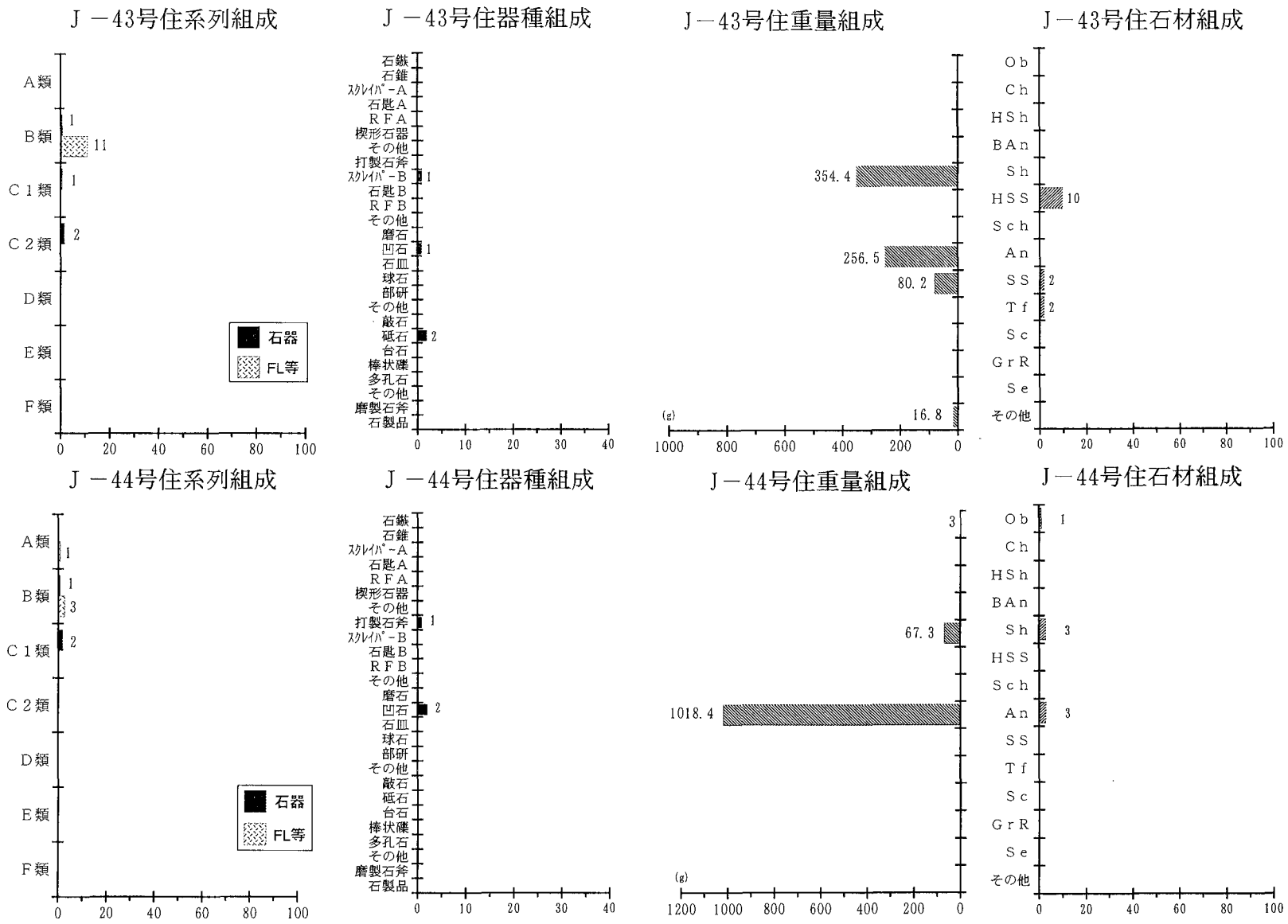
第65図　J—33・34号住居址の石器組成



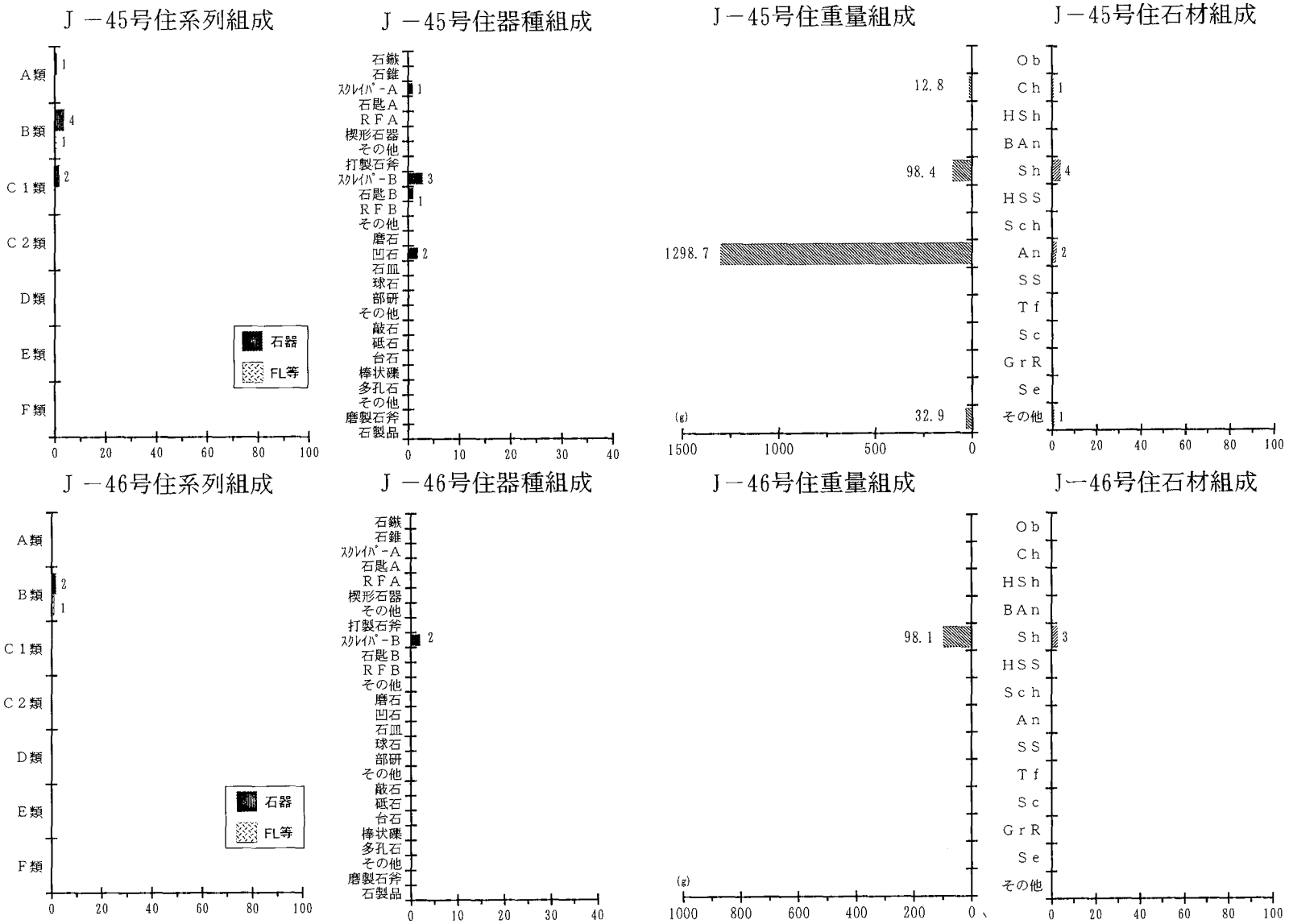
第66図　J－35・36号住居址の石器組成



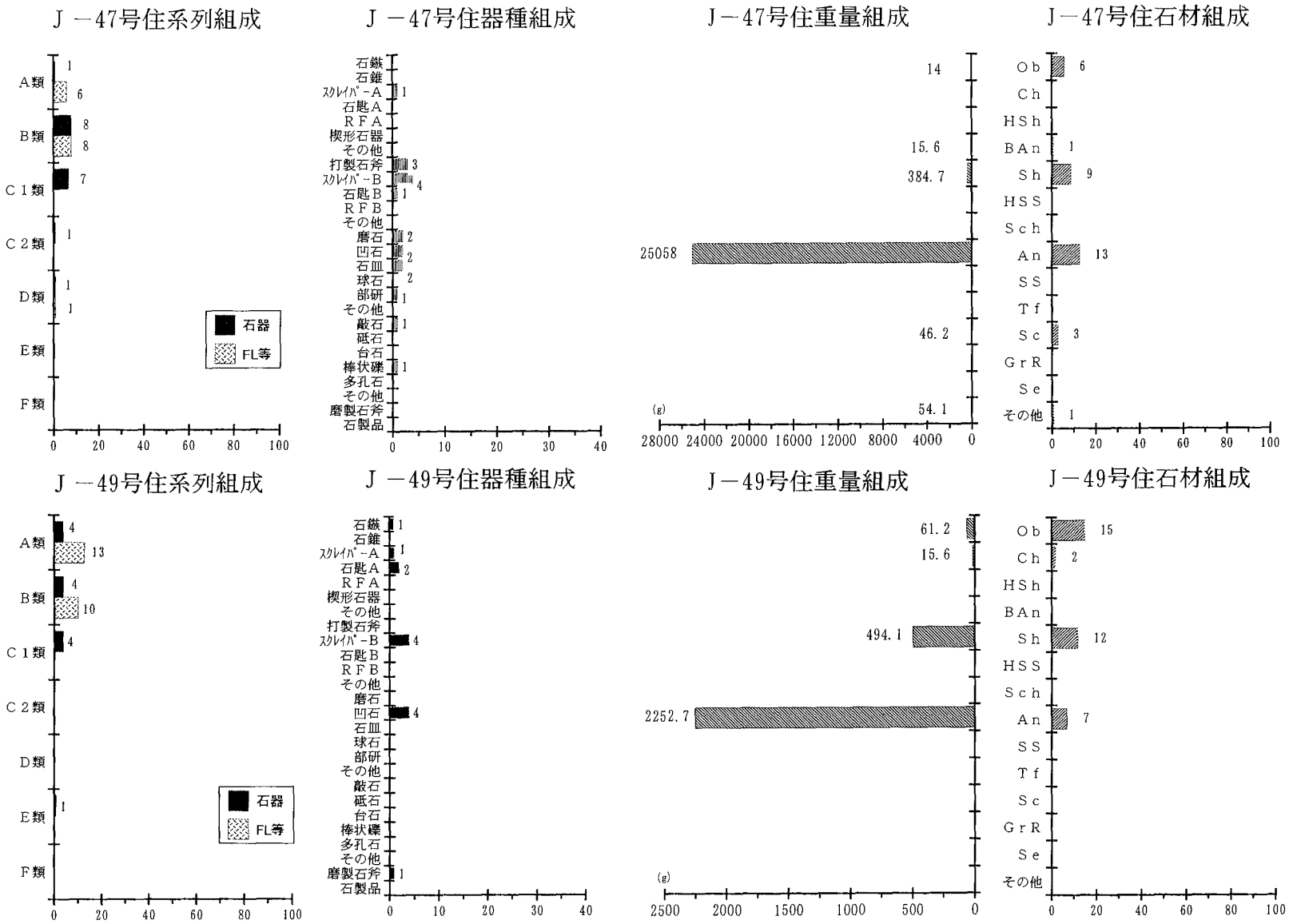
第67図　J－40・41号住居址の石器組成



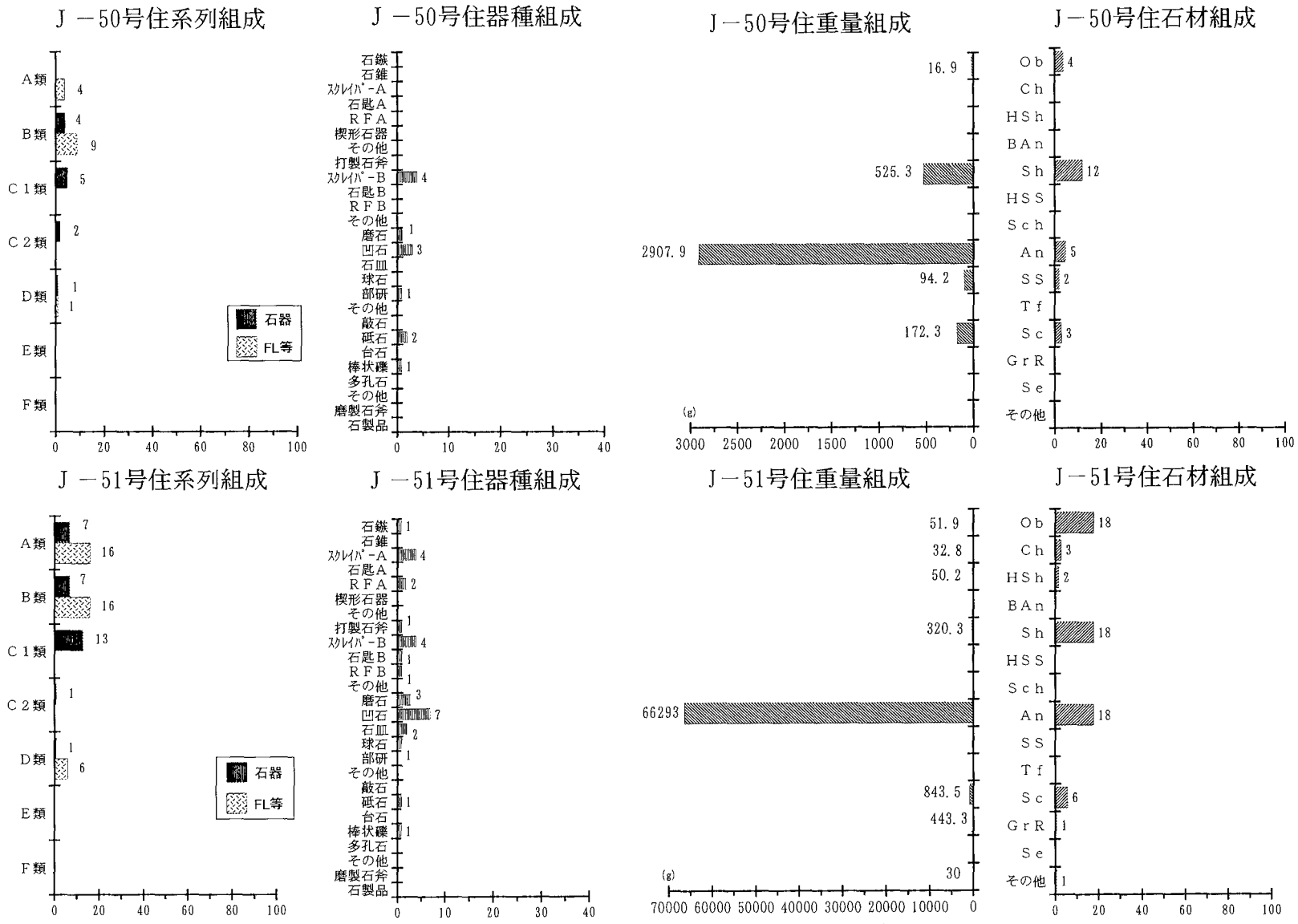
第68図　J－43・44号住居址の石器組成



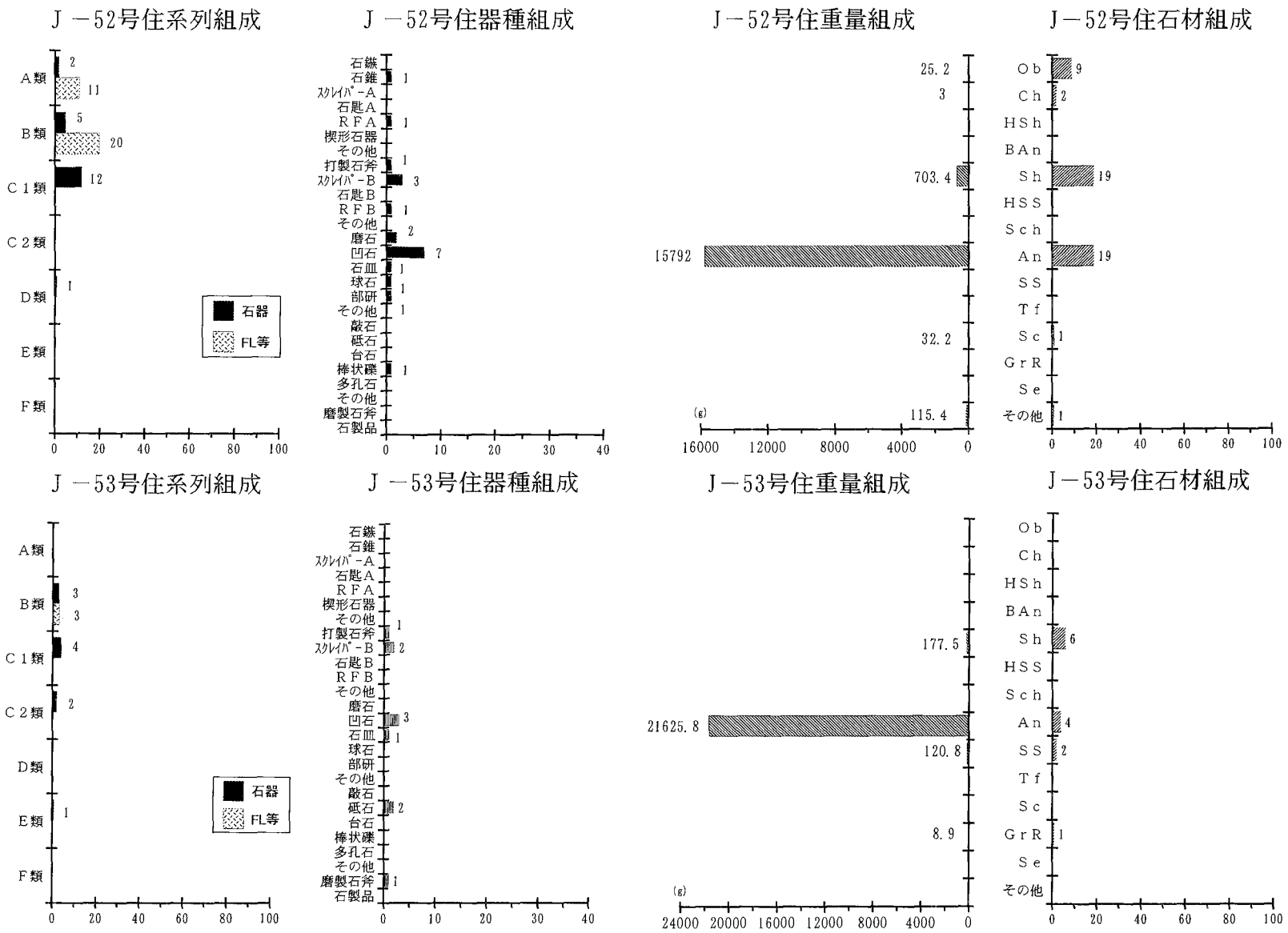
第69図　J—45・46号住居址の石器組成



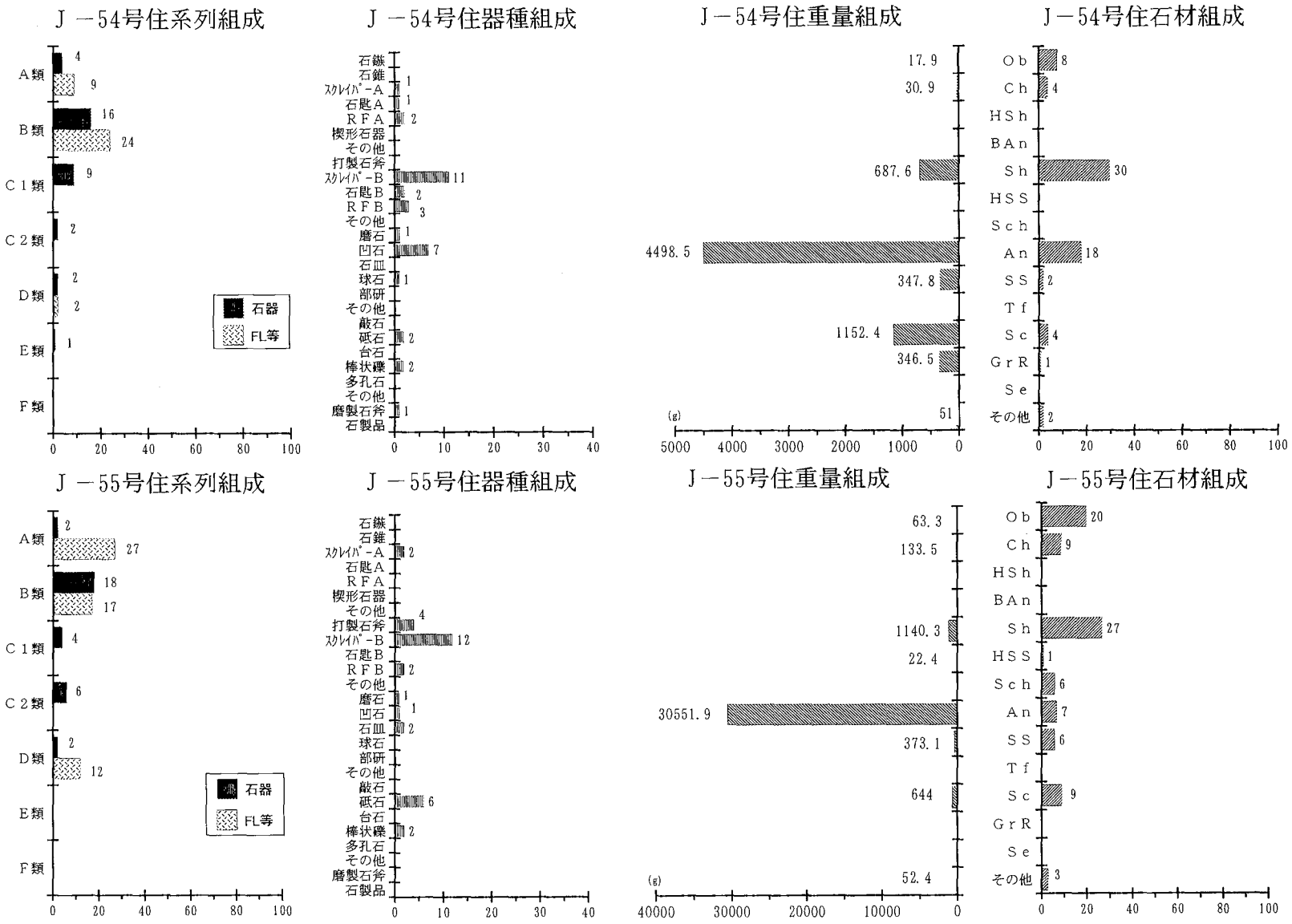
第70図　J－47・49号住居址の石器組成



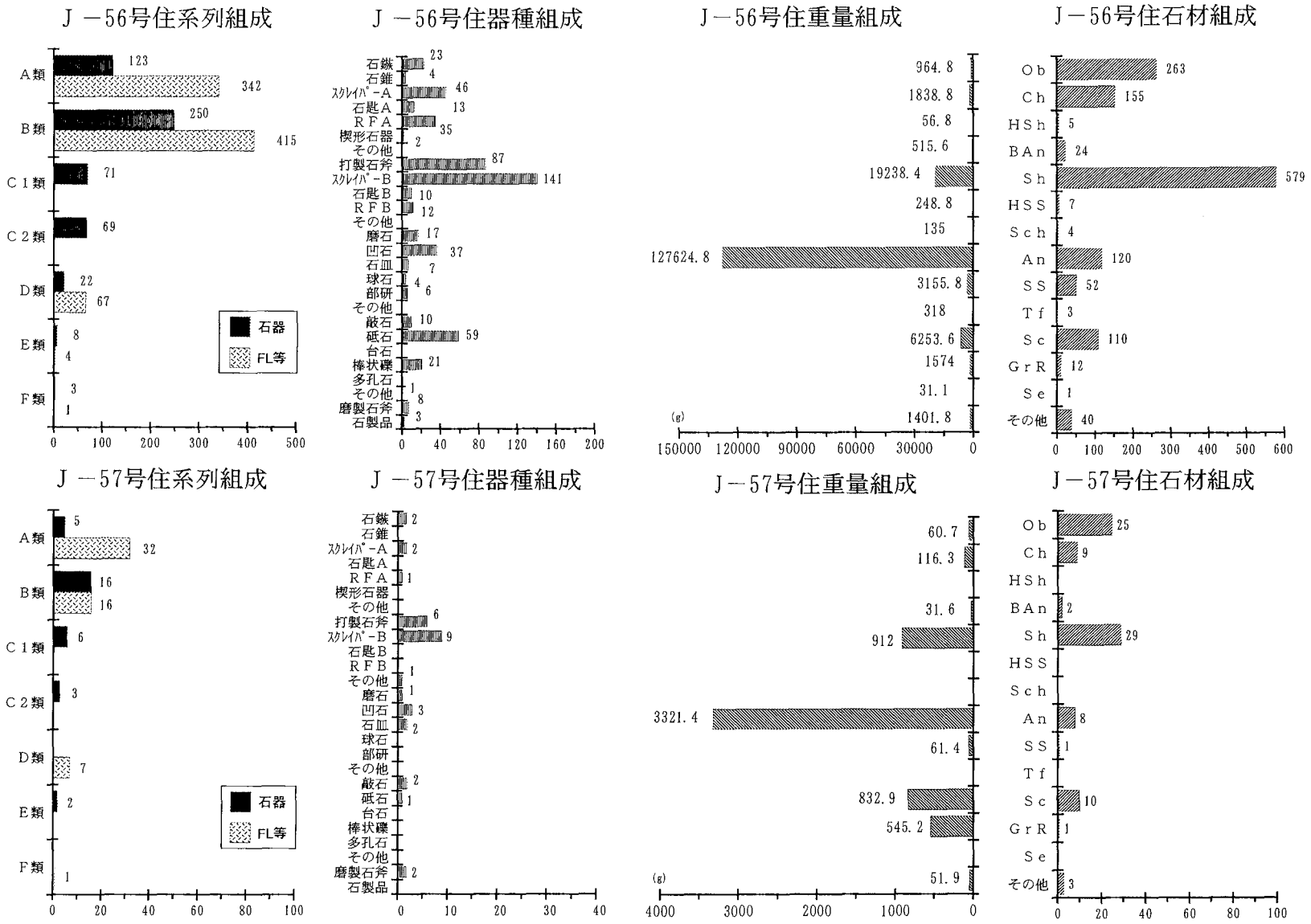
第71図　J—50・51号住居址の石器組成



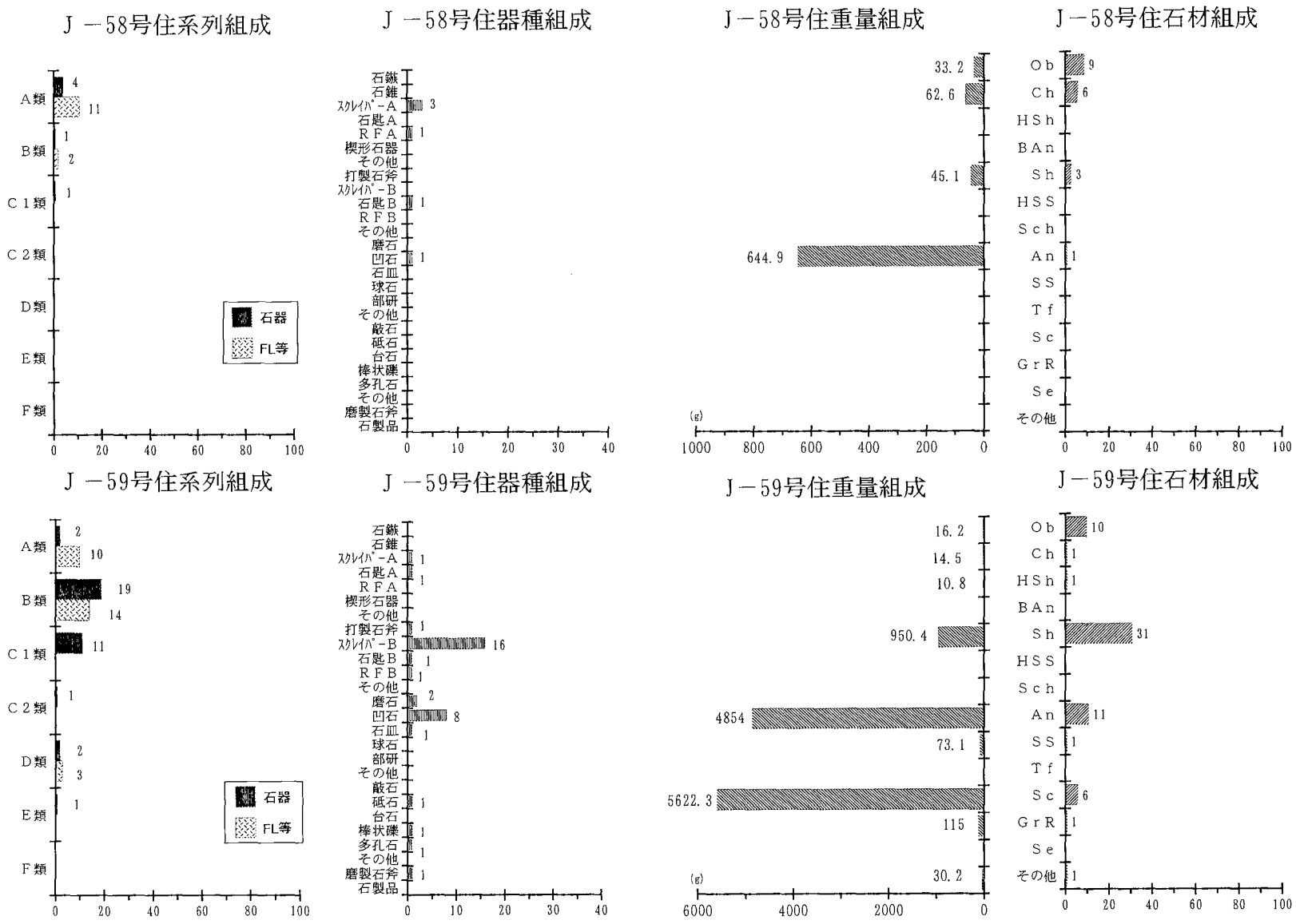
第72図　J－52・53号住居址の石器組成



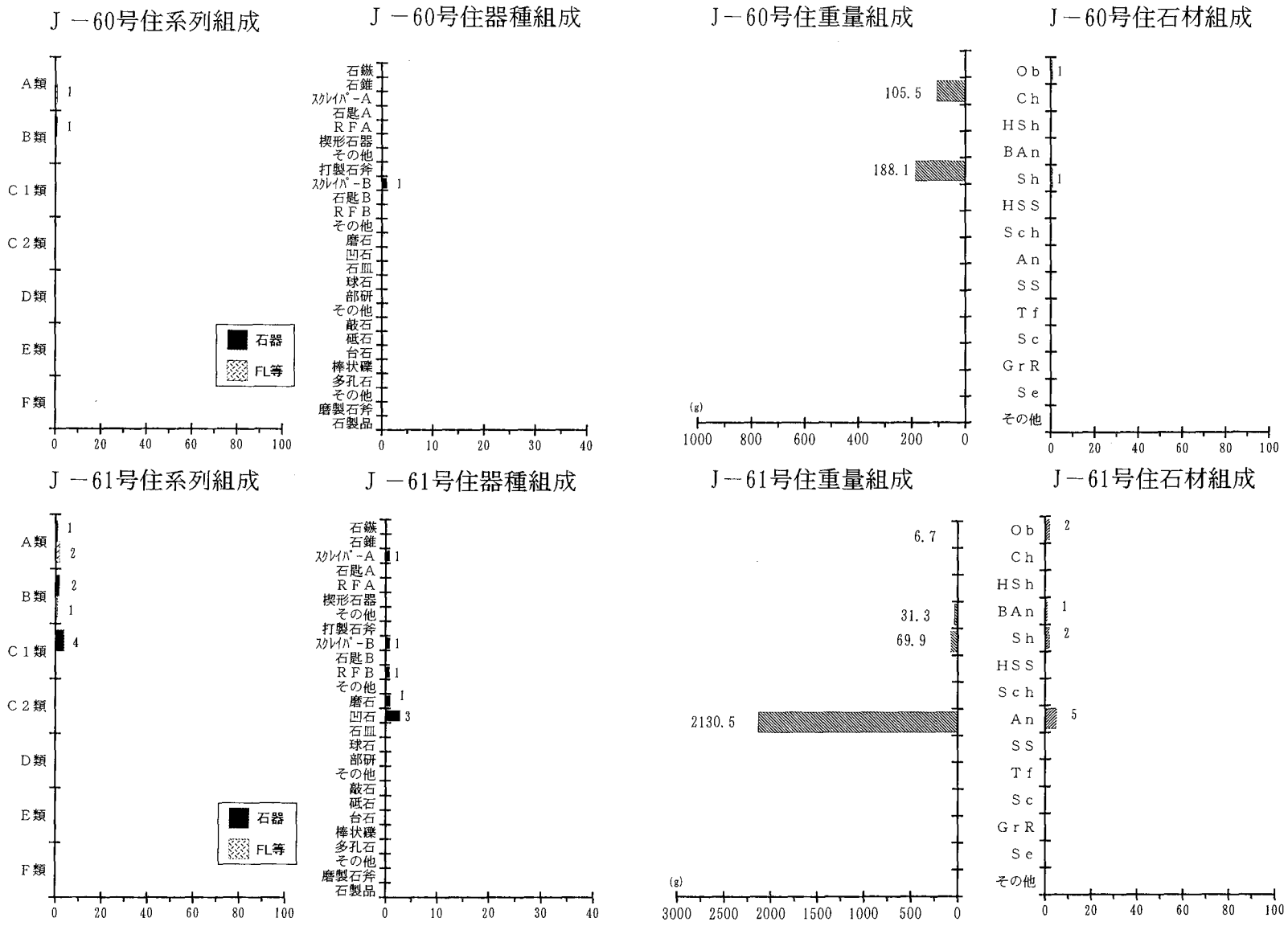
第73図　J—54・55号住居址の石器組成



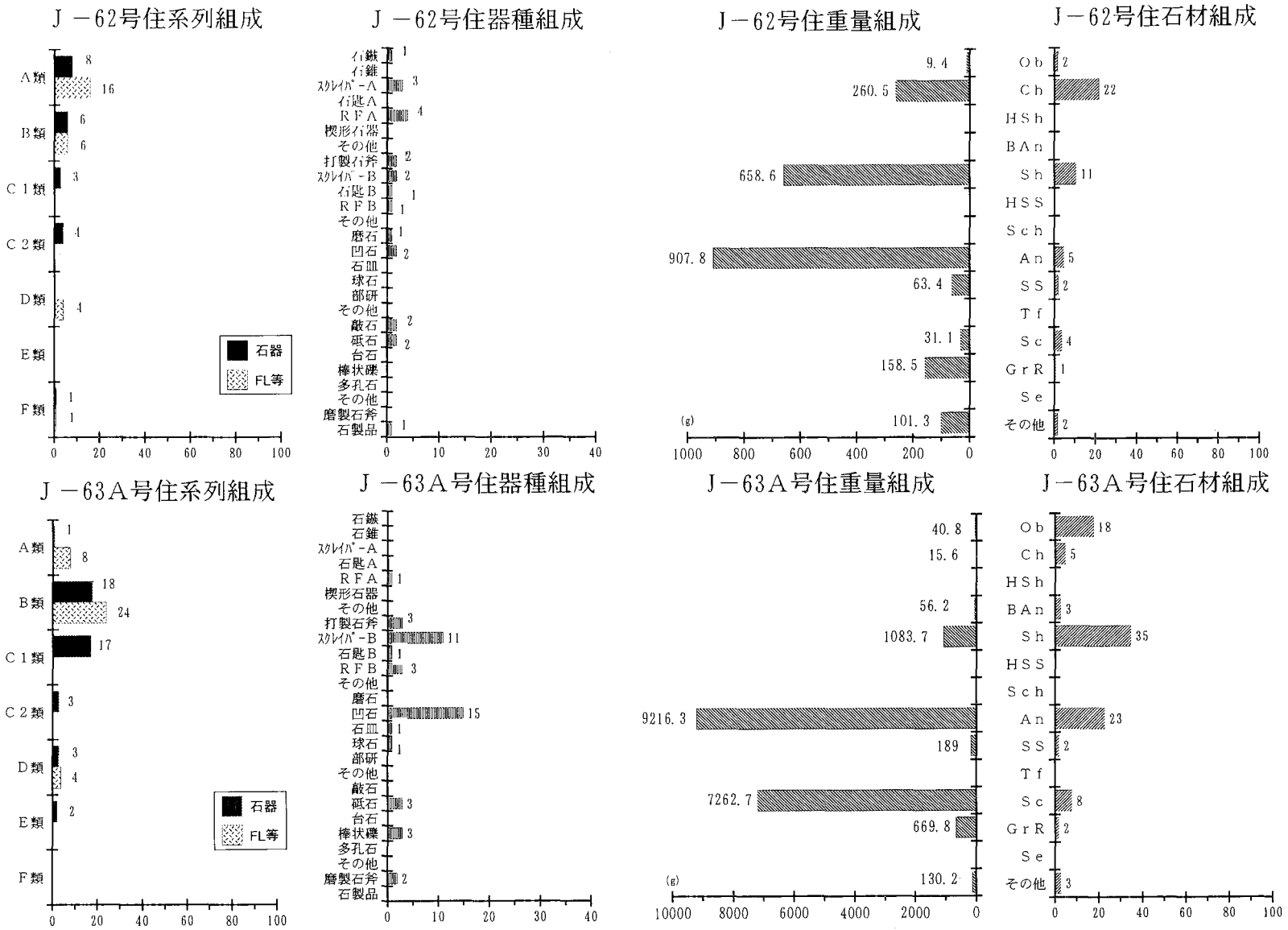
第74図　J－56・57号住居址の石器組成



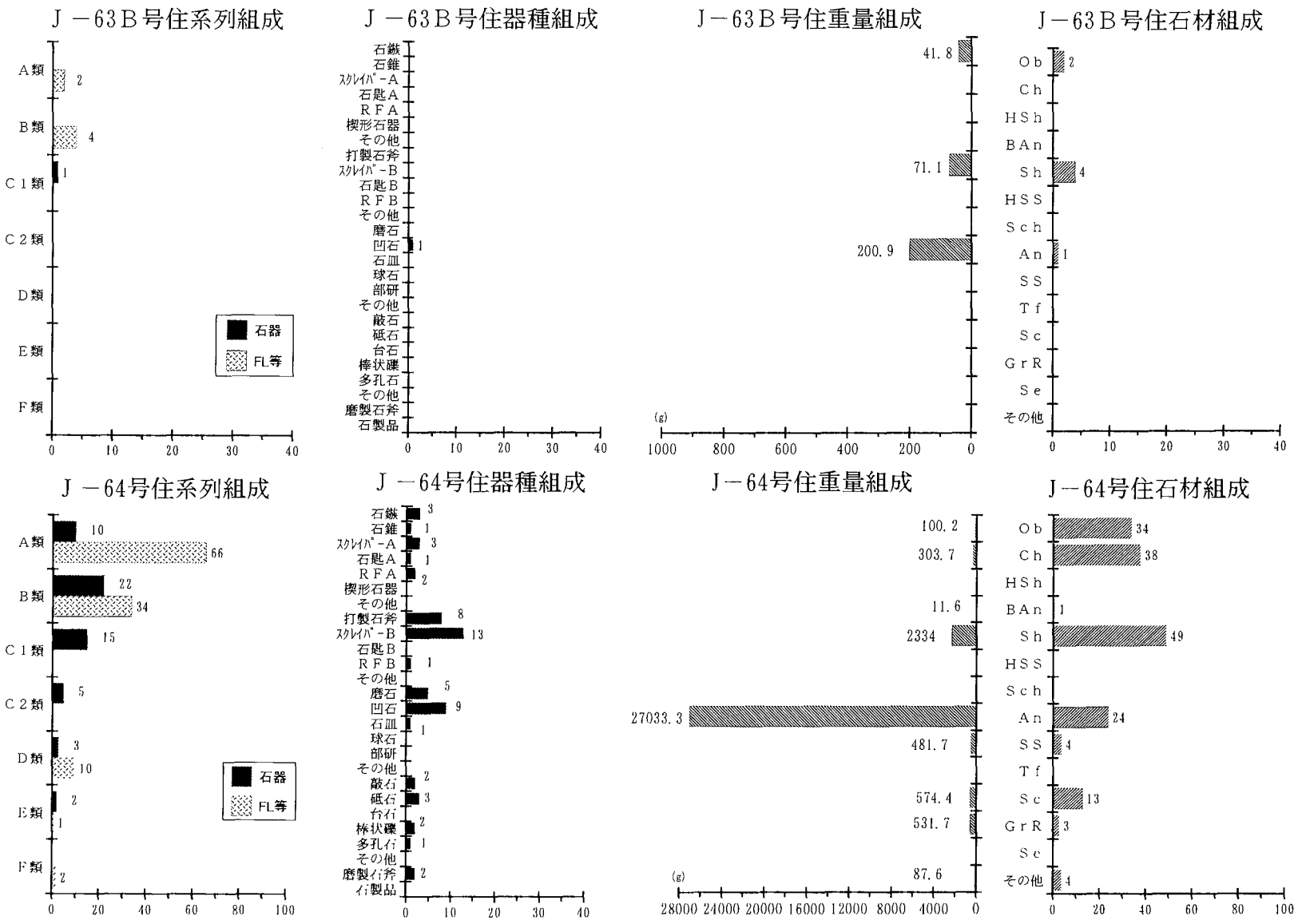
第75図　J—58・59号住居址の石器組成



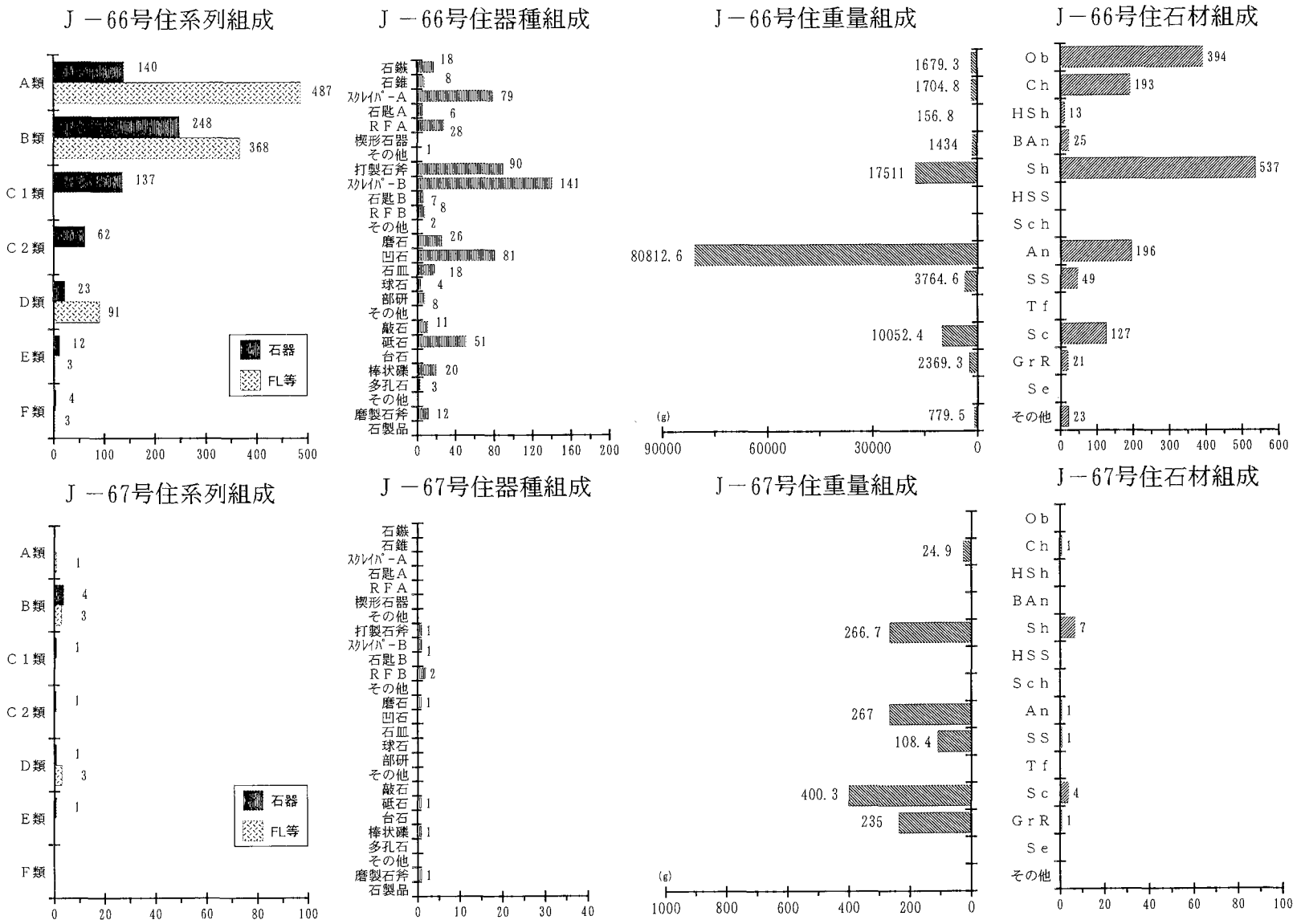
第76図　J－60・61号住居址の石器組成



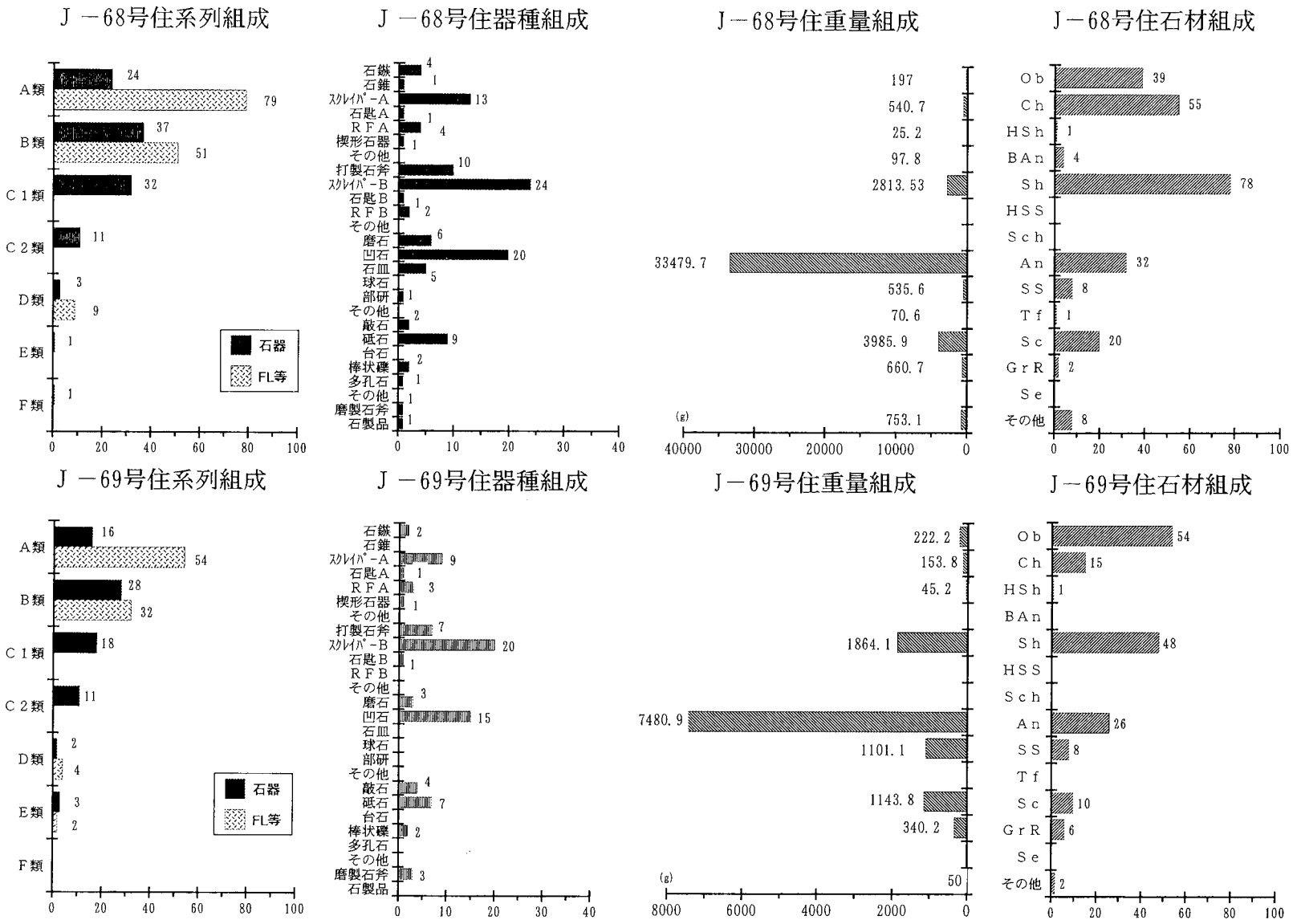
第77図　J－62・63A号住居址の石器組成



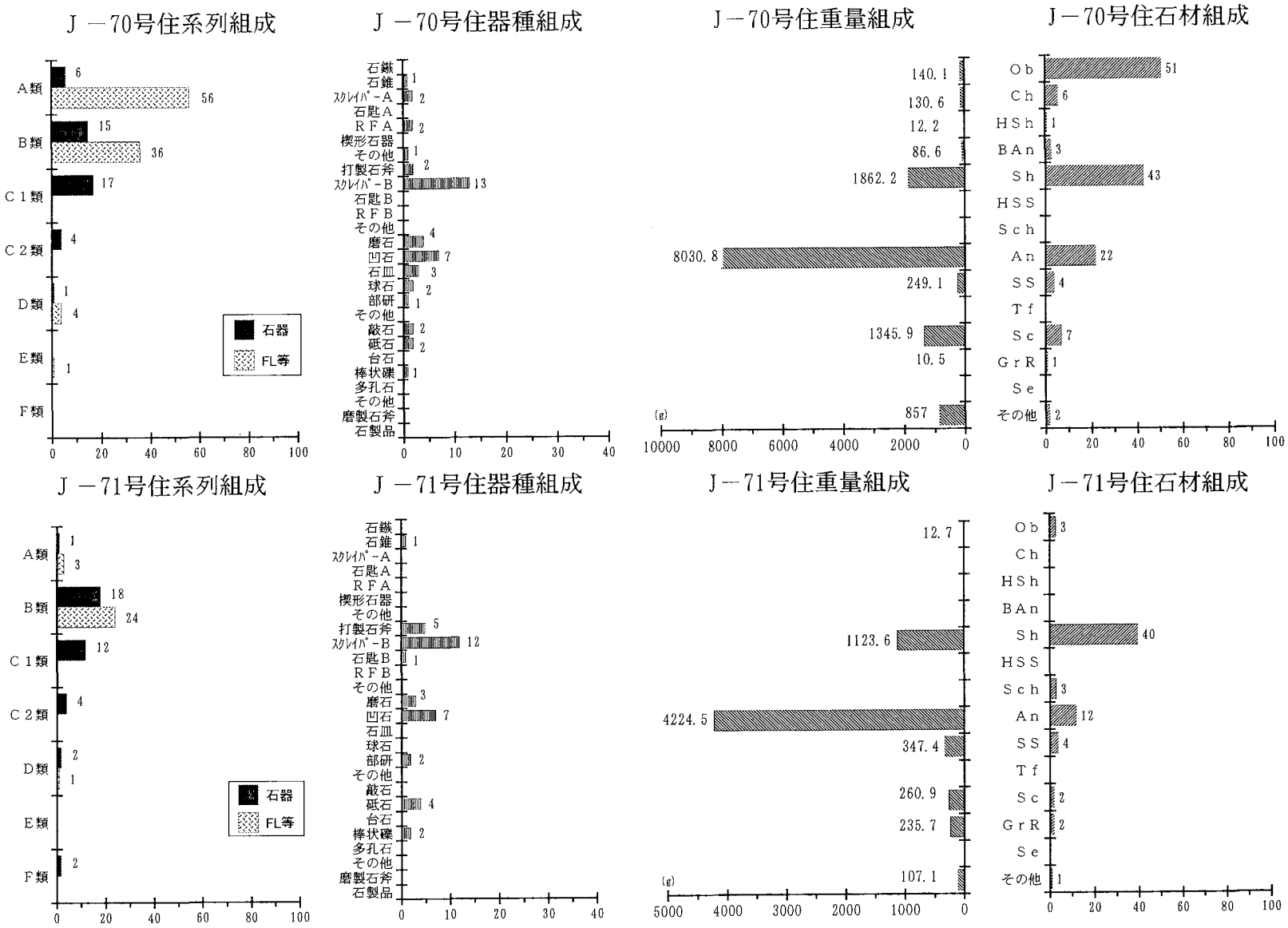
第78図　J－63B・64号住居址の石器組成



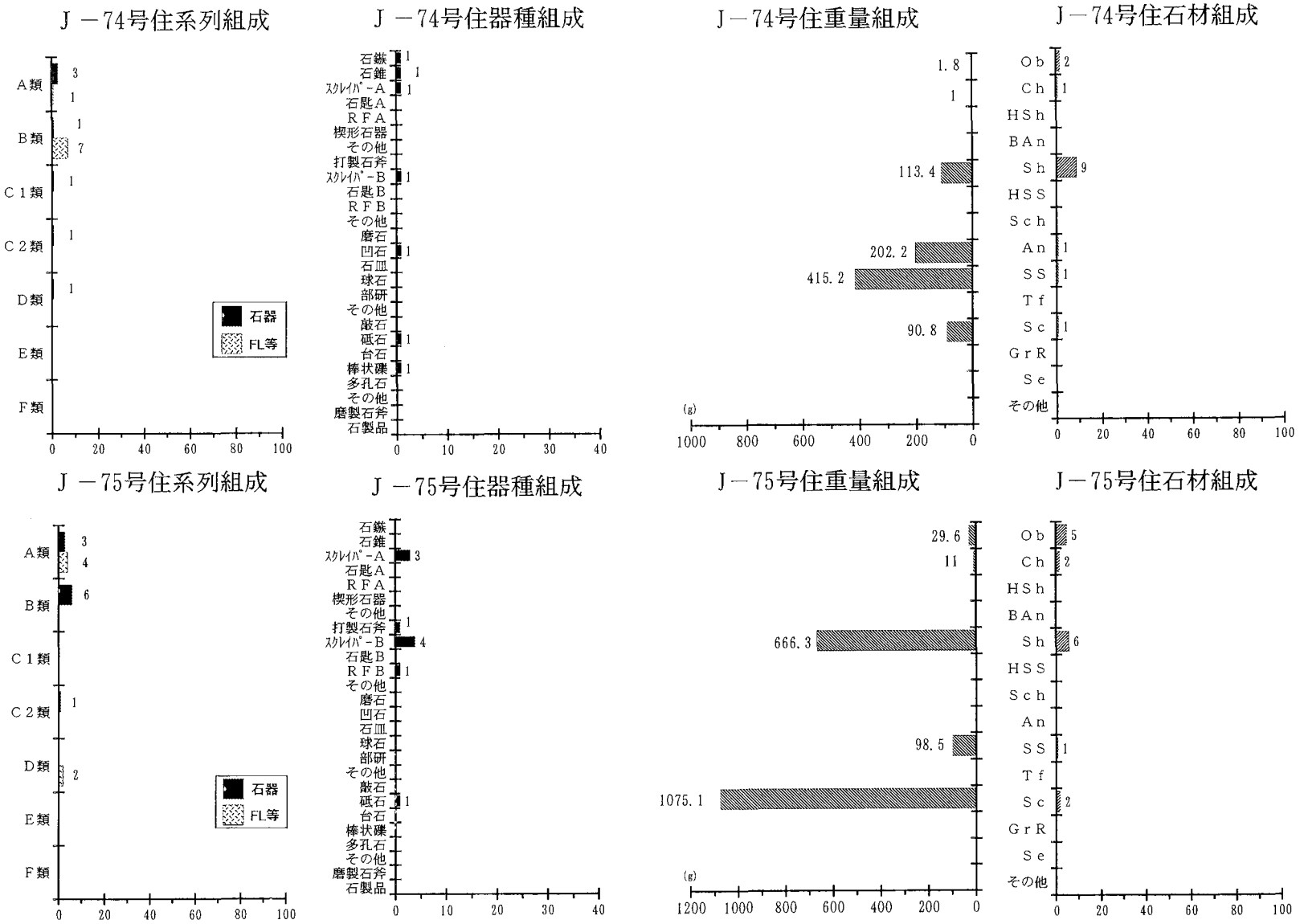
第79図　J—66・67号住居址の石器組成



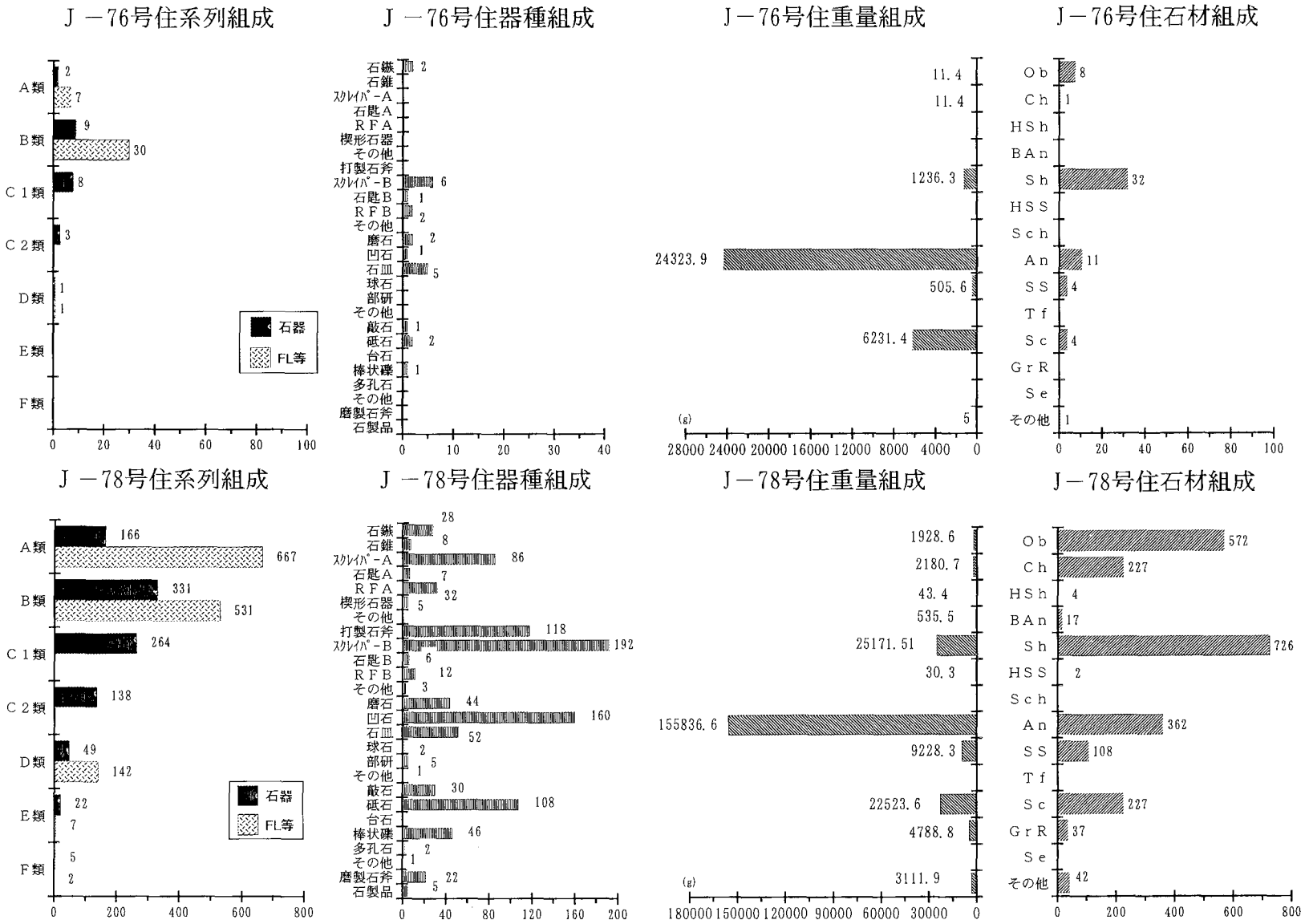
第80図　J－68・69号住居址の石器組成



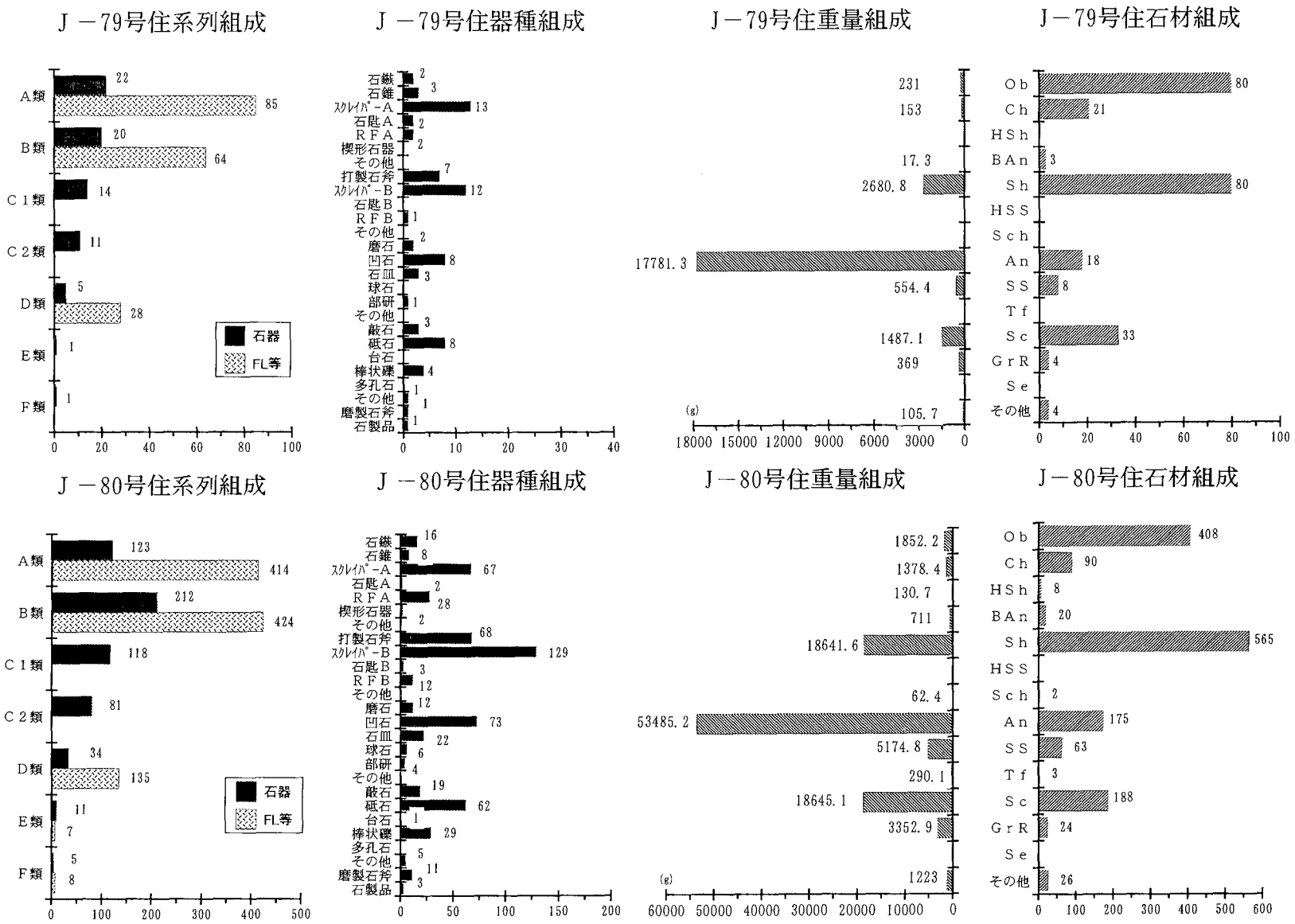
第81図　J－70・71号住居址の石器組成



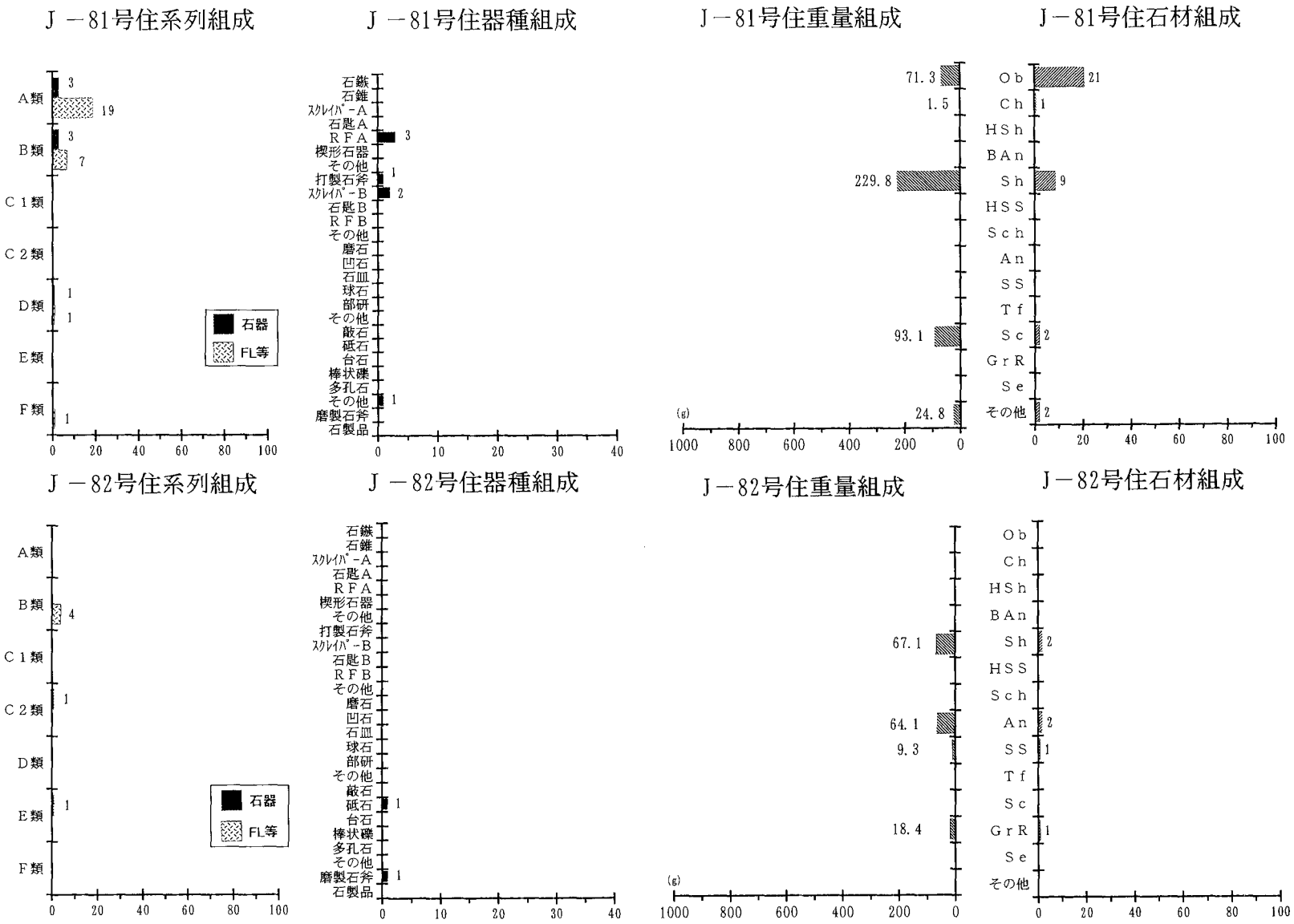
第82図　J－74・75号住居址の石器組成



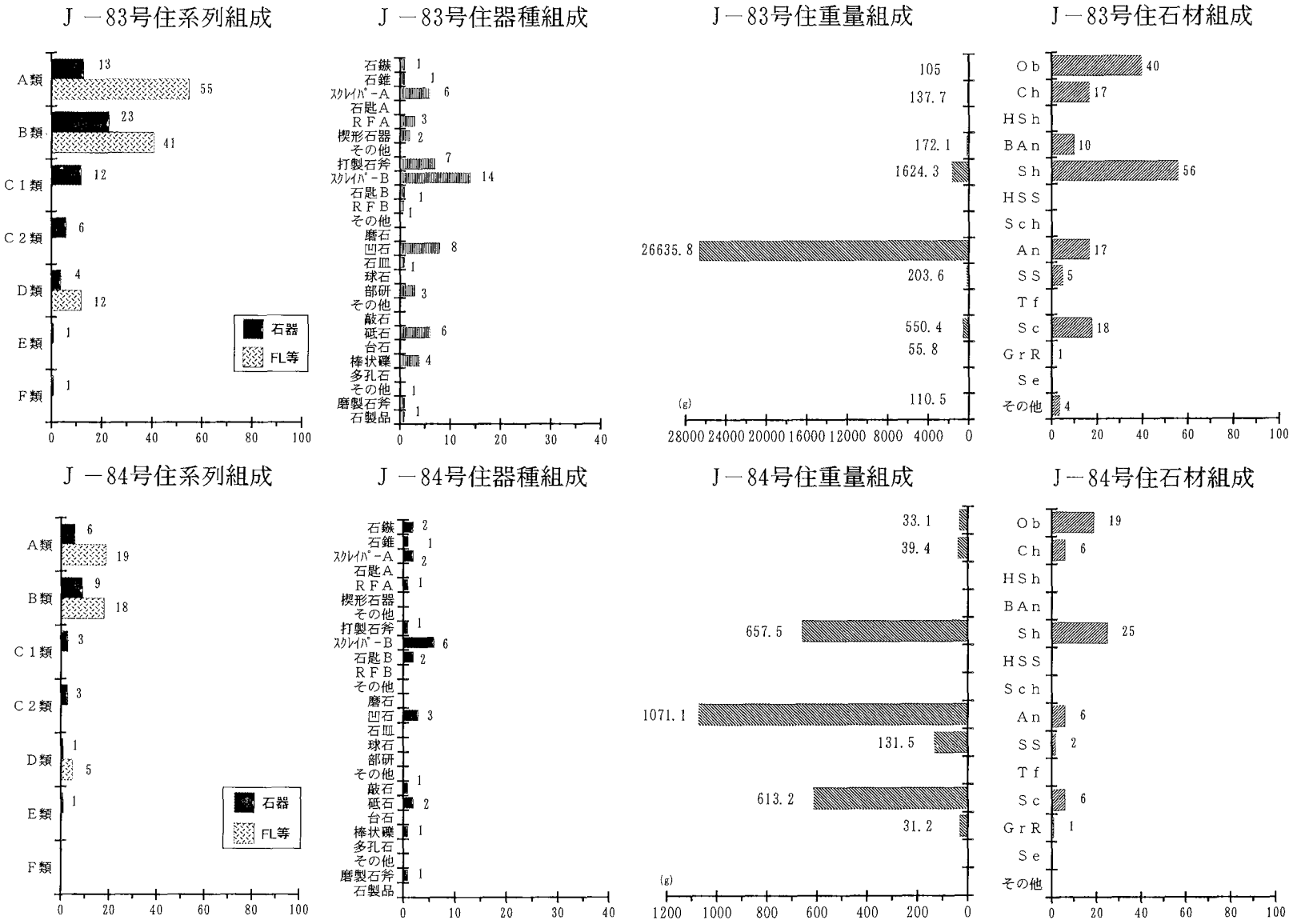
第83図　J—76・78号住居址の石器組成



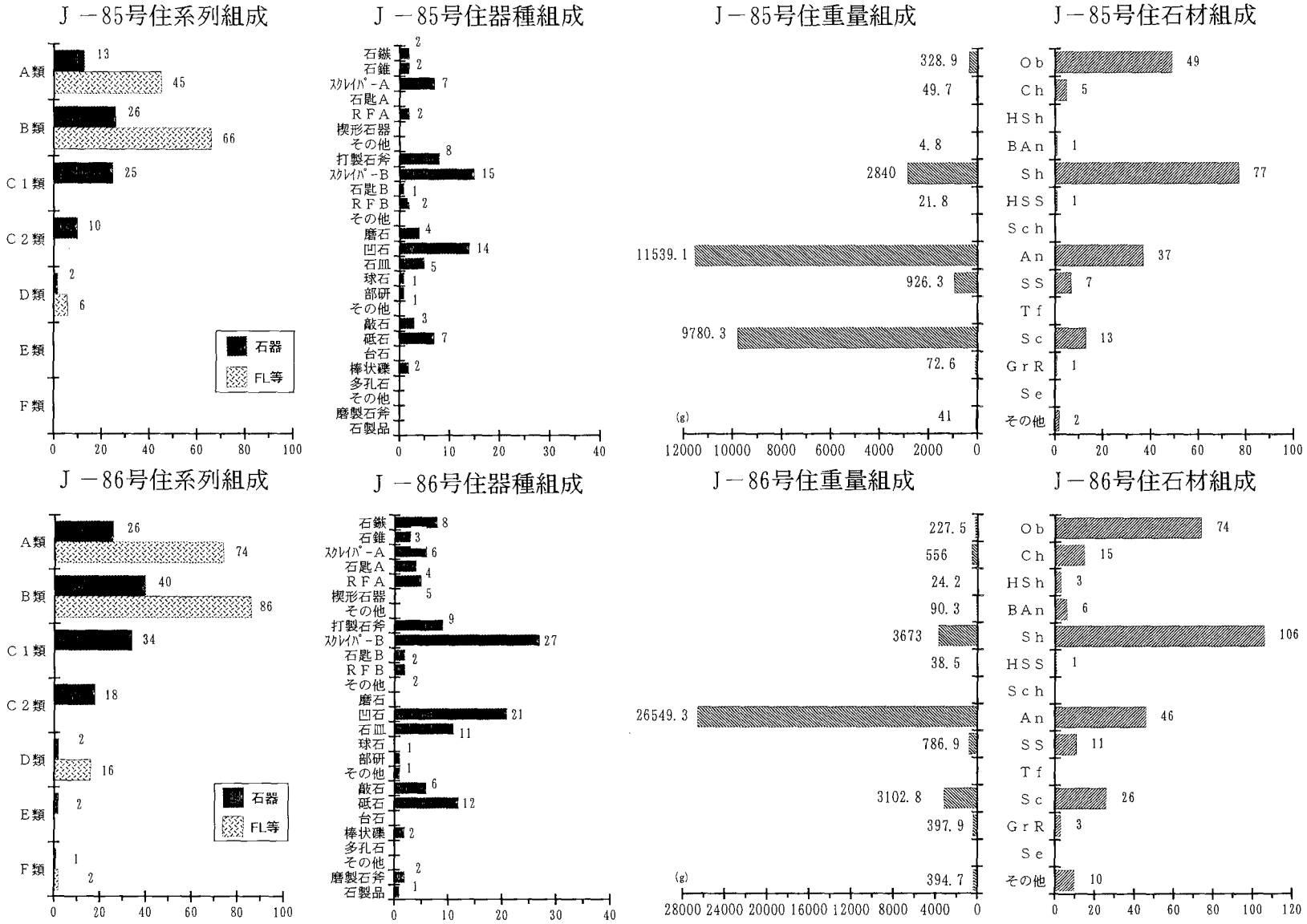
第84図　J—79・80号住居址の石器組成



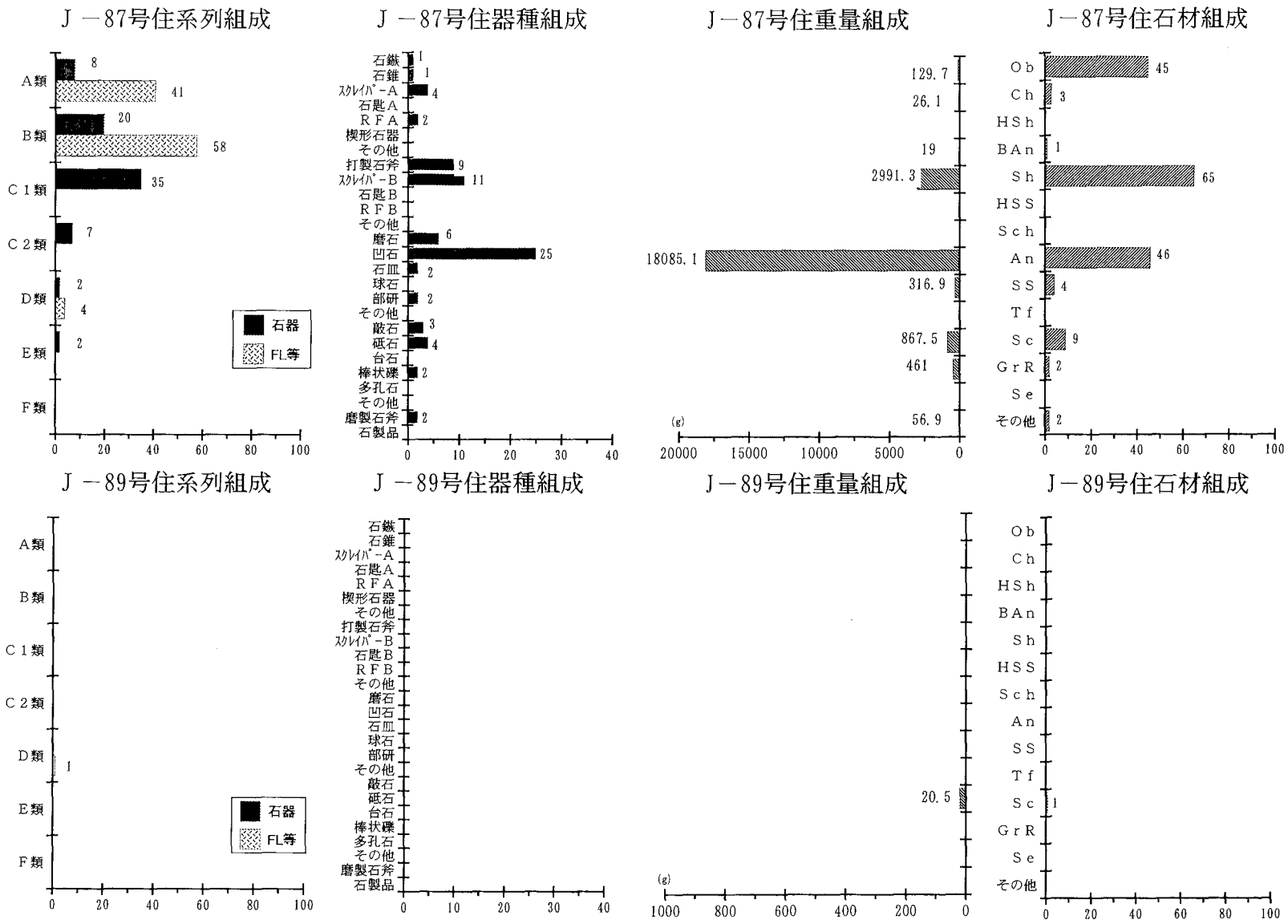
第85図　J－81・82号住居址の石器組成



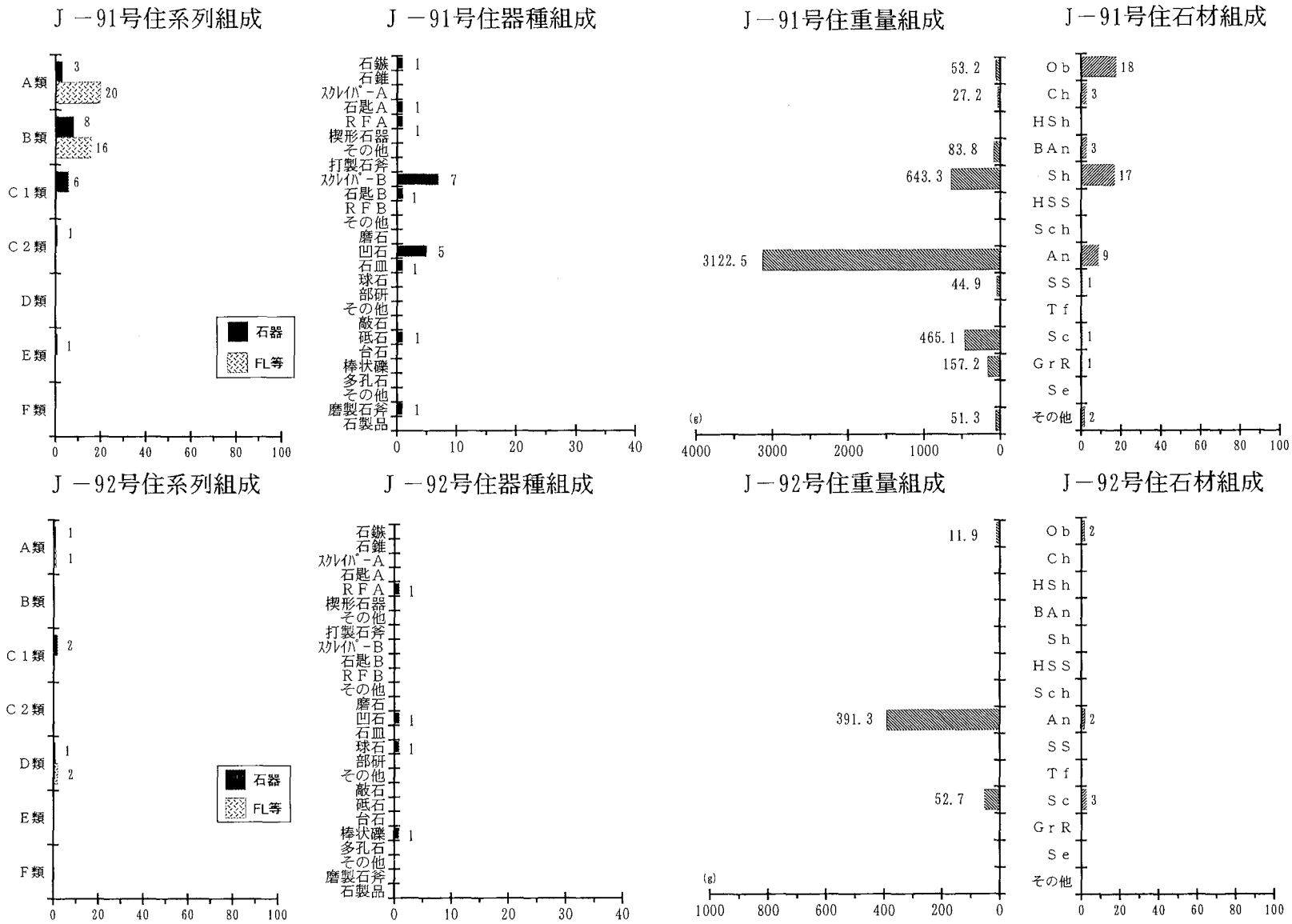
第86図　J－83・84号住居址の石器組成



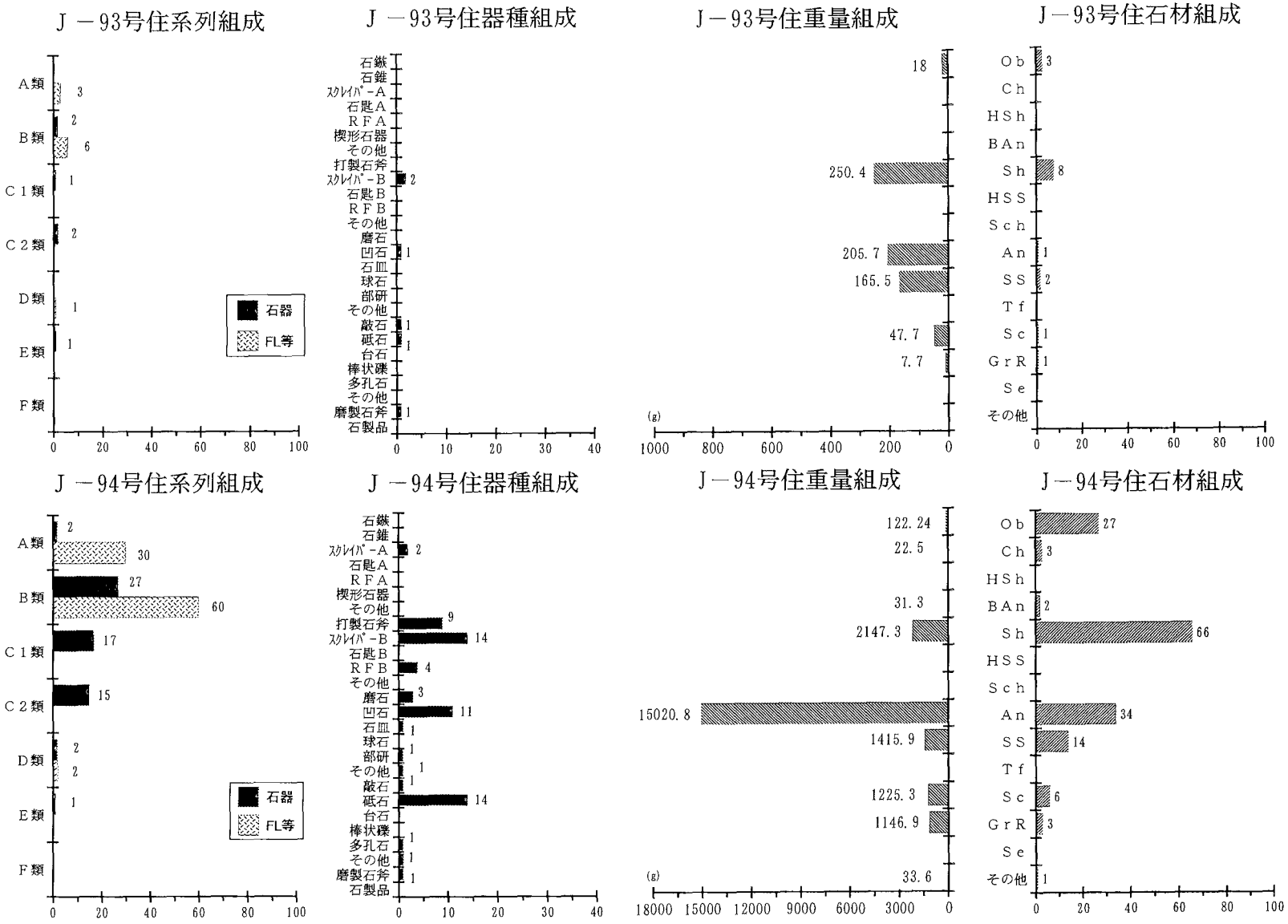
第87図　J－85・86号住居址の石器組成



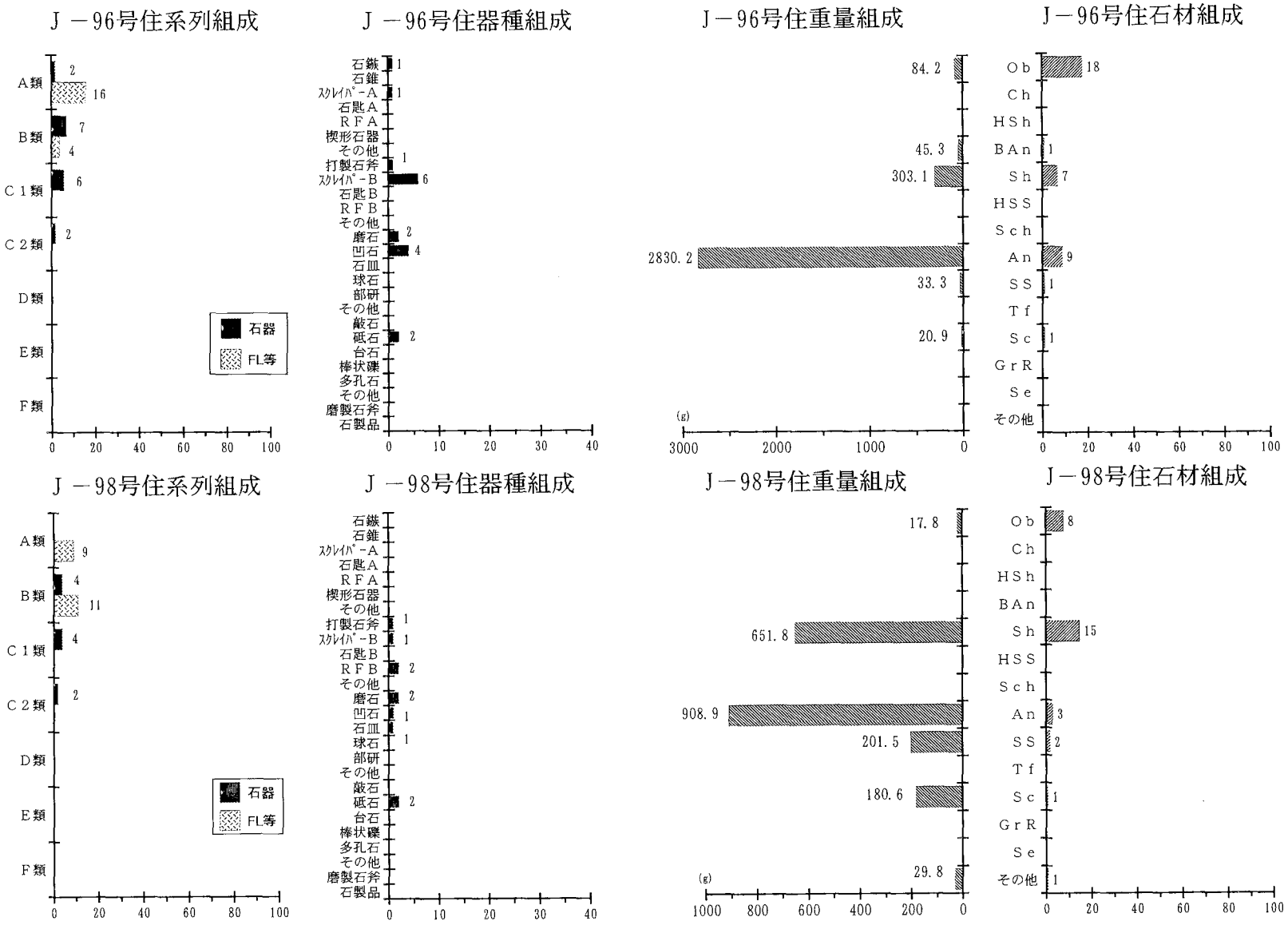
第88図　Ｊ－87・89号住居址の石器組成



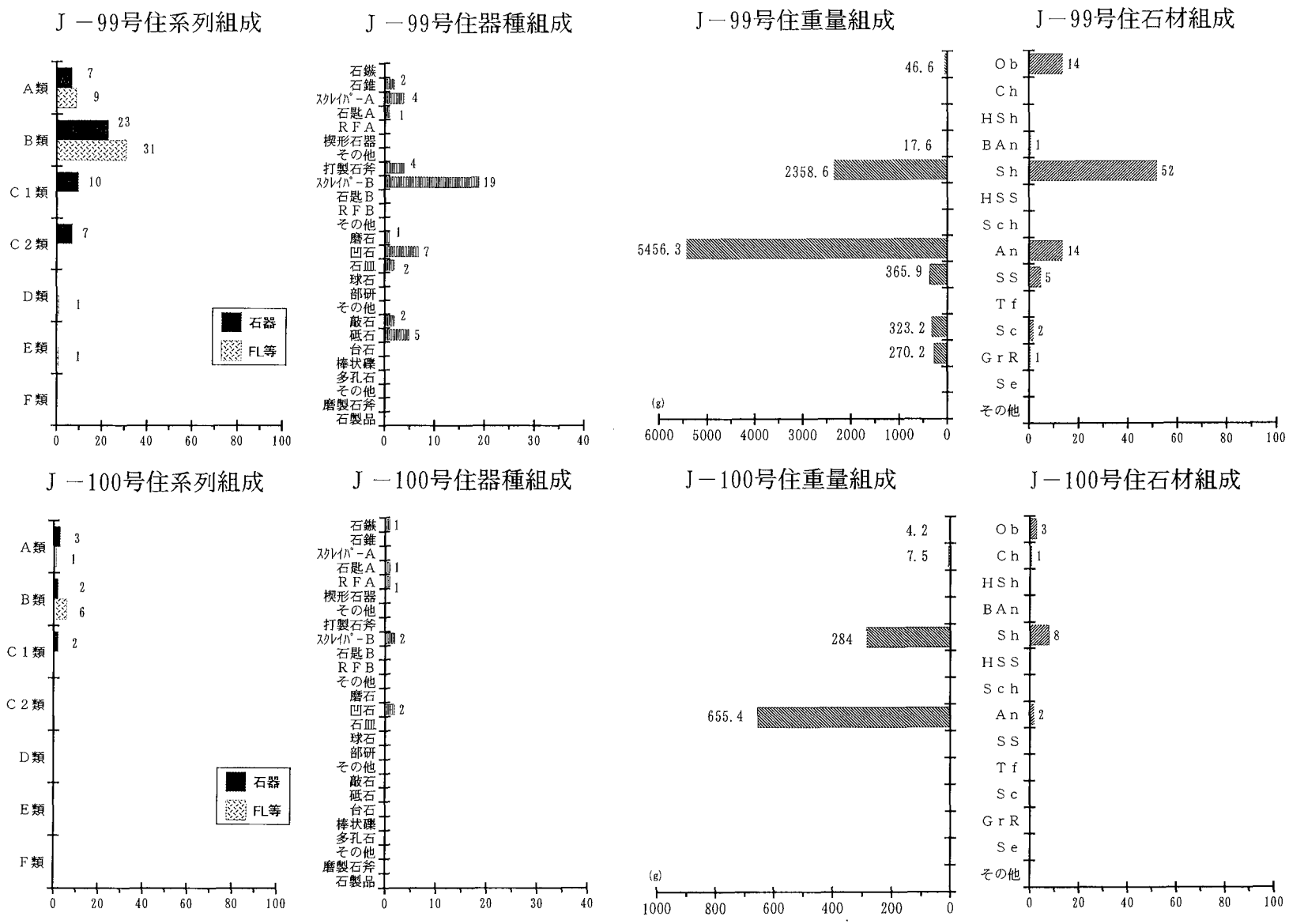
第89図　J－91・92号住居址の石器組成



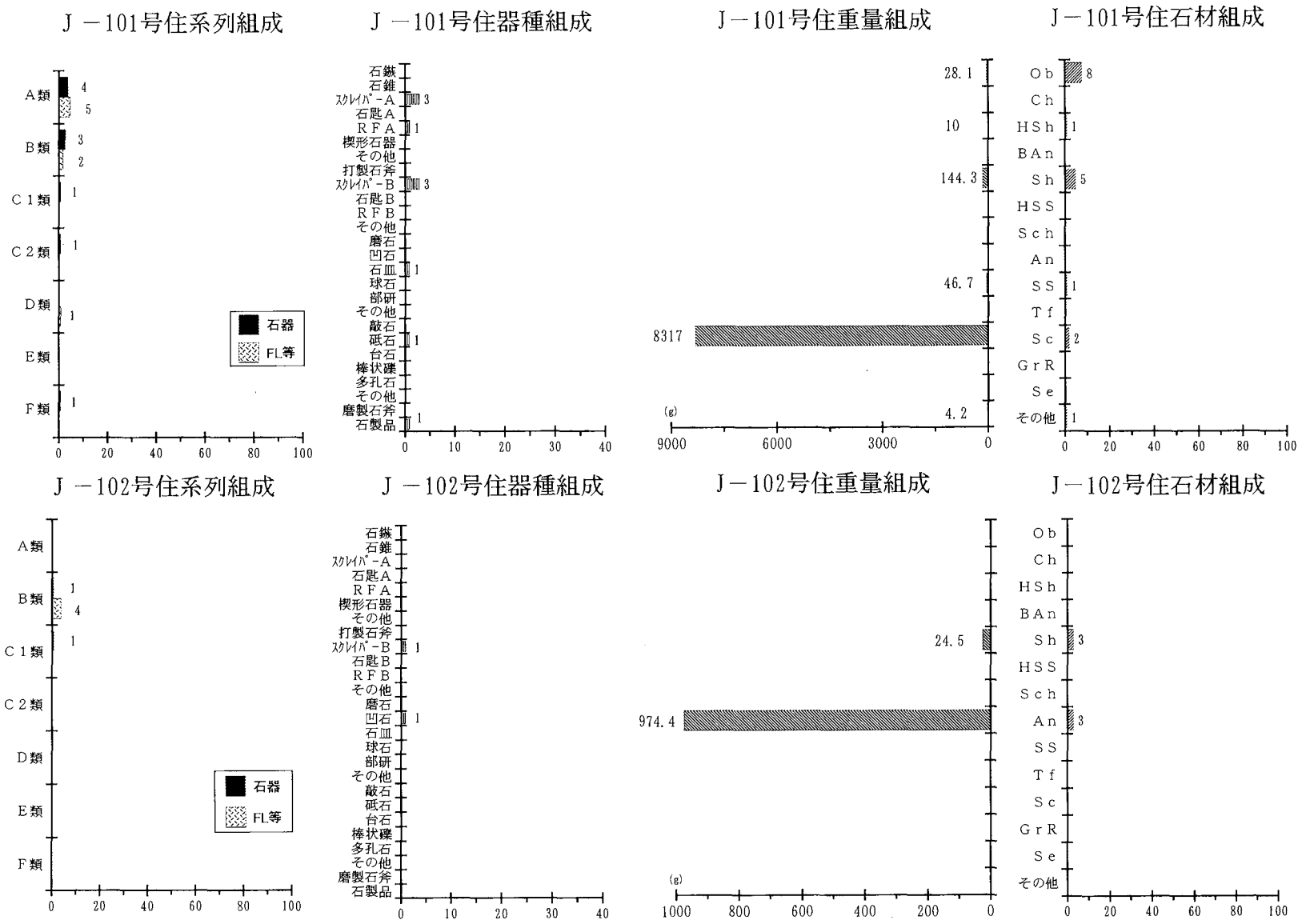
第90図　J—93・94号住居址の石器組成



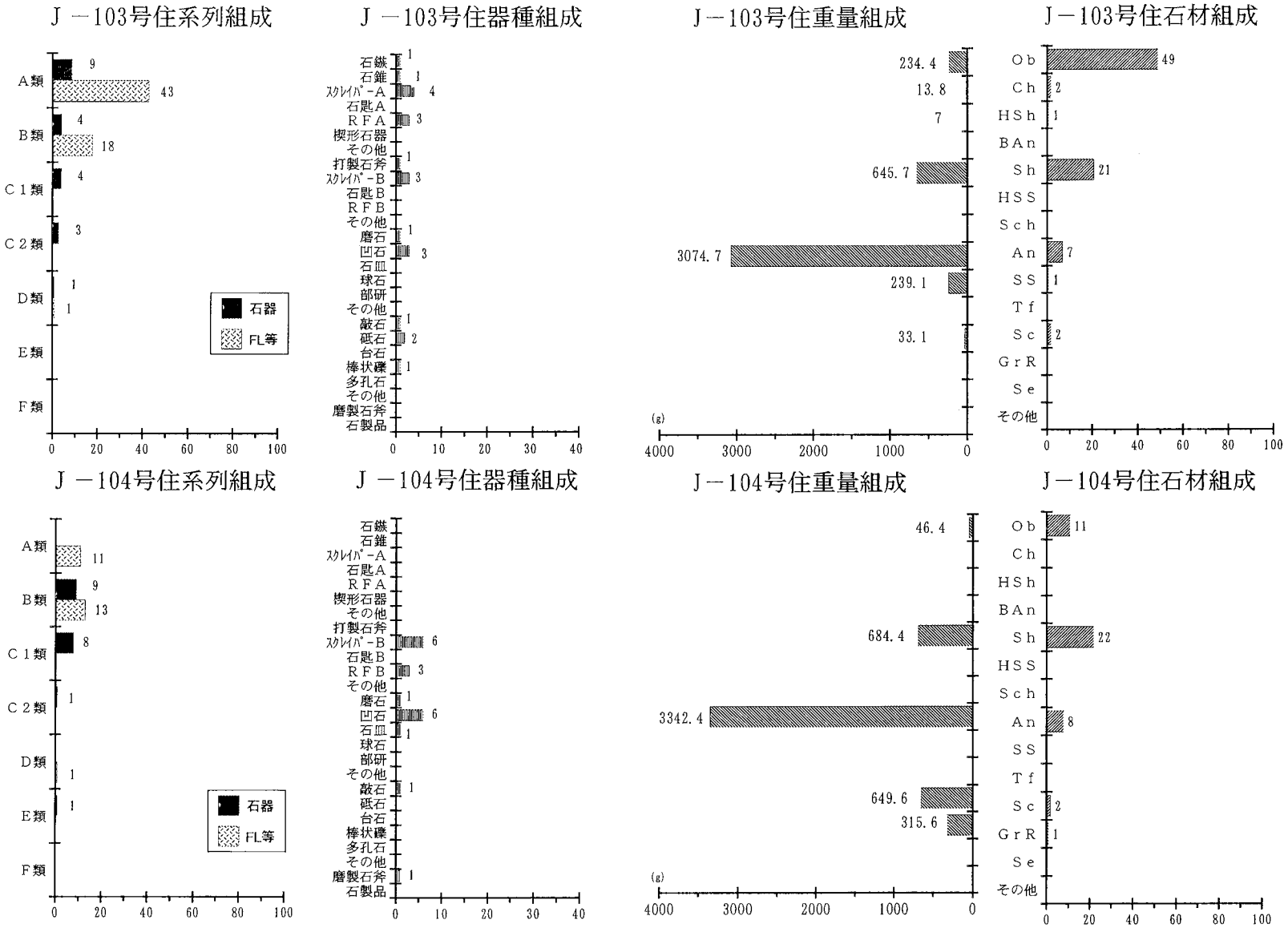
第91図　J－96・98号住居址の石器組成



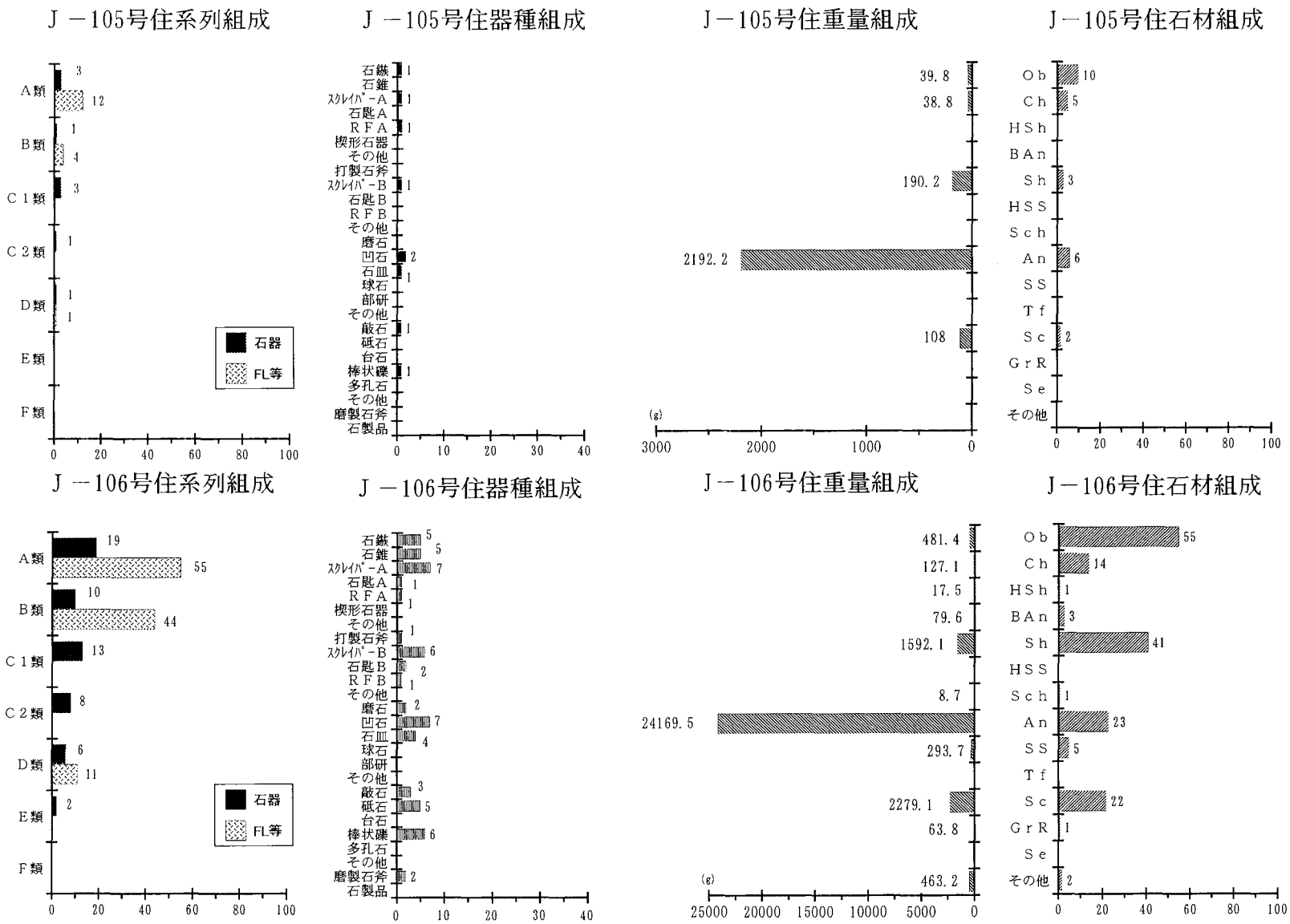
第92図　J—99・100号住居址の石器組成



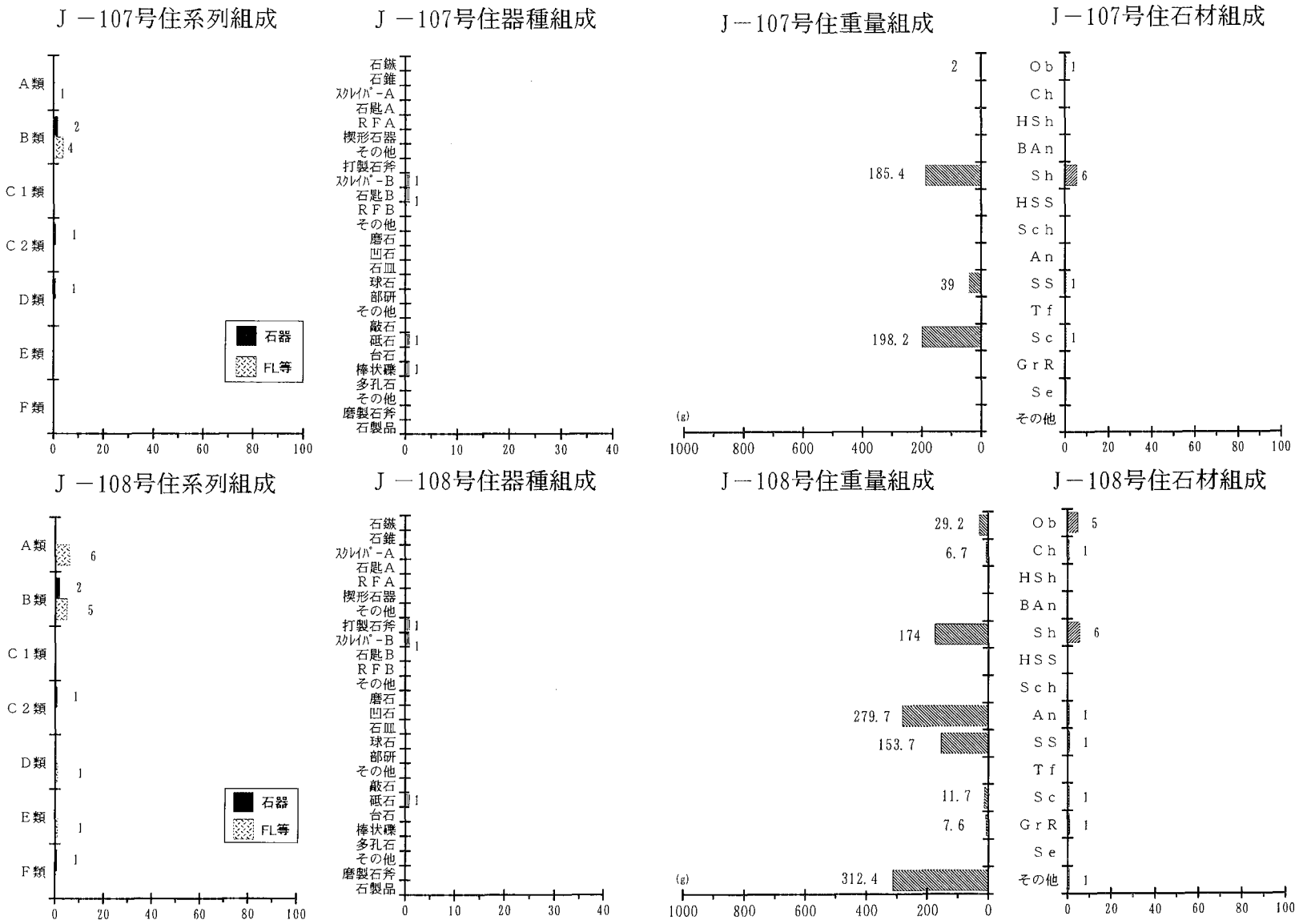
第93図　J－101・102号住居址の石器組成



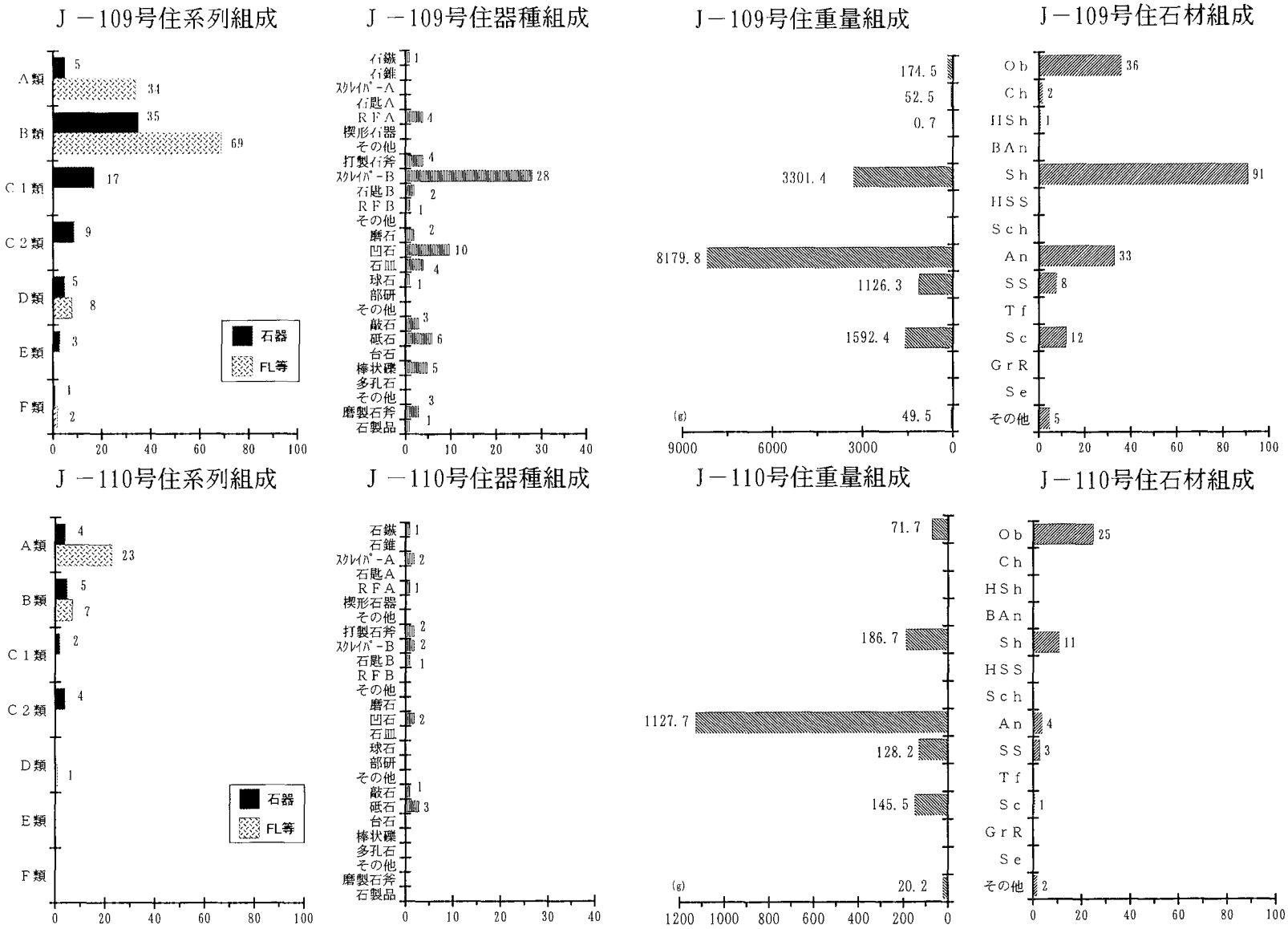
第94図　J－103・104号住居址の石器組成



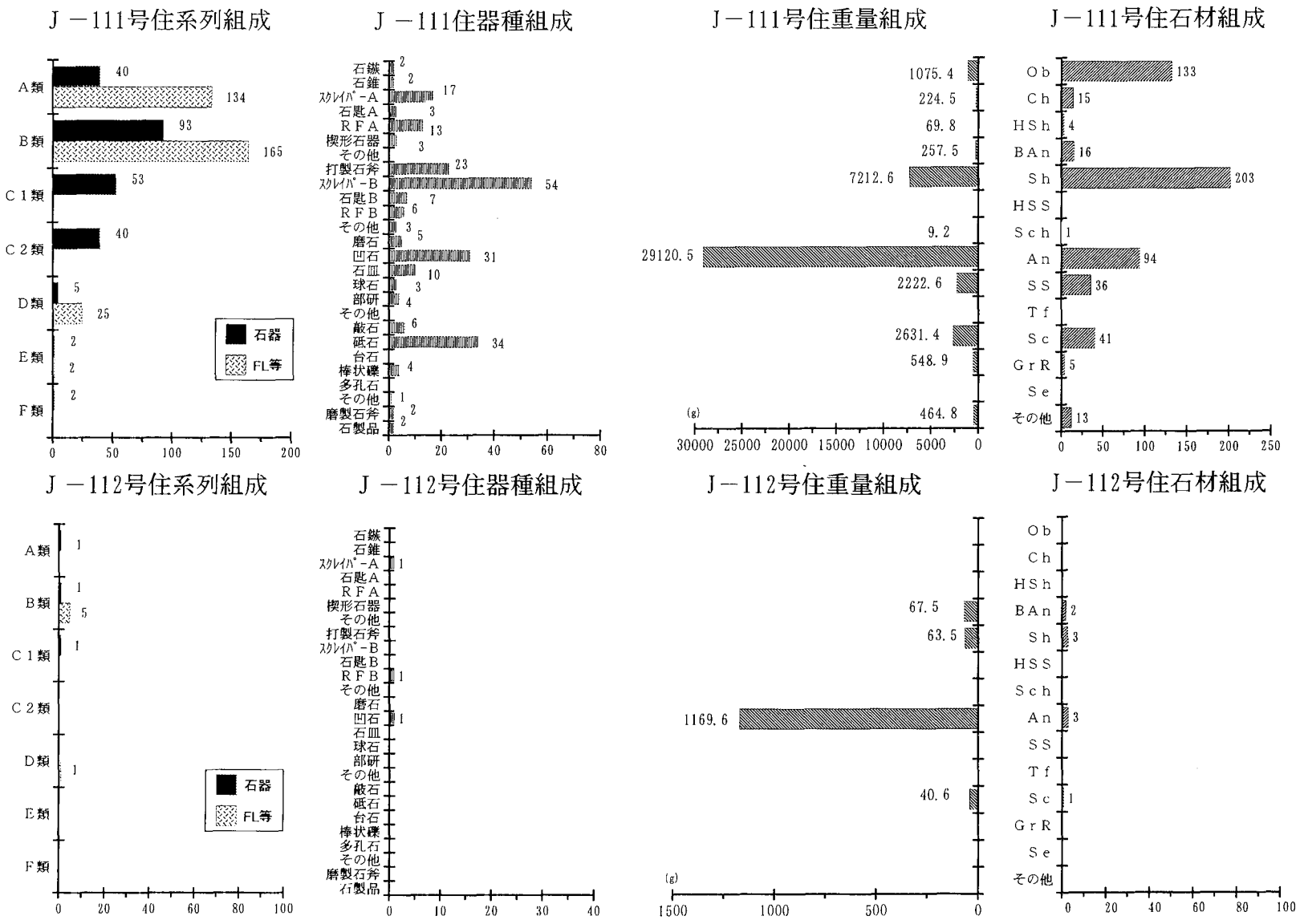
第95図　J－105・106号住居址の石器組成



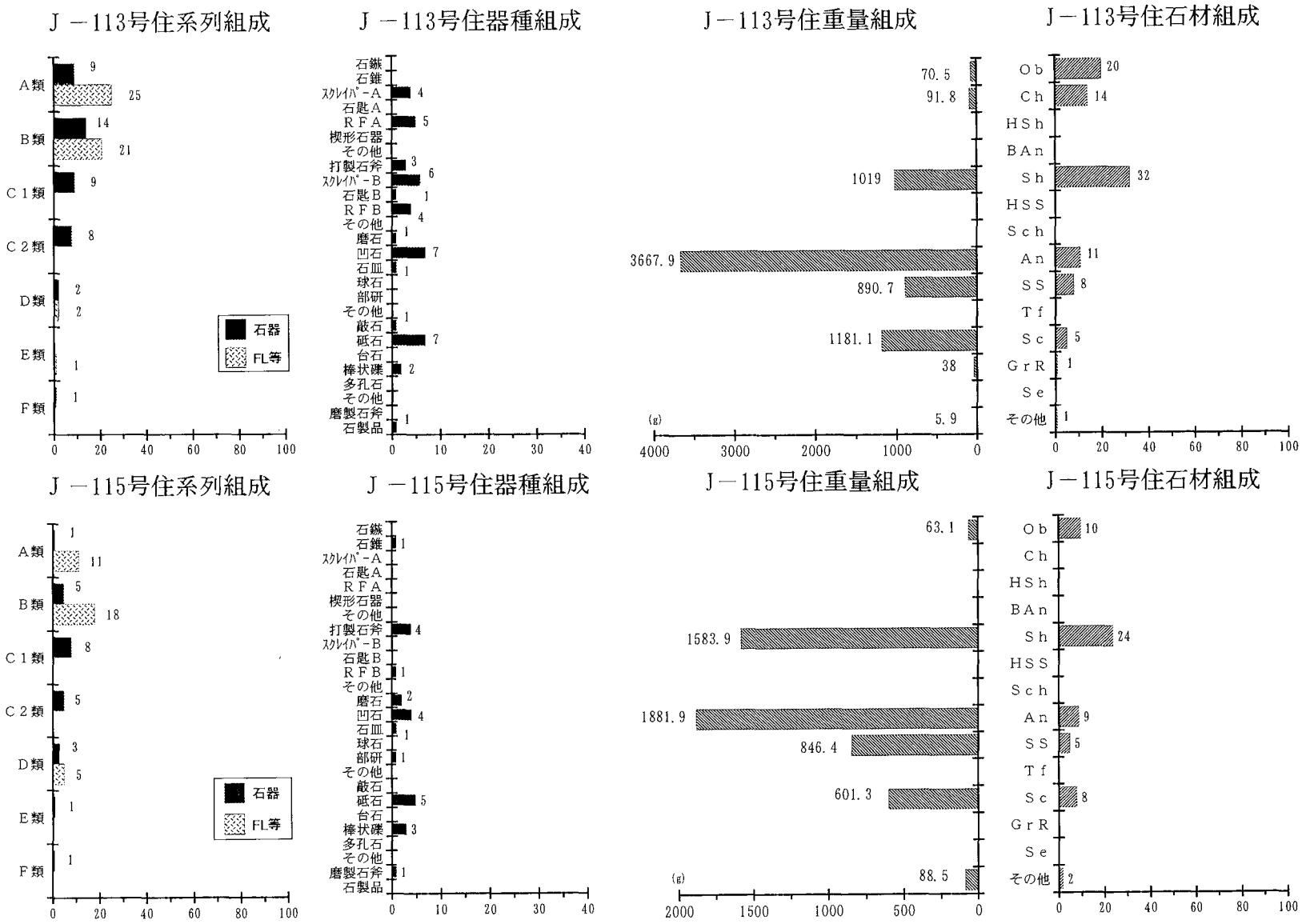
第96図　J－107・108号住居址の石器組成



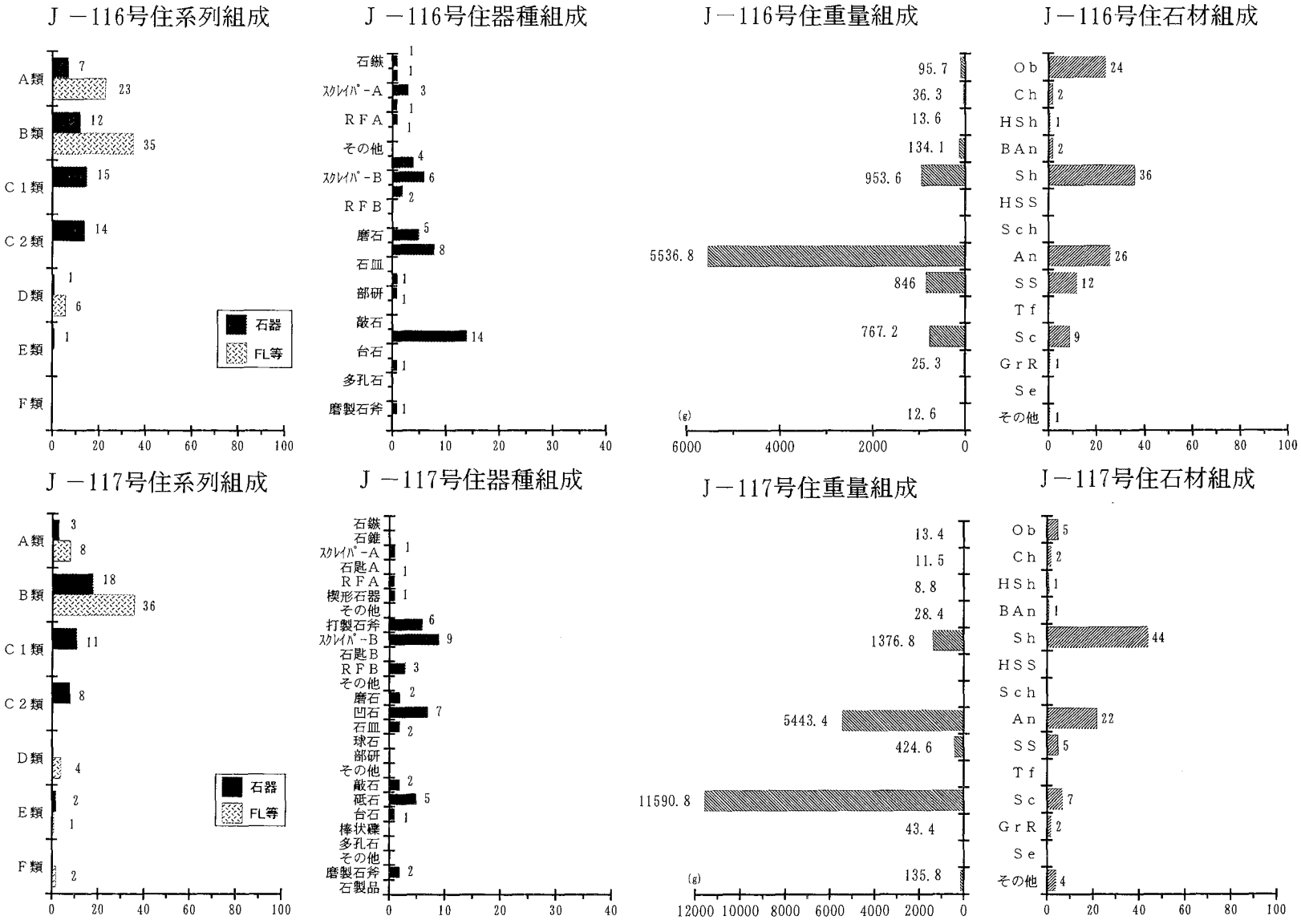
第97図　J—109・110号住居址の石器組成



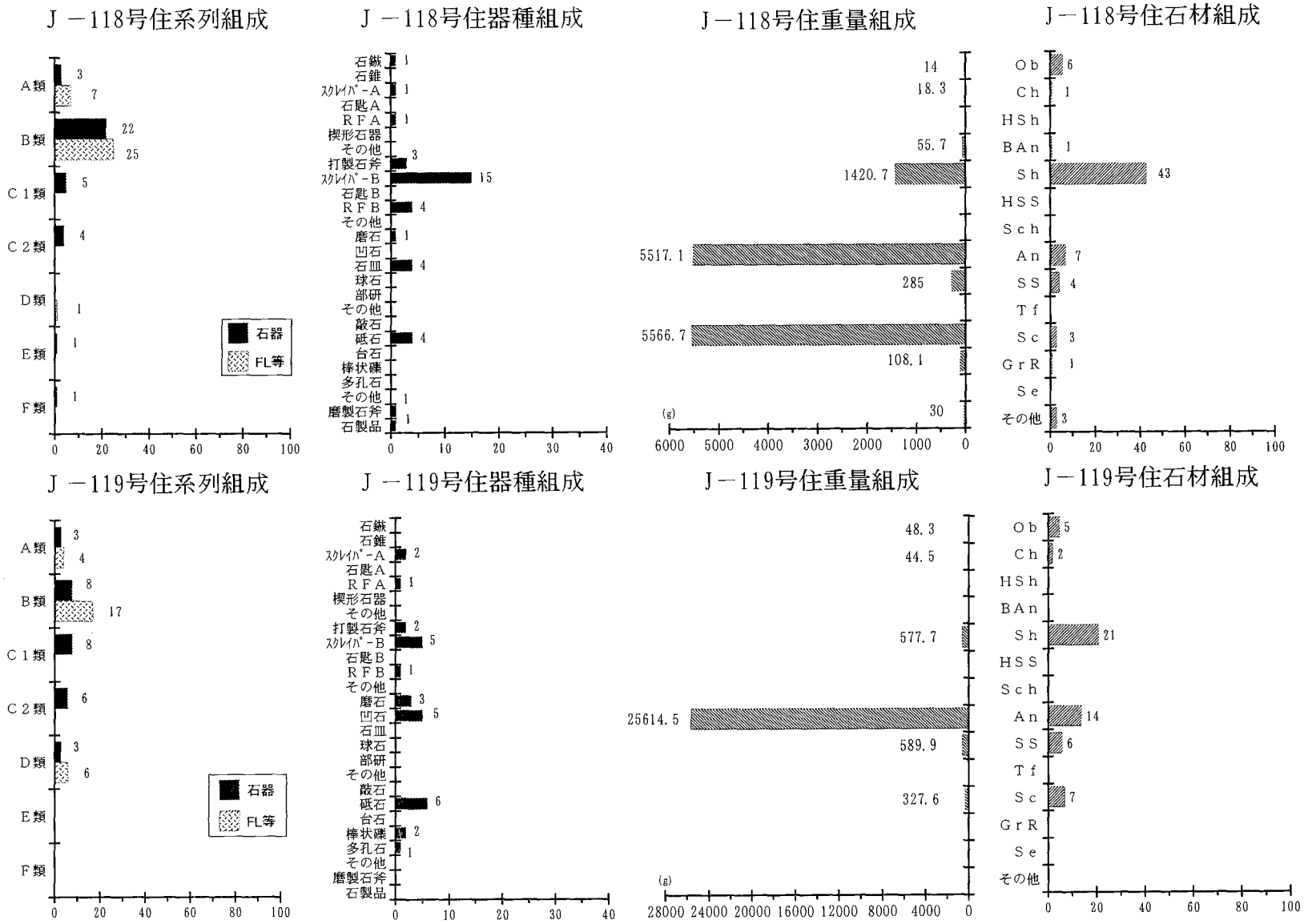
第98図　J－111・112号住居址の石器組成



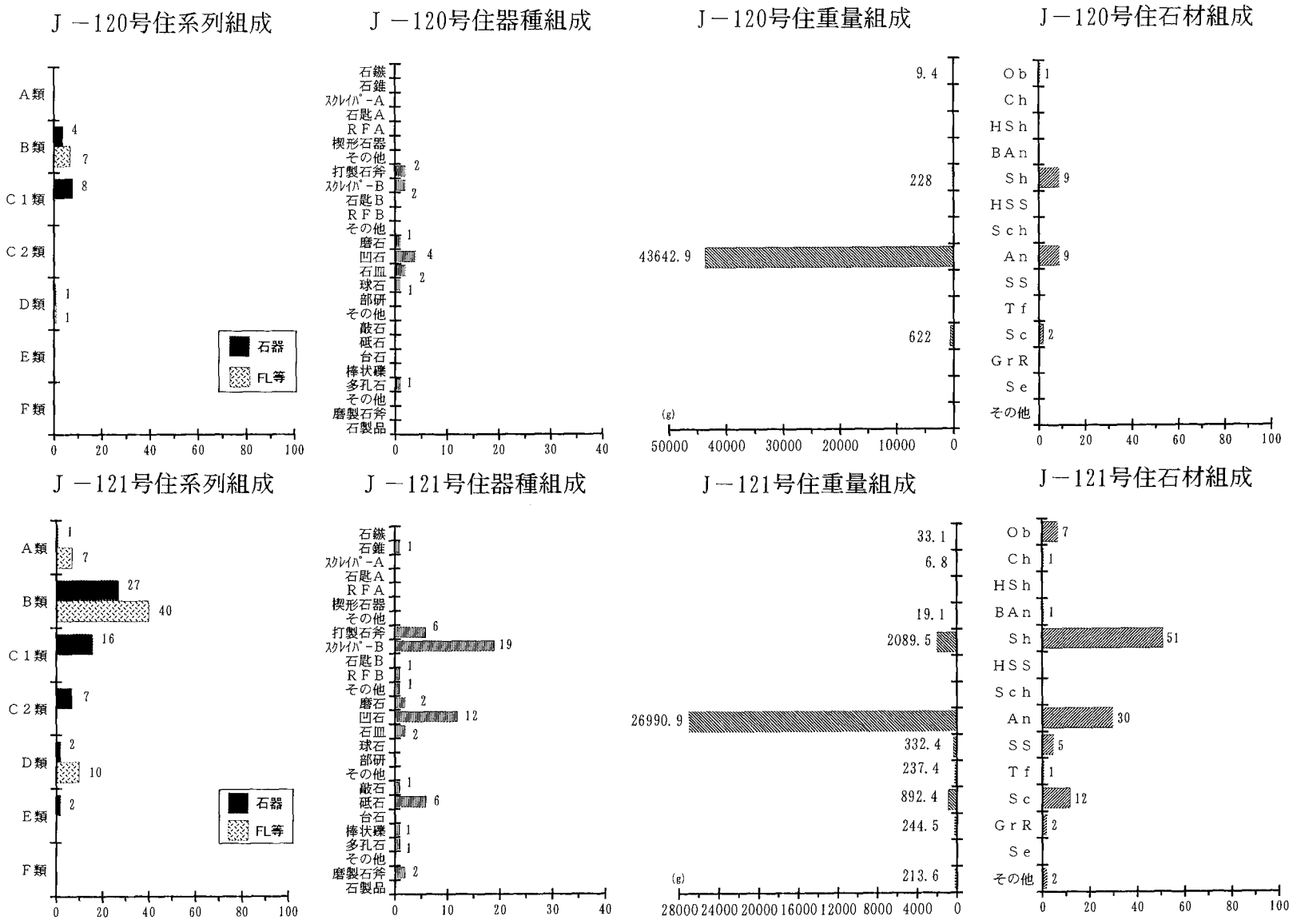
第99図　J－113・115号住居址の石器組成



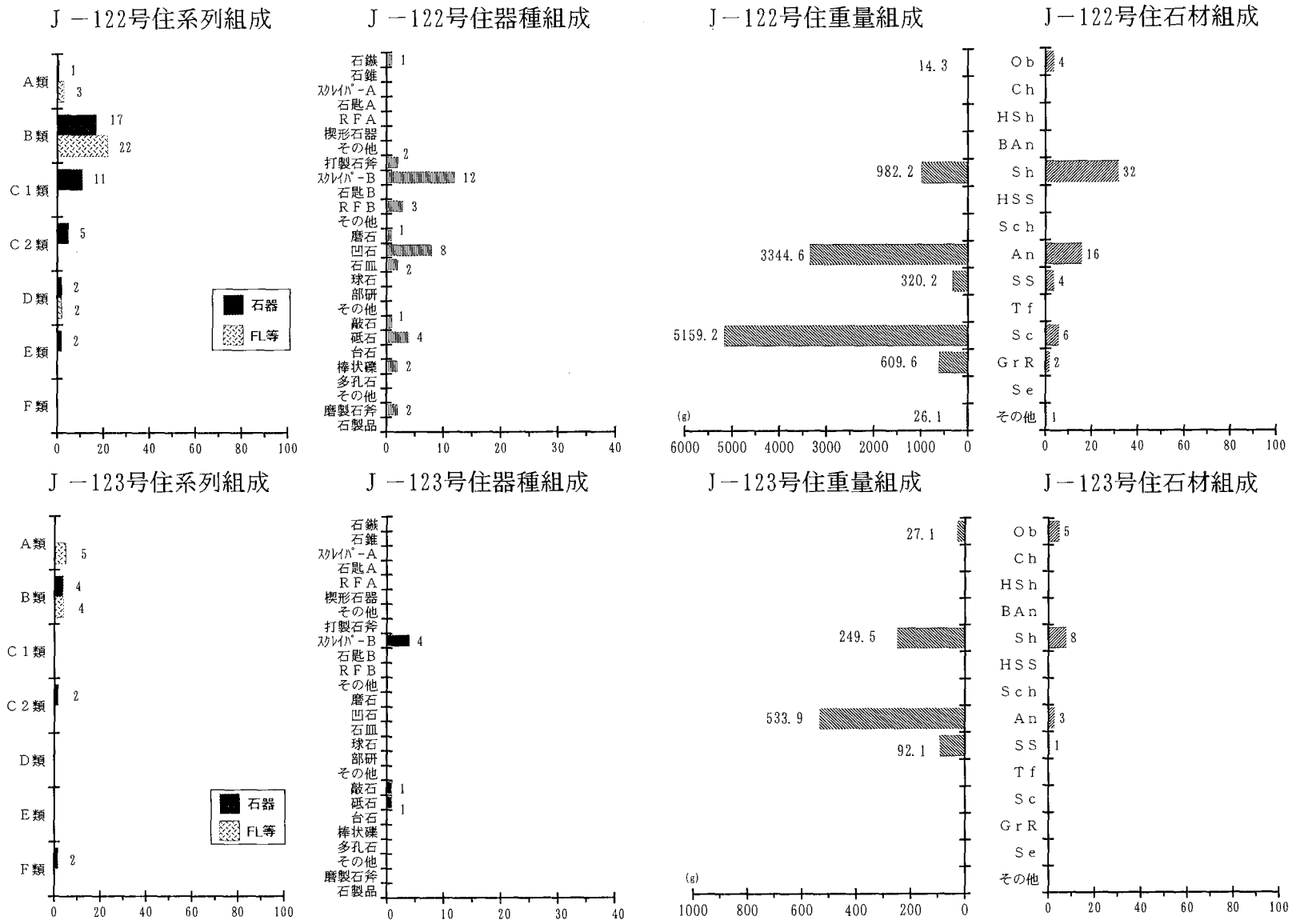
第100図　J－116・117号住居址の石器組成



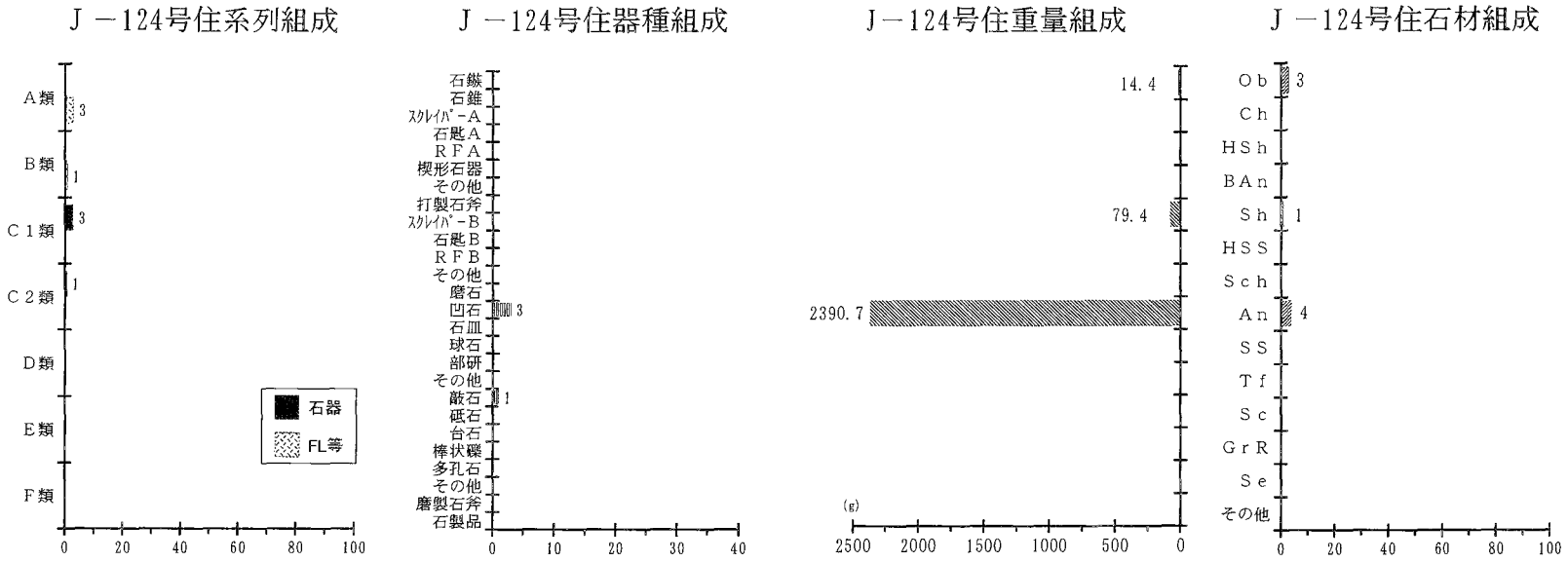
第101図　J－118・119号住居址の石器組成



第102図　J—120・121号住居址の石器組成



第103図　Ｊ―122・123号住居址の石器組成



第104図　J－124号住居址の石器組成

［各種遺構出土の石器組成について］

時期ごとの石器組成の様相についての分析は、住居址出土石器によりある程度明らかにすることができた。住居址以外の遺構から出土した石器組成の分析の目的は、単に時期的変化を明らかにすることではなく、集落内の「施設（遺構）」や「場」の使用方法を明らかにするためのデータの抽出である。住居址出土の石器組成と比較することにより、差異を明らかにすることを主眼としている。

しかし、こうした遺構では出土数量がそれほど多いものではなく、住居址のような統計的分析に耐えるような精度の高いデータは期待できない。したがって、同じ分析は行わず、遺構の種類ごとに簡単に所見を述べるにとどめる。

［掘立柱建物址出土の石器組成］（第105図・第90・92・94・95表）

掘立柱建物址は本遺跡における、比較的大規模な構築物であり、竪穴住居址とは異なる機能を有していたとみられる。その上部構造は、平地式もしくは高床式の構築物であり、この中に収納されていたものは、廃絶後地表に散乱し、調査時には包含層出土遺物として検出されているものとみられる。しかし、こうした包含層出土遺物は実際には少ない。

また、掘立柱建物は同じ場所に繰り返し建て替えられている場合が多く、ほとんどの場合、柱は抜き取られていることが確認されている（遺構編参照のこと）。したがって、ここで石器組成として集計したものは建て替え時に混入したものが大部分である。これらの石器は、建て替え以前にその場所に存在していたものであり、この建物内外で使用されていたものである可能性がある。

有尾式期は遺構数は少ないため、傾向は把握できない。全体の石器組成は、基本的に諸磯ｂ式期の組成とみて問題はない。各種石器組成とも、住居址出土の石器組成とほぼ同様な様相を示している。少なくとも石器組成から特別な場所であったことを、積極的に示すデータとは言えない。通常の廃棄行為に伴う石器の集合体と認識される。ただし、少数遺物を調べてみると、装身系列（Ｆ類）に属する蛇紋岩製の垂飾２点と管玉が含まれている。数量的には少ないが、遺跡全体でも蛇紋岩製垂飾３点、管玉５点であり、ここからの出土率は高い。消極的なデータであるが、唯一掘立柱建物址の機能や使用方法に関連する器種と推定される。

ＨＴ―10～24号大形掘立柱建物址群出土の石器組成　本遺跡の北中央に位置し、集落の中枢的機能を有していたと推定される大形掘立柱建物址群であるHT―10～24の石器組成を別に示した。しかし、石器組成で見る限りは、特に大きな違いは見い出せない。唯一の違いは、結晶片岩が多い点であるが、これは大形の石皿が存在しており、これが重いためである。なお、ここから検出された石製品１点は管玉（遺物図版編第269図８）である。

（大工原　豊）

石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	32	74	12	7	125
B　類	69	108	5	1	183
C 1　類	45				45
C 2　類	20				20
D　類	12	25		1	38
E　類	4	1			5
F　類	3				3
合　計	185	208	17	9	419

第90表　掘立柱建物址全体の石器系列組成

石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	10	25	4	6	45
B　類	37	54	1	1	93
C 1　類	18	13			31
C 2　類	12				12
D　類	5				5
E　類					
F　類	1				1
合　計	83	92	5	7	187

第91表　掘立柱建物址（HT-10～24）の石器系列組成

石器系列	器　種	掘　立	グリッド	合　計
A　類	石鏃	7		7
	石錐	2		2
	ScA	10		10
	石匙A	2		2
	RFA	10		10
	楔形石器			
	その他A類	1		1
B　類	打製石斧	19	2	21
	ScB	44	1	45
	石匙B	1		1
	RFB	2		2
	その他B類			
C 1　類	磨石	5		5
	凹石	25	2	27
	石皿	10	1	11
	球石	1		1
	部分研磨石器	1		1
	その他C1類			
C 2　類	敲石	5		5
	砥石	14	1	15
	台石			
	その他C2類			
D　類	棒状礫	7	1	8
	多孔石	1		1
	その他D類	3		3
E　類	磨製石斧	4		4
	その他E類			
F　類	石製品	1	2	3
	その他F類			
	合　計	175	10	185

第92表　掘立柱建物址全体の石器器種組成

石器系列	器　種	掘　立	グリッド	合　計
A　類	石鏃	3		3
	石錐			
	ScA	4		4
	石匙A			
	RFA	3		3
	楔形石器			
	その他A類			
B　類	打製石斧	7		7
	ScB	28	1	29
	石匙B			
	RFB	1		1
	その他B類			
C 1　類	磨石	2		2
	凹石	8		8
	石皿	6	1	7
	球石			
	部分研磨石器	1		1
	その他C1類			
C 2　類	敲石	2		2
	砥石	9	1	10
	台石			
	その他C2類			
D　類	棒状礫	4	1	5
	多孔石			
	その他D類			
E　類	磨製石斧			
	その他E類			
F　類	石製品	1		1
	その他F類			
	合　計	79	4	83

第93表　掘立柱建物址（HT-10～24）の石器器種組成
※砥石は砂岩礫を含む

石器系列	器　種	掘　立	グリッド	合　計
I　類	Ob	104	4	108
	Ch	11		11
	HSh	2		2
	BAn	11		11
	Ja	2		1
II　類	Sh	143	8	151
	HSS	1		1
	Sch	1		1
	Ho	1		2
IIIa　類	An	63	3	66
IIIb　類	SS	13	1	14
	Tf			0
IV　類	Sc	35	5	40
V　類	GrR	5		5
	Se	3	2	5
	蛇灰岩	1		1
合　計		396	23	419

第94表　掘立柱建物址全体の石材個数組成

石器系列	器　種	掘　立	グリッド	合計(g)
I　類	Ob	527.5	15.9	543.4
	Ch	81.2		81.2
	HSh	143.5		143.5
	BAn	467.9		467.9
	Ja	43.4		43.4
II　類	Sh	6708.3	417.8	7126.1
	HSS	26.9		26.9
	Sch	3.1		3.1
	Ho	99.3		99.3
IIIa　類	An	91633.8	1075.4	92709.2
IIIb　類	SS	5430.3	91.5	5521.8
	Tf			0
IV　類	Sc	7099.8	5640.9	12740.7
V　類	GrR	334.6		334.6
	Se	198.7	119.1	317.8
	蛇灰岩	3.4		3.4
合　計		112801.7	7360.6	120162.3

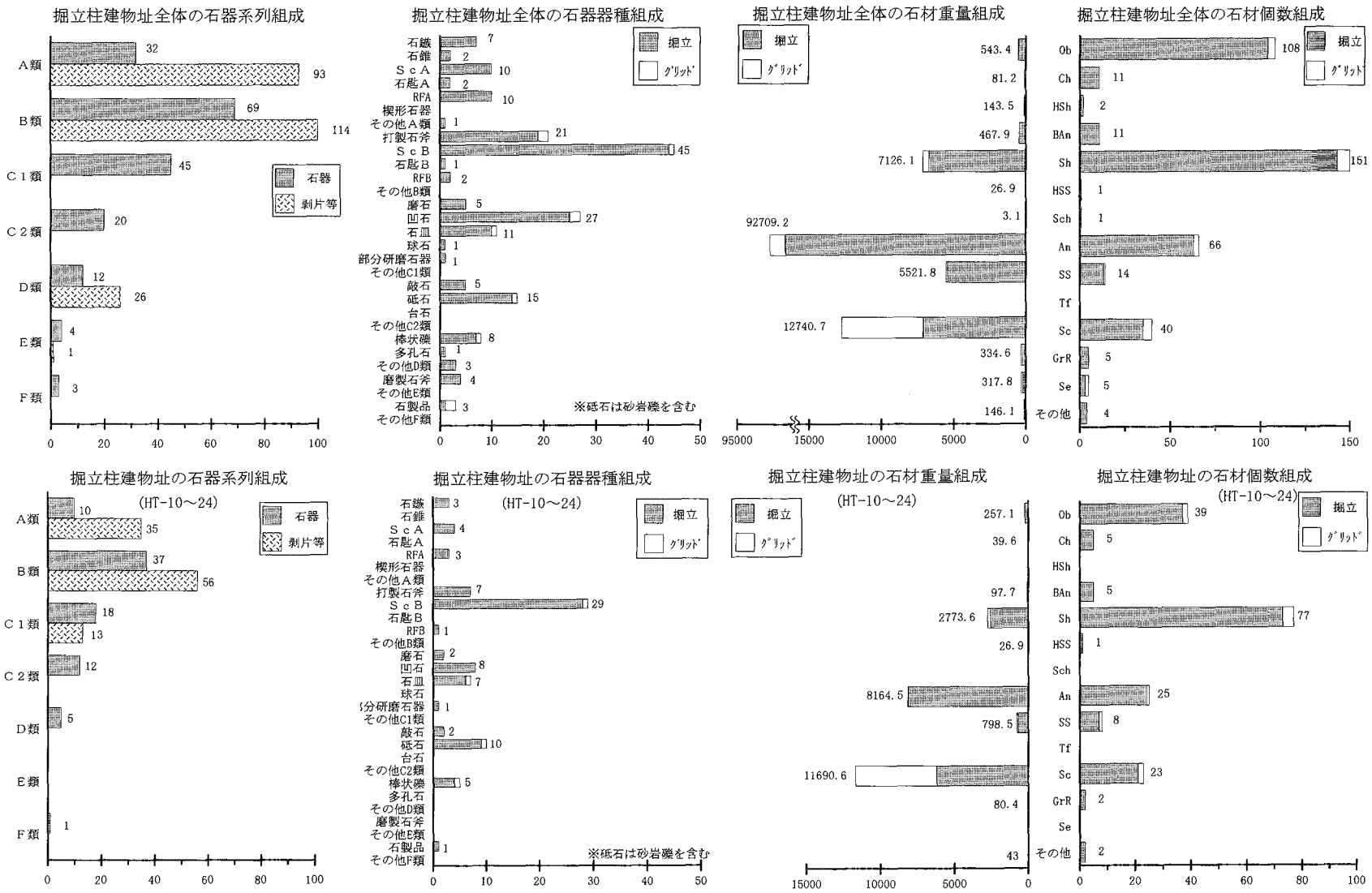
第95表　掘立柱建物址全体の石材重量組成

石器系列	器　種	掘　立	グリッド	合　計
I　類	Ob	37	2	39
	Ch	5		5
	HSh			
	BAn	5		5
	Ja	1		1
II　類	Sh	73	4	77
	HSS	1		1
	Sch			
IIIa　類	An	24	1	25
IIIb　類	SS	7	1	8
	Tf			
IV　類	Sc	21	2	23
V　類	GrR	2		2
	Se			
	蛇灰岩	1		1
合　計		177	10	187

第96表　掘立柱建物址の石材個数組成
(HT-10～24)

石器系列	器　種	掘　立	グリッド	合計(g)
I　類	Ob	250.2	6.9	257.1
	Ch	39.6		39.6
	HSh			
	BAn	97.7		97.7
	Ja	39.6		39.6
II　類	Sh	2539.9	233.7	2773.6
	HSS	26.9		26.9
	Sch			
IIIa　類	An	8104.1	60.4	8164.5
IIIb　類	SS	707	91.5	798.5
	Tf			
IV　類	Sc	6197.2	5493.4	11690.6
V　類	GrR	80.4		80.4
	Se			
	蛇灰岩	3.4		3.4
合　計		18086	5885.9	23971.9

第97表　掘立柱建物址の石材重量組成
(HT-10～24)



第105図　堀立柱建物址全体・ＨＴ－10～24号建物址群の石器組成

［土壙墓群出土の石器組成］（第106図・第98表～第108表）

土壙墓内から出土した石器は全部で483点である。土壙墓群は有尾式期～諸磯ｂ式期の石器を含んでいる。最初に土壙墓群全体の石器組成について検討し、住居址との機能的差異を調べてみたい。系列組成をみると、剥片類ではＡ類の製作指数2.12と、石器の比率が標準値より高い。しかし、Ｂ類では石器製作指数1.68であり、住居址の組成と同じ傾向を示している。したがって、副葬品以外にＡ類器種が墓域に多く存在していたことになる。そこで器種組成をみると、Ａ類で多い器種は、ScA20点・RFA13点・石鏃８点の順であり、住居址でも出土数が一般的に多い器種である。積極的根拠は見い出せないものの、一部のものは単なる廃棄遺物ではなく、この場所で行われた埋葬儀礼に用いられた可能性を秘めている。

ところで、土壙墓群出土の石器には、パターン①：副葬品あるいは抱石・立石などの施設として使用されたもの（埋葬時期の石器、それ以前の時期の転用石器）、パターン②：埋葬時に混入したもの（埋葬時期の石器）、パターン③：それ以前に存在していた遺構のものや、後世のものが二次的に混入したもの（埋葬時と異なる時期の石器）、が存在している。これらのパターンは土器の場合（79ページ参照）と同じであるが、石器の場合は、石器自体が時期決定できないものも多い。しかし、出土位置・欠損の有無・石器（狭義）か剥片類かといった基準により、どのパターンに伴うものかある程度区別することができる。

土壙墓群から出土した石器は、副葬品（着装品）や下部施設として埋納されたもの（パターン①）と、混入したもの（パターン②・③）に分かれる。石匙Ａ・石匙Ｂ・玦状耳飾などは副葬品（着装品）であるが、一部の土壙墓のみに限定されて埋納されている。また、凹石・磨石・球石・石皿といったＣ１類石器は「抱石」として遺体の上部に置かれたもので数量的にも多い。石材組成をみると、個数・重量ともに頁岩の割合が低い傾向が認められる。

以上のように、時期に関係なく、土壙墓群の石器組成では多少差異が存在することが判明した。そこで、次に、各土壙墓群別（時期別）に石器組成を検討してみたい。

Ｄ区南東群の石器組成（第98表・第106表～第108表）全部で58点出土している。系列別にみるとＢ類がやや多い。また、石器は33点である。パターン①の埋納された石器としては、石匙Ａ１点・玦状耳飾２点・垂飾１点が副葬品であり、凹石６点・磨石２点・球石１点・ScB １点は「抱石」として用いられたものである。また、石皿２点は「立石」として用いられ、凹石１点は立石の脇に置かれている。ここの土器型式帰属率は第27表のとおりであり、有尾式42.8％・諸磯ａ式15.3％・諸磯ｂ式33.1％である。ただし、副葬品のみでは有尾式100％である（第29表）。そして、この場所はその後「廃棄帯」として長期間利用されている。したがって、埋納された石器は有尾式期のものと考えて間違いないが、それ以外のものの中には二次的に混入したものが多く含まれていて、パターン③の様相を示しているので、純粋な土壙墓群の石器組成とは言えない状態である。

Ｄ区中央群の石器組成（第99表・第106表～第108表）　全部で34点出土している。石器は20点である。このうち、パターン①に相当する埋納されたものでは、玦状耳飾１点・石匙Ａ１点が副葬品であり、凹石６点・磨石３点・球石１点・石皿２点・棒状礫１点は「抱石」、石皿１点は「立石」として用いられている。なお、調査時には確認できていないが、これ以外にも「抱石」として用いられた可能性のある磨石・球石などが存在している。

この土壙墓群の帰属率をみると諸磯ｂ式64.8％である（第27表）。しかし、副葬品のみの帰属率をみる

	D区南東				
石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	5	3	1	1	10
B　類	10	10		1	21
C 1　類	13				13
C 2　類					0
D　類	2	9			11
E　類					0
F　類	3				3
合　計	33	22	1	2	58

第98表　D区南東土壙墓群の石器系列組成

	D区中央				
石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	4	6	3		13
B　類	2	4			6
C 1　類	11				11
C 2　類	1				1
D　類	1	1			2
E　類					0
F　類	1				1
合　計	20	11	3	0	34

第99表　D区中央土壙墓群の石器系列組成

	D区南				
石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	1	5			6
B　類	2	4			6
C 1　類	8				8
C 2　類	2				2
D　類					0
E　類	1				1
F　類					0
合　計	14	9	0	0	23

第100表　D区南土壙墓群の石器系列組成

	単　独				
石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	21	44	6	1	72
B　類	11	35	2	1	49
C 1　類	16				16
C 2　類	4				4
D　類	2	5			7
E　類	1	1		1	3
F　類		1			1
合　計	55	86	8	3	152

第101表　単独土壙墓の石器系列組成

	B区南				
石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	3	2	1	4	10
B　類	10	10	1		21
C 1　類	30				30
C 2　類	7				7
D　類	6				6
E　類		1			1
F　類	2			1	3
合　計	58	13	2	5	78

第102表　B区南土壙墓群の石器系列組成

	B区北				
石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	11	14	1		26
B　類	19	18			37
C 1　類	11				11
C 2　類	9				9
D　類	5				5
E　類	1				1
F　類					0
合　計	56	32	1	0	89

第103表　B区北土壙墓群の石器系列組成

	B区南西				
石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	5	11	3		19
B　類	3	7	3		13
C 1　類	14				14
C 2　類	1				1
D　類		2			2
E　類					0
F　類					0
合　計	23	20	6	0	49

第104表　B区南西土壙墓群の石器系列組成

	土壙墓群全体				
石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	50	85	15	6	156
B　類	57	88	6	2	153
C 1　類	103				103
C 2　類	24				24
D　類	16	17			33
E　類	3	2		1	6
F　類	6	1		1	8
合　計	259	193	21	10	483

第105表　土壙墓群全体の石器系列組成

と、有尾式33.3%・諸磯ａ式15.9%・諸磯ｂ式50.8%である（第29表）。したがって、ここでは埋葬が継続的に行われていたことを示している。この土壙墓群は時期を限定できないものの、混入した石器は少ないので、パターン①の様相が強く、墓域の石器組成を正しく示していると判断される。

Ｄ区南群の石器組成（第100表・第106表～第108表）　全部で23点出土している。石器は14点である。石匙Ｂ１点は副葬品、磨石２点・凹石５点・台石１点は「抱石」である。パターン②・③に相当する埋葬時やその後に混入した石器は少なく、パターン①の様相が強い。帰属率は有尾式26.8%・諸磯ａ式17.1%・諸磯ｂ式37.4%であり（第27表）、副葬品のみでは有尾式100%である。したがって、埋納された石器は、有尾式期の土壙墓群の組成をほぼ忠実に示していると判断される。

Ｂ区南群の石器組成（第102表・第106表～第108表）　全部で78点出土している。このうち石器は58点を数えるが、Ｊ―49住（有尾式期）の上部に存在しており、この住居址に伴う遺物が多数混入している（パターン③）。パターン①に相当する埋納されたものでは、玦状耳飾２点・石匙Ａ２点・原石Ａ（黒曜石）４点・砥石１点が副葬品、凹石６点・磨石２点・石皿６点は「抱石」、多孔石１点・丸石２点・磨石１点・打製石斧１点は中央配石からの出土である。ここでの帰属率は第27表のように諸磯ｂ式80.4%と高い。また副葬品のみでは諸磯ｂ式100%（第29表）。したがって、パターン①に相当する埋納された石器に限れば、この時期の土壙墓群の組成をほぼ正確に示していると判断される。

Ｂ区北群の石器組成（第103表・第106表～第108表）　全部で89点出土している。石器は56点を数えるが、この土壙墓群はＪ―51住（有尾式期）の上部に存在しており、パターン③に相当する多くの石器が混入していると判断される。パターン①に相当する埋納されたとみられるものとしては、副葬品として石匙Ａ１点、「抱石」として石皿２点・敲石１点、立石として石皿２点が存在する。帰属率は有尾式27.6%・黒浜式15.7%・諸磯ａ式14.2%・諸磯ｂ式27.5%である（第27表）。また、副葬品のみでは諸磯ａ式42.2%・諸磯ｂ式57.8%であり（第29表）、パターン①に相当する埋納されたものに限れば、諸磯ａ～ｂの時期の組成を示していると推定される。

Ｂ区南西群の石器組成（第104表・第106表～第108表）　全部で49点出土している。このうち石器は23点である。パターン①に相当する副葬品として石匙Ａ１点、「抱石」として凹石２点・石皿３点が存在している。ここではこれ以外にも「抱石」として用いられた可能性のある磨石・凹石などが認められる。帰属率は有尾式36.3%・諸磯ｂ式50.4%である（第27表）。また、副葬品では諸磯ｂ式100%である（第29表）。したがって、埋納された石器は諸磯ｂ式期の組成をほぼ示していると言える。

単独土壙墓の石器組成（第101表・第106表～第108表）　単独土壙墓は28基存在している。これらの土壙墓は有尾式～諸磯ｃ式までの時期のものが含まれているが、有尾式と諸磯ｂ式にほぼ二分される。石器類は全部で152点出土している。石器は55点である。凹石10点・磨石４点などＣ１類石器が多い。これは土壙墓群と共通しており、これらの中にはパターン①に相当する「抱石」として埋納されたものが多く含まれていると推定される。また、住居址や廃棄帯などが存在する場合、多くの遺物が存在しているが、本来「墓域」では埋納されたもの以外の石器が使用される機会が少なかったと判断される。

以上のように、各土壙墓群ともパターン①に相当する副葬品や「抱石」として埋納された石器には、一定の傾向が認められる。これはすでに述べたとおりである。また、土壙墓群の時期が新しくなるにつれて、石皿が「抱石」として用いられる頻度が高くなる。つまり、有尾式期から諸磯ｂ式期にかけて軽いものからより重いものへと変化している傾向が認められる。なお、「抱石」としては、石器以外に単な

る礫も使用されており、D区南群に多い傾向がある。このように、石器組成からも墓制の変化の一端をここに垣間見ることができる。

また、土壙墓群では、石器を用いた墓前祭祀的な行為は基本的に行われていなかったようであり、住居址などの重複のない場所に形成されたD区中央群・同南群などでは、埋納されたもの以外の石器は非常に少ないことが確認された。

（大工原　豊）

石器系列	器　種	D区 南東群	D区 中央群	D区 南　群	B区 南　群	B区 北　群	B区 南西群	単独 土壙墓	合　計
A　類	石鏃	2				4		2	8
	石錐					1			1
	SCA	1	1	1	1	3	3	10	20
	石匙A	1	1		2		1		5
	RFA	1	2			2		8	13
	楔形石器							1	1
	石槍(未成品)						1		1
	異形石器					1			1
	その他A類								0
B　類	打製石斧	2	1		3	5	1	3	15
	SCB	8	1		5	9	1	7	31
	石匙B			2		3			5
	RFB				2	2	1	1	6
	その他B類								0
C1　類	磨石	2	2	3	6	1	2	4	20
	凹石	6	4	5	17	6	7	10	55
	石皿	2	3		6	3	4	2	20
	球石	3	2		1				6
	部分研磨石器					1	1		2
	その他C1類								0
C2　類	敲石			1	1	3			5
	砥石		1		5	6	1	4	17
	台石			1	1				2
	その他C2類								0
D　類	棒状礫	2	1		2	5			10
	多孔石				2			1	3
	丸石				2			1	3
	石棒								0
	その他D類								0
E　類	磨製石斧			1		1		1	3
	その他E類								0
F　類	ケツ状耳飾	2	1		2				5
	垂飾	1							1
	その他F類								0
	合　計	33	20	14	58	56	23	55	259

第106表　土壙墓群全体の石器器種組成
※砥石は砂岩礫を含む

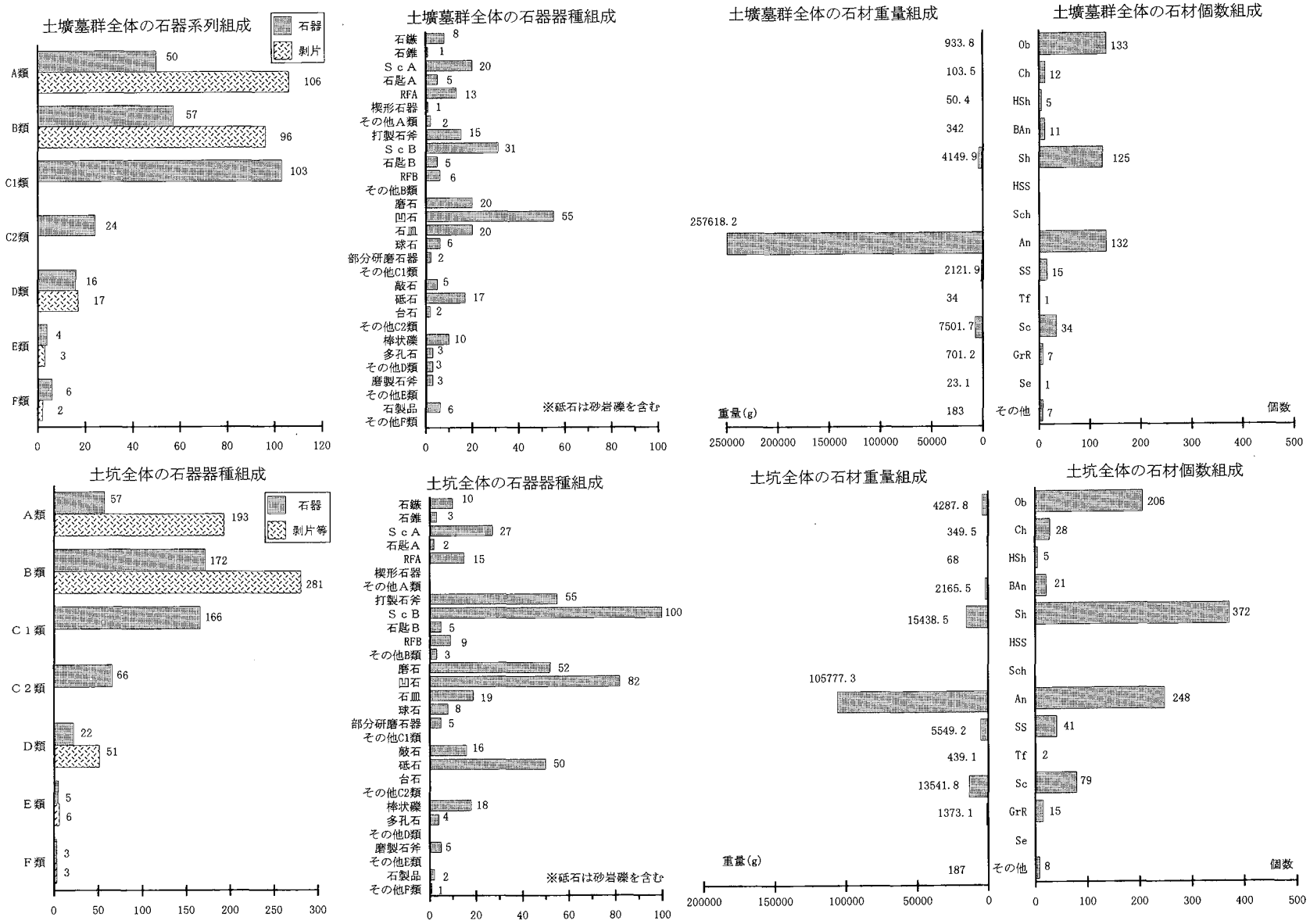
石器系列	石　材	D区 南東群	D区 中央群	D区 南　群	B区 南　群	B区 北　群	B区 南西群	単独 土壙墓	合　計
I　類	Ob	9	9	5	8	17	22	63	133
	Ch		2	1	2		2	5	12
	HSh		2			1	1	1	5
	BAn	1		1		2	3	4	11
	Ja	1							1
II　類	Sh	18	6	6	16	11	27	41	125
	HSS								
	Sch								
IIIa　類	An	15	11	9	38	14	20	25	132
IIIb　類	SS		1		5	1	4	4	15
	Tf							1	1
IV　類	Sc	11	2		4	3	9	5	34
V　類	GrR			1	2		1	3	7
	Se				1				1
	蛇灰岩	2	1		1				4
VI　類	滑石	1							1
	石英				1				1
合　計		58	34	23	78	49	89	152	483

第107表　土壙墓全体の石材個数組成

石器系列	石　材	D区 南東群	D区 中央群	D区 南　群	B区 南　群	B区 北　群	B区 南西群	単独 土壙墓	合計（g）
I　類	Ob	30	67.2	8	519	48.9	44.5	216.2	933.8
	Ch		42.6	12.3	12.7		6.1	29.8	103.5
	HSh		7.4			13.8	6	23.2	50.4
	BAn	13.8		107.3		90.7	73.6	56.6	342
	Ja	4.6							4.6
II　類	Sh	674.9	124.4	161.1	509	566.3	1036.1	1078.1	4149.9
	HSS								
	Sch								
IIIa　類	An	32698	42274.2	6237.5	113205	23344.7	11113.2	28745.6	257618.2
IIIb　類	SS		39.9		1273.7	72.5	327.3	408.5	2121.9
	Tf							34	34
IV　類	Sc	324.1	1.8		4877.1	255.6	1916.5	126.6	7501.7
V　類	GrR			97.7	65.6		17.5	520.4	701.2
	Se				23.1				23.1
	蛇灰岩	27.3	21.6		19.2				68.1
VI　類	滑石	2.4							2.4
	石英				107.9				107.9
合　計		33775.1	42579.1	6623.9	120612.3	24392.5	14540.8	31239	273762.7

第108表　土壙墓群全体の石材重量組成

※砥石は砂岩礫を含む



第106図　土壙墓群全体・土坑全体の石器組成

［土坑出土の石器組成］（第106図・第109表・第112表・第115表）

本遺跡の土坑全体から検出された石器類は全部で1,025点である。内訳はグラフと表のとおりである。ここでは個々の土坑出土の石器組成についてではなく、全体を一つの単位として扱い、その石器組成の傾向について述べる。本来であれば、時期別・空間別に土坑群を峻別し、その土坑群ごとに石器組成について検討すべきであるが、今回はさまざまな制約のため、実施できなかった。

まず、全体の石器組成を住居址のものと比較すると、基本的には大きな違いは認められない。唯一大きな違いが認められるのは、器種組成の中で、磨石が多い点である。土坑では凹石：磨石＝1.5：１であるが、時期に関係なく住居址では凹石：磨石＝3.7：１である。これは土坑と磨石との間に有意な関係が存在していたことを意味している。実は磨石が多い原因は諸磯ｂ式期にあり、それについては後述する。ちなみに、土壙墓では凹石：磨石＝2.9：１であり、この中間的値を示す。

以下、各時期の帰属率60％以上の土坑から検出された石器の組成について述べる。

有尾式期の土坑出土の石器組成（第107図・第110表・第113表・第116表）　この時期のものは266点を数える。このうち石器は136点である。石器系列組成では、製作指数はＡ類2.50で石器製作的パターンを示し、Ｂ類1.47で石器製作･消費的パターンを示している。この数値は住居址の指数（Ａ類：3.48、Ｂ類：1.49）であり、Ｂ類はほぼ同じであるが、Ａ類では大きく異なっている。ここでは石器が多いのではなく、逆に剝片類が少なかったことを示している。この理由は単にデータ数が少ないことによる偏差とみられる。

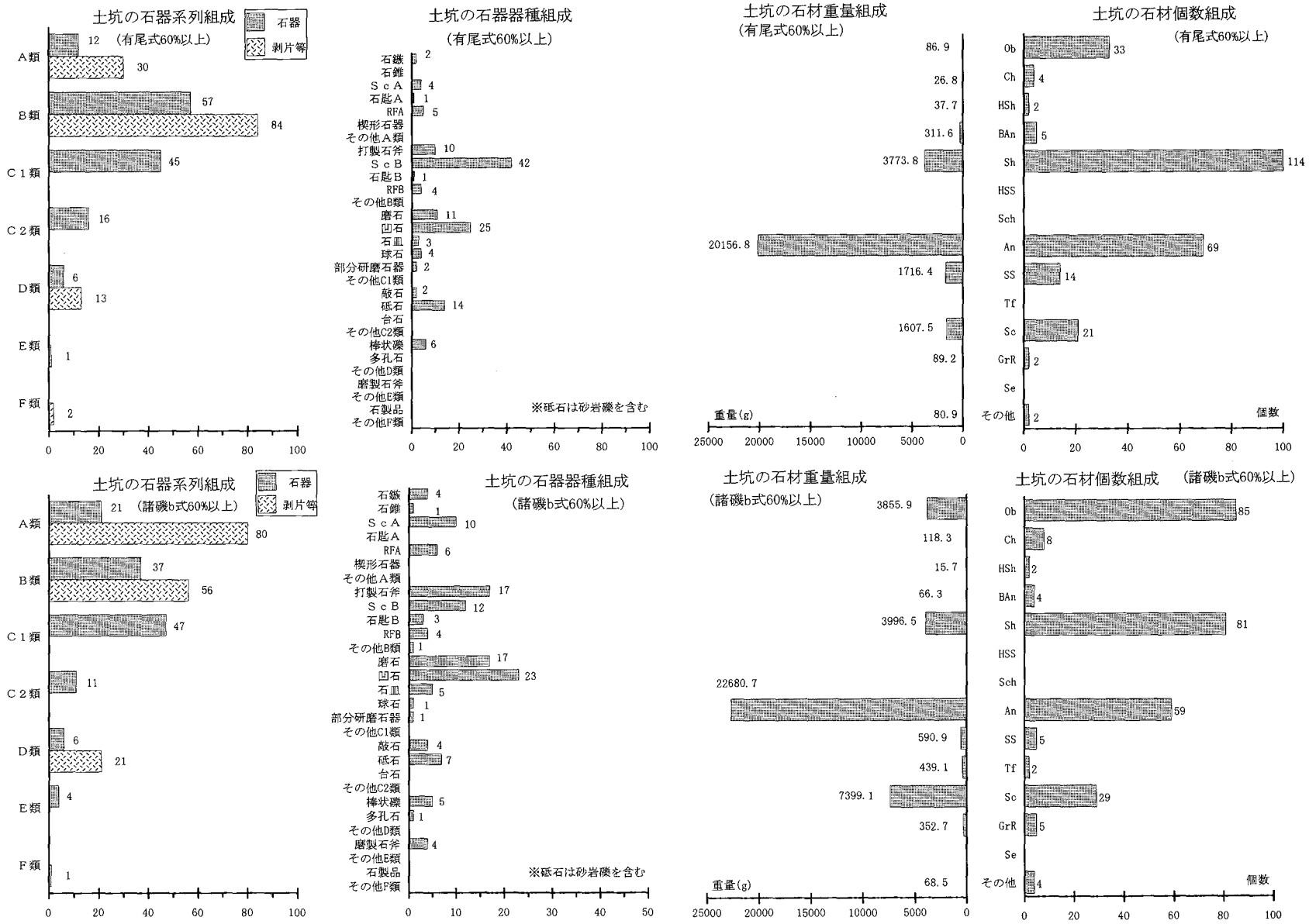
次に、器種組成は住居址と比較するとほぼ同じであり、特定の器種が偏在することはない。石材個数組成・重量組成も住居址とほぼ同じ組成を示している。このことは土坑にも住居址と同様な廃棄行為が行われていたことを示している。

諸磯ｂ式期の土坑出土の石器組成（第107図・第111表・第114表・第117表）　この時期のものは284点を数える。このうち石器は126点である。石器類全体の数量は有尾式期とほぼ同じである。しかし、住居址の石器類では、諸磯ｂ式期4.5倍に増加していることから、逆に諸磯ｂ式期の土坑から検出される石器類が著しく減少していることになる。同じ条件で調査しているにも関わらず、こうした違いが生じるのは、有尾式期と諸磯ｂ式期で土坑の機能や用途が変化したことに帰因するとみられる。具体的には、土坑に石器がより混入しにくい状況に置かれていたと言えよう。では、具体的に各種石器組成について検討してみよう。

石器系列組成では、製作指数はＡ類3.81、Ｂ類1.51で両者とも石器製作的パターンを示している。この数値は住居址の指数（Ａ類：3.60、Ｂ類：1.74）と比較すると、両者ともそれほど大きな違いではない。

次に、器種組成について住居址の組成と比較してみると、Ａ類では住居址とほぼ同じである。ところが、Ｂ類ではScBが9.5％（住居址21.8％）と大きく異なっている。また、Ｃ１類では磨石が13.5％（住居址3.7％）と大きく異なる。Ｃ２類では砥石が5.6％（住居址10.9％）と非常に少ない点で住居址とは異なっている。

こうした器種組成の違いは、土坑が住居址のように単なる廃棄の場ではなかったことを示すものである。特に、ScBは通時期的に本遺跡では最多器種であるにも関わらず、その組成比率が極めて低いのは、



第107図　有尾式期・諸磯ｂ式期土坑の石器組成

石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	57	151	33	9	250
B　類	172	266	12	3	453
C 1　類	166				166
C 2　類	66				66
D　類	22	44		7	73
E　類	5	4		2	11
F　類	3	3			6
合　計	491	468	45	21	1,025

第109表　土坑全体の石器系列組成

石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	12	24	6		42
B　類	57	82	2		141
C 1　類	45				45
C 2　類	16				16
D　類	6	12		1	19
E　類		1			1
F　類		2			2
合　計	136	121	8	1	266

第110表　有尾式60%以上の土坑の石器系列組成

石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	21	65	10	5	101
B　類	37	53	2	1	93
C 1　類	47				47
C 2　類	11				11
D　類	6	19		2	27
E　類	4				4
F　類		1			1
合　計	126	138	12	8	284

第111表　諸磯ｂ式60%以上の土坑の石器系列組成

石器系列	器　種	個　数
A　類	石鏃	10
	石錐	3
	ScA	27
	石匙A	2
	RFA	15
	楔形石器	
	円盤状石器	
	異形石器	
	石槍	
	石匙状石器	
B　類	打製石斧	55
	ScB	100
	石匙B	5
	RFB	9
	三角錐形石器	
	円盤状石器	3
	ミニチュア打斧	
C 1　類	磨石	52
	凹石	82
	石皿	19
	球石	8
	部分研磨石器	5
	スタンプ形石器	
C 2　類	敲石	16
	砥石	50
	台石	
D　類	棒状礫	18
	多孔石	4
	丸石	
	石棒	
	槍状石器	
E　類	磨製石斧	5
	磨製石器	
F　類	ストーンリタッチャー	
	ケツ状耳飾り	
	垂飾	
	石製円盤	2
	管玉	
	勾玉	
	石製品	
	有孔石製品	
	篦状石製品	
	その他	1
	合　計	491

第112表　土坑全体の石器器種組成
※砥石は砂岩礫を含む

石器系列	器　種	個　数
A　類	石鏃	2
	石錐	
	ScA	4
	石匙A	1
	RFA	5
	楔形石器	
	円盤状石器	
	異形石器	
	石槍	
	石匙状石器	
B　類	打製石斧	10
	ScB	42
	石匙B	1
	RFB	4
	三角錐形石器	
	円盤状石器	
	ミニチュア打斧	
C 1　類	磨石	11
	凹石	25
	石皿	3
	球石	4
	部分研磨石器	2
	スタンプ形石器	
C 2　類	敲石	2
	砥石	14
	台石	
D　類	棒状礫	6
	多孔石	
	丸石	
	石棒	
	槍状石器	
E　類	磨製石斧	
	磨製石器	
F　類	ストーンリタッチャー	
	ケツ状耳飾り	
	垂飾	
	石製円盤	
	管玉	
	勾玉	
	石製品	
	有孔石製品	
	篦状石製品	
	その他	
	合　計	136

第113表　土坑の石器器種組成
（有尾式60％以上）

石器系列	器　種	個　数
A　類	石鏃	4
	石錐	1
	ScA	10
	石匙A	
	RFA	6
	楔形石器	
	円盤状石器	
	異形石器	
	石槍	
	石匙状石器	
B　類	打製石斧	17
	ScB	12
	石匙B	3
	RFB	4
	三角錐形石器	
	円盤状石器	1
	ミニチュア打斧	
C 1　類	磨石	17
	凹石	23
	石皿	5
	球石	1
	部分研磨石器	1
	スタンプ形石器	
C 2　類	敲石	4
	砥石	7
	台石	
D　類	棒状礫	5
	多孔石	1
	丸石	
	石棒	
	槍状石器	
E　類	磨製石斧	4
	磨製石器	
F　類	ストーンリタッチャー	
	ケツ状耳飾り	
	垂飾	
	石製円盤	
	管玉	
	勾玉	
	石製品	
	有孔石製品	
	篦状石製品	
	その他	
	合　計	126

第114表　土坑の石器器種組成
（諸磯ｂ式60％以上）

石材系列	石　材	個　数	重量(kg)
I　類	Ob	206	4287.8
	Ch	28	349.5
	HSh	5	68
	BAn	21	2165.5
	Ja	4	67
II　類	Sh	372	15438.5
III a　類	An	248	105777.3
III b　類	SS	41	5549.2
	Tf	2	439.1
IV　類	Sc	79	13541.8
V　類	GrR	15	1373.1
VI　類	滑石他	4	120
合　計		1,025	149176.8

第115表　土坑全体の石材個数、重量組成

石材系列	石　材	個　数	重量(kg)
I　類	Ob	33	86.9
	Ch	4	26.8
	HSh	2	37.7
	BAn	5	311.6
II　類	Sh	114	3773.8
III a　類	An	69	20156.8
III b　類	SS	14	1716.4
IV　類	Sc	21	1607.5
V　類	GrR	2	89.2
VI　類	石英他	2	80.9
合　計		266	27887.6

第116表　有尾式60%以上の土坑の石材個数、重量組成

石材系列	石　材	個　数	重量(kg)
I　類	Ob	85	3855.9
	Ch	8	118.3
	HSh	2	15.7
	BAn	4	66.3
	Ja	3	46.7
II　類	Sh	81	3996.5
III a　類	An	59	22680.7
III b　類	SS	5	590.9
	Tf	2	439.1
IV　類	Sc	29	7399.1
V　類	GrR	5	352.7
VI　類	滑石	1	21.8
合　計		284	39583.7

第117表　諸磯b式60%以上の土坑の石材個数、重量組成

日常的作業と異なる「場」としての機能を有していたことによるものと考えられる。砥石が少ないのも同じ理由が考えられる。ScB と砥石の低下率はほぼ同じであることから、ScB と砥石は一緒に用いられる頻度が高かったことも推測される。これに対し、唯一土坑において組成率が大幅に増加している磨石は、土坑という「場」で用いられる頻度が高かったことを意味している。類似した機能を有している凹石・石皿が変化していない点も注目される。磨石という器種の用途が他のＣ１類の器種とは異なっていて、石皿とセットではなく、単独で用いられた器種である可能性を暗示している。このように磨石には植物質加工具という固定観念にとらわれることなく、様々な用途が考えられる。こうした分析結果の蓄積と実際の出土データから再考する必要がある。

石材重量組成では黒曜石の重量比が高くなっているが、これは大形原石が出土した土坑（D—1078）が含まれていることによる。それ以外では石材組成は住居址の組成とほぼ同じであり、大きな差異は認められない。

（大工原　豊）

石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	3	12	4		19
B　類	6	4			10
C 1　類	12				12
C 2　類	1				1
D　類					0
E　類					0
F　類		1			1
合　計	22	17	4	0	43

第118表　大形柱穴の石器系列組成

石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	2	9			11
B　類	17	18	1	1	37
C 1　類	7				7
C 2　類	11				11
D　類		3		1	4
E　類					0
F　類					0
合　計	37	30	1	2	70

第119表　竪穴状遺構全体の石器系列組成
※ J-25　D-1は除く

石材系列	石　材	個　数	重量(g)
I　類	Ob	19	73.4
	Ch		
	HSh		
	BAn	1	38.2
II　類	Sh	8	969.3
	HSS		
	Sch		
III a　類	An	13	6753.5
III b　類	SS		
	Tf	1	23.4
IV　類	Sc	1	59.7
V　類	GrR		
	Se		
VI　類	その他		
合　計		43	7917.5

第120表　大形柱穴の石材重量、個数組成

石材系列	石　材	個　数	重量(g)
I　類	Ob	6	11.6
	Ch	3	47.6
	HSh		
	BAn	2	44.2
II　類	Sh	34	1521
	HSS		
	Sch		
III a　類	An	8	2073
III b　類	SS	10	804.8
	Tf		
IV　類	Sc	7	1829.1
V　類	GrR		
	Se		
VI　類	その他		
合　計		70	6331.3

第121表　竪穴状遺構の石材重量、個数組成
※ J-25　D-1は除く

［大形柱穴出土の石器組成］（第108図・第118表・第120表・第122表）

大形柱穴はD－284・D－873の２基が存在する。両方で43点出土している。このうち石器は22点で、内訳は第108図及び第118表・第122表のとおりである。石器の出土数が少ないため、特に傾向は見い出せない。

［竪穴状遺構出土の石器組成］（第108図・第119表・第121表・第123表）

竪穴状遺構は７基が存在している。帰属率60％以上では有尾式３基・諸磯ｂ式２基であり、両方の時期のものが含まれている。石器類は全部で70点出土している。このうち石器は37点である。内訳は第108図及び第119表・第123表のとおりである。石器器種組成では、打製石斧・ScB・砥石が多い。砥石が最も多いのは特異な傾向と言えよう。

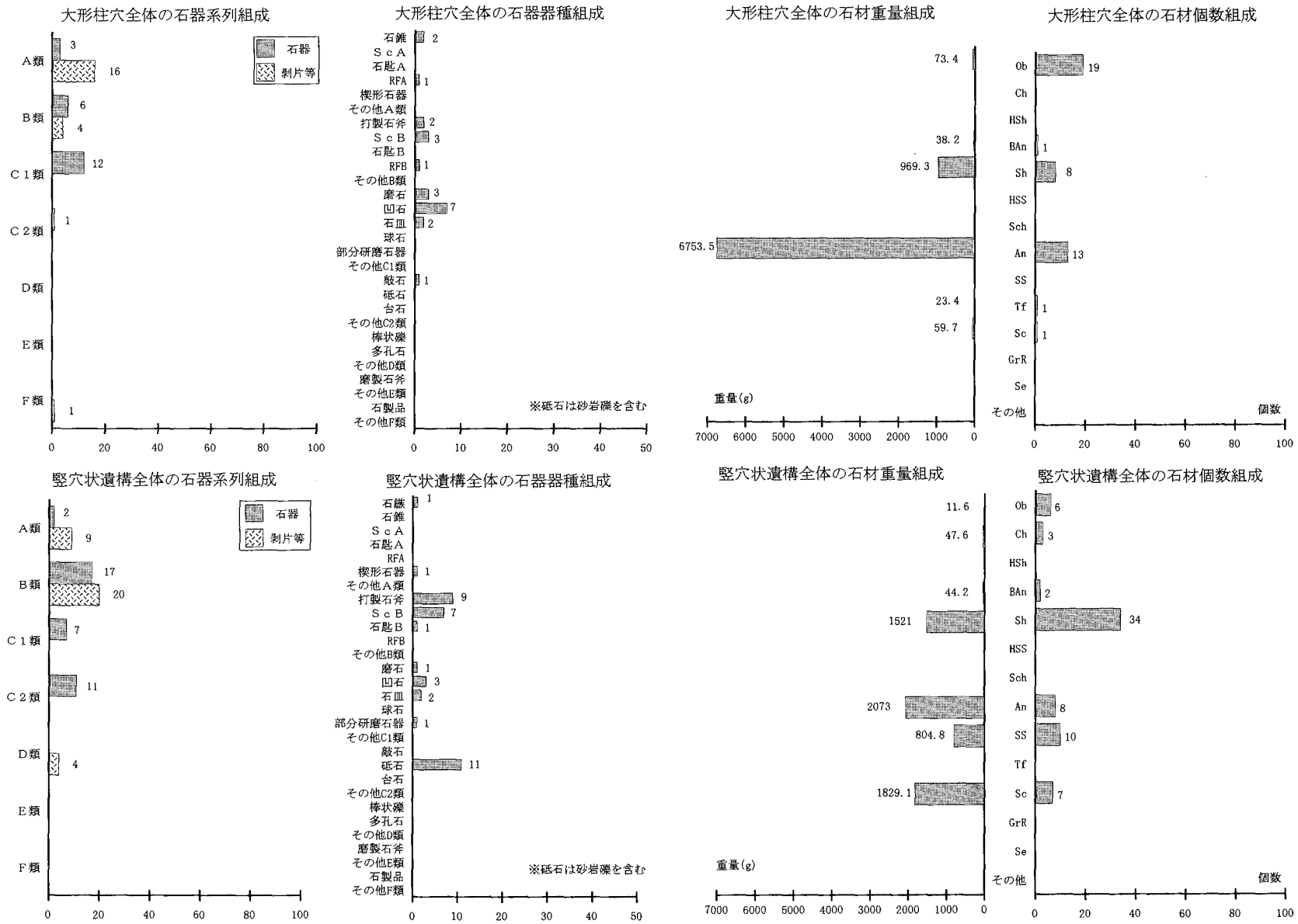
（大工原　豊）

石器系列	器　種	個　数
A　類	石鏃	
	石錐	2
	ScA	
	石匙A	
	RFA	1
	楔形石器	
	その他A類	
B　類	打製石斧	2
	ScB	3
	石匙B	
	RFB	1
	その他B類	
C１　類	磨石	3
	凹石	7
	石皿	2
	球石	
	部分研磨石器	
	その他C１類	
C２　類	敲石	1
	砥石	
	台石	
	その他C２類	
D　類	棒状礫	
	多孔石	
	その他D類	
E　類	磨製石斧	
	その他E類	
F　類	石製品	
	その他F類	
	合　計	22

第122表　大形柱穴の石器器種組成

石器系列	器　種	個　数
A　類	石鏃	1
	石錐	
	ScA	
	石匙A	
	RFA	
	楔形石器	1
	その他a類	
B　類	打製石斧	9
	ScB	7
	石匙B	1
	RFB	
	その他B類	
C１　類	磨石	1
	凹石	3
	石皿	2
	球石	
	部分研磨石器	1
	その他C１類	
C２　類	敲石	
	砥石	11
	台石	
	その他C２類	
D　類	棒状礫	
	多孔石	
	その他D類	
E　類	磨製石斧	
	その他E類	
F　類	石製品	
	その他F類	
	合　計	37

第123表　竪穴状遺構全体の石器器種組成
※J-25　D-1は除く
※砥石は砂岩礫を含む



第108図　大形柱穴全体・竪穴状遺構全体の石器組成

［ピット出土の石器組成］（第109図・第124表～第132表）

全部で381点検出されている。このうち石器は147点である。ピットから石器類が検出されるのは、①掘削時・木柱抜き取り時の偶発的混入（前～同時期のもの）、②掘削時・木柱抜き取り時の意図的埋め込み（同時期のもの）、③後世の偶発的混入（後の時期のもの）のケースが考えられる。ここで扱う石器類がどのケースに相当するかを石器組成の偏りから検討する必要がある。実際、ほぼ同時期の大下原遺跡では、ピットへの意図的埋め込みが確認されている（大工原　1993）。

以下、帰属率60％以上のピット出土の石器について、時期ごとに特徴を述べる。

石器系列	石　器	剥　片	石　核	原　石	合　計
A　類	26	68	21	3	118
B　類	45	114	8	1	168
C 1　類	53				53
C 2　類	14				14
D　類	4	18		1	23
E　類	4	1			5
F　類	1				1
合　計	147	201	29	5	382

第124表　ピット全体の石器系列組成

石器系列	石　器	剥　片	石　核	原　石	合　計
A　類	2	5	1		8
B　類	1	13			14
C 1　類	4				4
C 2　類	2				2
D　類		2			2
E　類					0
F　類					0
合　計	9	20	1	0	30

第125表　有尾式60％以上のピットの石器系列組成

石器系列	石　器	剥　片	石　核	原　石	合　計
A　類	13	34	4	3	54
B　類	18	32	1		51
C 1　類	13				13
C 2　類	3				3
D　類	1	4			5
E　類	2				2
F　類					0
合　計	50	70	5	3	128

第126表　諸磯ｂ式60％以上のピットの石器系列組成

石器系列	器　種	個　数
A　類	石鏃	10
	石錐	2
	ScA	11
	石匙A	
	RFA	2
	楔形石器	1
	その他A類	
B　類	打製石斧	13
	ScB	28
	石匙B	3
	RFB	1
	その他B類	
C1　類	磨石	5
	凹石	37
	石皿	5
	球石	4
	部分研磨石器	1
	特殊磨石	1
	その他C1類	
C2　類	敲石	2
	砥石	12
	台石	
	その他C2類	
D　類	棒状礫	4
	多孔石	
	丸石	
	石棒	
	その他D類	
E　類	磨製石斧	4
	その他E類	
F　類	石製品	1
	その他F類	
	合　計	147

第127表　ピット全体の石器器種組成

石器系列	器　種	個　数
A　類	石鏃	1
	石錐	
	ScA	1
	石匙A	
	RFA	
	楔形石器	
	その他A類	
B　類	打製石斧	1
	ScB	
	石匙B	
	RFB	
	その他B類	
C1　類	磨石	
	凹石	2
	石皿	1
	球石	1
	部分研磨石器	
	特殊磨石	
	その他C1類	
C2　類	敲石	
	砥石	2
	台石	
	その他C2類	
D　類	棒状礫	
	多孔石	
	丸石	
	石棒	
	その他D類	
E　類	磨製石斧	
	その他E類	
F　類	石製品	
	その他F類	
	合　計	9

第128表　ピットの石器器種組成
（有尾式60%以上）

石器系列	器　種	個　数
A　類	石鏃	6
	石錐	
	ScA	5
	石匙A	
	RFA	2
	楔形石器	
	その他A類	
B　類	打製石斧	4
	ScB	12
	石匙B	2
	RFB	
	その他B類	
C1　類	磨石	
	凹石	11
	石皿	1
	球石	
	部分研磨石器	
	特殊磨石	1
	その他C1類	
C2　類	敲石	1
	砥石	2
	台石	
	その他C2類	
D　類	棒状礫	1
	多孔石	
	丸石	
	石棒	
	その他D類	
E　類	磨製石斧	2
	その他E類	
F　類	石製品	
	その他F類	
	合　計	50

第129表　ピットの石器器種組成
（諸磯b式60%以上）
※砥石は砂岩礫を含む

有尾式期のピットの石器組成（第109図・第125表・第128表・第131表）　この時期のものは30点を数えるのみである。このうち石器は９点である。したがって、有尾式期では、ピットに石器が混入するケースは稀であったことがうかがえる。なお、出土石器数が少な過ぎるため、住居址との傾向の比較は不明である。

諸磯ｂ式期のピットの石器組成（第110図・第126表・第129表・第132表）　この時期のものは128点を数える。このうち石器は50点である。各種系列組成をこの時期の住居址と比較してみる。ただし、資料数が少ないため、正確な傾向が示されていない可能性が高い。そこで、諸磯ｂ式期が主体を占めていると推定されるピット全体の石器組成も併せて検討することにする。

系列組成ではほぼ同じ傾向を示す。器種組成ではピットの方が砥石が少ない点が大きく異なっている。しかし、ピット全体の組成では住居址とほぼ同じ傾向を示しているので、この器種組成は扱う資料数が少ないために正確な傾向を示していないと判断される。また、石材重量組成は住居址とほぼ同じ傾向を示すが、個数組成では頁岩が低率である。これも数量的問題と考えられる。

次に、製作指数について調べてみることにする。Ａ類では、ピット全体3.54、諸磯ｂ式期のピット3.15、住居址3.60である。原則としてほぼ同じ状態であったことが分かる。また、Ｂ類では、ピット全体2.73、諸磯ｂ式期のピット1.83、住居址1.74である。ピット全体のみ大きく異なっており解釈が難しいが、この時期にはやや剝片類が多い傾向が認められるようである。

以上のように、石器組成からみる限りにおいては、ピットの石器組成は、住居址の組成と大きな違いがなく、同じように廃棄された遺物が、①・③のケースで混入した場合が多かったものと推定される。

（大工原　豊）

石材系列	石　材	個　数	重量(g)
I　類	Ob	106	604.7
	Ch	6	59.3
	HSh		
	BAn	8	477.6
	メノウ	1	86.5
II　類	Sh	129	6798
	HSS	1	62.2
	Sch		
IIIa　類	An	89	27617.1
IIIb　類	SS	11	1227.2
	Tf		
IV　類	Sc	23	4607.9
V　類	GrR	7	1443
	Se		
	軟質泥岩	1	167.5
合　計		382	43151

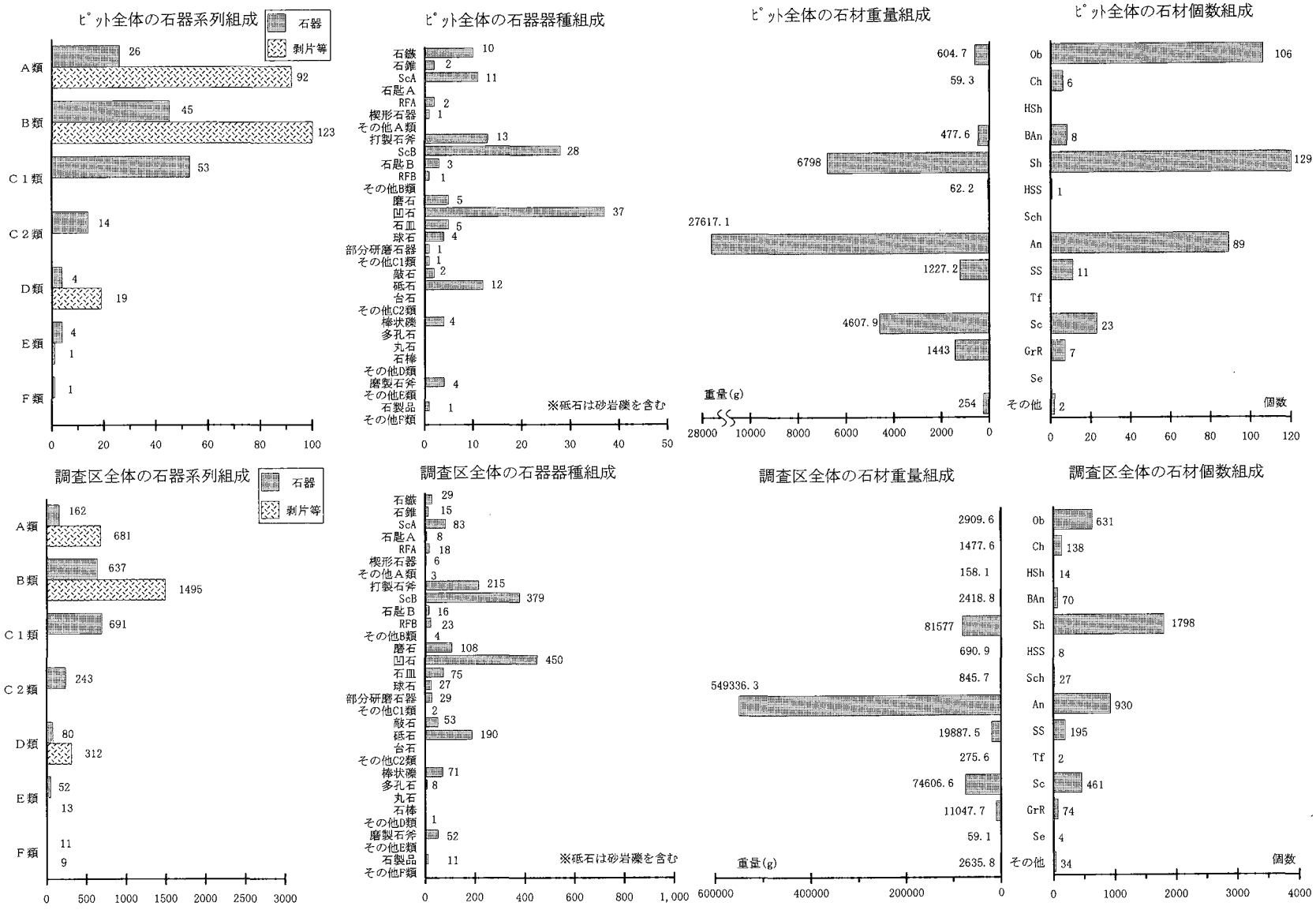
第130表　ピット全体の石材個数、重量組成

石材系列	石　材	個　数	重量(g)
I　類	Ob	8	24.3
	Ch		
	HSh		
	BAn		
II　類	Sh	11	267.7
	HSS		
	Sch		
IIIa　類	An	7	1378.4
IIIb　類	SS	2	114.3
	Tf		
IV　類	Sc	2	40.6
V　類	GrR		
合　計		30	1825.3

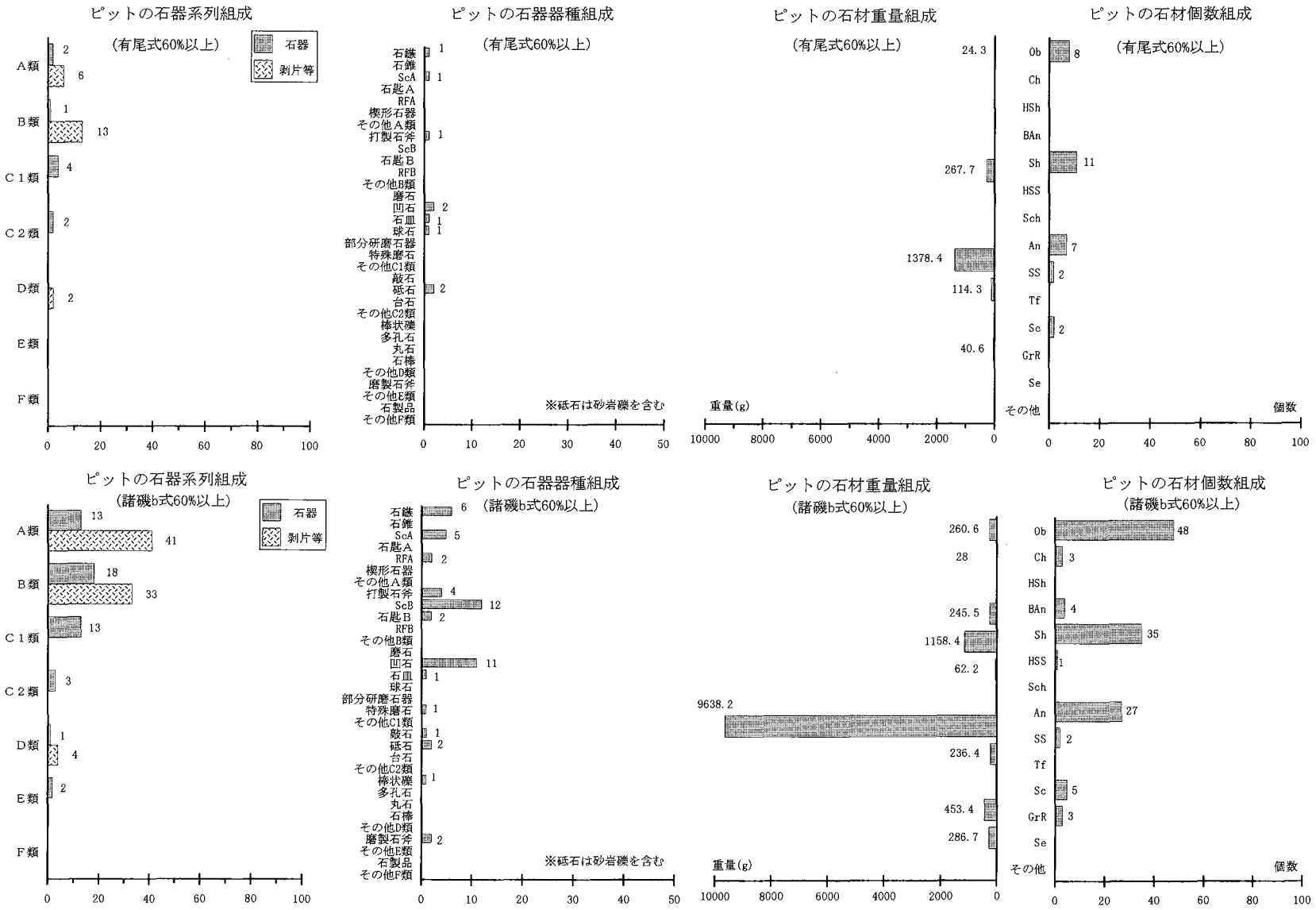
第131表　有尾式60%以上のピットの石材個数、重量組成

石材系列	石　材	個　数	重量(g)
I　類	Ob	48	260.6
	Ch	3	28
	HSh		
	BAn	4	245.5
II　類	Sh	35	1158.4
	HSS	1	62.2
	Sch		
IIIa　類	An	27	9638.2
IIIb　類	SS	2	236.4
	Tf		
IV　類	Sc	5	453.4
V　類	GrR	3	286.7
合　計		128	12369.4

第132表　諸磯ｂ式60%以上のピットの石材個数、重量組成



第109図　ピット全体・調査区全体の石器組成



第110図　有尾式期・諸磯ｂ式期ピットの石器組成

［調査区出土の石器組成］（第109図・第133―１・２・３表）

調査区内から検出された石器類は全部で1876点を数える。しかし、この中には遺構の覆土上層のものが、調査区（グリッド）出土遺物として取り上げられている。また、検出できなかった浅い遺構の覆土に含まれていたものも、調査区出土遺物である。しかし、こうした遺構に伴わずに当時の地表面に散乱していた石器類も当然存在している。ここでは、こうしたものをまとめて一つの石器組成としてみた場合、住居址の石器組成と差異があるのかと言う点について、調べてみる。調査区出土の石器について、土器との共伴関係が把握しにくいため、帰属率を算定していない。したがって、分かり難い点も多いが、とりあえず有尾式期と諸磯ｂ式期の両者を併せて検討することにする。

最初に系列組成をみよう。製作指数はＡ類4.20、Ｂ類2.35と住居址に比べ0.6～0.7ポイントほど高い数値を示しており調査区には剝片類が多い。この組成の中には遺跡内に存在していた石器製作場所の剝片類が含まれていることを意味している。つまり、①遺跡内での石器製作が行われていたことと、②石器製作場所に散乱していた剝片類はすべて住居址へ廃棄されていなかったことを示している。

次に器種組成を住居址と検討してみよう。住居址も時期により組成が大きく異なっているため、一概には言えないが、Ａ類の器種群の在り方は有尾式期に類似しており、全体に点数が少ない。ただし、これは住居址と調査区では精査が異なるため、調査精度の差異と考えておくべきであろう。Ｂ類ではScB・打製石斧が多く、諸磯ｂ式期の在り方に近い状態を示している。それ以外の器種においては、住居址の組成と取り立てて大きな差異は認められないようである。

そして、石材組成ではＡ類の黒曜石において個数が少なく、有尾式期と近い組成を示している。これは、系列・器種組成での在り方と連動するものであり、ほぼ同じ様相として認識されるものである。個体の小さいＡ類の黒曜石は調査精度により数量が大きく左右されるものと思われる。

以上の結果、Ａ類においては調査精度の差異により比較が困難であった。それ以外の組成では諸磯ｂ式期に近い様相を示していることが分かる。数量の多い諸磯ｂ式期の石器組成の陰に、有尾式期の石器組成が隠れて、表面上は現れなくなってしまったことも考えられ、帰属率を伴わない石器組成の欠点がさらけ出されてしまったと判断すべきであろう。

ブロック別石器組成（第111図～第113図・第134表）　ここでは、遺物分布状態から抽出された平面的に視覚的まとまりをもつ分析単位ごとに、石器組成を検討する。この分析上の単位は「ブロック」と定義されるものである（鈴木忠司　1980）。石器類のブロックでは、一連の作業単位としての性格を有する系列ごとに設定される方が、石器製作の場を特定するには有効性が高いと考えられる。したがって、今回は系列別にブロックを設定した（付図４～付図10）。なお、ここでは土坑・ピット出土の石器類を含めて平面的に眺めた時、まとまりとして認識されるものをブロックとして認定する方法を採った。これは遺構と遺物分布状態の関連性を検討するためである。視覚的に設定されたブロックに石器がない場合、すべて遺構に伴うものであり、遺構相互に関連性があることを示すことになる。逆に遺構には含まれない場合、「場」としての空間の関連性が示される。この場合、①製作・②使用・③廃棄のいずれかの「場」であり、石器組成からいずれかについて検討を行う。ちなみに、遺構との関連性については、遺物分布の項で扱うので、ここでは組成論的検討に限定することにする。

Ａ類のブロック別石器組成　Ａ―１～15ブロックが設定された。また、Ａ―２ブロックは、２ａ～２ｃ

石器系列	器　種	個　数
A　類	石鏃	29
	石錐	15
	ScA	83
	石匙 A	8
	RFA	18
	楔形石器	6
	円盤状石器	
	異形石器	
	石槍	3
	石匙状石器	
B　類	打製石斧	215
	ScB	379
	石匙 B	16
	RFB	23
	三角錐形石器	
	円盤状石器	3
	ミニチュア打斧	1
	礫器	
C 1　類	磨石	108
	凹石	450
	石皿	75
	球石	27
	部分研磨石器	29
	スタンプ形石器	
	特殊磨石	2
C 2　類	敲石	53
	砥石	190
	台石	
D　類	棒状礫	71
	多孔石	8
	丸石	
	石棒	
	槍状石器	1
	石製深鉢	
E　類	磨製石斧	52
	磨製石器	
F　類	ストーンリタッチャー	1
	ケツ状耳飾り	2
	垂飾	6
	石製円盤	1
	管玉	1
	合計	1876

第133-2表　調査区全体の石器器種組成

石器系列	石　器	剥　片	石　核	原　石	合　計
A　類	162	557	103	21	843
B　類	637	1428	66	1	2132
C 1　類	691				691
C 2　類	243				243
D　類	80	312			392
E　類	52	11	1	1	65
F　類	11	8		1	20
合　計	1876	2316	170	24	4386

第133-1表　調査区全体の石器系列組成

石材系列	石　材	個　数	重量(g)
I　類	Ob	631	2909.6
	Ch	138	1477.6
	HSh	14	158.1
	BAn	70	2418.8
	Ja	11	1035.7
	流紋岩	2	80.7
	珪質岩	5	303.5
II　類	Sh	1798	81577
	HSS	8	690.9
	Sch	27	845.7
	Ho	1	22.7
III a　類	An	930	549336.3
III b　類	SS	195	19887.5
	Tf	2	275.6
IV　類	Sc	461	74606.6
V　類	GrR	74	11047.7
	Se	4	59.1
VI　類	滑石	7	94.4
	石英	6	1056.4
	GTf	1	38
	下呂石	1	4.4
合　計		4386	747926.3

第133-3表　調査区全体の石材個数、重量組成

のサブブロックに分けられる。大別15、細別17ブロックである。A－1は「廃棄帯」として認識される大規模なブロックであり、すべての系列と前期の土器が集中している。A－2c、14も③廃棄の「場」の様相を示している。また、A－11、13はすべての石器が遺構に含まれるため、ここで組成として扱う石器は存在しない。したがって、これらのブロックは①製作・②使用の「場」の可能性が低い。

最初に系列組成であるが、石器製作指数でセリエーションを行うと、第113図左のグラフとなる。全体的に石器製作的パターンを示しているが、A－2b、6、10は石器製作的パターンが特に顕著である(A－3は1点だけなので除外)。これらのブロックは①製作の「場」であった可能性が高い。なお、A－2bは後期の住居址の周辺であり、この時期のブロックと推定される。

次に、器種組成ではA－2b、5、7、12、15がスクレイパー類のみで組成されており、②使用の「場」であった可能性がある。それ以外の場では石鏃も組成しており、①製作・③廃棄の「場」であった可能性が高い。

B類のブロック別石器組成　B－1～18ブロックが設定された。また、B－2ブロックは、2a～2cのサブブロックに分けられる。大別18、細別20ブロックである。B－1は「廃棄帯」である。B－2c、17も③廃棄の「場」の様相を示している。また、B－45、14、16はすべて遺構に含まれるので、ここで組成として扱う石器は存在しない。したがって、①製作・②使用の「場」の可能性が低い。

系列組成は、石器製作指数を調べてみると、第113図右のように示される。あまり顕著な差異は認められないが、1.6を境に2つのグループに分かれる。1.6以上の石器製作的パターンのブロックは、B－1、2b、2c、15、17、18の6ブロックである(4、11は1点のみなので除外)。これらのブロックは①製作の「場」であった可能性がやや高い。

次に、器種組成を調べてみよう。B－2a、6はScBの組成費率が高く、②使用の「場」であった可能性がある。それ以外のブロックでは、ScBが主体を占め、これに打製石斧が加わる組成である。打製石斧は次節で分析するが、II形態ではかなりの高率で使用痕が認められており、使用後に廃棄されたものが大部分を占めている。したがって、打製石斧が多く含まれるブロックについては、③廃棄の「場」であった可能性が高い。

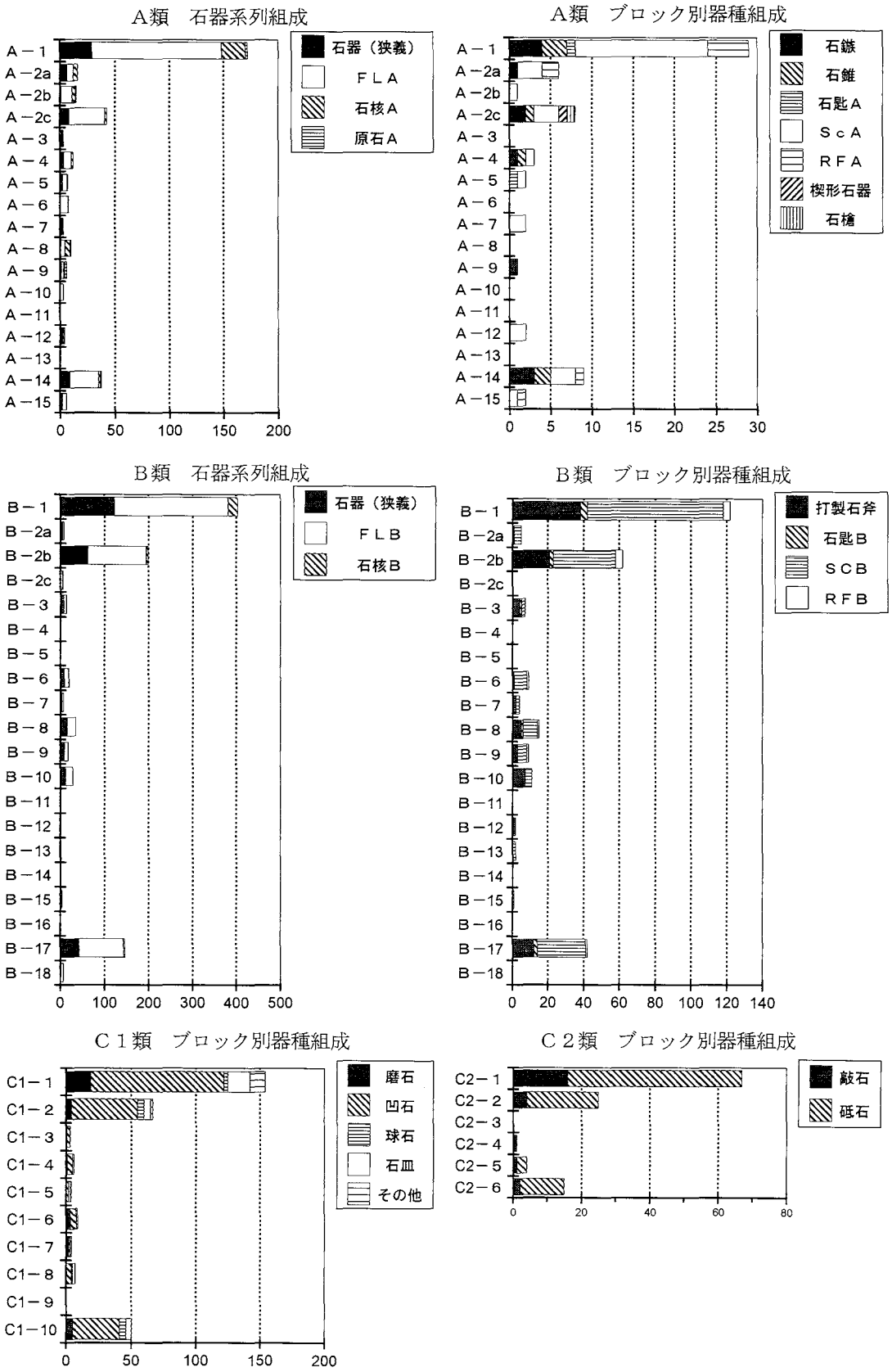
C1類のブロック別石器組成　C1－1～10ブロックが設定された。C1－1ブロックは「廃棄帯」である。C1－2、10も③廃棄の「場」の様相を示している。なお、C1－9はすべて遺構に含まれるので、ここで組成として扱う石器は存在しない。

器種組成をみると、「廃棄帯」と推定されるブロックではほぼ同じ組成を示す。それ以外のブロックでは器種が偏在するものの、資料数が少ないため、傾向はつかめない。

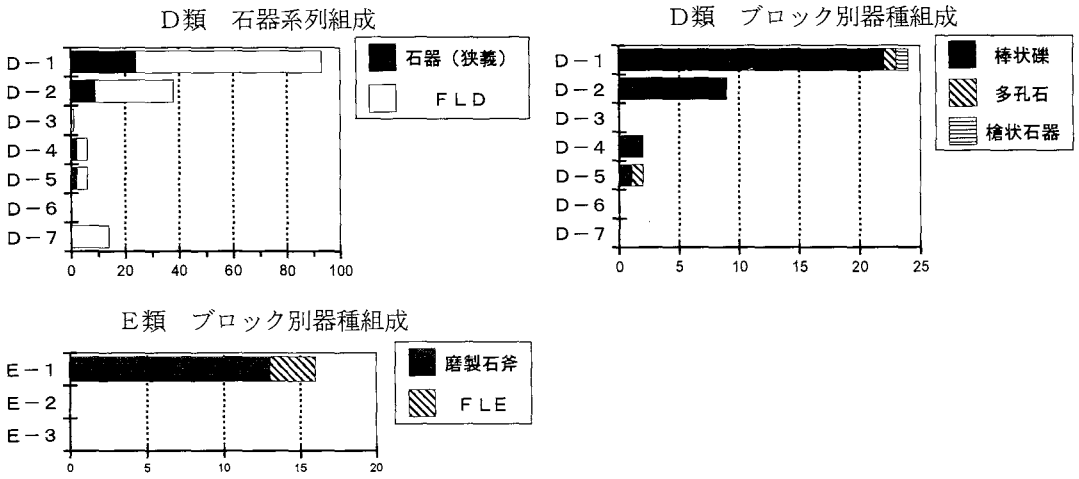
C2類のブロック別石器組成　C2－1～6ブロックが設定された。C2－1ブロックは「廃棄帯」である。C2－2、6も③廃棄の「場」の様相を示している。なお、C2－3はすべて遺構に含まれるので、ここで組成として扱う石器は存在しない。器種組成をみても、特別な器種の偏在は認められない。

D類のブロック別石器組成　D－1～7ブロックが設定された。D－1は「廃棄帯」である。D－2も③廃棄の「場」の様相を示している。狭義の石器としたものは、大部分が棒状礫であり、FLDが多いブロックには多い傾向を示している。したがって、棒状礫の多くは敲石として用いられ、破砕して廃棄された可能性が高いことが分かる。

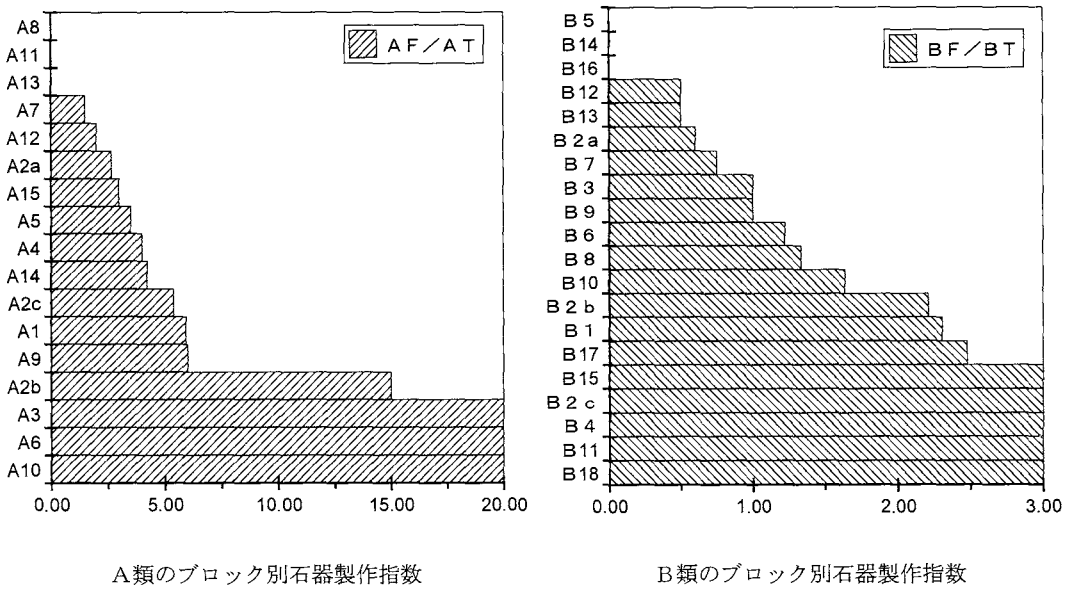
E類のブロック別石器組成　E－1～3ブロックが設定された。E－1は「廃棄帯」である。E－2、3はすべて遺構に含まれるもので組成を示し得ない。磨製石斧よりもFLEの方が少なく、これらはメン



第111図　ブロック別石器組成（１）



第112図　ブロック別石器組成（2）



第113図　A類B類のブロック別石器製作指数

テナンスに伴う剝片と判断される。

F類のブロック別石器組成　この系列ではF－1ブロックが設定されたが、土坑・ピット中にすべて含まれてしまうため、組成を作成し得なかった。つまり、F類については、遺跡内に明確な①製作場所が存在していなかったことを示している。

（大工原　豊）

器種	A−1	A−2a	A−2b	A−2c	A−3	A−4	A−5	A−6	A−7	A−8	A−9	A−10	A−11	A−12	A−13	A−14	A−15	計
石鏃	4	1	0	2	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	12
石錐	3	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	7
石匙A	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
SCA	16	3	1	3	0	1	1	0	2	0	0	0	0	2	0	3	1	33
RFA	5	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	9
楔形石器	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
石槍	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
石器計	29	6	1	8	0	3	2	0	2	0	1	0	0	2	0	9	2	65
FLA	119	6	10	33	1	7	4	7	1	4	2	3	0	1	0	26	4	228
石核A	22	4	3	2	1	2	1	0	0	5	1	0	0	1	0	2	0	44
原石A	2	0	1	0	1	0	0	1	0	1	2	0	0	0	0	1	0	9
剥片類計	143	10	14	35	3	9	5	8	1	10	5	3	0	2	0	29	4	281
合計	172	16	15	43	3	12	7	8	3	10	6	3	0	4	0	38	6	346

器種	B−1	B−2a	B−2b	B−2c	B−3	B−4	B−5	B−6	B−7	B−8	B−9	B−10	B−11	B−12	B−13	B−14	B−15	B−16	B−17	B−18	計
打製石斧	38	1	21	0	4	0	0	1	2	5	3	7	0	2	0	0	0	0	12	0	96
石匙B	4	0	2	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	10
SCB	76	4	35	0	2	0	0	7	2	8	5	4	0	0	2	0	1	0	27	0	173
RFB	4	0	4	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	12
石器計	122	5	62	0	7	0	0	9	4	15	9	11	0	2	2	0	1	0	42	0	291
FLB	259	3	132	5	6	1	0	9	3	20	9	17	1	1	1	0	3	0	101	7	578
石核B	22	0	5	2	1	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3	0	36
剥片類計	281	3	137	7	7	1	0	11	3	20	9	18	1	1	1	0	3	0	104	7	614
合計	403	8	199	7	14	1	0	20	7	35	18	29	1	3	3	0	4	0	146	7	905

器種	C1−1	C1−2	C1−3	C1−4	C1−5	C1−6	C1−7	C1−8	C1−9	C1−10	計
磨石	19	4	0	1	0	3	2	0	0	5	34
凹石	103	51	3	4	2	5	1	4	0	36	209
球石	3	5	0	0	0	1	0	1	0	5	15
石皿	17	5	0	0	1	0	0	2	0	4	29
その他	12	2	0	1	1	0	1	0	0	0	17
石器計	154	67	3	6	4	9	4	7	0	50	304

器種	C2−1	C2−2	C2−3	C2−4	C2−5	C2−6	計
敲石	16	4	0	1	1	2	24
砥石	51	21	0	0	3	13	88
石器計	67	25	0	1	4	15	112

器種	D−1	D−2	D−3	D−4	D−5	D−6	D−7	計
棒状礫	22	9	0	2	1	0	0	34
多孔石	1	0	0	0	1	0	0	2
槍状石器	1	0	0	0	0	0	0	1
石器計	24	9	0	2	2	0	0	37
FLD	69	29	1	4	4	0	14	121
合計	93	38	1	6	6	0	14	158

器種	E−1	E−2	E−3	計
磨製石斧	13	0	0	13
FLE	3	0	0	3
合計	16	0	0	16

第134表　ブロック別石器組成表

b　石器各説

［A類石器］

石鏃（遺物編第188図・第189図）　全部で235点検出されている。形態別・石材別の内訳は第135表のとおりである。以下のように大別され、さらに第115図のように亜形態に細分類される。

Ⅰ形態（ＮＢ形態）：凹基無茎（Notched Base）

大きさ（ａ～ｄ）と平面形状からいくつかの亜形態に細分される。標準的な形状のもの（Basic）と細身のもの（Slim）などがある。

Ⅱ形態（ＦＢ形態）：平基無茎（Flat Base）

大きさと平面形状からいくつかの亜形態に細分される。全体に粗雑な押圧剥離で整形されており、比較的大形のものが多いことが特徴である。この形態を最終形態としている例も存在するが、Ⅰ形態の未成品も多数含まれていると判断される。

Ⅳ形態（ＬＳ形態）：木葉形（Leaf Shape）

本遺跡においては、１点のみ認められる例外的な形態である。槍先形尖頭器のような木葉形の形状を呈しているが、石鏃と同じサイズであるので、石鏃に分類した。

以下、時期別にその特徴を述べる。なお、ここに図示したものは原則として土器型式帰属率の高いものであり、時期別に示した数値は土器型式帰属率60％以上の住居址出土資料のデータである。

形態	個数	全体							有尾式期								諸磯ｂ式期							
		石材						欠損	個数	石材						欠損	個数	石材						欠損
		Ⅰ					Ⅱ			Ⅰ					Ⅱ			Ⅰ					Ⅱ	
		Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh			Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh			Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh	
Ⅰa－B	23	19	4					11	5	4	1					2	14	12	2					7
Ⅰa-S1	11	11						4									4	4						1
Ⅰa-S3	4	4						3									2	2						1
Ⅰa-E1	2	2						1									2	2						1
Ⅰb－B	21	19	1		1			11									12	11	1					5
Ⅰb-S1	18	8	8				2	7									12	6	5				1	5
Ⅰb-S2	6	3	1	2				2	2		1	1				1	2	2						1
Ⅰb-S3	6	4	1			1		5	2		1			1		1	1	1						1
Ⅰb-E1	1	1															1	1						
Ⅰb-E2	2	2						1									1	1						
Ⅰc－B	15	11	3	1				8									12	8	3	1				6
Ⅰc-S2	6	6						3									2	2						2
Ⅰd－B	2	1	1					2	1		1					1	1	1						1
Ⅱa－B	5	5						1									4	4						1
Ⅱa-B2	5	5						2									4	4						2
Ⅱa-B3	6	4	2					3									6	4	2					3
Ⅱb-B2	3	2	1					1									2	1	1					1
Ⅱb-B3	6	4	2					4									4	2	2					4
Ⅱb－S	2	1		1				1	2	1		1				1								
Ⅱc-B3	1		1					1									1		1					1
Ⅱd-B3	1				1												1				1			
尖頭状	1	1																						
形態不明	19	15	4					15									5	3	2					4
未成品	67	50	14		1	1	1	36	6	6						2	38	27	11					
				15																				
円無未	2	2						1	1	1						1	1	1						1
合計	235	180	43	4	3	2	3	123	19	12	4	2	0	1	0	9	132	99	30	1	1	0	1	63

第135表　石鏃の時期別形態と諸属性

有尾式期の石鏃（遺物編第188図１～16）　全体的に石鏃の数量が少ない（帰属率60％以上の住居址では19点）。形態別・石材別の長幅比は第114図のとおりである。

完形品ではⅠ形態が83.3％と多く、Ⅱ形態は16.7％と少ない。この時期の特徴は全体的に細身で小形のものが多いことである。Ⅰ形態では小形で標準形状のもの（Ⅰａ－Ｂ形態：１～４）、小形でやや細身のもの（Ⅰａ－Ｓ３形態：９）、中形でやや細身のもの（Ⅰｂ－Ｓ２形態：６～８）、中形で細身のもの（Ⅰｂ－Ｓ３形態：10）などが認められる。また、Ⅱ形態では中形でやや細身のもの（Ⅱｂ－Ｂ２形態：11・12）などが認められる。ただし、いずれも非常に厚いので、あるいはⅠ形態の未成品かもしれない。石鏃未成品（13～16）でも13・15・16のようにⅠ形態の未成品が多い。これらの資料でも基部の湾曲は弱く、調整の最終段階で基部に深い抉り込みを入れて完成させていることが確認できる。ただし、前期全般にわたって、Ⅱ形態は少数ながら存在しているので、すべてがⅠ形態の未成品ではない。

また、石材別にみると黒曜石41.7％、チャート33.3％、硬質頁岩16.7％であり、黒曜石とチャートの占有率が高い。ただし、未成品も含めると黒曜石は63.2％、チャート20.1％、硬質頁岩10.5％となり、黒曜石の占有率がさらに高くなる。

石鏃の場合、黒曜石に対する執着心は強いようである。こうした黒曜石製の小形の石鏃を少数保有するといった傾向は、関山式期～有尾式期に一般的であり、前期前半期の伝統的な石鏃の在り方と理解される。また、チャートも比較的多く、黒曜石の不足を補うかたちで用いられている。これは黒曜石が少量しか入手できない石材事情によると推察される。

諸磯ｂ式期の石鏃（遺物編第188図17～26・第189図１～26）　この時期の石鏃は、有尾式期に比べ圧倒的に多い（帰属率60％以上の住居址では132点）。

Ⅰ形態が82点と多く、Ⅱ形態は43点とやや少数である。また、サイズ・形状のバリエーションも多く、第115図に示された大部分の形態が認められる。大形で標準的形状のもの（１ｃ－Ｂ形態：遺物編189図１～６）、中形でやや細身のもの（Ⅰｂ－Ｓ１形態：同７～14）、中形で標準的形状のもの（Ⅰｂ－Ｂ形態：同15・16）、小形でやや細身のもの（Ⅰａ－Ｓ１形態：同19・21）、小形で標準的形状のもの（Ⅰａ－Ｂ形態：同23・24）が代表的な形態である。

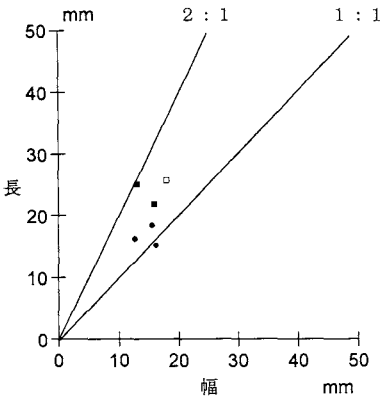
なお、Ｊ－78号住出土資料には脚部の長さが揃ってないもの（同18・22）や、ブーメラン形を呈するもの（同26）など特異な形状の石鏃がまとまっている。ブーメラン形のものは下高瀬寺山遺跡（富岡市）からも検出されており、この時期の亜形態の一つと推定される。

また、Ⅱ形態でも多様な形状のものが存在している。小形で標準的な形状のものが多いが、いくつかの亜形態に細分できる（Ⅱａ－Ｂ形態：第188図21・22、Ⅱａ－Ｂ２形態：同17・18、Ⅱａ－Ｂ３形態：同19・20）。これらの多くは弱い湾曲が基部に認められるが、Ⅰ形態の深い湾曲とは区別される。このうち、同23・25・26などは調整が少なく、未成品の可能性もある。Ⅰ形態が大多数を占めるものの、Ⅱ形態も前期初頭以来根強く存在し続けており、単に嗜好性の違いではなく、機能・用途の違いであった可能性もある。

この時期でも石材は黒曜石が75.8％、次いでチャートが22.7％で、両者で98.5％と大部分を占めている。それ以外の石材としては、硬質頁岩・黒色安山岩・鉄石英なども用いられているが極少数である。黒曜石に対する選択性は相変わらず非常に高い。

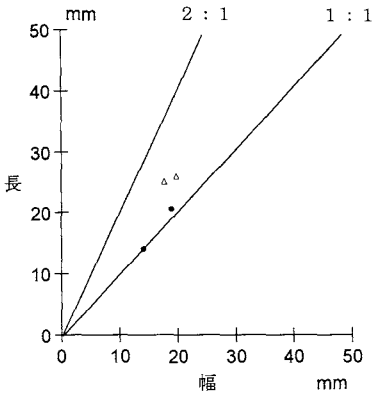
諸磯ｂ式期の石鏃の特徴は、中形から大形で比較的幅広のものが多いことである。また、黒曜石も多用されている。この時期には多量の黒曜石を入手しており、こうした石材事情が、比較的大きな（ある

石鏃形態別長幅比（有尾式）



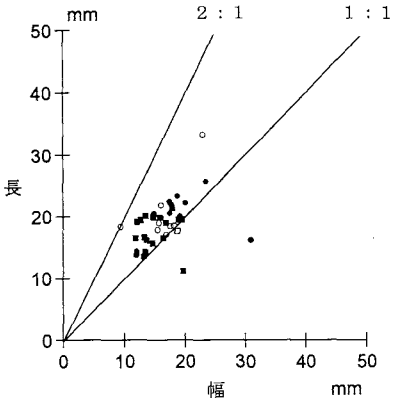
• Ⅰa形態　▪ Ⅰb形態　▫ Ⅱb形態

石鏃未成品長幅比（有尾式）



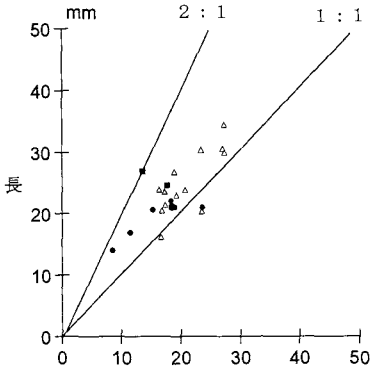
• Ⅰ形態　△ Ⅱ形態

石鏃形態別長幅比（諸磯ｂ式）



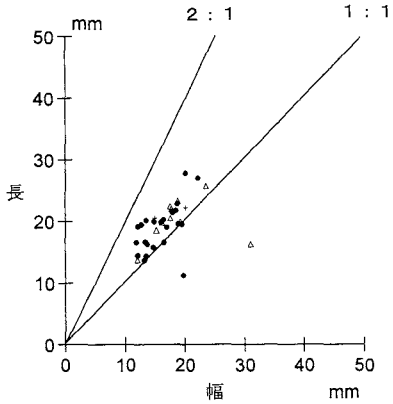
• Ⅰa形態　▲ Ⅰc形態　▫ Ⅱb形態
▪ Ⅰb形態　○ Ⅱa形態　△ Ⅱd形態

石鏃未成品長幅比（諸磯ｂ式）



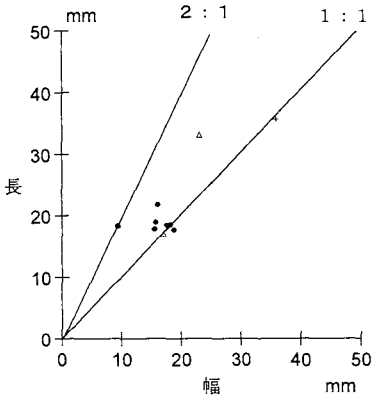
• Ⅰ形態　▪ 形態不明
△ Ⅱ形態

Ⅰ形態石材別長幅比（諸磯ｂ式）



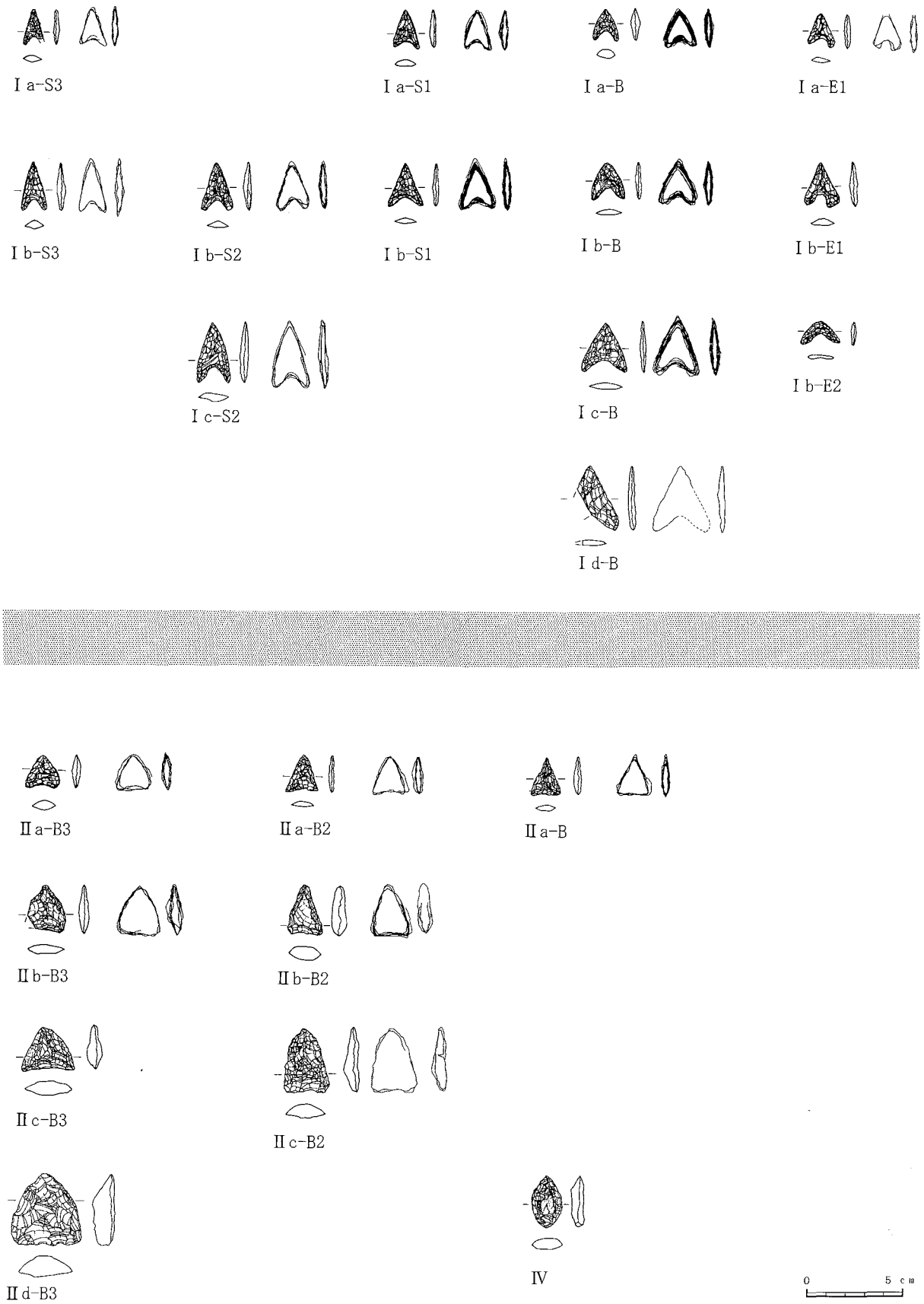
• 黒曜石　△ チャート　＋ その他

Ⅱ形態石材別長幅比（諸磯ｂ式）



• 黒曜石　△ チャート　＋ その他

第114図　石鏃の形態別・石材別長副比



第115図　石鏃の形態分類図

意味では贅沢な）ものを多数保有するという石鏃の在り方を可能としたのであろう。有尾式期以前の伝統的な石鏃の在り方とは見た目以上に大きな差異が存在していると考えられる。この点については、押圧剝離系列の製作システム全体を含めて後章で述べることにしたい。

石錐（遺物編第190図～第192図）　全部で98点検出されている。形態別・石材別の内訳は第136表のとおりである。以下のように分類される（第117図）。

Ⅰ形態（ＮＨ形態）：摘みの無いもの（No Handle）

押圧剝離［Ｐ］により丁寧に調整されたＩａ形態と、折断［Ｂ］や縁辺微細剝離［M］により粗雑に調整されたＩｂ形態に分けられる。また、大きさや形状により、Ｉａ一形態は１～４に細分される。

Ⅱ形態（Ｈ形態）：摘みの有るもの（Handle）

押圧剝離［Ｐ］により丁寧に調整され、錐部が長く明確なⅡａ形態、縁辺微細剝離［M］や押圧剝離［Ｐ］によるやや粗雑な調整で、錐部が短く明確でないＩｂ形態、摘み部にさらに石匙のような摘みの付いているⅡｃ形態に分けられる。また、大きさや形状により、それぞれいくつかの亜形態に細分される。

以下、時期別に特徴を述べる。

有尾式期の石錐（遺物編第190図１～４）　この時期の石錐は非常に少ない（帰属率60％以上の住居址で９点）。この時期の石錐はほとんどが剝片を素材とし、その一部に錐部が作出された簡単なものである。調整には折断［Ｂ］や縁辺微細剝離［M］が多用され、丁寧な押圧剝離は認められない。また、大部分はⅡｂ形態であり、直接手に持って使用されたと推定される。石材は頁岩が55.6％と過半数を占める。それ以外にチャート・黒曜石などが少数用いられているが、数量が少ないため正確な傾向はつかめない。

Ｉｂ形態の例（１）では、折断剝片を利用し、簡単な調整加工を施したものである。同形態のものは、東畑遺跡Ｊ－４住出土資料（関山Ⅱ式新段階）にある。また、２～４はⅡｂ形態の例であるが、いずれも明確な押圧剝離は認められない。類似資料は大下原遺跡Ｊ－12住出土資料（有尾式期古～中段階）、東畑遺跡Ｊ－４住出土資料（関山Ⅱ式新段階）などに認められる。

以上のように、有尾式期の石錐は、定型化された器種ではなく、便宜的なものである。また、調整技術・石材からみてもＡ類とは言い難い。つまり、有尾式期ではまだ石錐は押圧剝離系列（Ａ類）にしっかりと組み込まれておらず、直接打撃系列（Ｂ類）のマイナーな器種と理解した方が良い存在であったと考えられる。

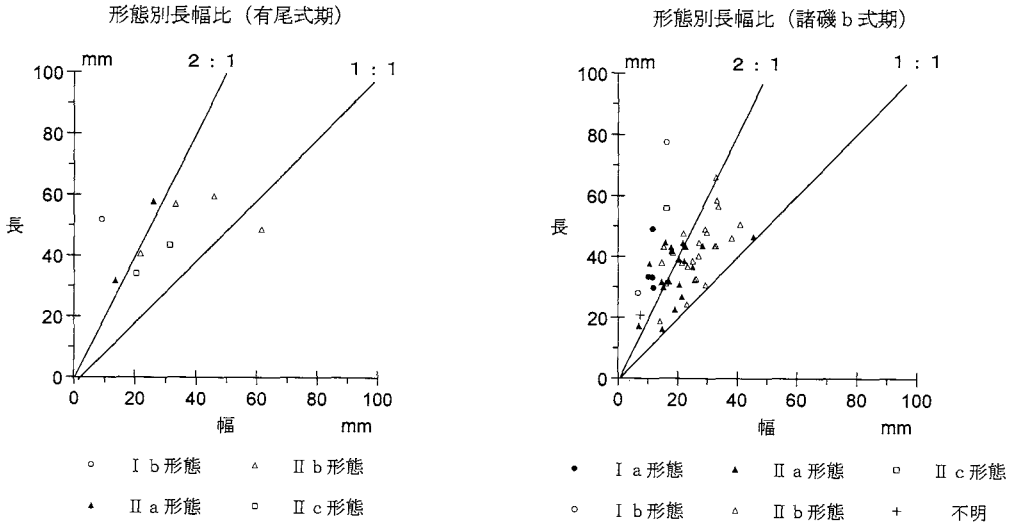
ちなみに、こうした簡便な石錐は関山Ｉ式以来存在しているが、ごくわずかしか検出されない。この時期までは、石錐のように「穿孔する」道具は使用頻度の低い器種であったとみられる。

諸磯ｂ式期の石錐（遺物編第190図５～13・第191図・第192図）　有尾式期には少なかった石錐が、この時期には多数存在するようになる（帰属率60％以上の住居址で54点）。押圧剝離による調整で、定型化した形状のものが製作されている。

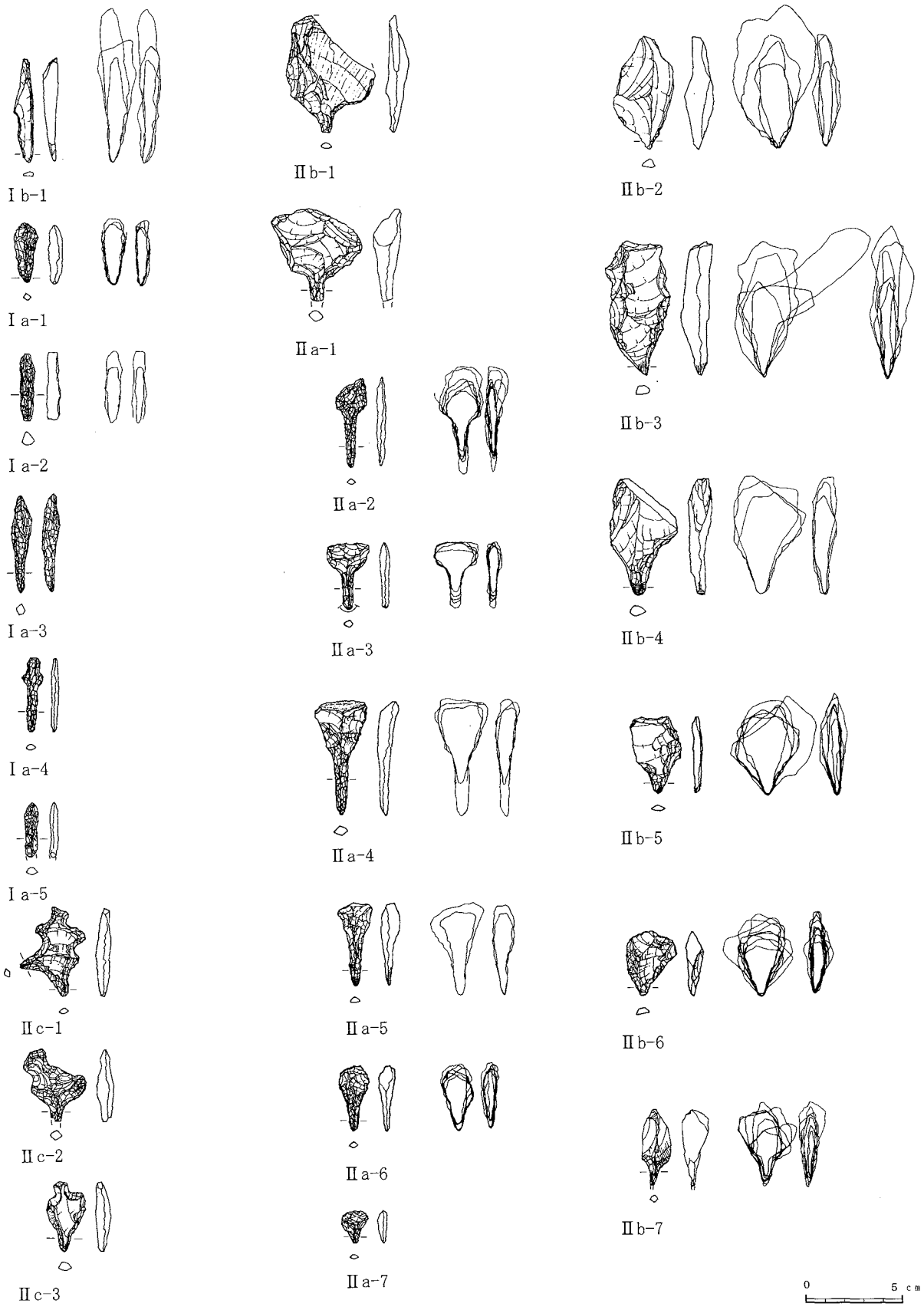
Ｉ形態（同第190図５～10）は16.7％と少ない。この形態では黒曜石が44.4％と多用されている点が特徴である。図示してあるものはすべて押圧剝離［Ｐ］により調整されたＩａ形態である。この中で10（Ｉａ－４形態）は基部に鍔状の突起のある特異な形状で、石材も一般的でない硬質頁岩製であるので、系譜

形態	個数	全体							有尾式期								諸磯b式期							
		石材							個数	石材							個数	石材						
		I					II	IIIa		I					II	IIIa		I					II	IIIa
		Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh	An		Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh	An		Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh	An
Ia-1	6	5	1						0								4	3	1					
Ia-2	2	2							0								0							
Ia-3	1		1						0								1		1					
Ia-4	1			1					0								1			1				
Ia-5	1	1							0								1	1						
Ib	3						3		1						1		2						2	
IIa-1	1						1		0								1						1	
IIa-2	6	3	2				1		0								5	3	1				1	
IIa-3	7	2	4	1					0								4	1	3					
IIa-4	3	1		1	1				1			1					2	1			1			
IIa-5	2						2		0								2						2	
IIa-6	6	2	4						1	1							2		2					
IIa-7	2	1	1						0								2	1	1					
IIb-1	1						1		1						1		0							
IIb-2	4		1				3		2						2		2		1				1	
IIb-3	5		2				3		0								3		2				1	
IIb-4	3						2	1	0								3						2	1
IIb-5	6						6		0								6						6	
IIb-6	10	4	3				3		1						1		7	2	3				2	
IIb-7	7	4	3						0								3	1	2					
IIc-1	1		1						1		1						0							
IIc-2	1		1						0								1		1					
IIc-3	1		1						1		1						0							
摘無不明	2	2							0								0							
摘有不明	13	7	2				4		0								0							
不明	3	1	1			1			0								2	1	1					
合計	98	35	28	3	1	1	29	1	9	1	2	1	0	0	5	0	54	14	19	1	1	0	18	1

第136表　石錐の時期別形態と諸属性



第116図　石錐の形態別長幅比



第117図　石錐の形態分類図

が注目される。なお、7（Ⅰａ－5形態）は基部が扁平な鉾状を呈する。基部形状が特異であり、異形石器の可能性もある。

Ⅱ形態は多数を占めており、この時期を代表する形態である。Ⅱａ形態（同第191図1～15）は定型化しており、サイズや形状により7形態に細分できる。このうち、特に摘み部と錐部が明確に分かれているⅡａ－2形態（2・5～7・13）と、こうした特徴に加え摘み部が丁寧に整形されているⅡａ－4形態（1・4）が代表的形態である。

Ⅱａ形態ではチャート（38.9%）と黒曜石（33.3%）が多く用いられ、頁岩（22.2%）は比較的少ない。それ以外に黒色安山岩・硬質頁岩が少数用いられている。1（Ⅱａ－3形態）や9（Ⅱａ－4形態）は、基部上端が直線的に整形されている、硬質頁岩製の精製石器である。形態・石材とも特異であり、他地域から搬入されたものである可能性もある。硬質頁岩製の石器には特異な形態の資料が多い。

Ⅱｂ形態（同第192図1～9）は、有尾式期からの伝統的な系譜を引く形態である。この形態は剝片の一部に押圧剝離［P］で調整を施したもので、錐部が短く摘み部との境が不明確である。サイズの違いにより、Ⅱｂ－3～7形態に細分される。中形のⅡｂ－5形態（2～4・8）と、小形のⅡｂ－6形態（5・7）が代表的な形態である。

Ⅱｂ形態では素材に頁岩が75.0%と多用されている。次いでチャートが33.3%を占めている。それ以外に黒曜石や安山岩も用いられているが少数である。

また、頁岩などやや軟質の石材のものは錐部に使用による擦痕が観察されるものが多い。

Ⅱｃ形態（同第190図11～13）は基部に摘みが付けられている特異な形状のものである。押圧剝離［P］による丁寧な調整で作出されている。この形態ではチャートが多用されており、図示した例はすべてチャート製である。このうち、13に類似した例は大下原遺跡Ｊ－5住（諸磯ａ～ｂ古）から検出されており、この時期に特徴的な形態なのかもしれない。また、11は摘み部の他に5カ所に錐部が作出されており、「多頭錐」（矢島・前山　1983）と呼称されているものに相当しよう。この時期には様々なミニチュア製品が製作されていることから、あるいは動物等をかたどったミニチュアの異形石器の可能性もある。

以上見てきたように、諸磯ｂ式期では調整に押圧剝離［P］を用い、定型化した石錐を作出することが一般的になるようである。石錐は関山式期から有尾式期では少なく、諸磯ｂ式期との間に画期が存在する。(註) 押圧剝離系列（Ａ類）に一翼に石錐が加わり、石鏃のみを定型化した器種として製作していた、前段階とは構造的にも変容していると考えられる。チャートの増加も石錐の増加と関連する現象と推定される。

ここで注意が必要なのは、石錐に用いられる黒曜石の比率はさほど高くない点である。やはり、［黒曜石≒石鏃］であり、［黒曜石≠石錐］といった認識であったのであろう。つまり、石錐は石鏃と同じ押圧剝離［P］といった製作技術を用いながらも、石鏃と石錐は並列の関係で製作されていた器種と推定されるのである。

（註）周辺の前期の遺跡では、中原遺跡（関山Ⅰ式を主体）10点、東畑遺跡（関山Ⅱ式を主体）2点、三本木Ⅱ遺跡（関山Ⅱ式を主体）1点、吉田原遺跡（黒浜式主体）0点、清水Ⅰ遺跡（有尾式）1点、大下原遺跡（有尾式・諸磯ｂ式が中心）20点であり、諸磯ｂ式を含む大下原遺跡以外は、いずれも少数である。

［スクレイパー類の分類について］

スクレイパー類は押圧剥離系列（A類）に分類されるものと、直接打撃系列（B類）に分類されるものがある。

押圧剥離系列(A類)は、調整段階に押圧剥離を多用することにより製作される定型化された器種―石鏃・石錐・石匙A類―を調達することを一義的目的とした系列である。この系列に含まれ、石材・一次剥離工程（あるいは剥離技術）を共有しつつ、製作されたスクレイパー類をスクレイパーA類（広義）と定義する。この中には石匙A類、スクレイパーA類（ScA)、リタッチド・フレイク（RFA）が含まれる。

この系列の中には調整に押圧剥離が施されていないものも存在しているが、石材系列の剥離最適系列（Ⅰ類）に属する石材が多用されている。したがって、石材系列Ⅰ類に属するスクレイパー類をすべてこの系列に含めて扱うことにしている。

直接打撃系列(B類)は、調整段階に直接打撃を多用することにより製作される定型化された器種―打製石斧―を調達することを一義的目的とした系列である。この系列に含まれ、石材・一次剥離工程を共有しつつ、製作されたスクレイパー類をスクレイパーB類と定義する。この中には石匙B類、スクレイパーB類（ScB)、リタッチド・フレイク（RFB）が含まれる。直接打撃系列では剥離適合系列（II類）の石材が多用されているので、原則としてこの石材系列に含まれるスクレイパー類をスクレイパーB類とする。

調整に押圧剥離が施されているものがスクレイパー類には存在している。こうしたものは直接打撃系列と押圧剥離系列の折衷である。前期前葉ではこうした系列の混用が特に多い。しかし、打製石斧と石材と一次剥離工程を共有している点を重視し、B類に分類している。系列単位での石器製作工程配置を理解し易くするためである。

なお、石匙はスクレイパーのうち、摘み部が付けられ、ある程度定型化された石器の総称である。「摘み付きスクレイパー（side-scraper with handle : ScH)」とでも呼称した方が、本質が理解できる。慣習的に「石匙」の名称を使用しているが、そろそろ名称変更を行った方が良いかもしれない。今回は混乱を避けるため慣習的名称に系列名を付けて「石匙A類」「石匙B類」と呼称している。

こうした理由から、『大下原遺跡』(1993年）以降、スクレイパー類の基本的分類は技術レベル行っている。この分類の方が形状のみを重視し調整技術を無視した従来型の分類よりは論理的根拠が明快なはずである。

スクレイパー類は調整技術の相違から以下の4形態に大別される。そして、それぞれの形態に片面調整（uniface）と両面調整（biface）があるので実際は8形態となる。従来では最優先されている平面形状は上記の基本分類の下位分類として位置付けることにした。同じ技術で製作されているものどうしであれば、平面形状の分類も有効であるが、技術が異なるものどうしを平面形状で比較することは不合理である。

Ⅰａ形態（Ｐ形態）：押圧剥離による調整と推定されるもの

深い剥離が規則性をもって連続的に並ぶことを特徴とする。縁辺が細かい鋸歯状のものと、直線的または曲線的に整っているものが存在するが、いずれも刃部は鋭く精緻である。片面調整のⅠaU(PU)形態と両面調整のⅠaB（PB）形態に分かれる。ⅠaB形態は交互剥離により調整され、側面から観ると

エッジがジグザグとなっているものが多いことが特徴である。なお、両面に調整が認められても調整手法が片面調整のものはＩaU形態に分類される。

［pressure flaking］の略号として、実測図の調整部位に［Ｐ］と表記してある。文中では分類基準と同様に、確実な押圧剥離だけではなく押圧剥離と推定されるものも含んでおり、押圧剥離［Ｐ］と表記している。

Ｉｂ形態（ＰＤ形態）：直接打撃と押圧剥離を併用した調整と推定されるもの（一部粗雑な押圧剥離と推定されるものを含む）

比較的大きな剥離面が内側に存在し、縁辺部にはある程度規則的な小剥離面が連続的に観察される。階段状剥離もしばしば観察される。比較的精緻なものと粗雑なものがあり、粗雑なものではII形態と区別しにくいものがある。また、この形態には剥離の大きさが一定でなく、粗雑な押圧剥離によると推定されるもの（本来はＩａ形態）も含んでいる。Ｉａ形態に比べ粗雑で刃部が鈍いもが多い。ちょうど、Ｉａ形態とII形態の中間的な形態である。

片面調整のＩbU（PDU）形態と両面調整のＩbB（PDB）形態に分かれる。

［pressure flaking＋direct percussion］の略号として、実測図の調整部位に［Ｐ＋Ｄ］と表記してある。

II形態（Ｄ形態）：直接打撃による調整と推定されるもの

比較的大きな剥離面によって構成される。剥離の大きさは一定せず、比較的粗雑な剥離のものが多い。また、縁辺に階段状剥離が連続的に観察され、縁辺は比較的鈍い。

片面調整のIIＵ（DU）形態と両面調整のIIＢ（DB）形態がある。IIＵ形態は側面から観るとエッジは直線的か大きな鋸歯状である場合がある。これに対しIIＢ形態は側面から観ると階段状剥離によりエッジが段違い平行棒のようなものや、規則性なく大きくジグザグに波打つものなどがあり、規則性に乏しい。

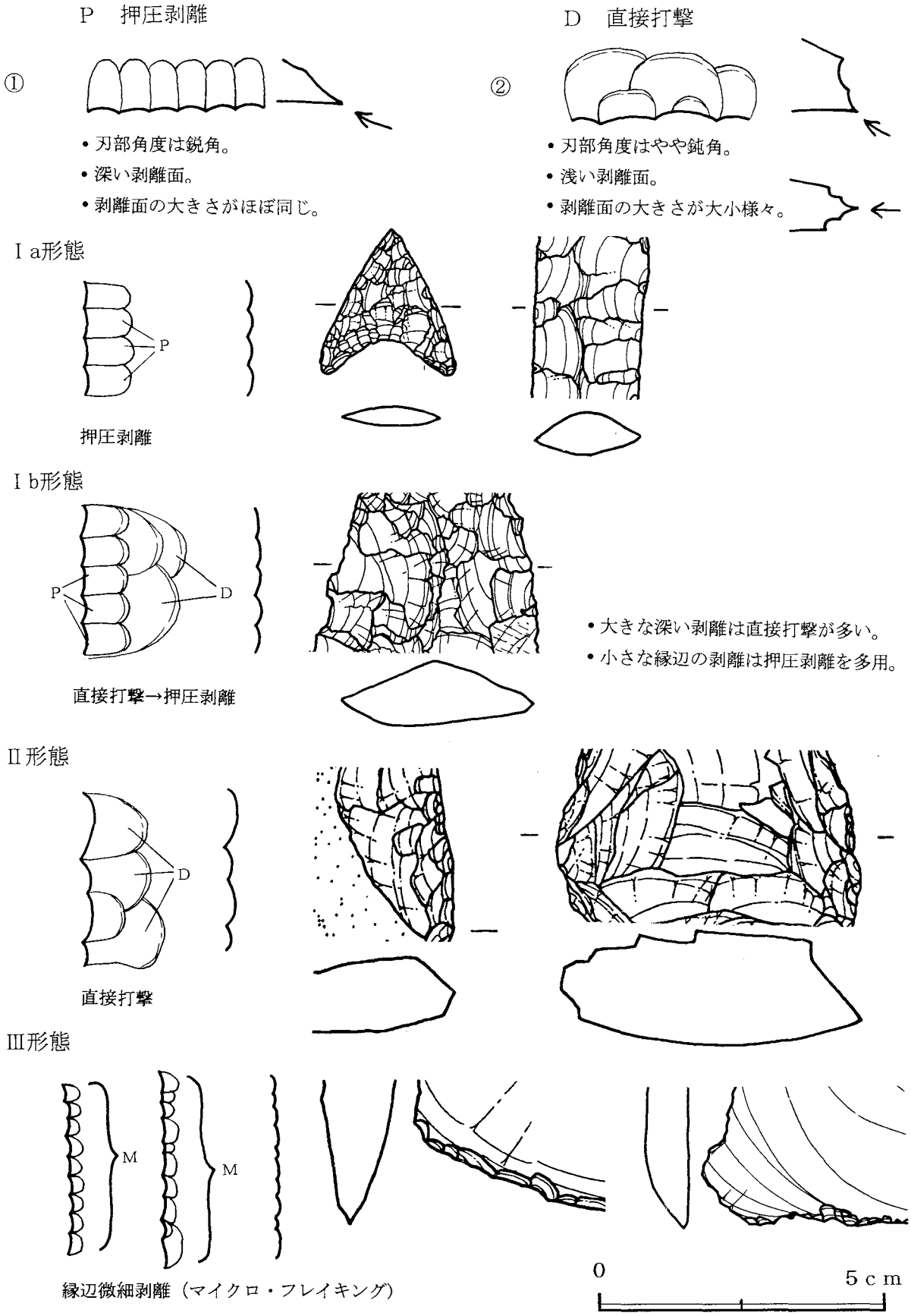
［direct percussion］の略号として、実測図の調整部位に［Ｄ］と表記してある。

III形態（Ｍ形態）：使用痕または調整による微細な剥離が縁辺の１／２以上連続的に認められるもの

縁辺に微細な剥離が連続的に観察されるもので、使用痕の場合と、調整の場合があると推定されるが、区別は困難である。なお、剥離が縁辺の１／２以下のものや連続していないものはリタッチド・フレイク（RF）に分類している。そのため、このIII形態とは近い関係にある器種である。

片面のみに剥離が観察されるIIIＵ（MU）形態と、両面に剥離が観察されるIIIＢ（MB）形態に分かれる。刃部を引いて剥離が生ずる際に、対象物に対して垂直に刃部が当たる場合IIIＢ形態となり、傾いていればIIIＵ形態となると推定される。

［micro flaking］の略号として、実測図の剥離部位に［Ｍ］と表記してある。



第118図　スクレイパー類の調整方法と形態分類

石匙Ａ類（遺物編第193図～第195図）　石匙Ａ類は全部で77点検出されている。石匙Ａは広義のスクレイパーＡ類に含まれるので、スクレイパー類同様に調整方法から上位分類される。ここで検出されたものは、Ｉａ形態51点（84.4%）、Ｉｂ形態９点（11.7%）、II形態２点（2.6%）、III形態１点（1.3%）である。ここでは、96.1%がＩａ・Ｉｂ形態であり、石匙Ａは基本的に押圧剥離により整形されている器種であることが分かる。そこで、下位分類にあたる平面形状を含めて細分すると、第119図・第120図のように分類される。各形態の特徴は以下のとおりである。

EVSH 形態：縦長で垂直に細い摘み部が付くもの（Elongated-Vertical Slim Handle）

調整方法により大きく二つに分けられる。一方は、両面に深い調整が施された大形のもの(EVSH－１形態)、同じく小形のもの（EVSH－２形態)、同じく超小形のもの（EVSH－３形態）であり、大形では調整が精緻であるがサイズが小さくなるほど粗雑になる傾向がある。硬質頁岩製で精緻なEVSH－１形態は東北南部（おそらく山形県）からの搬入品であり、本地域で製作されたものではない。良質な石材と非常に高度な調整技術により製作されたものであり、この形態を模倣して本地域で製作された形態がEVSH－２・３形態である。この関係は原形態（オリジナル）に対する模倣形態（イミテーション）と見なすことができる。

が、この地域で模倣される際に、技術的問題から小形化させざるを得なかったためと推定される。

もう一つは、幅広剥片の両側縁に浅い調整を施した比較的粗雑なもので、肩部が張り出すもの(EVSH－４形態)、身部先端が幅広となるもの（EVSH－５形態）がある。

EVWH 形態：縦長で垂直にやや太い摘み部が付くもの（Elongated-Vertical Wide Handle）

両側縁部に調整を施して整形したもので、素材はやや縦長の剥片とみられる。

WVWH 形態：横長で垂直に幅広の摘み部が付くもの（Wide-Vertical Wide Handle）

幅広剥片や横長剥片を素材とし、主剥離面の打面を摘み部上端に残すのが特徴である。また、基本的には押圧剥離［Ｐ］による片面調整であるが、摘み部付近は両面調整となる。平面形状により４亜形態に細分されるが、素材剥片に規制されるところが大きい。

WOWH 形態：横長で斜めに幅広の摘み部が付くもの（Wide-Oblique Wide Handle）

１形態は厚手の横長剥片を素材とし、直接打撃による両面調整で整形されており、スクレイパー類の分類ではII形態に分類されるものである。石匙Ａの中では例外的存在であり、いずれも黒色安山岩が用いられている。２形態は薄手の横長剥片を素材とし、押圧剥離［Ｐ］の片面調整で整形されている。

なお、この形態に属するものは遺跡全体でも３点のみであり、極めてマイナーな形態で、便宜的な形態である可能性が強い。

WVSH 形態：横長で垂直に細い摘み部が付くもの（Wide-Vertical Slim Handle）

幅広剥片を素材とする。原則として体部全体に調整が施されることで、整った形に整形されている。両面に深い押圧剥離［Ｐ］による精緻な調整が施されている１ａ・２・４形態と、縁辺に浅い押圧剥離［Ｐ］を施したやや粗雑な１ｂ・３・５・６形態がある。

このうち、１ａ形態は、深い両面調製により二等辺三角形に体部を整形した精緻なもので、北陸地方に特徴的な形態であり、系譜が注目される。これに対し、１ｂ形態は同じ平面形ながら縁辺調製で整形された粗雑なものである。おそらく１ａ形態を模倣したと推定される。２ａ・２ｂ形態や、５ａ・５ｂ形態は同じ形状でサイズが異なる形態である。

これら相似形をなす形態群には、範型を維持できる技術が踏襲されていない形態が存在しており、原形態（オリジナル）に対する模倣形態（イミテーション）と見なされる。

また、6・7形態は非常に小形で、実用品としては小さ過ぎる。おそらくミニチュア石器と推定される形態である。

WOSH形態：横長で斜めに細い摘み部が付くもの（Wide-Oblique Slim Handle）

幅広剝片を素材とする。摘み部に主剝離面の丈夫な打瘤がくるように、素材剝片を用いている。摘み部が斜めになるのは、素材剝片として左右非対称な幅広剝片が多用されることに帰因する。関東地方では前期初頭以来継続する伝統的な形態である。体部全体に調製を施して整形しており、摘み部周辺は押圧剝離［P］による両面調製で整形され、刃部は片面調製が多い。

6～8形態は特殊な形態群である。6形態は非常に小形であり、ミニチュア石器と判断される。7形態は黒曜石製の大形剝片の都合で範型が維持できなかったものと推定される。8形態は硬質頁岩製の縦長剝片を素材としていることや、刃部が内湾した形状を呈していることなど、基本的にはWOSH形態の製作手法から大きく逸脱している。他に該当箇所がないので、敢えてこの形態に含めたが、極めて特異な形態である。

有尾式期の石匙A類（遺物編第193図）　本遺跡ではこの時期には少ない（帰属率60％以上の住居址では6点）。したがって、帰属率の高い資料のみでは傾向が説明できないので、それ以外の例も含めこの時期の特徴について述べることにする。

ここに図示した例はほとんど押圧剝離［P］によって整形されている。また、石匙Aでは摘み部の調整には［P＋D］調整が用いられるものもある。1（WVWH－1形態）のように摘み部の幅の広い稚拙なものは、前期前半期に多い傾向がある。ただし、摘み部が幅広でもWVWH－3形態に分類される7は、帰属率・諸磯b式40.7％であり、同形態の遺物編第194図9（諸磯b式62.6％）共々諸磯b式期と推定される。

WOSH－2形態同第193図（3・4）は強い範型を有しており、有尾式期のものと判断される。

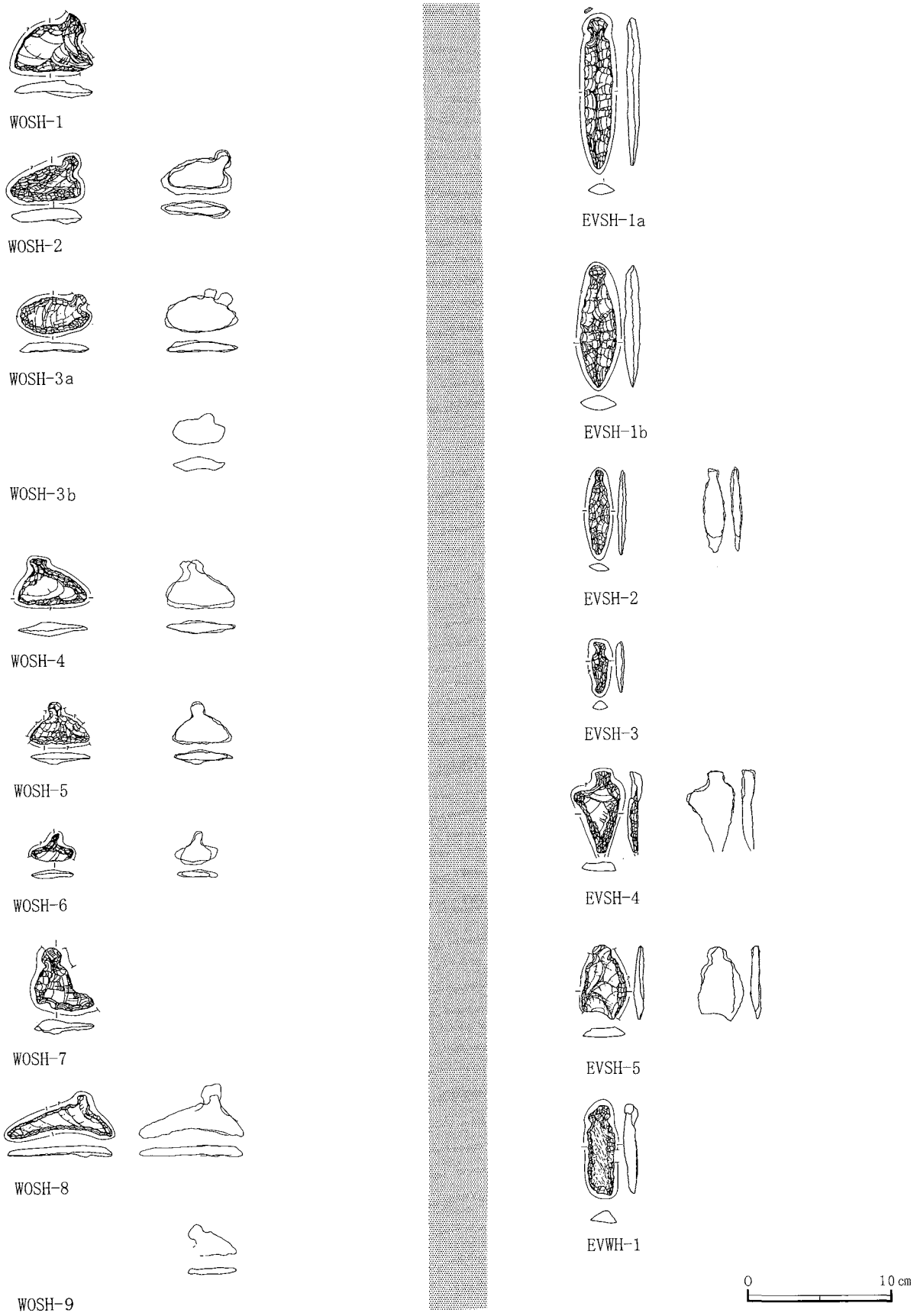
なお、同2（WOWH－1形態）は直接打撃［D］による両面調製であり、特異である。帰属率も黒浜式66.7％であり、系統的にみても異質である。

EVSH－4形態（12・13）は、縦形と横形の中間形態であり、この時期には明確な縦形は認められないようである。

唯一、明確な縦形の例は同9（EVSH－2形態）である。赤色の鉄石英製で精緻な押圧剝離［P］により整形され、最終段階では体部内面を研磨している。この研磨は刃部を作出する目的ではなく、体部を薄くレンズ状に整形することを目的としている。東北地方から搬入されたEVSH－1形態（同第195図10・11）を模倣したものと推定される。

この例は、D－1045号土壙墓（D区南東群）の副葬品であるが、土器は全く出土していない。土壙墓群の帰属率（出土遺物全体では有尾式42.8％・副葬品のみでは有尾式100％）からみると有尾式期のものと推定される。なお、同形態の資料は、大下原遺跡D－54号土坑（土壙墓：ここでも時期は明確でない）でも副葬品として検出されており、副葬用の石器と位置付けられていたと判断される。この形態は非常に重要な形態であるにも関わらず、不明な点が多い。東北地方の編年的位置付けや、広範な地域での事例を含めて、さらに時期・系譜などについて検討を続ける必要がある。

第119図　石匙A類の形態分類図（1）



第120図　石匙A類の形態分類図（2）

形態	分類	全体							有尾式期							諸磯b式期						
		個数	石材					欠損	個数	石材					欠損	個数	石材					欠損
			I							I							I					
			Ob	Ch	HSh	BAn	他			Ob	Ch	HSh	BAn	他			Ob	Ch	HSh	BAn	他	
Ia	EVSH-1a	1			1 (1)																	
	EVSH-1b	1			1 (1)											1			1 (1)			
	EVSH-2	2		1 (1)			1 (1)									1		1 (1)				
	EVSH-3	1	1 (1)													1	1					
	EVSH-4	2		1	1			1	1			1										
	EVSH-5	2		1		1		1	1				1			1		1				1
	EVWH-1	2	1		1			1								2	1		1			
	WVWH-1	1			1				1			1										
	WVWH-2a	1		1				1														
	WVWH-2b	1			1											1			1			
	WVWH-3	2			2																	
	WVWH-4	1		1																		
	WOWH-1	0																				
	WOWH-2	2		2												1		1				
	WVSH-1a	4	1 (1)	2 (2)	1 (1)			2								3	1 (1)	1 (1)	1 (1)			2
	WVSH-1b	2		1	1 (1)														1 (1)			
	WVSH-1c	3		1	1	1										2		1		1		1
	WVSH-2a	2		1 (1)	1				1		1				1	2		1 (1)	1			
	WVSH-2b	1		1 (1)												1		1 (1)				
	WVSH-3	2		2												1		1				
	WVSH-4	4	1	2 (1)		1										3		2 (1)		1		
	WVSH-5a	1		1					1		1											
	WVSH-5b	1		1																		
	WVSH-6	2	1 (1)	1				1								1		1				
	WVSH-7	1	1 (1)																			
	WVSH-8	1				1														1		
	WVSH-9	1			1														1			
	WOSH-1	1			1			1														
	WOSH-2	3		2	1				1			1				1		1				
	WOSH-3	2		1		1										2		1		1		
	WOSH-4	3		2	1											1			1			
	WOSH-5	3		1		2																
	WOSH-6	2	1	1 (1)				1								1		1 (1)				1
	WOSH-7	1	1													1	1					
	WOSH-8	2		1	1											2		1	1			1
	形態不明	4	2	1	1			3								4	2	1		1		3
Ib	WVWH-2a	1				1										1				1		
	WVSH-3	1				1										1				1		
	WVSH-4	1			1																	
	WVSH-6	1	1					1								1	1					1
	WVSH-8	1			1			1								1			1			
	WOSH-3	1	1													1	1					
II	WVWH-2a	1				1										1				1		
	WOWH-1	1				1																
	未成品	1			1											1			1			
	形態不明	2		1		1																
III	WVWH-3	1				1										1				1		
合計		77	12	30	21	13	1	14	6	0	2	3	1	0	1	41	8	16	11	9	0	10

（ ）内は両面調整の点数

第137表　石匙Aの時期別形態と諸属性

諸磯ｂ式期の石匙Ａ類（遺物編第194図・第195図）　この時期の石匙Ａは、WOSH 形態、WVSH 形態が中心であり、多くの亜形態が存在する。WOSH 形態は、伝統的な幅広非対称形の素材剥片作出法と結びついた形態であり、摘み部の位置が斜めとなることが特徴であり、完全な両面調製により整形されたものは少ない。これに対し、WVSH 形態は幅広対称形の剥片を素材としたもので、より後出の形態である。完全な両面調製により整形されたもの（１ａ形態：第195図１、２形態：第194図１・２、４形態：同３・４）が比較的多く存在する。これは諸磯ｂ式期の特徴の一つである。

完全な両面調製の場合、同じサイズであればより大きな素材剥片を必要とし、技術的にも高いレベルを必要とする。特に、二等辺三角形を呈した１ａ形態は、諸磯ｂ式期でもより新しい段階に多く認められる特徴的な形態である。また、北陸地方にもこの形態が存在しており、あるいはこの系譜に連なるものの可能性もある。

また、この時期に東北地方から搬入された EVSH－１形態（第195図10･11）は、良質のチョコレート色の硬質頁岩製で、精緻な両面調製を特徴とした優品である。また、スケールダウンした模倣品（２形態：同11、３形態：同15）も存在している。また、同じサイズでの模倣例は、槍状石器（第261図１～６）のように、直接打撃により強引に形状のみを似せて製作されたものが存在している。こうした石器の存在から、本遺跡ではこれを完全にコピーするための大形石器用の押圧剥離技術が存在していなかったと推定される。

なお、ミニチュアの石匙Ａもこの時期にはいくつか製作されている。特に WVSH－７形態は極小サイズで、石鏃よりも小さい。これらは実用品ではなく、各種の多数製作されている土器や石器のミニチュアの一つである。おそらく、儀礼・祭祀用の道具群の一つと見なされる。

この時期の石材の傾向についてみると、チャート39.5％、硬質頁岩20.9％、黒色安山岩20.9％、黒曜石18.6％であり、チャートの占有率が他の石材の約２倍である。これは比較的大きな原石が豊富に確保できる在地石材であることによると考えられる。

なお、有尾式期ではほとんど使用されていない黒曜石が、他の在地石材と同じ程度に用いられているように第137表のデータ上は見える。しかし、実際には黒曜石製のものはミニチュア石器をはじめ小形のものが多く、比較的大形の石匙は第195図３（WOSH－７形態）のみである。やはり、この時期黒曜石の入手量が飛躍的に増加したといっても、大きな素材剥片を必要とする石匙Ａに貴重な黒曜石を用いることはなかったようである。(註)

(註)諸磯ｂ３式期以降の時期になると、黒曜石製の WVSH－１形態が長野県を中心に存在するようになる。この形態のように両面調製で石匙Ａを製作する場合、掌サイズの素材剥片を必要とする。そのためには、石鏃用とは異なる大形原石が必要である。この時期に北陸系の形態を採用し、大形黒曜石を用いた石匙Ａの製作と搬出が、長野県の原産地周辺の集団により開始された可能性がある。

スクレイパーA類（ScA）（遺物編第196図～第202図）　石材系列Ｉ類を素材とするスクレイパーをここで一括して扱う。この中には一部石鏃未成品の可能性のあるものや、石匙Aの欠損品も含んでいる。全部で629点であり、形態別・石材別の内訳は第138表のとおりである。スクレイパー類の分類はすでに述べたとおりであり、調製技術から大きくＩａ形態（押圧剝離）・Ｉｂ形態（直接打撃＋押圧剝離）・II形態（直接打撃）・III形態（縁辺微細剝離）の４形態に大別される。そして、片面調製（U）・両面調製（B）に分けられる。さらに、形状により多くの亜形態に細分可能であるが、細分自体意味を持つか疑問であり、ここでは敢えてこれ以上の細分は行わなかった。

有尾式期のスクレイパーA類（ScA）　この時期のScAは帰属率60％以上の住居址では、33点と少ない。Ｉｂ形態がやや少ないものの、各形態とも一定数検出されている。素材剝片レベルでみると、一部のもの（遺物編第196図１・２・７）では、打面の角に打点がくるような特徴的な技法により作出された剝片が用いられている。

Ｉａ形態（遺物編第196図１～３・５）　この時期のScAの24.2％を占める。片面調製のＩaU形態（１・３・５）と両面調製のＩaB形態（２）に分類され、両者は同じ割合である。縦長の形状のものが多い傾向がある。石材は黒曜石が最も多いが、ある程度形状の整ったものは、図示したように黒曜石以外の石材である。２は石鏃の可能性もあるが、意図的に左右非対称に整形しているので、ScAに分類した。

Ｉｂ形態（遺物編第196図２・６～８）　この時期のScAの15.2％を占める。ＩbU形態（２・５・７）と、ＩbB形態（８）に分類され、前者が多い。石材の選択傾向は特に認められない。

II形態（遺物編第196図９～13）　この時期のScAの24.2％を占める。IIU形態（13）とIIB形態（９～12）に分類され、後者が多い。これはＩｂ形態とは対照的な傾向である。この形態は横長の形状のものが大部分である。また、石材の選択傾向は特に認められない。

III形態（遺物編第199図）　この時期のScAの36.4％を占める。IIIU形態（１・２・４～６・９）とIIIB形態（３・７・８・10）に分類され、両者は同じ割合である。第121図のグラフに示されるように、縦長の形状のものが多い傾向があり、しかも２例を除き幅1.5～３cmの範囲内に集中している。III形態では素材剝片の形状を大きく変形することはないので、素材調達段階である種の選択性がはたらいていたとみられる。石材は黒曜石とチャートが多用される傾向が認められる。

諸磯ｂ式期のスクレイパーA類（ScA）　この時期のScAは帰属率60％以上の住居址では、402点検出されており、有尾式期の12.2倍に激増している。形態別にみると、III形態が最も多く、次いでＩａ形態であるが、各形態とも安定した状態で検出されている。全体では黒曜石が50.2％とほぼ半数を占め、次いでチャートが33.6％を占めている。黒色安山岩は9.2％に過ぎないが、比較的大形のものが多いので、重量比ではもう少し比率が高い。第121図のグラフからみて、素材として用いられているのは、どの形態でも長幅比１：１を中心とする幅広剝片と推定される。

Ｉａ形態（遺物編第197図・第198図２・３）　この時期のScAの25.9％を占める。ＩaU形態（第197図１～６・第198図２・３）とＩaB形態（８～11）に分類され、後者の方がやや多い。なお、第198図２・３は拇指状を呈する掻器である。９・10（ＩaB形態）は形状からみて石鏃未成品の可能性がある。黒曜石が60.6％を占め、ScAの平均値を10％ほど上回る。また、第121図のグラフのように黒曜石のものは１～３cmのサイズに集中しており、石鏃を製作する工程の中で作出されたものが素材であることが分かる。

Ｉｂ形態（遺物編第198図４～11）　この時期のScAの16.2％を占める。ＩbU形態（４・６・８）と、

Ⅰ bB 形態（5・7・9～11）に分類され、前者の方がやや多い。なお、9～11は石鏃未成品の可能性がある。黒曜石は38.4%に過ぎず、ScA の平均値を大きく下回る。8では顕著な磨耗痕が認められ、使用方法がある程度推定できる事例である。

Ⅱ形態（遺物編第200図・第201図）　この時期の ScA の16.4%を占める。ⅡU形態（第200図2・4・8・第201図1）とⅡB形態（第200図1・3・5～7・第201図2～8）に分類され、後者の方がやや多い。チャートは43.9%と最も多く、次いで黒色安山岩27.3%である。これに対し、黒曜石は18.2%に過ぎず、ScA の平均値とはかけ離れた数値を示している。

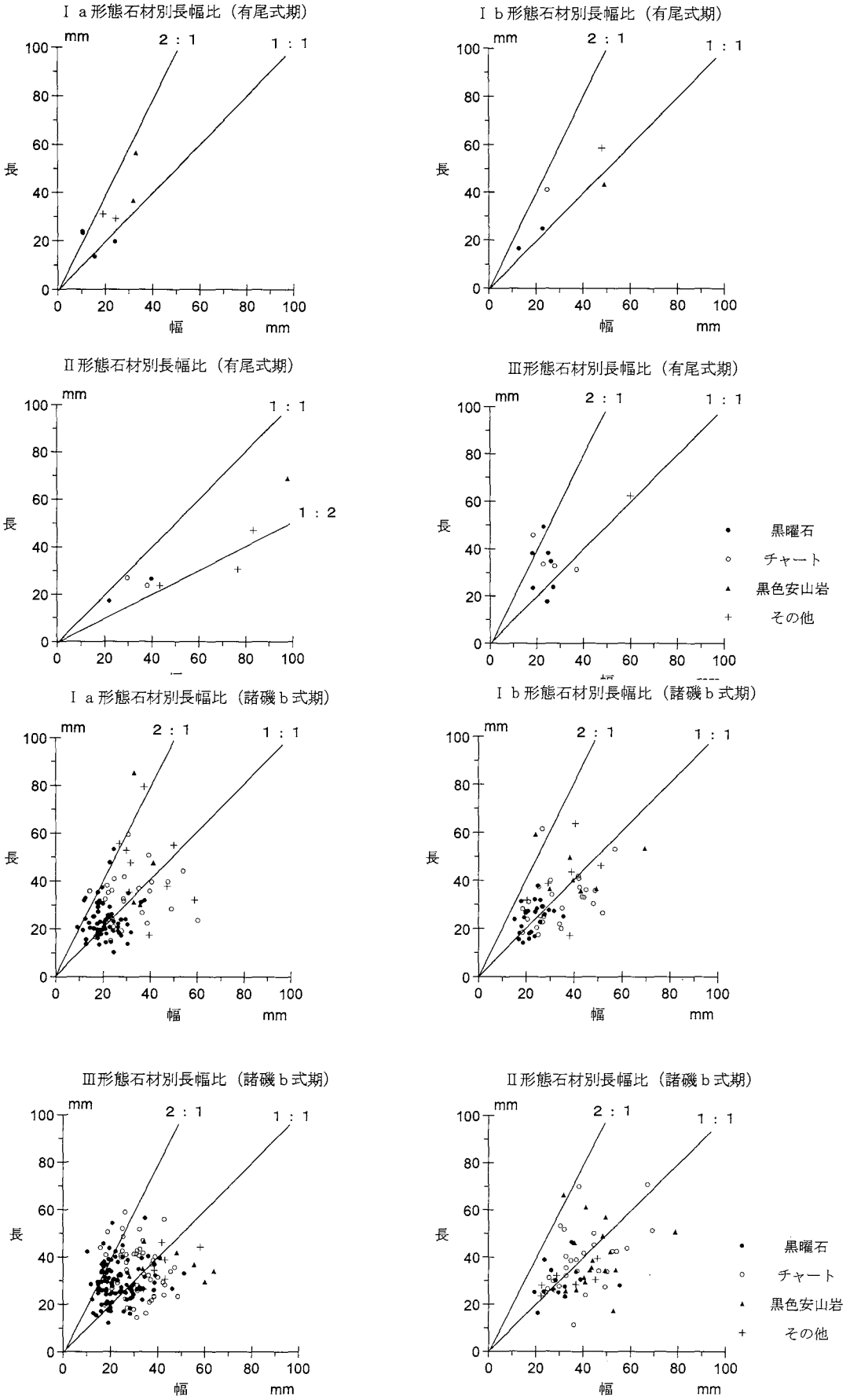
このような他の形態と大きく異なる石材選択性は、Ⅱ形態が直接打撃系列（B類）との折衷形態であることに帰因すると考えられる。つまり、Ⅱ形態は素材剥離段階では押圧剥離系列（A類）によっているが、調製段階では直接打撃系列（B類）の技術で製作されているキメラ状態である。例えば、第201図2は黒色安山岩製であるが、形状も打製石斧に近くB類との親和性が最も高い事例である。黒色安山岩製の打製石斧も少数（この時期では0.6%）存在しており、この石材の石器は系列のボーダーラインに位置している。ちなみに、Ⅱ形態で多用されているチャートで製作された打製石斧は皆無であり、チャートの押圧剥離系列への帰属度は黒色安山岩よりも高い。

以下、個別の事例で注意される点について述べる。第201図8は両極技法が用いられており、楔形石器の可能性もある。同6は石匙Aまたは石槍の未成品の可能性もある。

Ⅲ形態（遺物編第202図1～13）　この時期の ScA の41.0%を占める。ⅢU形態（1・5・6・8・10）とⅢB形態（2～4・7・9・11～13）に分類され、前者の方がやや多い。石材では黒曜石が60.6%を占め、ScA の平均値を10%ほど上回る。また、チャートは30.9%である。この選択率はⅠa形態とほぼ同じであり、Ⅰa形態とⅢ形態が同じ石材選択性によっていることが判明した。なお、第121図のグラフをみると、Ⅰa形態とⅢ形態は形状・大きさからみても近い傾向を示しており、最終段階の調製のみが異なっていたことがよく分かる。

形態	個数	全体						有尾式期							諸磯b式期						
		石材						個数	石材						個数	石材					
		Ⅰ							Ⅰ							Ⅰ					
		Ob	Ch	HSh	BAn	Ja	他		Ob	Ch	HSh	BAn	Ja	他		Ob	Ch	HSh	BAn	Ja	他
Ⅰa B	80	52	16	3	5	3	1	4	2			1		1	48	34	10	2		2	
Ⅰa U	84	51	19	5	5	3	1	4	2		1	1			54	29	16	2	4	2	1
Ⅰb B	36	14	14	2	3	2	1	1			1				26	9	10	1	3	2	1
Ⅰb U	56	25	24	1	6			4	2	1		1			38	16	17	1	4		
Ⅱ B	53	11	19	5	17		1	6	2	1	2	1			36	5	16	3	12		
Ⅱ U	51	13	20	2	11	1	4	2		1	1				29	7	13	1	6		2
Ⅲ B	95	76	16	2			1	6	4	1	1				62	50	11	1			
Ⅲ U	162	93	51	6	9	2	1	6	3	3					103	50	40	3	8	2	
Ⅰa 不明	3		1	2				0							2		1	1			
Ⅰb 不明	1			1				0							1			1			
Ⅱ 不明	1	1						0							1	1					
Ⅲ 不明	1	1						0							0						
不明	3	2	1					0							2	1	1				
合計	626	339	181	29	56	11	10	33	15	7	6	4	0	1	402	202	135	16	37	8	4

第138表　スクレイパーA類の時期別形態と諸属性



第121図　スクレイパーA類の長幅比

石匙状石器（遺物編第202図14）　１点のみ検出されている石器で、メノウ製の扁平な礫の周囲を直接打撃で整形し、石匙のような幅広の摘み部を付けた石器である。刃部は作出されておらず、実用的機能は有していない。垂飾の一種か石匙の模倣品と推定される。

なお、メノウは最も近くでは、本遺跡の西約20kmの位置にある御場山で採取可能であり、ここから入手されたと推定される剥片も遺跡から少数出土している。しかし、御場山産のものは白色で薄いが、本例は厚く橙色を帯びており、別の産地からもたらされたものと推定される。具体的には、浮島式土器の流入と関連して栃木・茨城方面（久慈川流域）から持ち込まれた可能性がある。

リタッチド・フレイクＡ類（RFA）　図示していないが、全部で229点検出されている。内訳は第139表のとおりである。RFA は ScA III形態と親和性が高い器種であるが、ScA より使用頻度の低い便宜的なもの、あるいは実際には使用されていない可能性の高いものの一群である。なお、剥片については、長幅比グラフを図示していないが、RFA の傾向と大きな違いはないので、ここで行われているこの系列の剥片の規格は、ここで示した傾向とほぼ同じと見なして差し支えない。

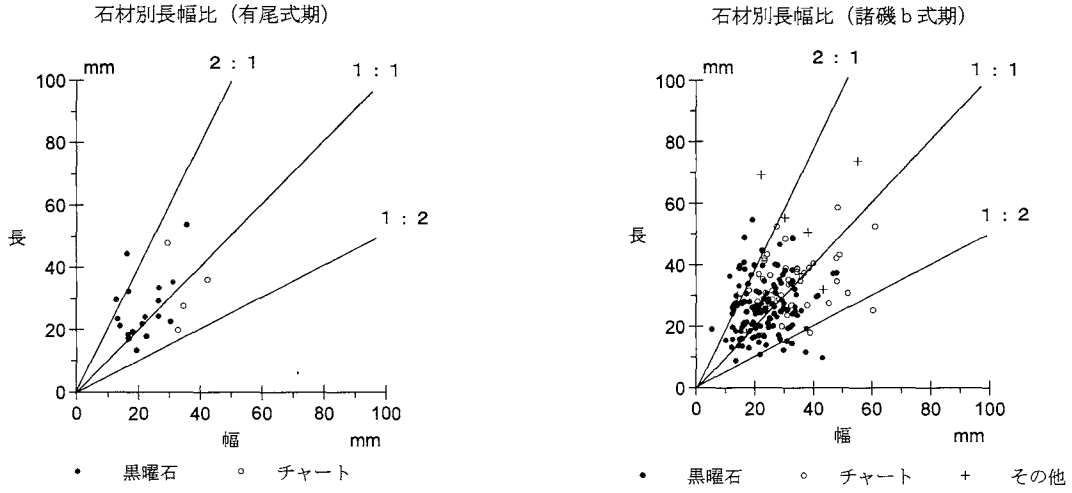
以下、帰属率60％以上の住居址出土資料により、時期別の傾向を述べる。

有尾式期では23点と少ない。黒曜石が82.6％と高率で、残りはチャートである。第122図のグラフのように長幅比１：１程度の幅広剥片を主体としている。大きさは２～４cmのものが大部分である。

諸磯ｂ式期では184点と有尾式期に比べ大幅に増加する。黒曜石は72.3％を占める。有尾式期と同様、長幅比１：１程度の幅広剥片を主体とし、大きさは２～４cmに集中する傾向が認められる。

全体						有尾式期						諸磯ｂ式期					
個数	石材					個数	石材					個数	石材				
	I						I						I				
	Ob	Ch	HSh	BAn	他		Ob	Ch	HSh	BAn	他		Ob	Ch	HSh	BAn	他
294	225	57	5	4	3	23	19	4	0	0	0	188	133	47	3	4	1

第139表　RFA の時期別石材



第122図　RFAの長幅比

楔形石器（遺物編第203図１～９）　両極技法（Bipolar Technique）を用いて剝離された石器で、断面は紡錘形を呈している。楔として用いられたものと、両極剝離技法（Bipolar Flaking Method）の際の残核が含まれていると推定される。Ａ類の残核と同じサイズのもの（Ｉ形態：１～６）と、超小形のもの（II形態：７～９）に分類できる。一般的傾向としては、Ｉ形態には残核の可能性が高いものが多く、II形態には楔の可能性が高いものが多い。ただし、ここで図示したものは、Ｉ形態でも楔としての使用の可能性が高いものである。このうち、５には使用による磨耗痕が観察され、実際に楔として用いられたのは間違いない。なお、II形態は実用品としての石器としては最小であり、実際の用途はかなり細かな細工的な作業に用いられたと推定される。

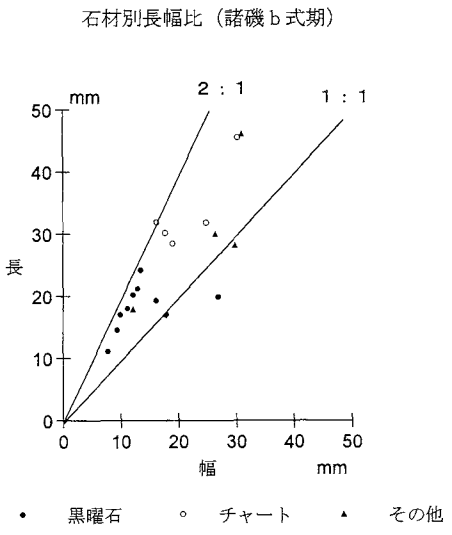
本遺跡で検出された楔形石器は36点であり、内訳は第140表のとおりである。時期別にみると、有尾式期２点、諸磯ｂ式期19点である。有尾式期が少ないのは、石核Ａ類の項で詳述するが、両極技法がほとんど適用されていなかったことに帰因する。

諸磯ｂ式期では黒曜石52.6％、チャート26.3％であり、他のＡ類の器種とほぼ同じ傾向を示している。また、長幅比は第123図のとおりであり、黒曜石は2.5cm以下で、２：１に近い縦長形状のものに集中しており、ある程度規格性が存在していることが分かる。これに対し、他の石材のものは３cm前後にまとまる傾向が認められる。ここに示された二つのグループは、前者がII形態、後者がＩ形態であり、グラフからも形態の違いがはっきりと読みとれる。

なお、図示したものでは、７（II形態）は有尾式期、６は中・後期、それ以外は諸磯ｂ式期である。

全体							有尾式期							諸磯ｂ式期						
個数	石材						個数	石材						個数	石材					
	I					II		I					II		I					II
	Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh		Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh		Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh
31	16	7	1	1	1	5	2	1	1	0	0	0	0	19	10	5	1	0	1	2

第140表　楔形石器の時期別石材



第123図　楔形石器の長幅比

石槍（遺物編第203図10～15）　遺跡全体で6点検出されており、すべて図示した。10は直接打撃［D］により整形されたものである。黒雲母流紋岩（下呂石）と推定される石材が用いられており、剝離面全体に磨耗痕が観察される。製作の最終段階で研磨されたものと推定されるが、これは第193図9の石匙Aと共通する技術である。下呂石（？）とすれば、搬入品である可能性が高い。諸磯b式帰属率75.4％であり、この時期のものと判断される。

11はやや粗雑な直接打撃＋押圧剝離［P＋D］により整形されたもので、先端が欠損している（図は上下逆で掲載してある）。諸磯b式帰属率82.6％であり、この時期のものと判断される。

12は精緻な押圧剝離［P］で両面調製されたもので、先端あるいは基部が欠損している。硬質頁岩製で、おそらく東北地方（山形県か）から搬入された精製品と推定される。第195図10・11の石匙Aと親和性が認められる。

13は断面形が三角形となる大形のもので、粗い直接打撃により調製を施している。先端は欠損している。剝離面には弱い磨耗痕が観察される。位置を調べるとJ―91住上層（諸磯b式帰属率66.2％）から出土しており、この時期のものと判断される。なお、大下原遺跡においても同形態の完形品が検出されており、諸磯b式期に特徴的な形態とみられる。大下原遺跡の例では先端が鈍く石槍としての実用的な用途に用いられたものではないことが確認されており、本遺跡の例でも石槍として用いられたかどうかかは疑わしい。

14は押圧剝離［P］で調製され、最終工程で研磨している。調製は石匙Aと親和性の高い半両面調製によって行われており、12とは技術基盤が異なっている。

15は小形のもので、14と同じ剝離技術を用いて製作されている。この時期にはミニチュア製品を製作することが頻繁に行われているので、この例も石槍のミニチュア石器の可能性もある。諸磯b式帰属率64.6％であり、この時期のものと判断される。

本遺跡出土の石槍は、帰属率から12を除きすべて諸磯b式期のものであると判断することができる。また、12についても、この時期のものである可能性が濃厚である。この時期の石槍には押圧剝離［P］により整形されている精製品と、直接打撃［D］や直接打撃＋押圧剝離［P＋D］により整形された粗雑なものが存在している。これらは、図示したように平面形状は木葉形ないし柳葉形を基本としているようである。精製品の中にも両面調製による精緻な東北地方からの搬入品（12）と、そうでないものが並存しており、後者は前者を模倣したものである可能性が高い。また、粗雑なものも模倣品であろう。しかし、粗雑なものの中に、岐阜県方面からの搬入品と推定されるもの（10）が存在しており、すべてが模倣形態とは言い切れない。今後、類例について注意が必要である。

また、ここで注目されるのは最終調整段階で研磨する例がしばしば認められることである。A類に研磨技術を適用させる器種は、縄文時代を通じて極めて少ない。今後、時期を決定する際にメルクマールとなろう。なお、この研磨技術は石匙にもしばしば適用されるようである。

ところで、13の形態の系譜については、不明であるが、この時期に限定されるローカルな形態であると言えよう。こうした粗雑な石器は、図示されない可能性もあるので、今後は留意しておく必要があろう。

石核A類（遺物編第204図～第209図）　石核と分類されるものは、全部で830点検出されている。また、

内訳は第141表のとおりである。以下、時期別に特徴について述べる。

有尾式期・諸磯ａ式期の石核Ａ類（第204図・第205図）　有尾式期の帰属率60％以上の住居址出土の石核Ａは69点である。すべて黒曜石製であり、長幅比は第124図のグラフのとおりである。長幅比１：１程度の形状で、２～４cm程度の小形のものが大部分であることが分かる。また、重量別ヒストグラムは第125図のとおりであり、３～６ｇ程度のものが多いことが分かる。

次に、剝片剝離技法について実際の資料を観察して検討してみよう。第204図１～10・第205図１は有尾式期帰属率60％の石核Ａである。これらの特徴は次のとおりである。①ほとんどのものが原礫面を残しており、比較的小振りの原石Ａが用いられている。②原礫面を打面としているもものが多い。③原礫面を打面とし、作業面を固定させて剝片剝離作業が進行させているもの（Ⅰ形態：２・３・６）と、打面と作業面を固定せず、頻繁に転移させて剝離を進行させているもの（Ⅱ形態：８・９・10）が認められる。④頭部調製や打面調製はほとんど行われていない。⑤幅広不定形剝片が剝離されているが、最終剝離段階では、かなり小形の剝片しか得られず、対応する器種はない。また、製作された石鏃では原礫面が残存するものは基本的には存在しておらず、初期段階の剝片は素材として用いていない。したがって、目的剝片は中間が作出されていると判断される。

また、第205図２～５は帰属率が低い一群であり、時期を特定することが難しい。ただし、５は諸磯ａ式期の帰属率43.4％であり、この時期のものと推定される。２はⅠ形態である。３～５はⅡ形態である。サイコロ状を呈し、頻繁に打面転移を行っている。作業面の上端は一見すると頭部調製を行っているように見えるが、実際には剝離の限界点で執拗に打撃を加えたためとみられる。

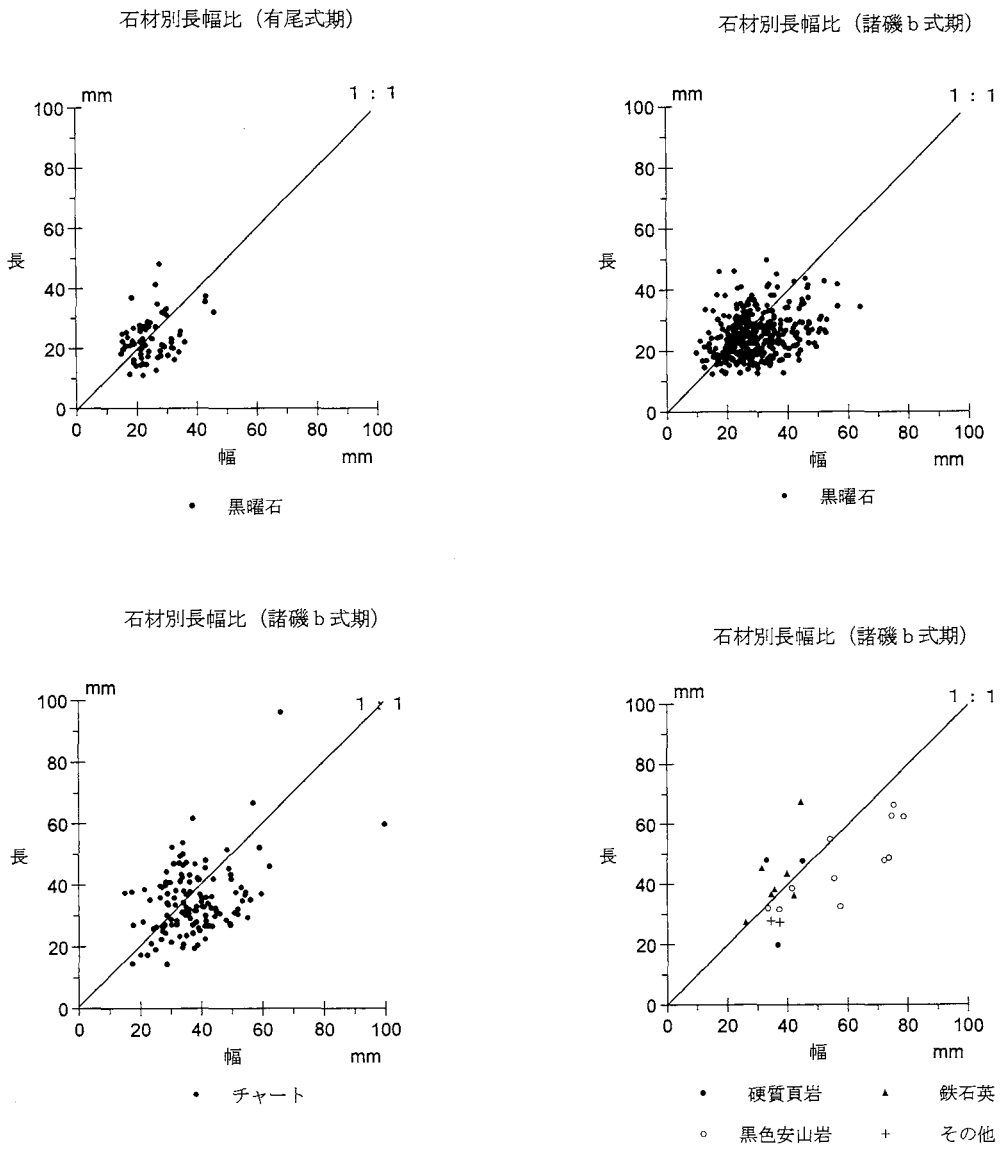
諸磯ｂ式期の石核Ａ類（第206図～第209図）　諸磯ｂ式期の帰属率60％以上の住居址出土のものは481点検出されている。内訳は第141表のとおりである。個数では有尾式期の7.0倍である。黒曜石が68.2％で最も多く、次いでチャートが26.8％を占めている。石材別の長幅比は第124図のグラフのとおりである。また、重量ヒストグラムは第125図のとおりである。黒曜石は長幅比１：１よりもやや横長の形状で、１～６cm程度の大きさにほぼ収まる。そして、３～６ｇのものが最も多い。チャートは長幅比１：１で２～６cm程度にほぼまとまる。そして、重量では12～21ｇに弱い集中が認められる。硬質頁岩や鉄石英も同様である。黒色安山岩は３～８cmと他の石材よりも大形である。全体として有尾式期よりも一回り以上大きいサイズであることが分かる。

次に剝片剝離技術の特徴について述べる。①原礫面を一部に残しており、比較的小形の原石Ａが用いられている。②原礫面を打面とするものと、剝離面を打面とするものが存在する。剝離面を打面とする場合、複剝離面（旧作業面）のものと、単剝離面（専用打面）とするものがある。③有尾式期と同様にⅠ形態とⅡ形態（第206図１・３・６、第207図１・３・５・７・８、第208図１・４）が認められる。Ⅰ形態では作業面を１面とするⅠａ形態（第206図２・４・５・８、第207図２）と作業面を２面とするⅠｂ形態（第206図７、第207図４、第208図２・３・５・６、第209図１・２・４・５～７）に細分される。④頭部調製のように見える小剝離は剝離の限界で生じたものである。⑤幅広不定形剝片が剝離されており、最終剝離段階でもⅠ形態では石鏃の素材となり得る剝片が剝離されているが、Ⅱ形態では石鏃の素材剝片よりも小さな剝片しか得られず、対応する器種はない。⑥チャートの方が大形の残核が多く、石鏃よりも大形の石錐や石匙Ａ・ScA などの素材剝片を作出する場合があったことが分かる。

原石Ａ類（遺物編第210図～第214図）　全部で142点検出されている。黒曜石が大部分を占めるが、チャー

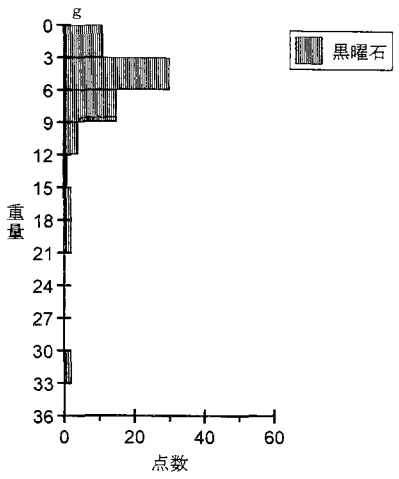
全　体							有尾式期							諸磯b式期						
個数	石　材						個数	石　材						個数	石　材					
	I							I							I					
	Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh		Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh		Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh
822	613	176	4	15	12	2	69	69	0	0	0	0	0	481	328	129	3	12	7	2

第141表　石核A類の時期別石材

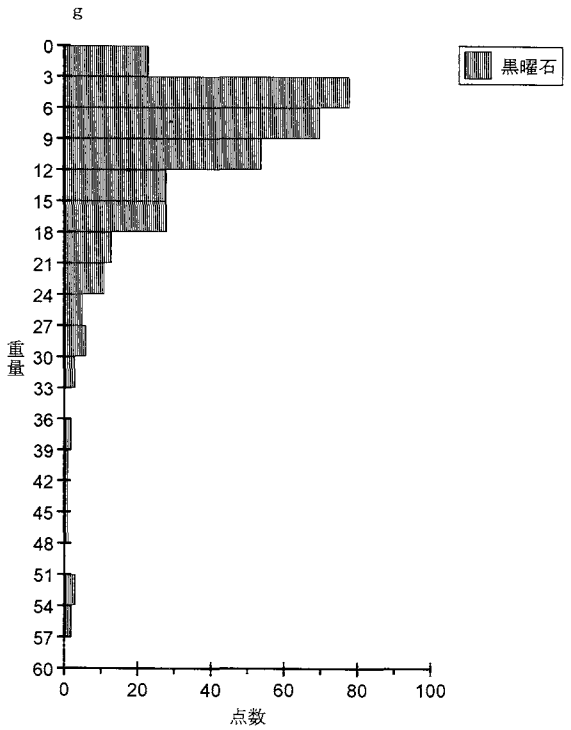


第124図　石核A類の長幅比

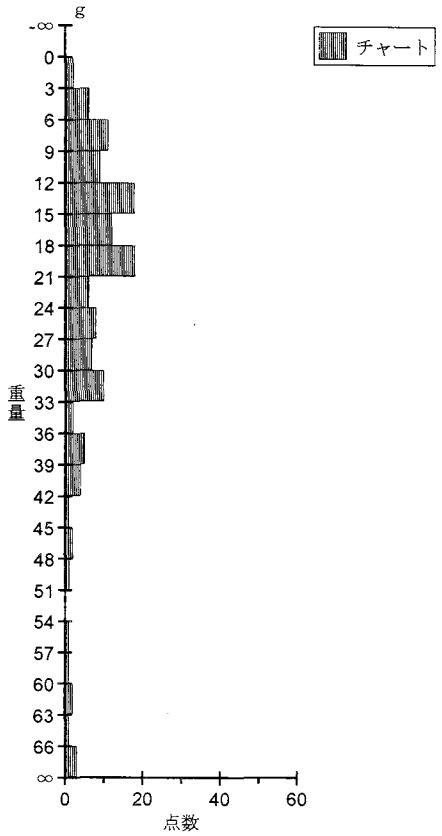
石核Ａ類の重量度数分布（有尾式期）



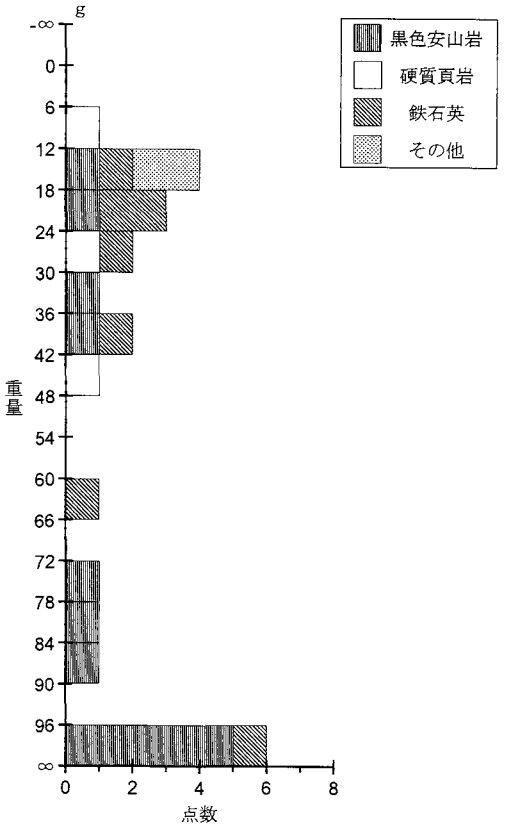
石核Ａ類の重量度数分布（諸磯ｂ式期）



石核Ａ類の重量度数分布（諸磯ｂ式期）



石核Ａ類の重量度数分布（諸磯ｂ式期）



第125図　石核Ａ類の重量度数分布

ト・硬質頁岩・黒色安山岩・鉄石英（赤玉）なども認められる。内訳は第142表のとおりである。

有尾式期の原石Ａ類（第210図１～４、第214図１・２）　帰属率60％以上の住居址では、13点を数える。黒曜石が76.9％を占める。黒曜石の形状は第126図のとおりであり、長幅比１：１程度で２～６㎝程度のものが多い。重量は第127図のように15～27ｇ程度のものが多い。また、黒曜石以外の原石Ａは５㎝以上であり、黒曜石より大形のものである。

諸磯ｂ式期の原石Ａ類（第210図５～８、第211図～第213図、第214図３・４）　帰属率60％以上の住居址では58点を数える。有尾式期の4.5倍である。黒曜石の形状は第126図のとおりであり、長幅比１：１程度で２～６㎝程度のものが多い。重量は第127図のように３～15ｇに弱い集中が認められる。その他の石材では長幅比１：１程度、３～６㎝程度である。なお、メノウの一部は形状から御場山産と推定される。

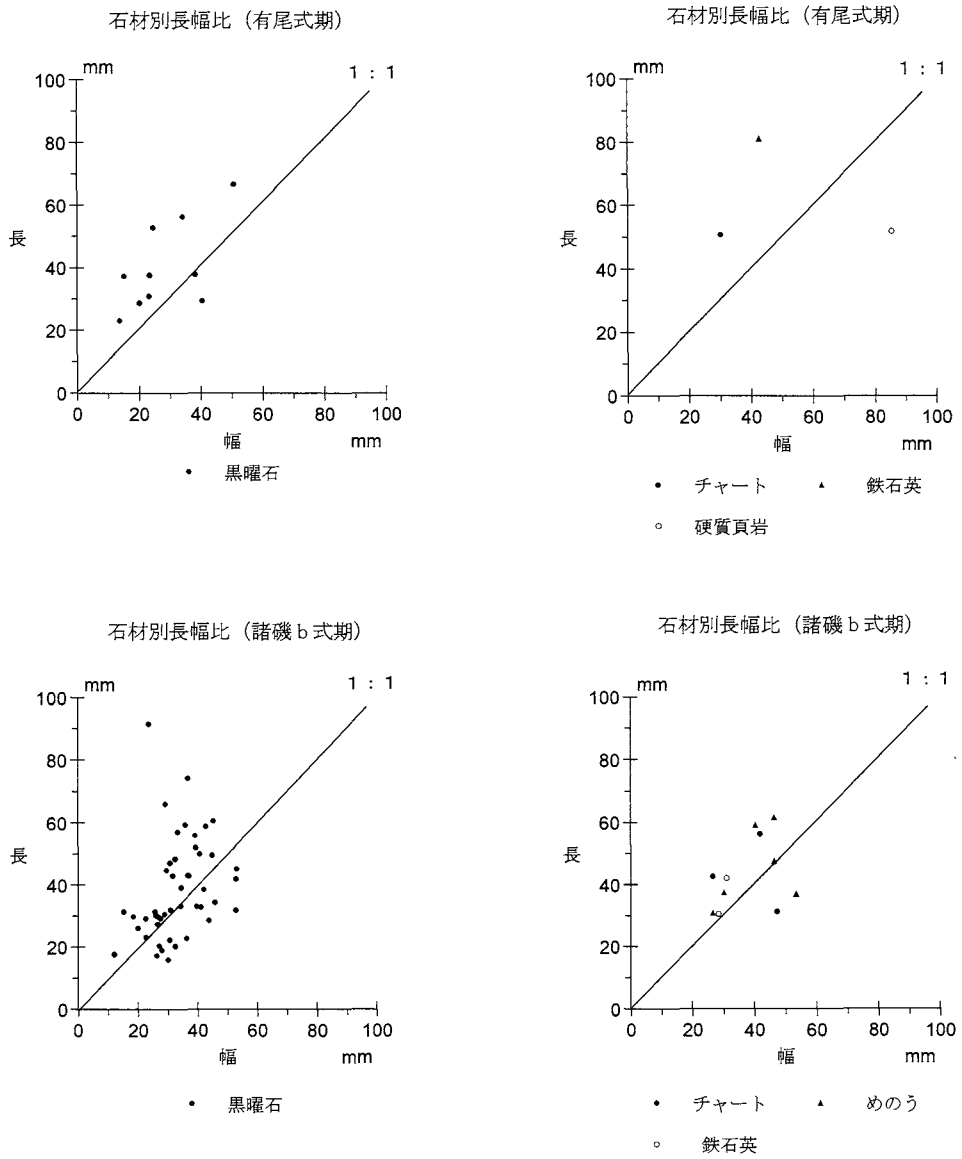
第211図１～７はＪ－106号住Ｐ－７号ピット内に埋納されていた一括性のある７点の黒曜石原石である。合計261.3ｇ、平均重量は37.3ｇである。１以外は円礫状のものである。黒曜石原石の保管の方法が分かる事例であり、非常に興味深い。なお、１は石刃状を呈する剝片の状態で搬入された原石Ａで、剝離面は古く両側縁には微細な剝離［M］が認められる。元々は原産地付近に散布している旧石器時代の石器と推定される。旧石器の搬入例としては第187図３があり、他に大下原遺跡・堤下北東遺跡からも検出されている。こうした状態は諸磯ｂ式期の原石搬入の在り方の大きな特徴である。

第212図１～４はＤ－333号土壙墓（Ｂ区南群：諸磯ｂ式中段階）に副葬品として埋納されていたもので、合計491.7ｇ、平均重量122.9ｇである。黒曜石の原石としては大形で、角礫状を呈する良質なものである。一緒に検出された剝片Ａの分析の結果、星ヶ塔産と推定された（別章参照）。

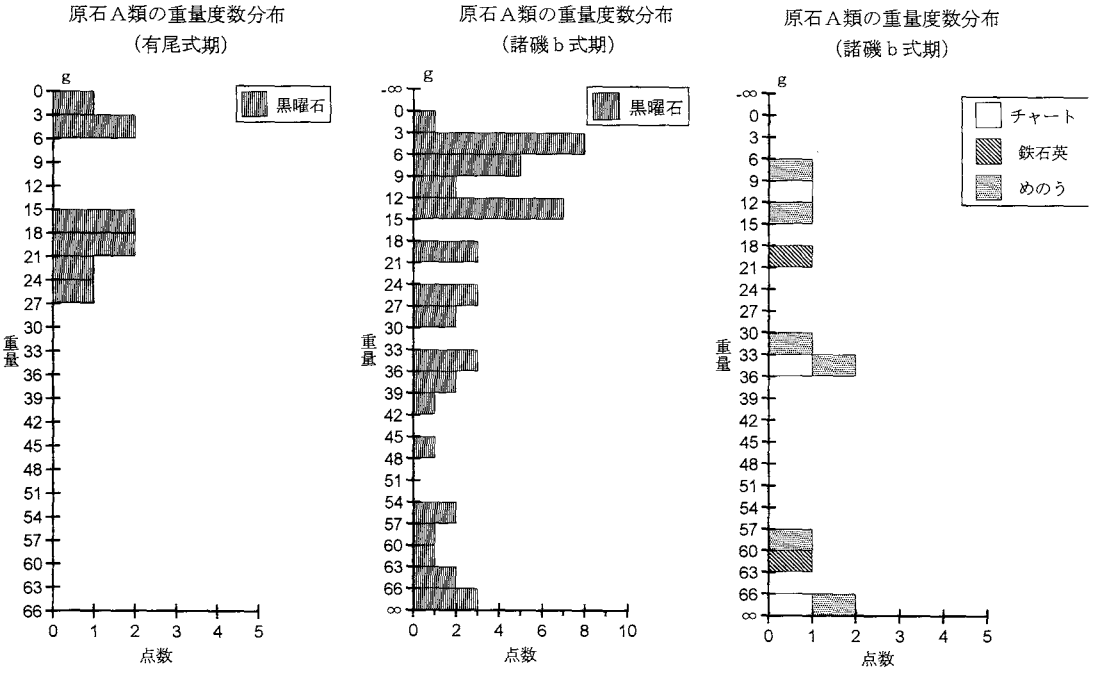
第213図１は超大形の黒曜石原石である。この原石は環状集落の南端に位置するＤ－1078号土坑の中央に置かれた状態で検出された（第128図）。この土坑の形状は本遺跡でも特異なものであり、大形黒曜石専用の特別な施設が存在していた可能性がある。帰属率は諸磯ｂ式71.1％であり、重量は3,567ｇを計る。現在までのところ群馬県内では最大のものである。一部を採取して分析した結果、和田峠産と推定された（別章参照）。一端には大形剝片を２枚剝離した痕跡が認められる。ここから剝離された剝片の大きさは石匙Ａの目的剝片のサイズであり、石鏃用の通常サイズの原石とは製作される器種が異なっていた可能性が高い。なお、糸井宮前遺跡からも1,880㎏の石核Ａが検出されている。この石核は剝離作業がある程度進行しているものであるが、ここでも比較的大きな剝離面が多く、直接的に石鏃用の目的剝片を作出しているのではないことが分かる。そして、この石核も本来は３㎏を越えるものであったとみられる。また、時期は諸磯ｂ（新）～ｃ式期と推定されており、本遺跡と時期的にも近い。諸磯ｂ式期に大形原石が群馬県方面へ搬入されていたことは確実であり、この時期に黒曜石交易が出現すると考えられている（金山　1993）。さらに、長野県から山梨県にかけての地域には、中期に集中して黒曜石原石を集積した遺跡が多数確認されている（長崎　1984、奈良・保坂　1993）。これは黒曜石原産地から南関東地方への搬出ルートに関係しているようであるが、こうした超大形の黒曜石はほとんど確認されていない。群馬県にそれ以前の段階に超大形の黒曜石が流入している現象は、黒曜石交易の問題を考える上で興味深いものがある。

全　体							有尾式期							諸磯ｂ式期						
個数	石　材						個数	石　材						個数	石　材					
	I					II		I					II		I					II
	Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh		Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh		Ob	Ch	HSh	BAn	他	Sh
139	113	8	2	1	6	9	13	10	1	1	0	1		58	47	3	0	0	2	6

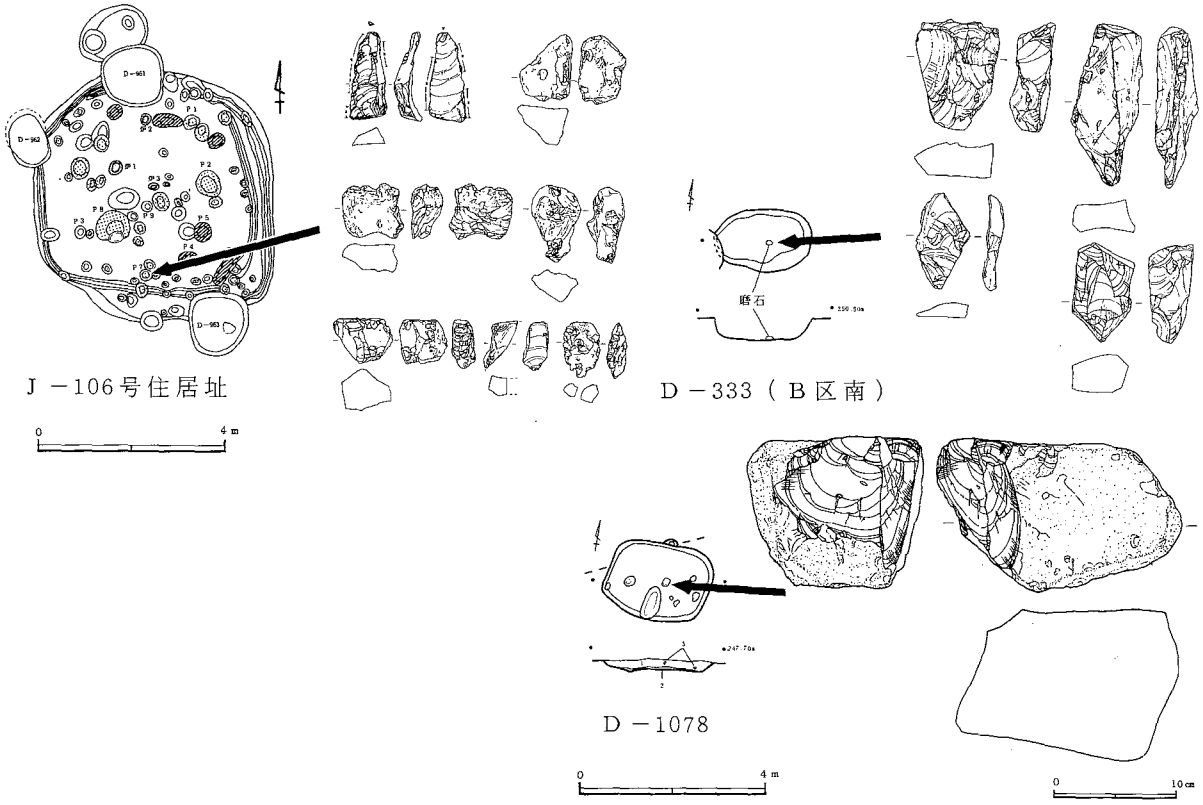
第142表　原石Ａ類の時期別石材



第126図　原石Ａ類の長幅比



第127図　原石Ａ類の重量度数分布



第128図　遺棄された黒曜石原石の出土状況

［Ｂ類石器］

打製石斧（遺物編第215図～第221図）　全部で981点検出されている。内訳は第143表のとおりである。打製石斧は直接打撃系列（Ｂ類）の中で最も定型化した器種であり、精度の高い型式学的分析を行わなければならない。しかし、使用による磨耗・欠損と刃部再生が頻繁に行われているため、範型を抽出するためには、廃棄時の形態（機能形態）から用いて製作時の形態（技術形態）を復元する必要がある。具体的には、作業第130図～第134図のように、使用によりリダクションが生じた部分を明示し、製作時から変化していない部分を基に分類を行った。

打製石斧はⅠ形態とⅡ形態に大別され、さらに多くの亜形態に細分される。なお、集計表の中にⅢ形態（側湾形≒分銅形）が少数（0.7%）含まれているが、これは中・後期のものである。

Ⅰ形態：片刃撥形石斧　基本的に水平持ち片面調製技法による急角度剥離で整形されたもので、平面形は撥形（一部短冊形のものもある）・断面形は蒲鉾形を基調とする。使用による磨耗痕は無いかごく弱く認められる程度で、刃部再生も行われない。本遺跡では68点検出されている。中原遺跡（関山Ⅰ式期主体）では53点、大下原遺跡（有尾式・諸磯ｂ式期主体）では49点であり、遺跡規模からすると数量的には少ない。これは本遺跡の時期の問題と判断される。

これまでの分析結果と今回の分析結果により、以下の事柄が明らかとなっている。

①前期前葉～中葉の時期に特徴的な形態であり、Ⅱ形態の普及とともにほぼ消滅する形態である。

②磨耗痕は弱いかほとんど認められないことから、柄は短く腕を下げた状態で地面に接しない程度で使用されていたと推定される。

③平面形が左右非対称で横に刃部が飛び出しているものがあることと、側縁部も刃部と同じ切截機能を有していることから、柄への装着方法は手斧（ちょうな）のような「横斧」ではなく、むしろ鉈のような「縦斧」であった可能性が高い。

④小さく重量がないので、樹木の伐採具としての機能が果たせないこと、また実際に磨製石斧のような衝撃による欠損や研磨痕が全く認められないことから、藪の小枝や草を刈り払うような道具であった可能性が高い。

⑤用いられる石材は黒色安山岩（Ⅰ類）・頁岩（Ⅱ類）・安山岩（Ⅲａ類）であるが、大部分は頁岩であり、石材選択性は極めて高い。

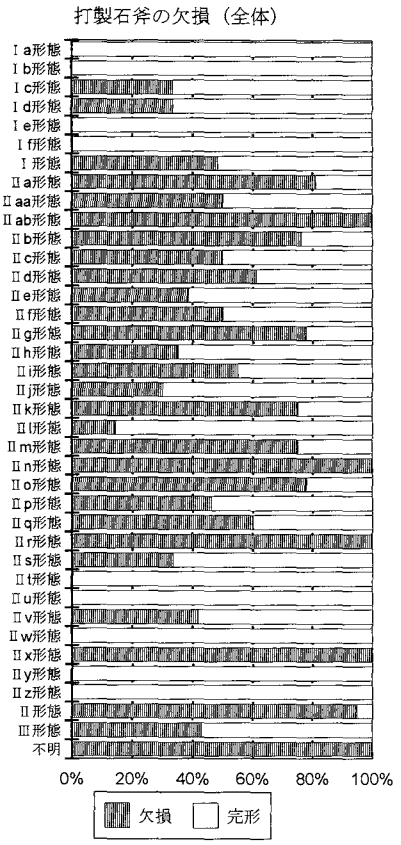
本遺跡ではⅠ形態は完形品が多く、リダクションもほとんどないことから、製作時の範型が維持されており、形態分類は容易である。第130図のように、Ⅰａ～ｆの６亜形態に分類できる。また、これらの分類に該当しない個体も存在している（第130図下２段）。これらのものについては、亜形態とはしなかった。

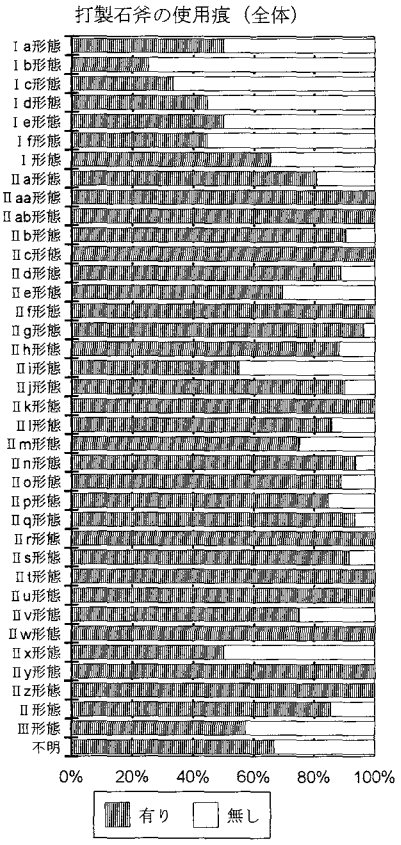
次に技術的な特徴が抽出できるものについて列記する。Ⅰｃ形態は表面に原礫面を残し、主剥離面の打点を刃部隅に置いている。Ⅰｄ形態では打点が側縁部に位置するように素材を用いている。幅広～横長剥片が素材として用いられていると推定される。また、Ⅰｅ形態では基部に打点を置いているため、基部は打面をそのまま残している。Ⅰｆ形態は比較的精緻に二次調製が行われており、体部に弱い磨耗痕を有するものが多いことが特徴である。

このように、亜形態ごとに素材の用い方にある程度特徴が認められ、素材剥片レベルからある程度類

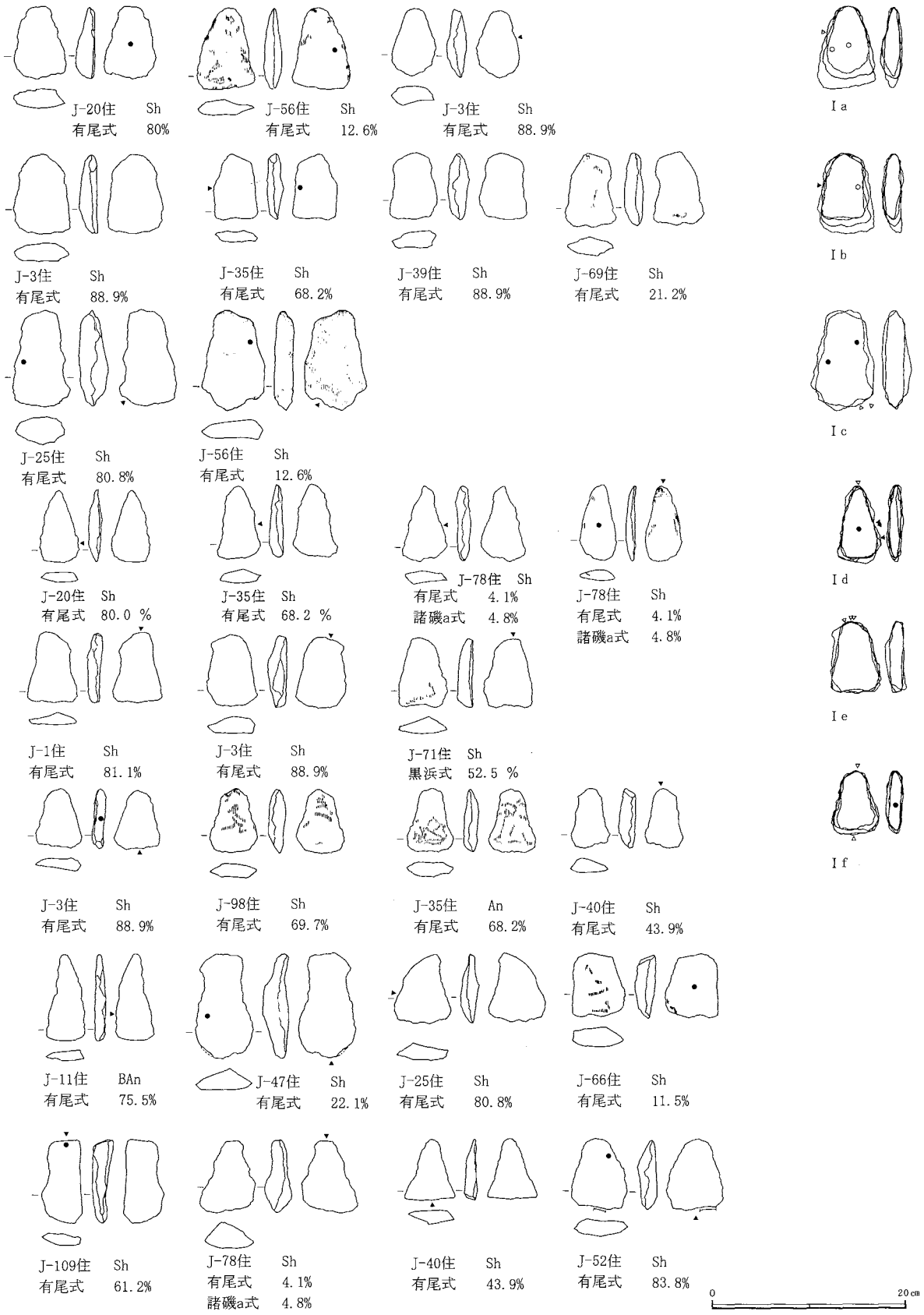
形態	個数	石材								欠損	使用痕	未成品
		I		II		IIIa	IV	V	VI			
		BAn	Sh	HSS	Sch	An	Sc	GrR	他			
Ⅰa 形態	6		6								3	
Ⅰb 形態	8		8								2	
Ⅰc 形態	3		3							1	1	
Ⅰd 形態	9	1	8							3	4	
Ⅰe 形態	4		4								2	
Ⅰf 形態	9	1	8								4	1
Ⅰ 形態	29	1	27			1				14	19	1
Ⅱa 形態	21		17			2	1	1		17	17	
Ⅱaa 形態	4		1				3			2	4	
Ⅱab 形態	1		1							1	1	
Ⅱb 形態	21		19			2				16	19	
Ⅱc 形態	10		7			2		1		5	10	
Ⅱd 形態	18		14			3		1		11	16	
Ⅱe 形態	13		12	1						5	9	
Ⅱf 形態	10	1	7			1		1		5	10	
Ⅱg 形態	27	1	19			4	3			21	26	
Ⅱh 形態	17		17							6	15	
Ⅱi 形態	20	2	16				2			11	11	1
Ⅱj 形態	10		7			1	1	1		3	9	1
Ⅱk 形態	8	1	3			1	1	2		6	8	
Ⅱl 形態	7		7							1	6	
Ⅱm 形態	4		4							3	3	
Ⅱn 形態	16		13			2	1			16	15	
Ⅱo 形態	18		17				1			14	16	
Ⅱp 形態	13		11			1		1		6	11	
Ⅱq 形態	15		12			2	1			9	14	
Ⅱr 形態	3		2	1						3	3	
Ⅱs 形態	12		12							4	11	
Ⅱt 形態	1		1								1	
Ⅱu 形態	2		1					1			2	
Ⅱv 形態	12		11			1				5	9	1
Ⅱw 形態	3		3								3	
Ⅱx 形態	2		2							2	1	
Ⅱy 形態	2		2								2	
Ⅱz 形態	3		3								3	
Ⅱ 形態	611	3	518	2	2	53	18	13	2	578	523	5
Ⅲ 形態	7		7							4	5	
不明	3	1	1				1			3	2	2
合計	982	12	831	4	2	76	33	22	2	775	820	12

第143表　打製石斧の形態と諸属性（全体）





第129図　打製石斧の欠損と使用痕（全体）



第130図　打製石斧の形態分類図（1）

似した形状のものが用いられていたと推定される。しかし、Ⅰ形態全体に共通した形状の素材剝片は存在しておらず、二次調製によって相当程度まで意図した形態に整形してしまっていたと考えられる。ここで、留意される点は主剝離面が長軸に対し斜めになるように調製が施されているものが多い点である。これは素材剝片が左右対称形でなかったことに帰因すると推定される。第137図の長幅比グラフに示されるように、長さ7㎝・幅5㎝程度が標準的な大きさであり、このサイズが共通のイメージであったと思われる。

次に、調製方法について検討してみたい。Ⅰ形態では片面調製のものが多い。こうしたものの調製剝離面を観察すると、打角は90°よりもはるかに鈍角であり、階段状剝離となってしまっているものもあるが、剝離が抜けているものが多く、縁辺は比較的鋭利である。ここでの調製は、主として素材剝片の表面（原礫面のある面）を打面とし、水平に回転させながら直接打撃［D］により調製を行うものである。この調製技法を仮に「水平回転技法」と呼ぶことにする。「水平回転技法」はScB・ⅡU形態に対する調製と同じ方法であり、親和性が強い。この技法は後述する諸磯ｂ式期を中心とするⅡ形態の調製方法とは、大きく異なっており、前期前半期に特徴的な技法とみられる。

Ⅱ形態：両刃短冊形石斧　基本的に垂直持ち両面調製技法による階段状剝離で整形されたもので、平面形は短冊形～撥形・断面形はレンズ形を基調とする。ほとんどのものに使用による磨耗痕がはっきり認められ、刃部再生によるリダクションも頻繁である。遺跡全体では903点検出されており、直接打撃系列ではScBに次いで多い器種である。なお、この中には刃部のみの欠損品や刃部再生剝片も含んでいるが、製作された個体数を反映している。

これまでの分析と今回の分析により、以下の事柄が判明している。

①前期前葉でも少数は存在しているが、後葉になると激増する。そのまま中期を通じて大量に保持されており、後期以降も数量は減少するものの、継続的に存在し続けている息の長い形態である。

②刃部の磨耗痕は顕著であり、しばしば縦あるいはやや斜め方向の線状痕が認められる。また、装着による磨耗痕の観察されるものも多い。こうした磨耗痕は細かな砂粒等、研磨剤となる物質との摩擦で生じたものであり、土掘り具であったと判断される。

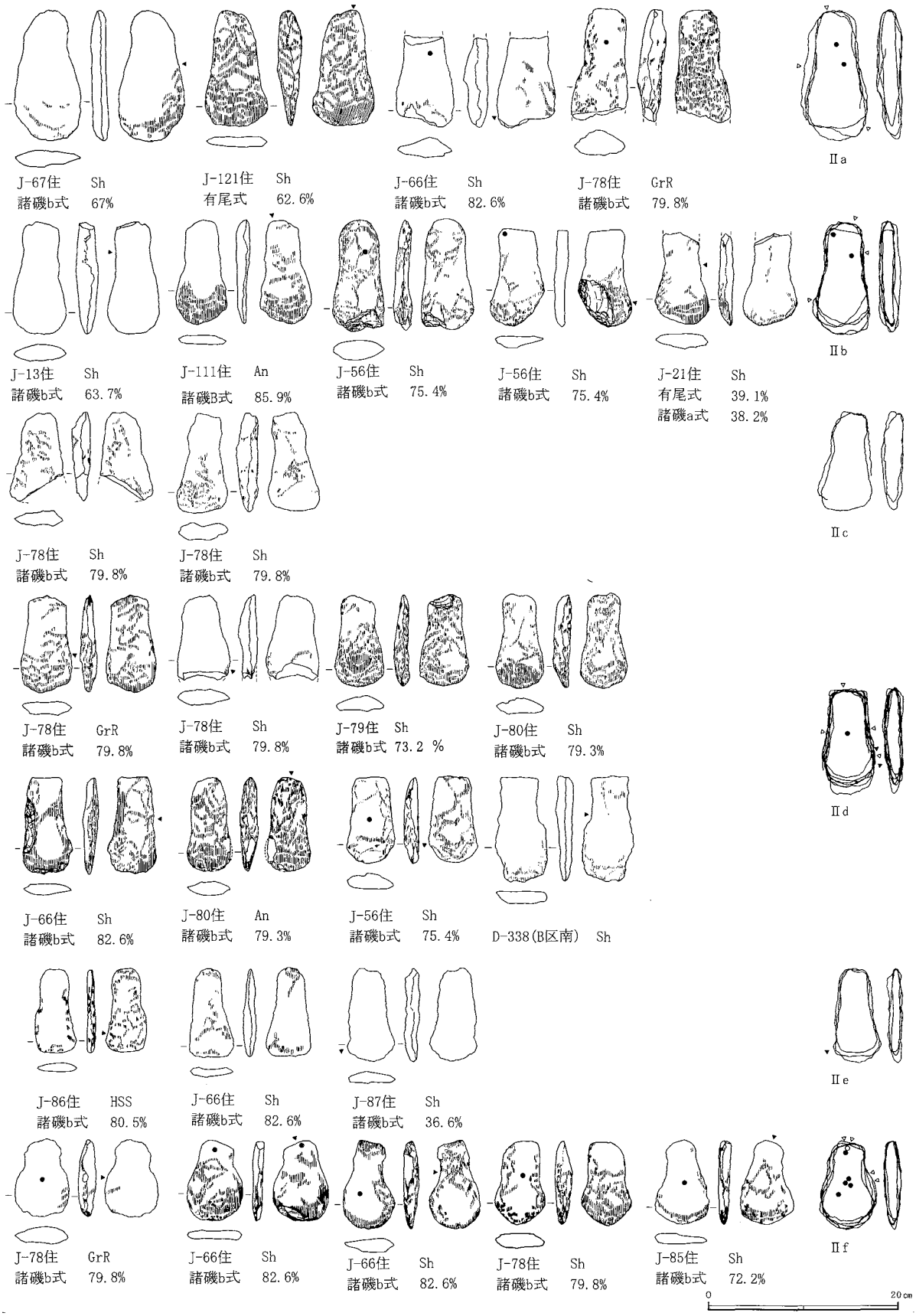
③刃部には使用時の衝撃、または刃部再生（リダクション）による剝離が観察される例も多く、磨耗痕に強弱が認められる場合もある。したがって、大部分のものは製作時の形状は維持されておらず、現在観察しているのは廃棄時の形状であり、技術形態学的分類を行う際には、注意が必要である。

④用いられる石材はⅠ類～Ⅵ類まで多用であるが、頁岩（Ⅱ類）が圧倒的な比率を占めており、石材選択性は極めて高い器種である。

本遺跡では基部と側縁部の形状からⅡａ～Ⅱａｂの27亜形態に細分可能である（第131図～第134図）。また、これらの分類に該当しないものも存在しているが、その多くは欠損品である。そして、リダクションにより形態変化が生じたもの（第134図右２列）は、亜形態に分類しなかった。

以下、特徴的な亜形態について列記する。

Ⅱａ～ｆ・ｔ～ｖ形態は側縁部が内湾する「しゃもじ形」を呈する亜形態である。Ⅱｂ～ｆ形態が比較的強い範型を有しており、個数的にも安定している。また、Ⅱｔ形態は特別大形のもので、本遺跡で



第131図　打製石斧の形態分類図（2）

第132図　打製石斧の形態分類図（3）

は１例であるが、三本木II遺跡から同形態のものが出土しているので、ひとつの亜形態とした。

II g～m・w～z形態は側縁部が直線的で「撥形」を呈する亜形態である。II g形態27点と最多数を占めており、最も安定した形態と推定される。II i形態は突出して使用痕が少ない亜形態であり、機能的にはI形態と同じであったと推定される。

II n～s・aa・ab形態は側縁部が直線的で「短冊形」を呈する亜形態である。II n～q・s形態は数量的に安定した亜形態である。

II形態では、数量が多いため、亜形態も多くなってしまうが、上記のように大きくは３群に分かれる。特別なものを除き、欠損率や使用痕の頻度も大きく違いはなく、形態差は機能的なものではなく、時期差・集団差・個人差などに帰因すると考えられる。

なお、第137図の長幅比グラフに示されるように、長さ７～14cm・幅４～６cmにほぼ収束されており、これが標準的なサイズであったことが分かる。このグラフで長さの変移幅が大きいのは、刃部リダクションによるところが大きいと推定される。

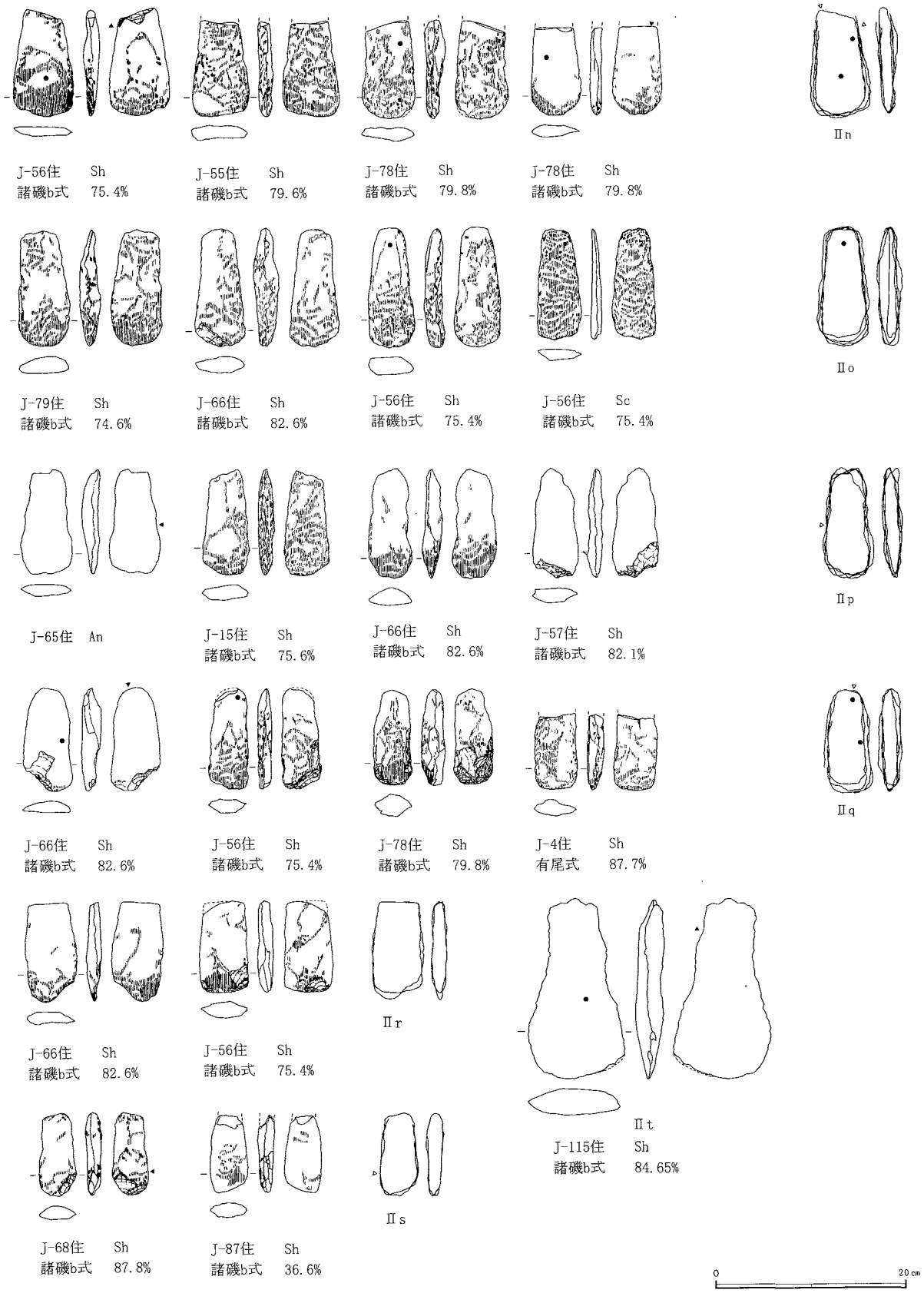
次に、技術的特徴について述べる。従来より、この形態の打製石斧の製作技術論は小田静夫氏によって半割技法が提示されて以来、この方法に収束してしまった観が強い(小田　1976)。しかし、この技法は武蔵野台地の中期に盛行した方法の提示であり、それ以外の時期や地域での一般的技法かどうかについての議論や検証は、ほとんど行われていない。そこで、より大形の原石が確保可能な本地域の実態と適合し得るかどうか本遺跡の資料を用い検証してみたい。

まず、素材剥片の形状を復元してみよう。図示したもののうち片面に原礫面が残存しているものは約50％に認められる。また、両面に原礫面が残存しているものは約４％である。約半数は剥離作業の初期段階に作出された剥片が用いられている。次に、素材剥片の用い方を調べると、打点が横に位置するものが約50％と最も多く、基部に位置するものや斜めのものは、それぞれ12％程度である。素材剥片を横位置で用いるのは、厚い打瘤部分や剥片先端の薄い部分を除去するためと推定される。

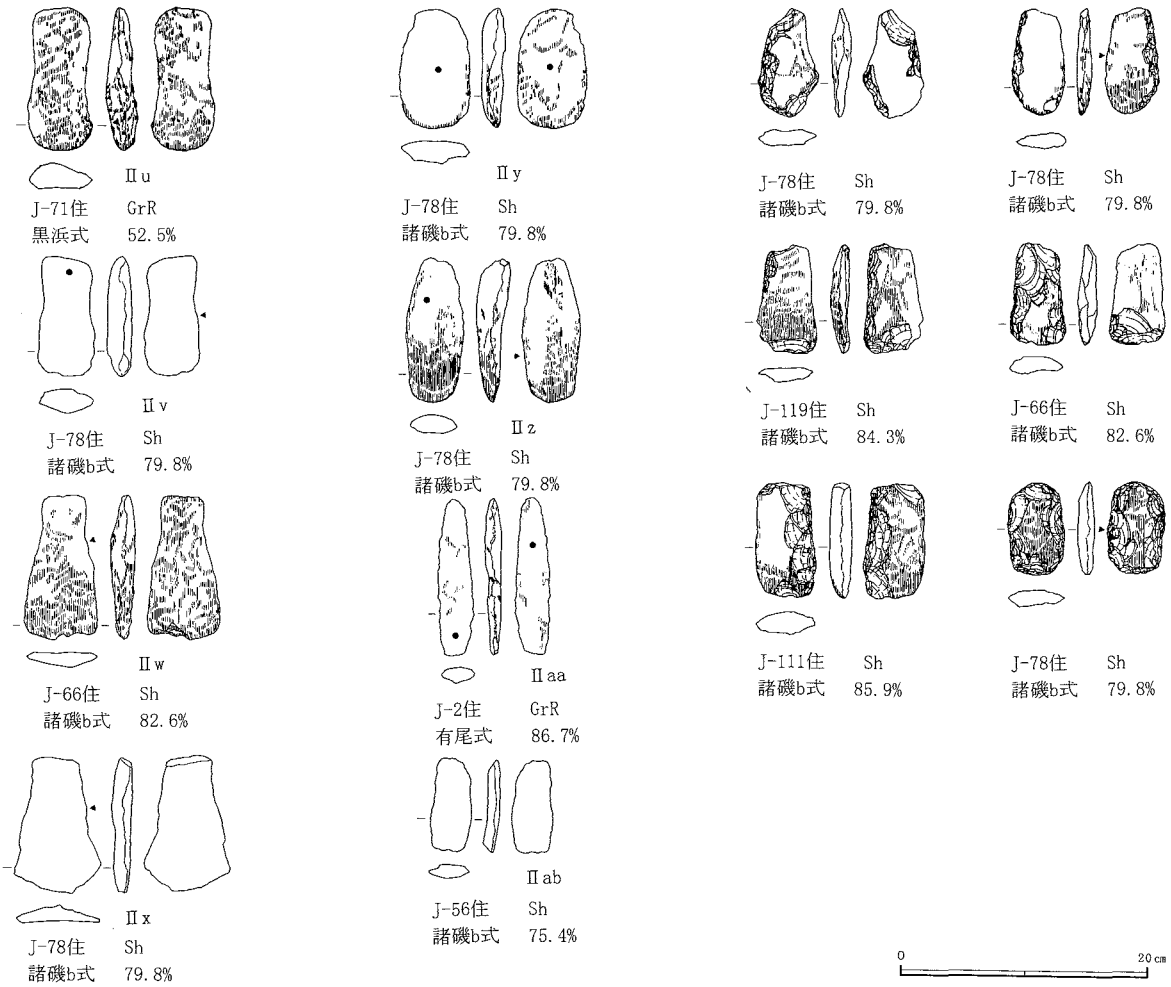
打製石斧の製作は、調製剥片・未成品・大形原石・残核の少なさからみて、大部分が遺跡外で製作されていたことはほぼ確実である。打製石斧が製作可能な大形素材剥片は遺跡内から少数例検出されており、片面に原礫面が大きく残されているものも存在している（遺物編第237図)。こうした大形素材剥片の形状を観察すると、側縁部の湾曲度からみる限り、大形で厚みのある原石（石核）から剥離された初期段階の剥片である。大形原石（石核）からは、引き続き数枚の素材剥片が剥離されていたものとみられる。遺物編第236図９や大下原遺跡Ｊ―12住出土例は原礫面がなく、この段階のものである。

では、素材剥片の剥離作業について復元してみる。原礫面のない打製石斧の表裏に残る一次剥離面の方向を観察してみよう。使用による磨耗痕が激しかったり、調製により一次剥離面がほとんど残存していないものもあり難しいが、一方向からのものと、斜行あるいは直行するものが多く、対向するものは少ない。この剥離の状態は、大形素材剥片の剥離面の状態と一致している。したがって、打製石斧の素材剥片の剥離作業は、①大形の原石（石核）を準備し、②打面を固定して連続した剥離か、打点を移動しながら求心状に進行させた剥離により、③大形幅広剥片を作出する方法が採用されていたと推定される。

なお、最も多い原礫面を片面に残し横に打点が位置するものは、半割技法により作出された素材剥片を用いていた可能性もあるが、実証的に説明することは難しい。少なくとも、本遺跡においては実際には上記のようなよりダイナミックな素材剥片獲得方法も採用されていたおり、打製石斧製作は１つの方法に収斂されるものではない。打製石斧に最適の石材が豊富に供給される群馬県域においては、ここで



第133図　打製石斧の形態分類図（4）



第134図　打製石斧の形態分類図（5）

確認された方法を含め、いくつかの製作方法が存在していたものと考えられる。(註)

次に、II形態の調製方法について検討してみよう。II形態の調製は両側縁部に集中して施されており、調製剥離面は内側では抜けているものが多いが、縁辺部ではほとんどが階段状剥離となっており、エッジが潰れている。このような調製は、素材剥片を垂直に立て、上方向から側縁に対して直接打撃［D］を連続的に加える方法が採られており、この調製技法を仮に「垂直打撃技法」と呼ぶことにする。垂直打撃技法では、剥離の限界となってもさらに執拗に打撃を加えることが可能であり、さらにこの状態が進行すると、敲打に至る技法である。

この技法はScB・IIB形態に対する調製技法と同じ方法であり、親和性が強い。垂直打撃技法は、これ以降直接打撃系列（B類）の中で、最も主体的な技法として、長く継続的に用いられる方法である。また、下部に台石を置けば両極技法となり、楔形石器との親和性が強いが、本遺跡の場合、楔形石器や台石の出土数が少ないことから、両極技法として用いられることは少なかったと判断される。さらに、垂直打撃技法はこの時期の押圧剥離系列（A類）の素材剥片作出に対しても適用されており、非常に適応範囲の広い技法としてこの時期以降急速に普及したものと考えられる。

（註）筆者が調査に従事した縄文中・後期を主体とした吾妻町郷原遺跡（能登・大工原他　1985）では、打製石斧用の大形石核Bが検出されている。ここでは遺跡内で打製石斧が製作されていた可能性が高い。この石核は報告書には図示していないが、サイコロ状を呈した頁岩（泥岩）製の石核であり、原礫面は存在していない。大形の転石または、露頭から直接採取されたものと思われる。

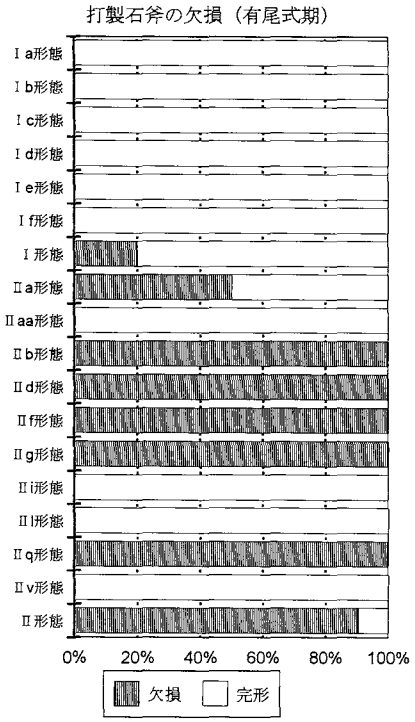
有尾式期の打製石斧（遺物編第215図、第216図１～14）　帰属率60％以上の住居址では55点を数える。Ⅰ形態41.8％、II形態58.2％であり、両形態が並存している。使用石材は頁岩83.6％であり、Ⅰ形態の方がやや比率が高い。欠損率は第135図のとおりであり、Ⅰ形態では4.5％に過ぎないが、II形態では57.6％を占めている。使用方法が全く異なっていたことがここからも理解できる。また、磨耗痕は第135図のとおりである。Ⅰ形態は27.3％に過ぎず磨耗痕も弱いが、II形態では66.7％に観察され磨耗も激しい。以上のように、Ⅰ形態とII形態では機能が異なっていたのは明かである。

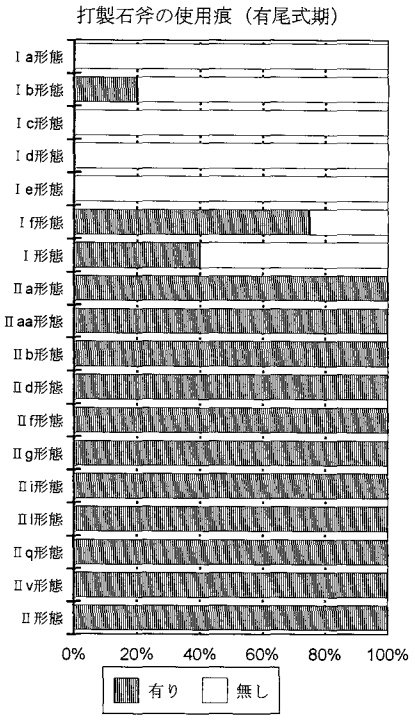
なお、第216図１～４・９・10のように、調製に垂直打撃技法が採用されており、技術的にはII形態であるが、使用による磨耗痕が弱く、機能的にはII形態といった中間的な形態が存在している。こうしたものの場合、本来のII形態よりも小形であったり、薄手であったりで概して貧弱なものが多い。本遺跡ではⅠ形態が衰退しつつあり、II形態への過渡的様相を示す資料と推定される。

諸磯ｂ式期の打製石斧（遺物編第216図15～17、第217図～第220図、第221図１～８）　帰属率60％以上の住居址では515点を数える。Ⅰ形態は3.7％であり、有尾式期のものが混在した可能性が高い。基本的にこの時期の打製石斧はII形態であったと判断される。II形態では83.9％が頁岩であり、次いで安山岩8.1％である。欠損率は第136図のとおりであり、非常に高率である。なお、欠損品の中には、刃部再生剥片も含まれており、実際の個数はもう少し少なかったと推定される。また、磨耗痕は第136図のとおりであり、大部分のものに観察される。こうしたデータからみて、集落遺跡から検出されるII形態はほとんどのものが使用後に廃棄されたものとみられる。また、すでに何度も言及しているように、未成品も少なく打製石斧の製作自体も遺跡内ではほとんど行われていない。遺物編第216図17・第220図11～13は、ほとんど使用痕が認められず、製作後遺跡内に保管されていたものの可能性が高い。

形態	個数	石材								欠損	使用痕	未成品
		I		II		IIIa	IV	V	VI			
		BAn	Sh	HSS	Sch	An	Sc	GrR	他			
Ⅰa 形態	3		3									
Ⅰb 形態	5		5								1	
Ⅰc 形態	1		1									
Ⅰd 形態	2	1	1									
Ⅰe 形態	2		2									
Ⅰf 形態	4	1	3								3	
Ⅰ 形態	5		5							1	2	
Ⅱa 形態	2		2							1	2	
Ⅱaa 形態	1						1				1	
Ⅱab 形態	0											
Ⅱb 形態	1		1							1	1	
Ⅱc 形態	0											
Ⅱd 形態	1		1							1	1	
Ⅱe 形態	0											
Ⅱf 形態	1					1				1	1	
Ⅱg 形態	1					1				1	1	
Ⅱh 形態	0											
Ⅱi 形態	1		1								1	
Ⅱj 形態	0											
Ⅱk 形態	0											
Ⅱl 形態	1		1								1	
Ⅱm 形態	0											
Ⅱn 形態	0											
Ⅱo 形態	0											
Ⅱp 形態	0											
Ⅱq 形態	2		1			1				2	2	
Ⅱr 形態	0											
Ⅱs 形態	0											
Ⅱt 形態	0											
Ⅱu 形態	0											
Ⅱv 形態	1		1								1	
Ⅱw 形態	0											
Ⅱx 形態	0											
Ⅱy 形態	0											
Ⅱz 形態	0											
Ⅱ 形態	21		18			3				19	21	
Ⅲ 形態	0											
不明	0											
合計	55	2	46	0	0	6	1	0	0	27	39	0

第144表　打製石斧の時期別形態と諸属性（有尾式期）

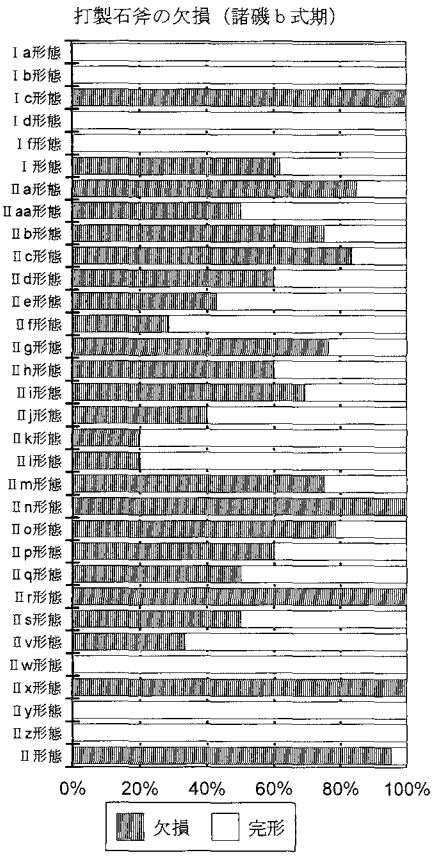


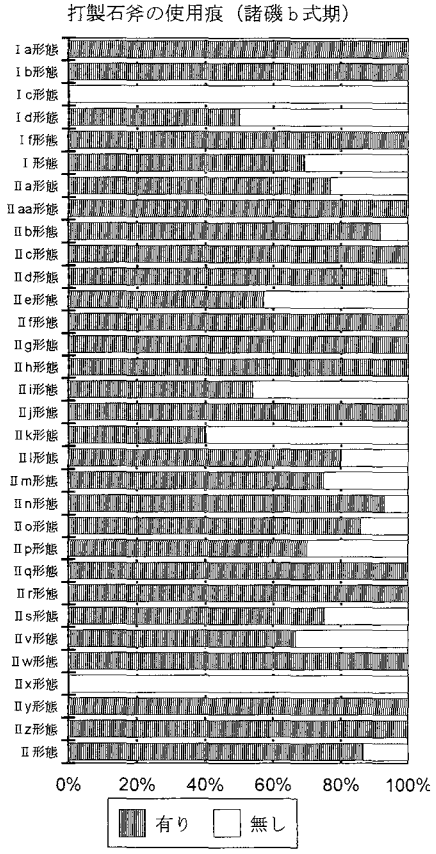


第135図　打製石斧の欠損と使用痕（有尾式期）

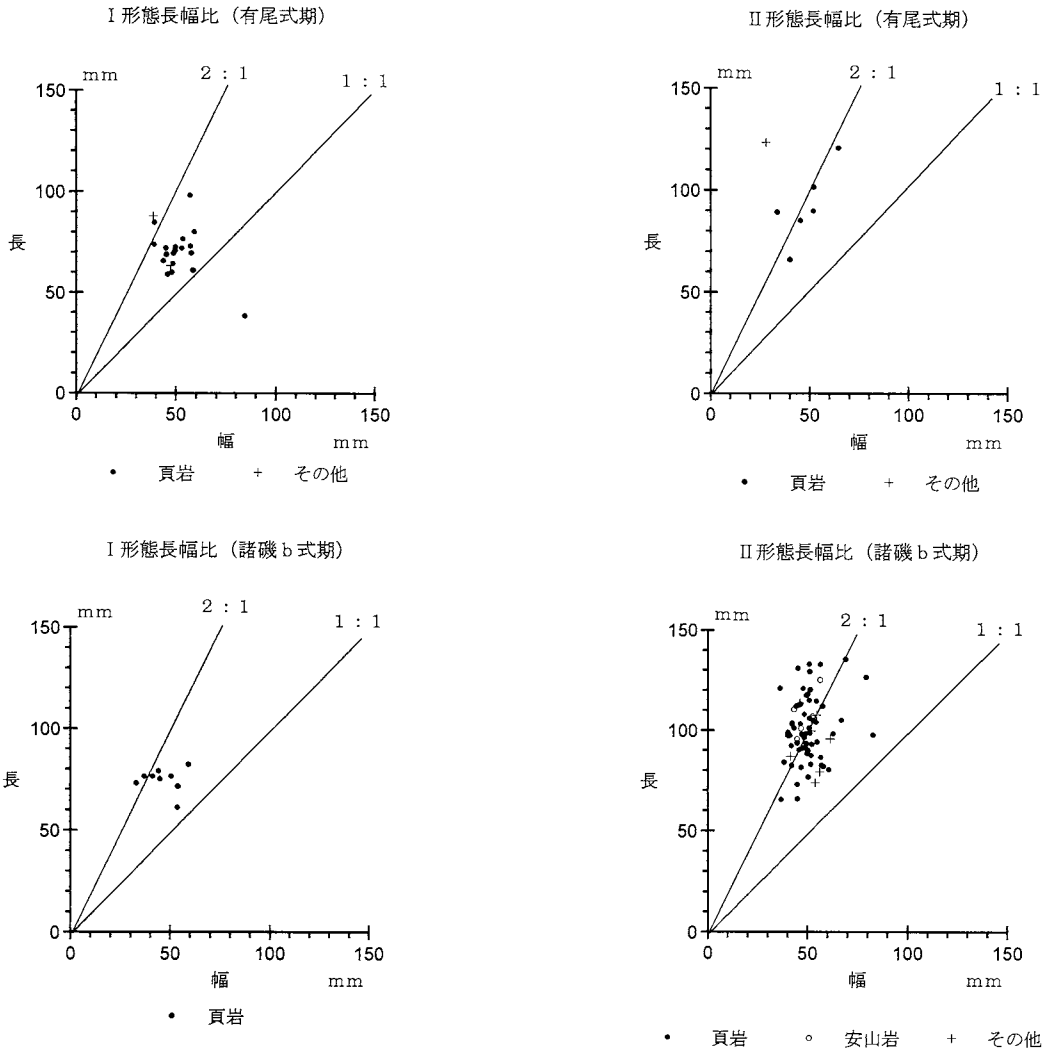
形態	個数	石材								欠損	使用痕	未成品
		I		II		IIIa	IV	V	VI			
		BAn	Sh	HSS	Sch	An	Sc	GrR	他			
Ⅰa 形態	1		1								1	
Ⅰb 形態	1		1								1	
Ⅰc 形態	1		1							1		
Ⅰd 形態	2		2								1	
Ⅰe 形態	0											
Ⅰf 形態	1		1								1	
Ⅰ 形態	13		13							8	9	
Ⅱa 形態	13		10			1	1	1		11	10	
Ⅱaa 形態	2		1				1			1	2	
Ⅱab 形態	0											
Ⅱb 形態	12		10			2				9	11	
Ⅱc 形態	6		4			1		1		5	6	
Ⅱd 形態	15		11			3		1		9	14	
Ⅱe 形態	7		6	1						3	4	
Ⅱf 形態	7	1	5					1		2	7	
Ⅱg 形態	21	1	14			3	3			16	21	
Ⅱh 形態	5		5							3	5	
Ⅱi 形態	13	1	10				2			9	7	
Ⅱj 形態	5		4			1				2	5	
Ⅱk 形態	5		2				1	2		1	2	
Ⅱl 形態	5		5							1	4	
Ⅱm 形態	4		4							3	3	
Ⅱn 形態	14		11			2	1			14	13	
Ⅱo 形態	14		13				1			11	12	
Ⅱp 形態	10		9			1				6	7	
Ⅱq 形態	8		8							4	8	
Ⅱr 形態	3		2	1						3	3	
Ⅱs 形態	4		4							2	3	
Ⅱt 形態	0											
Ⅱu 形態	0											
Ⅱv 形態	3		2			1				1	2	
Ⅱw 形態	1		1								1	
Ⅱx 形態	1		1							1		
Ⅱy 形態	2		2								2	
Ⅱz 形態	1		1								1	
Ⅱ 形態	314		270			26	11	7		299	272	1
Ⅲ 形態	0											
不明	0											
合計	514	3	434	2	0	41	21	13	0	425	438	1

第145表　打製石斧の時期別形態と諸属性（諸磯ｂ式期）





第136図　打製石斧の欠損と使用痕(諸磯ｂ式期)



第137図　打製石斧の長幅比

石匙Ｂ類（遺物編第223図～第227図）　遺跡全体では134点出土している。内訳は第146表のとおりである。石匙Ｂ類は広義のスクレイパーＢ類（ScB）に含まれる。石匙Ａ類との違いは、石材の種類であり、石材Ⅱ類が中心である。調製方法からスクレイパー類同様Ｉａ～Ⅲ形態に大別され、そして片面（U）、両面（B）に細分される。さらに、石匙Ａでは形状により多数の亜形態に分類されるものと思われる。しかし、本遺跡の石匙Ｂでは個々の形状差が大きいことと、リダクションにより形状変化しているものが多いことから、範型論的分析は途中で断念した。(註)　したがって、ここでは石匙Ｂに対する概観を述べのに留め、次に時期別に特徴について述べることにする。

石匙Ｂでも石匙Ａと同様に、摘み部の位置と幅から形態分類することが可能である。詳細は石匙Ａの記述を参照されたい。大まかにみて、摘み部の幅が広いものは、比較的古い時期に多い傾向があるようである。また、直接打撃により調製を施す比較的大形のもの（Ⅱ形態）は、諸磯ｂ式期になるとやや目立つようになる。これらは打製石斧Ⅱ形態と調製技術が共通しており、この時期の直接打撃系列（Ｂ類）の工程配置の中で大きな特徴となっている（大工原　1996）。

また、横形のものでは、摘み部が斜めに付くもの（WOSH 形態・WOWH 形態）と、垂直に付くもの（WVSH 形態・WVWH 形態）が存在するが、これは素材剥片の形状によるところが大きい。特に、斜めに付くものは「角打ち技法（ScB・石核Ｂの項で詳述）」との関係が強いものと推定される。これは素材剥片の打瘤部分が最も丈夫なので、この部分を摘み部としようとすると、どうしても斜めとなってしまうためと考えられる。これに対し、垂直に摘み部の付くものは、打面に対し垂直方向からの打撃によって剥離された左右対称形を基本とした素材剥片が用いられる場合が多い。

（註）大下原遺跡（有尾～諸磯ｃ式期）では36点で９以上の亜形態が存在が確認された。１亜形態当たり３点程度であり、本当に亜形態と個体差の識別が可能なのか疑問が生じた。そのため、その後に報告した中原遺跡（関山Ｉ式期が中心）では37点の石匙Ｂが検出されているが、亜形態の抽出は行っていない。今回は100点以上の資料があったので、再びこうした分析を試みたが、石匙ＢがScB と同様に千差万別であるため、亜形態の抽出は断念した。

有尾式期の石匙Ｂ類（遺物編第223図・第224図）　帰属率60％以上の住居址では31点を数える。内訳は第146表のとおりである。押圧剥離を伴うＩａ・Ｉｂ形態が90.3％を占めており、石材は異なるものの押圧剥離系列（Ａ類）の調製技術が混用あるいは流用されていることが分かる。また、Ｉａ形態では縦形が61.9％を占めているのに対し、Ｉｂ形態では横形が71.4％を占めている。そして、Ｉａ形態では片面調製が66.7％を占め、両面調製は少ないが、Ｉｂ形態ではほぼ同じである。以上のことから、Ｉａ形態とＩｂ形態ではそれぞれ縦形・横形との結びつきが強く、形状と調製技術との間に一定の関係があることが分かる。ただし、ここで縦形としたものは、第223図１～９、第224図５・６のような形状のものである。この中にはどちらかと言えば縦長といったものも含んでおり、摘み部の幅の広いもの（EVWH 形態：第223図１～４・６・７・９、第224図５）が多い。摘み部の幅が広いものは、横形でも認められる（WOWH 形態：第224図１、WVWH 形態：同３）。

石材は頁岩が93.5％を占めており、選択性は極めて高い。凝灰岩や黒色安山岩（安山岩と黒色安山岩の中間的材質のもの）がわずかにあるが、便宜的な利用程度のものと推定される。

欠損率は25.8％であり、強い衝撃を受けない用途に用いられたものと推測される。また、32.5％のものには、刃部に弱い磨耗痕が観察される。こうした磨耗痕は土掘具と推定されている打製石斧Ⅱ形態に

比べ明らかに弱いものであり、むしろ打製石斧Ⅰ形態のものに近いものである。

諸磯ａ式期の石匙Ｂ類(同第225図９)　この石匙Ｂは土壙墓の副葬品で、諸磯ａ式帰属率61.6%である。精緻な押圧剝離で両面調製されているが、片面調製に近い調製技術であり、正真の両面調製とは言い難い。全体を研磨しており稜が磨滅しているが、これは石匙Ａ類EVSH－２形態（東北からの搬入品の模倣形態）にみられる手法である。また、形状はWOSH形態に分類されるが、このように先端を尖らせるものは本例のみであり、摘み部の位置以外はEVSH—1b形態（東北地方からの搬入品）に似せられている。以上のことから、この石匙Ｂは東北地方から搬入された石匙Ａを模倣して製作された、副葬用の特殊な個体であったと推定される。

諸磯ｂ式期の石匙Ｂ類（同第225図～第227図）　帰属率60%以上の住居址では56点を数える。内訳は第表のとおりである。欠損率は34.5%であるが、摘み部が欠損している場合、ScBに分類されるため、もう少し多くの石匙Ｂが存在していたものとみられる。

また、使用による磨耗痕が認められるものは32.7%に観察されるが、磨耗痕は比較的弱いものが多い。これは有尾式期と同じ傾向である。打製石斧Ⅰ形態のように特定の用途に限定して使用された器種ではなく、多様な用途に用いられたものと推測される。

頁岩が94.6%を占めており、石材選択性は極めて高い。Ⅰａ形態24点、Ⅰｂ形態12点、Ⅱ形態15点、Ⅲ形態３点であり、押圧剝離を伴うⅠａ・Ⅰｂ形態が64.3%を占める。有尾式期に比べⅡ形態の比率が高いことが分かる。また、縦形はⅠaU形態で30.8%を占めるが、他の形態ではほとんど認められない。例えば、第227図３は一見すると縦形であるが、打製石斧を転用したものであり、本来の縦形とは異なる。

この中には形態的にみて、石匙Ａと同じ亜形態を有しているものが存在している。例えば、第225図４・５はWVSH－３形態、同７はWOSH－２形態、第226図４はWVSH—1b形態に分類することが可能である。このように石匙Ａと同じ範型を有するものは、ほとんど押圧剝離を主体としたⅠａ形態である。本来石材Ⅰ類で製作されるべきものが、汎用性が高い石材Ⅱ類（特に頁岩）の方が容易に調達可能であるために、こうした系列を越えてしまう個体が出現してしまうものと推定される。

この時期に増加するⅡ形態では第227図４・５が典型例である。直接打撃［D］により調製加工が施されており、技術的には打製石斧Ⅱ形態と共通する。直接打撃系列（Ｂ類）の工程配置の中にしっかりと組み込まれており、打製石斧と並列の関係に工程が配置されている。この工程配置は諸磯ｂ式期の直接打撃系列の型式の一つのメルクマールになる（大工原　1996）。(註)

石匙Ｂ・Ⅱ形態は諸磯ｂ式期ではまだ全体数はさほど多いものではなく、生業活動に不可欠な器種とは成り得ていないようである。そして、この形態では刃部にリダクションが認められるものが少なからず存在している。当初の刃部形状は大きく変化し、刃部が湾曲した形状になっているものがしばしば存在する。なお、刃部のリダクションのあるものを抽出するのは、使用による磨耗痕がある場合、打製石斧と同様に識別は比較的容易であるが、磨耗痕があまり強くない場合、当初の調製と区別し難いものも多い。亜形態の抽出が困難である要因の一つでもある。

第227図６・７はⅢ形態の例として示した。これらは、ほとんど刃部に調製が施されておらず、剝片に単に摘み部を付けた簡単なものである。こうした、きわめて便宜的な形態は、中原遺跡では関山Ⅰ式期にすでに存在しており、しばしば認められるものであるが、この系列の本来の製作システムとは連動しない例外的な存在と思われる。

（註）かつて、藤森栄一氏が中期の石匙の機能的変化として指摘したものに相当しよう（藤森　1964）。この石匙の区分は卓見であり大きく評価することができる。しかし、ここでは機能・用途論の方向に眼が向いていたため、大量に製作されていた打製石斧との関連性から、技術論へ研究が発展することはなかった。その背景には縄文時代の石器には技術体系など存在していないという先入観が考古学研究者の間に広く蔓延していたことがあり、石器研究停滞の大きな原因であった。

形態	分類	全体							有尾式期							諸磯b式期						
		個数	石材				欠損	磨耗痕	個数	石材				欠損	磨耗痕	個数	石材				欠損	磨耗痕
			I	II	III					I	II	III					I	II	III			
			BAn	Sh	An	tf				BAn	Sh	An	tf				BAn	Sh	An	tf		
Ia B	横形	19		19			4	3	2		2					13		13			4	2
	縦型	6	1	4		1	3	1	5	1	3		1	2	1	0						
Ia U	横形	20		20			5	5	6		6			1	2	9		9			2	3
	縦型	16		16			6	7	8		8			1	7	4		4			3	
	未成品	1		1			1		0							1		1			1	
Ib B	横形	13	1	12			9	1	2		2			2		3		3			1	
	縦型	4		4			2		1		1					0						
Ib U	横形	14	1	12	1		3	4	3		3					7	1	5	1		3	4
	縦型	1		1			1		1		1			1		0						
Ib	不明	1		1			1		0							0						
II B	横形	16		16			6	9	0							6		6			2	3
	縦型	3	1	2				1	0							1		1				
	不明	1		1					0							1		1				
II U	横形	11		11			3	8	1		1					6		6			2	5
	縦型	1		1			1		0							1		1			1	
III U	横形	5	1	4			1	1	1		1					3	1	2				1
	縦型	1		1			1		1		1			1		0						
合計		133	5	126	1	1	47	40	31	1	29	0	1	8	10	55	2	52	1	0	19	18

第146表　石匙Bの時期別形態と諸属性

スクレイパーＢ類(ScB)（遺物編第228図～第235図）　遺跡全体では2,273点検出されている。内訳は第表のとおりである。打製石斧と共通した石材II類を主体としたスクレイパーであり、打製石斧の製作工程の中に組み込まれて製作されているものと、中形原石から直接素材剝片を作出するものがある。前者は横長形状のものが多く、後者は幅広で逆三角形となるものが目立つ。ScB では原則として素材となる剝片の形状を大きく変えることなく、縁辺部に調製を施している。

調製技法によりＩａ～III形態に大別され、さらに両面調製（Ｂ形態）、片面調製（Ｕ形態）に二分される。詳細は［スクレイパー類の分類について］を参照されたい。全体の内訳は、Ｉａ形態222点、Ｉｂ形態436点、II形態1,375点、III形態461点であり、II形態が最も多い。各形態とも平面形状からさらに多くの亜形態に細分し得るが、石匙Ｂと同様の理由により分析は断念した。以下、時期ごとに特徴を述べる。

有尾式期のスクレイパーＢ類（ScB）　この時期の帰属率60％の住居址では431点を数える。II形態が多く、Ｉｂ形態はやや少ない。また、どの形態でも片面調製によるものが比較的多いが、この時期に多い打製石斧Ｉ形態の調製技術と連動しているものと考えられる。

打面は原礫面とするものが多く、打面の角を打撃し、左右非対称で逆三角形となる剝片を素材とするものがしばしば存在する。このように角を打点とする剝離技法を「角打ち技法」と呼ぶことにする。この技法は前期の剝片剝離方法の特徴の一つである。前述したように石匙Ｂの摘み部の位置は、この技法との関係で説明できる。

次に、表面と裏面の剝離方向を観察すると、打撃方向が同一のものと、大きく異なっているものが並存している。これは、一次剝離段階で打面を固定して剝離を進行する方法と、打面を頻繁に転移しつつ剝離を進行する方法が並存していたことを意味する。後者では、角打ち技法に類似した幅広で逆三角形となる剝片を素材としたものが目立つ。

また、第138・139図のように素材となる剝片の形状と大きさは、各形態ともほぼ同じ傾向を示しており、共通した剝片が用いられていたものと判断される。

そして、石材は頁岩が95.6％を占め、石材選択性は極めて高い。

Ｉａ形態（同第228図）　帰属率60％の住居址では81点を数える。第138図のグラフのとおり長幅比１：１を中心とし、３～７cm程の大きさに集中する。それより大形のものではやや縦長のものが多い傾向が認められる。縦長形状のもの（１～６）、幅広・横長形状のもの（７～28）があるが、幅広剝片を素材としたものが多い。この形態では表面に原礫面を大きく残すものは比較的少ない。３・16・17・27は角打ち技法によって作出された剝片を素材としている。この形態では片面調製（ＩaU形態）が87.7％を占めており、非常に高率である。刃部の部位や形状は多様である。

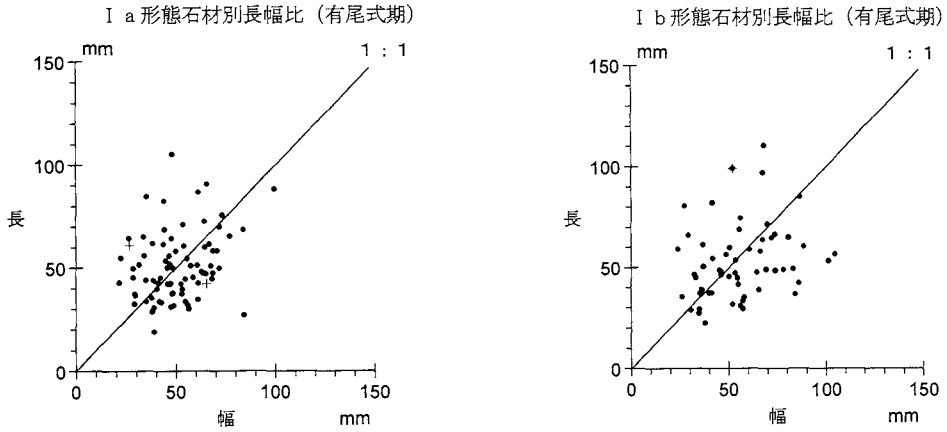
また、縦長形状のものは抉れを入れれば石匙Ｂとなり、この形態との親和性は高い。

Ｉｂ形態（同第229図）　帰属率60％の住居址では58点を数える。形状とサイズは第138図のグラフのとおりであり、他の形態とほぼ同じである。縦長形状（１～６）、幅広・横長形状（７～21）がある。11・22・23は角打ち技法によって作出された剝片を素材としている。また、片面調製のもの（ＩbU形態）は74.1％であり、Ｉａ形態よりも頻度が低い。それ以外はＩａ形態とほぼ同じ傾向を示している。

II形態（同第232図）　帰属率60％の住居址では195点を数える。縦長形状（１～７）、幅広・横長形状（８～23）がある。５・７は角打ち技法によって作出された剝片を素材としている。片面調製のもの（IIU

時期	形態		個数	石材												
				I		II				IIIa		IIIb		IV	V
				BAn	Sh	HSS	Sch	Ho	An	他	SS	Tf	Sc	GrR	
全体	Ia	B	38		35	2			1						
	Ia	U	183	2	179				1			1			
	Ib	B	72	1	69				2						
	Ib	U	140	5	134				1						
	Ib		1	1											
	II	B	592	15	536		3		30		2		5	1	
	II	U	764	22	687		1	1	48	1		1	1	2	
	II		1		1										
	III	B	162		158				3					1	
	III	U	290	4	281				3		1			1	
	III		7		7										
	不明		1		1										
	合計		2251	50	2088	2	4	1	89	1	3	2	6	5	
有尾式期	Ia	B	10		9	1									
	Ia	U	71		70							1			
	Ib	B	14		14										
	Ib	U	43		42				1						
	Ib		1	1											
	II	B	81	1	76		1		3						
	II	U	114	4	105				4			1			
	II		0												
	III	B	36		36										
	III	U	60	1	59										
	III		0												
	不明		1		1										
	合計		431	7	412	1	1	0	8	0	0	2	0	0	
諸磯b式期	Ia	B	15		14				1						
	Ia	U	55	1	54										
	Ib	B	31	1	29				1						
	Ib	U	55	3	52										
	Ib		0												
	II	B	275	9	243		1		18		1		3		
	II	U	337	8	300		1		26	1			1		
	II		1		1										
	III	B	62		60				2						
	III	U	114	2	110				2						
	III		5		5										
	不明		0												
	合計		950	24	868	0	2	0	50	1	1	0	4	0	

第147表　スクレイパーB類の時期別形態と諸属性



第138図　スクレイパーB類の長幅比（1）

形態）は58.5%であり、両面調製が用いられる頻度がＩａ・Ｉｂ形態に比べて高い。また、原礫面を表面に大きく残すもののが比較的多い点もこの形態の特徴である。こうした点はIII形態と共通性を有している。

III形態（同第234図）　帰属率60%の住居址では96点を数える。縦長形状（１～７）、幅広・横長形状（８～22）が存在している。６・９・11・12は角打ち技法によって作出された剥片を素材としている。この形態の場合、調製と使用による微細剥離が区別し難いものも多いが、片面調製のもの（IIIU形態）が62.5%であり、II形態とほぼ同じ傾向を示している。また、表面に原礫面を大きく残すものも多く、素材の選択にも共通性が認められる。

諸磯ｂ式期のスクレイパーＢ類（ScB）　この時期の帰属率60%の住居址では950点を数える。II形態が64.5%を占めており、III形態19.1%、Ｉａ形態7.4%、Ｉｂ形態9.1%と他の形態を圧倒している。II形態が多いのは、この時期に同じ調製技術で大量生産されている打製石斧II形態との関連性が考えられる。また、両面調製によるものが40.3%を占めており、有尾式期に比べると増加しているが、これも打製石斧の調製技術に連動した現象と推定される。

次に、表面と裏面の剥離方向を観察すると、打撃方向が同一のものと、大きく異なっているものが並存している。有尾式期と同様に、一次剥離段階で打面を固定して剥離を進行する方法と、打面を頻繁に転移しつつ剥離を進行する方法が並存していたことによる。前者では、表面に対向方向からも剥離が認められるものがしばしば存在しており、これらは打製石斧II形態の調製剥片が素材とみられる。この時期のScBが打製石斧の製作と連動していることの論拠となる資料である。また、後者では、依然幅広で逆三角形のものが目立つが、これらは中形原石から作出された剥片を素材としているものが多いと推定される。

各形態の形状と大きさは第138図のとおりであり、長幅比１：１を中心とした形状で、３～８cm程度に集中する。Ｉａ形態がやや横長指向であるのに対し、III形態はやや縦長指向であるが、基本的には素材剥片は各形態で共用していると判断される。

石材は頁岩が91.4%を占めており、有尾式期と同様に石材選択性は極めて高い。

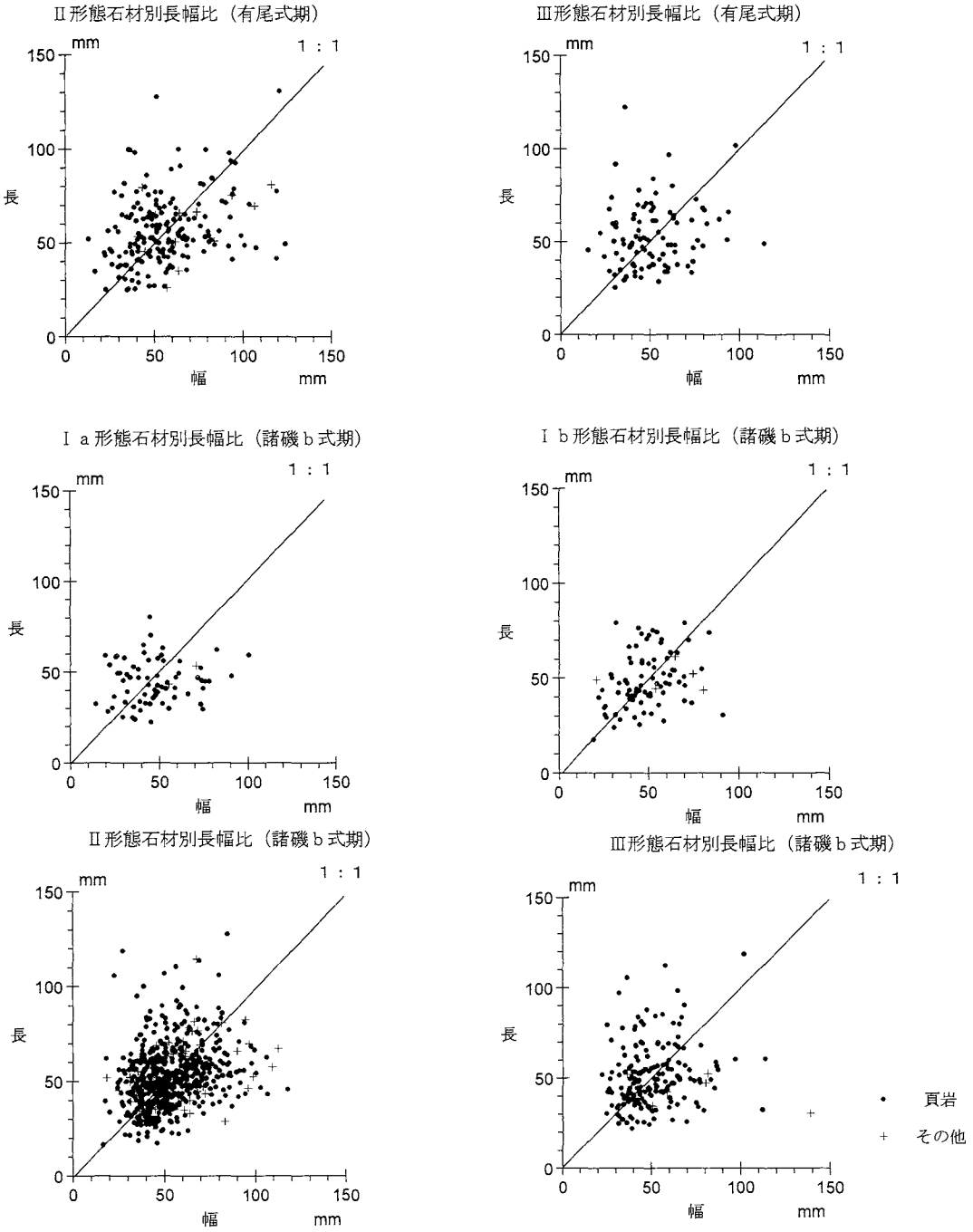
Ｉａ形態（同第230図）　帰属率60%の住居址では70点を数える。縦長のもの（１～７）と幅広・横長のもの（８～25）が存在する。縦長形状のものは石匙Ｂに近い形状であるので親和性は高い。２・17は角打ち技法によって作出された剥片を素材としている。また、横長形状で表面に上下両方向から剥離が複数認められるもの（20・22・24）は、打製石斧調製剥片が素材と推定される。片面調製のもの（ＩaU形態）が78.6%を占めており、この形態は有尾式期同様に片面調製の比率が高い。

Ｉｂ形態（同第231図）　帰属率60%の住居址では86点を数える。縦長形状のもの（１～６）、幅広・横長形状のもの（７～21・23・24）、石核状のもの（22）が存在する。２・４・５は角打ち技法によって作出された剥片を用いたものである。横長形状のものの中には打製石斧調製剥片を素材としたもの（18・19）が存在する。なお、石核状のものは円盤状石器に分類したものと類似している。こうしたものは中形原石から打面転移を頻繁に繰り返す剥離技法によって剥片Ｂ類を生産した残核が素材と判断される。また、片面調製のもの（ＩbU形態）は64.0%であり、III形態とほぼ同率である。

II形態（同第233図）　帰属率60%の住居址では613点を数える。縦長形状のもの（１～５）、幅広・横長

形状のもの（7～10・12～18)、石核状のもの（6・11）が存在する。横長形状のもののうち、13・15・17は打製石斧調製剝片を素材としたものである。また、片面調製（IIU形態）55.0%、両面調製（IIB形態）45.0%とほぼ拮抗している。打製石斧II形態は両面調製を基本としており、同じ両面調製の手法がこの形態には広く適用されていたことによるとみられる。

III形態（同第235図）　帰属率60%の住居址では181点を数える。縦長形状のもの（1～7)、幅広・横長形状のもの(8～22)が存在する。横長形状のもののうち、16・17・19～22は打製石斧調製剝片を素材とし



第139図　スクレイパーB類の長幅比（2）

たものである。これらのものは打製石斧II形態の製作工程の中に組み込まれていることが確認できる資料として重要である。この形態では片面調製（IIU形態）63.0%であり、I b形態とほぼ同じ比率である。

リタッチド・フレイクB類（RFB）　剝片の縁辺1／2以下に微細な剝離が観察されるものを本器種としている。スクレイパーB類III形態と近い存在であるが、より使用された可能性の低い器種である。この中には実際に使用されていないものも含まれていると推定される。石材が風化している場合や、安山岩のように肌理の粗い石材では、微細な剝離が観察できないので、実際にはこの器種はさらに多いとみられる。

遺跡全体では214点検出されている。内訳は第148表のとおりである。以下、時期別に特徴を述べる。

有尾式期のRFB　帰属率60%以上の住居址では45点検出されている。石材は頁岩100%であり、石材占有率は極めて高い。第140図のグラフのように形状・サイズはScB・III形態とほぼ同じである。

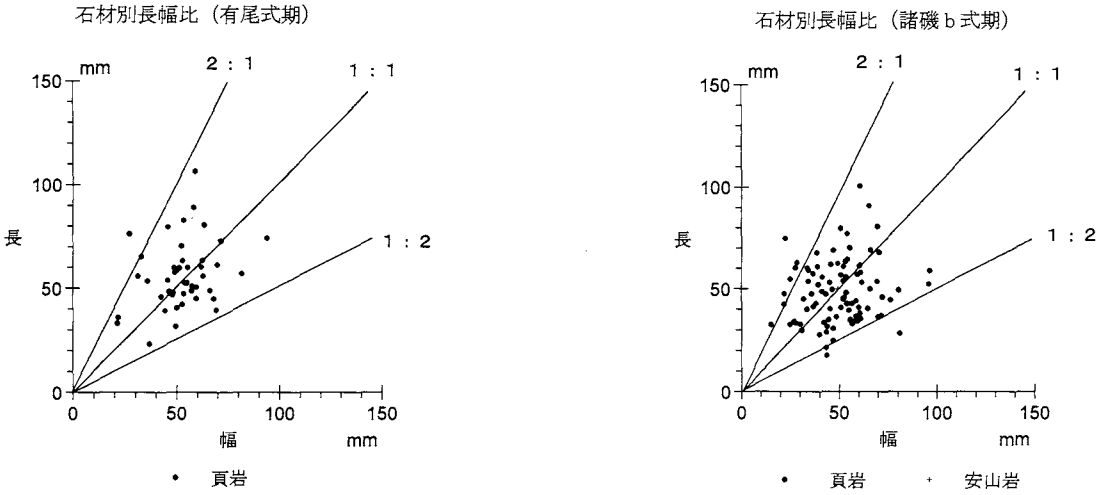
諸磯b式期のRFB　帰属率60%以上の住居址では93点検出されている。石材は頁岩97.8%であり、石材占有率は極めて高い。第140図のグラフのように形状・サイズはScB・III形態とほぼ同じであり、有尾式期のものと比較しても大きな違いは認められない。

円盤状石器（遺物編第221図9～12）　素材となる剝片を横方向に回転させながら直接打撃［D］で調製剝離を行い、円盤状に整形したものである。石核素材のScBと考えることもできる器種であり、その場合すべてII B形態に分類される。直接打撃系列の素材剝片作出方法を知る上で意味のある資料である。

遺跡全体で14点検出されている。有尾式帰属率60%以上の住居址では1点、諸磯b式帰属率60%以上の住居址では6点である。図示したものはすべて諸磯b式期のものである。

全体				有尾式期				諸磯b式期			
個数	石材			個数	石材			個数	石材		
	I	II	IIIa		I	II	IIIa		I	II	IIIa
	BAn	Sh	An		BAn	Sh	An		BAn	Sh	An
212	1	207	4	45	0	45	0	93	0	91	2

第148表　RFBの時期別石材



第140図　RFBの長幅比

三角錐形石器（遺物編第221図13）　諸磯ｂ式期の住居址から出土しているが、技法・形状・使用痕からみて、北関東地方の早期段階に特徴的な三角錐形石器である。何らかの原因で混入したものとみられる。今回の調査では、この段階の土器を識別することができなかったが、この時期にも小規模な遺跡が形成されていた可能性もある。

ミニチュア打製石斧（遺物編第221図14・15）　14はⅡ形態の打製石斧を忠実に模して製作されたミニチュア打製石斧である。調査区から出土しているが、両面調製技法により製作されていることと、他のミニチュア製品がほとんど諸磯ｂ式期であることとから、本例もこの時期のものと推定される。

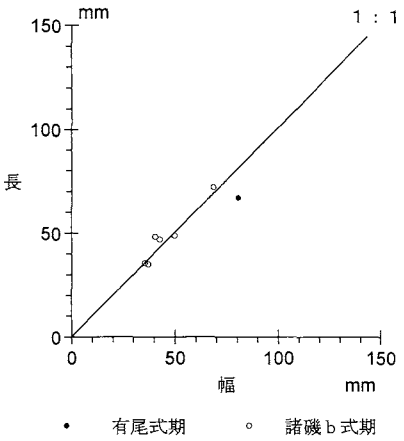
また、15は片面調製技法によって製作されており、技術的にみてⅠ形態と共通する。また、帰属率からみても有尾式期のものであることは間違いない。ただし、この石器の場合、実用性も有しており、ミニチュア石器ではなく小形のScBの可能性もある。

石核Ｂ類（遺物編第236図１～５・第237図１～９）　遺跡全体で253点検出されている。内訳は第150表のとおりである。ここに図示したものはその一部である。本来であれば、多くの資料を提示し、技術形態学的分類を試みる必要があるが、特徴的なものを示すことで、この時期の剥片剥離技術の一端を述べることにする。

なお、遺跡内で検出された石核Ｂはすべて中形・小形剥片を作出するためのものであり、スクレイパー類の素材剥片を作出することを目的としたものである。以下、時期別に特徴について述べる。

全体					有尾式期					諸磯ｂ式期				
個数	石材				個数	石材				個数	石材			
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲa	Ⅴ		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲa	Ⅴ		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲa	Ⅴ
	HSh	Sh	An	Sc		HSh	Sh	An	Sc		HSh	Sh	An	Sc
14	1	11	1	1	1	0	1	0	0	6	1	4	0	1

第149表　円盤状石器の時期別石材



第141図　円盤状石器の長幅比

有尾式期の石核Ｂ類（同第236図１～５）　帰属率60％以上の住居址では27点を数える。大きさ及び形状は第142図のグラフのとおりである。３～10cm程度の大きさで、やや横長形状のものが多い。大きさからみて、ScB などの素材となる中形・小形剝片作出用と推定される。また、安山岩製のものと頁岩製のものは、大きさである程度区別され、安山岩製のものは７cm以上の大きさである。石材別では頁岩が77.8％を占め、残りは安山岩である。

石核の形状は多様であるが、図示した代表的なものについて次に述べる。

１・２は打面と作業面を固定して剝離作業を進行させるものである。１は原礫面を打面として固定し、比較的小形の幅広剝片を連続的に作出するもので、最終的にやや棒状の形状となる。２も打面と作業面を固定させて小形幅広剝片を作出しているが、ある程度剝離が進行すると打面と作業面を転位させている。これらは大形剝片を石核素材としており、さらに前段階の石核の存在が推定される。

３は「角打ち技法」が適用された石核である。打面の側面部に調製を施して角を作出し、ここに打撃を加えて角打ち剝片を剝離するものである。この例では５の円盤状石核にみられる剝離技術も併用されている。４は作業面も打面も固定させず、回転させながら求心状に剝離作業を進行させてゆくものである。中形幅広剝片を作出している。最終的にサイコロ状となる。５は打面と作業面を交互に変化させつつ、水平に回転させて剝離を進行させてゆくものである。中形～小形幅広剝片が連続的に作出され、最終的に円盤状となる。円盤状石器と同じ剝片剝離技術にゆるものである。

諸磯ｂ式の石核Ｂ類（同第237図１～９）　帰属率60％以上の住居址では99点を数える。大きさ及び形状は第142図の長幅比グラフのとおりである。３～13cmほどの大きさで長幅比は１：１程度の形状のものである。安山岩製のものの方がやや大振りである。一部は打製石斧用の大形素材剝片を作出した可能性のあるものも含まれているが、実見した限りでは基本的に ScB 用の中形・小形剝片を作出したものである。石材別では頁岩78.6％であり、残りは安山岩である。

以下、図示した代表的な石核Ｂについての剝離方法を述べる。

２は打面と作業面を固定させて剝離を進行させてゆくもので、中形の横長剝片が連続的に作出されている。打面は原礫面で、両設打面としている。また、３は打面も作業面も固定させずに、回転させながら剝離を進行させてゆくものである。

１・４は作業面と打面を固定させて求心状に剝離を進行させてゆき、ある程度剝離が進行すると、あるいは剝離の限界点に達すると打面調製を行い、再び同じ作業面で剝離を進行させてゆくものである。比較的小形の幅広剝片を作出している。４の剝離面を観察すると、打点が打面の角にくるものが認められ、角打ち剝片が剝離されている。こうした石核が「角打ち技法」に伴う石核とみられる。「角打ち技法」により作出された剝片では原礫面打面のものも多く、必ずしも打面調製を必要としない。むしろ、打面に隣接した面（打面の側面）に調製を加え角を作り出す点に大きな特徴がある。５も角打ち技法が適用された石核である。この例では部分的に円盤状石核の技法が適用されており、１・４と８・９の中間的な存在である。

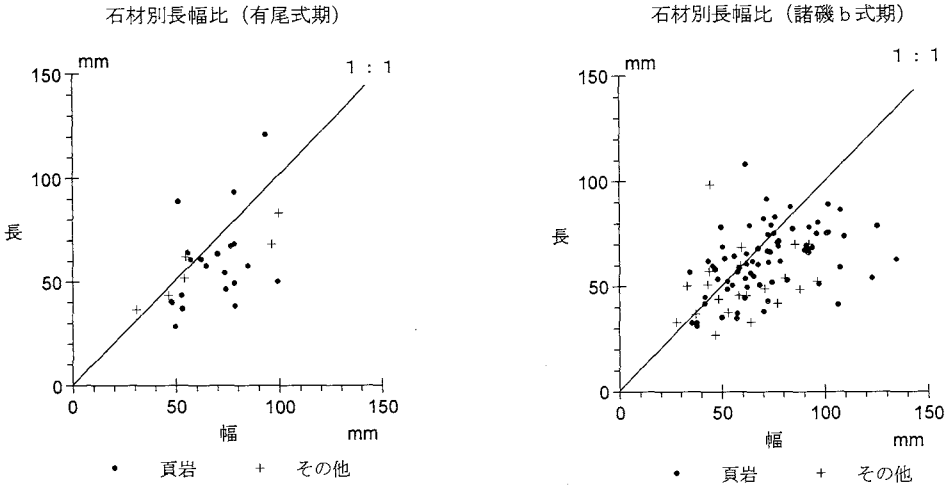
６・７は作業面を固定し、水平に回転させながら求心状に剝離を進行させてゆくものである。これらは原礫面をそのまま打面としている。

８・９は打面と作業面を交互に変化させつつ、水平に回転させて剝離を進行させてゆくものである。中形～小形幅広剝片が連続的に作出され、最終的に円盤状となる。

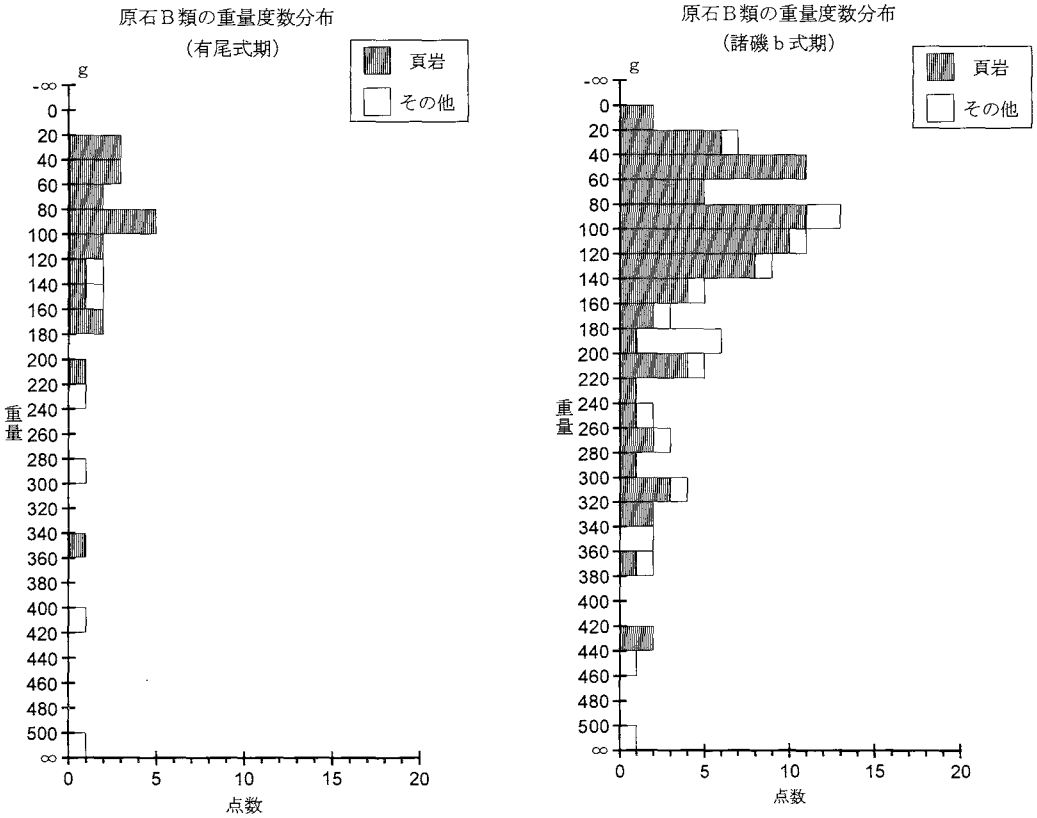
以上のように、剝片剝離技術は複数存在しており、ここでは技術が異なる例を示したが、これらの技

全体					有尾式期					諸磯b式期				
個数	石材				個数	石材				個数	石材			
	II			IIIa		II			IIIa		II			IIIa
	BAn	Sh	Ho	An		BAn	Sh	Ho	An		BAn	Sh	Ho	An
253	13	200	0	40	27	1	21	0	5	99	7	78	0	14

第150表　石核B類の時期別石材



第142図　石核B類の長幅比



第143図　石核B類の重量度数分布

術が複合的に適用されている例も多い。原石の形状により、あるいは目的とする剝片の形状により、多様な技術の中から臨機的に選択されて剝離作業が行われていたことを示している。作出される剝片の形状が一定でないのは、そもそも目的器種であるScBを一定の形状にしようとする意識が低かったことに原因がありそうである。その背景にはこの時期大量に出土するScBは、便宜的・使い捨て的な器種であったことに要因があったと推測される。また、ある程度形状に共通性のある石匙Bにおいても調製により意図した形状に整形できることともあり、素材の形状に対する意識は低かったと推定される。

大形素材剝片B類（遺物編第236図6～9・第237図10～12）　ここで素材剝片と呼ぶものは、打製石斧の素材となり得る大形剝片である。遺跡からの出土数は非常に少なく、全部でも図示したものの2～3倍程度に過ぎない。こうした状況はすでに大下原遺跡でも確認されており、一般的な傾向と判断される。打製石斧は遺跡全体で1,000点以上を数えるのに対し、素材剝片の出土数は極めて少ない。また、こうした素材剝片を作出したとみられる石核も原石も皆無である。したがって、素材剝片は遺跡外の場所、おそらく原石採取場所か、その付近の場所で作出されていたものと判断される。現在のところこうした製作遺跡は発見されていないが、原石の推定サイズから判断して鏑川上流域（おそらく下仁田町付近）に存在していると推測される。なお、石器組成の項でも述べているように、遺跡内から出土した打製石斧調製剝片の数も絶対的に不足しており、こうした素材剝片を作出した場所で打製石斧の製作作業も行われていたとものとみられる。以下、時期別に具体的資料により述べる。

第236図6～9は有尾式期のものである。6・7は打面の角を打撃して作出された「角打ち剝片」である。こうした逆三角形の大形剝片は打製石斧I形態の素材と推定される。8・9は原礫面を打面として、求心状に剝離を行って作出された剝片である。打製石斧I形態でもII形態でも素材となり得る大形剝片である。これらは原礫を輪切り状態に剝離していったようにも見え、1つの大形原石から複数の素材剝片を剝離していたことが窺える。

第237図10～12は諸磯b式期のものである。いずれも表面に大きく原礫面を残しており、大形原石からの最初の剝離によって得られた剝片とみられる。そのため、どのような技法によって作出されたものか手掛かりが極めて少ない。11・12の例からみても、相当大きな原石が必要であったことが分かる。これらは打製石斧II形態の素材剝片として最適のものと推定される。

原石B類　遺跡全体で19点検出されている。内訳は第151表のとおりである。時期別にみると、有尾式期3点、諸磯b式期6点である。

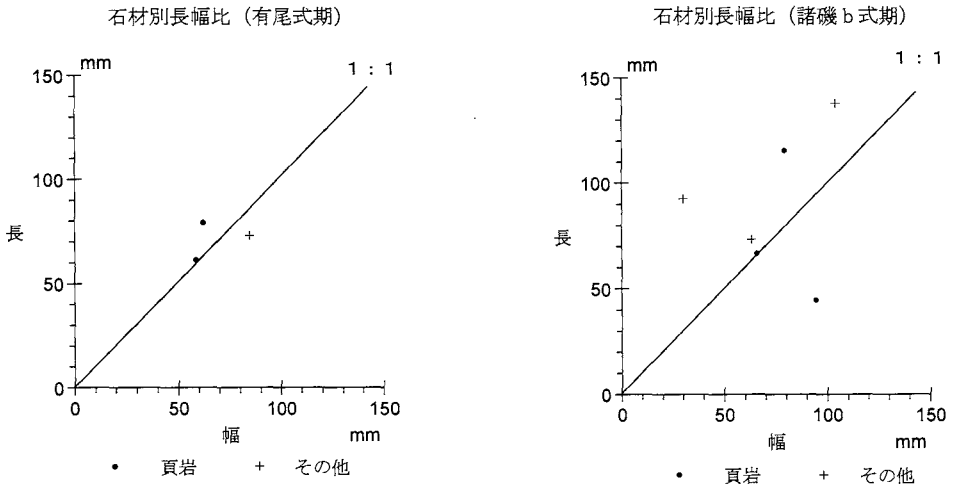
有尾式期のものは5～8cm程度の中形原石であり、ScBなどの素材剝片作出用とみられる。この中で1点はホルンフェルス製であり、渡良瀬川流域からの搬入品の可能性がある。

諸磯b式期のものは10cmを越える大形原石が2点あり、打製石斧の素材剝片を作出することが可能なものである。また、石材は半数を占め、残りは安山岩である。安山岩は実際には打製石斧では少なく、実際に剝片剝離用として搬入したものかどうか疑わしい点もあるが、打製石斧が製作可能なものということで原石Bとした。400g以下のものが大部分であり、中形原石の標準的な大きさはこの程度と推定される。

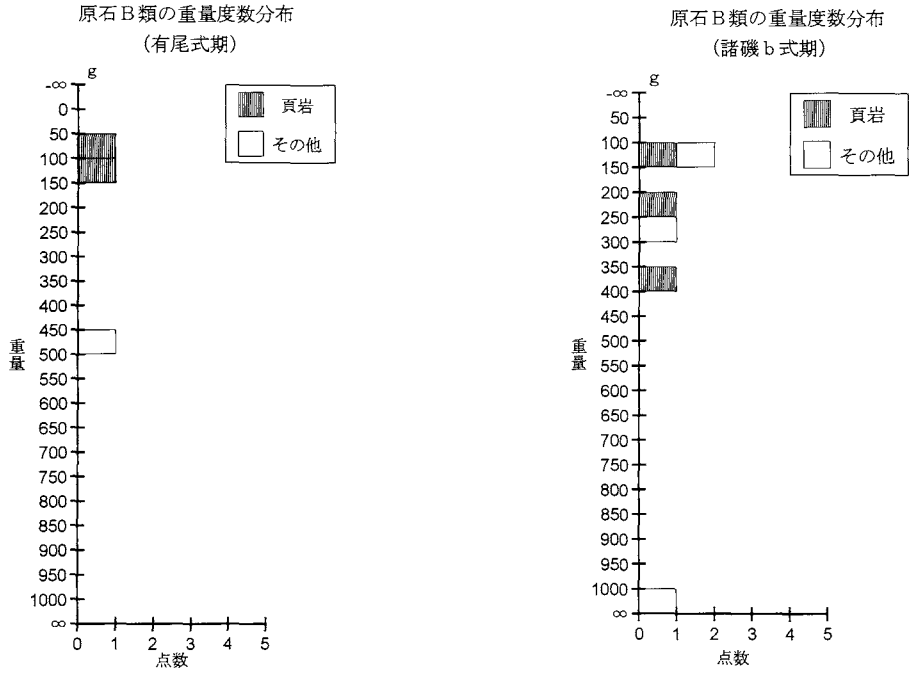
（大工原　豊）

全体					有尾式期					諸磯b式期				
個数	石材				個数	石材				個数	石材			
	I	II	IIIa	V		I	II	IIIa	V		I	II	IIIa	V
	BAn	Sh	Ho	An		BAn	Sh	Ho	An		BAn	Sh	Ho	An
19	1	13	1	4	3	0	2	1	0	6	1	3	0	2

第151表　原石B類の時期別石材



第144図　原石B類の長幅比



第145図　原石B類の重量度数分布

［C１類石器］

磨石（遺物編第238図～第240図）　原則として使用により磨滅した面（磨り面）が確認され、手で握った際、掌からはみ出す程度の大きさのもので、磨り面が扁平のものである。側面に敲打面が存在するものも含むが、原則として扁平面に凹のあるものは含まない。凹石とは凹の有無で区別している。多くの遺跡で同じ基準で分類を行っているが、凹石と磨石の比率が前期ではほぼ一定であることが今回の石器組成分析で確認され、有意の分類基準と考えて良さそうである。基本的にはⅠ形態（円形）、Ⅱ形態（楕円形）、Ⅲ形態（棒状）、Ⅳ形態（四角形）、Ⅴ形態（不定形）に分類される。

遺跡全体で463点検出されている。内訳は第153表のとおりである。なお、ここに図示したものは土壙墓出土のもの全点と、帰属率の高い住居址出土資料のうち、標準的なものを選択している。

有尾式期の磨石（同第238図）　帰属率60％以上の住居址では57点を数える。形態別では、Ⅱ形態が61.4％と最も多く、次いでⅠ形態が22.8％である。それ以外の形態は極めて少ない。また、欠損率は36.8％である。そして、被熱の痕跡が認められるものは35.1％である。欠損率や被熱率は形態による違いはほとんど認められない。石材はすべて安山岩である。

図示したものはⅠ形態（１～５）、Ⅱ形態（６～10･14）、Ⅲ形態（棒状：11～13）である。なお、１・６・11には扁平面に弱い敲打痕が認められるので、凹石に分類した方が良いかもしれない。

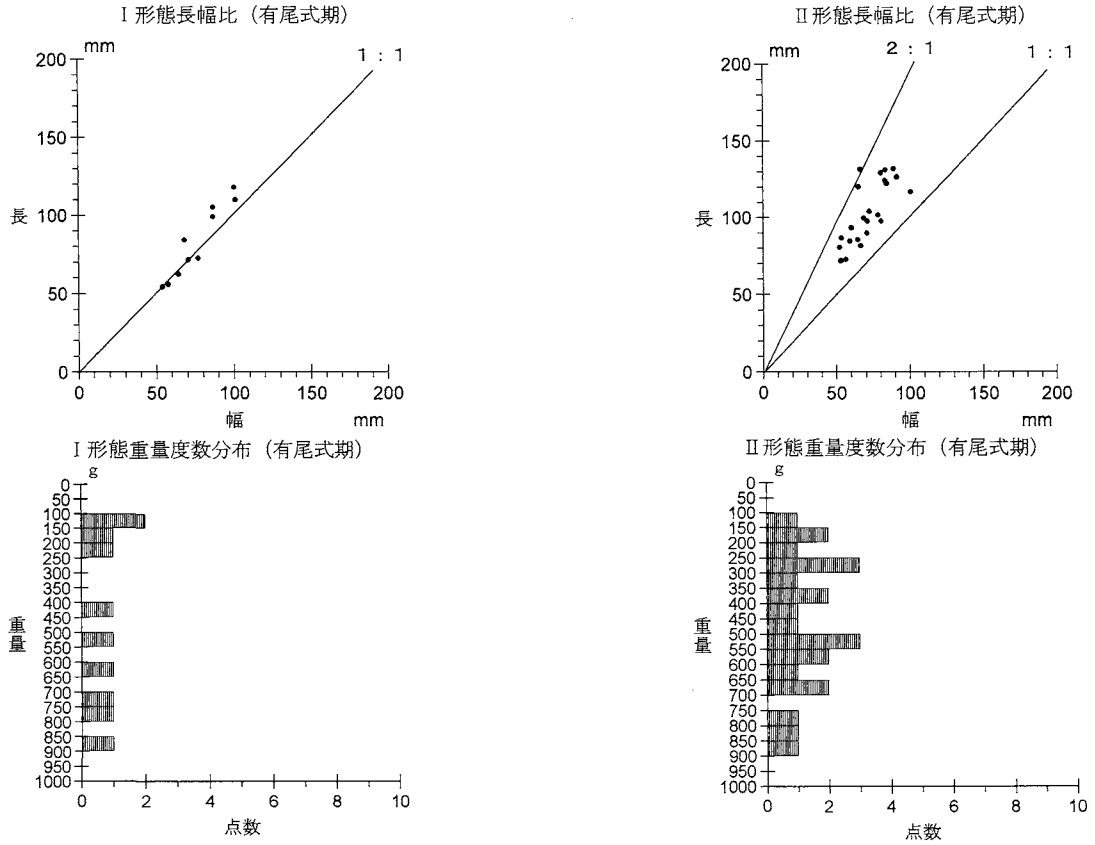
11・13には赤色顔料（ベンガラ）が付着しており、粉砕するために用いられた道具であった可能性が高い。磨石を短絡的に植物加工具とできない所以である。また、土壙墓の抱石として用いられていた４・14は小形であり、実用性に乏しい。

諸磯ｂ式期の磨石（同第239図･同第240図１～６）　帰属率60％以上の住居址では163点を数える。形態別では、Ⅱ形態が54.6％を占め最も多い。次いでⅠ形態（17.8％）、Ⅲ形態（7.4％）の順である。欠損率は41.7％と有尾式期よりもやや高い。これに対し、被熱率は34.4％と有尾式期とほぼ同じ傾向を示している。石材は安山岩が95.1％を占める。

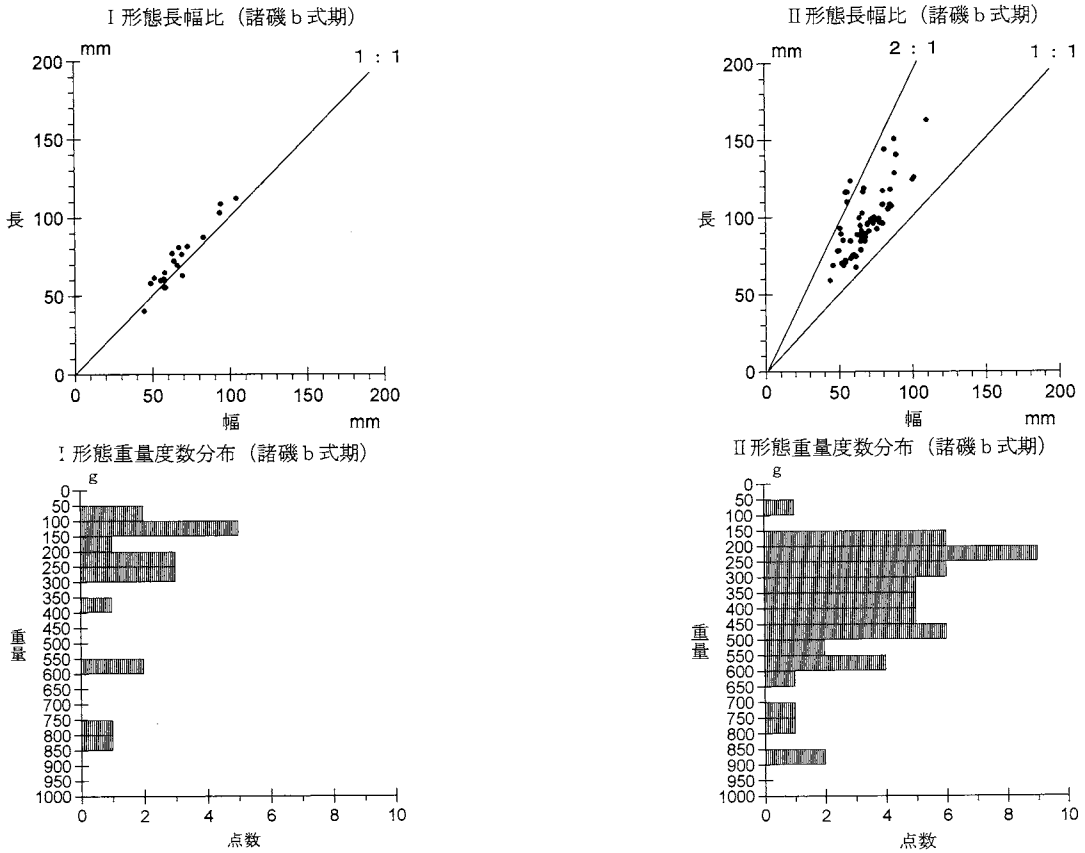
図示したものはⅠ形態（第239図１～４）、Ⅱ形態（第239図５～13・第240図１～４）、Ⅲ形態（第240図５～６）である。第239図５・６には扁平面に弱い敲打痕が観察されるので、凹石に分類することも可能な中間的なものである。土壙墓出土の第239図３・４・11～13は小形であり、実用性に乏しい。土壙墓の抱石として用いられたものに小形のものが多い傾向は有尾式期でも認められ、実用品とは区別された存在であった可能性もある。なお、第239図６は石英閃緑岩製である。この石材は利根川流域に多く存在するものであるが、本遺跡では稀少である。こうした隣接した他地域の石材を用いた石器の存在は集団間交渉と関連するものと推定され、注目される。

分類	全体										有尾式期										諸磯ｂ式期									
	個数	石材							欠損	被熱	個数	石材							欠損	被熱	個数	石材							欠損	被熱
		Ⅱ	Ⅲa		Ⅲb	Ⅳ	Ⅴ	他				Ⅱ	Ⅲa		Ⅲb	Ⅳ	Ⅴ	他				Ⅱ	Ⅲa		Ⅲb	Ⅳ	Ⅴ	他		
		Sh	An	他	SS	Sc	GrR					Sh	An	他	SS	Sc	GrR					Sh	An	他	SS	Sc	GrR			
Ⅰ	87	1	86						17	39	13		13						3	6	29	1	28						7	14
Ⅱ	244	6	236	1	1				77	75	35		35						11	13	89	4	84	1					24	32
Ⅲ	41		40			1			22	13	1		1						0	0	12		12						10	3
Ⅳ	4		4						3	1	1		1						1	0	3		3						2	1
Ⅴ	12		12						5	1	1		1						0	0	4		4						3	1
不明	74		70				1	3	62	17	6		6						0	0	26		24					2	22	5
合計	462	7	448	1	1	1	1	3	186	146	57	0	57	0	0	0	0	0	15	19	163	5	155	1	0	0	0	2	68	56

第152表　磨石の時期別形態と諸属性



第146図　磨石の長幅比と重量度数分布（有尾式期）



第147図　磨石の長幅比と重量度数分布（諸磯ｂ式期）

凹石（遺物編第241図～第248図）　全体で1,645点出土している。ここで凹石と分類したものは、手に持って使用することが可能な大きさのもので、扁平な面に凹が観察されるものである。凹石は磨石同様Ⅰ形態（円形）、Ⅱ形態（楕円形）、Ⅲ形態（棒状）、Ⅳ形態（四角形）、Ⅴ形態（不定形）である。また、凹石をよく観察すると、磨面の前にあけられた凹の痕跡が認められるものがしばしば存在している。また、手で触ってみると、凹の上端が引っかかる場合と、滑らかな場合がある。これは凹石の使用手順を示すものであり、この違いを大別することは有意な分類基準と成り得る可能性が高い。そこで、従前の報告書より凹と磨面との新旧関係から、ａ形態（磨面→凹）、ｂ形態（凹→磨面）、ｃ形態（凹のみ）に細分することにしている。

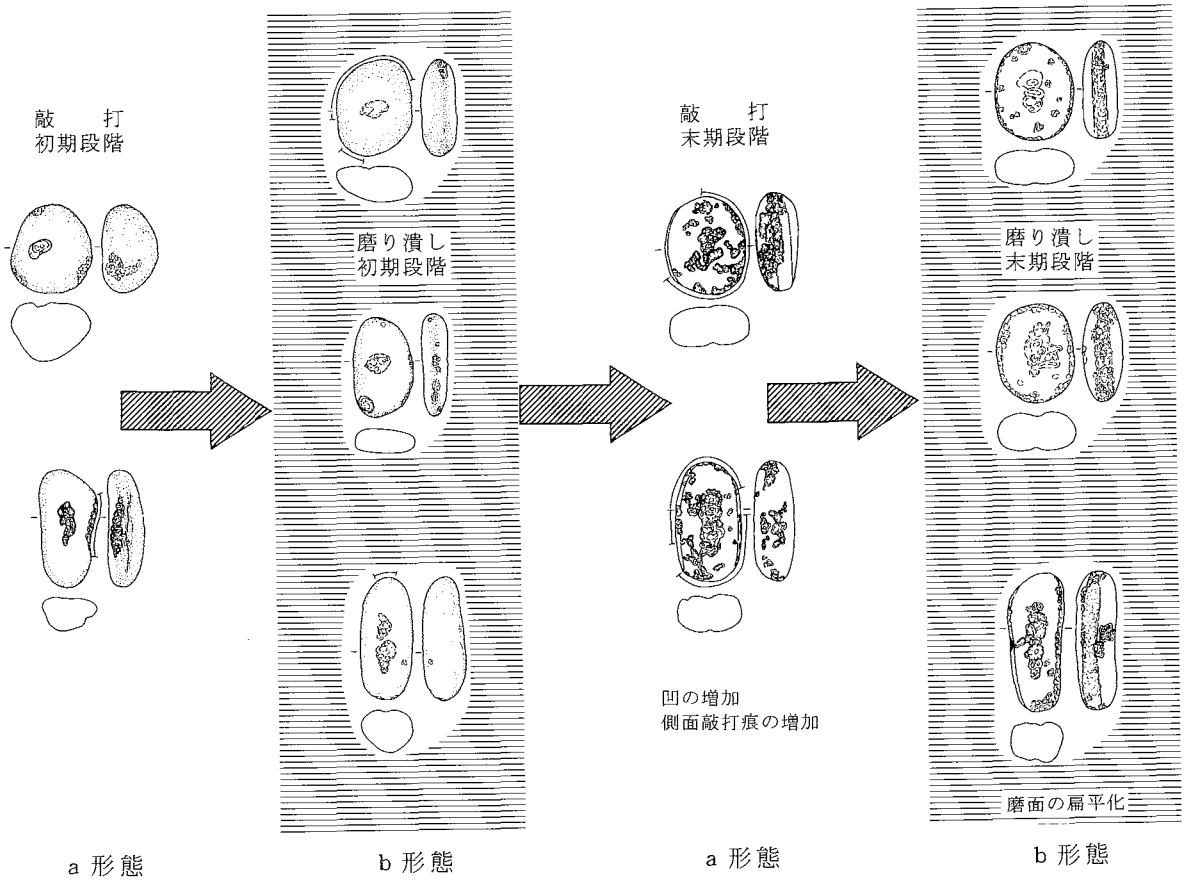
凹の状態を詳細に観察すると、小さな敲打痕の集合により凹を形成するものと、回転工具により漏斗状に凹を作出させたものが存在している。大部分は前者であり、一般的な凹の作出方法として縄文時代を通じて広く普及した方法であったのはほぼ確実である。

小敲打痕の形状をよく見ると、先の尖ったもので敲かれたと推定されるが、敲石と認定したものの中には、これに相当するものが見当たらない。明確に我々が敲石と識別できないような簡便な方法で凹が作出されていたとみられる。おそらく、遺跡内から多数検出される破砕礫の角などで、敲いて使用の都度簡単に作出されたものと考えられる。

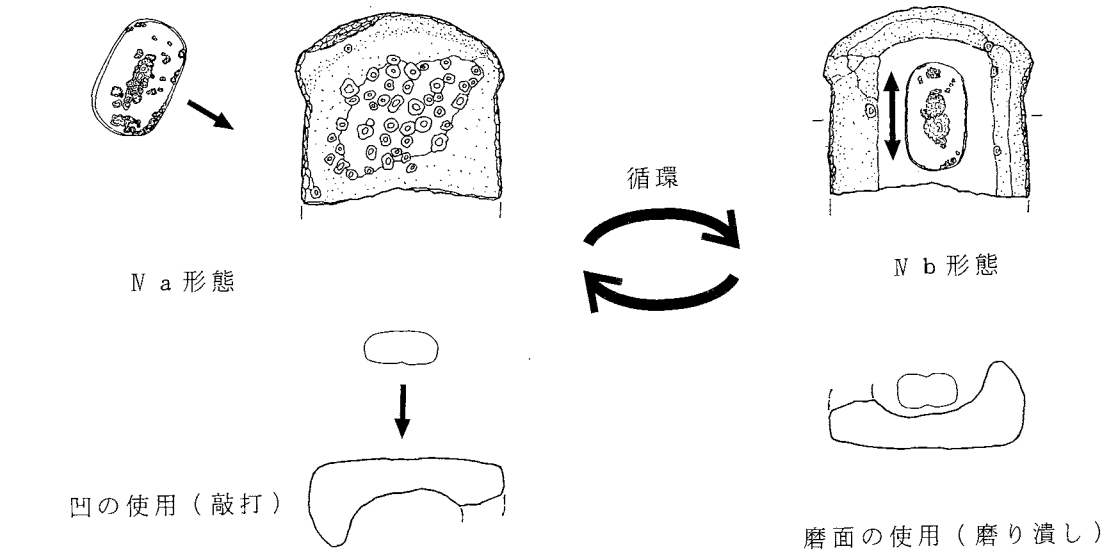
また、凹の状態を詳細に観察すると、凹が弱く局所的にしか認められないものから、凹が扁平面に広範囲に認められるものまで連続的に変移しており、完成品か未成品かといった概念で括ることができない。同じ理由で凹の数をカウントすることも使用頻度が高いものほど難しくなる。これは凹石が本来使

分類	全体										有尾式期										諸磯ｂ式期									
	個数	石材							欠損	被熱	個数	石材							欠損	被熱	個数	石材							欠損	被熱
		Ⅱ	Ⅲa		Ⅲb	Ⅳ	Ⅴ	他				Ⅱ	Ⅲa		Ⅲb	Ⅳ	Ⅴ	他				Ⅱ	Ⅲa		Ⅲb	Ⅳ	Ⅴ	他		
		Sh	An	他	SS	Sc	GrR					Sh	An	他	SS	Sc	GrR					Sh	An	他	SS	Sc	GrR			
Ⅰa	58	1	56		1				7	22	7	1	7						2	5	26		26						3	10
Ⅰb	87		86	1					15	40	22		22						2	11	22		22						6	12
Ⅰc	2		2						2	2	0		0						0	0	0								0	0
Ⅰ	20		19					1	3	6	6		6						1	2	2		2						0	0
Ⅱa	336	1	329	2	2	1	1		111	125	46		46						15	12	128	1	124	2	1				49	53
Ⅱb	616		608	1	2	2	2	1	224	209	71		71						16	20	227		222		1	2	2		95	82
Ⅱc	24		21		1	1		1	7	8	3		2			1			1	0	8		6		1			1	4	4
Ⅱ	79		76		2	1			33	25	13		13						5	6	25		23		1	1			13	8
Ⅲa	59		51		2	6			29	14	11		10			1			5	2	18		17		1				8	4
Ⅲb	132		129			2	1		60	36	9		8			1			0	4	49		47			2			27	11
Ⅲc	15		6			9			11	2	1		0			1			1	0	7		4			3			4	2
Ⅲ	25		20			5			14	7	1		1						0	1	11		9			2			4	2
Ⅳa	6		6						3	0	0								0	0	4		4						2	0
Ⅳb	13		12				1		8	1	0								0	0	3		2				1		2	0
Ⅳ	2		2						2	0	0								0	0	0								0	0
Ⅴa	36		29		7				17	9	7		4		3				2	2	14		11		3				8	4
Ⅴb	52		50		1		1		23	10	7		7						5	2	17		16		1				10	4
Ⅴc	27		19		3	5			11	6	1		1						0	0	10		7		1	2			5	2
Ⅴ	10		3		6	1			8	0	0								0	0	4				3	1			5	4
不明a	7		6		1				7	2	0								0	0	4		4						4	2
不明b	18		18						17	5	2		2						2	0	6		6						6	3
不明c	1		1						1	1	0								0	0	0								0	0
不明	20		17			2	1		15	5	1		1						1	1	10		8			1	1		6	0
合計	1645	2	1566	4	28	35	7	3	628	535	208	1	201	0	3	4	0	0	58	68	595	1	560	2	13	14	4	1	261	207

第153表　凹石の時期別形態と諸属性



凹石の時間的推移



四角形の凹石は四角形の石皿に対応する形で出現

凹石と石皿の使用方法と形態の循環

第148図　凹石の形態と使用方法

用されるにつれて、凹の形状や磨面の状態が変化する器種である所に由来する。凹石は使用痕系列の代表的な器種であり、使用されることによってはじめて石器と認定される道具である。したがって、使用頻度が高いほど（使い古されたものほど）我々にとっては理解し易いが、逆に使用頻度が少ないものは凹石と認識されていない可能性もある。

単なる搬入河川礫から凹石化する過程を理解することが、凹石分析の重要な視点である。そこで、使用頻度の低い個体を観察することで、凹石の形成過程を調べてみよう。

凹石は小敲打痕の集合による凹部分と、ものを粉砕する際の使用痕の観察される磨面、敲打痕が面的に形成される側面に分かれる。凹を用いる状態（a形態）と、磨面を用いる状態（b形態）が反復的に繰り返されている。使用頻度が個々の凹石の形状の偏差の要因である。廃棄された時点でa形態状態であるものと、b形態状態であるものが存在している。実際の資料では、有尾式期：a形態34.4％・b形態53.1％、諸磯b式期：a形態32.6％・b形態54.3％であり、時期に関わらずほぼ一定の割合でb形態の方が多い。これは磨面を使用している状態で作業が中断される場合が多かったことを示しており、磨面を使用する頻度が高く、あるいは期間が長かったためとみられる。

また、凹の形状を調べてみると、初期段階と推定される凹が部分的に存在しているものと、末期段階と推定される凹が広範囲に及んでいるものが存在している。側面の敲打痕も初期段階のものには少なく、末期段階のものではほぼ全周している。側面の敲打痕も徐々に増加しており、凹の形成と同時進行していたものと推定される。磨面の扁平化も末期段階のものほど進行しており、時間的推移とともに扁平化している。これを模式化したものが第148図上段である。

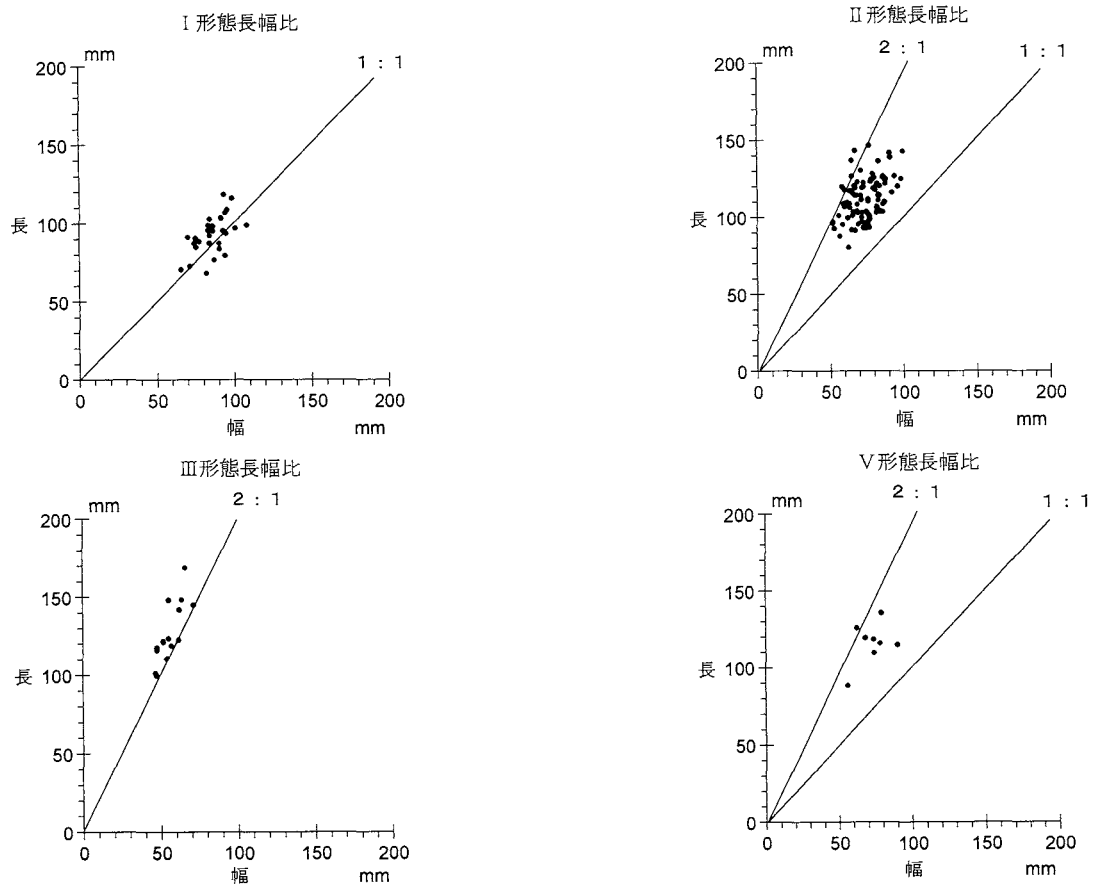
ところで、凹石と一緒に用いる石皿にも裏面に敲打による凹が密集しているものが存在する。この場合、石皿の裏面はa形態で敲打作業を行う際に利用されていたと判断される。また、言うまでもなく表面はb形態で磨り潰し作業に用いられていたものである。この二つの作業工程は循環して凹石化・扁平化が進行して行くと推定される（第148図下段）。

ちなみに、ここで示したⅣ形態（四角形）のものは、作業面が隅円方形となる石皿にピッタリと対応するように、最初から側面を敲打＋研磨し、整形されていたものと推定される。これ以外にもⅠ・Ⅱ形態で側面が丁寧に敲打＋研磨で整形されているものがしばしば存在している。これらの場合多孔質の安山岩が使用されるケースが多く、整形も容易である。こうしたものは、先に示したモデルとは異なり、当初から整形加工が施されていた可能性がある。

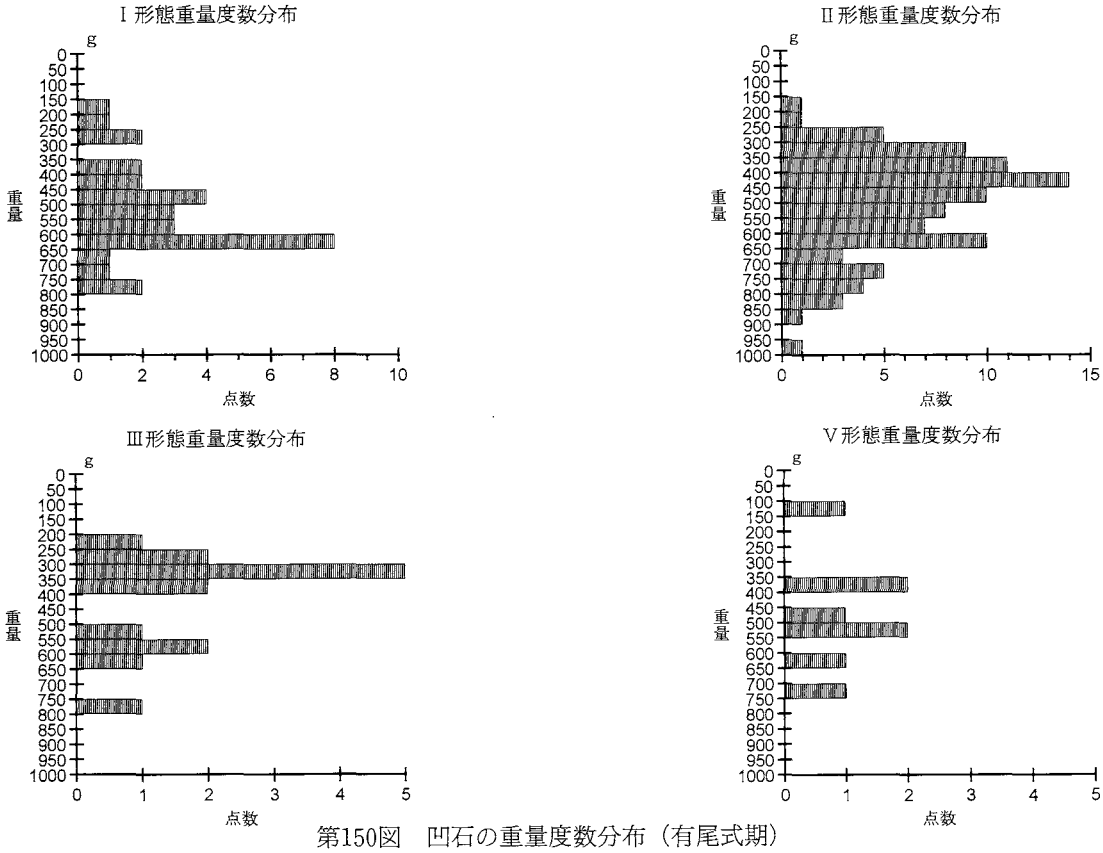
なお、実測図として図示したものは土壙墓出土のもの全点と、帰属率の比較的高い住居址出土のもので、特徴をよく示しているもの（すなわち末期段階のもの）が主体である。土壙墓出土のものに初期段階のものが多い傾向があり、凹石の耐用年数よりも先に使用者が死亡したことが、こうした資料が残存する要因と考えられる。

以下、時期ごとに特徴について述べる。

有尾式期の凹石（遺物編第241図～第243図）　帰属率60％以上の住居址では209点を数える。形状からの分類形態ではⅡ形態が63.6％を占め最多である。次いで、Ⅰ形態（17.2％）、Ⅲ形態（10.0％）、Ⅴ形態（7.7％）の順であり、Ⅳ形態は存在しない。また、窪みの在り方からの分類では、a形態34.4％、b形態53.1％、c形態2.4％であり、b形態がa形態よりも多い傾向が認められる。そして、細分形態でみた場合、Ⅱb形態が最も多く、34.0％を占めている。こうした傾向から、凹をあけた後にしばらく磨る行



第149図　凹石の長幅比（有尾式期）



第150図　凹石の重量度数分布（有尾式期）

為を行うことが一般的であったことを示している。次に欠損率をみると、27.8%を占めており、同じ時期の磨石に比べやや低い。また、明確な被熱の痕跡が認められるものは、32.5%と磨石とほぼ同じである。石材は安山岩が96.2%を占めている。

大きさと長幅比は第149図のとおりである。形状によって形態分類を行ったので、形態ごとに長幅比に差異が認められるのは当然の結果である。長さ8～15cm、幅5～10cm程度のものに集中しており、このサイズの河川礫が素材として選択の対称となっていたことが分かる。また、重量グラフ第150図をみると、形態により重さに偏りが認められる。Ⅰ形態では正規分布では450～500gにピークを持つが、600～650gにも突出した部分が認められる。後者は一般的な凹石とは異なる存在と推定される。Ⅱ形態では正規分布を示し、400～450gにピークが認められる。Ⅲ形態は二つのピークが認められ、300～350gと550～600gに二極分化している。これはⅠ形態と類似した傾向である。Ⅳ形態は個数が少な過ぎて傾向は見い出せない。

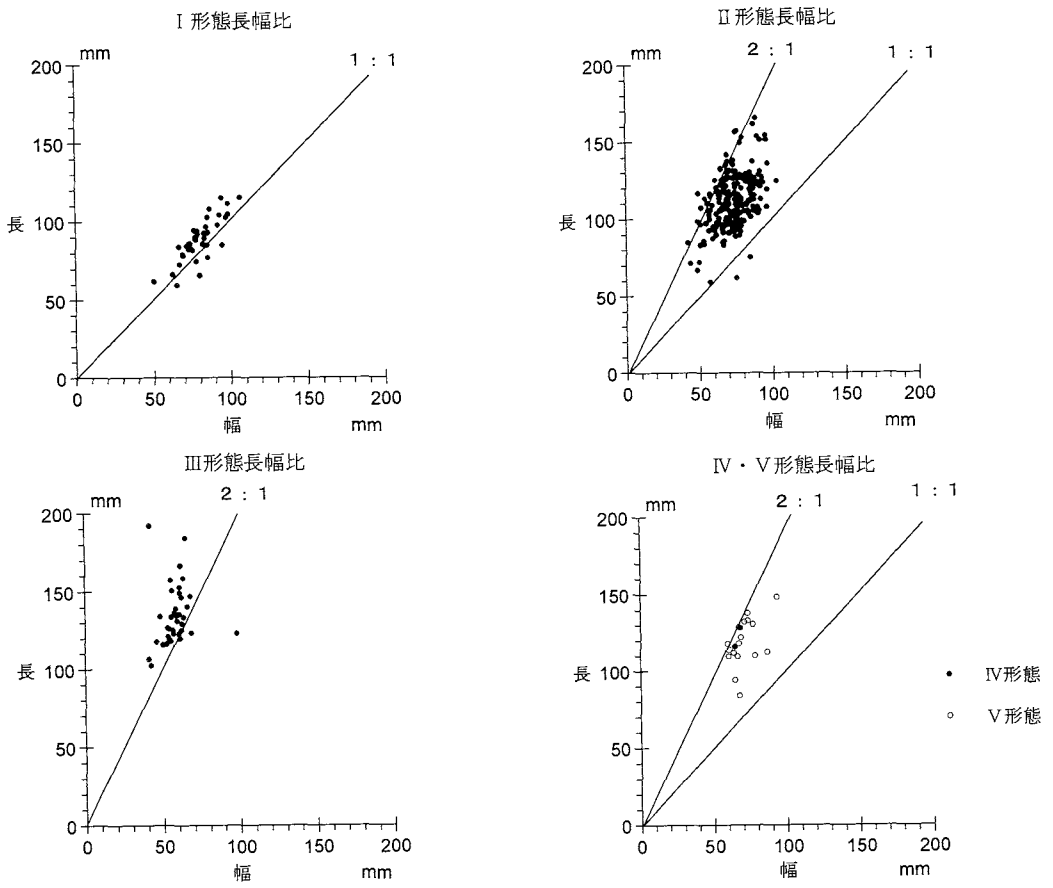
ここに図示したものは、Ⅰa形態（第241図1～3）、Ⅱa形態（第241図4・6～9）、Ⅲa形態（10・12）、Ⅰb形態（第242図1～3）、Ⅱb形態（第241図5・第242図4～12・第243図1～3）、Ⅲb形態（第243図4）、Ⅴb形態（第243図5）、Ⅲc形態（第243図6）、Ⅰ形態（第243図7・8）、Ⅱ形態（第243図9）である。凹は小さな敲打痕の集合によるものが多いが、しばしば回転工具により漏斗状に窪ませたものが認められる（第242図4）。

諸磯b式期の凹石（遺物編第244図～第248図）　帰属率60%以上の住居址では595点を数える。Ⅱ形態が65.0%と最も多い。次いでⅢ形態（14.1%）、Ⅰ形態（8.4%）、Ⅴ形態（7.9%）、Ⅳ形態（1.2%）の順である。Ⅳ形態（四角形）は有尾式期にはまったく存在していなかったが、この時期には一定数が存在している。これは石皿Ⅳa形態の出現に対応したものと推定される（第148図下段）。また、a形態32.6%、b形態54.3%、c形態4.2%であり、有尾式期とほぼ同じ傾向を示している。細分形態でもⅡb形態が38.0%を占めており、やはり有尾式期と同じである。次に欠損率をみると、43.5%であり、有尾式期とは大きく異なっている。しかし、被熱率は34.6%と、有尾式期とほとんど変わっていない。

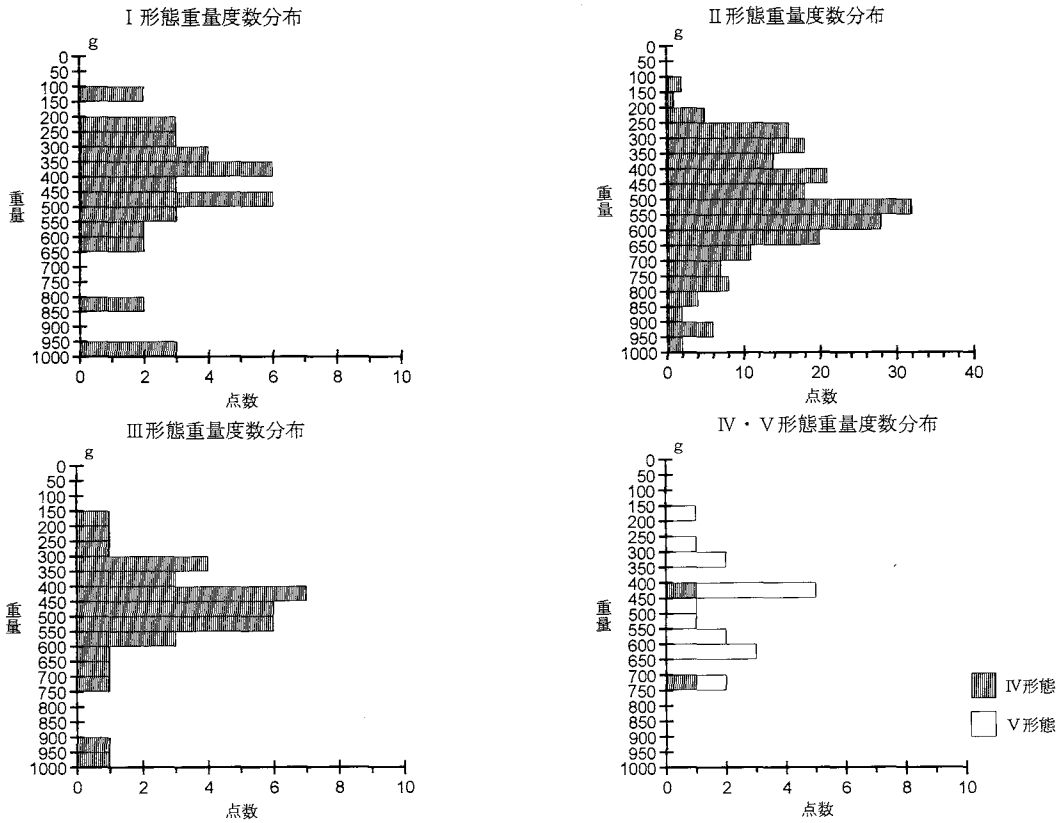
以上の分析結果からみて、欠損以外は有尾式期とほとんど変わっていないのに、欠損率だけが大きくなる。これは使用方法の変化とは考えられず、欠損に至るまで長期間使用されるようになったためと推定される。

大きさや重量の傾向は第151図・152図のとおりである。重量ではⅠ形態は350～500gに弱いピークが認められる。Ⅱ形態は正規分布を示し、500～550gにピークが認められる。Ⅲ形態はやや軽く、400～450gにピークが認められる。以上の結果のように、Ⅰ形態では有尾式期の方が重く、Ⅱ形態では諸磯b式期の方が重い傾向がある。時期により選択性に違いがあったものと推定される。

ここに図示したものは、Ⅰa形態（第244図1～3）、Ⅱa形態（第244図4～10）、Ⅲa形態（第244図11～13）、Ⅳa形態（第248図1・2）、Ⅴa形態（第248図3）、Ⅰb形態（第245図1～3）、Ⅱb形態（第245図4～12・第246図1～12・第247図1～6）、Ⅲb形態（第247図10～12）、Ⅳb形態（第248図5）、Ⅴb形態（第248図6）、Ⅱc形態（第248図7・8）、Ⅲc形態（第248図9）である。このうち、Ⅴb形態の例（第248図6）は磨製石斧の欠損したものを凹石に転用したものである。



第151図　凹石の長幅比（諸磯ｂ式期）



第152図　凹石の重量度数分布（諸磯ｂ式期）

石皿（遺物編第249図～第252図）　全部で366点検出されている。時期別・形態別・石材別の内訳は第　表のとおりである。平面形状から、Ⅰ形態（円形）・Ⅱ形態（楕円形）・Ⅲ形態（不定形）・Ⅳ形態（縁付き・四角形）に分類され、さらに磨面（作業面）の形状からａ形態（凹面）・ｂ形態（平坦）に区分される。

石皿は磨石・凹石とセットで用いられたと推定される器種であり、敲打作業の台石としての機能と、磨り潰し作業の受け皿としての機能を兼ね備えた器種である。前期中葉～後葉の石皿の特徴としては、下端部に掃き出し口が認められること、凹が磨面の縁に存在しているものが多く認められることが挙げられる。ちなみに、前期前葉では掃き出し口がないものが多く、凹も少ないので、ある程度識別することが可能である。

石皿は使用の過程で欠損するものも多く、全体の73.4％が欠損しており、小破片となったものも多い。ところが、ここでは遺跡を廃棄場所を含めてほぼ完掘しているにも関わらず、石皿の接合資料は極めて少ない。また、石皿を転用例としては、土壙墓の「立石」や「抱石」として再利用されるものが目立つ。その他、台石・敲石等への転用が認められるが、それほど多いものではない。したがって、破損したものの多くが遺跡外へ持ち出されていると考えざるを得ない。なお、中央から二分された例が多いが、実際の使用でこのような割れ方が一般的であったとは考え難い。おそらく、意図的に割られたものも多かったと推定される。

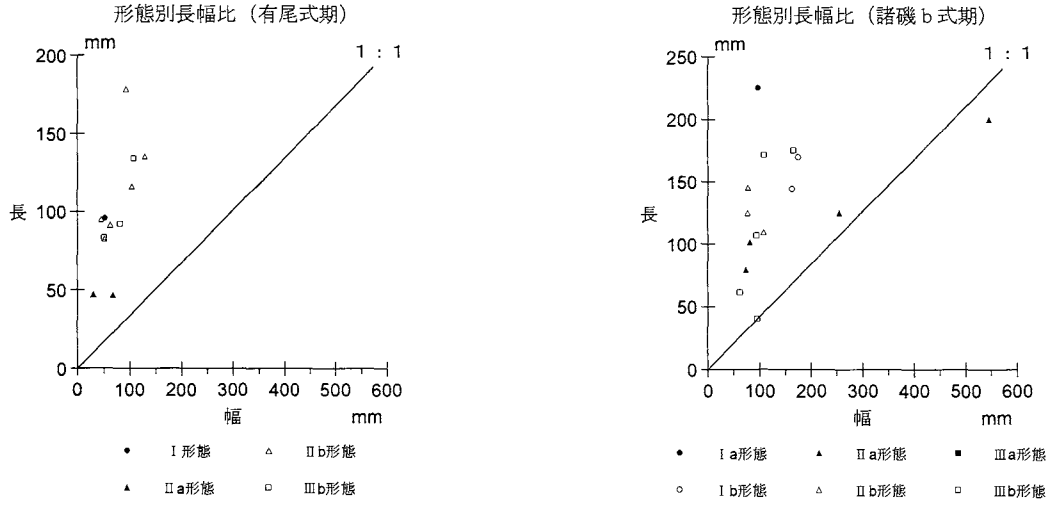
特殊な例としては、磨面中央への穿孔したものがある。穿孔例は本遺跡では３例存在する。第250図１・２・４で、時期は有尾式期・諸磯ａ式期・諸磯ｂ式期各１例である。いずれも穴の周囲が整形されており、意図的な穿孔が行われたものと判断される。また、すべて結晶片岩製であり、磨面の大きな湾曲は、長期間に及ぶ使用によって磨耗したものか、製作時に予め湾曲するまで研磨したものかは即断できない。穿孔する理由を考える上で重要なのは、１の出土状態である。これは住居内の柱穴中に特異であり、儀礼的行為に用いられた可能性もある。穿孔例は芳賀東部団地遺跡では諸磯ａ式期の住居址から検出されており、安山岩製である。

分類	全体							有尾式期							諸磯ｂ式期						
	個数	石材				欠損	被熱	個数	石材				欠損	被熱	個数	石材				欠損	被熱
		IIIa	IIIb	IV	V				IIIa	IIIb	IV	V				IIIa	IIIb	IV	V		
		An	SS	Sc	GrR				An	SS	Sc	GrR				An	SS	Sc	GrR		
Ⅰa	1	1						0							1	1					
Ⅰb	12	11	1			1	5	2	1	1			1	1	3	3					2
Ⅱa	42	20		21	1	29	4	3	2		1		1	1	18	8		9	1	14	1
Ⅱb	40	32	1	7		23	16	7	6		1		1	3	13	11		2		10	4
Ⅲa	1	1				1	0	0							1	1				1	0
Ⅲb	19	19				5	5	4	4				1		6	6				1	2
Ⅳa	12	12				12	1	0							10	10				10	1
不明a	68	28	2	38		65	3	2	2				2		39	17		22		38	2
不明b	12	9		3		7	0	3	3						6	5		1		3	
不明	168	74		94		142	26	12			12		12	4	68	24		44		56	4
合計	375	207	4	163	1	285	60	33	18	1	14	0	18	9	165	86	0	78	1	133	16

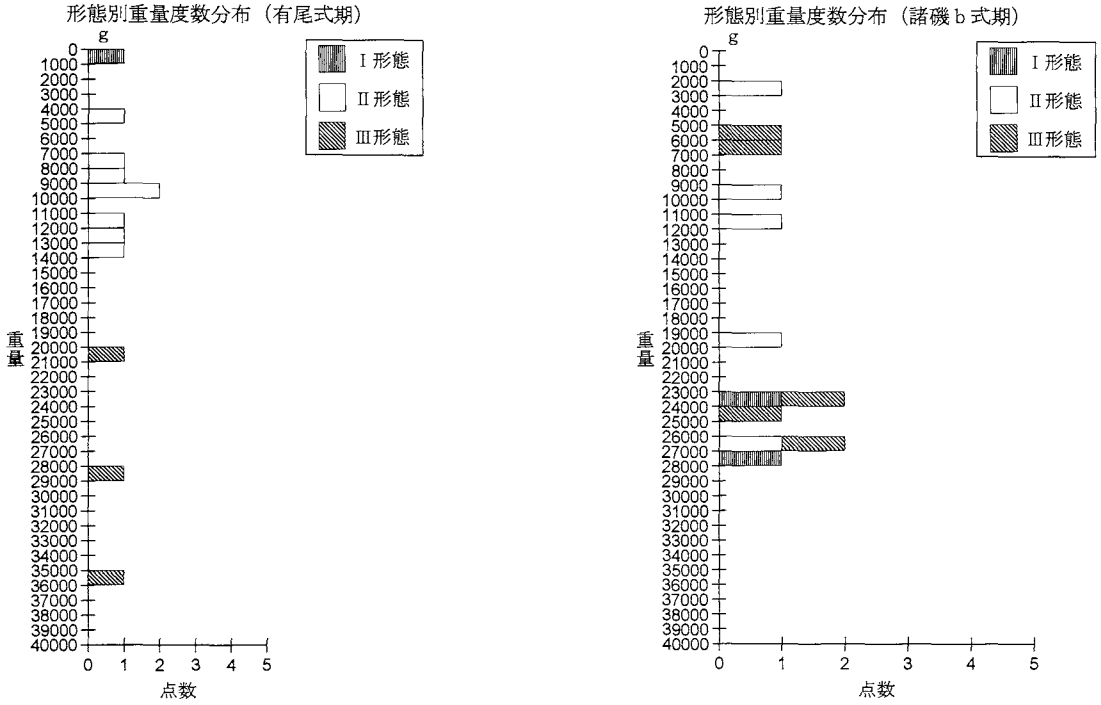
第154表　石皿の時期別形態と諸属性

石皿の穿孔や破砕行為についての、祭祀的性格を有していたことは、研究者の中でも共通認識化している(平出　1978、安達　1983)。今後はさらに詳細な時空的整理が必要となる。本遺跡の事例は、石皿を用いた祭祀行為としては、比較的初期段階の事例とみられ、プリミティブなかたちでの祭祀形態と考えられる。①土壙墓の「立石」・「抱石」といった埋葬施設への転用、②意図的穿孔と分割行為、③破損品の遺跡外への搬出、の3点を指摘することができる。追究する観点として留意する必要があろう。

ここでは、時期が明確なもの・土壙墓から出土したもの・形態的に特徴のあるものを図示することにした。これは本遺跡から出土した石皿のごく一部である。以下、帰属率60%以上の住居址出土の石皿について、時期ごとに特徴を述べる。



第153図　石皿の長幅比



第154図　石皿の重量度数分布

有尾式期の石皿（遺物編第249図１～３・５～８、同第250図１・５、同第251図７・８、同第252図８・13、第154表）　全部で33点を数える。IIｂ形態が最も多く21.2％（形態の分かるものでは43.8％）を占める。次いでIIIｂ形態12.1％(同25.0％)、IIａ形態9.1％(同18.8％)の順である。また、ａ形態は15.2％、ｂ形態は48.5％であり、ｂ形態の方が約３倍多い。欠損率は54.5％である。そして、被熱率は27.3％である。

石材をみると、安山岩が54.5％と最も多く、次いで結晶片岩が42.4％を占める。結晶片岩のものはほとんど形態不明のものであり、砥石（仕上砥）が含まれている可能性もある。

大きさや重量は第153図・154図のとおりである。完形品が少ないため、傾向をつかみ難いが、大きさをみるとIIIｂ形態が長さ45cm以上にまとまる。また、重量でもIIIｂ形態は20kg～36kgである。これに対し、他の形態は４～14kg程度であり、大きく二つのグループに分かれる。

以下、図示したものの所見を述べる。IIａ形態は、第249図１～３・５・６・８、第250図１、第251図７・８である。このうち、第249図３・５は磨面を整形するための製作時の敲打痕が残されており、まだ磨面の湾曲も弱いので、比較的初期段階の石皿と推定される。類似例は、大下原遺跡、芳賀東部団地遺跡にある。また、第249図２・第250図１は側面や、掃き出し口を敲打で二次的に再整形しており、石皿の形状は徐々に変化して行くことを示す例である。特に、２は諸磯ｂ式期の縁付き石皿へ発展する初源的なものと考えられる。なお、１は結晶片岩製で使用により磨面が大きく窪んだ後、意図的に中央を穿孔している。住居址の柱穴中から出土しており、最終的に儀礼的行為に用いられたものと考えられる。

IIｂ形態は、第249図７、第250図５、第252図８である。７は磨面より新しい敲打痕が中央に観察され、凹石ａ形態とセットでの使用状態を示している。ちなみに、本例は土壙墓の立石へ転用されている。また、５は同じように中央に敲打痕が認められるが、IIａ形態の例（第249図３・５）と同じように製作時のものと判断され、ごく初期段階の石皿とみられる。本例は使用が進行すれば、IIａ形態へ変化したかもしれない。また、８は表面に赤色顔料（ベンガラ）が付着しており、同様な第238図11の磨石とセットで使用され、ベンガラを粉砕する用途に用いられたものと判断される。

IIIｂ形態としては第252図12の大形石皿がある。表面には被熱による剝落が認められる。これも土壙墓の立石として再利用されている。

諸磯ａ式期の石皿（遺物編第図250図２）　IIａ形態の例をここに図示した。結晶片岩製で大きく湾曲した磨面の中央に意図的に穿孔されている。

諸磯ｂ式期の石皿（遺物編第249図４、同第250図３・４・６、同第251図１～６、同第252図１～７・９～12）　全部で165点を数える。このうち、形態の分かるものは51点（30.9％）である。IIａ形態が最も多く10.9％(形態の分かるものでは35.3％)を占める。次いでIIｂ形態7.9％(同25.5％)、IVａ形態5.5％（同17.6％)の順である。また、ａ形態は41.8％、ｂ形態は17.0％であり、ａ形態の方が2.5倍ほど多い。欠損率は80.0％である。そして、被熱率は9.7％である。また、石材をみると、安山岩が52.1％と最も多く、次いで結晶片岩が47.3％を占めている。

大きさや重量は第154図のとおりである。大きさをみても形態別にまとまりは見られない。また、重量をみても特に形態との関係も認められないが、２～12kgの比較的軽量のものと、19～28kgの重いものに分かれる。

以下、図示したものの所見を述べる。IIａ形態は、第249図４、第250図３・４・６、第252図１である。第250図４は磨面中央に意図的に穿孔されたものである。第251図１は、磨面と縁の間に段差が付くよう

に整形している。

Ⅳａ形態は、第251図１～６である。は丁寧に整形され、縁が付く石皿であり、敲打と研磨により製作されたものであり、使用により磨耗する一般的なものとは異なる。すべて安山岩製であり、多孔質の加工しやすいものが多い。１は上端隅が角張って僅かに突出するものである。この下半部は２が対応すると判断される。そして、３は上端隅の突出部がさらに大きく瘤状となったものである。５は下半部で側面が反り返ったものである。鞘戸原Ⅰ遺跡33号住（諸磯ｂ古段階）でこの形態の完形品が出土しており、この例に従えば上半部は３に近い形状と推定される。また、４・６は側縁の上端部と下端部が２条の隆帯として作出され、より装飾的に整形されているものである。有尾式期に初源的形態があり（第249図２）、これが型式学的に変化していったものと考えられ、１・２→３・５→４・６といった変遷が想定される。鞘戸原遺跡の例からみて、諸磯ａ式期まで遡る可能性もあるが、少なくとも諸磯ｂ式期に集中しており、この時期の示準遺物的な石皿形態と考えられる。今後、注目して行く必要がある。

この他に図示したものでは、他にⅠｂ形態（第252図11）、Ⅱｂ形態（第252図２・７）などがある。11は大形の例である。なお、土壙墓から出土したものは破片が多く、ほとんどがｂ形態である。

球石（遺物編第240図７～20）　団子状の形状を呈し、手で握った際、掌に隠れる程度の小形のものである。河川の円礫をそのまま搬入したものと、研磨によりある程度整形を施したものが存在する。研磨面のある球石と磨石との区別は、扁平面が存在しないことであり、別のものを磨り潰すのではなく、球石自信を丸く整形するために研磨されていることである。

全部で45点検出されている。内訳は第　表のとおりであり、すべて安山岩製である。欠損率・被熱率共に低く、この点で磨石とは大きく異なっている。帰属率60％以上の住居址では有尾式期13点、諸磯ｂ式期では26点検出されている。時期別の大きさ及び重量は第　図のとおりである。有尾式期は、大きさでは４～６㎝程度にほぼまとまる。また、重さは40～60ｇと100～140ｇに弱いピークが認められる。諸磯ｂ式期は大きさ４～６㎝にほぼまとまる。重量では正規分布を示し、60～80ｇにピークが認められる。

球石は住居址以外の場所では、12・13・16～20のように土壙墓の抱石として用いられているものがある。小形の磨石が土壙墓の抱石として用いられる例がしばしば認められることと関連するものであろう。ほとんど使用痕がないことや、抱石の事例からみて、実用的な道具ではなかった可能性が高い器種である。

部分研磨石器（遺物編第253図～同第255図）　全部で99点検出されている。楕円形ないし棒状で扁平な河川礫の側縁部を中心に研磨痕のある石器であり、研磨具と判断される。次のように形態分類される。

Ⅰａ形態（第253図１・３～５、第254図１・２・４、第255図１）：原則として側縁部を中心に研磨痕が認められるもの。研磨痕の方向は横方向である。

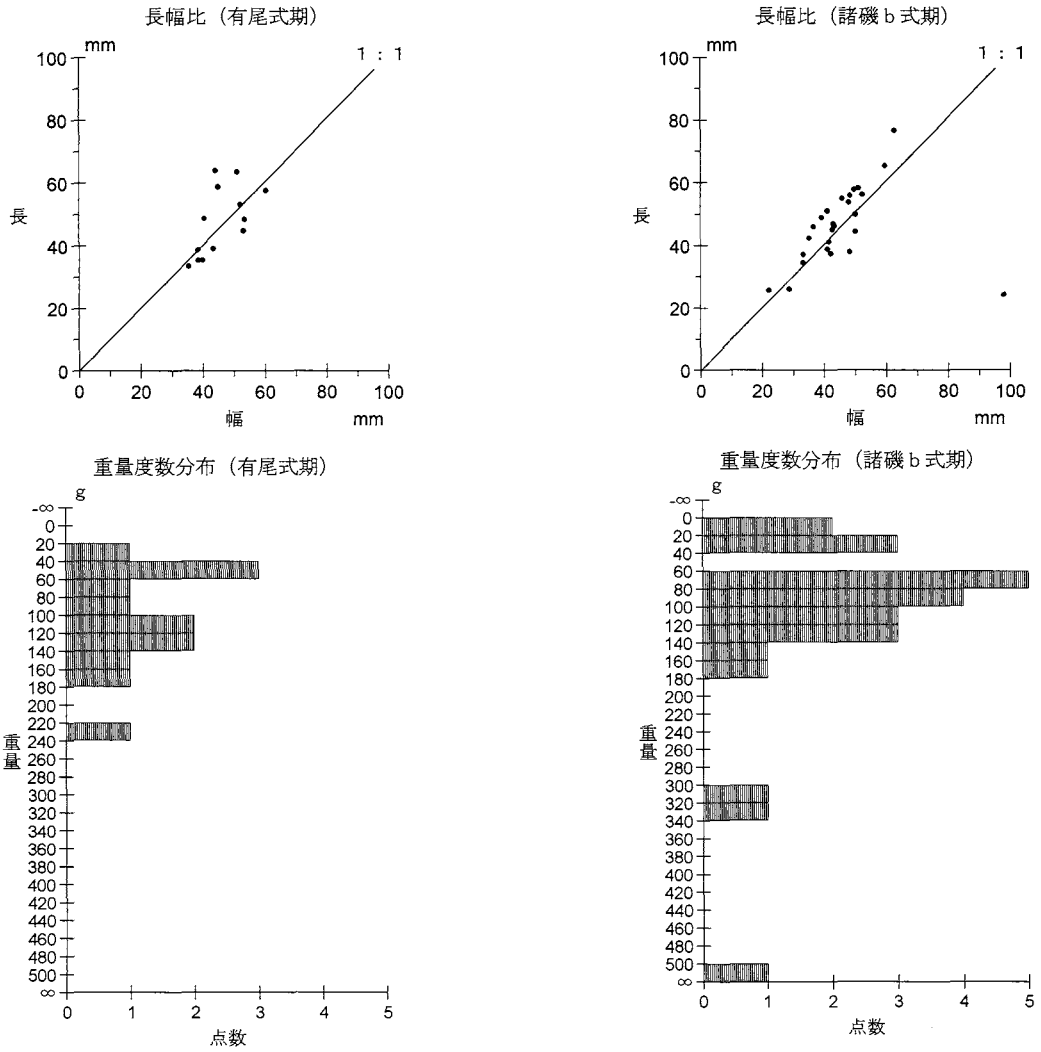
Ⅰｂ形態（第253図２・６～９、第254図３・５～８、第255図２）：側縁部の研磨痕に加え、扁平面にも研磨痕が認められるもの。研磨痕の方向は基本的には横方向であるが、斜めや縦方向の研磨痕が加わる場合もある。

Ⅱ形態（第255図３～６）：扁平面のみに縦方向の研磨痕が認められるもの。研磨部分はやや凹面となる場合もある。

Ⅲ形態（第255図７）：縁辺部に研磨痕が認められるもので、研磨部分は磨製石斧の刃部のように、稜が

全体					有尾式期					諸磯b式期				
個数	石材		欠損	被熱	個数	石材		欠損	被熱	個数	石材		欠損	被熱
	IIIa	他				IIIa	他				IIIa	他		
	An					An					An			
96	93	3	3	19	13	13	0	0	1	26	26	0	1	1

第155表　球石の時期別石材



第155図　球石の長幅比と重量度数分布

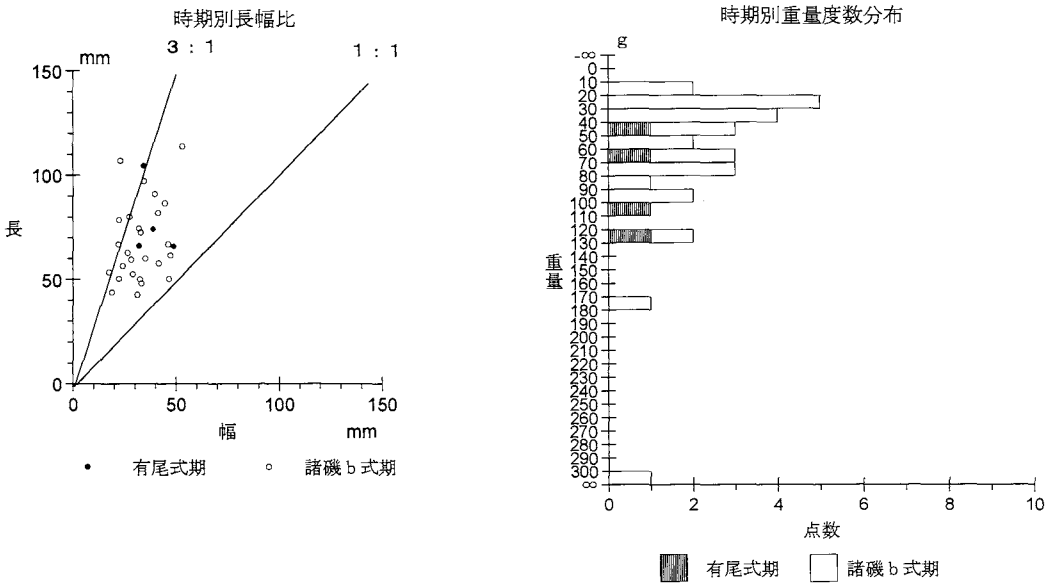
形成される。

この器種は、前期中葉から後葉の時期に存在することが確認されており、鈴木徳雄氏により資料の紹介と機能の推定がなされている（鈴木　1997)。鈴木氏は海岸地帯に存在する貝製研磨具（スレ貝）と同じ機能を有していることから、貝の少ない内陸部でスレ貝の代わりに用いられた土器の器面調製用の研磨具と推定している。

部分研磨石器には、表面に柿渋状（漆状）の付着物が認められる例が多い。同じ石材の石器・剝片類にはこうした付着物はほとんど認められておらず、機能や用途を推定する鍵となると考えられる。なお、赤色顔料が付着したものはない。こうした付着物からみて、漆などを塗るための道具の可能性もあり、単純に土器の器面調製用とは断定できない。特に、II・III形態は研磨部位の形状からみて、土器の研磨具とは異なる機能が推定される。さらに、用途については検討を要しよう。部分研磨石器は自然礫と区別が難しく、見逃されているケースも多いと思われる。遺跡出土の礫については、常に使用痕跡の有無を確認する姿勢が必要である。

全体										有尾式期										諸磯b式期									
個数	石材							欠損	被熱	個数	石材							欠損	被熱	個数	石材							欠損	被熱
	I	II		IIIa	IIIb	IV	V				I	II		IIIa	IIIb	IV	V				I	II		IIIa	IIIb	IV	V		
	HSh	Sh	HSS	An	SS	Sc	GrR				HSh	Sh	HSS	An	SS	Sc	GrR	3	0		HSh	Sh	HSS	An	SS	Sc	GrR	5	4
99	1	56	1	18	2	15	6	10	4	8	0	3	0	3	0	2	0	0	0	42	0	26	0	7	1	8	0	0	0

第156表　部分研磨石器の時期別石材



第156図　部分研磨石器の長幅比と重量度数分布

本遺跡では有尾式期に少なく、諸磯ｂ式期に増加する傾向があるが、他の時期に部分研磨石器がまとまって検出されたケースは、筆者の経験ではない。この器種の時期的消長は検討課題である。そして、鈴木氏の用途推定のとおりだとすれば、土器製作方法を含めて検討すべき器種であり、土器製作遺跡(あるいは場所)を特定することが可能となる。いずれにしても、今後十分留意する必要のある器種である。

以下、帰属率60％以上の住居址出土のものから、本遺跡での時期ごとの特徴について述べる。

有尾式期の部分研磨石器（遺物編第253図１～５）　全部で８点を数える。頁岩・安山岩・結晶片岩がほぼ同じように用いられている。欠損率は37.5％と以外に大きな値を示すが、数量が少ないためである。Ｉａ形態とＩｂ形態が存在している。第156図のグラフに示されるように個数が少ないので、傾向を見出すことはできない。なお、この時期のものでは敲石に転用されたものがある（同第256図10・11：いずれもＩａ形態)。

諸磯ｂ式期の部分研磨石器（遺物編第253図６～９、同第254図～同第255図）　全部で41点を数える。頁岩が63.4％を占め最も多い。残りは結晶片岩19.5％、安山岩17.0％である。頁岩のように肌理の滑らかな石材が多用される傾向が強い。欠損率は12.2％と低い。大きさと重量は第156図のとおりである。４～10cmの長さで、長幅比３：１～２：１ほどの細長いものが選択されている。また、重量ヒストグラムをみると、やや非対称分布を示し、ピークが20～30ｇとなる。扁平で軽いものが多いことによると判断される。

この時期ではすべての形態が存在している。図示したものの中で特徴的なものについて、所見を述べる。第253図８は棒状の河川礫が欠損後に片方だけＩｂ形態として用いられたもので、接合部分に段差が生じている。出土層位も異なっており、この磨り減った時間分が廃棄の時間差として認識できる例である。廃棄のタイムスケジュールを知る上で重要な資料となる。また、Ｉｂ形態のうち、第256図７・９などは棒状を呈していて、一見すると石棒のように見えるが、石棒の場合縦方向に研磨しており、識別可能である。

（大工原　豊）

［Ｃ２類石器］

敲石（遺物編第256図～同第257図）　全部で159点検出されている。磨面が存在せず、敲打痕のみが観察されるものを敲石としている。磨石などと同じように、平面形状により、Ｉ形態（円形)、II形態（楕円形)、III形態（棒状)、IV形態（四角形)、Ｖ形態（不定形）に分類される。内訳は第157表のとおりである。

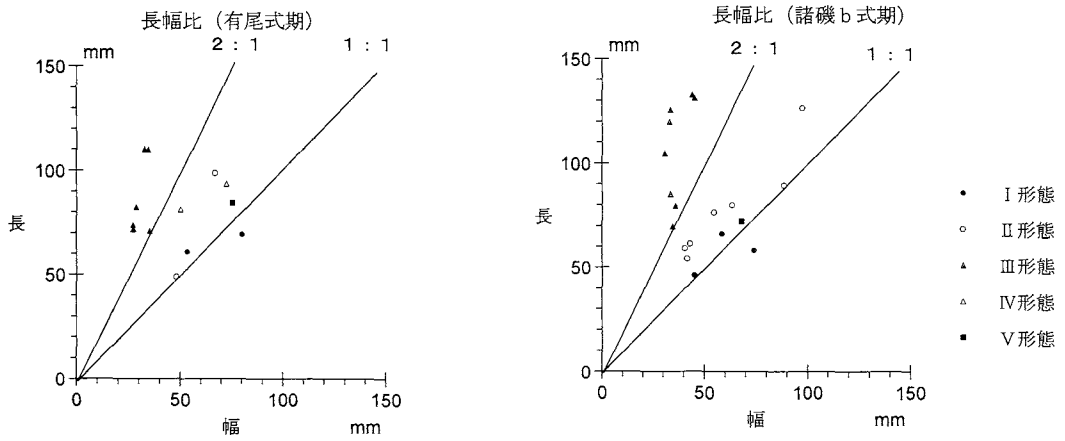
敲石は他の器種が転用されたものが多く、手頃な大きさの石器であれば、かなりの頻度で転用されている。特に、硬く比重の大きな緑色岩類製の磨製石斧などは、最終的にほとんど敲石として用いられている。したがって、ここに示されていない潜在的な敲石は、この数倍は存在していたと推定される。

なお、別項で述べているとおり、打製石斧や磨製石斧の製作はかなりの頻度で遺跡外で行われていることが検証されている。遺跡内では押圧剝離系列の石器製作と、直接打撃系列のうち中形原石から作出される石匙Ｂ・ScBの製作が行われていたと推定されており、こうした剝離作業に用いられたものが含まれているのは確実である。また、打製石斧や磨製石斧の刃部再生などのメンテナンス的な作業にも用いられていたと推定される。

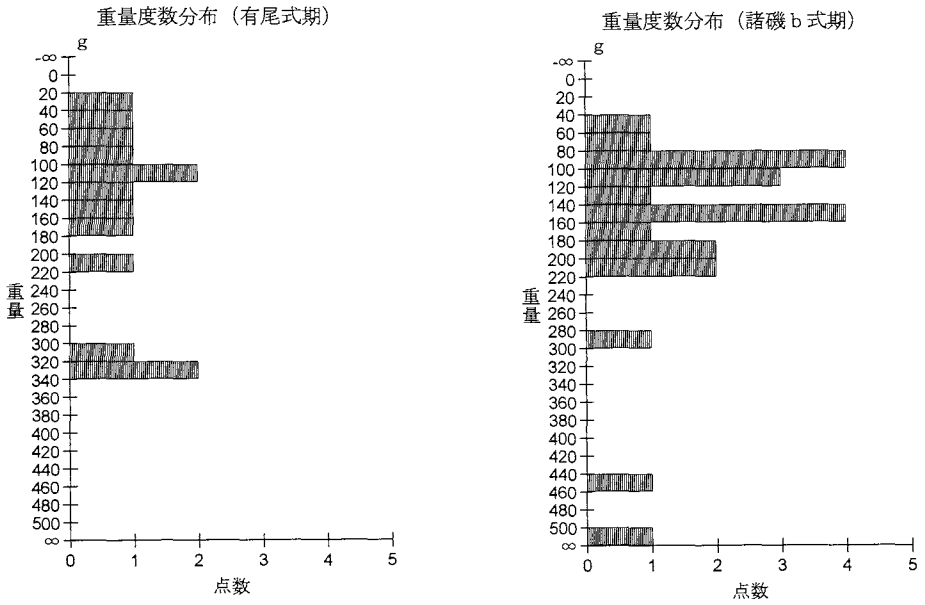
以下、帰属率60％以上の住居址出土のものにより、時期ごとに特徴について述べる。

分類	全体									有尾式期									諸磯b式期								
	個数	石材						欠損	被熱	個数	石材						欠損	被熱	個数	石材						欠損	被熱
		II		IIIa	IIIb	IV	V				II		IIIa	IIIb	IV	V				II		IIIa	IIIb	IV	V		
		Sh	HSS	An	SS	Sc	GrR				Sh	HSS	An	SS	Sc	GrR				Sh	HSS	An	SS	Sc	GrR		
I	18	6		8	2		2	3	2	3			1	1		1	0	0	6	2		4				2	1
II	39	9		22	1	6	1	15	6	3	2		1				1	1	19	2		14	1	2		8	4
III	90	6	1	41	1	32	9	49	6	12	3		5		4		5	0	37	3		14	1	14	5	26	4
IV	4	1		2		1		0	2	2	1		1				0	1	1					1		0	1
V	46	5		35		2	4	30	0	6	1		5				3	0	18	3		12			3	14	0
不明	45	12	1	13	1	12	6	27	2	0							0	0	33	8		10	1	9	5	20	1
合計	242	39	2	121	5	53	22	124	18	26	7	0	13	1	4	1	9	2	114	18	0	54	3	26	13	70	11

第157表　敲石の時期別形態と諸属性



第157図　敲石の長幅比



第158図　敲石の重量度数分布

有尾式期の敲石（遺物編第256図１～11）　この時期のものは26点を数える。III形態が最も多く、46.2%を占める。次いでV形態が23.1%であり、敲きやすい形状のものや、手頃に入手できるものが選択されている。石材別では安山岩50.0%、頁岩26.9%、結晶片岩15.4%の順である。欠損率は34.6%、被熱率は7.7%である。

大きさや重量は第157図・158図のとおりである。４～11cm程度の大きさで、長幅比２：１～１：１程度のものとしてまとまりをもつ。重量では20～220ｇのものと、300～340ｇのものに分かれるようである。

図示したものでは、側縁部や端部に敲打痕が認められるものが目立つ。また、転用されたものも多く、元の器種では、FLB（１）、磨製石斧（３）、部分研磨石器（10・11）などがある。

諸磯ｂ式期の敲石（遺物編第257図１～16）　この時期のものは114点を数える。III形態が32.5%と最も多く、II形態16.7%、V形態15.8%の順である。欠損率も高く61.4%と有尾式期よりもはるかに高率である。被熱率は9.6%と有尾式期とほぼ同じである。石材では安山岩が47.4%を占め、次いで結晶片岩22.8%、頁岩15.8%、緑色岩類11.4%の順である。安山岩の選択率は有尾式期とほぼ同じである。

大きさや重量は第158図のとおりである。III形態が７～13cmで長幅比３：１～２：１の位置にまとまる。またそれ以外の形態では、４～８cmで長幅比１：１～２：１の範囲にほぼまとまる。また重量ヒストグラムでは、80～160ｇに弱いピークが認められる。作業するにはこの程度の重さが手頃なものであったことが分かる。

図示したものでは磨製石斧を転用したもの（６）がある。また、８は円盤状石器、16は凹石が転用された可能性がある。

砥石（遺物編第258図～第259図）　全部で655点検出されている。内訳は第158表のとおりである。砥石としたものは、大部分は比較的軟質の砂岩（牛伏砂岩）の搬入礫である。この中には研磨痕が明瞭なものもあるが、石材の性質からはっきりしないものも多い。しかし、この石材は最短でも約10km離れた場所まで行かなければ採取不可能なものであり、目的をもって意図的に搬入されたものと判断される。そして、牛伏砂岩製の器種で確実に多数存在しているものは、砥石しかない。したがって、研磨痕のないものも、砥石として用いることを目的として搬入されたと判断される。

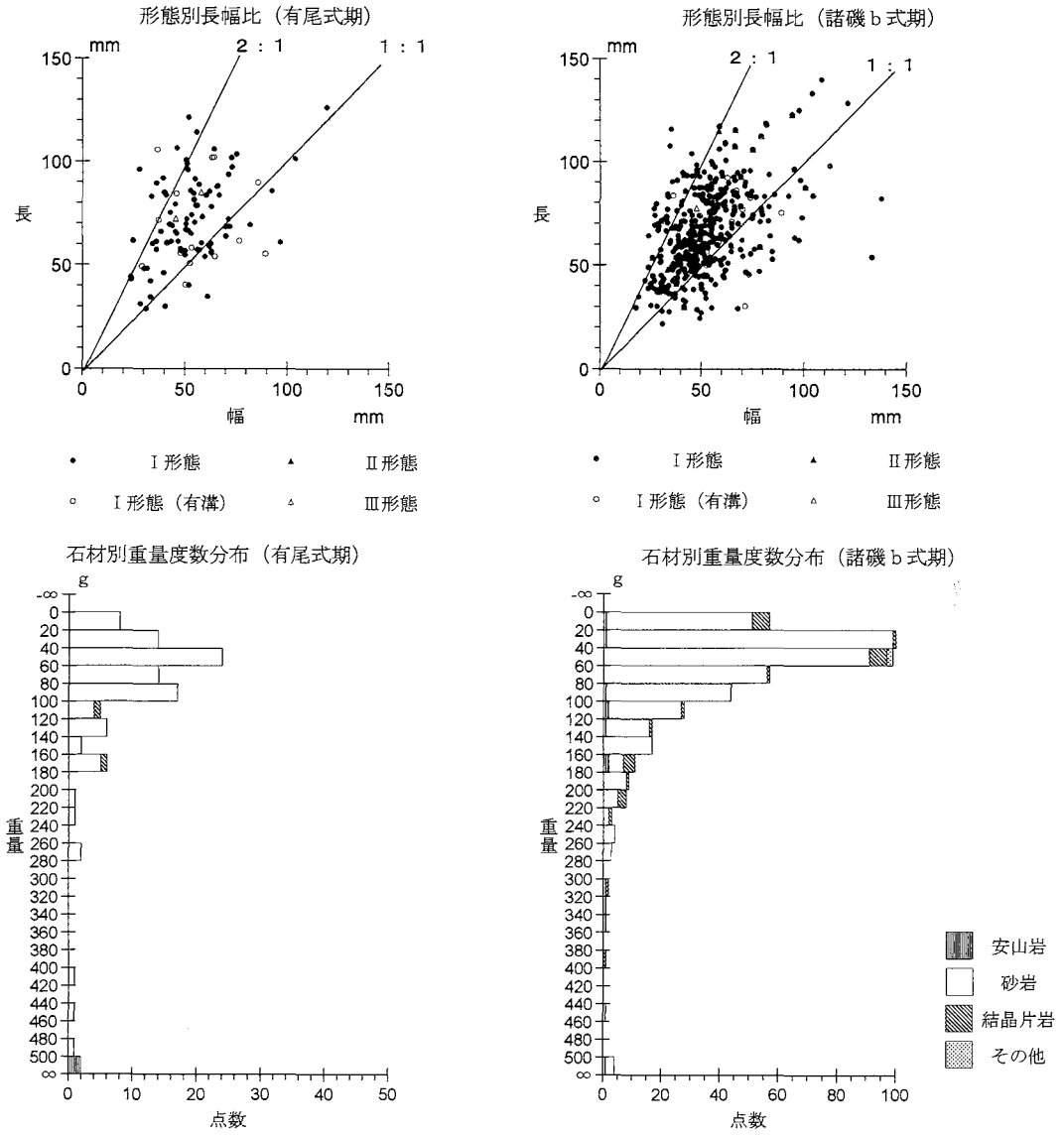
牛伏砂岩が91.1%を占め、それ以外の石材は、結晶片岩6.0%、安山岩（板状節理のもの）2.3%の順である。砥石の場合、肌理の粗さ＝形態である。したがって、基本的にはI形態：粗砥≒牛伏砂岩、II形態：中砥≒安山岩等、III形態：仕上砥≒結晶片岩等といった関係が成り立つ。また、I形態の中には有溝砥石が相当数含まれている。

砥石の機能からみて、硬い対象物を研磨するために用いられたと判断される。遺跡内からは出土したもので、対象物となるものは、磨製石斧・装身具類・土製円盤がある。また、現存していないが骨角器や木器が存在していたことも確実である。ここでは、特徴的な有溝砥石について検討してみよう。

この砥石は少なくとも磨製石斧の研磨用として用いられたものでないのは確実である。磨製石斧のリダクション頻度の高さからみて、扁平な研磨面をもった通常の砥石が磨製石斧の研磨用として用いられたものと推定される。また、土製円盤は大部分が諸磯ｂ式期であり、有尾式期にしっかりしたものが多い有溝砥石が用いられたものでないことはほぼ確実である。そうしてみると、有溝砥石は装身具類や骨角器の研磨用に用いられた可能性が浮上してくる。本遺跡では滑石製の原石や剝片などが出土しており、滑石製の装身具の一部を製作していたことは確実である。しかし、柔らかい滑石を研磨しても、こうし

分類	全体									有尾式期									諸磯b式期								
	個数	石材						欠損	被熱	個数	石材					欠損	被熱	個数	石材						欠損	被熱
		II		IIIa	IIIb	IV	V				II		IIIa	IIIb	IV	V			II		IIIa	IIIb	IV	V		
		Sh	HSS	An	SS	Tf	Sc				Sh	HSS	An	SS	Tf	Sc			Sh	HSS	An	SS	Tf	Sc		
I	796	1		3	792			191	35	87				87			42	5	404	1		1	402			61	17
I有溝	59				59			26	4	14				14			8		18				18			7	2
II	62		1	26	13	2	20	26	1	1			1				1	0	30		1	7	8	1	13	4	0
III	41	2		3	1		35	15	0	2						2	1	0	19	1		2			16	6	0
不明	11			1	9		1	3	3	1			1				0	0	1						1	1	0
合計	969	3	1	33	874	2	56	261	43	105	0	0	2	101	0	2	52	5	472	2	1	10	428	1	30	79	19

第158表　砥石の時期別形態と諸属性



第159図　砥石の長幅比と重量度数分布

た溝は生じ得ない。もっと硬いものが研磨されたと考えた方が良さそうである。こうして、消去法で対象物を絞り込むと、有溝砥石は骨角器の製作用として用いられていた可能性が最も高くなる。今後とも、砥石の対象物については留意しておく必要があろう。

以下、帰属率60%以上の住居址出土のものにより、時期ごとに特徴について述べる。

有尾式期の砥石（遺物編第258図）　この時期のものは105点を数える。Ⅰ形態＝砂岩が96.2%を占める。Ⅱ形態・Ⅲ形態は各1.0%である。Ⅰ形態のうち、有溝砥石は12.9%である。この時期の有溝砥石（第258図1～13）は諸磯b式期のものに比べ、溝の幅が広く深いものが多い。

大きさと重量は第159図のとおりである。大きさは3～12cm程度で、長幅比1.5：1のやや幅広のものが多い。重量ヒストグラムでは正規分布を示し、40～60gに弱いピークが認められる。

諸磯b式期の砥石（遺物編第259図）　この時期のものは472点を数える。Ⅰ形態が89.4%を占める。Ⅱ形態は6.4%、Ⅲ形態は4.2%である。Ⅱ形態・Ⅲ形態が増加したといっても絶対数は少なく、精緻な磨製製品を製作していたとは言い難い。

大きさと重量は第159図のとおりである。4～10cm程度で長幅比1.5：1のやや幅広のものに集中する傾向が認められる。また、重量ヒストグラムをみると、非対称分布を示しており、20～40gにピークが認められる。有尾式期よりも軽い傾向があるが、使用によって磨り減って小型化したものが含まれているためとみられる。

1～9はⅠ形態の有溝砥石である。細い線状痕が多数認められるものが多い。また、14はⅢ形態の例であり、結晶片岩製である。Ⅰ形態のうち、有溝砥石は4.0%であり、有尾式期よりもはるかに少ない。また、実際の資料をみても溝か狭く浅いものが多い傾向がある。

台石（遺物編第260図）　全部で6点検出されている。ここで台石と分類したものは、礫の表面に敲打痕が認められるもののうち、置いて使用したと判断されるものである。時期別の内訳は第159表のとおりであり、すべて安山岩製である。1は超大型の台石で、住居の床面上に据え置かれていたものである。平坦面に多数の敲打痕が認められる。また、2・3は土壙墓の抱石として用いられたものであり、平坦面以外に側縁部にも敲打痕が認められる。

（大工原　豊）

全体				有尾式期				諸磯b式期			
個数	石材 IIIa An	欠損	被熱	個数	石材 IIIa An	欠損	被熱	個数	石材 IIIa An	欠損	被熱
6	6	2	1	1	1	0	1	2	2	1	0

第159表　台石の時期別石材

［Ｄ類石器］

槍状石器（遺物編第261図１～６）　全部で６点検出されている。石槍を模倣した結晶片岩製の石器である。基本的には打製石斧の製作と同じ直接打撃の両面調製により整形されている。ただし、５・６は直接打撃の後、研磨により整形しており、部分研磨石器と同じ研磨痕が認められる。あるいは部分研磨石器に転用された可能性もある。平面形状のみを槍状に整形しただけで、縁辺は鋭利でなく、刺突機能はない。実用品ではなく、儀礼などに用いられたものと推定される。４に類似したものは下高瀬寺山遺跡（富岡市）で検出されている。

模倣される原型は、縦形の石匙Ａ（第195図11）に類似した良質な硬質頁岩製の石槍であり、この時期にに東北地方（おそらく山形県）から搬入されたものとみられる。黒熊第５遺跡（吉井町）から、原型となる石槍が検出されている。この時期の東北地方の石槍は優品であり、材質・技術・サイズ共に関東地方を凌駕しているため、威信財として搬入されたものと推定される。しかし、同じものは製作できないため、サイズと形状のみをコピーした模倣品が製作されたものと考えられる。

なお、これらは帰属率から諸磯ｂ式期のものと判断される。また、ほとんど住居址覆土から検出されているため、どのように使用されたか、あるいは使用場所などは不明である。

石棒（遺物編第261図７～14）　全部で８点検出されており、いずれも諸磯ｂ１～ｂ２式期のものと判断される。３形態に分類される。

Ⅰ形態：キノコ状を呈するもの（７）　敲打と研磨により、キノコ状に整形し、基部に線刻により１条の沈線を巡らすものである。安山岩製である。

Ⅱ形態：棒状で横位に沈線を巡らすもの（８～10）　棒状礫を素材とし、線刻により１条の沈線を巡らすものである。９は一部に複数の条線が観察されるもので、棒状礫と石棒の中間的存在のものである。結晶片岩・緑色岩類・頁岩が用いられている。

Ⅲ形態：円筒状で先端部が平坦なもの（11～14）　体部全体を研磨により整形し、先端部を平坦にすることが特徴である。軟質の凝灰岩製と、比較的硬い結晶片岩製のものがある。このうち、14はＪ―78号住居址上層に存在する堀之内２式期Ｄ―529号土坑から出土しているが、他の例との形態的類似から前期のものと推定される。

Ⅱ形態の典型例である第261図８は帰属率からみて諸磯ｂ１式期と判断される。また、９・10はｂ２式である。そして、Ⅰ形態の７はｂ３式期、Ⅲ形態の11～13はｂ１～ｂ２式である。したがって、本遺跡の事例でみる限りでは、棒状礫に１条の沈線を巡らしたⅡ形態が最も古く、より初源的形態と推定される。

棒状礫は前期前半期から存在しており、この中から沈線を巡らすⅡ形態が出現したものと推定される。研磨により全体を整形したⅢ形態がその後出現し、敲打と研磨により整形されたⅠ形態が最も新しいとみられる。なお、Ⅰ形態のように基部に沈線（溝）が認められる例は、山形県押出遺跡出土品にある（春成　1996）。また、Ⅱ形態の例は大下原遺跡、行田Ⅰ遺跡（松井田町）、前中原遺跡（月夜野町）から出土している。

本遺跡では検出されていないが、沈線が２～３条巡らす形態が県内では数例存在している。こうした例では体部全体を研磨し、プロポーションの整った形状に製作されている。これはⅢ形態と同じ整形手法であり、より新しい要素を含んでいる。また、２条の沈線を巡らすものは、荒砥上ノ坊遺跡（前橋市：

ｂ３式期）と、陣場遺跡（富士見村：ｃ式期）にあり、いずれも本遺跡のものより新しい。したがって、こうした多条化した形態は、II形態やIII形態が発展したものであると考えられる。

なお、群馬県内では諸磯ｂ式期に石棒が存在することは以前から知られている（黒岩　1985、羽鳥・藤巻　1989、長井　1989）。また、能登健氏は頭部に沈線を巡らす形態の石棒について集成している（能登　1995年）。

前述したように、石棒は前期前半期に出現する棒状礫に起源を求めることが可能であり、また、整形手法と土器との共伴関係により形態の変遷を辿ることができる。

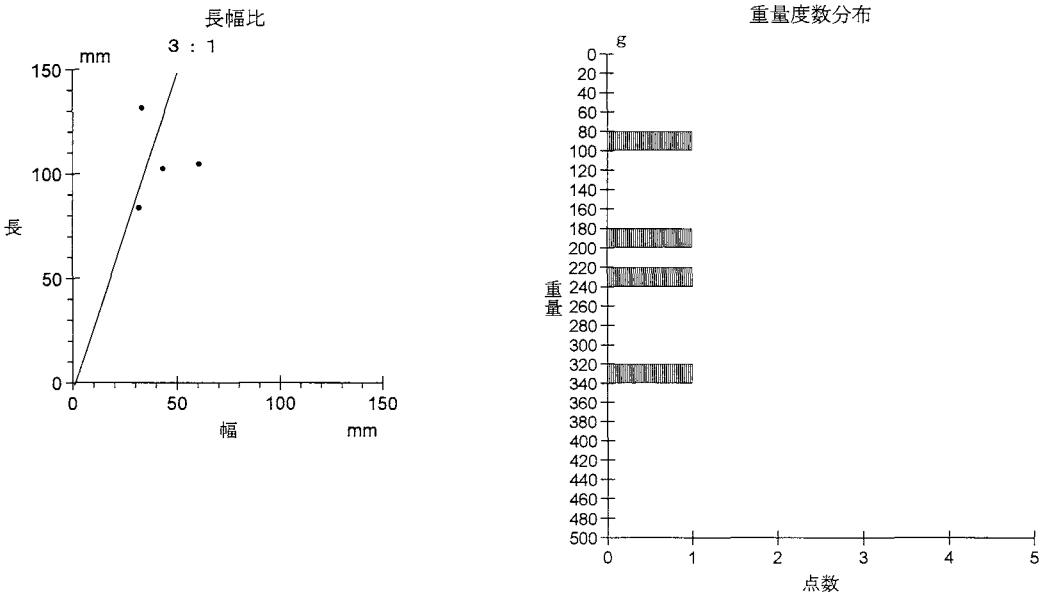
これらの石棒は住居址に廃棄された遺物と一緒に検出されており、使用場所や使用方法を推定できる状態ではなかった。ただし、サイズからみて遺構に組み込まれて用いられたとは考えにくく、手に持つかたちで用いられていた可能性が高い。これは土偶と同様であり、この時期の祭祀の在り方が暗示される。そして、墓標として用いられている大形棒状礫（立石）とは本質的な意味が異なっていたと考えられる。

石鉢（遺物編第261図15）　多孔質の安山岩製で、敲打と研磨により、浅鉢状に整形されている。素材が多孔質であるため、容器としての実用性はない。ただし、口縁部や底面には敲打による凹が認められ、機能的にも石皿と類似していることから、石皿のような用途で使用された可能性もある。

下半部が外傾するように整形されており、同第34図６のような諸磯ｂ式期の浅鉢を模倣したものと推定される。模倣品を製作するのは、この時期の特徴のようであり、多くの器種の模倣品が存在している。本例もその一つである。

全体								有尾式期								諸磯ｂ式期							
個数	石材					欠損	被熱	個数	石材					欠損	被熱	個数	石材					欠損	被熱
	II	IIIa	IIIb	IV	V				II	IIIa	IIIb	IV	V				II	IIIa	IIIb	IV	V		
	Sh	An	Tf	Sc	GrR				Sh	An	Tf	Sc	GrR				Sh	An	Tf	Sc	GrR		
8	1	1	2	3	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	1	1	2	2	1	4	0

第160表　石棒の時期別石材

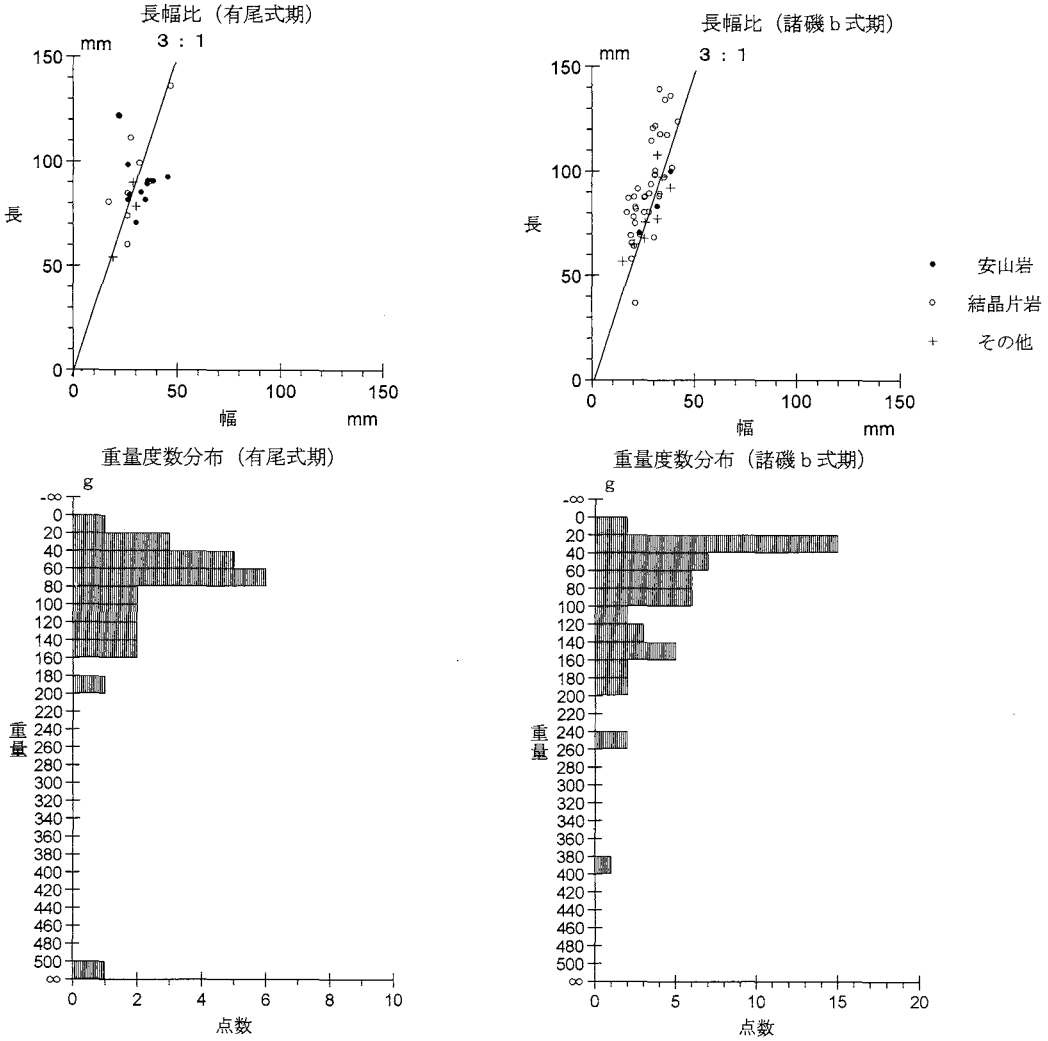


第160図　石棒の長幅比と重量度数分布（諸磯ｂ式期）

棒状礫（遺物編第262図）　遺跡に何らかの意図をもって搬入された棒状を呈した加工痕の認められない礫である。本地域では前期初頭から晩期まで存在しており、時期的メルクマールにはならない。また、ずっと同じ機能を有していたかどうかについても不明である。欠損したものは敲石の基部（手に持つ部分）の可能性もある。しかし、前期の棒状礫は石棒出現以前から存在していることと、初源的石棒の形状と大きさがほぼ同じであることから、石棒出現以前に類似した機能を有する道具として用いられたものが含まれている可能性についても考慮しておく必要がある。中棚遺跡NTJ—4住（諸磯b式期：昭和村）では、明らかに群馬県南部から搬入された棒状礫が検出されている。(註) なお、土壙墓に墓標として立てられている大形棒状礫（立石）は、機能・用途が明らかであり、本質的にここで扱う棒状礫とは機能が異なっているので、この分類には含めない。

全体										有尾式期										諸磯b式期									
個数	石材							欠損	被熱	個数	石材							欠損	被熱	個数	石材							欠損	被熱
	II		IIIa	IIIb	IV	V	VI				II		IIIa	IIIb	IV	V	VI				II		IIIa	IIIb	IV	V	VI		
	Sh	Sch	An	SS	Sc	GrR	他				Sh	Sch	An	SS	Sc	GrR	他				Sh	Sch	An	SS	Sc	GrR	他		
347	20	1	37	4	271	12	2	132	150	36	3	0	12	0	21	0	0	11	1	166	10	0	5	2	142	5	2	83	8

第161表　棒状礫の時期別石材



第161図　棒状礫の長幅比と重量度数分布

本遺跡では347点検出されており、内訳は第161表のとおりである。以下、帰属率60%以上の住居址出土資料により、時期別傾向について述べる。

有尾式期の棒状礫（遺物編第262図１～５・７～15・32～35・37・39）　この時期のものは36点を数える。欠損率は30.6%である。石材では結晶片岩が58.3%と最も多い。次いで安山岩33.3%、頁岩8.3%である。大きさや重量は第161図のとおりである。５～13cmほどで、長幅比３：１程度にまとまる。石材による違いは特に認められない。また、重量ヒストグラムではほぼ正規分布を示し、60～80ｇにピークをもつ。

諸磯ｂ式期の棒状礫（遺物編第262図６・16～31）　この時期のものは166点を数える。欠損率は50.0%と比較的高い。この中には敲石の基部がある程度含まれているものと推定される。石材では結晶片岩85.5%を占め、でおり、石材占有率は非常に高い。ほかに、頁岩・安山岩・砂岩・緑色岩類製のものが存在するが、いずれも数%である。有尾式期とは石材組成の傾向が全く異なっていると言って良いほどである。大きさや重量は第161図のとおりである。６～14cmほどで、長幅比３：１以上の細長いものが多い。また、重量ヒストグラムは軽い方に偏った非対称分布を示しており、20～40ｇに強いピークが認められる。また、140～160にも弱いピークが認められることから、大小２群が存在していることが理解できる。

（註）報告者の黒岩文夫氏は、石棒としているが、図と写真を見る限り調製は認められないので、棒状礫と判断される。

多孔石（遺物編第263図１～７）　全部で33点検出されている。ここで多孔石としたものは、凹が表面に認められるもののうち、大形で据え置いて使用したとみられるものである。一部のものには、研磨痕が認められるが、石皿のように作業面ではなく、整形痕と判断されるものである。

時期別のあり方は第162表のとおりである。有尾式期のものでは、安山岩・凝灰岩・砂岩・結晶片岩など多様な石材が用いられている。これに対し、諸磯ｂ式期では安山岩が70%、結晶片岩30%であり、石材が収斂される傾向が認められる。欠損率は両時期で変化なく60%であるが、被熱率は諸磯ｂ式期の方が低い。大きさや重量は第162図のとおりである。20～38cm程度のものにまとまる。

３・４・７のようにやや歪んだ球形で、丸石としても良いものもある。凹の数は数個のもの（３～５）片面に十数個存在するもの（１）、両面に多数存在するもの（２・７）がある。こうした凹の数の違いは、使用頻度の差と推定され、徐々に個数が増加していったものと考えられる。

なお、４は廃絶された大形住居址の覆土２層の中央に置かれていたもので、廃棄された遺物と一緒に出土しているものの、何らかの儀礼的行為に用いられた状態で遺棄されたものと考えられる。また、７は９・10の丸石と一緒にＢ区南土壙墓群中央の配石遺構（Ｄ－338）に組み込まれていたものであり、埋葬に関連した儀礼的行為に用いられていたとみられる。そして、住居址以外から出土したものの方が多いことも多孔石の特徴であり、屋外や各種遺構に設置されて用いられた使用期間の長い石器であったと推測される。

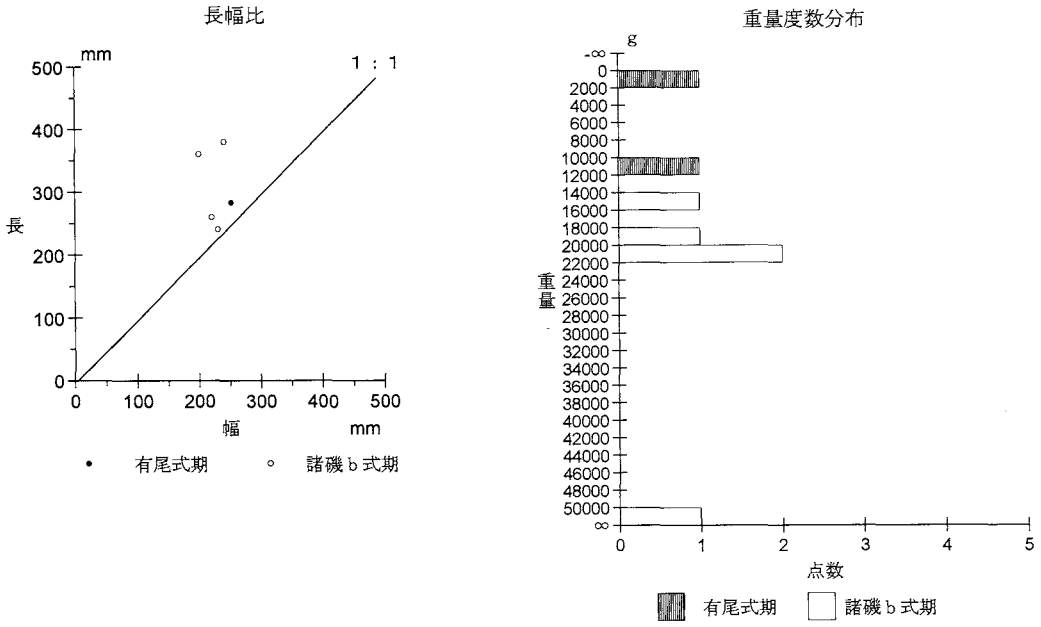
丸石（遺物編第263図８～11）　全体で９点検出されている。球状を呈した大形の石器であり、敲打や研磨により整形されているもの（８～10）と、球形の河川礫がそのまま搬入されたもの（11）が存在するが、本遺跡では、前者の方が多い。すべて安山岩製であるが、球形の形状とサイズを確保するためにやむを得ないことと推定される。住居址よりも、土坑から検出される場合が多く、図示したものはいずれも土坑や土壙墓群中の配石遺構から出土している。こうした点でやや多孔石と機能が異なっていたとみ

られるが、凹が存在するものもあり、機能が未分化のところがあったと考えられる。

（大工原　豊）

全体							有尾式期							諸磯b式期						
個数	石材				欠損	被熱	個数	石材				欠損	被熱	個数	石材				欠損	被熱
	IIIa	IIIb		IV				IIIa	IIIb		IV				IIIa	IIIb		IV		
	An	SS	Tf	Sc				An	SS	Tf	Sc				An	SS	Tf	Sc		
34	22	3	1	8	16	2	5	2	1	1	1	3	0	11	8	0	0	3	6	2

第162表　多孔石の時期別石材



第162図　多孔石の長幅比と重量度数分布

全体				有尾式期				諸磯b式期			
個数	石材	欠損	被熱	個数	石材	欠損	被熱	個数	石材	欠損	被熱
	IIIa				IIIa				IIIa		
	An				An				An		
8	8	1	3	0	0	0	0	2	2	1	1

第163表　丸石の時期別石材

［Ｅ類石器］

磨製石斧（遺物編第264図～同第267図　ただし第265図９・10、第266図３・８・９は除く）　全部で214点検出されている。前期中葉から磨製石斧は急増すると指摘されており（早川　1983）、本地域においても、この現象が認められる。以下のとおりに形態分類される。

磨製石斧は使用による形態変化が著しいことと、欠損後に敲石として転用されるものが大多数を占めているため、形態分類ができないものも多く存在している。他の器種としては敲石の転用が多いが、凹石に転用されているもの（同第248図６）も存在している。

Ｉ形態：基部尖形乳棒形態　平面形は撥形を呈し、基部が尖る。断面はやや扁平な楕円形を呈する。前期中葉～後葉にかけての特徴的な形態であり、①剝離工程（直接打撃）→②敲打工程→③研磨工程により製作されている。さらに、大きさと形状によりＩａ形態（超大形）、Ｉｂ形態（大形）、Ｉｃ形態（中形）、Ｉｄ形態（小形）、Ｉｅ形態（小形）、Ｉｆ形態（小形）に細分される。

II形態：打製石斧研磨形態（同第266図１～３・６）　①剝離工程（直接打撃）→②研磨工程で製作されているもので、敲打工程が存在しない一群である。打製石斧II形態の製作工程の最後に研磨工程が加わったものである。平面形は撥形（IIａ形態）と、短冊形（IIｂ形態）がある。IIａ形態はさらに全体を研磨したもの（IIａ－１形態：６）と、刃部のみを研磨したもの（IIａ－１形態：６）に分かれる。また、IIｂ形態も同様に全体を研磨したもの（IIｂ－１形態：２）と、刃部のみを研磨したもの（IIｂ－２形態：１）に分かれる。II形態では打製石斧の素材である頁岩も用いられる。

III形態：ミニチュア形態（同第266図５）　小形で平面形は撥形を呈し、断面形は隅円長方形を呈する。①剝離工程→②敲打工程→③研磨工程といった製作工程を踏まえているが、刃部が作出されておらず、実用性の乏しいもの。本遺跡では各種ミニチュア製品が製作されているので、これもその一環で製作されたものと推定される。

再生品（同第267図15）　大形磨製石斧の欠損したものを、直接打撃と敲打により、再加工したものである。Ｉ形態の欠損品が再生されたものとみられる。

以下、帰属率60％以上の住居址出土のものを中心として、特徴について述べる。なお、時期別の諸属性は第164表のとおりである。

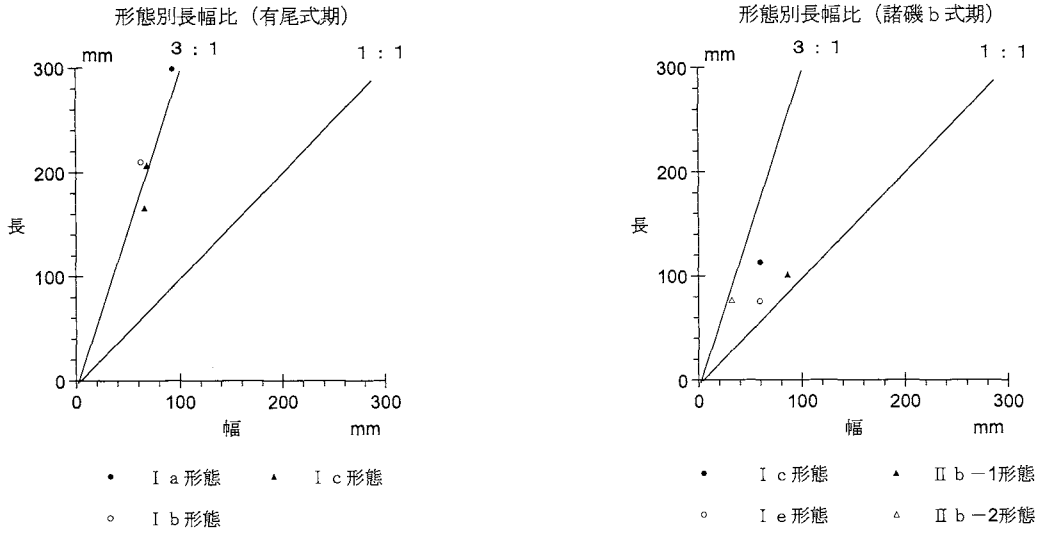
有尾式期の磨製石斧（同第264図１～11、同第266図10）　この時期のものは42点を数える。欠損率は90.5％と極めて効率である。すべてＩ形態であり、Ｉｃ形態が最も多く21.4％（形態の分かるものの中では52.9％）を占める。次いで、Ｉｂ形態14.3％（同35.3％）、Ｉａ形態4.8％（同11.8％）である。この時期には超大形１本、大形３本、中形５本の割合で保有していたと推定される。また、石材は緑色岩類が85.7％を占める。

諸磯ｂ式期の磨製石斧（同第266図１～３・６、同第267図１～15）　この時期のものは83点を数える。欠損率は95.2％と極めて高い。石材は緑色岩類が89.2％を占める。他に頁岩・安山岩・結晶片岩・蛇紋岩が少数用いられている。この時期にはII形態が出現し、3.6％（形態の分かるものの中では9.1％）を占めるようになる。しかし、最も多いのは、Ｉｃ形態で15.7％（同39.4％）と、Ｉｂ形態14.5％（同36.4％）であり、両形態が二分したかたちをなす。また、Ｉ形態ではＩｆ形態以外の形態も少数であるが存在している。

以上のように、磨製石斧は両時期ともＩ形態が主流をなし、諸磯ｂ式期にII形態が加わる。また、Ｉ形態の中でも時期により、形態組成比が異なっている。欠損品も多いため、この形態比率がそのままこ

分類	全体								有尾式期								諸磯b式期							
	個数	石材					欠損	被熱	個数	石材					欠損	被熱	個数	石材					欠損	被熱
		II	IIIa	IV	V					II	IIIa	IV	V					II	IIIa	IV	V			
		Sh	An	Sc	Se	GrR				Sh	An	Sc	Se	GrR				Sh	An	Sc	Se	GrR		
Ia	4		1			3	3	0	2		1			1	1	0	2					2	2	0
Ib	29					29	26	1	6					6	5	0	12					12	12	1
Ic	37		1			36	33	0	9					9	7	0	13					13	12	0
Id	9		1		1	7	8	1	0						0	0	2					2	2	0
Ie	1					1	0	0	0						0	0	1					1	0	0
If	1				1		1	0	0						0	0	0						0	0
IIa-1	1					1	1	0	0						0	0	1					1	1	0
IIb-1	1	1					0	0	0						0	0	1	1					0	0
IIb-2	1			1			0	0	0						0	0	1			1			0	0
III	1					1	0	0	0						0	0	0						0	0
定角式	3				2	1	1	0	0						0	0	0						0	0
不明	123	6	6	6	2	103	120	11	25	1	2	2		20	25	2	50	1	2	2	2	43	50	0
合計	211	7	9	7	6	182	193	13	42	1	3	2	0	36	38	2	83	2	2	3	2	74	79	1

第164表　磨製石斧の時期別形態と諸属性

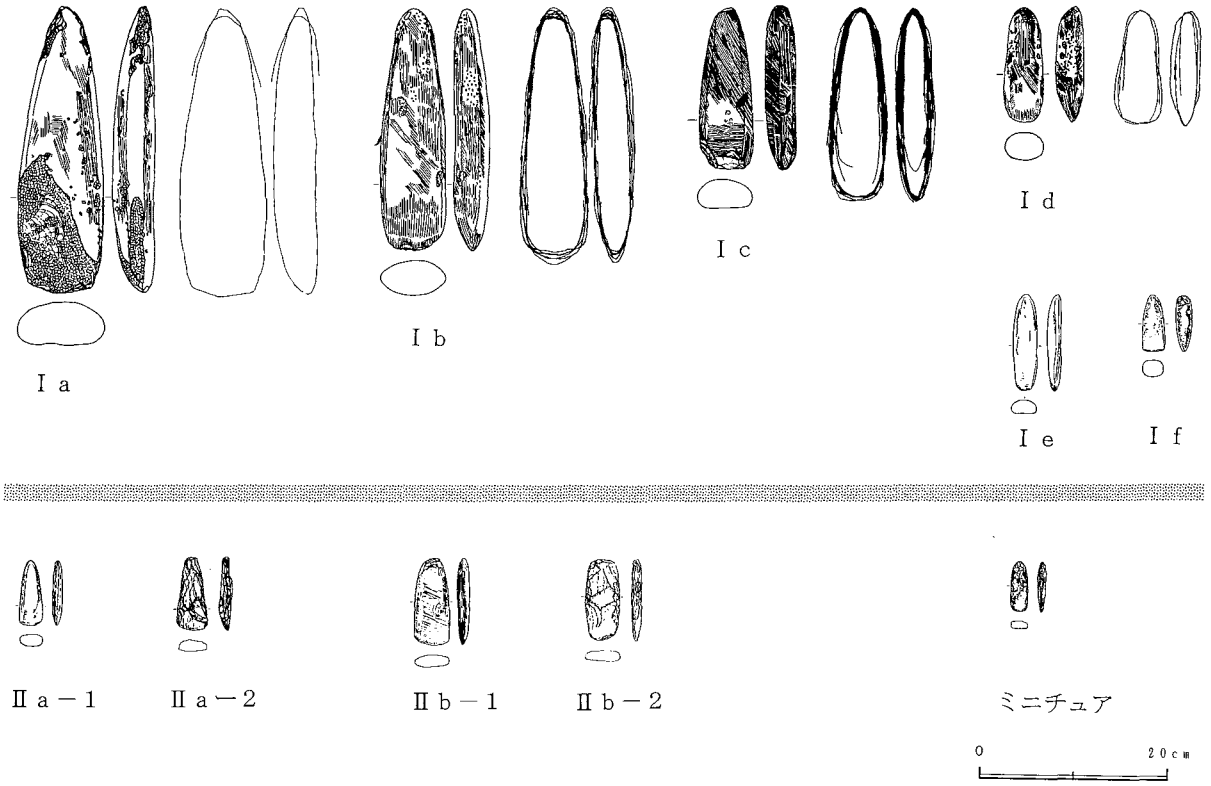


第163図　磨製石斧の重複比

の時期の保有数の比率と即断できないものの、ここでの比率がおおよそ保有比率を示していると推測される。しかし、基本的な形態は両時期とも大きく変化しておらず、型式的にはほぼ同じ様相であったと考えられる。磨製石斧に多様される緑色岩類は下仁田付近で採取されたものと推定される。遺跡内から検出された磨製石斧の中には未製品が存在している（第264図５・第267図１等）。しかし、①工程の剝片類は非常に少なく、石核・原石もほとんど出土していないことと、②工程で生ずる多数の小剝片もほとんど出土していない。しかし、砥石は非常に多く検出されていることから、③工程と再加工・転用が遺跡内で行われていたものと推定される。

また、当初前期とみられた良質の蛇紋岩製の定角式のもの（第266図８・９）は、北陸地方からの搬入品と思われたが、土器型式帰属率で確認したところ、中期末以降のものの可能性が高いことが判明した。この時期に定角式の形態が、帰属率の高い住居址からは１点も検出されていないことも、この結果と一致している。なお、II形態の例は榎木畑遺跡Ｊ－３住（諸磯ｂ式新段階）においても検出されており、諸磯ｂ式期において、特徴的な形態であった可能性もある。

（大工原　豊）



第164図　磨製石斧の形態分類図

［Ｆ類石器］

石製品（遺物編第268図～同第270図）　総数39点が検出されている。内訳は、玦状耳飾15点、垂飾６点、管玉５点、大型石製装身具４点(未製品１点)、各種石製品９点、石製円盤14点、ストーン・リタッチャー７点であり、第165表のとおりである。石製品は、包含層や住居址覆土といった時期の判然としない出土状況を示すケースがほとんどであり、多くの場合明確な時期比定が困難である。一方、本遺跡が営まれたのは、前期中葉～後葉（有尾式～諸磯ｂ式期）にかけての比較的限定された時期内である。よって、今回出土した多種多様な石製装身具は、当該期における装身具組成を知る上で重要な資料である。

以下、形態分類に沿って説明を加えたい。なお、分類・記述をおこなう際に、形態的変異の少ない玦状耳飾については問題はないが、変異幅の大きい垂飾・玉類は分類が非常に難しい。そうした理由から、石製装身具の分類には一貫した基準・定義がもうけられていないのが研究の現状である。ここでは仮に、栃木県根古谷台遺跡土壙墓出土事例で単独ではなく組み合わせて一つの装身具として使用する事が判明している管玉、さらに本遺跡に特徴的にみられる大型の石製装身具を垂飾から独立させて分類・記述をおこなった。

玦状耳飾(遺物編第268図１～15)　数的に最も多く出土した玦状耳飾は、良質な蛇紋岩や蛇灰岩を用い、全体的に丁寧に仕上げられたもの（第268図１～５）と、滑石などの質の悪い石材を用いてやや雑に作られたもの（第268図６～15）とが存在する。前者は土壙墓内出土のものに限られ、総じて大型である。また、土壙墓内出土品には完形品が含まれるが、それ以外についてはすべて半欠・欠損品であり、玦状耳飾の欠損率が高い事を示している。形態的には、堀江武史氏によってＣ類とされた(堀江　1992)、平面形がやや横に広がった楕円形を呈し、断面形が偏平のものが大半を占める。

第268図１～５は土壙墓から着装状態で出土したものである。１は黒色を呈する蛇紋岩を用いた大型品である。Ｂ区南群に存在するＤ―352号土壙墓中より 乳緑色の同図２と対になって出土した。ともに全面にわたり丁寧な研磨が施された完形品で、中央孔上部に切目突出と呼ばれる製作工程を示す痕跡を留めている。諸磯ｂ式５段階（中段階新）の深鉢（第36図１）によりとして覆われていた（鉢被り）ことから、時期が確実な例である。

３・４は飴色を呈し、Ｄ区南東群に存在するＤ―1011号土壙墓中より対になって出土した。２点とも両面穿孔による補修孔をもつ。３は欠損面が磨耗していることから、埋納以前にすでに欠損していたことが分かる。この土壙墓からは土器はまったく検出されていないが、Ｄ区南東群は本遺跡では最も古い土壙墓群であり、副葬品として出土した深鉢はいずれも有尾式である。しかも中心的位置から検出されていることから、有尾式期のものである可能性が高い。

５は、Ｄ区中央群に存在するＤ－949号土壙墓中より単独で出土した。３・４と同様の飴色を呈するが、前述の１～４とは形態的に異質である。断面が蒲鉾状をなすもので、玦状耳飾の形態編年上では若干古手に位置付けられる。５と近い形態をもつのが蛇紋岩製の６であるが、Ｄ区南群の場所の包含層中より出土しており、５とは出土位置も近いことから同じ土壙墓に伴うものであった可能性もある。Ｄ区中央群は他の副葬された土器から有尾式～諸磯ｂ式までの間に形成されたものであり、時期が限定できない土壙墓群である。しかし、形態的特徴からみて有尾式期のものである可能性が高い。

本遺跡より出土したものは、前述のように平面形態が楕円形を呈するものが主流となっているが、中には11のようにコーナーをもち、一辺が直線をなす隅丸方形のものも存在する。15は切目部に明瞭な二

条の擦切り痕を残す、唯一の未製品である。本遺跡からは滑石の原石が出土していることからも(第271図１～７)、滑石製のものについては遺跡内で製作された可能性が示唆される。第271図７の滑石原石には研磨による切断部分が認められる事からも裏付けられよう。

垂飾（遺物編第269図１～５・11）　垂飾は、バラエティーに富んでいる（第269図１～３・５）。第269図１は乳白色を呈する滑石によって作られており、Ｄ区南東群に存在するＤ―1045号土壙墓中より出土した。一部欠損しているものの、中央に孔を有し平面形が舟形を呈する垂飾と思われる。カーブをもつ側面には浅い溝が作られており、その中央に位置するところに二箇所の刻みが入れられている。同じ土壙墓中からは縦形（EVSH―２形態）の石匙Ａ類が伴出している。この土壙墓からは土器は検出されていないが、土壙墓群出土の土器から有尾式期のものである可能性が高い。

２は穿孔はされていないものの、一側面に溝と刻みをもち、形態的に１に近いものと考えられる。３は横長・偏平の滑石製垂飾で、両端部近くに小孔があけられている。諸磯ｂ式１段階（古段階）の住居址から出土しており、この時期のものと推定される。

４は濃緑色を呈する勾玉形の石製装身具である。出土層位は諸磯ｂ式５段階（新段階）の住居址覆土中であり、この時期のものと推定される。(註) 勾玉形を呈する装身具は前期にも多く存在するが、不定形のものが多く、玦状耳飾の半欠品を再加工したものもよくみられる。本例のように明確な勾玉形をとるものはきわめて稀である。

５は、緑白色を呈する縦長の垂飾で、表面に一条の沈線が施されている。両側面に切り込みをもつ。11は、大部分が欠損しているため、全体形は不明である。側面に切り込みを有しており、紐掛けの役割を果たしていたものと推測される。山梨県天神遺跡に類例がある。

（註）この住居址の上層には称名寺式期の土坑が複数存在しており、６区には土坑が存在していた。したがって、こうした土坑に伴うものの可能性もある。

管玉（遺物編第269図６～10）　側面が若干カーブをもついわゆる鳥瞰骨形のもの（７・８）と、まっすぐなもの（６・９・10）とが存在する。６は、長さと幅の比から考えると管玉とするにはやや躊躇されるが、他に適切な名称がないため、ここでは仮に管玉とする。出土したＪ―７号住居址は帰属率は有尾式83.7％であり、この時期に比定される。石材は翡翠製である。翡翠の使用という点では、山梨県天神遺跡出土の大珠より更に古くなる可能性が高い。７・８は側面の中央部幅がやや狭くなった鳥瞰骨形の管玉である。孔の断面は「く」の字形を呈しており、両面穿孔を基本とするが、９のみが括れをもたず直線的な断面をもつ。このことから、９のみについては管錐穿孔法が用いられた可能性が高い。

大型石製装身具（遺物編第269図12～15）　12～15は、大型の石製装身具で、４点ともきわめて類似した乳緑色を呈する良質な蛇紋岩により製作されている。15については、装身具に特徴的な孔をもたないため、異なった用途・性格を推定すべきかもしれない。全面にわたり研磨され、光沢を帯びる。12はいわゆる緒締形の大型玉で、全面にわたり入念な研磨をおこなっている。前期のものとしては形態的に稀なもので、類例としては、近年発掘された青森県三内丸山遺跡の盛土遺構中より検出された翡翠製のものが知られる。ただし、中期に属するものである事から、本例は時期的に先行する。

13はヘラ状垂飾と呼称される装身具である。多数の飾玉類がピット中より出土した事で著名な福井県桑野遺跡で、早期末葉と現段階で最も古い例が確認されている(木下　1995)。表裏面とも穿孔部分に縦長のスリットが入れられている。おそらく穿孔を容易にするための工夫と思われる。また、一方の面には、擦り切りの痕跡が残されており、本例が擦り切り技法によって製作された事が分かる。類例としては、群馬県赤城村の三原田城遺跡86号土坑中から検出されたヘラ状垂飾があげられる（小野他　1987)。形態はもとより、石材・穿孔部のスリットなども酷似している点が留意される。三原田城例も土器を伴っておなず、正確な時期ははっきりしないが、花積下層式と諸磯ｂ式が出土しており、いずれかの時期のものと推定される。14は平面形が半月型を呈する偏平な垂飾である。13と厚さや石材が酷似しており、同一時期のものとみられる。この例は帰属率では諸磯ｂ式73.9％であり、この時期のものと判断される。13についても14との共通性や第268図１・２の玦状耳飾の製作技法の共通性からみて、諸磯ｂ式のものと推定される。

３点とも遺構外の包含層中より出土している。ただし、12・14については、大形掘立柱建物址が集中する諸磯ｂ式期の環状集落の中枢的機能をもつ場所付近より出土していることから、建物内に保管されていた可能性も考えられよう。こうした大型石製装身具は、土壙墓内より出土した玦状耳飾に比肩する大きさを有し、良質な石材を選択し、丁寧な仕上げがなされている。同じ石製装身具でも、良質な石材が用いられた精製品と、滑石製の普及品が並存している。このことは、用途により石製装身具が区別されて用いられていたことを示しており、良質のものは着装用（玦状耳飾）・集団管理的威信材（ヘラ状垂飾・緒締形の大型玉）といった差異があったと考えられる。

各種石製品（遺物編第270図１～９）　１～５は牛伏砂岩製の垂飾状の石製品である。すべて紐掛け状の抉りないしは全周する溝をもち、断面形が偏平である。形状からみて、石棒とは区別される。類例は、神保植松遺跡（谷藤　1997）などに存在している。装飾性はないので、用途は不明である。

６は軽石製の石製品で、１・３と同様溝が全周する。非常に軟質・軽量であり水に浮く。千葉県を中心として比較的多くの類例が知られ、浮子であるとする見解が多く見られる。

７は表裏面に放射状の沈線が施された牛伏砂岩製の環状石製品である。類例は神保植松遺跡（前掲）にある。なお、環状のみの石製品は神保植松遺跡のほか、東吹上遺跡（外山　1973)、三原田城遺跡（前掲）など前期に多くの類例がある。

９は側面に刻みが入れられた砂岩製の石製品である。欠損品のため全体形は不明である。類例はやはり神保植松遺跡（前掲）にある。

石製円盤（遺物編第270図10～19）　側面からの直接打撃により円形に整形されており、縁辺のエッジは潰されているものが目立つ。技術的には楔形石器の製作方法と共通するが、刃部がなく実用性がないことから土製円盤と同じような道具であったと判断される。諸磯ｂ式期のものが多い点も土製円盤と共通している。全部で14点検出されている。

ストーン・リタッチャー（遺物編第271図８～10）　全部で８点検出されている。軟質の礫の一部に鼠歯状痕が認められるものである。旧石器時代から存在しており、剝片の縁辺を押しつけて調製を行ったものと推定されている（加藤・鶴丸　1980)。土器片に類似した痕跡が認められる場合もある。

滑石製剝片・原石（遺物編第271図１～７）　玦状耳飾などの素材とみられるものである。７は側縁部に研磨による切断部分が存在しており、遺跡内でも滑石製の石製品が製作されていたことが分かる。全部で９点検出されている。大部分は諸磯ｂ式期のものである。

（大工原　豊・舘　弘子）

器種	個数	石材															欠損
		I	II		IIIa	IIIb		IV	V		VI						
		Ja	Sh	泥岩	An	SS	Tf	Sc	Se	蛇灰岩	翡翠	滑石	軽石	軟質泥岩	溶岩	硅化木	
ストーンリタッチャー	7	1	2				3							1			2
ケツ状耳飾り	14								5	5		4					8
垂飾	15					8			3			3	1				1
石製円盤	14		5		4	1		3								1	0
管玉	5								1	2	1	1					
勾玉	1								1								0
石製品	5					3			1			1					1
有孔石製品	1			1													0
箆状石製品	1					1											0
不明	1														1		0
合計	64	1	7	1	4	13	3	3	11	7	1	9	1	1	1	1	12

第165表　F類の石材と諸属性

［搬入礫］

大形棒状礫（立石）（第165図・第166表）　土壙墓の上部施設として、設置することを目的とした大形で棒状を呈する河川礫が24点出土している。加工痕・使用痕は基本的には認められない。多くは土壙墓に立石として立てられた状態で検出されており、機能・用途が特定される。すべて安山岩製であり、最も近い碓氷川のものが搬入されたとみられる。その後、中期に出現する大形石棒に多用される結晶片岩や石英斑岩（恩賀産）は全く用いられておらず、大形石棒の系譜とは別のものであると考えられる。長さは最小30cm、最大80cmであり、長副比３：１程度の形状のものが用いられている。重量は６kg～66kgである。長さ50cmを境に、重量は26kg以下と36kg以上の２つのグループに分かれる。

石皿状礫（第165図・第166表）　本遺跡からは石皿状を呈した大形河川礫が24点出土している。すべて安山岩製であり、碓氷川から搬入されたものとみられる。石皿状礫は住居址に据え付けられたような状態で検出される事例もある。また、磨耗痕が認められるものは石皿とし、敲打痕のみのものは台石として分類している。しかし、明確な使用痕が認められないものも多数存在している。大きな扁平面を有した形状や、重さからみて、使用することを目的に遺跡へ搬入されたものと推測されるが、用途は不明である。少なくとも、石皿のように磨り潰しや敲打を伴う作業に用いられたものではないようである。土器作りの作業台、植物繊維・動物の毛皮の加工台など、研磨・敲打を伴わない作業用の台石であった可能性が想定される。

また、土壙墓の上部施設として立てられている例や、下部施設の「抱石」として用いられている例もある。上部施設として用いる場合、大形棒状礫とまったく同じ機能であったのか、多少異なっていたのかについては、人骨が検出されていない本遺跡の事例からは言及することができない。また、「抱石」としての利用は、磨石・凹石の転用もあるように、第一義的用途ではなかったと考えた方が妥当であろう。

大きさは20cm～50cmの範囲にほぼまとまる。しかし、重量は２kg～44kgと大きくばらついており、こ

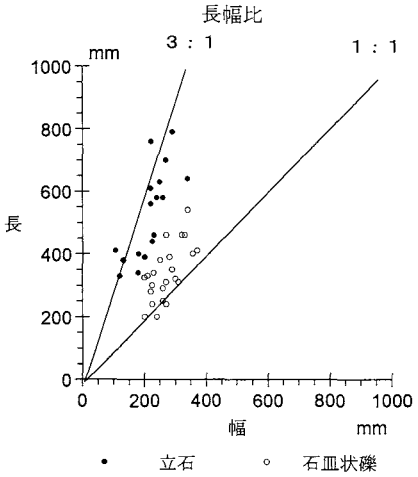
れは厚さが異なっていることによる。したがって、大きさが重視されていたことが分かる。欠損率は25%であり、石皿（全体で76%）に比べて低率である。また、被熱率は50%であり、石皿（全体で16%）よりも高率である。これは石皿と扱い方が大きく異なっていたことによるとみられる。

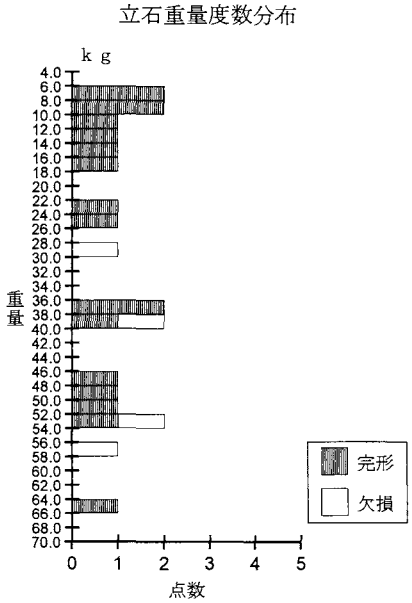
抱石（遺物編第272図～同第274図）　土壙墓の下部施設の「抱石」として用いられていた自然礫で27点検出されている。すべて安山岩製であり、大部分が河川礫である。形状や大きさは多様であり、こうした属性での選択性が認められない。また、欠損しているものもあるが、どの段階での欠損なのか判断しかねる。被熱率は44.4%である。一般的に集石として用いられている礫と共通性が高く、こうした遺跡内に存在していた礫が「抱石」に転用された可能性が高い。

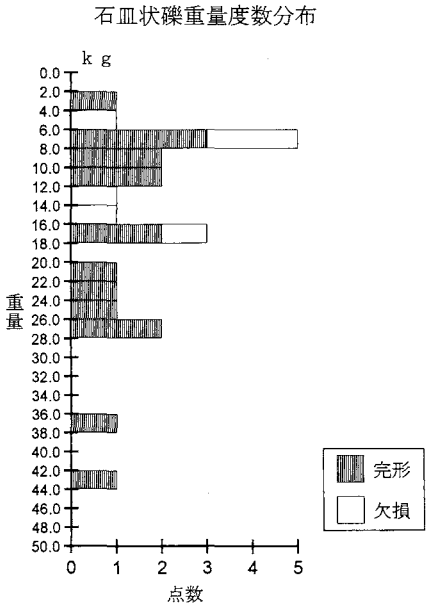
（大工原　豊）

器　種	個数	石材	欠損	被熱	総重量（g）	重量平均（g）
		IIIa				
		An				
立　石	24	24	4	7	684,000	31,091
石皿状礫	24	24	6	12	352,660	15,333

第166表　立石と石皿状礫の諸属性







第165図　立石と石皿状礫の長幅比と重量度数分布

c　縄文前期中葉から後葉の打製系列（Ａ類・Ｂ類）について

［有尾式期の押圧剝離系列（Ａ類）について］

各器種の関連性（第166図）　第166図は上段は押圧剝離系列に属する各器種の長幅比グラフを重ね合わせたものである。また、下段はこれを分かり易いように模式化したものである。これにより各器種の関連性について検討してみよう。

石鏃は系列中最も小さく、狭い範囲に限定されている。これは二次剝離工程（調整工程）を経ることによって、①剝片の形状が大きく変化したことと、②押圧剝離により形状に厳格な規制が加えられたこと、に帰因しており範型が存在していたことが分かる。換言すれば、石鏃がこの系列の中で唯一定型化され、機能・用途が明確化された器種であり、「最優先器種」と認識されていたと見なされる。押圧剝離系列とは石鏃を効率的に製作するための剝片剝離技術系であり、一次剝離工程はその「素材剝片Ａ」を効率的に獲得することを目標としていたと言えよう。

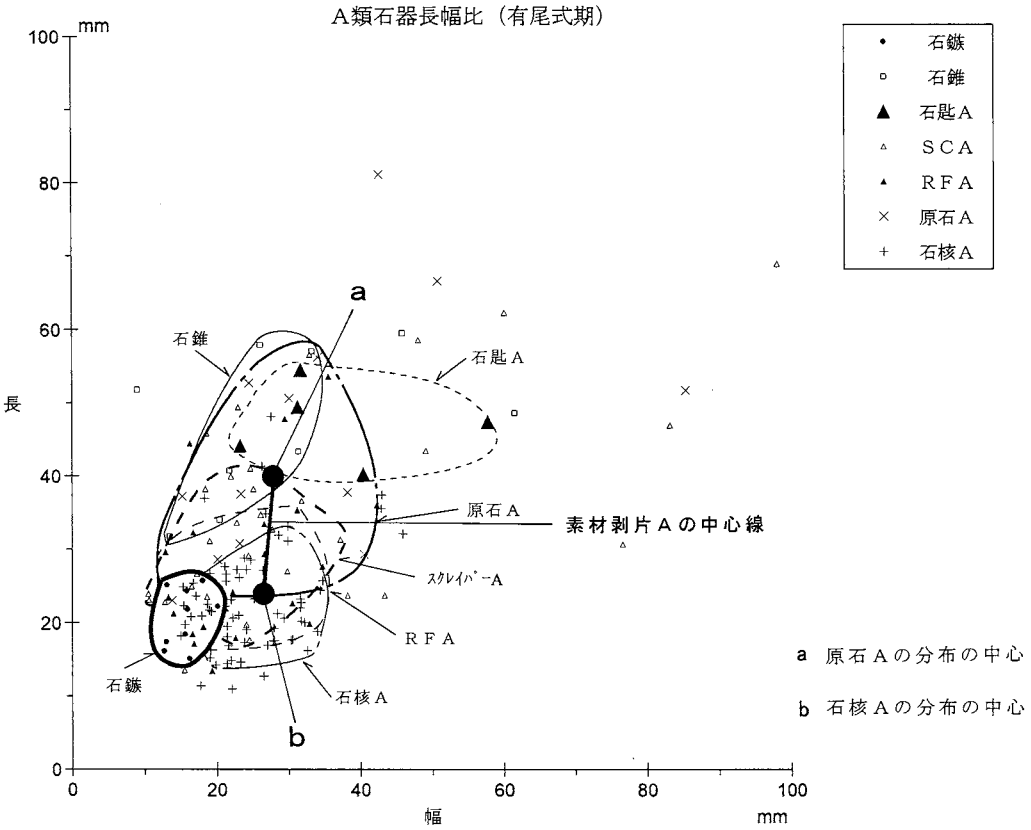
では、素材剝片Ａの実態はどのように認識されるであろうか。素材剝片Ａは原石Ａの大きさから石核Ａの大きさに変化する過程に存在している。したがって、「原石Ａの分布の中心」と「石核Ａの分布の中心」を結んだ線上に典型的な素材剝片Ａが存在していた可能性が高い。これを「素材剝片Ａの中心線」と呼ぶことにする。ここではａ（４，３）とｂ（２，2.7）を結んだラインが「素材剝片Ａの中心線」となる（第166図上段）。そして、「素材剝片Ａ」の許容範囲は二次剝離工程の技術水準によって異なると考えられる。ここでは遺跡内で検出されることの少ない「素材剝片Ａの中心線」から±0.5cm程度の範囲をこの時期の素材剝片Ａの許容範囲の考えておきたい（第166図下段）。本遺跡では「素材剝片Ａ」はほとんど検出されることがない。これは素材剝片Ａの状態で保管されることなく、直後に石鏃化されてしまったためとみられる。(註1)

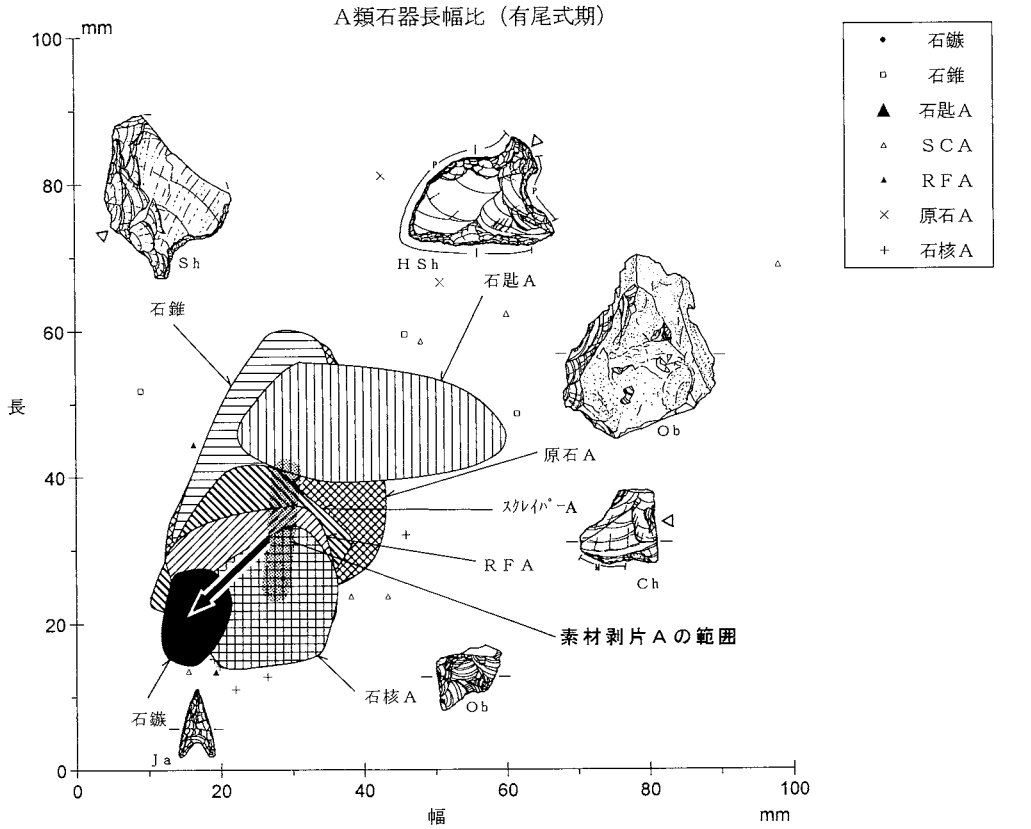
そして、「素材剝片Ａ」を取り巻く部分には、ScA と RFA が存在している。両器種は二次剝離工程を経ても、剝片の形状が大きく変化していない。こうした器種の素材となる剝片を「準素材剝片Ａ」と呼ぶことにする。「準素材剝片Ａ」の範囲は広く、ある程度の数量が遺跡内に残存されている。これは両器種の素材剝片獲得が二義的なものであり、すべてを二次剝離工程に回す必要がなかったためであろう。

以上のように、押圧剝離系列では、石鏃と一義的、ScA・RFA を二義的な器種として、一連の工程の中で製作されていたことが理解できる。

しかし、石匙Ａは「素材剝片Ａ」の範囲よりも大きく、石鏃製作用の原石Ａとは別の大形原石から剝離された剝片が素材として用いられている。上述の剝片剝離系列とは別の剝片剝離工程が存在していたことを意味する。なお、石錐は一緒に図示しているものの、有尾式期においては、直接打撃系列の中に属している。当初は石鏃とは全く別の剝片剝離工程の中に組み込まれていた器種である。

石鏃製作の実態　有尾式期の石鏃では黒曜石が63.2％用いられており、黒曜石が「最優先石材」と認識されていたようである。この時期にはまだ遠隔地から搬入される黒曜石の入手量は少なく、原石の大きさも比較的小さい。黒曜石で一次剝離作業により剝離された剝片（石器化されたものも含む）は258点である。これに対し、石核は69点である。したがって、一つの原石から3.7点の剝片が剝離されて残核化されていたことになる。遺跡外で消費されてしまったものと、調査で検出できなかったものがこれに多少加わり、一つの原石から５～10点程度の剝片が剝離されていたものと推測される。ここでは仮に10点の剝片が剝離されたとしよう。すると、このうち8.1点は単なる剝片で、石鏃は0.5点、ScA0.6点、RFA 0.7





第166図　有尾式期A類石器の長幅比

点となってしまう。つまり、原石２つでようやく石鏃１点が確保される計算である。ただし、素材剥片Ａがすべて石鏃化される訳ではないから、素材剥片Ａはもう少し多く獲得されていたとみられる。少なくとも１つの原石から２点程度の素材剥片Ａが獲得されなければ効率的な剥片剥離技術とは言い難い。

こうした計算となってしまうのは、遺跡外で消費されてしまった石鏃が相当数存在していたためであろう。少なくとも石核数以上の石鏃が存在していたはずであり、おそらく出土した石鏃の６倍以上の石鏃が生産されていたと推定されるのである。また、ScA や RFA は、遺跡外での消費は石鏃よりも少ないと推定されるが、石核数程度が製作されていたとすれば、やはり、出土数の４倍以上であったと推測される。

また、大きさの分析でも述べたように、有尾式期では石匙Ａ、大形の ScA は、チャート・硬質頁岩が多用されており、石鏃とは別の剥片剥離工程が存在しているとみられる。原石Ａも石核Ａも存在していないことから、基本的に遺跡外に一次剥離工程が配置されていたと推察される。そして、遺跡内に搬入されたのは、選択された「石匙Ａ・ScA 用中形素材剥片Ａ」であったとみられる。

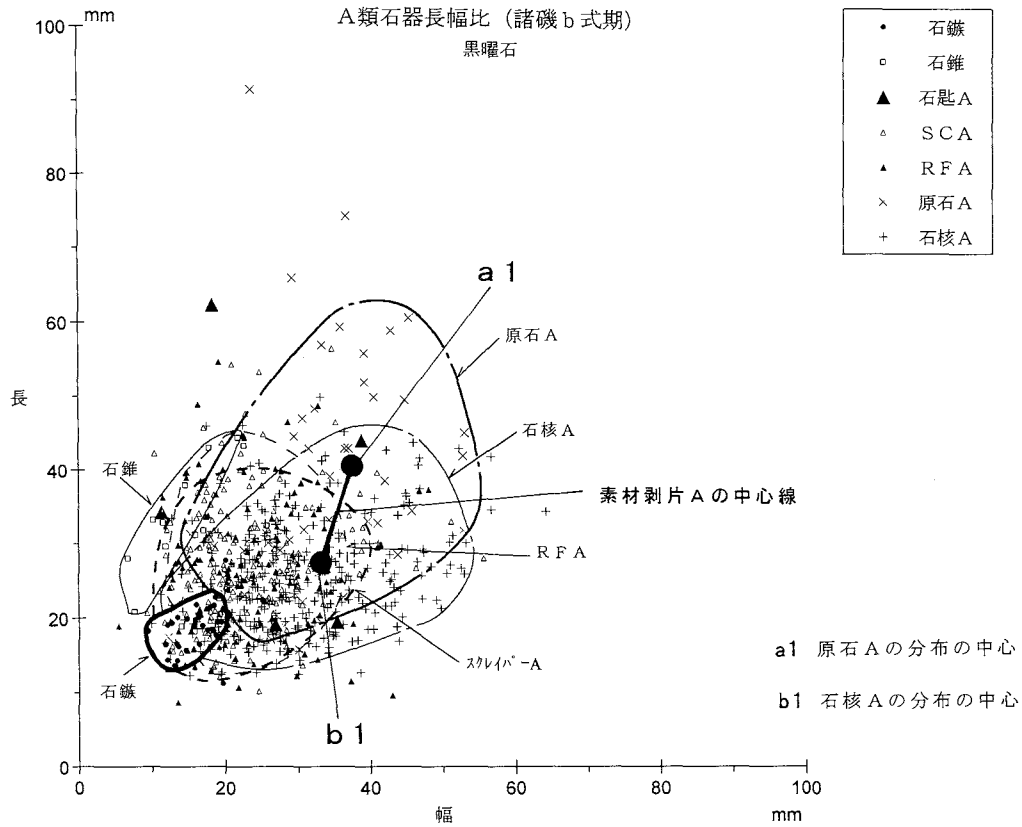
工程配置と型式（第170-１図）　これまでの分析結果をまとめて、一つの工程配置図として示したものが第170-１図である。有尾式期では石鏃を製作することを目的とした黒曜石亜系列と、石匙Ａを製作することを目的とした非黒曜石亜系列が並存している。主体となるのは黒曜石亜系列である。これは遺跡内にすべての工程が配置されている。搬入された黒曜石原石（円礫・亜角礫）からは、一次剥離工程で①原礫面打面固定、②打面・作業面非固定の直接打撃［Ｄ］により、「素材剥片Ａ」（長さ２～４cm・幅2.7～３cmを基本とする）が作出される。そして、作出された「素材剥片Ａ」はすべて二次剥離工程に回される。

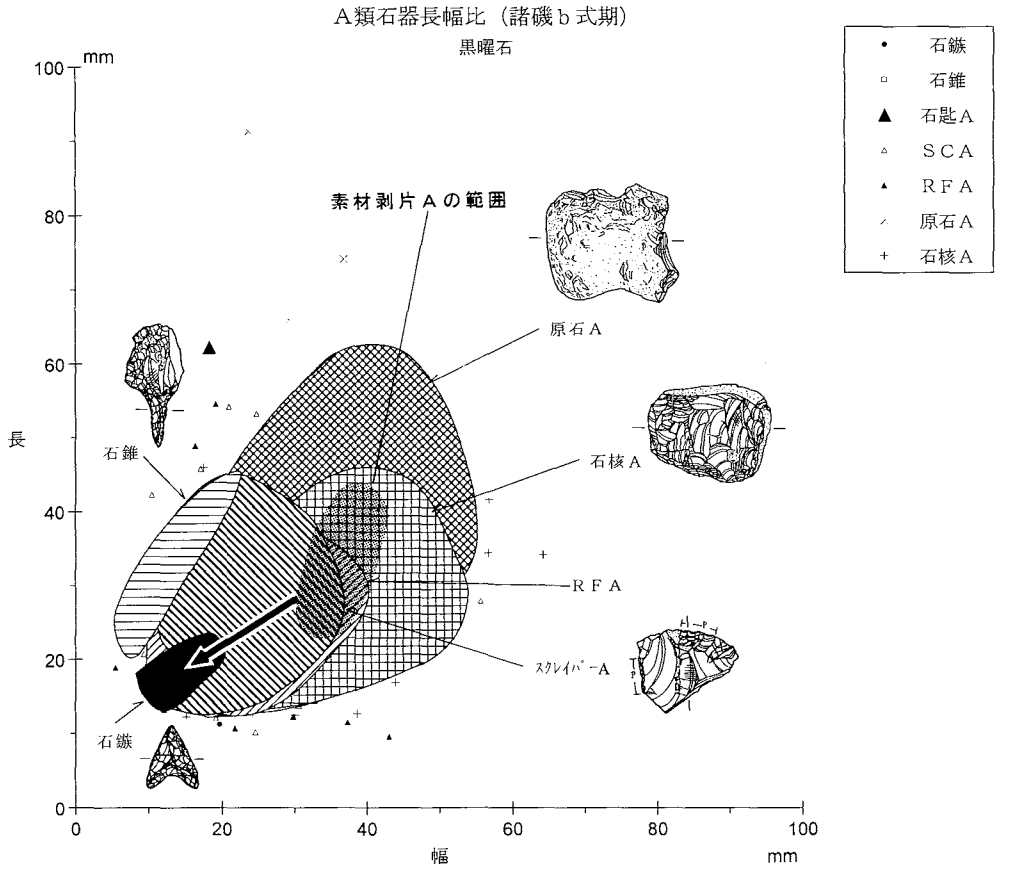
二次剥離工程では、押圧剥離（両面交互剥離）により、厳格な範型（細身・小形：Ｉａ－S1・Ｉｂ－S2）に基づいた石鏃が製作される。こうして製作された石鏃数は、１原石当たり１～２点である。

「素材剥片Ａ」と認定されなかった剥片のうち、「素材剥片Ａ」に準じた形状の「準素材剥片Ａ」は、二次剥離工程に回され、水平持ち調整（片面加工）と各種調整技術（Ｐ・Ｐ＋Ｄ・Ｄ・M）によりに、ScA・RFA に加工される。

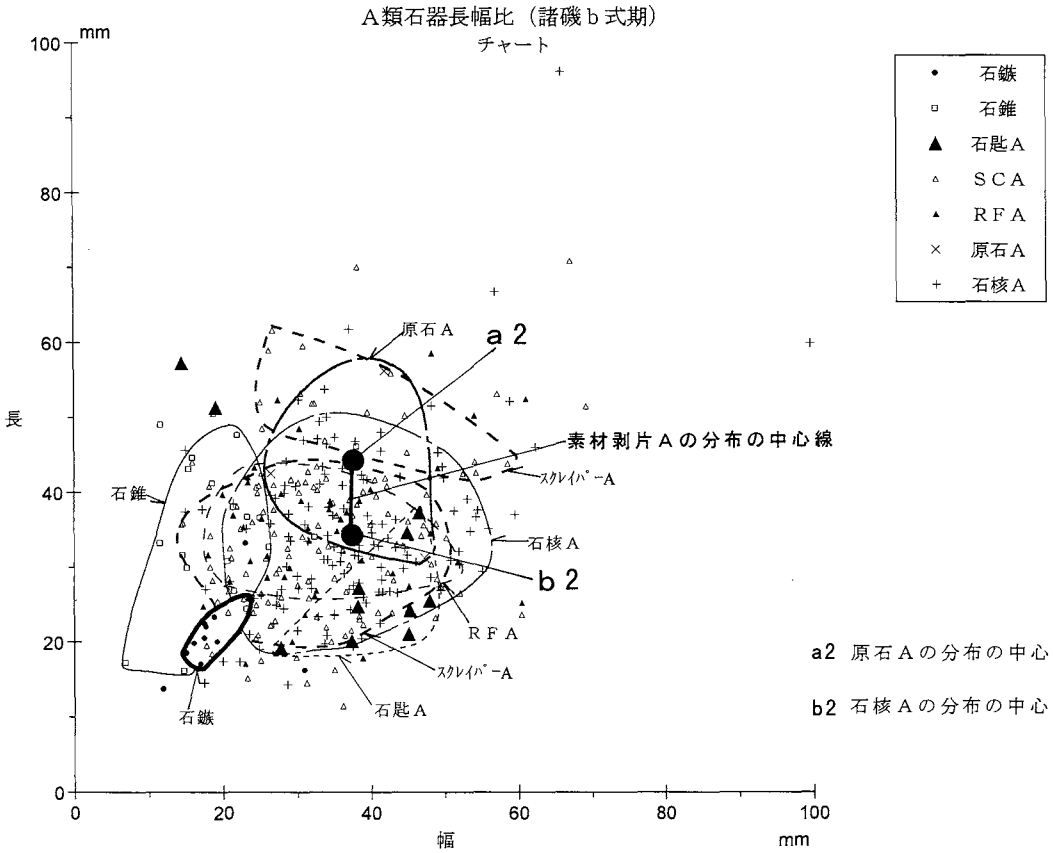
また、チャートを主体とする非黒曜石亜系列では集落外に一次剥離工程が配置されていたとみられる。直接打撃系列（Ｂ類）の一次剥離工程に多用される「角打ち技法」によるものが多く、石匙ＡやScA 用の「中形素材剥片Ａ」のみが集落内へ搬入されていたと推定される。「中形素材剥片Ａ」は遺跡内にある程度存在していることから、素材剥片の状態で保管されていて、必要に応じて二次剥離工程に回されたものと考えられる。このように、非黒曜石系列は黒曜石亜系列とは別個の工程配置がなされている。

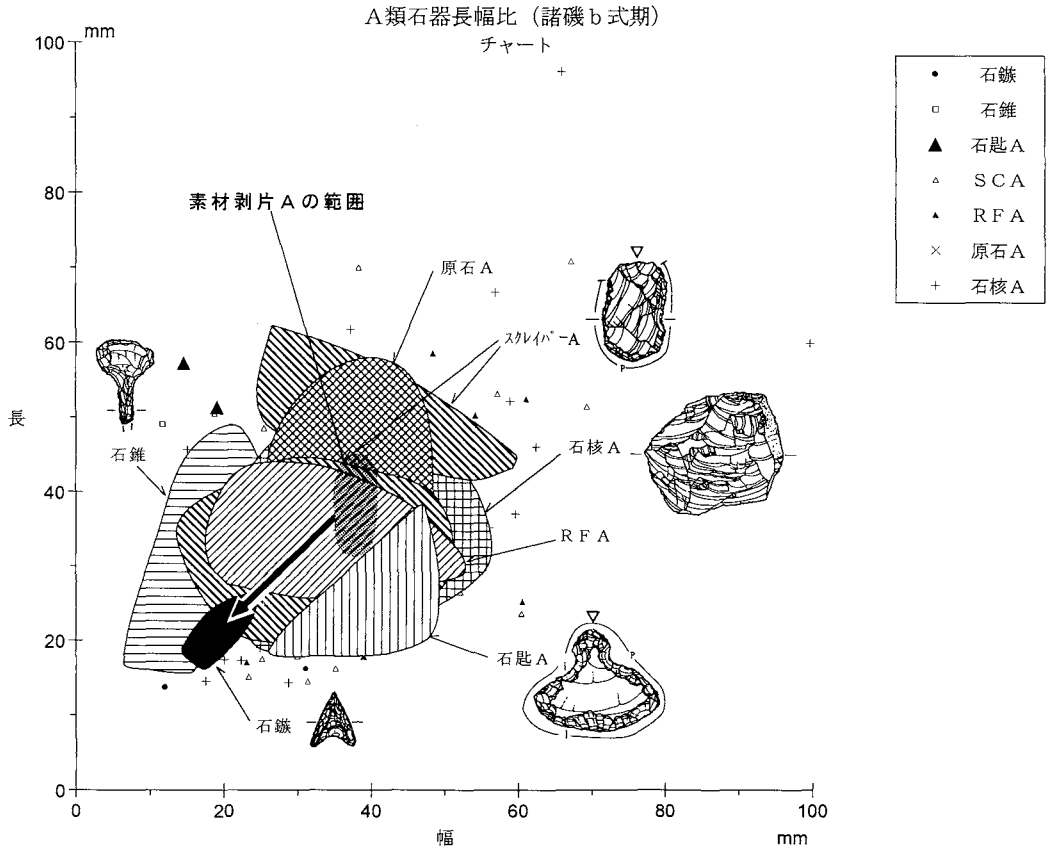
以上のような特徴を有した群馬県西部を中心とした有尾式期の押圧剥離系列と器種群について、**中野谷ＡＺ１式（押圧剥離系列）**と呼ぶことにする。この型式は前期初頭からほぼ同じであるので、前期前半期の時間幅を有している。



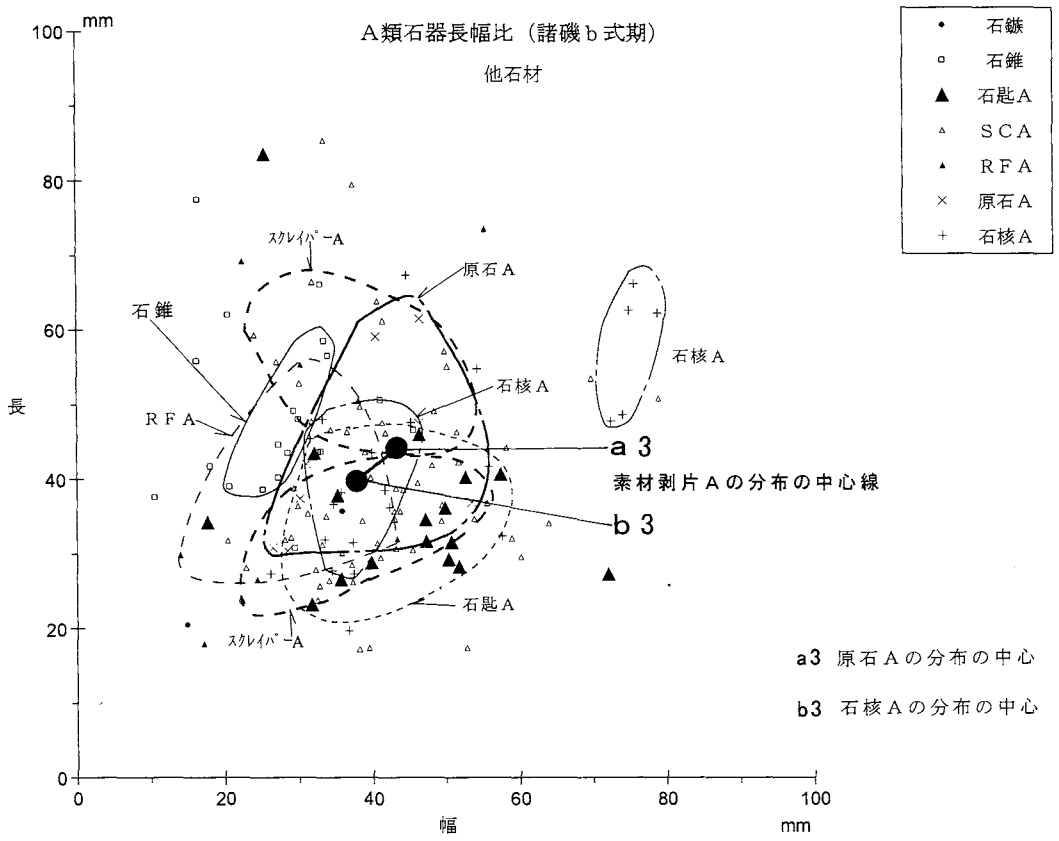


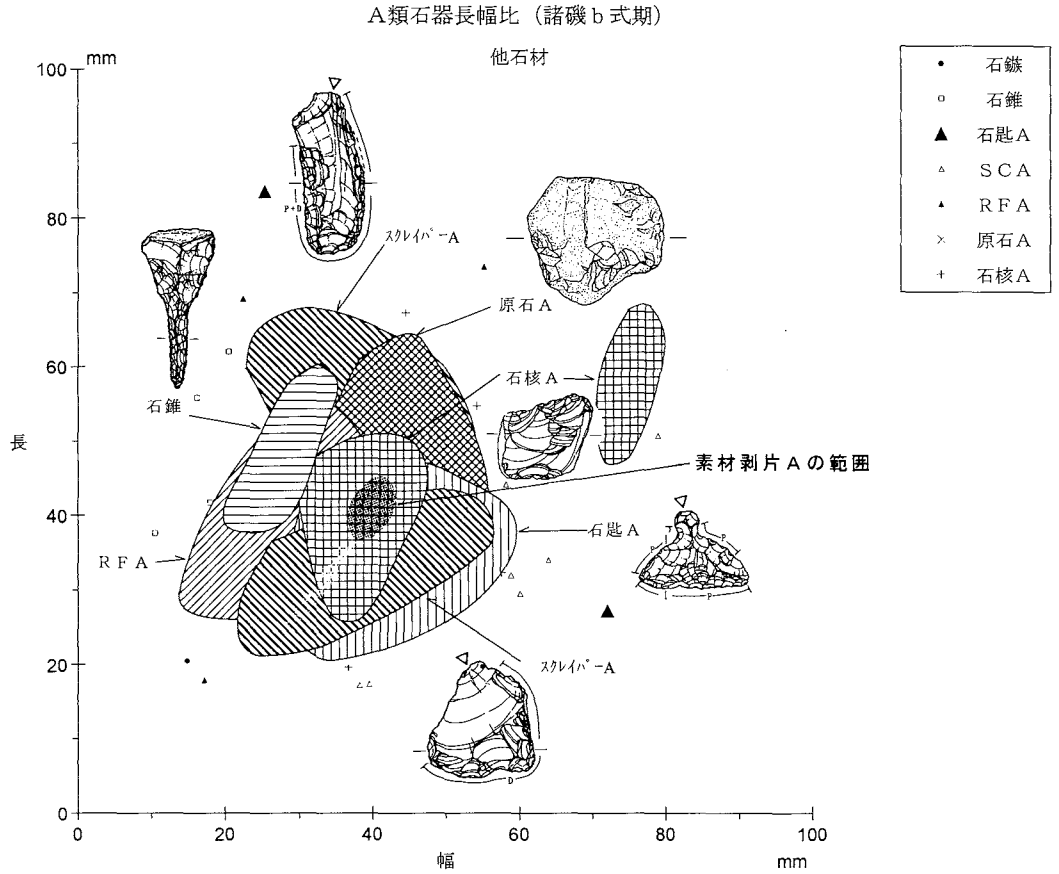
第167図　諸磯ｂ式期Ａ類石器の長幅比（１）





第168図　諸磯ｂ式期A類石器の長幅比（２）





第169図　諸磯ｂ式期A類石器の長幅比（３）

［諸磯ｂ式期の押圧剝離系列（Ａ類）について］

各器種の関連性（第167図～第169図）　第167図～第169図上段は石材ごとに各器種の長幅比を重ね合わせたグラフである。また、下段はこれを模式化したものである。

黒曜石ではグラフ上の各器種の分布状態からみて、石鏃を「最優先器種」とした亜系列と見なすことができる。

「素材剝片Ａの中心線」はａ1（4.0，3.7）とｂ1（2.7，3.3）を結んだラインである（第167図上段）。そして、「素材剝片Ａ」の範囲は第167図下段と推定される。

ScA と RFA は分布域がほぼ重複している。その分布域は、素材剝片Ａと石鏃の中間に集中しており、素材剝片Ａに準じた剝片（準素材剝片Ａ）がこれらの素材となっていたことが理解できる。

以上のように、黒曜石亜系列では石鏃と一義的、ScA・RFA を二義的な器種として、一連の工程の中で製作されていたと判断される。

また、石錐はこの系列の縁辺部に分布域をもっており、大きく形状の異なる剝片が素材剝片として用いられていたことが分かる。石錐は必要応じて、特別に素材剝片が用意されていたと推察される。

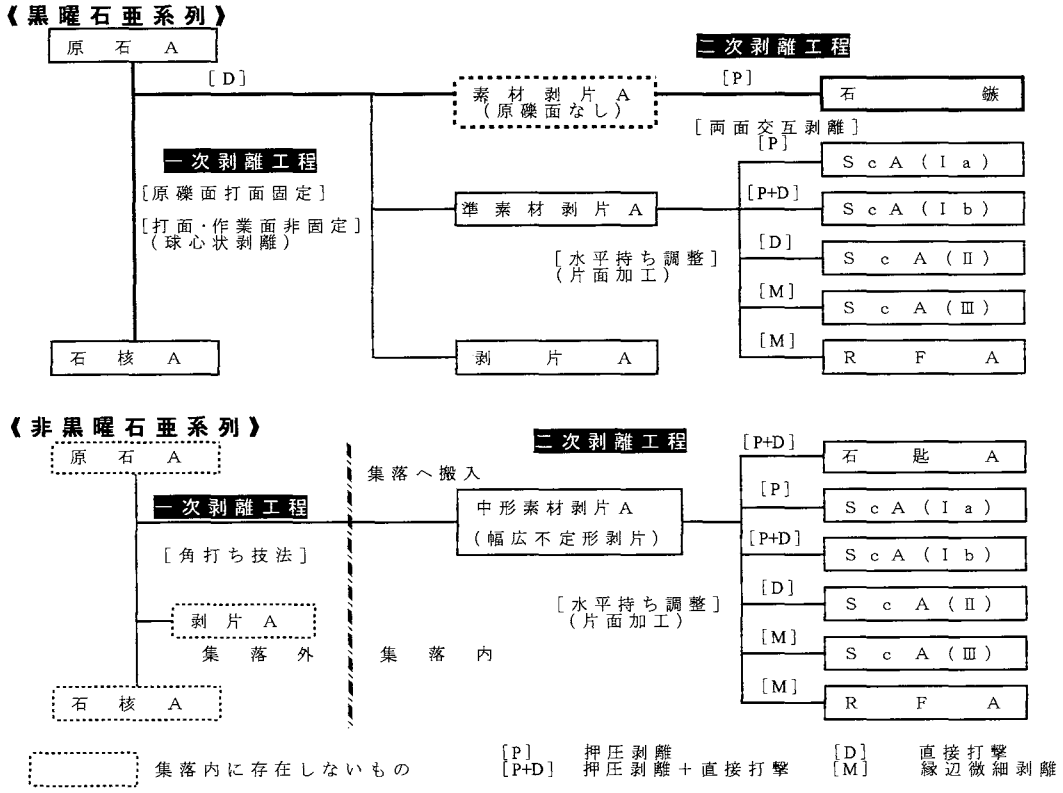
チャート亜系列では「素材剝片Ａの中心線」はａ2（4.2，3.8）とｂ2（3.4，3.8）を結んだラインである。そして、素材剝片Ａの範囲は第168図下段の範囲となる。黒曜石亜系列に比べ大きな剝片が作出されていることが分かる。しかし、石鏃の分布域は、黒曜石亜系列とほぼ同じである。そのため、この素材剝片Ａを用いて石鏃を製作する場合、二次剝離工程において、大きな整形を行う必要が生じることになる。これは、チャート亜系列が石鏃の素材剝片Ａのみを作出することを目的としていないことを意味している。この亜系列で石鏃以外に定型化された器種としては、石匙Ａが存在している。石匙Ａはこの素材剝片Ａを用いて製作することが可能であり、むしろ石匙Ａを主たる目的器種としていた可能性が高い。

その他の石材では、石核Ａと ScA が二つの分布域をもっている。より大形の石核Ａは黒色安山岩製のものである。しかし、これに対応する原石Ａは遺跡内にほとんど存在していない。したがって、ある程度剝離が進行した段階の石核や素材剝片の状態で、遺跡内へ搬入されていたものと推定される。これに対応する石器が大形の ScA と判断される。こうした黒色安山岩の在り方は、直接打撃系列（Ｂ類）のスクレイパー類の在り方と基本的に変わりないので、この石材の器種はＢ類と認識されていた可能性が高い。

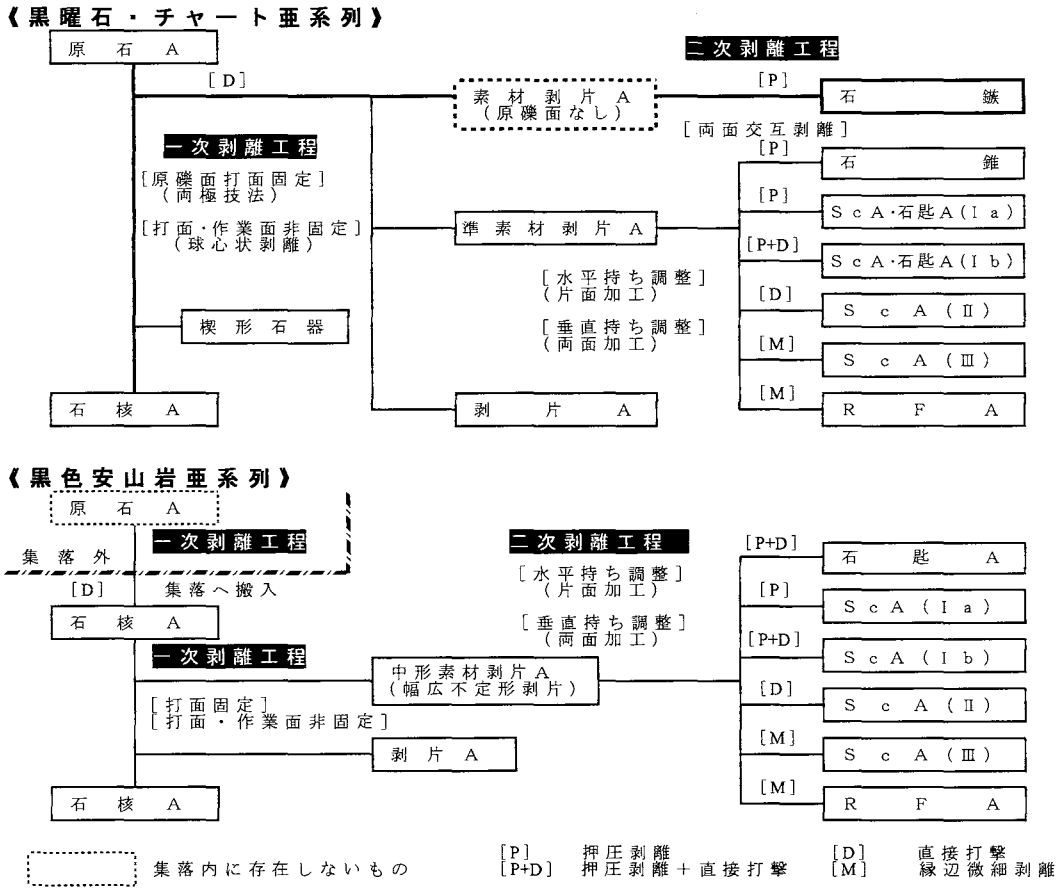
なお、硬質頁岩製でも大形の ScA が存在しているが、ScA ないし中形素材剝片Ａとして遺跡へ搬入されたものであり、この遺跡で製作されたものではないと考えられる。

このように、石鏃製作を主たる目的としている黒曜石亜系列以外では、それぞれ目的とする器種に応じて、その都度素材剝片を準備するフレキシブルな一次剝離工程が存在していたものとみられる。

石器製作の実態　石鏃の最優先石材と位置付けられている黒曜石製の石器類の比率について調べてみたい。この時期では少なくとも１つの石核Ａから7.9点以上の剝片が剝離されたことになる。遺跡内に残存している石鏃では、3.3個の原石Ａ（26点の剝片Ａ）の消費に対し、１点しか石鏃が製作されていない計算になる。これではあまりに非効率過ぎる。諸磯ｂ式期には有尾式期に比べ黒曜石の搬入量が爆発的に増加し、個々の原石Ａも大きくなっていることから、出土した石鏃の数倍の石鏃が製作され、遺跡外で消費されていたと推定される。この時期でも有尾式期と同じ技術水準が維持されていたとすれば、少なくとも１点の原石から１～２点の石鏃は製作されていたはずである。出土数の３～６倍が製作されていたと考えたい。



第170―1図　有尾式期のA類石器の工程配置図



第170―2図　諸磯b式期のA類石器の工程配置図

また、同じ工程の中で製作されていたScA・RFAについても、出土数を相当上回る数が製作され、遺跡外で消費されていたと推定される。

工程配置と型式(第170－2図)　これまでの分析結果から工程配置を復元したものが第170-2図である。諸磯b式期の工程配置のうち、黒曜石亜系列は石鏃製作を一義的としており、基本的に有尾式期と大きな違いはない。しかし、黒曜石の搬入量の増加と原石サイズの大形化に伴い、剥片剥離技術や器種構成に変化が認められる。一次剥離工程では、剥片剥離技術に両極技法が認められるようになる。(註2) また、石匙Aがこの亜系列に加わる点も大きな特徴である。チャート亜系列も基本的な工程配置は黒曜石亜系列と同じである。ただし、目的となる器種が必ずしも石鏃だけではなく、準素材剥片Aから製作される石匙Aなどスクレイパー類の比重が大きい点が特徴である。二次剥離工程では、伝統的な「水平持ち調整」のほかに、「垂直持ち調整」による両面加工が顕在化する。

また、黒色安山岩亜系列は、本来直接打撃系列（B類）と認識されていた可能性が高い。原石はほとんどないのに、石核が遺跡内に存在していることから、一次剥離工程の初期段階は集落外（おそらく石材入手場所付近）に配置されていたと推察される。(註3) この工程配置はB類の基本的な形であり、この石材が異なる系列のものであったことを示している。

以上のような多量の黒曜石の安定供給を背景とした、両極技法と「垂直持ち調整」の多用を特徴とする群馬県西部地域の諸磯b式期の押圧剥離系列について、**中野谷ＡＺ２式（押圧剥離系列）**と呼ぶことにする。なお、型式の時間幅は前期後半期であるが、諸磯c式期以降は細分、あるいは別型式として区別される可能性がある。また、この型式は黒曜石の安定供給と連動していることから、型式の分布域は中野谷ＡＺ１式よりも広く、これまで黒曜石の直接供給圏外であった群馬県東部地域や、埼玉県北部も含む可能性がある。

（大工原　豊）

（註１）横浜市茅ケ崎貝塚では、諸磯c式期の土壙墓に副葬品として黒曜石の素材剥片が10点埋納された例が存在しており、末端消費地では、素材剥片レベルでの保管されていた場合が存在していたようである。調査担当者小宮恒雄氏のご好意により、実見させていただいた。

（註２）縄文時代前期から中期にかけて両極技法による楔形石器（ピエス・エスキーユ）が広範な地域に存在していることについては、岡村道雄氏により、指摘されており(岡村　1976)、田中英司氏は加曽利E式後半期の両極技法による石核が石鏃製作と関連するものであることを指摘している(田中　1977)。その後、縄文時代における両極技法の事例は増加したが、前期後半以降のものが大部分である。しかし、栃木県などチャートを石鏃の素材とする地域では、前期前半期には素材剥片獲得技術として、両極技法は多用されていることが指摘されており（大塚 1987)、両極技法の系譜は地域によってはさらに遡るようである。本地域では諸磯b式期になって両極技法が多用するようになるので、地域により両極技法の導入には時間差が生じていたとみられる。また、この時期に直接打撃系列の打製石斧（II形態）に両極技法と親和性の高い「垂直持ち調整」が普及するようになる。押圧剥離系列での両極技法の普及は、上記の二つの現象と関連するものと推定される。

（註３）八風山遺跡群では、縄文時代前期と推定される一次剥離工程の遺跡の存在が確認されており、こうした石材原産地付近の場所や、河原で搬出可能な状態とされた石核や素材剥片が遺跡へ搬入されたものと推定される。須藤隆司氏のご好意により遺跡・遺物を実見させていただいた。

［有尾式期の直接打撃系列（Ｂ類）について］

各器種の関連性（第171図）　第171図上段は各器種の長幅比を重ね合わせたグラフである。そして、同図下段はこれを模式化したものである。

ここに示された原石Ｂは、中形原石Ｂであり、石核Ｂの大部分はこれより小形であることから、中形原石Ｂと対応関係にある中形石核Ｂであることが分かる。ここで作出された「中形素材剝片Ｂの中心線」は、ａ（7.2，6.8）とｂ（6.7，7.3）で示される（上段）。また、これを中心とした一定の範囲が、中形素材剝片Ｂの標準形を示している（下段）。この中形素材剝片Ｂから製作される器種としては、ScB②・RFB・石匙Ｂ②・③が対応する。ちなみに、ScB は密度の異なる大小二重に重なった分布域を有しており、２群存在していると考えられる。ここでは大形を ScB①、中・小形を ScB②とする。

しかし、打製石斧（Ｉ形態）・石匙Ｂ①・ScB①はこれよりも大形であり、中形原石Ｂから製作し得ない器種であることが分かる。これらの器種の素材となる剝片（大形素材剝片Ｂ）を作出した大形原石Ｂと大形石核Ｂは遺跡内に存在していない。大形素材剝片Ｂは遺跡外で作出され、搬入されたことになる。

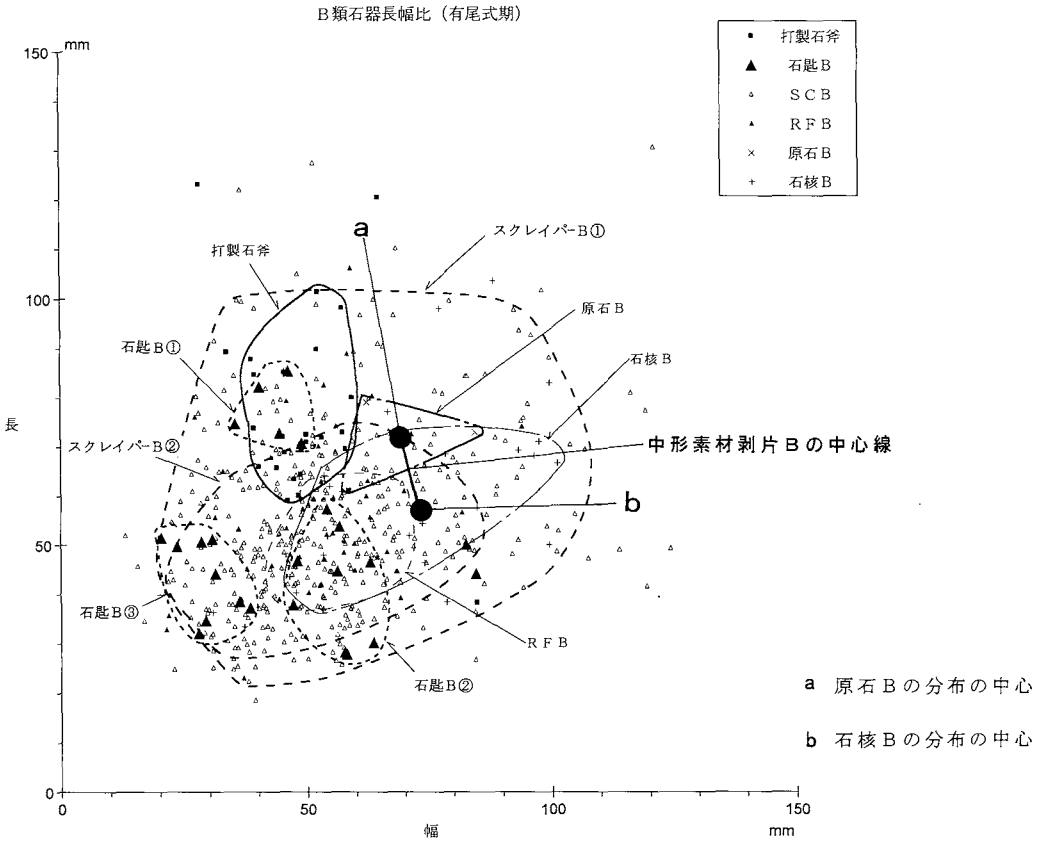
工程配置と型式（第173―１図）　これまでの分析結果をまとめると、第173―１図のような工程配置を復元することができる。ここでは大きく二つの亜系列が存在している。

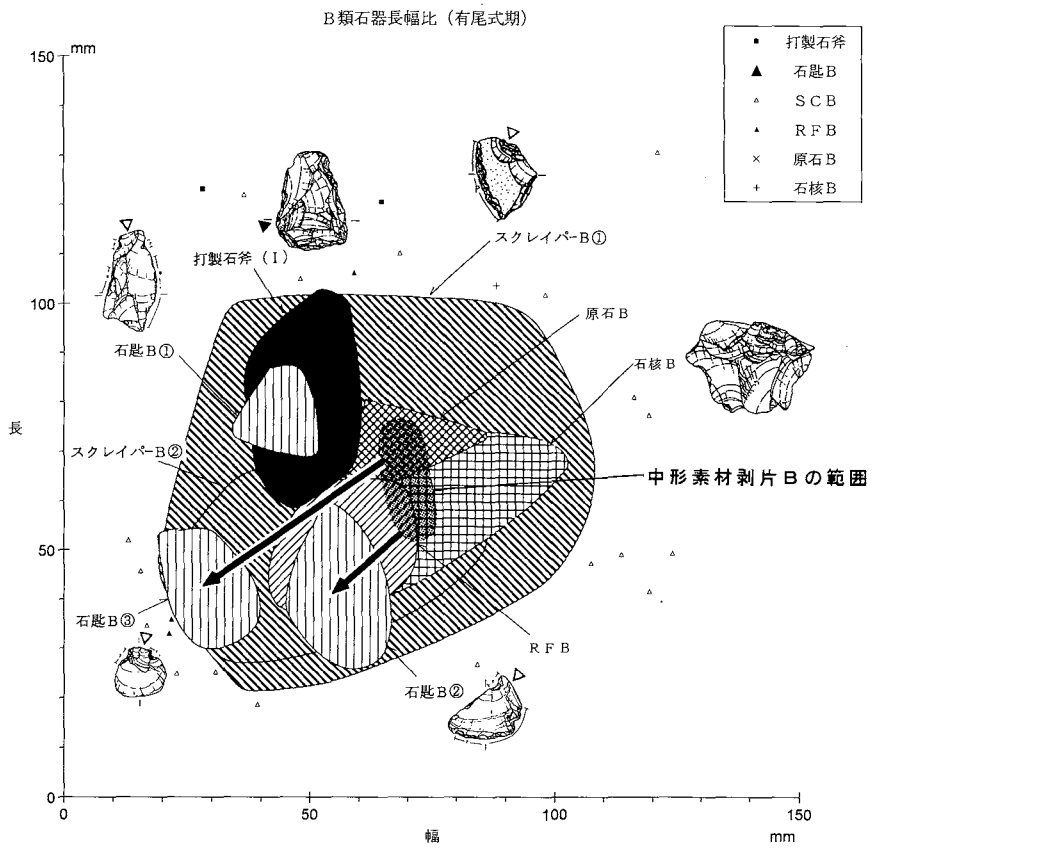
大形原石Ｂから大形素材剝片Ｂ（大形幅広剝片）を作出するための一次剝離工程は、遺跡外に工程が配置されており、大形素材剝片Ｂのみが遺跡内へ搬入されたとみられる。大形素材剝片Ｂは二次剝離工程で「水平持ち調整」による片面加工（水平回転技法）が施され、打製石斧（Ｉ形態）が製作される。また、一部の石匙Ｂ（Ｉａ縦形）も同じ工程の中で製作されている。

また、中形原石Ｂは遺跡へ搬入され、一次剝離工程により、中形素材剝片Ｂ（中形幅広剝片）が作出される。ここでは、原礫面に打面を固定した剝離方法と、角打ち技法が多用される。そして、二次剝離工程では、主として「水平持ち調整」による片面加工が各種調整技術（Ｐ・Ｐ＋Ｄ・Ｄ）によって施され、石匙ＢやScB となる。ここで一部のものに対して、押圧剝離［Ｐ］が施されるが、これは押圧剝離系列の調整技術の流用である。また、先に述べたように、石錐もこの工程の中で製作されている。

このように、系列に属する各器種が並列の状態で製作工程内に配置されている点が、この系列の大きな特徴である。また、技術的にも打面固定・「角打ち技法」や、「水平持ち調整」による片面加工（水平回転技法）が多用される点も大きな特徴である。そこで、こうした特徴を有し、頁岩（下仁田泥岩）を主たる石材として用いた、群馬県西部を中心とした前期前半の直接打撃系列（Ｂ類）について、**中野谷ＢＺ１式（直接打撃系列）**と呼ぶことにする。(註1) この型式では、各器種を必要に応じて独立して製作することが可能であり、フレキシブルな石器製作工程である。したがって、各器種の比率は遺跡のセトルメントにより可変的であり、移動性の高い社会形態に適応した型式である。この型式の分布範囲はさらに広範な地域を含む可能性があるが、今後の検討課題である。また、関山式期と有尾式期では、多少異なる部分が存在しており、さらに細分される可能性がある。

（註１）この時期の型式については、「有尾・黒浜式直接打撃系列」（大工原　1996）と呼称したものを基本としている。ここでは、遺跡出土の具体的資料に則してより実証的に工程配置を示したので、以前の工程配置図よりも複雑化し、部分的に異なる点がある。今後も一部変更を生じる可能性があるが、根幹部分は変わることはないと考えている。





第171図　有尾式期のB類の石器長幅比

［諸磯ｂ式期の直接打撃系列について］

各器種の関連性（第172図）　第172図上段は各器種の長幅比を重ね合わせたグラフである。そして、同図下段はこれを模式化したものである。

ここに示された中形原石Ｂは中形石核Ｂと対応関係にある。ここで作出された「中形素材剝片Ｂの中心線」は、ａ（7.6，8.1）とｂ（7.2，9.8）で示される（上段）。これを中心とした一定の範囲が、中形素材剝片Ｂの標準形を示している（下段）。この中形素材剝片Ｂは、やや横長の剝片であったことが分かる。この素材剝片から製作される器種としては、石匙Ｂ①･②･③、ScＢ②、RFＢが対応する。ただし、石匙Ｂ②の一部はこれより大形であり、この工程内では製作できないものが存在している。ここでの器種相互の関連性は、基本的に有尾式期と同じである。

打製石斧（II形態）と石匙Ｂ②の一部、ScＢ①はこれよりも大形であり、中形原石Ｂからの工程とは異なる工程の中で製作された器種であることが分かる。これらの器種の素材となる大形素材剝片Ｂを作出した大形原石Ｂと大形石核Ｂは遺跡内に存在していない。遺跡外で一次剝離が行われ、大形素材剝片Ｂのみが遺跡内へ搬入されたものと推定される。

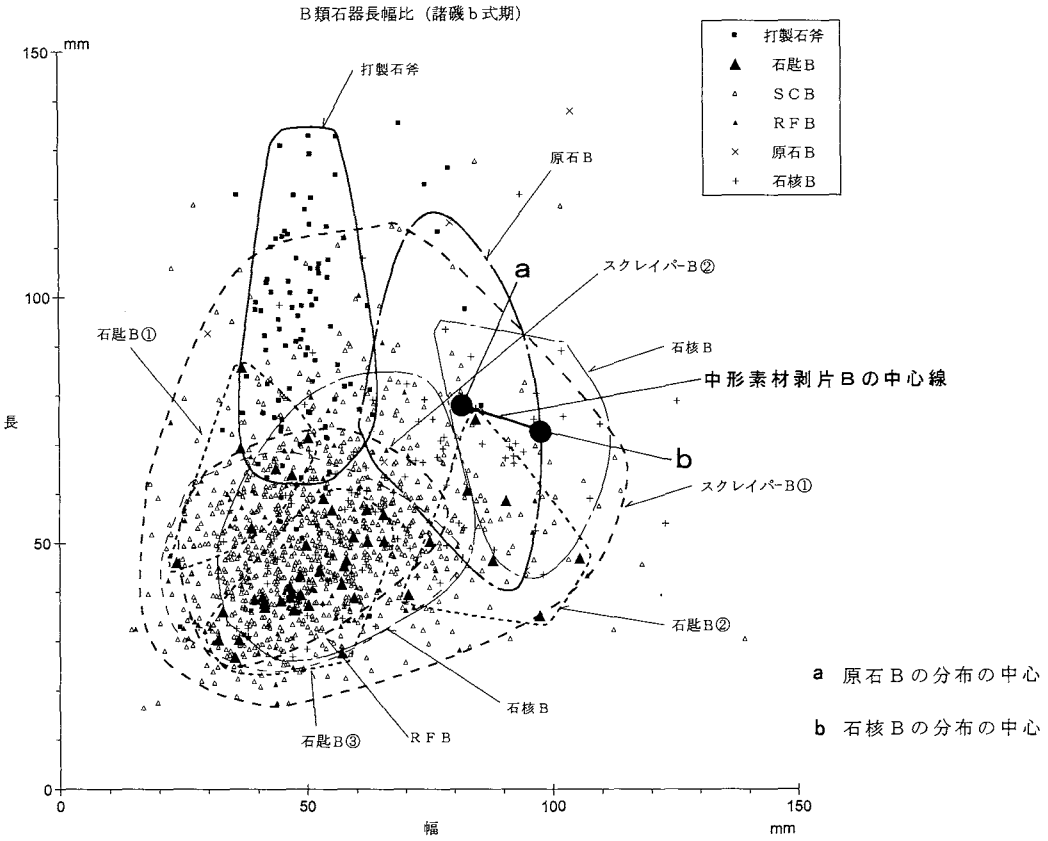
工程配置と型式（第173―１図）　この時期の工程配置を復元すると、第173―１図のように示すことができる。ここでは大きく二つの亜系列が存在している。

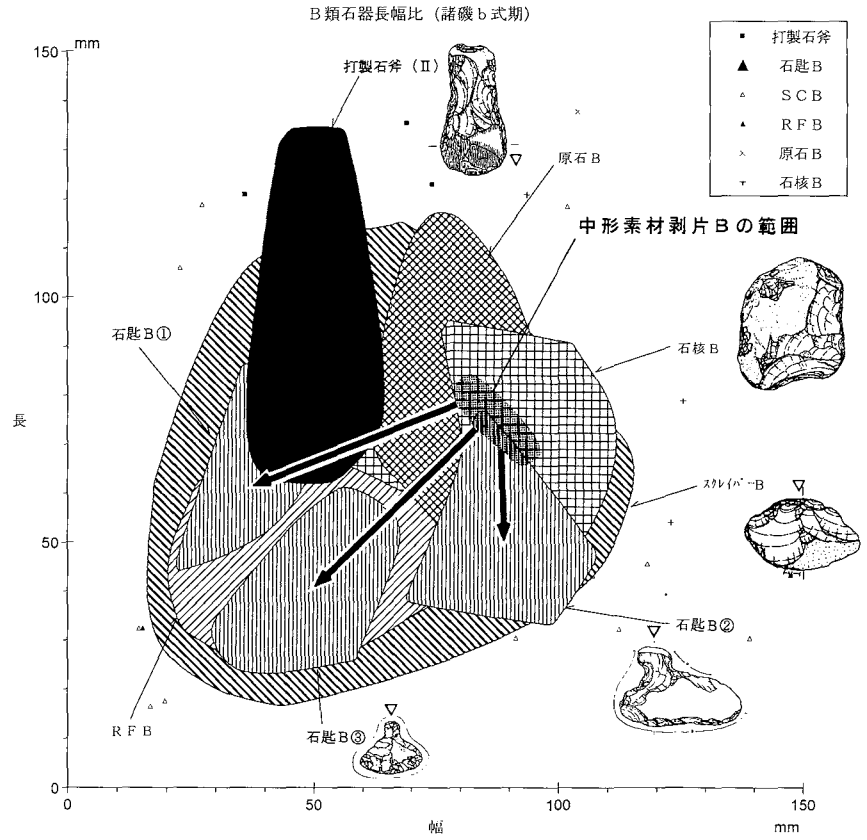
大形原石Ｂから大形素材剝片Ｂ（大形幅広剝片）を作出するための一次剝離工程は、遺跡外に工程が配置されており、大形素材剝片Ｂのみが遺跡内へ搬入されている。そして、大形素材剝片Ｂは二次剝離工程で「垂直持ち調整」による両面加工（垂直打撃技法）が施され、打製石斧（II形態）が製作される。また、一部の石匙Ｂ（II形態・横形）も同じ工程の中で製作される。(註1) さらに、打製石斧製作時に作出された調整剝片Ｂのうち、楕円形・杏仁形を基本とした横長剝片が選択される。これが中形素材剝片Ｂとして利用され、三次剝離工程において、各種調整が施され、ScＢ（主としてII･III形態）が製作される。

また、中形原石Ｂからは、一次剝離工程で、中形素材剝片Ｂ（中・小形幅広剝片）が作出される。ここでは、打面と作業面を頻繁に入れ替える求心状剝離法と、打面を固定し、角を斜めに加撃する「角打ち技法」が用いられる。二次剝離工程では、「水平持ち調整」による片面加工と、「垂直持ち調整」による両面加工が併用される。特に、「垂直持ち調整」で直接打撃［D］による調整が顕在化する。この二次剝離により、石匙Ｂ･ScＢ･RFＢが製作される。なお、この時期ではScＢ II･III形態が多数を占めるが、上記の剝離工程の両方で製作されるためと推定される。

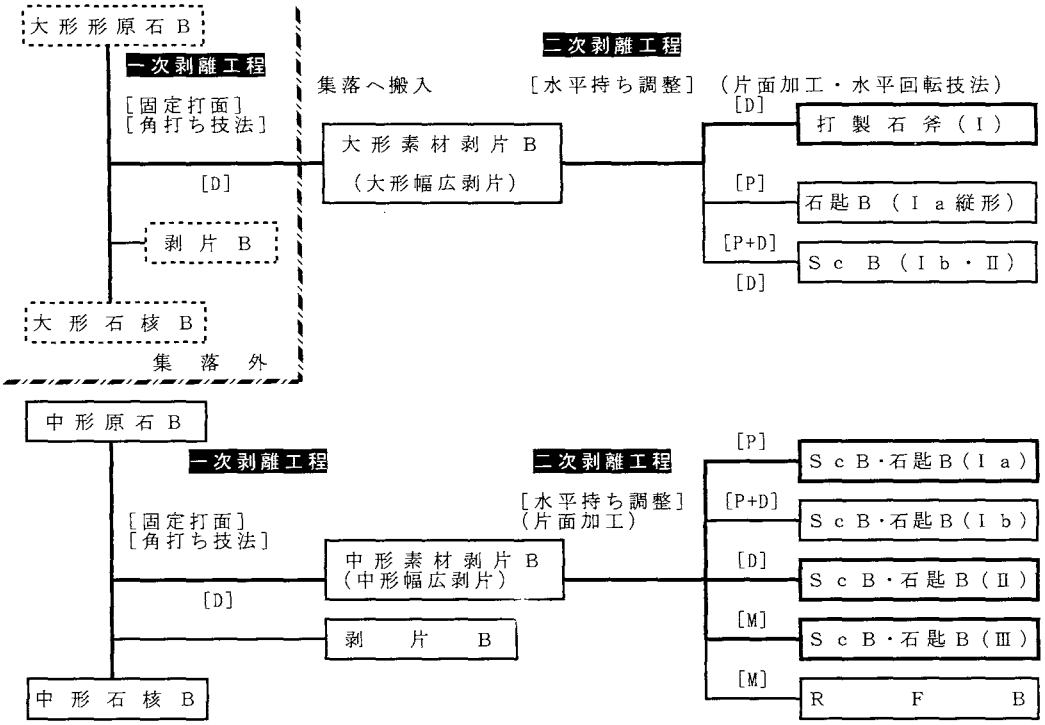
以上のように、遺跡内へ搬入された大形素材剝片Ｂから打製石斧（II形態）を製作する工程と、ScＢを製作する工程が直列に工程配置されている。こうした直列形工程配置では、打製石斧とScＢの比率が常に一定となる点が大きな特徴である。また、技術的には有尾式期から継承された伝統的な打面固定の「角打ち技法」や、「水平持ち調整」による片面加工も行われるものの、新しく打製石斧を製作するために採用された「垂直持ち調整」による両面加工が多用されている。この調整技術により製作された大形の石匙Ｂ（II形態・横形）は、打製石斧と並列に工程配置されており、この時期のメルクマールとなる。また、「垂直持ち調整」は両面階段状剝離が最大の特徴である。そして、打製石斧の製作のみならず、スクレイパー類の調整にも多用され、この技術により製作されたII形態が大きな比率を占めるようになる。

そこで、上述の特徴を有し、頁岩（下仁田泥岩）を主たる石材として用いた、群馬県西部を中心とする諸磯ｂ式期の直接打撃系列（Ｂ類）について、**中野谷ＢＺ２式（直接打撃系列）**と呼ぶことにする。(註2)

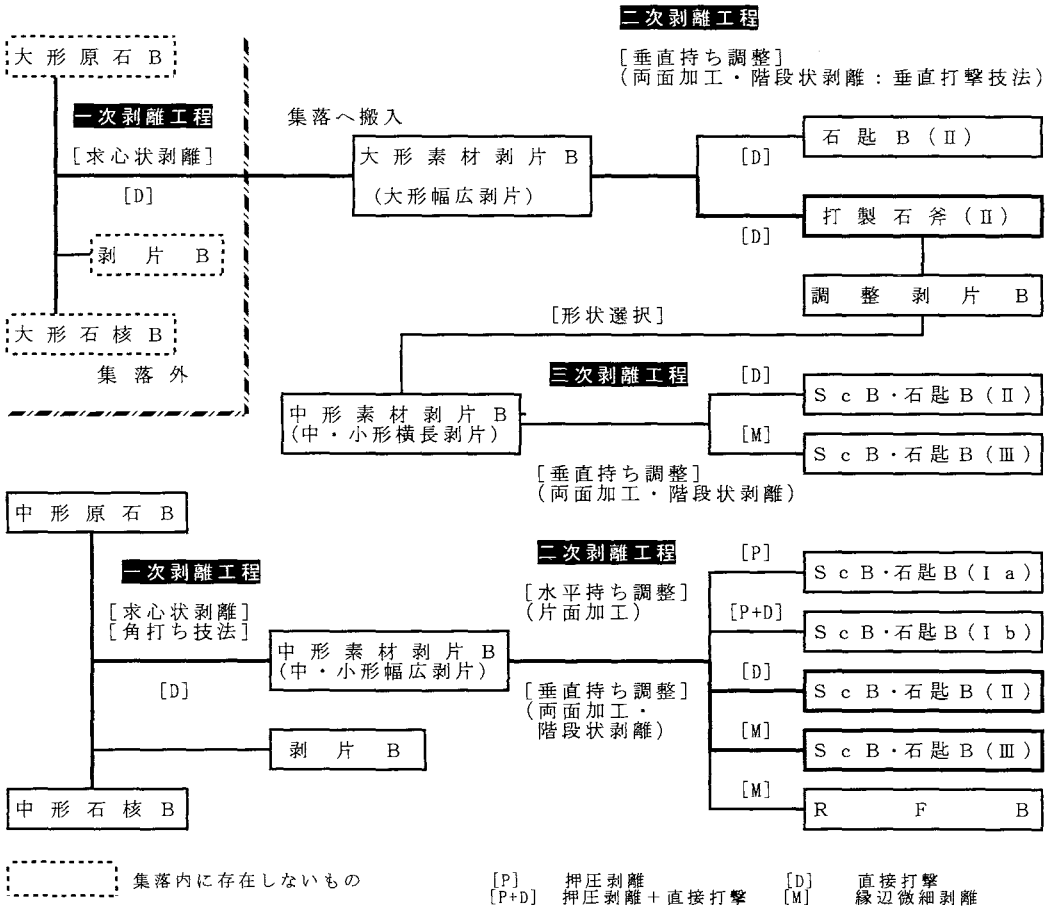




第172図　諸磯b式期のB類の石器長幅比



第173—1図　有尾式期のB類石器の工程配置図



第173—2図　諸磯b式期のB類石器の工程配置図

（註１）直接打撃［D］により製作された大形・横形の石匙Ｂは、その後中期に普及するものであり、この時期に出現する新しい器種として捉えられる。

（註２）この型式は仮に「諸磯ｂ式直接打撃系列」と呼称しておいたものである（大工原　1996）。実際の資料に基づいて工程配置を行ったので、以前に提示した工程配置と一部異っているが、本質的には大きな違いはない。なお、ここでは石材も含めて型式として考えているが、性質がほぼ同じ石材が用いられている利根川本流域でも、ほぼ同じ特徴を有した型式が存在している。こうした双生児のような型式をどのように定義して行くべきかは、今後の検討課題であろう。

［打製系列の型式変化について］

押圧剝離系列でも直接打撃系列でも、有尾式期と諸磯ｂ式期の間には、非常に大きな型式学的差異が存在していることが明らかとなった。

押圧剝離系列の変化の背景には、黒曜石の大量安定供給が考えられる。黒曜石が少量しか供給されなかった中野谷ＡＺ１式では、小さな黒曜石から石鏃を効率的に製作し、それ以外の器種に対するウエイトは極めて小さなものであった。ところが、中野谷ＡＺ２式では、黒曜石が大量に供給されるようになったため、石鏃以外の器種も黒曜石で製作することが可能となった。石錐・石匙Ａなどの器種がそれである。また、直接打撃系列の構造変化（垂直持ち調整）の影響もあって、両極技法が多用されるようになったと考えられる。しかし、石鏃を最優先器種とする本質的な部分に変化はなく、石鏃に対するニーズの高さが継続している。

直接打撃系列では、中野谷ＢＺ１式と、中野谷ＢＺ２式の間で構造変化が生じている。縄文時代の直接打撃系列の中で、「水平持ち調整」から「垂直持ち調整」への転換は、石器製作技術上の非常に大きな画期である。この時期の前後には相当大きな社会的・歴史的変化が生じたものと考えられる。「垂直打撃技法」を特徴とする打製石斧Ⅱ形態の出現について、これまでほとんど関心が払われていなかったが、この器種の出現の意義は大きい。あまりに一般的過ぎて深く考えられていなかったが、土掘り専用の器種としては、縄文時代の中で最初の器種と位置付けられるものなのである。こうした「土掘り専用具」の普及は、石器の単独の問題ではなく、この時期以降の生業システムの大転換の一部として理解する必要がある。

少なくとも、関東地方では諸磯ｂ式期の頃に「垂直持ち調整」による打製石斧Ⅱ形態製作システムが一斉に普及するようである。(註1) 現在のところ関東地方を中心として中野谷ＢＺ２式に類似する型式群（様式）が存在している。これらの型式がこの地域で自生的に出現したのか、他地域から伝播したのか、二つの説が考えられる。他の様々なハードウェア・ソフトウェアの変化も同時に生じていることからみて、他地域からの伝播の可能性が高いと思われる。この系譜の問題は今後の研究課題である。

（註１）御代田町塚田遺跡における中野谷ＢＺ１式並行の石器群では打製石斧Ⅱ形態が存在しているが、明確な刃部磨耗痕が認められず、数量的にも僅かである（堤　1994）。長野県でも諸磯ｂ式以前では本地域と同様な様相であることが分かる。

（大工原　豊）

(4) 遺物出土（分布）状態

a 住居址の遺物出土状態

［住居址出土遺物の分析視点］

各住居址の遺物分布状態は、第174図～第232図及び第167表～第169表に示したとおりである。各住居址とも土器と石器を取り上げ層位ごとに別々に図示した。なお、礫の出土状況についても当初は分布図を作成したが、土器・石器と比較してみたところ、データエラーが激しく掲載するに耐えない内容であることが判明した。遺物整理の過程で何らかの人為的データミスが生じたためである。そこで、礫のデータについては掲載しないことにした。また、こうしたデータエラーが土器と石器においてもあることが判明したため、再度現場台帳との照合を行い、データエラー箇所については、一覧表に記載した。こうした良好な遺跡で精度の高い報告ができないことは痛恨の極みである。

なお、言い訳がましくなるが、本遺跡の調査では当初から、微視的原位置論の視点は採用していない。遺跡全体を一つの大きな遺構として把握する巨視的原位置論の立場であるため、住居址としては遺物分布図はアナログ方式に比べ粗いものとなっている。したがって、ここでは個々の住居址の個別事例について述べるのではなく、出土状態を遺棄と廃棄に大別し、さらに廃棄についてはいくつかのパターンに分類し、それを説明することにする。

［遺棄された遺物が出土した住居址］

住居址出土の遺物は遺棄されたものと、廃棄されたものが存在しているが、本遺跡の場合、明らかに遺棄された遺物と認定できるものは、極めて少ない。遺棄と認定される条件としては、①床面直上やピット中から出土していること、②完形もしくは、それに近い形であり、使用可能な状態で出土していること、③人為的意図が推察されるような位置から出土していること、④複数の遺物が共伴関係を有して近接して出土していること、などがある。なお、本遺跡では住居址全体が遺棄された状態で検出された事例は存在していない。基本的にはごく少量の遺物が遺棄されている状態であり、使用状態での遺棄ではなく、廃棄行為に伴って遺棄されたと考えられるものが大部分である。遺棄されたと認定されたものとしては、以下の住居址の事例がある。

Ｊ－14号住居址（第179図）　住居址南端の床面直上の位置に、石皿が置かれた状態で出土した。位置的に見て使用場所ではなく、収納場所の可能性が高い。

Ｊ－21号住居址（第182図）　住居址南東部床面直上から、石皿と石皿状礫が置かれた状態で出土した。一方は拡張以前の住居壁溝上に置かれていることから、最終段階の住居址に伴うものであることが確認できる。

Ｊ－22号住居址（第183図）　この住居址では炉址の南に位置するピット（Ｐ－18）から、底部を穿孔された結晶片岩製の石皿（遺物図版編第250図１）が立位の状態で出土した。穿孔は人為的であり、意図的に行われたものと判断される。言うまでもなく石皿は使用できる状態にはなく、意図的にこのピットに収納されたものと推定される。なお、この住居址からは廃棄されたと判断される土器と石器が少量出土している。

Ｊ―33（27・28・29）号住居址（第185図）　住居の南部中央の位置（入口部分か？）で、床面直上に完形の浅鉢形土器（遺物図版編第２図４：諸磯ｂ式）が伏せて置かれた状態で出土した。また、この住居址では、南側の２基の主柱穴の脇から石皿がそれぞれ１点床面直上に置かれた状態で出土した。浅鉢はこの２点の石皿の中間の位置に当たる。周囲からは多量の土器と石器が出土しており、置かれた直後に廃棄が開始されている。浅鉢や石皿は出土場所が使用時の位置とは考え難く、遺物の廃棄に先立って行われた祭祀的な行為に伴うものと推定される。

Ｊ―34号住居址（第184図）　中央やや西寄りの床面直上の位置から、大形の石皿状礫と通常の石皿（遺物図版編第249図３）が出土した。石皿状礫は据置型であり、この場所で石皿が使用されていた可能性が高い。

Ｊ―35号住居址（第187図）　炉址４のすぐ東から、完形の石皿が古い住居の壁溝に落ち込んだ状態で出土した。壁溝中に落ち込んでいることから、３回目の住居址廃絶時に壁溝に埋め込まれたものと推定される。純然たる遺棄とは言い難いが、帰属する住居址が特定できることから、ここで取り上げた。

Ｊ―56号住居址（第196図・第197図）　炉体土器とみられる深鉢底部が、炉からずれた状態で出土した。また、北側の主柱穴に１点、その西側に２点、計３点の石皿（石皿状礫）が等間隔に並んだ状態で出土した。１点は主柱穴中にスッポリと落ち込んでいることから、廃絶後に置かれたものと推定される。ただし、この住居址では、すぐに廃棄は行われておらず、三角堆積が形成された後に大量廃棄が行われていることから、この３点の石皿とは時間差があることが分かる。つまり、この石皿は廃絶直後に何らかの意図をもって並べられたものであり、住居廃絶に関わる祭祀的な行為が行われた可能性が高い。

Ｊ―58号住居址（第198図）　大形の石皿状礫が住居南西の主柱穴脇に設置された状態で出土した。使用時の位置である可能性が高い。

Ｊ―63Ｂ号住居址（第200図）　住居址北東の主柱穴脇と、南東隅から石皿が置かれた状態で出土した。後者は本来の使用位置とは言い難く、収納位置である可能性が高い。

Ｊ―64Ｂ号住居址（第200図）　２回目に構築された住居址の北隅と北西の位置で、２点の石皿が出土した。床面からやや浮いた位置であるので、住居廃絶後に廃棄されたものである可能性もあるが、出土状態写真からみて、ここでは遺棄の可能性が高いと判断して提示した。使用場所よりも収納場所に近い位置と推定される。

Ｊ―66号住居址（第201図～第204図）　比較的大形の住居址の北東の主柱穴部分から石皿状礫が置かれた状態で出土した。主柱穴の押さえの石の可能性もある。この住居址は廃絶直後に廃棄が開始されており、あるいは廃棄遺物の可能性もある。

Ｊ―78号住居址（第210図～第213図）　大形住居址の床面に近い７層から、完形の石棒（遺物図版編第261図７）と、砂岩製の環状石製品（同270図７）が隣接する区から出土した。いずれも性を象徴する呪術的な器種と考えられており、共伴関係を有していたと推定される。この位置は炉址が多数設置されている部分でもあり、使用場所あるいは収納場所であった可能性がある。

Ｊ―79号住居址（第214図）　住居址北西部下層から完形の結晶片岩製の石棒（遺物図版編第261図８）が出土した。廃棄遺物の可能性もあるが、廃棄の中心から離れていることと、奥まった位置から出土していることから、使用あるいは収納場所に遺棄されていた可能性がある。

Ｊ―80号住居址（第215図・第216図）　大形住居址中央の下層から大形の丸石（遺物図版編第263図４）が出土した。その後この住居址に対しては、大量の遺物が廃棄されている。廃棄に先立った祭祀的意図

で置かれた可能性が高い。

Ｊ―83号住居址（第217図）　住居址内に存在する浅い掘り込み（竪穴状遺構か住居址の可能性もある）の南東隅から粘土塊と石皿・大形礫が出土した。粘土と作業用の石皿・大形礫が共伴関係を有した状態で遺棄されていたものであり、土器製作方法を知る上で重要な事例である。

Ｊ―85号住居址（第218図）　炉址（地床炉）の上部に伏せた状態で、底部を穿孔された結晶片岩製の石皿（遺物図版編第250図４）が出土した。この住居址にはその後大量の遺物が廃棄されている。廃棄に先立つ何らかの祭祀的行為が行われた可能性がある。

Ｊ―101号住居址（第223図）　住居址中央の床面直上の位置に、底部を穿孔された結晶片岩製の石皿（遺物図版編第250図２）が置かれた状態で出土した。この住居址には、その後土器と石器が廃棄されているが、土器と石器の分布状態が異なっており、それぞれが別個に廃棄されたものと推定される。この事例でも石皿は機能喪失させられており、祭祀的意図がうかがえる。

Ｊ―106号住居址（第224図）　住居址南隅に位置するピット（Ｐ―７）中に黒曜石原石７点（遺物図版編第211図１～７）が出土した。これらの原石はサイズから石鏃用とみられ、住居内のピットに収納されていたものである。黒曜石原石の保管方法や、住居内には柱穴以外の機能を有したピットが存在していたことが分かる重要な事例である。また、この住居址では南西の主柱穴に石皿が斜めに落ち込む状態で出土した。本来主柱の脇に置かれていたものと判断される。

Ｊ―113号住居址（第230図）　１回目に構築された住居の北西隅の位置から、粘土塊と台石とみられる石皿状礫が出土した。粘土塊と石皿状礫が共伴関係を有して出土しており、Ｊ―83号住居址とともに重要な事例である。

Ｊ―117号住居址（第230図）　精緻なミニチュア土器（遺物図版編第167図３：諸磯ａ式）が南東部の床面直上から出土した。また、隣接して下層から大形棒状礫が出土している。さらに、住居址北西部の下層から完形の結晶片岩製の石皿（同第250図３）が伏せた状態で出土している。その後にこの住居址に対しては多量の遺物が廃棄されている。ミニチュア土器は使用時の場所から出土した可能性と、廃棄された遺物の一部であった可能性がある。大形棒状礫は台石として用いられていた可能性もあり、石皿とともに使用場所あるいは収納場所からの出土と推定される。

炉体土器の残存していた住居址　これら以外に、住居址に残存していた炉体土器も、広い意味では遺棄されていた遺物である。炉体土器が残存していた住居址は、以下のとおりである。

有尾式期：Ｊ―７住・Ｊ―９住・Ｊ―11住・Ｊ―30住（２個体）・Ｊ―35住・Ｊ―52住

諸磯ａ式期：Ｊ―13住・Ｊ―21住・Ｊ―41Ｄ住・Ｊ―63Ｂ住

諸磯ｂ式期：Ｊ―56住・Ｊ―66住（３個体）・Ｊ―78住（２個体）・Ｊ―80住・Ｊ―113住・Ｊ―118住

本遺跡の場合、炉体土器は底部や胴部が多く、文様帯のある口縁部が残存しているものはほとんどない。したがって、細分時期を特定し難く、住居址の時期を特定する資料としての有効性は低い。複数の炉体土器が検出された住居址は３軒存在する。このうち、有尾式期のＪ―30住は２個体が同時並存していたものであり、共伴関係にある。しかし、諸磯ｂ式期のＪ―66住・Ｊ―78住は新旧関係にある。

［遺物が廃棄された住居址］

一般的に住居址から出土する遺物は、床面上に置かれていたものではなく、特殊な事例を除き、ほと

んどが外部から廃棄されたものであることは、すでに言及されているとおりであろう(小林達雄　1988)。本遺跡における百軒を越える住居址の調査においても、この認識を覆す事例は確認されなかった。すなわち、前述したように一部遺物が遺棄された特殊な事例を除き、住居址から出土した遺物は廃棄された遺物の集合体として認識し得る出土状態であった。

住居廃絶と廃棄の在り方については、すでに小林達雄氏によりパターン分類され(小林達　1972)、最近では小林謙一氏らにより、その多様性と竪穴住居のライフサイクルの抽出が精力的に実践されている(小林謙　1996等)。ここでは、詳細な廃棄過程をすべての住居址に対して示すことはできないので、調査及び遺物整理の過程で留意された点を中心に述べる。

本遺跡では比較的大形で深い住居址に大量の遺物が廃棄されている。特に、諸磯ｂ式期においては、それが顕著であり、Ｊ―56号住・Ｊ―66号住・Ｊ―78号住・Ｊ―80号住などがこれに当たる。これらの住居址に廃棄された遺物量は膨大であり、本遺跡から出土した遺物の中で占める比率も相当大きなものである。こうした住居址を含め、本遺跡のほとんどの住居址に対する廃棄は、小林分類に従えば、「第一次埋没土より上部の堆積土中に万遍なく甚だ多量の土器片が発見される」と定義されるパターンC_1に該当することになる。また、一部の住居址はパターンC_2に近いものもある。しかし、これ以外のパターンは存在しておらず、この観点からみれば、画一的な様相を呈していると言えよう。

なお、大量の遺物が廃棄された住居址は、環状集落の西部～北西部に集中しており、集落全体の廃棄場所の位置がある程度特定されていたものと推定される。そして、住居址以外の廃棄場所として、環状集落の南東部に遺物がうずたかく帯状に廃棄された場所（廃棄帯）(註)の存在が確認されている。この部分はちょうど有尾式期の土壙墓群（Ｄ区南東群）の存在していた場所であり、廃棄場所として利用された住居址の対向位置に当たる。つまり、この時期には２つの異なった廃棄場所が形成されていたことになる。しかし、集落の外縁部に廃棄場所は全く形成されていない。本遺跡に限らず、廃絶された住居址に対する遺物の廃棄は、関東地方においては一般的である。この点は、東北地方における遺物廃棄の在り方と本質的に異なっている。こうしてみると、住居址に対する遺物の廃棄と「廃棄帯」の存在は、社会的規範として伝統的なものとして継承されていた可能性が高い。なお、「廃棄帯」についてはここでは触れず後述することにする。

(註)「廃棄帯」は谷口康浩氏により提示された概念であり、「不要物・ゴミを廃棄する現代感覚の廃棄を意味するものではなく、遺物や土などが継続的に集積される場所」と定義される（谷口　1998)。本遺跡の廃棄場所はこのニュアンスに極めて近いものであり、遺物の廃棄に対して「物送り」のような儀礼的な意味を含んでいると考えている。本報告書ではこの用語をそのまま用いることにする。

一括廃棄と別個廃棄　廃棄に一定の傾向が存在するかどうかについて検討する。具体的な手順としては、土器と石器の分布上の共通性と差異を調べ、①土器と石器が同じように分布する場合を「一括廃棄」、②両者の分布が異なっている場合を「別個廃棄」、としての区別することにした。その結果は第167表～第169表に示した。大部分は「一括廃棄」であるが、中には「別個廃棄」あるいは一部「別個廃棄」の様相を示している事例が14例存在している。石器が別個に廃棄される場合、一つの作業単位ごとの廃棄であった可能性がある。Ａ類やＢ類のように剝片剝離作業を伴う系列で識別できる。Ａ類が廃棄された住居址としては、Ｊ―17住・Ｊ―98住・Ｊ―115住がある。また、Ｂ類が廃棄された住居址としては、Ｊ―11住・

Ｊ―52住がある。

一括廃棄の場合、土器と石器が別の場所に集積され、それが一括廃棄されたケースと、土器と石器が別個に廃棄されていたものが、結果として一括廃棄の状態と視認されるケースが考えられる。両者を調査・整理の中で識別することは実際には困難であり、今回はこれを分析することは行わない。

廃棄の方向　遺物の偏在性から廃棄の方向がある程度理解できる。本遺跡では中央から南側に位置する住居址は全体的に南東へ緩やかに傾斜しており、北側の住居址は北へ斜むいている。したがって、傾斜に沿った偏在は流れ込みの可能性もある。

調査区の東部・西部に存在する住居址では、全方向に同じように偏在しており、特に廃棄の方向性は認められない。しかし、南部と北部では南東と北西方向に偏在しており、共通性が認められる。この方向性は地形の傾斜と一致しており、傾斜に沿った廃棄・あるいは流れ込みの方向性を示していると考えられる。おそらく、廃棄の方向性を示している可能性の方が高い。

廃棄の時期　本遺跡では住居が廃絶してからある程度の時間をおいて廃棄が開始される場合が圧倒的に多い。このパターンが一般的な廃棄の在り方であったと判断される。これに対し、少数ではあるが住居が廃絶直後に廃棄が開始された事例が存在する。

ここでは前者の代表的な事例としてＪ―56号住居址を、後者の代表的な事例としてＪ―66号住居址を示すことにする。いずれも遺存状態が良好で、重複もなく深い掘り込みを有しており、かつ大量の遺物が廃棄されていた住居址である。

なお、住居廃絶後、直ちに廃棄が開始されたＪ―66号住の場合、炉体土器と廃棄された土器群との間に時間差はないが、Ｊ―56号住の場合、炉体土器と廃棄された土器群との間に、ある程度時間差が認められることがすでに土器の分析により判明している。

ａ．ある程度時間をおいて遺物が廃棄された場合（Ｊ―56号住居址の事例：第196図・第197図）　集落の北西に位置する比較的大形の住居址であり、大量の遺物が廃棄されている。住居廃絶後に土坑（Ｄ―１・２）が掘り込まれており、遺物分布上に影響を及ぼしている。Ｄ―１号土坑の堆積状況は住居址の土層図で確認できる。住居の廃絶直後に床面下まで堀りこまれており、その排土はすぐ脇にみられる。覆土は住居址上部から連続しており、遺物はほとんど存在していない。また、壁際の貼床層上の三角堆積土層にも遺物がほとんど含まれておらず、その上部に堆積する焼土層と黒褐色土層に大量の遺物が含まれているので、廃棄はこの段階から開始されたと推定される。分布図で５層から遺物出土量が急激に増加していることがこれを裏付けている。焼土層は数カ所確認されており、廃棄時に繰り返し焼却行為が行われたことを示している。このような観察から、①最初の住居の構築、②貼床を施した住居への改修、③住居内土坑の掘削、初期三角堆積（人為的か？）、④遺物の大量廃棄、焼却を伴う行為、という変遷をこの住居址はたどったと推測される。

下層の遺物出土量遺が少ないのは、廃絶直後に廃棄が行われず、しばらくはそのまま放置されていたからと判断される。また、遺物分布状態から、１層から５層では土器と石器の分布はほぼ同じような傾向がみられるので、一括廃棄された可能性が高い。分布図の６・７層ではＤ―１・２号土坑に対する廃棄が反映されている。

なお、同様な事例の住居址としては、Ｊ―３号住・Ｊ―11号住・Ｊ―13号住・Ｊ―15号住・Ｊ―24号住・Ｊ―25号住・Ｊ―68号住・Ｊ―78号住・Ｊ―80号住など多数存在している。

ｂ．廃絶直後に遺物が廃棄された場合（Ｊ―66号住居址の事例：第201図～第204図）　本住居址は深い掘

り込みをもつ比較的大形の住居址である。拡張のために円形から隅円方形に１回の建て替えを行っている。耕作による撹乱が１層・２層の遺物分布に影響を及ぼしているが、下層への影響はみられない。黄褐色土層と黒褐色土層がレンズ状に互層をなして堆積しているが、どちらからも遺物が多量出土している。また、最下層の三角堆積層中からも遺物が多く出土している。したがって、本住居では廃絶直後から遺物廃棄が行われている。

ここでは土器と石器のはほぼ同じ傾向を示しており、一括廃棄された可能性が高い。こうした明らかに諸磯ｂ式期の住居址でも相当量の有尾式土器が出土しており、二次廃棄されていることが分かる。こうした行為は単に層位的関係からだけでは、共伴関係や新旧関係を示すことができないことを示している。

なお、この住居址以外に廃絶直後に遺物の廃棄が行われた可能性がある住居址としては、Ｊ―33号住がある。

廃棄された遺物について　基本的には欠損したものや、機能喪失した（と縄文人に判断された）ものが住居址に廃棄されたと判断される。土器の場合、ミニチュアと先に述べた浅鉢を除いて、すべて欠損品であり、機能喪失後に廃棄されたことが、容易に理解できる。しかし、今回の調査で集落全域をほぼ完掘したにも関わらず、完形に近い状態まで復元されたものは非常に少ない。

このうち、異なる層位から検出された土器が接合し、しかも色調が異なる場合は、廃棄時期がずれており、欠損後も使用されていたものと判断される。例えば、Ｊ―56号住の例（遺物図版編第６図３・第７図１）などがある。この事例では、上下に欠損しているので、下部が欠損後に使用されていたと判断できる。また、偽口縁の形成された土器や、炉体土器も廃棄時期が異なる事例である。

ところが、中には縦に半分に欠損していて、廃棄時期が異なる事例が存在している（例えばＪ―56号住の例：同第９図３）。また、どうしても残り半分が見つからない事例も多い。異系統土器の事例で言うと、Ｊ―78号住の例（浮島式：同第19図５）、Ｊ―111号住の例（北白川下層系：同第32図３）などがそれである。縦に割れたものでも、残りの部分が道具として利用されていたことは確実であり、土壙墓の「破片被り」用に転用されてた事例（同第35図１・第141図27）はその証拠である。さらに、遺跡内に欠損した残りの部分が存在しない場合も多く、これらは破片レベルでの道具として、遺跡外へ持ち出されて使用されていたと推測される。多くの大形破片の多くは、欠損した破片状態でも道具としての機能は喪失せずに、リサイクルされて使用されていたことはほぼ確実である。

石器でも欠損しても使用され続け、廃棄時期が異なる事例がある。Ｊ―66号住出土の部分研磨石器（同第253図８）は、層位と磨耗状態が異なっており、欠損しても機能は喪失されなかったことになる。

また、逆に完形でも機能が喪失してしまったものも存在するようである。一括廃棄された遺物の中に含まれる完形品がそれであり、遺棄されたものを除き、遺跡から出土した完形品の大部分がこれに該当しよう。この中には道具の有機質部分が破損したことにより、機能喪失してしまったものも相当数含まれていると推定される。石鏃や打製石斧などがそれである。しかし、それ以外に、凹石や磨石は見かけ上は完形状態で廃棄されているものが多い。これらは縄文人により不用と判断されたものであり、現時点でその理由を説明することは不可能である。廃棄された遺物を単にゴミとして一括するのではなく、中にはこうしたものが含まれていることを認識しておくべきであろう。

また、当然調査で検出された遺物以外にも、住居址に対して廃棄された有機質の遺物が存在していたはずである。覆土中への炭化物の混入が傍証資料であるが、本遺跡では形となるものは検出されなかっ

た。これは酸性土壌によるところが大きい。なお、有機遺物が廃棄されていたとすれば、有機物が腐敗した部分の覆土は凹むはずである。実際多くの住居址で中央部分はくぼんでおり、廃棄物中に有機質の遺物が含まれていたと推定される。この場合、集落の廃絶後に堆積した覆土上層の中央部分には無遺物層が形成されるはずである。しかし、実際にはこの部分からも多量の遺物が出土している。また、有尾式期の竪穴の掘り込みが浅い住居址でも廃棄場所として用いられている。こうした状況からみて、住居址は最終的に廃棄された遺物により、うずたかくマウンド状を呈していた可能性が高い。

一次廃棄と二次廃棄　廃棄行為には遺物を使用した当事者が行った廃棄と、遺物とは無関係な第三者(この場合は後世の住人）が行った廃棄がある。ここでは前者を「一次廃棄」、後者を「二次廃棄」と呼ぶことにする。本遺跡では諸磯ｂ式期の住居址でも相当数の有尾式土器が出土している。この場合、有尾式土器は「二次廃棄」された遺物と判断される。本遺跡では諸磯ｂ式期では、すべての住居址で「二次廃棄」が認められることになる。ほぼ同時期の大下原遺跡でも「二次廃棄」は確認されており、この時期において「二次廃棄」は普遍性のある行為であったと言える。

そうなると、諸磯ｂ式期の住居址へより古い段階の諸磯ｂ式土器が「二次廃棄」されていたことも当然行われていたと考えられる。実際、土器編年を層位ごとに確認しようとした時点で、文様帯系統論に基づく変化とは連動しない土器が相当数存在しており、土器編年作業をより困難なものとしている。

二次廃棄が行われた要因を特定することは難しいが、本遺跡は定住性の高い集落であり、限られたスペースの集落内を繰り返し使用するにあたり、常に清掃行為が行われていた可能性を想定しておきたい。

遺物廃棄を伴わずに埋没した住居址　このような状態の典型例として、Ｊ―78Ａ号住居址がある。これは最大規模の大形住居であり、竪穴の掘り込みも1.6mと非常に深い。ここでは建て替え・拡張を含め６回構築されている。そのうち、最初に構築された住居がＪ―78Ａ号住であり、規模も最大規模であったと推定される。本住居址に相当する覆土は北から東の一部のみであったが、この覆土からは遺物の出土量が非常に少なかった。人為的に埋め戻された場合に特徴的な、YPやロームブロックの大量混入は認められず、自然埋没に近い状態で覆土が堆積したと推定される。また、次に構築されたＪ―78Ｂ号住は、掘り込みは深いものの、規模は相当縮小されていることから、この部分が浅い窪地か平坦化した状態になってから構築された可能性が高い。つまり、Ｊ―78Ａ号住とＪ―78Ｂ号住との間には、比較的長期にわたる放置期間が存在していたと推定される。そして、この間には遺物の廃棄場所として使用されず、放置されていた可能性が高い。この状況は土器の変遷の上でも空白期として確認されている（第40図)。

Ｊ―15号住居址も類似した様相を呈する。一度放置されて浅い窪地程度まで埋没した後に、床面下にまで掘り込まれた竪穴状遺構が作られている。この竪穴状遺構からは底面から上層に至るまで大量の遺物が廃棄されており、遺物廃棄を行うために掘られた土坑の一種と判断される。これはＪ―56号住居址に存在する土坑と同じ性格のものと判断される。Ｊ―15号住でも土器編年上、時間的空白期の存在が確認されている(第41図)。なお、この空白期間は、Ｊ―78号住では諸磯ｂ式２段階、Ｊ―15号住では同３段階に存在しており、時期が異なっている。これは集落全体の断絶ではなく、遺物廃棄の在り方に帰因すると推測される。

（大工原　豊）

住居名	層数	遺存状態	データエラー	回数	重複遺構	廃棄状態	偏在部分	特殊遺物
J-001	2	普通	PS：2層11区	2	J-2	一括	PS：S	
J-002	2	普通	S：2層北西部	1	J-1・3・4	一括	PS：NE～CN	
J-003	2	普通	S：2層2・6区	2	J-2	一括	PS：W(J-3B)	
J-004	2	普通	PS：2層	1	J-2	一括	PS：2層E	
J-005	2	やや悪い	無し	3		一括	PS：2層W	
J-006	1	悪い	無し	1	D-24～26	不明	-	
J-007	2	やや悪い	S：2層9区	1	J-8	一括	PS：N-CN	管玉（翡翠）
J-008	1	悪い	無し	2	J-7・9	不明	-	
J-009	1	悪い	無し	1		不明	-	
J-010	1	悪い	無し	2	D-87	別個	P：W	
J-011	1	やや悪い	無し	4		一部別個	P：NW・S：NW-SW	
J-013	3	良好	無し	3	J-14	一括・三角堆積後	PS：NE-CN	
J-014	1	良好	S：全体	1	J-13	不明	-	
J-015	5	良好	S：4層	2	D-1(竪穴状遺構)	一括	P：W	ミニチュア土器
J-016	1	やや悪い	無し	1	J-18・D-158	一括	PS：NW-SE	
J-017	1	普通	無し	2	D-157	別個	P：N-SE・S：S	
J-018	1	悪い	-	1	D-1	不明	-	
J-019	1	やや悪い	無し	2	D-1	一括	PS：N-NE	
J-020	1	普通	PS：1層5区	6	J-21・D-192・196	一括	PS：N-CN	
J-021	3	普通	PS：3層2・6・11区	5	J-20・D-195	一括	PS：CN	
J-022	1	悪い	ほぼ無し	2	J-26・33	一括	PS：SW	石皿（穿孔）
J-023	1	やや悪い	ほぼ無し	1		一部別個	P：NW-SE・S：SW	
J-024	2	やや悪い	ほぼ無し	4		一括	P：2層NW-CN	
J-025	1	普通	無し	4	J-30・31・D-197	一括	-	ミニチュア打斧
J-026	3	良好	無し	1	J-30・31・D-215～219	一括	PS：W	
J-030	2	普通	P：2層10・14区	7	J-31・D-200～206	一括	PS：1層E-CN・2層NE-E	
J-031	2	普通	無し	1	J-30・D-199・204	不明	-	ケツ状耳飾
J-032	2	やや悪い	無し	1	J-31・33・D-199・204	一括	-	
J-033(27・28・29)	3	普通	ほぼ無し	2	J-22・26・31・HT-35	一括	-	
J-034	2	普通	無し	4	J-30・D-215～219	一括	PS：SW	
J-035	3	普通	P：14区	6	J-36・D-221・222	一括	PS：N	
J-036	一括	普通	-	1	J-35	不明	-	
J-040A	5	良好	無し	8	D-229・230	一括	-	ミニチュア土器
J-040B	3	良好	無し	8	D-229・230	一括	-	ミニチュア土器
J-041A	3	普通	無し	2	J-41B・41C・D-227・228	一括	-	
J-041B	3	普通	無し	1	J-41A・J41D	一括	-	槍状石器
J-041C	2	やや悪い	無し	1	J-41A	一括	-	
J-041D	1	やや悪い	無し	1	J-41B・D-234～240	一括	-	
J-043	2	やや悪い	無し	1	J-44	一括	-	
J-044	2	普通	無し	1	J-43	不明	-	

P：土器　S：石器　E・W・S・N：東西南北　CN：中央

第167表　住居址遺物出土状態一覧表（1）

住居名	層数	遺存状態	データエラー	回数	重複遺構	廃棄状態	偏在部分	特殊遺物
J-045	1	悪い	ほぼ無し	2	J-43・44	別個	P：NW-SE	
J-046	1	悪い	ほぼ無し	2	J-45	別個	P：E	
J-047	1	やや悪い	無し	1	D-327～331	一括	PS：N	
J-049	1	悪い	無し	2	B区南群	一括	PS：E-CN	
J-050	2	普通	無し	1	D-332	一括	-	
J-051	2	悪い	ほぼ無し	1	B区北群	一括	PS：NE	
J-052	1	悪い	PS：20区	2	HT-3・D-367・386～389・394・1125	別個	P：NW-CN・S：S	
J-053	1	悪い	-	3	D-385	不明	-	
J-054	2	良好	無し	1	D-396	一括	PS：N	
J-055	2	良好	P：1層5・6区・2層15区	1		一括	PS：S	ミニチュア土器
J-056	6	良好	無し	1		一括・三角堆積後	-	ミニチュア土器・土製品・ケツ状耳飾・垂飾・石棒・石槍・縦形石匙A
J-057	1	普通	無し	1	D-403～406	一括	-	
J-058	1	悪い	無し	1		一括	PS：N	
J-059	2	悪い	無し	1	風倒木痕	一括	P：SE-CN	
J-060	1	やや悪い	石器全部	4	D-1	不明	-	
J-061	2	普通	無し	2	D-1・431	一括	P：S-CN・S：NW	
J-062	1	やや悪い	無し	1		一括	-	
J-063A	1	悪い	無し	4	J-63B・D-443～448	一括	PS：NE	
J-063B	1	悪い	無し	1	J-63A	一括	-	
J-064	1	やや悪い	P：5区	4	D-450・451	一括	PS：CN	
J-066	8	良好	P：8層3区・S：8層3・6・7・15区	2	D-489	一括	PS：2・5・6層W	ミニチュア土器・土偶・石槍・槍状石器
J-067	3	普通	無し	2		一括	-	
J-068	3	やや悪い	無し	1	竪穴状遺構・HT-4	一括	PS：W-CN	石棒
J-069	6	良好	無し	5	J-70・71・D-500	一括	PS：N-CN	ミニチュア土器
J-070	4	普通	無し	5	J-69・71・D-500・501	一括	PS：S	ミニチュア土器・石槍
J-071	1	やや悪い	PS：1・3・10・12区	4	J-69・70・D-478・500	一括	PS：S	
J-074	1	やや悪い	無し	1		一部別個	P：S-CN	
J-075	1	やや悪い	無し	1	D-486	一括		
J-076	2	やや悪い	無し	1	D-525・526	一括	PS：S	ミニチュア土器
J-078	10	良好	ほぼ無し	6	D-529・530・535	一括	-	ミニチュア土器・土偶・石棒・ケツ状耳飾・勾玉・環状石製品
J-079	2	やや悪い	PS：2層7・8区・1層14・15区	2	D-531～534	一括	PS：W	垂飾状石製品・石棒
J-080	4	普通	無し	6	J-81・D-583・586・587	一括	-	ミニチュア土器・土偶・石棒・石鉢・丸石・槍状石器・管玉・垂飾
J-081	2	やや悪い	無し	1	J-80・HT-6・D-583・586	不明	-	石棒
J-082	0	悪い	-	2	D-483	不明	-	
J-083	4	良好	無し	2	J-84	一括	-	管玉・粘土塊
J-084	1	悪い	無し	1	J-83	一括	PS：CN	
J-085	2	良好	無し	2	J-88・HT-36・D-622・623	一括	-	石皿（穿孔）
J-086	2	普通	無し	2		一括	-	ミニチュア土器・槍状石器
J-087	1	やや悪い	無し	4	HT-5・6	一括	-	スプーン状土製品

P：土器　S：石器　E・W・S・N：東西南北　CN：中央

第168表　住居址遺物出土状態一覧表（2）

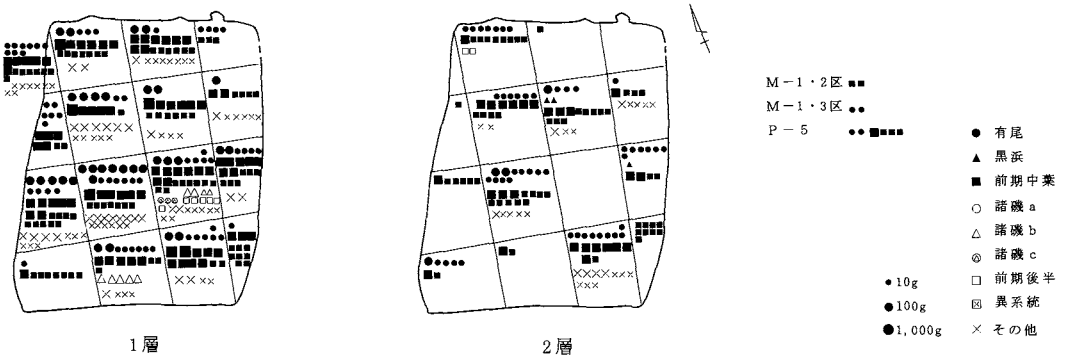
住居名	層数	遺存状態	データエラー	回数	重複遺構	廃棄状態	偏在部分	特殊遺物
J-088	0	悪い	-	1	J-85・D-623	不明	-	
J-089	0	悪い	-	1	HT-7・D-579・580・597・598・593	不明	-	
J-091	1	やや悪い	無し	1	D-727・728	一括	PS：CN	ミニチュア土器
J-092	0	悪い	-	1	J-96・D-759～761	不明	-	
J-093	0	悪い	-	1	J-125・HT-9・D-695～697・704・722	不明	-	
J-094	1	やや悪い	無し	5	D-800・819	一括	PS：CN	槍状石器
J-095	0	悪い	-	1		不明	-	
J-096	1	悪い	-	3	J-92・D-761・801	不明	-	
J-098	1	悪い	無し	4		別個	P：SW	
J-099	2	良好	P：2層6区・S：1層全部	1	J-100	一部別個?	P：SE-SW	
J-100	1	普通	無し	3	J-99・D-842	一括	PS：E	
J-101	1	悪い	無し	1	J-102・HT-26	一部別個	PS：N・P：S	石皿（穿孔）・浮子状石製品
J-102	1	悪い	ほぼ無し	2	J-101	一部別個	P：NE	
J-103	2	普通	無し	1	HT-28	一括	PS：CN	
J-104	1	悪い	ほぼ無し	2	HT-28・D-1	一括	PS：SW	
J-105	1	やや悪い	無し	1	HT-33	別個	P：W-SE・S：SE	
J-106	2	良好	無し	2	D-961～963	一括	PS：N	ミニチュア土器
J-107	1	悪い	-	1	HT-30・D-873・880・881	不明	-	
J-108	0	悪い	-	2	D-976・986・987	不明	-	
J-109	4	良好	ほぼ無し	1	D-991・1000・1001	一括	PS：SE-E-N	ケツ状耳飾
J-110	2	普通	無し	2	D-1017	一括	PS：NW	
J-111	4	良好	無し	2	D-1058	一括		ミニチュア土器・土偶・縦形石匙A・石匙状石製品
J-112	0	悪い	-	1		不明	-	
J-113	3	良好	無し	3	D-1059・1060	一括	P：1層SE	ケツ状耳飾
J-115	2	良好	無し	1		一部別個	S：W-NW	
J-116	3	良好	P：1層6区・PS：2層9・10区	2	D-1069	一括	PS：W	
J-117	1	普通	P：3・5区・S：15区	2		一括		ミニチュア土器
J-118	1	悪い	無し	2	HT-31・D-1077・1078	一括	PS：E-SE	石製装身具
J-119	2	良好	P：1層13区・2層9区	1	D-1081	一括	PS：NW	
J-120	1	やや悪い	P：5区・S：2・6区	1		一括	PS：N・SW	
J-121	3	良好	無し	1	J-122・D-1105	一括	PS：W	
J-122	一括	普通	-	3	J-121・123・124・D-1127	不明	-	
J-123	一括	やや悪い	-	1	J-122・123・D-1123	不明	-	
J-124	一括	やや悪い	-	1	J-122・123・D-1121・1122・1127	不明	-	
J-125	1	悪い	-	1	J-93・D-718・719・731	不明	-	

P：土器　S：石器　E・W・S・N：東西南北　CN：中央

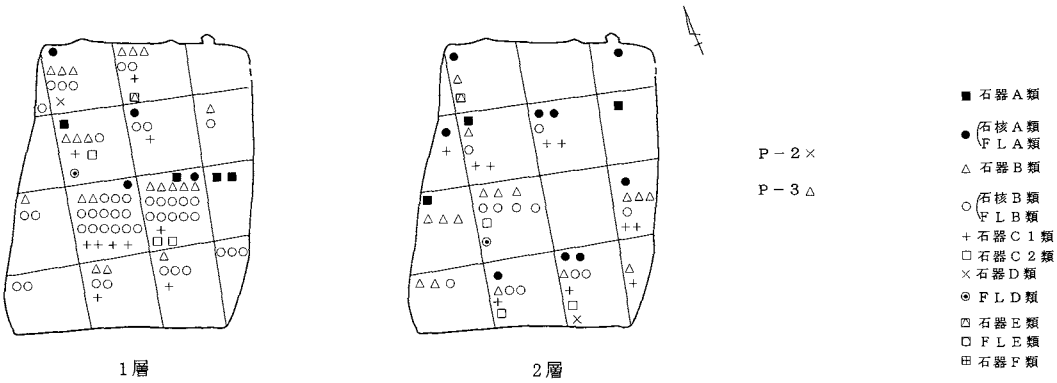
第169表　住居址遺物出土状態一覧表（3）

Ｊ－１号住

土器分布

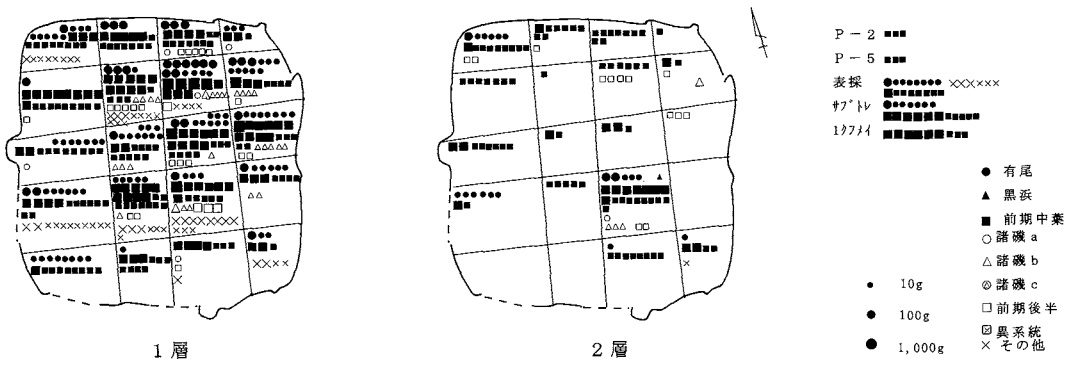


石器分布

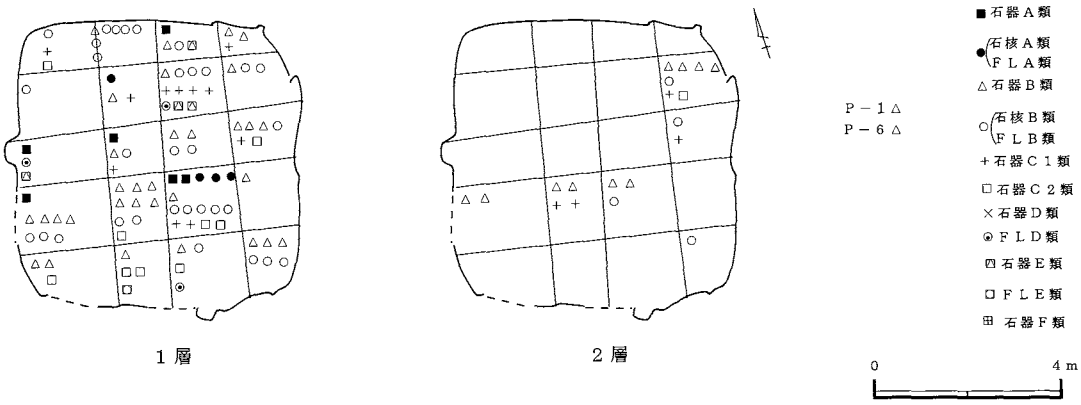


Ｊ－２号住

土器分布



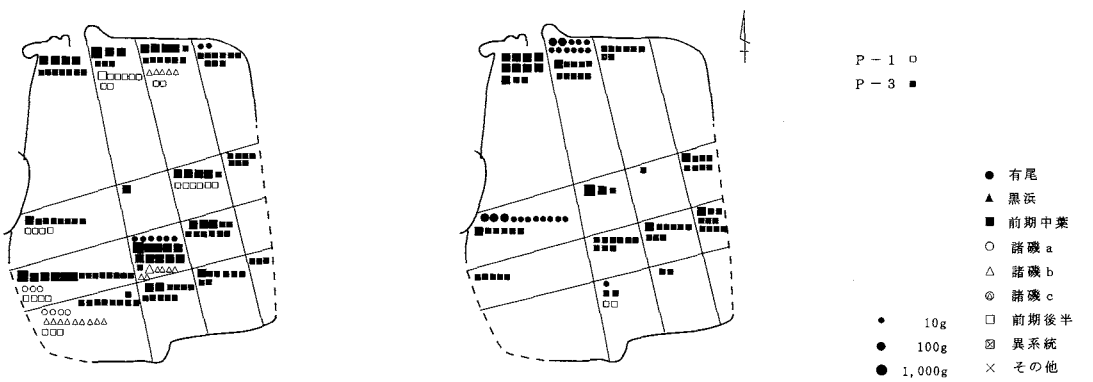
石器分布



第174図　Ｊ－１・２号住居址遺物分布図

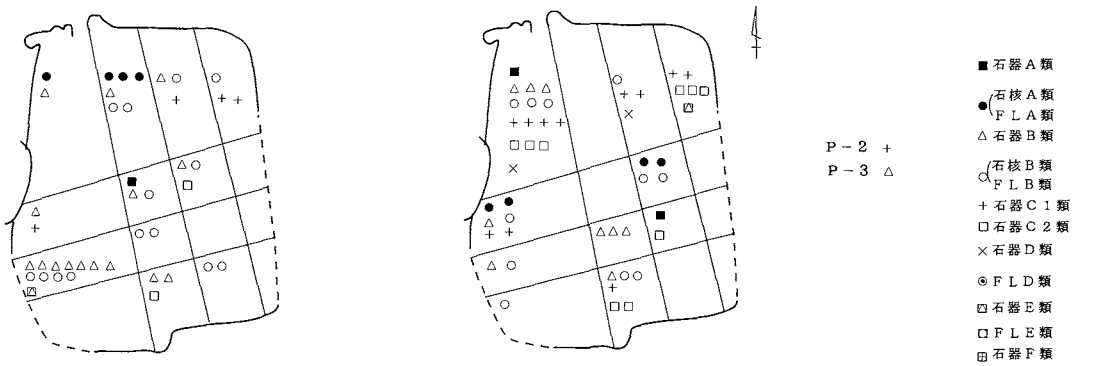
Ｊ－３号住

土器分布



１層　　２層

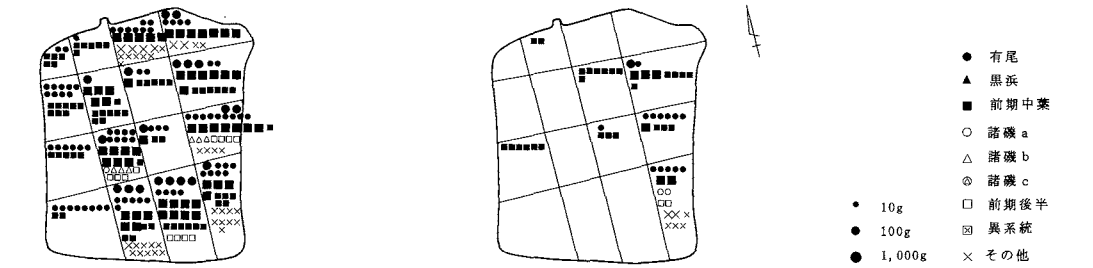
石器分布



１層　　２層

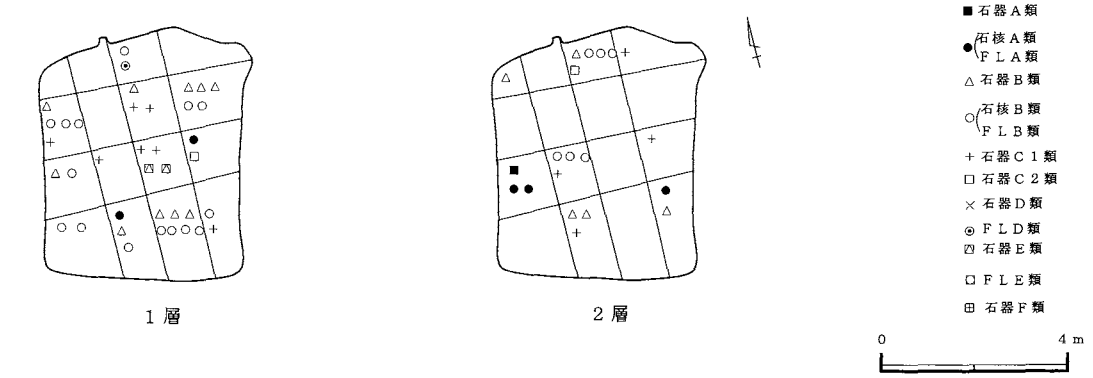
Ｊ－４号住

土器分布



１層　　２層

石器分布

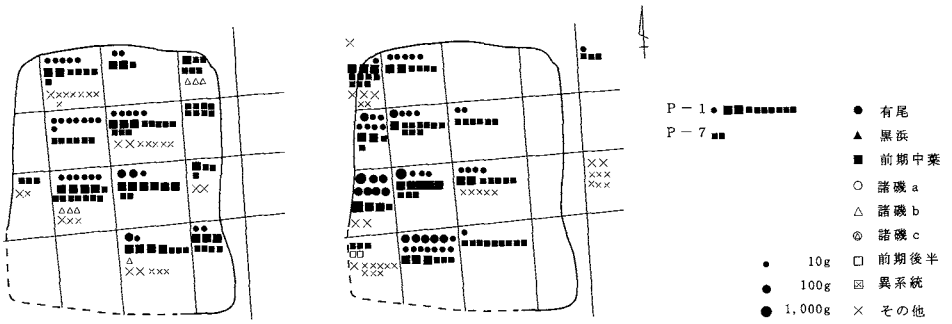


１層　　２層

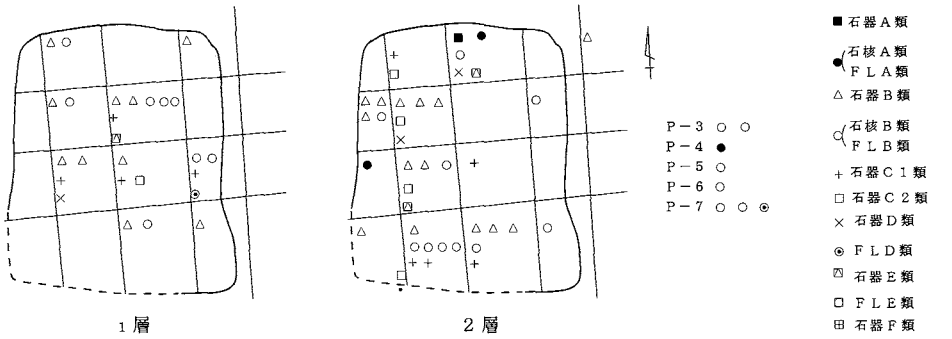
第175図　Ｊ－３・４号住居址遺物分布図

Ｊ－５号住

土器分布

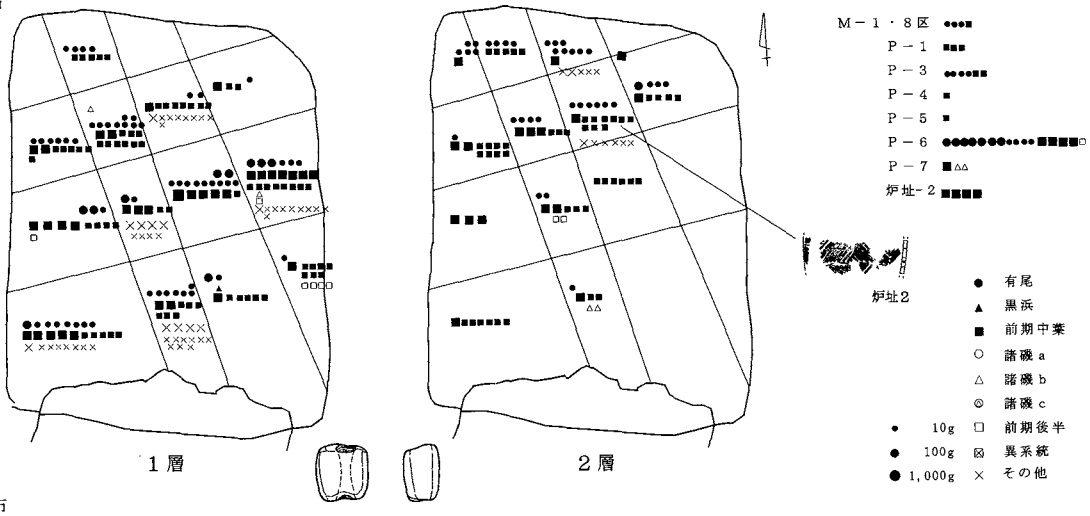


石器分布

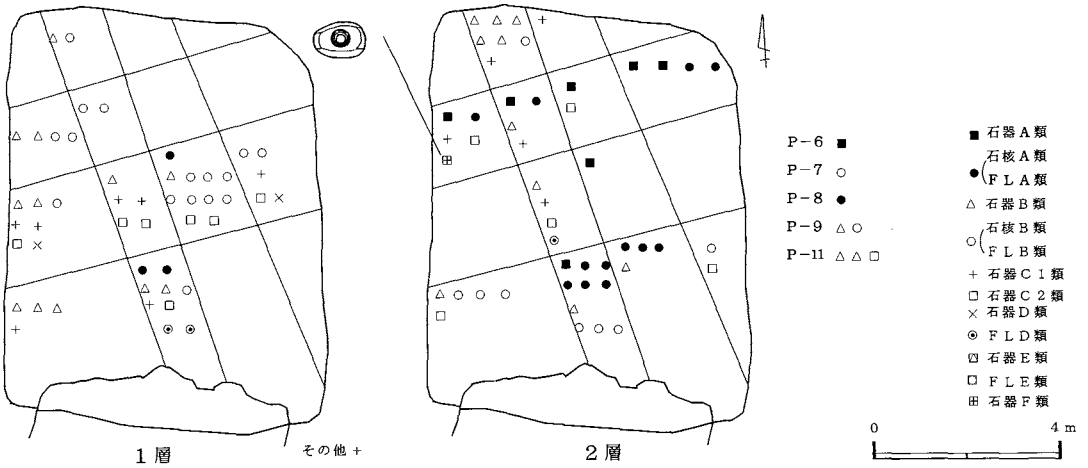


Ｊ－７号住

土器分布



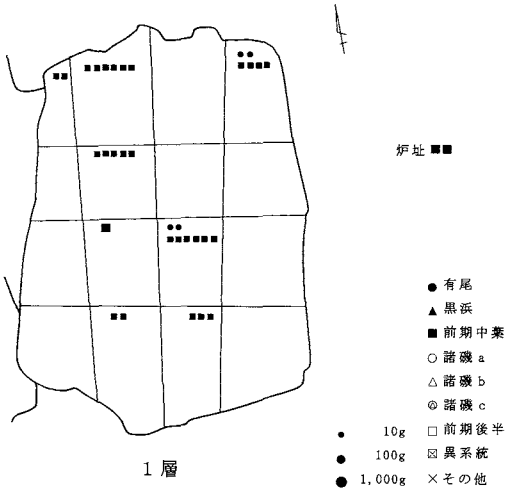
石器分布



第176図　Ｊ－５・７号住居址遺物分布図

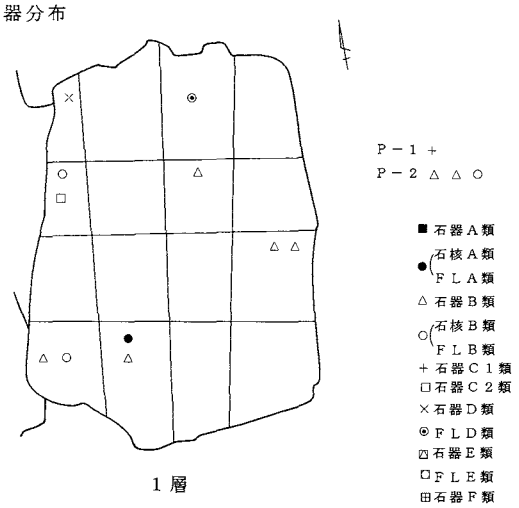
Ｊ－８号住

土器分布



１層

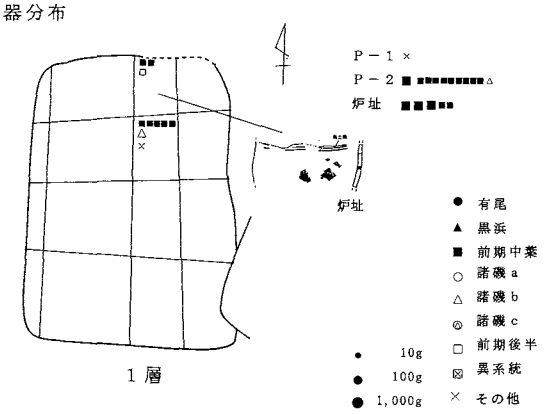
石器分布



１層

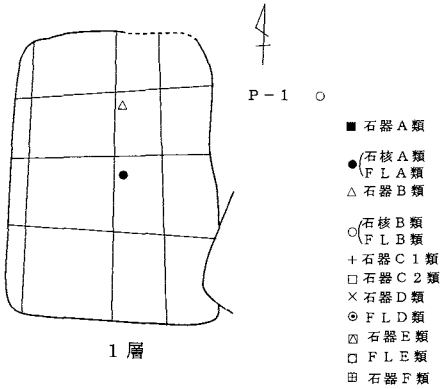
Ｊ－９号住

土器分布



１層

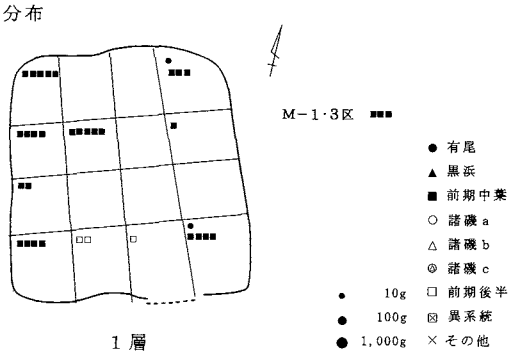
石器分布



１層

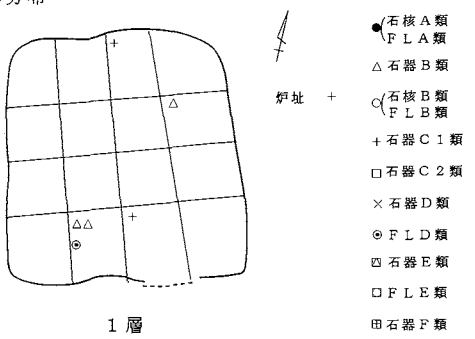
Ｊ－10号住

土器分布



１層

石器分布



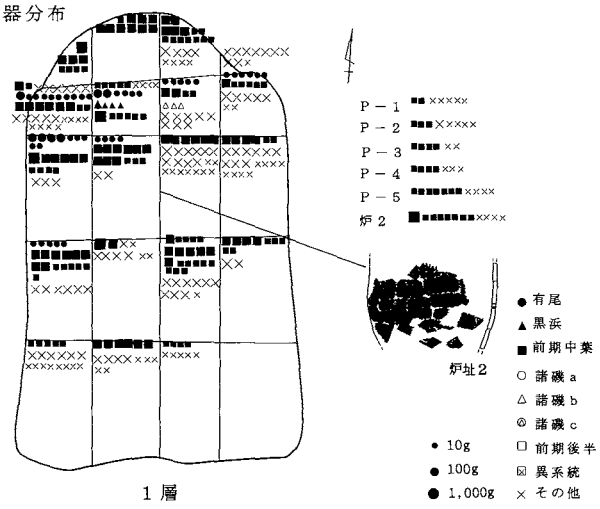
１層

0　4 m

第177図　Ｊ－８・９・10号住居址遺物分布図

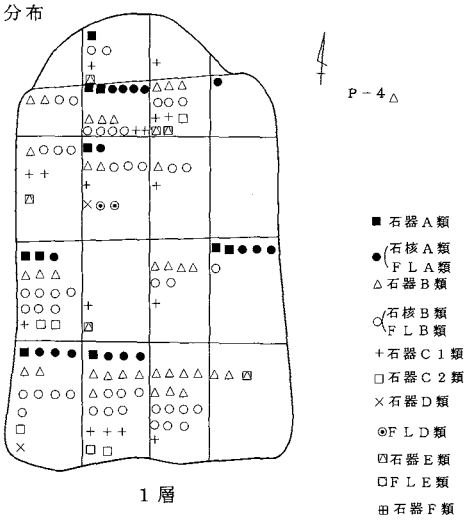
Ｊ－11号住

土器分布



1層

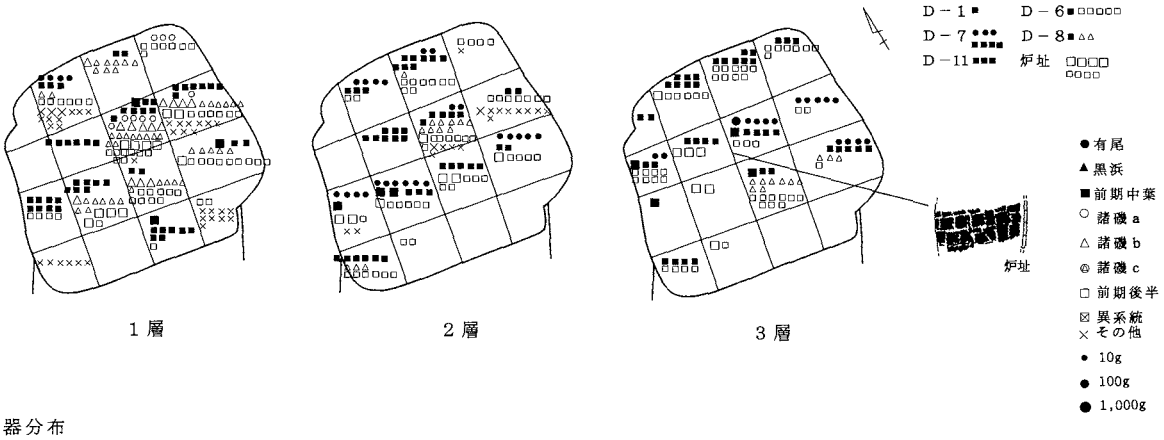
石器分布



1層

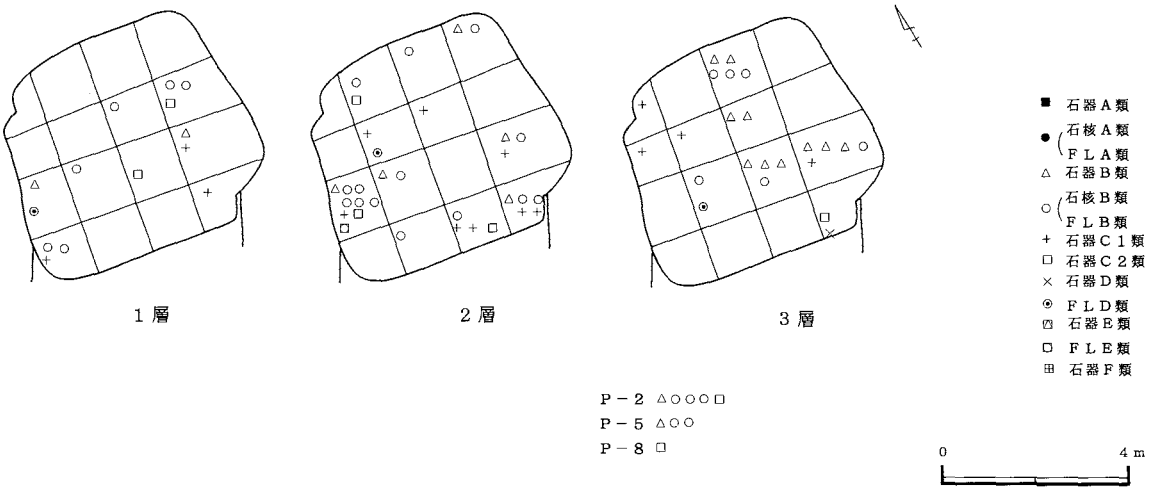
Ｊ－13号住

土器分布



1層　　2層　　3層

石器分布

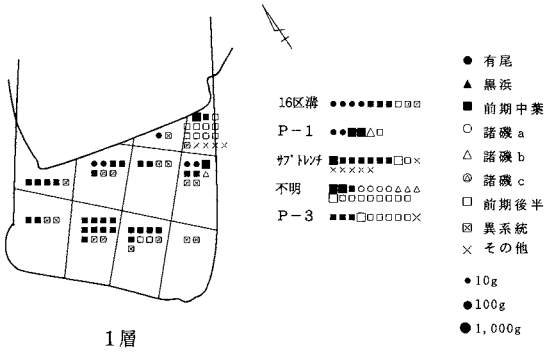


1層　　2層　　3層

第178図　Ｊ—11・13号住居址遺物分布図

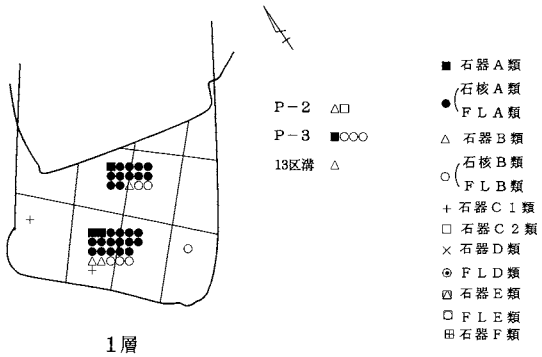
Ｊ－14号住

土器分布



1層

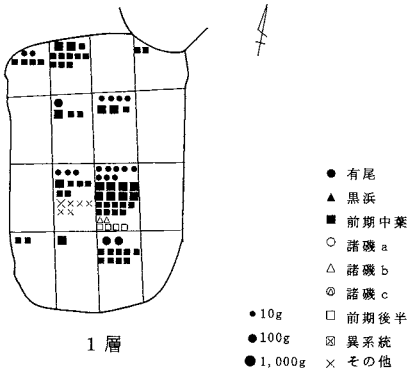
石器分布



1層

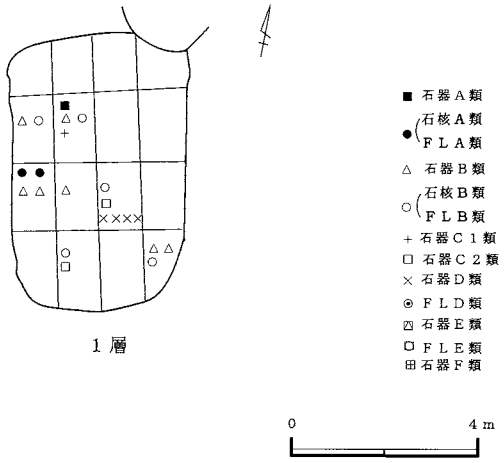
Ｊ－16号住

土器分布



1 層

石器分布

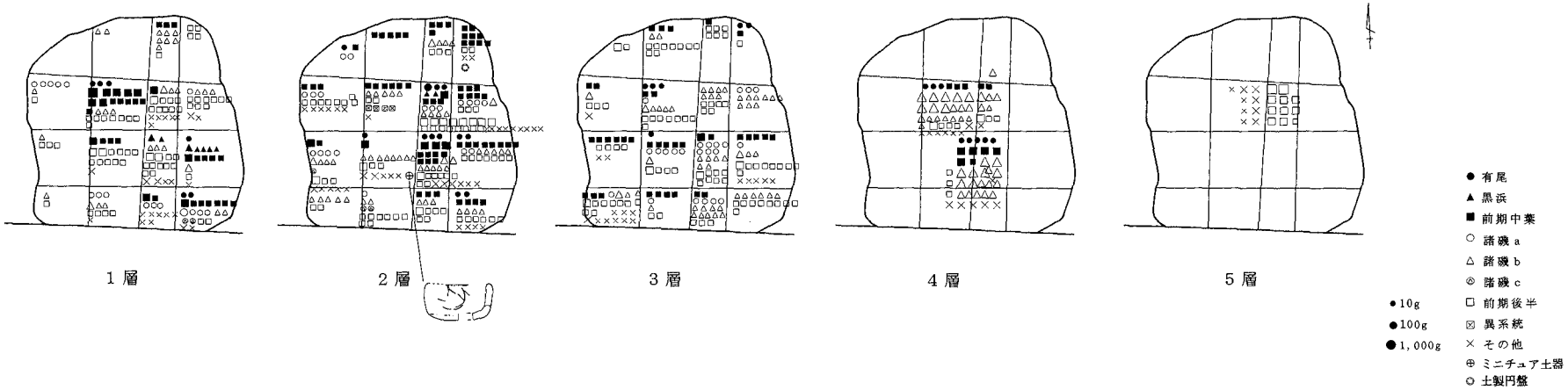


1 層

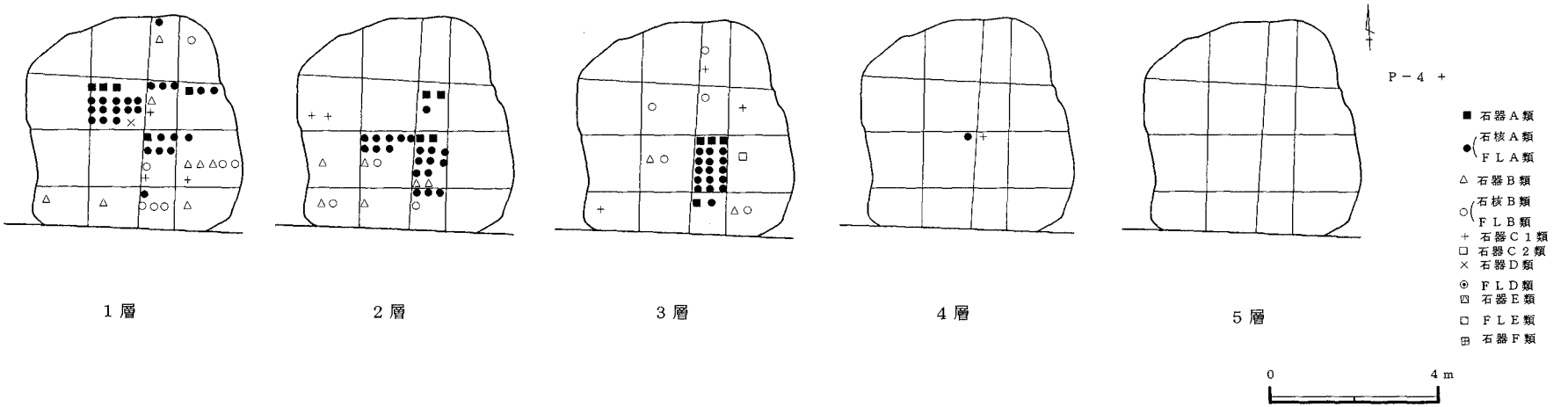
第179図　Ｊ—14・16号住居址遺物分布図

Ｊ－15号住

土器分布



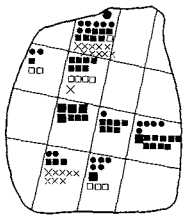
石器分布



第180図　Ｊ－15号住居址遺物分布図

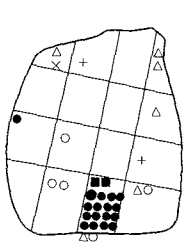
Ｊ－17号住

土器分布



１層

石器分布



１層

Ｐ－３

Ｐ－１ △○○
Ｐ－２ ●●●

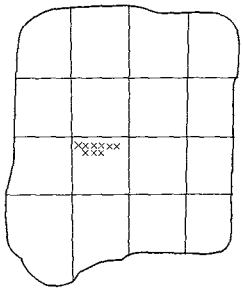
● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯ａ
△ 諸磯ｂ
諸磯ｃ
□ 前期後半
異系統
× その他

●10g
●100g
●1,000g

■ 石器Ａ類
●（石核Ａ類 ＦＬＡ類）
△ 石器Ｂ類
○（石核Ｂ類 ＦＬＢ類）
＋ 石器Ｃ１類
□ 石器Ｃ２類
× 石器Ｄ類
ＦＬＤ類
石器Ｅ類
ＦＬＥ類
石器Ｆ類

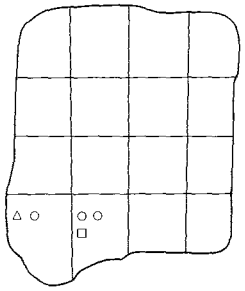
Ｊ－18号住

土器分布



１層

石器分布



１層

Ｍ－１·３区
Ｍ－１·４区
Ｐ－１
Ｐ－２
Ｐ－３
Ｐ－４

Ｐ－２ △○
Ｐ－３ △○

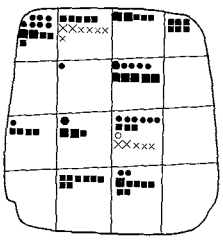
● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯ａ
△ 諸磯ｂ
諸磯ｃ
□ 前期後半
異系統
× その他

●10g
●100g
●1,000g

■ 石器Ａ類
●（石核Ａ類 ＦＬＡ類）
△ 石器Ｂ類
○（石核Ｂ類 ＦＬＢ類）
＋ 石器Ｃ１類
□ 石器Ｃ２類
× 石器Ｄ類
ＦＬＤ類
石器Ｅ類
ＦＬＥ類
石器Ｆ類

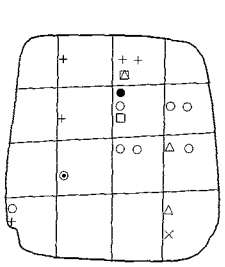
Ｊ－19号住

土器分布



１層

石器分布



１層

Ｍ－１·３区
Ｍ－１·８区
Ｄ－１
Ｐ－１

Ｄ－１ ＋

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯ａ
△ 諸磯ｂ
諸磯ｃ
□ 前期後半
異系統
× その他

●10g
●100g
●1,000g

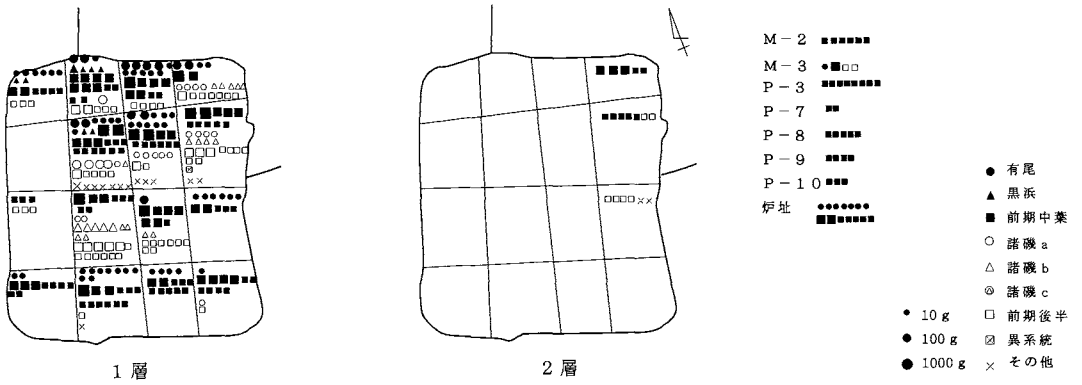
■ 石器Ａ類
●（石核Ａ類 ＦＬＡ類）
△ 石器Ｂ類
○（石核Ｂ類 ＦＬＢ類）
＋ 石器Ｃ１類
□ 石器Ｃ２類
× 石器Ｄ類
ＦＬＤ類
石器Ｅ類
ＦＬＥ類
石器Ｆ類

0　4 m

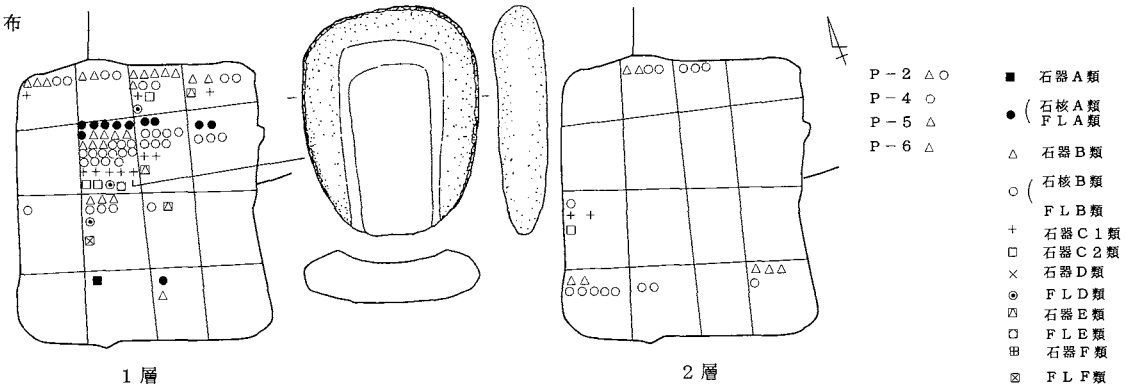
第181図　Ｊ－17・18・19号住居址遺物分布図

Ｊ－20号住

土器分布

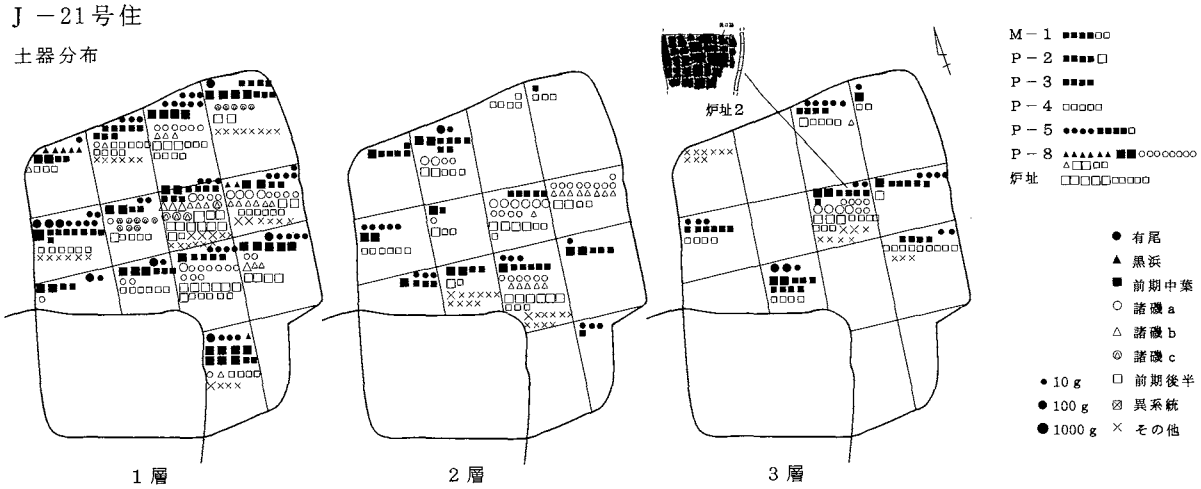


石器分布

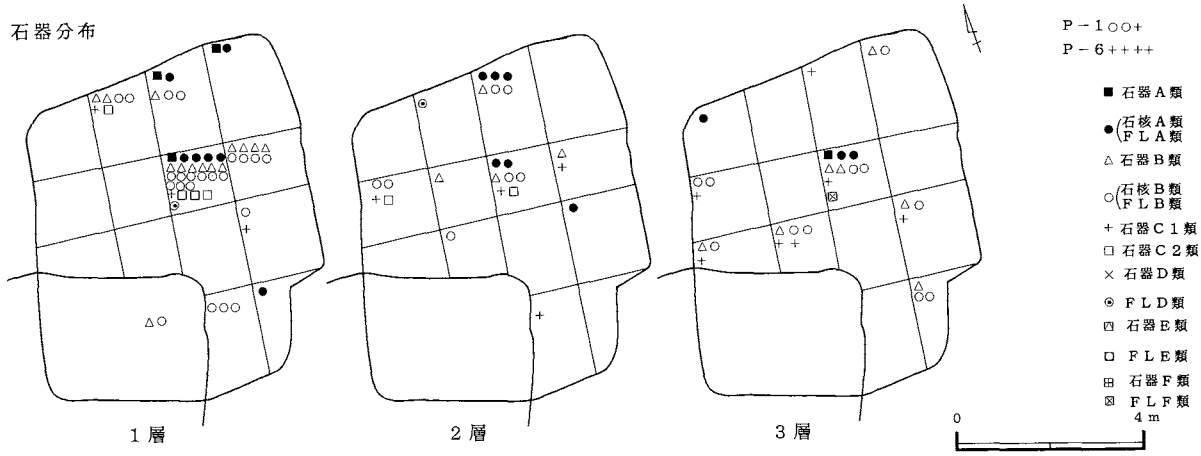


Ｊ－21号住

土器分布



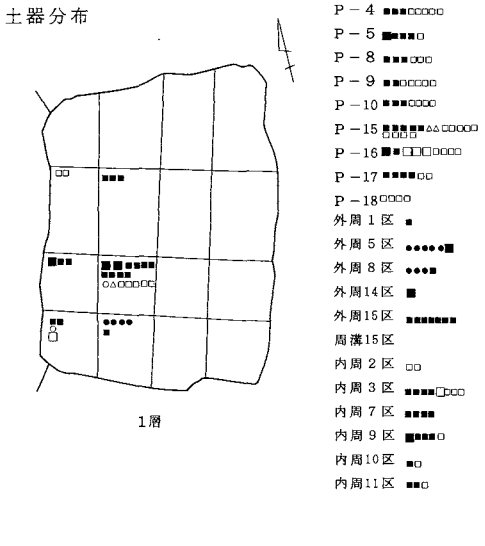
石器分布



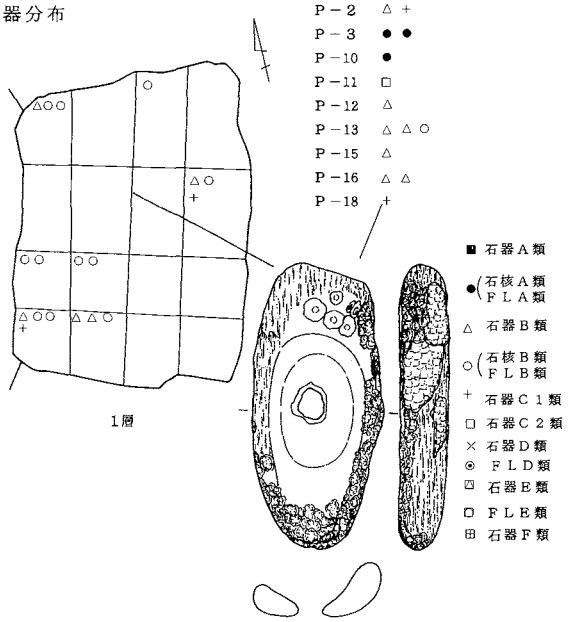
第182図　Ｊ—20・21号住居址遺物分布図

Ｊ－22号住

土器分布

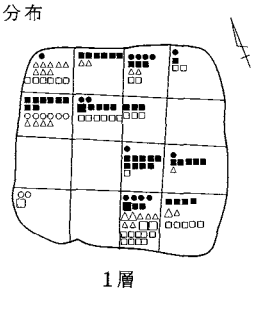


石器分布

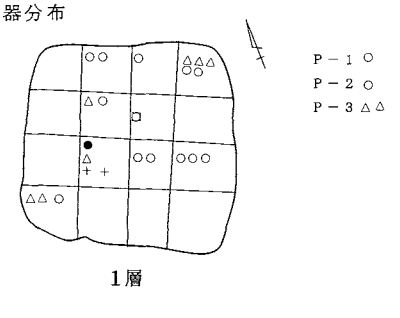


Ｊ－23号住

土器分布

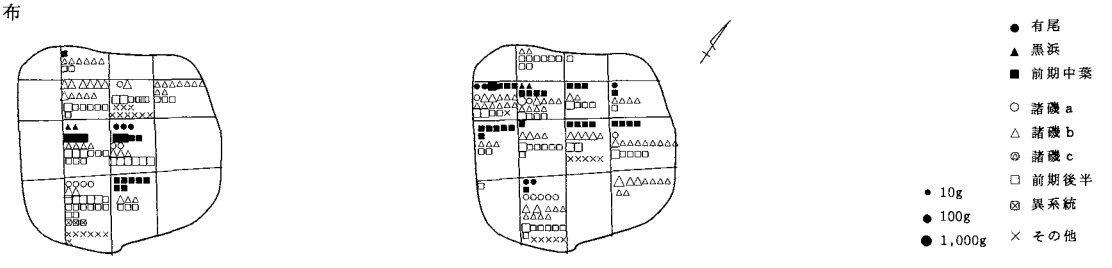


石器分布

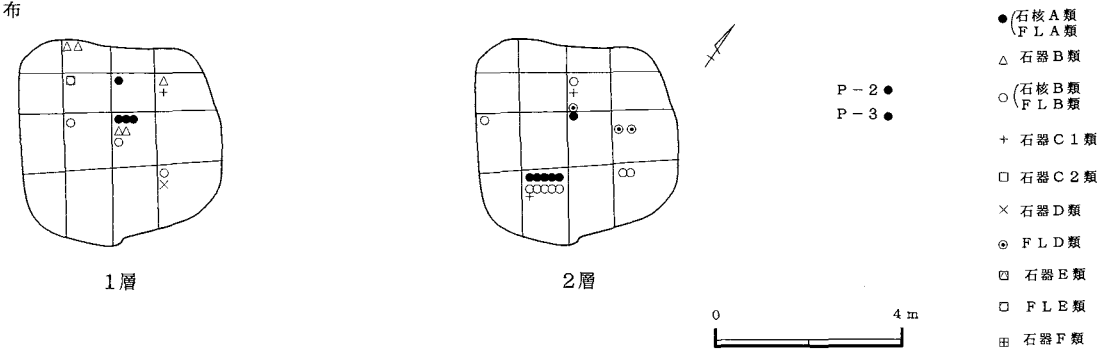


Ｊ－24号住

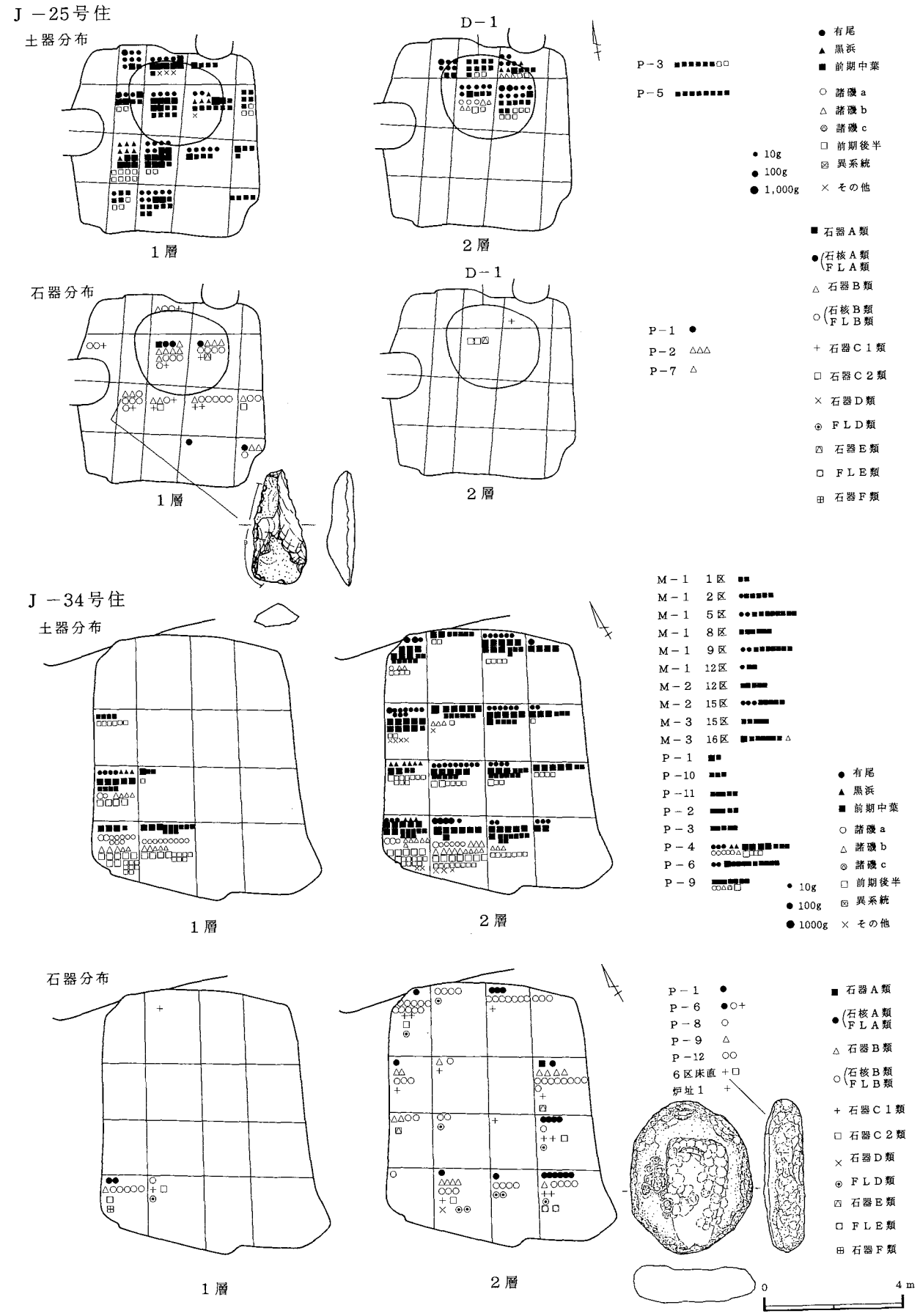
土器分布



石器分布



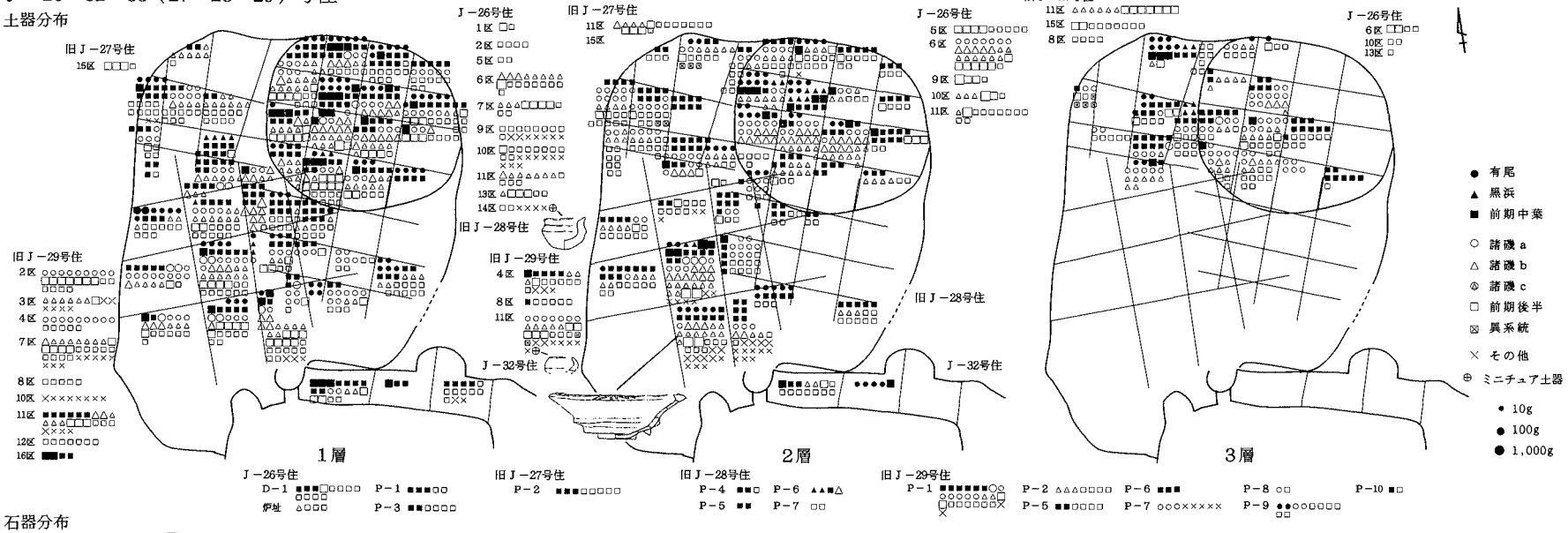
第183図　Ｊ—22・23・24号住居址遺物分布図



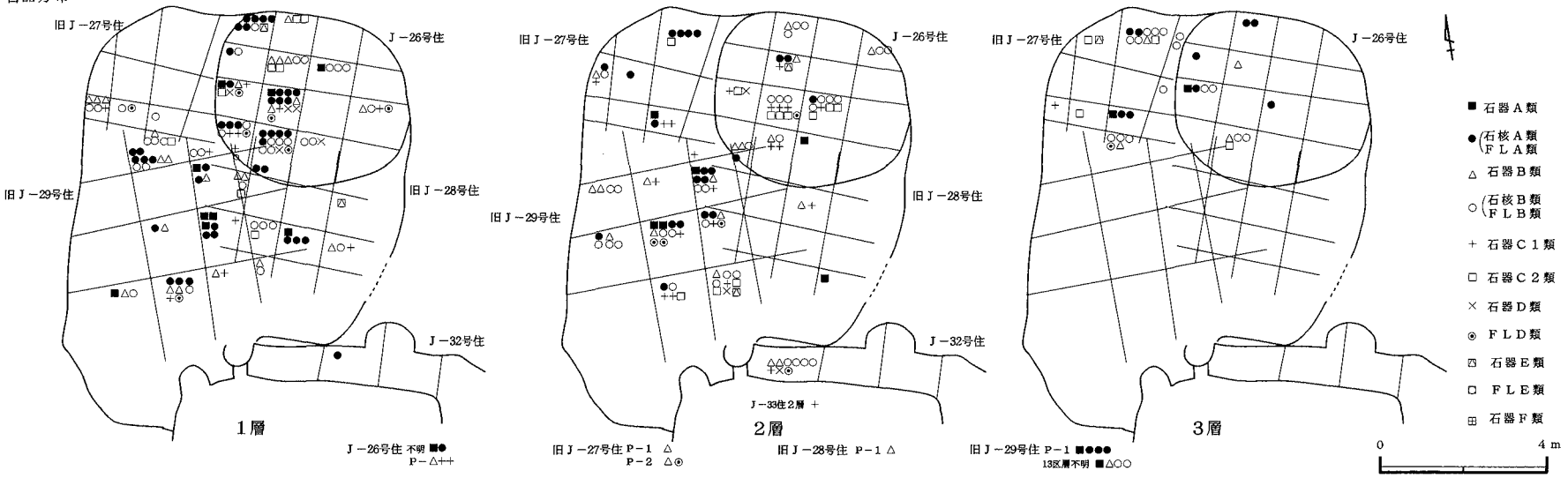
第184図　J—25・34号住居址遺物分布図

J—26・32・33（27・28・29）号住

土器分布



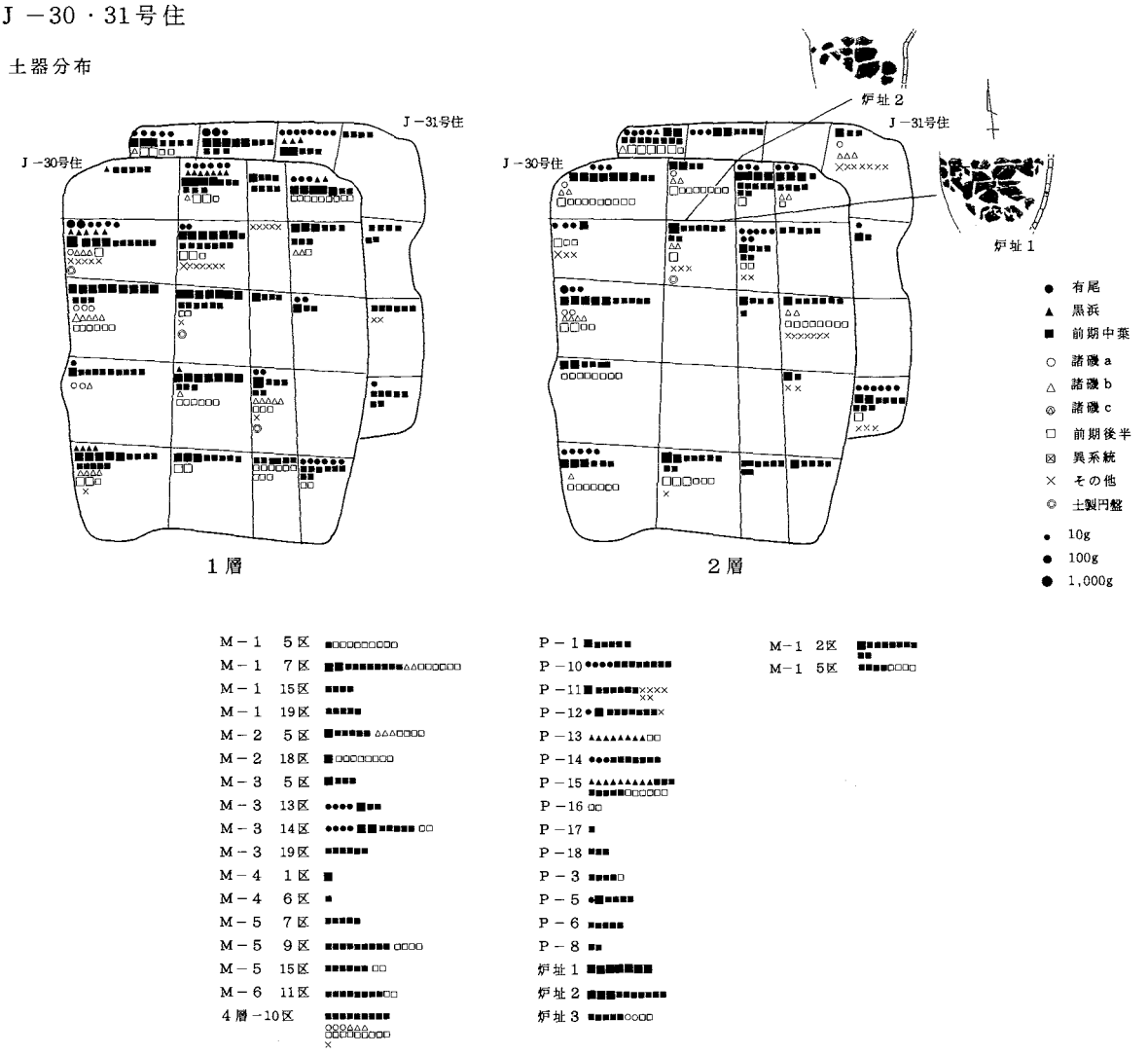
石器分布



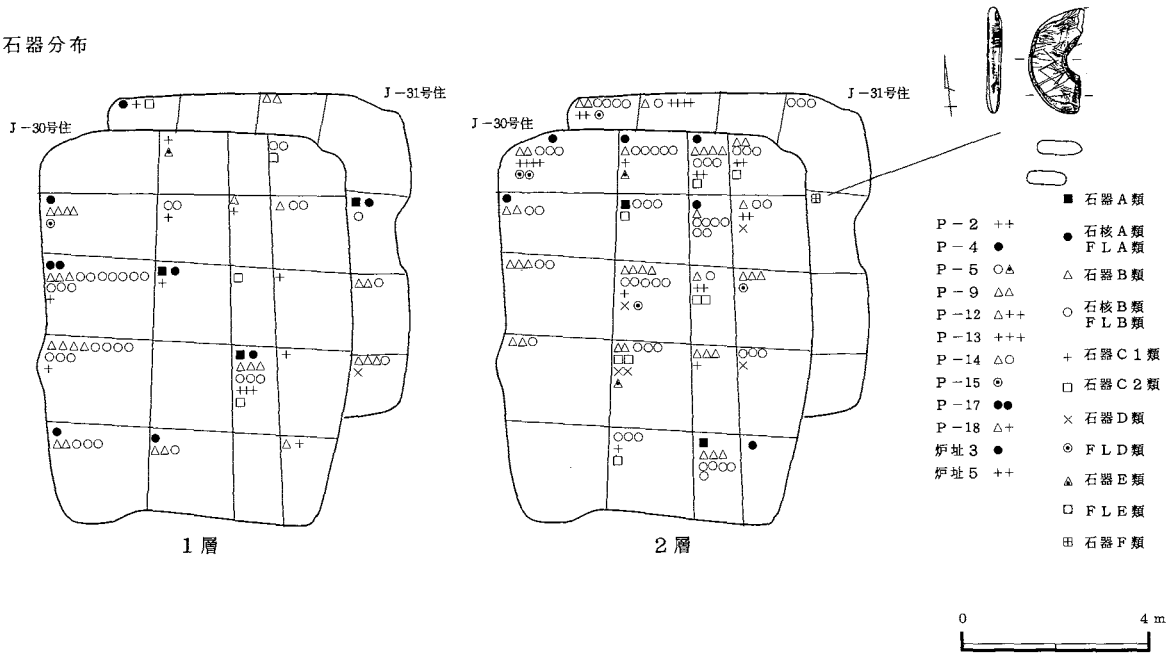
第185図　J—26・32・33（27・28・29）号住居址遺物分布図

J－30・31号住

土器分布



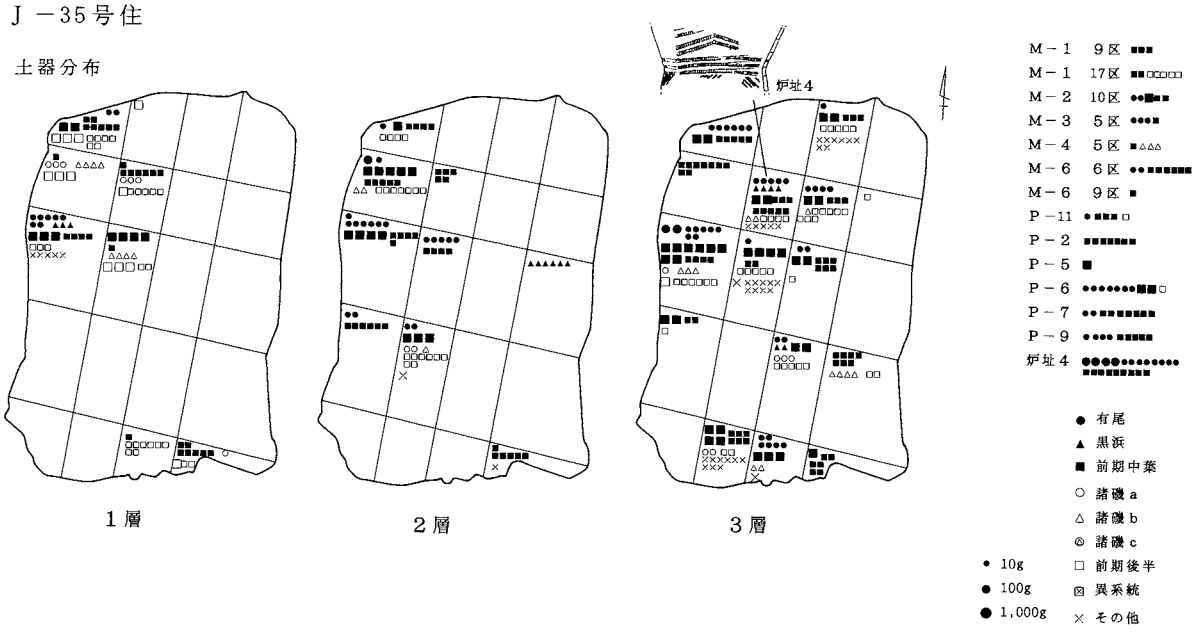
石器分布



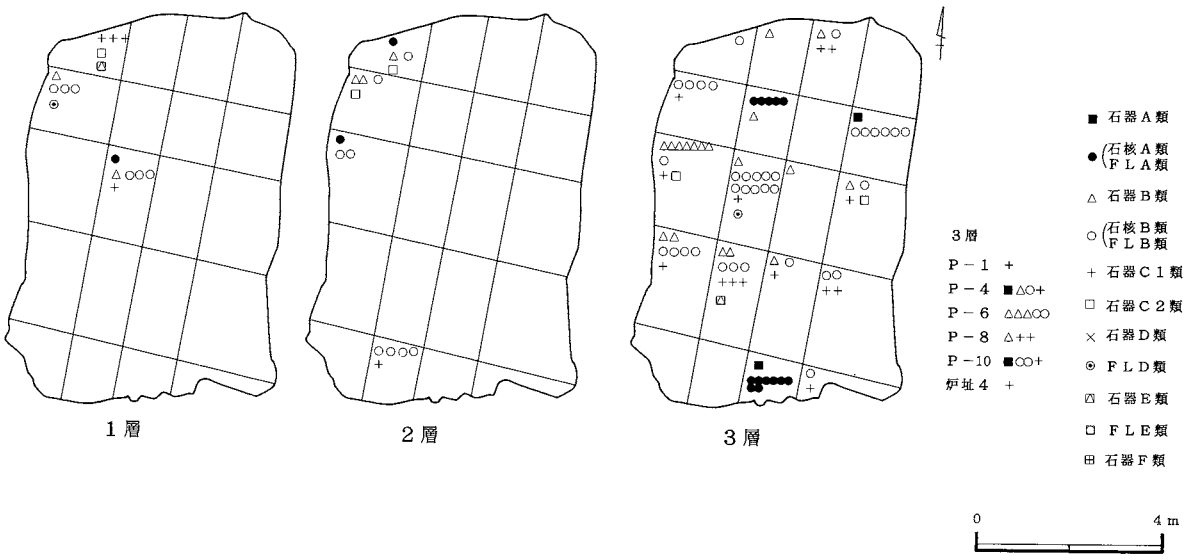
第186図　J－30・31号住居址遺物分布図

Ｊ－35号住

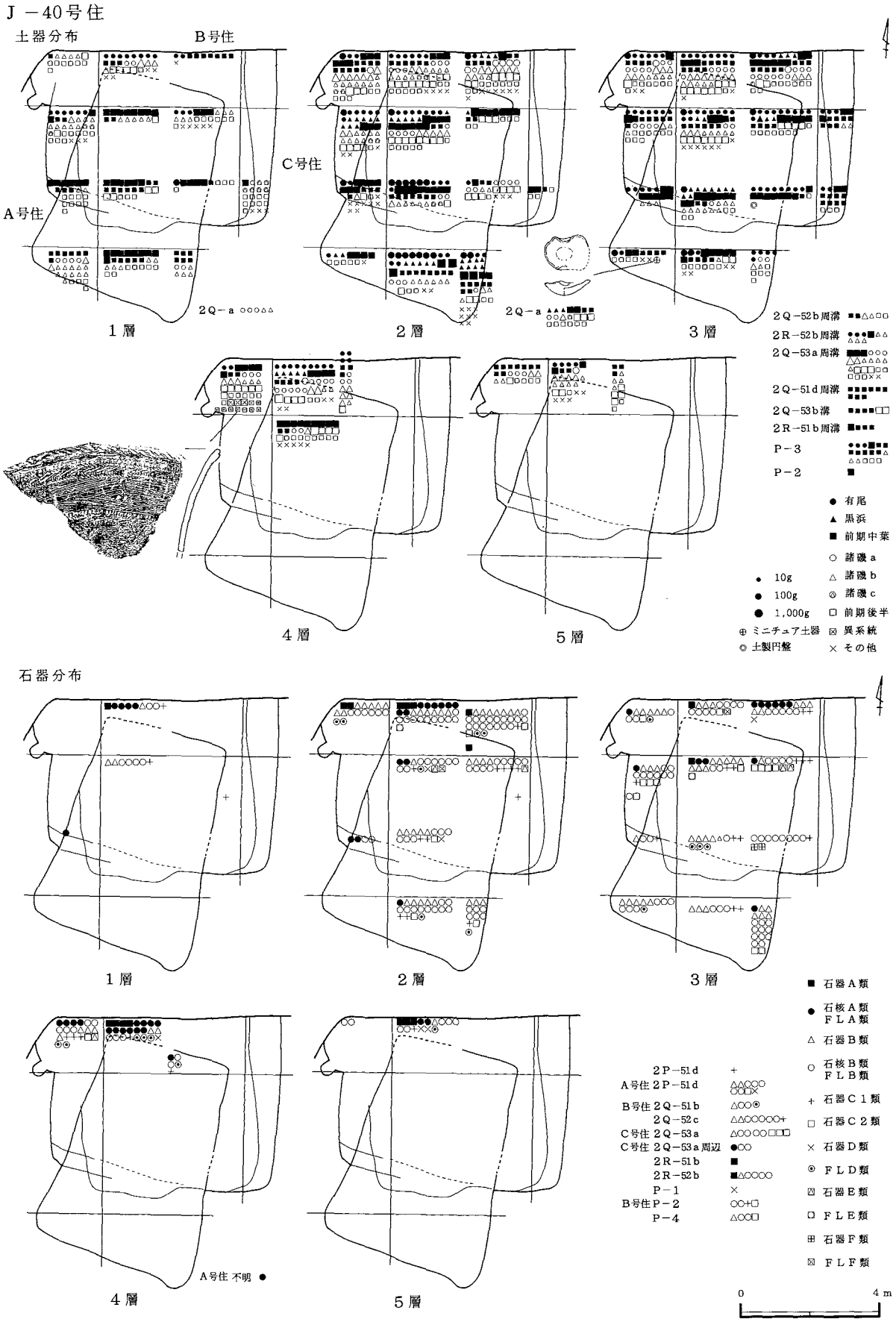
土器分布



石器分布



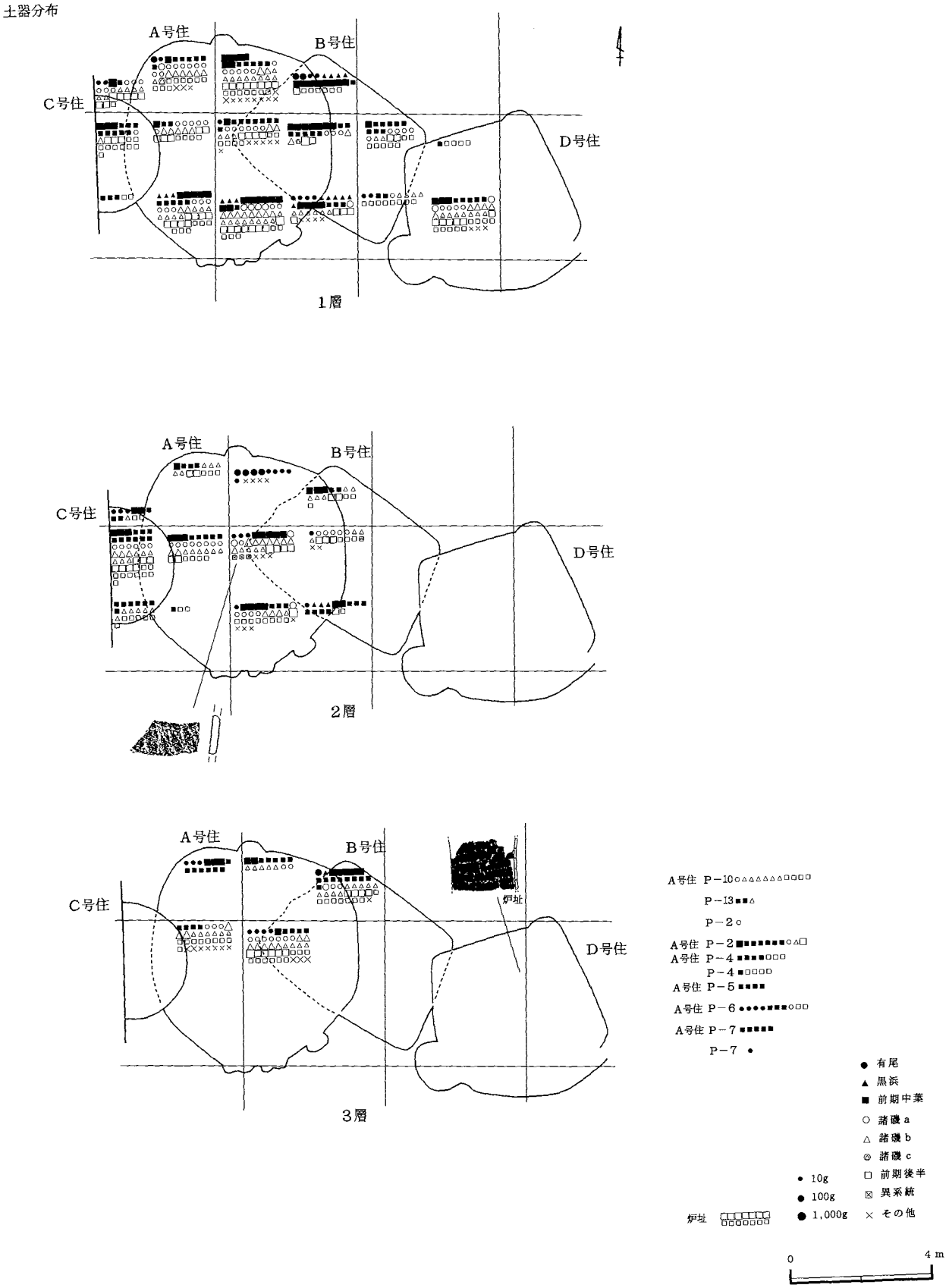
第187図　Ｊ－35号住居址遺物分布図



第188図　J－40号住居址遺物分布図

J－41号住

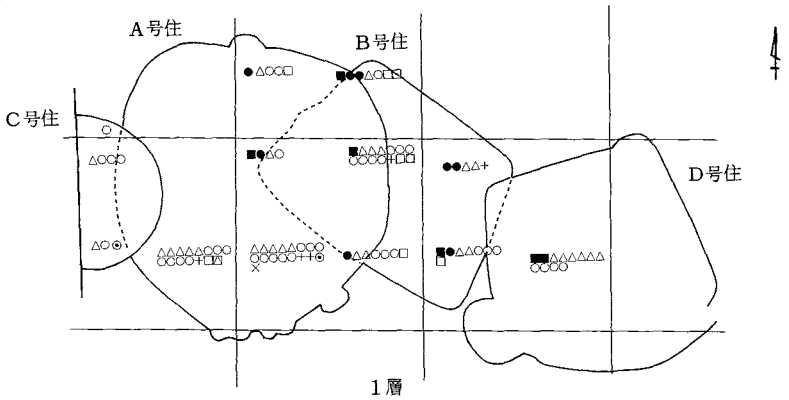
土器分布



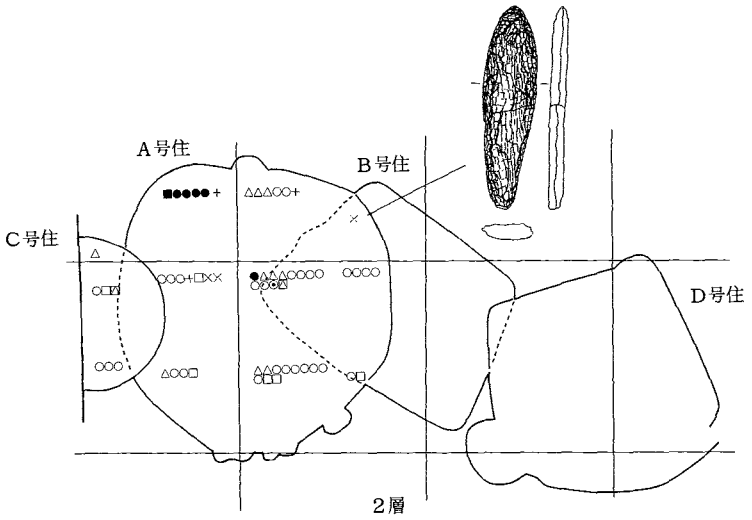
第189図　J－41号住居址遺物分布図（1）

J－41号住

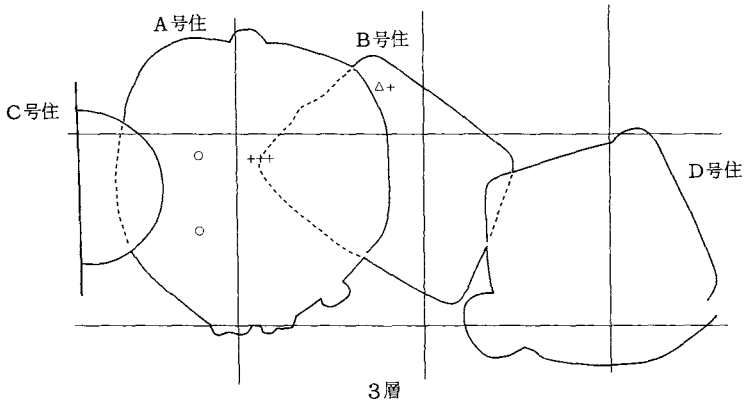
石器分布



1層



2層



3層

■ 石器A類
● (石核A類 / FLA類)
△ 石器B類
○ (石核B類 / FLB類)
＋ 石器C1類
□ 石器C2類
× 石器D類
⊙ FLD類
▨ 石器E類
□ FLE類
⊞ 石器F類

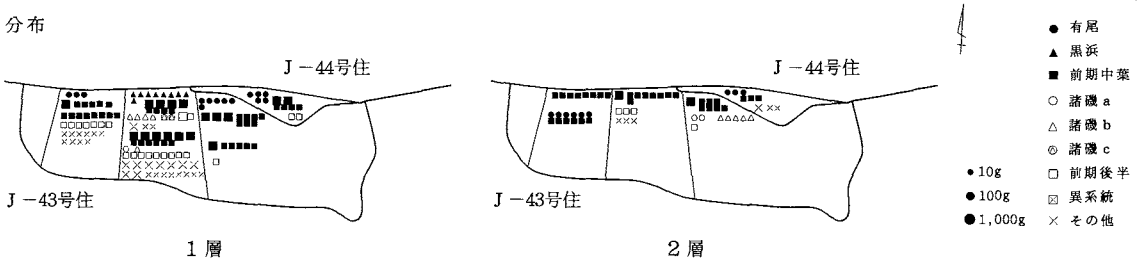
P－1	●●●
A号住 P－3	△
P－3	○○
A号住 P－4	●●●●●
A号住 P－5	＋×
A号住 P－8	●●
A号住 P－11	＋＋
A号住 P－13	○
A号住 P－15	●●⊞

0　4 m

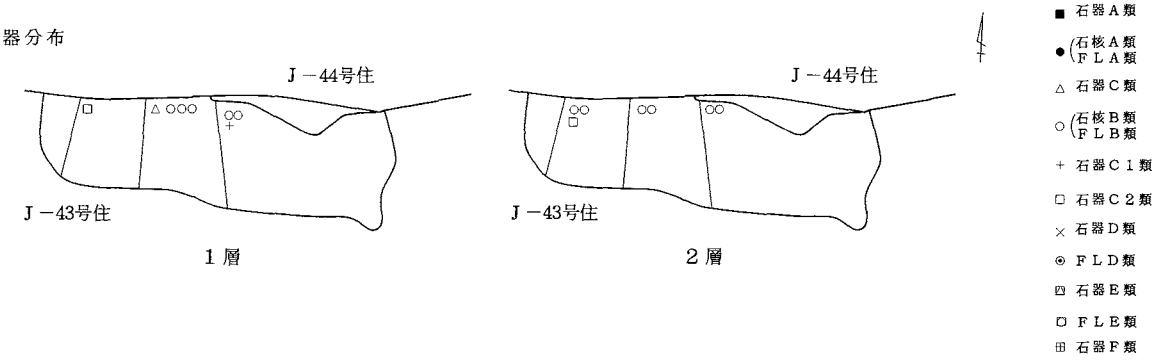
第190図　J－41号住居址遺物分布図（2）

Ｊ－43・44号住

土器分布

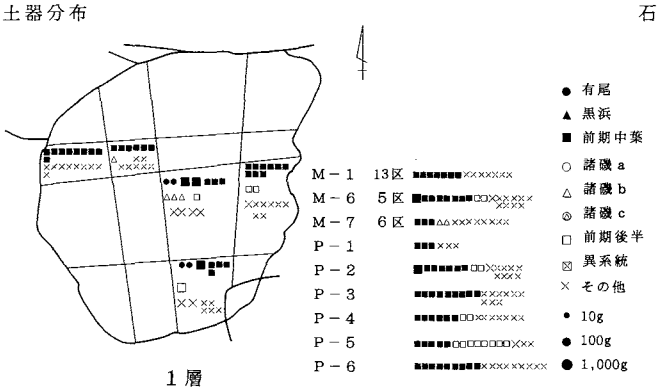


石器分布

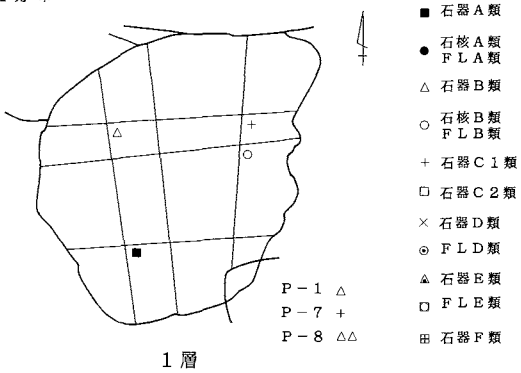


Ｊ－45号住

土器分布

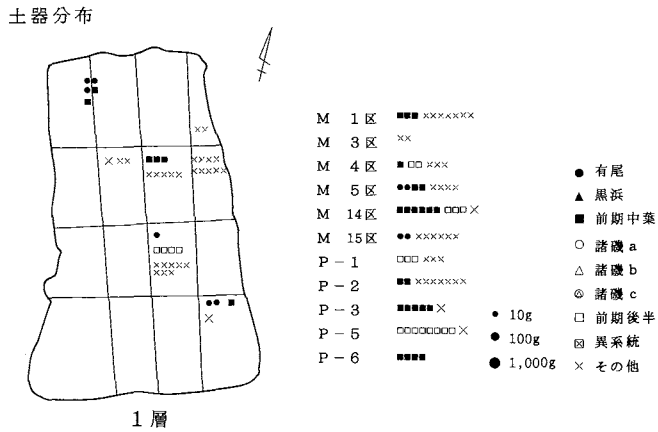


石器分布

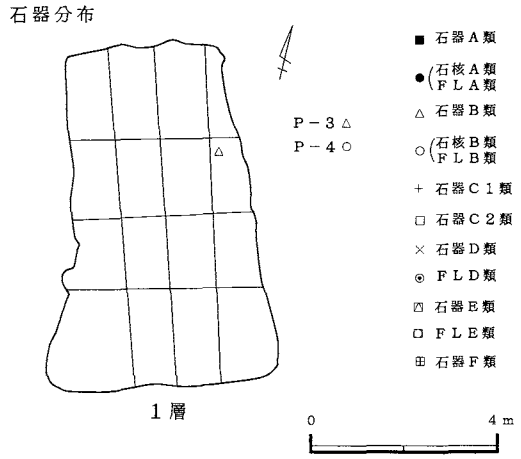


Ｊ－46号住

土器分布



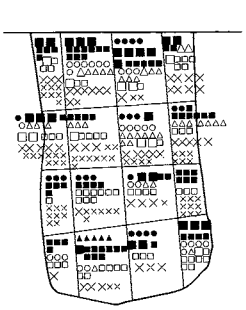
石器分布



第191図　Ｊ―43・44・45・46号住居址遺物分布図

Ｊ－47号住

土器分布

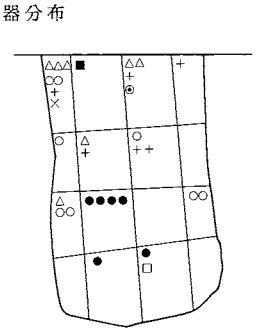


1層

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯a
△ 諸磯b
◎ 諸磯c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他

• 10g
● 100g
● 1,000g

石器分布



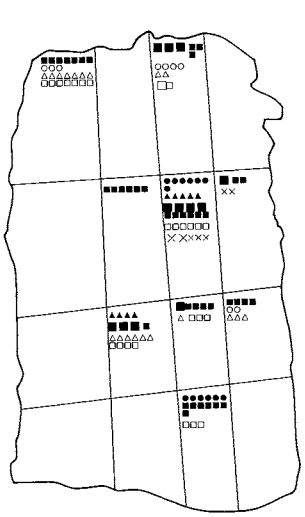
1層

2U53a △
炉址－10 ＋

■ 石器A類
● (石核A類 / FLA類)
△ 石器B類
○ (石核B類 / FLB類)
＋ 石器C1類
□ 石器C2類
× 石器D類
⊙ FLD類
⊠ 石器E類
□ FLE類
⊞ 石器F類

Ｊ－49号住

土器分布



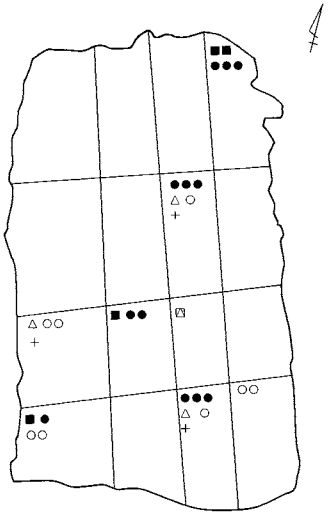
1層

M－1 1区
M－1 3区
M－1 8区
M－1 13区
P－2
P－4
P－5
一括

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯a
△ 諸磯b
◎ 諸磯c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他

• 10g
● 100g
● 1,000g

石器分布



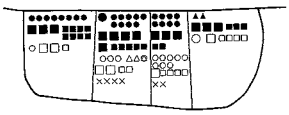
1層

P－3 ＋
P－5 △○○
P－6 ●

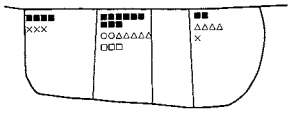
■ 石器A類
● (石核A類 / FLA類)
△ 石器B類
○ (石核B類 / FLB類)
＋ 石器C1類
□ 石器C2類
× 石器D類
⊙ FLD類
⊠ 石器E類
□ FLE類
⊞ 石器F類

Ｊ－50号住

土器分布



1層



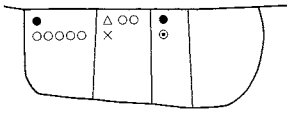
2層

P－1
P－3
P－4

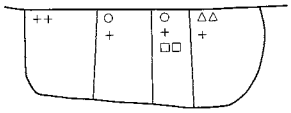
● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯a
△ 諸磯b
◎ 諸磯c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他

• 10g
● 100g
● 1,000g

石器分布



1層



2層

P－2 △
P－6 ●●

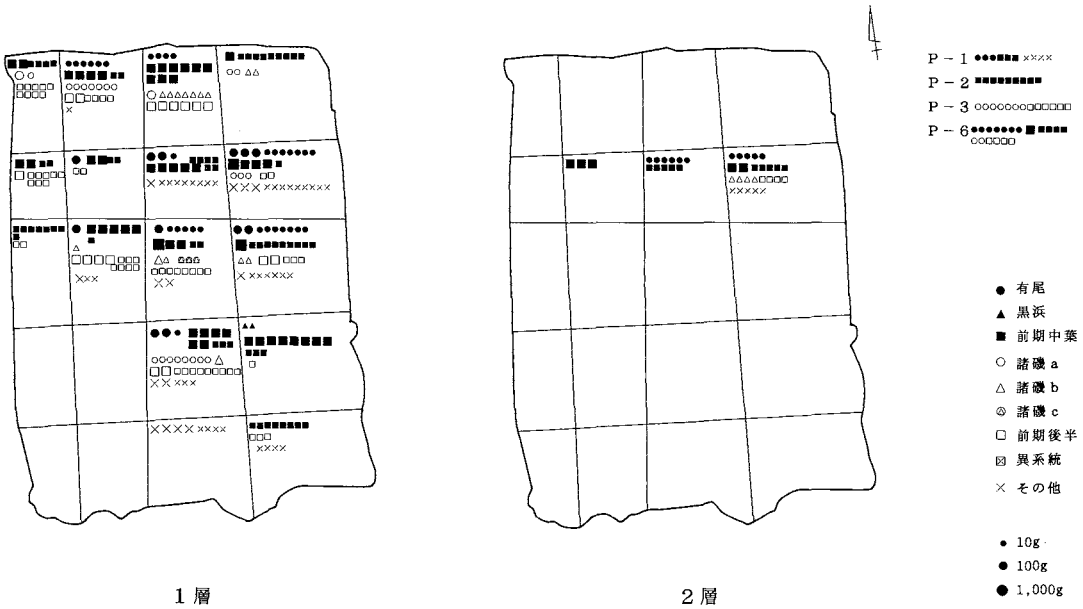
■ 石器A類
● (石核A類 / FLA類)
△ 石器B類
○ (石核B類 / FLB類)
＋ 石器C1類
□ 石器C2類
× 石器D類
⊙ FLD類
⊠ 石器E類
□ FLE類
⊞ 石器F類

0 4 m

第192図　Ｊ－47・49・50号住居址遺物分布図

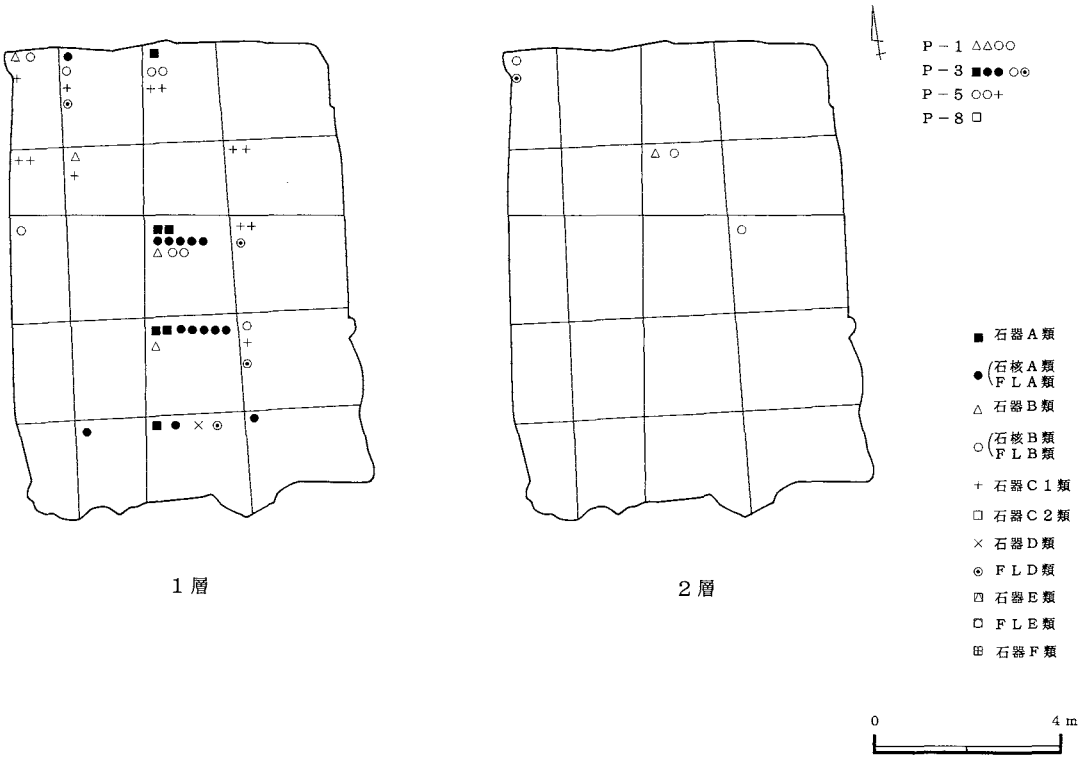
Ｊ－51号住

土器分布



1層　　2層

石器分布

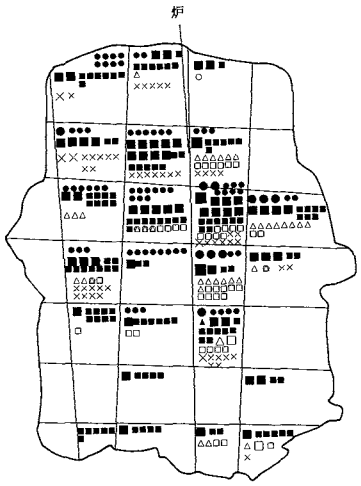


1層　　2層

第193図　Ｊ—51号住居址遺物分布図

J－52号住

土器分布



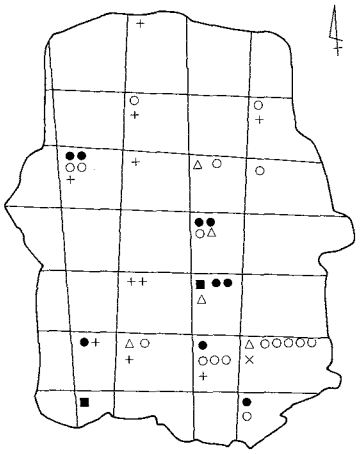
1層

M　3区
M　24区
M　25区
M－1　28区
P－1
P－11
P－14
P－15
P－4
P－5
P－6
P－9
炉体土器有り

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯a
△ 諸磯b
◎ 諸磯c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他

• 10g
● 100g
● 1,000g

石器分布



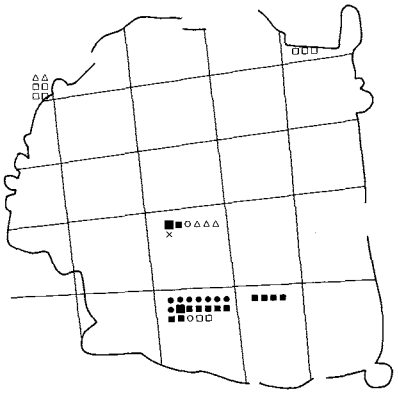
1層

P－7 +
P－8 ○○○ +
P－16 ●●

■ 石器A類
●（石核A類 FLA類）
△ 石器B類
○（石核B類 FLB類）
+ 石器C1類
□ 石器C2類
× 石器D類
⊙ FLD類
⊠ 石器E類
□ FLE類
⊞ 石器F類

J－53号住

土器分布



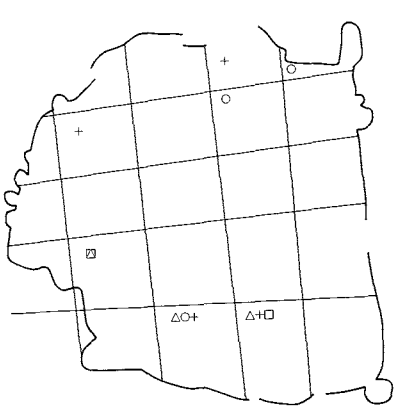
1層

P－1
P－2
P－3
P－5
P－6
P－7
P－10
P－11

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯a
△ 諸磯b
◎ 諸磯c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他

• 10g
● 100g
● 1,000g

石器分布



1層

P－1 ○
P－9 △□

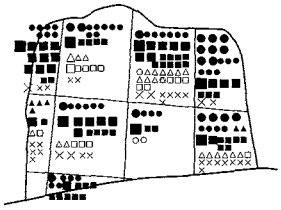
△ 石器B類
○（石核B類 FLB類）
+ 石器C1類
□ 石器C2類
⊠ 石器E類

0　4 m

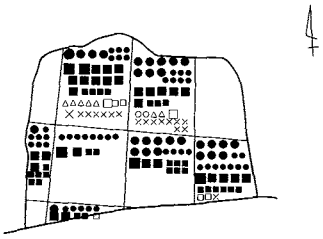
第194図　J－52・53号住居址遺物分布図

Ｊ－54号住

土器分布



１層

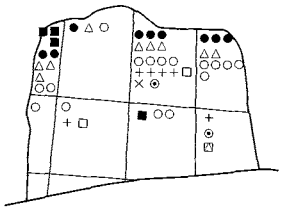


２層

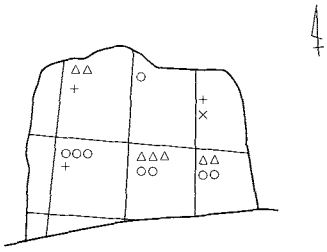
● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯ａ
△ 諸磯ｂ
◎ 諸磯ｃ
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他

• 10g
● 100g
● 1,000g

石器分布



１層

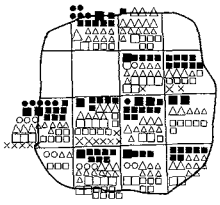


２層

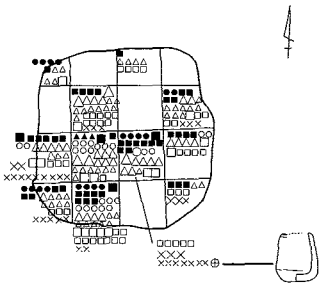
■ 石器Ａ類
●（石核Ａ類 ＦＬＡ類）
△ 石器Ｂ類
○（石核Ｂ類 ＦＬＢ類）
＋ 石器Ｃ１類
□ 石器Ｃ２類
× 石器Ｄ類
⊙ ＦＬＤ類
⊠ 石器Ｅ類
□ ＦＬＥ類
⊞ 石器Ｆ類

Ｊ－55号住

土器分布



１層

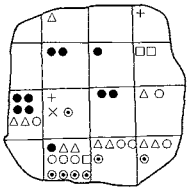


２層

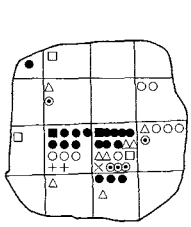
● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯ａ
△ 諸磯ｂ
◎ 諸磯ｃ
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他
⊕ ミニチュア土器

• 10g
● 100g
● 1,000g

石器分布



１層



２層

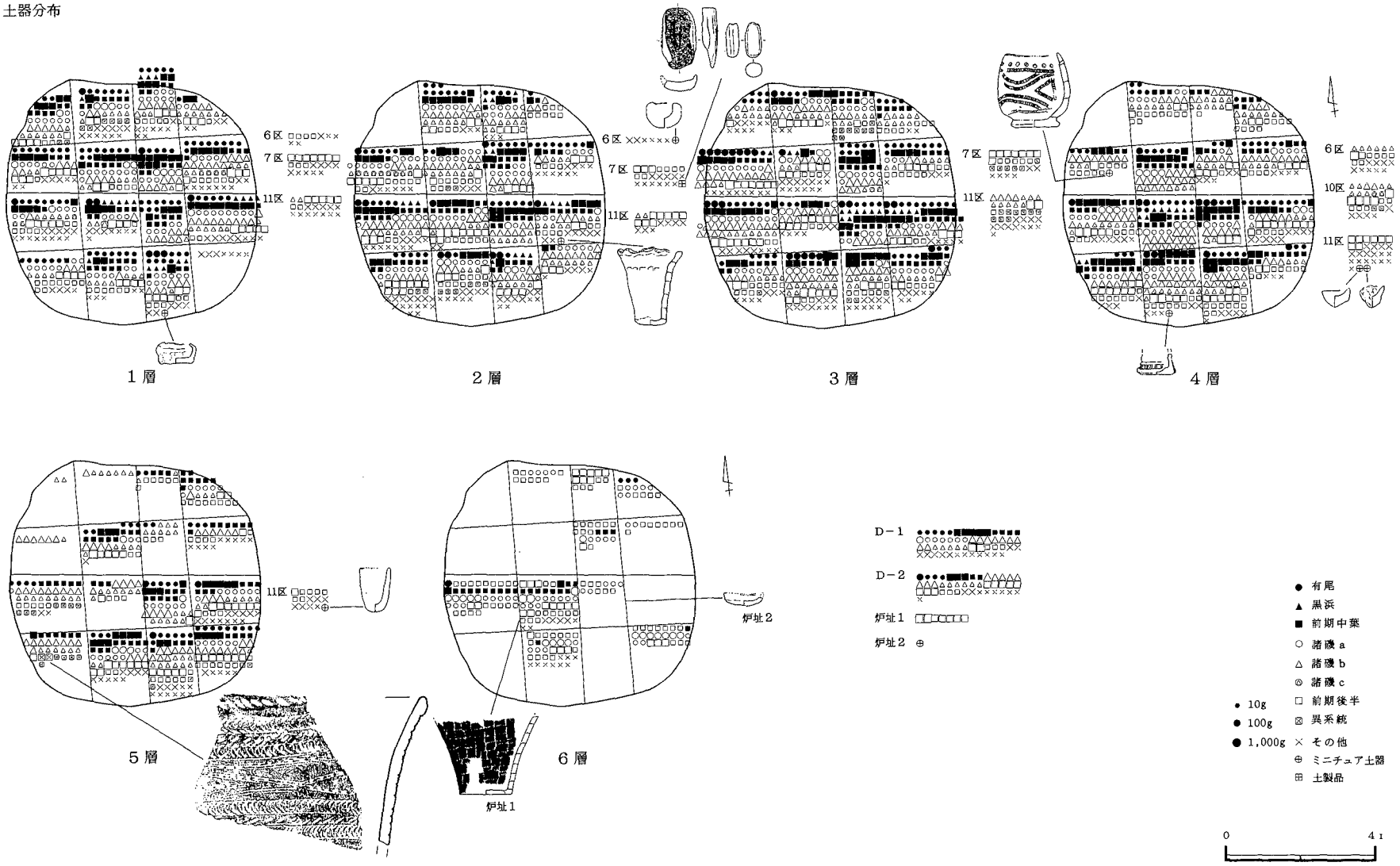
■ 石器Ａ類
●（石核Ａ類 ＦＬＡ類）
△ 石器Ｂ類
○（石核Ｂ類 ＦＬＢ類）
＋ 石器Ｃ１類
□ 石器Ｃ２類
× 石器Ｄ類
⊙ ＦＬＤ類
⊠ 石器Ｅ類
□ ＦＬＥ類
⊞ 石器Ｆ類

0　　4 m

第195図　Ｊ－54・55号住居址遺物分布図

Ｊ－56号住

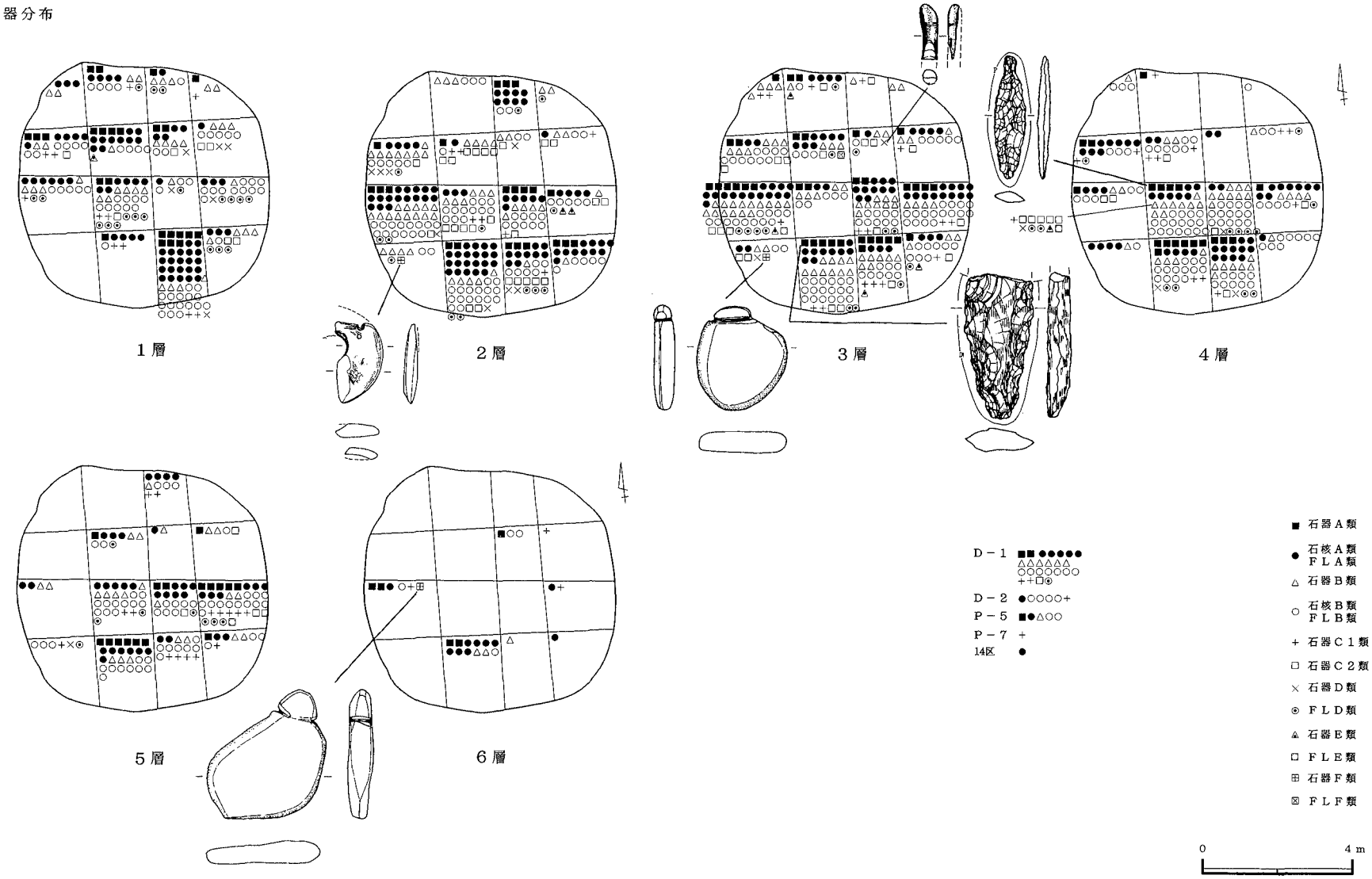
土器分布



第196図　Ｊ—56号住居址遺物分布図（1）

J－56号住

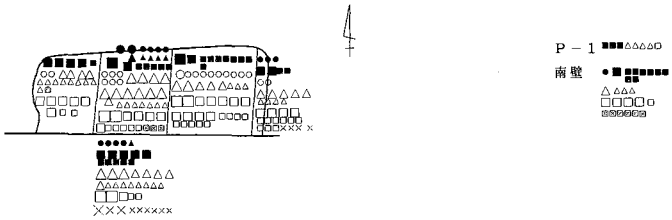
石器分布

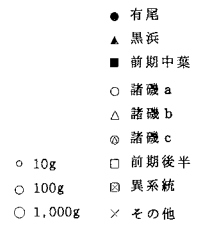


第197図　J－56号住居址遺物分布図（2）

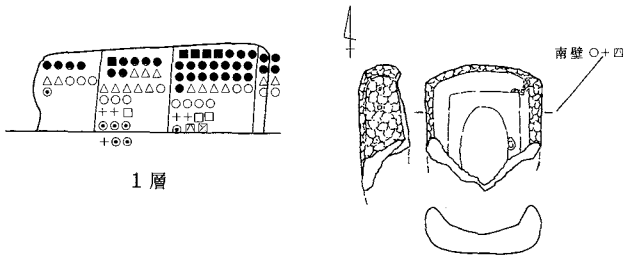
Ｊ－57号住

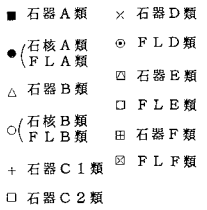
土器分布





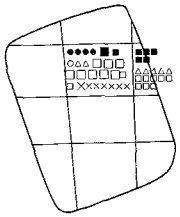
石器分布

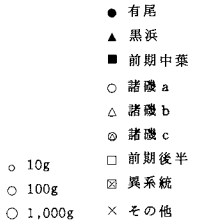




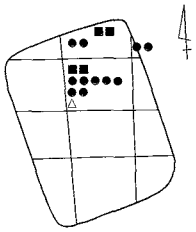
Ｊ－58号住

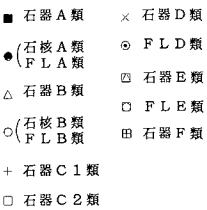
土器分布





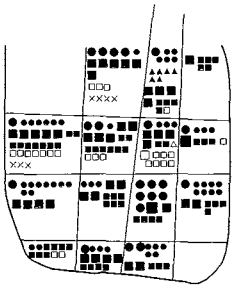
石器分布

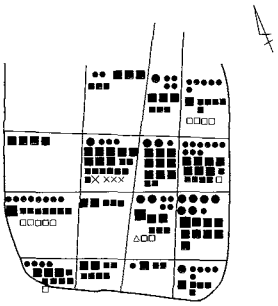


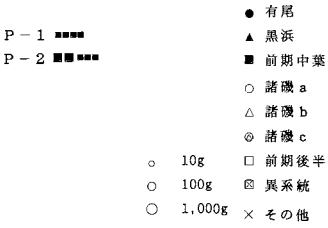


Ｊ－59号住

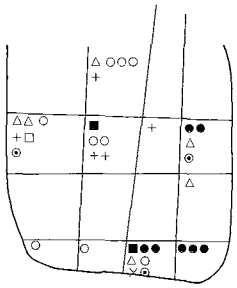
土器分布

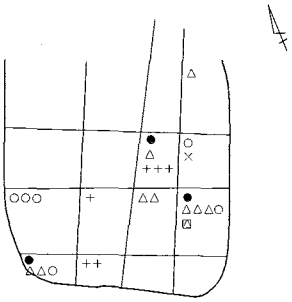


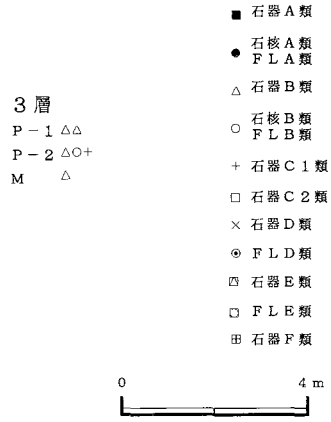




石器分布



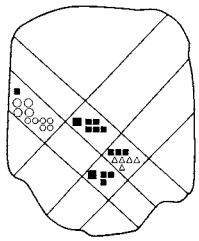




第198図　Ｊ―57・58・59号住居址遺物分布図

Ｊ－60号住

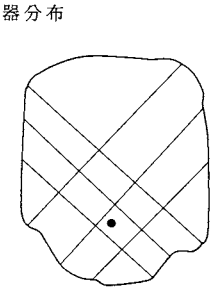
土器分布



表採 △△△△△△

1層

石器分布



D－1 △

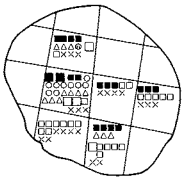
1層

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯a
△ 諸磯b
◎ 諸磯c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他
○ 10g
○ 100g
○ 1,000g

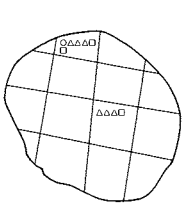
■ 石器A類
● (石核A類 FLA類)
△ 石器B類
○ (石核B類 FLB類)
＋ 石器C1類
□ 石器C2類
× 石器D類
⊙ FLD類
⊠ 石器E類
□ FLE類
⊞ 石器F類

Ｊ－61号住

土器分布

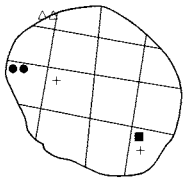


1層

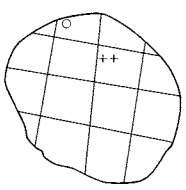


2層

石器分布



1層



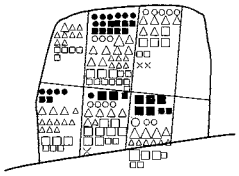
2層

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯a
△ 諸磯b
◎ 諸磯c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他
○ 10g
○ 100g
○ 1,000g

■ 石器A類
● (石核A類 FLA類)
△ 石器B類
○ (石核B類 FLB類)
＋ 石器C1類
□ 石器C2類
× 石器D類
⊙ FLD類
⊠ 石器E類
□ FLE類
⊞ 石器F類

Ｊ－62号住

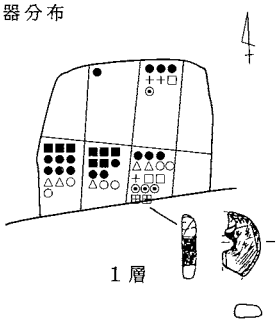
土器分布



D－1 △△△△△△△△△△△

1層

石器分布



P－1 △□

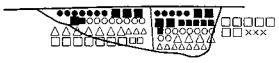
1層

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯a
△ 諸磯b
◎ 諸磯c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他
○ 10g
○ 100g
○ 1,000g

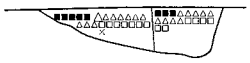
■ 石器A類
● (石核A類 FLA類)
△ 石器B類
○ (石核B類 FLB類)
＋ 石器C1類
□ 石器C2類
× 石器D類
⊙ FLD類
⊠ 石器E類
□ FLE類
⊞ 石器F類

Ｊ－67号住

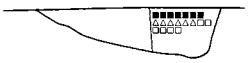
土器分布



1層



2層



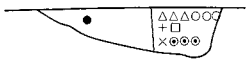
3層

P－1 △△□□□□

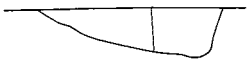
○ 10g
○ 100g
○ 1,000g

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯a
△ 諸磯b
◎ 諸磯c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他

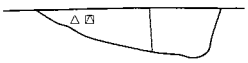
石器分布



1層



2層



3層

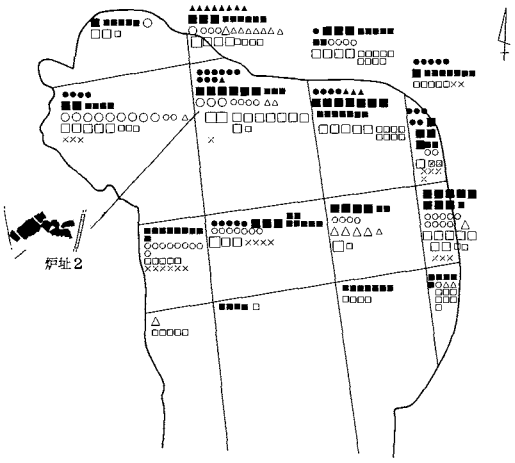
■ 石器A類
● (石核A類 FLA類)
△ 石器B類
○ (石核B類 FLB類)
＋ 石器C1類
□ 石器C2類
× 石器D類
⊙ FLD類
⊠ 石器E類
□ FLE類
⊞ 石器F類

0　4 m

第199図　Ｊ－60・61・62・67号住居址遺物分布図

Ｊ－63号住

土器分布

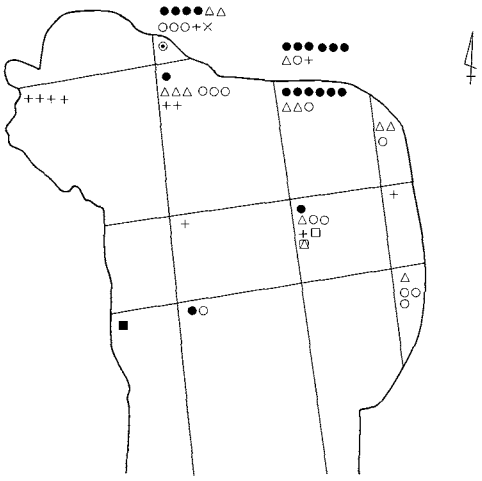


1層

M－1
M－13
炉址2
P－1
P－2
P－3
P－4
P－5
P－7
P－9
P－10
P－11
P－15
P－16
P－17
P－18
P－20
P－21
P－22
P－23
P－24
P－25
P－27
P－28
P－29
P－30
P－31
P－32
P－33
P－34
P－35
P－36

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯a
△ 諸磯b
◎ 諸磯c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他
。10g
○ 100g
◯ 1,000g

石器分布



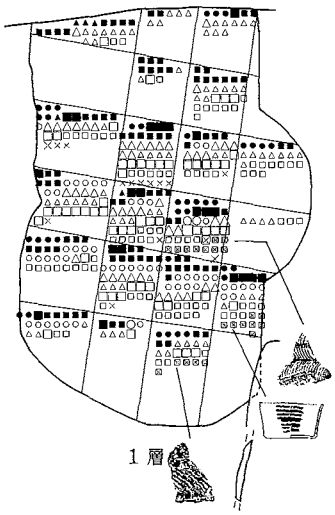
1層

周溝1
P－2
P－3
P－6
P－8
P－10
P－11
P－14
P－15
P－17
P－22
P－25
P－26
P－29
P－30
P－33
P－34
P－35

■ 石器A類
● (石核A類 FLA類)
△ 石器B類
○ (石核B類 FLB類)
＋ 石器C1類
□ 石器C2類
× 石器D類
⊙ FLD類
⊠ 石器E類
□ FLE類
⊞ 石器F類

Ｊ－64号住

土器分布

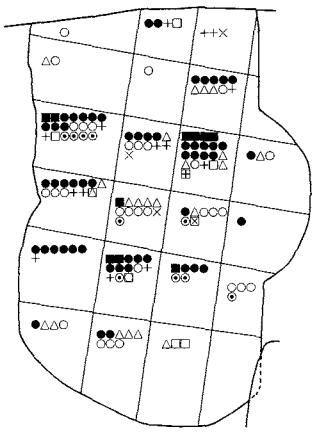


1層

炉址1
P－1
P－2
P－3
P－4
P－6
P－7
P－8
P－9
P－11
P－12
P－15
P－16
P－17
P－18

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯a
△ 諸磯b
◎ 諸磯c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他
。10g
○ 100g
◯ 1,000G

石器分布



1層

炉址 ＋
P－6
P－7
P－9
P－13
P－18
P－19
P－20

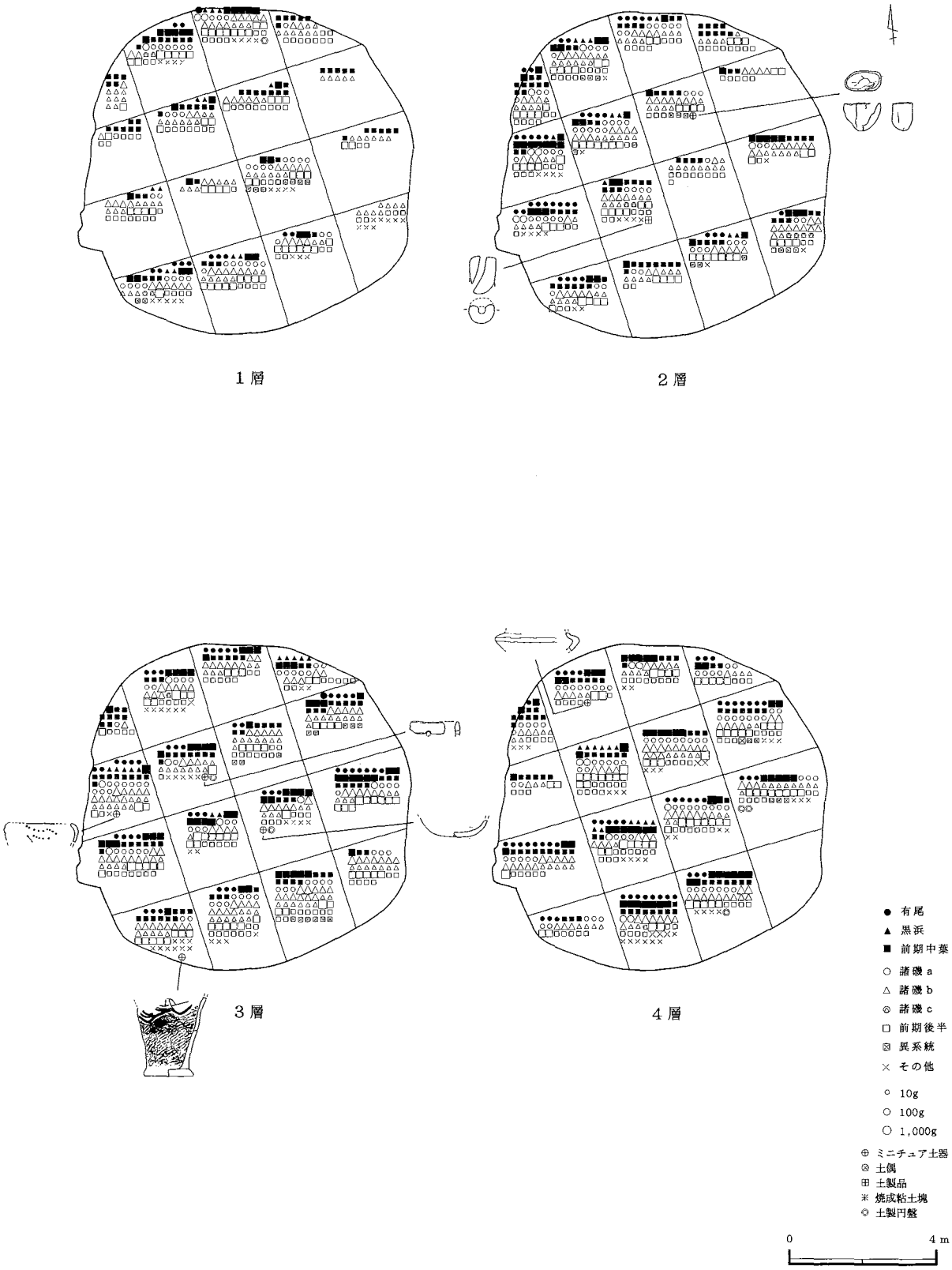
■ 石器A類
● (石核A類 FLA類)
△ 石器B類
○ (石核B類 FLB類)
＋ 石器C1類
□ 石器C2類
× 石器D類
⊙ FLD類
⊠ 石器E類
□ FLE類
⊞ 石器F類

0　4 m

第200図　Ｊ—63・64号住居址遺物分布図

J－66号住

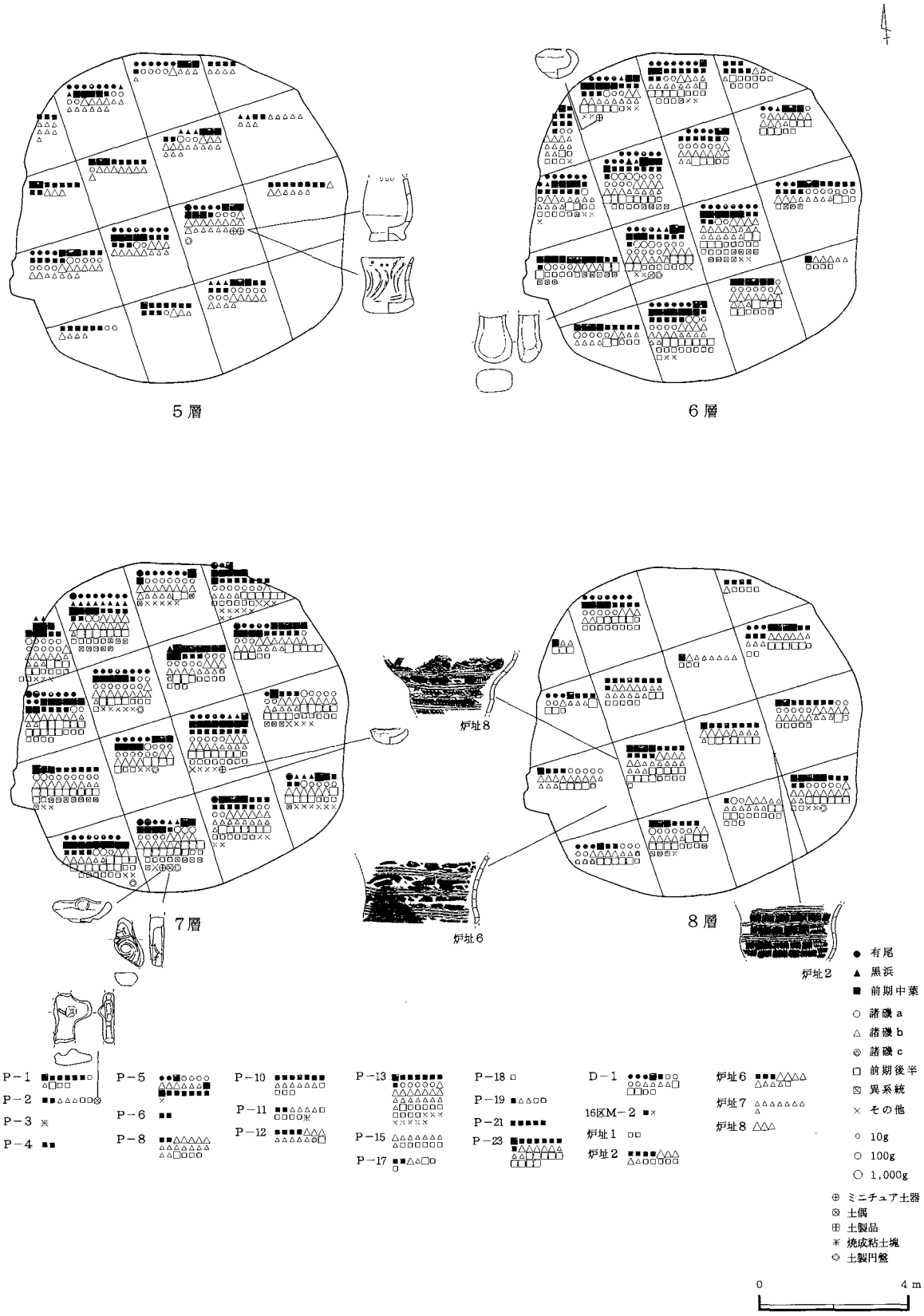
土器分布



第201図　J—66号住居址遺物分布図（1）

J－66号住

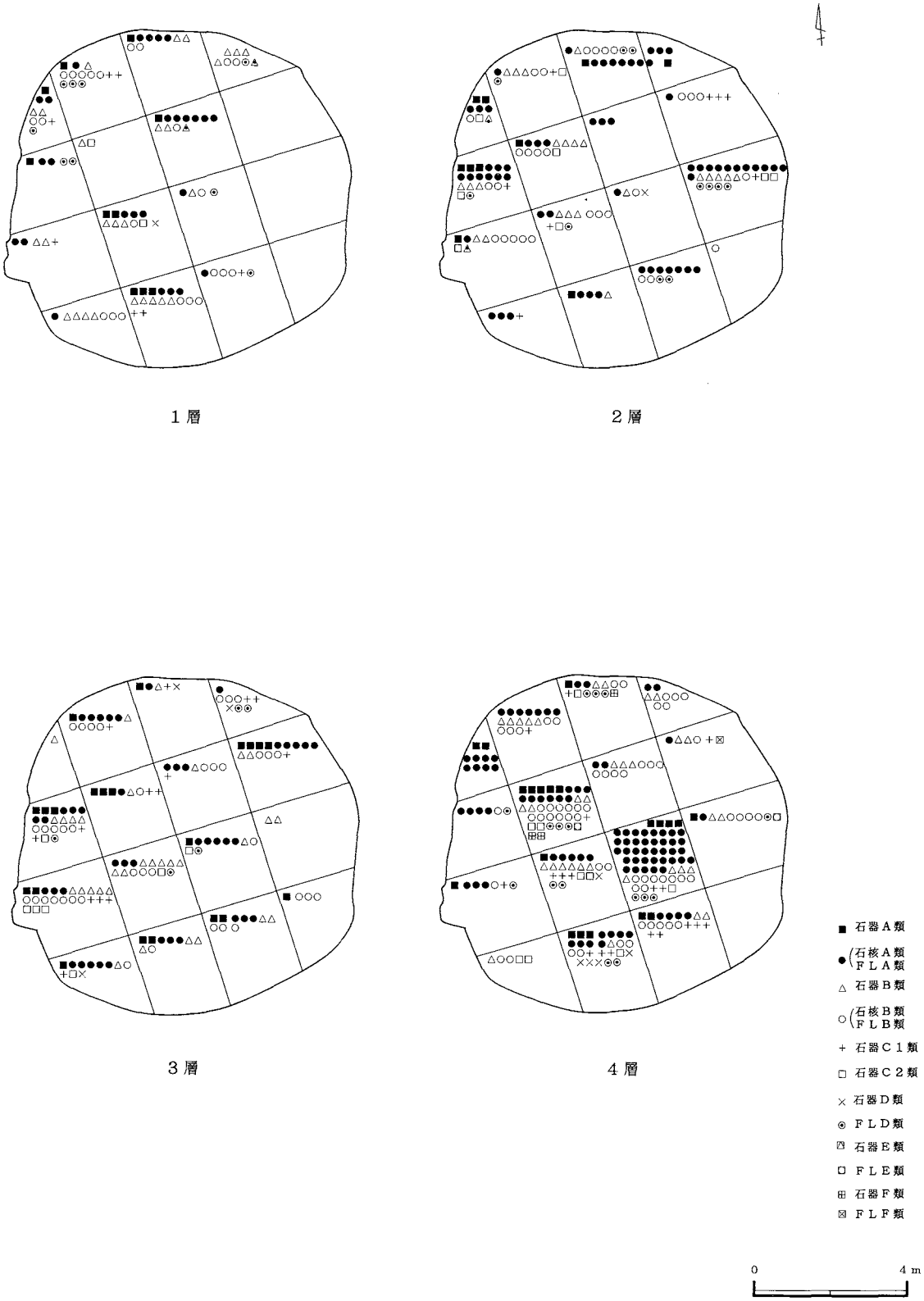
土器分布



第202図　J－66号住居址遺物分布図（2）

Ｊ－66号住

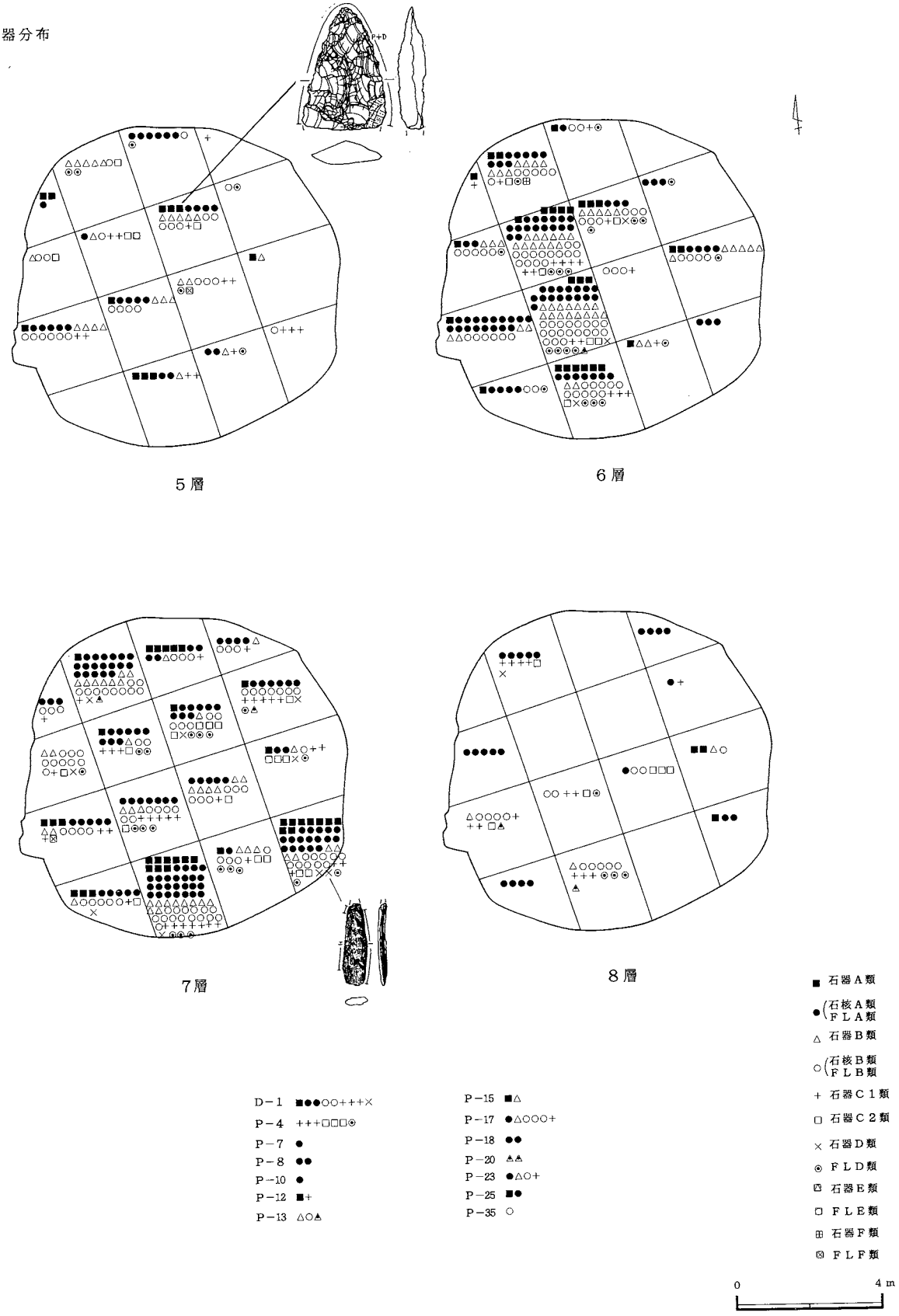
石器分布



第203図　Ｊ―66号住居址遺物分布図（３）

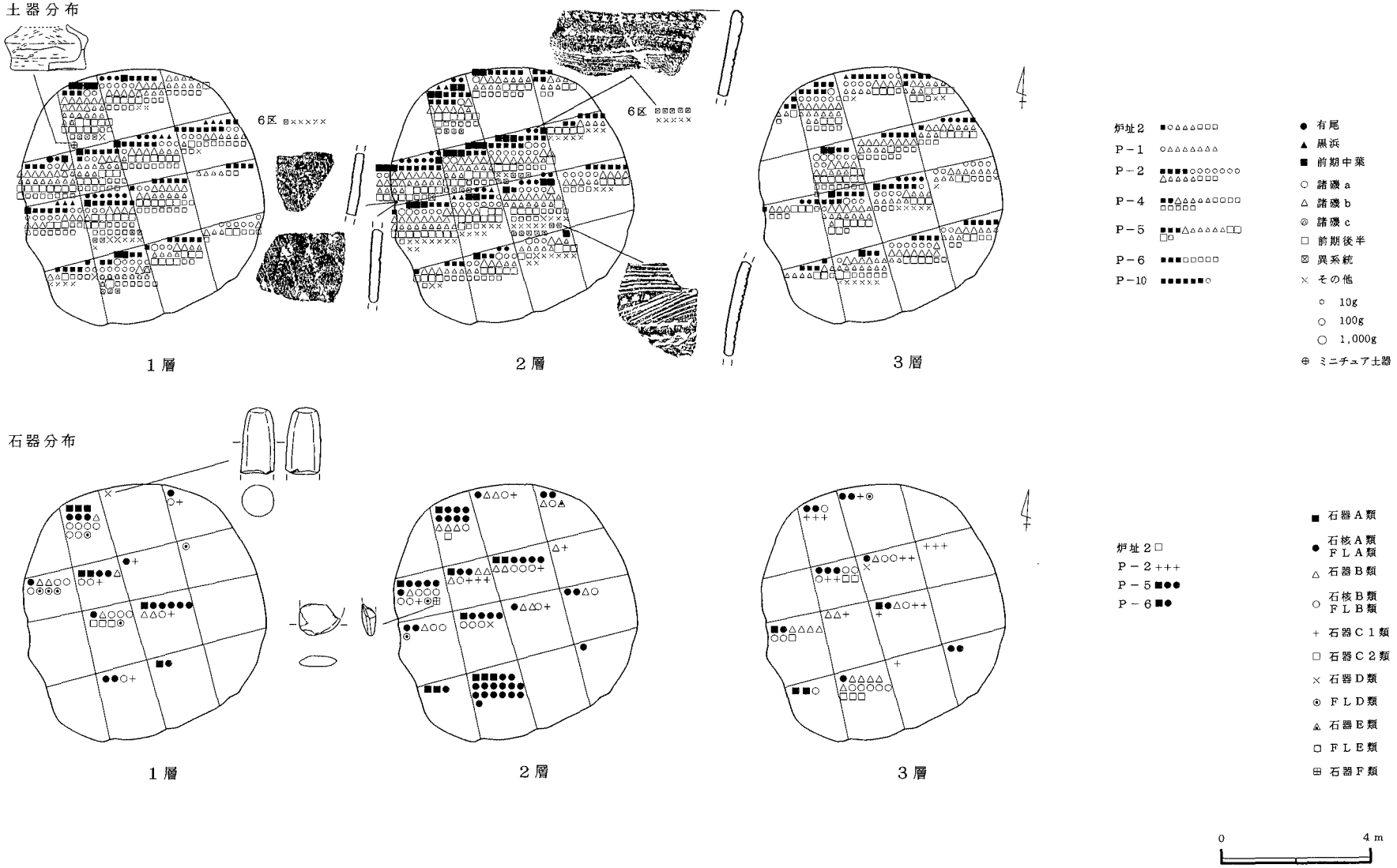
J－66号住

石器分布



第204図　J－66号住居址遺物分布図（4）

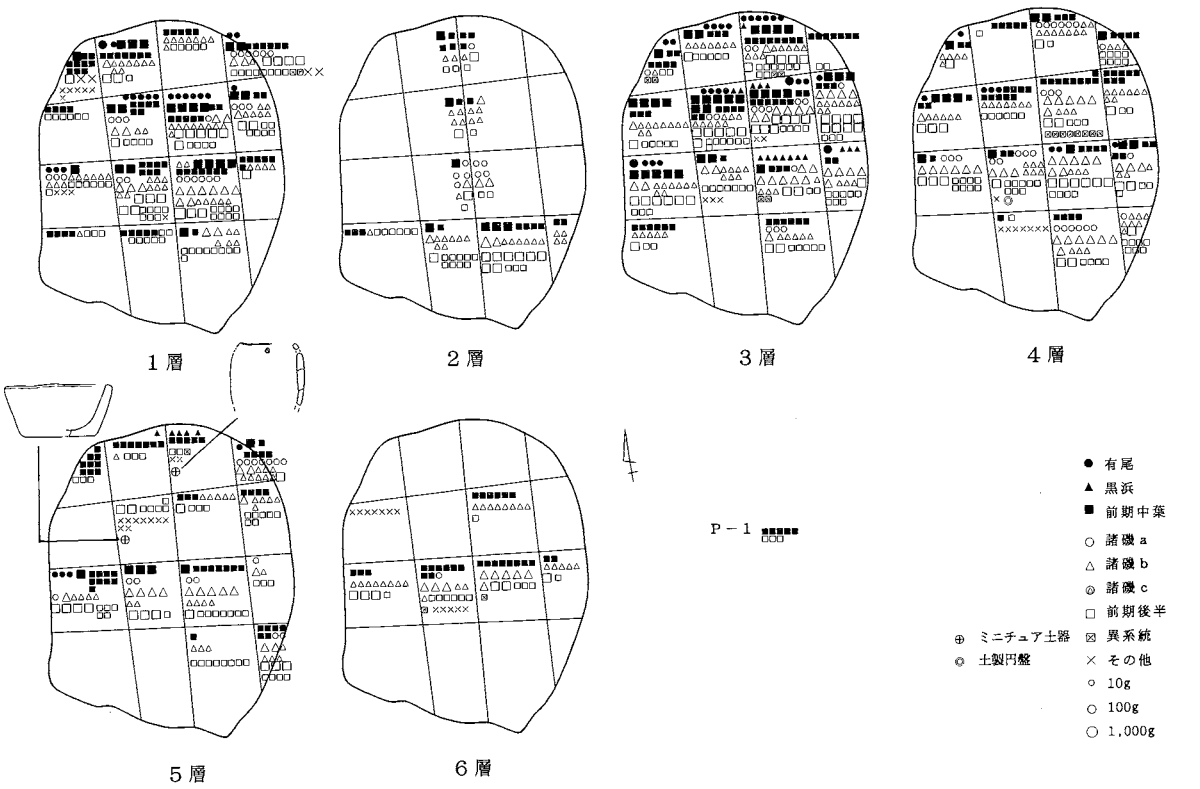
J－68号住



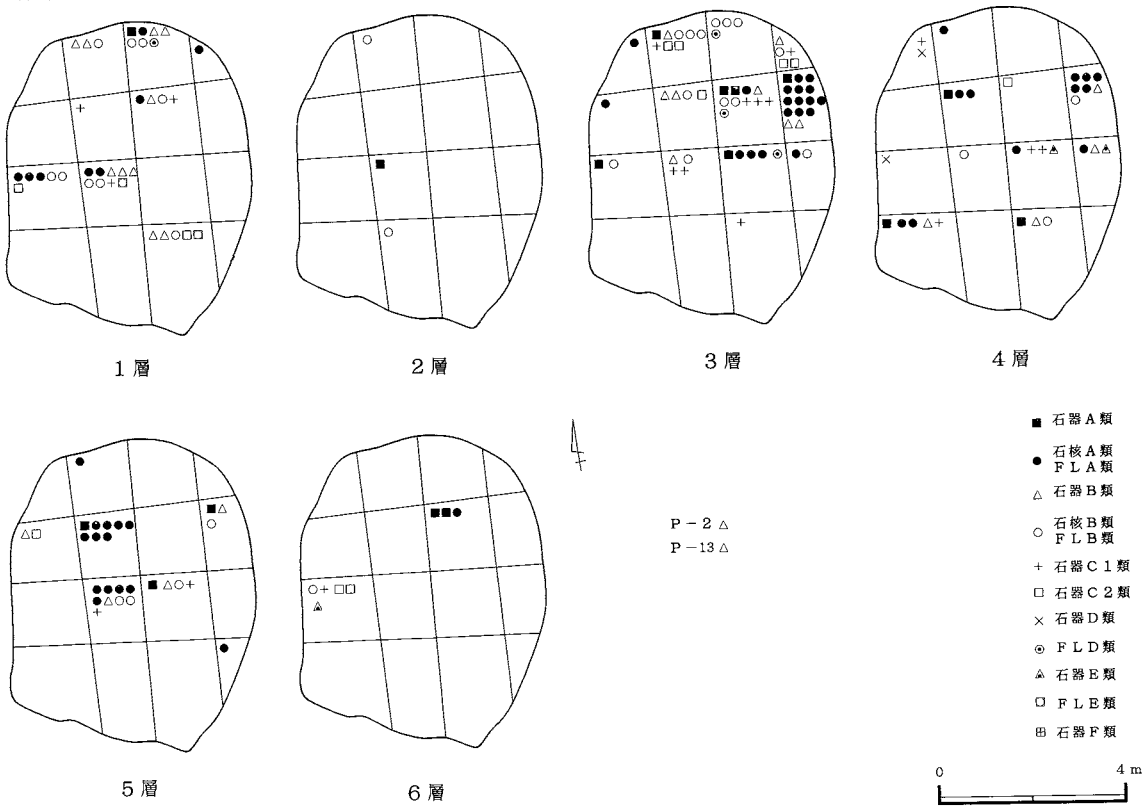
第205図　J－68号住居址遺物分布図

Ｊ－69号住

土器分布



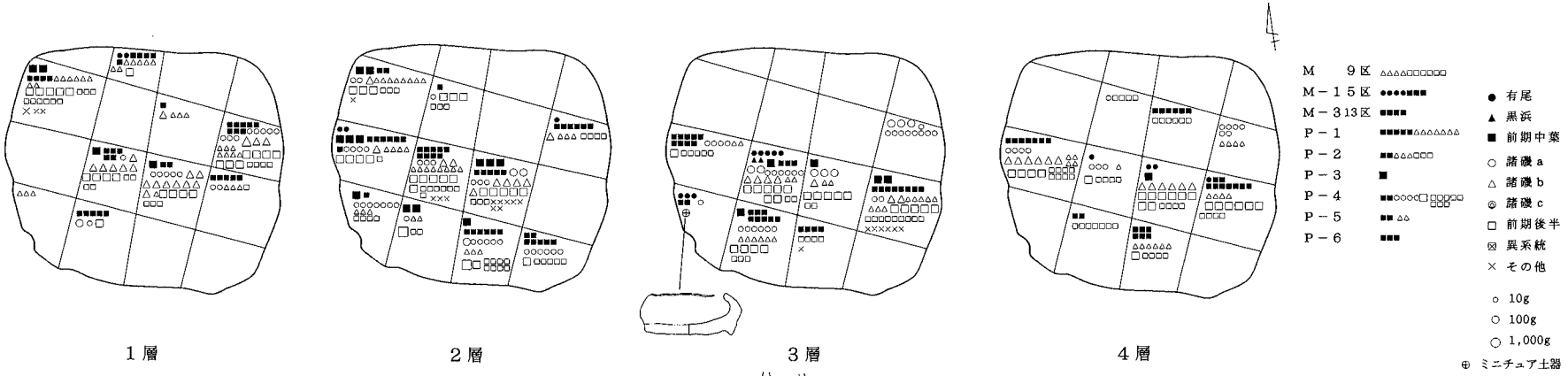
石器分布



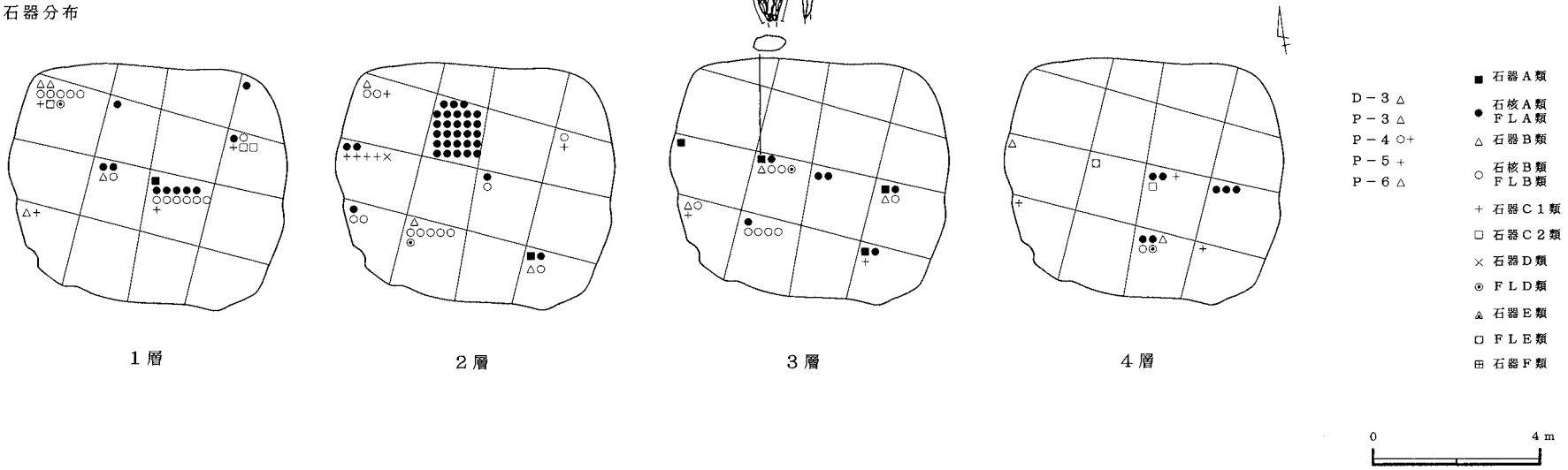
第206図　Ｊ－69号住居址遺物分布図

Ｊ－70号住

土器分布



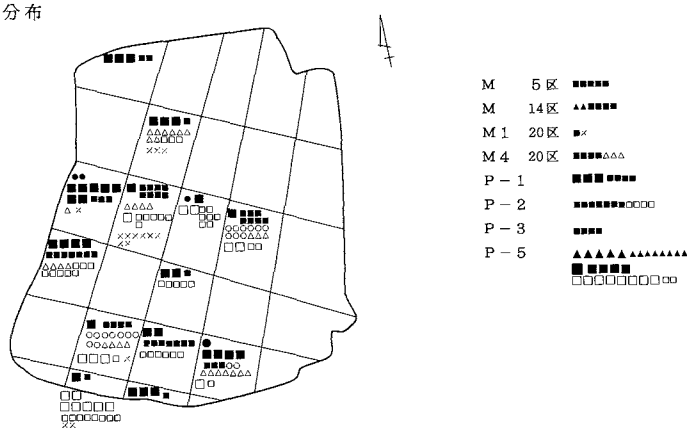
石器分布



第207図　Ｊ－70号住居址遺物分布図

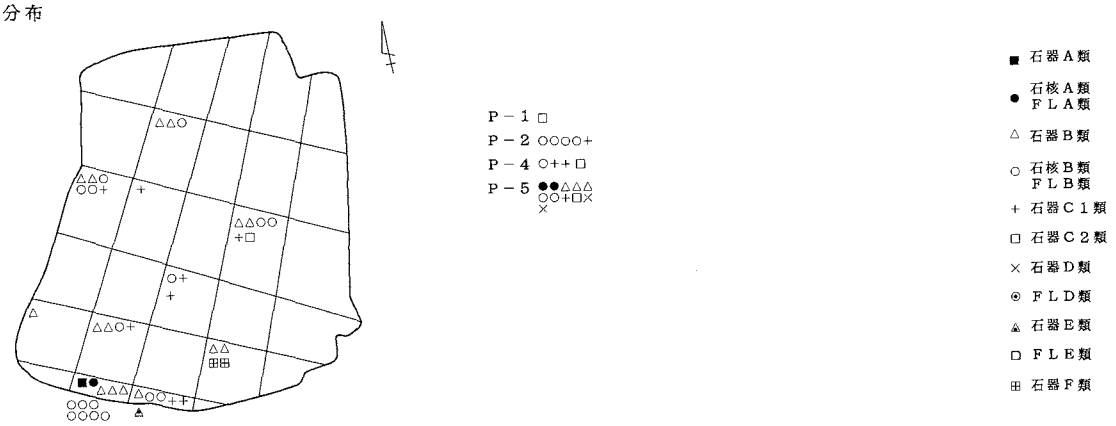
Ｊ－71号住

土器分布



1層

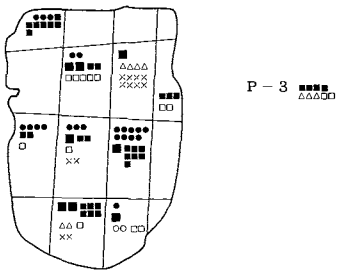
石器分布



1層

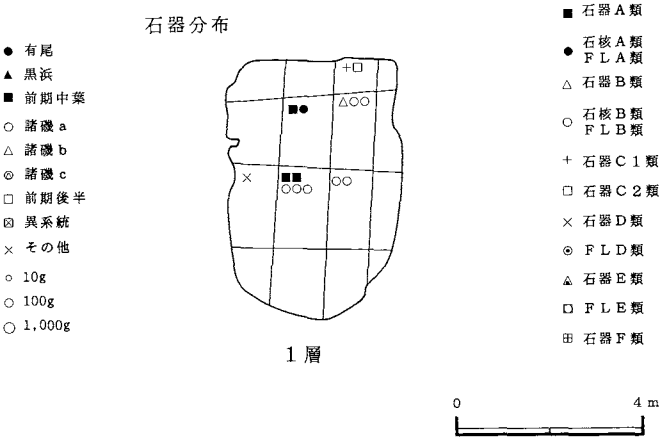
Ｊ－74号住

土器分布



1層

石器分布

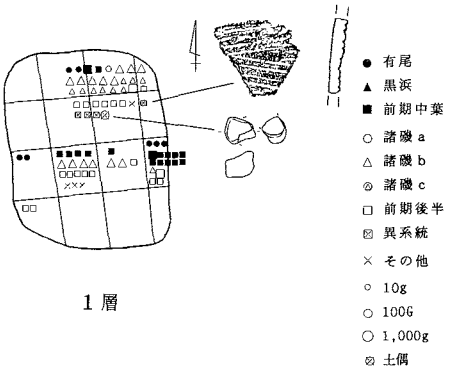


1層

第208図　Ｊ―71・74号住居址遺物分布図

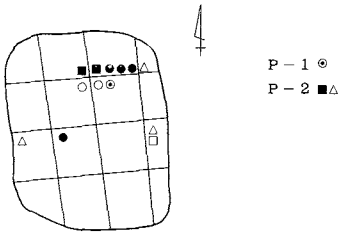
Ｊ－75号住

土器分布



1 層

石器分布

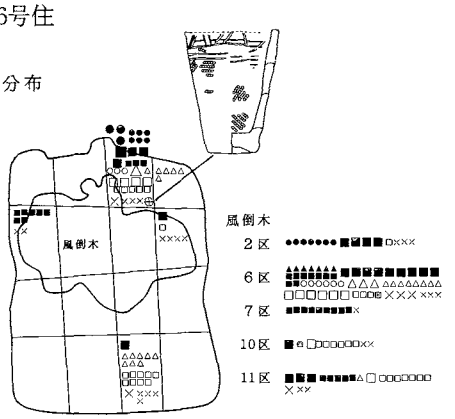


1 層

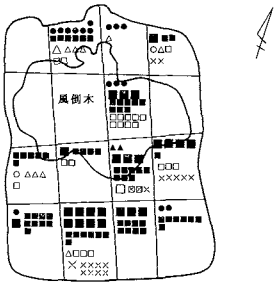
■ 石器Ａ類
● 石核Ａ類 ＦＬＡ類
△ 石器Ｂ類
○ 石核Ｂ類 ＦＬＢ類
＋ 石器Ｃ１類
□ 石器Ｃ２類
× 石器Ｄ類
⊙ ＦＬＤ類
◬ 石器Ｅ類
□ ＦＬＥ類
⊞ 石器Ｆ類

Ｊ－76号住

土器分布



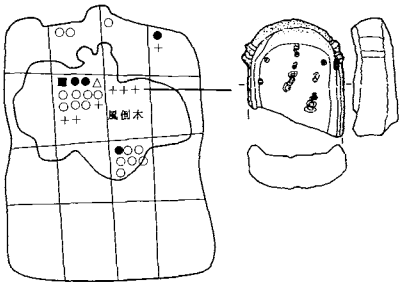
1 層



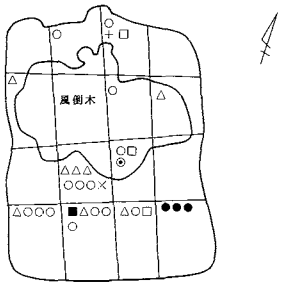
2 層

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯 a
△ 諸磯 b
◎ 諸磯 c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他
⊕ ミニチュア土器
○ 10g
○ 100g
○ 1,000g

石器分布



1 層



2 層

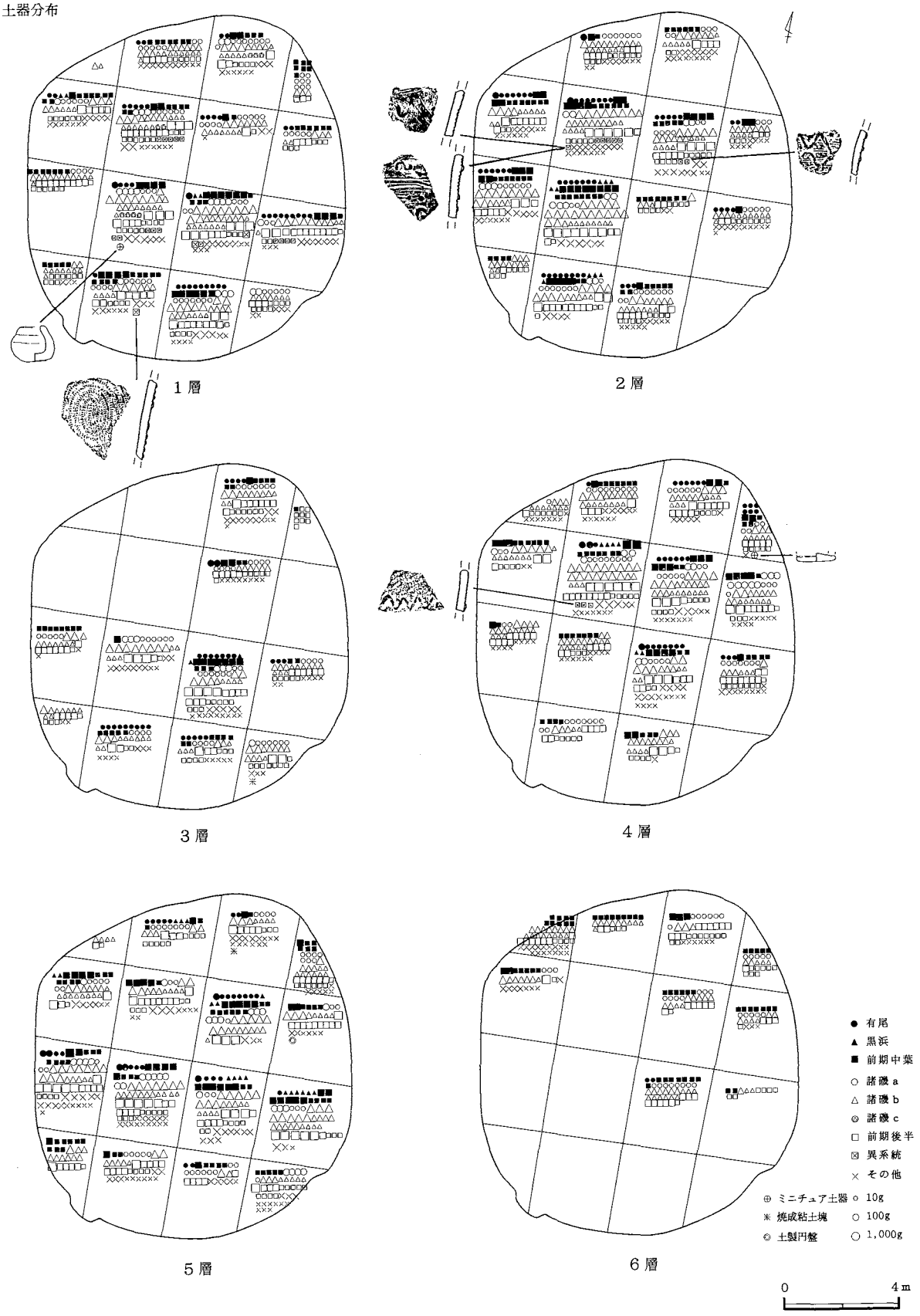
■ 石器Ａ類
● 石核Ａ類 ＦＬＡ類
△ 石器Ｂ類
○ 石核Ｂ類 ＦＬＢ類
＋ 石器Ｃ１類
□ 石器Ｃ２類
× 石器Ｄ類
⊙ ＦＬＤ類
◬ 石器Ｅ類
□ ＦＬＥ類
⊞ 石器Ｆ類

0　　4 m

第209図　Ｊ―75・76号住居址遺物分布図

J－78号住

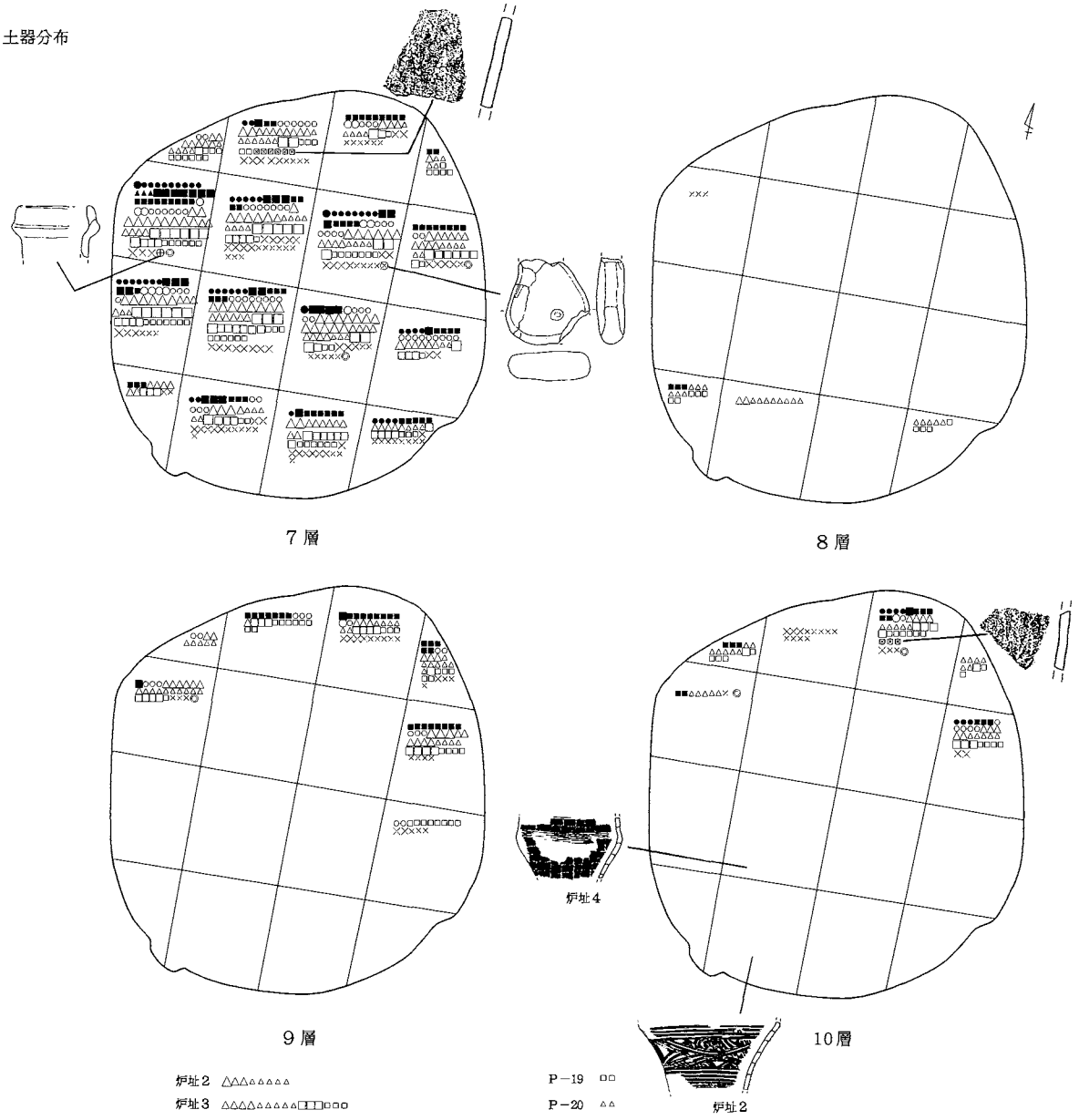
土器分布



第210図　J－78号住居址遺物分布図（1）

J－78号住

土器分布



炉址2
炉址3
炉址4
炉址11
D－1
D－2
D－3
D－4
D－5
P－1
P－5
P－7
P－9
P－11
P－13
P－14
P－15
P－16
P－19
P－20
P－21
P－23
P－27
P－28
P－29
P－31
P－32
P－34
P－36
P－37
P－38
P－39
P－42
P－43
P－48
P－51
P－52

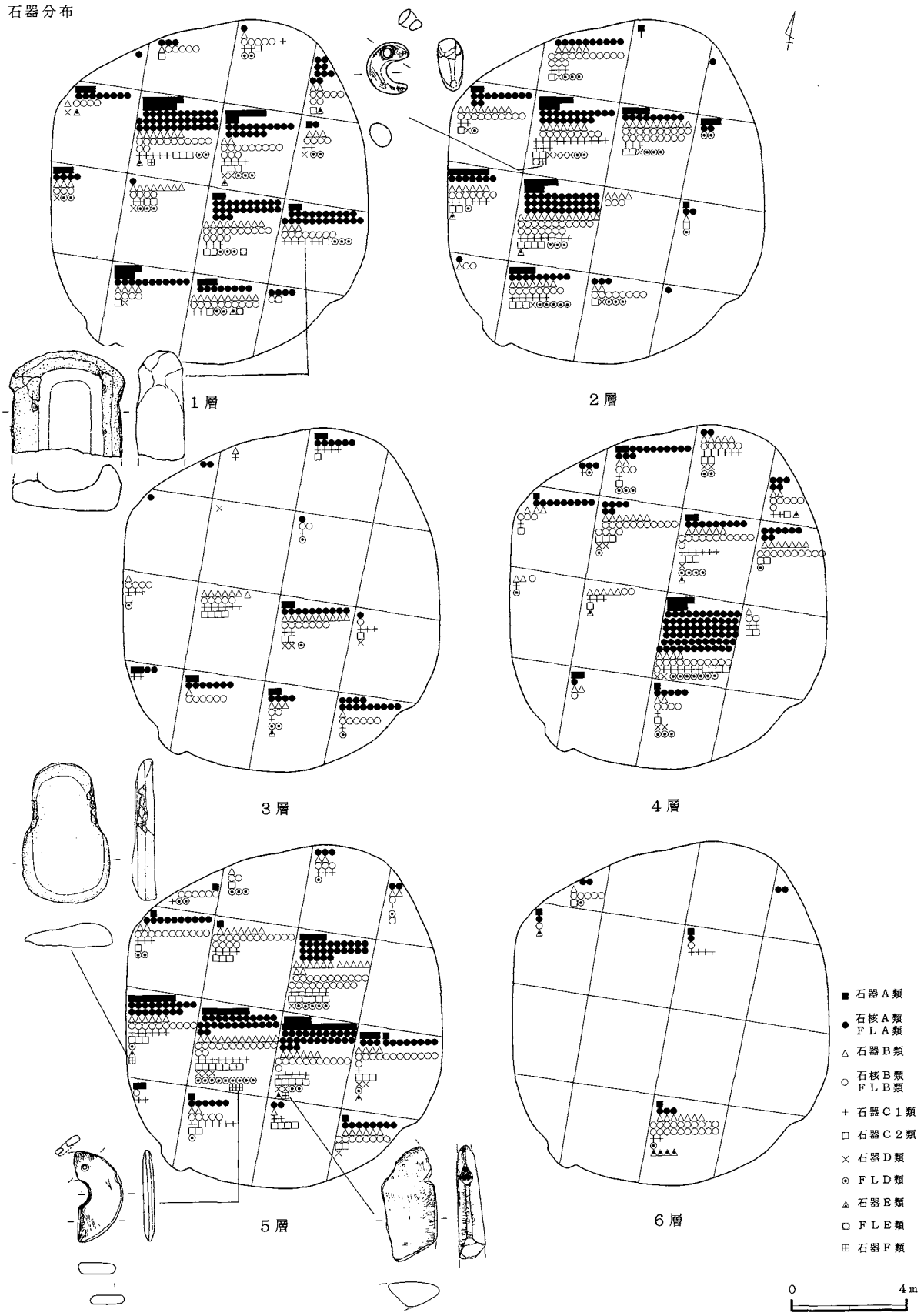
● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯a
△ 諸磯b
◎ 諸磯c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他
⊕ ミニチュア土器
⊗ 土偶
◎ 土製円盤
○ 10g
○ 100g
○ 1,000g

0　4m

第211図　J—78号住居址遺物分布図（2）

J－78号住

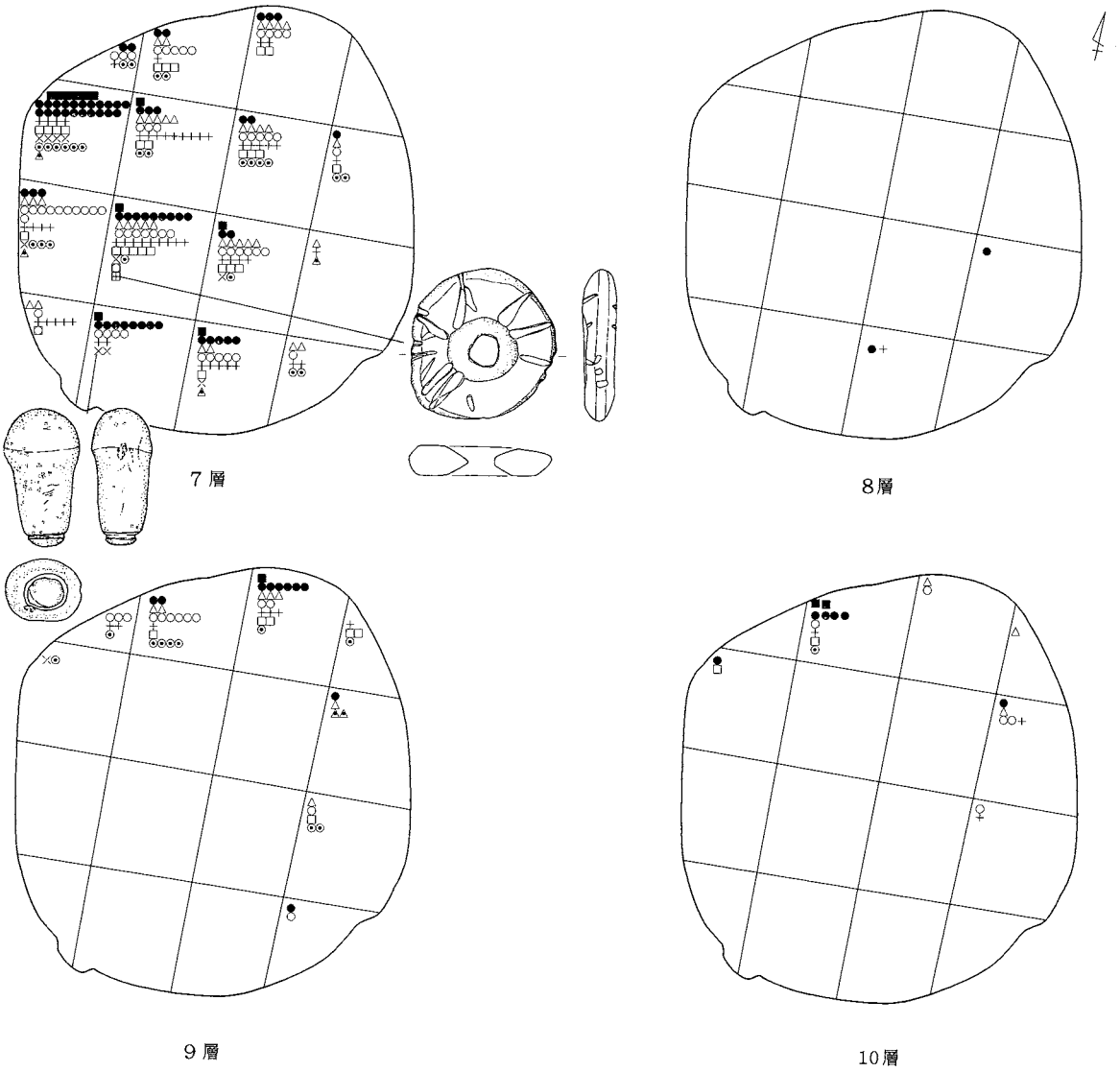
石器分布



第212図　J－78号住居址遺物分布図（3）

J－78号住

石器分布



炉址３ ●●●
炉址11 △+
Ｄ－１ ■●
Ｄ－２ +□
Ｐ－１ ●△○○
Ｐ－２ +
Ｐ－３ +++□
Ｐ－４ +
Ｐ－５ △++++
Ｐ－６ ++
Ｐ－８ ●
Ｐ－11 ■●
Ｐ－13 +
Ｐ－16 ●●△○
Ｐ－17 ●△○○▲
Ｐ－18 △△△+□□
Ｐ－20 ■●
Ｐ－21 ⊙
Ｐ－23 △△○+
Ｐ－25 ●●○+
Ｐ－30 ●
Ｐ－35 ○
Ｐ－38 △○
Ｐ－41 +
Ｐ－52 ●△△△○○○
Ｐ－53 +

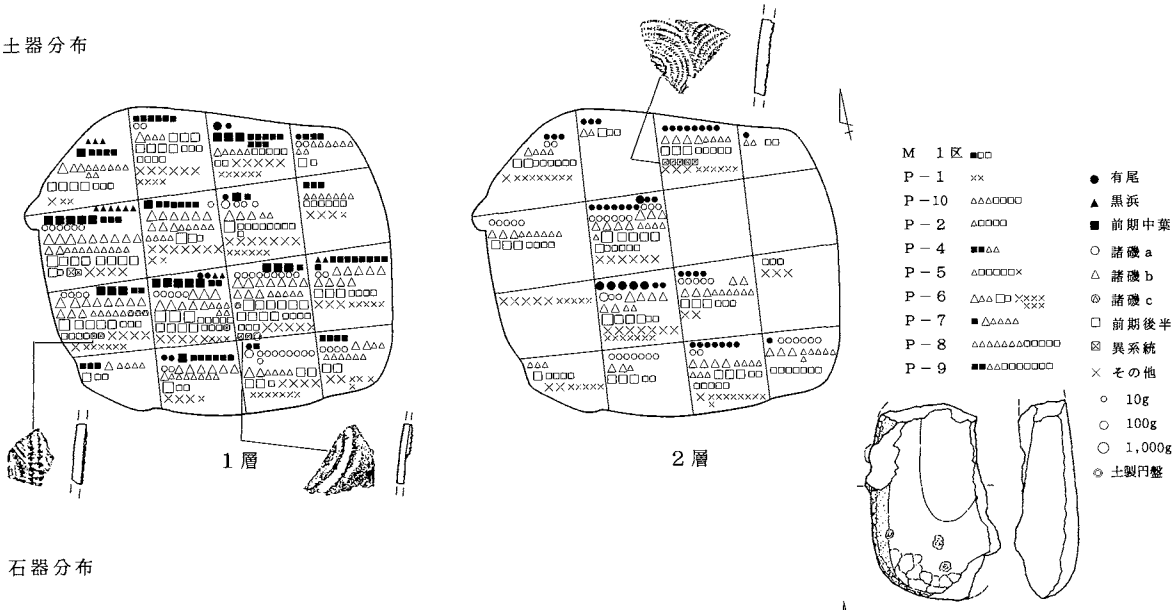
■ 石器Ａ類
● 石核Ａ類 ＦＬＡ類
△ 石器Ｂ類
○ 石核Ｂ類 ＦＬＢ類
+ 石器Ｃ１類
□ 石器Ｃ２類
× 石器Ｄ類
⊙ ＦＬＤ類
▲ 石器Ｅ類
□ ＦＬＥ類
⊞ 石器Ｆ類

0 4m

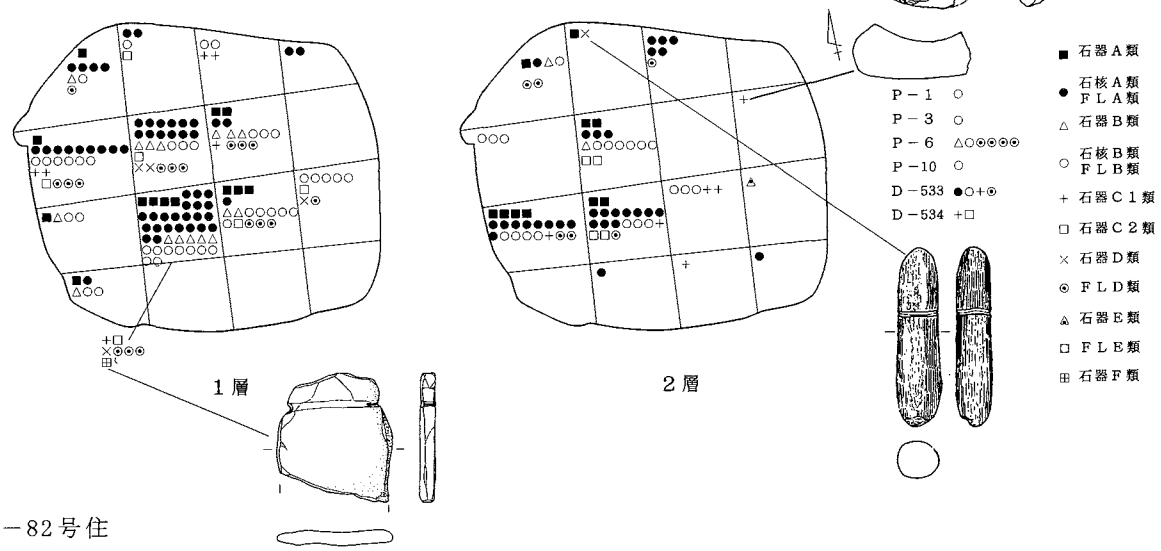
第213図　Ｊ－78号住居址遺物分布図（４）

J－79号住

土器分布



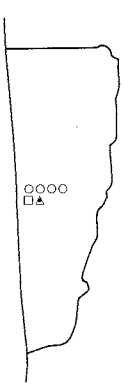
石器分布



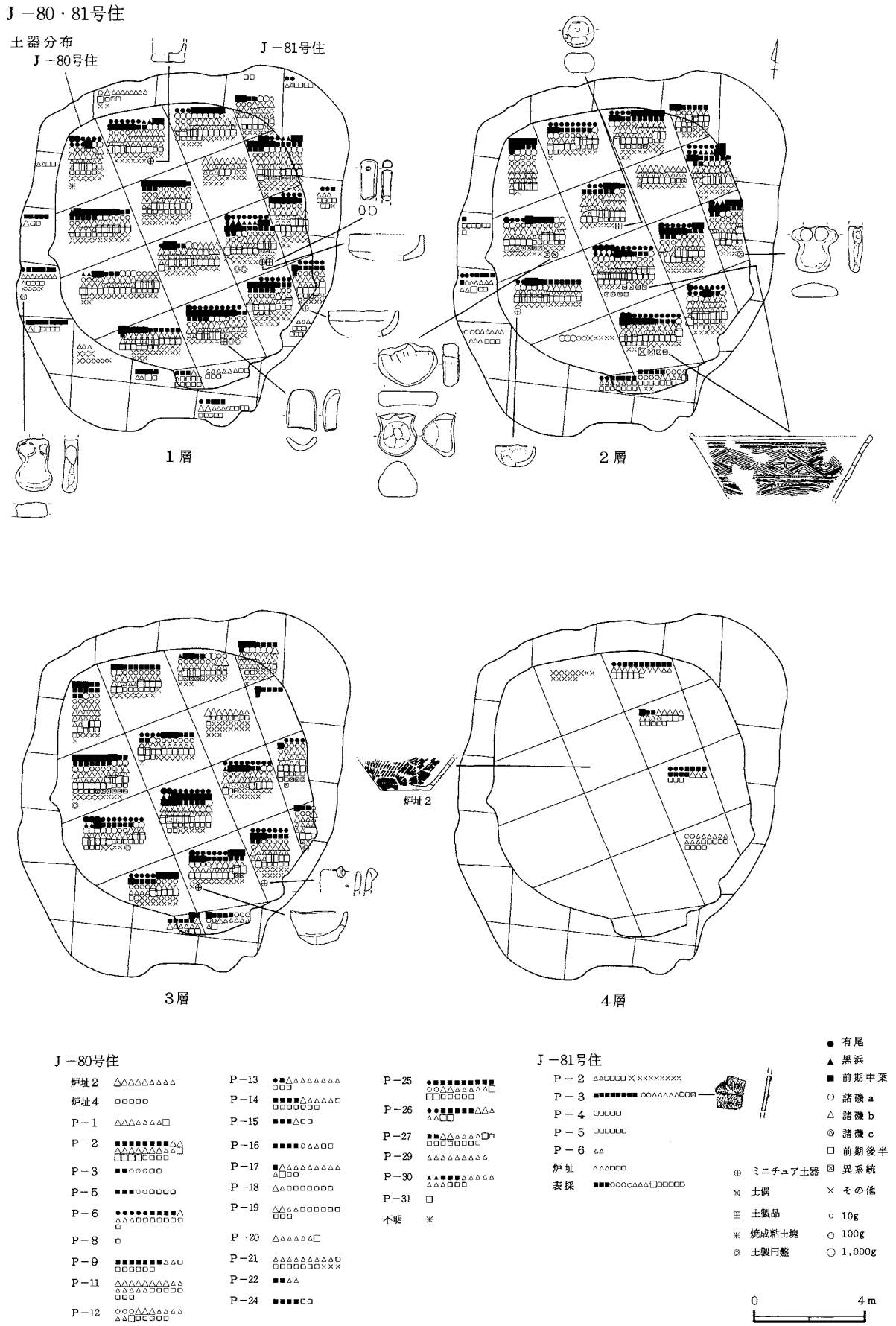
J－82号住

土器分布

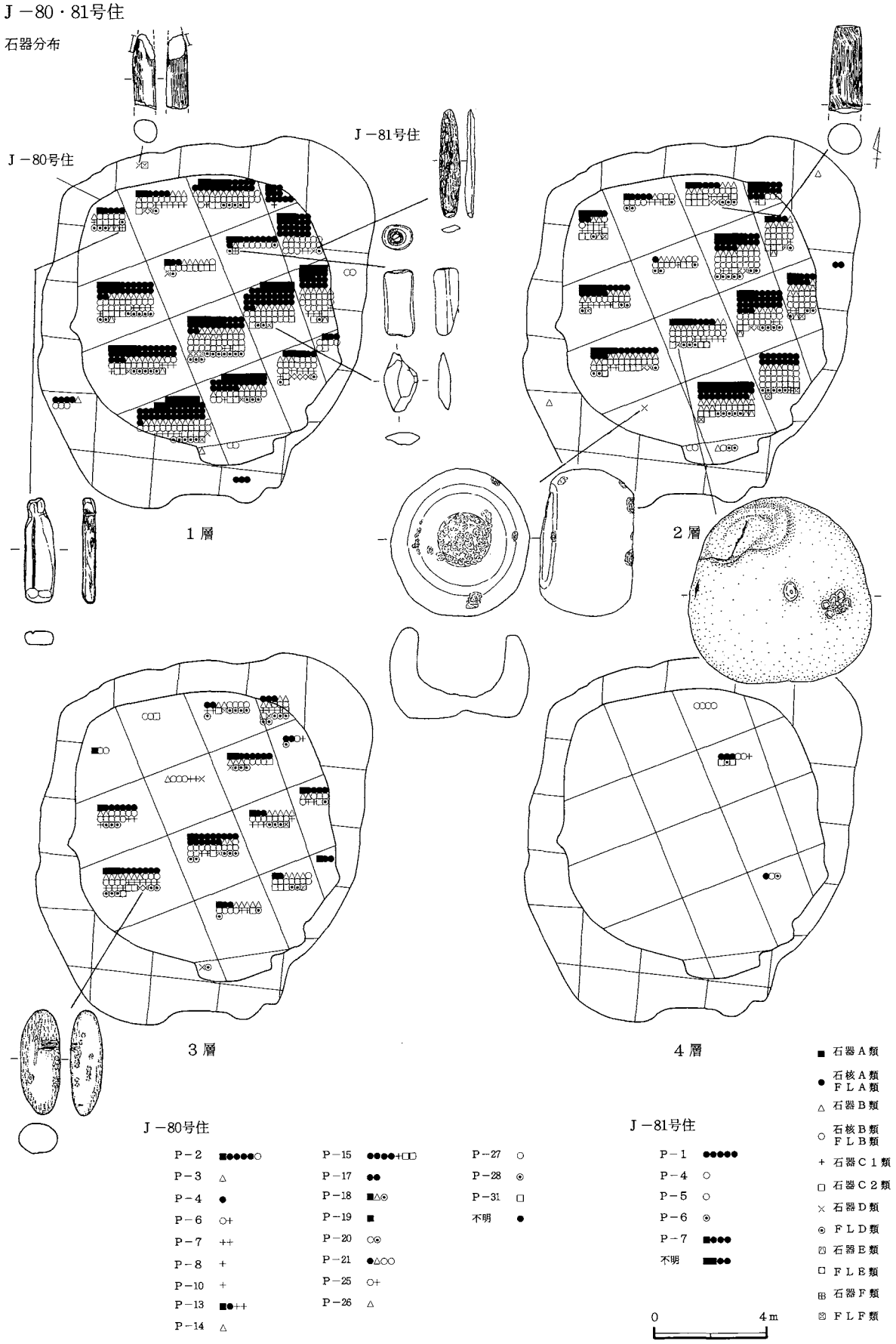
石器分布



第214図　J—79・82号住居址遺物分布図



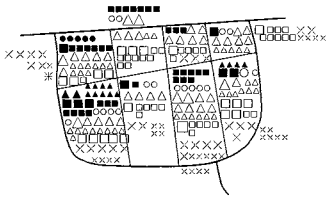
第215図　J－80・81号住居址遺物分布図（1）



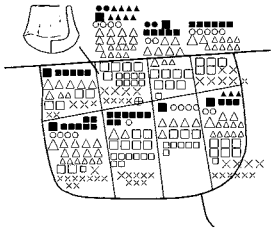
第216図　J—80・81号住居址遺物分布図（2）

Ｊ－83号住

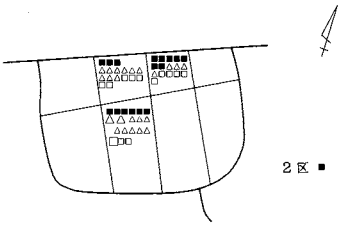
土器分布



１層

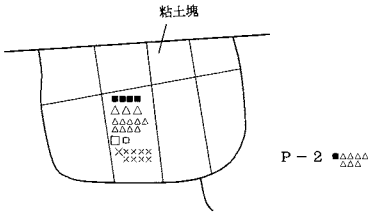


２層



２区 ■

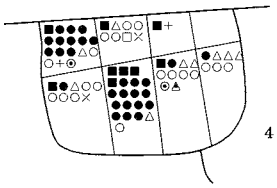
３層



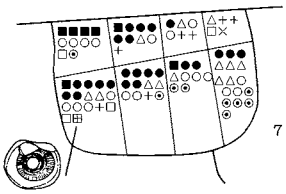
４層

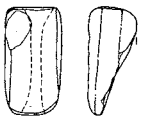
● 有尾　○ 諸磯ａ
▲ 黒浜　△ 諸磯ｂ
■ 前期中葉　◎ 諸磯ｃ
□ 前期後半　○ 10g
⊠ 異系統　○ 100g
× その他　○ 1,000g
⊕ ミニチュア土器
✳ 焼成粘土塊

石器分布

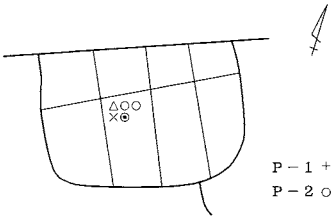


１層





２層

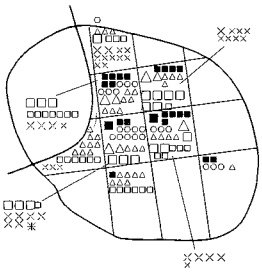


４層

■ 石器Ａ類
● 石核Ａ類 ＦＬＡ類
△ 石器Ｂ類
○ 石核Ｂ類 ＦＬＢ類
＋ 石器Ｃ１類
□ 石器Ｃ２類
× 石器Ｄ類
⊙ ＦＬＤ類
◬ 石器Ｅ類
□ ＦＬＥ類
⊞ 石器Ｆ類

Ｊ－84号住

土器分布

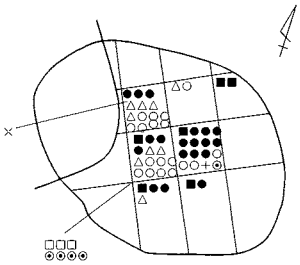


１層

P－1 △
P－2 △△
P－3 △△△△
炉址２ △△△□□□□□
１区一括 ■△△△△△△△△△△△△△△△△□□□□□□□□□□

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯ａ
△ 諸磯ｂ
◎ 諸磯ｃ
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他
○ 10g
○ 100g
○ 1,000g
✳ 焼成粘土塊

石器分布



１層

その他△++

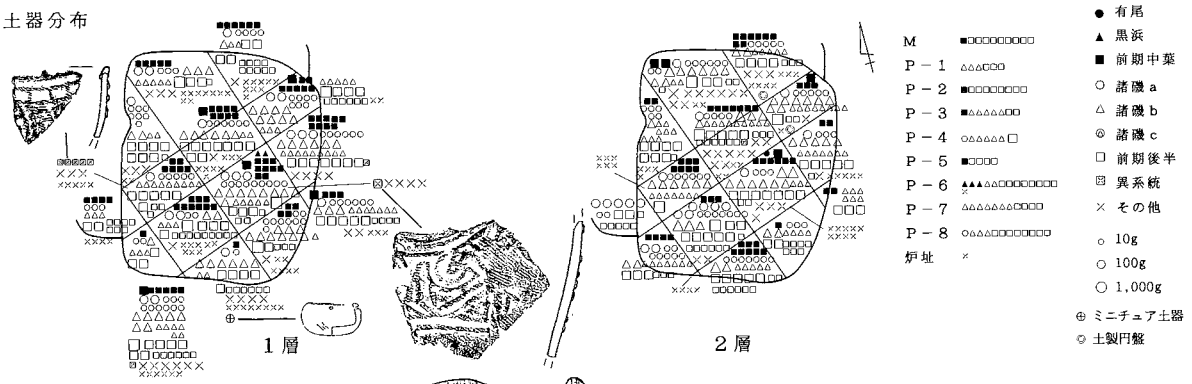
■ 石器Ａ類
● 石核Ａ類 ＦＬＡ類
△ 石器Ｂ類
○ 石核Ｂ類 ＦＬＢ類
＋ 石器Ｃ１類
□ 石器Ｃ２類
× 石器Ｄ類
⊙ ＦＬＤ類
◬ 石器Ｅ類
□ ＦＬＥ類
⊞ 石器Ｆ類

0　4 m

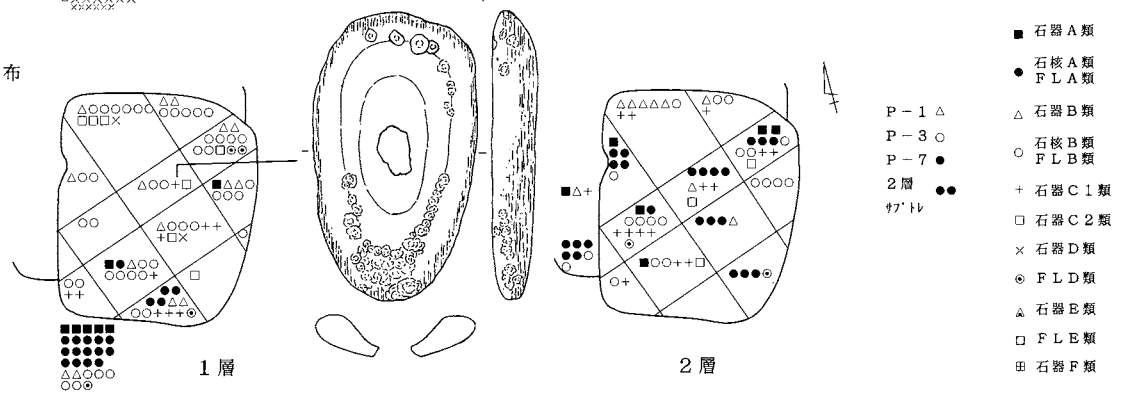
第217図　Ｊ―83・84号住居址遺物分布図

Ｊ－85号住

土器分布

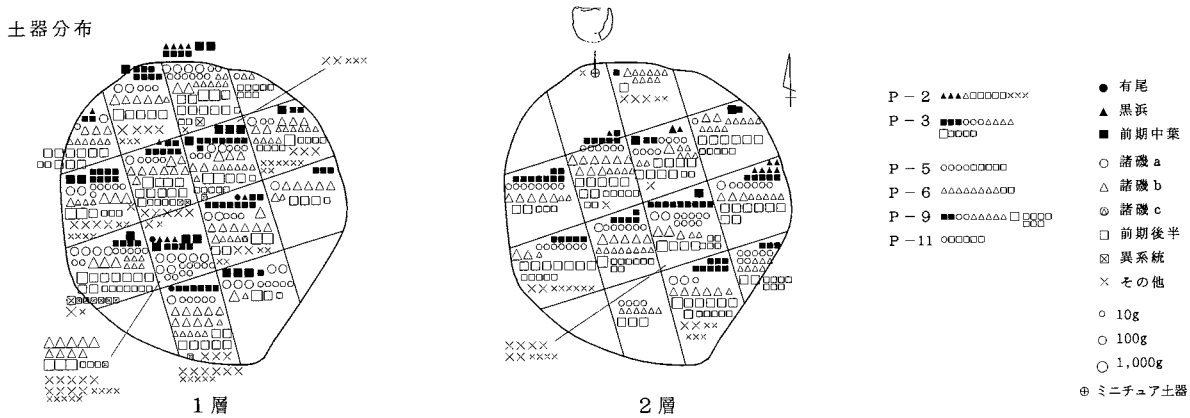


石器分布

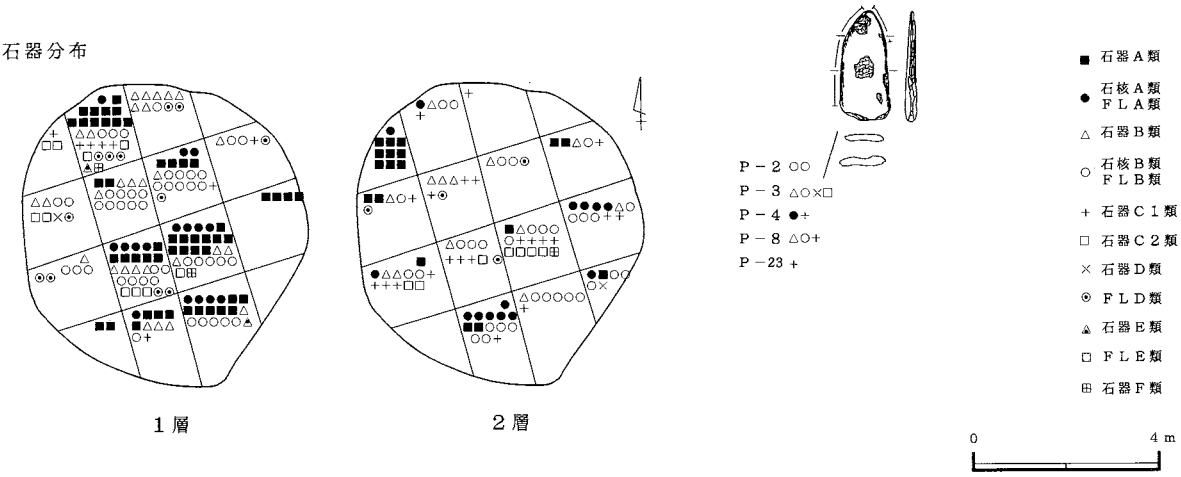


Ｊ－86号住

土器分布



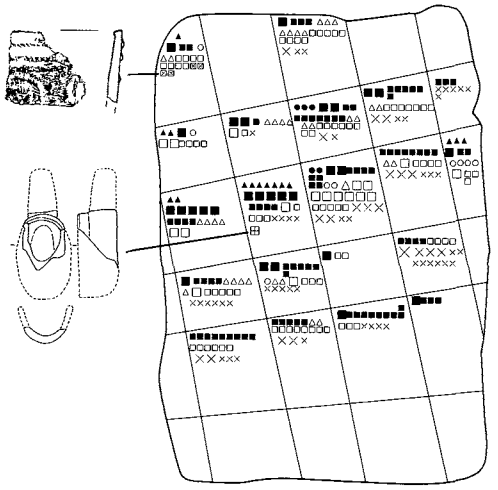
石器分布



第218図　Ｊ—85・86号住居址遺物分布図

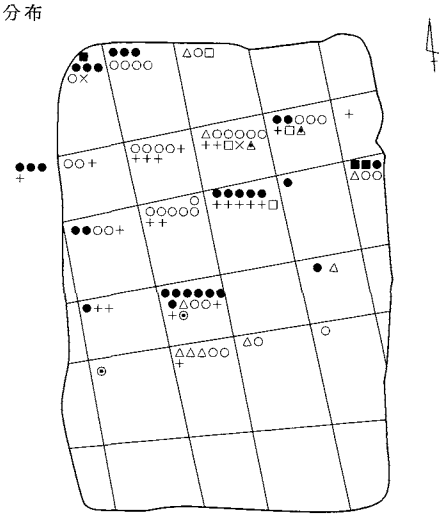
Ｊ－87号住

土器分布

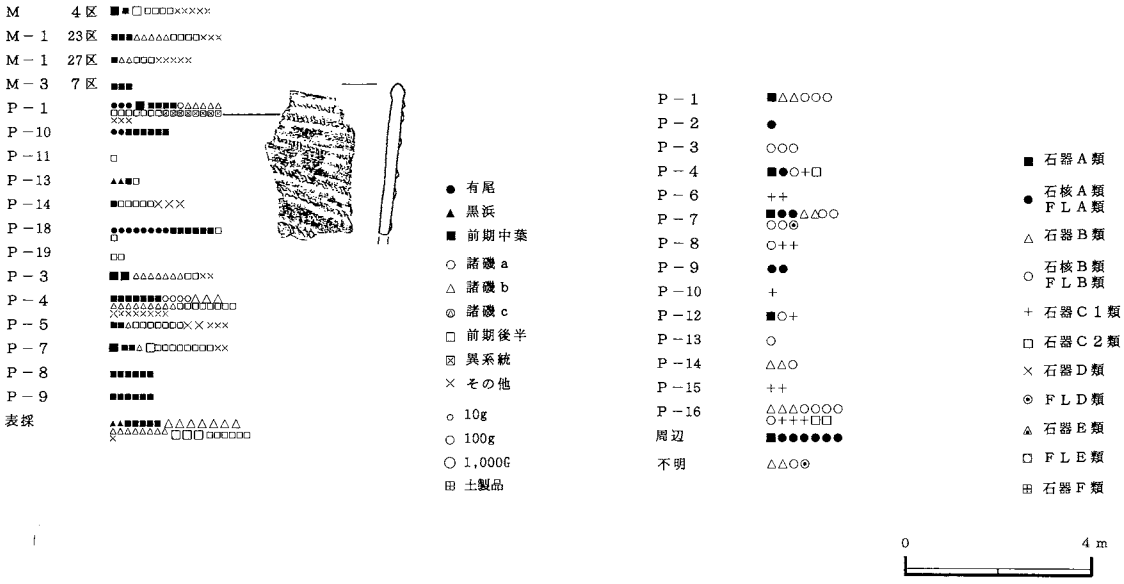


１層

石器分布



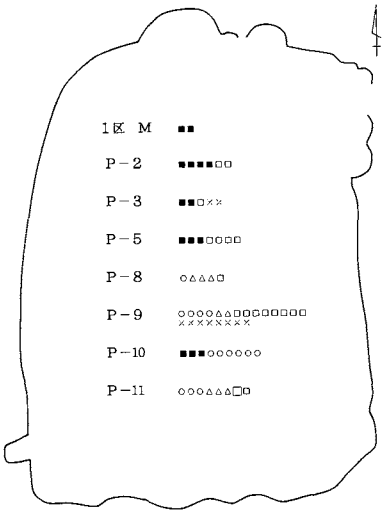
１層



第219図　Ｊ―87号住居址遺物分布図

Ｊ－89号住

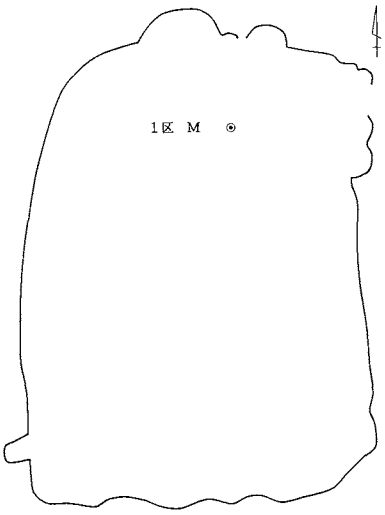
土器分布



1層

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯a
△ 諸磯b
◎ 諸磯c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他
○ 10g
○ 100g
○ 1,000g

石器分布

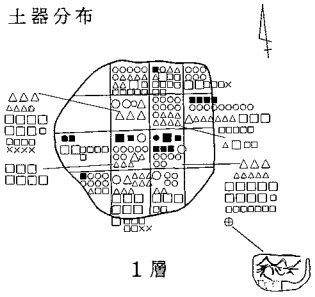


1層

■ 石器A類
● 石核A類 FLA類
△ 石器B類
○ 石核B類 FLB類
＋ 石器C1類
□ 石器C2類
× 石器D類
⊙ FLD類
▲ 石器E類
□ FLE類
⊞ 石器F類

Ｊ－91号住

土器分布



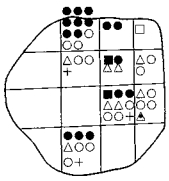
1層

P－1 □

○ 10g
○ 100g
○ 1,000g

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯a
△ 諸磯b
◎ 諸磯c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他
⊕ ミニチュア土器

石器分布



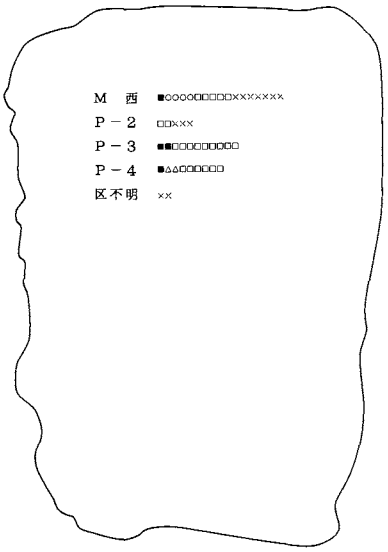
1層

P－2 ●
P－3 ■●●●
P－4 ＋
P－6 ＋＋

■ 石器A類
● 石核A類 FLA類
△ 石器B類
○ 石核B類 FLB類
＋ 石器C1類
□ 石器C2類
× 石器D類
⊙ FLD類
▲ 石器E類
□ FLE類
⊞ 石器F類

Ｊ－92号住

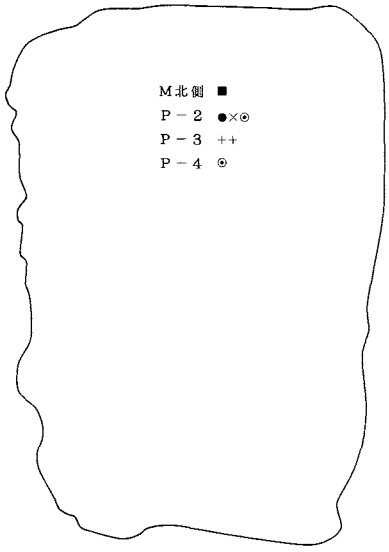
土器分布



1層

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯a
△ 諸磯b
◎ 諸磯c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他
○ 10g
○ 100g
○ 1,000g

石器分布

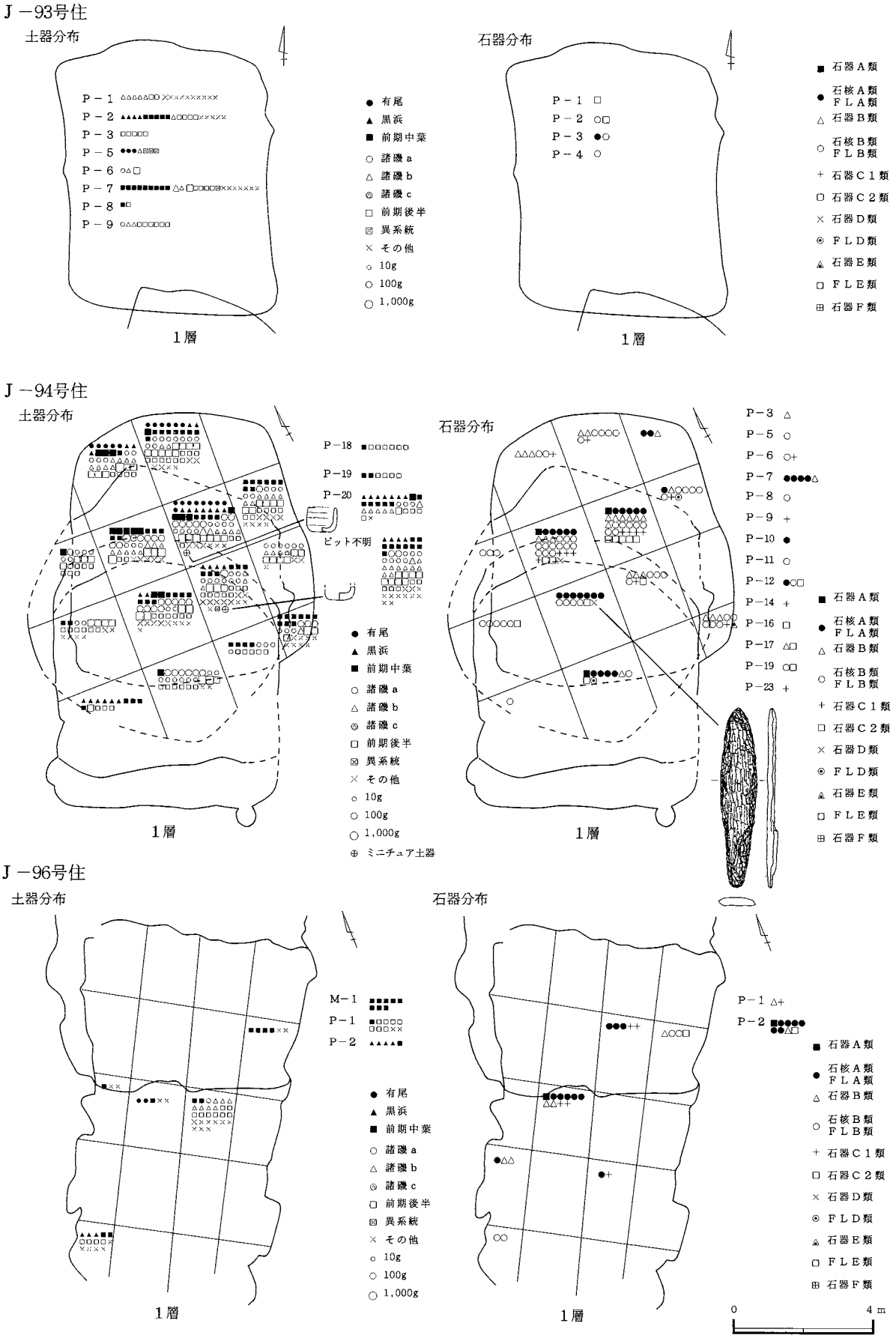


1層

■ 石器A類
● 石核A類 FLA類
△ 石器B類
○ 石核B類 FLB類
＋ 石器C1類
□ 石器C2類
× 石器D類
⊙ FLD類
▲ 石器E類
□ FLE類
⊞ 石器F類

0 4 m

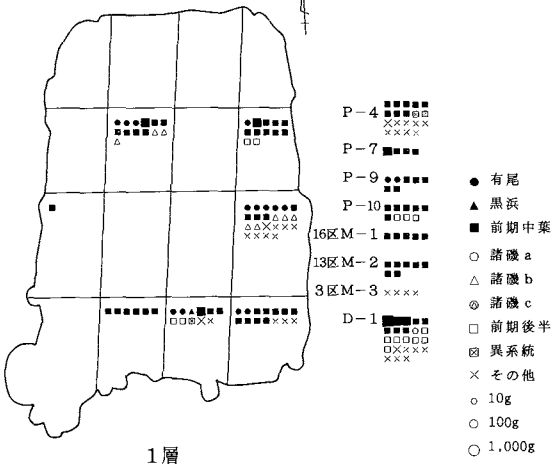
第220図　Ｊ－89・91・92号住居址遺物分布図



第221図　J—93・94・96号住居址遺物分布図

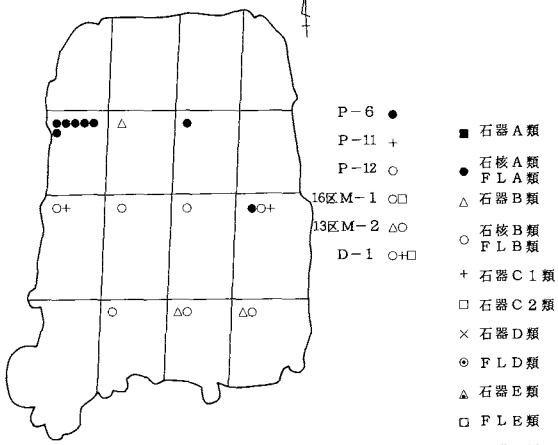
Ｊ－98号住

土器分布



1層

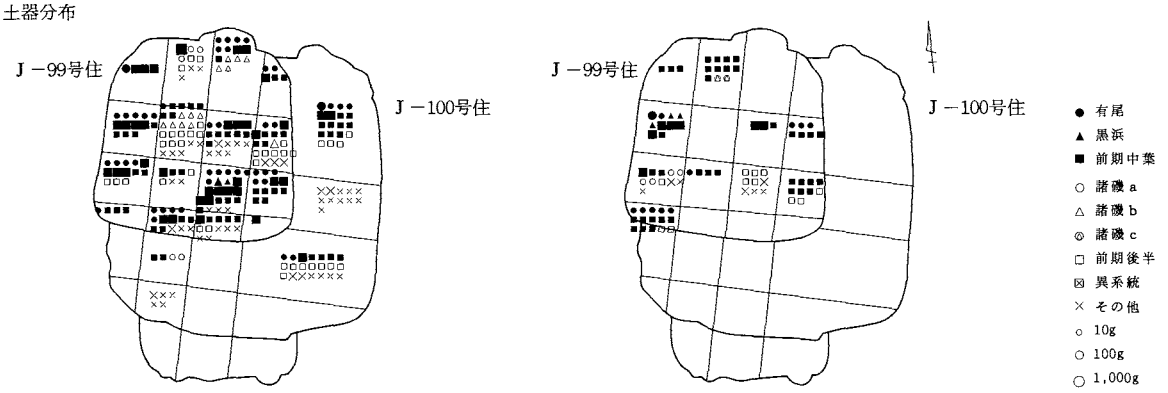
石器分布



1層

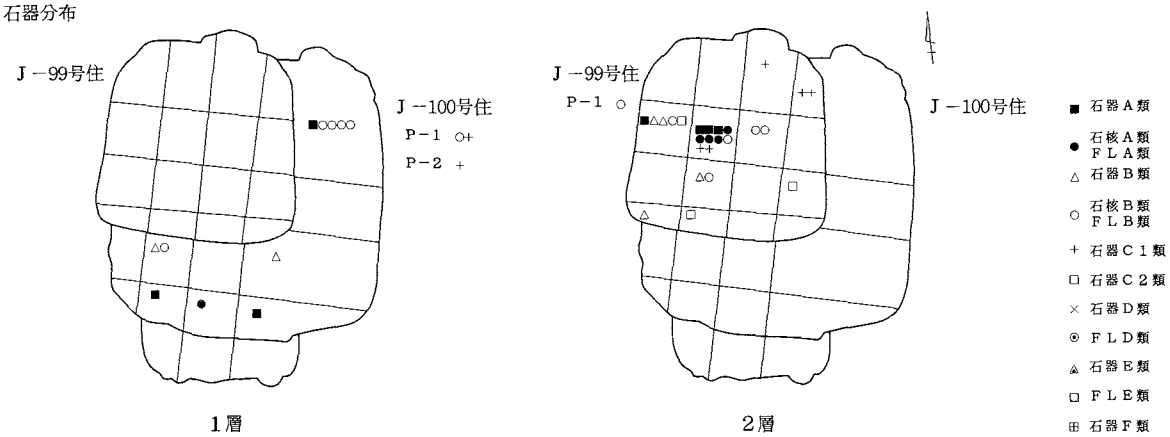
Ｊ－99・100号住

土器分布



1層　　2層

石器分布

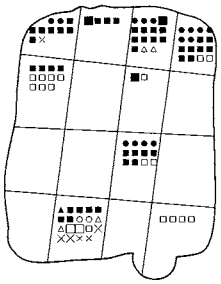


1層　　2層

第222図　Ｊ—98・99・100号住居址遺物分布図

J－101号住

土器分布

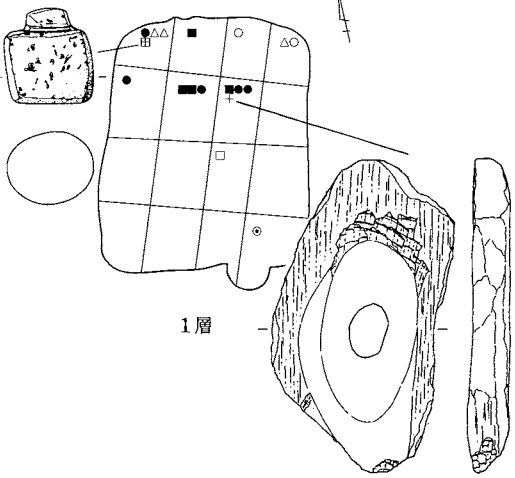


1層

炉址2

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯a
△ 諸磯b
◎ 諸磯c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他
∘ 10g
○ 100g
◯ 1,000g

石器分布

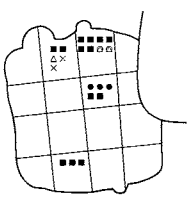


1層

■ 石器A類
● 石核A類 FLA類
△ 石器B類
○ 石核B類 FLB類
＋ 石器C1類
□ 石器C2類
× 石器D類
⊙ FLD類
◬ 石器E類
▢ FLE類
⊞ 石器F類

J－102号住

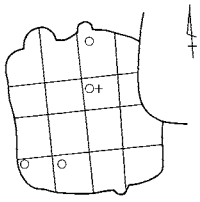
土器分布



1層

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯a
△ 諸磯b
◎ 諸磯c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他
∘ 10g
○ 100g
◯ 1,000g

石器分布

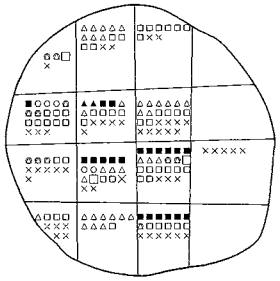


1層

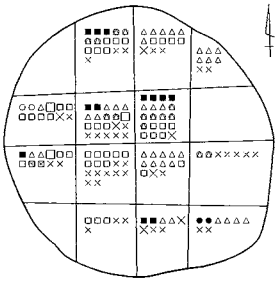
■ 石器A類
● 石核A類 FLA類
△ 石器B類
○ 石核B類 FLB類
＋ 石器C1類
□ 石器C2類
× 石器D類
⊙ FLD類
◬ 石器E類
▢ FLE類
⊞ 石器F類

J－103号住

土器分布



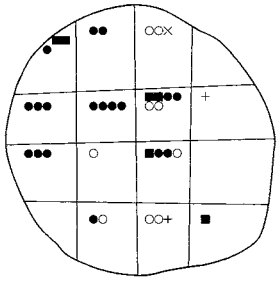
1層



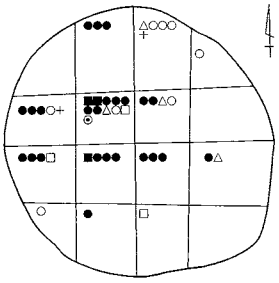
2層

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯a
△ 諸磯b
◎ 諸磯c
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他
∘ 10g
○ 100g
◯ 1,000g

石器分布



1層



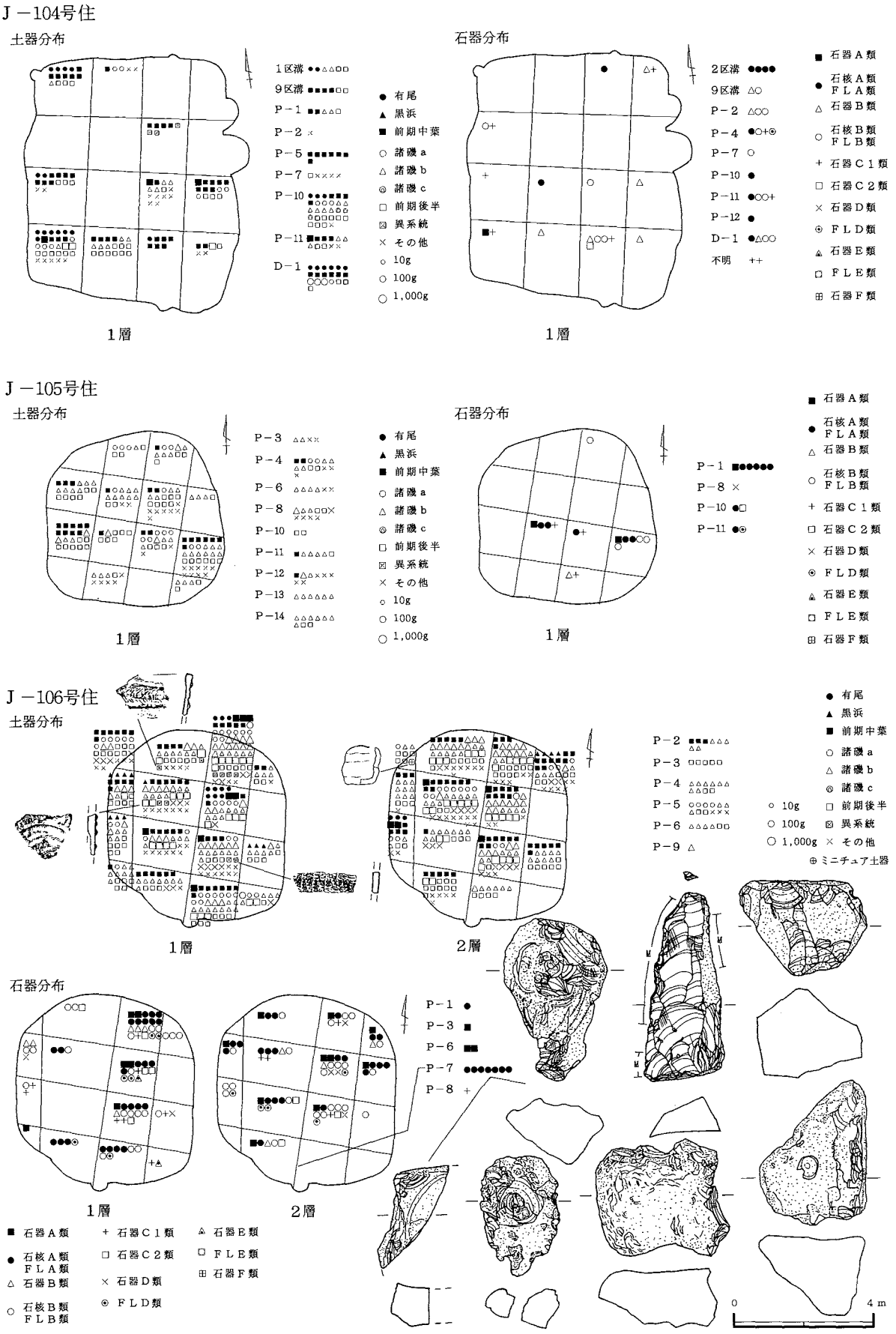
2層

P－2 ●

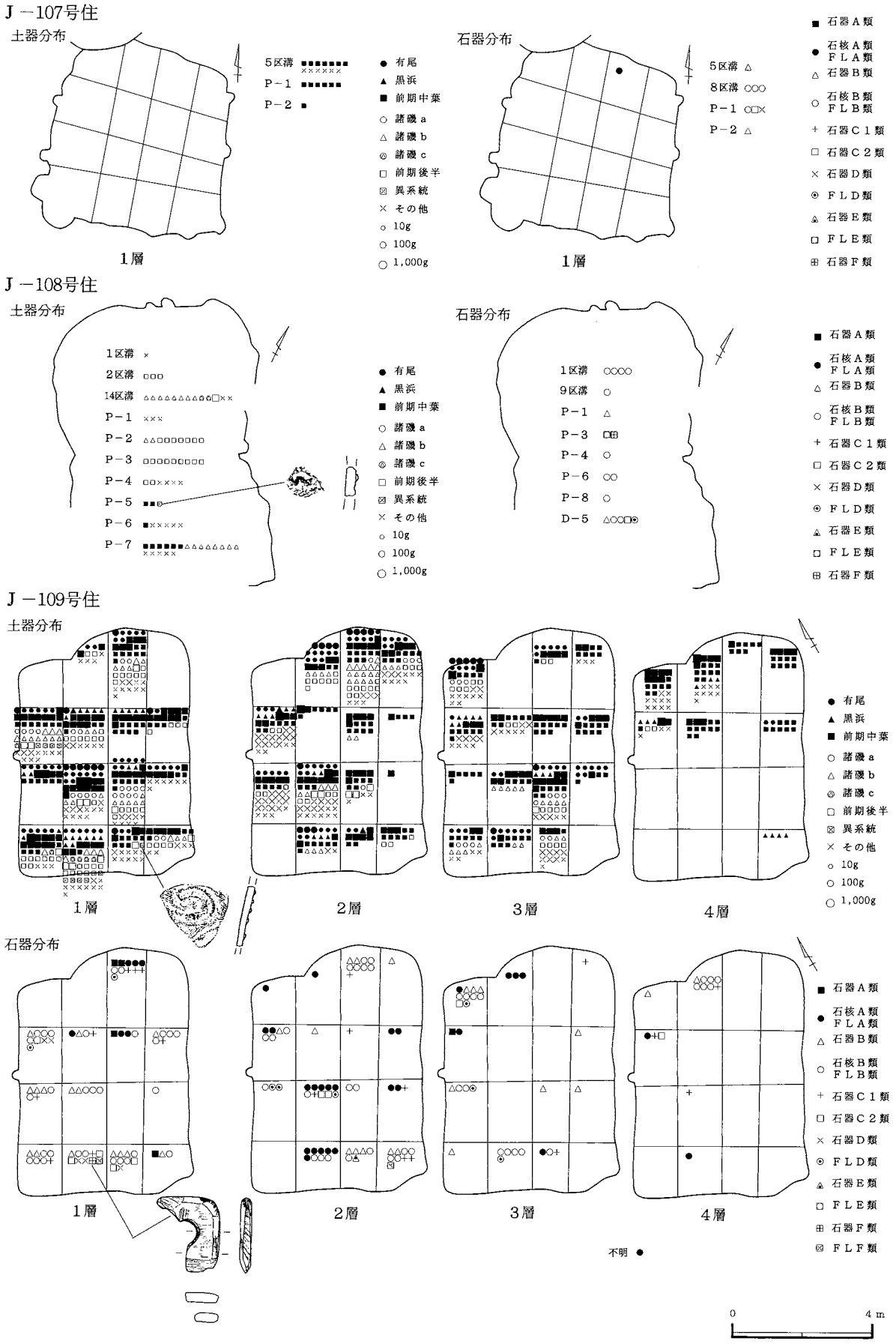
■ 石器A類
● 石核A類 FLA類
△ 石器B類
○ 石核B類 FLB類
＋ 石器C1類
□ 石器C2類
× 石器D類
⊙ FLD類
◬ 石器E類
▢ FLE類
⊞ 石器F類

0　4 m

第223図　J－101・102・103号住居址遺物分布図



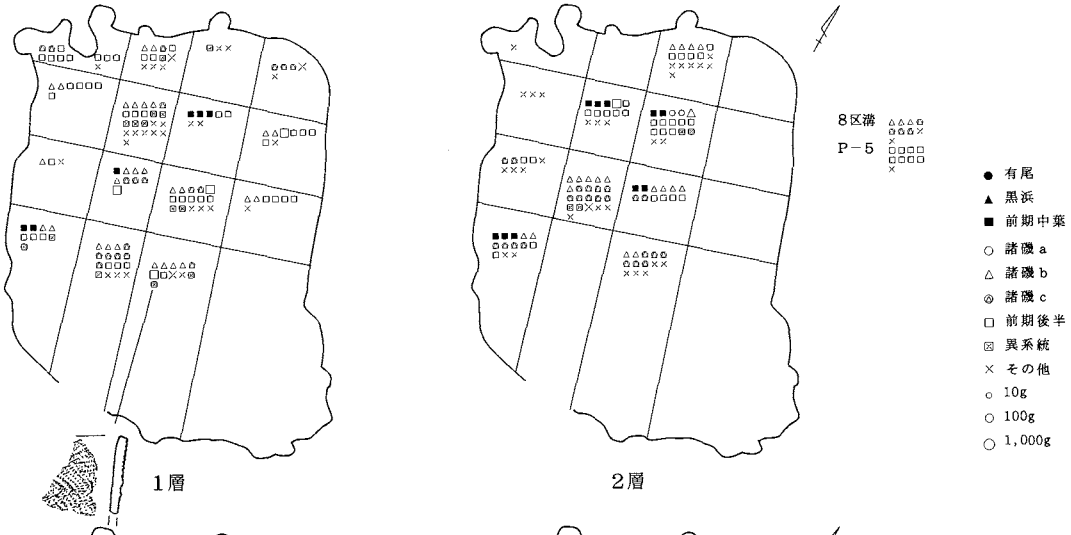
第224図　J－104・105・106号住居址遺物分布図



第225図　J－107・108・109号住居址遺物分布図

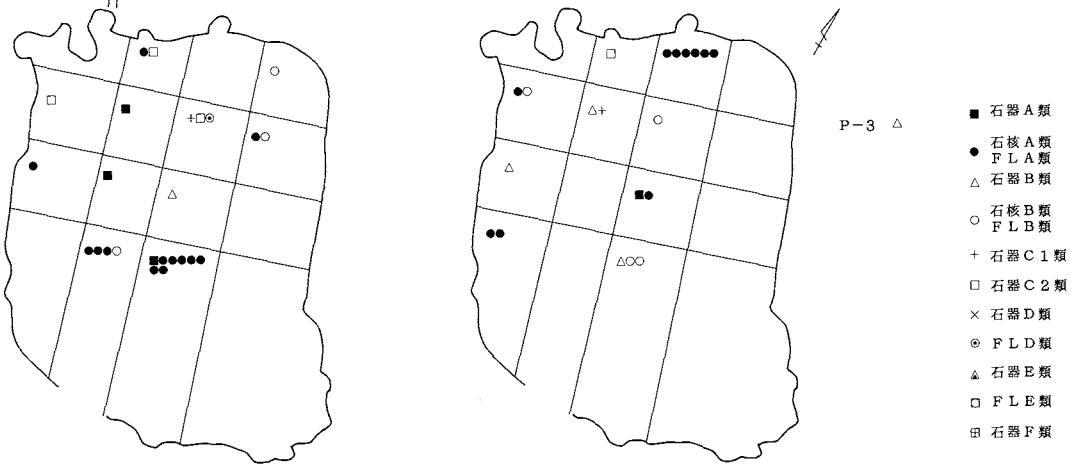
J－110号住

土器分布



1層　　2層

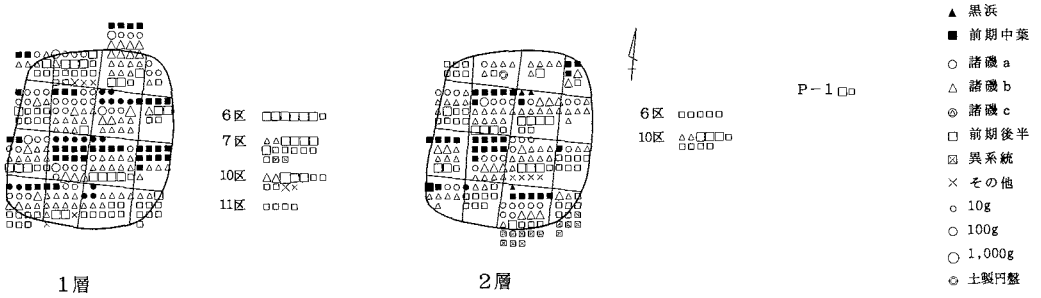
石器分布



1層　　2層

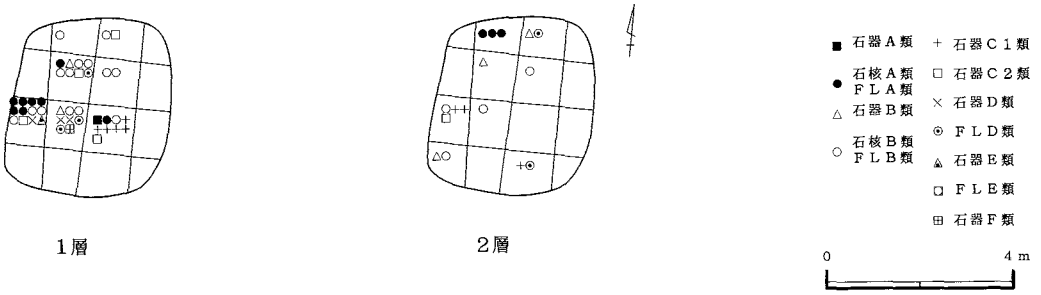
J－115号住

土器分布



1層　　2層

石器分布

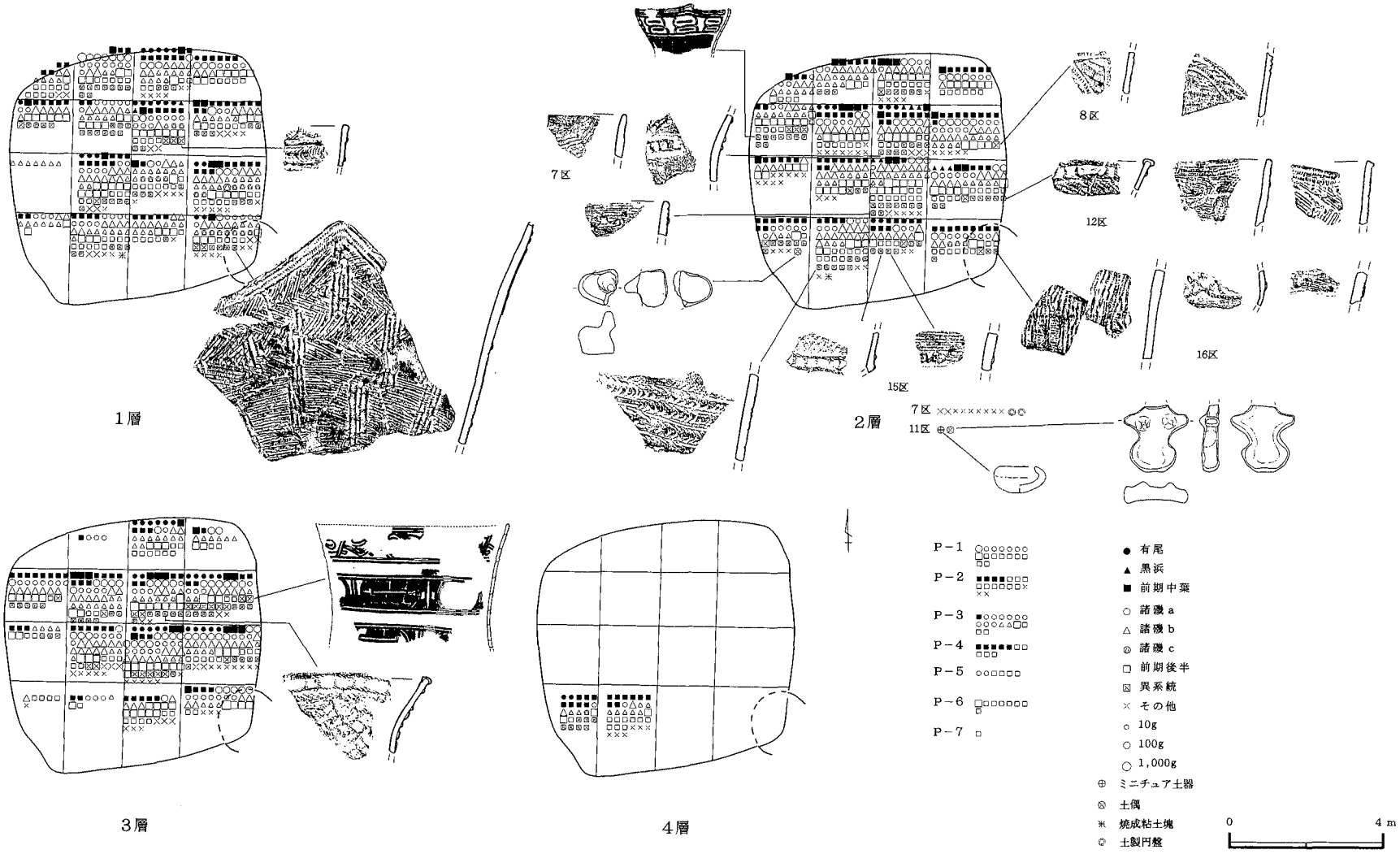


1層　　2層

第226図　J－110・115号住居址遺物分布図

Ｊ－111号住

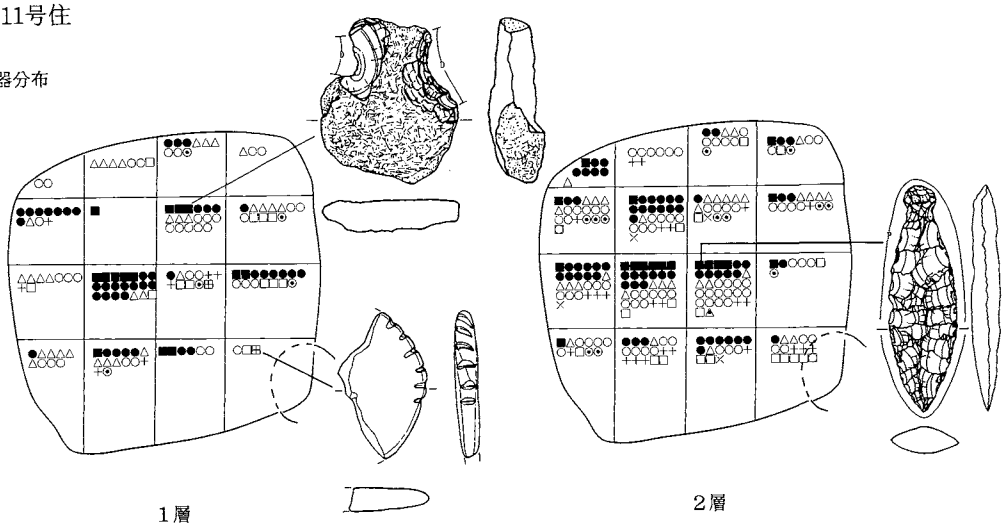
土器分布



第227図　Ｊ－111号住居址遺物分布図

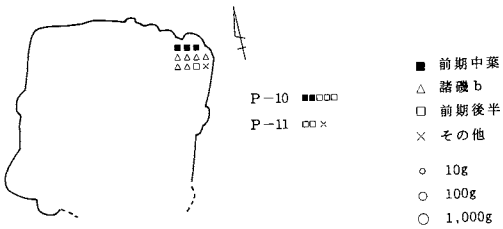
Ｊ－111号住

石器分布

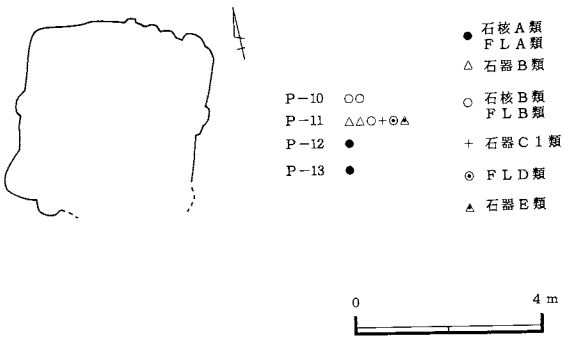


Ｊ－125号住

土器分布



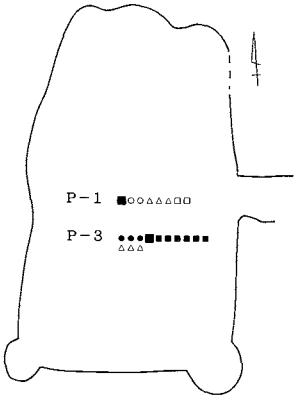
石器分布



第228図　Ｊ—111・125号住居址遺物分布図

Ｊ－112号住

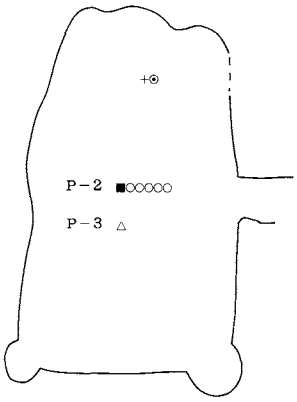
土器分布



1層

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯ａ
△ 諸磯ｂ
◎ 諸磯ｃ
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他
○ 10g
○ 100g
○ 1,000g

石器分布

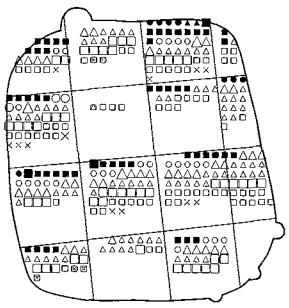


1層

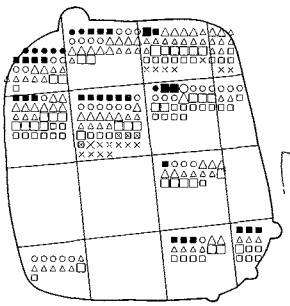
■ 石器Ａ類
● 石核Ａ類 ＦＬＡ類
△ 石器Ｂ類
○ 石核Ｂ類 ＦＬＢ類
＋ 石器Ｃ１類
□ 石器Ｃ２類
× 石器Ｄ類
⊙ ＦＬＤ類
▲ 石器Ｅ類
□ ＦＬＥ類
⊞ 石器Ｆ類

Ｊ－116号住

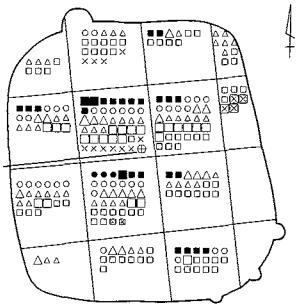
土器分布



1層



2層



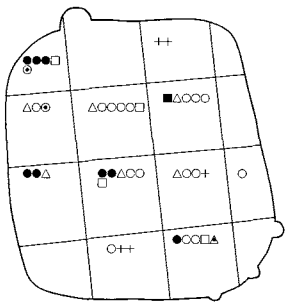
3層

P－1

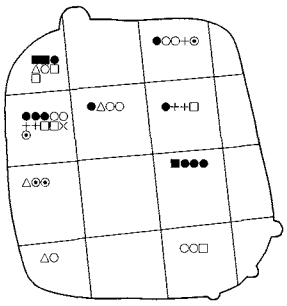
表採

● 有尾
▲ 黒浜
■ 前期中葉
○ 諸磯ａ
△ 諸磯ｂ
◎ 諸磯ｃ
□ 前期後半
⊠ 異系統
× その他
○ 10g
○ 100g
○ 1,000g
⊕ ミニチュア土器

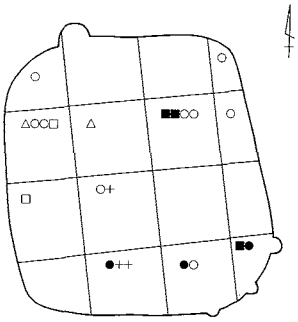
石器分布



1層



2層



3層

D－1

P－1

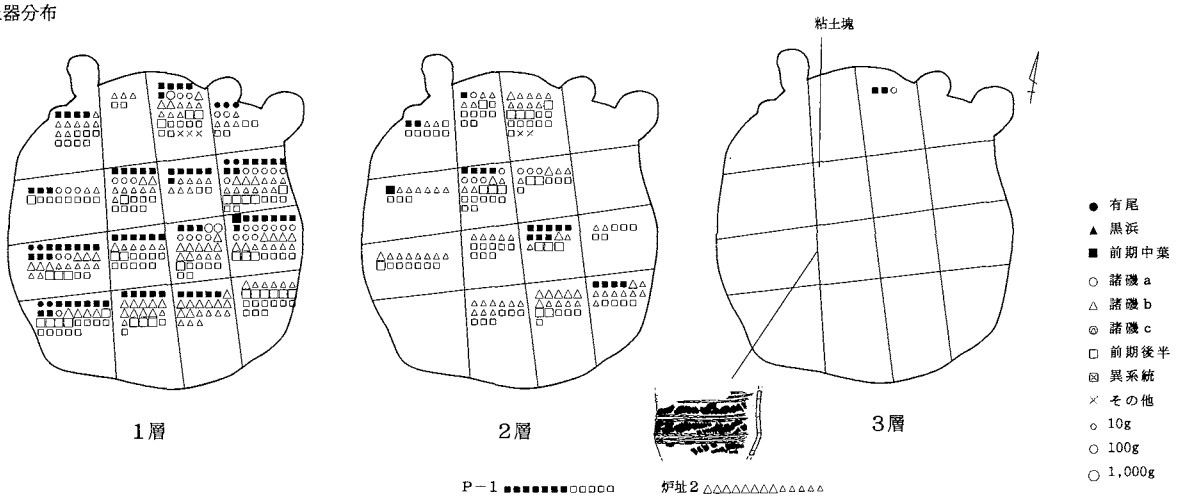
■ 石器Ａ類
● 石核Ａ類 ＦＬＡ類
△ 石器Ｂ類
○ 石核Ｂ類 ＦＬＢ類
＋ 石器Ｃ１類
□ 石器Ｃ２類
× 石器Ｄ類
⊙ ＦＬＤ類
▲ 石器Ｅ類
□ ＦＬＥ類
⊞ 石器Ｆ類

0　4 m

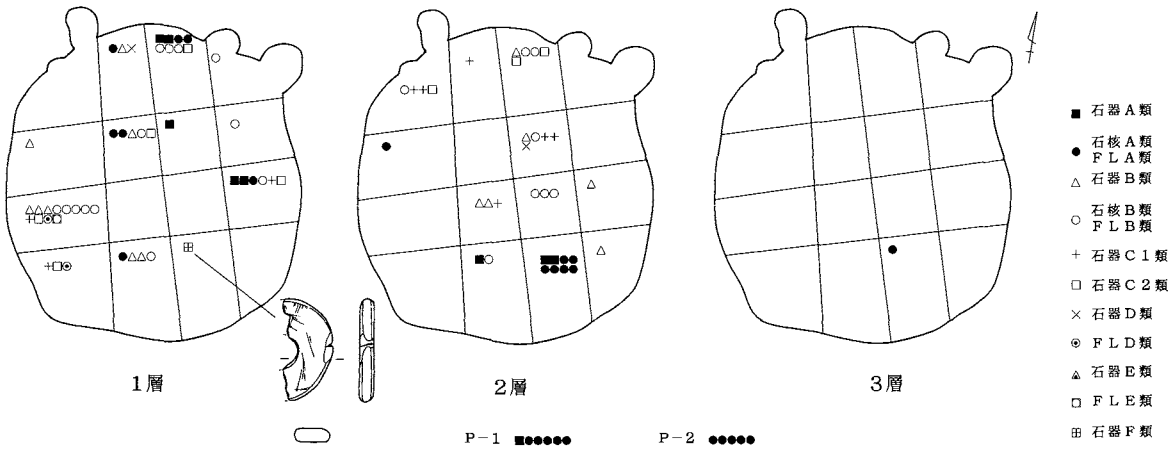
第229図　Ｊ－112・116号住居址遺物分布図

Ｊ－113号住

土器分布

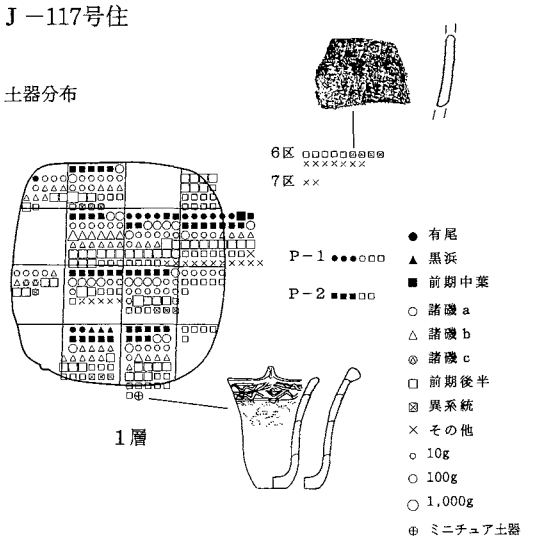


石器分布

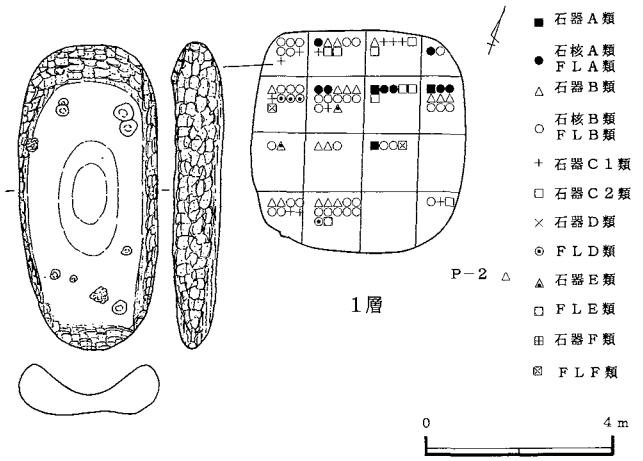


Ｊ－117号住

土器分布



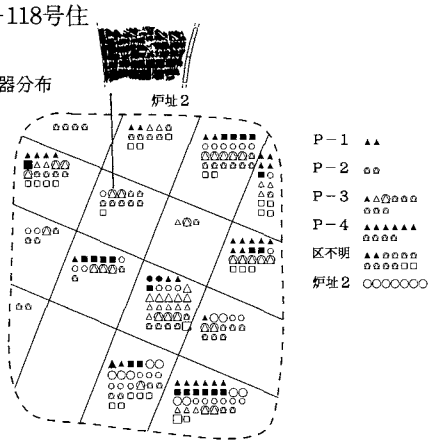
石器分布



第230図　Ｊ－113・117号住居址遺物分布図

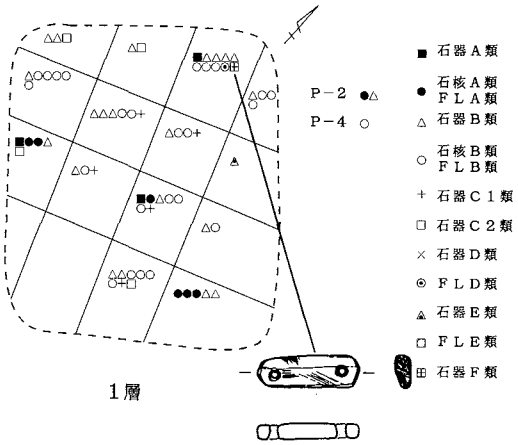
J－118号住

土器分布



1層

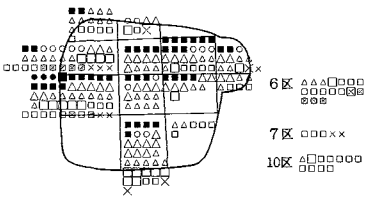
石器分布



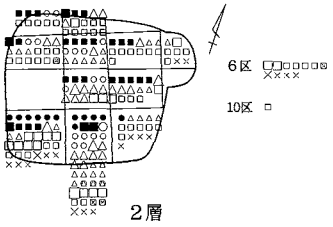
1層

J－119号住

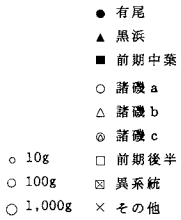
土器分布



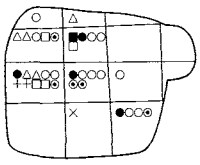
1層



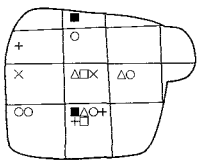
2層



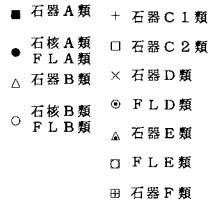
石器分布



1層

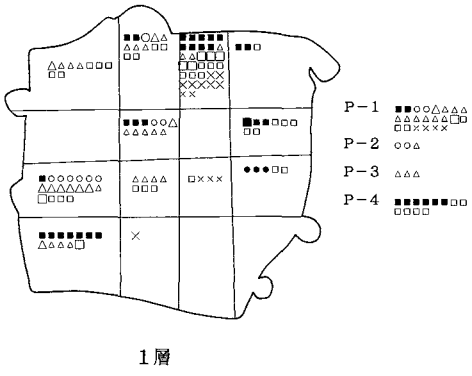


2層



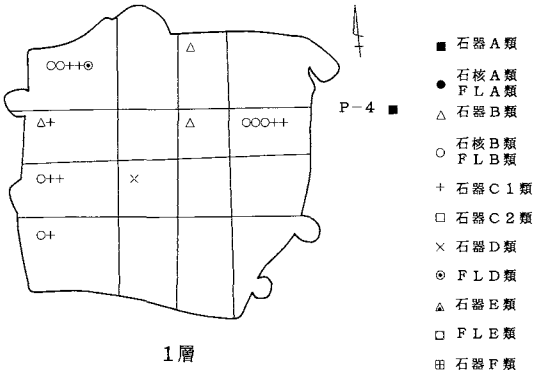
J－120号住

土器分布



1層

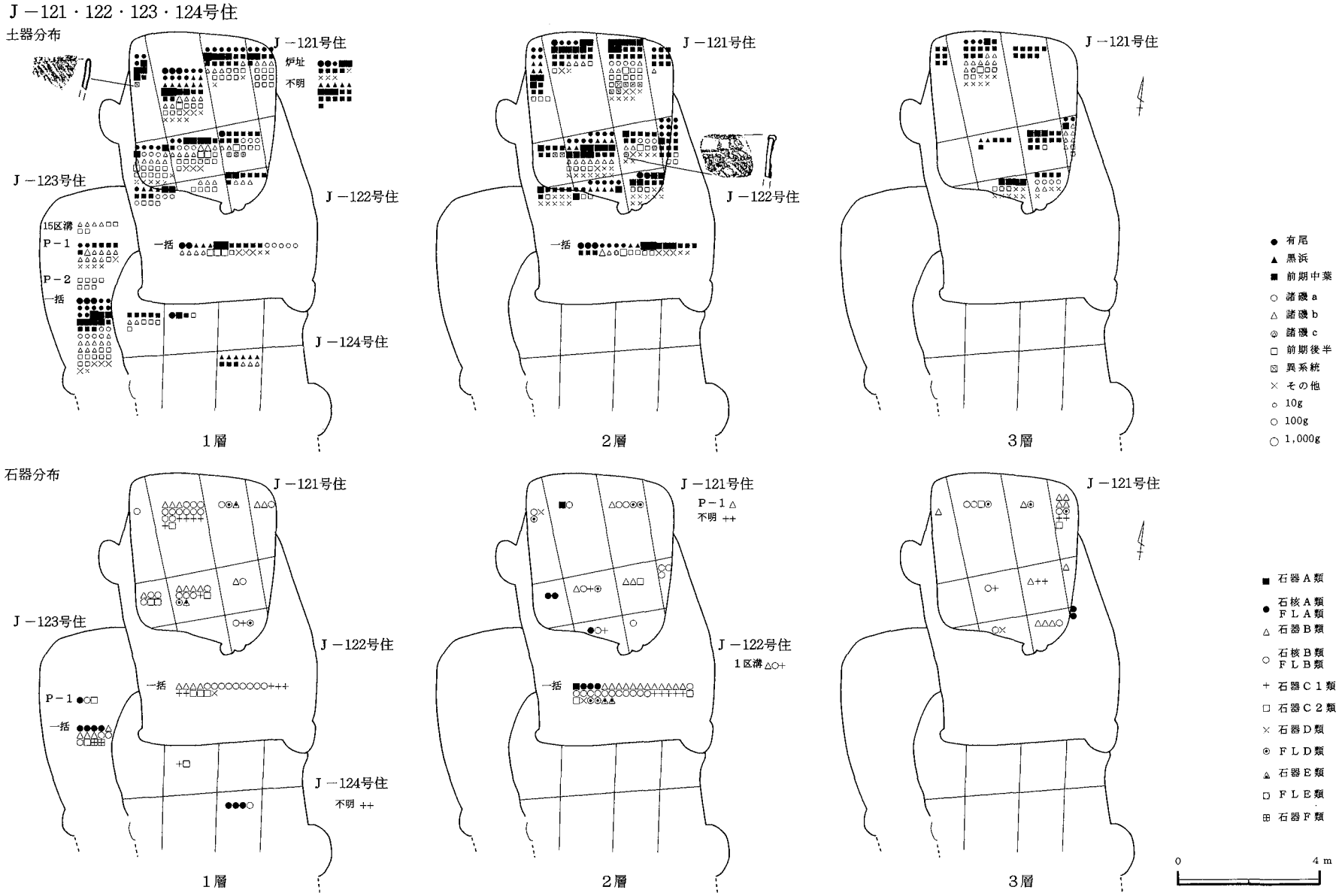
石器分布



1層

0　4 m

第231図　J－118・119・120号住居址遺物分布図



第232図　J—121・122・123・124号住居址遺物分布図

b　掘立柱建物址の遺物出土状態

竪穴住居址のように覆土が形成されない掘立柱建物址に伴う遺物を抽出することは難しい。掘立柱建物址に伴う可能性のある遺物は、①遺構の上部の包含層中の遺物と、②柱穴中に混入した遺物が考えられる。

①のケースについては、遺物をブロックとして把握して、分布状態と組成から分析することになる。

［掘立柱建物址出土の土器の型式比率］

最初に、②について諸磯ｂ式土器の型式比率をもとに、時期を特定する目的で、土器の出土傾向を調べてみたい。第233図・第234図は型式比率を５段階に分けて主柱穴中の土器の出土傾向を図示したものである。環状集落の要の位置にあるHT―10～13（Ａ形態）は型式比率が高い柱穴が最も多く、諸磯ｂ式期の遺構であることは、ほぼ間違いないことが分かる。また、その南に位置するHT―14～24（Ｂ形態）も比較的型式比率が高い柱穴が多い。したがって、HT―14～24のいずれかと、HT―10～13のいずれかが同時期に並存していた可能性が極めて高いと言えよう。また、HT―５・６、26、７～９といった比較的大形のもの（Ｂ形態）も同様な傾向を示しており、諸磯ｂ式期のものと判断される。

それ以外の掘立柱建物址ではHT―３・４・32・34・37では、諸磯ｂ式期の土器型式比率が低い。HT―３・34は確実に有尾式期のものと言える。それ以外では土器の出土量は少ないものの大部分が諸磯ｂ式期のものと推定される。

なお、大形の出現は諸磯ｂ式１段階であり、それ以降同式４段階までの土器が出土しており、出土土器の継続性が認められる。

次に、①について包含層中の分布傾向を調べてみよう。土器ブロックの分布状態は付図３・４のとおりである。これをみると、ほとんどの掘立柱建物址と重複して土器ブロックが存在していることが分かる。例えば、②により諸磯ｂ式期と判定されたHT―10～13の部分には、Ar―５号ブロック（有尾式）、Ma―５号ブロック（諸磯ａ式）、Mb―５号ブロック（諸磯ｂ式）が重複して存在している。ここでのAr―５、Ma―５は、明らかに建物構築以前の土器であり、ちょうど住居址における二次廃棄遺物と同じ状況を示している。つまり、掘立柱建物も廃絶後に、住居址同様に廃棄の「場」として利用されていたと判断される。ただし、HT―３・32・36では土器ブロックが形成されておらず、比較的小規模な掘立柱建物址の場合は、廃棄の場とならない場合もあったことが分かる。

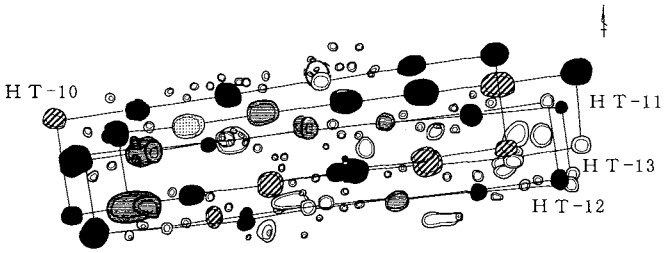
以上のように、建物が廃絶した場合、そこが窪地で有る無しに関わらず、多くの場合は廃棄の場として使用されていたと推定される。遺物の廃棄を単にゴミ捨て行為と考えるべきではないのである。

［掘立柱建物址出土の石器の出土状態］

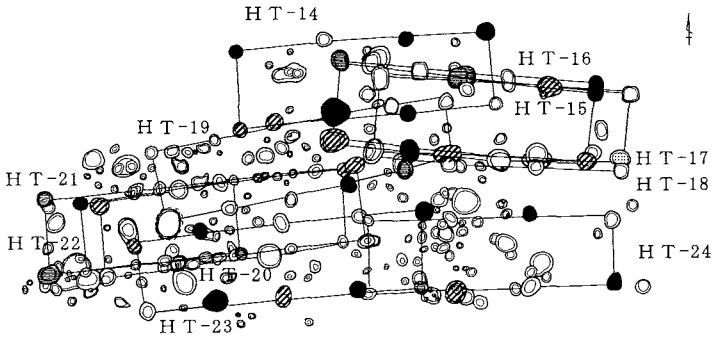
石器については、すでに石器組成の観点から掘立柱建物址全体に対する分析を行っている。その結果、②については、諸磯ｂ式期の住居址の組成と基本的には同じ傾向を示していることが判明している。つまり、住居址と同様に廃棄の場として利用されていたことを示している。

また、①については付図５～11の各系列ブロックの分布状態に示されるとおりである。これをみると、系列ごとに掘立柱建物址とブロックの在り方が大きく異なっており、偏在性が認められる。ここでは環状集落の中枢部分であるHT―10～24と、その前面に位置するHT―７～９について検討してみたい。

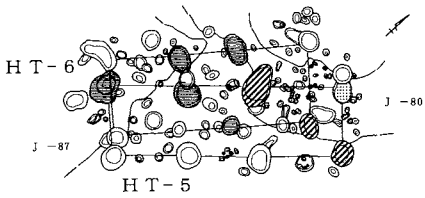
ＨＴ －10～13



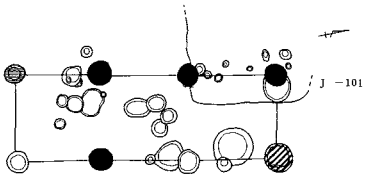
ＨＴ －14～24



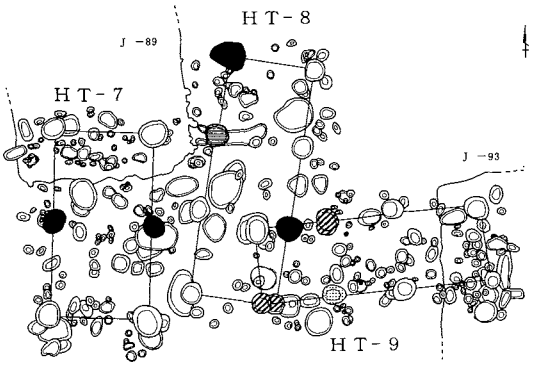
ＨＴ －5.6



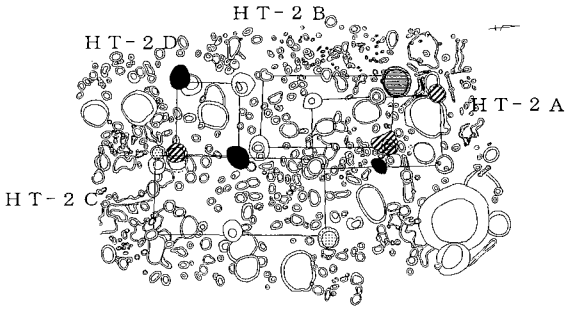
ＨＴ －26



ＨＴ －7 ～9



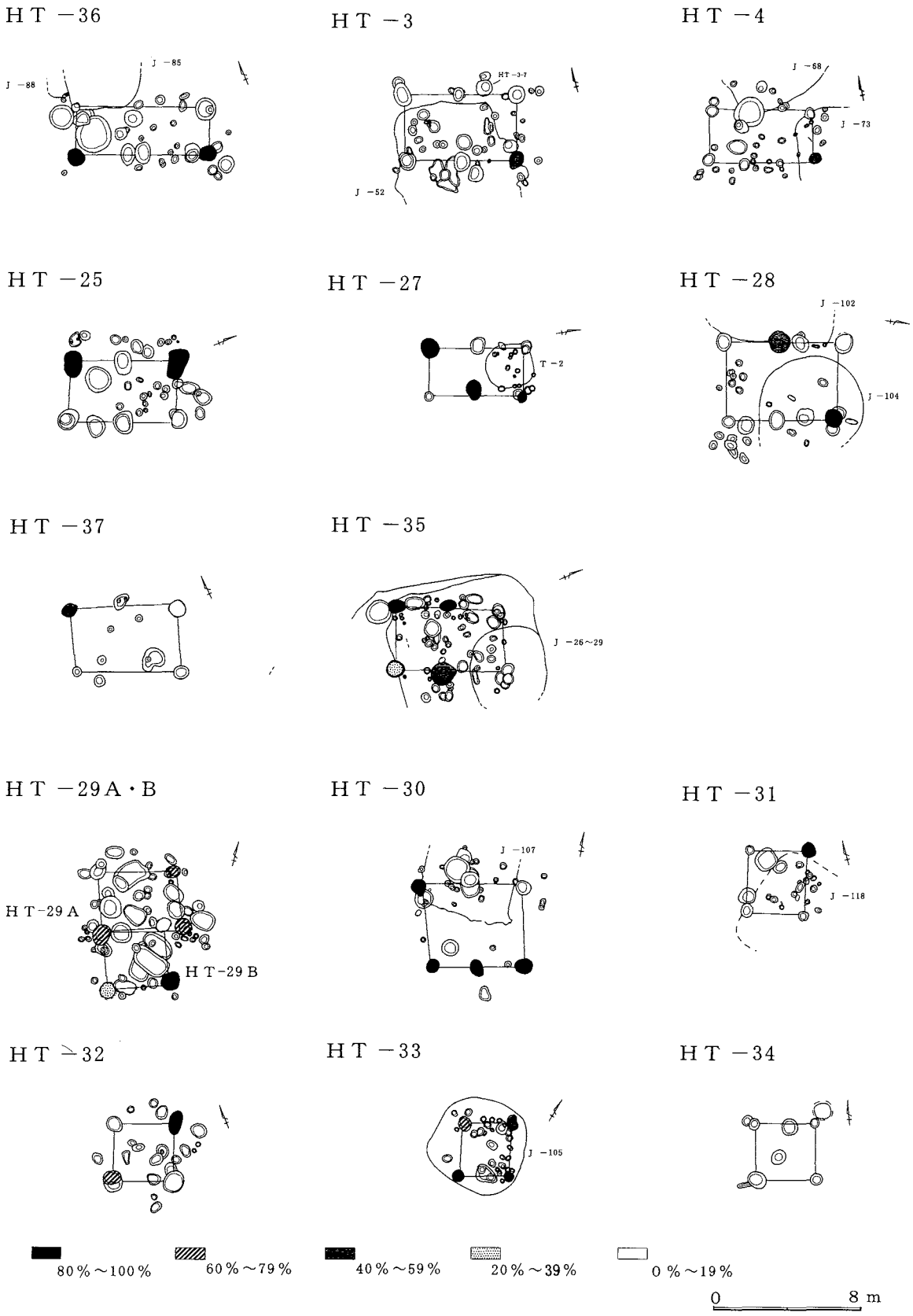
ＨＴ －2・Ａ～Ｄ



80％～100％　60％～79％　40％～59％　20％～49％　0％～19％

0　8 m

第233図　掘立柱建物址の遺物出土状態（1）



第234図　掘立柱建物址の遺物出土状態（2）

HT—10～24の部分にはA—5・B—5・C1—4・C2—3ブロックが存在している。いずれも分布密度は薄く、また柱穴中から出土したものも多い。この中ではC1—4ブロックの在り方に特徴があり、密度は薄いもののHT—14～24の前面に凹石が分布する状況が見出せる。なお、A—5ブロックの東端には、A類が集中する部分があるが、土坑に伴うものであり、直接的に建物群には関係しないとみられる。

HT—7～9の部分にはA—6・B—6・C1—4・D—3・4ブロックが存在している。この部分ではD類の在り方が特徴的である。分布密度は薄いながら棒状礫や剝片D類がまとまっており、この建物群の性格を推測する資料となる。また、ブロックは形成しないものの、HT—7とその南側からは、良質の蛇紋岩製の大型石製装身具が2点出土しており、この場所の意味を暗示している。

もう1カ所HT—9の東側に特徴的な分布を示す場所が存在している。この部分ではA類とB類の器種に偏在が認められる。すなわち、A—6ブロックでは石核A類が集中するものの、剝片A類は少ない。この状態からみて、この場所は単なる剝片剝離作業の場ではなく、石核A類が管理的状態で置かれていた場であったことを推測させるものである。また、B—6ブロックでもScBが集中している。A類での状況からみて、ScBを用いての作業の場と考えるより、むしろ管理的に集積されていた場であった可能性が高い。

以上のように、HT—10～24の部分よりも、その南側に存在するHT—7～9の部分において、建物群の機能や用途を暗示する特徴的分布状態が認められた。特にHT—9の東側に集積されているものは、棒状礫を含めいずれも男性系の器種であり、場の機能を暗示している。

（大工原　豊）

c　土壙墓群の遺物出土状態

土壙墓と認定した条件は、上部施設（立石・集石）、下部施設（抱石・鉢被り）、副葬品、覆土の状態（一度に埋め戻された特徴を示すもの）である。また、平面分布上、上記の条件を満たす例と同じ群を構成するものを、これに加え223基を土壙墓と認定した。そして、このうち196基が６つの土壙墓群を構成している。

すでに、各土壙墓群についての遺構としての分析は、遺構編（Ｐ.318～339）で説明している。なお、遺物分析の結果、多少見解が異なる部分もある。その場合、本項の記載が最終的見解である。ここでは、より具体的に各土壙墓群の出土遺物の在り方と、その特徴について述べる。

［Ｄ区南東群］（第235図～第239図）

37基の土壙墓が弧状に展開する。副葬品から時期を判断すると、有尾式１～２段階を中心とする時期に形成されたものとみられる。なお、この土壙墓群の中心にはしっかりと据え付けた立石を有し、抱石と一対の玦状耳飾が検出されたＤ―1011が存在している。この土壙墓は位置的にも内容的にも土壙墓の典型を成すものである。この土壙墓群の中心的意義をもっていた土壙墓と考えられるので、ここでは中心土壙墓と呼ぶことにする。

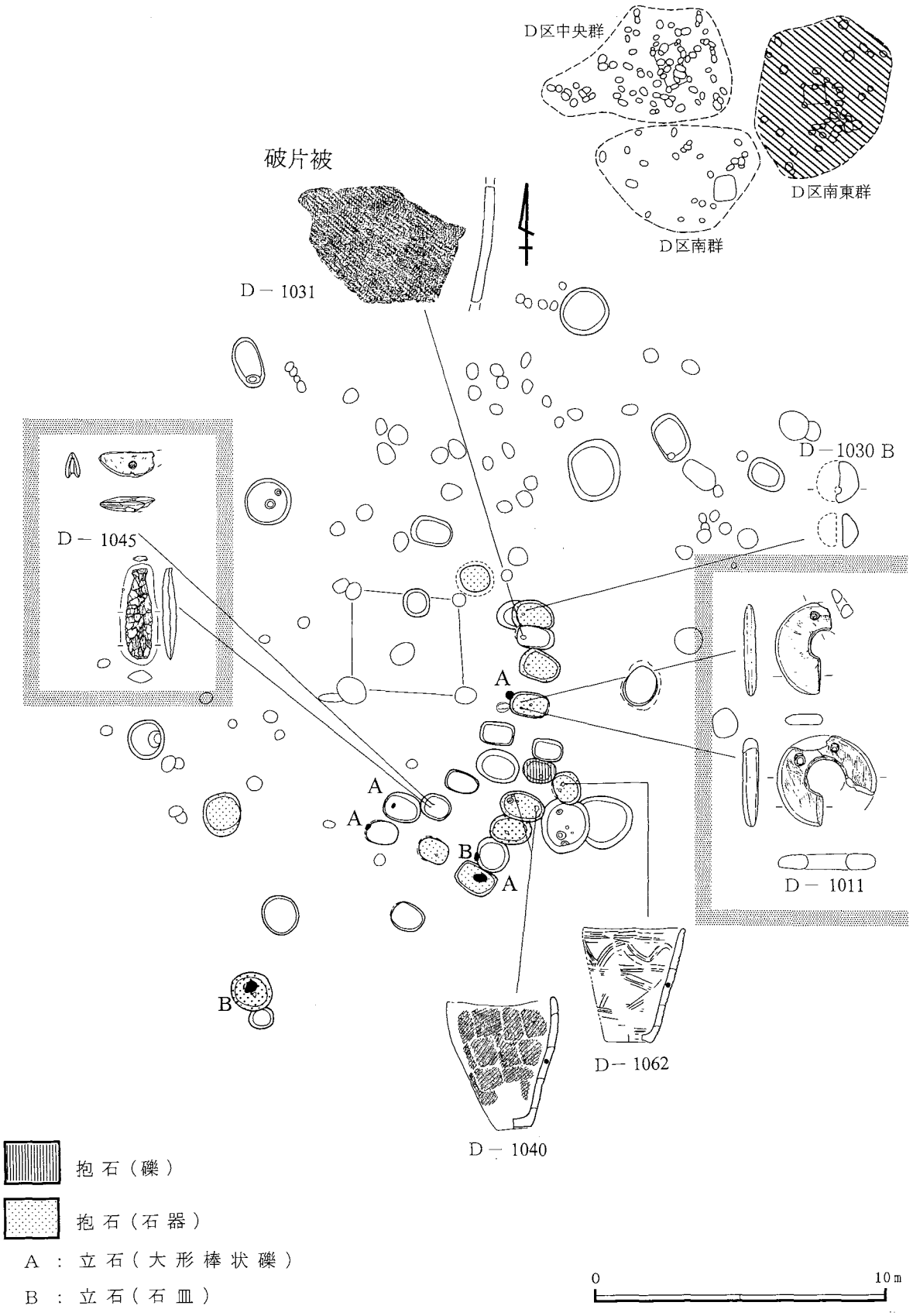
上部施設　立石が６例存在する。このうち、中心土壙墓（Ｄ―1011）の立石は、唯一墓壙の西側に穴を掘って設置されている。しかし、他の４例では立石は覆土上部に立てられていた。また、周囲から立石とみられる大形棒状礫が検出されており、これ以外の土壙墓にも立石が存在していたことが判明している。ちなみに、墓群の南側に立石のあるものが偏在する傾向が認められる。石皿が立石にされたものが２例ある。

下部施設　抱石12例、破片被り１例が確認されている。抱石の種類は凹石７例、磨石３例、ScB1例、礫１例である。ScB（Ｄ―1043）は副葬品の可能性もある。なお、礫には被熱が認められる。土器の破片で頭部を被った「破片被」例（Ｄ―1031）は本遺跡では最も古い例である。単節斜縄文の深鉢胴部破片が用いられていた。下部施設を有する例は、中心土壙墓（Ｄ―1011）から南北に延びる整然と配列した土壙墓にほぼ限定されている。

副葬品・着装品　副葬品・着装品が検出された土壙墓は５例であり、いずれも底面に近い位置から検出された。玦状耳飾１例、石匙Ａ類＋垂飾１例、小形深鉢２例である。これらの遺物はいずれも、日常的遺物が出土する住居址ではほとんど検出されないものであり、副葬品・着装品には専用品が用意されていた可能性がある。

これらの例は、中心土壙墓から整然と南北に延びる上部施設・下部施設をもった土壙墓群の中に限定される。さらに、よくみると中心土壙墓から２～３基おきに間隔を置いて存在しており、ある種の規則性が認められる。

この中で注目されるのは、やはり中心土壙墓（Ｄ―1011）である。玦状耳飾一対は、土壙墓の底面西側から出土しており、頭部に着装された状態で埋葬されたものと判断される。しかし、この耳飾では破損が著しく、耳タブにそのまま装着できない状態である。北側から検出された例は片側が欠損しており、南側のものも二つに割れている。そして、いずれの例にも補修孔が認められる。以上のことから、長年使用していた破損品を紐で括って耳タブに着装した状態で埋葬されていたと推定される。



第235図　D区南東群の施設・副葬品の分布

こうした状況は他の例でも認められる。D—1045では石匙A類とともに破損した垂飾部品が検出されている。この場合でも二次的な穿孔があり、紐で括って着装していたとみられる。また、D—1030でも破損した土玉が検出されている。これは二次的混入の可能性も考えられるが、この例でも穿孔部分で欠損しており、長年使い古した装身具が着装（もしくは副葬）されていたと推定される。

なお、D—1045で検出された石匙A類（EVSH—2形態）は小形縦形で、特殊な形態である。これも副葬用の石器であった可能性が高い。なお、大下原遺跡でも同形態のものが土壙墓に副葬されている。ちなみに、この土壙墓は副葬品を有する例の中では唯一、抱石が欠落している。

深鉢の副葬される例（D—1040・D—1062）は、隣接して存在する。いずれも小形でほぼ同じサイズの深鉢が用いられている。こうしたサイズの深鉢は住居址からはほとんど出土しておらず、これも副葬用に特化した遺物と推定される。D—1040の小形深鉢は2つに破損しており、一方は北西の位置から出土しており、もう一方は東寄りの位置から出土している。前者の方が下側の破片であり、後者は二次的撹乱により移動してしまったものと推定される。また、D—1062では北西部分から出土している。したがって、副葬品の置かれていた位置はいずれも北西部分ということになり、頭部右横に埋納されていたものと推定される。

［D区中央群］（第240図～第246図）

54基の土壙墓から構成される最も大きな墓域である。ここでは基本的に東西方向に二列に土壙墓が並び、その北側にも付随的に分布している。南側の列（南列）の方に、上部施設・下部施設・副葬品が集中する傾向が認められる。また、副葬品からみて、有尾式～諸磯b式古段階にかけて形成されたものと判断されるが、東から西へ行くにつれて時期が新しくなる。

上部施設　立石が3例存在する。全体からみれば上部施設の頻度は極めて少ない。この墓域の部分は、諸磯b式古段階以降に形成された環状集落の中央広場の中央に位置することから、上部施設の立石は片付けられた可能性もある。

3例中2例は南列に存在している。また、北列の北に位置するD—943の事例でも北側の位置からやや浮いて横倒しの状態で出土しており、本来はこの土壙墓の立石ではない可能性が高い。これに対し、南列のものではD—944例は確実に原位置を留めている。こうした状態からみて、元々南列に立石が多い傾向があったと推定される。

下部施設　抱石15例が確認されている。抱石の種類は凹石6例、磨石3例、球石1例、石皿2例、棒状礫1例、礫2例である。なお、礫では1例に被熱が認められる。ほとんどの抱石は中央から出土しており、腹部に置かれていたと推定される。なお、一部の事例では多少浮いたレベルから出土しているが、二次的に移動したものとみられる。石皿の場合でも破片が用いられており、それほど大形の抱石はまだ出現していない。抱石の存在するものは南列に集中しており、明らかに偏在性が認められる。

また、D—944では、諸磯b式古段階の胴下半部のない大形土器（2単位大波状口縁）が出土しているが、出土状態からみて埋葬遺体に〝着せた状態〟あるいは〝被せた状態〟であったと判断され、副葬品と言うより、むしろ下部施設の一種であったと推定される。同様な事例は大下原遺跡T—25号土壙にも存在しており、この時期の埋葬方法の一形態とみられる。

副葬品・着装品　着装品としては玦状耳飾1例、副葬品としては石匙B一例、小形深鉢2例、小形浅鉢2例、深鉢胴部1例がある。いずれも底面または底面に近いレベルで出土しており、原位置が保たれて

土 壙 墓 （D区南東）	上部施設 立石・平石	下部施設 抱石	下部施設 鉢被	副葬品
D－1011 D：71 cm	A（立）			
D－1045 D：61 cm				
D－1062 D：71 cm				
D－1040 D：38 cm				
D－1030B D：71 cm				
D－1031 D：65 cm				
D－1044 D：34 cm	C（立）			
D－1046 D：52 cm	A（立）			

※A：棒状の礫　C：石皿

第236図　D区南東群の施設・副葬品（1）

土 壙 墓 （D区南東）	上部施設 立石・平石	下 部 施 設 抱 石	鉢被	副 葬 品
D－1047 立石（傾斜） D：57 cm	A（斜）			
D－1049 凹石 立石 D：35 cm	A			
D－1066 凹石 立石（石皿） D：24 cm	C（横）	凹石		
D－1043 SCB D：66 cm		SCB		
D－1032 礫石 D：70 cm				
D－1048 凹石 D：65 cm				
D－1006 D：89 cm		凹石		
D－1020 D：33 cm		凹石		
D－1034 礫 D：61 cm				※A：棒状の礫　C：石皿

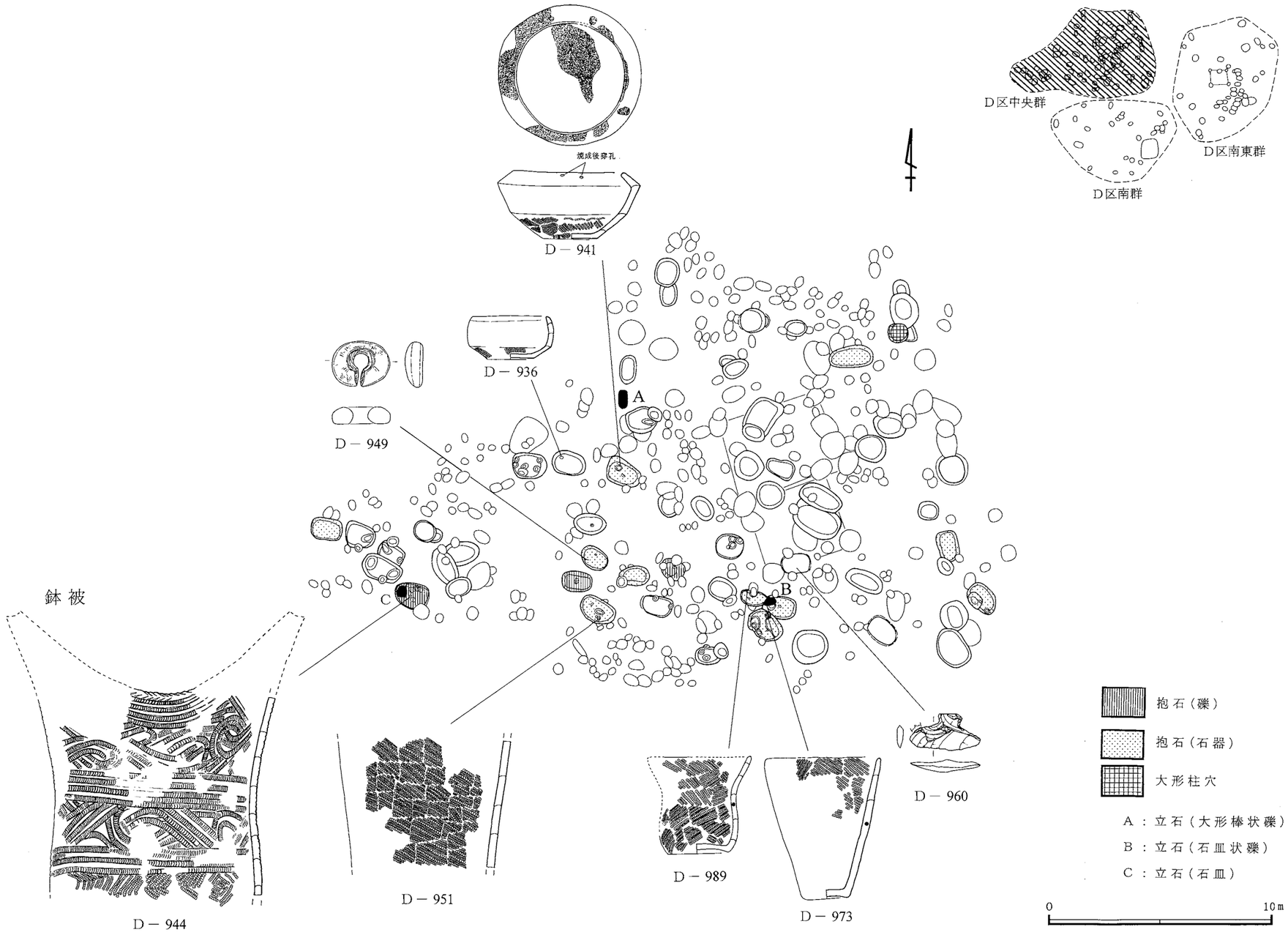
第237図　D区南東群の施設・副葬品（2）

土 壙 墓 （D区南東）	上部施設 立石・平石	下 部 施 設 抱 石	鉢被	副 葬 品
D－1008 D：23 cm				
D－1030A D：31 cm				
D－1029 D：63 cm				
D－1033 D：56 cm				
D－1061 D：48 cm				
D－1068 D：55 cm				
D－1064 D：61 cm				
D－1042 D：33 cm				
D－1041 D：32 cm				
D－1063 D：68 cm				

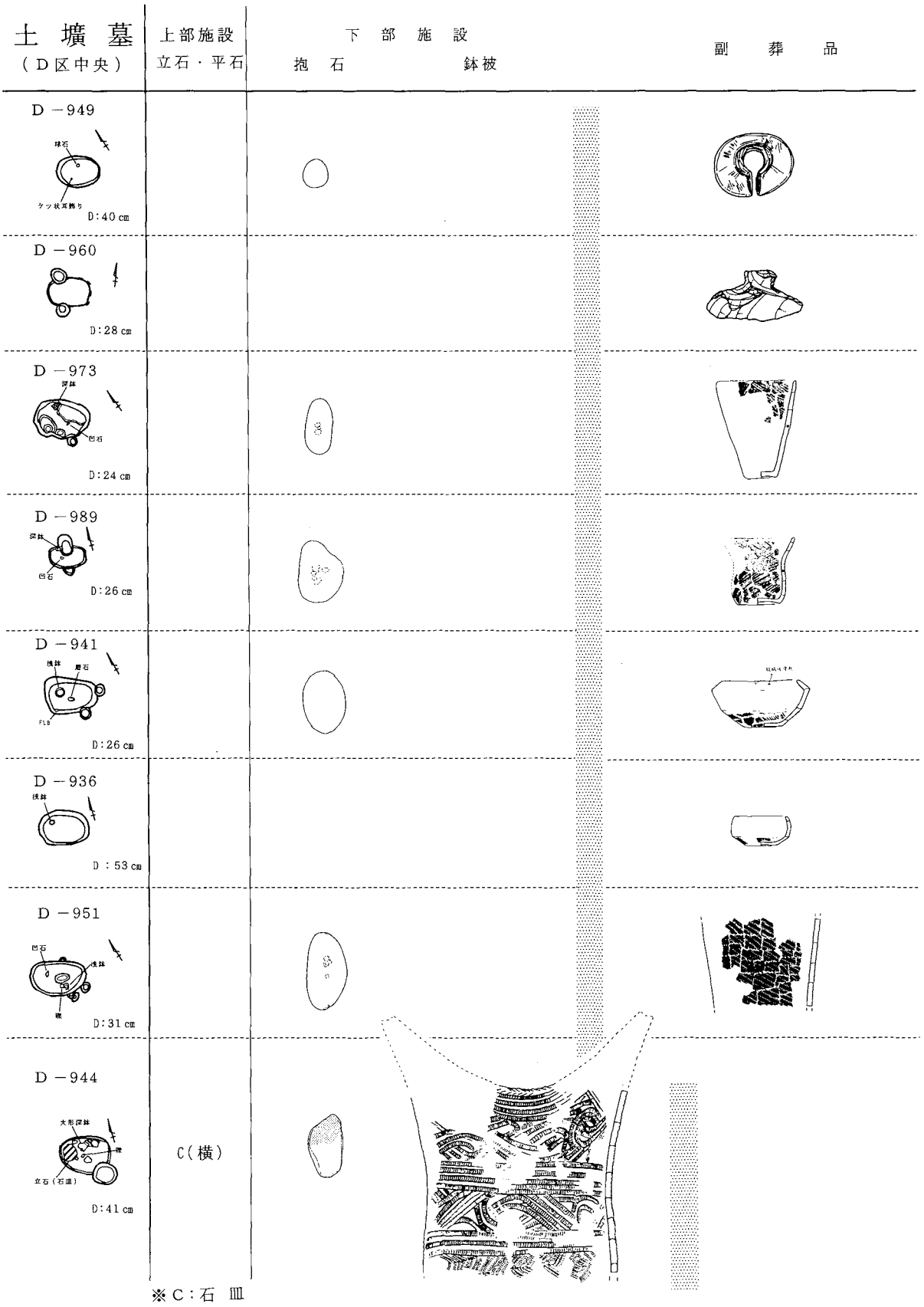
第238図　D区南東群の施設・副葬品（3）

土 壙 墓 （D区南東）	上部施設 立石・平石	下 部 施 設 抱 石	鉢被	副 葬 品
D－1067 D：26 cm				
D－1065 D：30 cm				
D－1012 D：15 cm				
D－1010 D：22 cm				
D－1009 D：39 cm				
D－1007 D：55 cm				
D－1005 D：44 cm				
D－1004 D：27 cm				
D－1023 D：23 cm				
D－886 D：47 cm				

第239図　D区南東群の施設・副葬品（4）



第240図　D区中央群の施設・副葬品の分布



第241図　D区中央群の施設・副葬品（1）

土 壙 墓 （D区中央）	上部施設 立石・平石	下 部 施 設 抱 石	鉢被	副 葬 品
D－943 D：18 cm	A			
D－974 D：15 cm	C（斜）			
D－952 D：20 cm		磨石		
D－966 D：26 cm		球石		
D－954 D：25 cm				
D－982 D：31 cm		石皿（破片）		
D－893 D：28 cm		凹石		
D－937 D：26 cm		凹石		
D－953 D：32 cm				

※A：棒状の礫　　C：石皿状の礫

第242図　D区中央群の施設・副葬品（2）

土 壙 墓 （D区中央）	上部施設 立石・平石	下 部 施 設 抱 石	鉢被	副 葬 品
D －950 D：32 cm				
D －887 D：37 cm				
D －888 D：21 cm				
D －889 D：33 cm				
D －891 D：35 cm				
D －894 D：35 cm				
D －895 D：53 cm				

第243図　D区中央群の施設・副葬品（3）

土　壙　墓 （Ｄ区中央）	上部施設 立石・平石	下　部　施　設 抱　石	鉢被	副　葬　品
Ｄ－896 D：25 cm				
Ｄ－922 D：31 cm				
Ｄ－935 D：23 cm				
Ｄ－938 D：18 cm				
Ｄ－939 D：29 cm				
Ｄ－940 D：20 cm				
Ｄ－942 D：30 cm				
Ｄ－946A D：32 cm				
Ｄ－946B D：28 cm				
Ｄ－947 D：30 cm				

第244図　Ｄ区中央群の施設・副葬品（４）

土 壙 墓 （D区中央）	上部施設 立石・平石	下 部 施 設 抱 石	鉢被	副 葬 品
D－948 D：30 cm				
D－955 D：42 cm				
D－956 D：33 cm				
D－957 D：28 cm				
D－958 D：27 cm				
D－959 D：30 cm				
D－964 D：48 cm				
D－965 D：25 cm				
D－967 D：23 cm				
D－968A D：23 cm				

第245図　D区中央群の施設・副葬品（5）

土 壙 墓 （D区中央）	上部施設 立石・平石	下部施設 抱石	鉢被	副葬品
D－968B D：51cm				
D－969 D：21cm				
D－970 D：59cm				
D－971 D：20cm				
D－972 D：27cm				
D－975 D：28cm				
D－980 D：15cm				
D－981 D：20cm				
D－983 D：22cm				
D－993 D：27cm				

第246図　D区中央群の施設・副葬品（6）

いると判断される。なお、諸磯ａ式と推定される深鉢胴部は、下部施設としての「破片被り」の可能性もある。

副葬品が出土した土壙墓は、南列に集中しており、諸磯ｂ式古段階の小形浅鉢出土例（Ｄ―941・936）のみが北列に存在している。なお、小形浅鉢はこの墓域の終末段階に出現した新しい器種であり、進取的な副葬品と言えよう。本群を構成する２列のうち、南列が主導的なグループ、北列が従属的なグループと考えられる。以上のように、この土壙墓群においては南北２列が存在し、少なくとも本墓域構成員には２つのグループが存在していたことが分かる。そして、常に南列が優位の存在であり、立石・抱石や副葬品の有無は、被埋葬者の生前の社会的位置を反映していたものと言えそうである。

なお、玦状耳飾が出土したＤ―949では、１点のみであったが、底部の南西から出土しており、他の土壙墓群同様頭部位置は西であったと推定される。また、この土壙墓の約７ｍ南の位置から同形態の玦状耳飾の破片が出土しており（付図12）、二次的撹乱を受けて一方が移動してしまった可能性がある。副葬された土器は、すべて土壙墓の北西部分から出土しており、頭部の右横に置かれたものと推定される。これはＤ区南東群でも同様であり、本遺跡では伝統的に副葬品の埋納位置が定められていたと言える。

［Ｄ区南群］（第247図～第250図）

24基の土壙墓群から構成され、Ｄ区中央群の南に存在する。詳しくみると、東端にこぢんまりと密集する部分（ａ群：６基）と、環状に土壙墓群が展開する部分（ｂ群：18基）に分かれる。ａ群ではほとんど立石を伴い、石匙Ｂが唯一副葬品として出土している。これに対し、ｂ群からは副葬品は全く出土していない。ｂ群では「鉢被り」として黒浜式土器が出土していることから、この時期に形成されたものと推定される。ａ群は埋納された土器がないため時期がはっきりしないが、Ｄ区南東群に隣接する位置に存在していることから、有尾式期に形成されたものと推定される。

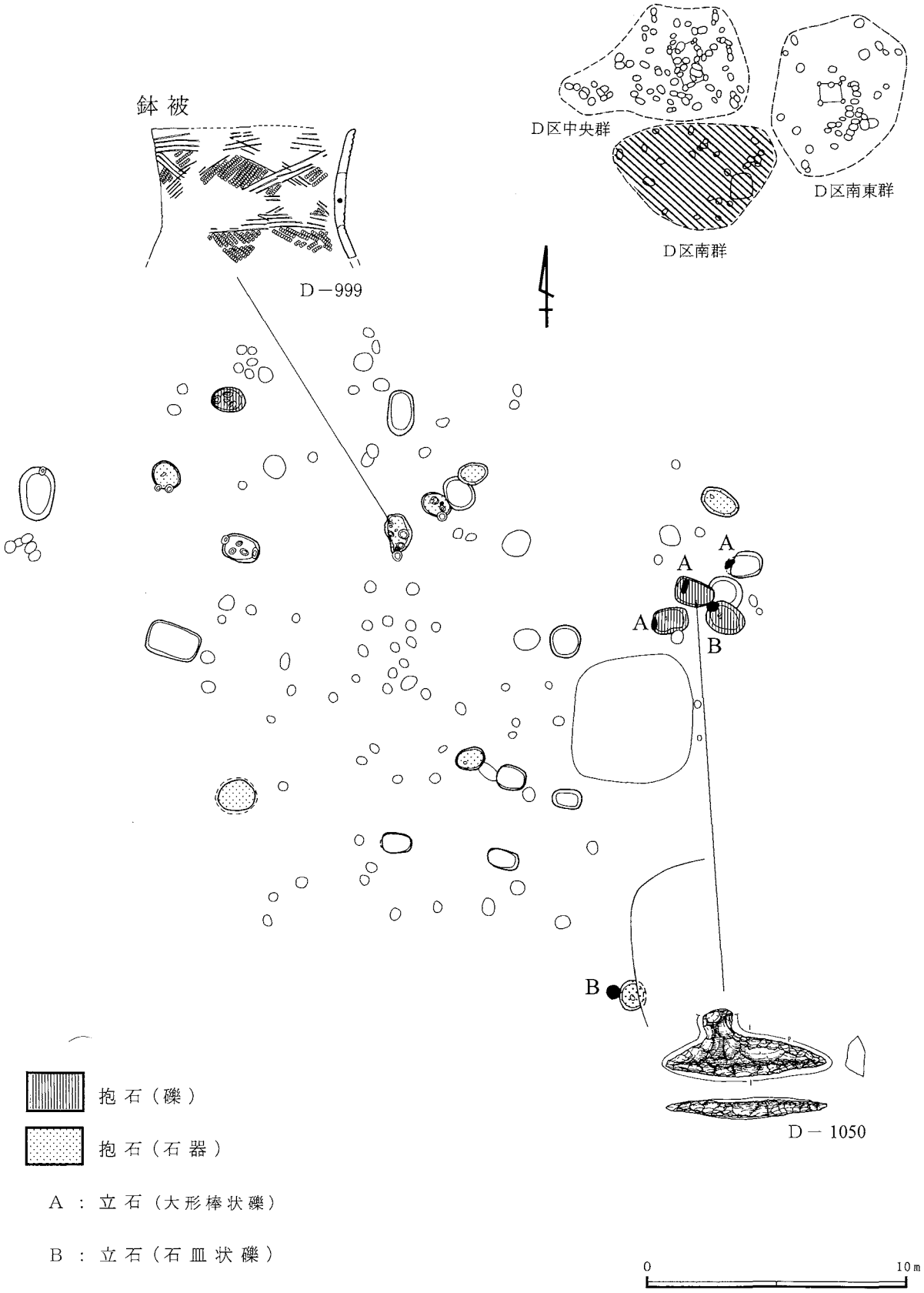
上部施設　立石のあるものが５例存在するが、４例はａ群に集中している。これに対して、ｂ群では上部施設の存在するものは皆無である。しっかりと直立した状態で検出されたものも３例あり、いずれも土壙墓の覆土上部に立てられていたと判断される。

下部施設　抱石が存在するものが12例、鉢被り１例がある。抱石の種類は、凹石５例、磨石２例、台石１例、礫４例である。出土位置は底面中央のものが大部分であり、底部または底部に近いレベルからの出土である。ここでは明らかにａ群に礫が多く、ｂ群に石器が多く、両群で明らかに傾向が異なっている。

また、ｂ群の中央部分に位置するＤ―999では深鉢（黒浜式）の口縁部破片が出土しており、出土状態と、土器の遺存状況からみて、「鉢被り」と判断される。

副葬品　唯一の副葬品として、ｂ群に属するＤ―1050の底面中央から石匙Ｂが出土している。この石匙ＢはWOSH形態であるが、非常に精緻で部分研磨も施されている特殊な石器である。副葬用の精製品と考えられる。なお、ｂ群に属するＤ―1037からも石匙Ｂの欠損品が出土しているが、小形石器の欠損品が副葬された事例は本遺跡では全くないので、この事例は副葬品と認定しなかった。

なお、本群では土器が副葬された事例は全く存在していない。



第247図　D区南群の施設・副葬品の分布

土 壙 墓 （D区南）	上部施設 立石・平石	下部施設 抱 石	鉢被	副 葬 品
D－1050 D：59 cm	A（倒）			
D－999 D：33 cm				
D－1037 D：21 cm	C（立）			
D－1038 D：66 cm	B（立）			
D－1039 D：56 cm	A（立）			
D－1069 D：43 cm	C（横）			
D－1021 D：25 cm				

※A：棒状の礫　B：A・Cの中間礫　C：石皿状の礫

第248図　D区南群の施設・副葬品（1）

第249図　D区南群の施設・副葬品（2）

土 壙 墓 （D区南）	上部施設 立石・平石	下 部 施 設 抱 石	鉢被	副 葬 品
D－1003 D：36㎝				
D－1028 D：35㎝				
D－1036 D：40㎝				
D－1051 D：68㎝				
D－1052 D：53㎝				
D－1054 D：46㎝				
D－1055 D：43㎝				
D－1057 D：24㎝				

第250図　D区南群の施設・副葬品（3）

［B区南群］（第251図～第256図）

37基の土壙墓から構成される。中心部には中央配石（D—338）が存在し、その周囲に楕円形に展開している。本遺跡の墓域で最も出土遺物が充実しており、墓制を解明するために重要な土壙墓群である。副葬品や下部施設に土器が多いため、時期の確定も比較的容易である。諸磯b式古段階（1段階）～中段階（4段階）にかけての土器が出土しており、この時期の墓域と判断される。また、本群では古い時期（諸磯b式古段階）の埋納品が出土しているものは、南東部分に集中しており、この位置から土壙墓群が形成され始めている。そして、中央から西の埋納品はいずれも諸磯b式中段階のものであり、明らかに時期差が認められる。したがって、本群は南東から順次西へ土壙墓が作られていったことが確認される。

中心配石　中央配石は丸石と多孔石・磨石により、四角く囲まれ、その内側は浅く掘り窪められ、中央底面には打製石斧（IId形態）が1点置かれていた。この打製石斧は完形で、刃部には使用による剝離痕と磨耗痕が認められ、元々実用品であったことが確認できる。なお、この打製石斧は、有肩の特異な形状と言える。これとほぼ同じ配石遺構としては、HT－9号掘立柱建物址の南に存在するD—721がある。この配石では横倒し状態の大形棒状礫が1点存在しており、立石として立てられていた可能性が高い。この事例からみて、本群の中央配石（D—338）の中心にも、本来は立石が存在していた可能性が高い。

なお、D—721の位置は、諸磯b式期の集落中枢部分に相当しており、両者とも中心を示す機能を有した特殊な遺構と推定される。

上部施設　本群では上部集石が4例存在するが、立石は皆無である。上部集石は本群とB区南西群に存在しており、立石より後出の上部施設と言える。阿久遺跡など長野県内では前期前葉から上部集石は普及しており、諸磯b式期に集石が出現した要因は、この方面からの影響であった可能性が高い。

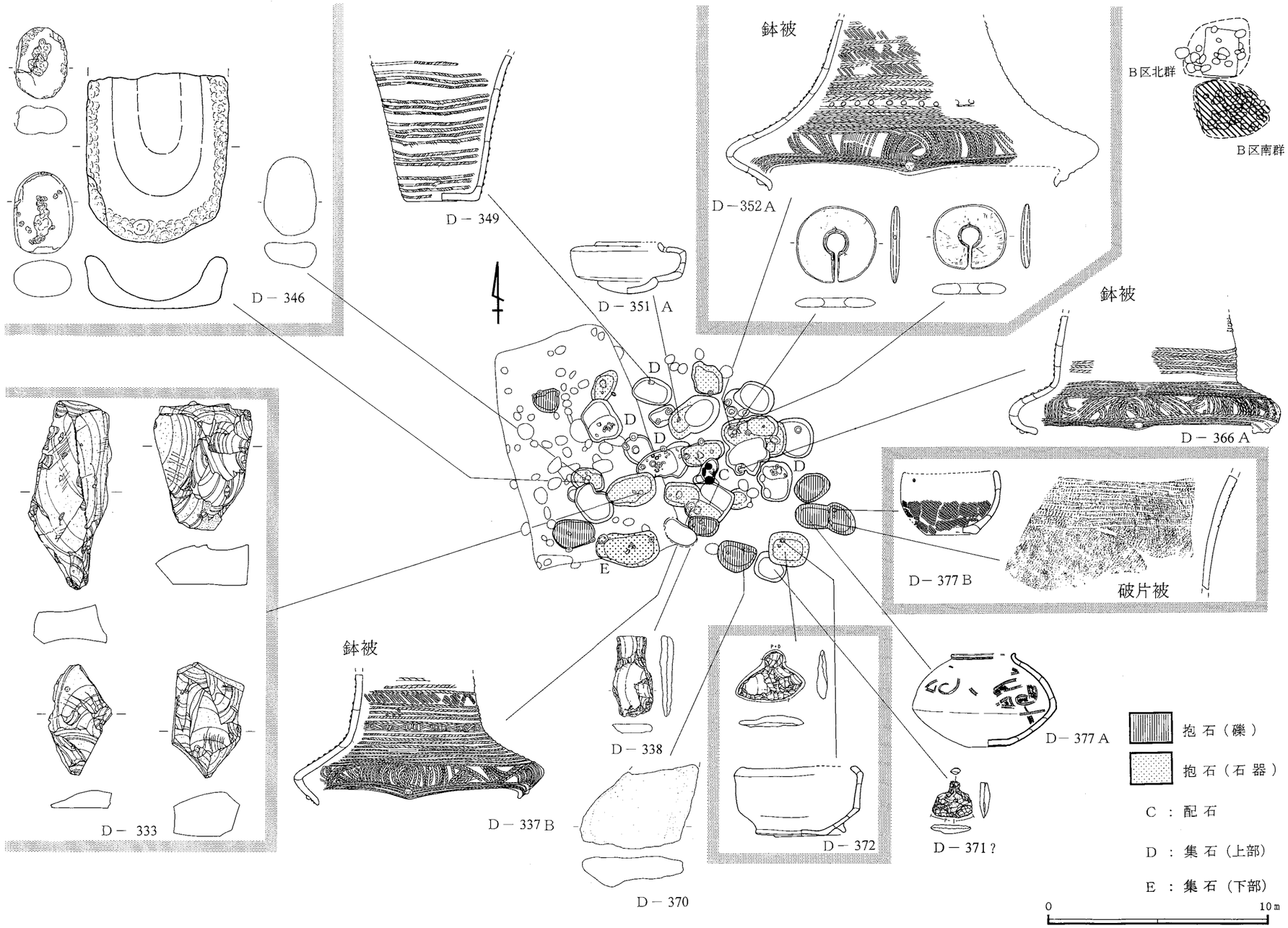
なお、前述したように中央配石には立石が立てられていた可能性があり、この配石は墓群全体を表象したものとして存在し、そのため個々墓に立石を立てられなくなったことも推測されよう。

下部施設　本群の下部施設としては、鉢被り・破片被り・抱石・集石・枕石の5種類が認められる。

鉢被りの事例は3例あり、中心配石に近接して、これを囲むように北東（D—352A）・東（D—366）・南（D—337B）に存在している。このうちD—366では、鉢被りされた深鉢が半分欠損し、上層から出土していることから、二次的撹乱を受けて原位置からややずれた位置から出土したと判断される。残り2例は原位置を留めた状態であった。ただし、いずれも胴下半部は欠損しているが、本来は完形であったのかは不明である。「鉢被り」に使用された土器は、いずれも諸磯b式中段階である。これに対し、「破片被り」は、本群では諸磯b式古段階の例（D—377B）であり、「鉢被り」よりも古い。したがって、ここでは「破片被り」→「鉢被り」といった変化がみられる。

ちなみに、D—377Bの例の出土状態を微視的に観察すると、埋葬姿勢が推定できる。破片は墓壙の南西の位置から外面を上部にして出土している。抱石は近接して、中央西寄りの位置から、副葬品の浅鉢はその横からそれぞれ出土している。こうした状況から、頭部を南西隅に置いていたと推定される。この位置に頭部がくるように埋葬する場合、上向き姿勢では無理がある。したがって、この事例は横向き（ここでは南向き）の姿勢で埋葬されていたと考えられよう。

「鉢被り」では、D—352Aの例が最大である。頸部に施文される円管連続刺突文は、本遺跡ではこの個体のみに認められる文様であり、この土器の特殊性がうかがえる。この事例では抱石・枕石・鉢被り



第251図　B区南群の施設・副葬品の分布

が併用されており、さらに玦状耳飾も着装された状態であった。枕石は墓壙西側の底面直上から出土し、その上部と北横から玦状耳飾が各１点検出された。北横のものは脱落したものと判断される。また、この上部は深鉢による「鉢被り」が施されており、枕石と玦状耳飾がほぼ埋葬時の状態であったことは確実である。したがって、被葬者の頭部は枕石の上部に位置し、それを「鉢被り」で覆っていたと判断される。また、抱石として石皿（半分に欠損）が「鉢被り」のすぐ東側から出土している。この位置は被葬者の胸部に相当し、抱石の機能が埋葬者の〝魂を封ずるため〟であったことを暗示している。

抱石が存在する例は20例存在している。本群の抱石の特徴は、石皿・または石皿状の大形扁平礫が多用されている点である。こうした事例が９例存在しており、有尾式期との大きな違いと言えよう。抱石の大型化は抱石の機能強化の顕れとみられる。また、抱石の出土位置をみると、Ｄ―352Ａ・337Ｂ・336・344では、中央より西側の位置から出土している。これは抱石が胸部に置かれていたことを示すものであり、抱石の機能が〝魂を封ずるため〟であったことを示す資料となる。次に、抱石の種類と出土位置の関係をみると、礫が抱石として使用されているものは、南東部と西端に位置しており、墓域の外縁部に偏在している傾向が認められる。

なお、Ｄ―346では石皿２点、凹石２点、磨石１点が底面中央から一緒に出土した。これらの石器が抱石なのか副葬品なのか判断が難しい事例である。本群の段階になって、下部集石が出現しており、抱石と下部集石の中間的な存在の施設と推測される。

下部集石はＤ―334の１例のみである。この事例では破砕した石皿の破片が出土しているが、基本的には集石の礫と認識されていたものとみられる。この例は礫が抱石されたもの同様、墓群の外縁部に位置している。

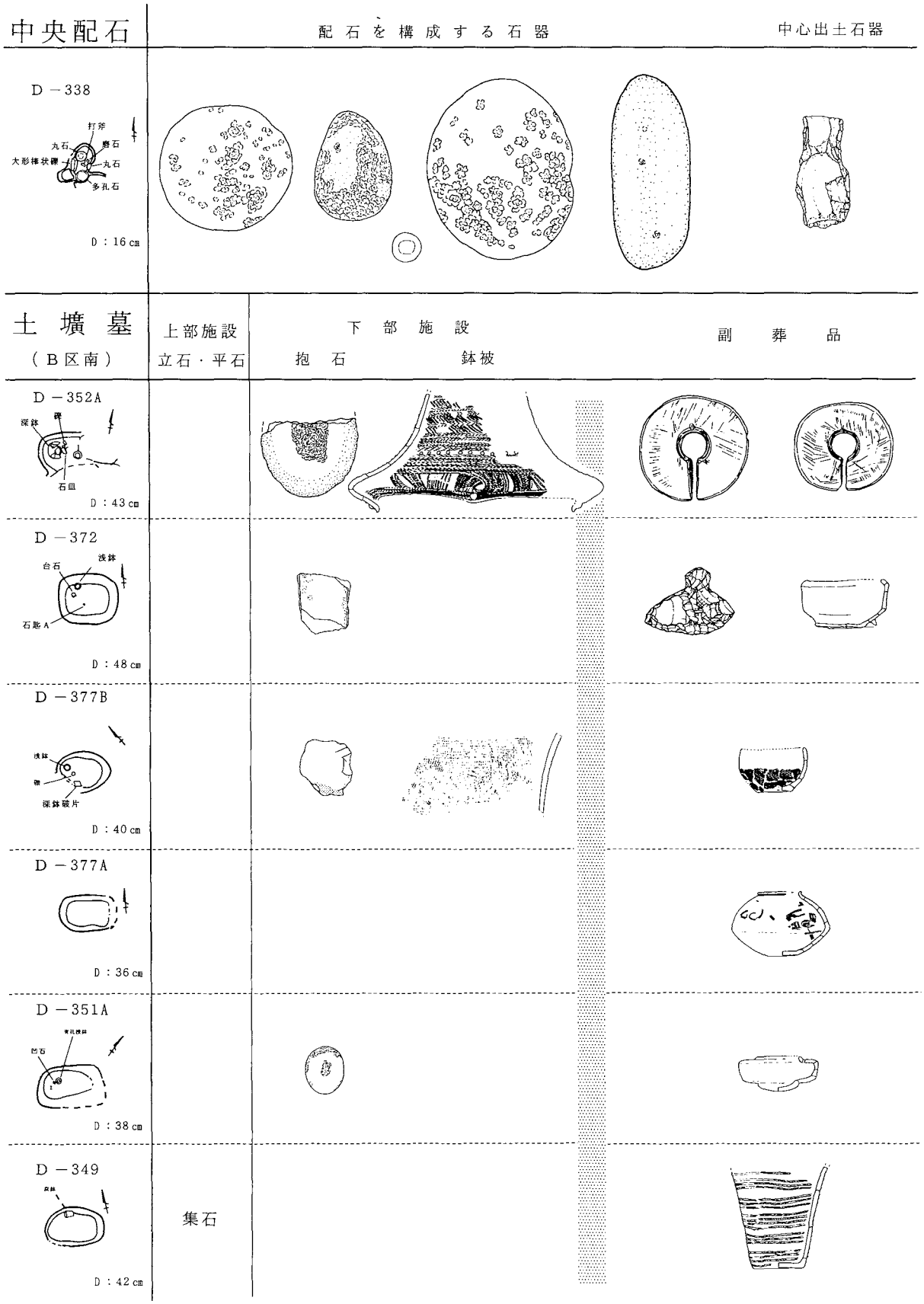
枕石はＤ―352Ａの事例により、墓壙から出土する礫には、抱石とは異なる機能を有するものが存在していることが明らかになった。これ以外に枕石と推定される例として、Ｄ―370の事例がある。

副葬品・着装品　着装品としては玦状耳飾がある。Ｄ―352Ａの事例では、１対の玦状耳飾が隣接して出土している。出土状況は下部施設の項で述べたとおりである。玦状耳飾が着装された土壙墓は、本群の中でも下部施設からみても特殊な存在であり、被葬者の生前の社会的位置が指導的立場にあった可能性が高い。「鉢被り」の深鉢とは共伴関係にあり、土器型式から諸磯ｂ式中段階（４段階）と確認できる。

土器が副葬される事例は５例あり、うち４例は小形浅鉢である。土器副葬例は墓域の北東半分にのみに存在しており、偏在性が認められる。

また、出土位置はＤ―377Ａを除き、墓壙の北西部の位置であった。副葬される土器の位置には、有尾式期以来の規則性が認められる。Ｄ―372は本遺跡で唯一土器と石器が一緒に副葬された例である。ここでは、石匙Ａが底面中央南側から出土していので、被葬者に着装されていた可能性もある。

石器のみが副葬される例は、石匙Ａ1例、砥石１例、黒曜石原石１例である。Ｄ―372に重複するＤ―371から石匙Ａが出土したと推定されるが、出土位置が不明である。Ｄ―333では黒曜石原石が４点、墓壙の底面東寄りの位置から出土している。また、Ｄ―370では砥石が墓壙北端から出土している。石匙Ａ以外の石器の副葬例は、本群の特徴であり、「鉢被り」同様後出の要素である。被葬者の生前の社会的位置が反映されたものと判断される。



第252図　中央配石を構成する石器、B区南群の施設・副葬品（1）

第253図　B区南群の施設・副葬品（2）

土 壙 墓 （B区南）	上部施設 立石・平石	下部施設 抱 石	鉢被	副 葬 品
D－379 D：33 cm	集石			
D－352B 凹石 D：27 cm				
D－353 D：43 cm				
D－336 石皿 D：27 cm				
D－366B 石皿 D：16 cm				
D－341 石皿状穴 穴 穴 D：35 cm				
D－365 石皿状穴 D：28 cm				
D－344 石皿状穴 凹石 D：31 cm				

第254図　B区南群の施設・副葬品（3）

第255図　B区南群の施設・副葬品（4）

土 壙 墓 （B区南）	上部施設 立石・平石	下 部 施 設 抱 石	鉢被	副 葬 品
D－347 D：48cm				
D－350 D：35cm				
D－351B D：52cm				
D－367 D：55cm				
D－374 D：23cm				

第255図　B区南群の施設・副葬品（5）

［Ｂ区北群］（第257図～第259図）

21基の土壙墓から成る。東北東から西南西の方向へ帯状に連なる。埋納品から諸磯ａ式新段階～諸磯ｂ式古段階の時期と判断される。

上部施設　立石が５例存在する。Ｄ―323では石皿状の大形砥石が墓壙の東側にピットを掘って設置されている。東側に立石が存在する例は他になく、特異な存在である。

下部施設　鉢被り１例、破片被り１例、抱石７例、下部集石１例が確認される。鉢被り例はＤ―362で、墓壙底面から伏せた状態で検出された。この出土状態のみを根拠に土壙墓と認定したが、①円形②北に離れて位置する③遺物が多量出土している、といった点から一般的な土坑の可能性もある。ここでは下部集石も存在するが、鉢被り例のやや上部に他の遺物と一緒に礫が出土したものであり、土壙墓の施設と積極的には言い難い部分もある。

破片被り例はＤ―357Ｂに認められる。ここでは諸磯ｂ式古段階に相当する格子目文系の深鉢が、北西隅から出土している。埋葬時に頭部位置が墓壙の中心からずれていたものと推定される。これは前述したＤ―377Ｂと同様であり、埋葬姿勢が横向き（西向き）であったとものも存在していたと考えられる。

抱石のあるものは、墓域の中での偏在性は認められない。また、抱石の種類では凹石・石皿・礫が用いられており、石皿や石皿状礫といった大形の抱石が出土しているもの（Ｄ―355・368）が存在しており、この時期から抱石の大型化が始まったものとみられる。また、凹石３点が出土した事例（Ｄ―321）が１例認められる。抱石の複数化はその後に出現する下部集石と関連性のある埋葬方法と推測される。

副葬品　唯一副葬品らしき遺物が出土しているのはＤ―362であり、覆土中層から深鉢（胴下半部・口縁部は偽口縁化されている）が出土している。また、一緒に打斧２、打斧未成品１、石匙Ｂ１、ScB ５、凹石３、磨石１、砥石２、敲石１、そして剝片類や礫数点が出土している。こうした出土状態は、一般的な土坑の廃棄遺物と同じであり、副葬品は存在していなかった可能性も高い。

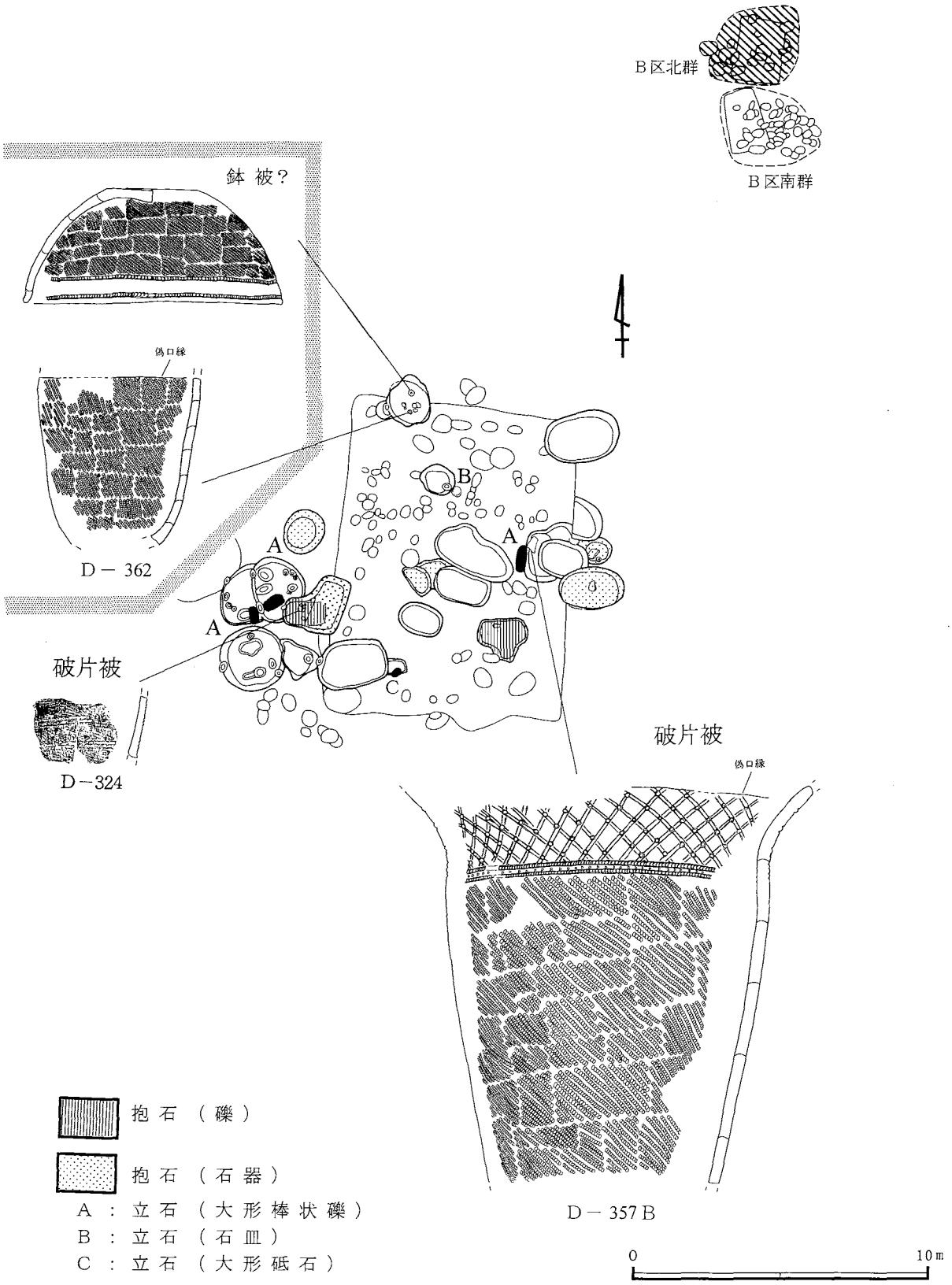
［Ｂ区南西群］（第260図～第262図）

22基の土壙墓から成る。本群は埋納品から諸磯ｂ式中段階の墓域であると判断される。土壙墓群全体の配置をみると、基本的には東北東から西南西にかけて帯状に展開している。調査区の西端に位置するため、墓域全体が完掘されていないため、実際にはさらに西側に多くの土壙墓が存在しているとみられる。本群の場所には、土坑やピットも多数存在しており、また隣接して掘立柱建物址も構築されていることから、土壙墓以外の土坑・ピットも重なって存在している。小形の土坑も、ここでは土壙墓として数えているが、実際は、一般的な土坑やピットの可能性もある。

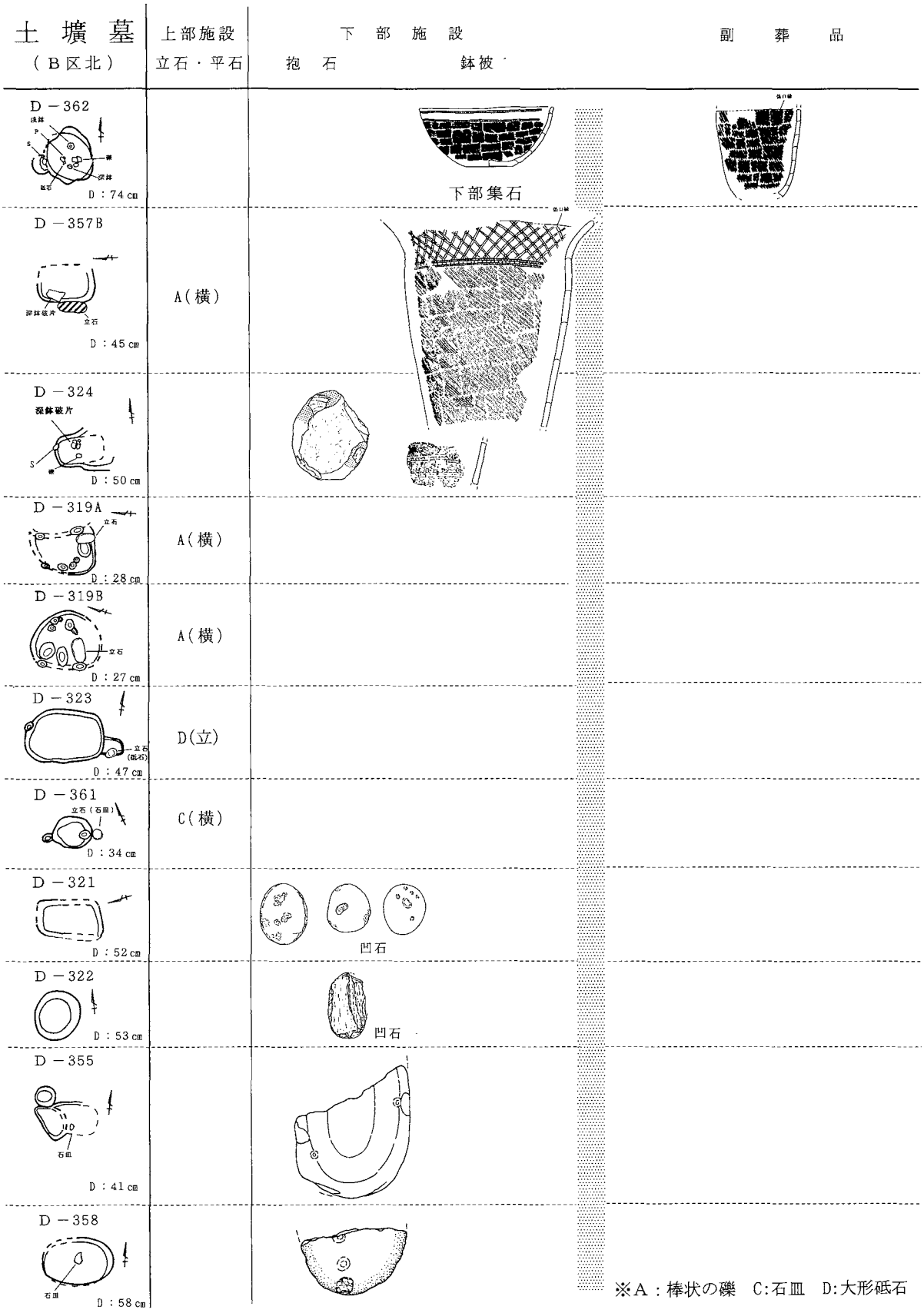
上部施設　立石が３例、上部集石が１例存在する。なお、本群の北に存在するＨＴ―２Ｄ号掘立柱建物址（Ｄ形態：２×２）は、立石を有するＤ―254・274を囲むように重複しており、土壙墓と関連する施設と推測される。上部集石はＤ―269に認められ、墓壙の東上部にまとまって存在している。頭位方向と関連性も考慮されよう。

下部施設　鉢被り１例、下部集石１例、抱石６例が認められる。下部施設の存在するものは、墓域の南側に帯状に存在しており、この部分が本群の主要部分であることが分かる。

鉢被りの事例は、Ｄ―277Ｂで、ここでは、大形浅鉢の下半部が用いられている。浅鉢の欠損部分は整形し、偽口縁化されている。遺物廃棄の項でも述べたが、この例は欠損しても道具としての機能は失われず、こうした用途に用いられていることが確認できる事例である。なお、この土壙墓はＤ―277Ａと重



第257図　B区北群の施設・副葬品の分布



第258図　B区北群の施設・副葬品（1）

土 壙 墓 （B区北）	上部施設 立石・平石	下部施設 抱石	鉢被	副葬品
D－368 D：29cm				
D－354 D：33cm				
D－356A D：43cm				
D－356B D：43cm				
D－326 D：41cm				
D－360 D：47cm				
D－359 D：37cm				
D－357A D：60cm				
D－325 D：43cm				
D－320 D：61cm				

第259図　B区北群の施設・副葬品（2）

複していると判断したが、あるいは、両者は一つの土壙墓であり、頭部を東向きにして埋葬されていた可能性もある。

抱石の種類は石皿２例、凹石３例、礫２例などであり、Ｃ１類石器が抱石に用いられる頻度が高い。Ｄ―261では石皿・石皿状礫・磨石が出土している。ここでは、①出土位置からみて、中央から出土した石皿と石皿状礫が抱石で、離れた位置にから出土した磨石は枕石といった考え方と、②出土状況写真・土層断面図等をみると、石皿・石皿状礫が出土した部分と、磨石が出土した部分では段差があり、両者はそれぞれ別の土壙墓の抱石であるといった考え方がある。いずれかここでは判断し難い。

下部集石はＤ―268の１例である。この中には磨石１点が含まれているが、石器として認識されていなかったとみられる。なお、集石は北側に集中しており、頭位方向と関連する可能性がある。

副葬品　小形浅鉢１例、石匙Ａ１例がある。Ｄ―277Ｂは「鉢被り」の西の位置から出土しており、頭部に隣接して置かれていたものである。頭位方向については、前述のように西向きか東向きと推定される。西向きであれは、伝統的な定位置と言えるが、東向きであった場合は、胸部付近に置かれていたと推測される。石匙ＡはＤ―268から出土しているが、詳細な出土位置は確認されておらず不明である。

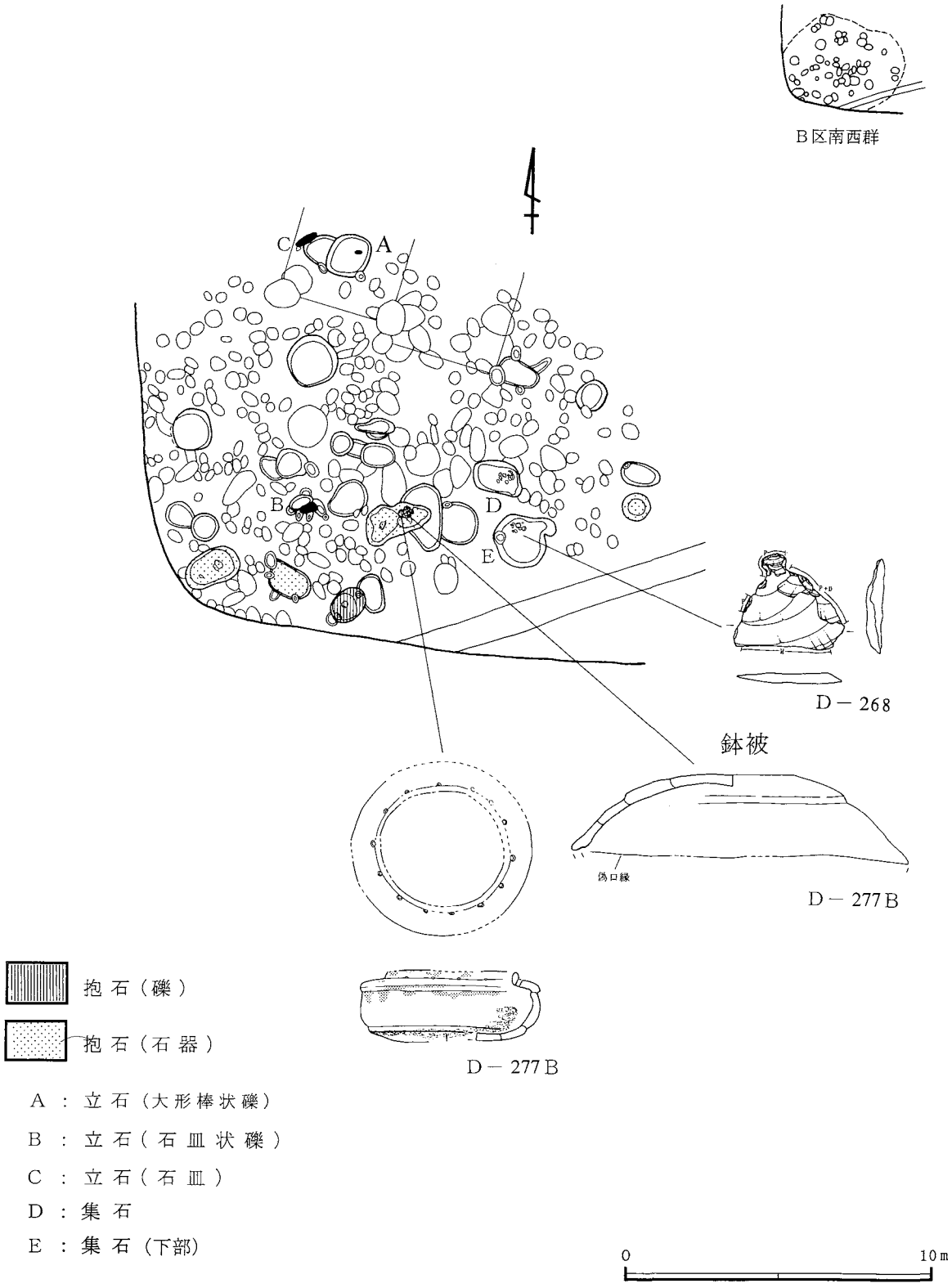
［土壙墓群周辺出土遺物］（付図３～・付図12）

副葬品以外に、この土壙墓の覆土中からは土器・石器が検出されている。土壙墓覆土から出土した土器の時期を示すと、第10表～第33表のとおりである。なお、土壙墓群別に土器型式比率を算出したものが、第26表・第27表である。また、副葬品のみで型式比率を算出したものが第28表・第29表である。両者を比較してみると、副葬品のみでみた場合、土壙墓群が時間的に推移している様子が明快であるが、出土土器全体でみると、時間的推移が不明瞭になってしまう。土壙墓に新しい時期の土器が混入していることはほぼ確実である。それぞれの土壙墓群で出土した遺物がどのような状態であったのかは、すでに土器の項（Ｐ.79～82）及び、石器の項（Ｐ.251～257）で検討した。その結果、Ｄ区中央群・南群では二次的混入が非常に少ないが、それ以外の土壙墓群では少なからず二次的混入遺物が出土していることが確認された。

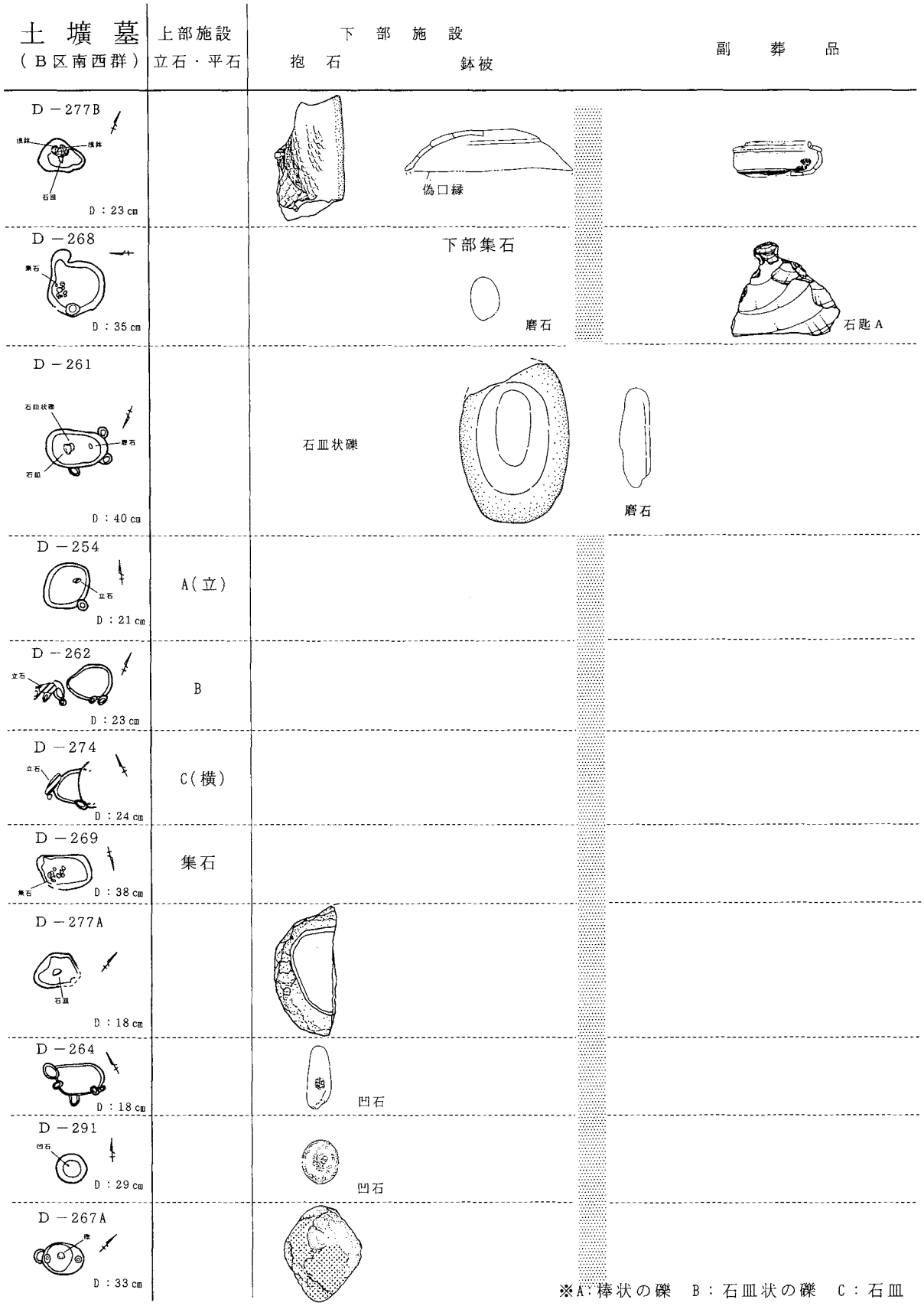
遺物の二次的混入の要因について検討してみよう。遺跡全体の土器の分布状態を、時期別に示したのが、付図３～５である。また石器系列別に示したものが付図６～12である。まず、Ｂ区南群・北群については、有尾式期の住居址のあった部分に土壙墓群が形成されているので、二次的混入の理由は容易に理解できる。また、すでに述べたようにＤ区中央群・南群部分は、遺物の分布密度が低く、二次的混入は生じていない。

しかし、Ｄ区南東群やＢ区南西群の存在する部分には、有尾式～諸磯ｂ式の土器群と各系列の石器群が高密度に分布している。こうした部分は「廃棄帯」や「中央広場」と呼ばれる部分に相当している。副葬品とは時期の著しく異なる遺物が含まれている理由は、本土壙墓群が形成された時期以降に、継続的にこの場所が「廃棄帯」として利用されていたことに帰因している。

特に、Ｄ区南東群では分布密度が高く、立石が樹立された状態で検出されたのも、「廃棄帯」の形成により、立石が埋没してしまったことによると推定される。ただし、この部分に後世の住居がいっさい構築されてないことからみて、長大な立石の上部は露出して目印となっていた可能性が高い。



第260図　B区南西群の施設・副葬品の分布



第261図　B区南西群の施設・副葬品（1）

土 壙 墓 （B区南西）	上部施設 立石・平石	下 部 施 設 抱 石	鉢被	副 葬 品
D－271 D：23cm		球石		
D－260 D：50cm		凹石		
D－255 D：47cm				
D－256 D：42cm				
D－257 D：29cm				
D－259 D：51cm				
D－267B D：25cm				
D－275 D：42cm				
D－276 D：31cm				
D－281 D：27cm				
D－290 D：28cm				

第262図　B区南西群の施設・副葬品（2）

［単独の土壙墓］

土壙墓の要件を満たすもので土壙墓群に含まれないものは少なくとも24基以上存在している。以下、上部施設・下部施設・副葬品に分けて、それらの遺物出土状態を示すことにする。

上部施設を伴う土壙墓　立石と上部集石を有する土壙墓がある。立石を伴う土壙墓としては、D—136・141・158・199・240・217・396・415・524・693・730・824・1075・1096がある。このうち、D—158・396は、住居（J—16住・J—54住）廃絶後に住居中央に作られた土壙墓である。上部に立てられていたと推定される立石は、その後土壙の脇の床面や、住居の壁に立てかけられており、墓壙は住居廃絶直後に床面から掘られたものと推定される。そして、土壙墓が作られてから短時間の後には立石は取り除かれ、住居址に対する廃棄行為が行われたとみられる。したがって、これらの土壙墓は廃屋墓の一種と判断される。これ以外にもD—196・220など、住居址に重複する土坑には、同種のものの可能性があるものが存在している。これらは、いずれも有尾式期のものであり、墓壙の形態も円形であることが共通している。A区に多いことから、より古い形態の土壙墓の可能性が高い。

上部に丸石を伴うものとしては、D—447がある。この事例については、土壙墓群では存在していないので、詳細は不明である。

上部集石の存在する土壙墓としては、D—925がある。この事例では集石は西側にまとまっており、土壙墓群における事例と同じ状態を示している。こうした例では、被葬者頭部の上部に置かれていた可能性が高く、本例も頭位は西と推定される。

下部施設を伴う土壙墓　下部から大形の抱石と推定される石皿・石皿状礫が出土しているものとしては、D—122・315・1086Aがある。また、礫が抱石として出土しているものとして、D—800・864・1082がある。

下部集石の可能性のあるものとしては、D—1105がある。ここでは南側の底面からやや浮いた位置から多孔石や礫がまとまって出土している。有尾式土器のみが出土していることからこの時期のものと判断される。しかし、土壙墓群の分析所見では下部集石は諸磯b式期に開始されたと考えられているので、本例は土壙墓ではなく、一般的な土坑の可能性が高い。

D—963は深鉢破片（同第39図10）が墓壙東寄りの位置から出土しており、「破片被り」の事例と判断される。また、D—396は底面の南端から深鉢の破片（同第156図17・18等）が出土しており、「破片被り」の可能性が高い。土器はいずれも有尾式土器であり、この時期のものである。

副葬品を伴う土壙墓　D—800・864・1126がある。D—800・864はいずれも諸磯a式の深鉢形土器（遺物図版編第39図8・9）を副葬品の深鉢を伴っており、時期が特定できる事例である。D—800では底面中央から深鉢が出土している。また、D—864では底面東寄りの位置から深鉢が出土しており、中央には抱石が出土している。この事例は単独土壙墓の中では最も土壙墓群の事例に近い典型的な事例である。しかし、副葬品が浅鉢でないこと、定位置から出土していない点は、土壙墓群の事例と大きく異なっており、こうした単独の土壙墓に対しては、異なる副葬方法が採用されていた可能性が高い。

D—1126からは、十三菩提式の完形の鉢形土器（遺物図版編第40図8）と、諸磯a式の深鉢の破片（同図7）が出土している。ここでは2つの土坑が重複しており、新しい方の土坑がある程度埋没した段階に、十三菩提式の鉢形土器が土坑の中央に置かれ、すぐ北の位置からは諸磯a式の深鉢破片が出土した。前者は副葬品、後者は諸磯a式土器を二次利用した「破片被り」と推定される。

（大工原　豊）

d　土坑の遺物出土状態

今回の調査では、個々の土坑の遺物出土状態については把握していない。そのため、土坑から出土した土器が、廃棄遺物なのか、自然の流れ込みなのか判断することはできない。こうした微視的な遺物出土状態を把握する方法は採用していないからである(遺構編ｐ.８参照)。したがって、ここでは土器型式比率により共時性を算出し、それがどのように遺跡内に分布するかを検討し、各時期の土坑が遺跡の中でどのような規則性を有していたかを分析する。具体的には、共時性のある土坑の集合体として有尾式期と諸磯ｂ式期の土坑について検討し、土坑群を認定する。そして、それを単位として、相互の関係を分析することによって、土坑群から出土した遺物の意味を理解しようとするものである。なお、ここでは土坑群を形成しない諸磯ａ式期の土坑についての分析は行わない。

［有尾式土器が出土する土坑］（第263図）

有尾式土器が出土する土坑を土器型式比率別に示したものが第263図である。これを観ると型式比率80％以上のものが、８カ所の土坑群を形成していることがよく分かる。これをＡ～Ｈ土坑群として、分析単位と認定することにする。

ここで注目すべき点は、型式比率の高いものだけで、はっきりと土坑群が分離され、型式比率の低いものによるグレーゾーンがほとんど認められない点である。なお、遺跡の南西部分は一見すると型式比率の低い土坑による群が存在するように見える。しかし、諸磯ｂ式期のものとオーバーラップさせてみると、諸磯ｂ式土器も一緒に出土している土坑が多いことが分かる。したがって、この部分から出土した有尾式土器は諸磯ｂ式期の土坑に二次的に混入したものである。住居址の分析所見を援用すれば、これらは諸磯ｂ式期の集落居住者により二次廃棄されたものであると推定されるのである。ゆえに、この部分の土坑はこの時期の土坑群と認定できない。また、遺物の出土しない土坑も存在していたと推定される。その中で土坑群に含まれる土坑はその可能性が高い。しかし、機能的に土器出土土坑と同じかどうか不明である。

有尾式期の土坑群の分布をみると、一定の規則性を有していることが理解できる。同じ時期の住居址の周辺及び南側に一定の範囲で土坑群を形成し、それが一定の間隔をあけて帯状に連なっているのである。したがって、この時期の土坑の在り方は次のように整理される。

①住居に付随して土坑群が形成されている。また、細分時期別に各土坑群をみても、近接する住居群とほぼ同じ時期のものである。したがって、こうした土坑群は集落に付随するのではなく、住居に付随する施設と考えられる。

②土坑の使用方法は土器が混入するような方法で行われているものが多く存在しており、そうした土坑は群を形成し易い状態で有機的結びつき（共時性あるいは通時性）を有していた。

③土坑群間には常に一定の空間が存在しているが、これは住居間の関係と同じ状態である。

④複数の住居が存在している調査区南西部分には、こうした土器型式比率の高い土坑群は存在しておらず、同じ遺跡でもセトルメントが異なっている場所が存在していた。

このように、住居群に対応する形で、土坑群が形成されていることが、有尾式期の特徴であることが明らかとなった。

第263図　有尾式期の土坑分布

第264図　諸磯ｂ式期の土坑分布

［諸磯ｂ式土器が出土する土坑］（第264図）

この時期の土坑の分布をみると、６カ所にまとまりがある。これをＡ～Ｆ群と呼ぶことにする。Ａ・Ｂ・Ｆ群は、有尾式期の土坑群と重複しているので、有尾式期から継続的（あるいは断続的）に利用されて土坑群と推定される。しかし、Ｃ・Ｄ・Ｅ群は重複しておらず、この時期に新たに形成された土坑群とみられる。また、各土坑群の規模や形状は様々であり、有尾式期のような等質性は認められない。特に、Ｄ群は居住域から離れた場所に小規模な土坑群を形成しており、全く異なる在り方である。つまり、Ｄ群は住居に付随するものではなく、集落で共有されていた土坑群と判断される。換言すれば、集落に付随して形成された、社会的機能を有する施設と言えよう。

また、この時期に存在した環状集落の中での位置関係でみると、「中央広場」にはこの時期のものと推定される土坑が多数存在しているにも関わらず、型式比率の高い土坑がほとんど存在していない点は注目される。後述することになるが、「中央広場」には散漫にしか遺物が分布しておらず、たとえ土坑群が形成されていても、土器が混入する状態でなかったと言える。また、環状集落の北西部分には住居が多数存在しており、Ｊ－80・66住など大規模な廃棄が行われている場所に相当するが、こうした土坑はほとんど存在していない。そして、最大規模の「廃棄帯」のあるＤ区南東土壙墓群周辺にも土坑群は形成されていない。そのため結果として、こうした土坑群は環状集落の北東部分（Ａ・Ｂ群）と、南西部分（Ｃ群）に二分されている。したがって、こうした土坑群は、ある程度場所が限定されていた可能性が高いのである。

また、各土坑群の細分時期について検討したが、特に大きな差異は認められなかった。これは、住居址同様二次廃棄の行われていたことに帰因するものと考えられる。したがって、ある程度の時間幅の中での共時性は把握することが可能であるが、細分時期レベルでの土坑群の変遷については、はっきりしない。おそらく、ある程度の時間幅をもって継続的に土坑群が使用されていたものと推定される。

諸磯ｂ式期の土器が出土する土坑群について、以下のように整理される。

①土坑群は特定の場所に形成されており、個々の住居に対応する施設というよりも、集落に付随して共同で利用されていた社会的機能を有する施設であった可能性が高い。

②環状集落に存在する土坑群は北東部分と南西部分に二分されており、集落構成単位との関係を推測することができる。

③「中央広場」にも多数の土坑が存在しているが、土器型式比率が高い土坑は存在しておらず、土器が混入しない使用方法もあったことになる。これは「中央広場」の機能を理解するために留意すべき事実である。

④集落の北東に離れて存在するＤ群は、特殊な機能を有していた可能性が高い。

⑤土坑群の形成は継続的に行われたものと推定される。

以上のように、諸磯ｂ式期の土坑では、有尾式期とは大きな差異があることが解明された。こうした違いは、集落の社会構造の差を反映している可能性が高い。

［土坑からの石器の出土状態について］

土器の出土する土坑群を検討した結果、土坑群により機能差が存在している可能性があることが確認された。そこで、こうした機能差の存在する可能性のある土坑群の出土石器について、石器ブロックの分布状態も含めて検討してみたい。

有尾式期　土坑群ごとの差異を把握することはできなかった。これは石器の出土量が少ないことと、土坑群が等質的な存在であることによるものと考えられる。

諸磯ｂ式期　この時期の土坑群では、群により差異が存在していることが確認された。B群西ではすでに掘立柱建物址の項でも述べているが、石核A類、ScBが集中する傾向が認められ、D類の棒状礫や剝片D類などもやや多い。この部分にはこうした石器類が管理的に集積されていたと考えられるる。また、D群でもScA・打製石斧・ScB、棒状礫・剝片D類などが出土しており、B群と似た様相を呈している。両土坑群に共通するのは、剝片石器の製作や、切削作業に用いる道具類であり、いわば男性系の石器群である。つまり、この2つの土坑群は、男性系の道具の集積場所としての機能を有していた可能性が高いことが理解されるのである。この石器の分析結果は、土器の分析結果と整合性を有しており、この時期の土坑群が社会的機能を有していた可能性はさらに高まったと言えよう。

なお、C群も機能分有されていた可能性が高い。この部分に存在する土坑には、石皿や石皿状礫など大形の石器類や土器が多数出土する円形で比較的深い土坑が多い傾向がある。中には土器製作用の粘土塊が出土しているもの（D－1073）も存在している。この例に象徴されるように、女性系の道具が集積されていた可能性が高い。したがって、C群は「中央広場」を挟んでB・D群に対置されるような社会的機能を有する土坑群であったと見なすことができる。

黒曜石原石の出土した土坑　土坑群以外の土坑で、特殊な石器が出土しているものとしては、D－1078がある（遺構編第168図）。この土坑の底面中央からは大形黒曜石原石（遺物図版編第213図）が置かれた状態で出土した（第128図）。出土状態からみて、この黒曜石は遺棄されたものとみられる。そして、土坑の存在する位置は環状集落の南端部である。また、土坑の形態も長大で浅いバスタブ形を呈する特殊なものであり、本遺跡では他に例がない形態である。したがって、この土坑は本遺跡の性格を理解する上で非常に重要な土坑と考えられる。出土した土器片からみて諸磯ｂ式期のものと判断される。

なお、本黒曜石の自然科学分析結果は、付編を参照されたい。

（大工原　豊）

e　ピットの遺物出土状態

［遺物の含まれるピットについて］

土坑と同様、土器の出土するピットについて、土器型式比率が高いものを抽出し、それらのピットが関連性を有しているかどうかについて検討してみたい。なお、ピットの覆土上部に含まれていたものは、確認作業によりグリッド出土遺物として扱われているため、ここでピット出土遺物としたものは、ピット覆土中・下層出土のものである。また、ピットから大量の遺物が出土する状況は本遺跡では認められていないことから、それぞれの土器型式比率は少数の土器片により算出されたものである。また、大形破片が出土している例は非常に少ない。したがって、ここでデータとして扱う土器は小破片中心であり、型式比率も住居址の場合とは、性格がやや異なっている。そのため、土器型式比率は60％以上に限定して、図示することにした。なお、分析時には土坑と同様にさらに低率のものの含めて作業用分布図を作成しているが、基本的な傾向に変わりがなかったことを付言しておく。また、石器の場合も、大形石器が出土することは、非常に少ないので、出土石器の傾向もこうした点で制約を有している。

［有尾式土器が出土するピット］（第265図・第266図）

有尾式期（型式比率60％以上）のピットは35基存在する。これらのピットの遺跡内での分布状態を図示したものが第265図である。また、これを簡略化して分かりやすくしたものが第266図である。これを観ると、D区中央では有尾式期の住居分布に沿って南東から北西に帯状に存在する傾向が認められる。特に、A群は12～15m間隔で５基のピットがほぼ一列に並んでおり、規則性を有していた可能性がある。なお、この部分の土器ブロックの在り方をみると、A群の場所では土器ブロックが一部しか重複しておらず、流れ込む可能性は少ない。したがって、A群に対しては意図的な土器片混入が行われたと推定される。

また、B群はB区西にある程度まとまるピット群である。ここでは特に規則性をもった配列は認められない。この部分は土器ブロックも重複しており、無意図的に土器片が混入した可能性が高い。

このように、有尾式期の場合、弱いながらピットに規則性が存在している場合（意図的な土器混入）と、無意図的に土器が混入した場合が推測される。

［諸磯ｂ式土器が出土するピット］（第267図・第268図）

諸磯ｂ式期（型式比率60％以上）のピットは108基存在する。この時期のピットの分布状態は第267図のとおりである。また、これを簡略化したものが第268図である。これを観ると、一定の規則性をもったピットの配列が存在していることが分かる。

特に、A群の配列は規則性を有しており、意図的な土器片の混入されたものとみられる。このピット群は環状集落の「中央広場」の外郭線に沿って一定の間隔でピットが楕円形（長径90m・短径73m）に配列している。そして、この円の中心にも土器混入ピットＰ－545（中心ピット）が存在している。こうしたピットの配置は偶然とは言い難く、この配列には特別な意図がはたらいていたと考えられる。

本遺跡では環状集落は諸磯ｂ式古段階に突然形成されるが、この際、北中央に位置する大形掘立柱建物群も出現しており、計画性をもって形成された集落であることが確認されている。また、A群のピット中から出土した土器に混入した土器を調べると、ほぼ同時期の土器片（爪形文系）である。これらの

土器片は同一個体のものはなく、別個体の小破片がバラバラと出土している。土器自体には特に意味を見出せない。したがって、A群は環状集落を形成する際に設置された計画線の痕跡と推定される。環状集落が計画的な集落として造られたものであることを示す有力な証拠の一つである。

A群の円周上に存在するピットと、中心ピットとの関係を検討してみよう。円周上のピットは中心ピットを通って反対側のピットと対応関係にあるものが数例存在しており、中心ピットはマーカーポールとしての機能を有していたと推定される。しかし、中心ピットと円周上のピットの距離は一定ではないので、中心ピットに結んだ綱で円周を決定していたのではないことが分かる。これらのピットには、木柱が立てられていたと推定されるので、円周上の木柱とマーカーポールを見通して位置を決定させる方法が採られていたと考えられる。このようにして設定された円周に沿って掘立柱建物址や住居址かつての土壙墓群（D区南東群）が規則的に存在しており、A群は環状集落の各種施設が計画的に配置される際の目印となって木柱が立てられていたと推定される。

また、A群の内側にも北東から南西方向に帯状にピットが配列（B群）する部分が存在する。そして、B区にも北北西から南南東へ向かう配列（C群）が認められる。こうした直線的な配列も、何らかの意図に基づく基準線の痕跡と推定される。各ピット群と土器ブロックとの関係をみると、B群では北東部分が土器ブロック（Mb—6）に重複しており、この部分のピットが多い。しかし、規則的に配列するピット列の部分には諸磯bブロックは重複していない。したがって、北東部分は無意図的な混入の可能性が高いが、ピット列部分は意図的な混入の可能性が高いと言えよう。また、C群では、土器bブロック（Mb—16）の縁辺部分に位置しており、流れ込みの可能性はさほど高くない部分である。後述するように、このピット列は、石器ブロックA群も重なっており、より強いピット列であるとみられる。以上の様相から、このピット列は集落内に存在していた何らかの区画線であったと推定される。

これら対し、環状集落の南西部のピット群は散漫に規則性もなく分布しており、やや密度の高い土器ブロック（Mb—2）も重複している。したがって、こうしたピット群は、土器が無意図的に混入したものの集合体であった可能性が高い。また、B区の「中央広場」の一部に相当するD群も漠然にまとまるピット群である。この部分は有尾式期のB群とも、土器ブロック（Mb—16）とも重複しており、無意図的に土器が混入してしまった部分の可能性が高い。

［石器の出土するピット］（第269図・第270図）

石器が出土するピットは171基存在する。なお、個々のピットの遺物数が少ないので、土器型式帰属率を算出できないものが多い。しかし、諸磯b式期のピットが75％を占めていることと、諸磯b式土器が出土するピット群とほぼ同じ配列のものが存在することとから、この時期のものが大多数であると推定される。

そして、分布状態は第270図のとおりである。これを簡略化したものが第269図である。これをみると、諸磯b式期の環状集落の「中央広場」と、調査区西部の「もう一つの中央広場」に多数のピットが分布していることが分かる。後者は密集状態であり一つの群を形成するが、特に規則性を有してする訳ではなく、無意図的な混入であった可能性が高い。そして、前者については詳細に観察すると、帯状に連なって分布する部分が「中央広場」の中央北側に幾筋か認められる。何らかの囲いのような施設が存在していた可能性も想定されよう。しかし、土器出土ピットのような明確な規則性は認められず、意図的な混入と断言できるほどではない。また、ここでは敢えて図示しなかったが、系列単位・器種単位に分解し

第265図　有尾式期のピット分布

て配列を検討してみてもはっきりした規則性は認めらなかった。

このように、石器の場合、意図的に混入したというよりも、無意図的に混入されてしまったと判断されるものが多数を占めており、意図性の強い土器の混入とは意味合いが異なっていたと考えられる。むしろ、石器の出土位置は、これらの器種を用いた作業空間などを反映していると考え方が良さそうである。

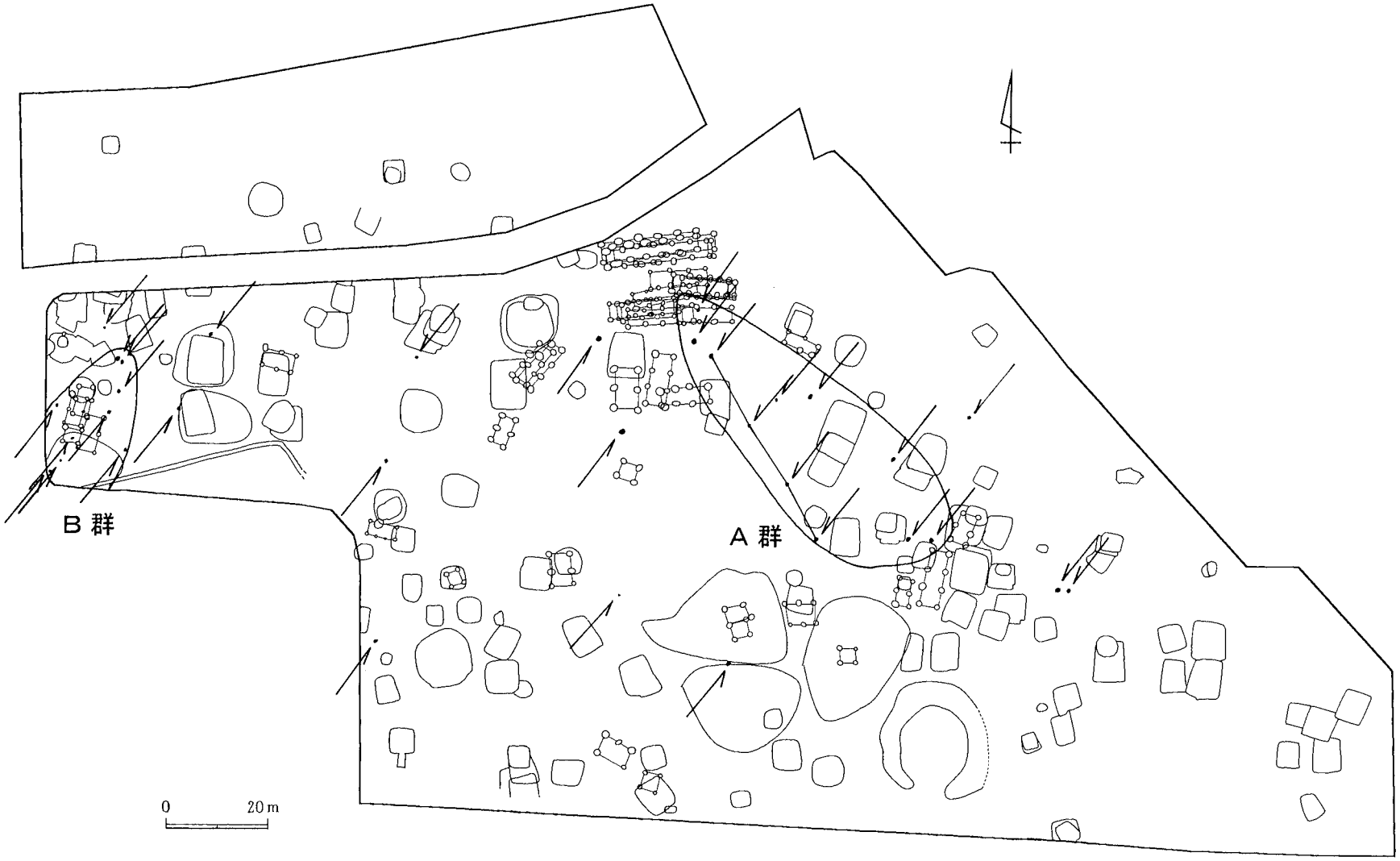
［ピットに遺物が混入する要因について］

こうした規則性のあるピット中に何故土器が含まれているのか、検討してみよう。本遺跡では約7,000基のピットが存在している。少なくとも半数以上は諸磯ｂ式期のものであることは確実であり、ピットに土器が含まれているものは３％以下である。この中には無意図的に混入してしまったものも当然存在しているはずであり、無秩序に存在するピットは、こうした可能性が高い。もし、これらすべてが無意図的な混入であれば、遺物が多い部分ほど遺物混入ピットの出現頻度が高まるはずである。しかし、最大規模の「廃棄帯」の存在するＤ区南東土壙墓群周辺に存在するピットは少なく、遺物分布状態と必ずしも一致しないのである。また、こうした３％にも満たないピットの中で、規則性をもったピット群が出現する可能性も極めて低いことである。

したがって、単に無意図的な混入以外の要因が存在していることはほぼ確実なのである。すなわち、ここには無秩序に存在するピット（無意図的混入）と、規則性をもったピット群（意図的混入）のものが並存していると考えられる。特に諸磯ｂ式期の土器において、意図的混入が顕著である。この時期には何らかの意味を持たせて土器片を入れる行為が行われていたのである。中でも諸磯ｂ式古段階に配列された環状ピット群（Ａ群）は極めて規格性が強く、意図的混入の確たる証拠となり得る事例である。このピット群の存在から、環状集落が計画的に造られた集落であったことがほぼ確認されたと言えよう。

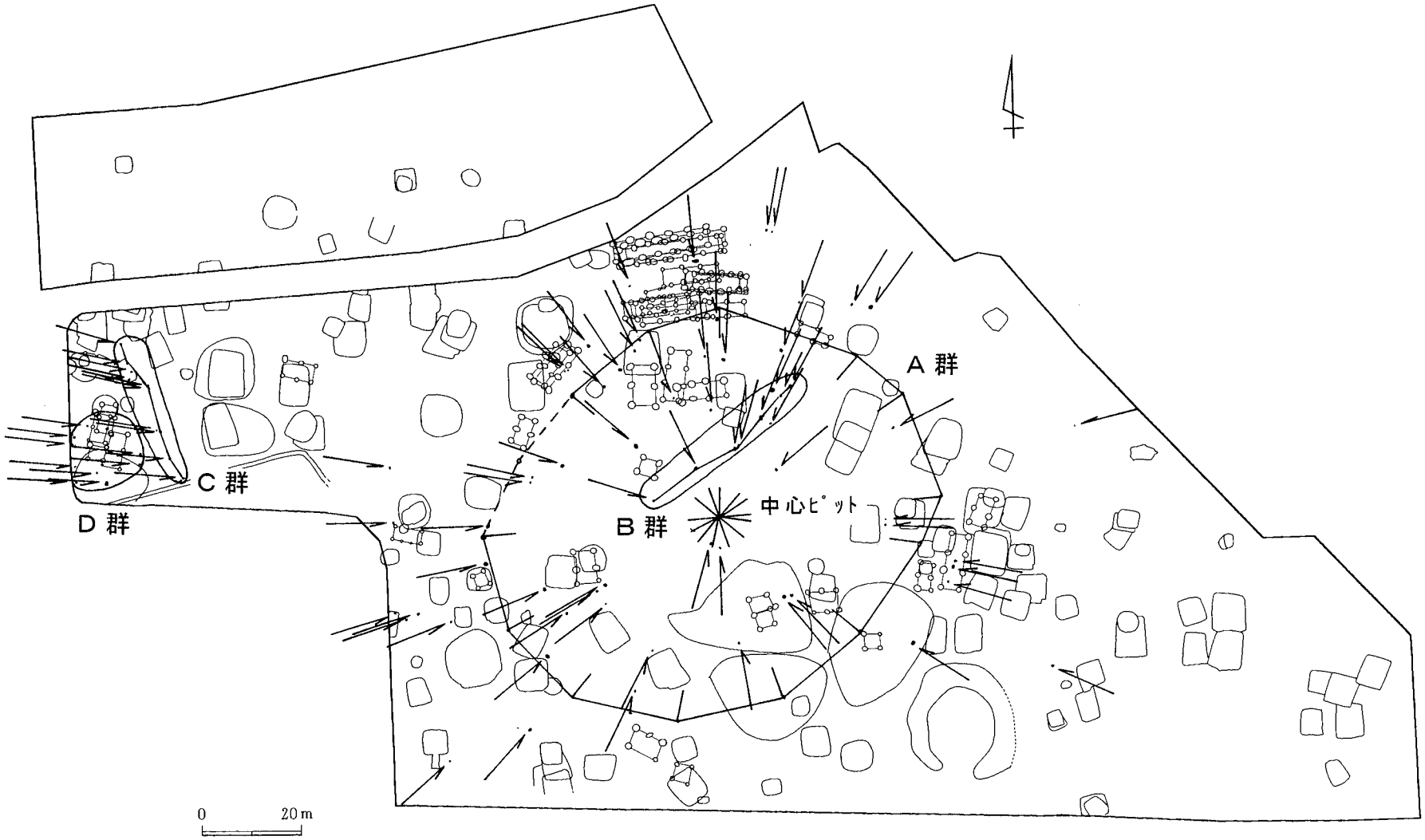
大下原遺跡（有尾式期～諸磯ｂ式期）でも、「中央広場」を中心に2,000基のピットが存在していたが、遺物の混入していたものは４％程度であり、ここでも遺物混入ピット群は規則的な配列が認められている（大工原他　1993）。土器・石器を含めた遺物混入の頻度は、本遺跡では約4.5％であり、混入比率もほぼ等しい。いずれの遺跡でも25基に１基の割合で遺物混入ピットが存在しているのである。したがって、遺物混入ピット、特に土器混入ピットの存在は、一般的なものとして普遍化することができよう。なお、土器混入行為自体には、機能的意味は見い出すことはできない。ゆえに、何かを設定する際に行われた儀礼的行為であったと推定されよう。

（大工原　豊）



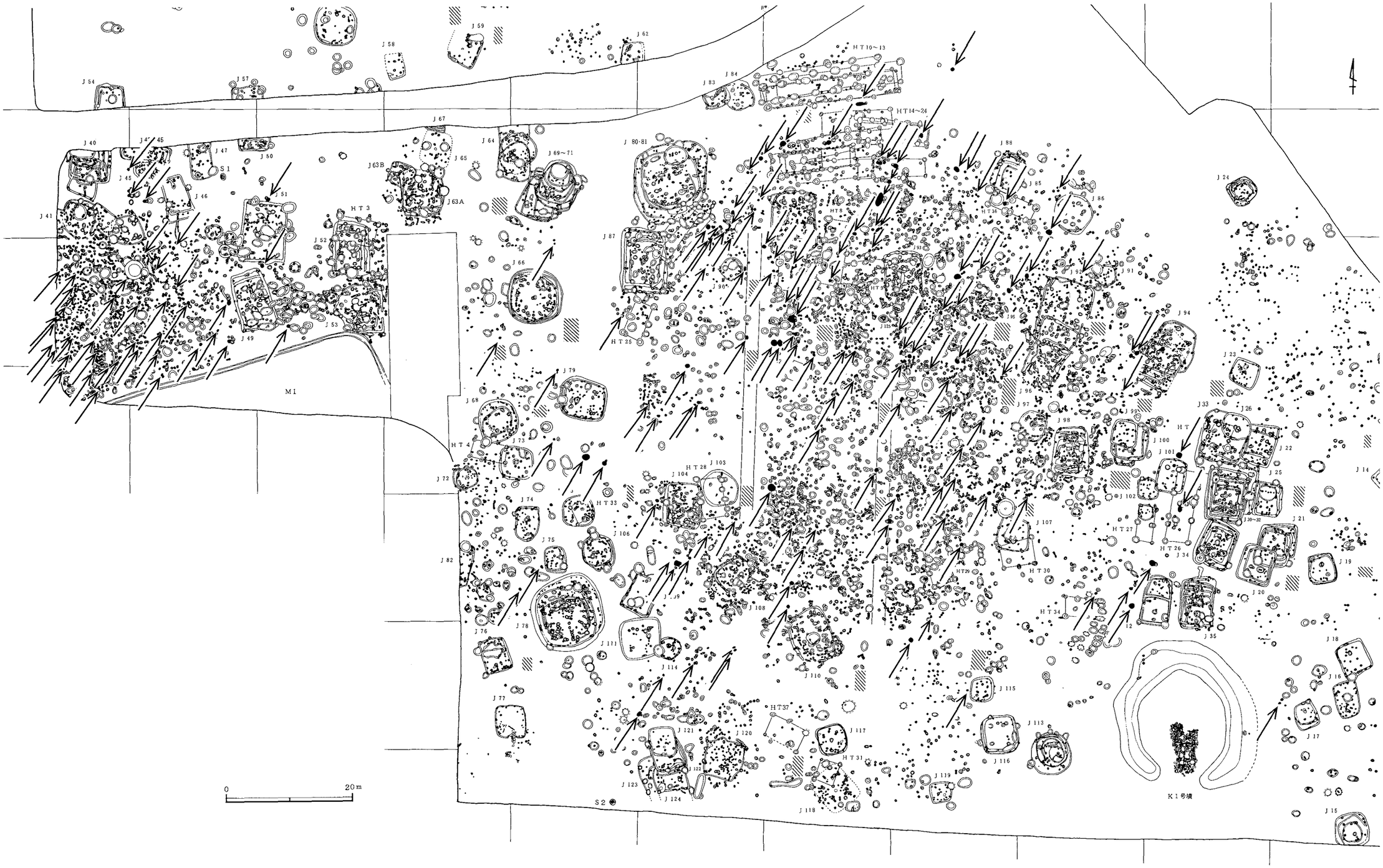
第266図　有尾式期のピット分布概念図

第267図　諸磯ｂ式期のピット分布



第268図　諸磯ｂ式期のピット分布概念図

第269図　石器の出土するピット分布概念図



第270図　石器の出土するピット分布

f　調査区の遺物出土状態

［調査区出土遺物の種類］

調査区内から出土した遺物には、本来は遺構の覆土上層部分に包含されていたものの、調査時に遺構が確認されなかったためグリッド出土遺物として取り上げられたものと、全く遺構に伴わないで、いわゆる「包含層」から出土した遺物がある。また、土坑・ピットから出土した遺物についても、本来近接する部分に存在していたものが、混入した場合と、離れた場所から持って来られて遺構に混入される場合が想定される。さらに、それぞれの場合において、遺棄と廃棄がある。理論的には以上のように分類されるが、実際には土壙墓群など遺棄されたことが確実な例以外は客観的に区別する方法はない。

そこで、ここで行う分析では住居址出土遺物以外の遺物をすべて遺跡全体図にプロットしたものをベースに、分布上認められる視覚的なまとまりについて、分析することにした。

土器では時期別に分布図を作成し、ブロックを設定した。ここでは同じ時期のブロックどうしの関係と、異なる時期のブロックの関係について検討することにした。その結果得られる土器の時間的・空間的な在り方を重層的に把握することを目的としている。ブロックの状態が単層構造の場合、その土器型式の占有空間が特定できる。

占有空間とはその時期に何らかの作業空間として利用されていた部分を示す。占有空間の強さは土器型式比率により示される。天神原遺跡の遺物包含層の分析において占有空間を抽出することを実践している(大工原他　1995)。すでに述べているように、本遺跡では二次廃棄が顕著であるため、明確な占有空間の抽出は、土器型式比率のみでは無理があるため、ブロックの重複度も併せて検討し、占有空間を決定する方法を採る必要がある。しかし、今回の分析では時間的制約もあり、ブロックごとの土器型式比率を算出することができなかった。そのため、ブロックの重複度のみで占有空間を決定する方法を採っている。したがって、やや客観性に欠ける。

なお、石器の場合、系列ごとに分布図を作成し、遺跡内における系列別の空間的在り方と、同じ空間に存在する他系列との関係について分析することにした。なお、ブロック別石器組成については、すでに分析を行っており、①製作②使用③廃棄のいずれのパターンを示しているか検討している。その結果を踏まえ、ここではブロックの位置的関係と遺構との関係を中心に検討する。

そして、土器により占有空間が特定され、かつ、石器により「場」の機能が理解された場合、そのブロック群について、ユニットとして認定することにした。ただし、諸磯ｂ式期に形成された環状集落南東部分の大規模な廃棄場所については、すでに時期・機能が明らかとなっているので、ユニットと認定し、「廃棄帯」という用語で説明することにする。今後の説明が煩雑になることを避けるためである。

［有尾式土器ブロック］（付図３）

大別19ブロック、細別31ブロックに区分することができる。有尾式土器は諸磯ｂ式期に二次廃棄の対象となっており、有尾式土器のみが分布する場所以外は、本来の有尾式土器の分布ではない可能性が高い。例えば、最も土器分布密度の高いAr―１ａ・１ｂブロックは、諸磯ｂ式期の「廃棄帯」に重複しており、二次廃棄による影響を大きく被っていることが分かる。そのため、分布密度によらず、確実に有尾式土器のみが分布する部分については、有尾式期の占有空間と認定可能である。こうして抽出された占有空間としては、Ａブロック群（Ar―10～15ブロック）、Ｂブロック群（７ａ西部・９ａ・９ｂ・９ｄ

ブロック)、Cブロック群（16･17ｂブロック）の３ブロック群が認定できる。なお、こうした全体的なブロックの配置状態からみて、諸磯ｂ式期の「廃棄帯」に相当するAr―１ａブロックの一部にも有尾式期の占有空間が存在していた可能性が高い。

次に、これらのブロックの位置関係をみると、Ar―９ａ・９ｂ・17ｂブロックは土坑群と重複していないが、それ以外は土坑群と重複している。これはブロック設定の際、土坑出土遺物も含めてブロックを設定している技術的な要因である。したがって、遺物包含層として一定のエリアに土器が散布するような土器ブロックは、ほとんど存在していない。この要因としては、遺物包含層を形成するような居住形態ではなかったことや、諸磯ｂ式期の二次廃棄行為が徹底的に行われていたといったことが推定される。

時間的変遷過程について検討してみたい。まず、櫛歯状刺突文は有尾式１段階にほぼ限定される文様であるので、この土器群の分布状態を調べることにする。この文様は量的に少なく、明確な傾向を把握することは難しいが、Ar―18ブロックに多く存在する傾向が認められる。この部分は土坑群Hと重複しているので、関連性が推測される。また、Ar―２ｄブロックにもやや多い。この部分はＪ―78住を中心として分布しており、二次廃棄によって集積された可能性もあるものの、一つのまとまりを形成している。この２ブロック以外では、櫛歯状刺突文は極めて低密度で散布している状態である。最も密度の高いAr―１ａブロックでも、この文様は非常に少ない。したがって、この２つのブロックは本遺跡における集落形成の初期段階に利用された空間であった可能性が高い。また、それ以降の時期については、特徴的な文様が存在しないため、ブロック変遷の様相を明確に示すことはできない。

有尾式期の土器ブロックの様相について整理すると次のとおりである。

①諸磯ｂ式期の二次廃棄による影響が大きく、すべての占有空間を抽出することは難しい。

②有尾式期のみの土器ブロック群は住居群の南の部分に存在し、全体として南東から北西方向に点在している。こうした部分はこの時期の占有空間と認定される。

③有尾式土器ブロック群の配置は、この時期の住居群や土坑群の配置と類似しており、住居群・土坑群・土器ブロック群が一体となって一つの単位を構成していたと判断される。これは集落を構成する基本単位と考えられる。

④有尾式１段階の土器ブロックは、調査区の西部（Ar―18）と南西部（Ar―２ｄ）の２カ所に存在しており、この場所が本遺跡の集落形成の初期段階に使用されていたものと推定される。

［諸磯ａ式土器ブロック］（付図４）

この時期には大別11ブロック、細別13ブロックが存在する。他の時期の土器ブロックとの重複関係をみると、諸磯ｂ式土器ブロックとすべて重複している。しかし、有尾式土器ブロックのみとの重複は認められない。諸磯ａ式土器ブロックは、諸磯ｂ式期と密接に関連していたことが確認される。この状況は土器の編年的位置付け（本遺跡では有尾式期と諸磯ａ式期の間に一時的に断絶期が存在する）と一致している。また、ブロックの位置関係からみて、諸磯ｂ式期の二次廃棄の対象とされた可能性が高い。

以上のことから、諸磯ａ式土器ブロックは次のように整理される。

①諸磯ａ式期のみの土器ブロックは存在せず、確かな占有空間を抽出することができない。

②諸磯ａ式土器ブロックは、有尾式よりも諸磯ｂ式の土器ブロックと近い配置であり、前者とは断絶が認められる。これは土器群の編年的位置付けと矛盾しない。

［諸磯ｂ式土器ブロック］（付図５）

この時期には大別17ブロック、細別21ブロックが存在する。これまで観てきたように、この時期には二次廃棄行為が活発であり、他の時期の本来の土器分布に大きく影響を与えている。こうした状況からみて、おそらく諸磯ｂ式の土器群自らも二次廃棄の対象となり、古い時期の土器分布が変化していることが推測される。したがって、現在確認できる分布状態は、諸磯ｂ式中段階頃の行動様式が強く反映されているものと考えられる。そして、土器ブロックの存在する場所は、すべてこの時期を中心とした占有空間と認識される。

全体的な土器分布の特徴は、環状集落の南東部（Mb－１ブロック）と南西部（Mb－２ａ～ｃブロック）に高密度に土器が集積された部分が存在していることである。南西部分は土器の密度が比較的高いものの、住居群・土坑群（Ｃ群）などが存在しており、廃棄以外の空間として利用されている。しかし、南東部分では、住居・土坑等の遺構がほとんど存在していないにも関わらず、高密度に土器が分布している。そこで、この部分を特にユニットと認定し、「廃棄帯」と呼んで区別している（ｐ.380参照）。「廃棄帯」に相当するのはMb－１ブロックである。ここでは二次廃棄も含め繰り返し廃棄行為がおこなわれていることから、結果として時期・種類に関係なくほとんどの遺物が集中することになっている。

「廃棄帯」以外の土器ブロックで、廃棄行為に関連するブロックとしては、Ｊ－66住を囲むように存在するMb－３ブロックが典型例である。ここでは住居址に対して大規模な廃棄が行われており、住居址に廃棄された土器と同じ性格の土器ブロックであるとみられる。これと同じような状態は、Ｊ－78住とMb－２ｃブロック、Ｊ－119住とMb－２ａブロックの東端などにも認められる。これらはいずれも廃棄行為に関連するブロック群と判断される。

環状集落の「中央広場」部分には、低密度のブロックが存在している。この中で、Mb－9a～ｄブロックは直径20mの空間を囲むように四方にブロックが展開しており、規則性のある配置が認められる。おそらく、何らかの意味のある占有空間であったと推定される。以上のように、「中央広場」に存在する土器ブロックは廃棄以外の行為に伴うものであった可能性が高い。

また、Mb－７ブロックは、南部分がＤ区中央土壙墓群と重複しており、この土壙墓群は最終的に諸磯ｂ式古段階まで墓域として利用されており、関連性がうかがえる。なお、大形掘立柱建物址群に重なるMb－５・６ブロックは、すでにこの遺構の項でも述べたとおりであり、この時期の集落の中枢部分である。

土坑群との関係をみると、Mb－１北部・2a～ｃ・６・12・13・16ブロックが土坑群と重複している。しかし、土器ブロックのエリアと一致していない場合が多く、一体のものとは言い難い状態である。これに対し、Ｂ区に存在するMb－14・15ブロックはそれぞれＢ区北・同南土壙墓群そのものであり、その性格は言うまでもない。

そして、その西に位置するMb－16ブロックはＢ区南西土壙墓群や掘立柱建物址（HT－2a～2d）を含んいる。ここでは、土壙墓群と掘立柱建物址部分が最も密度が高く、外縁部では密度が低い。なお、この部分にはもう一つの「中央広場」が存在しているが、Ｄ区の「中央広場」とは様相を異にしている。

次に、時期別変遷について検討してみたい。前述のごとく諸磯ａ式期の土器群は、諸磯ｂ式古段階と密接に関連しているものであることが判明している。また、そこで、諸磯ａ式土器の分布状態と、諸磯ｂ式古段階の特徴的文様である爪形文系土器の分布状態を比較してみたい。すると、両者とも同じような分布傾向を示すが、諸磯ａ式の分布は全体に規模が小さく、爪形文系土器群の方が遺跡全体に分布域

が拡大していることが分かる。次に、諸磯ｂ式中段階以降の特徴的文様である浮線文土器の分布と、爪形文土器の分布を比較してみよう。すると、両者はほとんど同じ分布状態を示しており、浮線文の方が分布密度が高まっていることが分かる。唯一、爪形文土器が卓越するのは、Mb―10ブロックであるので、この場所は古段階の占有空間と判断される。こうした土器の分布状態からみて、諸磯ａ式期以降諸磯ｂ式中段階まで、継続性をもって発展的に、集落域全体が活用されていったことが読みとれる。また、土器ブロックの時期的な偏在性はほとんど認められないことから、細分時期別に占有空間を抽出することはできない。これは、再三に渡って問題にしてきた、二次廃棄による土器の拡散現象によるものなのか、本来の様相であるのはは、即断できないものの、おそらく前者の影響は相当強かったと思われる。

以上、諸磯ｂ式土器ブロックの様相を整理すると次のとおりである。

①諸磯ｂ式土器ブロックは、二次廃棄の影響があるものの、本来的な土器分布がある程度保たれていると判断される。したがって、それぞれの土器ブロックは、この時期の占有空間を示していると言える。

②環状集落の南東部には大規模な土器ブロックが存在しており、「廃棄帯」と判断される。ここにはこの時期の遺構が少なく、専ら廃棄行為の場所として機能していたことが分かる。

③住居址の周辺に存在する土器ブロックは住居址に対する廃棄行為の一部と推定される。

④「中央広場」には低密度の土器ブロックが存在している。これらに廃棄の場としての機能は認められない。中には空白域を囲むように規則的に配列する土器ブロックも存在しており、廃棄以外の行為に関係する占有空間であったと推定される。

⑤土坑群と土器ブロックとの一体性は認めらない。これは有尾式期の場合とは様相が異なる。

⑥諸磯ａ式期以降諸磯ｂ式中段階に至るまで、基本的にブロックの配置に変化はなく、発展的に分布域を拡大させていることが判明した。また、二次廃棄の影響もあり、細分時期別の占有空間の抽出はできない状態である。

［土器ブロック相互の関係について］（第271図）

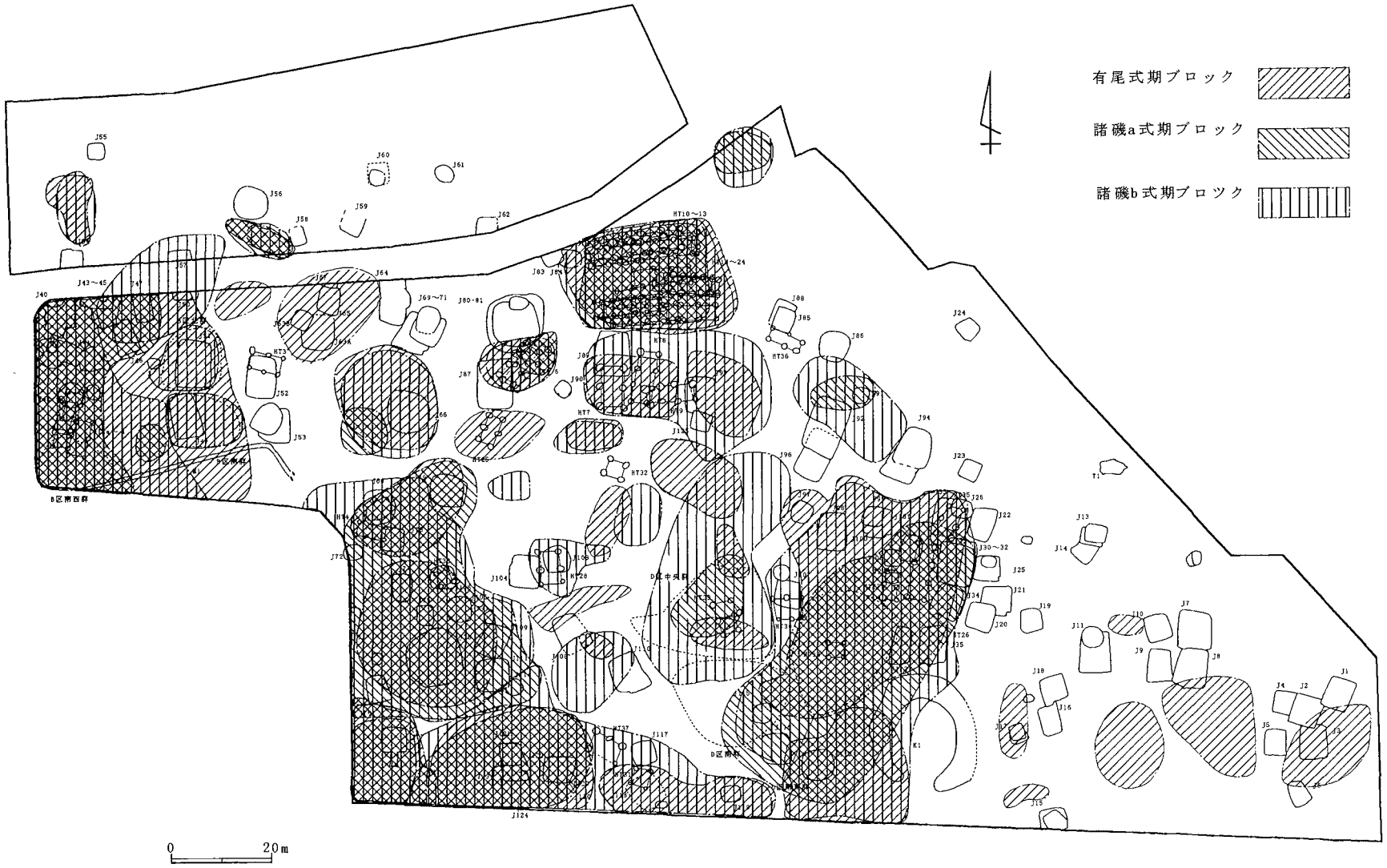
有尾式から諸磯ｂ式の土器ブロックの位置的関係について示したものが第271図である。すでに各項で述べているが、ここで再度まとめておくことにする。

①有尾式期と諸磯ａ式期では、土器ブロックの配置が大きく異なっているので、この間に占有空間の配置が大きく変化したことが分かる。この変化は集落の一時的断絶によるものと推定される。

②諸磯ａ式期と諸磯ｂ式期では、土器ブロックの配置は基本的に同じであり、発展的にブロックが拡大している。したがって、この間に集落の断絶はなく、集落は継続的に存在していたと推定される。

③諸磯ｂ式期には、定住性の強化に伴い「廃棄帯」が形成される。また、定住性の強化と関連して二次廃棄が活発に行われ、古い時期の土器分布を大きく変化させてしまっている。したがって、必ずしも土器分布が集落における占有空間を示しているものではないことが判明した。

（大工原　豊）



第271図　土器ブロック相互の関係

［石器Ａ類ブロック］（付図６）

大別15ブロック、細別17ブロックが存在する。Ａ類ブロックは遺跡全体に存在しており、Ｂ類ブロックとともに分布域も広い。石器組成分析により、①製作②使用③廃棄のいずれのパターンの傾向が強いか判明している。その結果は以下のとおりである。

①・②：Ａ―11・13・16ブロック

②：Ａ―2b・５・７・12・15ブロック

①・③：Ａ―１・2c・2a・３・４・６・８・９・10・14ブロック

有尾式期の占有空間に存在するブロックとしては、Ａ―12・16ブロックがある。Ar―16ブロックは有尾式期の占有空間（Ar―16ブロック）に存在し、土坑Ａ群の西部に位置している。ここにはScA １・石核Ａ２・FLA １が存在しており、①・②パターンを示している。また、Ａ―12ブロックはこの時期のＪ―63Ａ住の北側に位置し、②パターンを示している。これらの場所には、Ａ類ブロックのみが存在しているので、ある程度作業内容も限定される。組成内容からみて、Ａ類に関する小規模な作業空間と推定される。ただし、いずれの石器の数量が少ないので、活動自体は低調であったとみられる。時期と機能の推定が可能なこれらのブロックを、単独機能ユニットとして認定することにする。すなわち、Ａ―16ブロックをArU―１ユニット、Ａ―12ブロックをArU―２ユニットと認定する。

これ以外にも有尾式期のＡ類ブロックは存在していたはずであるが、残りは諸磯ｂ式土器ブロックと重複しており、有尾式期のものを分離することはできなかった。

前述のブロック以外は、諸磯ｂ式期の土器ブロックと重複するブロックであり、集落全体に存在している。「廃棄帯」に相当するＡ―１ブロックが圧倒的に分布密度が高い。そして、Ａ―2c・14ブロックがこれに次いで比較的密度が高い。

また、Ａ類ブロックは分布域が広いため、他の系列のブロックとも重複する部分が大きい。したがって、単独機能ユニットとして認定することはできない。こうした複合機能ユニットの認定については、後で項を設けて行うことにする。

なお、遺棄された黒曜石原石について分布図に図示した。大形の黒曜石原石が環状集落の南縁部から出土している状態は、集落構造と関連し興味深い。

［石器Ｂ類ブロック］（付図７）

大別18ブロック、細別20ブロックが存在する。最も数量・密度とも高く、遺跡の広範な部分にブロックが存在する。分布域の多くは諸磯ｂ式土器ブロックと重複している。石器組成分析の結果、次のブロックではある程度場の機能を推定するような傾向が抽出されている。

②：Ｂ―2a・６ブロック

①・②：Ｂ―４・５・16ブロック

①・③：Ｂ―１・2b・2c・15・17・18ブロック

有尾式期の占有空間に存在するブロックとしては、Ｂ―15・７西半部・12北半部などがある。Ｂ―15ブロックは、Ar―13ブロック及び土坑Ａ群と重複している。①・③パターンの傾向が認められるが、包含層出土石器では、ScB １・FLB ３と貧弱な組成であり、作業内容を特定できないものの、何らかの作業空間であったと思われる。また、Ｂ―７・12ブロックでは、いずれも打製石斧が組成している点で共通している。これらのブロックは、石器組成が貧弱であるため、機能推定が難しく、ユニットとして認

定することはできない。

諸磯ｂ式期の土器ブロックと重複するＢ類ブロックは、遺跡に広く分布しているため、他系列のブロックと相当重複している。なお、Ｂ－１ブロックは「廃棄帯」に相当する部分である。Ｂ－２ａ・２ｂブロックも廃棄的の色彩が強い場所に存在している。

［石器Ｃ１類ブロック］（付図８）

10ブロックが存在する。環状集落を中心に、ブロックが分布している。有尾式期の占有空間に存在するブロックとしては、Ｃ１－５西半部があるのみである。このブロックでは包含層で石皿１・凹石２が存在しており、これらをセットで用いた作業が推定される。なお、この部分には他系列のブロックも重複しているので後述することにする。それ以外のブロックは諸磯ｂ式土器ブロックと重複関係をもっており、この時期の可能性が強い。なお、Ｃ１－１ブロックは「廃棄帯」に該当する。また、Ｃ１－２・10ブロックも廃棄場所の色彩の強い部分に相当する。

［石器Ｃ２類ブロック］（付図９）

６ブロックが存在する。この系列のブロック群は環状集落の南半部分と、調査区西部に偏在する傾向が認められる。有尾式期の占有空間に存在するブロックとしては、Ｃ２－４南半部があるのみである。このブロックでは敲石が出土している。他系列のブロックと重複する部分に相当する。Ｃ２－１ブロックは「廃棄帯」に相当する部分である。また、Ｃ２－２・６ブロックも廃棄ブロックとしての色彩が強い部分である。

なお、この系列では、諸磯ｂ式期の石皿の分布状態に特徴が認められるので図示した。IIａ形態（楕円形・凹面）は環状集落の東半分に分布しており、儀礼的に底面を穿孔したものもここに集中している。これに対し、西半部分では、IVａ形態（四角形・凹面）が欠損した状態で出土している。この差異は単に時期的な差異とも考えられるが、集落を構成していた集団の社会的理由による可能性もあり、興味深い出土状況である。

［石器Ｄ類ブロック］（付図10）

７ブロックが存在する。有尾式期の占有空間に存在するブロックは存在しない。すべて諸磯ｂ式土器ブロックと重複している。掘立柱建物群の場所に存在するＤ－３・４ブロックはすでに述べているように、これらの遺構との関連性がうかがえる。Ｄ－１は「廃棄帯」に相当する。

なお、この系列の石棒・槍状石器などの分布状態を図示しておいたが、石棒は環状集落の西半部分にのみ存在している。これは、先に示した穿孔石皿と対峙する関係とも考えられる。

［石器Ｅ類ブロック］（付図11）

Ｅ－１ブロックのみが存在する。このブロックは「廃棄帯」に相当するものである。なお、蛇紋岩製の定角式の磨製石斧２点は中期末以降のものと判断されるものである。

［石器Ｆ類ブロック］（付図12）

Ｆ－１ブロックのみが存在する。このブロックは有尾式期のＤ区南東土壙墓群そのものであり、「廃棄

帯」には含まれない。なお、この系列に含まれる装身具類をすべて図示した。遺跡全体に分布しており、土壙墓への着装品以外は、集落全体から出土しており、特に集中する部分は認められない。

［石器ブロック相互の関係について］（第272図）

各系列の石器ブロックを重ね合わせると、第272図のように示される。この状態をみると、同じ部分に多くのブロックが重複していることが分かる。ほとんどの系列が重複する場所として、諸磯ｂ式期の環状集落南東部に存在する「廃棄帯」がある。また、環状集落南西部と、調査区西部にもこれに近い重複部分が存在している。そして、環状集落北中央部にもブロックが重複する部分が存在している。これらの部分も廃棄の場として利用された頻度が高かったと推定される。ただし、後者については、大形掘立柱建物群が継続して構築され続けられていることから、単に廃棄行為の場ではなく、使用頻度が高かったためとも考えられよう。

有尾式期のユニットは単一の系列により構成される単独機能ユニットであったが、諸磯ｂ式期では複数の系列により構成される複合機能ユニットとして、認定されるものが存在する。以下、複合機能ユニットの事例を示す。

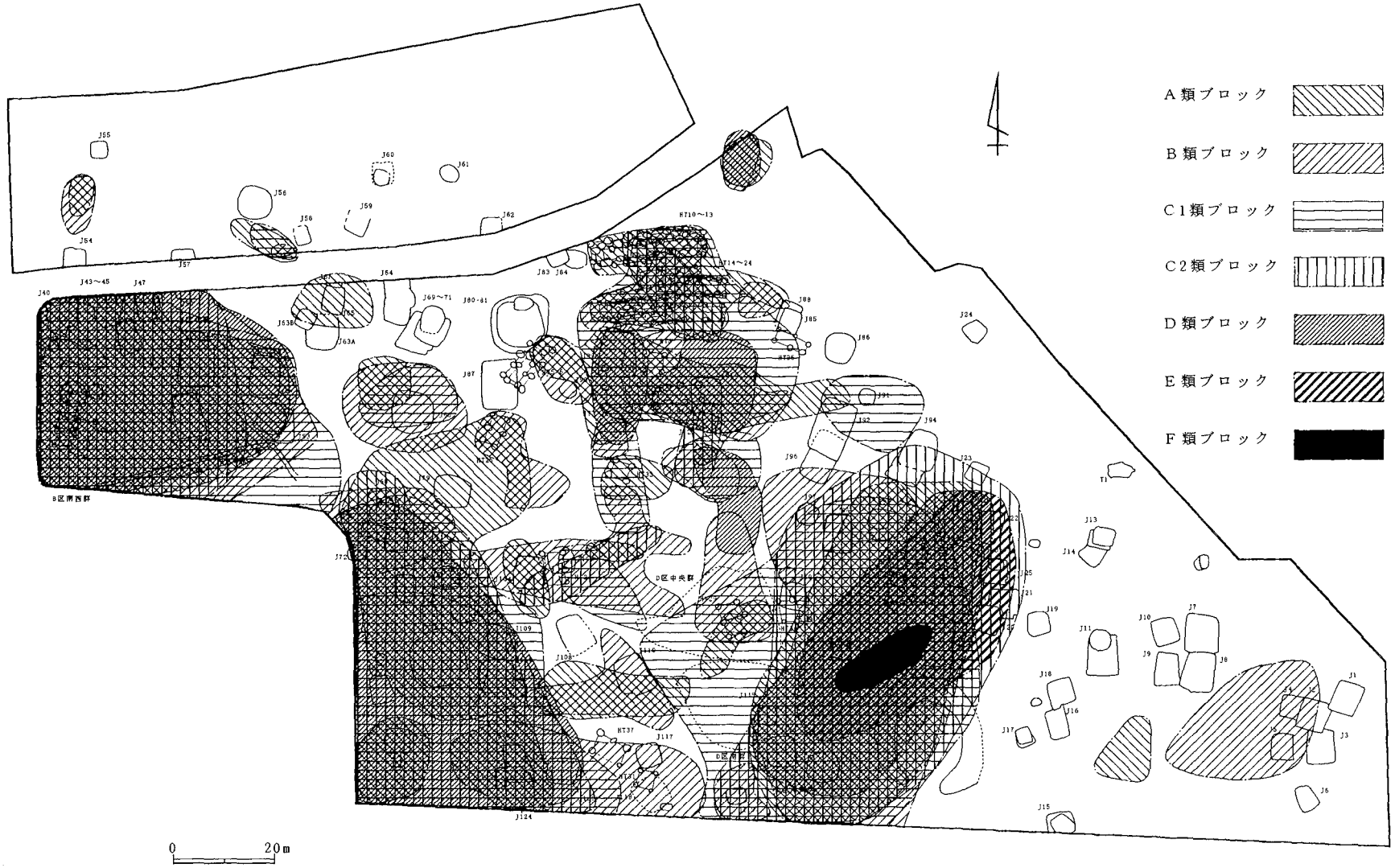
諸磯ｂ式土器ブロック（Mb—11）と土坑Ｄ群の存在する環状集落の北東に離れた場所は、この時期の占有空間である。また、土坑群の項でも述べているように、Ａ類・Ｂ類・Ｄ類ブロックのみが重なっており、これらが複合的に①製作②使用された場所と推定される。したがって、この場所に存在するＡ—11・Ｂ—14・Ｄ—６ブロックをMbU—１ユニットとして認定する。

また、ＨＴ—９号掘立柱建物址（諸磯ｂ式中段階）の東部には、Ａ類・Ｂ類・Ｄ類ブロックが重複し、石核Ａ類やScB・棒状礫などが石器の製作に関する器種が集積されている部分が存在している。この部分には諸磯ｂ式土器ブロック（Mb—６）と土坑Ｂ群が重複している。有尾式土器ブロック（Ar—６ｂ）と土坑Ｅ群が存在していることから、時期の決定がやや難しいが、総合的にみて諸磯ｂ式期の様相が強く、この時期のものと判断される。そこで、この場所に重複するＡ—６・Ｂ—６・Ｄ—４ブロックをMbU—２ユニットと認定する。

次に、ブロックの重複の稀薄な部分についてみると、環状集落の「中央広場」はブロックの稀薄な部分が広範に存在している。中でも、HT—25号掘立柱建物址の東側に広がる空白部分は特異である。この部分は周囲に比べやや窪んでおり、包含層に相当するⅣ層は厚く堆積していたのである。しかし、遺物は逆に他の部分に比較して著しく少なく、中央広場の中でも特別な場所として、位置付けられていた可能性が高い。このように、「中央広場」には、様々な作業に伴って形成されたと考えられる稀薄なブロック群と、遺物が放置されることのないある種「聖」なる空間が存在していたことが分かる。しかし、各ブロックとも石器の数量が少ないため、機能を推定することは困難で、ユニットを認定するまでには至らなかった。

また、ブロックの稀薄な、あるいは途切れる部分が南中央、北西、北東の３カ所に存在しており、ちょうど三角形を呈する。こうした稀薄な部分は、集落の出入り箇所であった可能性が考えられよう。

（大工原　豊）



第272図　石油ブロック相互の関係

5　縄文時代中期後葉から後期前葉の遺物

(1)　土　　器

a　分　　類

中野谷松原遺跡では縄文時代中期、後期の土器が出土しているが、次のような基準によって分類した。まず、今までの研究によって抽出される型式を群として分類し、器種(器形と文様から分類される一群)によって類に区分した。

［第1群土器　加曽利Ｅ３式］

ａ類　いわゆるキャリパー形の深鉢形土器で、文様は口縁部文様帯と胴部文様帯に区分される。口縁部文様帯は渦巻文、横方向の蕨手文、楕円の区画文などから構成され、胴部文様帯は地文縄文に２本一対の垂下文、縦方向の蕨手文などから構成される。

ｂ類　器形はａ類に似るが、口縁部文様帯と胴部文様帯の間に頸部無文帯が存在し、文様に隆線が多用される。いわゆる「胴部隆帯文土器」と考えられる。

ｃ類　器形はａ類に似るが、口縁部文様帯、胴部文様帯が隆帯によって構成される。加曽利Ｅ３式とは異なるが、並行する時期のものと考えられる。

ｄ類　器形はａ類に似るが、口縁部文様帯と胴部文様帯の区別がない。口縁に平行して沈線が１条巡り、その下部に波状文や逆Ｕ字文、蕨手文が施される。

ｅ類　器形はａ類に似るが、口縁部文様帯と胴部文様帯の区別がない。口縁に平行して沈線が１条巡り、Ｈ字状の文様が施される。ｄ類の文様が概ね２段構成であるのに対し、本類は１段構成のものである。

ｆ類　器形はａ類に似るが、胴部のくびれ部を境にして口頸部文様帯と胴部文様帯に区分される。口頸部文様帯には２本一対の波状文が施され、胴部には逆Ｕ字状の文様が施される。本類はいわゆる連弧文土器と関連する一群である。

ｇ類　広口壺形土器。口縁部無文帯、頸部文様帯、胴部文様帯に区分される。頸部文様帯に施される文様はａ類の口縁部文様帯に施される文様に類する。橋状把手が付くものが多い。

［第2群土器　加曽利Ｅ４式］

本群は従来加曽利E4式とされるものを分類したものであるが、称名寺式としても認識されるものを含んでいる。

ａ類　平縁ないし小波状の口縁をもつ深鉢形土器。頸部に施された隆帯によって口縁部無文帯と胴部文様帯が区分される。胴部文様帯は隆帯の起点部（突起状になる）から施されるＵ字文と、Ｕ字文の間に逆Ｕ字文によって構成される。

ｂ類　器形、文様帯構成ともにａ類に似るが、胴部文様帯は全面に縄文が施される。

ｃ類　波状口縁の深鉢形土器。ａ類に比べ胴部のくびれが強い。文様構成はｂ類に類似し、波頂部に

橋状把手が付けられる。

［第３群土器　称名寺式］

ａ類　波状口縁や小波状の口縁を持つ深鉢形土器。帯縄文によって構成される複雑な文様が施される。

ｂ類　波状口縁の深鉢形土器。文様帯の構成は第２群ａ類に似る。波頂部に８字状の突起が施される。

ｃ類　平縁の深鉢形土器。平面的な磨消縄文が施される。

ｄ類　平縁で砲弾状の深鉢形土器。頸部に隆帯が巡り口縁部文様帯と胴部文様帯を区分する。胴部文様帯は無文のもの、縄文のもの、条線のものがある。無文のものが小さく条線を施こしたものが比較的大きいという傾向がある。

ｅ類　頸部でくびれる深鉢形土器。くびれ部に隆帯が施される。

ｆ類　胴部でくびれ球状の胴部をもつ深鉢形土器。

ｇ類　平縁で砲弾状の深鉢形土器。口縁部に１状の沈線がめぐる。沈線より下部は無文のものと櫛画文を施したものがある。この類は加曽利Ｅ３式・４式に比定されるの可能性もある。

ｈ類　頸部でくびれる深鉢形土器。くびれ部より下側に１状の隆帯を巡らし、口縁部文様帯と胴部文様帯を区分する。頸部に橋状把手を付けたものが多い。

［第４群土器　堀之内１式］

ａ類　胴部上半でくびれ、３ないし４単位の小波状を呈する口縁をもつ深鉢形土器。円形の刺突文と１条の沈線からなる口縁部文様帯をもつ。胴部文様帯は３条ないし４条の沈線によって曲線的な文様が施されている。

ｂ類　胴部のくびれの弱い深鉢形土器。いわゆる下北原式に類する。

ｃ類　いわゆる朝顔形の深鉢形土器。文様が隆線によって構成されるものと、沈線によって構成されるものとがある。

［第５群土器　堀之内２式］

ａ類　いわゆる朝顔形の深鉢形土器。

ｂ類　頸部で屈曲する浅鉢形土器。

ｃ類　注口土器。

b　各遺構出土の土器

［住居址出土の土器］（遺物図版編第174図～177図・第182図４）

Ｊ－72号住居址の土器（同第174図１～８）

第174図１・２・４～８は第１群ａ類である。７は縄文ではなく条線を施している。３は第３群ｅ類であると考えられる。しかし、一般的なものに比べ器壁が薄く、胎土、色調、器面調整なども異質なものである。隆帯上に施されたヘラ先によるものと思われる刻みも類例に乏しく、あるいは後期中葉以降の土器である可能性もある。

本住居址出土の土器は概ね加曽利Ｅ３式比定のものである。

Ｊ－73号住居址の土器（同第174図９～19）

第174図９は住居址南側の壁際で検出された埋設土器で、第１群ｄ類である。底部を欠損する以外はほぼ完形である。14は炉址１から検出された深鉢形土器の胴部で、第１群ａ類である。10～13・15～19は第１群ａ類であるが、18・19は縄文ではなく条線を施している。

本住居址出土の土器は加曽利Ｅ３式比定のものである。

Ｊ－90号住居址の土器（同第175図１～５、第176図１～５）

第175図２・３、第176図４はＪ－90号住居址の覆土を掘り込んでいるＤ－２号土坑から検出された土器で、何れも第１群ａ類に分類される。

第175図１・４・５、第176図１～３・５はＪ－90号住居址覆土から検出された土器で、第175図１、第176図５は第１群ｆ類に、第175図４・５、第176図２は第１群ａ類に分類される。第176図１は頸部に無文部があり、第176図３とともに胴部の文様が隆帯によってなされている。これらは第１群ｂ類に分類される。

Ｊ－90号住居址とＤ－２号土坑の間には切り合い関係から明確な時間差が存在するが、土器は何れも加曽利Ｅ３式に比定されるものであり、型式レベルの時間差は認められない。

Ｊ－97号住居址の土器（同第176図６～11）

第176図６は住居址南側の壁際から検出された埋設土器で、波頂部と胴部下半を欠損する。住居址覆土から検出された７・10とともに第１群ａ類に分類される。９は頸部に無文部を有することから加曽利Ｅ２式の可能性もあるが、口縁部に施されている文様が太く浅い沈線で描かれ、単位文化していることから加曽利Ｅ３式と判断される（第１群ａ類）。11は第１群ｆ類に、８は第１群ｇ類に分類される。

本住居址出土の土器は加曽利Ｅ３式比定のものである。

Ｊ－77号住居址の土器（同第177図１～９）

第177図２は住居址北西部から検出された埋設土器で、胴部下半のみが検出された。意匠文様はなく、器面には縦方向のナデ調整がなされている。器形や胎土、調整などから称名寺式の粗製土器と判断される（第３群ｄ類）。１は住居址柄部から検出された粗製の埋設土器で、口縁部を欠く。頸部の屈曲部に一条の隆帯が巡る他は文様が施されず、器面には頸部が横方向の、胴部が縦方向のナデ調整が施されてい

る。第３群ｅ類に分類される。３～９は住居址覆土から検出された土器で、４・６は第３群ｃ類、５は第３群ａ類、７は第３群ｄ類に分類される。３は櫛画による文様で称名寺式に比定されると考えるが、明確な時期は不明である。８は第４群ｃ類、９は第５群ａ類に分類される。

本住居址に明確に伴う土器は１・２の粗製の埋設土器で、何れも称名寺式に比定される。一方、覆土から出土した土器は称名寺式（３～７）、堀之内１式（８）、堀之内２式（９）に比定される。

Ｊ―114号住居址の土器（同第177図10～12）

第177図10・12は炉址から検出された土器で何れも第１群ａ類に分類される。11は住居址東側の壁際から検出された埋設土器で、胴部下半を欠損する。第１群ｇ類に分類される鉢形土器である。頸部文様帯や胴部には条線による文様が施されるが、渦巻文の下部には単節縄文が施されている。

本住居址出土の土器は加曽利Ｅ３式比定のものである。

Ｊ―65号住居址出土の土器（同第182図４）

第182図４は炉址から検出された土器で、胴部下半を欠損する。文様は単節縄文と隆帯とからなり、沈線による文様表現はない。４単位の小波状口縁で、波状部には隆帯による渦巻文が施され、その渦巻文下に縦２条の隆帯が施されている。波状部間にも縦２条の隆線が施され、口縁部には弧状の隆線が、頸部には横方向の隆線が１条施されている。口縁部には単節 LR 縄文が横方向に、胴部には単節 LR 縄文と単節 RL 縄文が縦方向に施されている。異質な土器であるが、縄文の施文方向や文様構成、波状部の渦巻文などから加曽利Ｅ３式ないしは加曽利Ｅ３式に並行する土器と考える（第１群ｃ類）。

［埋設土器］（同第178図１～４）

１はＢ区で検出された埋設土器で、第１群ｅ類に分類される。２は30―67グリッドで検出された埋設土器で、１と同じく第１群ｅ類に分類される。３・４はＤ区で検出された埋設土器で、３は第１群ｄ類に、４は第１群ａ類に分類される。

住居址外から検出された埋設土器は、何れも加曽利Ｅ３式比定のものである。

［土坑出土の土器］（同第179図１～６、第180図１～10、第181図１～７、第182図１～３）

第179図１～６、第180図１～10はＪ―78号住居址の上層に掘り込まれた土坑から検出された土器である。第179図１は第３群ａ類で、１単位の大きな突起が付く深鉢形土器。２・４は第３群ｄ類、６は第３群ｈ類に分類される。２・４は口縁部から３～５㎝下のところに１条の隆帯を巡らせ、その下に単節 LR 縄文を縦方向に施したものである。加曽利Ｅ４式からの系譜をたどるもので、時間的な変化に乏しい一群である。３・５はＤ―535号土坑から検出された土器で、何れも無文の土器である。器形や胎土、器面調整から３は第３群ｄ類に、５は第３群ｄ類ないしｅ類と判断される。第180図１～４・７はＤ―529号土坑から検出された土器である。１は胴部の文様が３本一対の沈線によって描かれている土器で、堀之内１式でも新しい段階のものである（第４群ａ類）。４もおそらく１と同様の器形になると考える。３はいわゆる「朝顔形」の深鉢で第４群ｃ類に、２は第５群ａ類に分類される。２は帯縄文による重層的な幾何学文様が施されており、堀之内２式でも古い段階のものと考えられる。７は２や３のように「朝顔形」の深鉢になると思われるが、帯縄文ではなく、微隆起と細い沈線によって幾何学文様（重圏文）が

描かれている。施文の方法は堀之内１式のものに似ているが、文様から堀之内２式と判断される。D―529号土坑の土器は堀之内１式の新しい段階から堀之内２式の古い段階のものである。５・６・８～10はD―530号土坑から検出された土器で、５は第２群ａ類に、６は第２群ｂ類に分類される。しかし、これらの土器群はほとんど変化せずに称名寺式の中頃以降まで存続しており、５・６の土器も称名寺式の段階である可能性が高い。８・９はいわゆる「関沢類型」（石井1992）で第３群ｂ類に、10は第３群ｃ類に分類される。

第181図１は第１群ａ類、２は第１群ｃ類に分類される。３は胴部が緩やかに屈曲する浅鉢形土器である。口唇部に刻目文を巡らせ、屈曲部には指頭によるものと思われる浅く広い溝が１条巡る。器面の調整は横方向のミガキ調整である。第５群ｂ類に分類される。４・５は同一土坑から検出された土器であるが、４は第３群ｄ類に、５は第３群ｄ類ないしｅ類に分類される。６は第３群ｇ類に分類される。７は第183図９・10とともにD―486号土坑から検出された土器であるが、７は第３群ｄ類に、第183図９・10は第３群ｇ類に分類される。何れも、櫛画文が器面に施されている。第182図１は第４群ａ類に分類される土器の胴下半部である。２・３は何れも第３群ａ類に分類される。３は４単位の小波状口縁となり、波頂部には２つの刺突文とそれを結ぶ短い沈線が施されている。波頂部の下には縦の無文部があり、この無文部を区切りとして４単位の文様が施されているように見える。器面には下書きの線と思われる細く浅い線が消されずに残っている。

第183図は土坑出土の破片資料であるが、１・２、14、16、18～22が第１群ａ類に、15が第２群ａ類に、23が第２群ｃ類に、６～８、11・12、25が第３群ａ類に、４が第３群ｂ類に、３が第３群ｃ類に、５、13が第３群ｄ類に、24が第３群ｆ類に、17が第５群ａ類にそれぞれ分類される。

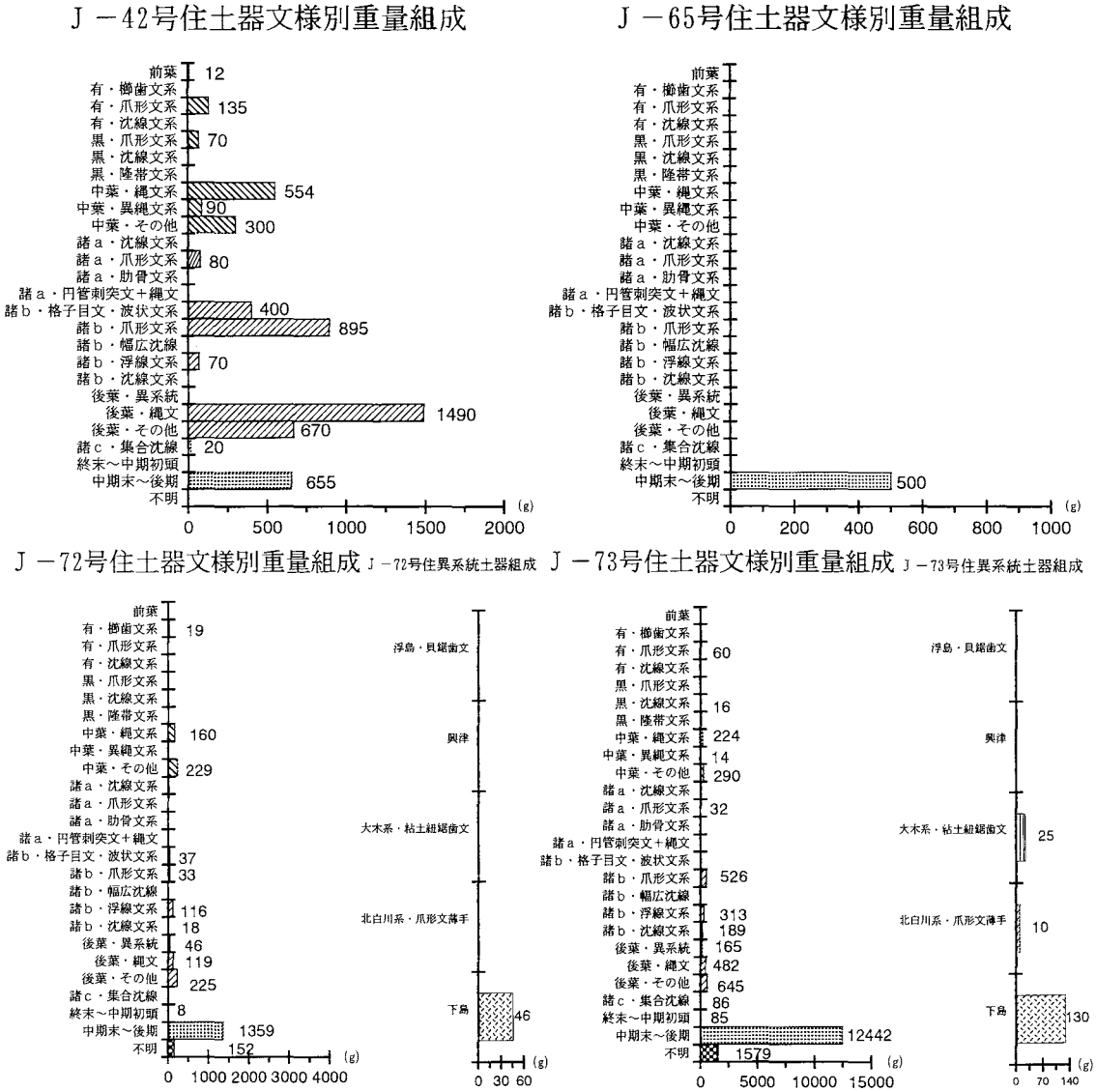
［中・後期調査区出土の土器］（同第184図１～３、第185図１～21、第186図１～21）

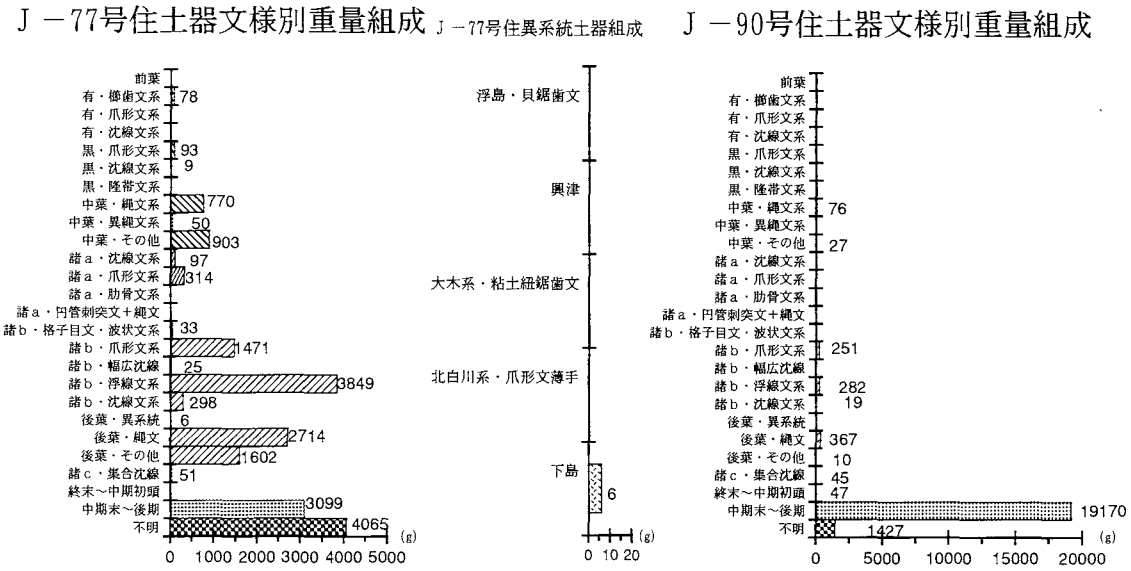
第184図１～３、第185図１～７は第１群ａ類に分類される。５・６には沈線間に櫛画による波状文が施されている。８は第１群ｆ類に、９は第２群ｂ類に分類される。10は第１群ｅ類に分類されるが、いわゆる「吉井城山類」（谷井・細田1995）である。11は第３群ｈ類に、12、14～16は第３群ａ類に、13は第３群ｃ類に、17～20は第３群ｄ類に、21は第４群ａ類に分類される。第186図１は堀之内１式の鉢であろうか。２～４は第３群ｆ類に分類されるが、あるいは堀之内１式に降る可能性もある。５は第４群ｂ類に、６～11は第４群ａ類に分類される。12は堀之内１式と思われるが全体の器形は不明である。押圧を伴った隆帯によって文様部と無文部を区別している。13～15は第４群ｃ類に分類される。16、20は第５群ｃ類に、17～19は第５群ａ類に分類される。21は堀之内２式の粗製土器であろうか。

［中・後期調査区出土の土製品］（同第186図22）

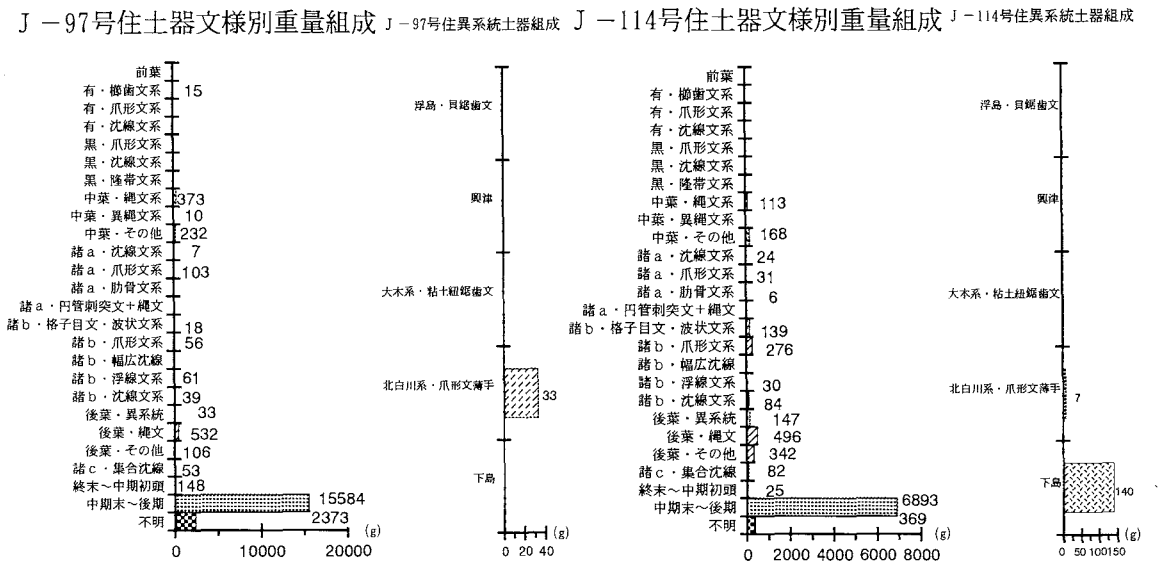
第186図22は耳栓状の土製品で、平面部分には中央に刺突文が施され、その周りを沈線が巡っている。時期は共伴した土器から加曽利Ｅ３式～称名寺式期のものと考えられる。機能・用途は不明である。

（林　克彦）





第273図　住居址出土の土器文様別重量組成（1）



第274図　住居址出土の土器文様別重量組成（2）

住居址＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
J-042		757	392	1,198	2,407	20			655		5,429
J-065									500		500
J-072		408		99	449	8	46		1,359	152	2,521
J-073		477	127	66	2,121	86	165	85	12,442	1,579	17,148
J-090		103			929	45		47	15,220	1,427	17,771
J-097		630		374	530	53	51	148	13,034	2,373	17,193
J-114		281		435	968	82	172	25	6,893	369	9,225
J-077		825	1,078	759	9,644	51	6		3,099	4,065	19,527

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木４式など、中期後～後期前は加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式を示す。

第170表　中・後期住居址出土土器の型式別重量

住居址＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
J-042		14.45	6.89	3.68	62.58	0.37			12.04		100
J-065									100.00		100
J-072		16.18			21.74	0.32	1.82		53.91	6.03	100
J-073		2.78	0.74	0.38	12.37	0.50	0.96	0.50	72.56	9.21	100
J-090		0.47			4.28	0.21		0.22	88.26	6.57	100
J-097		3.19		1.81	2.86	0.27	0.17	0.75	78.93	12.02	100
J-114		3.05		1.60	13.88	0.89	1.59	0.27	74.72	4.00	100
J-077		4.22	5.52	3.60	49.68	0.26	0.03		15.87	20.82	100

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木４式など、中期後～後期前は加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式を示す。

第171表　住居址出土土器の型式比率

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0072		92			55				73		220
D-0128		19			189				12	128	348
D-0237		504		30	2503			5	165		3207
D-0285				25					83		108
D-0292		64			71		30		78		243
D-0295									33		33
D-0300		306		192	734				19		1251
D-0314		29							247		276
D-0316		41			281				136	93	551
D-0330		344			202				1000	258	1804
D-0414		81			32				346	86	545
D-0417		202			390			43	43		678
D-0420		81			403				52		536
D-0421		273			1188				39		1500
D-0430		97			516	10		481	81	110	1295
D-0441		69			39				2660	133	2901
D-0442		166						64	52		282
D-0450		270		251	1099				16		1636
D-0462		14	21	39	163	30			54	352	673
D-0473		75			122				135		332
D-0475					332				1503	1113	2948
D-0476					32				27		59
D-0477				58				25	44	478	605
D-0478						10			13		23
D-0480		43			189				148	3681	4061
D-0481		16			95				1723	871	2705
D-0482		155	72	100	759				835	1720	3641
D-0483		82			201				444	229	956
D-0485		161			111				131		403
D-0486		97		18	232		17	55	8399	258	9076
D-0490				43	66				100	6	215
D-0491					84				2531	228	2843
D-0493		88			268	46			2110	47	2559
D-0495		18			60	50			27	145	300
D-0498					95				662		757
D-0510	15	154		74	317				171	135	866
D-0512		13			215				720		948
D-0515					182				712		894
D-0516		1008			61				18	235	1322
D-0519		20		10					3903		3933

第172表　中・後期土坑出土土器の型式別重量（1）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0520			587	47	218				365	405	1622
D-0522		65							40		105
D-0523					100				15		115
D-0528		65			18				180	50	313
D-0529		312	146	42	877				10969	1950	14296
D-0530		65		34	2213				2230	373	4915
D-0532		342		25	1692				605	945	3609
D-0533		152			1510				200	133	1995
D-0535		151		41	524				4240	40	4996
D-0536		135			355				50	64	604
D-0642		129		27	726			14	32		928
D-0644		310			125				75	215	725
D-0647		30			35				90		155
D-0727		546	129	1510	7045				80	80	9390
D-0728			115		40				40		195
D-0739		65				20			30	5	120
D-0744		30			5				180		215
D-0758		393	292		15				85		785
D-0765					90				80		170
D-0784		50							135		185
D-0787									37		37
D-0789									543		543
D-0796					15				45		60
D-0804									40		40
D-0811									138	15	153
D-0829		440							30	242	712
D-0830		200						45	10	415	670
D-0835		80			30				100		210
D-0840		185							40	5	230
D-0844									175	10	185
D-0877	15	15			35				215	50	330
D-0880		59	63						40	286	448
D-0898				24	16		85		205	60	390
D-0899					20				15		35
D-0903		10							60		70
D-0909									190		190
D-0910		55			365			15	90	365	890
D-0912		145		24	391				620		1180
D-0919		10			90				30		130
D-0928								5	40		45

第173表　中・後期土坑出土土器の型式別重量（2）

土坑＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
D-0954		645			15				280	170	1110
D-0961		80			295			45	20		440
D-0962		30			175				15	65	285
D-0977		10			25				30	30	95
D-0985		55			40				30		125
D-0991		1790			475	15	15		1760		4055
D-1002		40		61	492	35	20		195		843
D-1005		295		257	556			15	410		1533
D-1014					40				170		210
D-1015		170		17	223		25		270	60	765
D-1016		32	63	14	76	50			1190	180	1605
D-1018		255		85	475				1020	140	1975
D-1073		185		567	519	58			1872	150	3351
D-1074					49		9	12	102	71	243
D-1075				128	686				289	57	1160
D-1076		62		57	83				1363	46	1611
D-1094		73			192				1054	9	1328
D-1097		25			361	6	19		832	240	1483
D-1103									252	31	283
D-1106		182		177	1702				3912	24	5997
D-1107		55		70	72				294	83	574
D-1121					45				11		56
D-284・1層		53			46				1529		1628

第174表　中・後期土坑出土土器の型式別重量（3）

ピット＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0072		41.82			25.00				33.18		100
D-0128		5.46			54.31				3.45	36.78	100
D-0237		15.72		0.94	78.05			0.16	5.14		100
D-0285				23.15					76.85		100
D-0292		26.34			29.22		12.35		32.10		100
D-0295									100.00		100
D-0300		24.46		15.35	58.67				1.52		100
D-0314		10.51							89.49		100
D-0316		7.44			51.00				24.68	16.88	100
D-0330		19.07			11.20				55.43	14.30	100
D-0414		14.86			5.87				63.49	15.78	100
D-0417		29.79			57.52			6.34	6.34		100
D-0420		15.11			75.19				9.70		100
D-0421		18.20			79.20				2.60		100
D-0430		7.49			39.85	0.77		37.14	6.25	8.49	100
D-0441		2.38			1.34				91.69	4.58	100
D-0442		58.87						22.70	18.44		100
D-0450		16.50		15.34	67.18				0.98		100
D-0462		2.08	3.12	5.79	24.22	4.46			8.02	52.30	100
D-0473		22.59			36.75				40.66		100
D-0475					11.26				50.98	37.75	100
D-0476					54.24				45.76		100
D-0477				9.59				4.13	7.27	79.01	100
D-0478						43.48			56.52		100
D-0480		1.06			4.65				3.64	90.64	100
D-0481		0.59			3.51				63.70	32.20	100
D-0482		4.26	1.98	2.75	20.85				22.93	47.24	100
D-0483		8.58			21.03				46.44	23.95	100
D-0485		39.95			27.54				32.51		100
D-0486		1.07		0.20	2.56		0.19	0.61	92.54	2.84	100
D-0490				20.00	30.70				46.51	2.79	100
D-0491					2.95				89.03	8.02	100
D-0493		3.44			10.47	1.80			82.45	1.84	100
D-0495		6.00			20.00	16.67			9.00	48.33	100
D-0498					12.55				87.45		100
D-0510	1.73	17.78		8.55	36.61				19.75	15.59	100
D-0512		1.37			22.68				75.95		100
D-0515					20.36				79.64		100
D-0516		76.25			4.61				1.36	17.78	100
D-0519		0.51		0.25					99.24		100

第175表　中・後期土坑出土土器の型式比率（1）

ピット＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0520			36.19	2.90	13.44				22.50	24.97	100
D-0522		61.90							38.10		100
D-0523					86.96				13.04		100
D-0528		20.77			5.75				57.51	15.97	100
D-0529		2.18	1.02	0.29	6.13				76.73	13.64	100
D-0530		1.32		0.69	45.03				45.37	7.59	100
D-0532		9.48		0.69	46.88				16.76	26.18	100
D-0533		7.62			75.69				10.03	6.67	100
D-0535		3.02		0.82	10.49				84.87	0.80	100
D-0536		22.35			58.77				8.28	10.60	100
D-0642		13.90		2.91	78.23			1.51	3.45		100
D-0644		42.76			17.24				10.34	29.66	100
D-0647		19.35			22.58				58.06		100
D-0727		5.81	1.37	16.08	75.03				0.85	0.85	100
D-0728			58.97		20.51				20.51		100
D-0739		54.17				16.67			25.00	4.17	100
D-0744		13.95			2.33				83.72		100
D-0758		50.06	37.20		1.91				10.83		100
D-0765					52.94				47.06		100
D-0784		27.03							72.97		100
D-0787									100.00		100
D-0789									100.00		100
D-0796					25.00				75.00		100
D-0804									100.00		100
D-0811									90.20	9.80	100
D-0829		61.80							4.21	33.99	100
D-0830		29.85						6.72	1.49	61.94	100
D-0835		38.10			14.29				47.62		100
D-0840		80.43							17.39	2.17	100
D-0844									94.59	5.41	100
D-0877	4.55	4.55			10.61				65.15	15.15	100
D-0880		13.17	14.06						8.93	63.84	100
D-0898				6.15	4.10		21.79		52.56	15.38	100
D-0899					57.14				42.86		100
D-0903		14.29							85.71		100
D-0909									100.00		100
D-0910		6.18			41.01			1.69	10.11	41.01	100
D-0912		12.29		2.03	33.14				52.54		100
D-0919		7.69			69.23				23.08		100
D-0928								11.11	88.89		100

第176表　中・後期土坑出土土器の型式比率（2）

時期 / ピット	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
D-0954		58.11			1.35				25.23	15.32	100
D-0961		18.18			67.05			10.23	4.55		100
D-0962		10.53			61.40				5.26	22.81	100
D-0977		10.53			26.32				31.58	31.58	100
D-0985		44.00			32.00				24.00		100
D-0991		44.14			11.71	0.37	0.37		43.40		100
D-1002		4.74		7.24	58.36	4.15	2.37		23.13		100
D-1005		19.24		16.76	36.27			0.98	26.74		100
D-1014					19.05				80.95		100
D-1015		22.22		2.22	29.15		3.27		35.29	7.84	100
D-1016		1.99	3.93	0.87	4.74	3.12			74.14	11.21	100
D-1018		12.91		4.30	24.05				51.65	7.09	100
D-1073		5.52		16.92	15.49	1.73			55.86	4.48	100
D-1074					20.16		3.70	4.94	41.98	29.22	100
D-1075				11.03	59.14				24.91	4.91	100
D-1076		3.85		3.54	5.15				84.61	2.86	100
D-1094		5.50			14.46				79.37	0.68	100
D-1097		1.69			24.34	0.40	1.28		56.10	16.18	100
D-1103									89.05	10.95	100
D-1106		3.03		2.95	28.38				65.23	0.40	100
D-1107		9.58		12.20	12.54				51.22	14.46	100
D-1121					80.36				19.64		100
D-284・1層		3.26			2.83				93.92		100

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木４式など、中期後～後期前は加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式を示す。

第177表　中・後期土坑出土土器の型式比率（３）

ピット＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
P-040		11							38		49
P-055					7				45		52
P-067					15				20		35
P-078					41				8	32	81
P-081					30				68	9	107
P-096					15				59		74
P-105		38			52				279		369
P-108		5			19				19	24	67
P-112		273			25				11	69	378
P-117					76				81	19	176
P-123		32							17	14	63
P-133		8			38				38	46	130
P-138		56			15				27		98
P-140		19							24	18	61
P-142					27				36	24	87
P-147		32							29	43	104
P-162									11		11
P-166		8			13				68		89
P-173					19				59	32	110
P-177									44	54	98
P-180					25				36	15	76
P-182									278		278
P-183					76				17		93
P-192					23				158		181
P-229					111				15		126
P-247		27			166				14		207
P-297					264				11		275
P-327		65			284				25		374
P-334					162				27	53	242
P-357					249				11	44	304
P-380									33	14	47
P-381					30			12	24	23	89
P-386					18				33		51
P-387		6			8				20		34
P-390		13							12		25
P-397								10	8		18
P-399					21				315	101	437
P-405					77				7		84
P-406									136	60	196
P-417									139	38	177

第178表　中・後期ピット出土土器の型式別重量（1）

ピット＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(g)
P-426								11	49		60
P-428									76		76
P-430									38	32	70
P-437		19							38		57
P-447					56				19	37	112
P-449		20			43				23		86
P-457		1,845			30				23	400	2,298
P-471		3			35				99		137
P-474					24				13		37
P-526									149	20	169
P-535		10			445				16		471
P-542		8							8		16
P-552									40		40
P-556		11							54		65
P-559									121	31	152
P-580					78				39		117
P-581		9	4		155				129		297
P-591					77				42	134	253
P-596					37	20			131	36	224
P-601				45	9	6	21		69	52	202

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木４式など、中期後～後期前は加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式を示す。

第179表　中・後期ピット出土土器の型式別重量（2）

ピット＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
P-040		22.45							77.55		100
P-055					13.46				86.54		100
P-067					42.86				57.14		100
P-078					50.62				9.88	39.51	100
P-081					28.04				63.55	8.41	100
P-096					20.27				79.73		100
P-105		10.30			14.09				75.61		100
P-108		7.46			28.36				28.36	35.82	100
P-112		72.22			6.61				2.91	18.25	100
P-117					43.18				46.02	10.80	100
P-123		50.79							26.98	22.22	100
P-133		6.15			29.23				29.23	35.38	100
P-138		57.14			15.31				27.55		100
P-140		31.15							39.34	29.51	100
P-142					31.03				41.38	27.59	100
P-147		30.77							27.88	41.35	100
P-162									100.00		100
P-166		8.99			14.61				76.40		100
P-173					17.27				53.64	29.09	100
P-177									44.90	55.10	100
P-180					32.89				47.37	19.74	100
P-182									100.00		100
P-183					81.72				18.28		100
P-192					12.71				87.29		100
P-229					88.10				11.90		100
P-247		13.04			80.19				6.76		100
P-297					96.00				4.00		100
P-327		17.38			75.94				6.68		100
P-334					66.94				11.16	21.90	100
P-357					81.91				3.62	14.47	100
P-380									70.21	29.79	100
P-381					33.71			13.48	26.97	25.84	100
P-386					35.29				64.71		100
P-387		17.65			23.53				58.82		100
P-390		52.00							48.00		100
P-397								55.56	44.44		100
P-399					4.81				72.08	23.11	100
P-405					91.67				8.33		100
P-406									69.39	30.61	100
P-417									78.53	21.47	100

第180表　中・後期ピット出土土器の型式比率（1）

ピット＼時期	関山II	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	前期後葉異系統	前期末～中期初	中期後～後期前	不明	合計(%)
P-426								18.33	81.67		100
P-428									100.00		100
P-430									54.29	45.71	100
P-437		33.33							66.67		100
P-447					50.00				16.96	33.04	100
P-449		23.26			50.00				26.74		100
P-457		80.29			1.31				1.00	17.41	100
P-471		2.19			25.55				72.26		100
P-474					64.86				35.14		100
P-526									88.17	11.83	100
P-535		2.12			94.48				3.40		100
P-542		50.00							50.00		100
P-552									100.00		100
P-556		16.92							83.08		100
P-559									79.61	20.39	100
P-580					66.67				33.33		100
P-581		3.03	1.35		52.19				43.43		100
P-591					30.43				16.60	52.96	100
P-596					16.52	8.93			58.48	16.07	100
P-601				22.28	4.46	2.97	10.40		34.16	25.74	100

＊前期末～中期初は十三菩提式、五領ヶ台式、前期後葉異系統は浮島式、北白川下層式、大木４式など、中期後～後期前は加曽利Ｅ式、称名寺式、堀之内式を示す。

第181表　中・後期ピット出土土器の型式比率（２）

(2) 石　　器

a 概　　要

中野谷松原遺跡では縄文時代前期以外に中期、後期に帰属する石器も存在する。その概要は第182表～第187表、第275図～第279図で示したとおりである。しかし、遺跡の性格上、当該期の遺構(住居址や土坑等）といえども前期に相当する石器が混入している可能性が高くこれらのものと区別し、石器群としてまとめることは難しい。その上、石器組成の分析の中心である住居址も少ないため、石器群の特徴を抽出、比較を行うには資料的に不十分である。さらに縄文時代の石器は型式的変化が乏しいこともあり、石器から時期を特定することにも限界がある。以上のように、当該期の石器群の様相について検討するには資料的制約があることから、前期石器群に対して行ってきた分析の方法を適用するまでに至らないため、時期を限定できる住居址（中期：Ｊ―72・73・90・97・114号住居址、後期：Ｊ―77号住居址）を中心に、系列組成、器種組成、石材組成の全体の傾向と石器群の特徴について検討していくことにする。また、個々の器種については型式学的検討が可能な器種（打製石斧）に限定して検討を加えていく。

b 石器組成（第275図～第279図）

［系列組成］

本遺跡における縄文時代中期の住居址は、土器型式によりいずれも加曽利Ｅ３式に該当する。したがって出土石器のほとんどが当該期に帰属する確率が高い。そこで、住居址全体の石器組成の状況をみると系列組成では、各々の石器総点数は少なく、特に極端な組成差は認められないものの、Ａ類、Ｂ類ともに低調な石器製作・消費的パターンが見受けられる。特にＡ類の代表的な器種である石鏃は少ない点が特徴的である。Ｂ類に関しては、打製石斧とスクレイパーＢ類の占める割合が高い。また、Ｃ１類は磨石、凹石の組成の他、石皿も各住居址に安定して組成する傾向が認められる。Ｃ２類も少なからず各住居址での組成が認められる。Ｄ類に至っては組成する住居址も限られる（Ｊ―42・73号住居址)。Ｅ類の磨製石斧はＪ―73・90号住居址で組成する。Ｆ類の組成は剝片のみであり成品はない。

後期に該当するＪ―77号住居址ではＡ類においてやや活発な石器製作パターンが、Ｂ類では活発な石器製作・消費的パターンが認められる。ここでもＣ１類が多数組成している。この住居址においても中期の住居址と同様な組成状況が認められる。

［器種組成］

系列組成の中でも述べたとおり、Ａ類よりＢ類とＣ１類の器種が占める割合が高い。特に打製石斧、スクレイパーＢ類、凹石、磨石が多い傾向にある。しかし、石鏃、石匙は極端に減少している。砥石もやや多く組成している。他器種については前期の石器も混在していると考えられるため、石器組成から積極的な評価はできない。

石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	24	89	8	2	123
B　類	52	84	1		137
C 1　類	51				51
C 2　類	15				15
D　類	1	11			12
E　類	5	2	1		8
F　類					
合　計	148	186	10	2	346

第182表　中期の住居址全体の石器系列組成

石器系列	石　器	剝　片	石　核	原　石	合　計
A　類	26	50	10	12	98
B　類	54	109	8	1	172
C 1　類	66				66
C 2　類	35				35
D　類	11	11		1	23
E　類	2	2			4
F　類	2		1		3
合　計	196	172	19	14	401

第183表　中期の土坑全体の石器系列組成

石材系列	石　材	個　数	重量(kg)
I　類	Ob	91	200.4
	Ch	26	252.1
	HSh	2	30.3
	BAn	9	789.1
	Ja	1	33.4
II　類	Sh	102	4590.4
	HSS		
	Sch		
III a　類	An	78	90963.4
III b　類	SS	10	1835.6
	Tf		
IV　類	Sc	18	5499.3
V　類	GrR	8	1948.2
	Se		
VI　類	白色凝灰岩	1	298.1
合　計		346	106440.3

第184表　中期の住居址全体の石材個数、重量組成

石材系列	石　材	個　数	重量(kg)
I　類	Ob	77	689.6
	Ch	15	115.9
	HSh		
	BAn	9	245.8
	Ja	2	29.4
II　類	Sh	136	5644.6
	HSS		
	Sch	1	31.2
III a　類	An	100	42979.4
III b　類	SS	27	1917.6
	Tf	1	57.9
IV　類	Sc	28	5929.5
V　類	GrR	4	190.4
	Se		
VI　類	珪化木	1	4.7
合　計		401	57836

第185表　中期の土坑全体の石材個数、重量組成

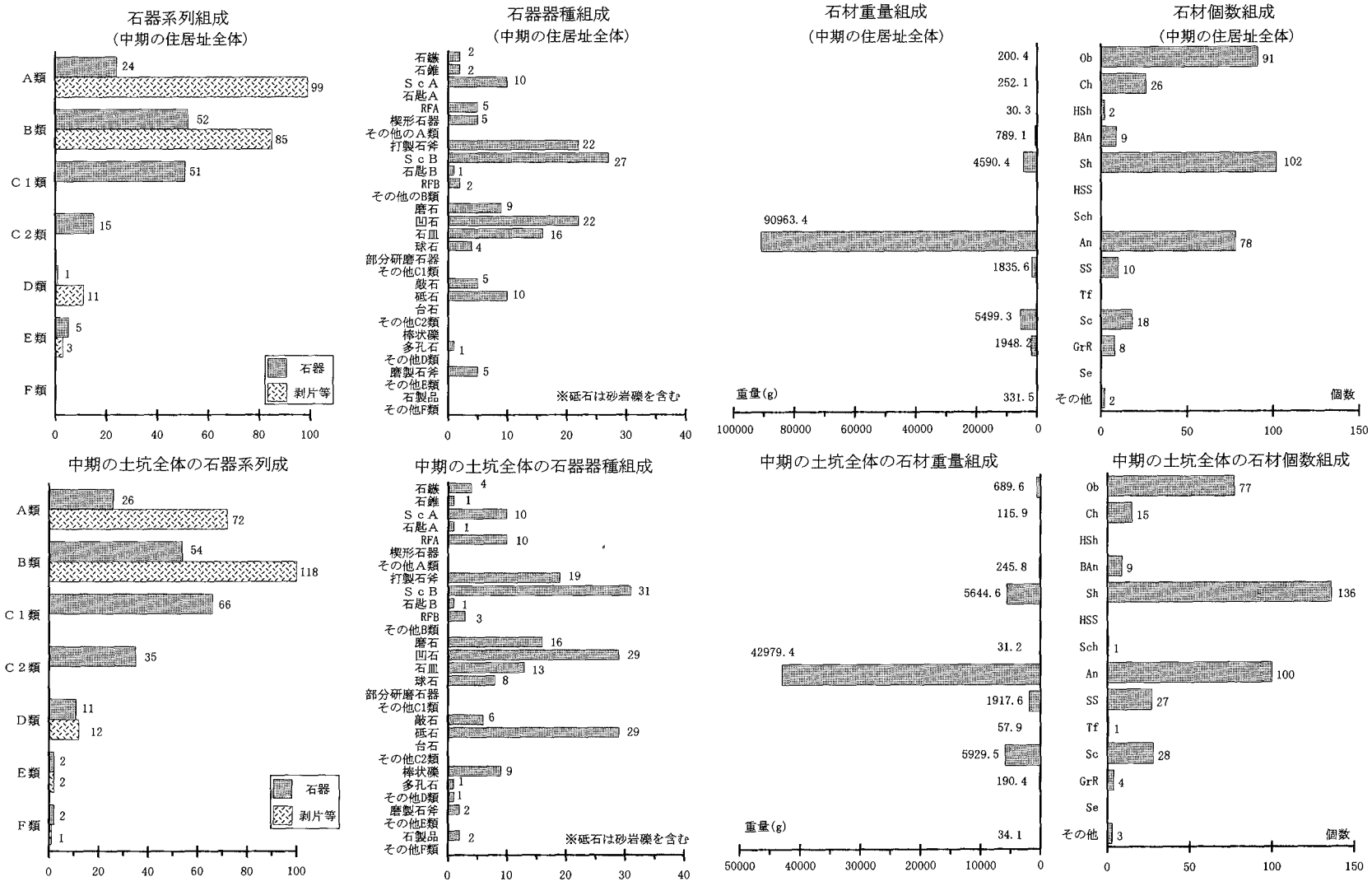
石器系列	器種	個数
A類	石鏃	2
	石錐	2
	Sc A	10
	石匙A	
	RFA	5
	楔形石器	5
	その他A類	
B類	打製石斧	22
	Sc B	27
	石匙B	1
	RFB	2
	その他B類	
C1類	磨石	9
	凹石	22
	石皿	16
	球石	4
	部分研磨石器	
	その他C1類	
C2類	敲石	5
	砥石	10
	台石	
	その他C2類	
D類	棒状礫	
	多孔石	1
	その他D類	
E類	磨製石斧	5
	その他E類	
F類	石製品	
	その他F類	
	合計	148

第186表　中期の住居址全体の石器器種組成

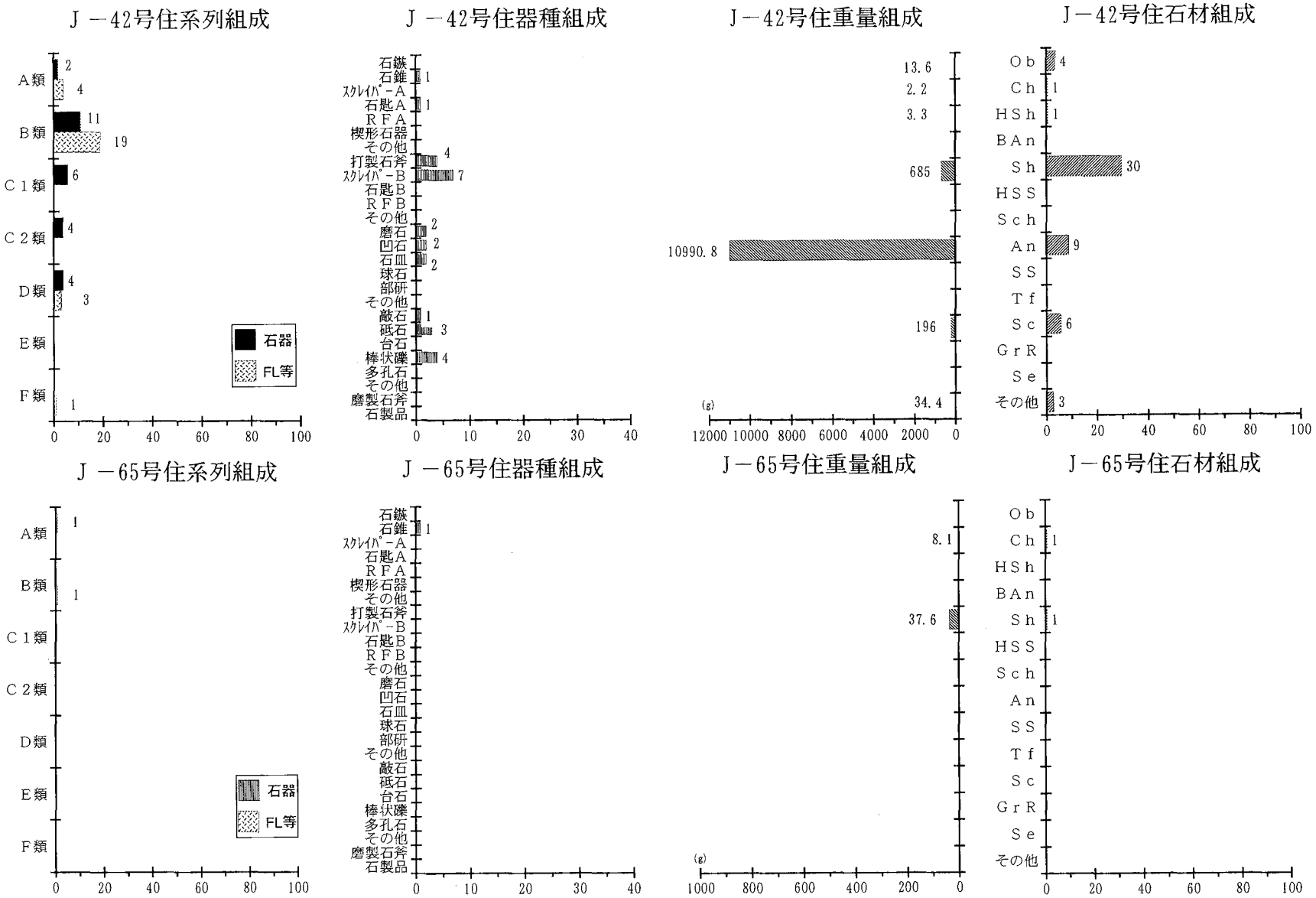
石器系列	器種	個数
A類	石鏃	4
	石錐	1
	Sc A	10
	石匙A	1
	RFA	10
	楔形石器	
	その他A類	
B類	打製石斧	19
	Sc B	31
	石匙B	1
	RFB	3
	その他B類	
C1類	磨石	16
	凹石	29
	石皿	13
	球石	8
	部分研磨石器	
	その他C1類	
C2類	敲石	6
	砥石	29
	台石	
	その他C2類	
D類	棒状礫	9
	多孔石	1
	その他D類	1
E類	磨製石斧	2
	その他E類	
F類	石製品	2
	その他F類	
	合計	196

第187表　中期の土坑の石器器種組成

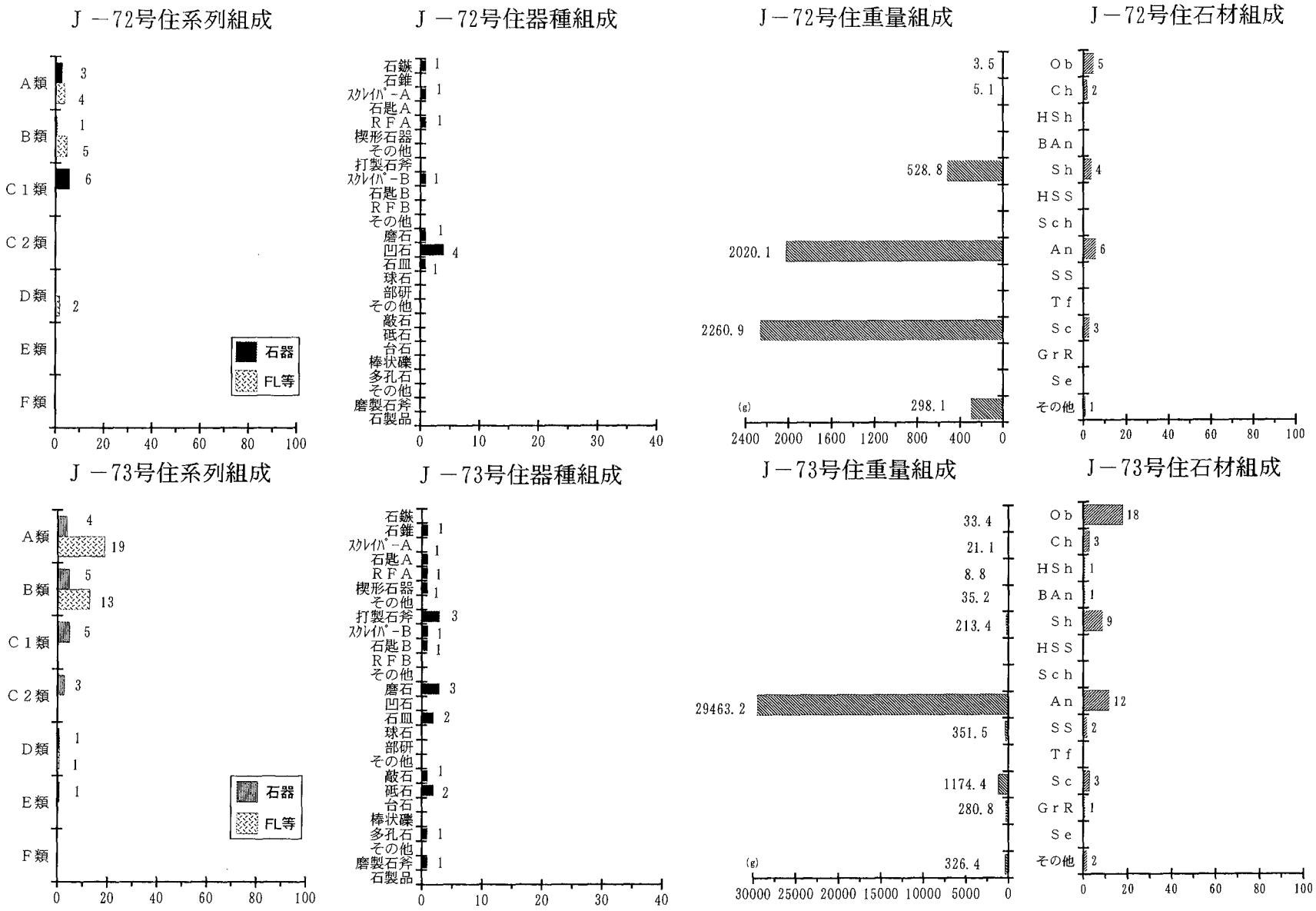
※砥石は砂岩礫を含む



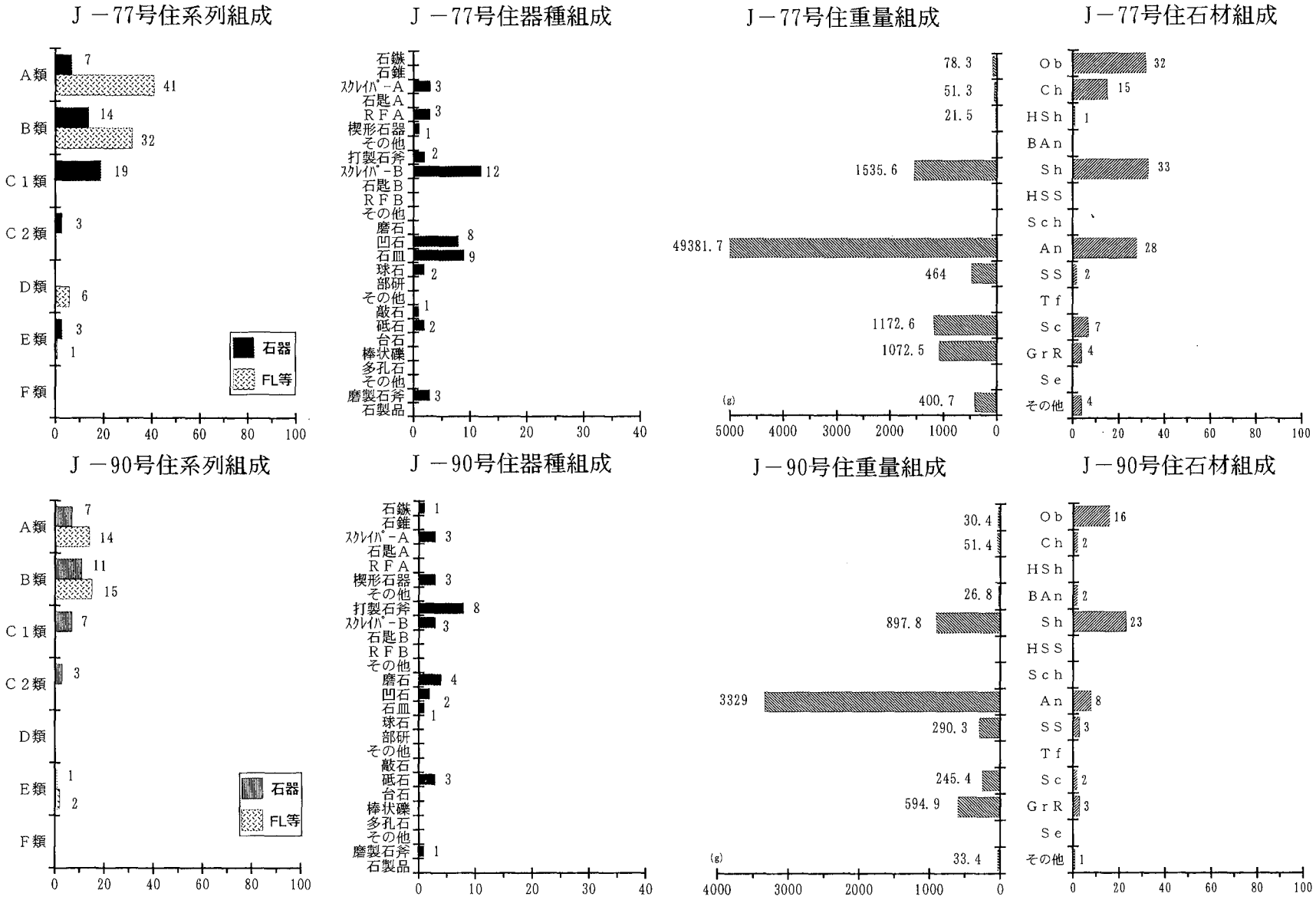
第275図　中期の住居址全体・土坑全体の石器組成



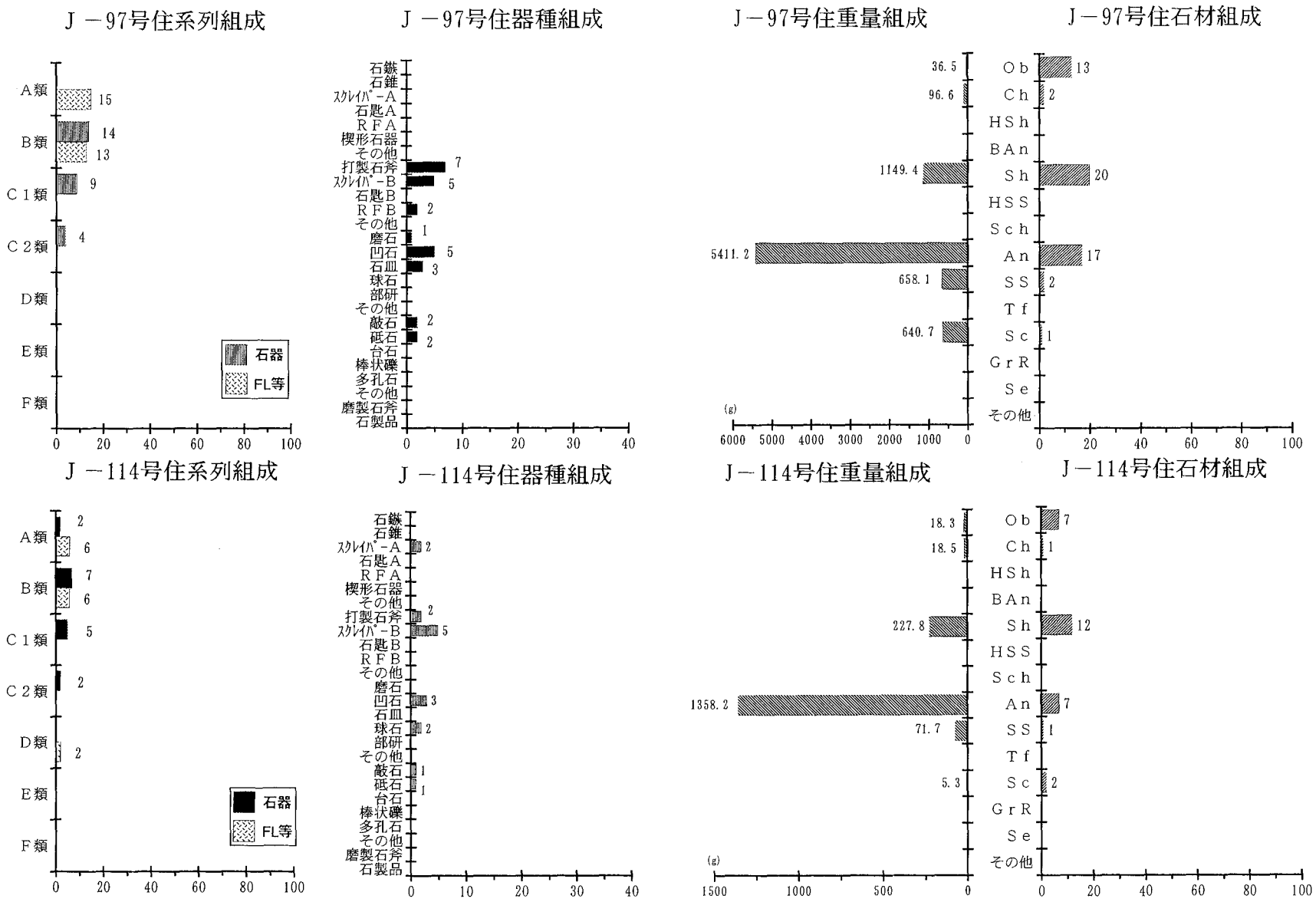
第276図　J－42・65号住居址の石器組成



第277図　J—72・73号住居址の石器組成



第278図　J－77・90号住居址の石器組成



第279図　J－97・114号住居址の石器組成

［石材組成］　石材種別の個数組成ではII類が最も多く、次いでＩ類、IIIａ類、IV類の順と続き、それ以外の種別はどれも数量的に少ない。石材種別ごとではＩ類では黒曜石、チャート、黒色安山岩が多用されている。II類ではほとんど頁岩で占められる。III類では安山岩、IV類では結晶片岩、Ｖ類では緑色岩類が多用されている。石材の選択は頁岩、安山岩等の在地石材を多用し、黒曜石等の非在地石材は少ない。石材の種類は比較的少ない。重量組成ではＣ１類、Ｃ２類に多用される安山岩が最も多く、次いで結晶片岩、頁岩、砂岩、緑色岩類の順となる。Ａ類に利用される石材は点数と同様、消費量は少ない。特に、黒曜石は点数は多いものの、重量組成になると極端に少ない。一方、Ｂ類に利用される石材は頁岩において消費量は多い。砥石には砂岩、磨製石斧には緑色岩類というように特定器種と石材の関係が成り立つものも存在する。概ね前期との石材利用に共通性が認められる。

c　石器各説

先に述べたとおり中期の石器は、遺跡の性格上、主体を占める前期石器群から抽出するには限界がある。特に型式学的検討が可能である石鏃、打製石斧、磨製石斧等の一部器種を除いては、型式学的検討に不適である器種（スクレイパー、凹石、磨石等）もあり、前期石器との区別がつかない器種がほとんどである。従って、ここでは打製石斧を中心に縄文時代中期、後期の石器について概観していきたい。

［Ｂ類石器］

打製石斧（第222図１～10）　中期、後期に帰属されると考えられる打製石斧は26点である（中期24点、後期２点）。そのうち図示したものは10点である。住居址出土の打製石斧をみると、全てII形態である（中期24点、後期１点）。平均値は長さ87.4㎜、幅47.1㎜、厚さ18.7㎜、重量97.7ｇである。欠損率63％である。石材は頁岩17点、安山岩６点、結晶片岩１点である。前期に引き続き、型式的変化が少ないIIａ形態が主体を占める。形態的に前期のものと類似するため、実際にはさらに増加すると思われる。形態的特徴としてと中央部分がやや括れるもの（１～３・６）と両側縁が平行するもの（４・５）に分類される。一方、後期以降に盛行するIII形態（７～９）とIV形態（10）が出現する。IIIａ形態は中央部に抉りをもつのが特徴である。中央部には装着痕が、器面全体には使用痕が観察される。IIIａ形態は前期の遺構から出土したものがほとんどであるが、III形態の出現は後期以降が一般的であるため、ここでは出土した全てを後期以降に帰属するものとして認識した。なお、本遺跡においても後期の住居址から１点出土し、隣接する天神原遺跡の後・晩期に帰属する形態と型式的類似性が認められる。

［Ｅ類石器］

磨製石斧（第265図９・10）　中期、後期に帰属すると考えられる磨製石斧は５点である。しかし、住居址で検出されたもの以外は前期との区別ができないため、正確な点数は不明である。型式的に前期のものとは異なるものについて２点図示した。９は後期の住居址から出土した。Ｉ形態（断面楕円形）であり、甲高で敲打痕が観察される。10は中期の住居址から出土した。II形態（定角式）である。いずれも緑色岩類である。磨製石斧は中期以降に定角式が出現するとされているが、前期の中にもその初源形態が認められる。したがって、定角式の出現をもって中期とする点にも再検討が必要である。中期の磨製石斧について中野谷松原遺跡と同時期である下鎌田遺跡において製作址が発見されいる。石材は緑色岩

類を主体としており、本遺跡との関連性が認められる。

d 小　結

本遺跡における縄文時代中期、後期は単独に近い居住形態をとる集落であるにもかかわらず、A類などの狩猟活動に直接関係する石鏃などの製作は顕著ではなく、B類などの加工具の製作が主体を占め、併せてその組成も多数認められる点に石器群の特徴を見いだすことができる。また、C１類（凹石、磨石、石皿）も各住居址とも安定して組成していることから、採集を主体とした生業活動であったことが窺えられる。しかし、いずれも単独居住であるため、本遺跡で示された石器組成の特徴が、果たして中期、後期の石器群の様相を示したものかについては、さらに検討を加えていかなければならない。

一般的に中期における石器群の特徴は打製石斧、スクレイパー、凹石等の加工具が増加し、石鏃等の狩猟具は減少する傾向が認められる。この点において本遺跡の石器群はほぼ一致していることが判明した。中野谷松原遺跡周辺の遺跡では同様な集落規模である上ノ久保遺跡（加曽利Ｅ２式期）、荒神平・吹上遺跡（加曽利Ｅ２～Ｅ３式期）においても、B類を主体とした石器組成に共通性が認められる。なお、1997年に調査が行われた砂押遺跡では中期の大規模集落が確認されており、その石器組成に注目される。しかし、石器組成には立地環境などによる地域性や遺跡の規模によって組成差があり、こうした傾向が一般的であったかについては再検討が必要であることも指摘されている（白石1987・1990）。

後期の石器群については天神原遺跡において分析が行われている。中野谷松原遺跡では１軒（称名寺式期）のみであり、その実態は不明であるが概ね中期石器群と同様である。中期以降に出現し、後期以降、特徴的なIII形態の打製石斧と遺構に伴わないが凸基石鏃１点（III形態）が検出されている。

北関東を含め中期、後期石器群に関する研究は、生業形態の変化を検証するための組成論と打製石斧に代表される個別研究に限られ、遺跡を単位とした石器群の全体の実態把握はほとんど行われていないのが現状である。本遺跡周辺においても砂押遺跡、新堀源ヶ原遺跡等の大規模な拠点的集落が発見されており、石器群の特徴を検討することが可能となりつつある。こうした遺跡を中心に拠点集落と点在する小規模集落の場の機能を石器群から具体的に推定するためには、前期石器群に対する分析に準じた方法論とその実践が必要とされ、石器群の実態把握と新たな石器群研究の展開へと導くものとして重要である。

（井上慎也）

6　古墳時代遺構

D区から古墳（K－1号墳）1基が検出された（第273図）。調査時にはすでに後世の耕作によって削平されており、遺存状態は良好ではなかった。平面形態は円墳で、墳丘には埴輪や葺石はなかった。墳丘の中央部のやや南よりに横穴式石室を持つ。横穴式石室の遺存状態も良好ではないが、自然石を使用した乱積積みであると推定される（第274図）。残存しているのは玄室で、羨道は残っていない。墳丘の周囲には周堀が巡るが、石室の正面、すなわち墳丘の南側には周堀がなかく、前底部と考えられる（第273図）。遺物としては、土師器・須恵器が若干出土している。葺石や埴輪を伴わないことから古墳時代終末期の古墳と考えられる。また、中野谷松原遺跡ではK－1号墳しか検出されなかったが、『塩ノ久保遺跡』（大工原ほか　1991）で指摘されているように中野谷古墳群が存在していた。これは時期的には同一期に形成された群集墳と推定される。

墳丘		石室			周堀			
長径	短径	長さ	最小幅	最大幅	最大幅	最小幅	深さ	前庭部の幅
16	13.8	8.5	3.2	4.5	6	2.5	0.6	6.5

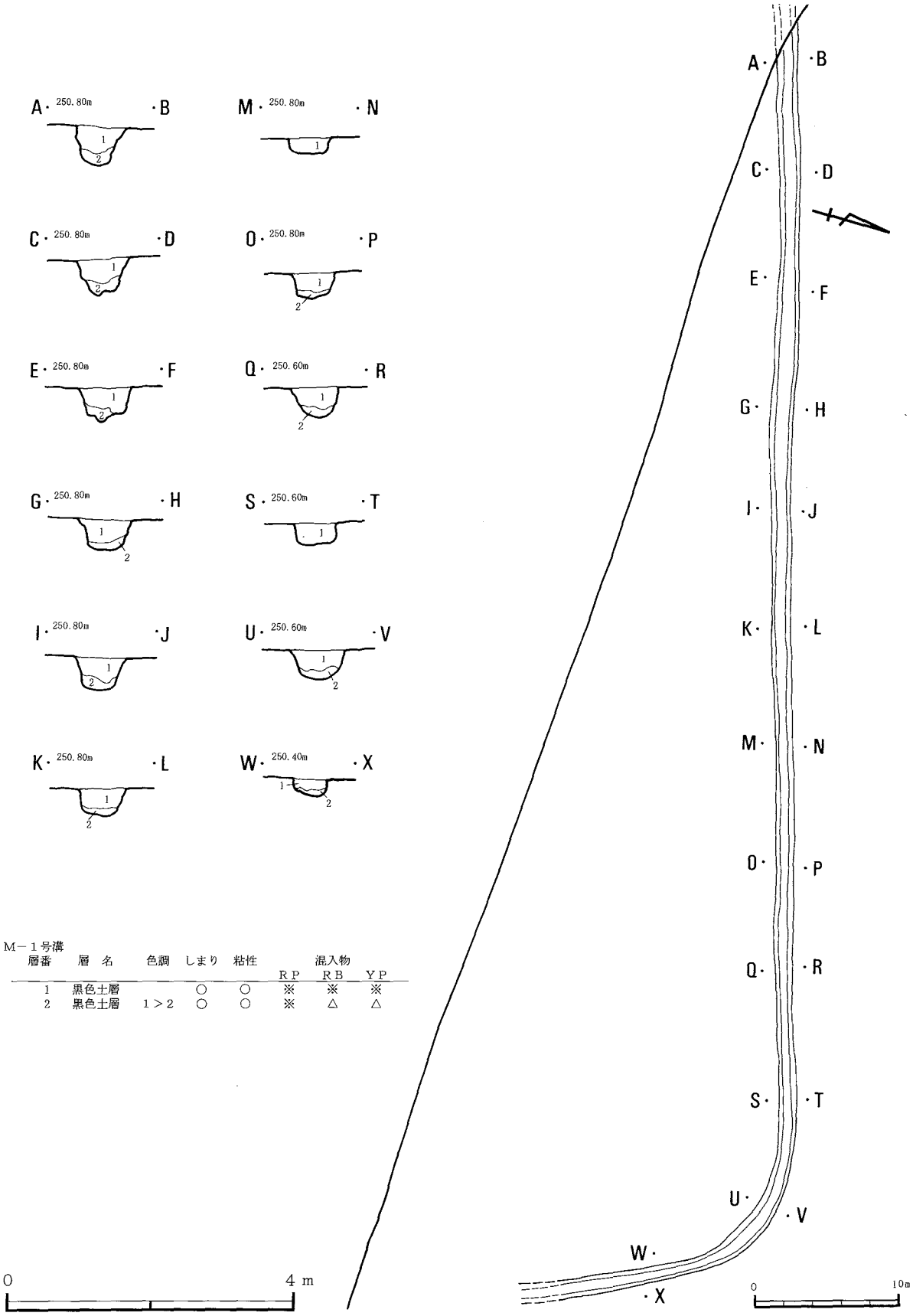
第185表　K－1号墳計測値（単位m）

7　奈良・平安時代の遺構

B区から溝（M－1号溝）が1条検出された（第272図）。M－1号溝は箱形の断面を呈しており、上幅1.2～1.6m、下幅0.6mを計る。B区の南壁から東に80mでほぼ直角に曲がっており、南に20mほどで検出できなくなるが、元々はさらに南に続いていたと考えられる。遺物が出土せず明確な時期は不明である。

安中市教育委員会が実施した中野谷地区遺跡群の発掘調査で、中原遺跡や細田・和久田遺跡、下塚田遺跡から放牧用の大溝と推定される溝が検出されており、猫沢川及びその支流である砂押川一帯の台地に8世紀～9世紀の牧が存在したことが判明している（大工原　1994a）。また、中野谷松原遺跡の南西に位置する天神原遺跡で検出された大形建物址を伴う工房群とあわせて、M－1号溝は牧の管理用の建物・執務所を方形に囲む溝の可能性があると指摘されており、天神原遺跡の工房群が8世紀後半であるので、中野谷松原遺跡のM－1号溝もこの時期に形成されたと考えられる。

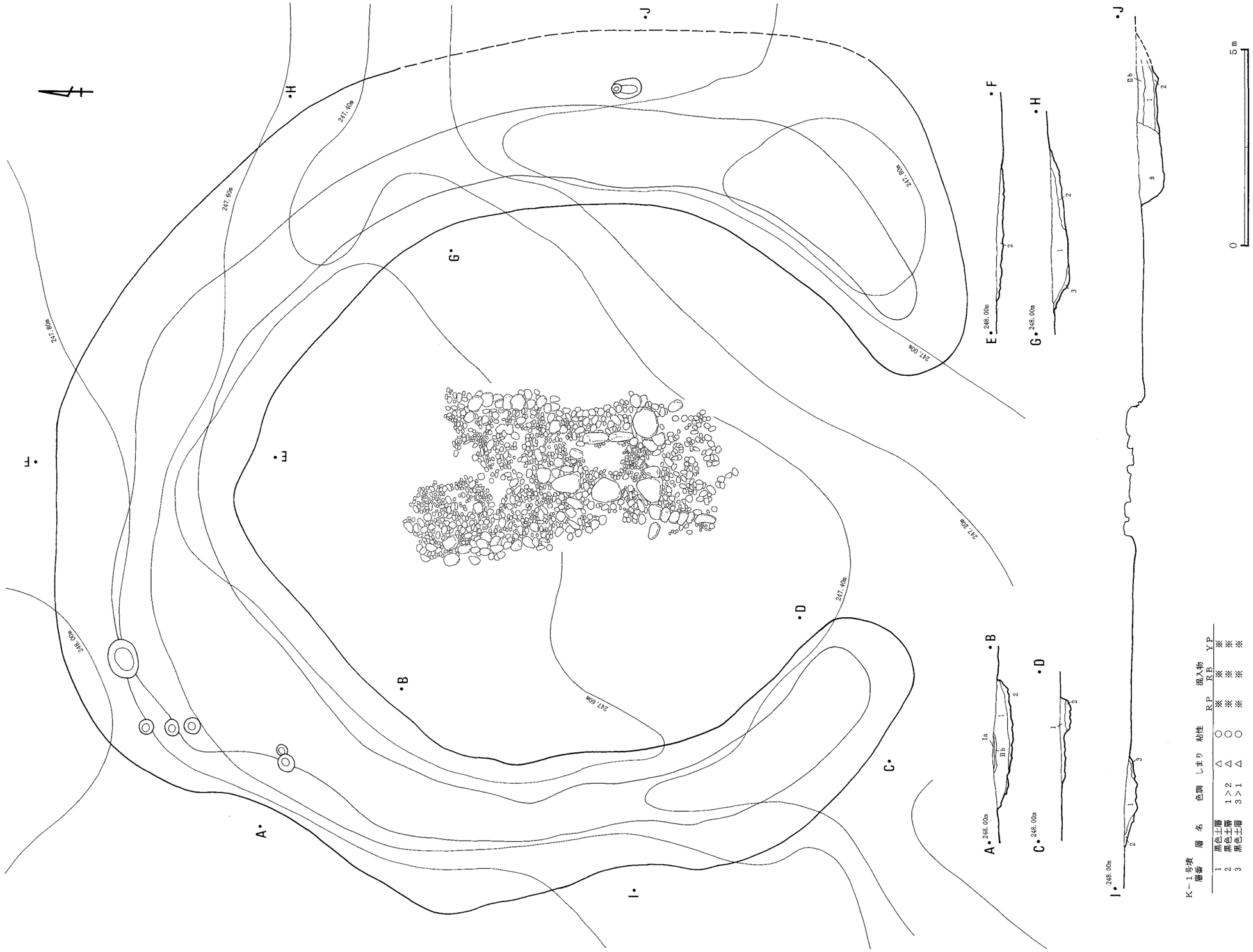
（深町　真）



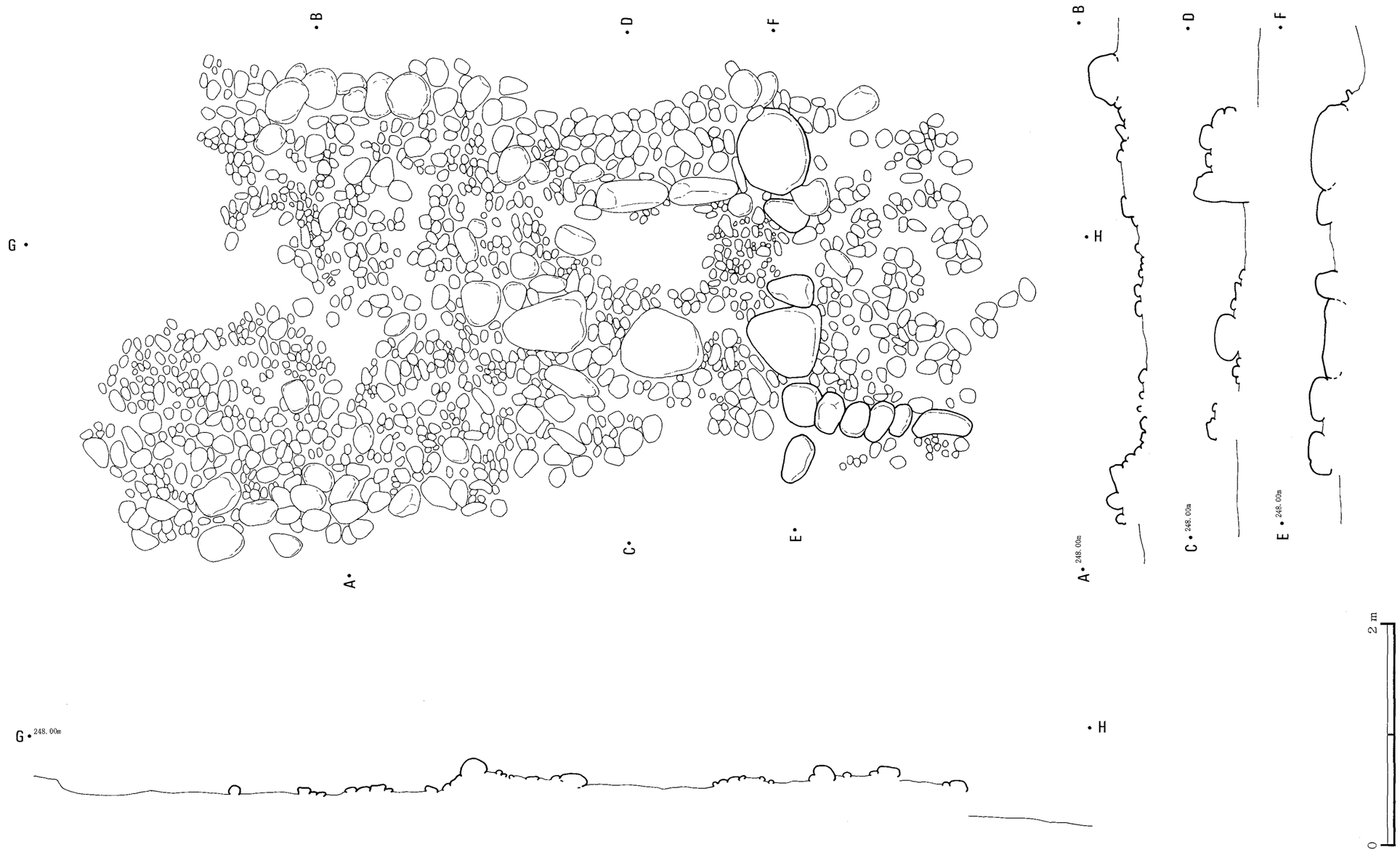
M－１号溝

層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	混入物 RB	混入物 YP
1	黒色土層		○	○	※	※	※
2	黒色土層	1＞2	○	○	※	△	△

第280図　M－１号溝実測図



第281図　K－1号墳実測図



第282図　K－1号墳主体部実測図

8　成果と問題点

(1)　縄文時代の集落の景観復元

a　縄文集落の景観復元について

中野谷松原遺跡は縄文時代前期中葉から後葉を中心とする大規模な集落遺跡であった。これまでの遺構遺物の分析結果により、その変遷過程をある程度具体的に解明することができた。その結果は、発掘調査時、あるいは分析の方法を構想していた時点に抱いていた予想とは、異なっている部分も多かった。そのため、本書の最初に掲げておいた分析メニューの方向性を維持できなかった部分もある。データ量の多さに、遺物相互の関係や、遺構と遺物の関係を詳細に吟味していない部分もある。したがって、本遺跡の研究もこれで終了した訳ではなく、このまとめも一つの通過点に過ぎないと考えている。今後、さらに考古学の研究が進展すれば、新しい視点でこの遺跡をとらえることも可能となり、内容も見直されることになるかもしれない。ここでは、あくまで現時点までに解明されたことをもとに、中野谷松原遺跡の集落変遷について述べることにする。

中野谷松原遺跡は、大きく4期に区分することができる。すなわち、前期中葉、前期後葉、前期末葉、中期後葉～後期前葉の4期である。この間には集落が一時的に断絶しており、居住者を含め遺跡のセトルメントパターンや遺構・遺物の型式も変化している。これは、歴史的・社会的な変化に連動した現象と考えられるものである。各期の集落の景観を述べる際、この点についても言及することにする。

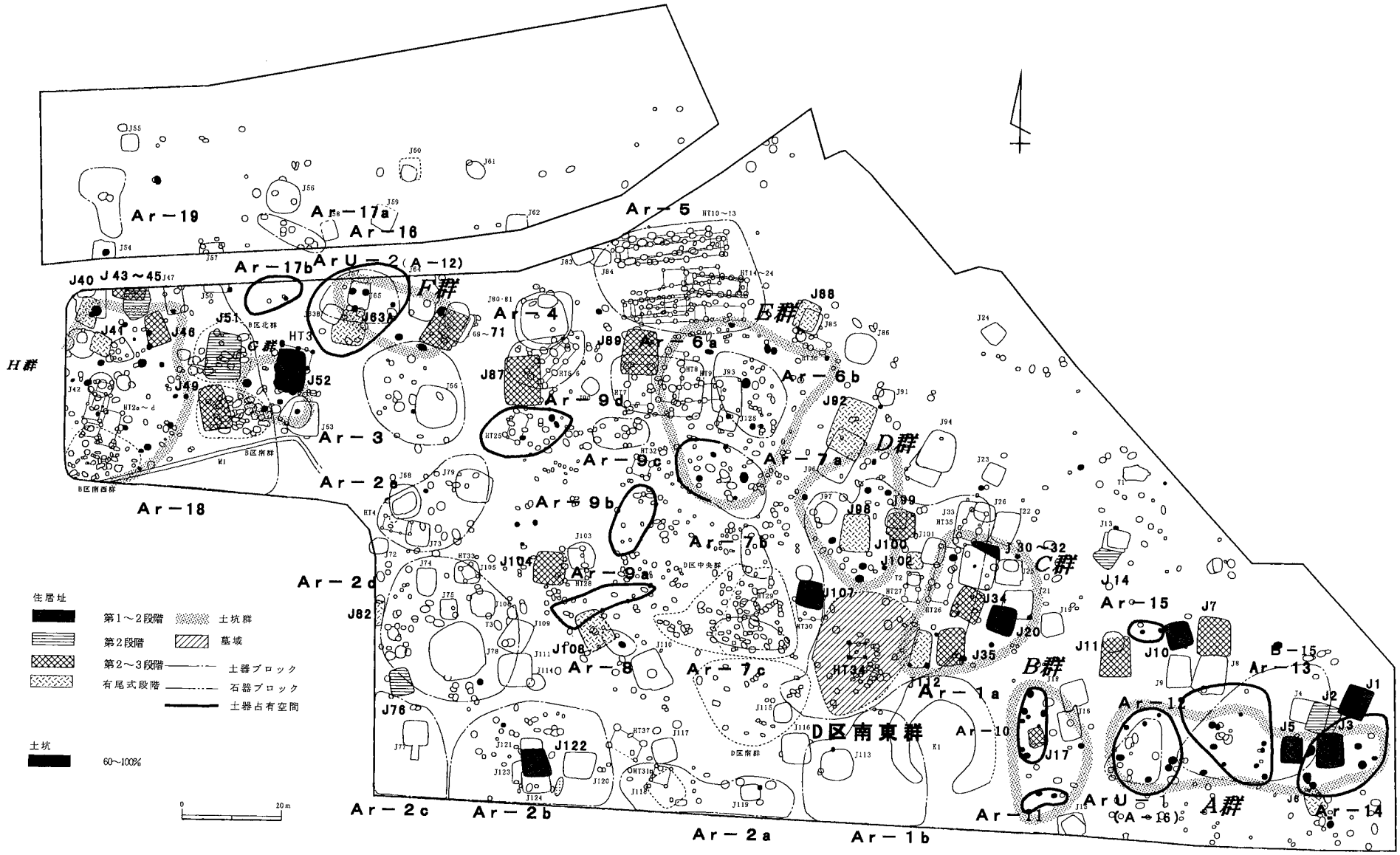
b　縄文時代前期中葉の集落の景観

［有尾式第1段階～第2段階の集落景観］（第283図）

有尾式第1段階　住居は調査区東部（J－1・3・5・10・20・107)、南西部（J－122)、西部（J－52)の3カ所に存在する。この時期では集落規模は小さい。後2者は集落の一部とみられ全体の住居配置は不明である。唯一全体が理解できる東部の住居址の配置をみると、約80mの帯状に住居群が存在し、20m以上の間隔を空けて3つの住居址群が一列に規則的に並んでいる。これは、本地域における典型的な集落形態である。(註)なお、住居の並ぶ方向は、台地の等高線に沿うものではなく、浅間山の方向を指向している。すでに、この時期にその後の集落構造の基軸ラインが意識されていたと推定される。この時期には2軒～4軒の「方形壁溝全周型」住居が同時並存していたと推定される。

また、東部集落では住居群の南側を中心に、これに付随するかたちで土坑群(A群)・土器占有空間(Ar－12～14ブロック)・石器ユニット（ArU－1）が一体となって存在している。このように、住居を中心に各種施設が付随する集落構造を有していることが確認されている。

この時期では住居が拡張される頻度も少ないことと、南西部や西部にもそれぞれ別の集落が存在していることから、まだ定住性は弱く、繰り返しこの遺跡が移動生活の中での居住地として利用されていたものと推定される。なお、この時期の土器群はAr－18ブロック、Ar－2dブロックにまとまっており、それぞれ西部集落、南西部集落に関連する作業空間などとして利用されていたと推定される。



第283図　有尾式第1段階～第2段階の集落変遷図

この時期には、まだ明確な墓域は形成されていないようで、東部集落の南西には、円形で立石を伴った単独土壙墓（D—136・141など）が存在しており、明確な土壙墓群は形成していないものの、この時期に初源的な墓域が形成されつつあった様子がうかがえる。なお、円形の土壙墓は、その後の墓域では認められず、より古い形態と推定される。

有尾式第2段階　住居は第1段階同様、東部（J—2・14)、西部（J—43・51)、南西部（J—76）に分かれて存在するが、各住居群がそれぞれ西へ多少移動している。住居配置からみて、第1段階の集落形態を基本的には継続しているとみられる。また、いずれの住居群も同じ動きを行っており、これらの住居群に一定の規範のようなものが存在していたと考えられる。

この時期になると、東部集落の西端に明確な土壙墓群（D区南東群）が形成されるようになる。土壙墓群は立石・抱石を有し、玦状耳飾・石匙A・小形深鉢などが副葬品として埋納されており、すでに一定の埋葬ルールに基づいていたことが分かる。この埋葬方法はその後の集落に継承されて行くものである。また、ここにはD形態（2×2）の掘立柱建物（HT—34）が構築されており、土壙墓群と関連する施設であったと推定される。このような社会的機能を有する施設（土壙墓群）が独立して存在するようになったことは、この時期以降定住性が高まっていったことの証拠の一つであろう。

第2～3段階とした時期の住居数の増加は、先にみた土壙墓群の出現と連動しているようである。調査区東部の住居群と、西部の住居群の距離が縮まり、段違いながら南北2列の住居群を形成する。また、列の方向はほぼ東西方向となり、台地の等高線に平行するような方向性を示している。両住居群が同じ方向性を有していることから、関連していたことはほぼ間違いない。同じ場所で頻繁に拡張・建て替えを繰り返すようになるので、前段階より定住性が高まり、同時並存する住居数も増加したと推定される。土壙墓群の規模（36基）からみると、各住居（17軒）に被葬者（成人）が各2名づつ存在していたとすると、34基の土壙墓が必要となり、住居数と土壙墓数はほぼ一致する。したがって、両住居群の居住者全体の墓域がD区南東群であった可能性がある。

なお、両住居群が同時並存していたかどうかについては、顕著な居住形態の差異が存在していないため、言及できない状態である。筆者としては、総合的に判断して同時並存していなかった可能性の方が高いと考えている。したがって、同時並存していた住居は「方形壁溝全周型」が3軒～5軒程度と推定される。

（註）このような2～3軒の住居が相当間隔をおいて一列に並ぶ集落形態は、すでに前期前葉の中原遺跡（関山Ⅰ式期）、東畑遺跡（関山Ⅱ式期）でも確認されており、本地域の伝統的な集落形態とみられる。東畑遺跡でも浅間山を指向する方向性をもって住居が並んでいる。

［有尾式第3段階～第4段階の集落景観］（第284図）

有尾式第3段階　この時期に本遺跡の集落は前半のピークを迎える。住居・土壙墓・土坑・ピット等が最も多いのがこの時期である。時期的にもある程度の時間幅があった可能性もあるが、その場合でも集落として安定した状態が保たれていたと言える。

住居群は調査区東部から中央部にかけて帯状に存在する規模の大きな東住居群（J—4・9・16・18・20・30・31・93・94・96・100）と、小規模な南西部住居群（J—74・109・123・124)、西部部住居群（J—50・54・59）が存在する。各住居群の位置は接近し、墓域を中心として一体化してきており、前段階

第284図　有尾式第3段階～第4段階の集落変遷図

のようにそれぞれが別個の集落ではなく、この段階には一つの集落として同時並存していた可能性が高い。この場合、同時並存した住居は「方形壁溝全周型」が最大８～10軒程度と推定される。

本集落の中心となるのは東住居群である。ここでは第１段階の集落形態を踏襲し、規模を拡大させたものであり、再び浅間山の方向性に住居が配列するようになる。各住居址では頻繁な拡張・建て替えが行われているのが、この時期の特徴であり、継続性（定住性）のある集落が形成されていたと推定される。

また、中心に位置するＪ―30住は、大形で炉が多数設置された特殊な機能を有する住居で、集落の中枢的機能を有した住居であったと考えられる。ここは集落の居住者が集合する社会的機能を有していたと考えられる。

この時期の墓域としては、Ｄ区中央群東半部とＤ区南群が推定される。いずれもＤ区南東群の西側に存在しており、人口増加とともに発展的に形成された土壙墓群と考えられる。中央群は南北２列の土壙墓群が存在するが、この配列は第２～３段階の集落構成と類似しており、集落と墓域の構成が連動していた可能性が高い。また、南群は東西２つの異なる配置の土壙墓群から構成されており、特に西群は環状構成と本集落の伝統とは異なる墓域である。なお、この墓域からは唯一黒浜系土器が埋納品として出土しており、この土器群が多く存在するのは、「廃棄帯」部分と南西住居群であることから、この墓域に対応する住居群は、南西部住居群と推定される。この段階は墓域を中心とした集落形態の萌芽期として捉えられる。

この時期の土坑群としては、Ａ～Ｇ群すべて該当する。住居数の増加に伴って土坑群も増加したと推定される。また、土器混入ピットでは、東住居群に重複するＡ群と、西住居群に近接するＢ群がこの時期のものと推定される。土器占有空間として、Ar―1a・7a 西・9b・9d・10・11・12・13・14ブロックが相当する。生業活動が活発であったことが分かる。

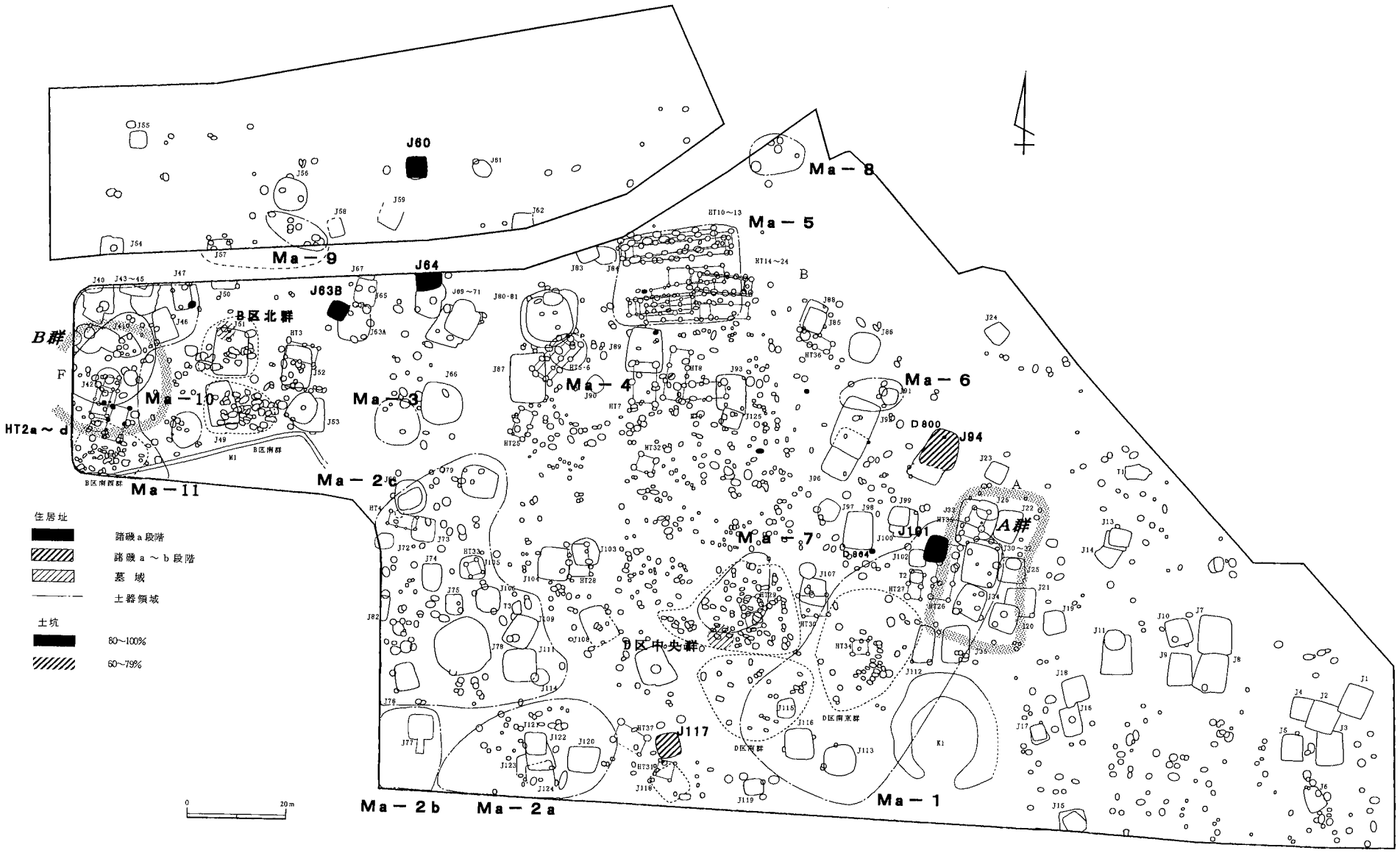
有尾式第４段階　住居群は第３段階とほぼ同じ位置に存在する。東住居群（Ｊ―22・34・94・96）は、住居数が減少すると共に西へ移動する。南西住居群（Ｊ―121）、西住居群（Ｊ―53）も規模を縮小する。これは、第３段階に比べて時期が短いためか、本質的に減少したためか判然としないが、各群の住居配列と、その後に一時的に集落が断絶していることから、両方の要因があったと考えられる。なお、各住居群は別々の集落であった可能性もあるが、前段階の様相からみて基本的な集落構成は同じで、各群が同時並存していた可能性が高い。この場合、同時並存した住居は各群１軒程度、全体で３～４軒程度であったと推定される。

この時期の墓域は前段階に引き続きＤ区中央群とＤ区南群が相当しよう。また、土坑群としては、住居に近接するＣ・Ｄ・Ｇ群が利用されていたと推定される。

c　縄文時代前期後葉の集落の景観

［諸磯ａ式期の集落景観］（第285図）

有尾式第４段階以降、本遺跡は一時的に居住地としての利用が極めて低調な状態となる。有尾式期終末から諸磯ａ式段階がこの時期に相当する。なお、有尾式終末～諸磯ａ式古段階には、住居は構築されていない。そして、諸磯ａ式新段階に至り住居が再び構築され、小規模な集落を形成する。この時期になると、住居型式が大きく変化し、隅円方形で浅い壁溝を巡らす型が一般的となる。



第285図　諸磯a式期の集落変遷図

この段階では、住居は東に位置するＪ―101住と西に位置するＪ―60・63B住の２カ所に分かれる。いずれも小規模な住居である。なお、Ｊ―101住には隣接して土坑群（Ａ群）が存在する。また、これとは別に調査区西端に掘立柱建物ＨＴ―2d（Ｃ形態）が構築される。この場所は次の段階まで掘立柱建物が継続して作られており、共有部分として利用されている。また、隣接して小規模な土坑群（Ｂ群）も存在する。さらに西にも集落が展開していた可能性も高い。

墓域としては、Ｄ区中央群の一部・Ｂ区北群の一部が相当する。これ以外に単独の土壙墓（Ｄ―800・864）がＪ―101住の西及び北に存在している。中央群は有尾式期の墓域が継承されているが、Ｂ区北群や単独土壙墓は、新たに作られた墓地である。その後、単独土壙墓は墓域を形成することなく、墓地としての利用が停止されるが、Ｂ区北群は大規模な墓域へと発展することになる。

また、土器ブロックの分布をみるとＤ区中央群に重複するＭａ―７ブロックは、墓域と関連するものである。また、Ｍａ―11ブロックは掘立柱建物や土坑Ｂ群に関連するものである。最も大規模なＭａ―１ブロックは、「廃棄帯」部分であり、諸磯ｂ式期の二次廃棄行為により、移動された結果と推定される。

［諸磯ｂ式第１段階～第２段階の集落景観］（第286図）

諸磯ｂ式第１段階　この時期には、突然直径110mの環状集落が形成される。この環状集落は計画的に作られた集落であることが、土器混入ピットの分析結果によって確認された。具体的には、中心ピット（Ｐ―545）を基準として楕円形に配列するピット群が存在しており、このピットに沿って大形掘立柱建物群や住居、そしてかつての墓域（Ｄ区南東群）が環状に配置されている。この際本当の基準となっていたのは中心ピットではなく、立石が林立していたＤ区南東群であったと判断される。このＤ区南東群は本遺跡で最初に形成された土壙墓群であり、集落を作る際には祖霊崇拝的な意識が強くはたらいていたと考えられる。そして、この場所は「物送り」的な意味をもった「廃棄帯」として、その後も継続的に利用されてゆく。

環状集落の中枢部分は北辺中央に存在する大形掘立柱建物群である。ここには、最大規模のＨＴ―10・12（Ａ形態：20m級）と、その南に配置されたＨＴ―14～22（Ｂ形態：10～15m級）が構築される。また、その南にもＨＴ―７（Ｃ形態：８ｍ級）が構築される。最大規模のＡ形態の建物は、基壇状の盛土の上に建てられていたと推定され、長大な木材で構築された神聖なる施設であったと推定される。(註1) また、その前面に位置するＢ形態の建物は、これに準じた共有施設とみられる。

そして、ＨＴ―14～22の両サイドにも掘立柱建物が規則的に配置されている。すなわち、西にはＨＴ―６（Ｂ形態）・25（Ｃ形態）が、東にはＨＴ―36がある。また、他にも東辺にＨＴ―27（Ｃ形態）、西辺にＨＴ―28（同）、南辺にＨＴ―37（同）が、環状集落に沿って規則的に配置されている。これらの掘立柱建物は、重量物の収納に耐える貯蔵用建物であったと推定される。(註2)

なお、調査区西部の「もう一つの中央広場」にもＨＴ―2A・2Bが構築されている。この建物群は前段階から継続しており、別の規制によって配置されているようである。「もう一つの中央広場」が大部分調査区外であるので、詳細は不明である。

住居群は西住居群（Ｊ―81・79・78・118）と東住居群（Ｊ―13・21・24・33・85・86・91）に分かれる。西住居群では比較的大形の住居が、等間隔に整然と配置されている。特に、Ｊ―78・81住は11m級の本遺跡最大規模の住居である。この住居群が集落の主導的位置を占めていたものと推察される。

これに対し、東住居群ではＪ―33住が比較的大形である以外は、標準サイズないし小形の住居で構成

され、それぞれの住居は近接している。よく観ると類似した構成の南北二群（東北群・東南群）に分かれる。いずれも、外側に各１軒離れて住居が存在している点まで共通している。両群は等質的な住居群であったことが理解される。

以上のように、西住居群と東住居群では、様相が異なっている。しかし、両群は同時並存していたことはほぼ確実であり、その違いは居住者の社会的差異に帰因していたと考えられる。東住居群のみに特徴的な底部穿孔石皿が遺棄されているものが存在しており、両群は異なる社会単位に属する集団であった可能性が高い。つまり、この段階の環状集落は社会的に異なる２つの社会単位（半族）により、構成されていたと推定されるのである。これは墓域が新旧２カ所に形成されている点からも傍証される。

なお、住居の規模と配置からみて、西住居群の居住者が、主導的立場で集落を統率していたものと推察される。墓域における副葬品の有無の差は、こうした社会組織を反映したものと考えられる。そして、この段階に同時並存していた住居は８～10軒程度と推定される。ただし、大形住居を数軒含んでおり、見かけの軒数以上の居住人口を擁していたと思われる。

この時期の墓域は「中央広場」中央のＤ区中央群北西部と、環状集落の西外側に位置するＢ区南群南東部・Ｂ区北群東部に形成されている。前者は有尾式第３段階以降の伝統的な墓域であり、後二者は諸磯ａ式期に新たに形成された墓域である。その後は、後二者が中心的な墓域へと発展して行くことになるが、これは西住居群の発展と連動していたものとみられる。この場所に新規に墓域が形成されたのも、主導的立場の西住居群の存在があったからであろう。

Ｄ区中央群には小規模な櫓状の掘立柱建物ＨＴ－29Ｂ（Ｄ形態）が構築されている。この墓域に関連する施設と推定される。Ｄ区南東群やＢ区南西群でも同じ施設が存在しており、墓域に対応して構築された祖霊崇拝的機能を有する施設であったとみられる。

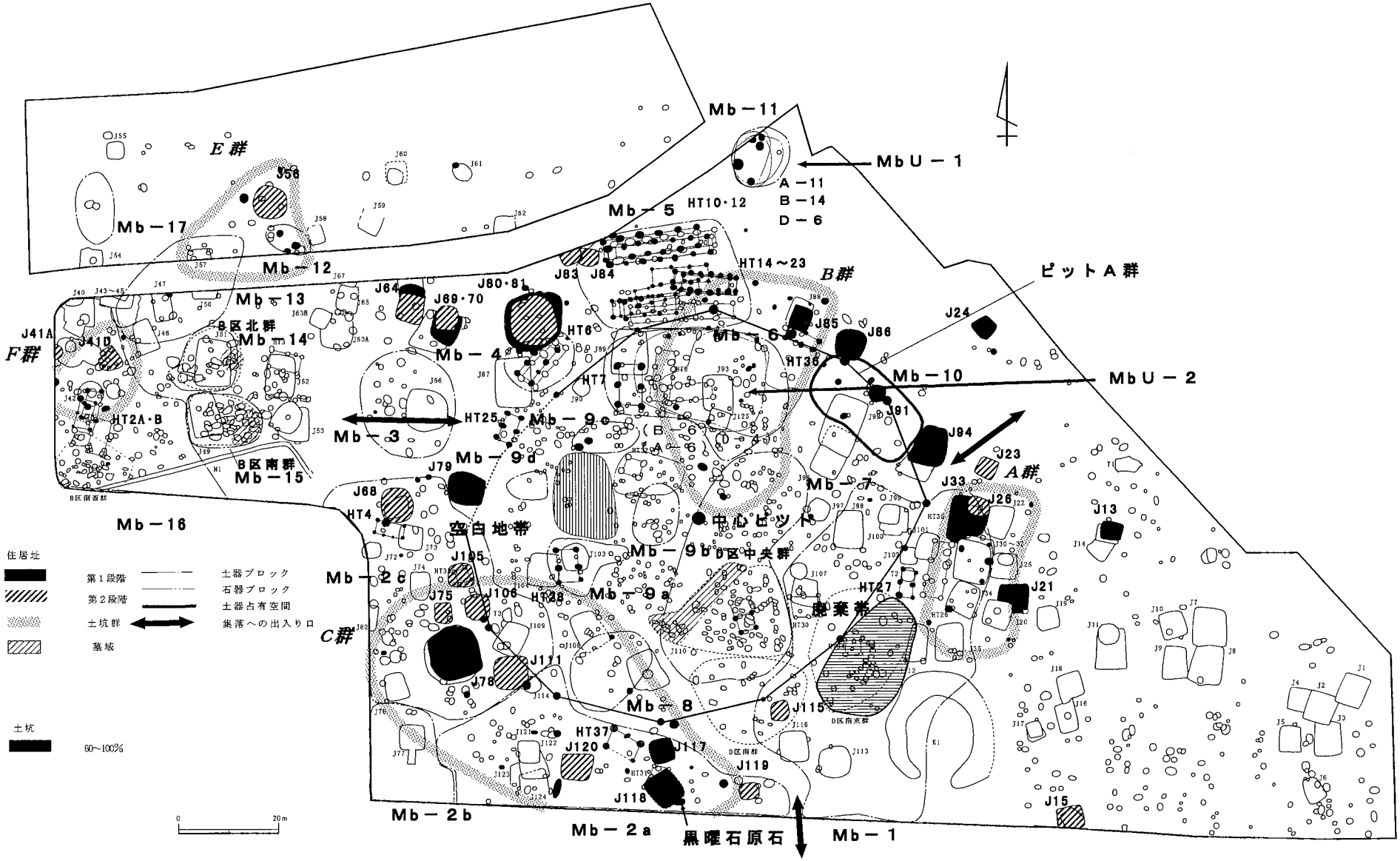
この時期の土坑群としてはＡ～Ｃ・Ｅ・Ｆ群が存在する。主として利用されていたのは西住居群に重なるＣ群である。Ｆ群はこの時期までで途絶する。しかし、それ以外の土坑群は、その後も継続的に利用されている。

「中央広場」には、この時期以降数千のピットが掘られるており、様々な作業が行われていたとみられるが、個々の作業内容は不明である。なお、「空白地帯」から東に向かって帯状にピットのやや稀薄な部分が存在しており、これによって「中央広場」が南北に二分されている。集落内に通路的な部分が存在してしたとみられる。

この時期にかつての墓域（Ｄ区南東群）に設定された「廃棄帯」への遺物の集積が開始され、墓域の立石は廃棄遺物により徐々覆われていったと推定される。この墓域はムラの創始者グループの墓地である。したがって、この墓域に対しては敬意を払う祖霊崇拝の中心的場所であったと考えられる。ゆえに、「廃棄帯」は単に不用物を捨てる場所ではなく、さまざまな生活道具に対する「物送り」的な意味合いで機能していた場所と推察される。この時期以降盛んに行われる前代の遺物の二次廃棄も、こうした意識によって行われた行為であったのであろう。「廃棄帯」と住居址の廃棄遺物は区別されていた可能性もある。

廃棄行為と連動して「中央広場」には不用物を放置しない清浄な場所と位置付けられていたとみられる。この場所の遺物は、清掃的廃棄行為（一次廃棄・二次廃棄を含む）により、「廃棄帯」や廃絶され窪地化していた住居址へ廃棄され、恒常的に清浄な状態が保たれていたとみられる。

遺物のブロックも「中央広場」では稀薄で、北西部分には直径15m程の「空白地帯」も存在している。



第286図　諸磯ｂ式第１段階～第２段階の集落変遷図

この部分は特に清浄にしておく必要のある神聖な「場」とみられる。(註3)

遺物分布では土器ブロック Mb—10は、唯一この時期の占有空間でとして認識できる部分である。また、MbU—2ユニットも、使用されていたとみられる。

集落への出入口は3カ所想定される。この部分は、遺構・遺物分布も稀薄である。北東部（東北住居群と東南住居群の間)、南（西住居群と「廃棄帯」の間)、北西部（B区土壙墓群の通路）の3カ所である。

諸磯b式第2段階　前段階に成立した環状集落は、この段階になると早くも形態が崩れ始める。中枢部分の大形掘立柱建物群・墓域・「廃棄帯」など社会的機能を有する施設は継続して使用されている。しかし、住居群の配置は前段階と大きく異なる。住居群は「中央広場」より北東には小形のJ—23・26住が存在するのみで、残りはJ—15住とJ—56住を結んだライン（SE—NW軸）よりも南西側に作られている。つまり、東住居群が大きく衰退し、西住居群は逆に発展するのである。依然として西住居群が集落の主導的位置を占めていたと考えられる。

詳細にみると、西北住居群（J—69・70・80・83)、西南住居群（J—68・75・105・106・111)、南住居群（J—118・119)、東住居群（J—23・26）の4群に分かれる。この段階唯一の大形住居（J—80）は西北住居群に存在し、それ以外は標準サイズないし小形の住居である。この中で、西南住居群に存在するJ—111住は特殊な住居である。①床面には炉が10カ所もあること、②北白川下層系土器群がまとまって出土していること、③東北製の精緻な石匙Aや東関東製の石匙状石器が出土していること、などから社交的色彩の強い施設として用いられていたと推察される。また、外縁部に位置するJ—15・41C・56住は、ちょうど対称的な位置に存在しており、内側の住居群とは区別されていた存在と考えられる。

前段階の様相からみて、各住居群のうち1～3軒は同時並存していた可能性があり、全体では6～9軒が想定される。集落形態は崩れたものの、前段階とほぼ同じ規模を保っており、引き続き安定した状態が維持されていたとみられる。

土坑群の利用は基本的には第1段階と同じであるが、J—56住に隣接するE群の土坑の利用されている。

黒曜石の大形原石が埋納（保管）された特殊な土坑（D—1078）が、南端部に存在している。この土坑は第1段階の住居（J—118住）より新しいが、土器型式比率などからこの段階の遺構と判断される。

（註1）建物の正面は、三角形に尖ったオドケ山であるが、隣にもっと目立つ西御荷鉾山があり、目標物としていたか疑わしい。

（註2）本遺跡では貯蔵穴と判断される土坑群が存在していない。集落規模と強い定住性からみて何らかの貯蔵施設が必要である。これに該当する施設としては、倉庫（高床式？）を想定する必要がある。本遺跡では掘立柱建物のうち、機能的にみてC形態がこれに相当すると考えられる。なお、林謙作は貯蔵と定住の在り方から成立段階（草創期)・確立段階（前期中葉)・変質段階（後期前葉）に区分している（林　1997)。第1段階はちょうど確立段階に相当するが、この段階を貯蔵施設が整備・充実される時期と考えており、この時期に出現する掘立柱建物がこうした貯蔵施設に想定される。

（註3）この部分は窪地化しており、Ⅳ・Ⅴ層が薄く、代わりに厚く黒褐色土（Ⅳ層起源）が堆積していた。したがって、人為的に窪地化された場所と判断される。この部分が大形木柱の中間に存在していることから、削平は第3～4段階に行われた可能性もある。

［諸磯ｂ式第３段階～第４段階の集落景観］（第287図）

諸磯ｂ式第３段階　住居群は南東から北西方向へ帯状に配列し、前段階とほぼ同じ集落形態を呈する。依然として西住居群を中心として住居は配置されている。これに対し、掘立柱建物群は「中央広場」を囲むように配列している。つまり、居住施設と、共有施設が二元的な構造を呈している。

集落を構成する住居群には、Ｊ―57・58・59・66・78・80F・106・108・116住が含まれる。また、Ｊ―40・41Ｃ・56・61・83・113もこの時期に存在していた可能性が高い。住居群は５群に分かれており、各群２～５軒で構成されている。このうち、Ｊ―66住とＪ―78住が大形で中核的な住居と推定される。よく観ると、南東群以外は比較的大形の住居１軒と小形住居２～４軒から住居群が構成されている。なお、最も西に位置する住居群（Ｊ―40･41C）は、さらに西に延びていると推定される。これらの住居群の床面積を合計するとほぼ同程度である。したがって、各住居群は比較的大形の住居を核とした等質的な居住単位であったと推定される。また、大形柱穴（マーカーポール）を結んだラインで大きく南北２群に分かれているとも考えられる。したがって、集落構成単位は、大別２単位、細別５単位であったと推定される。なお、これらの５住居群は同時並存し、全体では７～10軒程度と推測される。

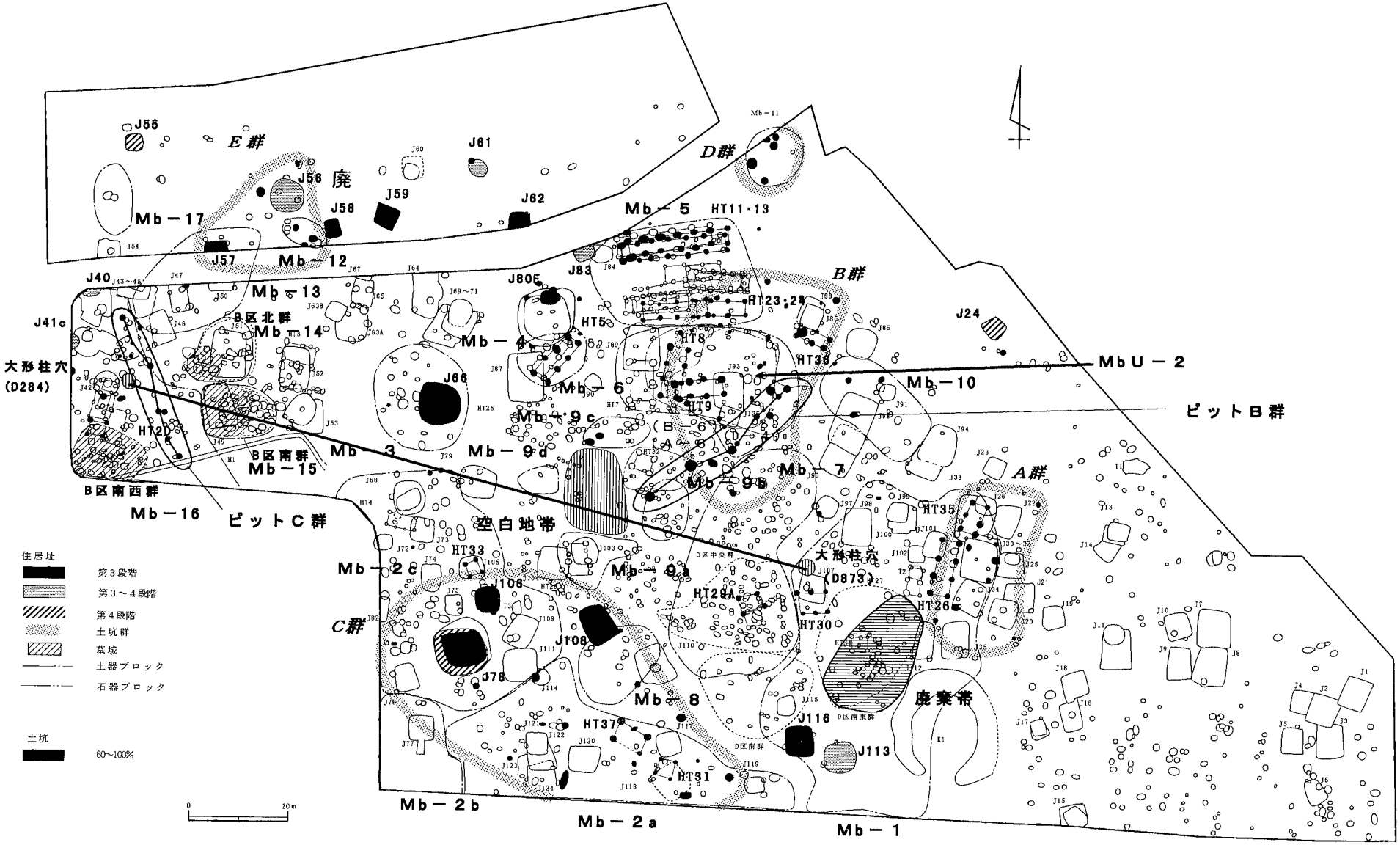
掘立柱建物址や墓域・土坑群などの共有施設（社会的機能を有する施設）は、前段階の様相を継続させており、大きな変化は生じていない。すなわち、環状集落中枢部には大形掘立柱建物群が継続的に同じ場所に構築されている。また、それ以外にも大小の掘立柱建物も、前段階の掘立柱建物と重複するか近接しており、継続性がうかがえる。

中枢部の大形掘立柱建物では、HT―11・13（Ａ形態）、HT―23・24（Ｂ形態）、HT―８・９（Ｂ形態）が、３列に規則的に配列されて構築されており、中枢部は前段階同様の機能を果たしていたとみられる。また、両サイドにはHT―５（Ｂ形態）、HT―36（Ｃ形態）が左右対称形に配列されており、計画的配置が維持されている。東辺にもHT―35（Ｃ形態）が構築されている。これらの掘立柱建物群は中枢部分を除き貯蔵施設として利用されていたと推察される。また、HT―26（Ｂ形態）は、後述するようにマーカーポールの設置と関連して作られた建物であった可能性もある。

墓域はもはや「中央広場」には形成されず、Ｂ区南群・同北群西半・同南西群に形成される。中心となるのはＢ区南群である。ここでは中心配石（Ｄ―338）が設置され、上部施設としては立石に変わり集石が用いられるようになる。また、下部施設には「鉢被り」と大形抱石（石皿・石皿状礫）が新たに追加される。そして、南西群は新たに形成された墓域である。この場所は「もう一つの中央広場」の一部に当たるが、未調査区域へ広がっていることから、集落の中での位置関係ははっきりしなくなる。このように、墓域は徐々に西へと移動して行くが、住居群の在り方と連動していた可能性が高い。

以前墓域が存在していた場所（Ｄ区中央群）には、掘立柱建物HT―29A・30（Ｄ・Ｃ形態）が構築される。これらは位置的にみて祖霊崇拝的な施設と推定される。Ｂ区南西群にも掘立柱建物HT―2D（Ｄ形態）が隣接して存在しており、同様な施設とみられる。

また、両墓域に隣接して大形柱穴が設けられる。「中央広場」のＤ―873と、「もう一つの中央広場」のＤ―284がそれである。このライン上には「空白地帯」や墓域への通路、墓域（Ｂ区南群）が連なって存在しており、視界を遮るものはない。したがって、ここには長大な木柱（マーカーポール）が見通せるように立てられていた可能性が高い。また、このラインは住居群を南北に二分する目的も有していたかもしれない。両者間の距離は140mであり、これを結んだラインはW―15°―Nとなる。この方向は５月初旬（立夏：５月６日前後）の日没方向とほぼ一致している。ここに立てられていた木柱は儀礼的なもの



第287図　諸磯b式第3段階～第4段階の集落変遷図

であったと推測される。(註1) マーカーポールの東には、このラインに対して正面を向いて大形掘立柱建物(HT—26)が構築されている。大形建物は、北辺中枢部以外では唯一であり、この位置に構築された理由は、マーカーポールの設置と関連する可能性がある。

土坑群としては、主としてA群とD群が利用される。このうち、A群は大形掘立柱建物(HT—26)の東(裏側)に存在しており、この建物との関連性がうかがえる。また、集落の北東にやや離れて存在するD群は、男性系石器群が集中する作業空間であり、複合機能ユニット(MbU—1)である。位置的に大形掘立柱建物(HT—11・13)との関連性がうかがえる。

また、掘立柱建物(HT—9)の東(土坑B群の一部)に存在する複合ユニット(MbU—2)では、石核A・ScB・棒状礫・FLDなど男性系石器群が集積されており、特定の機能をもった作業空間として、この時期に利用されていた可能性がある。

遺物の廃棄行為は、「廃棄帯」と廃絶した住居址に対して行われている。なお、遺物廃棄に利用されるのは、大形で深い竪穴住居址が集中する集落北西部に偏る傾向が強い。ちょうど「中央広場」を挟んで「廃棄帯」のある集落南西部と対峙する関係にあり、遺物組成からは認識できないが、両者の使い分けが行われていた可能性もある。

土器混入ピット群のうち、A群以外はこの時期のものとみられる。B群やC群では、列状に配列しており、何らかの意図に基づいて設置されたものと推定される。「もう一つの中央広場」に存在するピットD群は、無意図的に遺物が混入したものであり、この場所が頻繁に利用された結果とみられる。二つの「中央広場」で、遺物の分布状態が異なる点は留意される。

「中央広場」におけるピット群はこの時期にも継続して作られ続けたものと推定される。このピット群は、ほとんど規則性を有しておらず、組合わさって一つの施設が構成されていたと考えるより、反復的に穴を掘る行為自体が目的と考えた方が理解しやすい。この反復的に穴を掘る行為により、「中央広場」はあたかも耕作地のような、攪拌された土壌が形成されている。したがって、この「中央広場」とは地下茎を食用とする植物(ヤマイモ類等)を栽培する場所(耕地)であった可能性もある。(註2)

諸磯b式第4段階　この段階でも基本的には前段階の集落形態が継続する。調査区の南西(未調査部分)に「もう一つの中央広場」が存在しており、土壙墓数からみて、集落の半分程度は調査区外に存在していると推定される。調査区内に限れば前段階に形成された5つの住居群は継続するものの、住居数は減少している。この中では拡張を繰り返し大形住居化したJ—78住が中心的な住居である。そして、残りはほとんど小形住居である。この時期に新たに構築された住居(J—24・55)は、いずれも小形で、集落の外縁部に位置していることから、住居が散漫に存在する集落形態となっていったものと推定される。この段階に調査区内で同時並存する住居は3軒〜6軒程度とみられる。

集落の中心が西へ移動するに伴い、掘立柱建物は第3段階よりも減少していると思われる。「廃棄帯」でもこの時期の遺物は減少しており、東に存在する遺構群は衰退していったと考えられる。

墓域は前段階と同じ土壙墓群(B区南群西半・南西群)が使用されている。玦状耳飾の着装された土壙墓(D—352)はこの時期のものである。しかし、墓域の中心はしだいにB区南西群へ移行しており、2つの墓域が並存している。

(註1) 立夏は春分と夏至の中間日に当たり、端午の節句として祭日である。また、縄文時代まで遡ると考えられている諏訪大社御柱際の建て御柱は古来より5月初旬に行われている。そして、欧州でも5月祭に当たり、May・pole(5

月柱：花・リボンなどで飾った柱）を立て、その回りでダンスをして楽しむ習慣がある。洋の東西を問わずこの時期に柱を建て、祭りを行う慣習は多い。この事例からみて、縄文時代でもこうした節目を経験的に理解していた可能性が高い。ちなみに、この方向は妙義山と浅間山の間の切れ込んだ場所に当たる。

（註２）住居群が環状を成さなくなっても、「中央広場」とそれを囲む掘立柱建物が維持され続けていた点も、耕地と考えれば合点がゆく。中野谷地区遺跡群の細田遺跡では、この頃のものと推定される土坑（D－３号土坑：B.P.5，510±90）からは、南方系の外来の栽培作物であるエゴマがクリ・クルミとともに貯蔵された状態で検出されている（金原 1994）。また、最近では北海道千歳市美々貝塚北遺跡において前期の畑状遺構が検出されているし（高橋 1998）、岡山県を中心として検出されているイネは縄文前期～中期まで遡る可能性が指摘されている（佐藤 1997）。もはや、縄文時代の農耕の問題は避けては通れないものとなっている。

［諸磯ｂ式第５段階の集落景観］（第288図）

この時期には、集落の形態がさらに不明瞭になる。大形住居址（Ｊ―78）にはこの時期の遺物が大量廃棄されていることと、本遺跡の南西に存在する天神原遺跡では、この時期以降の住居址が１軒検出されていることから、集落は調査区の西側に移動したものと推定される。また、この時期以降の集落は、中野谷地区でも北東・堤下遺跡、下宿東遺跡、細田遺跡などで小規模な集落が形成されており、分散した居住形態となってしまい、大規模な集落は形成されなくなったと判断される。

この段階の唯一の住居はＪ―24住である。それ以外の住居址では遺物の廃棄場所として利用されているに過ぎない。大形柱穴からもこの段階から諸磯ｃ式期の土器が出土しており、マーカーポールが除去された後も窪地化していたと推定される。

ｄ　縄文時代前期末葉の集落の景観

［諸磯ｃ式期の集落景観］（第288図）

住居は全く存在せず、調査区内には土坑と遺物が集中する部分が数カ所点在するのみである。南西に隣接する天神原遺跡では、諸磯ｃ式古段階の住居が１軒検出されており、集落自体は調査区外に存在していたと推定される。しかし、集落規模は小規模なものであったとみられる。

［十三菩提式期の集落景観］（第288図）

調査区の東に土壙墓（Ｄ―1126）が１基存在するのみである。この時期の遺物は調査区内に散布しているが、住居や土坑は存在しない。一時的に滞在するキャンプサイトとして稀に利用されていた場所であったと推定される。

その後、この場所が利用されることはほとんどなく、遺物も散布しない状態がしばらくの間続く。この場所は縄文中期の人々からはすっかり忘れられていたとみられる。

第288図　諸磯ｂ式第５段階・諸磯ｃ式～十三菩提式の集落変遷図

e　縄文時代中期後葉～後期前葉の集落の景観

［中期後葉の集落景観］（第289図）

加曽利E3式期には小規模な集落が形成される。住居は7軒（J―42・65・72・73・90・97・114）存在する。住居は南東から北西の方向性をもって、35～50mの間隔を置いて2列に配列しており、北列（J―65・90・97）と南列（J―42・72・73・114）に分けられる。そして、この間には細長い帯状の「中央広場」的な場所が存在しており、埋設土器4基が点在している。

このうち、J―72・73住のみ隣接しており、時期差が想定される。また、J―72・90住は拡張されており、ある程度の時間幅をもって集落が継続していたとみられる。こうした状態らみて、3～6軒が同時並存していたものと推定される。しかし、この場所での集落は比較的短期間で終了しており、一時的なものであったと言えよう。

［後期前葉の集落景観］（第289図）

加曽利E4式期から称名寺式期にかけての時期では、住居1軒が調査区南西部から検出されている。本遺跡の南西に隣接する天神原遺跡では、この時期の集落が検出されており、本遺跡は集落の外縁部に相当するとみられる。この時期の遺構としては、他に調査区南西に土坑群が形成されている。また、堀之内1式期にも土坑群が同じ場所に継続して形成されている。

堀之内2式でも、同じ土坑群に継続して利用されている。また、大形柱穴の窪地を利用した土坑（D―284上層）が調査区西部に存在する。完形の浅鉢が1点出土しており、この時期に土壙墓に転用された可能性もある。

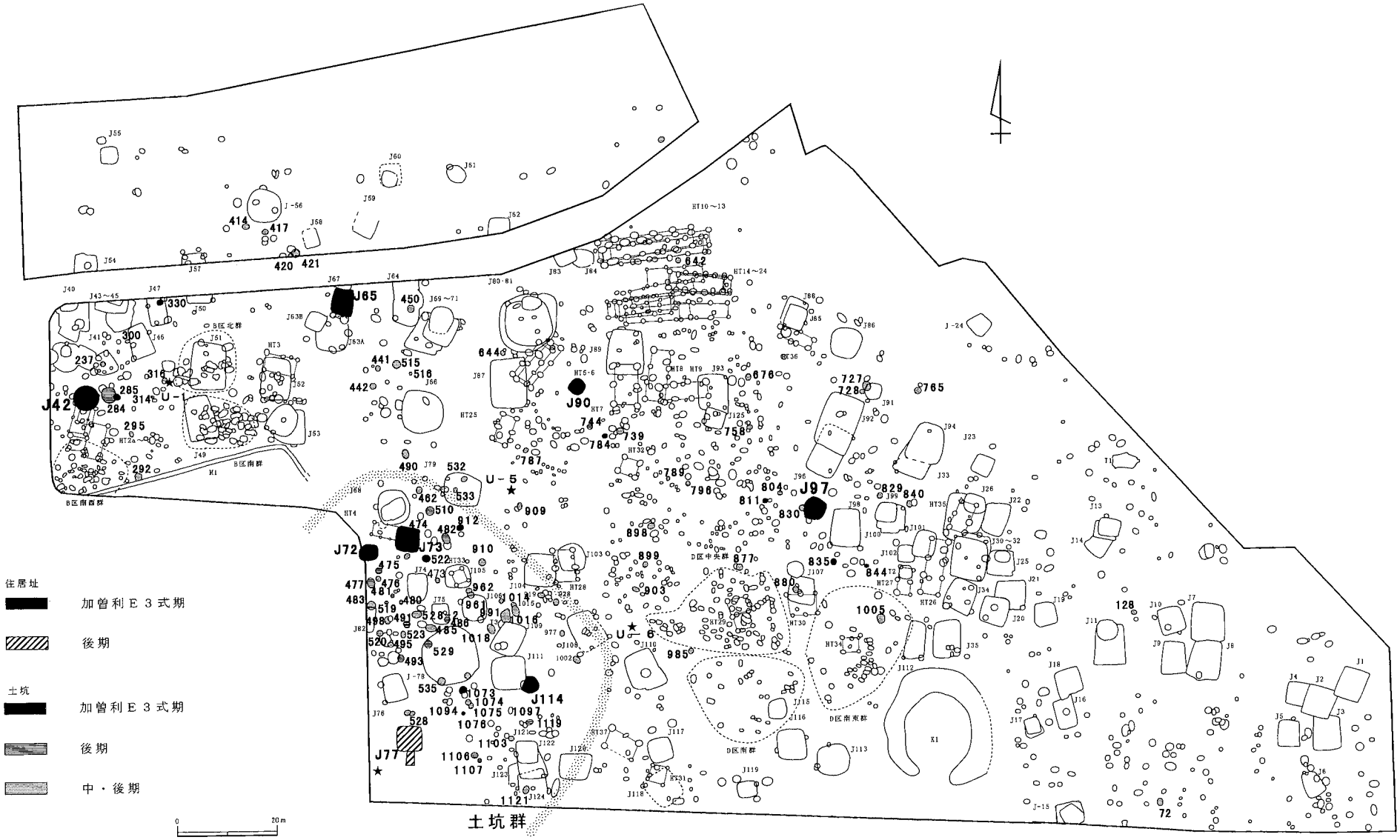
f　縄文時代前期の集落変遷について

縄文時代の集落研究は、一つのジャンルを形成しており、方法論も多岐にわたる。環状集落についても、住居を同時並存としてとらえ大規模な集落とみる立場（和島　1948、安孫子　1997など）と、少数の住居から成る小規模集落が反復的に営まれたとする立場（土井　1985、黒尾　1988、羽生　1989など）では、評価が大きく異なる。また、小林達雄氏は、環状集落を「縄文モデル村」（1980）と位置付け、拠点集落としての性格は認めつつ、「3棟からせいぜい数棟程度」（小林　1986）と同時並存する住居数は少なかったと考えている。

こうした最近の集落論の現状と課題については、客観的な視点からの整理が谷口康浩氏によって行われ、①方法論的問題（集落研究における「時間」の問題、民族誌的類推法の問題）、②竪穴住居跡の重複および廃絶後の現象に関する問題、③集落の安定性・移動性の問題、④環状集落と集落規模をめぐる見解の相違、といった4つ問題の所在が明らかにされている（谷口　1998）。こうした問題点の存在を踏まえつつ、本遺跡の事例について、集落形態・居住人口の変化・社会的機能を有する施設の発展過程の視点から、集落の社会性と歴史性について一つの解釈を提示し、ここでのまとめとしたい。

［集落規模の変化］

住居からみた居住人数の推定　本遺跡では縄文時代前期中葉から後葉にかけて集落が断続的に形成さ



第289図　中期・後期の集落変遷図

れ、居住人口の増減が反復的に繰り返されていることは間違いない。集落の居住人数の推定は、①「一つの集落遺跡の全体を発掘し、その遺跡にある住居址数を調べ」、②「発掘された住居址のうち、同時に存在したと考えられる住居の数を推定」し、③「それぞれの住居に住んでいた人々の数を推定する」手順が必要である（羽生　1990）。本遺跡の調査では①については、ほぼ条件を満たしていると言えよう。また、③についての住居数から居住人数を推計する方法は、住居床面積を基準とした関野克の公式（関野1933）が一般的であり、研究者間である程度コンセンサスが得られている。(註1)

ちなみに、関野の公式は次のとおりである。

n＝A／3－1　　ただし、n：居住人員（人）、A：住居床面積（m²）

ここで、問題となるのは②同時並存した住居数の推定である。前項では、住居群の配置状態から、同時並存する住居数を推定した。しかし、この方法では変位幅が大きく、なかなか居住人数の推定まで到達し得ない。

今回の調査では、各住居址の重複状態の把握と、出土土器から帰属率を求める方法により、ある程度の時間幅まで絞り込むことができた。さらに、厳密に同時並存を証明することは実際には不可能である。そこで、現状で把握し得る限りにおいてという条件付きで、居住人数の推定を行うことにする。

関野公式により、時期別に居住人数を推定したものが第290図である。ここで、縦に結んだ線は一つの住居の拡張（同一場所建替え）を示している。

有尾式期では2～4段階では、連続して最大5回の拡張が行われている。復元家屋の事例では、竪穴住居の耐用年数は中期の例で約15年（安孫子　1997）、古墳時代の平地式住居の例で7年とされる（大塚1998）。有尾式期では主柱が細いことから、中期の住居よりも短期間で建て替える必要があることは、ほぼ確実であり、7～10年程度と推測されよう。この場合、35～50年間住居が存続していたことになる。

また、関野公式では1回の拡張が1人の増加を前提としていることから、拡張は数年ペースで行われていたことになる。5回の拡張は5人の子供の増加ということになる。15才以上の女性の平均寿命は31.3才(註2)と推計されており（Kobayashi　1967）、3年に1度の割合度出産し、住居の拡張もほぼ同じペースで行われていたことになる。すると、拡張された住居でも15年間しか存続していなかった計算が成り立つ。

そして、諸磯b式期では各時期3～4回の拡張（同一場所建替え）が認められる。諸磯b式期の住居は柱が有尾式期よりも太く構造的にも堅固であるので、10～15年ほどの耐用年数が推定される。この場合30～60年間存続する住居が存在していたことになる。関野公式の前提に立てば9～12年となってしまうが、より堅固な構造の諸磯b式期の住居の方が耐用年数が短いのでは不合理である。

以上のことから、住居の拡張（同一場所建替え）は居住人数の増加というより、むしろ耐用年数が主たる要因として行われていた可能性が高いと言えよう。住居の存続期間は有尾式期で35～50年、諸磯b式期で30～45年のということになる。

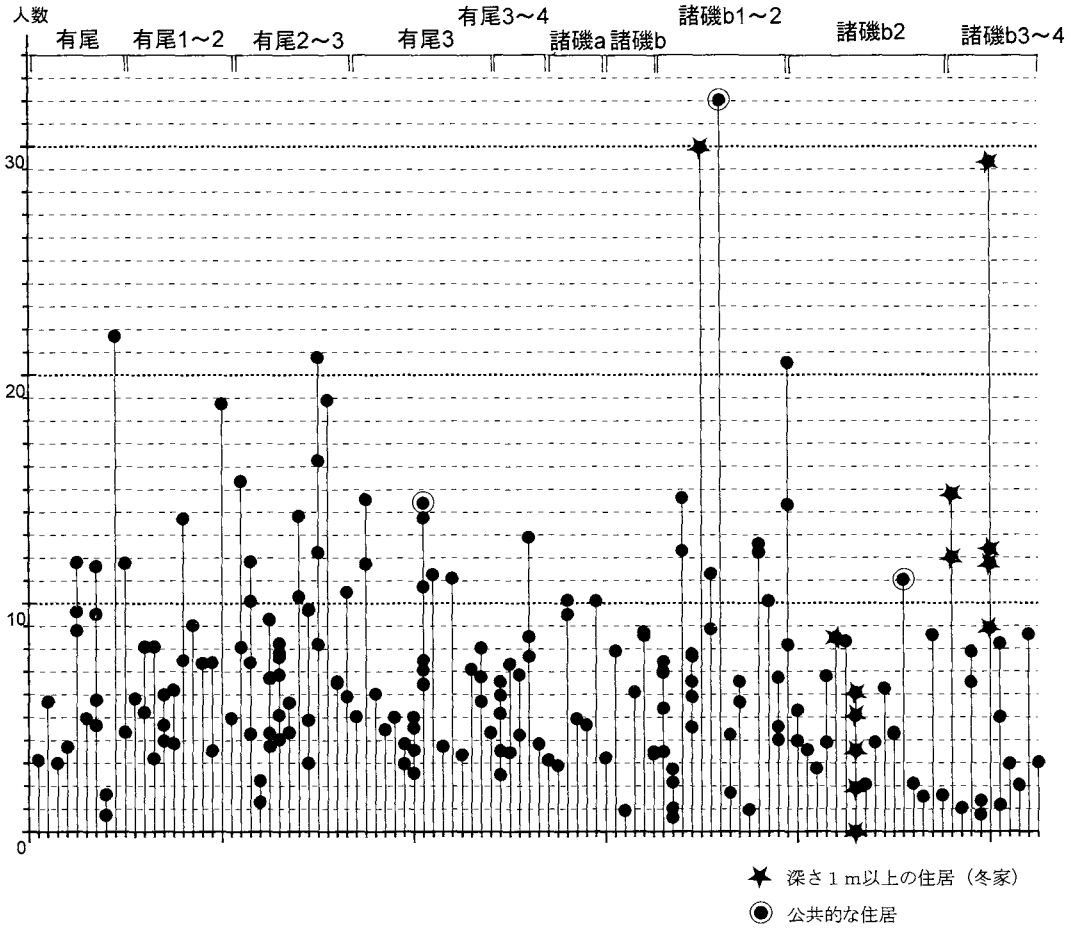
ところで、各段階の時間幅は前期の土器型式数からみて、約50年と推定される。(註3) したがって、有尾式期、諸磯b式期とも、本遺跡は集落が断絶することなく、ほぼ継続していた可能性が高い。この継続性の問題については、次項で再度検討することにする。ここで言えることは、定住性の高い集落が相当長期間に渡り存在していたことである。

関野公式により時期ごとに居住人数を推計してみよう。第186表上段は、単純に床面積を積み上げたものにより算出した居住人数でのとおりである。しかし、拡張住居の場合、同一人が複数カウントされる

ことになってしまうため、実際より人数が大幅に水増しされてしまう。また、炉址が多数存在し、公共的機能を有していた可能性のある住居や、深い竪穴を有する「冬家」の存在も推定される。そこで、こうした住居を除外し、補正したものが下段の表である。これをもとに同時並存していた人数を推定してみた。なお、この場合の居住人数は、床面積を占有する程度に成長した人間の人数ということになり、乳幼児は含まれないことになる。有尾式期では延べ446.3人、諸磯ｂ式期では215.8人である。同時並存していた人数はそれぞれ、81.6人、37.8人であり、有尾式期が２倍の人数となってしまう。しかし、これは有尾式期には、「冬家」を想定しなていないためであり、「冬家」を想定した場合には、各時期の人数はもっと少なく、諸磯ｂ式期とほぼ同じ居住人数で推移していたことになる。

また、細分時期別に居住人数の推移をみると、有尾式期では、徐々に人数が増加し、４段階になると大幅に減少する。その後に集落は中断されており、この時期には他の集落への移住といった変動が生じたものと考えられる。１～３段階の頻繁な住居の拡張は、この時期に人口増加率が比較的高かったことを傍証するものであろう。

これに対し、諸磯ａ式期から諸磯ｂ式２段階までの間は、居住人数が40～50人で推移している。また、３～４段階では急減するが、この時期の集落は完掘されていないことから、実際の減少はもう少し緩慢なものであったと推定される。他の集落からまとまって移住してきた集団によって、集落が再形成され、ほぼ同じ人数でしばらくの間、安定して集落が継続していたことを意味している。



第290図　前期の住居居住人数の推定

（註１）住居の居住人口を推定する場合、関野克氏の公式による推計が一般的に用いられている。安孫子昭二氏は関野公式の基準となった姥山貝塚の事例を疑問視する。別の方法での人口推定方法を検討し、多摩ニュータウン№72遺跡における中期の集落全体の饗宴に使用されたと考えられる特大の深鉢・浅鉢の容量から人口推定を行っている。結果的には、関野公式の1.8倍の居住人口を推定している(安孫子　1997)。しかし、安孫子氏の方法でも仮説の積み重ねであり、実態を示している保証はない。ここでは実態に合致していなくとも、相互に比較検討が可能な方法である点を重視し、関野公式により算出することにした。また、これまでの分析結果から考えて、この時期の掘立柱建物は共有施設・貯蔵施設と推定されるので、この場合の居住施設とは考えない。

（註２）平均寿命については、最近ではもう少し長命と考える研究者が多い（小林　1979、山口　1982等)。

（註３）ここでは前期の土器型式を、前期初頭土器群、花積下層古・新、関山Ⅰ古・新、関山Ⅱ古・新、有尾１～４、諸磯ａ古・新、諸磯ｂ1～６、諸磯ｃ古・新、十三菩提の20段階として考えた。また、笹森健一氏はこれとは別の細分案により前期を30細分し、1,400年間継続したものとして、１段階を45年と推定している（笹森　1987)。基準は異なっているが、およそ40～50年を一細分段階として捉えることについては、大きな支障はないと思われる。

［社会構造について］

住居居住単位の推定　縄文時代の住居には、一般的に夫婦を基本とした単婚家族(自然家族)、または複合家族（一夫多妻・多夫一妻）が居住していたと推定されている（勅使河原　1992)。また、前期中葉では、根古谷台遺跡の大形住居のみによって構成される集落の事例からみて、複数の世帯が集合した拡大家族の居住の可能性も考えられる。しかし、本遺跡では人骨が全く検出されていないことから、家族構成については間接的に推測するしか方法がない。

ここでは、居住人数をもとにして、こうした住居居住単位と、その背景にある社会構造につい推察してみたい。第291図は居住人数別に住居数を示したヒストグラムである。また、第186表は世帯平均人数を推定したものである。

有尾式期では、３～７人程度が標準的である。そして、10人以上が居住可能な大形の住居も少数存在している。こうした住居は標準的な住居が拡張した結果大形化したものであり、居住生活上の連続性が認められる。これは、同一住居に居住する「家族」の拡大の結果としてみた方がよいと考えられる。つまり、老年層を含めた親・子・孫の三世代が同居する居住スタイルへと発展した結果と推測される。こうした住居数が少ないのは、当時の老齢人口の比率の低さを反映した結果と思われる。

諸磯ｂ式期では、１～９人程度居住できる住居が標準的であったようである。また、11～15人程度居住可能な住居も少数存在している。これは有尾式期と同じ傾向であり、三世代同居の居住スタイルが継続していたことによると推定される。ここで注目される点は、離れた場所に複数の炉址が存在する住居が出現することである。有尾式期では、居住人口の増加に対し、拡張方式で対応していたのが、諸磯ｂ式期では根本的に住居構造を変化させて対応しており、炉の複数化もその一つであったと推定される。複数の炉址が存在する住居は、第291図に示したとおり大形の住居が多く、居住形態の変化と関連する現象であろう。

炉の機能については、小林達雄氏は、「単なる日常的な採光、暖房、調理用などとは異なる観念的な機能をもつもので」、非日常的なものと推定されている（小林　1990)。つまり、家族の紐帯関係の象徴と考えられ、背景には火を司る立場にあった成人女性の存在が暗示される。また、笹森健一氏は、この時期の住居構造に関する精緻な分析をとおして、複数炉の出現を新たな婚姻による「炉分け」と想定し、「婚姻を結んだ三世代に亘る直系家族的関係」が「中央炉」の出現と関連するとしている（笹森　1987)。

単純計算による推定居住人数

	有尾1～2	有尾2～3	有尾3	有尾3～4	有尾不明	有尾全体
合計居住人数(人)	129.3	295.0	186.0	83.5	133.0	826.8
住　居　数　(回)	18	35	28	14	18	113
世帯平均人数(人)	7.2	8.4	6.6	6.0	7.4	7.3

	諸磯ａ	諸磯ｂ1～2	諸磯ｂ2	諸磯ｂ3～4	諸磯ｂ不明	諸磯ｂ全体
合計居住人数(人)	63.7	195.8	80.3	38.5	40.2	354.8
住　居　数　(回)	10	38	23	18	8	87
世帯平均人数(人)	6.4	5.2	3.5	2.1	5.0	4.1

＊完掘しておらず、計測不可能な住居は除く

実質的推定居住人数

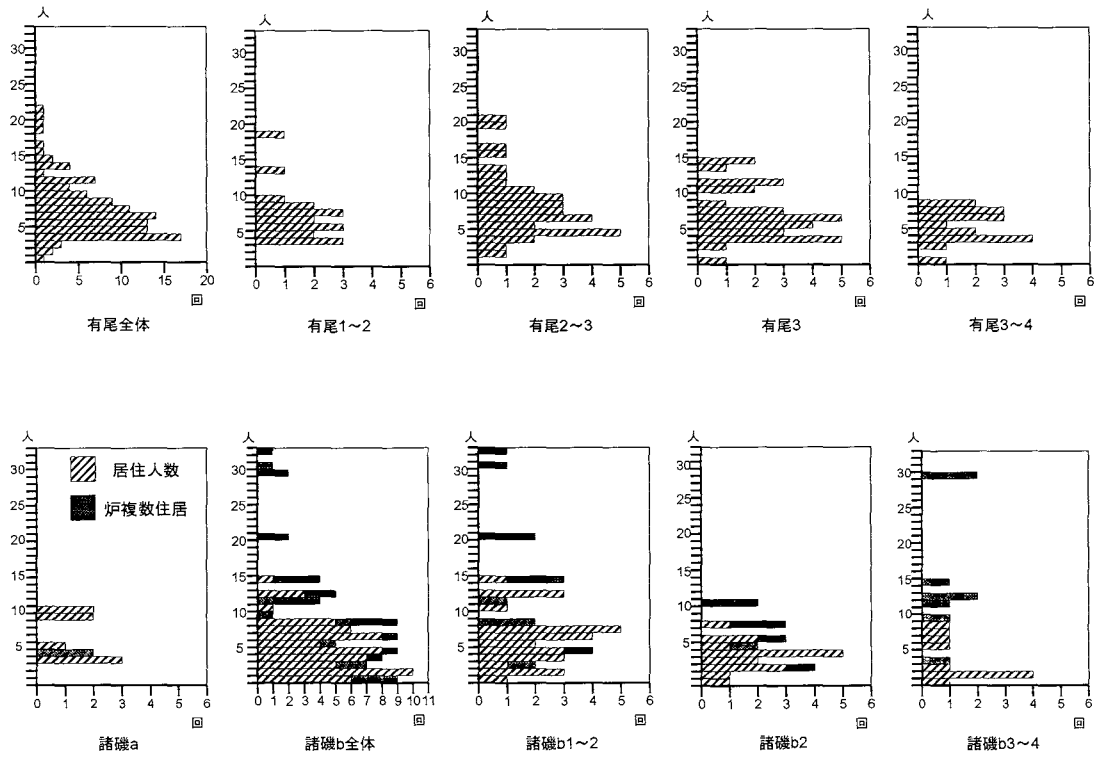
	有尾1～2	有尾2～3	有尾3	有尾3～4	有尾不明	有尾全体
合計居住人数(人)	96.6	134.1	108.8	38.0	88.8	466.3
住　居　数　(回)	11	12	15	5	11	54
世帯平均人数(人)	8.8	11.2	7.3	7.6	8.1	8.6
各時期の期間(年)	75	75	50	75		200
同時並存人数(人)	45.1	62.6	76.2	17.7		81.6
冬家有りの場合(人)	31.6	43.8	53.3	12.4		57.1

＊「冬家」有りは、諸磯ｂ式期の例に準じ、同時並存の30％を「冬家」と想定した場合。

	諸磯ａ	諸磯ｂ1～2	諸磯ｂ2	諸磯ｂ3～4	諸磯ｂ不明	諸磯ｂ全体
合計居住人数(人)	63.7	88.7	71.9	24.7	30.5	215.8
住　居　数　(回)	6	23	17	11	7	58
世帯平均人数(人)	10.6	3.9	4.2	2.2	4.4	3.7
各時期の期間(年)	50	75	50	75		200
同時並存人数(人)	44.6	41.4	50.3	11.5		37.8

＊実質居住数は拡張後の最大規模の住居の居住人数を示す。また、諸磯ｂ式期では、冬家と公共的性格の住居も除く。
＊同時並存人数＝平均寿命／継続年数／×合計居住人数　ただし、平均寿命は35才として算出。
＊完掘しておらず、計測不可能な住居は除く。

第186表　時期別にみた推定居住人数



第291図　時期別にみた住居の居住人数

ここでの複数炉の存在についても、複数の女性が同じ住居に同居する機会が増えたことによる可能性が高い。この場合、年齢層の異なる世代の女性（嫁・姑、あるいは母娘）の同居が一般的には想定し得る。こうした成人女性は、笹森氏が指摘するように、個々に独立して炉を保有していたものと推測される。複数炉の事例では、炉体土器があるものが片方だけで、残りは地床炉である場合が多いが、これは、前述の世代の違いが反映された結果ではなかろうか。

また、諸磯ｂ式期になると、こうした家族の増加では説明できないような、30人収容可能な特別大形の住居が各段階１～２軒存在するようになる。そして、これらの住居は特別に竪穴の深いものが多い。こうした深い竪穴住居は「冬家」とする説（大塚　1989、麻柄　1992、武藤　1995）が最近では支配的である。この時期に出現する深い竪穴住居は伏屋形式であり、密閉性が高いことから、「冬家」の可能性が高い。諸磯ｂ式期では、深さ1.0mを境に統計的にみて、有意な差異が認められることから、1.0m以上の住居が「冬家」の可能性が高い。これに対し、有尾式期の「方形壁溝全周型」では竪穴が浅く、通気性の良い壁立ち構造のものが大部分である。また、深さを調べても有意な差異が認められない。こうしたことから、この時期では特別に「冬家」としての住居基礎構造上の差異はなかったと考えられる。

諸磯ｂ式期に「冬家」に居住した人数は30人程度である。「冬家」はすべての集落メンバーが収容できる大きさではない。そうすると、ここに収容し得ない10～20人程度は、冬季には別の場所に移動して居住していたことが推測されるのである。ちなみに、冬季は狩猟シーズンに当たる蓋然性が高い。(註1)

次項で再検討するが、生業領域内の遺跡の分布状態、集落規模等からみて、ここで欠落する一部のメンバーは、狩猟期には狩猟キャンプとなる中小規模の遺跡へ、移住していた可能性が高い。そして、この場合集落残留者は通常の家族（世帯）の単位を越えて、一つの大形住居に集住していた可能性が高い。大形住居の炉の多さも、これを裏付けている。つまり、諸磯ｂ式期では、集落居住集団内での季節により離合集散的を行う二元的な社会構成を持っていたことが想定される。

土壙墓群からみた社会構造の推定　土壙墓群に埋葬された人数と、その変遷は第292図のように示すことができる。土器を伴わない土壙墓が多いことから、確実な時期を定めることはできない。しかし、全体的な墓域の変遷は明らかとなっており、徐々に東から西へと移動していることが判明している。有尾式期で97基、諸磯ｂ式期で97基と同数である。土壙墓群に含まれない単独の土壙墓を加えたとしても110基程度であり、住居からみた居住人数の半数程度に過ぎない。なお、土壙墓として認識可能な墓は、成人の墓と推定されるが、それにしても、墓の数が少な過ぎる。残り半数の居住者の墓は、どこか別の場所に存在していたことになる。(註2)

本遺跡とほぼ同じ時期の遺跡で、土壙墓群が存在している遺跡としては、松井田町行田梅木平遺跡(長井他　1997)と、大下原遺跡がある。行田梅木平遺跡は本遺跡の西北西7.5kmに存在している。ここでは、住居と十数基の土壙墓が検出されており、パターンＡ（小林　1980）と認定される。また、大下原遺跡は本遺跡の西南西1.5kmに位置しており、諸磯ｂ式期には数十基の土壙墓が検出されている。この遺跡もパターンＡと認定される集落である。

これらの集落の存在は、①同じ集団が集落を移動、②別の集団が同時並存、③季節ごとの居住地、④社会的規制に基づく集落の移動、の４つの可能性が想定される。大下原遺跡の場合、距離が近接し過ぎていることから、②・③の可能性は想定し難い。ここでは、土壙墓群の分布状態を詳細に分析してみると、第292図に示したように土壙墓群が途中で途切れたり、場所を変えている状態が認められる。こうした節目は、集落の中断を示している可能性がある。また、土壙墓群では副葬率がある程度一定に保たれ

ていたり、埋葬方法が確立され、時期により変容しながらも継承されていたことが確認されている。したがって、ここでは④の可能性が高いと言えよう。パターンAに分類される大規模な遺跡でも、土器の時期差に表れない小刻みな移動が行われていたことが推察されるのである。本遺跡と大下原遺跡では、大下原遺跡の方が規模がやや小さいものの、集落の性格は非常に近いので、両集落が拠点集落として交互に利用されていた可能性が高い。

次に、副葬率から社会構成の問題について考えてみよう。土壙墓の時期別副葬率は第293図に示した。有尾式期で9.4%、諸磯a～b式期で18.2%である。諸磯b式期に副葬率が倍増するものの、何も副葬されない土壙墓が大部分である。土壙墓群における副葬品の種類や位置は、単なる嗜好性ではなく、社会的ルールの中で、継続性をもって行われていた埋葬儀礼であったことは、すでに土壙墓群の項で述べたとおりである。ゆえに、副葬品を有する土壙墓の被葬者は、特別な社会階層に属する人々の墓壙であったものと考えられる。では、どのような対象が、集団の中で特別な存在であったのであろうか。

ここで第291図のヒストグラムについて、複数の炉を有する(火を司る女性が複数同居する可能性の高い）に着目して見てみよう。特別大形（20～30人クラス）は「冬家」ないし公共的住居と見なされるので、複数炉の存在は、社会的機能性によるものと推定される。次に、15人以下の住居について見ると、８人以上が居住可能な大形の住居に複数炉が多い傾向が認められる。こうした住居には、人数的にも複数の成人女性が含まれていた可能性が高い。つまり、老・熟年層の女性が含まれていた可能性が高いのである。

こうしてみると、副葬品を有する土壙墓の被葬者と、８～15人程度居住可能な大形の住居の在り方には、相関関係があった可能性が高いのである。この時期の大形の住居は三世代が同居する居住形態と考えるのが最も整合性があり、その中に老・熟年層が含まれていた蓋然性が高い。こうした高年齢層の居住者が死亡した場合、副葬品が埋納されたのではなかろうか。

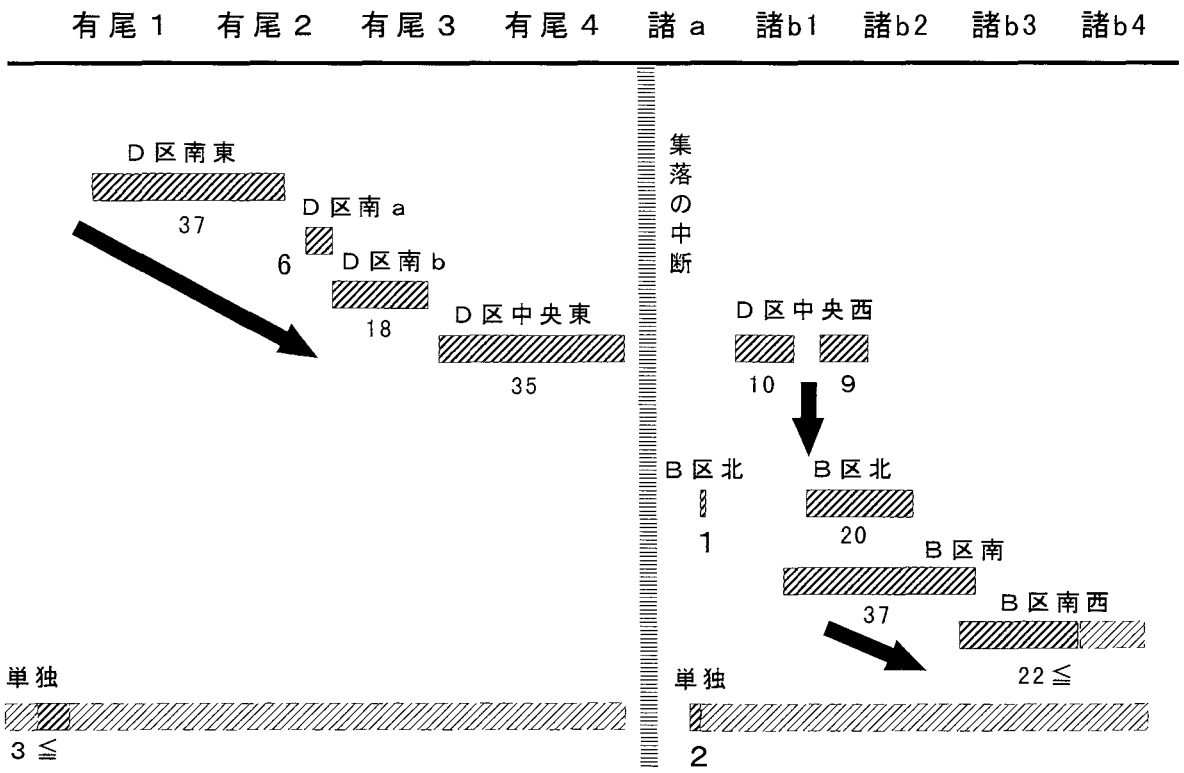
小林和正氏の作成した縄文時代の生命表によれば、15歳以上の人口のうち、45歳以上の占める比率は10.2%、40歳以上の占める比率は18.7%である(小林　1967)。(註3) この比率は、それぞれ有尾式期、諸磯a～b式期の副葬率とほぼ同じである。これを単なる偶然の一致とするのではなく、こうした高年齢層に対して副葬品が埋納されていた被葬者であったと考えたい。

長命のゆえに習得した高い経験値を有した人々は、定住性の高まった縄文前期の中では、尊敬され、かつ指導的役割を担うようになってゆき、それが埋葬時に特別な存在として扱われた理由ではなかろうか。こうした特別な存在として認識されていた老・熟年層を「長老」と呼んでいる（大工原　1997b)。(註4)

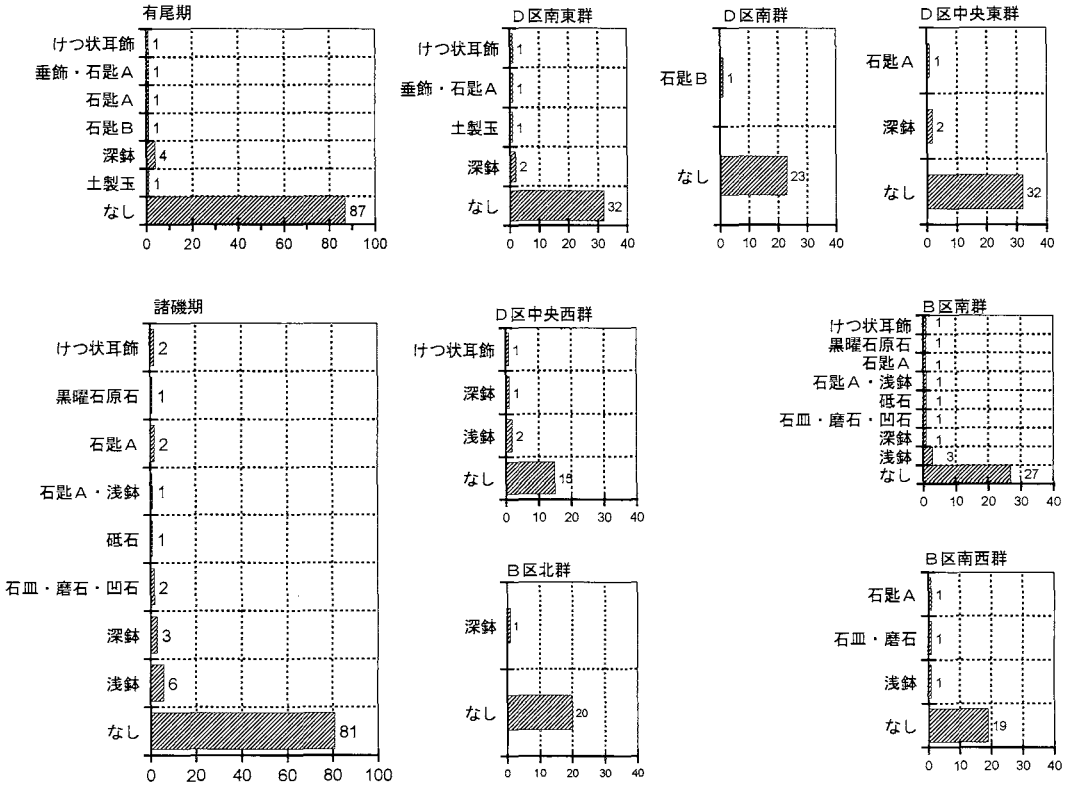
そして、社会経験の豊富な「長老」により統率されていた、この時期の社会構造について、「初期階層化社会」と呼ぶことにしたい。初期階層化社会においては、特定の家系による世襲的な社会階層は想定されず、長命かつ高い経験値が指導者としての要件であったと考えられるのである。この時期の副葬品の有無の問題についても、無理な階層化を想定しなくとも、より常識的な整合性をもって理解することができるのである。

（註１）時期は異なるが、千網谷戸遺跡の獣骨の分析した宮崎重雄氏は、狩猟季節はイノシシは秋から冬、シカは秋から冬と８～９月頃であることを指摘している(宮崎　1978)。動物の生態は変化していないことから、前期でもほぼ同じ頃に狩猟活動が行われていたと判断される。

（註２）多摩ニュータウンNo.446遺跡を分析した安孫子昭二氏は、墓壙の少ない原因について、「家長格に限られていた



第292図　土壙墓群の時期別変遷



第293図　時期別にみた土壙墓の副葬率

のではないか」と推定している（安孫子　前掲）。その場合においても、どこか別の場所の墓壙に埋葬されていたはずであり、同時並存する領域内の他の遺跡に存在していた可能性が最も高いのではなかろうか。

（註３）前項の（註２）参照。もう少し平均寿命は長いと推定されている。

（註４）筆者の意味する「長老」は、渡辺仁氏によって定義された「退役狩猟者層」と同義である。（渡辺　1990）。

［共有施設の出現と集落の画期について］

中野谷松原遺跡では、土壙墓群、掘立柱建物、大形住居といった社会的機能を有する施設が、徐々に追加されて行くことが判明した。これは集落が社会的制御機能を必要とする段階にまで、レベルアップしていったことを意味している。そして、集落の定住性が高まっていったことを示すものと考えられる。特に、集落が中断した後の、諸磯ｂ式１段階には、こうした施設がすべてが出揃い、計画的な環状集落が形成されることから、この時期に大きな社会的変動があったことが推察される。そこで、社会的機能を有する施設がどのような時期に出現するのか、他の遺跡の事例と比較し、本遺跡における集落の画期が普遍性をもつものか検討する。

土壙墓群の出現　土壙墓群は本遺跡では有尾式期２段階に出現すると判断される。まず、本遺跡周辺に存在する遺跡の様相を検討してみよう。近接する大下原遺跡（大工原・関根他　1993）では、有尾式中段階と、諸磯ａ式～諸磯ｂ式中段階に断続的に住居群の内側の平坦部分に土壙墓群が形成されている。土壙墓群はほぼ東西二群に別れて存在し、東群の方が密集している。楕円形を基本としており、上部施設として立石が存在するものがある。下部施設としては、抱石が認められるものが多い。副葬品と考えられるものとして、浅鉢・深鉢・石匙Ａ・石匙Ｂ・黒曜石原石・石皿などが検出されている。

また、松井田町行田梅木平遺跡（間宮　1997）では、有尾式新段階～諸磯ｂ式中段階の土壙墓群が、後期後半の列石及び配石墓群と重複して検出されている。ここでは少なくとも20基以上の土壙墓が、住居群の内側に帯状ないし楕円形状に存在している。土壙墓の形態は、いずれも楕円形である。上部施設の存在は判然としないが、下部施設として「抱石」が存在している。また、副葬品と考えられるものとして、浅鉢・玦状耳飾・石匙Ａ・黒曜石原石などが検出されている。また、隣接する行田大道北遺跡でも有尾式期～諸磯ｂ式期の土壙墓群が存在している。

富岡市鞘戸原Ⅰ遺跡・同Ⅱ遺跡（井上　1992）では、諸磯ｂ式期の浅鉢が埋納された状態で出土した土坑が検出されており、土壙墓と推定されるものが存在している。しかし、いずれも明確な土壙墓群は形成されてされていない。富士見村愛宕山遺跡（羽鳥他　1994）では、土坑群が各住居に隣接して存在している。このうち、確実に土壙墓と言えるものとしては、74号土坑がある。この土壙墓は円形を呈し、諸磯ｂ式中段階の浅鉢が「鉢被り」され、副葬品と推定される玦状耳飾が出土している。ただし、明確な墓域は形成されていない。前橋市川白田遺跡（大賀他　1998）では、有尾・黒浜式期～諸磯ｂ式中段階にかけての土壙墓群が検出されている。ここでは、住居に隣接して300基以上の土坑が群在しており、北東部から南西部にかけて、土壙墓と推定されるものが帯状に存在している。確実に土壙墓と言えるものは、楕円形を呈するものが多く、下部施設としての浅鉢による「鉢被り」が施されたものや、「抱石」が認められるものもある。有尾・黒浜式期では、副葬品と推定される深鉢が埋納されている例が存在している。大胡町上大矢・樋越遺跡群Ｇ区（山下　1986）では、諸磯ｂ式古段階の住居址周辺に土坑群が存在しており、土壙墓群の可能性がある。ここでは、２単位大波状口縁の深鉢が底面から出土している

例がある。こうした、土器が土壙墓に埋納されていた例は、本遺跡、大下原、行田梅木平にも存在しており、共通性が認められる。

このように、県内の土壙墓群について調べてみると、明確な土壙墓群が形成されている遺跡は、現在のところ、碓氷川流域に集中している。そして、これらの遺跡での土壙墓群では共通性が高く、同一集団または同族集団が残したものである可能性が高い。また、それ以外の地域では、ある程度類似性は認められるものの、遺跡により様相が異なっている場合が多い。特に、利根川以東の遺跡において、その差が顕著である。群馬県域における土壙墓群の特徴としては、以下の点があげられる。①楕円形のものが多い。ただし、利根川以東では円形で深い掘り込みをもつ土壙墓の比率が高い。②上部施設としては、立石が存在する場合がある。しかし、遺存状態が悪い遺跡では欠落してしまっているケースが多いようである。③下部施設としては、「鉢被り」、「抱石」が認められる場合がある。④副葬品としては、玦状耳飾・石匙A・石匙B・黒曜石原石・浅鉢・深鉢などが認められる。

それでは、関東周辺地域ではどうであろうか。各地域の土壙墓群の様相について調べてみよう。

栃木県では、根古谷台遺跡において、黒浜式（古段階～新段階）の時期には、玦状耳飾や大形装身具を豊富に伴う土壙墓群が検出されている(梁木　1988)。詳細は報告されていないものの、ここでは円形～楕円形の土壙墓が集落の「中央広場」に群在している。墓域は楕円形に密集するものと、環状に配列するものが存在しているようである。上部施設として小形の立石の認められる例が存在しているようである。

千葉県では、飯山満東遺跡（白石他　1975)、南羽鳥中岫第１遺跡（宇田　1997)、木戸先遺跡（高橋他　1994）で、黒浜式新期～諸磯ｂ式期（浮島Ⅰ・Ⅱ式期）を中心とした土壙墓群が検出されている。この地域では円形に近い土壙墓が中心で、墓域も楕円形に密集する場合が多い。この地域では、玦状耳飾（土製を含む）・垂飾・玉類・石匙・石鏃・浅鉢などが副葬品として埋納され、下部施設として浅鉢の「鉢被り」がしばしば認められる。また、南羽鳥中岫第１遺跡では、人頭形土製品が埋納された特殊な土壙墓が存在している。

埼玉県では、鷺森遺跡（笹森　1987）では黒浜式終末期～諸磯ｂ式期に土壙墓群が形成されている。土壙墓は楕円形を基本とし、帯状に配列する部分と、密集する部分が並存している。副葬品としては玦状耳飾・玉・石匙B・石鏃などが副葬品として埋納され、下部施設として「破片被り」が施される例がしばしば認められている。

東京都では、七社神社前遺跡（川田・大平　1998）がある。ここでも黒浜式新段階～諸磯ｂ式中段階にかけての土壙墓群が検出されている。モザイク的な調査であるため土壙墓群の配置は不明であるが、環状集落の「中央広場」に墓域が形成されている。土壙墓の形態は円形で深い掘り込みをもつ特徴的なものが目立つ。副葬品として、浅鉢・玦状耳飾・石匙Bなどが埋納されている。下部施設として、浅鉢による「鉢被り」と、深鉢破片による「破片被り」が施された例が存在している。この遺跡では浅鉢が豊富に埋納されている点が特徴的である。

神奈川県では、南堀貝塚（和島・岡本　1958、武井　1990他)、西ノ谷貝塚（坂本　1990)、北川貝塚（坂本・鈴木　1984・1986、坂本　1990)、茅ヶ崎貝塚（小宮　1990）などがある。正式な報告がなされていないため、詳細は不明であるが、いずれも住居群の内側の平坦部分に墓域が形成されている。土壙墓の形態は楕円形～円形で、掘り込みは浅い。北川貝塚では、下部施設として「破片被り」が施され、管玉が副葬されたものがある。また、茅ヶ崎貝塚では、石匙・玦状耳飾・石鏃などが副葬それた例が存在している。

長野県では、阿久遺跡（笹沢他　1982）では、大規模な環状集落が阿久III期～V期（有尾式期～諸磯b式期）に形成されている。内側には「中央広場」が存在し、阿久IVa期～V期（諸磯a式期～諸磯b式期）には、大規模な「環状集石群」が形成されている。土壙墓と推定される土坑は環状集石群の内帯部にいくつかの群を形成している。III期には「破片被り」例が認められるので、土壙墓群の形成はIII期からと推定される。その後、土壙墓群はV期まで継続して形成されている。土壙墓の形態は楕円形～円形で、上部施設として立石が存在するものがしばしば認められる。また、下部施設としては「抱石」、「破片被り」が認められる例も多数認められる。副葬品としては、浅鉢・小形土器・滑石製品（管玉）・赤色塗彩土器片・水晶・石匙などが埋納されていたとみられる。阿久遺跡の例は、本遺跡の土壙墓群と時期的にも、内容的にも共通性が多く認められる。ただし、環状集石群の存在する点では、本遺跡とは大きく異なっている。

また、上原遺跡（大場他　1957）の「環状石籬」と呼ばれているものも、下部の土坑を伴っており、土壙墓とその立石の可能性がある。時期も諸磯b式期であり、本遺跡の土壙墓群との関連性が推定される。

こうして各地域の代表的な遺跡の様相を瞥見してみると、それぞれに類似性を持ちながらも、同時に地域差も大きいことが分かる。これは、この時期の集団関係の強弱や、広域ネットワークのベクトルの方向性が示されていると考えられる。また、土壙墓群の形成は南関東地域では、黒浜式期新段階であるのに対し、群馬・長野では、これより多少古い時期には開始されているようである。

さらに初源的な土壙墓群としては、福井県金津町桑野遺跡（木下　1995）では、早期末～前期初頭の時期に明確な土壙墓群が形成されており、玦状耳飾・垂飾などの装身具類が豊富に副葬（着装）されている例がある。また、神奈川県上浜田遺跡（山本他　1979）でも、早期末（下吉井式期）の玦状耳飾が着装された土壙墓を伴う小規模な土壙墓群が検出されている。こうした土壙墓群の形成期を第一波とすると、本遺跡などの事例は第二波と言うことになろうか。この第二波は、第一波の時期に比べ、大きな影響力をもって短期間に広域に広まっていったと考えられる。

掘立柱建物群の出現　本遺跡では、有尾式期1段階から小規模な掘立柱建物址（あるいは方形柱穴列：D形態）が土壙墓群に隣接して構築されている。阿久遺跡でも土壙墓群に隣接して方形柱穴列が構築されている例が存在しており、共通性が認められる。

また、こうした小規模なものとは別に、本遺跡では諸磯b式1段階に突如として、20mを越える大形掘立柱建物址が出現する。これ以前には、東畑遺跡(大工原他　1994a)や松井田町八城遺跡(水田　1996)では、関山II式期に直径10m以上の円形柱穴列が検出されている。しかし、形態・機能からみて、本遺跡の大形掘立柱建物址とは、異なる系譜に属するものと考えられる。

県内ではこうした大形掘立柱建物址の類例はないので、県外に系譜を求めなければならない。栃木県根古谷台遺跡では、本遺跡に先行して、すでに黒浜式期には壁溝が全周する「長方形大形建物跡」が複数検出されている。そして、根古谷台遺跡の「長方形大形建物跡」は東北地方の大形住居との関連するものと考えられている。この建物址は、本遺跡で有尾式期に特徴的な「方形壁溝全周型」住居址と類似しており、時期的にもほぼ同時期であることから、関連性がうかがえる。また、阿久遺跡や阿久尻遺跡（小林　1993）では、「阿久型」と呼ばれる特徴的な「方形柱穴列」が多数検出されているが、規模・形態の上で本遺跡の事例とは大きく異なっている。また、南関東地域においては、土壙墓群が存在するような大規模な遺跡でも、こうした大形建物址の事例は知られていない。

したがって、現在のところ本遺跡の大形掘立柱建物址は栃木県方面、あるいは直接東北地方からの影響により、構築された施設であった可能性が高い。

大形住居の出現　本遺跡では、有尾式期にも長辺が10m程の大形住居が存在する。この時期の大形住居については、多数回の拡張の結果として大形化したものであり、通常の住居の発展形として捉えるとができる。また、諸磯ｂ式１段階に出現する30人を収容可能な大形住居は、拡張の結果ではなく、最初から大形住居として構築されている。なお、大形住居の機能については、武藤康弘氏は「住居形態、建築構造、集落立地などが多様で、一様の機能的な解釈は成立しえない」と多様性を強調する。そして、大形住居の一部についてのみ「冬期間に降雪によって生業形態が大きく変化する東北・北陸地方において、数家族の単位集団が複合居住するための住居と考え」ている（武藤　1989）。本遺跡の場合、豪雪地帯ではないものの、諸磯ｂ式期に構築される極度に深い掘り込みをもつ大形住居については、冬期の複合居住に使用される「冬家」と推定した。

諸磯ｂ式期以前の大形住居の事例としては、黒浜式期の根古谷台遺跡の事例が著名である。これは掘立柱建物址の項でも述べたとおり、東北地方のいわゆる「ロングハウス」型であり、この影響によって構築されてものと推定されている。ここでは掘り込みが浅く、掘立柱建物址とは、壁溝の有無が区別の基準となっており、両者が関連するものであったと考えられる。

また、諸磯ｂ式期の事例としては、東京都四葉地区遺跡群（山村他　1992）、和田西遺跡（桐生他　1997）において、本遺跡と類似した大形住居が検出されている。いずれも、正式報告がなされていないため詳細は不明である。この時期には南関東地域でも大形住居が存在することは、本遺跡の大形住居の系譜を考える上で重要である。今後こうした大形住居を有する集落形態を含めて検討して行く必要があろう。

集落の画期について　本遺跡では諸磯ｂ式古段階に大きな画期が認められたが、他の地域における、類似した遺構の事例について検討した結果、必ずしも同時期に一斉に出現しているのではないことが判明した。前期中葉から後葉にかけて、地域によりケースバイケースで社会的機能を有する施設が採用されていったものと考えられる。また、個々の遺構に個性があることから、広域的に画一的な情報によって構築されたものではなかったとみられる。ただし大局的に見た場合、諸磯ｂ式古段階でどの地域でも、これらの施設がほとんど出現しきっており、この時期に広域的な画期を見出すことができる。

本遺跡における集落の画期もこうした社会変化の中に位置付けられよう。また、本遺跡でこうした施設が充実していた要因として、黒曜石交易の出現（金山　1993）といった特殊事情を考慮しておく必要がある。この時期を境として黒曜石の搬入量が飛躍的に増加しており、黒曜石の流通の中継拠点としての役割が、社会的機能を有する施設を充実させたものと推定されるのである。

［列状集落と環状集落について］

中野谷地区遺跡群における前期集落の形態は、前期初頭以来列状集落が一般的な形態である。本遺跡においても、有尾式期の集落形態は列状集落である。本遺跡では、一時的に中断を経て諸磯ｂ式１段階に突然環状集落が形成される。この時期の環状集落は計画的な集落であり、新しい情報の受容と、強い指導力により建設されたものと考えられる。しかし、環状集落はすぐに崩壊し、次の段階には伝統的な列状集落に戻ってしまう。これは墓域の形態にも反映されており、環状集落が形成された直後の土壙墓群は、「中央広場」の中心に作られるが、すぐに集落の西外部（Ｂ区南群・北群）へと移動してしまうのである。また、Ｂ区南群においては一時的には環状を指向するものの、その後のＢ区南西群では再び列

状に戻ってしまう。

こうしてみると、この時期の環状集落の在り方は、中期における継続性をもった環状集落とは、本質的に異なっていると推察されるのである。環状集落の採用は、大きな変革期における外的要因によるものであって、内的要因から発展したものではないことを意味している。諸磯ｂ式期古段階の社会的変化は、伝統的な土器作りや石器作りといった生活の根幹を形成する部分をも、大きく変化されている。環状集落の採用もその一環として理解されよう。

［縄文ランドスケープとマーカーポールについて］

本遺跡の形成過程をみると、前期前葉には全く遺跡として利用されていなかった場所に、有尾式期に突然、集落形成場所として、利用されるようになる。本遺跡の直前段階では、大下原遺跡が本地域における中核的な集落であり、この遺跡は浅間山を指向する場所（北西斜面）に集落が立地している。中野谷松原遺跡も、初期の土壙墓群や住居群の配列は浅間山を指向している。そして、浅間山と大下原遺跡を結んだライン上に中野谷松原遺跡は存在している。これらの状況証拠からみて、前期中葉には、浅間山が本遺跡を拠点とする集団にとって意味のある「ヤマ」であったことが分かる。有尾式期以前から本地域では、浅間山の方向に向かって住居が列状に配置される集落形態が一般的であり、意識の中には伝統的に「浅間山」が我が「ヤマ」として存在していたとみられる。

なお、本遺跡の土壙墓群は、諸磯ｂ式期になると妙義山の方向に土壙墓の主軸方向が変換する。これは浅間山に変わって妙義山が特別に意識される「ヤマ」へと変化したことを意味していると推定される。

同様に「ヤマ」が意識されていたことを示す事例は阿久遺跡にも存在している。阿久遺跡では、集落の中央に大規模な列石が存在しており、蓼科山の方向を向いていることが確認されている。したがって、本遺跡に限らず前期中葉には、すでに特定の「ヤマ」について、特別な存在として認識していたものと推定される。

また、本遺跡は春分・秋分の妙義山（金洞山）への日没ラインと、冬至の大桁山への日没ラインの交点に位置している。この場所が選地されたのは、果たして偶然なのであろうか。関山Ⅱ式期に形成された大規模な環状集落である安中市野村遺跡（大工原・千田　1998）は、冬至の日没ライン上に位置しており、本集落形成以前には冬至の日没が意識されていた可能性がある。本遺跡は後述するように活動領域の中心的な場所に当たる。したがって、経験的にこの場所が最も生業活動を行うのに好都合な位置であったとも考えられる。しかし、そうであれば横野台地には、同じような立地条件を満たす場所はいくらでもあるはずである。それにも関わらず、台地の縁辺部に近いこの場所を選地しているには、深遠な意味があったと推察されるのである。①浅間とかつての拠点とのライン上、②春分・秋分の妙義山日没ライン上、③冬至の大桁山日没ライン上、④大規模な集落が形成可能な台地、４といった条件を満たす場所は、半径数百メートル以内の範囲に限定される。

また、諸磯ｂ式第４段階には２本の大形木柱（マーカーポール）が立てられていたことが判明している。これを結んだラインは、立夏・立秋の日没方向を示している。なお、この方向には目標となる山は存在していないことから、日没位置が方向を定める基準となっていた可能性が高く、特に立夏に基準を定めたメイポールと推定される。この方向は春分・秋分日没点と夏至日没点の中間点であるので、春夏秋冬の時期を知り得る正確なカレンダーを保持していたものと推測される。

したがって、中野谷松原遺跡が数百年間利用される拠点集落として選地されたのは、単なる偶然の帰

結であるとは言い難く、自然景観との位置関係や世界観が意識されて選地された可能性が高いのである。縄文ランドスケープの顕在化は、定住性の強い大規模な集落遺跡において認められる場合が多く、他の集落とは異なる社会的機能が保持していたことと無関係ではなかったと考えられる。

(2) 中野谷松原遺跡の活動領域について

a 石材入手からみた活動領域の推定

縄文人の日常的な活動領域については、赤澤威氏により「遺跡テリトリーは、その遺跡に居住していた集団が日常的に食料など各種資源を調達していた領域であり、それは明確に閉じた系を意味している。」(赤澤 1983) と定義される。そして、民族事例からは半径10km (歩行時間2時間) 程度で、これを越えると経済効率が著しく低下するとも言われている。仮に拠点集落から半径10kmの円を描き、その内外の生活物資の在り方の違いにより、その有効性を確認する方法で、いくつかの事例研究が行われている。遺跡から検出された貝種・魚種の組成から、活動範囲を推定する方法はその一つである。その結果、千葉県新田野貝塚や、福井県鳥浜貝塚などの研究事例では、外海の海水域に生息するものは非常に少なく、半径10kmを越えていなかったことが明らかとなっている (赤澤・小宮 1981)。海岸地域に置いては、魚貝類といった良質な食糧資源が存在し、それに依存する頻度が高かったためか、遺跡テリトリーの大きさは比較的狭かったと推定されている。

それでは内陸部に存在する本遺跡のテリトリーはどの程度であったであろうか。そこで、日常的に調達される石器石材をもとに、遺跡テリトリーについて検討することにする。前提として本遺跡を中心とした地域の地形を確認しておく。本遺跡を中心に半径5km・10kmの円を描くと第294・295図のようになる。ちょうど10kmの距離で北西から南東にかけては、急峻な山地帯に囲まれ、東にも観音山丘陵が存在することから、中野谷地区を中心として「箱庭」のような地形が展開していることが分かる。山地帯といった自然の障壁が、日常の生業活動を行う際の制約となっていたことが推察される。また、遺跡の南北には鏑川と、碓氷川といった河川が西から東へ流れている。このように、中野谷松原遺跡を中心とした模式的な地形は、遺跡テリトリーを推定するには格好の地域である。

中野谷地区遺跡群で出土する石器石材の入手場所の推定については、これまで継続的に行ってきており、大下原遺跡の事例研究 (磯貝・大工原 1993) や、天神原遺跡の事例研究 (磯貝 1994) がある。今回も付編で磯貝基一氏が中野谷松原遺跡の石器石材について産地を推定している。こうした研究の結果、中野谷地区遺跡群では、縄文時代前期から晩期に至るまでの間では、石器石材のバリエーションに大きな変化はなく、ほとんどの石材が碓氷川流域と鏑川流域から入手されていることが確認されている。

中野谷松原遺跡における石器石材の在り方も同様な様相を呈しており、黒曜石・硬質頁岩・蛇紋岩・翡翠など遠隔地からもたらされた石材以外は、碓氷川流域と鏑川流域から入手されたものが大部分である。

鏑川流域では、下仁田付近で頁岩 (下仁田泥岩) と緑色岩類が、富岡付近でチャートと黒色安山岩が、雄川との合流点付近で結晶片岩が、そして天引川との合流点付近で砂岩 (牛伏砂岩) が、それぞれ入手されていたと推定される。また、安山岩は磯部付近の碓氷川流域と推定される。

これを石材入手仕事として時期別に示すと、第187表のように示される。石材調達では鏑川流域に重点

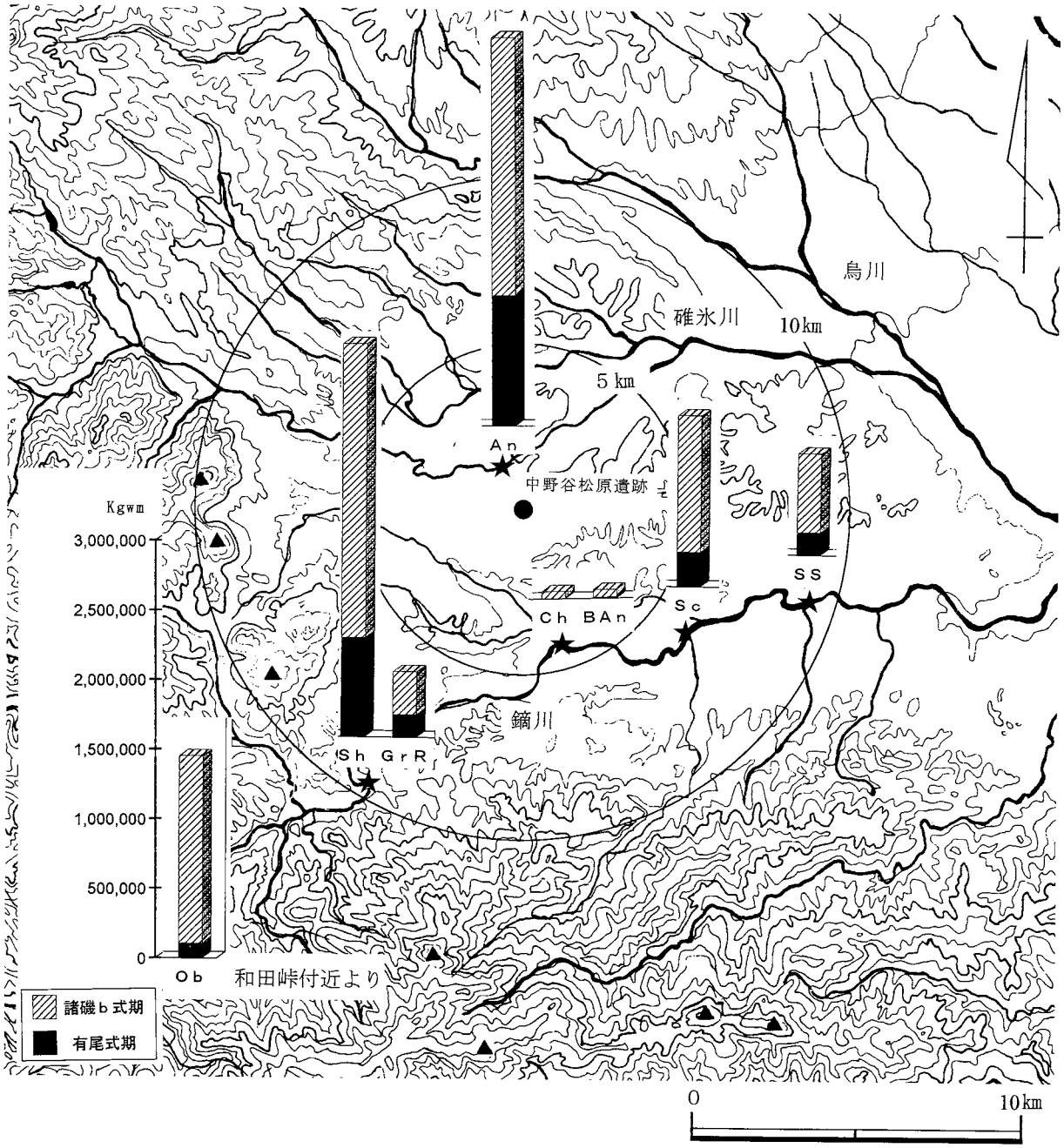
が置かれていたことが分かる。ただし、遺跡内には安山岩製の立石や大量の河川礫が搬入されて利用されており、碓氷川流域での石材調達での依存度はさらに大きなものとなる。そのため、両河川に対する依存度は同程度であったと推定される。ここでは、材質が重視される石材は、遠くても鏑川流域で調達され、運搬に労力が費やされる大形の石器や大量に必要とされる場合には、碓氷川流域において調達されるといったルールが確立されていたものと考えられる。

こうした石材は日常的に繰り返し調達されていた結果として、集落に蓄積されたものであることから、入手場所が遺跡テリトリーの範囲内に存在していた可能性が高い。したがって、本遺跡に居住していた集団の活動領域は、半径10kmの範囲であった可能性が高いのである。これは海岸地域の遺跡テリトリーに比べ広い範囲と考えられる。

石材名	採取推定地点	距離 (km)	石材重量（kg）			遺跡全体	石材入手仕事(Kgwm)	
			遺跡全体	有尾式期	諸磯ｂ式期		有尾式期	諸磯ｂ式期
Sh	下仁田町青岩	16.0	332.92	44.51	131.41	5,326,720	712,160	2,102,560
GrR	下仁田町青岩	16.0	51.03	10.19	19.19	816,480	163,040	307,040
Ch	富岡市七日市	4.6	14.31	0.35	10.52	65,826	1,610	48,392
BAn	富岡市七日市	4.6	21.45	1.97	11.39	98,670	9,062	52,394
Sc	富岡市田篠	8.5	324.59	29.23	115.18	2,759,015	248,455	979,030
SS	吉井町小棚	15.0	92.95	10.84	37.61	1,394,250	162,600	564,150
An	安中市西上磯部	2.1	2691.31	444.48	880.08	5,651,751	933,408	1,848,168
Ob	長野県和田峠	92.1	23.86	1.17	14.6	2,197,506	107,757	1,344,660

＊主要な石材のみを示した。有尾式期・諸磯ｂ式期としたものは、帰属率60%以上の住居址出土の石材
ただし、諸磯ｂ式期では大形原石（3.56kg）を加えた。
＊採取地点までの距離の推定は、Atlas Mate ver. 3.0（住友電工製）を用いた。

第187表　石材入手場所の推定と石材入手仕事



第294図　石器石材入手仕事からみた活動領域の推定

b　時期ごとにみた遺跡の分布状態

［遺跡の分布状態と遺跡パターン］

石器石材の分析結果から、有尾式期と諸磯ｂ式期ではほぼ同じ範囲が活動領域と推定された。そこで、この中に遺跡がどのように分布しているかを分析して、時期ごとに遺跡の分布状態について考えてみたい。

前提となる遺跡の分布状態について述べておく。ここで分布図に示した遺跡は、報告書等で公表されているものと、鬼形芳夫氏による分布調査の成果(鬼形　1988、鬼形・内木　1988)をもとにしている。対象地域全域の遺跡分布状態が把握されている訳ではないので、分布の疎密は調査の頻度が大きく反映されている。鏑川の南岸地域と、本遺跡周辺は調査頻度が高いため、遺跡の密度も高い。しかし、東部（観音山丘陵）や北西部（九十九川流域）は調査が少ないため、ほとんど空白となっている。そこで、本来の遺跡の分布状態を理解するために、鬼形氏によって面的に遺跡分布が把握されている榛名山東南麓についても、併せて図示した。

また、遺跡のセトルメント・パターン分類は、基本的には小林達雄による定義（小林　1980）によっている。ただし、小林氏の場合、多時期に渡る遺跡を含めてパターン定義しているが、ここでは時期を限定して分類しているため、同じ遺跡でも時期により別のパターンに分類されるケースがある。また、パターンＤ以下の分類は遺跡の性格認定が困難であるため、ここでは用いていない。また、立地条件の基準については、原典どおりでは適合しない場合が多いため、パターン分類の基準には含めていない。なお、遺跡のパターンが不明な場合は、パターンＣとして示している。以下、ここでのパターン分類の基準を示す。

パターンＡ：厳密な意味で同時並存する住居が10軒程度存在する。列状集落や環状集落を形成し、住居は重複や拡張が頻繁に繰り返される。同じ土器型式の時期と認識される住居数は数十軒とカウントされる。「中央広場」や土壙墓群・掘立柱建物址などの社会的機能を有する施設が顕在化している。

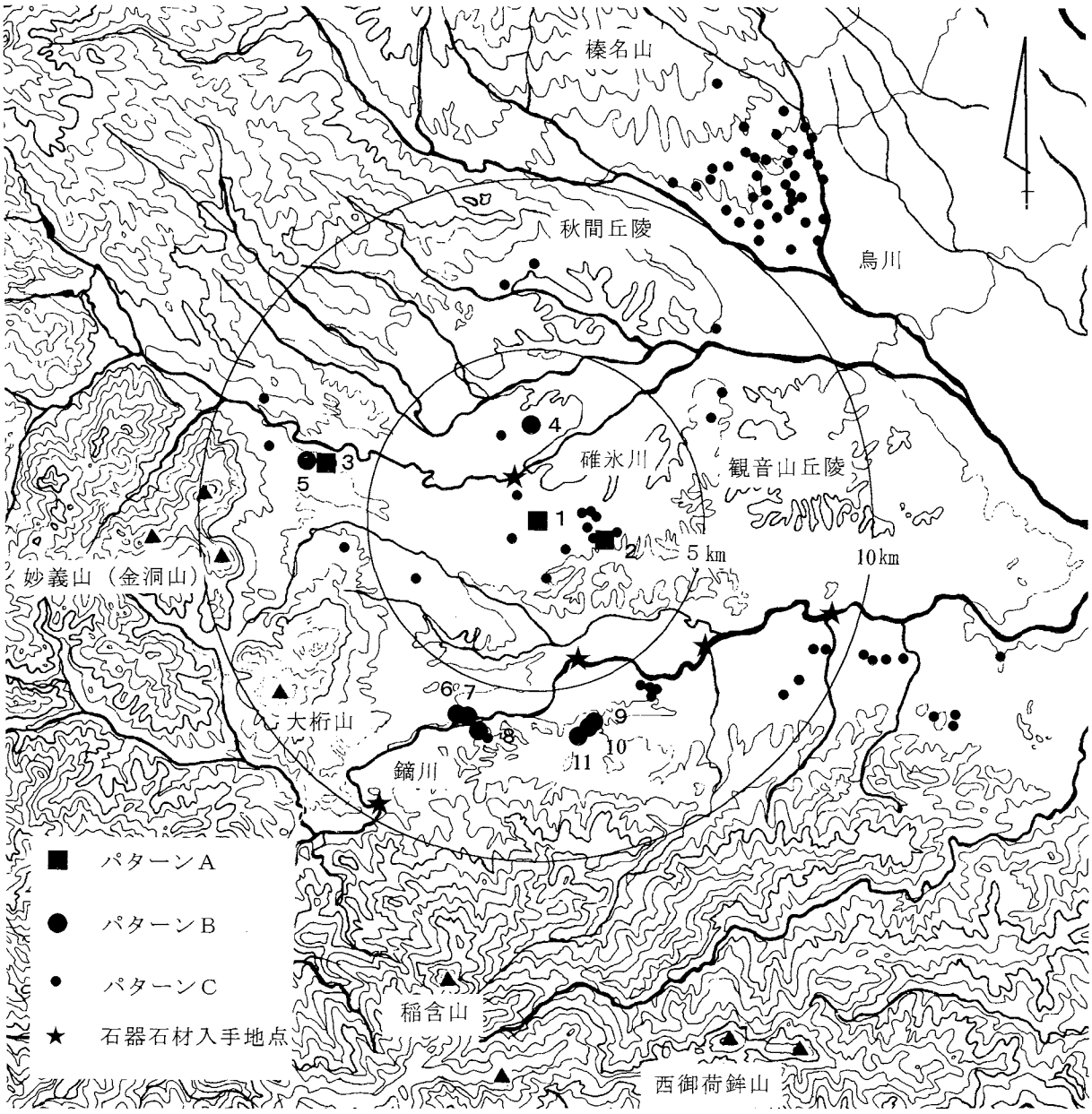
パターンＢ：同時並存する住居は３軒～５軒程度存在する。拡張や重複回数は少なく、同じ土器型式の時期の住居は数軒～十数軒程度である。土壙墓や掘立柱建物址が少数存在する場合もあるが、土壙墓群や掘立柱建物址群などの社会的機能を有する施設は顕在化していない。パターンＣの累積による場合と、パターンＡに準じた集落として利用される場合があるようである。

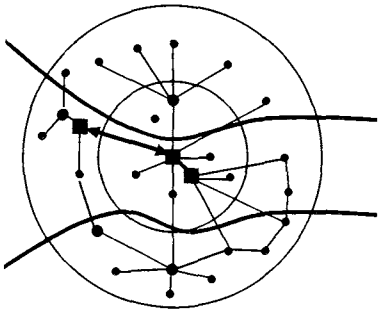
パターンＣ：同時並存する住居址が１・２軒程度である遺跡や、土坑が存在する程度の遺跡で、一時的な居住場所として利用されたと推定されるもの。

［有尾式期の遺跡の分布状態］（第295図）

パターンＡの遺跡としては、５㎞圏内には大下原遺跡が存在している。また、10㎞圏では西に行田大道北遺跡が存在する。本遺跡と大下原遺跡は、時期的に重っているが、距離が近過ぎることから同時並存していたとは考えにくい。すでに土壙墓の項でも述べているとおり、両遺跡間で振り子状に移動していたものと推察される。

また、行田大道北遺跡については、正式報告がなされていないため、詳細は不明であるが、同様に振





有尾式期のセトルメント・システムのモデル

1　中野谷松原遺跡
2　大下原遺跡
3　行田大道北遺跡
4　清水遺跡
5　行田梅木平遺跡
6　南蛇井増光寺Ⅰ遺跡
7　南蛇井増光寺Ⅴ遺跡
8　下鎌田遺跡
9　鞘戸原Ⅰ遺跡
10　鞘戸原Ⅱ遺跡
11　西平原遺跡

第295図　有尾式期の遺跡の分布状態

り子状に移動した際の拠点的な集落であったと推定される。この遺跡と本遺跡が同時並存し、この範囲が2つの領域に区分されていた可能性もある。

また、パターンB・Cの遺跡は、榛名山東南麓の分布を参考にすれば、この時期には「一台地一遺跡地」と呼ばれるような密度の高い分布状態であったと推定される。調査事例をみれば、パターンCに分類される遺跡が多い。この場合、多数の小集団が各台地に同時並存していたとの考え（鬼形　1988）もあるが、むしろ、石器石材の画一性や継続時期が短期間の遺跡が多いことからみて、一つの集団に属する人々が頻繁に移動を繰り返していた結果として、こうした分布状態が出現したと推察される。パターンA以外の遺跡に短期間居住する場合、あまり立地条件にこだわらず、ケースバイケースで居住場所を定めていた結果、居住場所が頻繁に変化し、「一台地一遺跡地」といった状態を生じさせ原因と考えられる。ちなみに、鏑川流域では、南蛇井増光寺遺跡（小野他　1992）、下高瀬寺山遺跡（新井　1995）では、Bパターンであるが、Cパターンの累積によるものと推定されるが、こうした反復利用される遺跡が、すでに有尾式期には出現していた点が注目される。

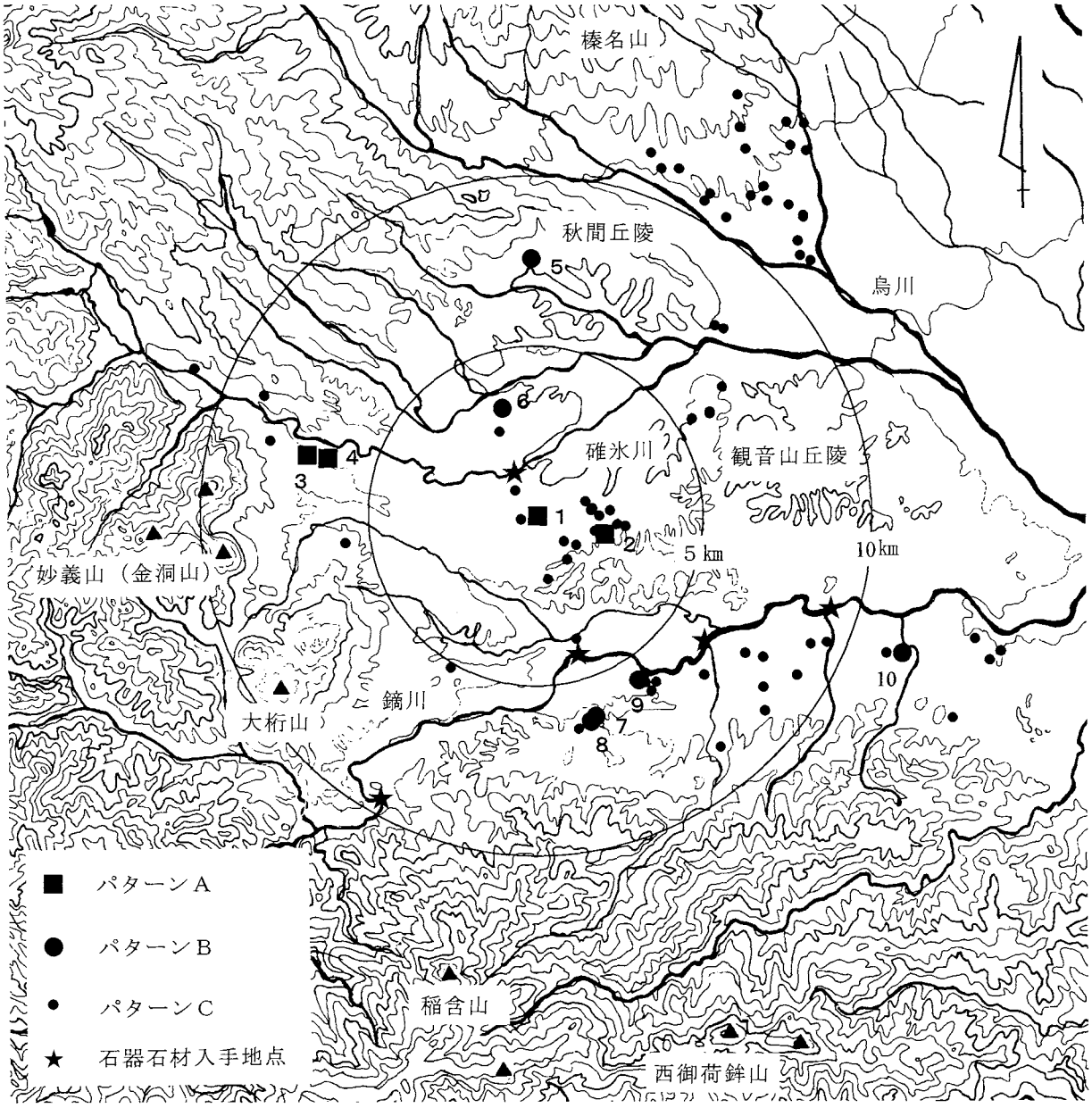
なお、この時期の遺跡の性格を検討するために、本来であれば厳密に石器組成を検討するところであるが、各遺跡の資料が同じ精度でないため、比較が困難である。現状では石器組成の漠然とした差異により傾向を類推するしか方法がない。パターンAに相当する本遺跡と大下原遺跡の石器組成を比較すると、ほぼ同じ組成を示している。また、清水I遺跡（長井他　1996）や山峰遺跡（深町他　1998）でも、数量は少ないものの、ほぼ同じ組成を示している。石器群が移動性の高い生業形態に則ったフレキシブルなシステムを採用していた結果であり、どのセトルメントに対してもケースバイケースで対応可能な必要最小限の軽量装備しか保有していなかったのが、有尾式期の特徴である。したがって、遺跡ごとのセトルメントの推定は難しいが、移動性が高い居住形態であったと考えて間違いはあるまい。

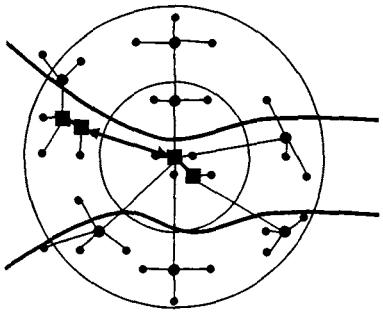
以上のことから考えて、おそらく拠点となるパターンAを中心に季節的にパターンB・Cの遺跡を頻繁に移動するセトルメント・システムであったと推定される。この時期のパターンAの拠点集落は、2遺跡近接しており、社会的要因により一定の期間ごとに振り子状に交互に利用されていたとみられる。そして、西外縁部に位置する行田大道北遺跡へ一定期間拠点そのものが移動するケースもあったと考えられる。同様に東・南・北いずれの外縁部にも、こうした移動拠点が存在していた可能性がある。領域内でも生業活動の重点が時期によっては異なっていたのであろう。また、回遊システムについては、第294図下段のモデルに2案示したとおり、パターンAを中心としてパターンCが放射状に展開するシステム（年間サイクル）と、パターンAから始まりパターンB・Cを周回するシステム（複数年サイクル）が想定されるが、現状ではどちらのシステムであったかは不明である。これは可児通宏氏のシステムII（可児　1993）に近いものと考えられる。

［諸磯b式期の遺跡の分布状態］（第296図）

ここで諸磯b式期としたのは、中野谷松原遺跡とほぼ同時並存する時期についてであり、セトルメント・システムが大きく変化する諸磯b式新段階は除外しているので、正確には諸磯b式古段階～中段階の遺跡の分布状態を示している。

有尾式期の遺跡分布と基本的に大きな変化は認められない。パターンAの遺跡としては、中野谷松原遺跡と大下原遺跡、行田梅木平遺跡と行田大道北遺跡がそれぞれ近接して存在している。中野谷松原遺跡と大下原遺跡の関係をみると、規模・継続時期から前者が優勢であったとみられる。また、行田梅木





■ パターンA
● パターンB
• パターンC

諸磯b式期のセトルメント・システムのモデル

1 中野谷松原遺跡
2 大下原遺跡
3 行田梅木平遺跡
4 行田大道北遺跡
5 野村遺跡
6 榎木畑遺跡
7 鞘戸原Ⅰ遺跡
8 鞘戸原Ⅱ遺跡
9 下高瀬寺山遺跡
10 神保植松遺跡

第296図　諸磯b式期の遺跡の分布状態

平遺跡と行田大道北遺跡の関係をみても、後者が優勢である。パターンAの遺跡にもメインとサブが存在していたと推察される。また、社会的機能を有する施設の増加や、「第二の道具」が比較的多く存在するようになっており、より拠点性や定住性が高まったとみられる。そして、本遺跡では47点以上の黒曜石原石が存在しており、狩猟に関しては備蓄基地的性格が強いことを示している。これは、後述する狩猟キャンプとは黒曜石の状態が大きく異なっていることと、好対照である。

この時期でもパターンB・Cの遺跡が存在していることから、拠点集落に集団全員が通年定住していたのではなく、季節的な移動を行っていたことも確実である。パターンB・Cの遺跡についてみると、パターンBの遺跡が有尾式期よりも増加する傾向が認められる。この現象を榛名山東南麓の遺跡分布でみると、有尾式期に比べ遺跡数が減少しており、短絡的に居住人口の減少と理解し易い。しかし、調査された遺跡で調べてみると、パターンCの累積による結果としてパターンBと分類される遺跡が多いことが分かる。つまり、パターンCの遺跡が減少し、絞り込まれたいくつかの遺跡がパターンBとなっているのである。有尾式期のようにケースバイケースで居住場所とするのではなく、居住場所をある程度定めるようになったためと考えられるのである。この要因としては、住居構造が強化されたことや、生業の年間サイクルが安定し、より計画性が増したことにより、同じ遺跡が反復利用されるようになったためと判断される。

例えば、榎木畑遺跡（千田他　1990）中高瀬観音山遺跡（坂井他　1995）、神保植松遺跡（谷藤　1997）では、大量の黒曜石の石核・剝片・石鏃未成品などが出土している。しかし、住居数は少なくパターンBに分類される。神保植松遺跡では黒曜石原石はわずか3点しか出土しておらず、この場所が最終消費地であったことが分かる。また、中高瀬観音山遺跡でも原石は8点と少ない。こうした黒曜石剝片類の大量出土は、反復利用により蓄積されたものであることを意味している。ちなみに、神保植松遺跡では、この時期の獣面把手の中に二重獣面土器がほとんど出土していないことから、本遺跡を拠点とする集団の狩猟キャンプではなく、東に隣接する集団によって残された狩猟キャンプであった可能性がある。

このように、諸磯b式期のパターンBの遺跡は、パターンCの累積結果と考えられ、そのセトルメントは黒曜石の最終消費地であることから、狩猟キャンプとしての色彩が強いものである。こうした遺跡での押圧剝離系列（A類）の石器製作指数は極めて高いものであり、石器組成でもA類の器種群が卓越した傾向が認められる。また、鏑川南岸におけるパターンBの遺跡は、河岸段丘よりも上段の丘陵上に位置する場合が多いようである。

以上のことから、諸磯b式期のセトルメント・システムについてまとめよう。第295図下段のモデルが想定できる。これは可児氏のシステムIIIに近いものと推定される。パターンAの拠点集落を中心とした、定住性の高い居住生活を営みながらも、一部の選抜されたメンバーは、おそらく冬期を中心として領域内のパターンBの狩猟キャンプへ移動し、狩猟活動を営んでいたと考えられる。また、パターンAの集落は近接して2カ所存在しており、社会的要因によって振り子状に交互に利用されていたとみられる。そして、西外縁部に位置するパターンAの集落は、生業活動に関係する要因か、または社会的要因により、反復的に移動を繰り返していたと推察される。ただし、大形掘立柱建物群や土壙墓群の規模からみて、中野谷松原遺跡が拠点集落として利用されるケースが多かったと判断される。

c まとめ

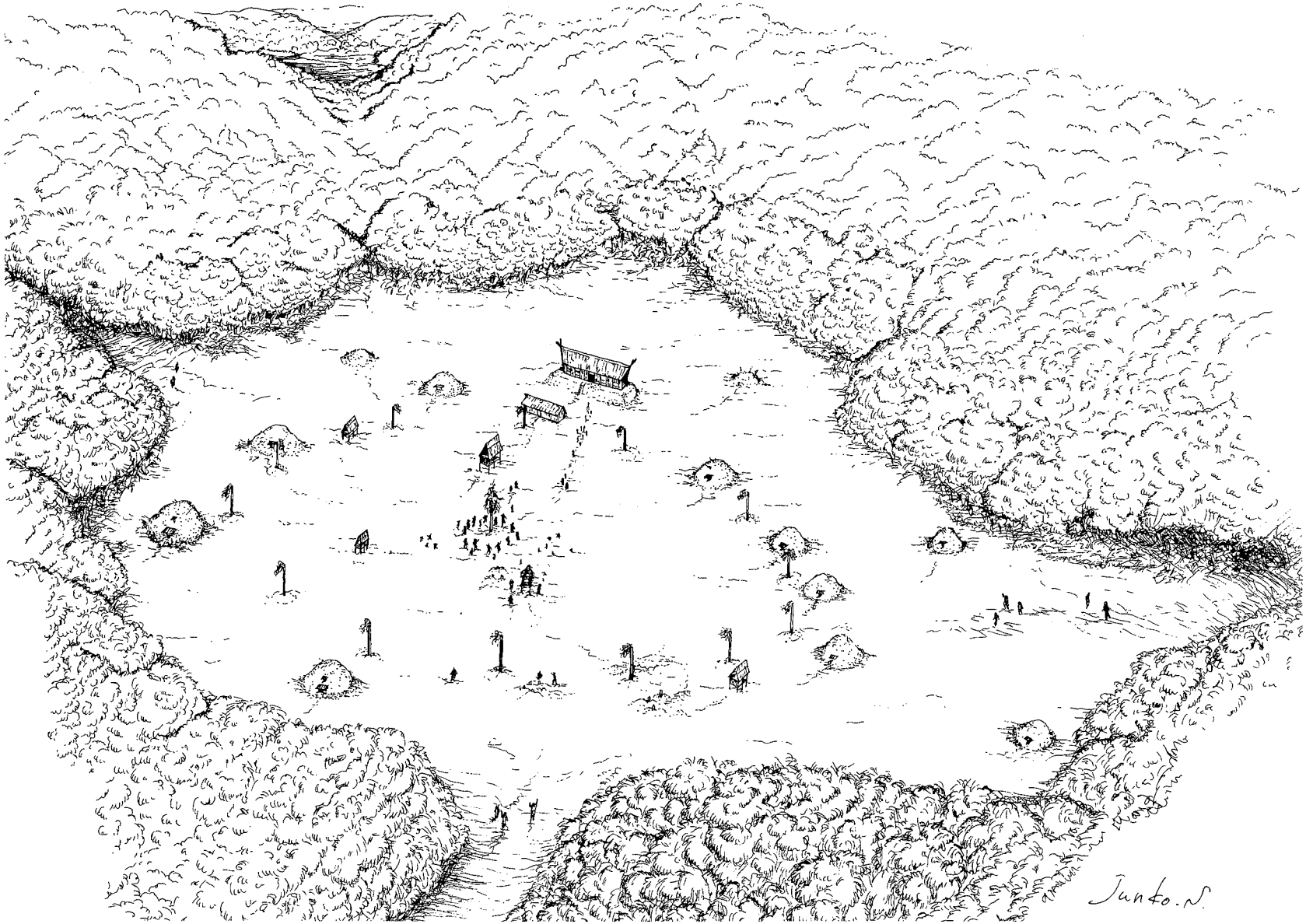
以上のように、本遺跡を中心とした有尾式期と諸磯ｂ式では、領域内でのセトルメント・システムが異なっていることが明らかとなった。有尾式期では、前期前葉以来の伝統的な移動性の高い居住形態であったのに対し、諸磯ｂ式期では拠点集落を中心とした定住性の高い居住形態であったと判断される。また、拠点集落は隣接して２カ所存在し、振り子状に２つの拠点集落間を一定の社会的ルールに則って移動することが行われていたとみられる。こうした定期的な移動は、土壙墓群における?状耳飾・石匙などの副葬率が一定の割合で推移していることと、土壙墓群がしばしば途絶することからも傍証される。そして、中野谷松原遺跡が他のＡパターンの集落に比べ、規模・継続性とも卓越しており、地理的にみても、精神的な意味においても、正真の拠点集落として認識されていたと考えられる。このように拠点集落が２カ所並存するセトルメント・システムは、中期においても南関東地域でも存在するようである（谷口　1993）。

さらに、西外縁部への拠点集落を一時的に移動する場合があったことが判明した。この場合の移動のルールについてははっきりしないが、この移動の契機は領域の西に広がる山地において、生業活動を行うことを目的として行われた可能性が高い。規模は小さいものの、南外縁部にＢパターンの集落が存在しているのも、領域の南の山地における生業活動の準拠点として、利用されていたと推測される。こうした領域外縁部に拠点をシフトした生業活動は、有尾式期から諸磯ｂ式期まで継続して行われており、諸磯ｂ式期には、狩猟キャンプの場所もある程度固定化していったものと考えられる。

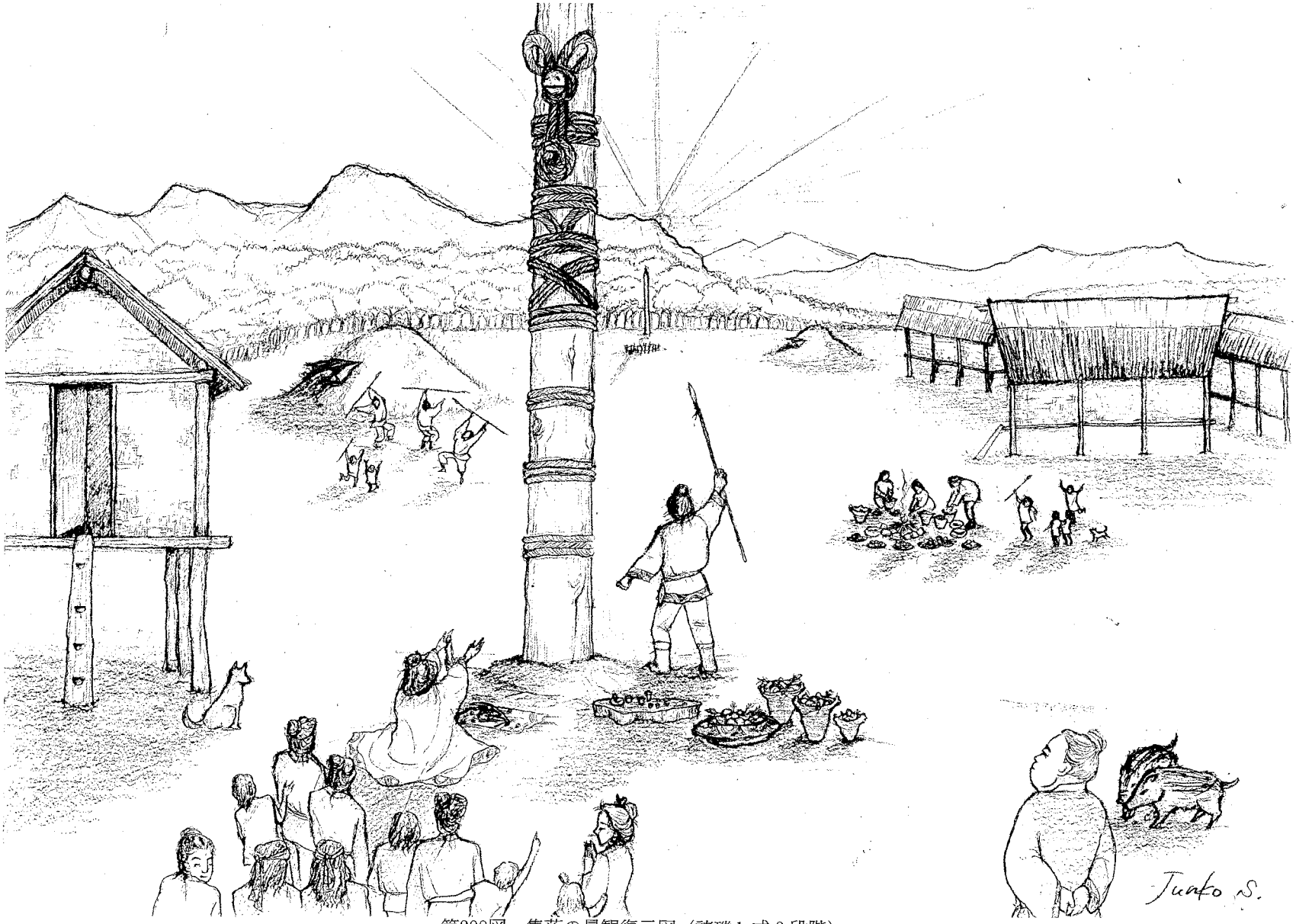
このようなセトルメント・システムについて、渡辺仁氏は狩猟採集民の住居居住パターンを住居安定度により５つの型式に分類している（渡辺　1990）。これに当てはめた場合、諸磯ｂ式期ではⅣ型と分類される「複数の恒久住居（集落）があって、家族全員が季節的にその間を移転して住み分ける方式（home base 移動型定住）」に相当するとみられる。また、Ⅳ型では「狩猟期に当たる冬期集落期（中略）に、成人男子の一部（狩猟者）が、一定期間集落を離れて山猟に従事する傾向が一般的」としている。また、有尾式期では、狩猟キャンプの場所がケースバイケースであることから、Ⅳ型よりはむしろⅢ型（半定住型）に近い形が想定される。

また、本遺跡が衰退する諸磯ｂ式新段階以降の時期では、こうした拠点集落が求心力を失い、パターンＢ・Ｃに分類される中・小規模集落が一般化することが指摘されている（木村　1992）。この時期の流動化の要因については、付編で述べているような黒曜石採掘の質的変化と、交易ルートの変更といった、広域的な経済ネットワークの大きな変化によるものと推測される。すなわち、黒曜石原産地では、和田峠の表層採掘が限界に達し、星ヶ塔における露頭採掘が本格化する現象や、黒曜石の交易ルートが群馬ルートから山梨ルートへ変化する現象が関連していると考えられる。拠点集落の形成が、単に地域内での食糧資源調達といった生業活動のみでは、説明し得ない社会構造が、すでにこの時期に成立していたものと推察されるのである。

（大工原　豊）



第297図　集落の景観復元図（諸磯ｂ式１段階）



第298図　集落の景観復元図（諸磯ｂ式３段階）

参考・引用文献

赤澤　威・小宮孟　1981 『別冊冬木貝塚産魚種組成と漁撈活動』 茨城県教育財団

赤澤　威　1983 『狩猟採集民の考古学』 海鳴社

麻生　敏隆・大工原　豊　1994 「縄文時代の打製石器の製作について」『中野谷地区遺跡群　―本文編―』 安中市教育委員会

麻生　優　1969 「「原位置」論序説」『上代文化』38

安達厚三　1983 「石皿」『縄文文化の研究』 7　雄山閣

安孫子昭二　1997 「縄文中期集落の景観―多摩ニュータウン446遺跡―」『研究論集』XVI　東京都埋蔵文化財センター

新井　仁　1995 『内匠上之宿遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団

新井　仁他　1994 『下高瀬上之原遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団

新井　仁　1995 『内匠日向周地遺跡・下高瀬寺山遺跡・下高瀬前田遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団

荒井幹夫・早坂廣人　1995 『水子貝塚』 富士見市教育委員会

石井　寛　1992 「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』 9　横浜市ふるさと歴史財団

石井　寛　1995 「縄文時代掘立柱建物址に関する諸議論」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』 6　帝京大学山梨文化財研究所

石原正敏　1989 「諸磯ｃ式土器再考」『新潟史学』22

磯貝基一・大工原豊　1993 「石器石材の分析」『大下原遺跡・吉田原遺跡』 安中市教育委員会

磯貝基一　1994 「石器石材分析―安山岩製石器石材について―」『中野谷地区遺跡群―自然科学編』 安中市教育委員会

伊藤廉倫　1992 『前畑遺跡・内出Ｉ遺跡・丹生城西遺跡・五分一遺跡・千足遺跡』 群馬県教育委員会

伊藤廉倫　1994 『天神Ｉ遺跡・天神II遺跡・西原遺跡・松葉慈学寺遺跡』 群馬県教育委員会

小泉清隆　1985 「古人口論」『岩波講座日本考古学』 2　岩波書店

伊藤　肇他　1992 『南蛇井増光寺遺跡』 Ｉ　群馬県埋蔵文化財調査事業団

井野誠一　1990 『芳賀東部団地遺跡III』 前橋市教育委員会

飯塚　誠　1988 『書上下吉祥寺遺跡・書上原之城遺跡・上植木壱町田遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団

石坂　茂・藤巻幸男　1985 「加曽利Ｅ式土器について」『荒砥前原遺跡　赤石城址』 群馬県埋蔵文化財調査事業団

石坂　茂　1985 『荒砥二之堰遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団

石坂　茂　1988 『勝保沢中ノ山遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団

石坂　茂・藤巻幸男・桜岡正信　1988 「加曽利Ｅ式土器に　関する一考察」『群馬の考古学』 群馬県埋蔵文化財調査事業団

石坂　茂　1992 『荒砥三木堂遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団

井上　太　1987 『小塚・六反田・久保田遺跡』 富岡市教育委員会

井上　太　1992 『鞘戸原Ｉ・鞘戸原II・西平原』 富岡市教育委員会

今村啓爾　1980 『伊豆七島の縄文文化』 武蔵野美術大学考古学研究会

今村啓爾　1981 「施文順序からみた諸磯式土器の変遷」『考古学研究』27―４

今村啓爾　1982 「諸磯式土器」『縄文文化の研究』 3　雄山閣

岩崎泰一　1986 『下触牛伏遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団

岩橋陽一・江里口省三・可児通宏・小坂井孝修・中西　充　1992 「諸磯ｂ式土器の展開とその様相―多摩丘陵からの視点」『東京都埋蔵　文化財センター研究論集』 XI　東京都埋蔵文化財センター

宇田敦司他　1997 『南羽鳥遺跡群』 II　印旛郡市文化財センター

上田典男他　1998 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書４』 長野県埋蔵文化財センター

上野修一・荒川竜一編　1993『第45回企画展　選ぶ・割る・磨く』 栃木県立博物館

内田憲治　1988 「城遺跡」『群馬県史資料編』 1　群馬県

内田祐治　1975 『三宅島の埋蔵文化財』 伊豆諸島考古学研究会

江坂輝弥　1964 「装身具」『日本原始美術』 2　講談社

大塚達朗　1996 「土器―山内型式論の再検討―」『考古学雑誌』82―２

小笠原雅行　1997 「三内丸山遺跡における葬制遺構」『考古学ジャーナル』419

小田静夫　1976 「縄文中期の打製石斧」『どるめん』10

小野和之他　1993 『神保富士塚遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団

小野和之他　1997 『南蛇井増光寺遺跡』 V　群馬県埋蔵文化財調査事業団

及川　司　1988 『滝前・滝下遺跡』 藤岡市遺跡調査会。

大賀　健　1985 『関越自動車道（新潟線）水上町埋蔵文化財発掘調査報告書』 水上町教育委員会
大賀　健他　1994 『杣瀬Ⅰ遺跡・杣瀬Ⅱ遺跡・杣瀬Ⅲ遺跡』 下仁田町教育委員会
大賀　健他　1997 『新堀東源ケ原遺跡』 群馬県教育委員会
大賀　健　1997 『下鎌田遺跡』 群馬県教育委員会
大賀　健　1998 『川白田遺跡』 川白田遺跡調査会
大塚昌彦　1995 「火山灰下の家屋」『考古学による日本歴史』15　雄山閣
大場磐雄他　1957 『上原』 長野県教育委員会
大西雅広　1992 『二宮千足遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
岡村道雄　1993 「埋葬にかかわる遺物の出土状態からみた縄文時代の墓葬礼」『論苑考古学』 天山舎
鬼形芳夫　1985 「赤城山麓における縄文文化の展開」『群馬県史研究』21　群馬県史編さん委員会
鬼形芳夫　1988 「遺跡の動態と集団関係」『研究紀要』 5　群馬県埋蔵文化財調査事業団
鬼形芳夫　1988 「新羽今井平遺跡」『群馬県史資料編』 1　群馬県
鬼形芳夫・内木真琴　1988「鏑川右岸下流域段丘上における縄文時代遺跡分布調査」『群馬の考古学』 群馬県埋蔵文化財調査業団
加藤晋平・鶴丸俊明　1980 『石器の基礎知識』Ⅰ　柏書房
加藤晋平・鶴丸俊明　1980 『石器の基礎知識』Ⅱ　柏書房
金山喜昭　1993 「縄文時代前期における黒曜石交易の出現」『法政考古学』20　法政考古学会
金山喜昭　1998 「集落間の交流と交易」『季刊考古学』64　雄山閣
可児通宏　1993 「縄文時代のセトルメント・システム」『季刊考古学』44　雄山閣
金子直行　1989 「縄文時代中葉における大形菱形文系土器群の成立と展開」『埼玉考古』25　埼玉県考古学会
金子正人　1990 『芳賀北曲輪遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
金原正子　1994 「炭化種実の分析」『中野谷地区遺跡群―自然科学編―』 安中市教育委員会
川田強・大平理恵　1998 『七社神社前遺跡』Ⅱ　北区教育委員会
神戸聖語他　1982 『十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
木村　收　1992 「群馬県における縄文前期後半の居住形態」『研究紀要』10　群馬県埋蔵文化財調査事業団
木村　收　1994 『白倉下原・天引向原遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
木下哲夫　1993 『桑野遺跡発掘調査概要』 金津町教育委員会
木下哲夫　1995 「桑野遺跡」『金津町埋蔵文化財調査概要（平成元年度～５年度）』 金津町教育委員会
桐生直彦・米沢容一・高橋泰子　1997 「多摩市和田西遺跡」『東京都遺跡調査研究発表会　発表要旨』22
黒尾和久　1988a 「縄文時代中期の居住形態」『歴史評論』454
黒岩文夫・富澤敏弘　1985 『中棚遺跡』 昭和村教育委員会
黒坂禎二　1989 「羽状縄文系土器の文様構成（点描）１」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』6　埼玉県埋蔵文化財調査業団
小島敦子他　1995 『荒砥上ノ坊遺跡』Ⅰ　群馬県埋蔵文化財調査事業団
小島純一　1988 『月田・室沢遺跡群』群馬県史資料編１
小杉　康　1992 「縄文時代・道具の組合わせ・前期」『図解・日本の人類遺跡』（東京大学出版会）
小杉　康　1994 「黒曜石産出地における採掘活動の復原―長野県鷹山遺跡群の調査―」『日本文化財科学会』11研究発表要旨集
小杉　康　1996 「土製品―動物形土製品を例にして―」『考古学雑誌』82－２
小杉　康　1997 「関東南部の縄文前期中葉の土器群―土器製作の技術相関論と集団関係論との視座より―」『前期中葉の諸様相』第10回縄文セミナー
小林和正　1979　「人口人類学」『人類学講座』Ⅱ　雄山閣
K. Kobayashi 1967 “Trend in the Length of Life Based on Human Skeleton from Prehistoric toModern Times in Japan”, J. Fac. Sci. Univ. Tokyo（V）3（2）, 1967
小林謙一　1996 「竪穴住居跡ライフサイクルからみた住居廃絶時の状況―南関東の第10回縄文セミナー縄文中期集落での遺物出土　状態を中心に―」『すまいの考古学』 山梨県考古学協会
小林三郎他　1998 『七社神社前遺跡Ⅱ』 東京都北区教育委員会
小林達雄　1973 「多摩ニューウタウンの先住者」『月刊文化財』112
小林達雄　1974 「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』93
小林達雄　1980 「縄文時代の集落」『国史学』93

小林達雄　1986 「原始集落」『岩波講座日本考古学』4　岩波書店
小林達雄　1988 「縄文時代の居住空間」『國學院文学研究科』19輯
小林達雄　1996 「縄文世界における空間認識―祭祀儀礼空間の形成と展開―」『國學院日本文化研究所紀要』78
小林深志　1993 『阿久尻遺跡』 茅野市教育委員会
小林　克　1997 「東北地方北部縄文時代の墓制」『考古学ジャーナル』422
小安和順　1988 『佐久間遺跡』 甘楽町教育委員会
小宮恒雄　1990 「茅ヶ崎貝塚」『全遺跡調査概要』 横浜市埋蔵文化財センター
小山修三　1984 『縄文時代』 中公新書
　埼玉考古学会　1990　「シンポジウム「大木・有尾・そして黒浜」『埼玉県考古』別冊3　埼玉県考古学会
駒倉秀一　1990 『横俵遺跡群』Ⅰ　前橋埋蔵文化財調査事業団
斎藤利昭　1994 『多比良平野遺跡・白石根岸遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
坂井　隆他　1995 『中高瀬観音山遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
坂本　彰・鈴木重信　1984 「横浜市北川貝塚の調査」『第8回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
坂本　彰・鈴木重信　1986 「北川貝塚」『日本考古学年報』36　日本考古学協会
坂本　彰　1990 「西ノ谷貝塚」『全遺跡調査概要』 横浜市埋蔵文化財センター
坂本　彰　1990 「北川貝塚」『全遺跡調査概要』 横浜市埋蔵文化財センター
笹沢　浩他　1982 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　原村その5』 長野県教育委員会
笹森健一　1987 『鷺森遺跡』 上福岡市教育委員会
佐藤洋一郎　1997「ジャポニカの原産地と日本への伝播経路」『考古学ジャーナル』424
下城　正他　1982 『十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
縄文セミナーの会　1993 『前期終末の諸様相』
白石竹雄・清藤一順他　1975 『飯山満東遺跡』 房総考古資料刊行会
白石浩之・鈴木保彦他　1981 『細田遺跡』 神奈川県教育委員会
白石典之　198　「「縄文中期的石器」に関する一試論」『行幸田山遺跡』本文編Ⅱ　渋川市教育委員会
須田英一　199　『諸磯遺跡への招待』 三浦市教育委員会
鈴木敏昭　1980 「諸磯b式土器の構造とその変遷（再考）」『土曜考古』2　土曜考古学研究会
鈴木敏昭　1980 『足利遺跡』 久喜市教育委員会
鈴木敏昭　1991 「土器群の変容―例えば、諸磯b式浮線文土器の場合―」『埼玉考古学論集』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鈴木徳雄　1979 「諸磯式土器文様の変遷について」『白石城』 埼玉県遺跡調査会
鈴木徳雄　1987 「諸磯式土器研究の問題点」『第1回　縄文セミナー　縄文前期の諸問題』 群馬県考古学研究所
鈴木徳雄　1997 「縄文前期の石製研磨具―側面に擦痕のある扁平礫を巡って―」『群馬考古学手帳』7　群馬土器観会
鈴木忠司他　1980 『静岡県磐田市寺谷遺跡発掘調査報告書』 平安博物館
関根慎二　1986 『糸井宮前遺跡Ⅱ』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
関野　克　1933 「埼玉県福岡村縄紋前期住居址と竪穴住居の系統について」『人類学雑誌』53―8
千田茂雄　1995 『荒神平・吹上遺跡』 安中市教育委員会
千田茂雄　1996 『北原遺跡・上久保遺跡』 安中市教育委員会
千田茂雄・大工原　豊　1990 『榎木畑遺跡』 安中市教育委員会
大工原　豊　1990 『中野谷地区遺跡群発掘調査概報』2　安中市教育委員会
大工原　豊他　1991 『塩ノ久保遺跡』 安中市教育委員会
大工原　豊・関根慎二・金井京子他　1993 『大下原遺跡・吉田原遺跡』 安中市教育委員会
大工原　豊　1994a 『中野谷地区遺跡群』 安中市教育員会
大工原　豊　1994b 「石器石材からみた縄文人の活動領域」『安中教育』35　安中市教育委員会
大工原　豊　1995 「群馬県天神原遺跡」『縄文時代における自然の社会化』小林達夫編　季刊考古学・別冊6
大工原　豊・林　克彦　1995 「配石墓と環状列石」『信濃』47―4　信濃史学会
大工原　豊他　1996 『落合Ⅱ遺跡・平塚遺跡・三本木Ⅱ遺跡・三本木Ⅲ遺跡』 安中市教育委員会
大工原　豊　1996 「縄文時代　石器」『考古学雑誌』82―2
大工原　豊　1997a 「縄文時代の石器研究の方法」『遺跡・遺物から何を読みとるか（Ⅰ）』 帝京大学山梨文化財研究所

大工原　豊　1997b 「遺跡からみた家族の歴史（1）」『安中教育』38　安中市教育委員会
大工原　豊他　1998 『上ノ久保遺跡・桜林遺跡・五ケ遺跡』 安中市教育委員会
大工原　豊・千田茂雄　1998 「安中市における発掘調査」『群馬歴史散歩』150　群馬歴史散歩の会
深町　真他　1998 『日向後原遺跡・野毛良遺跡・山峰遺跡』 安中市教育委員会
田口一郎　1988 「中善地・宮地遺跡」『群馬県史資料編』1　群馬県
高橋　敦　1983 「石製玦状耳飾について」『打越遺跡』 富士見市教育委員会
高橋　誠他　1994 『木戸先遺跡』 印旛郡市文化財センター
高橋　理　1998 「千歳市美々貝塚北遺跡における縄文時代前期の畠状遺構とその意義」『日本考古学協会第64回総会』研究発表要旨　日本考古学協会
武井則道　1990 「南堀貝塚」『全遺跡調査概要』 横浜市埋蔵文化財センター
谷井　彪・細田　勝　1995 「関東の大木式・東北の加曽利E式土器」『日本考古学』2　日本考古学協会
谷口康浩　1989 「諸磯式土器様式」『縄文土器大観』1　小学館
谷口康浩　1993 「セトルメント・システム論」『季刊考古学』44　雄山閣
谷口康浩　1998 「縄文集落論の争点」『國學院大學考古学資料館紀要』14　國學院大學考古学資料館
谷藤保彦・小野和之　1987 『三原田城遺跡・川崎城址・八崎塚・上青梨子古墳』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
谷藤保彦・関根慎二　1987 「群馬県における縄文時代前期の動向及び研究史」『縄文前期の諸問題』 群馬県考古学研究所
谷藤保彦　1988 「北関東における有尾式土器の変遷」『考古学叢考』下巻
谷藤保彦他　1997 『前期中葉の諸様相』第10回　縄文セミナーの会
谷藤保彦他　1997 『神保植松遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
茅野市教育委員会文化財調査室　1991 『阿久尻集落の方形柱穴列をめぐって』研究会資料
V.G.チャイルド　近藤義郎訳　1965 『考古学の方法』 河出書房
堤　隆　1993 『黒耀石原産地遺跡分布調査報告書』III　和田村教育委員会
勅使河原　彰 「縄文時代の社会構成」『考古学雑誌』78－1・2
手塚　孝　1993 「米沢盆地の硬質頁岩について」『第45回企画展　選ぶ・割る・磨く』 栃木県立博物館
寺村光晴　1967 「縄文時代前期飾玉生産の一考察」『和洋女子大学紀要』12
都所敬尚　1991 『横俵遺跡群III』 前橋埋蔵文化財発掘調査団
都所敬尚　1991 『横俵遺跡群V』 前橋埋蔵文化財発掘調査団
鳥羽政之　1985 「見立溜井・見立大久保遺跡」 赤城村教育委員会
鳥羽政之　1991 「縄文時代前期中葉土器群の編年と地域性」『埼玉考古』28
土井義夫　1988a 「縄文時代集落論の原則的問題―集落遺跡の二つのあり方をめぐって―」『東京考古』3
外山和夫　1973 『東吹上遺跡』 群馬県立博物館
奈良泰史・保坂康夫　1993「黒曜石原石格納の土器と黒曜石について」『山梨県考古学会誌』6　山梨県考古学協会
奈良国立文化財研究所　1996 『平地住居と高床建物』
中澤貞治　1980 『下吉祥寺遺跡』 伊勢崎市教育委員会
中島　宏　1977 『金堀沢遺跡』 入間市金堀沢遺跡調査会
中島　宏　1980 『伊勢塚・東光寺遺跡』 埼玉県教育委員会
中村富夫・間庭　稔1986『大友館遺跡・三峰神社裏遺跡』 月夜野町教育委員会
長井正欣　1989 「行田I遺跡出土遺物について」『群馬文化』220　群馬県地域文化研究協議会
長井正欣　1996 『清水I遺跡』 原市第一県営住宅遺跡調査会
長井正欣　1997 『清水III遺跡・清水IV遺跡』 原市第一県営住宅遺跡調査会
長崎元廣　1984 「縄文の黒曜石貯蔵例と交易」『中部高地の考古学』III　長野県考古学会
並木　隆　1978 『甘粕原・ゴシン・露梨子遺跡―国道254号バイパス建設用地に係わる埋蔵文化財発掘調査―』 埼玉県遺跡調査会
新津　健　1994 『天神遺跡』 山梨県教育委員会
西口陽一　1983 「耳飾から見た「性別」」『季刊考古学』5　雄山閣
能登　健他　1985 『清水山遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
能登　健他　1985 『粕川村の遺跡』 群馬県勢多郡粕川村教育委員会
能登　健　1988 「荒砥上諏訪遺跡」 『群馬県史資料編』1　群馬県

能登　健　1995「縄文時代前期の石棒について」『荒砥上ノ坊遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
長谷川福次1993『芝山遺跡』 北橘村教育委員会羽鳥政彦　1987『「向吹張・岩之下遺跡』 富士見村教育委員会
羽鳥政彦・藤巻幸男　1989「新発見の縄文時代前期の呪術具二例」『群馬文化』220　群馬県地域文化研究協議会
羽鳥政彦　1992『広面遺跡』 富士見村教育委員会
羽鳥政彦　1994『愛宕山遺跡・初室古墳・愛宕遺跡・日向遺跡』 富士見村教育委員会
羽生淳子　1987「諸磯ｂ式土器」『季刊考古学』21　雄山閣
羽生淳子　1989「住居址数からみた遺跡の規模」『考古学の世界』 新人物往来社
羽生淳子　1990「縄文人の集落の大きさと人口はどの程度か」『争点日本の歴史』1　新人物往来社
羽生淳子　1993a「縄文文化の研究に民族誌はどう役立つか」『新視点　日本の歴史』1　新人物往来社
羽生淳子　1993b「集落の大きさと居住形態」『季刊考古学』44　雄山閣
原　雅信　1985『清水山遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
原　雅信　1990『堀下八幡遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
原　雅信　1996『天引狐崎遺跡』II　群馬県教育委員会
原田昌幸　1990「縄文時代の玉」『月刊文化財』№326
原田昌幸　1995『日本の美術　土偶』345　至文堂
原田昌幸　1997「発生・出現期の土偶について」『土偶シンポジウム６　奈良大会 西日本をとりまく土偶発表要旨集』「土偶とその情報」研究会
原田昌幸　1997「Ⅲ土偶研究と時期・地域性　発生・出現期の土偶総論」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集（１）』
春成秀爾　1996「性象徴の考古学」『国立歴史民俗博物館研究報告』66　国立歴史民俗博物館
林　謙作　1977「縄文期の葬制　第Ⅱ部　遺体の配列、とくに頭位方向」『考古学雑誌』63―３
林　謙作　1996「縄紋研究と型式学」『考古学雑誌』82―２
林　謙作　1997「縄紋社会の資源利用・土地利用」『考古学研究』43―４・44―３
樋口昇一　1983『長野県史　考古資料編　全一巻（三）主要遺跡（中信）』 長野県史刊行会
平出一治　1978「縄文時代の石皿について」『信濃』30―４
平田貴正　1986『大久保Ａ遺跡・七日市遺跡』 吉岡村教育委員会
福山俊彰・桐谷　優　1997『横川大林遺跡・横川萩の反遺跡・原遺跡・西野牧小山平遺跡』 群馬県教育委員会
藤田富士夫　1983a「玦状耳飾の編年に関する一試論」『北陸の考古学』 石川考古学研究会会誌26
藤田富士夫　1983b「縄文～古墳時代の玉製装身具」『季刊考古学』５　雄山閣
藤田富士夫　1983c「玦状耳飾」『縄文文化の研究』７　雄山閣
藤田富士夫　1992『玉とヒスイ―環日本海の交流をめぐって―』 同朋舎出版
藤巻幸男・石坂　茂　1996「群馬県の土偶―その変遷と地域的様相―」『研究紀要』13　群馬県埋蔵文化財調査事業団
藤森栄一　1956「中部」『日本考古学講座３』 河出書房
細田　勝　1989「黒浜式土器成立の背景について」『古代』80
堀江武史　1992「玦状耳飾の分類と製作工具に関して」『国學院大學考古学資料館紀要』８　国學院大學考古学資料室
間宮政光　1997『行田梅木平遺跡』 群馬県教育委員会
前原　豊他　1990『芳賀東部団地遺跡』Ⅲ　前橋市教育委員会
麻柄一志　1992「夏の家と冬の家」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ
麻柄一志　1992「土屋根の竪穴住居」『魚津市立博物館紀要』３　魚津市立博物館
松田光太郎　1993「諸磯ａ式土器の文様とその変遷」『古代文化』45―６
松田光太郎　1994「縄文時代前期後半諸磯ｂ～ｃ式土器（第Ⅲ群土器）の考察」『愛宕山遺跡』 富士見村委員会
松田光太郎　1998「東関東における縄文前期後半の浅鉢形土器に関する考察」―浮島・興津式土器に属する浅鉢形土器を対象として―『神奈川考古』34
松田政基・福山俊彰・桐谷　優　1997『五料平遺跡・五料野ケ久保遺跡・五料稲荷谷戸遺跡』 群馬県教育委員会
三上徹也　1987『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書１』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書水田稔　1996「八城遺跡」『西毛の古代』 山武考古学研究所
宮崎茂雄　1978「群馬県桐生市千網谷戸遺跡星野昭司宅内１号住居跡出土の獣骨類」『千網谷戸遺跡発掘調査報告書』 千網谷戸遺跡発掘調査会

宮下健司　1997 「中部地方の縄文時代墓地」『考古学ジャーナル』419
武藤康弘　1989 「複合居住家屋の系譜」『考古学と民族誌　渡辺仁教授古稀記念論文集』 六興出版
武藤康弘　1995 「民族誌からみた縄文時代の竪穴住居」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』 6　帝京大学山梨文化財研究所
村越　潔　1997 「三内丸山遺跡と縄文集落」『考古学ジャーナル』419
茂木由行　1983 『黒熊遺跡群発掘調査報告書（3）―図版編―』 吉井町教育委員会
茂木由行　1984 『黒熊遺跡群発掘調査報告書（3）―本文編―』 吉井町教育委員会
茂木由行　1988 「黒熊第5遺跡」『群馬県史　資料編1』 群馬県
森川昌和他　1979 『鳥浜貝塚―縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1―』 福井県教育委員会
矢島國雄・前山精明　1983 「石錐」『縄文文化の研究』 7　雄山閣
梁木　誠　1988 『聖山公園遺跡』Ⅴ　宇都宮市教育委員会
山内清男　1939 『日本先史土器図譜』
山内清男　1964 『日本原始美術Ⅰ』講談社山下歳信　1986 『上大屋・樋越地区遺跡群』 大胡町教育委員会
山村貴輝　1992 『四葉地区遺跡　平成4年度年報』 板橋区四葉遺跡調査会
山口　敏　1982 「縄文人骨」『縄文文化の研究』 1　雄山閣
山口逸弘他　1996 『黒熊八幡遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
山口逸弘　1992 『書上本山遺跡・波志江六反田遺跡・波志江天神遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
山口逸弘　1994 『多比良平野遺跡・白石根岸遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
山下歳信　1981 『天神風呂遺跡』 大胡町教育委員会
山下歳信　1986 『上大屋、樋越地区遺跡群』大胡町教育委員会　山本暉久　1979 『上浜田遺跡』 神奈川県教育委員会
山本暉久　1997 「関東地方の縄文時代墓地」『考古学ジャーナル』422
横田公男　1996 『上丹生市小塚・山ノ上遺跡』 富岡市教育委員会
水田稔・平岡和夫　1990 『古立東山遺跡』 群馬県教育委員会
茂木由行　1984 『黒熊遺跡群発掘調査報告書（3）』 吉井町教育委員会
湯原勝美　1993 『六万遺跡』赤城村教育委員会
吉田　格　1956 「関東」『日本考古学講座3』 河出書房
和島誠一　1948 「原始聚落の構成」『日本歴史学講座』
和島誠一・甲野勇　1958 「南堀貝塚と原始集落」『横浜市史』 1
渡辺　仁　1990 『縄文式階層化社会』 六興出版

付編　自然科学的分析

1　テフラ分析

早田　勉（古環境研究所）

(1)　はじめに

中野谷松原遺跡の発掘調査では、厚い火山灰土の下部から石器が検出された。そこで野外地質調査を行ってテフラの層相を記載するとともに、テフラ検出分析を合わせて行ってテフラ層序を記載した。そして示標テフラとの層位関係から石器が検出された層位を明らかにした。

(2)　ローム層中のテフラ層序

石器が検出された旧石器試掘E区の土層断面を柱状図にして第図に示す。ここで認められる火山灰土は下部の厚いローム層と上部の黒ボク土に大きく区分することができる。とくにローム層中には9層のテフラ層が肉眼で観察できた。これらのテフラ層を仮に松原第1～9テフラ（Mt-1～9）と呼ぶことにする。以下、各テフラについてその特徴を記載する。なお石器は、Mt-1のすぐ下位のローム層中から検出されている。

松原第1テフラ（Mt-1）：白色ガラス質細粒火山灰層。層厚3㎝。

松原第2テフラ（Mt-2）：成層した軽石層。下位より白色風化軽石層（層厚11cm）、白色風化細粒軽石層（層厚8㎝）、粗粒の橙色軽石層（層厚46cm，　軽石の最大径：27㎜，石質岩片の最大径：11㎜）、黄灰色軽石層（層厚12cm，軽石の最大径：23㎜，石質岩片の最大径：6㎜）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚8㎝）の 連続からなる。

松原第3テフラ（Mt-3）：成層したテフラ層。下位より灰色粗粒火山灰層（層厚9㎝）、褐色細粒火山灰層（層厚0.7cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚2㎝）の連続から構成される。

松原第4テフラ（Mt-4）：黒灰色石質岩片混じり橙色軽石層。層厚は17cm。

松原第5テフラ（Mt-5）：黒灰色石質岩片混じり橙色軽石層。層厚は16cm。軽石と石質岩片の最大径は各々13㎜と3㎜。

松原第6テフラ（Mt-6）：橙色軽石層。層厚は13cm。軽石と石質岩片の最大径は、各々11㎜と3㎜。

松原第7テフラ（Mt-7）：成層したテフラ層。下部が軽石に富む黄橙色細粒軽石層（層厚14cm）で上部が黄灰色粗粒火山灰層（層厚4㎝）から構成される。下部に含まれる軽石と石質岩片の最大径は各々37㎜と7㎜で、上方ほど粒径が大きい逆級化構造が認められる。

松原第8テフラ（Mt-8）：ローム層中に濃集する黄白色細粒軽石。軽石の最大径は7㎜。

松原第9テフラ（Mt-9）：成層した軽石層。層厚は40cm。下部の黄色粗粒軽石層（層厚21cm，軽石の最大径：61㎜，石質岩片の最大径：16㎜）と上部の成層した黄色細粒軽石層（層

厚19cm，軽石の最大径：19mm，石質岩片の最大径：３mm）から構成される。

(3) テフラ検出分析

a 分析試料と方法

中野谷松原遺跡では肉眼で認められなかった黒ボク土中にも、示標テフラの存在する可能性が考えられた。またローム層下部のガラス質細粒火山灰の起源も明らかにする必要があった。そこで黒ボク土について基本的に５cmごとに採取された試料のうち、５cmおきの５点およびガラス質細粒火山灰の合計６点の試料を対象にテフラ検出分析を行い、示標テフラの検出を試みた。分析の手順は次の通りである。

1）試料10ｇを秤量。

2）超音波洗浄装置により泥分を除去。

3）80°Cで恒温乾燥。

4）実体顕微鏡下で、テフラ粒子の量や特徴を観察。

b 分析結果

テフラ検出分析の結果を表１に示す。試料番号11を除くほとんどの試料に灰白色や白色であまりよく発泡していない軽石が少量含まれている。その量は下位の試料に多い傾向がある。またこれらの試料には繊維束状やスポンジ状に発泡した透明の火山ガラスや褐色の比較的分厚い火山ガラスなどの軽石型ガラス、さらに透明で平板状のいわゆるバブル型ガラスなどが比較的多く含まれている。なお試料番号１には、スポンジ状によく発泡した白色軽石（最大径1.7mm）が少量含まれている。ただし量が少ないために、試料番号１をその降灰層準と明言できない。また試料番号３には褐色の平板状のいわゆるバブル型ガラスが少量含まれている。この試料についてもその降灰層準と判断することは難しい。これらテフラ検出分析により検出された２層準のテフラを下位より中野谷松原第10～11テフラ（Mt-10～11）と呼ぶことにする。

最下位の試料番号11には、火山ガラスがとくに多く含まれている。火山ガラスは透明で、その多くは平板状のいわゆるバブル型ガラスである。繊維束状に発泡した軽石型ガラスも少量含まれている。火山ガラスの純度が非常によいことから、一次堆積層と判断してよいものと思われる。

(4) 考察―示標テフラとの同定と石器の出土層位

中野谷松原遺跡における野外地質調査とテフラ検出分析の結果、合計11層のテフラの存在が確認された。テフラ検出分析によって明らかにされたテフラ粒子の特徴を合わせて示標テフラとの同定を試みると次のようになる。

Mt-１：後述するように浅間―板鼻褐色軽石群（As-BP Group）の直下にある透明のバブル型ガラスに富むテフラであることから、約2.1-2.2万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT，町田・新井，1976）に同定される。

Mt-2：テフラの層相から約1.6-2.1万年前に浅間火山から噴出した浅間―板鼻褐色軽石群（As-BP Group,新井,1962,町田ほか,1984）の最下部の軽石に同定される。このテフラはその上位のテフラと区別して、浅間―室田軽石（As-MP,森山,1972,早田,1990）と呼ばれることがある。

Mt-3～Mt-7：テフラ群の層相から、As-MPの上位のAs-BP Groupに同定される。ただしAs-BP Groupの噴出年代については、浅間―大窪沢第1軽石（As-OP_1）の噴出年代などからその下限が若干古く（約1.8-2.1万年）なる可能性もある。

Mt-8：As-BPの上位にあり、浅間―板鼻黄色軽石（As-YP,後述）の下位にあることや中野谷松原遺跡の位置テフラの分布域などの関係から、直下の泥炭層から16,880±130y.B.P.（中井ほか,1992）の14C年代が得られている浅間火山起源の浅間―大窪沢第1軽石（As-OP_1,中沢ほか,1984,早田,1991）に由来する可能性が大きいと考えられる。ただしやはり浅間火山起源の浅間―大窪沢第2軽石（As-OP_2,中沢ほか,1984,早田,1991）に由来する軽石が含まれている可能性も完全には否定できない。なおAs-OP_2の直下の泥炭層からは、16,720±160y.B.P.の^{14}C年代が得られている（中井ほか,1992）。

Mt-9：層相から約1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間―板鼻黄色軽石（As-YP,新井,1962,町田ほか,1984）に同定される。

Mt-10：薄手の褐色のバブル型ガラスで特徴づけられることから、約6,300年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah,町田・新井,1978）に由来する可能性が大きい。前述のように火山ガラスの検出量が非常に少ないことから、その降灰層準を明確にすることは困難である。

Mt-11：スポンジ状によく発泡した白色軽石で特徴づけられることから、4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C,新井,1979）に由来する可能性が考えられる。この試料についても軽石の検出量が非常に少ないことから、その降灰層準を明確にすることは困難である。

以上のテフラとの層位関係から、中野谷松原遺跡の発掘調査で検出された石器は、一次堆積層として確認されたATの下位にあると考えられる。

(5) まとめ

中野谷松原遺跡において野外地質調査とテフラ検出分析を合わせて行った結果、火山灰土中に下位より姶良Tn火山灰（AT,約2.1-2.2万年前）、浅間―板鼻褐色軽石群（As-BP Group, 約1.6-2.1万年前）に同定される6層のテフラ、浅間―大窪沢第1軽石（As-OP_1,約1.7万年前）に由来する可能性が大きな軽石、浅間―板鼻黄色軽石（As-YP,約1.3-1.4万年前）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah,約6,300年前）、浅間C軽石（As-C,4世紀中葉）の11層ものテフラを検出することができた。これらの示標テフラとの層位関係から、中野谷松原遺跡においてローム層中から検出された石器は、ATの下位にあると考えられる。

〈参考文献〉

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要，自然科学編，10，p.1-79

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.157，p.41-52

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰―姶良 Tn 火山灰の発見とその意義―．科学，46，p.339-347

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学―考古学研究と関係するテフラのカタログ―．古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p.865-928

森山昭雄（1971）榛名火山東・南麓の地形―とくに軽石流の地形について―．愛知教育大学地理学報告，36・37，p.107～116

中井俊夫・辻誠一郎・竹本弘幸・池田晃子（1992）南軽井沢周辺のテフラ層序の加速器14C 年代．日本第四紀学会講演要旨集，no.22，p.58～59

中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦（1984）浅間火山，黒斑～前掛期のテフラ層序．日本第四紀学会講演要旨集，no.14，p.69～70．

早田　勉（1990）群馬県の自然と風土．群馬県史通史編，1，p.35-29

試料	軽石			火山ガラス		
	量	色調	最大径	量	色調	形態
1	＋	白，灰白	1.7，1.3	＋＋	透明＞褐	pm＞bw
3	＋	灰白＞白	1.6，1.5	＋＋	透明＞褐	pm＞bw
5	＋	灰白＞白	1.1，1.3	＋＋	透明＞褐	pm＞bw
7	＋＋	灰白＞白	1.3，1.4	＋＋	透明＞褐	pm＞bw
9	＋＋	灰白＞白	1.2，1.3	＋＋	透明＞褐	pm＞bw
10	＋＋	灰白＞白	1.9，0.9	＋＋	透明＞褐	pm＞bw
11	―	―	―	＋＋＋＋	透明	bw＞pm

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋：中程度，＋：少ない，―：認められない．
最大径の単位は㎜．　pm：軽石型ガラス．　bw：バブル型ガラス．

第１表　中野谷松原遺跡（旧石器試掘Ｅ区）のテフラ検出分析

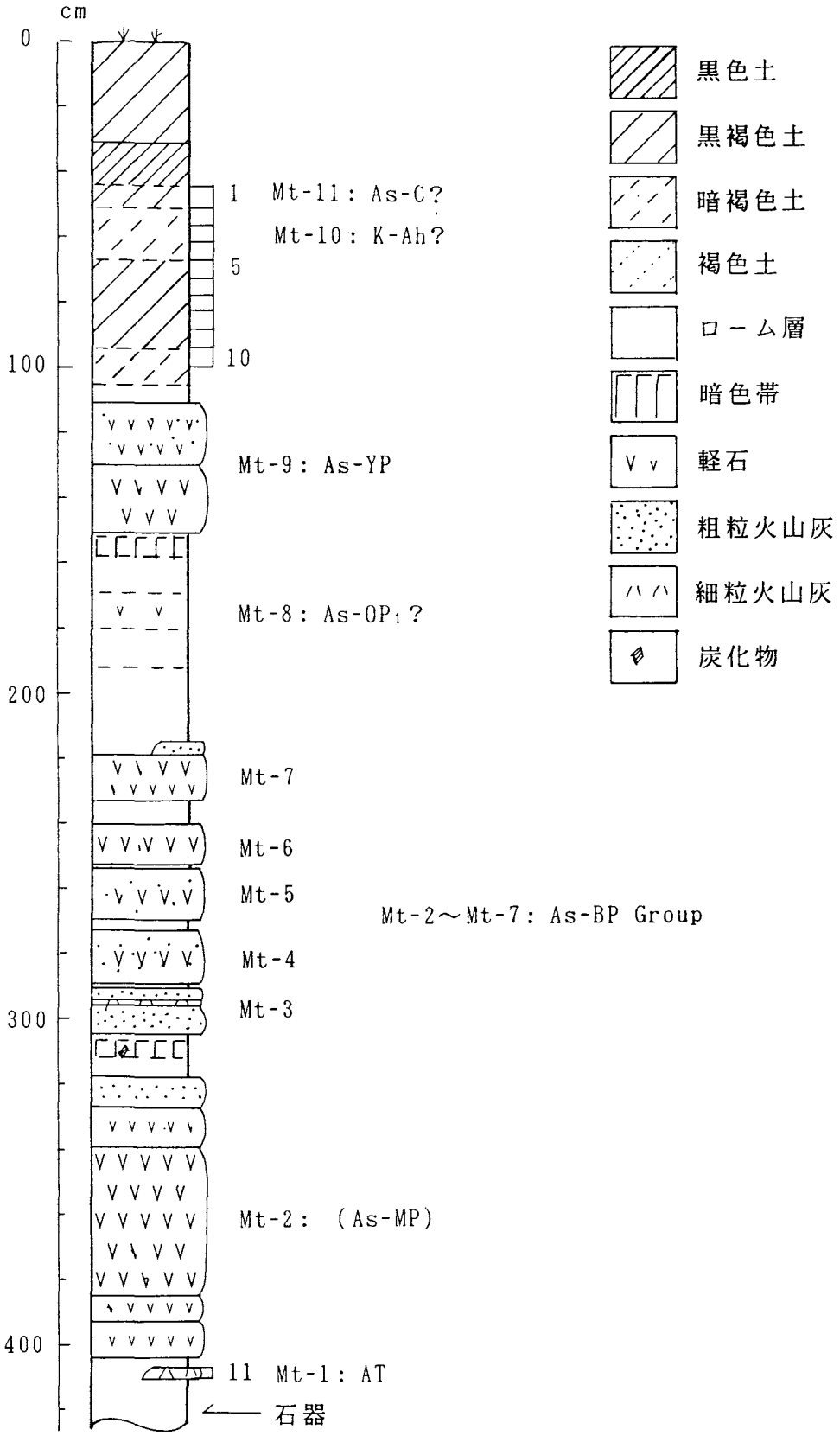


図１　松原遺跡G-21E地区の土層柱状図（数字はテフラ検出分析の試料番号）

2　植物珪酸体（プラント・オパール）分析

杉山真二（古環境研究所）

(1)　はじめに

植物珪酸体は、植物体内で形成されたガラス質の細胞であり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定、および古植生・古環境の推定などに応用されている。本章では、植物珪酸体分析を用いて、中野谷松原遺跡における古植生・古環境の推定を試みた。

(2)　試　　料

調査地点は、旧石器試掘Ｅ区およびＪ―66号住居址である。試料は、Ｇ―21旧石器試掘Ｅ区で№1～№22、Ｊ―66号住居址の１層～７層の計29点が採取された。採取層準の詳細については第１章を参照されたい。

(3)　分 析 法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976)」をもとに、次の手順で行った。

(1)　試料の絶乾（105°C・24時間)，仮比重測定

(2)　試料約１ｇを秤量，ガラスビーズ添加（直径約40μm，約0.02ｇ）

　　※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

(3)　電気炉灰化法による脱有機物処理

(4)　超音波による分散（300W・42KHz・10分間)

(5)　沈底法による微粒子（20μm以下）除去，乾燥

(6)　封入剤（オイキット）中に分散，プレパラート作成

(7)　検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。また、この値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10-５ｇ)をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は6.31と1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

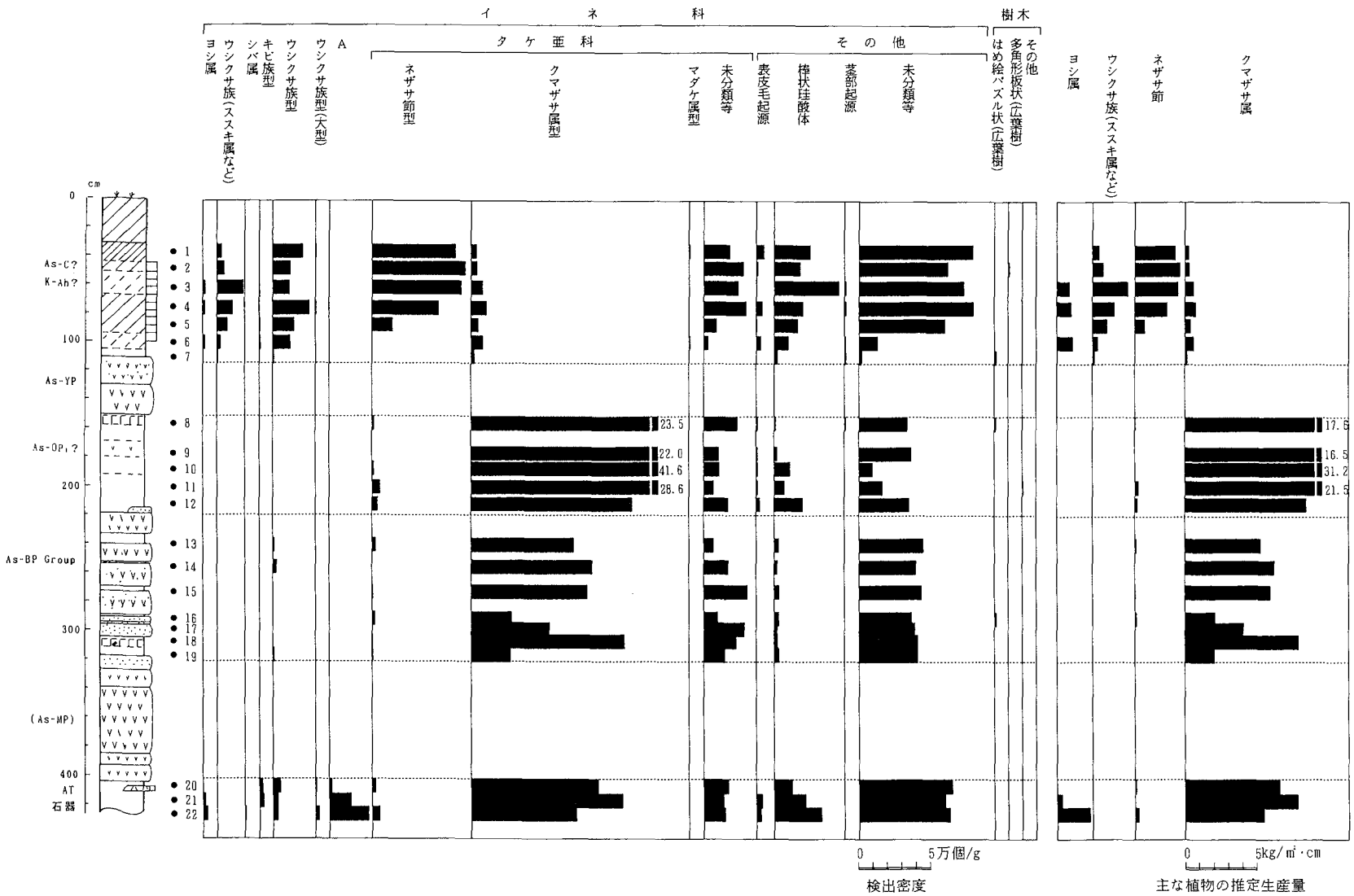


図1　安中市、松原遺跡G-21E地区の植物珪酸体分析表

分類群	旧石器試掘E区																				
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
イネ科																						
ヨシ属			15	16		17															7	36
ウシクサ属（ススキ属など）	44	59	198	121	74	26	8															
シバ属																						7
キビ族型					7	9														22		
ウシクサ族型	207	119	122	258	148	121	8						8	23					6	51	28	29
ウシクサ族型（大型）	7			8																7		22
くさび型																						
Aタイプ																				15	161	275
タケ亜科																						
ネザサ節型	590	654	625	460	148			10		10	59	46	25		9	15		7	6	22		58
クマザサ属型	44	52	84	113	59	78	23	2349	2200	4162	2862	1130	729	851	802	268	551	1077	272	896	1062	739
マダケ属型	7					9																
未分類等	192	290	267	307	96	35		261	122	119	89	185	68	187	350	111	316	258	149	191	140	145
その他のイネ科																						
表皮毛起源	59	7		48	7	26		10	9	10	10	19									42	29
棒状珪酸体	266	178	465	210	170	104	23	10	19	110	79	204	42	23	43	30	38	29	45	132	223	340
茎部起源			8	16		9	8	10														
未分類等	797	624	740	816	607	130	23	331	376	100	178	352	441	406	427	362	386	406	407	661	587	645
樹木起源																						
はめ絵パズル状（広葉樹）			8	8												7						
多角形板状（広葉樹）		7																				
その他											10											
植物珪酸体総数	2213	1992	2532	2383	1318	562	92	2981	2727	4511	3288	1936	1315	1491	1629	813	1291	1777	886	1998	2277	2325

（単位：×100個/g）

表1－1　中野谷松原遺跡（旧石器試掘E区）の植物珪酸体分析結果

(4)　分析結果

［旧石器試掘E区］

姶良Tn火山灰（AT）直下層から浅間C軽石（As-C）直上層までの層準について分析を行った。その結果、最下位のAT直下層（№21、22）では、クマザサ属型（おもにクマザサ属）が試料1gあたり10万個前後と多量に検出され、イネ科Aタイプ、棒状珪酸体なども比較的多く検出された(図1)。また、ヨシ属やシバ属なども少量見られた。イネ科Aタイプの給源植物は現在のところ不明であるが、湿地性の堆積物からしばしば検出されることから、おもに湿地に生育する植物に由来するものと考えられている。AT直上層(№20)ではクマザサ属型が引き続いて多量に検出されたが、イネ科Aタイプやヨシ属はほとんど見られなくなっている。浅間―板鼻褐色軽石群（As-BP Group）の各ユニット間（№13～19）では、継続的にクマザサ属型が多量に検出され、その他の分類群はほとんど見られなかった。As-BP Groupの上層から浅間―板鼻黄色軽石（As-YP）までの層準（№8～11）では、クマザサ属型が著しく増加しており、密度は約22～41万個/gにも達している。As-YP直上層（№7）ではクマザサ属型は急激に減少し、ほとんど見られなくなっている。黒ボク土層下部（№4～6）では、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）やウシクサ族（ススキ属など）、ウシクサ族型などが増加傾向を示し、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）混層（№3）から浅間C軽石（As-C）直上層（№1）の層準ではネザサ節型が圧倒的に卓越している。なお、ウシクサ族（ススキ属など）はAs-C混層より上層ではしだいに減少している。植物体生産量の推定値（表2－1）によると、As-YPより下位のローム層ではクマザサ属が圧倒的に卓越しているが、As-YPより上位の黒ボク土層ではネザサ節やウシクサ族（ススキ属など）が優勢となっていることがわかる。なお、AT直下層や黒ボク土層の下部ではヨシ属も比較的多くなっている。

分類群	旧石器試掘E区																					
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
イネ科																						
ヨシ属			0.96	1.02		1.09															0.44	2.29
ウシクサ属（ススキ属など）	0.55	0.74	2.46	1.50	0.92	0.32	0.09															
タケ亜科																						
ネザサ節型	2.83	3.14	3.00	2.21	0.71			0.05		0.05	0.29	0.22	0.12		0.04	0.07		0.04	0.03	0.11		0.28
クマザサ属型	0.33	0.39	0.63	0.85	0.04	0.58	0.27	17.62	16.50	31.22	21.47	8.48	5.47	6.38	6.01	2.16	4.13	8.07	2.04	6.72	7.96	5.54

＊表１の値に試料の仮重量（1.0と仮定）と各植物の換算係数をかけて算出。　（単位：kg/m²・cm）

表２－１　中野谷松原遺跡（旧石器試掘Ｅ区）における主な分類群の推定生産量

以上の結果から、中野谷松原遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

AT（約2.1～2.2万年前）直下層から As-YP（約1.3～1.4万年前）直下層までのローム層の堆積当時は、クマザサ属が卓越して生育するイネ科植生が継続されていたものと考えられ、その他のイネ科植物はほとんど見られなかったものと推定される。クマザサ属は比較的寒冷なところに生育していることから、当時は比較的寒冷な気候条件で推移したものと推定される。なお、石器が検出された AT 直下層では、調査地点もしくはその付近にヨシ属の生育する湿地的な部分も見られたものと推定される。As-BP Group（約1.6～2.1万年前）の各ユニットは数cmから数十cm程度の層厚であるが、堆積当時はさらに厚かったものと思われる。このため各テフラの堆積によって当時の植生は一時的に破壊されたと考えられるが、クマザサ属は比較的早い時期に再生して繁茂したものと推定される。テフラの堆積の影響が比較的小さかったと考えられる As-YP（約1.3-1.4万年前）直下層では、クマザサ属が特に旺盛に生育していたものと推定される。

As-YP 直上層ではクマザサ属は急激に減少し、その直上の黒ボク土層下部ではネザサ節やススキ属を主体とする草原植生に移行したものと推定される。ネザサ節は比較的温暖なところに生育していることから、この時期に寒冷から温暖への環境変化があった可能性が考えられる。なお、当時は調査地点もしくはその付近にヨシ属の生育する湿地的な部分も見られたものと推定される。これらの植物は森林の林床では生育しにくいことから、当時の遺跡周辺は、森林で覆われたような状況ではなく比較的開かれた環境であったものと推定される。K-Ah（約6,300年前）混層から As-C（４世紀中葉）直上層にかけては、ネザサ節はさらに増加したものと考えられるが、ススキ属はなんらかの原因でしだいに減少したものと推定される。

［Ｊ－66号住居址］

縄文時代前期とされるＪ－66号住居址は、褐色土と黒（暗）褐色土との互層から成る覆土（１層～７層）によって覆われており、その成因が検討課題となっていた。分析の結果、全体的にクマザサ属型やネザサ節型、ウシクサ族（ススキ属など）、ウシクサ族型、棒状珪酸体などが比較的多く検出されたが、褐色土と黒（暗）褐色土との間ではクマザサ属型とネザサ節型の出現傾向に違いが見られた（図２）。クマザサ属型は、褐色土では密度が平均29,500個/ｇであるが、黒（暗）褐色土では平均13,900個/ｇと半分以下の値となっている。また、ネザサ節型は褐色土では平均5,800個/ｇであるが、黒（暗）褐色土では平均9,000個/ｇと比較的高い値となっている。このように、褐色土ではクマザサ属型が、黒（暗）褐色土ではネザサ節型が多く検出される傾向が認められた。前述のように、ローム層ではクマザサ属型が圧倒的に卓越しており、黒ボク土層ではネザサ節型が優勢である。したがって、縄文時代前期とされる

住居跡が埋没していく過程では、周辺の黒ボク土やそこに多く生育していたネザサ節の影響を強く受けていたものと考えられるが、ローム層を起源とする“砂ぼこり”が周期的に混入・堆積したことによって、褐色土と黒（暗）褐色土との互層が形成されたものと推定される。この周期的な“砂ぼこり”の原因の一つとして、冬期の強い季節風の影響が想定される。

分類群	J－66号住居址						
	1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層
	黒褐色	褐色	暗褐色	褐色	黒褐色	暗褐色	褐色
イネ科							
ヨシ属	15	8			6	7	7
ウシクサ属（ススキ属など）	75	38	30	42	57	114	28
シバ属							
キビ族型	15	30	12	14	13	7	14
ウシクサ族型	149	106	115	126	133	121	99
ウシクサ族型（大型）	7	15	6		6		14
くさび型		7					
Aタイプ							
タケ亜科							
ネザサ節型	149	68	55	98	108	50	7
クマザサ属型	60	264	188	330	121	185	290
マダケ属型							
未分類等	90	151	152	112	178	86	99
その他のイネ科							
表皮毛起源	15	15	30	7	19	29	35
棒状珪酸体	187	91	115	140	222	171	127
茎部起源							
未分類等	500	551	412	421	444	485	544
樹木起源							
はめ絵パズル状（広葉樹）		8					
多角形板状（広葉樹）	7						
その他							
植物珪酸体総数	1277	1343	1116	1291	1307	1254	1264

（単位：×100個/g）

表1－1　中野谷松原遺跡(J－66号住居址)の植物珪酸体分析結果

分類群	J－66号住居址						
	1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層
	黒褐色	褐色	暗褐色	褐色	黒褐色	暗褐色	褐色
イネ科							
ヨシ属	0.94	0.48			0.40	0.45	0.45
ウシクサ属（ススキ属など）	0.93	0.47	0.38	0.52	0.71	1.41	0.35
タケ亜科							
ネザサ節型	0.72	0.33	0.26	0.47	0.52	0.24	0.03
クマザサ属型	0.45	1.98	1.41	2.47	0.90	1.39	2.17

（単位：kg/m²・cm）

表2－2　中野谷松原遺跡(J－66号住居址)における主な推定生産量

(5) まとめ

以上のように、ローム層の堆積当時はテフラの度重なる堆積にも関わらずクマザサ属が多く生育するイネ科植生が継続されたものと推定される。なお、石器が検出されたAT(約2.1～2.2万年前)直下層では、調査地点もしくはその付近にヨシ属の生育する湿地的な部分も見られたものと考えられる。また、As-YP（約1.3～1.4万年前）直下層ではクマザサ属の生育が特に旺盛であったものと考えられる。

その後、As-YPを境にして大きな植生変化が認められ、As-YPより上位の黒ボク土層ではネザサ節を主体としススキ属なども見られる草原植生に移行したものと推定される。このようにAs-YP直上層を境にして植生が大きく変化した原因として、1)この時期に寒冷から温暖への気候変化があったこと、2）この時期に森林植生が破壊されネザサ節やススキ属などの草原植生が維持されたことなどが考えられる。これと同様の植生変化は群馬県内およびその周辺でも認められている(杉山ほか,1992・佐瀬ほか,1987）ことから、局所的なものではなく比較的広い地域における環境変化を反映しているものと考えられる。遺跡周辺に多く生育していたと考えられるタケ亜科（竹笹類）やススキ属などは、その有用性から燃料や道具、住居の屋根材や建築材、敷物などとして盛んに利用されていたものと考えられる。特に笹類は鹿などの草食動物の食料としても重要であったものと考えられる。

〈参考文献〉

佐瀬隆・細野衛・宇津川徹・加藤定男・駒村正治（1987）武蔵野台地成増における関東ローム層の植物珪酸体分析．第四紀研究，26，p.1-11

杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究第２号，p.27-37

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83

杉山真二・前原 豊・大工原 豊（1992）植物珪酸体（プラント・オパール）分析による遺跡周辺の古環境推定．日本文化財科学会第９回大会研究発表要旨集，p.14-15

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―．考古学と自然科学，9，p.15-29

植物珪酸体（プラント・オパール）分析に関するコメント

大工原　豊

今回の分析の目的は二つある。一つは、本地域における後期旧石器時代以降の土壌中に含まれる植物珪酸体の状態の基礎データの蓄積である。もう一つは、植物珪酸体の含有率をもとにして、縄文時代の住居址の土層堆積状態を理解するために応用することである。

基礎データとしての植物珪酸体のダイヤグラムは、中野谷地区では大下原遺跡(杉山1993)、北浦露頭（杉山　1994）において作成し、これで３例目となる。これまでの分析結果と、今回の分析結果はほぼ一致しており、基礎データの蓄積という初所期の目的は達成することができた。

また、もうひとつの分析は、縄文時代前期後葉（諸磯ｂ式中段階）の掘り込みの深い竪穴住居址（Ｊ―66号住）を対象として実施した。覆土中には黒褐色土と暗褐色土の互層が３単位認められた。Ｊ―66号住の遺物出土状態については、本編で述べているとおりであるが、住居廃絶直後から遺物の廃棄が行われている特殊な事例である。遺物は６・７層に多く、７層下部（三角堆積部分を含み、本編では８層と表記)、５層（黒褐色土層)、１層（黒褐色土層）で少ない傾向が認められている。７層下部はともかく、１層・５層は、いずれも色調が暗い土層であり、こうした土層で遺物が少ない点は、留意す必要がある。

植物珪酸体の分析結果によると、クマザサが褐色土の２層・４層では多く、黒褐色土の１層・５層では少ないことが確認された。クマザサは基礎データ分析の結果によれは、後期旧石器時代のローム層中に多く含有されていることが判明している。したがって、ここで土層中に含まれるクマザサは、冬期の強い季節風（空っ風）により、ローム層を含む“砂ぼこり”が堆積したものと推定された。

つまり、２層・４層・７層は、冬期に堆積した可能性の高い土層とみられ、住居址が埋没するまでの間は、３サイクル（３年）程度の短期間であったと想定される。この住居址が比較的短期間で埋没したことは、土器の層位別出土状態からも判明している。

また、反対にクマザサが少なく、色調の暗い１層・３層・５層・６層は有機物を多く含む春期から秋期と判断される。このうち、５層・６層は連続していることから、６層が春から夏、５層が夏から秋の堆積ということになる。６層は遺物量が多いことから、この時期に廃棄行為が最も活発であったことになる。つまり、生活物資の新調と廃棄がこの季節頻繁におこなわれていた可能性が高い。これに対し、

夏から秋にかけては廃棄される遺物は少ないのは、道具類が新調されているので、この時期に廃棄対象となる道具類が少なかったことに帰因するのであろう。秋期は食糧資源調達に忙しい季節であることから、その前に道具のメンテナンスや新調が行われていたと想定されるのである。

住居址覆土に貝層が存在する南関東地方では、貝の成長線を測定することにより、貝殻の廃棄の季節が春期であったことを確認されている。これに基づいて小林達雄氏は「縄文カレンダー」を提唱し、縄文時代の生業活動には年間スケジュールが設定されていたとする(小林　1975)。そして、土器製作の季節も固定されていた場合が多かったと考えている(小林　1996)。今回の分析結果に照らしてみれは、土器製作をはじめ、石器類も含めて生活道具の新調は春から夏にかけて行われていた可能性が高いことになる。

また、この住居址に対する遺物廃棄は遺物量からみて、世帯規模ではなく集落規模で行われていたものと考えられる。住居址の埋没が極めて短期間に完了してしまったのは、そのためであろう。

以上のように、今回の分析によって、住居址覆土形成に対する一つのデータを示すことができた。こうした分析は、貝類など自然遺物が失われてしまった内陸部の遺跡における、季節性を解明するためには、有効な分析手法であると考えられる。さらにデータを蓄積し、より確実な分析方法として確立させる必要があろう。

参考文献

小林達雄　1975「縄文人の生活」『日本の歴史』学習研究社
同　　1996「縄文姿勢方針―多種多様な食利用」『縄文人の世界』朝日選書

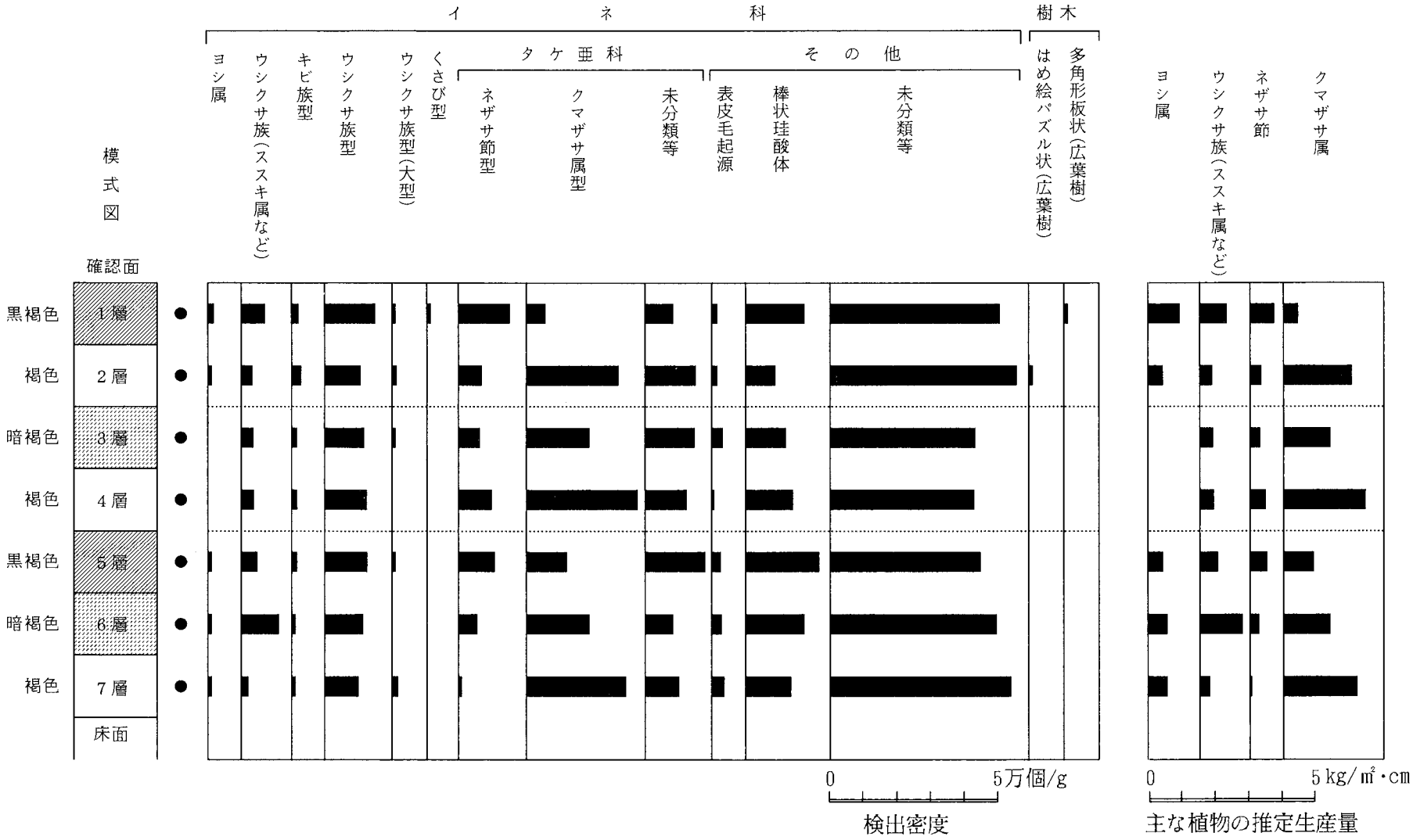


図2　安中市、松原遺跡J67住居跡の植物珪酸体分析結果

3　直接打撃系列（B類）の石器石材について

磯貝　基一

(1)　はじめに

安中市南部の横野台地上には、数多くの縄文時代の遺跡が発見されている。その中の中野谷松原遺跡は縄文時代前期を中心とする集落遺跡で、膨大な量の土器や石器などの遺物が検出された。出土した石器には石鏃、石錘、スクレイパー、打製石斧、磨石、凹石、石皿、砥石、磨製石斧などがあり、スクレイパーと打製石斧が多い。石器に使用されている石器には、黒曜石、チャート、黒色安山岩，硬質頁岩、頁岩、砂岩、安山岩、結晶片岩、緑色岩類などがあり、頁岩、安山岩、結晶片岩が多い。そこで、中野谷松原遺跡から出土した頁岩を主とする直接打撃系列（打製石斧・石匙B・スクレイパーB）の石器石材について肉眼観察と顕微鏡観察を行って、石器と石材との関係、石材の特徴と原産地、石材の入手などについて検討した。

(2)　石器と石材との関係

中野谷松原遺跡出土の直接打撃系列の石器（打製石斧・石匙B・スクレイパーB）と石材の関係は表1のようになる。

器種＼石材	黒色安山岩	頁岩	硬砂岩	安山岩	結晶片岩	緑色岩類
打製石斧	*	◎	*	○	○	*
石匙B	*	◎	*	*		
スクレイパーB	*	◎	*	○	*	*

◎：非常に多い　○：多い　*：少ない

表1　直接打撃系列の石器と石材の関係

最も多く使用されている石材は頁岩である。次に安山岩、結晶片岩が多く、他に黒色安山岩、硬砂岩、緑色岩類がある。結晶片岩と緑色岩類は石匙Bには使われていない。石匙B、スクレイパーB、打製石斧の製作に使用されている石材には，丈夫である程度の硬さとねばりがあり、加工しやすく、身近で入手可能な岩石が選ばれている。頁岩が最適とされ、次に安山岩があり、他に結晶片岩、黒色安山岩、硬砂岩、緑色岩類がある。

(3) 石材の特徴と原産地

松原遺跡から出土した打製石斧、スクレイパーB、石匙Bに使われている頁岩、安山岩、結晶片岩、黒色安山岩、硬砂岩、緑色岩類について、その特徴と原産地について検討した結果を以下に述べる。

［頁岩］

従来考古学の分野では泥質岩を慣習的に頁岩と呼称しているが、岩石学的記載では剝離性の発達した泥質岩を頁岩とし、剝離性に乏しくブロック状に破断する泥質岩を泥岩と呼んで区別している。石材の特徴や原産地を考えるとき、泥岩と頁岩に区別して記載することが適切である。群馬県西部で石材として使われている泥岩は、硬質な泥質岩であることから硬質泥岩と呼ぶことにする。

［硬質泥岩］

打製石斧、スクレイパーB、石匙Bの製作に最も多く使われている。剝離性の乏しい淡青灰色～淡緑灰色～淡褐灰色の泥質岩で、一般の泥岩よりも硬くて重い。新鮮な破断面は淡灰～青灰色を呈し、やや半透明で塊状緻密である。鏡下では細粒の石英、斜長石などの鉱物や、黒色の炭化物がみられ、微細な黄鉄鉱を含むものもある。原岩はおそらく第三紀層の細粒砂岩、泥岩、細粒凝灰岩などで、珪化作用によって硬質な岩石に変化したものと思われる。藤岡地域から出土する硬質泥岩には緑色化したものもみられる。

硬質泥岩は群馬県西部の多くの縄文時代の遺跡から多数出土し、群馬県西部の特徴的な石器石材となっている。群馬県西部に分布する新生代第三紀中新生に形成された第三紀層は、鏑川流域に下～中部層がみられ、碓氷川流域には下～上部層が分布する。硬質泥岩は鏑川流域及びその支流域に分布する第三紀層下部の下仁田層、牛伏層、小幡層などが珪化作用を受けて形成されたものと考えられる。

［頁岩］

剝離性の認められる暗灰色～黒色の泥質岩で、新鮮な破断面は黒色緻密である。一般に風化面は灰色～褐灰色で、硬質泥岩よりも硬くて重い。利根川流域の遺跡でみられる風化面が砂岩のようにざらざらした第三紀層起源の黒色頁岩とは区別できる。利根川産黒色頁岩はほとんどみられない。

頁岩の多くは続成作用の進んだ、下仁田付近に分布する南蛇井層、跡倉層、秩父中・古生層中のものと推定される。

［安山岩］

打製石斧、スクレイパーB、石匙Bに使用されている安山岩の多くは、灰色のごく一般的な等粒斑晶輝石安山岩である。斑状組織をなし、斑晶は斜長石、輝石，磁鉄鉱で、石基も斜長石、輝石，磁鉄鉱などで構成されている。また、僅かではあるが、角閃石安山岩も使われている。角閃石安山岩は斑状組織を示し、斑晶は斜長石、角閃石、輝石、磁鉄鉱、シリカ鉱物などからなっている。等粒斑晶輝石安山岩、角閃石安山岩は群馬県西部に広く分布する新第三紀火山堆積物中のものである。

［結晶片岩］

打製石斧、スクレイパーＢに使用されている結晶片岩は、緑色片岩、石英片岩などで、緑色片岩が多い。

結晶片岩は関東山地北縁部に位置する多野山地に広く分布する三波川変成帯中の変成岩である。

［黒色安山岩］

黒色安山岩は黒色緻密でガラス光沢のある黄褐色の斑晶あるいは斑晶跡の見られる無斑晶質安山岩である。斑晶量、石基中のガラス量などの違いにより、ガラス・斑晶質安山岩・無斑晶質安山岩・ガラス質安山岩に分けられる。ガラス・無斑晶質安山岩は最も良質で、斑晶が少なく、石鏃に多く使われている。ガラス質安山岩は黒色安山岩のなかでは斑晶量が多く、打製石斧、スクレイパーＢ、石匙Ｂに少量ではあるが使われている。打製石斧、スクレイパーＢ、石匙Ｂに使われている黒色安山岩の多くは、ガラス質安山岩に相当する。ガラス質安山岩は群馬県西部に広く分布する新第三紀火山堆積物中のものである。

［硬砂岩］

暗灰色～暗青灰色の硬質緻密な砂岩で、量は少ないが打製石斧、スクレイパーＢ、石匙Ｂに使われている。中・古生層起源の堆積岩で、下仁田付近に分布する跡倉層、秩父中・古生層中のものと推定される。

［緑色岩類］

緑色化した枕状溶岩、玄武岩、斑れい岩、輝緑岩などの塩基性火成岩起源の変成岩で、僅かに打製石斧、スクレイパーＢに使われている。多野山地に分布する三波川変成帯中の御荷鉾緑色岩類と呼ばれる変成岩である。

(4) 石器石材の入手

石器の製作にあたっては、石鏃、石錘などを除き、身近に存在する石器に適した地元産の石材を求める場合が多く、打製石斧、スクレイパーＢ、石匙Ｂなどの大形石器の製作にあたっては、その傾向が顕著である。河川では上流域に分布する多くの種類の石材が入手可能であり、出土した大形の剝片や石核に原礫面がみられることから、多くの石材は河川から採取したものと考えられる。

中野谷松原遺跡から出土した打製石斧、スクレイパーＢ、石匙Ｂの石器石材は硬質泥岩、頁岩、安山岩、結晶片岩、ガラス質安山岩(黒色安山岩)、硬砂岩、緑色岩類などで、近くの鏑川及び碓氷川から採取した可能性が高い。

最も多く使われている硬質泥岩は、鏑川流域及びその支流域に分布する第三紀層下部層の堆積層であることから、鏑川で採取したものと推定される。

頁岩は下仁田付近の中・古生層の堆積岩であり、鏑川での採取が推定される。

安山岩は群馬県西部に広く分布する新第三紀火山堆積物中のものであることから、鏑川と碓氷川が入手可能であるが、遺跡からの距離、安山岩の種類や量などから考えると、多くを碓氷川で採取したもの

と考えられる。

結晶片岩は鏑川南方の多野山地に分布する三波川変成帯中の変成岩であることから、南方支流から流入した結晶片岩を鏑川で採取したものと考えられる。

ガラス質安山岩（黒色安山岩）は群馬県西部に広く分布する新第三紀火山堆積物中のもので、鏑川上流にその産地が多いことから、鏑川で採取した可能性が高い。

硬砂岩は下仁田付近の中・古生層の堆積岩であり、鏑川での採取が推定される。

緑色岩類は鏑川南方の多野山地にみられる三波川変成帯中の塩基性火成岩起源の変成岩であることから、　南方支流から流入した緑色岩類を鏑川で採取したものと考えられる。

以上のことから、松原遺跡の打製石斧、スクレイパーB、石匙Bの製作に使われた石器石材のほとんどを鏑川から入手したものと考えられる。ただし、安山岩の多くは碓氷川から入手したものと推定される。

（磯貝基一）

参考文献

飯島静男　1996「上栗須寺前遺跡の岩石」『上栗須寺前遺跡群III』　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
磯貝基一・大工原豊　1993「石器石材の分析」『大下原遺跡・吉田原遺跡』　安中市教育委員会
磯貝基一　1994「石器石材分析―安山岩製石器石材について―」『中野谷地区遺跡群　自然科学編』安中市教育委員会
磯貝基一　1995「群馬県における石器石材」『第3回岩宿フォーラム　シンポジウム予稿集』　岩宿文化資料館
桜井美枝　1995「河川における石器石材のあり方」『第3回岩宿フォーラム　シンポジウム予稿集』　岩宿文化資料館

4　黒曜石の産地及び年代の推定

金山喜昭（野田市郷土博物館）

中野谷松原遺跡・榎木畑遺跡・大下原遺跡・中原遺跡出土の黒曜石の産地と年代について、下記のとおり分析結果を報告する。

1　遺　　跡　中野谷松原遺跡・榎木畑遺跡・大下原遺跡・中原遺跡
2　分 析 者　鈴木正男（立教大学）
　　戸村健児（立教大学原子力研究所）
　　金山喜昭（野田市郷土博物館）
3　分析方法　熱中性子放射化分析法
　　黒曜石水和層厚測定分析法
4　分析結果　別表のとおり（なお、空欄は不明）

黒曜石の産地及び年代の推定に関するコメント

大工原　豊

a　分析の目的と方法

黒曜石は後期旧石器時代以来石器石材として、広域的に流通している石材である。そのため、集団の移動軌跡や地域間交流を広域的に解明するための重要な資料である。分析の目的は、黒曜石流通の中間地点に当たる群馬県西部地域で、黒曜石の時期ごとの流通の様相を明らかにするためのデータの蓄積である。特に、今回は縄文時代前期の黒曜石流通の変遷について明らかにすることを目的とし、中野谷松原遺跡以外にも、前期の市内のいくつかの遺跡のデータも分析することにした。

黒曜石の場合、理化学的方法による産地及び年代の推定方法がいくつか開発されており、簡便であり、精度もある程度保証されている。安中市においては、これまでにも金山氏に依頼して、古城遺跡（後期旧石器）、注連引原遺跡（縄文前期）、注連引原II遺跡（弥生中期）における黒曜石の分析をすでに実施している。そのため、データの互換性を考え、今回の分析についても、金山氏に分析を依頼した。そして、実際の理科学的分析は、立教大学の鈴木正男氏と戸村健児氏が担当して実施している。

黒曜石の原産地は、熱中性子放射化分析と判別法（Suzuki & Tomura. 1983 ; Suzuki et. al. 1984a, b）によって推定している。また、年代は黒曜石水和層年代測定法によって測定している。分析方法についての詳細は以下の参考文献を参照されたい。なお、分析結果は1995年10月に受領しているので、分析の精度等はその時点のものである。

中野谷松原遺跡													
グリット・遺構	器種	大きさ(cm)	重量(g)	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe(%)	La	原産地	TOHL	年代
J－11住2区1層	FLA	1＞	0.9	5.93	3.62	11.1	3.18	3.03	0.472	17.2	星ヶ塔	6.21	8900
J－11住2区1層	FLA	1～2	0.5	8.33	11.40	36.1	5.00	6.38	0.570	19.6	和田峠	5.98	5500
J－11住2区1層	FLA	1～2	2.2	6.08	4.64	11.5	3.40	3.13	0.518	17.6	星ヶ塔	5.59	6900
J－11住2区1層	FLA	2～3	1.7	7.72	9.41	27.4	3.78	6.16	1.185	24.1	和田峠	6.52	5500
J－11住2区1層	CoreA	2～3	3.4	8.16	9.87	29.2	4.39	5.64	0.495	25.9	和田峠	6.75	7000
J－11住13区1層	FLA	1～2	0.2	8.45	7.69	25.8	4.01	4.80	0.571	34.5	和田峠	7.14	7000
J－11住13区1層	FLA	2～3	0.9	7.34	9.38	27.1	3.83	4.98	0.474	23.9	和田峠	6.98	7000
J－11住13区1層	FLA	1～2	0.9	7.02	6.64	26.3	4.05	4.38	0.615	28.8	和田峠	6.05	5500
J－11住13区1層	FLA	1～2	2.0	8.71	9.71	32.2	4.58	6.03	0.520	26.1	和田峠	5.35	4100
J－11住13区1層	FLA	1～2	1.1	3.94	5.87	16.8	2.18	2.77	0.286	13.8	ITAYAMA	4.5	
J－30住 P－4	FLA	2～3	1.2	8.44	11.90	36.9	4.58	6.76	0.515	19.0	和田峠	5.35	4100
J－30住1区2層	FLA	2～3	1.4	5.71	3.43	10.8	3.03	2.99	0.461	17.9	星ヶ塔	6.21	8900
J－30住3区2層	FLA	1～2	2.4	8.12	12.30	35.0	5.05	6.60	0.539	18.2	和田峠	5.43	4100
J－30住5区2層	FLA	1～2	1.6	8.33	12.70	35.6	5.06	6.53	0.554	18.7	和田峠	5.43	4100
J－30住5区1層	FLA	1～2	0.7	7.82	11.90	33.4	4.44	6.24	0.466	17.6	和田峠	5.35	4100
J－34住5区2層	FLA	1～2	2.1	8.56	10.30	30.8	4.34	5.84	0.506	26.9	和田峠	7.76	8800
J－34住16区2層	FLA	2～3	5.2	8.16	11.30	35.4	3.95	6.31	0.575	23.3	和田峠	6.67	7000
J－34住16区2層	FLA	1～2	0.6	8.61	10.10	31.3	4.73	5.88	0.469	27.2	和田峠	6.21	5500
J－34住16区2層	FLA	1～2	0.6	8.33	9.55	29.4	3.86	5.52	0.470	24.9	和田峠	6.83	7000
J－34住16区2層	FLA	2～3	4.3	8.04	8.76	29.0	4.24	5.63	0.514	25.4	和田峠	7.84	8800
J－66住 P－10	FLA	3～4	7.0	8.67	8.62	34.6	4.50	6.08	0.566	28.1	和田峠	6.29	5500
J－66住2区8層	FLA	2～3	2.7	8.57	8.74	33.3	4.85	5.84	0.531	26.0	和田峠	7.14	7000
J－66住9区7層	FLA	3～4	2.3	8.29	8.74	30.5	4.60	5.67	0.542	25.1	和田峠	5.35	4100
J－66住6区6層	FLA	1～2	0.8	8.61	10.00	32.3	4.85	6.05	0.563	26.3	和田峠	5.28	4100
J－66住3区5層	FLA	2～3	1.5	8.15	11.70	36.9	4.37	6.61	0.580	17.1	和田峠	7.06	7000
J－66住9区4層	FLA	3～4	2.6	8.45	9.26	32.4	4.62	5.67	0.521	24.5	和田峠	7.22	7000
J－66住11区3層	FLA	2～3	2.1	7.34	8.16	29.7	4.22	4.81	0.623	29.5	和田峠	5.35	4100
J－66住9区2層	FLA	1～2	1.1	5.66	3.55	11.2	3.38	3.07	0.489	17.2	星ヶ塔	6.36	8900
J－66住12区2層	FLA	2～3	3.5	7.93	9.22	30.3	4.23	5.68	0.572	25.6	和田峠	6.91	7000
J－66住15区2層	FLA	2～3	2.9	8.85	9.82	34.0	4.62	5.96	0.542	26.8	和田峠	6.05	5500
J－78住5区10層	FLA	2～3	1.7	8.13	10.90	36.1	4.68	6.39	0.584	20.1	和田峠	4.58	3000
J－78住8区10層	FLA	3～4	3.9	8.33	9.72	31.4	4.56	5.84	0.581	25.3	和田峠	6.29	5500
J－78住3区9層	FLA	1～2	1.1	8.64	10.30	33.1	4.54	5.89	0.570	25.7	和田峠	6.91	7000
J－78住3区9層	FLA	3～4	1.8	7.55	8.42	27.5	4.10	5.13	0.480	23.6	和田峠	11.1	18000
J－78住5区7層	FLA	2～3	1.3	8.69	8.97	32.5	4.66	6.00	0.534	26.2	和田峠	5.98	5500
J－78住7区5層	FLA	2～3	3.8	8.51	8.77	31.4	4.49	5.82	0.517	25.3	和田峠	5.9	5500
J－78住10区5層	FLA	2～3	5.2	8.27	12.20	37.8	5.08	6.65	0.591	18.5	和田峠	4.5	3000
J－78住16区5層	FLA	3～4	6.4	8.44	9.47	31.8	4.71	5.83	0.531	25.2	和田峠	7.06	7000
J－78住16区5層	FLA	2～3	5.0	8.73	9.95	33.7	5.22	6.12	0.552	28.0	和田峠	7.22	7000
J－78住11区4層	FLA	2～3	2.7	8.19	8.89	31.0	4.80	5.79	0.530	25.2	和田峠	6.98	7000
J－80住4区3層	FLA	2～3	6.4	7.97	9.86	29.2	4.47	5.31	0.503	24.4	和田峠	6.13	5500
J－80住5区3層	FLA	2～3	1.3	8.45	9.46	30.6	4.76	5.71	0.484	24.3	和田峠	6.05	5500
J－80住5区3層	FLA	1～2	1.4	6.03	3.31	11.5	2.87	3.18	0.510	18.2	星ヶ塔	6.75	10200
J－80住9区3層	FLA	2～3	2.3	8.72	10.40	33.3	4.68	6.02	0.508	25.5	和田峠	6.91	7000
J－80住10区3層	FLA	2～3	1.9	8.25	9.16	30.9	4.47	5.79	0.586	24.3	和田峠	5.98	5500
J－80住10区3層	FLA	2～3	2.1	8.81	9.60	33.1	4.64	6.01	0.540	26.1	和田峠	6.36	5500
J－80住10区3層	FLA	3～4	12.1	8.29	9.21	31.3	4.57	5.64	0.519	25.1	和田峠	6.44	5500
J－80住10区3層	FLA	2～3	7.3	8.01	11.00	35.4	5.04	6.31	0.564	18.7	和田峠	6.91	7000
J－80住11区3層	FLA	2～3	1.3	8.31	9.65	31.7	4.67	5.69	0.523	25.4	和田峠	5.98	5500
J－80住16区3層	FLA	2～3	2.1	8.83	9.66	33.1	5.04	6.05	0.537	26.2	和田峠	5.98	5500
J－110住3区2層	FLA	2～3	1.4	6.06	4.01	11.7	3.18	3.20	0.548	18.3	星ヶ塔	6.44	8900
J－110住3区2層	FLA	1～2	1.7	6.26	4.22	12.5	3.15	3.07	0.581	19.9	星ヶ塔	5.59	6900
J－110住13区2層	FLA	1～2	1.6	8.63	9.12	31.3	4.39	5.64	0.487	24.6	和田峠	6.83	7000
J－110住13区2層	FLA	1～2	1.8	5.83	3.52	11.7	3.55	3.15	0.486	17.9	星ヶ塔	6.36	8900
J－110住14区1層	FLA	2～3	1.4	5.92	3.49	11.5	3.22	3.18	0.487	17.7	星ヶ塔	6.36	8900
J－110住14区1層	FLA	1～2	0.6	5.61	3.26	10.3	3.10	3.04	0.454	16.8	和田峠	6.36	8900
J－110住14区1層	FLA	2～3	2.6	5.75	3.96	11.7	3.40	3.05	0.463	18.9	和田峠	6.83	10200
J－110住15区1層	FLA	1～2	0.7	5.73	3.09	11.4	3.10	2.96	0.456	17.2	星ヶ塔	5.51	6900
J－110住15区1層	FLA	1～2	1.6	5.89	3.94	10.6	3.34	3.13	0.461	16.9	和田峠	6.36	8900
J－110住15区1層	FLA	2～3	4.2	6.04	3.76	11.6	2.93	3.16	0.514	18.9	和田峠	5.66	6900
D－333	FLA	2～3	2.4	5.43	3.68	10.2	2.78	2.86	0.452	16.1	星ヶ塔	5.51	6900
D－1078	FLA	1～2	0.9	8.78	10.50	32.2	4.51	6.37	0.612	26.9	和田峠	6.91	7000

放射化分析・判別分析・黒曜石水和層測定（Fe以外はppm）

表1　黒曜石分析データ一覧表（1）

〈分析方法に関する参考文献〉

Suzuki, M. 1973: Chronology of prehistoric human activity in Kanto, Japan-Part I. J. Fac. Sci., Univ. Tokyo, Sec. V (Anthoropology), Vol. IV, 241-318.

Suzuki, M. and Tomura, K. 1983: Basic data for indentifying the geologic source of archaeological obsidian by activation analysis and discriminant analysis. St. Paul's Review of Sience, 4, 99-110.

Suzuki, M., Kanayama, Y., Aoki, Y., and Tomura, K. 1984a: Intrasite obsidian analysis of the Hashimoto site, Sagamihara-shi, Kanagawa-ken, Japan. St. Paul's Review of Science, 4, 121-129.

Suzuki, M., Kanayama, Y., Ono, A., Tsurumaru, T., Oda, S., and Tomura, K. 1984b: Obsidian analysis: 1974-1984. St. Paul's Review of Science, 4, 131-140.

中原遺跡													
グリット・遺構	器種	大きさ(cm)	重量(g)	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe(%)	La	原産地	TOHL	年代
J－3住P－3下層	FLA	2～3	1.8	9.75	12.50	31.8	5.68	6.01	0.517	26.7	和田峠	5.43	4200
J－3住P－4	FLA	1～2	1.0	7.72	7.31	24.2	3.57	4.24	0.655	29.3	和田峠	6.21	5800
J－3住9区下層	FLA	2～3	2.4	1.49	1.45	1.3	0.45	4.60	0.375	4.7			
J－3住9区下層	FLA	2～3	0.8	10.00	13.50	33.6	5.41	6.42	0.610	26.7	和田峠	5.35	4200
J－3住5区中層	FLA	1～2	0.5	6.79	5.85	19.9	4.19	4.09	0.825	29.8	男女倉	4.89	5300
J－3住8区中層	FLA	2～3	0.7	5.94	4.73	11.2	3.44	3.13	0.455	18.2	星ヶ塔	6.83	10300
J－3住8区中層	FLA	1～2	0.7	9.34	10.50	29.6	4.94	5.62	0.459	25.3	和田峠	6.98	7100
J－3住9区中層	FLA	1～2	1.4	9.33	10.10	30.0	5.29	5.72	0.506	24.5	和田峠	6.36	5800
J－3住10区中層	FLA	2～3	1.2	9.37	10.40	30.3	5.02	5.91	0.500	25.9	和田峠	7.06	7100
J－5住7区下層	FLA	2～3	2.0	9.55	11.00	29.0	4.82	5.72	0.502	25.0	和田峠	6.36	5800
J－5住7区下層	FLA	1～2	0.7	6.19	4.54	11.2	4.10	3.22	0.473	17.7	星ヶ塔	6.36	9000
J－5住11区下層	FLA	2～3	2.3	7.38	7.30	21.3	5.24	3.84	0.700	30.8	男女倉	7.37	12000
J－5住11区下層	FLA	1～2	0.7	9.51	12.10	29.5	5.25	5.56	0.463	24.9	和田峠	6.98	7100
J－5住12区下層	FLA	1～2	0.9	9.64	9.79	29.6	4.30	5.72	0.486	24.4	和田峠	6.44	5800
J－5住12区中層	FLA	1～2	0.7	9.97	10.50	30.9	5.19	5.95	0.501	26.2	和田峠	6.13	5800
J－5住12区中層	FLA	1～2	0.2	9.35	10.80	28.5	4.68	5.62	0.530	24.8	和田峠	6.44	5800
J－5住12区中層	FLA	1～2	0.3	10.00	11.10	31.3	4.78	6.17	0.546	26.2	和田峠	6.98	7100
J－5住12区中層	FLA	1～2	1.3	10.20	11.10	31.3	6.27	6.03	0.500	26.6	和田峠	5.43	4200
榎木畑遺跡													
グリット・遺構	器種	大きさ(cm)	重量(g)	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe(%)	La	原産地	TOHL	年代
J－3住8区下層	FLA	2～3	1.4	5.73	3.52	11.1	3.22	3.12	0.449	18.2	星ヶ塔	5.2	6000
J－3住3区中層	FLA	1～2	1.5	9.16	10.20	32.8	4.66	6.26	0.523	29.6	和田峠	6.91	6400
J－3住10区中層	FLA	1～2	0.5	5.74	3.47	11.2	3.14	2.98	0.403	16.1	星ヶ塔	5.28	6000
J－3住12区上層	FLA	1～2	0.9	8.10	9.35	28.4	4.30	5.49	0.520	26.1	和田峠	6.67	6400
J－4住2区下層	FLA	2～3	1.0	5.69	3.56	11.1	3.12	3.03	0.440	17.3	星ヶ塔	5.04	6000
J－4住2区下層	FLA	1～2	0.8	8.28	10.10	30.2	4.57	5.51	0.540	25.2	和田峠	6.6	6400
J－4住4区下層	FLA	2～3	2.8	8.89	10.10	32.1	4.46	5.91	0.520	24.2	和田峠	6.83	6400
J－4住7区下層	FLA	2～3	1.8	8.51	12.50	37.2	4.92	6.57	0.537	20.5	和田峠	6.36	6400
J－4住10区中層	FLA	1～2	1.8	4.38	2.07	9.6	3.30	2.28	0.661	28.4	八ヶ岳	5.35	6000
J－4住4区上層	FLA	2～3	3.1	8.18	9.95	29.7	3.94	5.48	0.483	26.5	和田峠	6.44	6400
大下原遺跡													
グリット・遺構	器種	大きさ(cm)	重量(g)	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe(%)	La	原産地	TOHL	年代
J－12A住2区3層	FLA		0.5	5.87	3.64	12.2	3.23	3.14	0.487	17.8	星ヶ塔	5.12	5700
J－12A住2区3層	FLA		0.2	8.19	11.30	34.3	5.03	6.35	0.617	22.6	和田峠	6.44	5800
J－12A住4区1層	FLA		0.2	9.45	11.10	31.3	4.46	6.11	0.545	25.3	和田峠	6.44	5800
J－12A住5区4層	FLA		0.9	8.37	10.30	29.2	4.54	5.59	0.518	25.5	和田峠	6.29	5800
J－12A住5区4層	FLA		2.2	5.82	4.28	11.1	2.93	3.18	0.496	16.8	星ヶ塔	5.12	5700
J－12A住5区3層	FLA		2.0	9.87	11.70	32.2	5.49	6.16	0.597	27.2	和田峠	6.36	5800
J－12A住5区3層	FLA		5.3	7.95	9.88	29.2	4.42	5.46	0.488	24.4	和田峠	6.21	5800
J－12A住10区2層	FLA		0.8	8.53	9.39	30.5	4.95	5.63	0.470	26.7	和田峠	6.29	5800
J－12A住10区2層	FLA		2.2	5.85	3.20	11.0	3.19	3.21	0.446	17.7	星ヶ塔	4.97	5700
J－12A住13区4層	FLA		2.1	5.94	3.89	11.7	3.15	3.22	0.512	19.7	星ヶ塔	5.04	5700
天神原遺跡													
グリット・遺構	器種	大きさ(cm)	重量(g)	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe(%)	La	原産地	TOHL	年代
D－201	FLA			5.60	3.51	10.8	3.16	2.95	0.457	16.6	星ヶ塔	5.59	6900

放射化分析・判別分析・黒曜石水和層測定（Fe以外はppm）

表2　黒曜石分析データ一覧表（2）

b　分析結果の解析

［産地について］

産地分析の結果、ほとんどが長野県和田峠周辺の黒曜石であると推定された。和田峠周辺の原産地は位置的にみて、和田村側の路頭である和田峠産、同じく和田村側下流の男女倉産と、諏訪市側の路頭である星ヶ塔産に大別される。そして、大部分は和田峠産である。

この分析結果を、遺跡ごとに土器型式の新旧により再整理したものが、１図のグラフである。黒曜石の流通量が少ない関山式期から有尾式期の分析結果を調べてみよう。関山Ⅰ式期の中原遺跡Ｊ―３・５住では、和田峠産が大部分を占めるが、星ヶ塔産と男女倉産が少量含まれている。特に、男女倉産はこの時期のみに存在している。また、有尾式期の大下原遺跡Ｊ―12住、中野谷松原遺跡Ｊ―11・30・34住では、ほぼ和田峠産と星ヶ塔産に限られ、和田峠産の比率も高い点が特徴である。

黒曜石が激増するのは諸磯ｂ式以降である。この時期の中野谷松原遺跡Ｊ―80・66・78住では星ヶ塔産の比率が有尾式期よりも減少し、大部分が和田峠産で占められるようになる。したがって、諸磯ｂ式期には和田峠産の流通量が増加した可能性が高い。和田峠詳細分布調査の際にも、和田村側で諸磯ａ式期の土坑が確認されている(森嶋ほか　1993)。(註)　こうした事例の存在からみても、黒曜石の採掘がこの時期以降活発化したことが推察される。原産地における採掘は、本遺跡における黒曜石の急増化は連動すると言えよう。黒曜石交易が、この時期以降活発化することについては、すでに金山氏により指摘されているところである（金山　1993)。なお、群馬県内では最大の大形原石（Ｄ―1078号土坑出土）も分析結果では和田峠産である。土器型式帰属率からみると、諸磯ｂ式古段階に位置付けられ、和田峠産黒曜石の流通の活発化と関連するものであろう。

その後、中野谷松原遺跡は諸磯ｂ式新段階に至って崩壊する。この時期以降に相当する中野谷松原遺跡Ｊ―110住、榎木畑Ｊ―３住では、星ヶ塔産のものの比率が高い。この直前の諸磯ｂ式中段階(第４段階）の土壙墓（Ｄ―333）副葬品も星ヶ塔産である。また、諸磯ｂ式新段階以降と推定される糸井宮前遺跡出土の大形原石も同じ分析方法で星ヶ塔産との結果である（鈴木他　1986)。やはり諸磯ｂ式新段階～諸磯ｃ式が主体となる中高瀬観音山遺跡でも星ヶ塔産の占める割合が高い（和田峠50.4％・星ヶ塔43.8％・男女倉5.8％：鈴木・戸村　1995)。さらに、諏訪市角間の神篭石という洞穴では、諸磯ｃ式土器に共伴して黒曜石原石がトラック１台分も発見されたという（藤森　1966、長崎　1984)。

このように、時期により黒曜石の産地が少しずつ異なっていることが判明した。前期では圧倒的に和田峠産が多いが、諸磯ｂ式新段階以降星ヶ塔産の黒曜石の比率が大きくなる傾向がある。これは、神篭石の集積場所の事例に象徴されるように、黒曜石採掘場所が諏訪市側へ移行したことが、この変化の要因と考えられる。この時期以降、群馬県における集落形態は大きく変化し、大規模な拠点集落はほぼ消滅するとされる（木村　1992)。また、山梨県ではこの時期以降大規模な拠点集落（天神遺跡･花鳥山遺跡など）が出現する。こうした集落形態の変化と、黒曜石の産地の変化は別個の現象ではなく、密接に関連する現象であった可能性が高い。

黒曜石交易の拠点であった中野谷松原遺跡がこの時期に急速に求心力を失い崩壊したのも、黒曜石交易ルートの大きな変化が生じたためと考えられる。この点についてはさらに長野県・山梨県における遺跡動態を含めて検討する必要があるが、長崎元廣氏の集成（前掲）や、奈良泰史・保坂康夫両氏の集成（1993）でも中期以降のこの地域での貯蔵例の顕在化は、中長期的にこのような方向性を継承している

時　　期	遺跡・遺構名	和田峠	男女倉	星ヶ塔	八ヶ岳	その他	計
関山Ⅰ	中原・J－3住	6	1	1		1	9
関山Ⅰ	中原・J－5住	7	1	1			9
有尾（古）	大下原・J－12A住	6		4			10
有尾（古）	三後沢	2		5		3	10
有尾（中）	松原・J－11住	7		2		1	10
有尾（中）	松原・J－30住	4		1			5
有尾（中）	松原・J－34住	5					5
諸磯b（古）	松原・J－80住	9		1			10
諸磯b（古）	松原・D－1078	1					1
諸磯b（古～中）	榎木畑・J－4住	4		1	1		6
諸磯b（中）	松原・J－66住	9		1			10
諸磯b（中～新）	松原・J－78住	10					10
諸磯b（中～新）	下牧小竹	4					4
諸磯b（中～新）	松原・D－333			1			1
諸磯b（新）	榎木畑・J－3住	2		2			4
諸磯b～c	松原・J－110住	5		5			10
諸磯b～c	天神原・D－201			1			1
諸磯b～c	糸井宮前	1		35			36
諸磯b～c	中高瀬観音山	61	7	53			121
	計	143	9	114	1	5	272

＊　下牧小竹のみ分析者は二宮修治他

表3　熱中性子放射化分析法による縄文時代前期の黒曜石原産地推定結果一覧表

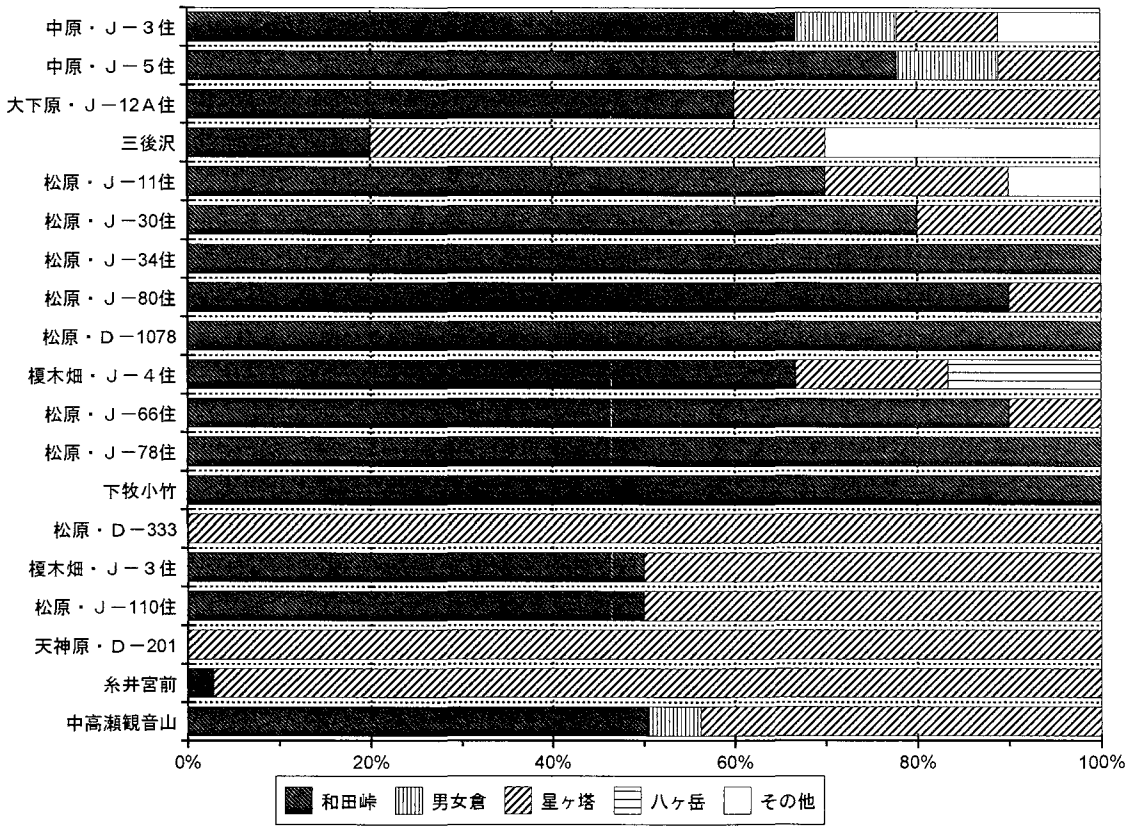


図1　縄文時代前期の黒曜石原産地

と言えよう。

（註）筆者自身この調査に参加し、実際にこの土坑を担当し、土器の出土を確認している。

［年代について］

分析結果について、出土住居址ごとに再整理して、土器型式帰属率とのクロスチェックを行った。その結果は2図・3図及び表4のとおりである。年代値ではBP.5,000～7,000年にまとまるが、土器型式の新旧関係とはほとんど一致していない。したがって、大まかに前期という程度の尺度にはなるが、土器型式をクロスチェックするとか、石器単独で年代を決定するために利用することは困難である。

また、この中で著しく古い年代値を示すデータがいくつか含まれている。この古い年代値に符合する事例が本地域には存在している。すなわち、諸磯b式期の黒曜石製石器の中には、型式学的にみて後期旧石器時代の石器と判断されるものがしばしば存在している。(註) こうした黒曜石製石器は、一般的には下層に文化層が存在していることにより混入する場合が多い。しかし、本地域においては、縄文時代の遺構地山中（Ⅴ～Ⅶ層）には旧石器時代の遺跡はまったく存在していない。そして、こうした石器はすべて諸磯b式期の遺跡に限定されている。したがって、こうした旧石器は黒曜石原産地の石器群のものが、原石と一緒に採集され、本地域までもたらされた、時空系列の異なる石器群（信州産旧石器）と推定される。ここでデータとして表れた数値の意味は、信州産旧石器の存在を示していると推察される。

（註）中野谷松原遺跡、大下原遺跡、北東・堤下遺跡で、石刃・ナイフ形石器などが検出されている。

〈引用・参考文献〉

金山喜昭　1993「縄文時代前期における黒曜石交易の出現」『法政考古学』20　法政考古学会

木村　収　1992「群馬県域における縄文時代前期後半の居住形態―諸磯b式新～c式期を中心として―」『研究紀要』10　群馬県埋蔵文化財調査事業団

鈴木正男・福岡久・金山喜昭・戸村健児・関根慎二　1986「糸井宮前遺跡の黒曜石分析」『糸井宮前遺跡』II　同

鈴木正男・福岡久・金山喜昭・戸村健児　1986「黒曜石分析」『三後沢遺跡・十二原II遺跡』　同

鈴木正男・戸村健児　1995「黒曜石分析」『中高瀬観音山遺跡』　同

二宮修治・藁科実・網干守・大沢眞澄　1992「下牧小竹遺跡出土黒曜石の黒曜石の原産地推定」『下牧小竹遺跡』　同

長崎元廣　1984「縄文の黒耀石貯蔵例と交易」『中部高地の考古学』III　長野県考古学会

奈良泰史・保坂康夫　1993「黒曜石原石格納の土器と黒曜石について」『山梨縣考古學協會誌』　山梨県考古学協会

藤森栄一　1966『古道』学生社

森嶋　稔・森山公一他　1993『長野県黒耀石原産地遺跡分布調査報告書（和田峠・男女倉谷）』III 和田村教育委員会

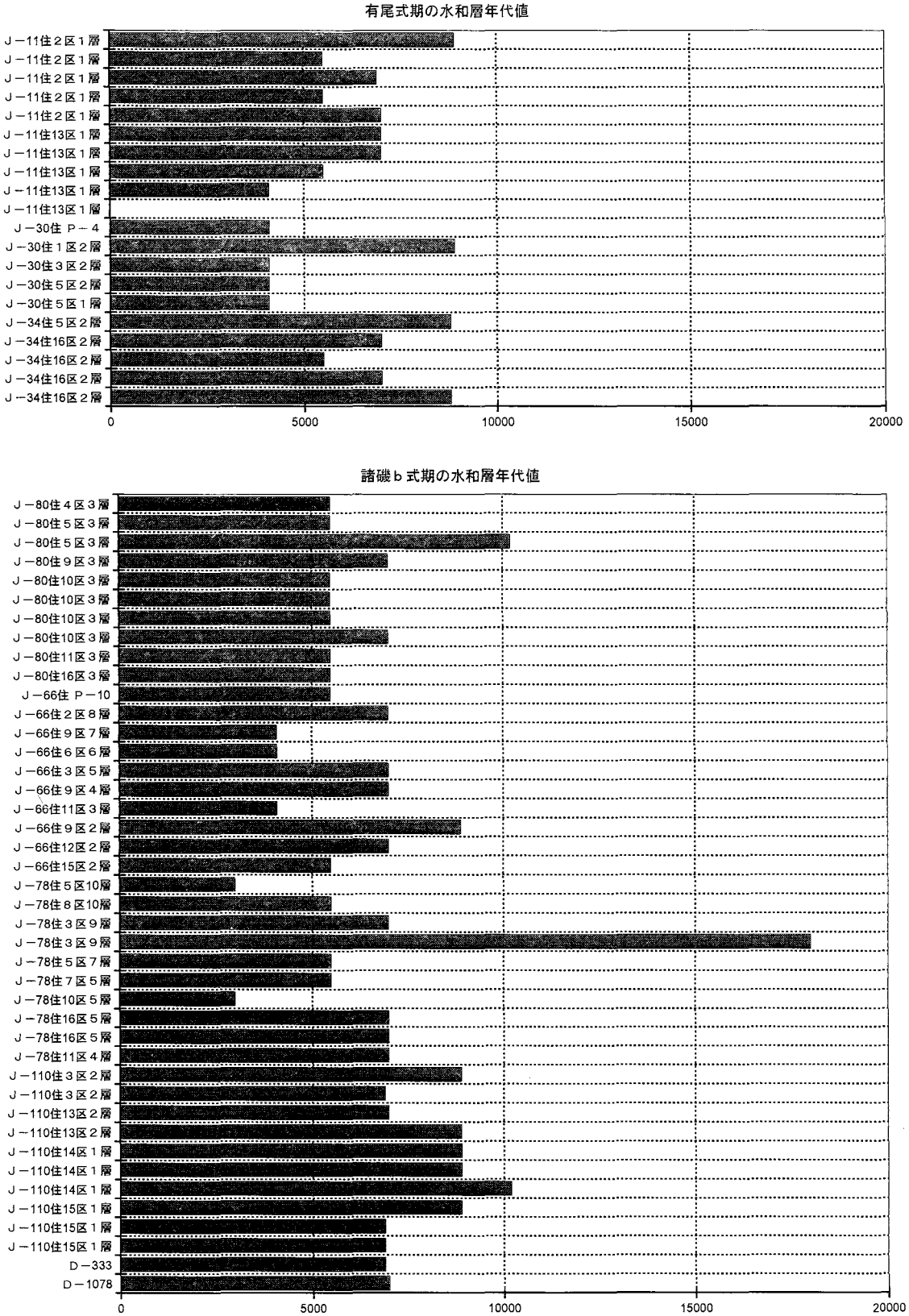


図２　中野谷松原遺跡の時期別水和層年代値

5　赤色顔料の分析

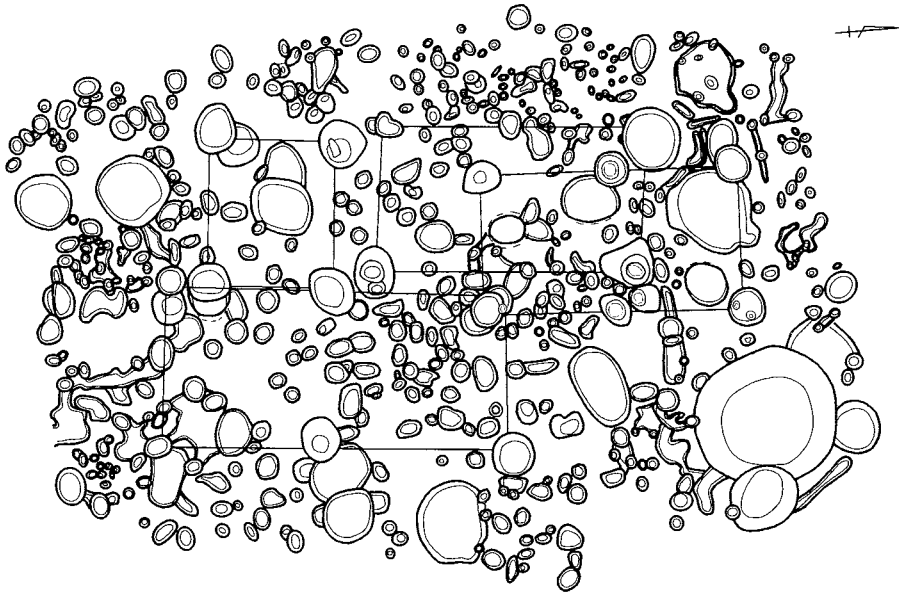
今回の分析は、永島正春（国立歴史民俗博物館）によって行われた。分析結果のデータを以下に示す。

図版番号	分析遺物			器種	諸機ｂ式帰属率	分　　類
1	Ｊ－ 66号住	10区	3層	深　鉢	82.63%	褐色パイプ状
2	Ｊ－ 66号住	11区	5層	浅　鉢	82.63%	褐色パイプ状
3	Ｊ－ 66号住	14区	6層	浅　鉢	82.63%	非パイプ状
4	Ｊ－ 66号住	3区	1層	浅　鉢	82.63%	非パイプ状
5	Ｊ－114号住	6区	1層	深　鉢	13.88%	非パイプ状
6	Ｊ－114号住	3区	1層	浅　鉢	13.88%	非パイプ状
7	Ｊ－ 66号住	8区	4層	浅　鉢	82.63%	良好パイプ状
8	Ｊ－ 66号住	12区	8層	深　鉢	82.63%	パイプ状
9	Ｊ－ 66号住	14区	6層	深　鉢	82.63%	パイプ状
10	Ｊ－ 66号住	14区	6層	浅　鉢	82.63%	極めて良好パイプ状
11	Ｊ－ 66号住	11区	8層	深　鉢	82.63%	良好パイプ状
12	Ｊ－ 66号住	10区	4層	浅　鉢	82.63%	パイプ状
13	Ｊ－ 66号住	3区	1層	深　鉢	82.63%	良好パイプ状
14	Ｊ－ 66号住	9区	3層	浅　鉢	82.63%	パイプ状
15	Ｊ－ 66号住	2区	2層	深　鉢	82.63%	良好パイプ状

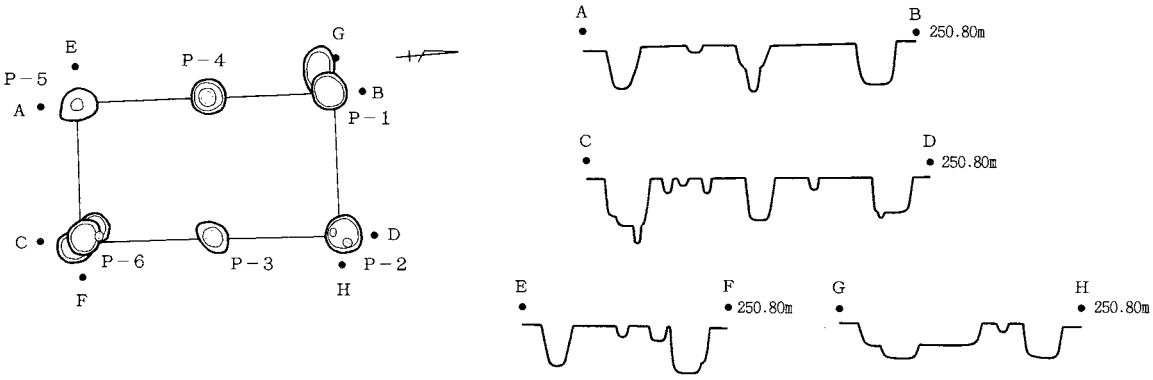
表１　中野谷松原遺跡出土赤色顔料分析土器

補　遺

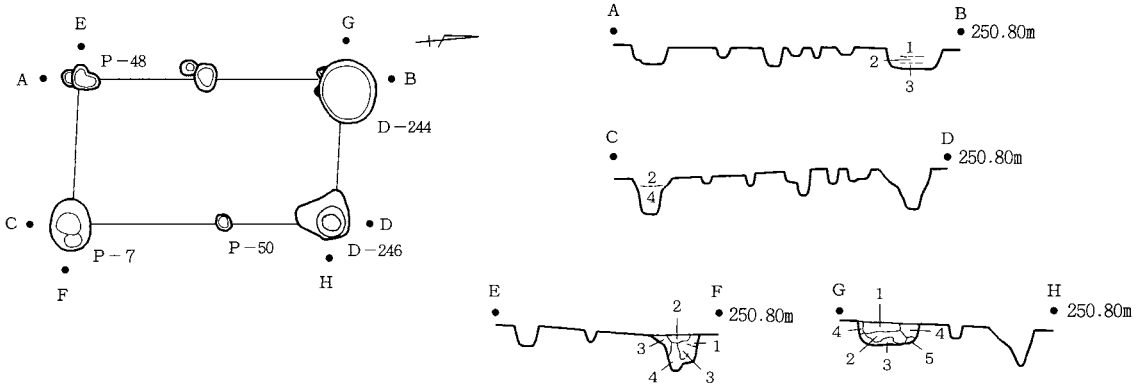
HT－2A・B・C・D



HT－2A

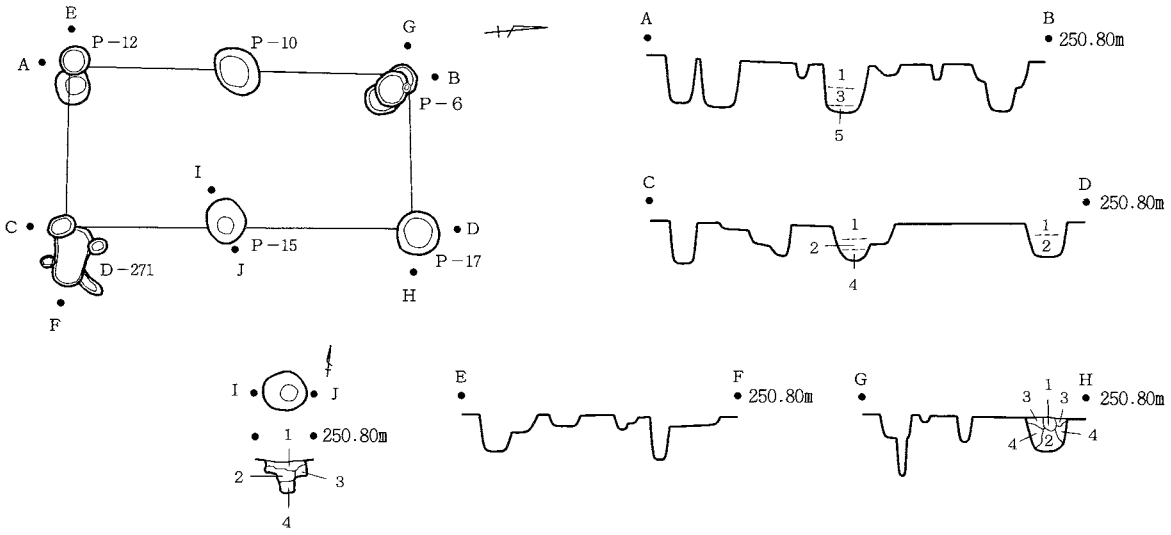


HT－2B

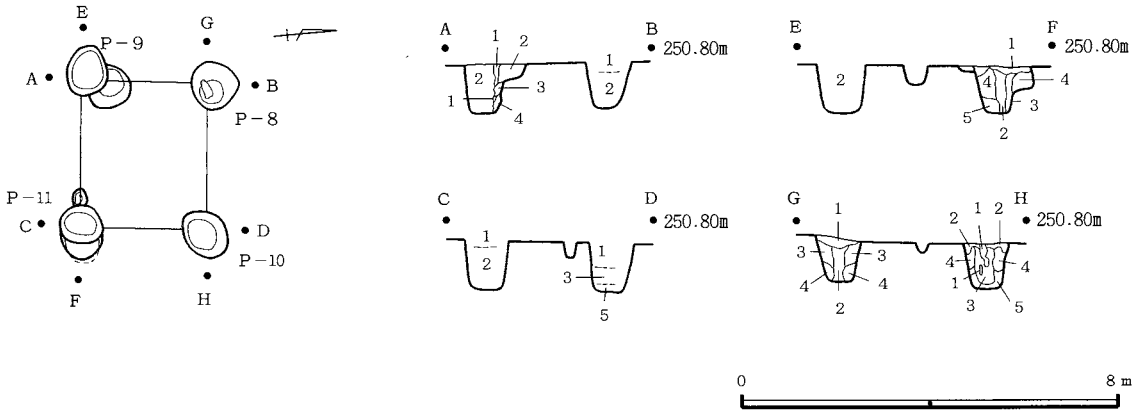


堀立柱建物址実測図

HT－2C



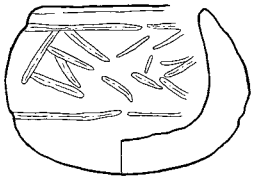
HT－2D



堀立柱建物址実測図

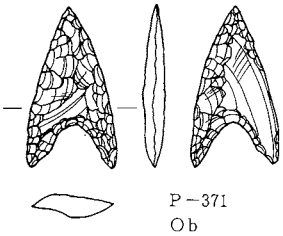
機構名	区	位置	形態	時期	規模（芯芯）cm		柱間平均cm		主軸
					東西	南北	東西	南北	
HT—02A	B	南西	3×2	諸磯b	291	545	289	252	N—86°—W
HT—02B	B	南西	3×2	諸磯b	279	551	279	267	N—85°—W
HT—02C	B	南西	3×2	諸磯b	314	699	313	347	N—82°—W
HT—02D	B	南西	2×2	諸磯b	252	250	252	252	N—85°—W

堀立柱建物址観察表

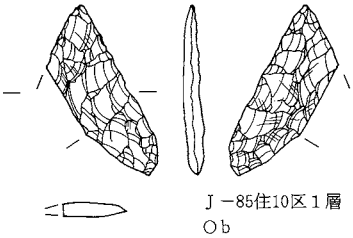


Ｊ－56住６区３層

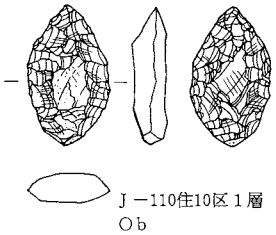
北部表採
Ｏｂ



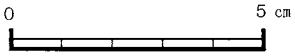
Ｐ－371
Ｏｂ



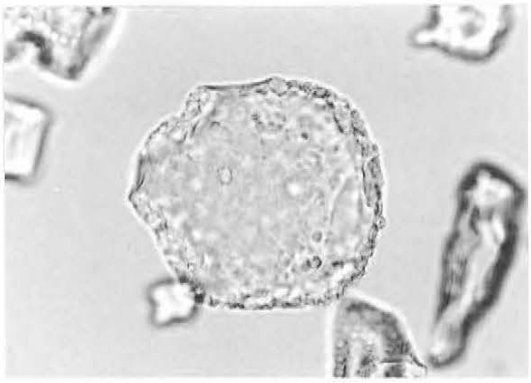
Ｊ－85住10区１層
Ｏｂ



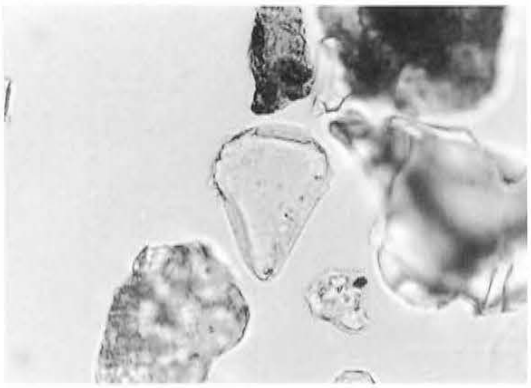
Ｊ－110住10区１層
Ｏｂ



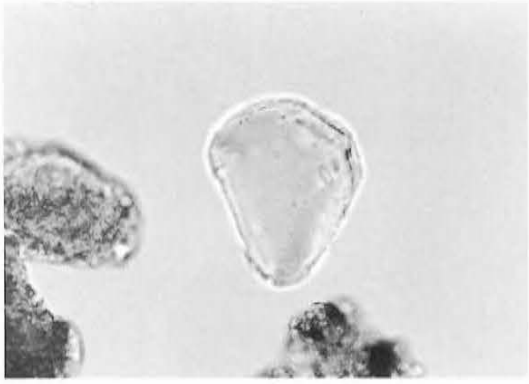
遺物実測図



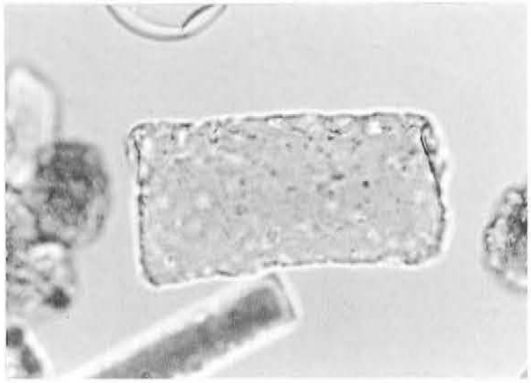
1　ヨシ属　21



2　ウシクサ族（ススキ属など）　6

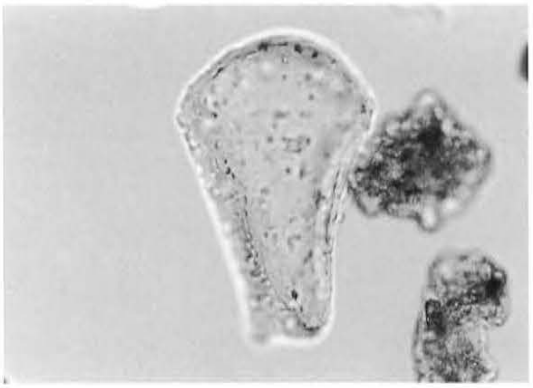


3　ウシクサ族（ススキ属など）　5

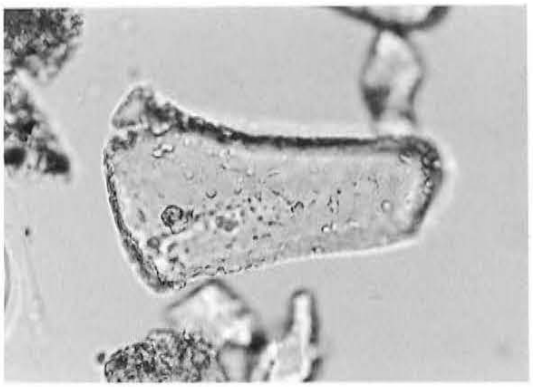


4　キビ族型　6

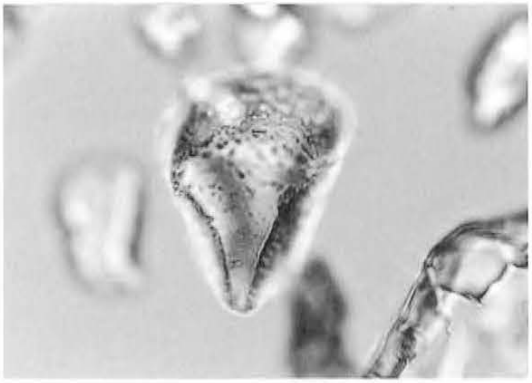
5　ウシクサ族型　3



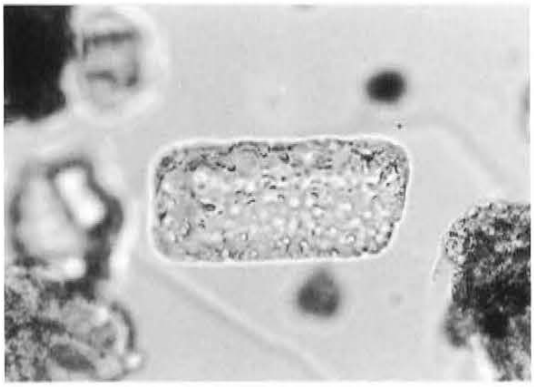
6　ウシクサ族型（大型）　3



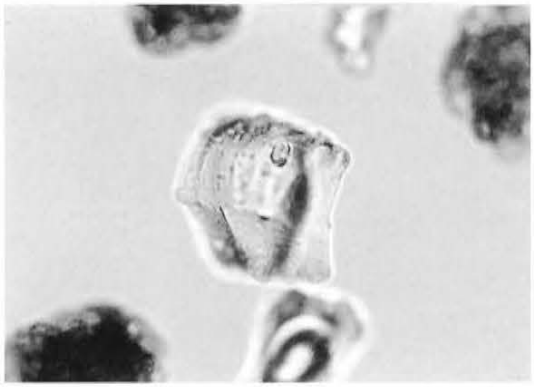
7　くさび型　20



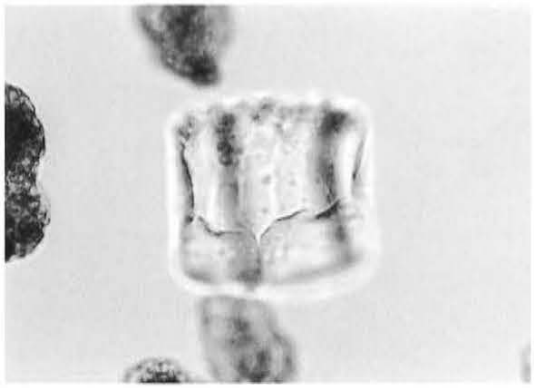
8　イネ科Aタイプ　21



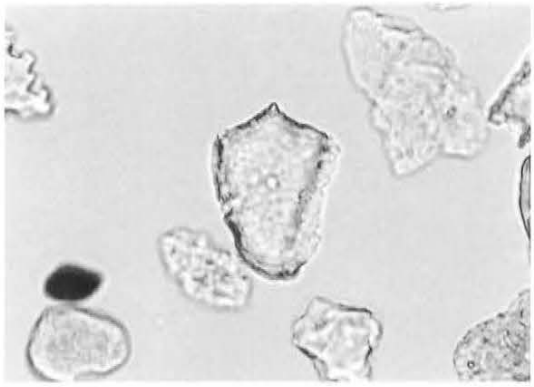
9　イネ科Aタイプ　20



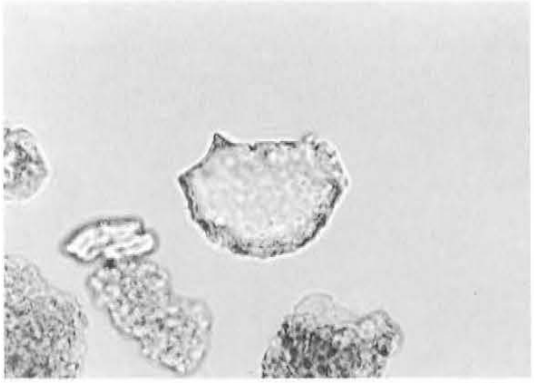
10　ネザサ節型　2



11　ネザサ節型　3

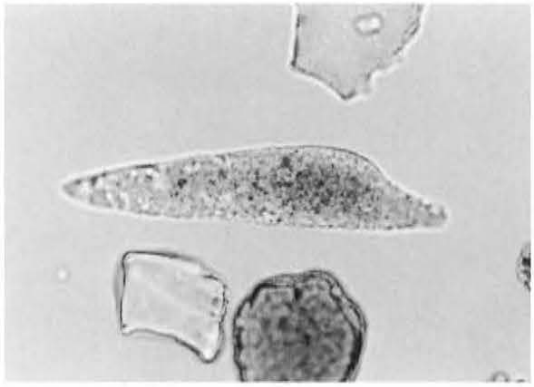


12　クマザサ属型　9

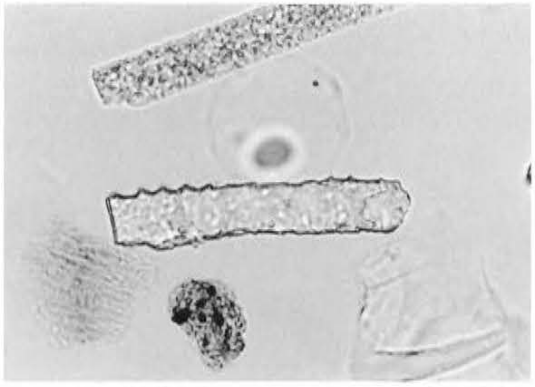


13　クマザサ属型　10

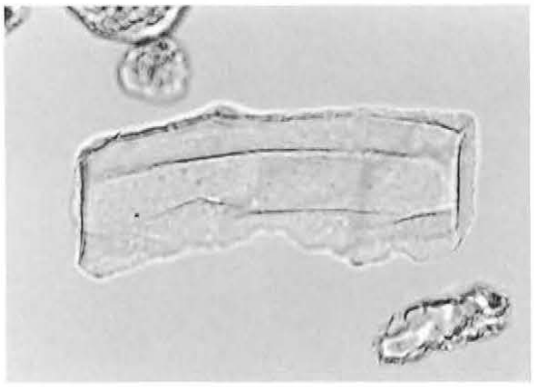
14　マダケ属型　6



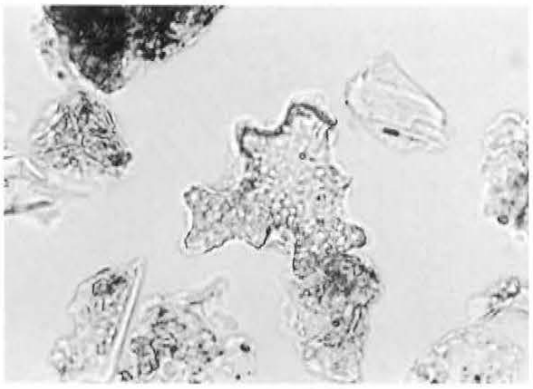
15　表皮毛起源　4



16　棒状珪酸体　3



17　イネ科の茎部起源　　7



18　はめ絵パズル状（広葉樹）　　16

0　50　100μm

植物珪酸体の顕微鏡写真

（倍率はすべて400倍）

No.	分　類　群	試料名
1	ヨシ属	21
2	ウシクサ属（ススキ属など）	6
3	ウシクサ属（ススキ属など）	5
4	キビ族型	6
5	ウシクサ族型	3
6	ウシクサ族（大型）	4
7	くさび型	20
8	イネ科Aタイプ	21
9	イネ科Aタイプ	20
10	ネザサ節型	2
11	ネザサ節型	3
12	クマザサ属型	9
13	クマザサ属型	10
14	マダケ属型	6
15	表皮毛起源	4
16	棒状珪酸体	3
17	イネ科の茎部起源	7
18	はめ絵パズル状（広葉樹）	16

中野谷松原遺跡

—縄文時代遺物本文編—

安中横野平工業団地造成に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 3

発行日　平成10年10月31日

編集・発行　安中市教育委員会
群馬県安中市安中1-23-13
027(382)1111（内433）

印刷　朝日印刷工業株式会社